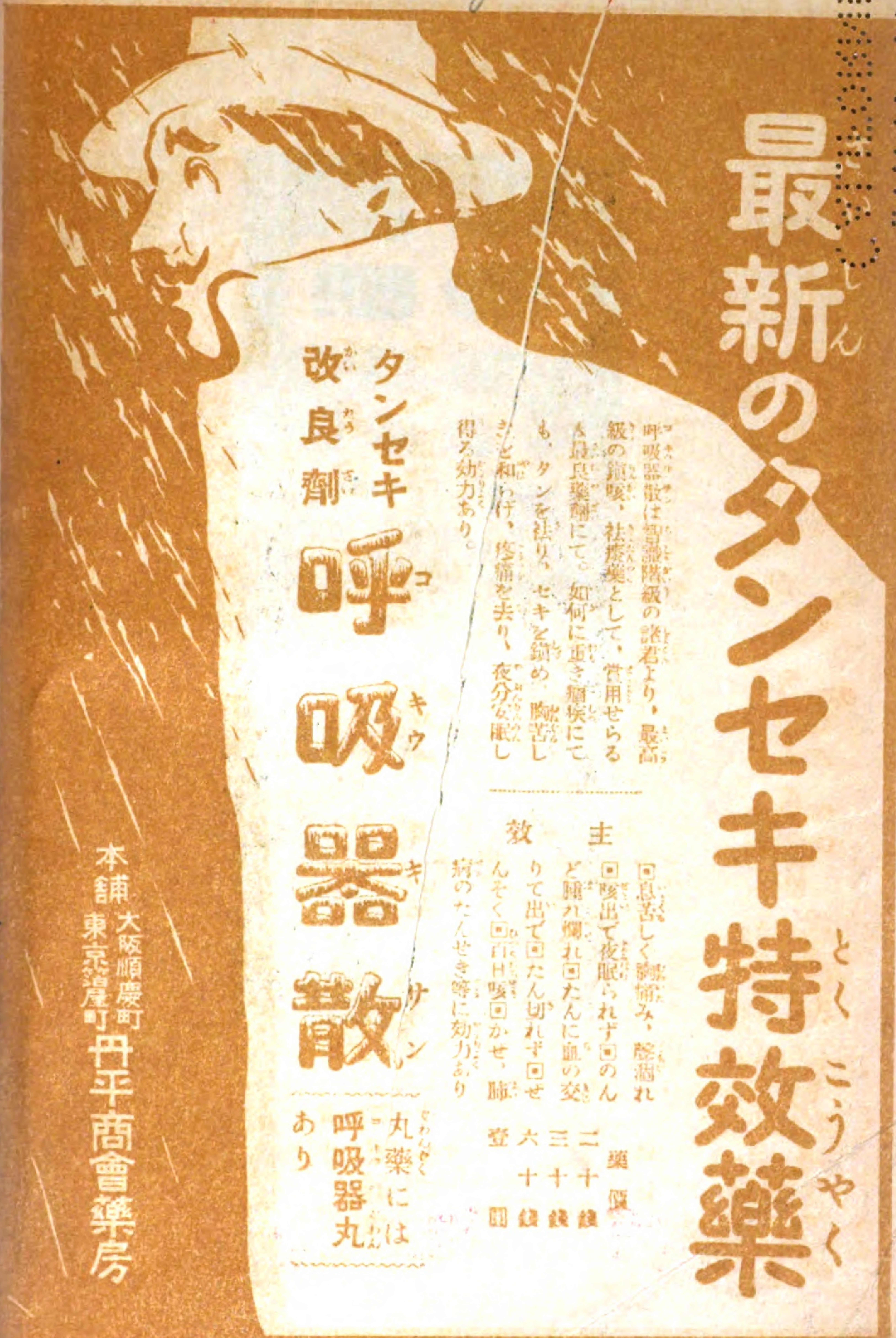
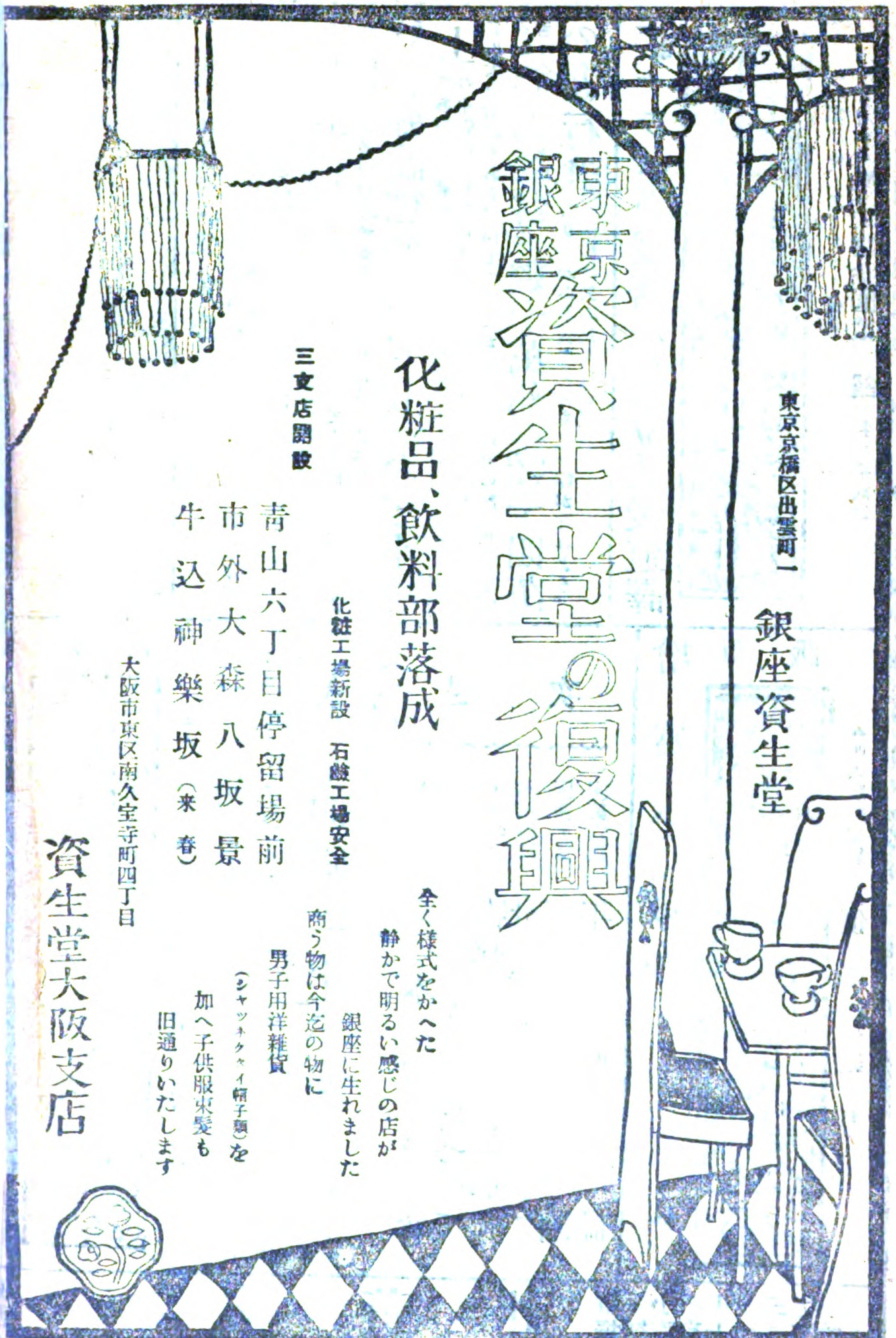
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

新年號

第三十九年 第一號 第四百三十號


最新のタンセキ特効薬
呼吸器散は智識階級の諸君より、最高級の鎮咳、祛痰薬として、賞用せらる最良薬剤にて、如何に頑き痼疾にても、タンを祛り、セキを鎮め、胸苦しきを和げ、疼痛を去り、夜分安眠し得る効力あり。
主效
◎息苦しく胸痛み、喉渇れ◎咳出て夜眠られず◎のんど腫れ爛れ◎たんに血の交りて出で◎たん切れず◎ぜんそく◎百日咳◎かぜ、肺病のたんせき等に効力あり
薬価
二十銭
三十銭
六十銭
壹円
タンセキ改良剤
呼吸器散
丸薬には呼吸器丸あり
本舗 大阪順慶町
丹平商會藥房



東京
銀座
資生堂の復興
東京京橋区出雲町一
銀座資生堂
化粧品、飲料部落成
化粧工場新設 石鹸工場安全
全く様式をかへた
静かで明るい感じの店が
銀座に生れました
商ふ物は今迄の物に
男子用洋雑貨
(シャツネクタイ帽子類)を
加へ子供服束髪も
旧通りいたします
三支店開設
青山六丁目停留場前
市外大森八坂景
牛込神樂坂(来春)
大阪市東区南久宝寺町四丁目
資生堂大阪支店





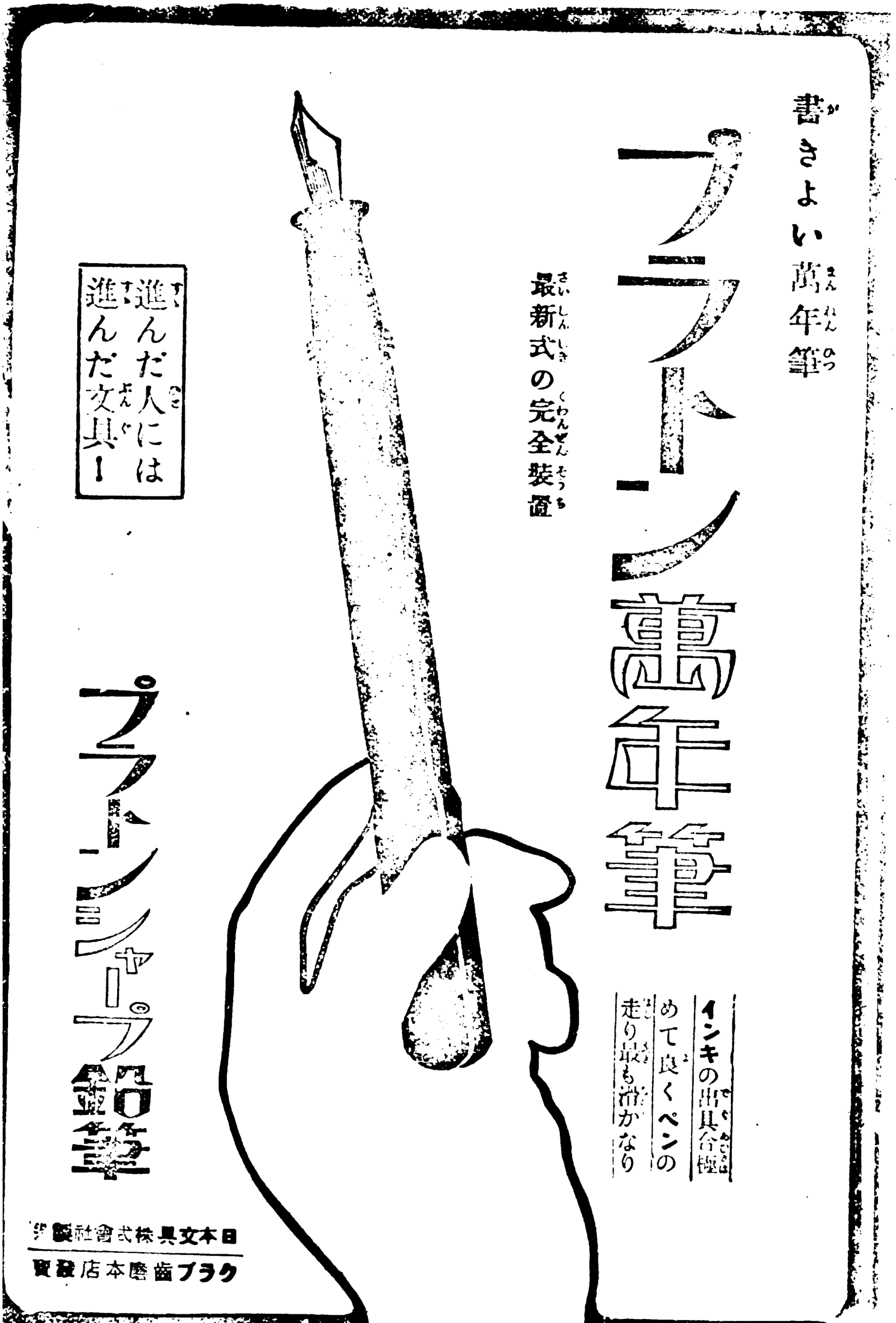
質素の意義

代價の安き物を購ふが質素の本意にあらず、良品にして廉價なるものを愛好するは、即ち質素の美風なり。

鷹印中折帽子

同胞は家を焼き財を失ひ寒に迫らる。我が鷹印帽子は質素實用の意義に適ひ、今や全國擧げて歡迎の焦點となれり。

株式會社
高橋製帽所
・大阪・東京・


書きよい萬年筆
プラトン萬年筆
最新式の完全装置
インキの出具合極めて良くペンの走り最も滑かなり
進んだ人には進んだ文具！
プラトンシャープ鉛筆
日本文具株式會社製造
クラブ齒磨本店發賣

大正十三年

中央公論

一月一日發行

一月號

第卅九年第一號

第四百三十號

大正十三年を迎ふるに際して

歳茲に改まりて大正十三年となる。來るべき一年に於て、我々に課せられたる仕事は、我々の生活の舞臺を復舊することだ。否、一層うるはしく之を復興することだ。夫れには鬱勃なる精神的昂奮の作ふことを必要とする。是れ近者精神作興の叫びの大なる所以。併しよく考うるに只精神作興の宣傳だけでは足りない。之と共に是非注意しなくてはならぬ一事は、作興した精神の活躍が無礙に種々の必要事を產み出して行ける樣所謂社會的規道がよく整頓して居るか否かの點である。斯う考へて來ると、吾人は當面の世相に對して些か遺憾の情を禁じ得ざるものがある。

之からの青年は能く動き能く食はねばならぬとの宣傳に釣り込まれて、成る程と衣物を脱ぎすてゝ見ても、運動の場所も作つてなし、器具は固より、後で食べる物にも碌なものが無いといふのでは、折角の勇躍も失望に終らざ を得ない。精神の作興もいゝ。之をして終りあらしむる爲には、作興せる精神の活躍をして順當ならしむべき地盤の整理が大事だ。而して今日の我國公生活の舞臺面は果して青年の創造的新興精神を迎うるに適當だらうか。

一二の例を擧げて讀者の反省を乞はう。

京濱罹災民に供給すべき多量の救濟品を持つて來た某國特派員から斯う云ふ話を聞いた、自分の持つて來た品物は陸揚してから數十日になる。併し未だ一品も罹災民に配られて居ない。密かに傳うる所に依ると一部は某方面の役人の間に低價で頒たれたとか。孰れにしても罹災者分配の實績を見ねば歸國も出來ぬので、頻りに督促するけれど當局からは中々返事が來ないと。之を聞いた時、吾人は下層罹災民中には今猶衣食の料に極度の欠乏を愬へて居るがあるのに、去りとは怠慢な話だと思ひ、轉じて此事を當局に質してみた。當局の一員の説明に曰く、折角の寄贈品を最も公平に配分する爲には、府廳から市役所、市役所から區役所と、夫れ／＼信用するに足る機關を通してやる事にした。

然るに之等の機關は平時でさへ手が空いて居ないのだから、此際ことに世間の期待する樣な敏活な處置は固より出來ない。是れ多少停頓して居る事實ある所以だが、併し之に依りて最も公平なる配分が出來るのだと、そこで又問うた。そんな事をして居ては何時結着が付くか分らない。下層階級に對する仕事には救世軍の樣な多年の經驗を積んだ專門家もある。之に賴んで早く片付けたらどうかと。之に對する答は斯うだ。救世軍に賴むと、已にもと佛教神道の團體も飛び出して來る。が、一々信用していゝかどうか分らぬ。一に許して他に拒んでは又た面倒が起る。そこで運びが惡くとも市役所から區役所と公の機關に任して面倒な非難を避くるの外はないのだと。

斯う云ふ遣り方をする役人の頭を一番强く支配するものは、後から面倒な非難をされまいといふ事である。自分の所信に基き然るべき者に許したと、責任を一身に引受くるといふ風の勇氣は毫末もない。甚しきは後から見事な成績だと賞められやうとて、飛んでもない迷惑を民衆にかける事すらある。之も今度起つた一つの面白い例だ。某官廳の依囑を受けて東京市中各所に開かれた診療班の中には、取扱患者數の多きを誇らんとて、二日分の藥を一度にやつて宜いのをわざ〳〵毎日取りに來さしたのがあるとやら。患者の爲めの診療班か囑托醫や官廳の爲の診療班か分らなくなる。斯種の例は數へ上げれば幾らでもある。

太平無事の際は繁文縟禮も我慢が出來る。今や即ち然らず。短日月の間に最も實のある仕事を爲し遂げなければならないのだ。何より大事なのは速かに效を奏せしむることである。夫には簡捷を以て運營の根本義とせねばならぬ。一言にしていへば、曰く簡捷速效。之が今年のモツトーでなくてはならぬと思ふ。

一方に罹災民を飢えしめ凍えしめ乍ら、他方に救助品の山を手附かずに放置する樣なヘマは、役人だけと思つてはいけない。民間の仕事にもある。是れ吾人が官民と云はず今年のモツトーとして齊しく簡捷速效の四字を勸めんと欲する所以である。

中央公論



第卅九年第一號
一月號
第四百三十號

わが同胞のために轉禍爲福の根本策を唱說す

田中王堂

一　この天災の意義を決定する最後のものは何か

フリイドリッヒ・リストは一般經濟學に對抗して國民經濟學を首唱した學者である。彼れの意見に從へば、貿易が原料を供給する農業國と、加工して其れを送り還す工業國との間に行はれる場合には、一層の利潤を占めるのは工業國である。隨つて、或る一國が農業國たるに止まる間は、其れは永久に富の點に於て工業國の下風に立たざるを得ない。されば

ば、如何なる國民と雖も富を以て世界に雄飛するの大志を抱くものは是非とも工業の培養に其れの全力を注がなければならない。たとひ生産の設備が幼稚なるがために、自國に於て或るものを製造するよりも、貿易に依りて其れを他國より搬入することが利益であるにしても、さうして居ては自國に於て工業の發達する機會は到底來たらぬから、一時の損失の如きは眼中に置くことなく、專念其れの發達のために謀るべきである、と言ふのである。斯くして、自由貿易はたゞ工業に於ける先進國の政策である、其れに於ける後進國の政策は斷じて保護貿易でなければならぬ、といふ彼れの結論も自然に生じて來るわけである。

彼れの一本調子な經濟政策に關しては、贊成、反對、いろいろに議論を試みる餘地はあらう。わたくし自身としても相當に批判することが出來る。然し、こゝにわたくしはさういふことをすることに何等の興味も有たぬ者である。こゝにわたくしの興味の一切は富に關する彼れの定義に集中されるのである。彼れは富を定義して、それは現存する其れの量の謂ではなくして、未來に向つて其れを作り出す力の謂である、としたのであつた。わたくしはこの見地をリストの理想主義と呼び、そして、斯くの如く卓越した理想主義が一經濟學者に依つて唱道された事實を珍重して措かぬ者である。

一體、理想主義、眞正なる意味に於ける理想主義とは何であるか。其れは、實際に支配し得る總べての要素を合理的に、經濟的に統率し、其等をして未來に向つて生活の改善の方便となり、方針とならしむる覺悟に他ならない。現在の狀態に滿足しないが、其れを改善することは其れのはたらき振りの改整の中にのみ見出だされるとするのが眞正なる意味に於ける理想主義である。リストは一個の理想主義者として、富は現存する狀態ではなくして、其れを組織する要素を利用して現在の狀態を改整して行く力そのものであると理會したのである。つまり、富は靜的のものではなくして、

動的のものであると彼れは理會したのである。カアライルが『汝に最も近き義務をなせ』と叫び、ゲエテが『瞬間を受用せよ』と說いたのも彼等が眞正なる意味に於ける理想主義を體認して居たからである。『總べて現實的のものは合理的であり、總べて合理的のものは現實的である』と言つたあの有名なるヘエゲルの格言も敢らに汎神論的に解釋せずとも、實際の事實に卽して甚深の省察を表現して居るものと觀ることが出來る

わたくし共は如何なる環境に於ても、理想主義者であらねばならぬが、特に今日の環境に於てさうであることの必要は一層ある。何故ならば、わたくし共を今日の困踣と窮迫とより救ふものは眞正なる意味に於ける理想主義を外にして一つもあり得ないと信ずるからである。重ねて說明するが、眞正なる意味に於ける理想主義とは、現代の狀態を正視し、正用することに依つて共れに含まれた意義と効力とを出來るだけ發揮する覺悟である、さういふ覺悟を作り、且つ、はたらかせることとである

二十萬の人命の亡失と百億圓の貨財の蕩盡ー、此れが一首都と一要港とを中心として大正十二年九月一日より三日に亙つて震災と火災とよりわが同胞が蒙つた損害である。わたくし共はこの莫大なる數字を一つの項として方程式を組み立てるに當つて、之れが他の項となるものは人間の苦痛と、哀傷と、恐怖と、不安と缺乏とであることを懷ふ時、わたくし共はあの災厄が古來一國民の運命の上に落ちた災厄の中で稀有に深刻なものであり、殘酷なものであつたことをしみじみと感銘するのである。この頃、あの災厄の性質を形容するに、しばしば『未曾有』といふ言葉が用ゐられるが、未曾有といふ言葉もこの場合に限つて、大して事實を誇張して居るものではないやうに考へられる。よし東市灣の水は涸るゝことはあるとも、日本民族の存續する間、どうして一度體驗されたあの痛恨の痕跡を彼等の記憶より全然拭ひ去ることが出來ようぞ。

然しあの出來事をわが國民の文化史上に起つた一事實として見るならば、二十萬の人命の損失と百億圓の[illegible]とは或る意義を構成する與料ではあるが、まだ意義そのものではない。其の意義を決定するものは、あの出來事を如何に受け取るかのわたくし共の態度であらねばならぬ。わたくしがこゝで暗示しようとして居る事柄の意味を明瞭にするためには、假りにあの出來事が印度人の上に落ちたとして、其れに對して彼等が取るだらうと思はれる態度を想像して見、其れから更にあの出來事が英國人の上に落ちたとして、彼等の取るであらうと思はれる態度を想像して見ることが捷徑である。わたくし共は、其れに對して印度人の取る態度と英國人の取る態度との間には雲泥の相違のあるべきことが容易に推測出來る。そして、其の相違こそ、印度人に取つてと、英國人に取つてとのあの出來事の意義の相違である。わたくし共日本人はあの出來事に對して如何なる態度を取り、あの出來事を與料として其れより如何なる意義を構成するか。實に、今回の天災はわたくし共の文化の一試驗石としてわたくし共に臨んで居るのである。

昔、ユダヤの預言者たちは天災ある毎に猛然起つて其れを天譴として民の不德を責めたのであつた。(平常、衛生の方法を怠るために疫病が流行したり、防火の用心の不足なために大火の災厄に出遇つたり、武備の不完全なために外國の侵略を蒙つたりするが如きは、人間が當然盡すべき義務を盡さなかつた結果であるといふ意味に於て、天譴であると言へないこともないが、)總べての種の災厄の一切を民の不德に課する天譴の結果に歸するのは反つて因果應報の理を無視した極めて幼稚にして不合理な思想であることはいふまでもない。然し、自づからさう信じ、他人に對つてさう說いたことが(わたくし共からすれば)一つの迷信に過ぎないにしても、天災に遭遇して人々悲嘆の淵に沈み、謙虛の心に立ち返つて居る時に際して、彼等の不當の行跡に關して彼等の反省を促したことは極めて機宜に適したものであつた。わたくし共は歷史に現はれた事實に徵して、ユダヤ人の道德觀念は一天災毎に當時の預言者の警告と訓誡とに依つてだん

だんに外的より内的に進んで行つたことを知るのである。

個人の、及び、國民の内具性は非常時に當つて始めて赤裸々にはたらく。若し今日に於て、そして、今後に亙つて、わたくし共の生活に或る缺陷が見出だされるならば、勿論、其等は今回の天災が作り出したのではない、今回の天災はたゞ其等を一層明白に曝露しただけである。が、其等を正確に診斷し、適切に治療するには今時が最好機會である。そして、其等を正確に診斷し、適切に治療する見地と方法とをわたくし共に與へるものは眞正なる意味に於ける理想主義の一つあるのみと思はれる。何故ならば、眞正なる意味に於ける理想主義は標準をわたくし共の生活の總合意義に據つて工夫し、其れを組織する總べての要素を更に善く統率するといふ意味に於て、わたくし共の生活を批判するものであるからである。然し、わが同胞は能く斯くの如き理想主義を受け取るであらうか。受け取つて、さうして、能く彼等の行跡を反省するであらうか

二　復興の事業は改造の意氣と理會とに依りて始めて成就せらる

今日、世人は擧つて震災善後の事業を復舊と呼ばずして復興と呼んで居る。彼等は舊時の文物の缺陷多くして既に震災前に於て、特に、震災當時に於て故障と過失との百出したのに鑑みて、遙かに完全なる形式に於て其等の體現を圖らうとするからであらう。わたくしは彼等の意圖を至極尤もと認むる者である、たゞ、わたくしが懸念に堪えないのは彼等が其等の缺陷を纔かに結果の上にのみ見得て、其等の由來に溯り得ないために、其の復興なるものも眞の復興たるに至らずして止むことなきかの一事である、言ひ換へれば、物質的の復興に止まつて、精神的の改造に至らずして止むことなきかの一事である。

わたくしは、こゝに峻嚴に區別さるべき二つの態度として、物質的の復興といふ言葉と、精神的の改造といふ言葉とを用ゐた。さうして、わたくしからすれば、物質的たることは飽くまでも排斥さるべき態度であつて、わたくし共に依つて採用さるべき態度は精神的のものに限られるのであるが、わたくしが物質的及び精神的といふ言葉に盛る意味は、世間にありふれた宗教家、文藝家、乃至、哲學研究者等が其等の言葉に盛る意味とは大いに其の趣を異にするものがあるが故に、こゝには、簡單にでも、物質的と精神的とに依つてわたくしが如何なることを理會するかを一通り說明することが肝要である。

わたくしは如何なるものにしても、欲求の對象としての其れの性質の相違より、物質的と精神的との差別を立てない。如何なるものが物質的となり、精神的となるかは、其れに對するわたくし共の態度に依つて決定されるものであるとわたくしはして居るのである。或るものがわたくし共の生活の中に矛盾を生ずるやうに、纔かに斷片的に使用されて居れば、其等はわたくし共に取つて物質的となつて居るのである。之れに反して、其等がわたくし共の生活の中に互に調和するやうに結合的に運用されて居れば、其等はわたくし共に取つて精神的となつて居るのである。かういふわけであるから、或るものが物質的であるか、精神的であるかは、其れに關するわたくし共の理會と支配力との如何に依つて決定されるのである。如何なるものでも其れを取り扱かふに方つて、わたくし共が不明であり、無力であるならば、其れは物質的となるが、わたくし共が聰明であり、有力である限り、其れは精神的とならざるを得ない。わたくしとしては、この事實を外にして、何故に物質的が排斥さるべくして、何故に精神的が賞讚さるべきかの道理を一つも見出だし得ぬのである。

わたくし共は、久しい間、明治年間に亘つて沈澱され、大正年間に至つても猶ほ繼承されて行つた文明の物質的なる

に惱まされて來た。若し之れが復興の事業をして一つの重要なる意味あるものたらしめようとするならば、其れを精神的のものたらしめることであらねばならぬ。わたくしからすれば、さうすることが復興の最初の、そして、最後の計畫であらねばならぬ。然し、今日、間接に、直接に、復興の事業にたづさはる者の幾人が果してこの事理を洞察して居るであらうか。

時は正に明治の時代より大正の時代に入つた際、大正維新とか、第二の維新とかいふ言葉が一つの警句として或る人々に依つて頻りに叫ばれたのであつた。この警句を發した人々の心の中には、改元に方つておのづから明治時代の文化の總勘定が出來、彼等は其れに對して不滿足を感じたのであらう。この警句を以て互ひに呼應した人々が第二の維新を實現するために如何なる程度の努力をしたかわたくしは知らない。然し、若し彼等にして或る程度の努力をしたのならば、其れの成績の些しも見るべきもののないのは、畢竟するに、彼等の誠實の足らなかつたためではなくして、彼等に聰明の全然無かつたためであつたとせねばならぬ。彼等の感性は明治の文化の缺陷の個々の發露を知覺することは出來たが、彼等の知力は其等の缺陷の病根を究明することが出來なかつたのである。彼等は悉とく短見者流である。彼等に依つて著眼され、著手される謂ふところの改善、若しくは改革なるものは、其れが政治に關するにしても、教育に關するにしても、産業に關するにしても、將た、學問に關するにしても、常に其れの意義に於てたかだか第三次以上のものに出ることは出來なかつた。彼等は揃ひも揃つて源頭の濁りを塞がずして、下流の清からんことを求めて居るのであつた。是れ、主として彼等の勞すること多くして、功の其れに副はなかつた所以である。こゝにわたくしが語つて居るところのものを具體的に、そして、事實的に言ひ現はすならば、彼等は明治の文化の特徴と其れの原因とを見極はめ得ずして、暗中に模索しつゝ、一向に其れの偶然の發露を取り除かうと焦慮して居たのである。『眼高手低』といふ諺があるが、

彼等の手の低いのは彼等の眼の低いのより來たつて居るのであるから、之れに對して策の施しようはない。

明治の、そして、大正の文化は何故に（わたくしがさきに説明した意味に於て）物質的たるに止まつて精神的たるに至らなかつたか。この理由は一口に斷ずることが出來る。其れはわたくし共が實際の壓迫と好奇心とより、近世文明の機關を、殆ど既成の形のまゝ一つ一つ採取し、堆積して行きながら、一度もわたくし共の能力と、環境と、眞の要求とを標準として近世文明そのものの志向を理會し、其れの組織を改整しなかつた當然の結果である。

實に、わが國の文化の最大缺陷は、あらゆる缺陷の根源は、わが同胞が近世文明の機關を取り上げながら、近世文明そのものの意義を會得しないところに起因するとわたくしは確く信ずる者である。そして、この悲しむべく、耻づべき狀態が依然として改善されないことは、あの震災當時に於て彼等の取つた處置からしても容易に推測することが出來る。

あの大震災と大火災とより酷烈なる洗禮を受けたわが同胞は、上下擧つて一日も速かに其等の慘禍より復活し、將來に於て其等に類する災厄を未然に征服するだけの種の文化を建設しようとして計畫し、其の計畫の實現に努力して居る。然し、わたくしからすれば、この計畫の失敗と成功との最後に別れる一點は、其れが新たに如何なる設備を施こし、如何なる方策を講ずるに拘はらず、終局、其れは能くわが同胞をして近世文明の意義を理會して其れを精神的に運用するに到らしめるか、或は、纔かに其れの機關の功利を便利として其等を物質的に使用するかにあるからである。早い話が、例を復興の　業の一部分であるべき防震防火の計畫に取ることとしよう。其れがために道路が整理されること、公園が増設されること、建築物が堅牢になること、交通機關が一層成備される等は容易に逆睹し得る。そして、此等の施設が今回の災害の模樣と由來とを參照してなさるゝ上は、たとひ近世文明に關するわが同胞の理會が今日のまゝでも、

其等の設備自づからに防震と防火との方便として役立つことのあるべきは言ふまでもない。然し、わたくしがこゝに指摘したいと思ふことは、わが同胞の叡智にして近世文明を精神的に運用するに至らずして、纔かに其れの機關を物質的に使用して居る間は、啻に其等の効用の什が一も擧がらないのみならず、反つて、其等が彼等の動作の自由を障碍することがないとは限らないといふことである。之れはほんの一例である。然し、一事は萬事である。若し世の中にわたくしのこの立言を疑ふ者があるならば、彼れは宜しく自づから尠しく思を凝してわが國の政治や、教育や、産業や、學問の中に見出される缺陷の性質と由來とを討尋して見るべきである。さうしたならば、彼等はわたくしのこの立言の決して虚罔でないことを體認することであらう。今日、復興の事業にたづさはる人々の意圖する如き成績を擧げるためには、彼等が現在考慮しない廣さに、其れの範圍を擴張し、彼等の理會し得ない深さに其れの志向を解釋したければならない、さうして、始めて、彼等の意圖するものは實現されるのであると考へるのである。

三　哲學はわが國民生活に對して何を貢獻し得るか

哲學の役目は古今を通じて同一であつた。然し、解決さるべく其れに課せられた問題は異ならざるを得なかつた。是れ、それの方法に於ても、それの結果に於ても、哲學なる一つの名稱を以て呼ばるゝには、其れの方法に於ても、其れの構造に於ても、其れの結果に於ても、餘りに互に乖離したものの生じた理由である。然しながら、異なる時代に生じた異なる哲學が斯く互に乖離するのは偶ま哲學が生活の理想と要求とを反照し、其れの指標であつたことを、尠なくとも、其れの指標たらんとして居たことを證據立てるものである。如何なる時代に方つても、人間の生活の特徴よりして、或る形に於て焦熱問題なるものは自然に化釀される。其等の淵源に就いて之れが解決を試み、雄深なる知見と豐潤なる

想像力とを供給して、同時人の情操を釋放し、彼等の理會を啓沃しようとしたものは哲學であつた。斯くして、プレトオの哲學は當時に於けるアテンス人の生活を離れては到底理會出來ないほどに其れの理想と要求とを反照し、其れの指標となつて居る。ロックの哲學は當時に於ける英國人の生活を離れては到底理會出來ないほどに其れの理想と要求とを反照し、其れの指標となつて居る。カントの哲學は當時に於けるドイツ人の生活を離れては到底理會出來ないほどに其れの理想と要求とを反照し、其れの指標となつて居る。こゝには連綿たる哲學史より特に卓越して其等が出現した社會生活と密接なる關係を有つた三つのものを抽出したのであるが、此等を外にしても、苟くも哲學の名に價するやうに哲學の役目を滿たしたものは、或る風に、程度に、同時人の理想と欲求とを反照し、其れの指標とならなかつたものは一つもないと言つてよい。

若し哲學を構成する成分を分ちて內容と樣式との二つとするならば、其れの內容を作するものは當時の社會生活の中に醱酵された問題であり、其れの樣式を作すものは創始者が彼れの個性に依りて其の問題の性質を解釋し、その解釋に隨つて其れに與へた答案である。この事實よりして、哲學は一面に於て氣稟の學問であると同時に、他の一面に於て傾向の學問である。孰づれよりするも、哲學が時代の所産として時處に即し、時處に制せられることには一點の疑を挾む餘地はない。

最近數年間に亙つて、わが國の謂ふところの識者に依りて、『刻下、わが國は其れの總べての方面に於て墮落の極に達して居る。この墮落の極よりわが國を救拯し得るものは獨り哲學のみである。哲學はわが國が有たなければならぬ最重要のものである』といふ意見がしばしば口にされたのであつた。然し、彼等の中、一人として、刻下に於けるわが國に對して、さういふ効力を有し得る哲學は如何なる種のものであるべきかを殊示し、其の哲學が如何なるプロセスを通し

てさういふ徴驗を現はし得るかを解說するところはなかつたのである。彼等にしてさうするところのなかつたのは、多分、さうすることが出來なかつたのであらう。畢竟するに、彼等は、漫然、哲學を以て一つの萬能藥と心得て居たのであらう。

一概に哲學と言つても、哲學は其れの種と數とに於て夾雜を極めて居る。ブラッドレエは哲學を割義して、其れは嚴密に事物を考へることとであるとしたのであつた。然し、嚴密に事物を考へると言つても、興味の異なるに隨つて、其れの假定に於ても、又、其れの推理の方法と方向とに於ても、大分に異ならざるを得ない。こゝに、嚴密に事物を考へる程度を等しくしながら、いろいろと組織を異にする哲學が出來る理由がある。そして、其等の孰れもが總べての生活に取つて、總べての場合に方つて、無差別に平等の價値があるものではない。其等の或るものは桎梏となり、他の或るものは解放の具となつてはたらくのである。

一つの時代は獨自の組織とはたらき振りとを以て獨自である。そこに獨自の矛盾と困難とが胚胎される。其等獨自の矛盾と困難とを解決するためには、若しくは溶解するためには、獨自の方便が工夫されねばならぬ。是れ、各の時代は此等の方便の尤なるものとして、獨自の詩を要求するやうに、獨自の哲學を要求する所以である。されば、何人にしても、刻下に於けるわが國に取つて哲學を有つことの最要事なることを力說しようとするならば、彼等は、先づ、現にわたくし共の生活の中に胚胎されつゝある矛盾と困難との特徴を理會し、其の理會に隨つて、正に要求さるべき種の哲學の特徵を理會するところがなければならぬ筈である。

一見したところ、現にわたくし共の生活の中に胚胎されつゝある矛盾と困難とは、制度や、設備に關するものより、行動や、情操に關するものに至るまて、到底枚擧に違あらざるほどに無制限に夥多である。然し、さうであるのは、わが

文化の缺陷を其れの症狀に於て觀察し、其れの病源に就いて診視しないからである。一度、其れの病源に就いて診視する時、わたくし共は其等の矛盾と困難とは、案外にも、單一にして、單純なる不用意、若しくは、無反省より由來することを發見するであらう。若し世人にしてこの間の事理を洞察せざるがために、彼等が現になして居るやうな風に、政治や、產業や、學術や、道德や、宗教を以て其等の症狀を治療しようとして、反つて、ますます其の病源をして內攻せしめて居るならば、此等のものの外に、上に、人間に依つて工夫される機關にして、（其れを哲學と呼ぶにしても、呼ばないにしても）一つでも端的に其の病源に溯つて、其れの眞相を診斷し、其れの病力を芟除し得るものがあるか、どうかと考慮して見ることには十分の意義がある。さうして、人間がこれまで閱し來たつた彼れの過去の文化に徵して、さういふ役目を滿たしたものが一つあつた、そして、其れは哲學と呼ばれて來たものであるといふことが明らかになつたならば、そこで、始めてわたくし共は是非ともさういふ役目を滿たし得るものを一つ有たなければならぬといふ限りの意味に於て、刻下に於けるわが國に取つて哲學を有つことは其れの最要事であると力說することが一つの切實なる觀察となるといふものである。

世の中に philosophies と呼ばれて居るものは澤山にある。然し、わたくし共に取て卓越して the Philosophy と呼ばれなければならないものは唯一つ、若しくは、唯一つの種しかあり得ない。其れは、若しくは、其の種のものは、如何に廣汎に、そして、忠實になさるゝとも、單に傳統となつた學說に關する記誦よりは來らずして、獨り自己を中核として左右前後に廣がる現實生活の上に施される聰明なる、そして眞劒なる反省より來たるのである。然し、わたくしの知り得る限り、わが國に於ては、そんな、若しくは、そんな種の哲學は、今日のところ、出現の途中にはないやうである、否、構成の途中にもないやうである。現在、哲學研究者として自任し、他稱されて居る輩は、其の數に於て決して少な

いとは言はれない。たゞ、わたくしの怪訝に堪えない一事は、そんな、若しくは、そんな種の哲學を建設するに必要なる精神と態度とが全然彼等の哲學研究の圏外に置かれて居ることである。彼等は他の國民に依つて工夫され、完成された哲學を、確乎たる目的も、歷然たる方針もなく、徒らに傳習して居ることだけが哲學研究であると妄想して居る。わたくしは、嘗てミシシッピイ河畔の兒童は彼等が學校で學ぶ教科書に出て居るミシシッピイ河が、自分たちの軒先きを流れる河のことであるといふことを彼等の教師から教へられて意外の感じを抱くことを聞いた。地理書には地理に關することは書いてあつても、自分等の生活に直接關係ある地理に關しては何事も書かれないもの、書かれてはならないものと彼等は考へて居たのであつた。わが國の謂ふところの哲學研究者の謂ふところの哲學研究に對する理會も、此等の兒童が地理學に對する理會と殆ど選ぶところはないのである。彼等が哲學を研究するとは、擬古氣分に醉ひ、異國情調に耽ることに過ぎない。彼等が號してプレトオの、スピノザの、乃至、ヘエゲルの研究として居るものは、既成の天啓として其等を記誦して居るのである、自分の生活の註脚として其等の起原と意義とを追究して居るのではない。彼等は、既に彼等の哲學思索に於て、其れの第一の、そして、必須の條件たる「汝自づからを知れ」を閑却して出立して居る。たとひ其等にして千年の齡を重ねることあるとも、口耳の徒たるに止まつて、終生、何等の得るところのなかるべきは當然のことである。『樹は其の實に依りて知らる。』彼等の或る者は頻りに文化の意義を口說する。然し、彼等が現に分領して居るわが國の文化の性質に關しては、尠しも會得するところなく、隨つて、其れの缺陷に對して尠しも施策するところのないのは、彼等の謂ふところの哲學研究がまだ僞物であり、假物であつて、眞物となつて居らない何よりの證據ではあるまいか。

わたくしも哲學を以てわが國が、特に、刻下に於けるわが國が有たなければならぬ最重要のものであると信じて居る

一人である。昔、英國の物理學者ジョン・ティンダルはトオマス・カアライルの銅像除幕式に於て、カアライルが彼れに及ぼした感化の性質を演說して、『カアライルはおのれの義務を爲せと自分に命じた。自分は彼れのこの道德的刺激に感じた。そして、自分の素質は一物理學者として最も善くおのれの義務を爲し得るやうなものであると考へたから、遂に自分は物理の研究者たるべく決心した。』と語つたのであつた。わたくしをして一哲學研究者たらしめたものは、わたくしの素質であつたか、教養であつたか、乃至、境遇であつたか、こゝでそんなことを問ふ必要はない。いづれにしても、其れの淵源に就いてわが文化を改善し得るものは獨り哲學である、隨つて、哲學を以てわが國が有たなければならぬ最重要のものであると信ずるがために、現にわたくしが哲學の研究に從事して居ることは事實である。正直のところ、わたくしの學問はまだ至つて未熟ではあるが、ますます其れの上達に努めて、他日わたくしの不才、許す限りわが國の、文化に貢獻するところがなければならぬとわたくしは決心して居る。然し、わたくしが哲學と考へて居るものは、哲學の名稱に價するほどの哲學と考へて居るものは、其れの準備としては苟も人間に依つて體驗されたものならば、其れが正確なるパアスペクチイブを通して觀照され、評價される限り、わたくし共に取つて全然外物として殘る筈はない。さればさうする用心をさへ缺かない以上、如何なる材料が如何に廣く參照され、如何なる思索方法が如何に深く攻究されるのも差し支へはないが、其れの構成を支配する最後の興味、若しくは、志向は現にわたくし共の生活の中に胚胎されつゝある焦燃問題の解決、若しくは、溶解に資するがために、之れが淵源の由來と性質との理會に對してわたくし共の理智を啓明し、わたくし共の情操を澄明するところになければならない。

わたくし共は、世界の國民の中で、最も特異な境遇に置かれた國民である。この結果として、(曾てわたくしが或る機會に於て指摘したやうに、)わたくし共の生活は、二重に、一方に於ては、神秘主義的となり、他の一方に於ては、唯物

主義的となつて居る。此れがわたくし共の文化の根本疾患であつて、今日わたくし共に取つての焦點問題は一つとしてそこより發生して居らないものはない。わたくし共に依つて此等根本疾患の由來と性質とが明瞭に理會せられ、其れの芟除に對つて的確なる方策が工夫されない間、わたくし共は、永久に、事々物々矛盾を含み、消耗を生ずる不合理にして不經濟なる生活を續けねばならぬ。そして、今日わたくし共の生活の機關となつて居る政治にしても、道德にしても、宗教にしても、產業にしても、學問にしても、教育にしても、この根本疾患を芟除する力を有たぬ。何故ならば、此等のものは、こゝ五十年間堆積されて來たわたくし共の文化の成り行きの所産であるがために、其等の各は、其れの腹心に於て、既に其の根本疾患を分受して成立して居るからである。事實さうであるとすると、わたくし共は、どうしても此等のものを超えて、わたくし共の生活に卽しながら、全體として其れの區々たるはたらき振りの上に反省し、散じて其等の中に沈潛する志向を糾合し、意義を統一するものを一つ有たねばならぬ、作らねばならぬ。この一つのものこそ卓越した意味に於て、わたくしがわたくし共の哲學と呼ぶところのものである。其れの內容と様式とはわたくし共の生活の理想と要求とに依つて決定される。そして、其れのメリツトを判斷する唯一の標準は、其れがわたくし共の生活に役立つか、どうか、詳しく言へば、わたくし共の生活を擴張するか、どうか、充實させるか、どうかといふことである。其れが正しきもの、深きものである限り、其れは、おのづから、異なる時代に取つても、異なる國民に取つても、貴重なる參考とはならう。然し、そんなことは、其れの偶然の副產物であつて、其れが當面の問題とするところのものではない。

尠なくとも場所柄を忘れまいとして居るわたくしは、こゝでは、かゝる哲學の構成の假定と、順序と、思索方法とに關しては一切の言説を顧慮せねばならぬ。たゞ、其れはヴィンデルバンドの謂ふところの發生方法を取らないと同時に、

批判方法をも取らず、又、絶對主義に反對すると同時に、經驗主義にも反對し、價値、若しくは、意義に限り時間の内にあつて、人間が判斷の連續を通して彼れの生活を改整し行く進程の中にのみ實現されるものであるとするのを其れの一般特徴として居るといふだけに止めて置かう。個々の經驗は其れの作用に依つて始めて存在し得ると主張するところから、其れを作用主義と呼んでもよい。又、理想は實驗のテストに依りて始めて成立するものであると主張するところから、其れ〃實驗理想主義と呼んでもよい。ヴィンデルバンドもコオエンも口を揃へて、哲學は希臘的のものか、獨逸的のものかに限られると高唱して居るが、わたくし共の哲學としてわたくしの肚裡にあるものは、希臘的でも、又、獨逸的でもあつてはならぬことだけは明らかである。

わたくし共の生活は獨自のものである。わたくし共は獨自の矛盾と困惑とに取り捲かれて居る。其等を解決し、若しくは、溶解する哲學は、亦、獨自のものでなくして可いであらうか。

今わたくしはかゝる哲學を將ゐて、わが國の文化の缺陷の由來と性質とを吟味して見ようと欲する者である。

四、わが國の文化の缺陷の由來と性質

米國大統領ルウズヴェルトは一代の闘士であつた。彼れは、彼れの一生を通じて、社會の傾向の改善のために奮闘したのであつた。そして、之れがために彼れが用ゐた標語は、『高德にして勇敢なれ』であつた。彼れの考へたところに隨へば、當時日夜米國の社會に於て化醸されつゝあつた缺陷の總べては、其れの市民が十分に德高からず、勇敢ならざるに起因したのである。一層正確に言へば、高德の者は勇氣を缺き、勇敢なる者は德性の低いところに起因したのであつた。勿論、一方に高德であることと、他の一方に勇敢であることとは生活の鹽として如何なる社會のメンバアに取つて

も大切なことであるから、彼れが米國の社會の健全のために聲を勵まして彼れの同胞に對つて其等が併養するやうにと鼓吹したことは至當であつた。然し、若し彼れにして彼れの奮闘の實績が擧がりさへすれば、彼れの目撃して居た缺陷は悉とく除去されるものと速了して居たならば、彼れは其れの最も重大なる要因を見逃がしたのである。米國が、當時に於てさうであつた如く、今日に於ても、いろいろと嚴肅なる問題に逢着し、困惑して居るのは、だんだんに其れの社會組織と經濟制度と、生活理想との變遷するにつれて、其等の間の喰ひ違ひより發生したのである。其等は、まづ其等の喰ひ違ひの出來と性質とを見極めることの出來る智識と智慧とに依つて偵察され、攻究さるべき問題である。其等の問題が知識と智慧とに依つて偵察され、攻究されて其等の眞相が捕捉された上は、之れが解決の方便として高徳も必要であるし、勇氣も必要であるが、問題の特徴からして、單に高徳と勇氣とあるだけであつて、指南車として、知識と智慧とが其等に先き立つにあらざれば、其等は大して役をなすものではない。されば、ギリシヤ人の徳目に於ても智慧が其れの主位を占めたのであつた。

從來、わが國に於て生活改善、若しくは、社會改善を標榜して立つた者は多かつた。然し、わたくしの見るところでは彼等の殆ど總べては其等の成就に必要なる一つの重大なる要素を閑却して居たのである。是れ、彼等の成功が彼等の企圖に副はなかつた所以である。今日、震災の後を承けて、生活の改善、若しくは、社會の改造を標榜して立つ者は決して尠なくない。そして、彼等の成功が彼等の企圖に副ふや、否や、は一に彼等が果して其の一つの重大なる要素を閑却するや、否やに懸つて居るのである。それならば、其の一つの重大なる要素とは何んであるか。其れは他でもない、知識である、智慧である。現にわたくし共の生活の中に胚胎されつゝある缺陷の由來と性質とを發見し、診斷する知識である、智慧である。然し、震災前に於て、其等を閑却して居た彼等は、震災後に於て、頓に、其等を重視することにな

つたであらうか。わたくしは頗る其れを危むものである。

わたくし共日本人は一國民として未だ自覺に達せぬのである、自覺に達しようと努めて居らないのである、自覺に達しようと努めることのおのれの永遠　幸福に取つて如何に大切であるかに氣付かぬのである。自覺とは、自分の所爲の全般を一つの對象とし、其れの上に反省することに依つて其れの意義を發揮し、體認し、把持することである。わたくし共は、この五十年間、總べての上に於て非常に貧乏であつた。特に觀念の上に於てさうであつた。觀念の上だけで言ふならば、わたくし共は文字通りに『手より口へ』の貧乏生活を送つて來たと言つてもよいほどである。そして、其れには十二分の理由があつた。

わたくし共の父老は、突然に、そして、威嚇を以て（彼等から見れば）奇怪極まる環境に置かれ、そして、そこにどうにかして彼等の生活を持續して行くように強ひられたのであつた。彼等は、倏ちにして、苦き實驗を通して、そこに生活を持續する道具としては、在來の文化の産出した機關の多くは其の用を爲さないことを覺つた。さりとて、彼等にそんなものを自分の工夫に依つて急造するとしては、準備　時間とゝ一　缺いて居た。この場合、彼等は、彼等の本意に反して、世界のどこにかさういふものを求めなければならなかつた。倖にして、彼等はさういふものを西洋の文化の産出した機關に於て見出だした。彼等は半分は實用より、三分は臆測より、殘りの二分は好奇心より、手當り次第に、其等のものの由來も、意義も、相互の關係も顧ず、一層正確に言へば、知ることが出來ないまゝに、さうして聞けば何かの役に立つだらうぐらゐの氣分で其等を拾ひ上げ、移植したのであつた。斯くの如きが、抑も今日わたくし共がわたくし共の文化と呼んで居るものの濫觴である。それから後、この五十年間に亘つて、西洋の文化は一度發足した進程をたどつてますます其れの機關を完成して行つた。其れに對するわが國の態度はたゞ汲々乎として彼の土に在つて制度に於て、

學說に於て、技藝に於て、將た、情操に於て、一發明が出で、一變遷が生ずる度に、盲目的に其等を尊信し、沒批判的に其等を適用することの其れであつた。勿論、だんだんに深く西洋の文化に親炙し、だんだんに汎く其等の機關を取り扱つて行くにつれて、不用意の中にもおのづからわが國の特殊の事情と、要求と、國民性とからの漾蕩に依りて其等の間に尠なくとも何かしら連結化のはたらきに似たものが出來て居らねばならないことだけは想像出來る。然し、明晰なる意識と精確なる目的とを以てわが國の事情と要求と國民性とに憑據して、其等の上に廣汎に、透徹に、そして、深奧に統一化の工夫の施されなかつたことは事實である。英國の憲法は作られたのでなくして、生長したのであると言はれて居る。わが國の文化は、今日のところ、成長したのでないのは無論のこと、嚴密なる意味に於ては作られても居らぬ、纔かに寄せ集められ、若しくは、積み重ねられて居るだけのものである。拙なきモザイクはある、眼に付かぬ折衷はある、然し、渾然たる創造の一つも見當らないのは、之れが何よりの證據ではないか。

昔より、大なる創造者は大なる借用者であつた。國民としてギリシヤは大なる借用者であつた。彼等はアジヤやアフリカの文化を借用することに依つてあの光輝ある獨自の文化を創造したのである。個人としてシエクスピヤは大なる借用者であつた。彼れは彼れの劇の題材を多くの民族の傳奇や歷史より借用することに依つて、あの八面玲瓏なる獨自の天才を完成し得たのである。わたくしはわが同胞が借用者であることを恥づる者ではない。たゞ、彼等が永久に模倣者たるに止まつて、創造者となり得ないのを悲しむ者である。こゝでこのやうに語つて居るわたくしの直意は讀者に依つて的確に理會されねばならぬ。わたくしは故らに科學に於て、藝術に於て、哲學に於て、一二の民族的、若しくは、國民的紀念碑の築かれないのを悲しんで居るのではない。わたくしの悲しんで居るのは、其等の築かれないのは、偶々わたくし共の日常生活に依つて近世文明の意義が尠しも理會されず、隨つて、其れの歸趨が尠しも體認されて居ないことの象

僅に過ぎないとするからである。さきに、わたくしが、わたくし共は、その場合にわたくしが說明した意味に於て)物質的に近世文明を使用して居るが、其れを精神的に運用しては居らないと言つたのはこの事實を指して言つたのである。或る人が或るものを精神的に運用すれば、其れは全然彼れの支配の下にあるから、其れがどんなに複雜なる組織を有するも彼れに對して何等の抵抗を呈することはない。之れに反して、或る人が或るものを纔かに物質的に使用することになると、其れがどんなに單純なる構造しか具へないでも其れは彼れと對立の關係にあるがために、事毎に彼れにまで一つの[illegible]を現はすことになる。上手な船頭に逆風なしと言ふことが眞實であるならば、下手な船頭には順□も逆風となるといふことも眞實であらねばならぬ。して見れば、精神の發動として條文が出來たのでなくして、まづ條文が輸入され而して、其れを運ぶ精神が急に粗製され居るわが社會に於て、如何なる制度、若しくは、設備にしても、其等が實行されることになると、其等が期待する効果と、實際の成績との間に當初立案者の全然豫想なかつた扞挌の發生る場合の多いのに大した不思議はない。然し、其れに對して誰れが其の責を負ふべきであるか。直接には立案者が其れの一半を負ふべきであらう。實行者も其れの他の一半を負ふべきであらう。然し、結局其れの全般を ふべきものはわたくし共の文化そのものであらねばならぬ。彼等、立案者と實行者とは、倶に、其れの中に育まれ、其れに依つて薰染されて、各、其れの缺陷を享有し、たゞ、其れの代理人としてはたらいて居るのに過ぎない。わたくし共が政治に於て、產業に於て、道德に於て、教育に於て、學問に於て、餘りにしばしば逢着する其等の缺陷は、こゝにわたくしが指摘した事柄の動しづゝ其の姿を變へたものに他ならない。其等は悉とくわたく 共の文化の缺陷の反映である。されば、これまで世人が政治の、產業の、道德の、教育の、乃至、學問の缺陷を匡正しようとして、其等を匡正することが出來なかつたのみならず、反つて、未來に向つて新たなる缺陷の種子を蒔いたのは、彼等が其等の淵源たる文化の缺陷にまで溯つて

其れを匡正する知見を有たなかつたからである。

わたくしはわたくし共の文化に對して決して苛刻であることを欲しない。わたくし共の父老やわたくし共にして一層聰明であつたならば、言ひ換へれば、一事を爲すに方つて其れの上に一層の反省を施して行つたならば、わたくし共は今日一層優れた文化を有つことが出來たこととわたくしは考へる。そしてわたくし共の父老にしても、わたくし共にしても、尠しく氣分の持ちやう、態度の取りやうを改めさへすれば、其れは容易に出來たこととわたくしは考へる。然し公平に見て、わたくし共が現在の文化を作り上げるまでには、さまざまな故障や、妨害と鬪はなければならなかつた。さういふことを思ふと、わたくし共の文化の價値を評定するのには相當な割増をして掛らねばならぬ。重ねて言ふが、わたくしはわたくし共の文化に對して決して苛刻であることを欲しない。然し、缺陷はどう見ても缺陷であるに相違ない。そんなものは保存されるより取り除かれた方がよいに定まつてゐる。そして、わたくしは、世人にしてさう決心し、其の決心に隨つて行なふ限り、其等を取り除くことは、尠なくともだんだんに其等を減少することは確かにわたくし共の實力の中にあると信ずる。其れは、其等の缺陷の淵源たるわたくし共の文化の由來と性質とを、其れがわたくし共の生活の中にはたらくまゝに、篤と理會し、體認する智識と知慧とを養ひ、且つ、はたらかせることとである。今日、この復興の時期に方つて、わが同胞はいろいろと、改良、若しくは、改造の事業を意圖しつゝあるが、彼等の意圖する通りに此等のものをして効果を擧げしめるには之れに優る知識も知慧も他にあり得ないとわたくしは斷言する。

五、わが文化の缺陷を反映する二元情操と二元生活

わたくし共の文化が統一された精神的のものでなくして、きれぎれの物質的のものであるところから、多くのものに

關するわたくし共の感じ方、考へ方は一方に於ては神秘主義的となり、他の一方に於ては唯物主義的となつて居る。この感じ方と考へ方とはわたくし共の生活の中に多くの無益な矛盾と消耗とを化醸するものとして、どのくらゐわたくし共の活動と幸福とを荼毒して居るか解らない。

神秘主義的といふ言葉と唯物主義的といふ言葉とを最廣義に取るならば、其等は隨分古い起原と多くの沿革とを有する人間の感じ方、若しくは、考へ方である。そして、この感じ方、若しくは、考へ方は今日に至つても、猶ほ全く其の跡を人間の生活より絶たないほど深く彼れの性情に根柢するものである。人間の生活に在つて、單一なる活動、例へば判斷とか、行爲とかいふものが、其れの發端より其れの終結までに至る進行中に起る二重の關係を作用的に識別せずして、存在的に、若しくは、發生的に區分する必然の結果として、其れの一面を支配するものと同一視し、其れの他の一面を支配されるものと同一視することになる。さうすると、こゝに、同時に、單一なる活動に對して神秘主義的と唯物主義的との感じ方、若しくは、考へ方が形造られることとなる。斯くして、それぞれ多少異なる興味と觀點とから作られたのではあるが、神と人間、天理と人道、意義と存在、法則と事實、義務と快樂、理想と情欲等が各、獨立の存在、若しくは、本質として對立せしめられることになつたのであつた。さうして、各對の前項に權威と意義との一切を與へて、其れの後項より全然其等を奪つたのであつた。今日わたくし共の生活の組織と理想とからみれば、かゝる感じ方、若しくは、考へ方の不經濟極まるものであり、不合理極まるものであることは言ふを俟たないが、人間の文化の或る段階に於ては、かゝる感じ方、若しくは、考へ方が多くの經濟性と合理性とを有つて居たのである。然し、それから後、人間の生活のだんだんに流動化されると同時に作用化されて來るに及んで、かゝる感じ方と考へ方とは次第に其の經濟性を失なひ、隨つて、其の合理性を失なふことになつた。今日に於ては、權威も意義もわたくし共の生活が全體としては

たらく時の體驗であるから、其等は各對の兩項の交渉の中にのみ成り立つものと理會さるゝことになつた。そして、（前に掲げた例を引くならば）神と人間との對立は其の他の對立と等しく、生活の契機、契機に權威と意義とを成り立たせるに必要なる作用たる確執と、協同との二重作用をはたらかせる方便に過ぎないといふことを覺るに至つた。實に權威若しくは、意義はわたくし共の生活全體が有つた性質であつて、わたくし共が生活して或る目的が實現される時、わたくし共は其の實現に伴なつて意義、若しく其、權威を體驗するのである。

人間は舊き文化を繼承し、其れを新らしき方向に發展するのを彼れの生活の一般典型として居る。彼れが生活すると、舊き制度を其れの樣式として新らしき衝動を統一し、其れの奔逸を防ぎ、新らしき衝動を其れの內容として舊き制度を擴充し、其れの朽廢を救ふことである。如何なる個人、若しくは、國民と雖も、彼れ、若しくは、彼等が生活する限り、必然にこの綜略の內に於て生活して居るのである。完全なる生活とは、個人としても、若しくは、國民としても、舊き制度と新らしき衝動とが適度に互ひに牽制し、相協同して、統一と擴充とが一時に都合よく行はれて居る生活の謂である。然し、實際の事實として、舊き制度と新らしき衝動とは乖離し、反目する場合は尠なくなかつた。其の場合には、人間は舊き制度と新らしき衝動とに對して全然異なる評價を與へることになる。舊き制度に對しては其れを神秘主義的に評價して其れの意義、若しくは、權威を彼れの理會以上のところに置き、新らしき欲求に對しては、其れを唯物主義的に評價して其れの意義、若しくは、權威を彼れの理會以外のところに置かうとする。

單一なる活動を分割し、其れの一部を神秘主義的に評價し、其れの他の一部を唯物主義的に評價する感じ方、若しくは、考へ方は、理論の上だけでは、過去の文化の遺物に過ぎないものと見做されて居るが、實際の上では、現在の文化に於ても、往々有力に人間の行動を支配して居る感じ方、若しくは、考へ方である。わたくしは之れが適切なる實例を

今日の國際關係に對する歐洲諸國の態度に見出だすのである。彼等にして宣言する如く、若しくは、互ひに宣誓した如く、眞に平和を希望して居るならば　何故に彼等は實行に依つて其れを裏切るやうなことを續けて居るのであるか。彼等がさういふことを續けて居るのは、畢竟するに、彼等がこれまでの行き掛り、即ち、制度と、將來の希望、即ち、衝動とを現に彼等の生活を組織する二つの要素として完全に支配することが出來ないために、名譽とか、利害とか、いろいろの幻想の下にこれまでの行き掛りを神秘主義的に評價して其等をして固定せしめ、將來の希望を唯物主義的に評價して、其等をして渙散せしめて居るからのことである。

何人に取つても、彼れの生活を組織する總べての要素が完全に彼れの支配の下にあり、隨時、彼れの意思に依つて自由に改整され改造されるやうに柔軟であり、從順になつて居りさへすれば、彼れの生活方針としての感じ方、考へ方は單一であるべきである。わたしは其れを（最深義に於て現實と理想とは一つものでなければならぬから、）現實主義的、若しくは、理想主義的と呼ぶであらう。かゝる狀態に在つては、制度と衝動とは樣式と內容とを代表するものとして其等の間に作用上の差別はあるが、存在上の對立、若しくは、本質上の反目はないわけである。何故ならば、兩者の間に生ずる確執は、たゞ、一層高き調和の暗示とし、準備として役立つに過ぎないからである。されば、何人にしても、彼れの生活を組織する要素を兩分し、彼れの生活方針として、其れの一方を制度として其れに神秘主義的の評價を與へ、其れの他の一方を衝動として其れに唯物主義的の評價を與へて居るやうな感じ方、考へ方をして居るならば、彼れの生活を組織する總べての要素は彼れに依つて完全に支配されて居らないといふことを證據立てる。

今日、世界の文化國民の孰づれと雖も、彼等の生活に對して神秘主義的と唯物主義的と二重の評價を與へるやうな感じ方、考へ方をして居らない者は一つもない。それだけ彼等の文化は猶ほ幼稚の程度にあるのである。然し、この點に關

しては、其等の中でも、支那國民と印度國民とを除いては、日本國民は最も酷だしきものであるとせねばならぬ。其れは、わが同胞は二重に神祕主義的と唯物主義的との感じ方と考へ方とに依つて彼等の生活を分割し、其れをして混亂と無統一とに陷らしめて居るからである。此れが此の一事がわが文化の精神的でなくして、物質的であることより馴致された損害の最も大なるものである。さきにわたくしは制度と欲求との融通せず、協同せざるところに制度に對しては神祕主義的に評價し、欲求に對しては唯物主義的に評價する感じ方と、考へ方とが化醸されると言つたが、わが國に於ては、制度に二種あつて、喰ひ違ひは制度と衝動との間にあるのみならず、乖離は其等の二種の制度の間にもあるのであるから、事態はますます面倒になる。然し、この一見して面倒な事態も、其れの原因は極めて單純であつて、其れは彼等が彼等の生活を形造る總べての要素を其れの機關として自由に驅使し、按排する知見と實力とを缺くところから來たつて居るのである。若し彼等にして、さうする知見と實力とをさへ具へて居たならば、そこには制度と衝動とに關して舊と新との區分もなく、固有の制度と舶載の制度、若しくは、急造の制度との間に内と外との差別のあるべき筈はない。其等のものはたゞ現實の情操の思想の、乃至、行爲の樣式及び内容としての役目を滿たして居るに過ぎなかるべきである。

わたくし共の文化の啓發に取つて最も恐るべき障礙はわたくし共の感じ方と考へ方とが一方に於て神祕主義的となり、他の一方に於て唯物主義的となつて居ることとであることは多言を用ゐずして明白である。何故ならば、其等がさうなつて居ることはわたくし共の生活を組織する二つの要素たる制度と衝動とをして交錯せしむることはあるが、決して融通し協同せしめることのない結果として、其れの健全なる存在に缺くべからざる事物の意義に關する解釋と、其等の構成に關する改整とを十分にはたらかせる機會と知見とを全然わたくし共より奪ひ去るからである。

若し今日に於てわたくし共に取つて生活改善、若しくは、社會改造の必要があるならば、其れはわたくし共の文化をして物質的のものより精神的のものに化すことであらねばならぬ。そして、さうすることはわたくし共の感じ方と考へ方との一方に於て神秘主義的であり、他の一方に於て唯物主義的であることを改めて、最深義に於ける理想主義的、即ち、現實主義的であることにすることから始められねばならぬ。

六、二重情操と二重生活との種々相

今日、わが文化の中に絶えず代謝して化醸されて居る缺陷はいろいろあるが、其れの淵源を討尋して、其れを、わたくし共が近世文明を精神的に運用せずして、物質的に使用して來た自然の結果として、わたくし共がわたくし共の生活を組織する要素に對して、一方に於ては神秘主義的の評價を與へ、他の一方に於ては唯物主義的の評價を與へられて居る感じ方と考へ方とが馴致せられ、其れがわたくし共の生活の全般に亙つて其れの最小細胞にまで喰ひ入つて羈絆となり、桎梏となつてはたらいて居る、事に歸するの わたくしは躊躇せぬ者である。世人をしてこの一事が如何なる風にわたくし共の生活に取つて羈絆となり、桎梏となつてはたらいて居るか、その羈絆と桎梏とがわたくし共の生活改善、若しくは、社會改造に取つて如何に大なる障礙となつて居るかを會得せしめるために、わたくしは其れの發動の種々相に就いて尠しく語るところがなければならない。

一口に種々相と言つても、一次的のものと二次的のものとの相違、隨つて、過眼的のものと恒久的のものとの相違がある。こゝにわたくしが語らうとするところのものは、一次的のもの、恒久的のものに就いてである。わたくしは其等を一、自主精神の缺乏、二、分離主義の浸潤、三、流行感情の專制、等の項目の下に措擬しよう。

劣等なる文化を有つた國が優等なる文化を有つた國と接觸し、其れの文化の適用に依つて自國の文化の開發を圖ることになると、自力に依らずして多く他力に依つて頓に自國の文化の面目を一新する利益はあるが、此等二つの國の文化の優劣の間異が其の當時に於て餘りに大なる懸隔があると、悪くすると、優等國の文化は劣等國の文化の自然の發展を幇助しないで、反つて、不自然に其れを壓倒し、酷だしきに至つては、其れをして窒息せしむることになる。劣等國は地理の上から、歴史の上から、國民性の上から、自國に一個の獨自性の存在する事實と、又、存在しなければならぬ道理とを忘れて、盲目に、永久に亙つて實際に於ては更に角として、理論に於ては、自國の文化の長短、美醜を律するに優等國の其れを以てしようとする全然誤れる情操が馴致される。さうなると、參考とされ、刺激とされて、始めて一つの意味をなす外國の文化は自國の文化にまで模範とされ、若しくは典型とされて了ふ。奇怪にも、おのれの生活を統率する標準は其れも外にあつて其れの內にないことになる。世の中に之れに勝る不合理は又とない。然し、この不合理なことはしばしば人間の生活に於て起つた現象であつて、正にわたくし共の生活に於て起つて居る現象である。

昔、一人の儒者があつた。或る時、經書を講ずるに方つて、彼れは其の講義に列した彼れの弟子たちに對つて、『若し假りに支那より大軍が攻め寄せ、孔子、孟子が先頭に立つて其の大軍を指揮するとしたならば、其の時お前たちはどういふ處置を取るか』と尋ねた。そこで、弟子の一人は進み出で、『其の時は拙者は甲冑を身に纒ひ、槍を手に取つて、まつ先きに孔子、孟子に手向ふでございませう。』と答へたさうである。こんな對話でも、當時に於てはコンヴェンションを破つた、極めて大膽な、そして奇拔なものであつたのである。然し、當時に於ては、稀有の識見を以て吟つて居た彼等の生活も、尠なくとも、其れの一半は既に支那に依つて征服されて居たのであつた。因襲の久しき、反省の足らさる、彼等はたゞ其の重大なる事實に氣付かなかつたのである。彼等は政治上に於ける自國の獨立の大切なることは知つ

て居たが、文化上に於ける其れの獨立の更に一層大切なることを知らなかつた。彼等は政治上に於て自國が支那の屬國たることを惡みながら、文化上に於ては互に競つて其れの屬國たることを希へて居たのである。荻生徂徠は日本を卑下して、東夷と稱したとて、世人の物議を買つたのであるが、當時儒者や文人の輩にして、彼等の內心に於て日本を以て東夷に擬して居らなかつた者が果して幾人あつたであらうか。然し、わたくし共には彼等の所爲を非難する權利は毛頭ないやうである。何故ならば、明治の初年に方つてわたくし共の父老は一國を擧げて生死の巷に置かれたとは言へ、遙かに大なる規模で政治上に於ける自國の獨立を保障するために、文化上に於ける其れの獨立を失墜する端を開き、そして、今日に至つても、わたし共は依然として彼等の過失を繼承し、尠しも其れを訂正するの道を講じて居らないからである。

孰づれの國民に取つても、出來るだけ自由に彼等 文化を發展することが最後の目的であらねばならぬ。政治の改善はたゞ其れの方便として一つの意義を有つのである。何故にわたくし共は政治上に於ける獨立を失なふことを恐れなければならぬかといふ最大なる理由は、さうなれば總べての場合に於てゞはないが、大抵の場合に於て文化上に於ける獨立を全うすることが不可能となるからである。されば 政治上に於ける獨立を得るがために、文化上に於ける其れの獨立を失なふといふことは矛盾の甚だしきものであると言はねばならぬ。

嘗ては、西洋諸國はわが同胞に依つて異國と呼ばれた時代があつた。異國とは野蠻の國、粗野の國、尠なくとも、不自然の國の謂であつた。此れはわが同胞の無智より來たつた偏見に過ぎなかつたのであるが、今日に於ては、舶來は優秀を意味し、和製とは劣惡を意味することとなつた。其れは精巧とか、耐久性とかに關聯して、容易に單純なる功利の標準に依つて其れの優秀と劣惡とが試驗された事物に就いて舶來品が優秀であり、和製品は概して劣惡であるといふ事實

から、舶來を優秀の別名とし、和製を劣惡の別名とすることには何人も異義を狹まないであらう。わたくしが極力非難するのは、單純なる功利の標準よりも遙かに複雜にして柔軟なる考慮より成る標準を必要とする事物に關して、而かも、試驗に先き立つて舶來を優秀の別名と取り、和製を劣惡の別名と取る當習の深くわが同胞の心裡に浸潤し、其れの公平なる觀察と判斷とを腐蝕し、掩晦して居ることである。

わが同胞に依つてはまだ卓越性の性質が明晰に理會されて居らぬ。彼等は卓越性を以て、例へば通用貨幣の如く固定の價値を以て萬人に共通のものであると誤解して居る。彼等は一つの制度にしても、一つの學說にしても、乃至、一つの生產の方法にしても、其等の結晶した國民の間に其等の卓越性が承認されゝば、其のまゝ其等はわたくし共に取つても同一程度の卓越性を有つものと速了して居る。そして、彼等は、其等が果してわたくし共に對してどれだけの卓越性を有ち得るかといふことは實際にわたくし共の生活に依つて試驗されて、始めて發見され、決定されねばならぬ事柄であるといふことに氣付かぬのである。然し、わたくし共の生活の組織と要求とが其等の國民の組織と要求とより異なつて居ることが、事實である。隨つて、其等の制度學說、乃至、生產の方法は其等の異なるだけ異なつて、始めてわたくし共に取つて同一度程の卓越性を有つて來るのであるといふことは極めて見易き道理ではないか。其れは、彼等とわたくし共と等しく人間性を享受し、そして、今日に於ては大體同樣な文化の大勢の中に棲息して居る以上は、彼等に取つて卓越性を有つものは、わたくし共にまで來たつた時に、全然其の卓越性を失なつて了ふといふことはないのみならず、其等の或るものは其れの同一程度を保留するといふこともあるのは當然である。然し、此れは其等のものが適用された後、其の結果よりの立證に依つて承認さるべきものであつて、無雜作に其れに先き立つて假定さるべき事柄ではない。個人に取つてと等しく、國民に取つて或るものが卓越性を有つか、否かは、たゞ其れが如何に彼等の生活に役立つ

か、否かの一事に依つて批判され、決定されるのである。或るものは國民に依つて評價された時に、其國民からその卓越性は普遍的であると思惟されたにしても、其れは其國民の組織と要求とを標準としてさう思惟されて居るに過ぎない。されば、其れが他の國民に依つて適用されることになると、其の普遍的なる性質は彼等の生活の組織と要求との異なるにつれて、或場合には多く、或る場合には尠なく、然し、多小に拘はらず當然割り引きされて相對的のものとならねばならぬ。この第二の國民たるものは、其れの表記價値は如何なるものであらうとも、彼等の生活を標準として、新たに其れの內具價値を創造せねばならぬ。わが同胞に依つては、この單純にして、而かも、緊要なる考察は全然閑却されて居るのである。

特に驚くべきことには、過去に於て自國が產出した文化の意義に關してさへも、たまたま其れに對する西洋人の見解に逢著して、始めて信賴すべき評價の標準を得たと想像してゐるものが決してなくないことである。尠なくとも、一つの外國語を知るにあらざれば眞に自國語の特性を覺ることが出來ないといふ諺もある。わたくし共日本人は外國の文化に接觸すると共に、自國の文化に關する外國人の解釋に接觸して、ますます自國の文化に關する確認を深刻にし、自由にすることのあるのは事實である。わたくし共は世界の中の日本人として、世界の文化の中に自國の文化を理會することに依つて、始めて一つの純眞なる文化の所有者であり、支持者であることが出來る。わたくし共が眞正なる意味での世界人、若しくは、國際人たる最初の、そして、最後の覺悟は、眞正なる日本人たることであらねばならぬ。されば、わたくしは誰れにしても出來るだけ汎く、そして、出來るだけ多く自國の文化に關する外國人の見解を參照することに贊成する。たゞ、わたくしは其れの意義を決定する標準はわたくし共の生活そのものを外にして他に一つもあり得ないといふことを彼れに忠告しようと思ふだけである。

今日に於て、自主精神の缺乏を以てわが同胞の二重情操と二重生活とより派出した現象の最も悲むべきものの一つであることを誰れが否定し得るか。

次に、分離主義の浸潤なる言葉に依りて、わくしは何を意味するか。

分離主義とは、總べての事實、若しくは、活動を正しく理會し、正しく取り扱ふためには、其等のはたら振さりを作用的に識別して其等の統一を圖るべきであるのに、其等を存在的に、さうでなくとも、原理的に區分した上、其等の統一を圖らうとする思索方法の謂であるが、わが同胞が概して現にこの思索方法の囚となつて居る事實を意味するのである。

人間の生活に其れの道具として役立つ知識は判斷作用に依りて其れの材料たる觀念を選擇し、綜合することより成り立つが、其等の觀念は、其の始め、外界より來たる刺激に應酬するために、一つの漠然たる繼續體より分化したものである。この根本事實からして、知識なる不思議な作用が可能となり、其れの性質が限定される。十八世紀の大賢ティルゴオは、それまで具體的よりだんだんに抽象的に進んで行くのが知識の發達の順序であると一般に信ぜられて居たのに反して、其の實、其れは抽象的より具體的に進んで行くのである、といふことを宣言した最初の一人であつたとして稱讃されて居る。然し、嚴密に事實に即する時、知識の發達する順序は、具體的より抽象的に進むのでもなく、又、抽象的より具體的に進むのでもなくして、同時に其れの關係に於いてますます一般的となり、其れの意義に於てますます特定的となるのであることをわたくし共は發見するのである。知識は如何なる場合に於ても綜合と分析との二重作用に依つて發達する。綜合作用は其れの關係を一般化し、分析作用は其れの意義を特定化する。

人間は行ふために知り、知つて而して後行ふ。知は行の始めであり、行は知の終りである。理論は實行の準備として

のみ其れの存在の理由を有し、實行は理論の前提としてのみ其れの存在の理由を有するのである。然し、人間それ〴〵の才能の特長に隨つて出來るだけ自由に、出來るだけ妥當に其れの開發を企てゝ以來、理論と實行との間にも、一面の分業が行はれることになつた。そして、理論は主として知識の一般化の側面を司り、實行は主として其れの特定化の側面を司ることになつた。この自然の結果として、一見したところ、理論は統一的であり、實行は分離的であるやうであるが、健全なる生活にあつては、理論の統一的であるのは分離的たる實行を豫想してさうであるのであり、實行の分離的であるのは、統一的なる理論を前提してさうであるのである。つまり、生活が健全である限り、理論と實行とは、互ひに他に對しておのれの指標を失ふことなく、理論は分離的實行にまで發展するために統一的に推理し、實行は統一的理論の延長として分離的に處置してゐるのである。理論は大貨幣であり、實行は小貨幣である。若し世の中に小貨幣にまでくづせない大貨幣といふものがあるならば、其れは、既に、如何なる意味に於ても貨幣ではないのである。

然し、以上は人間の生活に於ける理論と實行との關係を一つの公準としての立場より叙述したのである。ありふれた生活にあつては、知と行、即ち、理論と實行との間に存在する交徹と融通とはこのやうに圓滿に、そして微妙にははたらいては居らぬ。そこにはいろいろな故障が發生することになる。理論と實行とがいろいろの樣式を以て互ひに乖離し、相反撥することになる。そして如何なる樣式に於てさうなるかといふことは當の生活の特徴に依つて支配されるのである。わたくし共は、其れの一方の極端に於て絕對主義を見出だし、其れの他の一方の極端に於て分離主義を見出だす。

分離主義は實行が複雜であり、煩瑣である程度に相應する理論が構成されて居ないところに沈澱する生活の缺陷の一樣式である。分離主義は妥當なる理論が存在しないために、便宜上、實行の立する區分、若しくは、差別をそのまゝ受け取つて、直ちに其等を理論の根據として生活を統一しやうとする人間の努力の所產である。分離主義は實行の特色を

以て理論の役目を滿たさうとするものである。隨つて、其れは理論ではなくして擬似理論である。實行は、隨時、當面の事件を處理して行くのを其れの目的とする。實行が其れを處理する興味と態度とは場合の異なるにつれて絶えず異なる。本能、習慣、乃至、制度より來るものの外は、別に其等を一貫する原理といふほどのものはそこにない。實行は其の時々で便宜と思はれる或る方法に依つて一つの事件が其の場に於てどういふ風にか處理されゝば、たゞ、それだけで滿足する。實行は斯くして處理した方法、即ち、觀念のはたらいた跡を外化して其れを『物』とする。さうして行くと歲月の經過するに隨つて、澤山な互に矛盾し、衝突する『物』が出來るわけである。この事實からするとシェリングが物質を劃義して『化石した精神』としたことゝあながち、突飛な空想とばかりは言はれぬやうである。矛盾や衝突を含んだ其等の『物』は獨り實行よりも一層廣き、一層高き、一層自由な見地を取り得るものに依りて、始めて整齊されるのである。此れが、即ち、理論である。然し、分離主義は理論の見地に立たず、實行の見地に止まつて、其等の整齊を圖らうとして居るのである。こゝに、其れの結果に依りて分離主義の短所が暴露される。

今、わたくし共の生活の中にはわたくし共の支配に抵抗するといふ意味に於て、多くの『物』が見出だされる。わたくしはこゝに一々其等の『物』の系譜を敍述して居る遑を有たぬ。たゞ、わたくしは其等の主なるものは近世文明の移植を其れの緣とし、其れに對するわたくし共の態度と、其れの性質に關するわたくし共の理會とを其れの因として生じたものであることだけを明言して置かう。わたくし共は其等の『物』より來たる抵抗を回避するために、若しくは、緩和するために、いろいろに分離主義を工夫して居るのである。之れが最も顯著な、そして、わが文化の發展のために最も寒心すべき標本として、わたくしは、現時行はれて居るのみならず、近き將來に於ても容易に改善される模樣のない國民教育に於ける理科の精神と修身の精神との關係を糊塗して居るが、融合して居らない分離主義を擧げることが出

來る。實驗主義に基づく理科と服從主義に基づく修身とを同一見地に配すやうな矛盾せる教授を敢てしながら、さうして、他日、彼等に對つて聰明にして善良なる市民たることを期待し得るか。理科といひ、修身といふも、結局、單一たる生活を組織する二つの要素たる性情を陶冶し、境遇を整頓するため、其れの中核の方向よりすると、其れの末梢よりするとの二つの方便に過ぎない。されば、若し眞にわが社會生活の要求に隨つて、聰明にして善良なる市民を教養するに、(姑らく彼等の所信を肯定して)實驗主義に基づく理科だけでも缺けるところあり、服從主義に基づく修身だけでも足りないところがあるといふならば、此等の兩者の孰づれにも偏倚しないと同時に、兩者を抱擁し、融合し得る一層高き、一層深き、一層自由な見地に立つ第三のものを創造し、そして其れを運用すべきではないか。今日、世人がわが國の生活改造は須らく徹底した教育改造より始められねばならぬと高唱して居る時に方つて、國民教育の根本原理が徒らにこのやうに糊塗を是れ事として居る分離主義に依つて弄ばれて居ることは無制限にわが社會生活を荼毒して居るのである。

こゝにはわが同胞の生活のあらゆる側面に浸潤して居る分離主義の代表として國民教育に於ける其れを擧げたのであるが、たとひ少數なりとも、そこに幾人でも具眼の士があるならば、之れに類する、若しくは、之れより酷だしき分離主義が夥しく其れの形態を異にしながら、全然其の精神を同じにして、刻下に於けるわが國の政治や、道德や、學問や、藝術や、産業の方法の中にまでも彌漫し、其等を窒殺して居ることを分明に看取し得ることであらう。

嘗て、太古に於て人間が知覺の混沌を統一して其れに秩序を與へようとして他の方法に著想することが出來なかつた時、彼等は分離主義に依つて知覺のレヴェルに於て其れを統一しようとした。さうした結果は神話の捏造となつた。生活の方針として神話に内具する最も大なる缺陷は新たなる統一は更に新たなる混沌を生活に輸入することである。この二十世紀の今日に於て、わが同胞は彼等原始人より遙かに高き文化の段階に於て、然し、彼等と等しく分離主義に依

つて既定のレヴェルに於て生活の理想と其れの機關との間に生ずる矛盾を其等の既定のレヴェルに於て統一しようとして、知らず識らず其等の取り扱ひを一種の神話と化して居るのである。兒童に市民の資格を與へない教育、個人を（最も含蓄ある意味に於て）賢くしない學問、民衆の幸福と向上とに切實ならざる政治、風土と物産との特徴に適應せざる産業の方法―畢竟するに、此等は神話でなくして何んであらうか。そして、此等は悉く分離主義の所産である。

最後に『流行感情の專制』なる言葉に依つてわたくしは何を意味するか。

『流行感情の專制』は讀んで字の如し。こゝに改めてわたくしが説明するまでもなく、簡單な、そして、何人に依つても夙に氣付かれて居らなければならぬ事實である。わたくしがこゝに二重情操と二重生活とよりの一つの派出としてわたくしがこゝに論議の題目として居るのは流行そのものではなくして、其れに對する感情である、その感情の專制である。單に流行といふことゝ、流行感情の專制といふこととの間には、意義の重大さに於て非常の相違がある。單にあるものが流行であるだけならば、其れが無害である場合も尠くない。然し、流行感情の專制は如何なる場合に於ても有害であると認めねばならぬ。何故ならば、其れは、國民生活の向上に取つて流行として取り扱かふには餘りに重大なる、そして、餘りに嚴肅なる事柄、例へば、學説や、運動のやうなものまでをも流行として取り扱ふからである、取り扱ふに止まるからである。

人間の本能の一つとして好奇心がある。人間に在つて新奇を愛する、若しくは、求める傾向には二つの要素が錯綜して居るやうに思はれる。其等の一つは單に變化を好むことである。其等の他の一つは彼れの生活の改造に役立つ或る新らしき方便を探して居ることである。此等二つの孰づれも衝動を以て始まるが、前者が衝動に止まつて滿足するに反して、後者は更に進んで、選擇し、洗練して、其れを概念、即ち、生活の方針としなければ滿足しないものである。如何

に偉き學說と雖も、如何に大なる運動と雖も、其の爲め、衝動でなかつたものは一つもない。然し、又、如何に小さき學說と雖も、如何に小なる運動と雖も、衝動として終つたものは一つもない。されば、わたくしがわが同胞が總ての學說、若しくは、運動を一つの流行として取り扱かふのを非難するのは、彼等が其等を衝動として迎へるのを非難して居るのではない。たゞ、徒らにそこに止まつて、更らに其等を概念、即ち、生活の方針までに選擇し、洗練して行く覺悟と努力とを一切缺くのを非難して居るのである。

わが同胞ほど熱心に新たに外國に出現した學說と運動とを歡迎する國民は他に多くはない。それと同時に、わが同胞ほど冷淡に其等を忘却する、さうしないまでも、わが國の組織と理想とを標準として其等の意義を眞摯に研究することを等閑に附する國民も他に多くない。『大風一過』といふ言葉があるが、わが同胞が或る學說、若しくは、運動を迎送して彼等の覺悟の上に殘る痕跡は大風一過にも如かざるものが多いのである。一度、或る學說、若しくは、運動がわが國に輸入されると、其れに關する紹介が(其等の殆ど總べては批判にあらずして紹介であるが)旬日を出でずして雨後の筍の如く簇出する。其等を購讀する讀者は異なる階級を通して萬の數にも上る。それならば、其等は民衆の生活の上に如何なる感化を與へるか。或は散漫に彼等の見聞を增加するといふやうなことはあらう。然し、的確に彼等の聰明を啓發することは極めて稀である。そして、一層惡いことには、彼等はそんな安價な見聞に依つて、何かしら一層賢くなつたと妄想して居ることである。賢くなるといふことと、多く物を識るといふこととは全然別の事柄であることを、一層多く物を識ることとに依つて、反つて一層愚かになる場合のあるといふことをまだ彼等は理會するに至らぬのである。

比例と適當との感覺を缺くのは流行の有つ特徴の一つである。タゴオルが、ラッセルが、ヴインシュタインがこの土

に來遊した時、彼等は如何なる狂熱を以て、否、如何なる狂信を以て、わが同胞の或る者に依つて應接されたかは、なほ世人の記憶に新たなところであらう。彼等に依つて此等の人々の信仰、學說、乃至、發見はわたくし共日本人の生活の方針を一新するものであるやうに、其等を知らなければ文化人としてわたくし共は明日の生活にも差支へ、若しくは、行き詰るやうに宣傳されたのである。わたくしは、こゝに、此等の信仰や、學說や、發見の價値を否察しようとする者ではない、たゞわたくしは或る信仰、學說、乃至、發見がどんなに正しきものであり、どんなに優れたものであつても、其等が眞に學說、信仰、乃至、發見である限り、一打にして人間の總べての欲求に同じ意味で接觸し、同じ程度に其等を改善する力を有つといふことはあり得ない。隨つて、正當に其等の價値を認識し、把持しようとするならば、必然に、其等の志向と効力とに或る制限を置かねばならぬといふことである。なるほど、此等のものが人類に屬する或る個人に依つて、人類の開拓した或る文化の中に著想されたものならば、それぞれ異なる關係に於て、わたくし共日本人の總べての欲求に或る交涉があることは容易に認容出來る。然し、其等は場合の異なるに隨つて、適當に或る制限を置かれて、始めて、當初其等に依つて企てられた目的が適當に達成されるといふものである。例へば、ラッセルの學說を以てしても、直ちにそれだけでわが議會の改良は期せられないではないか。タゴオルの信仰を以てしても、直ちにそれだけでわが國の小作爭議を解決することは出來ないではないか。アインシュタインの發見に至つては、尙更、今日、わたくし共がわが國の焦熱問題として居るものと緣の遠いものである。されば（假りに此等のものは皆正しく、そして優れたものであるとしても）、わたくし共にして、其等を抱擁しさへすれば、他に何物をも必要としない。其等を理會しなければ一日も立ち行かないといふ風に輕宜し、輕信することは惡いことである。

わが國は震災後のことは知らず、震災前に於ては、世界の一等國の班に列して居ると稱せられて居た。わたくしの考

へるところでは、一等國とは、其れの持つ眞に獨自で、他のいかなる一等國に見出だされないところの文化を創造し、又、自の何物に依つても代はられることの出來ないほど其等の一等國を稱する國民のことである。さういふ獨自の文化を創造して居る國民は他の國民の文化を採用するにしても、選擇と批判とを以て其れをするが故に、其れを採用するに愼重であり、其れを把持するに確實であるのである。この點から言つても、わたくしはわが同胞が一等國民であると輕々しく思考することは出來ないのである。

わたくし共日本人は個人として、國民として、眞に偉大ならんと欲せば、一日も早く流行感情の專制より脱出せねばならぬ。

七、わが文化の改造の根本策

わたくしは、さきに、わが文化に見出だされるあらゆる缺陷の淵源を斷じて、其れはわたくし共日本人が近世文明を物質的に使用するに止まつて、其れを精神的に運用して居らないことの一事に歸した。さうすると、わが文化に見出だされる缺陷を匡正するに必要なる概念、若しくは、知見は極めて簡明であるやうにわたくしには思はれる。其れはわたくし共が近世文明を物質的に使用することを化して、其れを精神的に運用するの術を講ずればよいわけである。それでは、さうすることは如何にして可能であるかが、わたくし共に取つて最も重大にして、最も嚴肅なる根本問題であるとせねばならぬ。

從來世間に流布されて居る東西の兩融合論なるものがある。其れは多くの人々に依つて唱道されたものであるが、大抵其の揆を一にし、そして、其の所說は淺薄にして、其れを實現する方法を一切缺いたものであつた。

こゝに東洋文明と稱する一種の文明があり、かしこに西洋文明と稱する一種の文明がある。此等の兩者は大分に其の性質を異にするものであるが、各、一長一短あるを免かれない。されば、兩者より其等の短所を捨て、其等の長所を取つて、兩者を融合したならば、そこに始めて人間の理想し得る最も完全なる一つの新らしき文明が建設されるであらう。幸にして、わが日本に於ては此等の文明があらゆる他の國土に於けるよりも、一層親密に交渉する機會が存し、そして、わたくし共日本人はあらゆる他の國民に優れて一層其等を咀嚼し、同化する素質を具へて居る。そこでわたくし共は、この機會と素質とを利用して、東西文明の融合を完成し、他の國民に對つて其の範を垂れねばならぬといふのが、この東西文明融合論の要旨である。

わたくしからすれば、此れは一片の空論に過ぎない。人間の生活の實際のはたらき振りを無視して、總べての事物を固定的に、そして、形式的に觀察したり思考したりすることしか出來ない人々に依つて捏造された一片の空論に過ぎない。若し過去に於て、或る民族、若しくは、國民に依つて二種、若しくは、二種以上の文化が融合されたことが一度でもあるならば、其れは決してそんな風になされたのではないし、又、若し將來に於て或る民族、若しくは、國民に依つて、二種、若しくは、以上の文化が融合されることがあるならば、其れは決してそんな風になされ得るものではない。其れは、彼等が外國の文化に接觸する時に、其れの啓發、若しくは、壓迫より自然に自國の文化の缺陷が意識され、其の缺陷を補塡するために外國の文化が採用されることとなり、さうなつた結果として、其等二つの文化が交錯して彼等の思想や行爲の中にはたらくことになるのである。二種、若しくは、二種以上の文化が融合されるのにはこのプロセスを外にして、他に一つも道はないのである。

わたくし共は大まかに西洋の文明、東洋の文明と言つて、恰もそこには二つの型しかないかのやうに兩者を對立させ

る。蓋し、仔細に觀察すれば、西洋の文明とても英國の文化と獨逸の文化との間には[illegible]すべからざる相違があるやうに、東洋の文化と言つても、支那の文化と印度の文化との間には到底混同すべからざる相違がある。そして、此等の一つ一つはそれぞれ特異の過去と將來とを有つたものであるから、英國が或る機會に於て、或る必要から、自國の文化を標準として東洋の文化の中の或るものを或る風に攝取することは、ドイツが或る機會に於て自國の文化を標準として東洋の文化の或るものを攝取することとは、全然其れの意義と結果とに於て異ならざるを得ない。この理を押して、支那が西洋の文化を攝取することと、印度が其れを攝取することとは、其れの意義と結果とに於て異ならなければならないことをも覺るべきである。斯くして、東西文明の融合といふことは、或る特定の民族、若しくは、國民が、或る機會に於て、或る必要から、おのれの文化を標準として、東洋の若しくは、西洋の文化の中の或るものを、或る風に攝取して行くことに依つて成り立つのであるから、一つの實在を有つ東西文明の融合は嚴密に一つの民族、若しくは、國民に屬すべきものである。自家用としての東西文明の融合は市井に於て、若しくは、田園に於て生長して實在するが、評賓の東西文明の融合といふやうなものは、たゞ、書齋の中と、講壇の上とに於て捏造されるのであつて、實在しないものである。

勿論、一つの民族の、若しくは、國民の生活の中に醱酵するものであるにしても、其れが人間的である限り、他の民族、若しくは、國民に取つても一つの參考資料となり得ることは事實である。然し、畢竟するに參考資料となるに止まる、典型となることも出來ないし、範疇となることも出來ない。

わが國も、明治の初年より、こゝ五十年に亙つて、いろいろの機會に於て、いろいろの必要から、西洋の文化の中の或るものを、或る風に攝取して來た。されば、自家用としての東西文明の融合は一つの生きた事件として、或る形と程

度とに於て、既に行はれて來たのであり、現に行はれて居るのである。さうすると、若し今更らに東西文明の融合といふことに何か一つの意義があり得るならば、其れは、これまで衝動に依つて斷片的に、功利的になされ來たつたものを、概念に依つて統一的に、合理的にすることとであらねばならぬ。獨り東西文明の融合といふことの意味をさう取る時、其れが、始めて、刻下に於けるわたくし共に對して一つの重大なる意義を齎らすのであるとわたくしは信ずるのである。そして、其れはわが文化の改造の根本義である。

これまで衝動に依つて斷片的に、即ち、物質的に使用され來つた近世文明を、概念に依つて統一的に、即ち、精神的に運用するためには、次ぎの三つの條件を考慮することが緊要である。

一、わたくし共の生活を標準として、近世文明の起原と、歴史と、意義とを改釋すること、

一、こゝ五十年間、近世文明がわたくし共に依つて採用された跡に就いて、其れを通してのわが國民性の發動を考察すること、

一、この改釋と考察とを總合して、過去に於けるわが文化の缺陷を批判し、將來に於けるわが文化の善導を計畫すること、

が、其等である。

七、結語

若し世の中に老年國といふものがあり、青年國といふものがあるならば、兩者の差別は、建國以來の年數の多寡に依つて決定されずして、おのれを若返らせる能力の强弱に依つて決定されるのである。建國以來の歳月は如何に短くと

も、おのれを若返らせる能力の無きものは老年國である。建國以來の歲月は如何に長くとも、さうすることの能力の[illegible]きものは青年國である。さうすると、わが國は一老年國であらうか、それとも、一青年國であらうか。

わが祖國は五十年前に方つて、一度非常な艱難に際會した。然し、美事に其れを乘つ切つておのれを若返らせ、僕に、まだ一老年國にならなかつたことを立證した。今、再度、わが祖國は可なりに大なる災厄に遭遇し、其れが果して一青年國として、美事に其れを乘り切り得るか、否かを試驗されて居る。さきには、わが國は自國の獨立を保障するだけで一老年國とならないことを立證した。今は、其れが一青年國たることを立證するには、獨自の文化を建設せねばならぬ。

わたくしの信ずるところに據れば、一國民に取りておのれを若返らす術は、他に一つもあり得ない。其れは、たゞ彼等が現に置かれた境遇と、彼等が現に有てる力量とを一層明晰に意識し、一層正確に其等の間の交涉と統一とを圖ることである。そして、此れは卽ち眞正なる意味に於ける理想主義に他ならない。非常なる艱難、若しくは、災厄は彼等をしてこの理想主義を開拓し、把持するの自覺に致らしめるのである。

わたくしは、この一篇の著者として、わが同胞がこの災厄を以て、將來、彼等が光榮ある獨自の文化を建設するための眞正なる理想主義を開拓し、把持する機緣となすことを切望して止まぬ者である。

歐洲文明の衰頽と米國文明の興隆

柳　澤　健

一

伊太利を歩いてフィレンツェの町に暫し足を停めた時のことである。

この町のメデチのカペルレといふ古い建物のなかには、人も知る通りかのミケランジエロが刻んだ『曉』『夕』『晝』『夜』といふ大きな四つの大理石像が飾つてある。自分がその彫刻のまへに立つて手を拱いて嘆息とともに凝視めてゐたときに、誰やら自分の側へ遣つて來て耳許で呼びかけるものがあつた。振りかへつて見ると、金ボタンの服を身に付けた番人である。此奴また頼まれもせぬ説明でもして金を貰はうといふのだな、――と咄嗟の間に頭に浮べた自分は、可成り不興氣な聲で『何の用だい?』と聽き返した。すると、その番人は、ずつと部屋の端れの方を指さしながら、極く低い聲でかう言ふのであつた。

――あそこに見落してならぬものがありますよ、旦那（シニョール）。ミケランジエロが働いてゐたといふ仕事部屋（アトリエ）が……

到頭自分はその男の後に附いて、廣間のなかを斜めに横斷し、部屋の一隅の嚴重に錠を下した扉のまへにと立つことになつたのである。

自分は、がちやがちや言はせながらその錠を開けるにかゝつてゐる番人の背後に立ちながら、頭の隅で浮べるともなくかうした感想を浮べてゐた。――『ふむ、かうして錠まで下して大切にしてゐる部屋であつて見れば、ミケランジエロの仕事部屋だといふことは强ちでたらめではないかも知れぬ。それとも――何かといふとすぐに觀光客（ツーリスト）の懷から拔き出さうと拔き出さうとかゝつてゐるこの土地のことであつて見れば、部屋のかうした錠仕掛けも、實はさうした手管の一つに過ぎぬのかも知れんぞ……』

やがて錠は開いて、自分は身體は薄暗い、同時に薄汚ない小部屋のなかに見出されたわけだ。自分は流石にきよときよとし

ながらこの陰氣な薄黑く汚れた部屋のなかを眺め廻した。灰色に黝ずんだ壁の上には、あちこちに巧みな樂書のデッサンが無雜作に描かれてゐる。

自分の眼尖がかうした壁の上のデッサンの上に惹き付けられてゐるといふことを眼賢く見付けた番人は、待つてましたと言はぬ許りに、すぐと口を開いた

——この樂書は、旦那、一つ殘らずミケランジエロ・ブオナロッティの描いたものですよ。この部屋で仕事をする合間合間にね。どうです、旦那この立派な形は？　この美くしい線は？

口と一緖に忙がしげにその手を動かしてゐた番人は、ある箇所へ來ると急に立ち停つて、こつちが鳥渡びつくりするほどの聲を出した。

——これです旦那、ここのナイフの痕跡を見て下さい。これはね、いつか亞米利加人の奴等が見物に來たときに、俺等の眼を盜んでこつそり壁を、——樂書のある壁の所を削り取つて持つて行つた跡ですよ。ほら、またこゝにもその痕跡がありませう。ひどいことをする野郎ぢやありませんか？　だからね、それからつてものは亞米利加人の見物人は險呑だつてんで、かうしてちやんと部屋の扉に錠を下して、勝手には誰でも這入れぬやうにしたんですよ！

番人は、激しやすい南國人の感情を露骨に見せて、今更らしく無念な表情を顏に湛へながら、壁の上にまざまざと跡をとゞめてゐるナイフの白痕を指さしてゐるのであつた。——

間もなく自分は、その部屋にもその番人にも別れ、メヂチのカペルレの建物を後にして、アルノの河畔にのぞむ旅舍へと足を向けて行つた。さうして足を運んでゐる間も、自分の心は何故か今しがたうんと感服して眺めて來たミケランジエロの『曉』や『夕』やの傑作についてよりも、寧ろあの小さな薄暗い部屋の壁のうへに殘されてゐる亞米利加人のナイフの傷痕について更に多く惹かされてゐるのを感じないわけには行かなかつた。然しながら、その折自分の頭を充たしてゐた感想が、かの金ボタンの番人の憤激とその軌を一にして、この不德なる亞米利加人の所業を憎むのにあつたか、といふと單にそれだけではなかつた。否むしろ自分の感想はそれとは全く別の點にあつたのである。

二

ミケランジエロをその邊の靈驗あらたかな天神地祇の一つとでも思ひ違ひ何かの呪ひかお守りにでもするつもりで、かうも無慘にナイフの尖端で削り取つて行つたのかも知れないけれ

ど、それにしても事柄も茲まで來れば單に亞米利加人一流の無邪氣とか無知とか言つて澄してゐられなくなるのは固よりのことである。吾人の憤激は至極尤ものことである。またさう言ふ自分とてもかなりの憤激を起さずにはゐられなくなつたことも事實である。

然しながら、今翻つて考へて見る。このフィレンツェのメデチのカペルレの一隅で起つた出來事は、實は、フィレンツェは愚か、伊太利全土の、――否歐羅巴全洲の上にかゝつてゐる問題ではないであらうか？ その大きな問題のあるのを忘れて、單にその一小事例に過ぎないとも見らるるこのメデチのカペルレの事件に對し、憤激の氣を洩らしたとて何とならう。壁上のミケランジエロの素描をナイフの尖で無遠慮に削り取ると同じことが、――否それ以上のことが、歐羅巴全洲の上に、しかも日日行はれつゝあるのだとしたら、それもよくよく詮索して行くと、取りも直さず歐羅巴人自身の播いた種から生じた果實に他ならぬといふことが判るとしたら、如何してこのメデチのカペルレに於ける亞米利加人の所業を單純に罵つただけで事が濟まう。そうだ、問題はもつと大きい、もつと複雜してゐる。……

それにしても、メデチのカペルレに於けるこの事件は、そのまゝにかうした大きな問題のお誂へ向きの縮圖でありまたはシムボルであると言ふことが能きやう。言ふまでもなく伊太利の光輝あるルネツサンス文明の生み出した――といふよりも、もつと廣く歐羅巴文明の生み出した最大の藝術家であると言ふことができるこのミケランジエロが、埒もなく教養のない粗野な亞米利加人の手にかかつて削り取られてしまつたといふことは、そのまゝに、現代に於ける歐羅巴對亞米利加といふ問題になる。希臘、拉丁の燦やかしい文化の精華を享け繼いで、藝術に哲學に宗教に科學にさては政治に法律に金融に、まこと世界人文の中心を以て自らも持し他もまたこれを許した歐羅巴が、近來日一日とその燦然たる光芒を薄かせることとなり、これに代つて所謂物質中心、機械力萬能の亞米利加が、幅を利かせやうとするのが、今日の有樣であるとしたならば、我々はこのメデチのカペルレの事件に於いて、現代といふものの最も恰好なミニユアチユアを見せられることになるのではないか？

歐羅巴文明の末路といふこと、更にその衰頽せる歐羅巴の低地の上に澎湃たる津浪となつて押し寄せつゝある亞米利加化の波濤といふもの、――世にそうした現象にも優して、歐羅巴の國々を旅する者の胸に強く迫るものはないと言つていいであらう。あゝ、古き歐羅巴は、懷かしきわが歐羅巴は、日一日と崩壞して行く。古く永き傳統を矜とし、恒久なる精神文化の創始

者、支配者を以て自ら持してゐた歐羅巴は、今や何等の傳統なく、また何等の固有なる精神文化も有せざる新參の富限者亞米利加のために、日一日とその矜りとその存在を奪はれつゝある。敢て多感の遊子たらずとするも、顧みて無限の感慨に打たれざるもの、そも幾人あるであらう！

既に自分は、巴里に入るや否や、亞米利加輸入のジャズ・バンドの物狂はしき騷樂が所在に鳴りはためくのを耳にした。フォックス・トロットとやらの、タンゴ・ダンスとやらの、活潑無比なる踊りを所在に眼にした。アメリカン・バーと金看板の文字鮮やかにブールヴァールの大通を眼下に見下してゐるのをも幾つとなく見せられた。まあそれも『エトランジエの殖民地』巴里邊ならば止むを得ない現象であるとする。あの古い古い『永遠の都』においてさへも、人々は、シーザーの舊跡やアウガスタス大帝の遺墟やと並んで鐵筋コンクリートのビルディングが天に向つて聳立してゐるのを眺めさせられるであらう。何でもビッグ（大きく）でさへあればいいとしてゐる亞米利加人の信條そのまゝに建設されたヴイツトロ・エマヌエレ皇帝の紀念建造物といふ莫迦げてでかい金ぴかの建物を仰がせられるであらう。さては、チヤツプリンとデブ君の活動寫眞が、羅馬滿都のキネマ・フアンをやんやと言はせてゐるのを見せられるであらう。

あゝ、これはほんの通りすがりの旅人の眼にも直ぐと眼に付く現象だ。が、それこそは取りも直さず今日の歐羅巴自身の僞りなき現象であると言はなければならないのである。

三

歐羅巴の亞米利加化といふこと、――換言すれば亞米利加文明の西漸といふこと、それが何時如何樣にして始まつたかは、今玆で詮索する限りではないが、兎も角、それが特に今日始まつた現象でないことだけは確かである。それは、歐羅巴の諸國が、藝術の進歩や宗教の發達や哲學の研究やさては純正科學の進歩やの爲めに金や頭や人やを使ふよりも、遙かより以上に、殖産興業とか金融財政の強固」が商工業の活躍とかの爲めにそれを使はなければならなくなつた時から、既にこの亞米利加主義（アメリカニズム）といふ白蟻は、歐羅巴の古い屋臺骨を蠶食し始めたのだといふことが能きやう。本來の亞米利加が出現するまへに、歐羅巴自身が已れの手で先づ亞米利加主義を作り上げてゐたのだとも言ふことが能きやう。

さう言へば、戰前あの獨逸が僅々二三十年の間によく先進の英、佛、伊等の諸國を凌駕してあれまでに國勢を張つたといふ

ことも、取りも直さず獨逸が、是ら先進の諸國が古い傳統の壁に打ちかこまれてうろうろしてゐる暇に、逸早く先手を打つてこの亞米利加主義（アメリカニズム）を實行した爲めに他ならなかつたのだと言へよう。どつちみち、歐羅巴の諸國は、その遲速はあれ、またその好むと好まざるとの別はあれ、一律亞米利加主義といふ標的に向つて一歩一歩その歩武を進めてゐた（また、進めざるを得なかつた）といふことだけは、動かし得ない事實であつた。

その歐羅巴が今度の歐羅巴大戰といふ未曾有な事件に遭遇した。この大戰の結果が、一方は英、佛、伊等所謂聯合國側の勝利となり、他方は獨、墺、土等所謂協商國側の敗北となつたといふことは今更言ふまでもないことであるが、この結果を更に廣い世界文明の推移といふ點から觀て行くならば、敗けたのは實に英、佛、伊等をも引きくるめた歐羅巴全體であり、勝つたのは實は亞米利加だけといふことになるやうに思はれる。それとも、小さな亞米利加である獨逸を、皆で潰さうとかゝつて、却つてその子供の親に出て來られて散々に叩き潰されてしまつた、とも言ふことができるやうに思はれる。兎に角歐羅巴の亞米利加化といふことは、今回の大戰に依つて、最早何人も到底動し得ない既成の事實といふことになつてしまつたのである。

試みに、この大戰の結果如何に歐羅巴が痩せ衰へたか、反對に如何に亞米利加が肥えふとつたかを調べて見やう。如何に歐羅巴が强がりを言つても、最早「亞米利加の侵入」に對して到底已れを守り得ないであらうといふことは、遺憾ながら次の數字を見て行く誰にでもそれを直ぐ察せられずには濟むまいと思はれるから。——

先づ、戰爭に依る人口の死亡數である。言ふまでもなく人口の減少は、その國家その社會の出血である。物質的にも精神的にもその活力の衰微の最も大いなる原因である。歐羅巴大戰に於いて直接戰線に於て死傷せるものの總數は、露西亞の千七百萬をはじめとし獨逸の二百十餘萬、佛蘭西の百四十萬其他實に二千五百萬に及ぶのを見る。しかもこのうち死亡せることの確實なるものは、八百五十萬以上に及んでゐるのである。然も此等の計數には戰線を離れてゐた除隊兵士の夥しい死亡數が含まれては居らない。而して孰れもこの死傷者は社會國家の中堅に立つべき最も强健なる年齡者——即ち大體二十二歲から四十四歲に到るまでの人達であつたことを特に考に容れて置かばならぬ

なほ直接間接戰場で屠戮せられた以上の死亡者のほかに、戰爭の齎した苦痛、疾病、饑餓等のための死亡者といふものはまた夥しい數に上つてゐる。のみならず、各國の出産が戰爭の爲め

に著しい差等を生じてゐる。因に此の如き、例へば千八百十三年度と千九百十八年とを比較して見れば後者に於ける出産數は、前者に於ける出産數の約半數にしか達してゐない。しかも死亡數はずつと増してゐて、結局出生數は死亡數の半數近くにしか達しないといふ有様であつた。獨逸に於ても、千九百十三年と千九百十八年とを比較して見れば、前者に於ける出産超過數八十數萬といふので、後者に於てはそのまゝの數で死亡超過數といふことになつてゐるのを見る。割に人口の上では戰爭の影響を受くることが尠いと言はれた英吉利でさへも、戰前一個年の出産平均數三百五十萬が、戰爭中は二百九十五萬に減少してゐるのを見る。

右に並べた損失を極く內輪に數へただけでも、歐羅巴が今回の戰爭に依つて失つた人口總數といふものは、實に二千萬を遙かに超えたものとなる。

そもそも、佛蘭西の出産率の減退といふことは可成り以前から識者の間に深い憂慮をもつて見られた現象であつた。國力の發展、文化の進步が最早行き詰つたことを示すものとして中外から觀察せられてゐた。然るに、近來、英吉利及び獨逸に於ても漸次出産率の減退を見るに到り、此等諸國の政治家、教育家等をしてかなりに周章せしめつゝあつたのである。然しながら今回の戰爭に依つて失はれたる人口の損失と比べて見れば、それはまるで月前の雲の翳りにも喩へらるべき輕微なる損目に過ぎなくなつたのである。今や歐羅巴は、恐るべき出血のために步行することさへ意のまゝにはならぬ重態の病狀にある。しかも一方亞米利加はと言へば、總人口一億千八百萬に近い數のうち今回の戰爭から得た死傷數といふものは僅々十五萬八、一十七八百人に一人あるかないかといふほどの損失に過ぎない。強いて氣に止めて見なければ、とても眼にはつかぬほどの微細な損失である。歐羅巴の出血過多に對して、これはほんの擦過傷にも當らないほどである。

四

人口問題に關聯して、更にこの戰爭が齎せた歐羅巴の重大な損失に殖民問題がある。

從來歐羅巴はその比較的豐富なる人口をもつて世界の各地に殖民を試み、その土地を加工して「歐羅巴風」に調理してゐたことは今更らしく說き出すまでのこともない。即ち、今日世界が殆んど到る處歐羅巴化せられてゐる理由はと言へば、直接この殖民のお庇であると言はなければならぬ。然るに、前に述べたがごとく歐羅巴は甚しき人口減少を來してゐる結果、到底昔

日のごとく旺んなる殖民を實行し行くことが困難になつたことは明白である。

勿論國に依つては經濟上の逼迫の結果、却つて國外移住を望むものの續出するものがあり得ることも考へらる。例へは、東歐、中歐諸國のごときこれである。然しながら、これ等の諸國から外へ移住しやうとしてゐる人々は、往時の歐羅巴諸國の移住民と較べて、その素質なりその教育の程度なり、さてはその抱負なりが極めて低劣であることは容易に想像ができる。從つて、世界の諸方へ向つての歐羅巴文明の傳播のためには、是等の移民はむしろ害にこそなれ、益する所はないと見て行かなければならぬ。これのみではない、從來に於ける歐羅巴移民の最も大なる捌口をなしてゐる北亞米利加なり南亞米利加なりは最早相當な移民の飽滿狀態に達して來た關係上、一層此等の低劣なる移民の入國をば欣ばざることとなつて來てゐる。しかも幸によく迎へられるにしても、此等の無學無教育たる移民は容易に新らしき環境の下に「亞米利加人」に化成せしめらるゝことは極めて當然のことである。孰れにもせよ、移殖民に依る世界の歐羅巴化は、最早過去の事實になつてしまつたと言つて差支へはないであらう。

なほ右の事實に附帶して、從來亞米利加大陸に移住してゐた歐羅巴人が、大戰後は逆に己れの母國を指して陸續歸還しつゝあるといふ事實を觀察する必要がある。一つには、歐羅巴が人口減少に陷りその爲めに勞力缺乏を來してゐるが故である。これは、今後歐羅巴の政情が安定し商工業の恢復が明白になつて來れば、一層この人力の缺乏が痛感せられて、移民の歸還を促すこととなるものと思はれる。二つには、大戰に依り、歐羅巴全洲に亘つて、新に獨立を獲得した國又は古き政治的組織に變革を來した國が數多く出來、その結果大戰前政治上の迫害若くは生活の逼迫等のため止むを得ず生れ故鄕を去つて亞米利加等へ移住してゐたものが、擧げて己れの故鄕へと歸還し、そこに自由と平等との新生活を營まんとするに到ることゝである。

この移民の歐羅巴歸還は如何なる結果を生み來すであらうか？　言ふまでもなくそれは『亞米利加の西漸』となる。永い月日を亞米利加ですごし、そこで教育せられ啓發せられ、その趣味に於いてその思想に於いてその生活振りに於いて殆んど全く亞米利加化せられたこれ等の移民たちが、恰かも亞米利加そのものの代表者のごとくになつて母國歐羅巴に歸還して來るといふことは、亞米利加主義を歐羅巴の土壤の上に散布傳播する上に於いて、これほど强い端的な力となるものはない。かくして、歐羅巴の亞米利加化は、歐羅巴人自身の手に依つても亦く

盛んに行はれつゝあるのである。

なほ、是等の人口問題、殖民問題に較べれば遙かに小問題ではあるが、大戰中渡歐して來た數多くの亞米利加の軍隊の歐羅巴に殘して行つた跡といふものも無視できまいし、また、大戰後かの大袈裟な戰跡見物の亞米利加人やらさては爲替の差を利用して歐羅巴見物に遣つて來た所謂爲替成金の亞米利加人やらの歐羅巴の所在に殘して行く跡といふものも無視できない現象と言はねばなるまい

五

更に大戰に依る歐羅巴の衰頽と亞米利加の隆昌とを端的に語る事實は、金融財政の問題である。

言ふまでもなく歐羅巴が從來世界に覇を唱へて來たのは、その多年蓄積したる經濟力のお庇に俟つ所大部分であつた。世界の銀行家として、世界の商業家として、さては世界の工業家として、――要するに世界の資本家として、歐羅巴の地位は到底何人も代り得ないまでに不動に見えてゐた。それが大戰に依る莫大なる戰費の支出と生産の停止との爲めに一擧にしてミリオネアの位置から窮乏のどん底へと陷つてしまつた。そして、これと同時に亞米利加を、――大戰前に鐵道債券だけでも三十億弗に近い巨額の借金を歐羅巴に對して負ふてゐたその債務者國を、一擧にして世界の經濟界の覇權者としてしまつたのである。

無論大戰前と雖も亞米利加の經濟的發展といふものが隱然として歐羅巴の敵國をなしてゐたことは事實である。例へばその版圖を見ただけでも、歐羅巴全體と同じ廣さを持つてゐる。それに加へて、その版圖内に貯藏されたる天然の富といふものが遙かにこれに超えて居るのだ。即ち石油の産額は世界總體の産額の六割强に當り、石炭及び鐵に於いては世界の四割强に當り、銅及び綿花に於いてはこれ亦その六割强に當つてゐる。かゝる豐饒なる富の貯藏は未曾有なる機械力の發達に連れて自由自在にその生産を實現するに到り、大戰前既にその生産物資の豐富さに於いて歐羅巴を瞠若たらしめてゐたものであつた。それが大戰の勃發後、歐羅巴の生産の停止並びに諸軍需品の需用とともに、その缺乏を亞米利加が殆んど、一手に引き受け、あらん限りの生産力を傾倒してその供給を圖つたのであるから、これが數字の上に現はれた結果がすばらしく大きなものになつたといふことは無理もないことと言はねばならぬ。

即ち、大戰前、――千九百十三年に於ける亞米利加の外國貿易の輸出超過額を見ると、六億弗前後といふことになつてゐ

る。それが、大戰中は約四個年を通じて輸出超過總額は實に百億弗といふすばらしい巨額に達してゐる。殊に千九百十七年の如きは一年間で三十五億弗餘の輸出超過を見てゐるといふ狀態である。しかも、この巨額はそのまゝ歐羅巴の輸入超過となつてゐることは固よりである。なほ歐羅巴はこの額のほかに更に亞細亞及び南亞米利加からの輸入超過額をも持つてゐる。

この結果として、驚くべき巨額の正貨が亞米利加へ流入するに到つた。即ち、大戰終熄當時に於ける計算に依れば、約三十二億弗といふ巨額に達してゐるのを見る。三十二億弗と言へば大戰前の亞米利加の正金準備額二億三千萬弗と較べると實に十三倍に上つてゐる。しかも、この巨額は世界の總金額の三分の一に當つてゐるのである。世界金融市場は、數世紀以來の傳統的の中心倫敦を去つて紐育に移つたと言はれてゐることも、この數字から見て最早毛筋ほどの疑をも容れる餘地がないと言はれねばならぬ。

然も歐羅巴は、右のやうな巨額の正金を亞米利加に引渡したほかに、一方なほ返還するに到らない巨額の債務を背負ふてゐる。即ち、千九百十九年の調査に從へばそれは約九十五億弗の巨額に達してゐる。爾來この額の大部分は依然として返還されずして歐羅巴の借金となつて今日に到つてゐる。大戰前亞米利加に對して債權者の地位を占めてゐた歐羅巴は忽ちその地位を轉換して最も惨めなる債務國となつてしまつたのである。

かくして亞米利加は今日完全に世界の金融上、財政上の中心となつてしまつて、最早歐羅巴は事實亞米利加の許可なしでは何事も自力では爲し得ないといふまでにはかない身の上となつてしまつた譯である。

六

軒を貸して母屋まで取られる、といふ日本の諺がある。譬へて見ると、歐羅巴と亞米利加との關係は、この諺の通りであつた。

現在亞米利加が、歐羅巴の諸國を――否世界そのものを、眼下に見下してゐるその素張らしい富強の基となつてゐるものは何かと言ふと、それは要するに機械力といふことに歸する。機械の應用、發達に依る富の開發といふことに歸する。更に言葉を換へて言ふならば、一般事物の科學化、さては、工業化といふことに歸する。かの歐羅巴全洲に等しい廣大な土地を、且歐羅巴と較べて遙かに肥沃で豐饒な土地を、その耕人口は遙かに少ない土地を、この機械力を用ゐて縱橫無盡に耕作し墾し拓殖し開發して行く所に、世界に嘗て類のない素張らしい富が生

み出されて行くのに他ならないのだ。

所が、一體そうした機械は何人の發見にかゝつた所であるかと言ふと、決して亞米利加人の頭から手から生れ出たものではなくて、總て歐羅巴から來てゐるのである。たゞ、それが歐羅巴にある間は、恰かも未だ學者の實驗室内で取扱はれてゐるある發見のやうに、格別の社會的影響も起さず、またそれをさして豫想もしてゐなかつたのであつた。所がそれは亞米利加に渡るや否や、實驗室から實世間へ投げ出された發見同樣、學者自身が意想外として驚ろくほどの素張らしい實效を、反響を生み出すに到つたのであつた。

單にそうした機械ばかりではない。それに關聯して、科學といふもの、工業といふもの、さては銀行とか會社とか金融とか資本とかいふもの、そうした一切の富の生産に必要なる知識なり制度なり組織なりで、歐羅巴から渡つて來なかつたものは一つだつてあつたであらうか？ それが孰れも機械と同樣、亞米利加へ渡つて來てはじめてその能率の――この能率といふことが亞米利加の文明の最も大きな特徴の一つなのだ、――全部を示す機會を得ることとなつたのではないか。

亞米利加の大陸を發見したのは言ふまでもなく歐羅巴人である。その大陸に移住して來たものも言ふまでもなく歐羅巴人である。そして、それに機械なり科學なり制度なりを與へて富の生産に從事せしめたのがこれ亦歐羅巴人であつた。それが、今やその母たりその恩人たる歐羅巴が、その子たりその弟子たる亞米利加の爲めに血を吸はれ肉を啄かれ危ふく骨すらも舐ぶられんとする狀態に立ち到つたわけである。世によくある慣はしであるとは言へ、容易に諦らめることのできない歐羅巴人の心中もまた同情に値するものと言はれねばならぬ。

然しながら、これだけならばまだまだいい。歐羅巴自身、運命なり災難なりとして秘かに自ら慰めて行くことも能きやうから。さては、軒を借りて遂にその母屋にも及んだ亞米利加の不所存を不埒を、後世の道徳的な春秋史家に依つて或は嚴しく仇討ちして貰ふことも能きやうから。または、亞米利加が肝腎の精神文明の生活を忘れて徒らに物質本位の生活のみに趨いてゐるのだといふやうな非難を盛つた言葉で、せめてもの悲しい諦めも能きないわけでもなからうから。

所が、かうした運命とか災難とかさては亞米利加の不埒とか不所存とか言つては到底濟ましてゐられないものが他にある。それこそは、他ならぬ歐羅巴自身の自業自得の到す所であつて今更天をも地をもまして他人をも怨みるわけには行かぬ所のものである。言はゞ責任の全部を歐羅巴自身がのこりなく己れの

兩肩に背負はざるを得ない所のものである。それは一體何であるか？

第一には、言ふまでもなく、歐羅巴大戰である。第二には、その大戰から引續いて今日の歐羅巴の上に昏迷してゐる不安、不定の暗雲である。

七

歐羅巴大戰が歐羅巴全洲を形容枯槁息も絶え絶えになるほど蒼褪めたものにしてしまひ、反對に亞米利加を血と肉とではち切れるほど肥大豐富なものにしたことは、既に前に詳しく説いたが、かくも決定的にこの歐羅巴と亞米利加との間の勝負を極めるに到つた歐羅巴大戰といふものは、一體誰が起したのだと言へば、他ならぬ歐羅巴が自ら好んで敢へてした所のものに他ならないのだ。歐羅巴としては今更その結果を意外だとして他を怨みるわけには行かない筈である。勝手に戰爭をはじめ、勝手に軍需品を買ひ、勝手に人命と財産とを損じ、同時に勝手に亞米利加を富強にしてしまつたのだ。言はゞ歐羅巴は御丁寧にも自分からわざわざ光榮ある王座を下りて來て、代りに亞米利加をその坐へと押し上げてやつたやうなものなのだ。

が、これだけならばまだまだ歐羅巴としてはすこしは運命の致す所として自ら諦むる筋のないことでもないではない。戰爭をはじめたといふこと、——あのセルビアの一青年の放つた一發の彈丸からこれほどの大戰爭が勃發するに到つたといふことは、それは世のなかに能くある瓢箪から駒の出た例であつて、豫め人智の與り知るを得ない一の「運命」に屬するとも見られないことはなからうから。ナポレオンがかのライプチッヒの戰爭で敗戰の浮目を見たのは、一つの桃の實に原因するといふ。——といふのは、當時ナポレオンが偶々口にした桃の實の爲めに彼の胃の腑はちくちく痛み出し、肝腎の戰場の驅け引きが暫らく彼の頭からお留守になつてしまつたからであるといふ。ライプチッヒの戰爭の勝負けの別れ目が桃の實一つに存してゐることが豫め判つてゐたならば、如何してナポレオンがそれを口にすることを敢てしやうぞ。これが一つの運命であり災難であるならば、歐羅巴大戰の勃發の責任を、或は墺太利に或は獨逸に或は露西亞にさては英吉利に、負はせやうとしてゐる所謂歷史家なるものは、怖ろしく不透明な無理解な頭腦を持つた者であると歸結して行かねばならぬかも知れぬ。孰れにもせよ、此場合歐羅巴人としては、戰爭の勃發を目して一種の災難とすることはさして理屈の立たぬことでもないと思はれる。またこれとともに、一旦始めた戰爭を途中で中止も出來ずに、最後は共倒れ

にならざるを得ないことを漸々感じつゝ乍らも、すゝむるにどん底まで引き摺つて行つたといふことも亦、さかしらな顰をした第三者が何點と非難はするものの、何ともならない悲しい人生の眞實の現はれであり、人間の意志以上の仕業であるとも、言へぬこともないであらう。

然しながら、この無慘極まる屠殺戰が漸くのこと終了したのにも拘はらず、——厭はしき惡運の手から漸くのことで解放せられたのにも拘はらず、尙飽きずに今日も各自唸り聲を立て牙を鳴らし合ひ、遣るべき仕事も遣らず食ふべきものも食はずに日を送つてゐる歐羅巴の現況といふものは、いくら巧に理屈を立て議論を飾ざらうとして見たところで、到底眞に辯護の餘地はないと言はなければなるまい。勿論その個々について言へば佛蘭西は佛蘭西としての言ひ分はあらうし、獨逸は獨逸としての又英吉利は英吉利としての言ひ分はあるであらう。然しながら、若し是等の國々がもうすこし眼尖を上に擧げて廣く遠くを見渡す氣持を持ち得るものならば、佛蘭西對獨逸とか英吉利對佛蘭西とかいふやうな事柄以上に、歐羅巴全洲對亞米利加といふ重大な——それにのつぴきならない問題が、前途に橫はつてゐるといふことを氣付かずにはゐられない筈である。勝つたと言つてゐる國も負けたと言つてゐる國も束ね合した一箇の歐羅巴としての生死の問題であるといふことだ。——

戰後は戰爭中よりも更に酷烈な不安極まる逼迫の狀態を生みつゝある。刻一刻と歐羅巴の空合は——一時はあんなにも明るくあんなにも碧かつた！——晦冥混沌の度を增しつゝある。そうだ、全く彼女は、避けがたい盲目の運命にひた押されつゝ一步一步滅亡の淵へと進みつゝある悲劇の主人公なのだ。

八

想ひ出すと、もう十五年ほども昔にならうか。高等學校にはいつて初めて東京の生活をして見るやうになつてから間もない頃のことであつた。神田の日本大學の講堂で、今は故人となられた上田柳村博士が新歸朝者として興趣ふかい洋行談をせられたことがある。田舍にゐる時分から、博士の令名を耳にしてゐた自分は、早速ノートと鉛筆とを懷にして、その會場へと馳せ參じたものであつた。

博士のその日の講演の內容は、その時の博士の風貌、音調とともに今もそのまゝに想ひ出せるやうな氣がする。博士は先づ橫濱を出て間もなく『鋼鐵色をした黑』潮を渡つた話をせられた。布哇ではじめて馬車なるものに乘つたとて『諸君、こゝで御紹介して置きますが、馬車といふものは實に乘り心地のいいも

のです」と言つて、皆を笑はされた。それから亞米利加大陸の話が出た。桑港とか紐育とか市俄古とかの殷賑な富裕な町を見て、博士はどんな感想を抱かれたか？その折の博士の言葉は、わけて自分の耳朶に今もありありと殘つてゐる。——

『亞米利加の繁榮といふものは、私には何となくあのバビロンの榮華といふものを想ひ起させます。バイブルのなかに、ソロモンの榮華は一莖の百合の花にも若かないと言はれてゐるその果敢ない盛衰が、其まゝ亞米利加の運命であるやうな氣がされてなりません。まつたく今は人目を見張らせずには措かないほどに榮華、繁昌を極めてゐますが、明日になると、忽然として沙漠にでもなつて消えてしまいさうな感じが起つてまゐります。物質のみの國、それを支へる文化といふもののない國、土臺石となる傳統といふもののない國……』

博士は續いて、巴里で見たゾラのパンテオン改葬の騷ぎの話を熱心に話された。または、巴里の道路が餘りに綺麗なので歩いてゐるのが勿體ない、「ぺしやん、とそこに坐つてしまひたい」といふやうな話もせられた。伊太利では菫の花に圍まれた詩人キイツの墓に詣でて、その花の一つを摘むで服のボタン・ホールに挿して來た、とも話された。——が、かうした話を一々こゝに書き記して行くといふことは自分の本旨ではない。自分がこゝでわざわざ十五年もまへに聽いた博士の講演を思ひ出して書き記したといふのは、要するに、博士の亞米利加觀が今でも確かにこの國の教養ある人々の意見を裏書きするやうにも思つたからである。また、今や自分の議論が自然と落ちて來た亞米利加の將來といふ題目に多少なり關聯する所があると思つたからでもある。

博士は亞米利加の榮華を往古のバビロンの榮華に喩へられた。が、不幸にしてそのバビロンの興亡について知ることの尠ない自分は、果して博士の比喩が當つてゐるか否かを驗することは能きない。然しながら、博士が亞米利加を目して物質のみの國とし、それに對應すべき精神文化を有せざる國とし、從つてかゝる國は到底永くその繁榮を、生命を、持ち續くることは困難であらうとせられたその論斷に對しては充分諒解し得るのである。

博士の見られた亞米利加は、其後十五年の星霜を經て更にその榮華を增し愈々その繁昌を加へて來たことは前に詳しく說いて來た通りである。而して、一方亞米利加に獨自の哲學なし、文藝なし、音樂なし、美術なし、はた純正科學なし、誇るべき精神文化の見るべきもの更になしとして、これを譏り嘲けるものの多きは、依然として十五年まへの博士の時代に於けると異な

る[illegible]あるを見ない。によつて、若し假りにさうして今日までこの世にあらしむるもその亞米利加禮は、依然として變らないものであつたらうとも推測せらるる次第である。

經濟的勢力に於ては最早何等の異論を挿さむを許さないまでに今日世界に覇を唱へてゐる亞米利加も、所謂その精神文化の缺如の爲めに、ソロモンの榮華のごとく一葉の百合の花にも若かずにはかなく衰微してしまふであらうかどうか？　そして依然として歐羅巴が、よし經濟的勢力に於いては最早亞米利加の敵ではなくなつてゐるにしても、精神文化の覇者たるの地位だけは從來のごとくこれを保持してゐるといふことになるであらうかどうか？　即ち、亞米利加の榮華は所謂槿花一朝の夢で瞬くまに亡ぶべき運命にある「物質」自體であり、これに反して歐羅巴は如何に疲れ衰へてゐても尚且容易に亡びることを知らぬ不死の「精神」自體である、といふことになるであらうか？　それとも、亞米利加には亞米利加一流の精神文化が存在してゐるのであつて、歐羅巴人等の眼にはそれと頗くは映らぬながらも、順當に育ち榮えつゝその國家、社會を永く堅く基礎づけて行つてゐるのではないであらうか？　かくして、結局歐羅巴の創り上げた文明とは違つた特殊の亞米利加の文明なるものが、世界に擴がるに到るのではないのであらうか？

[illegible]……

九

上田博士の見る所に依れば、――否、大多數の人々の見る所もまた、亞米利加文明の最大缺點はそれが物質中心である、といふことである。この爲めに亞米利加は、精神的には墮落を免れ得ぬこととなり、遂にはその爲めに國家の急激なる崩壞をも來すこと無きやを憂慮せしめるものがある、といふのである。

然しながら、自分は、先づこの點に於いて甚しい異見を抱いてゐる。自分の見る所では、亞米利加の物質文明は、やがて精神文明の苗床となるものである。從つて、彼女が物質文明の所有者であらばあるだけ、今後彼女は容易に崩壞することはないであらう、と信ぜられるのである。

從來の歴史を見るのに、殆んど總てのよい文學、よい美術、よい音樂、よい彫刻といふやうなものは、國家の保護か宮廷の保護かそれともある富豪の保護の下に生れ出てゐるのを常としてゐる。一般民衆の間に自然に生れ出でたといふやうなものは實に稀れなる例外に屬する。近來になつて殊更らしく民衆藝術の標語をきくのも、それは反面に如何に民衆のなかに生ある藝術が乏しいか、乏しかつたかを實證してゐるものと言つてもよ

い。民衆自身にあつても、彼等が最も頻繁に行くことを好む活動寫眞やまた最も讀むことを好む安小說やらが、決してよき藝術であらうとは信じてゐない。彼等だとて矢張り（宮廷詩人だつた）ホーマーや（宮廷樂人だつた）モツアルトや（羅馬法王の庇護の下に仕事をすることを得た）ミケランジエロやの作品の方がより善いものであることをば認めるのを躊躇しない。兎も角、精神文明の精華とも言はるべき是等過去の藝術について見ると、殆んど傑れた作品は孰れも物質の豐かな援護の下に生み出されたものであることは、否定能きぬ事實である。これと同時に科學の方面に於てもまた、從來貴い發見、發明といふやうなものは孰れも權力とか富とか物質とかの援護に依つて生じ來つたものが大部分であつて、直接民衆の支持に依つて生じたといふがごときものあることは殆んど聽くことを得ない位である。

從つて若し我々が、近時往々見る所の所謂プロレタリア藝術論者のごとく、プロレタリア藝術に非ざれば今後藝術と見做すを得ないと爲すがごとき素張らしき度胸を有するのならば兎も角、然らざる限りは藝術にしろ科學にしろ、ある程度の豐かなる物質の支持を離れては到底充分に成育し得ないことを恬淡に認めざるを得ないことと思はれる。

しかもこの事實は單に過去に於ける歷史上の事實たるのみではなくして、現在我々が眼のまへに見つゝある事實も亦これに他ならないのだ。大戰前からかけて今に到るまで、幾十の、幾百の、優れたる藝術家さては科學者が、窮乏の歐羅巴を後にして富裕亞米利加に渡りつゝあるか、蓋し人々の想像の他にあると言つていい。自分は今朝ほどもある亞米利加の雜誌に於いて、伊太利の最もすぐれたる聲樂者、マツチア・バツチスチニが曾つて一度たりと雖も亞米利加に渡つて演奏せしめんとする契約に從はんとしたことなかつたとのことを物珍らしげに書いてゐるのを讀むだ。まつたくこの音樂家のごときは異數中の異數に屬する。亞米利加より招かれてそれを辭退するものがないのは勿論、招かれざるも自分より客とならんとする者比々皆然りといふのが、歐羅巴の藝壇の僞かざる眞相であらう。それは、歐羅巴の窮乏が增すに連れ、――同時に亞米利加の富裕が增すに連れ、益々その程度を激甚ならしむる次第である。

かく見て來れば、歐羅巴はその窮乏とともにその精神も窮乏を來し、反對に亞米利加はその物質の豐富を來すとともにその精神も從つてその豐富の度を增し來ることを、結論せざるを得ないこととなるではなからうか？　自分が、物質文明の末路を預言しやうとした上田博士の所說の結論をそのまゝ肯づかうと

しておなかつたのは、實にかゝる爲めに他ならない。

　もつともこれに對しては多少の註釋は必要である。即ちこの歐羅巴のすぐれたる藝術家の亞米利加流入は、例へば正金の流入とは事かはつて、そのまゝの分量と質量で亞米利加の（精神上）の富となるかどうかの點は疑がはしいと言はねばならぬといふことである。即ち、自分の見る所をもつてすれば、是等の藝術家は窮乏の歐羅巴から逃げて富裕な亞米利加に引き寄せられただけあつて、殆んど十人が十人、その亞米利加人の趣味に適するやうにと――同時にそれはすこしでも多く亞米利加人から金を多く得るやうに、といふことになる。――已れの藝術を調整し變化して行くこととなるものと思はれる。歐羅巴のすぐれた藝術そのまゝの精神や姿やを移入しやうといふのではなく、亞米利加人の趣味に適應するやうに已れ自身の藝術を變改して行くといふこと、即ち歐羅巴藝術の亞米利加化といふことは、藝術家にとつて許りではなく、亞米利加にとつても眞の精神文明の樹立のために果してどれほどいいことなのか餘程疑はしくなつてくると言はねばならぬ。從つて、前述したやうに世界の總ゆる傑れた藝術科學が、豐かな物質の支持なしでは生育できなかつたし今後も生育できぬにしても、それが歐羅巴に見たやうな宮廷や國家やさては私のパトロンやに對する關係と今日亞米利加に對する關係とは、全然同一視はできないといふことになつてくる。即ち、從來歐羅巴の宮廷やパトロンや富豪の援助をする代りに藝術家（若くは科學者）から求めやうとしてゐたものと、今日亞米利加が求めやうとしてゐるものとは、そこにある差のあるものと言はなければならぬ。

　然し、それはそれとして、歐羅巴は精神を失ひつゝある、亞米利加はそれを得つゝある、といふ事實だけは到底否定することはできぬ。自分は先づこの點について、亞米利加の優越をば信じなければならぬ。

一〇

　亞米利加が物質中心の國柄であることは是認するにしても、なほ、彼女が決して精神文化から見て緣なき衆生ではないことは、前に述べた通りである。すくなくも、今後は、よしそれが亞米利加流の風變りのものであらうとも、一つの光輝ある精神文化をば持ち得る時機が來るであらう、創り得る時機が來るであらう、といふことだけは確かな氣がせられる。

　然しこれは、言はゞ、未來のことである。現在に於てはそれが什麼見合であるか？　それは、人々が兎もすれば口にするやうに、深き傳統の存せぬことは固より、特色ある精神文化は一

向に存在せず、たゞ徒らに物質中心の、ビジネス中心の、能率中心の、――言はゞ極めて卑近淺薄なる實利・實益第一の國柄に過ぎないのではないであらうか？　現代の亞米利加をもつて、そうした實利・實益一點張りの國柄であると見做す者は無論ある、――ばかりではない、大多數の人々が實にそれである。わけて、藝術とか趣味とかを口にし筆にする人は、十人が十人、亞米利加を宛然野蠻人扱ひにして、これを侮蔑しさては嫌惡してゐる。ところが、却つてかうした亞米利加人を目するに世界に於ける最も精神的な最も理想的な民族であるとなす學者さへ存するのである。亞米利加の制度文物のすぐれたる研究家としてひろく世界にその名の聞えてゐる佛蘭西人のアレクシ・ド・トックヴイル、この人のごときは、亞米利加人は平素こそ厚い物質の障壁に取り圍まれて生棲してゐるやうに見ゆるものの、時とすると、その障壁を敢然とうち破つて、理想の蒼穹に向ひ到底他國の者にはできぬほどのすばらしい飛躍を試みることがあると言つて感歎の聲を擧げてゐる。又、現代に於ける最大の歴史家なる伊太利人グリエルモ・フエレロの如きは、紐育の町を歩いて、この町にはあらゆる建築物が存在してゐるし、またあらゆる藝術品も存在してゐる、亞米利加人は、あらゆる國土、あらゆる時代、あらゆる傾向のあらゆる美を讃へんとしてゐるものと思はれると感歎し、「歐羅巴の古典文學が現代文學と並び合ひ、伊太利音樂が獨逸音樂と並び合ひ、希臘彫刻が和蘭の繪畫と並び合ひ、日本の裝飾藝術が路易十四世、十五世、十六世の樣式のものと並び合つてゐる、この點で、紐育は、實に藝術のコスモポリスである！」とまで激賞して、名だたる世界金融市場の中心紐育を、むしろ自國の羅馬よりもより藝術的なる都であると言はぬばかりの口吻を洩してゐるのを見る。

固より、亞米利加がその最大の努力を所謂精神文化の向上とか發達とかに向けてゐるとはお世辭にも言はれない。物質的の富の開發、物質的の生産の増加、若くは物質的の生活の享樂、――亞米利加人の殆んど十人が十人まで朝夕翹望し希求して止まない所のものは、これに他ならないことは言ふまでもない。然しながら、それだからとても、亞米利加人を（一般歐羅巴人が、また我々日本人が考ふるがごとく）卑俗なる物質主義者、憫むべき拜金宗の信徒に過ぎぬといふ風に、見做すことは、決して正しい見方とは言へない。

今、亞米利加人の物質追跡の姿をよくよく眺めて見る。どうも、それは單純なるシヤイロック的貪慾の姿ではない。一の信仰に驅られた、超俗的な熱情の姿である。これは思ふに、あの歐羅巴の過去の歴史に於て、ある時代例へばナポレオン時代の

ごときは萬人皆光榮、名譽の爲に燃えて戰爭のみに從つてゐたことがあり、またある時代例へば十字軍時代のごときは宗教的熱感に動かされ自己の信仰を守らんが爲めに萬人死をすら厭はなかつたといふやうなこともあり、さてはある時代例へば伊太利ルネッサンス時代のごときは藝術に對する熱情に燃えて全國が波のごとくに蕩揺するといふやうな情勢を呈したこともあつたと同様、亞米利加は今日この土地の蓄積するあらゆる富の開發及びその威力の增加のためにその熱情を傾倒すべき時代に際會してゐるのだ！　といふ風に解せられねばならないのではなからうか？　殊にこの物質に對する熾烈なる熱情は、歐羅巴人自身の胸にも、亞米利加人のそれと時を同じうして醸されたものであることを見免すわけには行かない。即ち、かの佛蘭西大革命を劃紀として、歐羅巴のあらゆる國民、あらゆる階級に亘つて最も顯著に現はされた現象はと言へば、自由と進歩とに對する理想の活動に他ならないのは言ふまでもないが、この理想の活動の結果現實に人々の心を占めたものが、即ち、新らしき欲望とか野心とか要求とかといふ物質征服欲ではなかつたか？　大工業は起り、汽車汽船は走り、あらゆる科學的發明がそれからそれへと企てられたかの近代歐羅巴の産業革命の精神といふものは、實にこれを指したものではなかつたか？　そして、この精神が、――物質に對する征服欲が、その環境と與件とによつて、更に一層熾烈となり、殆んど宗教的熱情にまで灼熱してゐるとも見られるのが、取りも直さず現代の亞米利加人の姿ではなかつたか？

試みに思へ。一方、人口稀少でしかも富饒極まりなき廣茫萬里の邦土が眼のまへに横つてゐる。他方從來人力では到底敢行し得なかつた大事業を蒸汽力、電氣力等によつて瞬時に易々これをなし遂げることが能きる機械が兩手に握られてゐる。征服すべき材料が眼のまへにあり、征服し得る手段がまた眼のまへにある。この場合に、拱手瞑目して『詩』を思ひ『哲學』を思ふものが若しあつたとしたならば、――物質に對する熾烈なる征服欲の衝動に動かされぬものが若しあつたとしたならば、それはむしろ現實の人間世界に於ては容易に見るを得ない珍奇なる奇蹟であると言はねばなるまい。亞米利加人を稱ぶに物質主義者といふ言葉を用ゐ、拜金宗の信徒といふ言葉を用ゐるのもいい。然しこれ等の言葉が輕侮心から發せられるものならば（無論侮蔑の意味のみで用ひられてゐる！）その言葉の使用者はおそらく聖書の奇蹟をそのまゝに現代に見出さうといふ善男善女と言はねばなるまい。と、自分には思はれるのである。

二

亞米利加人の物質主義を目するに、言はゞ物質以上のものであることをもつてしやうとする自分にとつて、もひとつ興味のある問題は、亞米利加の政治思想並びにその制度の中心をなしてゐる所謂デモクラシイそのものである。

　デモクラシイの思想が亞米利加は言ふに及ばず現代の所謂立憲諸國の間に廣く行き亘つてゐることは言ふまでもあるまい。然しながら、それ等の諸國の實情を見ると、この思想なり制度なりは、一般民衆の覺醒、擡頭の爲めに止むを得ず政府乃至特權者階級がこれを受け容れざるを得なくなつたものであることが感じられる。どうも、大勢に押され押されて、止むなく今日の情勢を呈するに到つたのだといふ風に感じられる。それは、デモクラシイの原則の下に國の政治を行はねばならなくなつてゐる現代に於ても、この原則の適用を能きるだけ制限し、たゞ實際上止むを得ぬ點だけに付いてこの新らしき思想なり制度なりを採用してゐるといふ實情を見れば直ぐ判る。所謂近世立憲國の模範をもつて稱せられてゐる英吉利を見るがいい。如何なる方法をもつて女子參政權論者の要求を――彼女等のデモクラシイの要求を、阻止するに努めたことであらう。要するに、デモクラシイなるものは多數の國々に於ては、當然あるべき一國の理想としてではなく、たゞ止むを得ざる實際上の手段として採用せられてゐるといふに過ぎないのである。

　然るに、こゝに唯一の例外をなしてゐるのはわが亞米利加である。彼女は、このデモクラシイの思想をそのまゝ現實の理想として受け容れて、あらゆる組織、あらゆる制度の上にそれを示さうとしてゐる。實際上の必要からとか實際上の便宜からとかいふのではなしに、それがある神秘的なる神託ででもあるかのごとくに取扱ふてゐるのである。

　むしろ、實際上の必要若くは實際上の便宜から言へば、それは甚しい邪魔をなしてゐることとさへ尠くはない。從つて、單純なる觀察者の眼からすれば、――わけて實際政治の經驗とその熟練とをもつて誇りとしてゐる西歐羅巴の諸國の人達の眼からすれば、亞米利加のこの政治思想なり政治組織なりは、幼稚にも見え、無鐵砲にも見え、無器用にも見え、さては馬鹿正直にも見えざるを得ないところである。

　こゝに一例を引く。亞米利加が從來歐羅巴からの移民を夥しく收容してゐたこと、その夥しい數も大戰以來は著しく減少したこと、これは前にも書き記した所であるが、今日其等が減少してゐるとは言へ依然として年々二十萬前後の歐羅巴人はこの

國へ〳〵這入り込みつゝあるのだ。大戰前のごとき年々實に七十萬を超ゆる移民が大西洋を航してこの國に流れ込んだものであつた。一體是等の夥しい移民は何を目的に亞米利加に入りつゝあるのか？――言ふまでもなく、金を儲けんが爲めである。

彼等にとつて、亞米利加の政治組織が如何であらうと、各個人に與へられる政治的權利が如何なものであらうと、一向介意する所はなく、たゞたゞうんと金を儲けて他日錦を着て故郷歐羅巴に歸還せんものをと、それをのみひたすらに望むで來たに過ぎないのである。殊に、是等の移民の多くは、東歐羅巴若くは南歐羅巴の無學にして無教育なる勞働者である。彼等が移住國の政治上の問題なり制度なりについて徹頭徹尾無關心であることは、當然すぎるほど當然であると言つても差支はない。所が、亞米利加は彼等移民に對して、彼等が一向介意せざる所のものを、求めんと欲せざる所のものを、――即ち、彼等をして亞米利加の政治に參與せしむべき權利を、自ら進んで提供してゐるのである。即ち、亞米利加政府は、自國に生れ自國に育つた者に對してのみならず、從來あらゆる關係に於いて緣もゆかりもなかつた此等の無學なる移住民に對しても、平等一律に選擧權なるものを賦與してゐるのである。（自分はこゝで、讀者にわが日本のことを思ひ出すことをお勸めする！）

歐羅巴全土にほゞ均しき廣漠たる土地、そこに居住する種々雜多なる人種、――これだけを考へただけでも、如何に亞米利加が他の文明諸國と較べて社會上・政治上に雜治であるかは、何人にも容易に想像がつかう。然も、彼女は、前記したやうな移住民への選擧權の賦與といふがごとき他國に類なき制度（例へば、南亞米利加の諸國のごときは移住民に對してかくのごとき選擧權を與へて居らない）によつて、自ら進んで更にその雜治を増しつゝあるの觀がある。これを目して、無鐵砲であり、馬鹿正直であるとなすのも、或は無理がないかも知れぬ。然しながら、亞米利加のこの無鐵砲さ、この馬鹿正直さこそは、彼等が擧つてデモクラシイを一の神聖なる政治理想、一の嚴肅なる政治原則、一の敬虔なる國民的義務なることを心から確信してゐるからに他ならないのだ。單に眼前の利害得失を計算する以上に、永遠に亘つて人類を動かすべき大原則を確守すべきことを肝要なりとなす國民的信條の現はれに他ならないのだ。

亞米利加から生れ出でたものは、總て淺薄卑俗なる實利、實益の域から一歩も踏み出さぬものとして、その政治上の制度のごときも、多くの學者にとつては一向研究に値せぬもののやうに取扱はれてゐるのが事實である。然しながら亞米利加のこの政治上の制度、――この徹底せるデモクラシイの思想竝に制度

こそは、おそらく世界各國を通じて、最も精神的、最も理想的且最も神秘的なものでなくて何であらう。單なる實利、實益の點から政治を研究して行かうといふならば、英吉利に赴き獨逸に走り佛蘭西に留まるがいい、然し、政治を眞に人性の深い理想から見て行かうといふならば、是非とも亞米利加に向へ、――からすらも、自分は感ずるものである。

二

亞米利加の文明と歐羅巴の文明との相違點としてよく人々の口にするのは、量と質との對照である、從つて、亞米利加が歐羅巴に代つて世界に覇を唱へるといふことは、量（クオーンチチイ）が質（クオーリチイ）に代つて世界を支配するといふことを意味する。若しかゝる現象が必至であるとするならば、それは文明の將來にとつては、たしかに憂慮すべき結果を生むことになるのは當然であらう。

まつたく、量が亞米利加の特長をなしてゐることは明白なる事實である。『大きい（ビッグ）』といふ言葉は、亞米利加人にとつては最上、最善、最美といふ言葉とまつたく同義語（シノニーム）である。と言つてもいい。かのスカイス・クレーパーやマンハッタン・ビルヂング等の建築物の大は言ふに及ばず、橋梁でも街路でも紀念像でも公園でも汽車でも汽船でも、すべてはその大きさをもつてその存在を世界に誇つてゐる。その最も得意とする物資の生産の大なることに到つては固よりのことである。フォード自動車の一日に於ける夥しい製作數とか、さては過般の大戰中殆んど一夜にして建造せられた汽船の夥しい數とか、今更言ふも事古りたる感じがある。

この亞米利加人の量の價値に對する極度の尊重は、必然に、質の價値と量とは同等に見ないといふことになる。然るに、從來歐羅巴諸國が傳統的に尊重して來た所のものはと言へば、決して量ではなくて、その質であつた。單純に利益を目指して製作される器具機械の類でさへもが、一箇一箇の價額は高くつても、精巧なる良質のものを生産するといふのが所謂商業道徳であつた。戰前獨逸が、海外に於いて先進の英・佛等と競爭するために、歐羅巴のこの傳統から離れて亞米利加式の大量生産の政策を採つたが爲めに、『獨逸製（メード・イン・ジャーマニー）』の名が是等の諸國の輕蔑と憎惡の標的になつたことは、誰しも知る所である。兎も角歐羅巴は、現代に於ける諸科學の勃興、機械力の發達といふ事實にも拘はらず、この質の價値を尊重する點に於いては依然たる産業革命前派の思想の所有者であると言つて差支へなかつたのである。わけて、美術工藝品等の考案、製作に付いては、その性質上當然、永久に亞米利加が已れの敵にあらざることをばふか

く信じつゝあるのを見るのである。亞米利加が『世界一』をもつて誇るホドソン河上に架せる鐵橋の、たゞ徒らに長大を極むるのみにてそこに些かも人の眼を休ませ樂しませる美を有してゐないのに對し、小型なれども均整と調和の美にかゞやく佛蘭西のセエヌ河上に架した亞歷山三世橋を、兩替橋を拉し來つて『亞米利加の世界一』と歐羅巴の世界一』とをまづ較べても見よ！』と皮肉にも宣叙せんとするのである。

思ふに、亞米利加が量の專賣國にして歐羅巴が質の專賣國であるとなすことが當つてゐるか否かは別とし、假令量が現代の社會の普遍的の現象でありまた不可避なる多數の欲望を充す當然の結果であるにしろ、結局のところ、質の價値が量の價値に超えたものであることは、心あるものの認識せざるを得ない所であらう。社會の眞の進歩、發達が將來も亦過去と同じく決して量の大きさ如何にかゝるものではなく、飽まで質の善美に據らねばならぬものであることは、恰かも、藝術家の生命がその作品の數量に存せずして、その作品の內質に存するのと些かも相違はない眞理であると言はなければなるまい。從つて、若し亞米利加が、今後も依然大量生產のみに終始する國であり、しかも彼女の國勢は日を追ふて隆んとなり世界に向つてその所謂亞米利加化を日一日と完成して行くといふことに間違ひがないものとすれば、我々はさうした現象を何よりも世界の文化の將來のために呪はしき事であると結論して行かざるを得ぬこととなる

が、亞米利加は果してかゝる大量生產にのみ終始して質の價値を永久に冷眼視して行くものと見做すべきであらうか？

自分は、總て人間なるものは到底量のみでは滿足し得ない本性を有してゐると考へる。この考からして自分は、亞米利加人も亦この例に洩れず、當然量から質へと趨くことの確なることを、こゝに推論するのを憚からぬものである。

人間は決して量のみでは滿足するものではない。これを個人に例へて見る。我々は金があるからと言つて同一種類のものを幾つも買つて置くといふことはない。結局は質のいい、形の美くしいものを、選び求めるといふことをする。こゝに月に百圓しか貰はぬものと、月に千圓取るものとがあると假定しやう。前者が買ひ求めてゐる一着の冬服に對して、後者は或ひは二着若くは三着の冬服を藏してゐるかも知れない。が、前者が求めたやうなものを收入に割合して十着も有してゐるといふやうなとは決してないであらう。二着若くは三着といふ、比較してその數の割合は少なからうとも、その代りに質のいいものを選んでゐるといふことになつてゐるであらう。さうして見れば、我

ゝは、收入の割合に應じて量の欲望は增して行くであらうが、それも間もなくで、やがて質に對するの欲望が一層はげしく增して行くといふことになるのを知るのである。

これは需用の側計りではない。それ等の物を供給する側に於ても、これに關聯してやはり、簡素にして價の廉い物を數多く生產することから、何日とはなしに精巧にして價高きものを努めて生產するやうに立ち到るものである。一般の富が增して來るにつれ、――それは、一般の欲望の種類と程度とが增して來ることを意味する――その質に對する好みも、漸次高まつて來るであらう。從來大量生產を覗つてゐた商工業界も、ある程度まで行けば、自然にかうした現象からその質といふものに目標を轉換しなければならぬこととなつて來るであらう。かくして徒らに數の多いのを誇り、形の大きいのを誇るといふやうなことから、眞に內質のすぐれたるもの、眞にその形の美くしきものを生產し、または所有することを誇るといふことに轉換して來るであらう。

自分には、人間界一般に亘るやうに想像せられるこの自然的法則が、亞米利加のうへにも適用せられぬとは、信じられない。亞米利加の大量生產は、言はゞ彼女が今し發足點に立つて間もないからであつて、當然ある程度まで進行すれば、質の價値に對する反省覺醒が自然と湧き出して來るに相違ない、と自分には思はれる。否、現にその時期が直ぐそこに來りつゝあるやうにも見られる。若しそれに間違がなければ、この點については、歐羅巴が亞米利加化せられつゝあるのに對して、亞米利加が歐羅巴化せられつゝあるのだ、とも言ふことができるやうに思ふ。どつちみち『大きいこと第一』といふ標語が最早過去のものになつてしまふ時代が、もう眼のまへに來りつゝあるのだといふ氣がする……

從つて自分は、亞米利加文明と歐羅巴文明との消長をもつて量と質との決死的な爭鬪であるかのごとく考へてゐる論者の意見には、容易に服することが能きないものである。是等の兩個の文明の勝敗如何にかゝわらず、結局質は量に勝つであらう、人性にして變ぜざる限りは、長き競爭に於て質は遂に量を凌駕し行くであらう！――これは、平素よりの自分の確き信仰でもある。

三

自分はいままで亞米利加の所謂物質主義を、拜金主義を、若くはデモクラシイの制度を、さては、大量主義のことを、極く大摑みながら一渡り討檢して來た。そして、亞米利加文明の本質が決して世人の輕侮するほど卑俗・淺薄なものではない計り

か、むしろその反對とも見られるといふこと、從つてこの意味に於ては亞米利加文明の降昌が世界にとつて決して悲しむべき現象でも何でもないといふことを記述して來た。

然しながら、こゝに、かうした樂觀を根柢から覆へす危險のある一大缺陷が亞米利加文明の中に存してゐる。それはこのまゝ亞米利加の國力が隆盛に向へば向ふほど大きく擴がつて來る缺陷であり、黑點である。從つてそれは、ひとり亞米利加のために危險である許りではない、亞米利加化せられつゝある歐羅巴のために——否、世界全體のために、亞米利加同樣危險極まりなきものと言はねばならない。それは、ほかでもない、亞米利加の所謂機械文明それ自身である。

亞米利加の富がその基礎を機械力の活動に置いてゐることは前にも述べた。かうした機械力に基礎を置いた文明といふものは、當初から、將來のある禍機を胎むものとせられてゐた。然しながら、それは幸にして杞憂に過ぎなかつた。卽ち、機械文明は、一般勞働者のためには地獄の役をつとめ、極めて少數の資本主の爲めには極樂の役をつとむることになりはせぬか、といふ掛念であつた。機械力に依つて、富める者は益々富み、貧しき者は益々貧しくなつて來るといふ社會主義の說く所が卽ちそれであつた。然しながら機械文明の發達の結果、勞働者の收入は依然よりは遙かに增して來たことが判つた。同時に從來は等の得られなかつた物質も容易に手に入るやうになつて來たことも判つた。富める者は益々富んだことは事實であるにしてもこれに反して貧しき者は益々貧しくなるといふことは事實ではなくて、むしろ、收入の增加、境遇の改善といふがごとき善き結果をば生み出すに到つたのである。從つてこの點に於ては、最初杞憂されたやうなことはなく、機械文明といふものは多數の人々のためには決して地獄を作り出したものではなかつたことが判つたのである。

ところが、これとは全然別種の意味で、更に更に重大視すべき禍機を機械文明といふものが胎んでゐることが判りかけて來た。卽ちそれは、機械文明が人間の持つ悅びのうち最も貴く最も深い生存の悅びをば奪ふといふことである。換言するならば人間の創造的本能をば殺してしまつて、人間は單に機械の奴隸——否機械そのものにしてしまふといふことである。

歐羅巴とても、今日に於いては、亞米利加と均しく機械文明の國と言はねばならぬことは當然である。然し、歐羅巴には今だに古き傳統精神が連綿と存在してゐるが爲めに、機械文明の渦中に捲きこまれてゐながらも、なほ且最後まで、己れの創造的本能を守らんとする意志の存することは、間違ひなく推測

される。ところが、これに反してわ若かき亞米利加は、かくのごとき底力を、未練を、反撥力を、社會の奈邊にも有して居らない。彼女は容易に機械文明のなかに己れの身をまかせて、機械そのものと同化することを拒まうとはしてゐないやうに、推測せらるる。

若しかゝる結果に立ち到ることが確實であるものとするならば、亞米利加文明なるものは、最も惡しき意味の物質文明、――といふよりも、むしろ文明の末路をもつと稱せざるを得くなることと思はれる。あらゆる人間的な本能的な悅びはこの社會から跡を絶つてしまつて、人間全體がたゞ能率（エフィシェンシィ）といふやうなことのみを目的として生活全部を作して行くやうになる。取りも直さず、人間が機械の通りになつてしまふ。人間の存在、欲望、歡喜、悲哀總て其等の人間らしさから生れ出づる聲は、何等の反響をも動搖をも社會に與へることなく、たゞ機械運轉のすばらしく巨大なる音響のみが世の中を領することとなつてしまふ。社會上のあらゆる制度、あらゆる組織が、皆この機械文明と調子を合せてのみ存續するやうになる。教育さへも、人間自身の意義とか價値とかいふことよりもこの機械文明、この工業文明に一番能く適應するのが人生の目的であるかのごとくに敎へ込むやうになつてくる。

かゝる文明は、最早文明の名をもつて呼び難い所の、人間自滅の行爲、民族自殺の行爲であると言はなければなるまい。かの英吉利の哲人バートランド・ラッセルのごときも、かゝる工業的文明をもつて戰爭、革命、不產等の惡德の必然的の母であるとして、よし歐羅巴が無知蒙昧なる百姓のみになつてしまはうとも、この亞米利加流の文明に征服せられるのをば見るにしのびないとまで、激語してゐるのを見るのである。

自分は、亞米利加の有する高き精神的理想を、それに到達せんとする激しき宗教的熱情を、數々の現象の上に讀むできた。從つて、この機械文明の到來に對してもまた、或は亞米利加を信賴して、彼女にそれに對する充分な反撥力、抵抗力が存在することを豫め安心してゐていいのかも知れない。然しながら、亞米利加の今日の隆盛が、すべてはこの機械力に基礎を置いてゐるものであることを考へると、――更に、その環境と敎育との結果ゼネレーションからゼネレーションへと代を重ぬる每に益々この機械化、工業化が骨身に滲み込んで來ることを考へると、さうした反撥力、抵抗力も何日しかまつたく消滅し終るの日が來るべきことに想到せずにはゐられない。自分が、亞米利加文明の將來を、更に、その世界浸蝕の事實を、深き憂慮なしには見守ることが能きないのは、實にこのためである。

十三

自分がこの稿を起したのは八月の末であつた。稿半ばにして未曾有の災禍は帝都を襲ふて、三百年來の文化の集積を文字通り焦土に歸せしめてしまつた。

伊太利のフィレンツェの町での出來事からこの稿の筆を起した自分の聯想は、忽ち、同じ伊太利の南端シチリアの島に位するメッシナの町のうへに飛んで行つた。その町をしばく見舞ふた震災のこと、わけて十數年前の災禍の折には十萬にも近い夥しい人々が無慘にも命を落してゐること、それにも拘はらず當に拾年にして見違ふばかりの美くしき町に再興してゐること——フィレンツェの町を訪ねてから恰度二十日許りののちその土地に初めて足を踏み入れた折に感じ入つたこれ等の事柄が、今更らしく自分の心のなかに蘇へつて來たのであつた。

災禍に打ち拉げられたその町を不斷に再興するのを止めないのは、一にメッシナ人の——否伊太利人の感ずべき元氣に歸してしまはうとは、自分も思はない。土地の形勝——すぐれた海港として申分のない土地の形勝が、結局に於いてこの災禍に呪はれた町を再興せねばならぬといふ元氣を人々の胸から惹き出すことになつてゐるのだ。然し、それにしても、あの南部伊太利人の通有性とも言ひ得べき逞しい活力と熱情とがないとしたら、如何してあれまでに速やかにあれまでに見事にその再興を實現することができやう。自然のまへには人間は弱いと言ふ。然し、その自然をまへにして、燃えあがつた人間の不屈な熱情ほど、世に強いものはない。何千年來の我々の歴史が、みなこれを教へる。

東京の再興が如何にして爲し遂げらるゝであらうか これは我市民が——否我國民が有つ眞の熱情を試し得る二となない機會であると言つていい。我國民が、自然のこの反逆に對して、どの程度まで強い反撥力を有してゐるか、どの程度までにその自然を更に征服し得る活力を有してゐるかを示し得る最もいい機會であると言つていい。……

それにしても、德川時代からの永い傳統の數々を所在に殘してゐた舊東京も跡無く亡びてしまつた今日、我々の持たうとする新東京は厭應なしに西洋まがひの都市になつてしまふことは殆んど疑ひを容れまい。しかもそれは單に街路とか橋梁とか建築物とか庭園とかといふもののみに止まらず、我々の日日の生活様式もそれと均しく急激なる西洋化を強いられることとなるであらう。しかもそれはまた、單に東京一個に止まらず、結局は、帝都としての東京の影響を受くる各地方にまで、ひとしく

波及して行く現象となるであらう。

自分はこゝに漫然西洋化といふ言葉を用ひた。が、それは歐羅巴化といふことゝを意味するのではなくて亞米利加化といふことを意味することになるのは、讀者には容易に想像が付かう。歐羅巴自身すらも刻一刻と亞米利加化の色合の濃厚になりつゝある現代なのだ。わけて我國はその亞米利加とは一衣帶水十日もかゝらずに行き着くことの出きる土地なのだ。殆んど我國の貿易總額の過半は、この國に負ふてゐるといふ間柄なのだ。この國がなければ持つてる物も賣れず、欲しい物も買へぬといふ間柄なのだ。わけて、今次の震災に對する亞米利加の同情と救恤とは、由來感激性に富んだ我國民をして倏忽の間に一律親米論者たらしめるといふ情勢を呈してゐる。殊に、この際帝都復興に要する外債でも募集するといふことになれば、脈應なしにこの國から借金せねばならぬこととなる。從來とても、決して微かではなかつた亞米利加文明の日本浸蝕は、おそらく今次の震災を一段の劃紀として、すさまじいまでに發展し來るものと見て、差支へはないであらう。

自分が、亞米利加文明の本質をもつて決して一般歐羅巴人が見てゐるほどに低劣なものではないと信じてゐることは前に屢々述べた通りである。然し、これを模倣するとか、但しはその影響を受くるといふ場合には、その本質は顧みられないで、その形のみが傳波されるに過ぎないといふことは、殆んど十が十その通りである。この點に於いて亞米利加文明の模倣なり影響なりは、歐羅巴文明の模倣なり影響なりとくらべて、遙かに危險と墮落とに人々を陷れる可能性がある。

然しながら、これは、まだまだいい。亞米利加文明のなかに存する、——といふよりも、その中心をなしてゐる機械文明の暗潛たる禍因は、果して、一通りの警戒や選擇や批評やでこれを避けることができるであらうか？　うまくこの禍因だけを外して、他の差支へない安全な部分だけを輸入するといふことが、果してできるであらうか？

自分は、ある點に於いては樂觀主義者でもある。生活の機械化を工業化を最後まで拒はうとする力が、たしかに日本人の傳統的精神のなかには存してゐるやうに考へられるから。わけて今次帝都の上を襲ふたやうな大災禍に對しても更に挫けざる意志を持ち、更にその焦土のうへに美くしき新都市を速やかに築き上ぐる勇氣をも持つてゐるとしたならば、この亞米利加文明のおのづからに抱懷する禍害に對しても、必ず相應なる反撥力を有してゐると見ることも能きやうから。

然し、また自分は、悲觀論者でもある。今日でも最早亞米利

加文明の不可避の缺點である能率第一主義が、我們の世界の隅々までも浸潤してゐるやうに思はるるから。人間を見るのに、生きた一箇の人間としてではなしに仕事をうまく運ぶか否かといふことに依つて、――人間を言はゞ一つの機械と見ることに依つてその甲、乙をきめて行かうといふのが、最早都鄙を通じての風潮となりつゝある狀態であるから。さては、個性よりも沒個性、自由よりも服從、獨創なりも訓練が、より肝要なこととゝして世間に、重んぜられつゝあるのが日一日とその度を増しつゝあるのが現況のやうであるから。

我々は、自然の暴威に脅かされた。が、今度は、それにも劣らない人事の生み出す暴威のまへに直面させられやうとしてゐる。さうだ、我々は眞に大いなる岐路のまへに立ちつゝあるのだ。（十一月十一日稿）

大正十三年の財政計畫と復興豫算を評す

法學博士　堀江歸一

財政と國民經濟との矛盾

近年我國の財政が幾多の方面に於て、窮迫の狀態に居つたことは、爭ふ可からざる事實であつた。蓋し大正九年の恐慌、之に次ぐ不景氣の結果として、我國の經濟社會には異常の收縮を來したのであつて、總ての力は恐慌前と恐慌後とを比較して、減殺されるもの少なしとしなかつた。然るに我國の財政のみは此間に居つて、少しも收縮の狀を示さないのみならず、恐慌後に於て依然として膨脹する趣きを免がれなかつた。即ち我國に於ては財政だけ所謂不景氣知らずの狀態に居つたのであつて、是れでは經濟と財政との間に矛盾を生じ、扞格を醸すことも、亦已むを得ざる所であつた。我國に於て近年物價が依然昇騰の勢を續けて、更める所なきが如き、金融が常に財政の爲めに、壓迫されて緊縮逼迫の趣きを示した如き、盡く財政における過

度の膨脹の然らしめたものに外ならなかつたのである。私が從來我國の經濟を復興する最有力の方便として、財政緊縮、經費削減の必要を主張して、今日に至つた次第であつて、此點に於ては、多くの同論者を見出したのである。而して之を實際問題として考へても、英米兩國の如きは、戰後大なる程度に於て、經費に削減を加へて、財政の面目を一新し、其程度の急劇なることに於ては、世人をして驚歎するものあらしめた次第であつたが、右の如き經費の削減の行はれると同時に、兩國共に物價の下落を惹起し、戰時混亂に混亂を重ねた經濟社會をして漸く其常調に就かしめたことも亦爭ふ可からざる事實であつて、斯る英米兩國の所爲並に其結果が我國に反應して、經費削減論の有力なる根據と爲つた次第である。

然しながら財政の規模を縮小することは、一面に於て政府の事業を減縮し、其權勢を薄弱ならしめる所以であつて、當局者に取つて、最も苦痛の甚だしきを感ずる所である。殊に我國に於ては多年政友會なり、同會を背景とする政治家なりが政權を壟斷して居る間、地方に政友會の勢力を伸張することを必要とし、此見地から、所謂積極政策なるものを主張し經費の膨脹する勢を其赴く所に任せたのは勿論、斯く增加する經費に對する財源を公債に求めた爲めに、益々財政を不良の域に導いたものと見ることが出來る。近年我國の財政が行詰りの狀態に陷つたとたと共に、政友會に對する輿望の失墜甚だしきに至つたのも多くは其財政々策に於ける年來の過誤の然らしめるものであつて、寧ろ當然の事實を以つて、見る可きである。隨つて今日我國の財政を刷新し、其中外に於ける信用を復興せしめようとする以上は、第一經費に節約を施し、第二公債政策を廢棄することを以つて、整理の骨子とす可き道理であつて、何人が財政の局に當つたとした所で、爲す可き所は是等の二點以外に見出されるを得なかつた。即ち經費にして削減されゝば、其れだけ不生產的消費を抑制し、物資や勤勞に對する無用の需要なからしめる其當然の結果として國民の財力に餘裕を生ぜしめて、物價や賃銀の低廉と爲る勢を見るであらうし、一方に公債政策が破棄されたならば、從來多年間を通じて、公債の爲めに、金融市場を壓迫し來つた弊害は除却される道理であつて、一方に公債の發行されるものがなくなり、他の一方に高利の公債が序を逐うて償還されるに至つて、玆に始めて金融を緩和し、以つて民間事業の進行を容易ならしめるものと考へられたのである。

然しながら我國の財政又は行政に於ける積弊は此行はなければならぬ事の行はれるに就て、非常の妨害と爲つた。豫算編成の時節に臨むと、國務大臣は國務全體に對する責任よりも、寧

ろ自己の管掌する官廳の爲めに成る可く多額の經費要求の財政當局者に依つて、承認されることを重しとし、自己の要求した經費に對する削減に就ては、容易に之を承認しないばかりでなく、當初から削減の加へられることを承知して、殊更に過大の要求を爲すの風さへ行はれた。所謂豫算分捕と云ふ我々國民に取つては、之を聞くさへ、尙ほ不快の感を催ほさゞるを得ざる言葉が公々然として唱へられ來つたことを知つたならば、經費に關する要求の支持、財源に對する爭奪の如何に急なるものであるかは、明に理解されるであらう。時に國務大臣にして經世上の着眼點から、財政の緊縮を以つて、已むを得ざる所と考へても、其率ゆる屬僚は飽くまでも經費の增額を必要とし、大臣亦彼等の意嚮に制されて、態度の强硬を加へることもあると云ふ即ち分捕り來る經費の多寡に依つて、國務大臣の管轄下に於ける屬僚に對する威信が高低するに至つては、誠に驚く可く、慨す可きの限りであつて、我國屬僚政治の弊害は殆ど拔く可からざる所に達したのである

震災の齎した效果

從來我國に於て經費緊縮の必要が叫ばれたに拘はらず、又世間の具眼者が請く其必要を認めたに拘はらず、毫も其實效を生するに至らなかつたは、要するに右の如き弊風が財政に禍ひした結果である。然るに今回の震災火難は其影響の及ぶ所極めて大であつて、遂に我國に於て殆ど人間業を以つてしては、行はれ難しと思はれた財政緊縮、經費縮小をして行ひ得る所たらしめた。唯財政當局者が何處まで此の機會を善用して、實效を擧げたかは、自ら別問題に屬するが、兎に角經費緊縮の行はれる機會の供へられたことは論を俟たない。蓋し震災火難の結果として、帝都が殆ど焦土と爲り、經濟上に治癒す可からざる傷害を蒙つた其上に、帝都と經濟上の關係を有する幾多の都市も帝都に對する賣掛代金が回收されないとか、帝都から商品に對する註文が減少し、又は杜絕するに至つたとか云ふとの爲めに、自ら不景氣の勢を濃厚ならしめた。一時震災直後帝都の衰微と共に地方殊に、地方大都會の繁昌を來すように思はれるたのは東京の物資缺乏に乘じて、地方の在庫品が盛に東京に向つて、相當の高價を以つて、賣却された間だけの事であつて、地方に於ては殆ど藏拂ひの盛況を呈した。然し其れが終つて、次の註文が發せられてこそ、間斷なく景氣を刺戟するに至るのであるが、藏拂だけで、次の註文が行はれない、註文があつても、代金の回收不定であつては、地方經濟の潤はざることも、亦已むを得ないのである。然らば帝都に於ては、第一罹災民に對して

租稅を免除することに依り、第二罹災民たると、然らざるとを問はず、帝都に居住する者は盡く公共收入の負擔力の一部を喪失したことに依り、第三地方民は帝都の經濟的混亂に累されて公共收入の負擔力を失つたことに依り、其れ〴〵租稅なり、官業收入なりに減收を見ることは、勢ひ免かれ難き所に屬する。政府は既に罹災民に對して租稅の減免若しくは徵收手續の猶豫を行つて居るが、減收を生ず可きものは、斯く政府が減免又は猶豫を爲す租稅のみに止まらない。各種消費稅の收入にした所で專賣業の收益にした所で、官業官有財產の收入にした所で、國民の收入に大なる陷缺を生じ、容易に補給される見込の存しない一方に、不景氣は社會到る所に浸潤し、所謂復興景氣なるものゝ如き、其到來を望み得ないし、假令ひ到來したとしても、架空的のものであり、其去來殆ど定め難きものであるとすれば國庫收入の減少は已むを得ない。而して此減收たる、本年度の實行豫算にも現はれるが、明年度の歲計に於ては全年を通じて現はれる道理であつて、其金額の大なる可きは、當然であり、又其減收は官業收入にも、租稅收入にも、共に現はれ可きものであり、隨つて確定的性質を有すると云へる。既に歲計に於て斯る確定的性質の收入に減少を生ずる以上は、之を如何に取扱ふ可きものであるか、確定的收入の減少に對して、不確定的收入例へば公債收入の增加を以つて、塡補を謀るが如きも、行つて行ひ得られない譯でもなからうが、斯の如きは財政の基礎を常闇ならしめる道ではない。左ればと云つて、增稅に依つて、確定的收入の增加を求めるが如きも、今日に於ては殆ど問題外であるとしなければならない。一時奢侈稅を賦課して、一方に奢侈を抑制しつゝ、他の一方に國庫に增收を得ると云ふ說もあつたが、今後國民の間に果して奢侈の風習が起るかどうかは、一つの疑問であつて、政府が外國債でも集募して、其收入の大部分を內國に回收する無謀の擧を敢てせざる限り、斯る事は起るまいと考へられる。而して既に勅詔に依つて、國民に奢侈を警しめられ、國民亦之を遵奉して怠らざる場合に、政府獨り奢侈の行はれることを前提して、奢侈を起すが如き、大なる矛盾である。增稅の目的物として、唯一無二とも見る可き奢侈稅にして、斯の如しとすれば、增稅の如き今日に於て言ふ可くして行はれ可きものではない。然らば租稅收入なり、官業官有財產收入なり、總て確定的の性質を有す收入に減額を來したゞけ、一般歲計に於け經費を削減し、斯くして財政の規模を縮小することは、震災後の財政に於て、先づ第一に爲されなければならない所である。

明年度の財政方針

震災前に於ても、我國の財政は殆ど行詰りの狀態に陷つて居り、公債の如き、之を募集すれば、必ず其處に或る無理の生ずることを免かれなかつた。然も今回の震災火難に依つて、國民の財力に著しき消耗を來し、資力亦薄弱と爲つたことの爭う可からざる事實である以上は、今後の歲計に於て、公債募集を揭げて、之を一の財源とするが如き、甚だしき背理の所業であつて、公債財源は總て之を歲計から除却し、財政を以つて金融を壓迫する弊を絕つと共に、當然帝都復興事業に關聯して、發行される公債の爲めに、國民をして之に應募せしめる餘地を開かなければならない道理である。平時の財政に於ても、昨今の窮迫した狀態を以つてしては、公債政策の廢棄を必要としたのであつた。私が多年政友會の積極政策に反對したのも要するに我國財政の窮地に陷ることを防ぐの意に外ならないのであつたが、震災後の經濟社會に於ける變動は更に此必要を焦眉の急たらしめたのである。

私は曩に租稅其他經常收入に生ずる減少だけ、一般歲計に於ける經費を節約しなければならないと云ふことを論じた。然しながら是れは單に歲計に於ける收入の均衡を維持すると云ふ見地から立論したゞけの話であつて、寧ろ現狀維持論に過ぎぬ。然し今日は現狀維持の下に、單に收支の均衡を得たことを以つて、足れりとするものではない。今や帝都復興事業に要する財源の調達頗る急なる事情の存するからには、租稅其他の經常收入の減少した金額以上に、經費に削減を施し、斯くて生じた餘裕を以つて、復興事業の財源に充てることは、復興事業の國民に加へんとする負擔を輕くする所以として、私の推奬する所であつて、財政當局者の手腕は必ず此處まで伸されなければならないと信じたのである。

故に明年度豫算編成の方針としては、第一經常收入の減少以上に、經費を縮少すること、第二公債政策を廢棄すること、第三一般歲計に於ける剩餘を以つて、復興事業の財源に充ることの三點こそ其眼目とす可きものであつて、私の最も重きを置いた所である。然らば一般豫算なり、復興豫算なりに對する政府の方針は能く上記の三原則に適合して居ると見る可きであらうか。最近大藏省の發表に係る豫算大綱に據つて、本年度の實行豫算並に明年度の豫算を見ると、前者に於ては、

歲入（單位千圓）

經常部	一、一六九、〇〇〇
臨時部	一二三、〇〇〇

普通歳入	二六、〇〇〇
前年度剰餘金繰入	九七、〇〇〇
計	一、二九二、〇〇〇

歳出（單位千圓）

經常部	九八〇、〇〇〇
臨時部	三一二、〇〇〇
計	一、二九二、〇〇〇

であつて、之を成立豫算に比較すると、經常部に於て、八千三百萬圓を減じ、臨時部に於て、公債募集の打切りに依り、三千十萬圓を、其他に依つて三千五百萬圓を減じた勘定と爲る。而して大正十三年度歳入歳出概算に於ては、

歳入（單位千圓）

經常部	一、二六四、〇〇〇
臨時部	一〇六、〇〇〇
普通歳入	二〇、〇〇〇
前年度剰餘金繰入	八六、〇〇〇
計	一、三七六、〇〇〇

歳出（單位千圓）

經常部	一、〇〇八、〇〇〇
臨時部	二六三、〇〇〇
計	一、二七一、〇〇〇

であつて、經常部に於て一千六百萬圓の經費を增加したが、臨時部に於ける經費の減額は一億二千百萬圓であつて、差引き一億五百萬圓の減少に當る。一方に歳入を取つて、前年度に比較すると、經常部に於て八千八百萬圓、臨時部に於て四千百萬圓、合計一億二千九百萬圓の減少であつて、歳出減少額一億四百萬圓に對する不足額は前年度剰餘金繰入れに依つて、塡補されることゝ爲つて居る。而して公債財源の打切に依つて必要と爲る事業費の財源は如何にして調達されるかと云ふ問題は今日に至るまで、尙ほ未決の儘に置かれて居るが、兎に角公債財源の打切られたことは歳計に於ける一の特徴として、認めるを得るのである。

財政方針に對する批判

以上の計畫に對しては、種々の批評を下すを得るであらう。第一多年の問題に屬する經費の削減が天災の齎した偶然の結果とは云へ、兎に角遂行されたことは、私の大に喜ぶ所である。唯經費に對して、何故に今、一歩の削減が加へられないのであらうか。人力の限りを盡して、尙ほ是れ位の削減に止まるのであるか、其れとも行政改革なり、其他の方法なりに依つて、此

以上の削減を望み得るものであるかどうか。第二我國財政に於て、經費の大部分を占めるものが、軍事費であるが、經費削減を必要とする今日に於て、軍事費に幾何の削減が加へられたであらうか、其削減の程度は

經常部（單位千圓）

	大正十三年概算額	前年度豫算額
陸軍省	一七九、四〇〇	一八一、三〇〇
海軍省	一二六、三〇〇	一二五、二〇〇
臨時部		
陸軍省	一三、六〇〇	二三、六〇〇
海軍省	一一二、二〇〇	一五三、五〇〇

と云ふ數字に於て、示される如く、頗る微々たるものであつて、此一事が常に我國に於て經費節約の行はれ、財政の整理される難關と爲るのである。今回の如き非常の事變に際會しながら、尚ほ軍事費の削減の容易ならざるに至つては、唯驚くの外なしとする。此點に就ては財政當局者も相當の努力を致したようであつたが、結局妥協に依つて、始め削減された經費も遂に復活の已むを得ざるに至つた如くである。軍事費の節約は殆ど國民の間に一人の異論者を見ざる位に成熟し切つた案件である。一方に國際間の廣きを眺めれば、レール占領の如き軍事的行動の佛蘭西に依つて、行はれて居ることは、甚だ遺憾とす可き所であるが、他の一方に平和的感情は各國の間に甚だ盛であつて、戰爭を嫌厭する念は極めて強い。此際一國が武力を張つて、他國に臨まうとするが如き、大なる間違であつて、總ての施設盡く平和的基礎の上に築かれなければならないことは、疑を容れない。而して今や我國財政の窮迫は歴然たる事實に屬し、此窮迫した財政の遣繰に依つて、帝都復興の大事業を果さなければならない場合に立ち至つたとすれば、國費の大部分を占める軍事費に削減の加へられるのは當然であるのに、實際の結果の右の如くであるのは、何處に如何なる理由の存する爲めか、吾人の工風を要する故である。第三斯の如く經費の節約される高の充分でなかつた結果として、歳出減少額は歳入減少額に及ばず却つて前年度剩餘金を繰入れて、兩者の差を塡補せざる可からざるに至つたことは、一の瑕瑾とす可き所である。私は財政當局者が最善を盡したと稱しながら、尚ほ經費節約の斯の如く爲ることを遺憾とするものである。第四随つて一般歳計の餘裕を以つて、復興事業の財源に供するの不可能であることも亦當然の數に屬するのであつて、斯くて復興事業に要する經費は之に對する財源の調達を如何なる方法に於てするを問はず、全部國民の新なる負擔と爲ることを免かれない。第五、唯兩年度の豫

算を通じて、公債財源の事業費の打切られた一事は我國財政の爲めに喜ぶ可き所である。之を鐵道豫算に就て見るに、

	十二年度(單位千圓)	十三年度(同上)
豫定額	四〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
前年度繰越	五、五〇〇	六、三八〇
計	四五、五〇〇	七六、三八〇

と云ふが如く、十二年度の未募集公債と十三年度の募集豫定公債とを主なるものとし、此外に殖民地特別會計の募債額があつて、常に財政に對する重荷と爲つた。隨つて是等の公債の打切られたことは、財政の運用を安易にする點に於て、効果の少なからざりしことを認めなければならない。

復興豫算の主義如何

要するに累年の積弊に依つて、紊亂し、紛更し、膨脹した我國の財政は假令ひ天災の爲めに、國民の氣分を緊張させて、其緊縮の行はれる勢を助けたとした所で、一年二年の間に、整理の効果の收められることは、何としても之を望むを得ない。唯當局者なり、國民なりが震災の氣分を忘れず、其れに依つて與へられた教訓を銘記する一方に、假すに時日を以つてしたならば整理の功業或は之を收め得るかも知れない。然しながら一方に震災に依つて、財政に緊縮の行はれる勢が加はつたかと思へば、他の一方に於ては復興豫算なるものが現出して、財政に擾亂を惹起すと云ふことは、私の甚だ遺憾とする所である。始め世間の風評に據ると、復興事業の經費は二十億圓とか、三十億圓とか云ふような途方もない金額に上るようであつた。東京市を一の燒野原として取扱ひ、其上に自由自在に線を引廻して、道路や、運河や、鐵道を建設する、然も道路は數十間幅とし、此幅員の道路に適するような建物の建築を公共の費用を以つて行うなり、設立を奬勵するなりし、輪奐の宏壯、人目を聳うが如き大都會を急速に現出せしめる方針を以て、帝都復興の要訣としたならば、二十億、三十億の財源を以つてして、尚ほ餘りありとするを得ないかも知れない。一時は市民の感情興奮して、斯る誇大の計畫を欲したかも知れず又斯る計畫の下に、莫大なる資金の東京市に撒布されることを以つて、帝都復興の要件とした者もあるようであるが、感情の漸く冷却した今日に於て考へて見ると、如何に帝都に壯觀を添へることが、急務であり、又之を爲すことが今日を以つて好機であるとしても、天下の事物一として算盤を土臺として、立案されざるものはない。復興事業の計畫を決定するに就て、吾人が財政上の問題として考へなければならないのは、

第一、如何なる方面より、如何なる手段に依つて、財源を調達するを得るか、

第二、復興經費は國と市との間に於て、如何なる割合の下に分担され可きものであるか、

第三、或る金額の財源を調達するに就て、如何なる時期を要するか、

第四、財源調達の方法に依つて、國民經濟を攪亂する虞れなきを得るか。

第五、國が府市の爲めに、府縣市に代つて負担した經費に對しては、如何にして或る時期に至つて、府縣市をして償還の道を講ぜしめるか

の諸問題に外ならない。復興事業の財源を自由に求めること、爲れば、公債も、租税も、剰餘金も共に共選に上る可く、公債の内には内國債と外國債とが擧げられるであらう。然しながら實際問題として之を考へると、租税の如きは、事實帝都の經濟力が破壞され、地方も共影響を蒙つて、不景氣の勢を甚だしからしめて居る今日到底復興事業の財源として、推す可きものではない、剰餘金亦其多きことの期し難き以上は、内外國債こそ復興事業の財源とするの外はなからう。唯茲に問題と爲るのは復興事業に要する經費の調達に就て、國民や、市民に如何なる負担を及ぼすであらうか。假に國債の收入を財源として、復興事業を計畫し、又之を經營する。斯くて生ずる利益は東京市に歸し、其市民全體の享ける所と爲るものである以上、國債の利子や、元金償還の財源を國民全體に於て、負擔すると云ふことは、不公平であつて、寧ろ東京市民をして其負擔に當らしめることを正しとする。隨つて復興事業に就ては、純國家的關係のものと、公共團體關係のものとの間に區別を設け、經費の負担に就ても、國民と市民とに之を分配する計畫が備はつて居らなければならない。今回の豫算に於ては、國の負担の四、六に對して、公共團體の負担が二、四と爲つて居るが、更に府縣市の復興事業に對して國から費用の一部分を補助することに爲つて居り、事實國の負担に歸する所少なしとしない。畢竟府縣市の財力疲弊の現狀から云つて已むを得ざる所であるとしても、負担分配の標準正しきを得たかどうかは、一個の問題たらざるを得ない。

復興事業を過大視する勿れ

復興事業の經費は當初の豫算を裏切つて、七億圓臺に節減された。或は之に對しては、復興計畫の規模狹小と爲つて、帝都としての面目を全うするを得ないとか、復興に非ずして、單に復

舊を爲すに止まるゝか云ふやうな、非難に接するであらうと思はれるが、私は財源調達の難易なり、又は復興事業の速成され可き期間なりに就て判斷を下して、先づ此位の金額が相當の處ではあるまいかと考へる。世間或は今回の震災火難に依つて、消耗された富を以つて、百億圓の多きに上るものとし其大なることを論據として、復興經費の多額に上らざる可からざることを論斷するようであるが、此議論には二ツの誤解がある。其一は消耗した富の內には、多くの不生產的分子の含まれて居ることであり、他の一は民間の力に依る復興の輕視す可からざる事である。卽ち今回の震災火難は罹災地に於ける動產は勿論家屋建物の如き不動產を燒燼し、地價の上にも亦大なる下落を惹起した。其れ等の損害を計算したならば、其價格の百億圓と爲り、又百億圓を超ゆることも、怪むに足らざる次第であるが、是等燒燼した富の內で、所謂消費者資本に屬するものゝ如きは、其滅失に依つて、國民生活に何等影響を及ぼすことの大ならざるものであり、隨つて他日國力大に恢復して、各自の生活に著しき餘裕を生ずるに至れば兎に角然らざる限り決して急速の復興を要せざるものである。書畫骨董の如き、料理店待合の如き、各種建物に於ける裝飾的部分の如き、卽ち之に該當する。是等の價格が果して幾何に上るかは、何人に依ても計算されないようであるが、所謂震災火難の損害百億圓から是等消費者資本に屬するものゝ金額を控除したならば、眞に復興を必要とする金額は餘程の小なるものと爲るであらう。而して國家として斯る損害額の全部を補償す可きものではない、國家が補償の責に任ず可きものは、國家直屬の建物、事業等であつて、是等は何としても國家の着手を要する。而して東京市が帝都であると云ふ點から、後段論述する如く、市の爲す可き事業でありながら、國家が代つて執行する場合もあれば、市に屬する事業であつても、其關係の廣いと云ふ點から國家自ら、國費を以つて、施行することを要する事業もあり、其國費を以つてした場合に於ても、國庫から全部市に向つて渡し切りにしたものであるか、其れとも貸付金の形態として置いて、他日の償還を待つ可きものとするかの別を生ずる。東京市や横濱市の蒙つた打擊の大なる場合には、地方の負担を輕くし、成る可く國家をして復興事業の經費を負担せしめようとする傾向に陷り易いのは、已むを得ない所であつて、復興豫算にも此邊の趣きの歷々として現はれて居ることは見逃す可からざる所である。唯此一事を以つて、府縣市の復興事業に於て當然分担す可き領域を忘却し去るのは、大なる間違である。彼等と雖も、國家と共に復興事業に對して、協力す可きは勿論、復興事業の一部分としては、人民自身

に依つて行はる可きものこそ、最も重要なる地位を占めるのであつて、國家としては市民を指導し、啓發し、私人をして其全力を發揮せしめる工風ある可き道理である。

國費と都市復興との關係

兎に角復興事業の經費が當初の風說を裏切つて、七億圓臺に止められたことは、誇大妄想を事とし、東京市の變災に乘じて、之を實現しようと期圖した者の間には、不平もあり、異論もあらうが、我國現時の財力を考量したならば、此程度の規模を以つてして、滿足す可きものではなからうか。七億二百九十七萬七千圓と定められた復興事業の經費に對する財源は如何にして調達され可ものであらうか。私は國庫の剩餘金に依つて、其財源の少なくとも一部分の調達されることを希望した。固より剩餘金は租税其他の經常收入の殘餘から成れるのであつて、國民全體の負擔を加へて、收め得られた結果である。隨つて剩餘金を復興事業の財源に充てたならば、全國民の負擔を以つて東京市とか橫濱市とか、限られた地域の復興を行う、斯くては國費分配の公正を失すると云ふ非難を生ずるかも知れない。然しながら此非難に對しては、東京市が帝都であり、帝都の興廢は全國の運命に影響を及ぼすと云ふ故を以つて、抗辯するを得ると考へる。現に東京市の經濟組織が震災火難の爲めに、攪亂されること甚だしく、消費地としての經濟的勢力を失へば、其影響は全國到る所の生産地方に及び、是等地方の經濟を衰微せしめた一事を以つてしても、諸地方が東京市の復興を助けることは、即ち或る程度まで自ら助ける所以であると理解されるであらう。此見地から云へば、全國民の負擔を以つて、帝都復興財源の一部分を得ることに、承認され可き所であり、又全國民の負擔に依つて、作り出された剩餘金を復興財源とすることも許され得ることゝ爲るのである。

復興經費の分擔法

然るに一般財政に加へられた經費削減の跡は著しきを得ざる一方に、震災火難に依る歳入減、緊急處分に基く經費の支出に依つて、剩餘金を以つて、復興事業の財源に充てる餘裕の存せざるに至つたことは、前論の如くである。隨つて復興事業に要する經費の財源としては、全部公債に依らなければならないことゝ爲る。固より復興事業の性質に依つては、

一、當然國家に於て爲す可きものと、

二、地方團體の爲す可き事業であるが、其執行を國家に於て擧るものと、

三、地方團體自ら財源を工風して、自ら執行の局に當るべきものと

に區別される。第三種の事業に於ては、勿論、第二種の事業に於ても、財源は地方團體自ら調達し、又自ら負擔す可き道理である。唯今日の疲弊せる東京市や横濱市の財力を以つてしては直に此道理を應用するを得ない爲めに、結局國家に於て直接に復興費を負擔したり、又は地方團體の財力を助けて、以つて間接の負擔を加重するに至るのである。現に今回發表された復興計畫に於ても、復興事業費貸付金一千三十二萬五千圓があり、地方復興事業補助五千八百十六萬六千圓があり、更に地方復興事業債利子補給二千八百七十五萬九千圓があり、事實復興計畫の大部分は國家自ら從事せさる可からさるに至る、市債の外國に發行せられる場合に、國家が之に對して元利金の支拂を保證する爲に、自然國家の起債力を制限する結果を齎らすことも、考へられる。假に復興豫算の經費七億三百萬圓が盡く公債に依つて、募集されるものとして、如何なる結果を生ずるであらうか。

復興公債募集の難易

復興公債を内外國孰れの市場に於て、募集するかと云ふことは、當初から世間の議論に上つた所である。而して近時財政當局者の聲明する處に據れば、外國債は外國に就て買入れた復興材料の代金支拂に必要なる高だけに止め、事實復興財源の大部分は内國債に據らしむる方針であると云ふ。始め復興事業の内國經濟社會なり、金融市場なりに及ぼす影響を回避する爲めに、外國債募集を必要とし、殊に之を重なる財源に充てる議論も行はれたやうであつたが、之に對しては熱烈たる反對論の行はれ可きことが豫想された。蓋し外國債に依つて、復興資金の調達される場合には、其資金は必ず外國に就て購入する物資の代金に供用される次第であるから、外國債の募集されることの多ければ多いだけ、外國物資の輸入は容易に行はれて、內國に於て同種物資を製造する事業に脅迫を加へざれば已まないであらう。復興資金の供給に就て、國際共通主義を取る以上は、復興材料の調達に就ても、亦同一の主義を以つてしなければならない道理であるが、以前から今日も殆ど終始一貫我國に行はれる一の經濟的理想は所謂國產獎勵主義であつて、如何なる犧牲を拂つても、內外國兩種の產物の並立する場合には、外國品を排斥して、國產品を重用す可しと云ふ。殊に震災後東京其他罹災地の工業は何れも大なる打擊を蒙つて、再起を難しとする事情のある際、外國物資を迎へることを以つて不可なりとするやに見へる。政府が在外正貨の拂下を行つても、之を以つて外國物

資の輸入を容易ならしめるものであるとして、非難を加へる者のある次第であつて見れば外國債の募集之に伴ふ外國物資の輸入に對して、反對論の起ることも亦想像するに餘りありとするを得るであらう。一方に今日外國が我國の爲めに、果して有利なる條件の下に、募債の目的を達するを得るや否やは頗る不明であつて、英米兩國共に外國債に對する應募力に豐でなく、且つ震災以來日本の外債相場が低落して、容易に震災前の程度に復歸しないことを考へたならば外債に依つて、多額の財源を調達することは甚だ困難であつて、當局者が外國物資購入代金の支拂額に止めると云つたのも、強ち道理なき事でもなく、而して外國債募集能力との關係上、外國物資購入代金も亦自ら多額に達しないこと丶爲るのではなからうかと思はれる。

内國債の募集は如何

斯の如く復興財源の大部分は内國債に求められものとして、内國債の募集は結局如何なる成績を奏するであらうか。從來永く我國の財政を苦しめた公債財源の事業費は明年度豫算に於て打切られるが、其れに代つて復興事業の内國債が發行される。以前の經濟狀態を以つてしても、政府が年に多額の公債を發行することは、甚だ困難であつて、動もすれば金融市場を壓迫する所以と爲つた。今斯る公債財源の事業費は漸く打切られたのに、一方に復興事業に伴ふ公債の募集を必要とするに至つたと云ふのは、要するに前門の虎を逐うて後門に狼を迎へるの類に外ならない。政府の計畫では復興事業の行はれることの最も盛なる年に多額の分債を發行する豫定であつて、必ずしも一を以て律する次第ではないが、兎に角復興事業の財源が大部分公債であつて、六個年に亙つて、發行される以上は一年の發行高は一億圓以上に上らざるを得ない。之に加ふるに火災保險問題の解決案として、政府は結局保險會社に向つて、公債の形で貸付金を交付するであらうし、旁々一般金融の緊縮と共に、公債市價の低落は勢の免かれ難き所と思はれる。固より復興事業に於て、土地買收の爲めに、公債を發行するに當つては、之を公募することを要せず、其儘公債を土地所有者に交付すれば可なる道理であるが、尚ほ時價の低落した公債を所有者に交付するに就ては、必ず公債金額の增加を必要とし、國庫の負擔を加重するに至るであらう。

政府は公債の發行を容易ならしめることに就て、如何なる成算を有するか、此事たる、復興事業の成否の分岐する所であつて、現政當局者の技能の發揮される點である。思ふに復興計畫が當初の豫想に反して、七億圓に切詰られたのも、財政當局者が

財源調達難に立脚して、尨大なる計畫の立案を不可能ならしめたことに胚胎するものではなからうか。此點に於ける當局者の所爲果して然りとしたならば、吾人は之を稱讃するに吝ならざるものであるが、然も今や成立する復興豫算に於て認められる七億圓の募債に就ては、能く成算ありとするを得るであらうか。國家が募債を容易ならしめる道は要するに貯蓄を奬勵して資金の豐富を期するの外に、他あるを知らない。而して貯蓄を奬勵するには、金利歩合の引上げを以つて、其捷徑とする。蓋し人が所得を其入るに隨つて、利用處分せず、他日の用に供する目的を以つて、一部分を留保することは確に一の苦痛であつて、人をして此の苦痛を忍ばしめるには、貯蓄に對する代價として收められる金利の多大なるを必要とするからである。或は割增金付償還の債券を發行して、資金の吸收を容易ならしめようと云ふ說もある。割增金付債券の場合に於ては、割增金に依つて、應募者を勸誘する結果利子其もの丶高きを要しないが、國庫の負擔に至つては、表面上利率を高くした場合に比較して異ならざる次第であつて、一般金利歩合に影響を及ぼして、之を高からしめることも亦同樣である。從來我國に於ては公債に關して五分利標準なるものが行はれて居つたが、今後復興事業に關して、公債の發行される場合に、斯る標準が果して維持されるかどうか、私は之を維持して、一方に發行價格を法外に低くするよりも、利率を高くして、額面に近き價格を以つて發行し、財政の信用の恢復するに隨つて、低利公債に借換へることを以つて、得策とする。

思ふに復興事業の着手と共に、如何なる方面から財源の調達されるを問はず、政府は一方の手に入る所の資金を他方の手に依つて、經費として拂出すであらう。而して政府の經費は專ら其購入する物資に對し、勤勞に對して拂出されるのであるから勢中流以下の階級に居る人々の消費力を大ならしめるに相違ない。隨つて割增金付債券の發行に依つて、彼等の射倖心に訴へつ丶、其不時の所得を吸收し、無謀の消費の行はれることを抑制するのは、經濟社會に起らんとする波瀾を廻避する一法たるを失はないであらう。然しながら斯の如くして國庫に收納される收入の幾何であるかは、殆ど數ふるに足らぬ所であつて、結局復興事業の財源は普通公債の發行に依らなければならないこと丶爲るであらう。

公債の民間事業の復興

近き將來に毎年連續して、多額の公債の發行されるときには其れに依つて金利歩合の上進することは、何としても免かれる

を得ない。金利の上進は一方に貯蓄を奬勵し、貯蓄の奬勵は資本の蓄積を促す效果ありとしても、其れには或る年限の經過を必要とする一方に、金利上進の勢は當面に出現せざるを得ない。

茲に於て考ふ可き問題は斯る金利の上進に依つて、民間に行はれる復興事業に妨害を及ぼさゞるやの一事である。蓋し復興事業は國家なり、公共團體なりで、單獨に行ふものを以つて、足れりとするを得ない。之と相待ち相賴つて、民間商工業者の間に事業の復興が行はれて、始めて復興計畫の首尾全きを得るものと云へる。即ち商工業者が震災以前に於けると同一規模の店舖工場を構へ、以前と同一數量の商品を貯へたり、同一數量の注文を受けたりするのは勿論、此機會に於て、以前に倍する商工業の規模を維持するに至つて、始めて復興の實が擧げられたものと云へる。即ち國家と公共團體と如何に協力して、道路を擴張する、公園を完全にする、運河を開鑿する、港灣を修築するとした所で、是等の設備が能く市民に依つて利用されるかどうかは、一に都市に於ける商工業の復興に依るものとしなければならず、而して商工業の復興を謀るには、資本の供給を豐富にすることを捷徑とするのである。

復興豫算を編成するに當つて、政府は此點に就て幾何の注意を廻らしたであらうか。震災以來金融上に、國民生活上に、罹災民救護に政府に依つて施設された政策は必ずしも少なしとしないが、罹災商工業者をして罹災前の營務に復せしめる計畫が何時何處に行はれて居るであらうか。或は政府と日本銀行と協力して、市中諸銀行の爲めに援助を與へた以上は、商工業者は自ら取引銀行を通じて、復興資金を調達するを得るものと見られるかも知れず、又日本興業、日本勸業の兩銀行をして商工業者に動產又は不動產を抵當とし、時には一片の信用を以つて、資金を融通せしめることゝしたのも、見方に依つては、商工業復興策であるかも知れないが、其結果は如何と云へば、殆ど認む可きものがなく、世人をして失望せしめるに止まる。斯る際に復興事業が公債を財源として行はれ、然も公債發行高の多い爲めに、結局金利步合の上進を促す傾向を生ずるに至るものとすれば、爲めに民間事業の復興に停頓を來さしめるの虞れなきを得ないであらう。私は此際民間事業の復興を急速ならしめる爲めに、金融機關の活動を促す必要のあるは勿論であるが、此外に復興に必要なる材料で外國から輸入されるものゝ輸入税を免除し、內地に於て供給される材料に就ては、鐵道運賃の輕減免除を爲すことを以つて、肝要の處置であると考へる。政府は甞に國民生活に必要なる物資に限り、輸入税を免除することを決定し現に之を實行して居るが、一方に其品目に限りあり、他の

一方に實施期間を明年三月末日にまでと定めてある。思ふに內國生産業者の側に於て、今日の如く外國輸入品から受ける競爭を恐れることの甚だしき以上は、政府は今日以上に免税の品目を增加することも、明年三月以後に免税期間を延長することも出來ないのであらうが、斯の如きは民間事業復興の要旨に反するの大なるものである。若し其れ運輸機關の不振に依つて、物資の輸送が停滯し、企業者に大なる不便を加へて居る事實は何人も認めて、以つて言語道斷とする所であり、斯の如くして民間復興の期せられ難しとするも、亦世評の一致する所である。

近來民間に於ては日本銀行利下論なるものが主張されるやうである。其趣意は日銀の利下げに依つて、諸銀行の金利を引下げさせ、斯くて生じた金利の低落に依つて、民間事業の復興を助けしめようと云ふのである。固より日本銀行の金利引下げに依つて、一般金融の大勢を支配するを得るものゝ如くに考へたり、又四圍の狀況殊に復興公債の陸續發行される事實を眼前に控へて、日銀をして金利を引下げしめようとしたりするのは、大なる誤解であつて、私の何としても與せざる所であるが、金利が低く爲らなければ、民間事業は發達しないと云ふ點に就ては全然所感を一にする。日本國內に存する資力には自ら限りがある。如何に資金に對する需要が緊切であつて、人々は貯蓄に依つて、之に應ずることが有利であるとしても、尙ほ衣食住の諸方面に於ける生活は平常と異ならざる程度に於て支持して行かなければならない關係上、貯蓄に依る資金增殖の勢の遂に大なるが如きことも亦之を期するを得ない。斯る際に政府自ら公債を發行して、限りある國民的資力の一部分を奪ひ去らんとする。其一部分は國民の貯蓄額から云へば、或は大半を占めるものであつて、若しも公債の利率にして高きに至つたならば、現に或る方面に放下されて居る資本の回收を惹起すことゝなしとしないのである。果して斯の如くであれば、政府の復興事業は遂に民間の復興事業に對して、妨害を及ぼすの嫌なきを得るか、一個の問題と爲るのであつて、次第に依つては政府の行はんとする復興事業の完成期を延長する理由を生ずるのである。世論果して此處まで進み來るや否やは、私の豫想し難い所であるが所謂帝都の復興なるものは決して道路の擴張とか、港灣運河の經營とか、公園の增設とか云ふやうな都市計畫類似のものに止まらない。市民を震災前と同數に、寧ろ同數以上に吸引して、大都會の一要素である人口夥多と云ふ件を備へ、而して是等市民に豐富なる職業を供へ、收入を與へ以つて其生活に安んぜしめることが復興の眼目でなければならない。復興豫算の實行は東京市の外觀を復するの力はあるであらう。此以外に市民の生

活市民の職業市民の生活を復興せしめざれば、復興の名はあつて、遂に其實を見るに至らない、私は更に第二段の計畫、第二次の政策を必要とするのである。

以上認め終つてから、十一月二十七日の新聞紙を讀むと、二十六日の復興審議會は政府の復興計畫に大修正を施し、結局復興豫算を七億三百萬圓から、五億二千七百萬圓に削減し、政府亦之を承認するもの、如くに傳へられる。即ち復興計畫の削減されただけ、復興事業の規模は縮小され、其財政上の負擔も亦緩和されるに至る。唯復興事業の完成期を五個年に短縮した爲めに經費の年度割は略ぼ原案と大差なきものと爲り私の以上論述した趣旨においては、大體變更を加へる必要を認めないのである。

文明の意義、價値、その運命

室伏高信

一

ユトピアを語るものはあまりに多い。大道革命家の間でさへも、若くは Feuilletonist——ニイチエの所謂近代文明の道化者の間でさへも、ユトピアを語ることは寧ろ一つの流行である。けれども人を社會を事物を、眞に遠きに考へてゐる人は殆んどこれあるを見ない。地震後において私はこの感を一層に深くする。

私は街頭の政治家、金錢の實業家、若しくはその Winkel-advokat であるに過ぎない政治學者や經濟學者については何ごともいはうとはしない。地震前までは、世の中を遠くに考へてゐたらしい人々、現實の社會を雲煙過眼するらしい人々、藝術至上主義者、人道主義者、文化主義者、若しくは Katheder und Winkelphilosoph の一團が、現實の醜くさから、彼等自身を隱くさうと努めてゐたかに見えてゐた。けれども振幅數寸の地震は一つのよき試練であつた。天ぷら藝術、天ぷら文化、

wissenschaftliche Kostümgelehrte Maske einer Philosophie天ぷら人道、天ぷら社會主義は、一つの地震によつて根こそぎに振るひ落された。一つの地震が東京の近代文明を一と振るひに振るつたように、藝術家、新聞文藝欄の健筆家の一と群れ、博學なる雜誌評論家、科學者、革命家の一團が、疑もなく彼等自身ニイチエの謂ふところの近代文明の道化者であることを證據立てた。

私はこゝに地震のことについて何ごともいはうとしてゐるのではない。地震について試驗された人々について一言を費すことが、私のこの一文の序言であることに必要を思ふてゐるだけである。一つの地震が火事を作ふて東京を燒き盡した時に、彼等は何ごとを考へ、何ごとを口にしたのであるか。帝都の復興東京の再興！　何人かこの標語に疑を挾むだのであるか。當路の職業的政治家、民衆の車を輓く驢馬が、帝都復興の大風呂敷を擴げて立つた時に、何人かよくそれに捲きこまれずにすむだであらうか。商人が、金の人が、工業家が、機械の人が、アダム・スミスが、アリストオトルが、大都市の再建のために熱狂することに私は何の異論も勿論これあるのではない。けれども平常は兎も角も金錢の人であることを自ら屑しとせざる人々、資本主義、商業主義、への抗議を叫ぶ人々が、一つの疑もなしに、帝都の復興のためなる合唱機關となつたことに、私たちは憤りと冷笑とを感んぜずにゐることができるであらうか。

何故に大東京は復活しなくてはならないであらうか。何故に東京はもとありしごとくに大都市でなくてはならないであらうか。東京の榮ゆることが日本の榮ゆることなのであらうか。東京人の榮ゆることが日本人の榮ゆることなのであらうか。東京の大都市を再興することによつて、文化が、藝術と宗教とが、道徳が、人間が、再興することができるであらうか。

東京の、東京としての再興は、都會の再興である。大都會の再興である。一つの世界都市の再興である。現代の世界は、後に述べる機會のあるであらうように、世界都市の世界である。この時代に、世界都市が再興せられずにすむものでないことはこゝにいふまでもない。東京の滅びることは一東京の滅びることではない。日本における文明の滅びることである。世界における都市文明の滅びることである。東京は、日本においては、日本における近代文明の中軸である。一切の機關は東京を中心として造られてゐる。世界においては、世界都市文明の一つの鎖環である。倫敦、巴里、伯林、紐育と並んで、若しくはそれに次いでの重要な一つの鎖環である。東京が眞に滅亡したとしたならば、やがてそは近代日本の滅亡である。またやがて近代世

界滅亡の第一歩である。それゆゑに東京は滅ぶるのではない。滅びないのである。近代日本の滅びざる限り東京は滅ぶることを知らないのである。近代世界文明の滅びざる限り東京は滅びることを知らないのである。何人が努力しなくても、何人が反對するとも、東京は必ず再興されるのである。近代文明がこれを要求するからである。近代文明がこれを要求するからである。即ち人爲ではない。人の意思ではない。ショウペンハウアアの意思ではなくてカアル・マアクスのデタアミニズムである。再興されることが一つの運命である。自由ではない。一つの必然である。一つの機械的作用である。オルガニズムではない。メキャニズムなのである。それゆえに東京の再興を主張することとは、その再興のために努力することは、創造ではない。Wiederaufbau ではない。Mechanisierung なのである。

大都市とは何にぞや。世界都市とは何にぞや。即ち東京とは何にぞや。商人の場所である。商業の場所である。工業の場所である。その Geist としての科學、その權力擁護としての政治の場所である。それゆえに東京の再興とは政治の再興、科學の擁護を意味するとともに、大工業主義と、大商業主義と、從つて機械と金錢との擁護を意味するのである。またそれゆえに今日騷々しくも帝都の再興を合唱する一團の批評家、藝術家、フォイイレトニスト、講壇的學者の諸君とは、大工業主義、機械主義、商業主義、資本主義、勞働搾取、利潤、金錢、金錢の人、金錢の場所、金錢的世界觀の辯護者なのである。然りニイチエの言葉でいへば近代文明の道化者の一團なのである。

あるものは火災保險の問題に熱中してゐる。火災保險を支拂ふも、支拂はざるも、ともにブルヂョア仲間の問題ではないか。一部のブルヂョアをして他の一部のブルヂョアを興すとも、それに何の價値がある。何の意義がある。私たちは踏み車を踏むことの愚ろかさから救はれねばならぬ。またあるものは小ざかしくも生存權の古るき手形に新しき金箔を塗りつけんとあせつてゐる。文化價値を難んじて生存權を說くのである。世の一派の文化主義、若しくは文化哲學なるものを難んずるはいゝ。けれども文化なくして生存なるものがあるであらうか。生存の價値なくして生存なるものがあるであらうか。もつと適切にいへば生存なくして生存權なるものがあるであらうか。生存とは法律上の權利でもなく義務でもない。神の命令としての義務の認識がなくては生存なるものはありえないのである。更に、またあるものは新らしき東京を藝術化せよと叫びつゝある。東京を藝術化することが可能であらうか。金の場所——東京を藝術化するとは何にぞや。東京の藝術化ではない、藝術の東京化で

ある。商業化である、金錢化である。こゝにおいてトルストイがその藝術論のうちでいふたことは至言である。曰く、今日の藝術とは、藝術家の内的衝動から起るのではない。主として、富裕階級の人々が遊戯を要求してそのために費用を惜しまないがために起るのであると。

汝等、[illegible]等よ、汝等の閥團、制度、主人、民衆の驅馬の宣傳、金錢の世界觀を超克せよ。

二

文化とは何にぞや。文化主義を唱へるの哲學者も、文化主義を排斥して生存權なるものを高調するの金錢學者も、文化とは何にぞやの問題に觸れることをしない。文化の聲、反文化の聲が喧しく叫ばれてゐる現代に於いて、文化とは何にぞやのいろけの問題が常に宙宇に迷ふてゐる。文化とは何にぞやの問題が自明のことであるからではない。理解されがたいがためである。文化の問題は、シペングラアのいふてゐるごとくに、歴史モルホロギイの解きうべき最後にして且つ最も困難な問題なのである。けれども最後にして且つ最も困難な問題はまた常に最初にして且つ最も解き易き問題である。最後にして且つ最も解き難き問題を理解することのできないことは、最初にして且つ最も解き易き問題を理解しないことゝである。神と人との關係を見よ。世界根據の深みについて思へ。現象の世界に彷徨してゐもの、曲馬場の馬にとつては、それは把握すべからざる認識の限界である。けれども、トルストイに眞似ていへば、神と人との關係であるかぎりどうして理解されないといふことがありえよう。文化の問題とは實にかくのごとき問題なのである。

文化の問題が理解されないがために、文明の問題が理解されることができない。文明と文化との關係の理解されてゐないことが、今日における所謂文明批評の、藝術批評の根本的缺陷である。

多くの人々は、文化とは文明の頂上だと考へてゐる。文明の頂上に文化が立つてゐると考へてゐる。それゆえに文化の發達とは文明の發達だと考へてゐる。今日の文化論者とは上はリツカアトの文化哲學から下は森本厚吉の澤庵廢止論的文化生活に至るまで、みな等しく文明病患者である。文明を謳歌するがゆえに文化を謳歌するのである。文明主義者なるがゆえに文化主義者なのである。文明と文化とは彼等にとつては何等の本質的區別ではない。文化とは文明の外衣である。コスチュウムである。裝飾である。藝術、教育、道德、宗教、みな等しく文明のコスチウムである。またそれゆえに、リツカアトなどが考へて

ゐるごとくに、政治も法律も國家も、若しくは科學もみな等しく文化客觀でありうるのである。こゝにおいて文化とは唯物的社會主義の謂ふところの Überbau である。ブハリンの輕んじてゐるごとくに、謂ふところの geistige Kultur とはかくして正しく一つの Überbau なのである。大地のうへに、人間のうへに、心靈のうへに、神と人との關係のうへに立つてゐるのではなくて、一つの經濟財のうへに立つてゐるところの精神的構造物である。心靈的ではない。唯物的である。メキヤニズムである。靈の國ではない。精神の機制である。それゆえに今日の所謂文化とは文明の一部である。文明の大伽藍のうちにおける精神的部門である。文明の上部構造を名づけて文化といふてゐるのである。

　文明とは何にぞや。農業と牧畜の時代は野蠻の時代である。商工業の時代は文明の時代である。文明とは都會の世界である。都會の世界とは都會の支配、都會的世界觀の支配する世界である。それゆえに文明とは何にぞやの問題は都會とは何にぞや、都會的世界觀とは何にぞやの問題に歸着するといふも差支へないのである。

　都會とは何にぞや。最初にはそれは商業の場所として生れたのである。今日は商工業の場所として生れたのである。商業の本來の目的は交換にある。工業の本來の目的は多數生産にあるといふはいふ人の隨意である。けれども商業も工業もその所謂本來の目的によつて動くものではない。それには一つの動力がなくてはならぬ。利潤がこれなのである。金錢がこれなのである。都會が商業若しくは商工業の場所であることは、都會が利潤の場所、金錢の場所であることである。都會人とは金錢の人である。直接間接に、一切の都會人は金錢人である。金錢餓鬼である。金錢なくしては一日も生活することはできない。金錢によつて生活を買ふのである。都會生活とは金錢によつて買はれた生活である。渇して飲む一杯の水も、饑に飢えて眺める一つの藝術品も、みな金錢によつて買はねばならぬ。金錢は彼の胃の腑を支配する。胃の腑をとほして彼自身を支配する。ブルジョアもプロレタリアも、ともに金錢餓鬼である。ともに金錢の人である。金錢で買はれた人である。金錢で買はれるために、農業の原價値觀念を捨てゝエエレンフェルスの所謂 Wirkungswerte を追ひつゝ金錢の場所に集合してきた人々である。ともに奴隷である。絶望的なのはブルヂョアだけではない。プロレタリアもまた絶望的である。ブルヂョアだけが Bürger ではない。ブルヂョアもプロレタリアもともに Stadtbürger である都會的世界觀の信奉者である。工業の讃美者である。機械の讃美者である。政

治、國家、科學の讃美者である。大量生産、印刷機械、Labour-saving machine 大學、小說、活動寫眞、蓄音機、十二階、丸ビル、新聞、汽車汽船、電信電話、ニュートン、アインシタイン、「帝都復興」の讃美者である。ともに都會の産物である。ともに都會寄生者である。ともに寄生虫である。農民に對する寄生虫である。ブルヂョアだけがそうであつたのではない。プロレタリアもまた寄生虫である。頭の頂邊から足の爪さきに至るまで寄生虫である。價値とは金錢價値である。Eigenwerte ではない。Wirkungswerte である。量的である。量的なるものでなくては計算の對象とはならない。計算の對象とならなくては價値判斷はない。經濟財が一切を支配する。シラアの所謂 Hunger und Liebe ではない。Hunger が世界を支配する。Hunger が Liebe をも支配する。人を物を社會を支配する。

政治は、法律は、道徳は、宗教は、藝術は、Liebe のうへにではない。Hunger のうへに立つてゐる。革命も反革命も、リイベのうへにではなくてフンガアのうへに立つてゐる。こゝに階級の存在は必然である。ニイチエのいふごとくに文明と階級とは二つにして一つである。階級とは常に經濟的觀念である。經濟財の世界とともに階級があり、經濟財の世界の終焉とともに階級は終りを告げるのである。階級とはそれゆえに都會の産物である。都會生活のあるところ必ず階級があり、都會生活の終局するまでは階級は終滅するものではない。古代共産主義は農村とともにあつたがゆえに共産主義でありえたのである。ボルシウヰキ的共産主義は都會とともにあるがゆえに反共産主義なのである。都會のもとに共産主義はありえない。都會のあるところ金錢が支配する。金錢的世界觀が支配する量的價値觀念が支配する。大社會が支配する。制度、組織、權力、機械、金錢が支配する。今日はかくのごとき時代である。都會時代である。文明の時代である。その都會は世界都市である。その文明は世界文明である。世界都市となることが凡ての都會の運命である。ロオマ文明がロオマの世界都市を生みだしたように、近代文明は倫敦、巴里、伯林、紐育、東京の世界都市を産み出したのである。Das Geld Kennt Keinen Herrn. ――金錢が主人を知らないごとくに、都會は、文明は主人を知らないのである。歐羅巴でも、亞米利加でも、支那でも、印度でも、都會は、文明は、境を知らない。世界都市は世界の吸血鬼である。白人であつても、黄人であつても、ロシアの半野蠻人であつても、若しくはホッテントット・ブッシメンであつても、都會は、文明は、その血を吸ひ盡くさねばならぬ。個別ではない。普遍である。自由聯

合ではない。中央集權である、民族的ではない。インタナショナルである。傳說ではない。經驗である。認識の限界の彼方ではない。現象の世界である。直觀ではない。計算とデイアレクチイクである。神祕ではない。科學である。今日は科學の時代である。都會の時代、金錢の時代、機械の時代、經濟財の時代、階級の時代であるとともに、科學の時代なのである。文明の時代は科學の時代なのである。科學の時代、機械の時代、金錢の時代、都會の時代、世界都市の吸血する時代を、人々は文化の時代だといはうとしつゝある。文明の時代を文化の時代だといはうとしつゝある。文明の爛熟する時に文化が爛漫として花開きつゝあるものと考へてゐる。汝等、猿猴等よ、自ら欺くこと勿れ、民衆の車を輓く驢馬等よ、賤民を欺くこと勿れ。

三

面紗を脫して光に面せよ。——ラスキン。

汝等のうちから面紗と衣裳と顏料と外見とを除け。——ツアラツストラ。

汝等のうちから面紗と衣裳と顏料と外見とを除き去つた時に私たちの世界には何ものが殘されるであらうか。gerade genug würde er übrig behalten, um die Vögel damit zu erschrecken——謂ふところの文化とは、たゞ小鳥を驚かすに足るものではないであらうか。若しくはたゞなる面紗、たゞなる衣裳、たゞなる顏料、たゞなる外見、一つの科學的コスチウムであるに過ぎないではないであらうか。

私は既に今日謂ふところの文化なるものが、文明の外衣であることを指摘した。文明の外衣であることは都會の外衣であることである。都會の外衣であることが、今日の文化なるものである。文明における文化とは都會の外衣なのである。

都會の外衣は科學的外衣である。Wissenschaftliche Kostüm である。今日の文化人とは外衣をまとうた市民である。ルソウの自然兒の代りに外衣をまとうた化裝人である。貴婦人だけが化裝人であるのではない。現代の凡ての人は、多かれ少かれ何ものかの外衣をまとうてゐる。人間が、最初に襯衣に類する衣服を發見した時から、人間は一日々々と彼の外衣を重ねてきた。肩書き、勳章、高等官何等、金時計、ダイヤモンド、エメラルド、オペラバツク、自働車、毛皮、一切の物的并に精神的こけおどしの道具が整備して文明は大都市の街頭に酣けなわである。この文明の外衣を人々は文化だといふてゐる。謂ふところの文化が、カフエに、劇場に、音樂會に、三越に、資生堂に、ボンドストリイトに、大學に、議事堂に、文展に、雜誌に

フォイイレトンに花爛漫であるばかりではない。澤庵漬けを廢止して郊外に文化村を建てる。田園都市を建てる。夏期大學を四方に設ける。文化生活、文化しるこ、文化食堂、文化哲學、今日は正に所謂文化の時代である。所謂文化とは文化であるか。文明における文化とは眞に文化であるか。

文明とは外的秩序の整正である。機械的世界である。生活の機械化である。都會化である。文明における文化も、物的であることの代りに、精神的だといふことができるであらう。geistige Kultur は、汽車や電車や輪轉機やよりも違つたあるものであるといふことはもとより許るされなくてはならないであらう。けれども汽車や汽船や電車や輪轉機がなくては、精神的文化なるものもあり得ない。前者と後者とは互に相助けてゐる。マアクスは唯物史觀の著者として知られてゐる。彼がその有名な heilige Familie のうちで、科學が、産業と並んで、歴史を動かす二つの動力であるといふてゐることは、マアクス專門家もまたしばしば注意することなくしてすむでゐる。マアクスは、産業とともに、科學において進化の動力を見てゐたのである。彼の歴史哲學はどこまでも唯物論とヘエゲルとの組み合せである。ヘエゲルは知性のうちに人間の意識生活並に歴史の動力を見てゐたからである。けれども、外的世界秩序、即ち物質的文明なるものと、謂ふところの精神的文化、知性、科學との間に何等かの本質的區別が存在するであらうか。

知性は精神の下層形體を形ちづくる。窺ふべからざる深みではない。心の扉のところに立つてゐる。そは積み重ねることのできるあるものである。組織することのできるあるものである。說明することのできるあるものである。意識の世界である。無意識の闇黑ではなくて意識の明るみである。概念の世界である。論理の世界、辨證法の世界、數學の世界に屬する。一人から萬人へ、一事から萬事へ傳達することのできるあるものである。entgeisteter Geist である。括弧でくくり出すことのできるあるものである。符號の世界に屬する。メキヤニズムである。精神の機制である。プラトオとゲエテとによつて代表される Philosophie des Werdens の世界ではなくて、アリストオトルとカントとによつて代表される。Philosophie des Gewordnen の世界に屬する。生成の世界ではない。過去と死の世界である。科學者とは、おしなべて Prediger des Todes である。生の哲學は哲學ではない。死の讃美者でなくては哲學者ではない。システマチカアでなくては哲學者ではない。系統と組織とがなくては學ではない。凡てのものが組織され、凡てのものが系統立てられねばならぬ。人が、物が、萬物が組織立てられて人が、

物が、萬物が數學のアパラアト、論理の飜弄に委せる。萬物が整正されて一つの生命が失はれる。アルツウメンシリッヒの著者のいふごとくに、われ／＼はかくして表象の世界に住むでゐる。たゞなる現象の世界、意識の世界、經驗の世界に住むでゐる。現象の世界を越ゆることは認識の限界を越ゆることである。物自體は不可解として捨て去られねばならぬ。世界根據の深みは無意味として研究室の外に追ひやられねばならぬ。無意識は、夢は、夜は、精神錯亂として捨て去られねばならぬ。神秘は、傳說は、奇蹟は、信仰はおしなべて迷信である。Glauben は常に Aberglauben である。現代の奇術師は、ルナンの指摘してゐるごとくに、奇蹟を信んずることなくして奇蹟を行ふものである。欺僞師である。科學的奇術師である。科學は常に自然科學である。自然科學と文化科學とを區別せんとする企ては科學の破産を意味する。歷史と自然とが區別されないといふのではない。人間は Glied der Natur であるとともに、Glied der Geschichte である。自然の肢體である時に因果關係が支配する。歷史の肢體である時に因果關係が支配するものでないといふのである。文化科學の建設は、歷史の心靈性を解することなき科學者の誤謬である。再びいふ、科學は常に自然科學である。生命が歷史に、知が自然に屬する。自然科學の世界は知の世界、經驗の世界、因果關係の世界である。Kausales Wissen technische Erfahrung gibt es nur von Gewordenem, Ausgelebten, Erkannten――既成の世界、過去の世界、擴がりの世界である。未來ではなく、創造ではなく、豫言ではない。われ／＼は今まかくのごとき世界に住む。人間は、かくのごとき世界に進化してきたのである。ベルグソンの言葉でいふと、動物が本能的に發達してきたのに對し、人間は知能的に發達してきたのである。人間の知能が科學を、國家を、議會を、機械を、新聞を、大學を、ドレットノオトを造り、自然を征服し、夜を晝と化せしめたのである。こゝに人は自然に對して文化といふ。人間の知能の産物を名づけて文化財といふのである。ニウトンの自然がゲエテの自然を征服したのである。Philosophie des Gewordnen がPhilosophie des Werden を征服したのである。卽ち文明における精神的構造を名づけて文化財といふのである。

勿論、われ／＼が名づけて物的秩序となすもの、若しくは科學と名づくるもののほかに、更に他の精神的文化なるものをもたないのではない。藝術、宗教のごときものがこれである。藝術と宗教とが今日の世界に存在するであらうか。文明における宗教、文明における藝術とは宗教であり藝術であるか。

宗教のことについては、私は嘗つて本誌に寄せた「創造人の

宣言」のうちで述べたことがある。存在するものは宗教ではない。文明は無恐怖である。Unfurchtbare seid ihr : darum fellt es euch an Glauben.——文明は無恐怖である。無恐怖であるがゆえに無信仰である。文明には、科學には、意識には、機械には、迷信もなく、信仰もない。神々は死せり——ツアラツトストラのいふごとくに、神々は死んだのである。神々は死んで既に久しい。今日の牧師とは、僧侶とは、神を信んぜずして神を説くものである。信仰の代りに神學が、宗教學が代つた。神學は、宗教學は、最早　何等の宗教ではない。學であるべく、科學であるべく、系統であるべく企てられた。超證明の世界でなくて證明の世界である。神秘でなくて概念である。即ち宗教ではありえない。神々が死んで宗教もまた死んだのである　科學に懐疑に始まるとはデカルトの有名な言葉である。科學は宗教的一切のものに對する懐疑から始まるのである。科學と宗教とを兩立させようとする企て位ひ愚ろかな企てはない。私學の價値を高きに買ふものは宗教を捨てねばならぬ。宗教的信仰の人は科學を捨てねばならぬ。科學の妥協することのできるのは、神とではなく、宗教とではなく、たゞ神學とである。ルナンの耶蘇傳に曰く、煩瑣神學のごとくに福音　から遠いものはないと。煩瑣神學が發達して宗教が滅びたのである　牧師が神學博士となり、パチエラア・オブ・ディヴヰニテイとなり、僧侶が僧府となり、管長とな　、勅任官となつて、耶蘇教も佛教も　ともに亡びたのである。否、神學と雖も起つたのではない。神學と雖　科學の征服するに任せたのである。再びいふ、科學は常に自然科學である。神學は學問ではない。神學は信仰でもなく科學でもない。一つの迷信なのである。信仰が亡びて迷信が殘つたのである。科學の勝利のうちに、迷信が尙ほその殘骸を殘してゐるに過ぎないのである

宗教が亡びた時に、藝術なるものが尙ほ存在するであらうか。藝術は遊戯から始まつたといふことができるであらう。その遊戯とは如何なる知の産物でもない。内的衝動が、意欲が、心靈が、呼びもとめたために、藝術はこの地上に生れてきたのである。文明の世界は知の世界である。科學の世界である。機械の世界である。知が、科學が、機械が、衝動を、意欲を、信仰を、心靈を支配することが　明である。知が、科學が、機械が、衝動を、意欲を、信仰を、心靈を支配する時に、人々は最早や自然人ではなく、本能人ではなく、無意識は無意味なものとして意識の奧底に鎖ざされ、夢は、想像は、神秘は、傳說は、奇蹟は、虛僞として、精神錯亂として遠方に追ひやられるのである。知、と科學と、意識とが、精神を機械化した時に文明人が、誕生す

る。文明人は知の人、科學の人、意識の人である、足の爪先きから頭の頂點まで知の人、科學の人、意識の人である。藝術とは、こゝにおいて知の人、科學の人、意識の人の遊戯である。頭腦の產物である。內的衝動からではなくて精神の下層形態から生れてくる。無意識の深みからではなくて意識の表面から出てくる。心靈の表現ではなくて精神の機械作用である。シペングラアの言葉でいへば、近代の藝術とは、都會の腦髓人の遊戯である。自然主義は、若しくは印象主義は、近代藝術における代表的原理である。藝術とは模倣である。自然の模寫である。ゾラの謂ゆるテムペラメントを通じて自然を見るのである。その自然とはゲエテの自然ではなくてニユウトンの自然である。自然科學の自然である。頭腦をとほして観るの自然である。しかも近代藝術は自然科學、概念、機械と切り離して考へることは不可能である。音樂は人を離れて器械の遊戯である。蓄音器に至つて最も代表的である。劇は活動寫眞によつて置き換へられつゝある。小說家、美學者、藝術評論家の間では、藝術上の階級戰が激烈に戰はれた。近來のフオイイレトンは無數なるフオイイレトニストの藝術階級論によつて滿たされてきた。しかも小說家、哲學者、藝術評論家とは、おしなべて、ブルヂョアである。都會文明の產物である。哲學なるものはブルヂョアとともに生れたものである。藝術評論家とは、ブルヂョア社會における分業の產物である。小說とは、藝術におけるヂヤアナリズムである。印刷機械が發明されて、文藝の多量生產、機械生產、薄利多賣主義がブルジョアの頭腦人によつて要求されてきた時に、この地上に生まれたものである。ブルヂョア以前に、われ〱は哲學者を、藝術評論家を小說家を、もつてはゐなかつた。美學の誕生は藝術に對する科學の征服である。神學が宗教の勝利を意味するものでないごとくに、美學の誕生は藝術の發達を意味するものではない。小說とは一つの新聞藝術である。新聞が大社會、階級社會、機械的社會の精神であるように、小說もまた大社會、階級社會、機械社會の遊戯である。ブルヂョア藝術とプロレタリヤ藝術との爭ひは、プロレタリヤ科學、ブルヂョア科學の爭ひのそれのごとくに愚ろかである。今日の社會においては一切がブルヂョア藝術である。ブルヂョア藝術は一つの模倣であるが、プロレタリア藝術とは、模倣の模倣である。知の器用なる模倣である。知の連り、知の擴がり、名づけて、われ〱は藝術だといふでゐるのである。

私は文明には必ず階級が存在するといふた。また階級とは常に經濟階級であるといふた。階級の支配する世界では經濟財が支配する。金錢が支配する。唯物史觀が支配する。政治も、法

律も科學もみな等しく經濟生活の上部構造である。文化、藝術、宗教も、また等しく經濟生活の上部構造である。共產主義に共產主義の文化がある。資本主義に資本主義の文化がある。藝術や科學が經濟のうへに高く超越してゐると考へたツガン・バラノウスキイは現代藝術の特質についても、若しくは科學の本質についても、何ごとをも理解してはゐないのである。希臘風の建築がロシヤにおいて成立することのできないのは、ロシヤに石材がないからであるばかりではない。ロシヤ風の建築は、たゞロシヤに森林が豐富であるがためであるばかりではない。希臘風の建築は希臘における全文化の結晶である。建築は就中協同藝術である。資本主義の世界がその經濟的　勢力をもつてしても尙ほその固有の建築術をもつことができないのは、今日の建築が經濟のうへに高　聳へてゐることの如何なる證據であるのでもない。經濟財の支配する世界、物質の　界、知の世界において眞實なる藝術をもつことのできない證據でなくてはならぬ。こゝに資本主義　藝術がある。こゝに文明における文化がある。それは會　世界觀の產物である。金錢的世界觀の再現である。ワグナアの音樂も、バウデレエルの抒情詩も、如何なる國民のための藝術でもなく、如何なる自然人のための藝術でもない。世界都市の頭腦人のため、金錢人のため、若しくは金錢のためなる藝術である。小說家の原稿料は、その質によつてではなく、その人のもつ社會的聲望——それは出版業者によつて直に金錢と引換へられるものであるがゆえにまた一つの經濟財である。——と原稿紙の數量によつて計算されるのである。藝術の價値は計算される價値である。市場における一つの商品である。文化財ではなくて經濟財なのである。

ツアラツストラの言葉でいふ、汝等末人等よ。新聞は毒液である。教育は剽竊である　藝術家とは近代文明の道化者である。人々は毒液を、剽竊を、道化を、文化だと名づけてゐるのである。

四

Man suche nur nichts hinter den Phänomenen: sie selbst sind die Lehre.——ゲエテの心は、マアクスとダアギンの世界には異端である。しかも人々はたゞなる現象の世界に滿足してゐることはできない、現象の奥深くに心靈を浸透せしめることなくしては、われ〳〵の生活は深みを加へてゆくことはできない。科學の時代、知性の時代、文明の時代、機械の世紀において、無意識の奥深くから、心靈の王國から、一つの呼び

もとめがきたらねばならぬ。

科學の國の榮は既に久しい。科學は既に久しく人々の常識である。科學は自由民の間における宗教である。組織的哲學は十八世紀において完成したとはシペングラアの指摘してゐるところであるが、カント以後、多くの組織的哲學者、カテエデル・ウント・ウヰンケルヒロソウフの續出とともに、哲學は今や整然たる概念建築として押しも押されもしない科學となり了つたのである。Die systematische Philosophie liegt uns heute unendlich fern: ――組織的哲學はわれ〱から果てしもなく遠く隔つて教壇の一隅に立て籠つてゐる。倫理的哲學は終りを告げたのである。科學は、宗教をも、藝術をも、歷史をも、哲學をもそして遂に人間の心靈をも征服し盡した。文化の聲、宗教の聲、哲學の聲、藝術の聲が、街頭の一角に喧しく叫ばれてゐる現代において、文化は、宗教は、藝術は、哲學は、道德は、既に科學の征服するところとなり了つたのである。

あゝ、靈魂の貧しい哉。宗教の聲、藝術の聲、文化の要求が喧しい現代において、あゝ靈魂の貧しい哉。

「太陽は既に沒した。」懷疑は時代の精神である。自由精神である。Der Skeptizismus ist Ausdruck einer reinen Zivilisation. ――懷疑は科學の母であるごとくに、また文明の母である。純粹文明の表現である。懷疑が支配して太陽は既に沒した。神々は既に死んだ。科學が勝ち誇つて知は今や力である。富である。榮譽である。宗教である。藝術である。文化である。道德である。善である。頭をとほしてでつち上げられたのは形而上哲學であるのではない。科學的哲學である。教育である。道德である。藝術である。宗教である。――太陽は既に沒したのである。

太陽が既に沒した時に、新らしい時代の呼びもとめが聞えてきたらねばならぬ。現代は正に懷疑の時代である。ブルヂョア時代は懷疑の時代である。しかもブルヂョアの宗教――それをわれ〱は科學と呼びなしてゐる――が完成に近づいて一つの新らしい懷疑は生れてきた。科學の價値に對する疑惑がこれなのである。科學の價値に對する疑惑は、過去十年間における最も大いなる動きであらなければならぬ。地は尙ほ自由なる魂を拒ます。自由なる魂が、自由なる精神に對して抗議を始めたのである。無意識のどん底におけるある力が、意識の表面に對する革命である。意欲が知性に對する抗議である。機械に對する生命、模倣に對する創造、組織に對する自由の抗議である。自由は凡ての救世主のうちで最も偉大なる救世主である voluntas superior intellectu ――意思は知に優越する。知

は選擇するの力もなく、創造する力もなく、ゴドキンのいふごとくに人間を動かす力もない。精神世界における意欲と思惟とは、外的世界における方向と擴がり、歴史と自然、運命と因果律とである。知の世界は人格的の世界ではなく、心靈の世界ではなく、またこれゆえに創造の世界、自由の世界ではない。ベルグソンの形而上學概論は事物を知るの方法を二つに分けてゐる。一つは事物の周圍を廻ることである。他の一つはわれ〳〵が事物のうちに入りこむことであると。前者は彼の所謂る關係的知識であ。。後者は彼の所謂絶對的知識である。關係的知識は記號によつて到達される。そは彼が他のものと共通にもつてゐるものを組織するが、共通ならざるもの、彼に屬するもの、彼にのみ特有なるものを與へはしない。實證科學の職分は分析である。實證科學は表象をとほして働くのである。そして遂に事物の眞髓に這入つてゆくことはできない。物自體は不可解として認識の限界の彼方へと追ひやられねばならぬ。組織的哲學は論理と數學とをとほして分析し、組織する。マツハの「認識と誤謬」を讀む。科學的思考とは事實に對する思惟の適應、思惟に對する思惟の適應であると。科學は事物の周圍を廻轉し、現象の世界を彼の唯一の世界として、分析し、組織し、說明し、證明する。科學は一幅のパノラマである。一囘の光景は手にとるごとくに見える。そして遂に一つの眞實在にも觸れることはできないのである。

私はこゝに科學の誤謬を論んぜんとしてゐるのではない。たゞ論理學の教ゆるごとき事物、數學の假定するごとき事實が、われ〳〵の世界に實在するものでないことを指摘すれば充分なのである。「餘りに人間的な」の著者のいふてゐるごとくに、論理學の教ゆるごとき事物の均一、異つた時における同一事物の同一性若しくは數學の假定するごとき直線、眞實なる圓は、われ〳〵の現實世界には實在するものではないからである。科學はかくのごとき假定のうへに立つて、かくのごとき說明すべからざる假定のうへに自ら立ちながら、實證主義の全能を主張する。もろ〳〵の科學者はそのもろ〳〵の科學の部門について知識の山を築く。大地震が一度きたるや、多くの地震學者が材料の山を傾けて地震の性質、歴史、結果を說明すること甚だ詳らかである。そしてたゞそれだけである。それ以上の何ごとも求めずそれ以上の何ごとをも求めようとはしない。哲學と雖も、今や認識の辯護のほかに一歩も出ることはできないのである。かくのごとくにして知識の山、科學の建築が積み重ねられて、われわれはこの地上から遠ざかつた。自由精神が完全にまで發達して自由は極度にまで萎縮するに至つた。三度いふ、あゝ、靈魂の

貧しい哉。

　靈魂は今や飢餓に瀕してゐる、靈魂は超證明の世界に屬する。記號によて說明すべからざる世界に屬する。意識の世界ではない。無意識の世界である。知の世界ではない。無知の世界である。知不知、上不知、知病である。知は病である。靈性における病である。有限の生命をもつて無限の知識を追ふ。知識尙ほ到りえず、生命是れ奈何ともすべきなし。實在を捕えるの道は知ではない。知不知である。實在は論理ではない。記號ではない。數學のために實在が存在してゐるのではない。物體は論理のほかにある。二つの自然を區別せよ。ニユウトンの自然とゲエテの自然とを區別せよ。神は人間に二つの頭腦を與へた。二つの腦房を與へた。一つは科學的である。他は非科學的である。藝術の世界文化の世界は非科學的世界である。ゾラのいふごとくに、科學が幸福を約束したものでないといふことも事實であらう。けれどもそれが人間により少き悅びを與へる時に、幻想や、想像や、無意識やが、そのもとの領土を囘復することはニイチエの指摘してゐるごとくである。歐羅巴人は一度論理的批評的の學校に行つた。そこに知の冷やかな生活をつゞけてきた。「陽は已に　した。けれどもわれ〳〵の生活の天は尙ほそれによつて輝いてゐる。」冷やかなる知の生活に飽いて、知

の專制に對する抗議が、無知のどん底から起つてきたらねばならぬ。

　再びいふ、二つの自然を區別せよ。ニユウトンの自然の代りにゲエテの自然について思へ。ニユウトンにとつて自然は一つの因果律である。物自體ではなくて因果的推理の世界である。ゲエテにとつては、彼がシラアに語つたごとくに、自然は、法意深き觀察者には、如何なる秘密をも何處においても、裸體のまゝで道くものである。自然を外に見ることなくして、自らのうちに見るのである。こゝに不可測として畏敬するの自然は、彼自身のうちに再現する。「眼が日光をもつので無かつたなら、日をどうして見ることができよう。神の力がわれ等のうちになかつたなら、神聖なるものが如何にしてわれ等を悅ばせることができやう。」眼と太陽とは、ゲエテにとつては、等しく神的自然の兒である。Kinder göttlicher Natur である。ニユウトンの自然ではない。神的自然である。科學がニユウトン的自然の產物であるのに對し、藝術は、宗教は、神的自然の產物である。藝術はテムペラメントをとほして見た自然ではない。それは宗教のごとくに、神性をとほして見た神的自然である Schreibe mit Blut ―血をもつて書け。藝術は敍述ではない。因果律ではない。論理ではない。辯證法ではない。數學の符號では

ない。科學小說は藝術ではない。活動寫眞が藝術ではないごとくに科學小說なるものは藝術ではない。科學は藝術への道ではなくて藝術の破壞である。科學の世界に藝術はありえない。現象の世界を出でゝ、認識の彼方に自然の本質を探ぐり、物自體のうちに神秘の偉大なるに驚くことなくしては、宗教もなく藝術もない。宗教の衰へるところに藝術が始まると考へたニイチエは誤謬である。藝術の原理はまた宗教の原理である。神秘なく、奇蹟なく、宗教なく、傳說なく、不可思議なく、藝術はない。藝術家とは、若しそれが近代文明の道化者であるに止まつてはならないとしたら、小ざかしき知性を去つて非論理の世界、錯覺の世界、無意識の世界、マツハの所謂「誤謬」の世界、天地創造の神秘にと入つてゆかなくてはならぬ。パウル・エアンストのいふてゐるごとくに、科學的實在なるものは藝術のカテゴリイではない。宗教のカテイゴリイである。こゝに藝術に於ける自然とは科學的自然、論理的、記號的自然ではなくて、非論理的、超越的、超經驗的、神的自然である。死せる自然ではなくて生ける自然である。Sich, so ist Natur ein Buch lebendig: ——自然はこゝに生ける書物である。科學者の書物、文獻學者の死書ではなくて、生ける書物である。ウエルデンの書物である。こゝに自然とはウエルデンである。ゲヴオルデネではない。自然の核心は Menschen im Herzen である。自然と人と相通づる。自然と人と相通づることは神と人と相通づることである。神の有無を論ずる位ひ愚ろかなことはない。Gottheit ist wirksam im Lebendigen, aber nicht im Toten, ——神は生けるものには實在である。死せるものには非實在である。科學者にとつては、文獻學者にとつては、實證主義者にとつては、合理主義者にとつては、主知主義者にとつては、金錢學者にとつては、都會人にとつては、文明人にとつては、自由民にとつては、神の存在は荒唐無稽である。生けるもの、深きもの、直觀するもの、心靈、藝術家、宗教家にとつては、神のごとき確かなる實在はありえない。神的なるもののみ彼の心を打ち、彼の內部から、本能から、衝動から、醱酵しきたつて彼自身を揺り動かす力であるからである。ニユートンの自然は死せる自然である。藝術における自然は生ける自然である。宗敎における自然は生ける自然である。「靈の詩歌、信仰、自由、誠實、獻身は、ある意味において人類を作りあげた二大種族とともに世界に現はれたのである。その種族は印度歐羅巴種族とゼミチツクとである。印度歐羅巴種族の最初の宗教的直觀は、根本的に自然主義のものであつた。けれどもそれは深遠なる精神的自然主義であつた。人間によつて自然を繞ひ抱かれるもの

である。無限感の溢れた甘い詩歌であり、後にセエクスピア、ゲエテの表現する天才の原理となるものである。反省された宗教のそれではなくて、沈靜、溫情、想像のそれであつた。」——生ける自然は神の自然である。神である。それゆえにこそわれ等人間の血であり、生命である。神と人とに關係を有する限りどうして理解されないといふことがありえようといふたトルストイの言葉はこゝに何の障害もなく理解されることができるのである。知あるがためではない。無知なるがためである。ガリラヤの小さな町で生れた基督は、伯希來語の交つたシリヤ語を使つた人である。豚を飼ふこととわが兒に希臘の學問を教へるものを呪詛したパレスチイナの博士たちの間に育つた基督は、希臘文化については何ごとも知らなかつた。「ツアラツストラは學者の家を去つた。」「ツァラツストラは學者ではなかつた。」分析と計數とは私の性格に合はないといふたのはゲエテであつた。資本論を讀むことは自分にとつては頭痛であるといふたのはウヰリアム・モリスであつた。大なる誤謬から大なる眞理が生れる。コロンバスは誤謬から出發して亞米利加を發見した。知識から出發して眞理に到達せんとする位ひナイイヴな企てはない。天の父は賢きものには秘密を匿くし、小供にはそれを漏らす。神の王國は小供のものである。貧しきものが神の王國の第一列に坐すべし。末人等よ、知識人等よ、歴史と進化等とは汝等に先立つて神の國に入らん。基督は決して神に關する議論をしなかつた。再びルナンの言葉でいふ、煩瑣神學ほど福音書に遠いものはなかつたのである。小智から超克せよ。最大多數の幸福説から超克せよ。世間的榮譽よりは寧ろ牡牛の皮のうへに眠れ。嵐をもたらすの思想は靜かなる思想である。「鳩の足とともにきたる思想は世界を征服する」のである。

こゝに藝術の一歩がある。こゝに宗教の第一歩がある。そして文化の第一歩がある。文化の本質が宗教と藝術とであるといふことは私がしば〲くり返してきたことである。宗教と藝術とがなくては文化なるものはありえない。宗教と藝術とのなき時代は文化の時代ではない。知性の時代、合理主義、主知主義、科學、科學的哲學、機械化、都會、都會的世界觀、金錢的世界觀の時代は文化の時代ではあり能はぬ。しかも藝術の原理はまた宗教の原理である。學科が知と實證と系統と、論理と數學の世界に屬するに對して、宗教と藝術とは、ともに非論理、超證明、先驗、神秘、奇蹟、衝動、神的自然、神の國、心靈の王國に屬する。それゆえに藝術の原理はまた宗教の原理だといふのである。凡ての偉大なる藝術は宗教的である。宗教的奇異、神的驚異、靈性の飛躍なくしては、藝術的跳躍はありえないの

である。「魂のこもつた音樂は、新らしく目ざめた、衷心からの深く動いた精神に音響を與へたところのパレスツウリイナによつて、トウリエントの宗教會議の後に同復された加特力主義のうちに起つたのである。……あの深く宗教的な情操なしには、最も内的に動かされたる心情の響きなしには、享樂は學者的なもの、もしくは歌劇的なものに止つたであらう。音樂は藝術の世界における反文藝復興である。」音樂ばかりではない。建築術は、中世紀においてその頂點に達した建築術は宗教と藝術との完全なる一致であつた。表現派の新藝術運動は、またニューウトンの自然に對してゲエテの自然を囘復せんとしつゝある。精神に對して心靈を、機械に對して人間を、靜止に對して運動を要求して立つた。こゝに藝術における創造性のよりもどしがあるとともに、藝術における宗教的意義が存在するのである。こゝに、文化の本質は宗教藝術とであるといふよりは、文化の本質は宗教である。シペングラアの指摘してゐるごとくに文化の本質は宗教であるといはなくてはならぬ。

五

文明と文化とを區別せよ。文化をもつて文明における一段階だと考へる位ひ大いなる誤謬はない。文明があつて文化があるのではない。文明があつて文化が終るのである。Jede Kultur hat ihre eigne Zivilisation——文化が文明をもつのである。文明の後に文化がきたのではない。文化の後に文明が續いたのである。文化が亡びんとするところに文明が續いたのである Die Zivilisation ist das unausweichliche Schicksal einer Kultur——文明とは文化の發達ではない。その避くべからざる運命である。文明は始めではない。終りである。文化の終りである。

文明は知の世界である。文化は靈の世界である。前者は科學の世界である。後者は宗教の世界である。文化の本質が Religion であるのに對し、文明の本質は Irreligion である。文明と文化とは相助ける或るものではなく相反撥する或るものである。文明の時代は文化の時代ではない。文化の時代は文明の時代ではない。希臘が靈の時代、ローマが知の時代であるとはシペングラアの說くところである。古代における文化から文明への轉化は四世紀において、西洋文化が文明にと轉化したのは第十九世紀であつたとは、これまたシペングラアの說くところである。私はシペングラアの說を一々とるものではもとよりない。けれども文明と文化との關係について彼のごとくに大膽に彼のごとくに明確に彼のごとくに歷史的に、彼のごとくに豫言者的に論んじたものは他にこれあるを知らない。

今日は、ロオマのそれのごとくに、文明の時代である。文化が終りを告げて、文明が勝ち誇つてゐる時代である。フロオレンス、ニユウレンベルク、サラマンカ、ブリユツケ、プラアグの文化都市が伯林の、倫敦の、紐育の、巴里の世界都市の片隅にうずくまつてゐる時代である。今日は世界都市の時代である。アレキサンドリアとロオマとが倫敦、巴里、紐育、伯林、東京の世界都市として再びこの地上にくり返へされたのである。世界歴史は、ペネロオペのやうに、夜分その織物を断ちきつた後で、再びその織物を織り始めたのである。その織物は既に完成の域に達したのである Werden の時代が去つて Gewordene の時代がきたのである。世界都市が興隆して文化都市が滅んだのである。文明が完成して文化が滅んだのである。現代はかくして文明の時代、世界都市の時代なのである。

ペネロオペが再びその織り物を断ちきつた時に、時代は新らしい轉化をもちきたすであらう。そこに文化の時代がつゞくべきである。經濟的、金錢的、知的、大社會的、中央集權的世界都市の織り物が再び斷ちきられた時に、文化が、自由が、人間が、神的自然としてこの地上に再びもちきたされるであらう。そこに人間の再發見がある。心靈の再生がある。生命がある。無價値から價値への轉化がある。無價値なる價値哲學から價値ある目然への轉化がある。私はこの意味において自然に還れといふのである。自然に價値を與へよ。人間の價値は自然に價値を與へたるとにある。自然を無價値なる世界に墮せしめる世界はまた等しく人間を無價値の世界に墮せしめるものであるからである。

自力復興

岡田信一郎

其の日二平方里四分の一の面積を蔽ふ三十萬戸の家を焼いた火焔は、天に柱して結んで雲となつた。あの赤黒い妖魔のやう

な入道雲の印象は、幼兒の胸からも生ひ先永い一生消す事の出來ない脅威であらう。あの火勢に蒼天も焦がされてか、其の頃は天候も平衡を失した。火に燒かれで僅に身を以て免れ得た數十萬の罹災者は風や雨に又惱まされた。いつもならば天高馬肥の好季節も、不安と戰慄の中にあはたゞしくいつの間にか過ぎ去つて、今は秩父、筑波の風が漸く身にせまつて來た。初冬の月は水霜の置く、バラックの亞鉛屋根を照らして蒼白い。夜は靜かだが、バラックの夜寒に夢も結ばぬ人達の胸中は靜かでもあるまい。灰土を蹴立てゝあはたゞしく走る自動車の窓から見たらば、帝都の復興は着々進行しつゝあると安心するかも知れないが、東京が亞鉛屋根で一ぱいになつたとて夫が復興でもあるまい。困難は是れからだ。

大災禍の後救護事務局、震災善後會、帝都復興審議會、帝都復興院、復興計議會、日はく何、日はく何と、數多のたよりになりそうな組織がいくつもく出來上つた。併し其後九旬に及ぶ今日、期待に副ふ一事も成就しない。文明の今日幸に國の內外からの救護も行き屆いて、遍かに曠野に滿つるの慘狀も無いが、失業者は灰都に滿ちて、生產の業全く途絕すと言つても誇言でもあるまい。商業も飲食と、日用の急を要する小賣の他は未だ全然恢復されない。斯くして人心不安に疲れ、絕望に倦み、自暴自棄に陷る事があつたら、復興の阻害之より恐ろしきものはあるまい。私は大地震に叩き伏せられ、大火事に燒け出された滿都の人達が猛然として再び起ち上つた勇氣には、感激のあまり淚ぐましくも覺えた。無遠慮に驅け廻る自動車の灰烟の後から、灰燼を踏んで復興へと急ぐ健氣な市民を見た時には極度の興奮をさえ覺えた。此の市民再起の力を空しく堰き止めて、不安に停滯せしむる事は帝都復興の上に大なる阻害である。

想ふに東京市の復興は市民彼等自身の手によつて成し遂げられねばならない。自ら復興によらずして生命ある新都市を建つる事が出來得やうか。今の帝都復興の災は、復興院が復興の事總て其手で爲し遂げ得らるゝと自ら過信する事と、市民が復興院が復興の事を萬事其手で成就し與れると妄信する事とではあるまいか。其一は甚だしき僭越である。其二は甚だしき怠慢である。復興の事業は市民自らの手で成し遂げられねばならない。たゞ國は之を援助するに止る可きである。今焦土の跡片付に罹災の失業者を急拵えの勞働者として使つて居るが、其能率は少しも上らないとて非難されて居る。此れは彼等が勞働に熟さないからでもあるが、一は其精神が無いからで、若し假に此等の人々が自發的に、彼等自身の家を建てる場所を片付るとしたら。

其働きに熱も出やう、態度も精緻になるだらう。作業の能率も著しく増進するだらう。彼等自身も亦其氣力で甦る事が出來る。自力復興の要領は此處にあるのでは無からうか。

倒れた東京は其自身起き上る可きである。東京は都市全體としての自力で、及其市民個々としての自力で起ち上らねばならない。國はたゞ其に援助の手を差しのべればよい。然るに今の現狀は起さんとする東京を、起き上る可き場所なしとして強いて寢かして置くが如き狀態ではあるまいか。東京は自身起き上る勇氣もある。氣力もある、たゞ倒れた傷は大きい、起上るには援助の手が差しのべられねばならないのは勿論である。

今日（十一月廿五日）の新聞紙で見れば、復興審議會では種々な根本的の異論があるやうである。復興案の確立も茲に再び停滯を見るのであらう。斯くして復興の氣力は空しく費消される。のみならず時としては惡化する處もあらう。復興の災は其の方策の混沌たるより大なるは無い。今や罹災市民と言はず全國國民其の惑ふ所を知らない。復興難と云はず國難と言はねばなるまい。

精神復興

帝都の復興は單に一地方としての東京市の復興に止まらない。其は同時　國家の復興である。茲に重大なる意義がある。又國が大に力を傾さねばならぬ理由が存する。國として日本は近年著しく國力の増進を爲した。世界　有數なる因子になつた。別して歐洲大戰爭に際して、國富を増し國力を涵養する事が出來たが、一面に於て國民の精神は陵遲する處があつた。之は識者の憂ふる處であり、又私に警戒する所でもあつた。茲に此度の大震災に遭遇して、人心一度に緊張した。此機に乘じて一方國都の復興も成就し、國家の紀綱を張る事が出來たら、其は國家の大なる幸福である。地震は天譴でなくて天佑である。爲政者は此點で充分の努力を爲さねばならない。私達は不合理な、不眞面目な、非人道的な總てを惡み惧れるれど、天譴を信ずるわけには行かない。地震と云ふ偶然の出來事で、自然の威力の今更に強大な事を知つて、人爲的に放漫であつた過去を悔い、新らしい建設に向ふ勇氣を出しさへすればよいのである。又放漫な、頹廢的な世道人心は、地震の有無に關らず革正さる可きものである。たゞ茲に其の革正に都合のよい時機を地震によつて得た事を幸とし、此機を利用せねばならない。

大戰後歐洲の回復、復興の鈍いのは戰禍の莫大であつたので、疲弊が甚しいためでもあるが、一は各國各々利を爭つて、單に經濟復興や、外形の恢復に走り、精神氣力の復興を忘れ、特に

相互扶助、共立共榮の理法を捨てたからではあるまいか。獨逸を斃し得たら佛は續て自ら疲弊し終るであらう。獨佛共斃の後は英と雖衰頽は免れまい。米國も亦遂に其の災を受けないわけには行くまい。日本には震火の災害が突如來襲した。而して其の慘害の大なる事は、歐洲戰後の被害にも比す可きものがある。然し數年に亘つての出來事ではないだけに、心の奥深く喰ひ込んだ疲弊はない。慢性の病氣で無く、急性であるため或は救治に都合がよいかも知れない。たゞ玆に惧れるのは、復興が遲るれば遲れる程、日一日と不安は心の奥に喰ひ込んで行く事である。之れ復興の災で、精神復興を第一とする論の起るのは寔に當然の事である。

私は襲に本誌十月號の帝都再建論で、帝都再建の根本を爲すものは一に市民の氣魄である。二に互助共存の精神であると言つたが、今日やはり玆に其を繰り返す。今日の社會に於て互助の念なくして何事か成就しやう。特に都市は此の精神の上に築かれる、都市の自力とは要するに市民の共存共榮の念に基く力を云ふので、之れが今の復興には最も重要な精神である。

大正十二年十一月十日再び聖詔を煥發され國民精神の振作更張を諭された。之を拜誦して聖德の大なるに恐悚すると同時に、有司の聖旨を誤らん事を惧れる。復興は謂はば新都の建設である。其の費額は國家民力に相應して先後緩急を加減せねばならぬにしても、其の理想は百年の發展を考慮せねばならない。濫りに恭儉に名を借りて、因循姑息して退嬰を事とし、國運振興の妨ともなつたならば、夫は決して聖旨ではあるまい。復興には創造の强い精神が互助共存の理によつて積極的に活躍しなければならない。

復興院

惜しい哉帝都復興院の組織された事は帝都復興の大なる妨害であつた。特に大仕掛の組織で大々的の宣傳を爲した事は、一層此の災を大にしたのではあるまいか。私は復興は市民の自力で成立つのを本則と考へる。然るに復興院が萬事を引き受けたやうな顏をして、何でもやつてやると言ふやうな感を與へた事はどれ程依賴心を增し、どれ程自力復興の氣勢を殺いだか。そのくせ復興院は實は復興の一部に過ぎない都市計畫の事業を計畫し其一部を施工するに過ぎないのである。然るに無暗に組織を大きくして、復興の萬事其手裡から出づとの妄信を抱かせた點で思はぬ阻害をした事になる。復興院のする仕事は勿論復興の中心となる重要な事項であつて、是非とも爲さねばならない仕事ではある。併し都市計畫に關しては內務省に其の局があり、

又復興物資に關しては農商務省に其の局課がある。夫れ〳〵の局課を運用する事によつて當然充分の成蹟は上る譯である。たゞ最も重要なのは全體の統一綜括を計る事であるが、其には相當の機關を置いて處理する事が出來やう。然るを參議會、復興院、復興評議會と尨大な組織を起して、朝野のえらさうな人を網羅した。かくては世間が何かして呉れる事と依賴心を起すのは當然である。無用な大組織によつて國帑を浪費する事も、今の國費多端の折から惜しむ可き事だが、夫よりも折角緊張した民心に油斷を與へ、自力復興の熱心をさました事に復興院の第一の罪過がある。

其の第二の罪過は荒怠緩漫にある。帝都復興の計畫案は決して簡單な事ではあるまいが、東京に於ける都市計畫の考察は既に多年の事で、決して震災によつて突如惹き起された事項ではない。都市計畫法が施行されて既に三年になる。其間都市計畫局の吏員は、將東京の改造計畫に對して當然調査と考慮を從した事と思ふ。然らば當然其の改造計畫の據て基く理想案が出來て居る筈である。此の根本案が既に出來て居るならば、突然此度のやうた災害が起つたとしても急に計畫を立てる事は左したる難事でもあるまい。財政狀態に適應して立案する事は素より困難ではあるが、基礎案が定まつて居れば、夫れから鹽梅する事は長時日を要しもしまい。復興院の總裁は、曾て東京市長として在職中に、其科學的な嗜好から充分の調査を爲して、東京市都市計畫の基礎案は、此の方面でも定められた筈である。既に研鑽のあつた所に今度の災害故、得たりかしこしと、急遽にも立案成就が見らる可き筈である、然るに荏苒今日に及んで未だ市民は嚮ふ所を指示されない。

近日（十一月十六日）復興評議會に附議された計畫案を見ると、幾の大言壯語にも似ず甚だ貧弱な間に合せ案に過ぎない。夫は帝都百年の理想にも適はず、又焦眉の急を救ふにも役立たない。自信のない杜撰な草案である。確たる理想もなく、復興の精神に燃えない人達の机上の立案が、かくなるのは當然かも知れないが、之に安心して今迄傍觀した市民の失望は今更多大である。復興の幸先を挫いた咎は復興院が受けねばなるまい。

蓋し復興の計畫は自ら起ち上る意氣と、自分自身の都を創設せんとする努力からのみ始めて生命あるものが生れ得る。吏僚や技師は、其上長の命により、財政に適應して幾つでも計畫案を立て得やう、併し國務大臣として國家財政の狀態を知り、且都市に關する諸般に通じた復興院總裁の、自信ある復興計畫案は唯一無二である可きではないか。復興院の復興計畫の動する のは、眞摯と、熱誠と、努力と、犧牲と、別して自信を缺くか

らではあるまいか。

强い國民、弱い市民。

想ふに市民は、日本國民としては强い人達である、然し東京市民として果して强い市民であらうか。私は强い國民ではあるが、實は弱い市民であるのでは無いかと陰に危虞するのである。歴史をひもどく迄もなく、萬世一系の天皇を戴いて、我國史は一度も汚された事はなかつた。國家の危難に瀕すると、いつでも國民は敢然として立上り强固な結束をして、國家を盤石の安きに置いた。元寇の役でも、朝鮮の役でも、明治維新に際してでも、近くは日清戰爭、日露戰爭でも、熱烈な愛國心と强固な擧國一致の團結とで、他國民の了解し能はざる不思議な成蹟を擧げるのである。理解し得ざる他の民族にとつては、日本魂は神秘的な不思議な心の働である。此の國民團結の强さは過去に於て屢々立證されたけれど市民として同じく此の精進の勇猛心が發揮されるであらうか。幸か不幸か過去に於てはかゝる發露を見るの機會が無かつた。江戸人は贅六と言つて大阪人を蔑視したが、寧ろ大阪の方が商工の都市として自ら發達したゞけに、都市としての團結は强固であつた。多少の自治も古くから認められた。江戸は治者の統治に满足して音なしく發達した平穏の町であつた。與へられた都であつて、自ら造り上げた都市ではない。市民も市民として大なる試練の前に立つた事は無かつた。元祿の地震もあつた。明暦の大火もあつた。安政の震火もあつた。而して其等の被害の總額は今回のと比べて、勿論些少ではあるが、當時の江戸と對比して其の慘害は莫大であつた。けれども其復舊は幕府の手厚き補助によつて、比較的安穏に成就して、市民は大なる困難と戰ふ事なく恢復した。江戸の市民は常に公方樣の力のもとに助成されて、勞苦たくして都市は次第に發達した。其間失政もあつて多少の苦狀も出た事であらう。然し市民は市難に遭遇して、團結一致之れが解決を自ら果したと云ふやうな力量を示した事は無かつた。强い國民も市民としては溫柔であつた。明治維新の際幕府の倒潰に遇つた時でも、西郷南洲と勝海舟との對決で、江戸は兵燹も免れたし、非常な困難も嘗めずに濟んだ。此時でさえ市民は市難に處するの覺悟を自覺しないで濟んだ。國民として强い日本人も、江戸人として若くは東京人として强い意氣を示した事を見ないので、私かに弱い市民であるのではないかと危ぶむのである。

歴史を讀で中古歐洲の都市が生ひ立つ時の苦難の狀態と、熱烈な愛都の精神の發露を見て、彼等の都市の發展の偶然でない事を知るのである。中古の市民が熱烈な辛棒强い心で、其の榮

慢な領主達から機會ある毎に種々のチャーターを獲得する意氣、而して其或るものは自由市にまで發達して、眞に自分達の都市として造り上げた努力は、互助共存の精神を基とした眞成の自治の心の現はれである。其のためには苦しい鬪爭もあつた、貴き犠牲者も出た。彼等は決して平穩に斯く發達したのでは無かつた。名匠ロダンの傑作によつて、其の名擧を再び新にしたカレーの市民達の貴き話なども、其のほんの一例に過ぎない。歴史を繙く迄もなく、佛蘭西の町々の中央に聳ゆる本寺の大塔や、白耳義の町々の市廳舍の高塔は、市民の此の精神の生きた記錄である。斯くして自ら生ひ立つた都市の力は寔に偉大である。其處には力強い血が流れて居る、彼等は強い市民である、彼等の本寺は眞に偉大な建築である。然し之を造つた彼等は決して富んでは居なかつた。否貧しい中古の市民に過ぎない、然も彼等は自分で之を成就した。私は此處に學ぶべき多くを見出したい。今東京の市民は決して其貧しきを恥ぢなくてもよい。たゞ其弱き市民たるを恥ぢなければなるまい。江戸は、東京は大きい町であつた。然し決して偉きい都市ではなかつた。私は強い國民を誇とするが弱い市民の手による復興の完成を私かに危ぶむのである。

自治の目覺

弱い市民はたゞ其の自治精神を振興する事によつてのみ強く成り得るのである。今度の震火災で、舊東京のあらゆる糊塗、模擬、彌縫、僞瞞等の弱點が赤裸々にさらけ出された。其の中で最も慘ましい。而して最も戒心を要する病弊は都市成立の基本精神である互助共存の念の缺乏であつた。言ふ迄もなく都市生活の根蔕は共存共榮の理法の下に相互扶助の精神から成り立つ、自治の精神は即夫れだ。舊東京に果して自治があつたか、市民は果して自治の精神を持つて居たか。外形は自治として立派な市廳舍もあり、高給の吏員も居た、市會議員も區會議員も撰出されて自治の組織を備えて居た。然し其の吏員の多くは官吏の心で、無關心な市民は自治廳と官廳とを同一に考へて居た。市會議員も區會議員も戸別訪問のお辭儀のうまいものが撰出されて居た、東京市民の內果して幾人が自分達のものとして此の都市を眞劍に考へて居たであらうか。市民は自分自身が私有する家や庭を立派にする事には骨折つたが、共同生活の本體たる自分達の東京を完全にする事が、自分達の生活を圓滿にし生命の完全を保護する所以である事を理解しなかつた。斯くして自治は名のみであつて實が擧らなかつた。弊のみであつて其

利は全く享けられなかつた。文明の都市として具備しなければならない色々の施設や機關は全く不備であつた。東京は村の集合で、都市ではないとの或米人の冷評は單に外觀だけの事を意味したのだらうが、内部から見れば、東京は事實外形ばかりでなく其内實に於ても都市の資格はなかつた。東京が眞實の意味で文明の都市であつたならば、之れ程の地震に遇つたとて之れだけ大きな慘害は受けなかつた筈だ。第一あんな大火にはならない筈だ。大きな橋等がどん〳〵燒け落ちるなど〻云ふ事もあるまい。土地臺帳が燒けて仕舞ふとか、郵便貯金の元簿が燒けて仕舞ふとか云ふやうな馬鹿な事があるものではない。曰く何、曰く何と此等の損害の大部分は輕減されるであらう。此んな過去つた事を後からくど〳〵云つても無駄の事だと嗤ふかも知れないが、私が斯る事を並べ立てるのは、要するに今度の震火災は天災に基くが、慘害は天災でなく、市民放漫の自ら招いだ結果である事を自覺して、新東京に於ては此の過を再び繰り返さないためである。且は此精神によつて新東京は彌々發展して所謂燒け肥りの實を擧げ得ん事を庶幾すればである。其にも自治を自覺して今迄の無關心な態度を改めねばならない。

東京は古來與へられたる都市で、自ら造り上げた都市ではなかつた。家康開府以前の江戸は都市とも言はれない。太田道灌の府城こそあれ村に過ぎなかつた、天正十八年八月徳川家康が此處に城を定め府を開いて、關東八州を領してから、始めて都市の基が出來た。而して徳川氏が天下の權を握るに及んで江戸の資格は、天下の都城として急激に高まつた。併し其の發展も自力の發展ではなく、幕府の大きな援助のもとに苦勞なく、肥え太つたに過ぎない。立志編中の苦勞人として發展したのでなく、富豪の息子のやうに肥えたのである。三百年の徳川泰平の文化、五十年の明治聖代の文化に浴して、江戸は東京となつたけれど、市民は遂に自治に目醒めなかつた。互助共榮の自力によつて自ら發展するの傳統もなく、又從つて其の自信もない。されぱこそ意氣地も無い。

復興院が成立して、復興の事總てを企畫せんとした時に、東京市は其の爲す可き事業を奪はれながら、反對の聲も擧げ得ず反つて喜んで萬事を國家の手に委ねたかに見えた。其の蹂躙されたる自治權は如何に!! 其の失はれたる面目は如何に!! 腑甲斐なき東京市を憤らずには居られない。市當局者の頭には、此場合復興の費用の大部分は國家が出して呉れるであらう。其故に國家に委ねて傍觀しやうと云ふやうな卑屈な考があつたのでは無からうか。國の力元より借りねばなるまい。併し自分達の都市は自分達の手で復興すべきで、補助は國から受けるとし

ても主衍者は市自らであらねばならない。果然復興院の復興案は到底市民の滿足の出來ない貧弱な草案である。然も復興審議會は猶それを復活に止めやうと言つて居るではないか。與へらるゝを待つ卑屈な心の酬はあまりにみじめであつた。今や東京市自ら其の復興案を立て、自力で復興を計る可きである。之には遲れ馳せながら自治の精神を自覺するによる他、道はない。

自治自覺の問題は東京市に不正な疑獄事件の度々起る毎に、市會議員や、區會議員の選擧がある度毎に、新聞や雜誌で盛に論議されたけれど、市民は無關心で他人の事と考へて居た。今や彼自らの居所は全く崩れ、全く燒れ終つたのだ。而して其復興を計らなければ彼等の都は衰微して、彼等の生存は絕たれる事になる。夫れでも自治の自覺が起らないのであらうか。今は自治を自覺して互助共榮の精神で自力で自分達の東京を建てる事をはかるより他に途が無いでは無いか。

區劃整理

市民自力の復興の一端として、其體的の問題としては土地區劃整理が急務である。都市計畫の事業の其の何れもが都市復興には必要な事項ではあるが、緊急を要するものと、除々に資金に順應して施行せられて然る可きものとがある。道路の確定と區劃整理とは第一着に施行されねばならない。而して之が自力復興の最も重大な因子であると考へられる。舊東京は其の外形は近時多少整頓しかゝつて來たけれど、其の裏町は實に甚だ猥雜な狀態にあつた。日本橋、京橋等の中心地域でも、一地劃の外廻りだけは立派な商店が立ち、並んで、時としては壯觀を呈して居ても、一旦其の路地を這入つた裏側に穢陋なひどい狀態であつた。三四尺巾の路地の中に、平家建の小さい家が雜然と建つて日光も當らず、風も通さず、其非衞生的な狀態は、本所深川の長屋と甲乙のないやうな場合まであつた。行き止りの路地が多く、中の人達に非常時の避難には餘程の危難があつた事とも思はれる。斯う云ふ部分は整然としないから、土地利用上の損害は莫大なもので、地價の高い中心地でありながら、其高價な土地を充分利用する事も出來ず、此點でも不經濟を極であつた。斯うした衞生的にも、利用の上からも、又安全の上からも始末の惡るい土地は、整然と整理されて充分に利用されねばならないのは論を俟ないが、此の整理は平素にあつては耕地整理のやうに簡單には片付かない。近年新宿の火災、淺草の火災などの大火の場合には、當局は色々な非難を浴びながら、建築線を設定して多少はかゝる缺點を除去する事に苦心をした。今の東京の燒野原は、地區の整理のやうなかゝる根本的な施設

を斷行するには一番都合がよい。今此の機會を逸したら、東京の都市としての大疾患は永久に除く事が出來なくなる。此の區劃整理の問題は地主（土地所有者及其に關する特殊の權利所有者）の自力によつて改良されねばならない。而して此の區劃整理を徹底的に行ふ事によつて、其の地區は利用上非常に都合よくなるが故に、地主は自ら利する事が多大である。從つて地主達は進んで自力で此の整理改良を企てるがよい。

政府は復興法の中に（十一月十八日朝日新聞所載帝都復興法案第十五條乃至第二十三條）土地區劃整理に關する規定を置いて、大體耕地整理法に準據して區劃整理を行はしめんとして居る。勿論其の目的は其宅地の利用を增進する事が主眼であつて之には道路新設は直接目的ではない。都市に於ける區劃整理は其土地の利用を增進する事從つて地價の增す事も多大であるから、耕地整理に比して、其成績は一層良好であつて、此の精神さへ了解熟知したならば、如何なる地主と雖進んで組合を組織して、其進行に骨折るであらう。耕地整理も現在大體成績良好に實施されつゝあるが、所有地の位置の問題の他に、地味の良否の問題、灌漑に關する問題が含まれる故、多少の紛糾もあるやに聞いた。都市の區劃整理では此の困難はない。唯小さい土地や込入つた不整形の敷地が混沌と併存するが故に、其整理案の作成は耕地整理に比して、多大の困難を伴ふであらう。然し其實行は耕地整理に比して案外困難でもあるまい。要は斷行の決心だけである。區劃整理によつて偏狹な路地は適當な小道路とならう、歪形な敷地は矩形の具合よき形にならう、何の敷地も改善されて、衞生狀態も改まり、保安にも都合よく、舊東京に見たやうな汚穢な、卑猥な、都市の疾患は全く排除される事が出來る。又道路小道路に面して交通の利便も從し、土地利用の增進は多大である。

區劃整理の斷行によつて、併せて道路の問題が解決さるゝならば、之れこそ自力復興の根幹である。復興院の計畫、豫算に見ると、其道路費は四億萬圓餘を計上して居る、其の大部分は恐らくは道路敷地の買收の費用であらう。今區劃整理に際し て此等の道路敷地の全部又は一部が、無償で提供されたとしたら、夫れによつて生じた餘剩の費額は有効な支途によつて復興を促進する事が出來やう。政府の復興法案中の土地區劃整理に關する規定では、除外の場合を別にして多く耕地整理法を準用して居る。耕地整理法では其第十一條で「國有ニ屬スル道路、堤塘、溝渠、溜池等ノ全部又ハ一部ヲ廢止シタルニヨリ不用ニ歸シタル土地ハ無償ニテ、之ヲ整理施行地ノ所有者ニ交附ス。耕地整理施行ニ依リ開設シタル道路、堤塘、溝渠、溜池等ニシテ

前項廢止シタルモノニ代ルベキモノハ無償ニテ國有地ニ編入ス」とある。之れに依れば道路其他をこめて全體として區劃整理をやれば、夫れで出來た新道は國道として返還されて、道路敷地は無償で提供された事になる。けれども復興院では私有地をかくして擴大された道路敷地として無償で提供させる考ではないらしい。併し私は東京の自力復興の爲に、是非とも此の提供を見たいと考へて居る。又實際地主達も充分な理解を持ち、明敏な打算をしたら必ずや此の提供を否むものではなからうと信じて居る。土地區劃整理に關する無償提供の準據としては、四割迄を制限とする獨逸のアヂケス氏法が屢々引例される。四割の土地は高價な地價を有する商業地域にあつては莫大に過ぎる。且又、東京市内の道路改修の爲としては、必しも夫れだけを要さない。アヂケス案は新住宅地の區劃を新に設定するために、市郊外の未建築地に適用されるもので、今事狀を別にする東京で其の割合に準ずるわけにも行かないし又其必要もない。然し其精神は準據して然る可きである。

今回の燒失區域の面積は東京市の調査では一千一百八十五萬坪と報告されて居る。燒失區域の道路面積は一百三十五萬六千坪で、燒失區域の内にも私有地以外のものもあるが、總てを包含するとして、道路敷地は現在に倍加すると見て、一千一百八十五萬坪の約一割二分弱を要する。道路のため又路地が新に必要な土地が設置さるゝとして二百萬坪が無償で提供さるゝとしたならば土地買收に要する、三億に累む莫大の費用が節約さるゝ事が出來る。而して此の節約した費用は多少は區劃整理費（復興院豫算八、七五萬圓）の足し前にも使用さるゝだらうが、大部分は其土地の價値を高め得る施設に轉用さる可きが至當である。地主の利益から見ても、火事にはやかれ、震災にあつて全財産を無くした其上に、無償で二割弱の土地を提供させらるゝ事は泣き面に蜂以上の苦痛とも考へられやうが、之は甚しい速斷であつて、其土地は利用の價値を增して從來のやうに役にも立たぬ路地裏もなくなり、又道路其他の關係が著しく改善されるから面積は減少しても實質は良好になる。從つて土地價格も非常に昇るわけである。即ち土地百坪と新しい良好な敷地八十坪と交換するの理となるので、實利から見ても、打算から判用しても地主に損害はない。

且又道路敷地を買上げ收用をする場合を想像すると、道路敷地に當る沿道地主は、其貴重なる土地を僅かの金で否應なしに收用される事になる。幸に大なる土地を有するものは、殘餘も役に立つからよいが、小なる土地で大部分が取られるとすると、補償の金を貰つたとて有難くはない。又地帶收用を行るとして

も、被收用者は非常な不幸に遇つて迷惑千萬である。之に反し沿道でない爾餘の地主達は道路の改正によつて何の犠牲もなく非常に有利になる。區劃整理と聯關した無償提供では偶然の幸不幸や不公平は起らない事になる、從つて地主にもより滿足さるべき施設である。新聞紙上に（十一月二十二日朝日新聞）傳へられた復興評議會の記事を見ると大橋新太郎氏が「土地の一割を無償提供して、道路の用地費を節し、之を建築補助に當てるがよい」と言つて居る。氏のやうな東京中心地區の實業家で地主である人が、此の意見を抱く事を知つて甚だ意を強くする事を得た。同氏の立場として、市民としての公憤もあるだらうが、實利と打算は恐らくは忘れられては居まい。總ての地主諸君は之れに傾聽して間違はないだらう。市民の自力の斯る現れによつて、復興の難事は著しく輕減されやう。かゝる難事業も一に地主の決意によるので、地主は自ら此の決意を示せば、其成就は容易い事である。勿論數多の地主中に異存者のある事は察するに難くはない。大體の意向に從つて政府は區劃整理を強制斷行すればよい。復興法案の第十七條にある土地所有者總數の二分の一以上にして云々の項を推し廣めて、全部として計畫地地主二分の一以上を取纏めて、其希望として具體化せん事を切望する。私は此一事は自力復興の最も重要にして、然かも最も行ひ易き事柄であると信ずるので、其の遂行を極力主張したい。復興院の復興計畫案の貧弱なるに驚いた今日、いくら雅量ある市民でも、もう復興院に萬事を委ねて置いて晏如たる事は出來なからう。今や市民はかゝる自力で推し進む他、途はあるまい。

復興審議會の老人達の中には、所有權の尊重を說いて、土地收用等にも反對の意見を有する人があると、新聞は傳へて居る。法律を文字通りに死解する固陋な意見からは、かゝる解釋も成り立つかも知れない。然し市民多數の自力により、自ら之を望めば此問題は自然に解決される。且今の非常の場合非常の解決處理を爲すべき事は、大詔の諭示し給ふ所である。

耐火建築助成

嘗て（中央公論十月號）私は復興策の要綱として小東京の完成を唱へた。火に懲り、地震に怯えた吾々は、二度と燃える都を造りたくはない。新都の主要部は必ず耐火でなければならない。然し市民は此大災害のため、其資產の大部分を燃燼してバラツク建築を建てる事すら容易でない今日、鐵筋コンクリートの耐震耐火建築を要求したとしても、到底不可能に近い。資力の無くなつた者に反つて災前より高價な建築を強ひる事になる。普通で

は出來難い事である。從つて建築資金給與の問題が起る。

かゝる際に都市の建築にある制限を置く以上は、之を助成すべき事は當然である。復興の爲建築を建てるものには、或る年限（復興期間）を限り、其建築の幾分を給與して助成する事が必要である。此金額の程度は攻究を要する事がらで、少に失すれば助成の効なく、大ならんとすれば國家は負担に堪ゆ可くもないであらう。這の區劃整理に基き無償提供によつて節せらる可き道路敷地買收費が、此處に充てらるゝが至當であらう。かくして其等の土地は優秀な耐火構造の建築によつて土地の利用も充分にされ、地價も從つて増進して、地主の利益とも成り得るので、此の節約さるる資金は、此の建築助成に使用されるが最も正當であり、且又最も適當な用途である。

建築界の先覺横河博士は「帝都復興建築事業遂行に就きて」の論文中に耐火耐震建築の補給金額に關して「余が推算によるに補給年限を五ケ年とし其期間に建築せらる可き、否實現を望むものを延坪三百萬坪と見る。之は東京市燒失市街の主要部分を平均二階建の耐震耐火構造となすこととなり、之れに補給金額を一坪五拾圓とするときは合計一億五千萬圓となる。即一ケ年三千萬圓宛を復興事業費中に計上することとなり、之れ實際に不可能な數字にあらざる可し、又有効なる補給をせんには一坪五拾圓位は必要なり。一坪當工費の六分の一乃至八分の一を補給するの譯となる」云々記して居る。私も此の一坪五十圓說に加擔する。鐵筋コンクリート建築の工費は木造の約五割増とされてゐる。一坪二百圓の木造建築に對して、三百圓の鐵筋コンクリート造となる。一坪一百圓の増加額を折半した、這の補給額、恰度適當と考へられる。道路敷地の節約額は此の資金として充分過ぎる位である。斯くして建たられた耐火の建物は相當の永久性を有するが故に、危險なる木造家屋とは異り、之を擔保して銀行其他から資金の融通を受け、産業商業の資金に運轉する事も出來やう。而らば或は重ねて復興に資する事ともなるであらう。

建築助成の他の一の然かも重要なる方策は云ふまでもなく建築會社の設立である。此會社に關しては復興院に於ても民間に於ても既に研究を進めて居り、或は半官半民の經營を可とし或は民營をより可しとして居る。何れにしても之により建築希望者で然かも其の資の乏しきものに對し、代つて其所要の家屋を建築し、之を月賦若しくは年賦で讓渡する事が出來るにより市民は一時に多大の建築資金を準備するを要さない事になり、復興の仕事は容易になる。市民の一部が震災によりて疲弊しつくした今日、かゝる助成法は是非共必要である。而して之によ

りて一日も早く復興しなければ東京は遂に破滅を見る他ない。斯かる會社を設立するが爲には、政府は此會社の利益の或る程度を保證せねばなるまい。此會社の利益配當率の何分を補給する事も起つて來るかも知れない。此の資金として彼の道路敷地費節約の一部が充分に役立ち得ると考へられる。此の會社の資本金としては或は割増付小額貯蓄債券によつて資金を集むるを可とするとか、或は外債によるを可とするとか諸種の研究があるやうだが、財政經濟の事に精しからざる私には其何れが勝るかを論ずる事は出來ないが、何れにもせよ、此の建築會社の資金としては、國家並に市民の有力なるもの、震火災の痛手に屈せない人達が、自力の發奮で充分に出資して、先づ其の根本を造る事が第一に必要なのであらう。猶其不足資金は會社自身の信用によつて外資を輸入するも宜からう。小額債券もよからう。何にもせよ先づ第一に有力なる市民の自力發奮を俟たねばならない。東京を一日も早く復興する事は彼等有力者の任でもあり、又其の利益でもある。互助共存の理法から他を扶くる事は自ら富ます所以にもなる。

富國貧民

際に現れるのは政府の富國貧民の態度である。富民貧國の支那の現狀は沙汰の限だが、未だ貧民にして遂に不統一に富國であり得る所以はない。官尊事大の日本でも地震と火事には遠慮が無かつた。公私を問はず皆崩れ、皆燒けた。中にも官廳では廳舍や、道具の他に貴重な記錄文書の殆と凡てを燒け盡したと傳へられて居る。國家の政廳として、此等の廳舍や其設備が、復舊されるのは當然な事であるが、民家の復舊は極めて貧弱であつて、官廳の復舊丈が充分であつて、果して復興の事蹟が擧らうか、政府の各廳と及其各學校等では、其罹災の復舊に併せて復興の計畫によつて、競つて其豫算を要求して居るとのことである。私達は官民を問はず凡ての事項の復興を希望する。政治の機關、教育の機關の復興の極めて重大なる事を承知して居る。然し其の復興の緩急は、官民の別によりて差別されるのではなく、事の性質によりて塩梅されねばならない。帝都幾十萬の兒童の國民教育の復興が貧弱であつて、高等教育の復興だけが豐である可き理由を知らない。帝都の復舊恢復が遲々として將來を危まれるのに、獨り官廳だけが充分に復舊せらるべき所以を知らない。帝都復興の豫算だけが切り詰められて、官廳復舊の豫算だけが豐富であるべき理由を知らない。平素から日本では政府の財政は豐かであつて、民間の經濟は逼迫して居るやうに見えた。新聞紙上で復興豫算の梗概を見ると一層此の感を深くする。

、帝都復興案の豫算の大綱として傳へられゝ所を見ると、總額七億○三千萬圓で、初め復興院案として宣傳された膨大なものと比較して、之れは又極度に切りつめられたものである。財政經濟の事情に通じない私には、事情止むを得ざるに出づると考へる他はないが、夫れでも多少の疑問を抱いて居る。新聞紙の傳へる所では、此等復興費七億萬圓は主として內國債によつて調達せらるゝのである。利息一億萬圓を限度として募集し得らるゝ十二三億內外の國債が企圖せられて居るのであるとか。私には公債募集の擧が（特に內國債を主とする）民間に於ける經濟復興と兩立するとかしないとかと云ふやうな財政の點は全く分らない。けれども內閣が紀綱を張るを主張とし、財政の緊縮を政策とするならば、此の大災害に遇はずとも當然國費は緊縮されて予算は縮み出されねばならない。而して其の殘餘が利息に廻はさるれば猶多少の國債の工面もつくであらふ。其が復興に役立つ事は尠少ではない筈である。今此の災害の非常時で、市民は困苦窮乏に堪えても復興を成就せんとし、獨罹災民といはず、國民總てが緊張した精神で之に力を添えんとして居る。然るに政府が猶充分な緊縮をなさないで晏然たるあらば、當國貧民の譏を免れまい。平時の政財は充分緊縮されて一錢でも多くの資金が復興に差し向けられたら、夫は百年の大計に役立つ事になる。

曩に私は市民が互助共存の精神で、其所有土地の區劃整理を斷行して、土地の一都を道路敷地として無償で提出する事を切望した。國は之を見て其所有する、市內並に近郊の土地を市の用途に供す可きは當然過ぎた話である。此等の主なるものは公園の敷地として最も適當である。殘餘は市の適當な處分によつて有効に役立つ事であらう。かくして道路も公園も成就するに容易になる。

東京の都市計畫の困難なのは、其が帝都であるからではない。若し東京が單に帝都であつて、產業商業の都市でない事、假令ば米國ワシントン市の如きであつたとしたならば、其計畫は決してむづかしい事ではない。復興院のやうな政府の機關が豫に立案實施して、所謂整然たる美しい都市——併し生命のない——を現出する事は容易である。平城京も、平安京もかくして出來た。產業の都、商業の町は之れでは成就しない。東京は自ら生ひ出なければならない。茲に生命があるので、新東京は復興院と雖も造つて之を與へる事は出來ないのである。其は市民の自力により自然と焦土から生ひ出づる勢を持たねばならない。此の復興が成就しなければ其は帝都の復興とは云へない。私は官廳方面のみの復興が成就して、市は復舊も爲し得で、片

輪の都市の現出せん事を祈れる。

自力復興

今の復興の災は東京市が逡巡して、復興の萬事を復興院に譲つて、袖手傍觀した事にある。復興院が更は審議會を置き、參與を置き評議會を組織して、屋上屋を架した事にある。其の總てが責任を怖れ、他に依據して、自力で處理する勇氣を缺いた事から出來する。復興審議會は單に復舊に留めよと云ひ、何等主張もなく信念もない復興院は、一言もなく直ちに之れに妥協苟合せんとして居る。斯くして復興の事は東京市に愛着のない人達の玩弄物になり終つた。復興に熱した市民も、與へられんとする火災保険金はバラツクの建築費も償はない。産業商業は途絶した。人々やバラツクの亞鉛屋根の下で、寒雨に凝えて、途方に暮れる他はない。復興難之より甚だしきはない。今に至つては復興の途は只一つだ、自力による道ただ一つである。市民は此の一本道を行く他はない。市民は市難に處するの大勇を振興して、自治の根本義を想ひ、互助共存の精神で一所に奮發するより他はない。政府や、復興院、或は市の如き何のたよりにもならない。市民は相互をたより自分自身にたよるだけだ、自力復興は剩されたるたゞ一途である。地を持つ市民は其の一部を資金を剩すものは其一部を、力を持つものは其力を各供して意氣と氣魄で奮ひ起つて、互助の精神で復興の事を遂行するだけだ、之れから新しい自治の精神も生れ出やうではないか。具體的には、市民の代表者たる市會議員等を督して、東京市自身復興案の對策を作成して之を遂行し、國家の法規の許す範圍で、求む可き援助を政府に求め、復興院や、政府の手を放れ、自由に自ら復興するがよい。斯くして出來た東京が假りに貧弱であつたとしても、其は自ら生んだ愛兒である、市民並に其子孫は永く之を育てゝ行つて、其光榮ある前途を囑望する事が出來やう。然し如何に資金に乏しくとも市民の造る復興の對策は必ずや理想に基いたものでなければならない。剩された乏しき金と力とで造らるゝのであるから、其實現は一部づゝであつても、其計畫は大規模であらねばならない。遠い中古の北歐の市民達は貧しかつた。されど彼等の本寺の計畫は偉きかつた。色々の苦難を經て其は遂に成就されて、今私達はパリーに、ランスに、アミアンに、ボーベーに、天功を奪ふ本寺の偉觀を仰ぎ見る事が出來るではないか。

火は總てを燒いた。形なき人の心も此の火に焦かれて熱烈に燃えた。されど當時政治家の心は此の火と雖燃す事は來ないやうだ、彼等には國と市と協せて復興する熱も燃えない。信念

なき虐殺者よ、卿等は退いて、焦土の灰燼にまみれた眼鏡でも拭ふがよい。老いたる長袖者よ、卿等は去つて廟堂の廂に冬の日を浴びて閑眠にふけるがよい。市民は自力で自分達の都を復興しやうではないか。

（十二、十一、廿八）

舊プロ文學の破滅と新プロ文學の創造

林癸未夫

一　舊プロ文學の破滅

大正十二年の文壇に、時ならぬ波瀾を捲き起した階級文學の論戰も、どうやらプロ派の敗北に歸したやうであつた。少くともプロ派の方の旗色が次第に惡くなつたやうであつた。若し震災の起る前、八月の末頃にでも討論終結の動議が成立して、文壇人と讀者との一般投票にでも問うて見たならば、恐らくブル派が多數を制したに相違あるまいと思はれる。尤もプロ派の人はそれを否認するかも知れぬ。今一息でブル派の牙城を陷れるところであつたものを、地震といふ天災によつて、味方の據つてゐた陣地をことごとく破壞されたゝめ、一時戰線を撤廢したゞけであつて、決して勝利を敵に與へたものではないと言ふかも知れぬ。成程さう言へば、さう言へないこともないであらう。併し吾々の如き嚴正中立地帶に在つた公平な觀察者の眼から見ると、どうもそれはプロ派の負け惜みのやうである。私の見るところでは、震災でプロ派の據つてゐた諸雜誌が全て潰れてしまつたことは、寧ろ彼等の幸せと言つても可かつた。何故なれば、彼等はそのために却て戰敗の慘狀を明らさまに暴露することを免れ得た上に、その戰敗の罪を天災に嫁すことによつて、幾分か自ら慰めることもできたといふものだから。

併し、かくプロ派が敗れた原因が、ブル派の善戰に在つたと見るのは當を得てゐない。敗因は寧ろプロ派自身の中に在つたのであるが、それは後に述べるとして、ブル派がプロ派の攻擊に對する防戰の仕振を見ると、決してブル派の戰士が、敵軍に

比べて、戰術に優れてゐたとも思へないし、武器が精鋭であつたとも思へなかつた。其點では實は双方とも不熟練不用意千萬で、血氣の雜兵どもが戰略兵法などはそつち除けの亂鬪に終始したのであつたから、ブル派が自力でプロ派を撃滅したつもりで勝鬨でも上げるならば、それこそ笑止の至りなのである。

が、それにも拘らず結局プロ派の敗れたことは爭ふべくもないやうに思はれる。其原因を訊ねると、先づ第一にプロ派は其議論に副ふだけの作品を示すことができなかつた。如何ほどプロ藝術の福音を高唱した所で、藝術は終に藝術であつて、生のまゝの理論では到底藝術にならない以上、其理論の妥當性を證據立てるがためには、何うしても之を實際に藝術の型で表現して見せることが肝要である。そして最後の勝敗は結局其作品の價値が、ブル派の作品の價値よりも優れてゐるか劣つてゐるかによつて斷ぜられるより外はないのである。尤も茲に謂ふ所の價値とは、其作品の有つ社會的及藝術的特徴の總和が、一體として讀者に與へる印象を指すのである。從つて此讀者はブル派にもプロ派にも屬しない。單なる社會人としての文學愛好者を意味するのである。此讀者が個々の作品から素直に受取る印象によつて批判されるものが即ち其作品の價値である。從つて此價値はブル派又はプロ派に屬する作家や評論家の認めて眞の價値と自稱するものとは、或は一致し、或は一致せぬであらう。プロ派は階級闘爭意識を激發し、社會革命を促進することに役立つやうな作品でなければ、それに價値を認めないといひ、ブル派は藝術の眞の價値は、社會思想などには沒交渉に存在しなければならぬ筈のものであるといふ。併しそれは何方も自己の立場に即した議論であつて、文壇外の讀者は何方の議論にも捕へられることなしに、實際の鑑賞の上から個々の作品の價値を批判するの自由を有するのである。そして此讀者の自由批判が結局其作品の價値に最後の斷案を下すのである。そして作家は其斷案に不滿であつても、なくても、結局それに服從するの外はないのである。

所がプロ派の作品は如何にしてもブル派の作品以上に其價値を讀者に認めしめるだけの力を有たなかつた。公平なる社會人としての讀者は依然ブル派の作品を以てプロ派のそれよりも優秀なるものと斷定したのである。プロ派の人々が、かゝる小說戲曲こそは眞に社會人によつて要求さるべき筈のものなれと、必死になつて宣傳を試みたにも拘らず、案外社會人はそれに耳を傾けなかつたのである。或は、耳を傾けても、それを肯定しなかつたのである。そして「汝等の作品未だし」といふ判決をプロ派に與へたのであつた。

かく言ふならばプロ派の人々は抗辯するであらう。一般讀者の批判に何の權威があらう。彼等は單に新聞の誇大な廣告文によつて操縦されてゐる土偶に等しいものである。彼等に作品價値の最後の判決權を與へて堪るものかと。かういふ讀者に對する侮蔑的感情は、ひとりプロ作家に限らず、ブル作家の中にも案外少くないやうに思はれる。今日流行作家として世間的に成功してゐる人々の中にも、往々讀者輕蔑論をする人がゐるやうに思はれる。が併し、それは實際當を得た觀察であらうか。私は決してさうでないと思ふ。序だから此事を少しく論じて見やう。

作家は常に文壇の中でのみ生活して、文壇外の一般社會人に接觸する機會が乏しいから、やゝもすれば文壇内に於ける評判の效果を誇大視し、非常にそれに神經を惱まされるものゝやうに見受けられる。成程世間の狹い彼等としては、それも無理でないかも知れぬ。現に德田秋聲氏の如き老大家ですら、日本の文學者の生活狀態の不如意な事を嘆じて、「都會文化の中に一つの文壇といふ空氣が築かれ、その中に身を投じてゐることによつて、文壇的生命と生活の安定が保たれる」と言つてゐる。(十一月二十四日讀賣新聞)併し、少し氣を落ちつけて考へて見ると、かういふ見方が餘りに捕はれ過ぎたヒボコンデリー式の考へ方であることが直き分る筈と思ふ。文壇といふものは僅々五十人か百人かの作家と批評家によつて構成されてゐるのである。彼等は元來が所謂「さばけた」性格の持主ではない。從つて交友の親疎とか、文壇的立場の異同とかによつて、とかく黨同伐異になりたがり、偏頗な批評などが行はれ勝ちになるに相違ない。併し如何に文壇人の間の毀譽褒貶がまち〳〵であつたにせよ、結局それは五十人か百人かの向背の問題ではないか。作家が作家としての地位を今日の社會に保證してゐるのは、是等少數の文壇人ではなくして、實は一般の讀者なのである。露骨に言へば、あの作家のあの作品を買つて讀まうといふ一般讀者の心なのである。是の讀者の文學に對する鑑識と愛好とが、作家の社會的生存を支持してやつてゐるのである。

尤も一般の讀者と言つたところで、數から言へば、數千か乃至數萬であつて、國民全體から見れば僅か千分の一か、萬分の一に過ぎないことは確かである。併し此數千か數萬かの選ばれた讀者の鑑識力は、決して文壇人によつて想像されるほど、そんな低級なものではないのである。時としてはイカサマ物の小說などが驚くべき版數を重ねるやうな例は勿論ある。併しそれ等のイカサマ物の愛讀者と、眞の文學の愛讀者とを混同することは大變なまちがひである。前者に屬する數十萬の讀者は文壇

人から實際輕蔑されても仕方のない讀者であるが、後者に屬する數千か數萬かの讀者は、言はば國民中の最高級の讀者であつて、其鑑識力、批評眼は決して文壇人の輕蔑を許さない種類の人々である。しかも此種類の讀者の數は少いとは言つても、文壇人に比べれば大々的多數である。此多數が作品の價値に對する無言の批評家であつて、どれだけ自信ある作家でも、此無言の批評家によつて愛好されない限りは、如何に文壇人の間に評判が良くても到底社會的存在を維持することはできないのである。何故なれば、雜誌編輯者も出版業者も、文壇人に愛讀されるだけでは商賣が成立たないから

かう論じて來ると、現代に名を成してゐる諸作家の地位は、彼等自身が信じてゐるやうに、文壇によつて保たれてゐるのではなくして、やはり社會によつて保たれてゐるのである。文壇に在る五十人か百人かの向背が彼等の成敗を支配してゐると思ふのはまちがひで、無言の批評家たる數千人か數萬人かの社會人の向背が彼等の運命を支配してゐるのである。若し假にさうでないとするならば、現代第一流の作家の社會的生存は、眞の文學の價値を鑑識したり批判したりする能力を缺いでゐる、輕蔑すべき數千人か數萬人かの、でたらめの購買力によつてのみ維持されてゐるといふ奇態な結論に達するのであるが、彼等は果してそれを肯定するの勇氣を有つであらうか。否、恐らく彼等は、最も高級なる藝術品と自信するであらう所の、自己の作品を愛讀してくれる多數讀者の鑑識を讃歎せずにはゐられないであらう。

右に述べた道理によつて、プロ派の作品が、實際ブル派の作品ほどに社會に認識されなかつた理由は、其作品の眞の價値が未だブル派のそれに及ばなかつた罪であるとして自ら諦めるより外はないことが明白にされたと思ふ。其點に於て彼等は、自然主義運動時代に於ける自然主義作家の功業に譲るところがあつたのである。自然主義の理論が島村抱月や長谷川天渓などによつて高唱されつゝある傍に、自然主義の立派な作品が田山花袋や正宗白鳥などによつて續々と發表されたゝめに、彼等は既成文壇に對する惡口雜言に於てプロ派よりも遙に控目であつたにも拘らず、事實に於て文壇から自然主義前派を驅逐し、容易に覇を唱へることができたのであつた。然るにプロ派は單に口舌の上で既成文壇を攻撃し、其破壞を叫びながら、事實之に取つて代るに足るべき新文學を創造するの力を缺いでゐたので、脆くも退敗の憂目を見なければならなかつたのである。

これがプロ派の第一の敗因であるが、その第二の敗因と認められるのは、プロ派に屬する年少氣鋭の評論家たちが、其議論

の立て方に、根本的な一つの誤謬を冒してゐたことである。それは彼等が社會革命に適用され理論を、そつくりそのまゝに藝術革命（彼等の語を借れば）にも適用しやうとしたことの過失に基くものである。具體的に言ふならば、社會革命の成就はブルジョア階級の根絶を絕對的に必要とするのであるが、その理論を直に文壇に移して、プロレタリヤ文學を確立するがためには、既存のブルジョア文學を根絶することが絕對に必要であるといふ觀念上の錯誤から彼等は出發したのであつた。此誤つた觀念が、過去の卓越したる藝術の社會的價値を悉く否認しなければならぬやうな論理的窮地に彼等自身を陷れる原因となつて、彼等の議論の妥當性を甚しく薄弱ならしめたのみならず、又それが爲に既成文壇の人々に挑戰して、理不盡な喧嘩を賣るやうな始末ともなり、內心彼等の主張に共鳴し、彼等の立場に同情してゐた人々をまでも、彼等の敵に廻はすやうな結果に立至つたのであつた。

社會革命はブルジョア階級の根絶を前提とするけれども、革命のための藝術は必ずしもブルジョア階級から生れた舊藝術の根絶を前提としなければならぬものでないといふ事の論據は、昨年七月の本誌に掲げた拙論「階級藝術と超階級藝術」に於てかなり詳しく論證したつもりであるから、茲にそれを繰りかへすことを避けやう。唯此際一言して置くべきことは、社會革命が成就して、プロレタリヤの文化が普遍的になつた後の社會に於ても、舊社會のブルジョア文化の中から生れた藝術が（特にアンチ・プロレタリヤ的宣傳の意味を寓するものでない限り）依然として社會的價値を存續するに違ひないといふ私の信念である。この私の信念からすれば、プロ派が過去の文學に挑戰することの妥當性の範圍は、單にアンチ・プロ的な、換言すれば革命抑壓資本主義擁護の特徵を有してゐるやうな一部の文學——若しそんなものが實在するならば——に局限されるのであつて、決して既成文壇の全體に及ぶべきものではなかつたのである。然るにプロ派の論客は此睹易きの理を辨へないで、坊主の憎みを袈裟に移し、ブルジョア階級を滅ぼさなければならぬといふ社會革命の綱領を延長して、ブルジョア文化から生れた文學の一切をも滅ぼさなければならぬといふ論鋒を振廻したことが、彼等の論陣に償ふことのできない破綻を與へてしまつたのであつた。

以上擧げた二つの原因が、大正十二年度に於けるプロレタリヤ文學運動を失敗に了らせたのであつた。地震の影響もあつたが、とにかく形の上ではプロ文學は破滅したものと認めざるを得ない有樣である。尤も所謂プロ派に屬する作家の中に、引續

いて創作を發表してゐる人も多少はあるが、併し其作品は、作家の表現してゐる感情に於て、又其主題に於て、事實プロ文學の實を具へないものばかりのやうであるから、昨年の文壇の最後の四半期に於て、舊プロ文學は破滅したと言つても、異論を唱へるわけには行くまいと思ふ。

二　新プロ文學の創造

舊プロ文學は一應破滅した。併しそれは永久に破滅するものであらうか。永久に破滅させて可いものであらうか。否、否、それは必ず別箇の生命を有つて再生しなければならない。來るべき大正十三年の文壇に於て、新プロ文學は必ず創造されなければならぬ筈のものであると私は信ずるのである。

私がかく主張する理由の第一は、過去及現在の日本に於て、眞にプロ文學の名に背かないやうな小説も戯曲も實際未だ存在してゐないといふことである。假に明治大正の文學を通覽せよ。誰が日本の無産階級の眞の生活を描き出してゐるか。單に彼等の中に其題材を求めたといふだけならば、硯友社派の作家にも、自然主義派の作家にも、漱石及其門下の作家にも、白樺派の作家にも、現存の流行作家の中にも、其例を擧げることが困難でないかも知れない。併し彼等の中の誰が日本現代の眞のプロレタリヤの生活を描いてゐるか。紅葉も漱石も獨歩も花袋も秋聲も、將た有島も志賀も芥川も菊池も決してそれを描きはしなかつたのである。彼等が選んだ主題、描寫した對象、表現した感情は、徹頭徹尾ブルジョア階級の範圍に限られてゐたのである。勿論私はプロ派の論客の誤つた主張のやうに、かるがゆゑに彼等の作品が無價値であるとは決して言はないのである。併し彼等が作家として描き出した生活が、社會の限られた一局面、即ち有産階級のそれに止つてゐたといふことは、何人にも否まれない事實である。現代社會の大部分を占めてゐる無産階級の生活が、全く過去の小説家戯曲家から默殺されてゐたといふことだけは、決して疑はれない事實であると思ふ。

併し之は將來に於ても其儘であつて可いことであらうか。我同胞たる幾千萬のプロレタリアが、小説戯曲のやうな、最も民衆的な藝術の上に、永久に其生活を再現せられることなしに終ることが、果して認容し得べきことであらうか。彼等自身は或はそれに對して苦情を唱へないであらう。併し私共の如き、人類全體としてのヨリ良き社會生活に向つて不斷に努力しつゝある者から言へば、これは何うしても認容さるべきことではないのである。吾々は此點に於て、飽くまでも頑硬に日本の文壇に抗議しなければならないのである。それは何故であるか。

凡そ如何なる社會改造もしくは改良の諸計畫も、それが社會の實生活と沒交渉に立案されたのでは、全く砂上の樓閣である。從つて如何なる計畫も先づ事實の正視から出發しなければならぬ。一つの主義を信奉し、一つの實行手段を選ぶことは、決して急ぐべきことではない。何よりも第一に必要なことは、自分の努力の對象となつてゐる或國、或社會に於ける現實の生活に觸れることである。世態人情の眞相に徹することである。かくの如くにして得たる實人生に對する精確なる知識の上にのみ、一切の主義が成立ち、あらゆる計畫が立てらるべきである。これは私の持論であつて、私の社會問題に關する考察の基調を形造つてゐるものである。そして又かくの如き私の態度が、私をして、マルクス及レニンの學說や、共產黨インターナショナルの綱領を、直譯的に我國に適用しやうとしてゐる、現代の流行的社會評論家と、同一戰線に立つを得ざらしめてゐる原因でもあるのである。

併しながら社會生活の眞相を誤りなく理解するといふことは、實に何人にも甚だ困難な仕事なのである。吾々は現に自分の屬する、もしくは自分に密接な交渉を有つ或集團の生活ですら、十分にその眞相を會得してゐるとは言へない。況して平素自分と交渉の少い社會に生活してゐる人たちの、本當の道德や感情を、まちがひなく會得することは非常に困難なことである。現に私の如きは、長く鑛山や工場に勤務してゐて、日本の無產階級の生活に就ては、かなり豐富な知識を有つてゐるつもりであるけれども、併し尙眞に良く彼等を理解してゐるといふ自信は有ち得ない。所が今日、自らボルシュヴヰズムやアナーキズムの信者であると名乘つたり、階級鬪爭の勇士を以て任じたりしてゐる評論家や作家や勞働運動者の多數は、大抵中產階級に生れ、正規の學校敎育で育ち、無產階級の實生活とは懸け離れた狹いグループの中に寢食し、單に書籍や新聞雜誌を通じて社會に接觸しただけであるだけに拘らず、旦に社會主義者の宣傳文書を讀んで忽ちそれに共鳴し、夕に勞働組合の集會に臨んで忽ち階級鬪爭に身を投ずるのである。彼等の思想も主義も單に理論の傀儡であつて、血と肉とを伴ふ實感に根ざしてゐない。だから彼等の主張は、いつも資本主義撤廢の一天張なのである。資本主義が害毒であるならば、それを征伐することは固より結構である。併し英吉利も、獨逸も、日本も、等しく資本主義の國だからと言つて、それ等の國々の有つ政治的背景も、經濟的狀態も、道德的傳統も、國民的性格も、決して同一ではないのである。日本の現在の社會生活は、是等種々なる事情及勢力の複雜な交錯によつて成立つてゐるのである。善かれ惡かれ、日

本は日本である。決して他の何れの國とも同一に律せらるべきでない。從つて日本には日本獨特の資本主義撤廢の時期、方法、順序、手段がなければならない。或方法が露西亞に成功したからと言つて、日本にも成功すべき理由がない。或手段が佛蘭西に失敗したからと言つて、日本にも失敗すべき理由がない。何處までも日本は日本として考へ且行はなければならぬ。之は分り切つた道理である。しかもこの分り切つた道理が、實際今日の我國の社會主義者や勞働運動者に分つてゐないといふのは一體何ういふ理由からであらう。要するにそれは、彼等が日本の社會生活、殊に無産階級の生活の眞相に觸れてゐないからであると私は信ずるのである。

然らば如何にして彼等を、ひとり彼等と言はず、あらゆる階級、あらゆる職業の人々を、日本の無産階級の生活の眞相に觸れしめることができるであらうか。世間には「貧民窟の視察」なるものによつて、それが可能であると考へてゐるお芽出度い人々が往々ある。是等は論外として、最も適切な方法は、親自ら無産階級の間に伍して、彼等の生活を直接體驗することである。併しそれは言ふべくして、實は行ひ難い。さうすると、殘されたる唯一の方法は、小說戯曲を通じて、其中に如實に再現せられたる無産階級の生活を感受するの外はないのである。

實際日本にも、ストウ夫人が南米の奴隷の生活を、ゾラが巴里の勞働者の生活を、ゴルキーがペトログラードの窮民の生活を、トルストイが露國の農奴の生活を描いたやうに、日本の無産階級の生活を描いた文學がなければならない筈なのである。若しそれがあつたなら、日本に於ける社會主義者の思想の上に、又勞働運動者の戰略の上に、どれだけ有益な資料を與へ得たか知れないと思ふのである。所が悲しいことには、明治大正の文壇に全く此種の文學を創造し得る者がなかつた。強いて求むれば有島武郎の『カインの末裔』と長塚節の『土』くらゐが例として擧げ得るけれども、どちらも普遍的な力に缺けてゐた。漱石の『坑夫』の如きは、全で遊戯氣分のカリカツールである。明治大正の文壇に名を成した重な作家等は、多少の程度に於てリアリストたらざるはないのに、彼等の觀照の範圍は悉くブルショア階級の生活に限られてゐる。吾々は彼等の作品を通じてブルジョア階級の生活の眞相に觸れることはできるが、プロレタリヤ階級のそれに觸れることは不可能である。これは私どもの如き志向を以て現社會に生存しつゝある者の立場からは、如何にしても遺憾至極の事と言はざるを得ないのである。

玆に於て私は敢て現文壇に向つて要求する。日本のプロレタリヤの生活の眞相に觸れ得るやうな文學を創造して貰ひたい

と。そして私は此種の文學を新プロ文學と呼ぶのである。

併し茲に明白にして置かなければならぬことは、私の所謂新プロ文學は、決して大正十二年度の文壇を攪亂したやうな舊プロ文學とは全然別物であるといふことと之である。舊プロ文學は震災と共に既に破滅した。私は決してその再生をも復活をも希望するものではない。舊プロ文學とは全然別箇の生命を有つた新プロ文學が創造されなければならないと云ふのである。然らば破滅した舊プロ文學と、創造さるべき新プロ文學との間には如何なる差別があるのであるか。それを明にする前に、先づ新プロ文學の本質を一應說かなければならない。

新プロ文學の本質は徹頭徹尾日本の無產階級の生活の表現である。決してそれ以上であつても以下であつてもならない。從つてそれは無產階級の讚美であつても憎惡であつてもならない。又如何なる意味に於ても、それは主義宣傳の具であつてはならない。何處までも純客觀的な無批判的な描寫でなくてはならない。それが社會思想の上に及ぼす影響などは、全く作家の意圖から驅逐さるべきである。作家の主觀が無意識的に作品の中に表現されることは已むを得ないことではあるが、併し作家は出來るだけ其主觀を沒却するの用意を有つべきである。

新プロ文學は又、決してブルジョア文學を排斥するものではない。現社會にブルジョア階級といふ大衆の一團が存在する以上は、其生活を如實に表現する文學の存在することは當然であつて、如何なる理論を以てしても、それを排斥し得べき道理はないのである。然るに現社會にはブルジョア階級の外にプロレタリア階級といふ、ヨリ大なる民衆の一團があつて、社會生活の大半を占めてゐるに拘らず、彼等の生活を如實に表現した文學が未だ存在してゐなかつたといふことは、如何にしても我國の文學の一大缺陷であることを否むわけには行くまいと思ふ。しかもそれが文學としての缺陷であるばかりならまだしも、延ゐてそれが日本の社會思想及勞働運動の基調にまで、大きな破綻を齎らしつゝある一つの原因と考へられる以上、如何にしても此缺陷は速に塡充されなければならぬ國民的疾患であると言はなければならないのである。が、併し此意味の新プロ文學は何處までもブルジョア文學と併存すべきものであつて、相互に排擠すべき性質のものでは斷じてないのである。

從つて又新プロ文學は、既成文壇に挑戰する必要は毛頭なく、唯その平和なる競爭者であるばかりである。既成文壇が大部分ブルジョア階級出身の作家によつて構成せられて居り、又彼等の作品が悉くブルジョア階級の生活を描くに限られてゐることは疑ひのない事實である。併し私の知る限りでは、彼等は決し

てプロレタリヤ階級出身の作家を排斥もしなければ、又プロレタリヤ階級の生活を描いた作品の價値を否認もしなかつたやうである。唯昨年度に於て、プロ派の無謀な評論家が、頻りにブル派に挑戰して口汚い罵詈を放つたために、ブル派が自衛上之に應戰したに過ぎなかつたのである。(尤も雜兵どもの亂鬪になつてからは、双方甲乙のない惡態振ではあつたが。)又たとひ文壇内の形勢が何うであらうとも、前に述べた通り、價値ある作品を鑑識して、其作家に社會的生存を保證する者は、文壇人ではなくして、一般の讀者なのであるから、自信ある作家は何等の懸念なく新プロ文學の創作に從事して可いわけである。既成文壇に挑戰することによつて、自己の存在を認めさせやうとするが如き術策は飽くまでも避けねばならないのである。

更に附け加へて言つて置かなければならぬことは、プロレタリヤ階級の出身者でなければ、新プロ文學の創作に從事できないといふやうな觀念に捕はれてはならないことである。固より新プロ文學が専らプロレタリヤ階級の生活の表現である以上は、躬自ら其生活を體驗した者が、其作家であることが、文學的成功には有利な條件であるには相違ない。併し、それがために、ブルジョア階級の出身者が新プロ文學の創作を遠慮しなければならぬ道理もないし、又それに成功し難いといふ理由もないのである。いやしくも文學の作家たらんほどの者は、人並勝れて世態人情に對する感受性が鋭敏であるに相違ないから、普通人には捕捉のできない他階級の道徳感情も、彼等には捕捉できると考へられるのである。

右の如きものが新プロ文學の特徴である以上は、それは第一に社會主義は固より、他の如何なる主義の宣傳具でもないといふ點に於て、第二にブルジョアの敵でもプロレタリヤの味方でもないといふ點に於て、第三に既成文壇に決して挑戰しないといふ點に於て、全く舊プロ文學と其性質使命を異にするものであることが、自ら了解されるであらう。

舊プロ文學の如きは、プロ派の論客がそれに與へた本質論に從ふならば、全く有害無益なものであつた。(實際には私の所謂新プロ文學の質を備へたものも混つてゐたのであるが)何となればそれは最初から日本の無産階級の實生活を表現するがために描かれたものでなくて、彼等の力を讃美し、或はブルショアを呪詛し、兩者の間に階級鬪爭を煽動するの意圖を以て描かれたものであるから、彼等の描いた對象は、眞實の生活ではなくして、彼等の目的のために勝手に歪められた虚僞の生活であつたと言へるからである。新プロ文學は斷じてそんなものであつてはならない。何處までもリアリズムに徹した作品でなくては

ならない。かくの如き文學にして初めて日本の社會生活の全體としての幸福安寧に貢獻することができ、又日本の無產階級の解放運動に正當な針路を與へることもできるのである。

舊プロ文學は既に破滅した。新プロ文學を速に創造せよ。これが新年劈頭に於ける私の叫びである。

都市美論

工學博士 佐藤功一

（一）

海外に遊んだ人の多くは、そこの古都市の美を口にするが、新しい市街の美を說く人は少い。同じ傾向から日本に於てもまた、人は第一に奈良京都の美を擧げる。私は此の事に就て決して異議をさし挾むものではない。併し乍ら、是等の都市が旅行者の情操を動かすところの動因は、主として歷史的回想であつて、一般施設の合理性や、線の變化や、立體の集合やから來る直觀の美（當代文藝の雰圍氣といふ點には暫く觸れぬ事として）ではない。即ち古都の美は、一般都市美を論ずるに當ては特殊の範疇に屬するものである事を心にとめて置かねばならぬ。

それにまた、年代を經た都市である丈けにその名所舊蹟と伴つて、其處には、永い間人間の手のはいらなかつた「自然」のこれを補ふのものが甚だ多い。

京都の美の如きは、それから歷史的の背景を取去つたならば殆んど詰らぬもので、單なる田舍の集りに過ぎぬといつてよい。周圍の山々の美しさを說く人もあらうが、併しあの位の風景は到る處に存在する。特に俯瞰の美のない事もないが、これに伴つて自ら氣宇の宏大を缺く。朝鮮の京城がまたそうであるが、周圍の山々は京都よりは遙かに美しい

（二）

壯觀な趣を與へる都市は、平原から段々と高く盛り上つた都市にある。乍併斯ういふ都市は世界に於て極めて少く、且つ近代都市としては總ての點に於て不便多く其發達は困難である。

私は玆には主として平原都市を擧げる事とする。

多くの封建都市は發生上所謂 The city crown で、中央に高く群を拔いて立てる宮城を核心として、其周圍に群がる聚落から成立つてゐる。歐洲の古いカセドラル・タウンに於ては其中央クラオンは大寺がこれを形造る。最も早く發達した北歐の商業都市、ニーデルランド地方の是等の都市には、核心として市廳（メウンホール）が高く聳えてゐる。これは中世紀の都市の獨立と殷富とを反映する。市廳に附屬して鐘塔（Beffroi）を建立することは憲法に依つて與へられた重要の特權であつた。堅固な構造に成る鐘塔の下部の室は間々記錄所として用ゐられた。ブルジス市の鐘塔は高さ三百五十二呎を算し、この種の塔中最も雅趣に富むものの一で、附近數哩の地方の目標となつて居る。此の塔に就てはロングフエローが次の如く歌つた。

“In the Market-place of Bruges
　Stand the belfry old and brown;
Thrice consumed and thrice rebuilded,
　Still it watches O'er the town.”

是等の市廳は都市の中心廣場に面して建ち、廣場の周りには取引所、銀行、商業會議所、各商業組合の建物が並らび、廣場は市場として用ゐられ、謂所シビック・センターを形造るものである。

東京の丸の内附近を人はシビック・センターといふが、東京にはシビック・センターはないといつてよい。其處に宮城の周りに諸官廳が並んで居ても、それは帝都としての中樞區域であつて、東京市民のシビック・センターではない。たゞ僅かに東京市廳と商業會議所とが一方に遍在して居るに過ぎない。

（三）

乍併、平原都市東京の偉觀は實は此所に集中せられて居るといつてもよい。殊に馬場先から宮城の眺め、左に二重橋と右に本丸の櫓を臨んで、其間に連らなつた森の茂みの上に、碧瓦の隱見する景觀の美は誰しも口にする所である。私はそれにもまして三宅坂の眺めを喜ぶ。それは櫻田門の見付から始まる。幾段にも引かれた穩かな水平線の上に、高く腕を突出してゐる松樹、それ等の綠と白壁との反映、一文字に引幕を引いたやうな此塗壁の盡きる所、そこから青芝の土堤が緩く高まつて、其上の石垣から正門の屋根が覗く。振天府のあたりは土堤の一角

おずつと前に突き出して、頂上の石垣の上にむつくりと盛り上つた森の繁み、其の石垣の上に長い列を作つた木柵が全體の調子を引き締める。此のはつきりした斷面が緑の濠の水に逆に倒影を作つて、その向ふに三宅坂が、歩を運ぶにつれて段々とフイルムを展開する。併し實をいふと此の濠の風情は寧ろ上から見下ろした方がよい。半藏門前の堤上に立つて直下の眺め、浮島のやうに汀に密叢した樹々の、水に差しでた枝振りは、春の若葉によく秋の紅葉によい。翡翠のやうた水の色に是等の樹々が黒い蔭を宿して、そこには水禽の群れが小波を漂はし、折々飛び立つては白い翼を見せて居る。中景の松の間に見える裁判所の赤い壁もよく、これと濠を挾んで舊參謀本部の碧い屋根もよい。惜しいかなあの高い海軍無線電信の三本のポールが近來此の風景を破つて了つた。であるから此の景色を眺め乍ら道を下つて行く觀者は、ポールの見えなくなるまではたゞ、濠と、土堤と其後ろの森だけに見入るがよい。此の見下ろしは行くに從つて漸次に開展し、行くこと一町にしてポールと舊參謀本部とは前景の柳に隱れて、眼下遙かに裁判所と司法省の建物が目に映じ、其上に攝大府の森の影がうづくまる。更に進むに從て柳の幹の間を縫ふて遠景は右へ／＼と前進する。衛戍病院の前まで來ると司法省は眞正面になつて濠は其の前池のやうに見える。そして塔のスカイラインがすつきりと目立つて右手の森に反映する。坂を下るに從つて司法省はまた漸次に柳の枝に隱れ、寺内伯銅像前の角では全く眼界から沒し　土堤の曲りで濠も小さく限られて見える。これから下に降る際には人々は左手に後ろを振り返らなければならない。こゝに來ると池の明るさと土堤の柔かさと森の黒さとがまた濠と人の心を惹き付ける。

（四）

乍併此美觀にも、實は土堤の奧深く其處に陛下の宮殿のましますといふ事が潜在的に強く働いてゐる事を忘れてはならぬ。それにまた、譬へ古く江戸の建設者が、此處を吾々の信ずるよりも遙かに意識して計畫して居るとしても、今日に於ては「自然」の成長の下に大きな影響を受けて居る。であるから一般都市美を論ずるに當つてはまた例外とせねばならぬ事勿論である。

大阪中の島公園、北濱から難波橋を渡り乍ら、そこの左右の眺めはまたなく美しいものである。左手の廣場の水に近く、コンクリートを以て平たく固めた築堤の上には、曳き舟の綱を桁にした船頭が通り。それと生垣を隔てた低い樹木の向ふ砂地の滑らかな運動場には、兒童が遊戯に餘念もない。此處は洪

水の折には水に漬かつても差支ないやうに設計されて居り、緑の木立を通して、一段高まつた所には、赤煉瓦の公會堂、其背後の白い圖書館、高くスカイラインを破つて抽んでた市廳舍の塔など、悉く人工を以て作り上げられた線の變化と立體の集合から成る美だ。橋の右手に低く突き出した島の尖端にも棄て難い趣があり、難波橋がまた相應に意匠を凝らされたものである。建築的デテールに就ては多少の申分こそあれ、これこそ眞に都市の美觀である事を何人にも頷かしめる。朝の靄によく、暮の光によく、夜の灯によい。洵に世界に於ける都市の美觀の一である。私は此の全體のプランを立てた技術家の手腕に敬服するものである。其處には何等の歴史的回想もなく、何等の傳説をも容れずに、自由の計畫を表現することが出來た。また河や地勢を利用してはゐるが、自然の姿其儘から來る美と、これに伴ふ聯想を主としては居ない。

乍併、それは都市の美ではあるが街衢の美ではない。半分は「自然」を取入れて居る事を否む事は出來ない。私は先づ主として總てが殆ど人間の手に依つてなされる街衢の美を說かうとするのである。

（五）

都市の美は庭園の美と同じく、形式的、規則的のものと、不定形的、不規則的のものとに分つ事が出來る。確かにオクスフオードやローテンブルヒのやうな直線も直角も對稱もないやうな都市に我々は美を感ずると同時に、パリやナンシーやコツペンハーゲンのやうな都市の、其眞直ぐな街路、四角な廣場やスカイラインの均整な外觀を有する規則的な部分からも美を感ぜしめられる、前者の美は自然に發達したやうな古都市に存し、後者の美は新しく計畫されたる都市に存する。古の全く無意識的に從はれた傳習の影響の下に出來上つた美的な都市の成長は自然の成長と比較される。譬へそれ等の都市の建設者が今日迄吾々が信じて居たよりも遙かに意識して計畫したとしても、この比較に於て全くは毀はれ得ない程多くの點で一致して居る。勿論技術家は彼の豐富な記憶から引き出して古都の美しい市街の圖面を、恰も風景畫を製作するやうに描き出す事が出來る。然し乍ら一都市の建設は未だ斯くの如き圖面の製作を以て行はれてはならない。假令この技術家にこの仕事の有ゆる細部を指圖する事が出來るとしても、現代の要求條件は彼のプロポーシヨンの多くを覆へし　現實　彼の理想圖とは遙かに隔つたものにしてしまふ。」と英國の都市學者レーモンド・アンウィンは述べて居る。

田舍は神これを作り都市は人これを作る、といふ句がある。都市の眞乎の美は、其の隅々まで、あらゆる人間の知識と人間の意思に依て有機的に作り上げられたものでなければならぬ。勿論公園や逍遙道や一般住宅地の計畫には、寧ろ天然物を多く取入れて不定形に作る事を妨げない。且つ其の方が、強く定形的に作られる商業街と對比しての反映の美をなすものである。商業地の街衢に街路樹などの天然物があしらはれるけれども、それは餘りに引き締められた建築觀を柔げる爲めに點景として置かれたものに過ぎないのである。私は寧ろ或る街衢には何等の天然物を入るゝ事はなく、幾何學的堆體の集團のみに依つて美をなさしむる部分の存する事を希望するものである。

私は是等の複雜なる都市美の中で、先づ專ら人間の手に依つてなされる建築的な美に就て述べやうとするものである。

（六）

昔は東京の名所は上野と淺草とであつた。今日ではどんな田舍の青年に聞いても、恐らく三越と丸ビルと答へるであらう。といふ事は享樂の巷としての都市に對する人々の考が一般に變つて來たといふ事を示すものである。即ち日本人も段々と近代的の都市觀を持つやうになつて來た事を物語るものである。「自然」が多量に入り込んで居る都會の風景よりも、田舍と全く異つた人工的の都市建築觀を喜ぶやうになつて來た事を證據立てるものである。それはインフォーマルからフォーマルへ、ウンレーゲルメーチヒからレーゲルメーチヒへ、不定形的から形式的へ、不規則的から規則的へ進んで來たといふ事である。

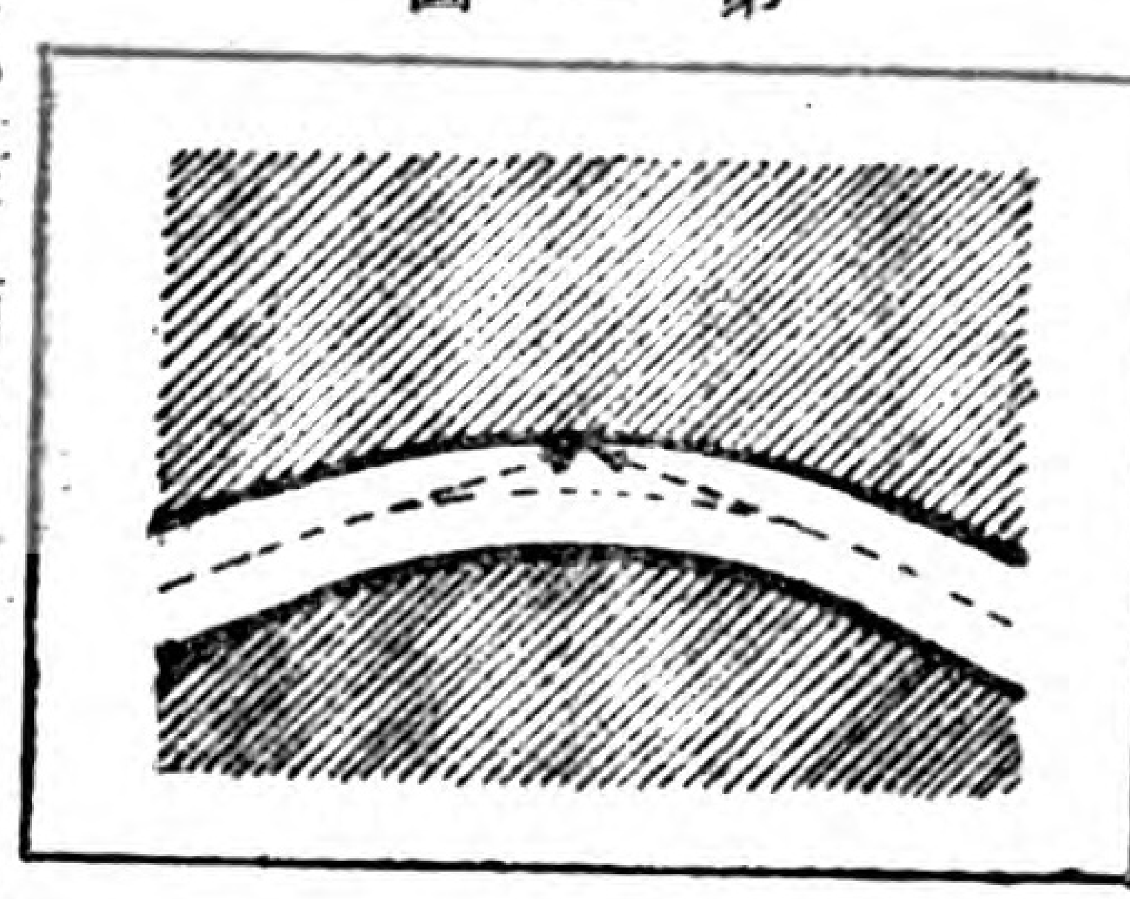
併し震災前の東京に於て、眞に定形的。規則的な都市の美觀を持つた處が何處にあつたであらうか。それは私の最も嫌ひな言葉ではあるが、東京の中流民の間に近年「銀ぶら」といふ言葉が流行した。それは私のいふ街衢の美を味はんが爲めの憧憬を以て銀座に遊ぶといふ言葉である。事實、震災前の東京に於て、斯の如き街巷として私の頭に浮ぶところのものは、纔かに尾張町、交叉點位のものである。しかもそれは人も知る如く外國の都市に比して甚だ貧弱なものである。廣場も狹く、交通も不便で、其四隅がまた各自思ひ〳〵に建てた貧弱な安建築から成り、何等東洋に於ける大都市の主要街巷としての稱せらるべきものがなかつた。それでも先きの東京の中で眼に殘る所のものはこんなものであつた。歐米各國到る所の都市に於ては、斯くの如き主要な交叉點には意を用ゐて居る。其の整頓と美觀とは、都市自身の誇りの爲めに、市民の敎養と愉樂との爲めに、都市計畫上に於て極めて重要なものである事を知らねばなら

ぬ。復興の帝都に於てはもつとも東洋第一の市街として恥ぢさるやうに、壯觀な建築美を有する街巷が是非欲しいものである。在來の「がらくた」道具をぶちまけたやうな狀態から一變して整然と計畫せられたる廣場が欲しいものである。

(七)

人は都市の美觀といふと甚だ贅澤なものゝやうに考へる。これは獨り都市のみの問題でなく、美といふと金をかけて修飾するものゝやうに考へる。併し機物の美の本質は修飾に基くものではない。修飾は時としては更に美を增さしめる手段ともなるが、併しそれは決して第一義のものではない。小にしては家具其他の日用品、大にしては家、更にこれを大にしては都市、是等の總てに於て、實利を犧牲に供して其美を求むる事の不可なるは誰しも知る所であるが、此の實利といふ考が單なる物的評價であつてはならぬ。そこには心的評價が當然入り來らねばならぬ。例へば街路を作る時、それが主として交通と保安のためのみとして考へられてはならぬと同時に、後からの附加ではなく全く同時に、其間に美の觀念が入らねばならぬ。これを爲すと爲さゞるとに依て、僅かの相違は、一方には甚だ好結果を齎らし、一方には極めて惡結果を來さすものである。殊に注意す可きは、街路は單に平面的にのみ考へられてはならぬ事である。それは一般建築と等しく立面的の考察を必要とする。平面的に路線を定むると同時に其兩側に造營せらる可き建築物の形をも頭に置かなければならぬ。これを念頭に置いて計畫する事が決して贅澤な事である可き筈がない。建築物の形を念頭に置いてプランを定むる事の必要は殊に廣場を作ることに於て其の然る所以を覺える。更にこれを念頭におくときに、必ずしも街路の適當なる彎曲を訂正して直線となす必要はない。寧ろこれを利用して、其彎曲部に適當なる修正を行ひ、以てこれを街路の主要中心點たらしむべきである。例へば圖に於て街路の彎曲せる其凹面は前後より視線の焼點となるものである。此の部分に適當なる建築的計畫を行へば、ロンドン市のレゼント街に於ける通稱クアドラントの如き美觀を呈せしむる事が出來る。此所は名匠ノルマン・ショウの手になつた傑作である。

第一圖



(八)

先きに私は三越のことを述べた。

三越は恐らく全國に響き渡つた東京の名所であらう。而も私は此度の大火以前に此の名所の本當の姿を見た人は極めて少い事と思ふ。私はあの屋内の段階をいつでも眼に浮べる事が出來る。三井銀行の方の廣場から見た形も何時でも心に描くことが出來る。又遠く有樂橋方面から見た、あの豐富はスカイラインは今でも空に描くことすら出來る。乍併私は、三越の正面といふものを今度の大火後に於て初めて見る事が出來た。それ以前には、あの前を歩いて通つた時も、車上で通つた時も、私の眼に觸れた所のものは、前方の街路樹と其の向ふに飾られた飾窓の美しさ丈けであつた。街が燒き拂はれて後に初めて、其正面の全景を望む事が出來た。其處には高く壁面にヘルメスや鳳凰の青銅の裝飾彫刻がついて居つた。其のファサードの全體、舗道から軒先に至るまで、其意匠はなか〳〵に思を凝らしたものであつた。私は嘗て圖面に於て知つて居る筈であつたが、實は全く火災後に於て初めて氣付いた事であつた。恐らく火災前に於て茲に氣付かなかつたのは私一人だけではないであらう。此れに依て此れを觀れば、其幅十五間位の道路にあつては、建物正面の全景は、街路の美觀に殆ど關係のないものである。若し其處に街路樹がないか、或はなほ廣い街路ならば別であるが、此の位の路幅にあつては殆ど美觀に關係のない事を斷言して差支ない。且つ在來の東京の街路のやうに、小さき間口を各自思ひ〳〵の意匠を以て建築しては、餘りに市街の景觀を複雜にするのみならず、斯くの如きは所謂中世紀都市であつて、モダーン、コンビニエンスを充分に取入れる事は不可能である。近代都市に於ては、一の街區は一の意匠を以て統一的になさるべきものである。新帝都の都市計畫に於ても、此の意味に於ける街區の整理と、建築物法の制定と、統一的建築の促進に向ての政策とが重要な仕事をなすのである。一般街衢は以上述べた如く整然と統一せられ、然かも彎曲部とか交叉路とか廣場とかの如き部分に特種の意匠が施されて、其所に統一と變化とが程よく按配せらる可きである。斯くの如くしてこそ市街は最もよく美觀を發揮する。

（九）

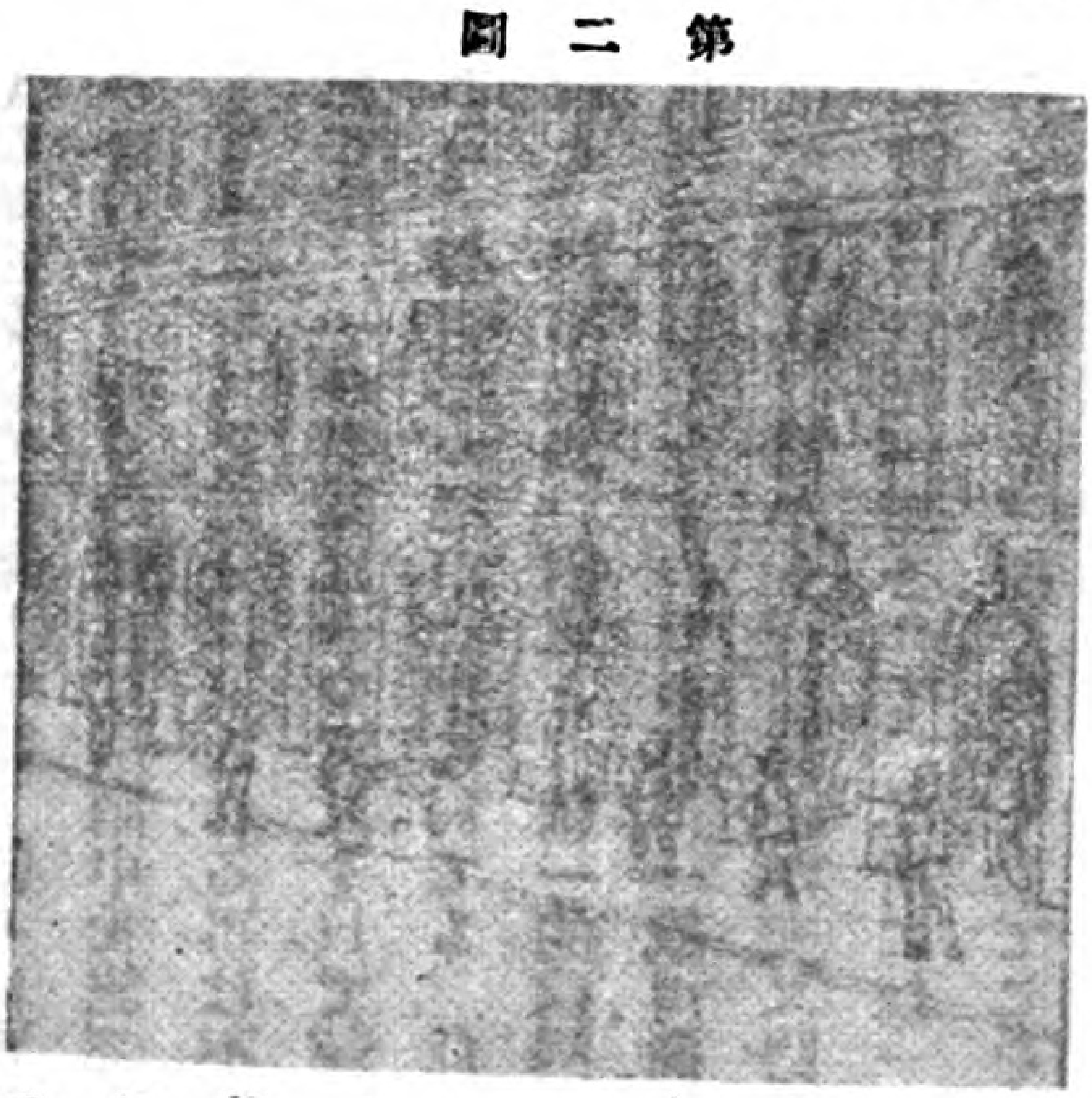
伊太利に遊んだ人でベニスのサン・マルコ前のピアッツアを知らない人はあるまい。正面はサン・マルコ大寺で、三方はアーケードの附いた石造建物によつて圍まれた廣場である。それは相當に廣い廣場であるが、地上は悉く舗石を以て（大きく幾何的の模樣を表はして）敷きつめられて、寸土も表はれて居らずまた何等の植物もない。こういふ狀態であるから誰れが見て

も、周圍の家を入れてその廣場全體が一つの建築物であるといふ感が起る。此所に生ずる美は、如何なる部分と雖ども人間の手に依つてなされた建築線の美と、建築的立體の集合の美である。街衢の或る部分には常に斯ういふ所があつて欲しい。どこに行つても一様に街路樹に依つて緣どられた街觀のみでは、眞に厭き〳〵してしまう。そこにはどうしても企てられた變化が置かれねばならぬ。都市計畫の標本としてよく引用される佛國ナンシー市の中心に二の廣場がある。一はスタニスラスの廣場と呼ばれ、他はカリエールの廣場と呼ばれる。兩者は美しい石造凱戰門に依つて別たれて、カリエールの方は或特種の形に刈込んだ街路樹で緣づけられてあるが、スタニスラスの方は樹木を用ゐず、また寸土も表出し居らぬやうに計畫されてある。歐洲の都市と雖ども、巴里は別として、住宅地域でもなければ街路樹のある街路はごく少ない。東京の市街のやうに比較的狭い街路にも樹木を植えやうとする所は殆どない。概して西洋諸都市では、住宅地域にはこれを植へ商業地域には植へぬやうになつて居るのに、如何なる故か日本は全くこれと反對である。實は日本の都市に於ても、商業地域には成る可く街路樹をなくして、公園や逍遙路や住宅地やと反映を保たせる方が、美觀上よい譯であるが、先にも述べた通り、街路樹に依つて、路行く人をして建築の上部に注意を引かしめず、建築物の上部は表面を簡單に済し得る事になり、經濟上の利益あるが故に、商業地の左程廣ろからぬ街路にすら、これを植へる事を否定せぬが、其の代り要所々々の或る部分には全くこれを植へる事なく、また寸土をも表出せしめず、全然建築的美觀を發揮せしむる街衢の作られん事を、帝都の復興に當つて希望する事切なるものである。

(十)

私は今、復興の帝都の或る部分には、全然街路樹を廢す可しとした。而してなほ、斯くの如き街區の或る部分に建てられる建築に就て希望がある。それは其街衢の兩側に建並らぶ建物の第一階に於て、歩道に接する部分をアーケードになさしむる事である。解り易くこれを圖示すれ

第二圖



ば第二圖の如くなさしむ可しといふのである。即ち此の如く連續したるアーチをアーケードと稱し、此に依つて此處に廊下を形造り、人は一方に店舗（例へば圖に於てアーケードの右手に並べる）を、一方にはアーチを隔てゝ街路を眺め乍ら通行し得るのである。アーケードは、是等の通行者をして、雨を避けしむるによく、また夏の直射の日光より遁れしむるによい。のみならず、これに依つて作られたる變化に富める投影は、建物に奥行と美觀とを與へる。

先に述べた、サン・マルコのピアッツアの周圍の建物は總てこの式からなる。伊太利各都市のピアッツアには此の種の建築多く、ボロニヤ市の全部が此の建築から成り、瑞西ベルリンの全市がまたこれから成る。近くは香港、コロンボに於て多く見られる。近代の代表的都市に於ては巴里のリボリ街に長く續いてこれを見受ける。其の起源は、古く希臘の市場なるアゴラや、羅馬の市場なるフォーラムの、其周圍をかこんで環らされたストアと呼ばれた廻廊に存する。勿論極く古代の是等の廻廊はアーケードではなくコロネードであつた。即ちアーケードの方は上部がアーチになつて居るが、コロネードの方は柱の上には平らに桁が渡されてゐる。羅馬に於ては既にアーケードが用ゐられる、そして其の東方植民地に於ては盛にこれが用ゐられたものであつた。街を行く人々をして彼の强烈なる直射の日光から避けさせるによいからである。

明治五年に政府の手に依て建築された銀座の建物の大部分には、街に面してコロネードが並んで居たといふ事である。それがいつの間にか段々と失はれて行つたのである。確かに震災前の銀座の家には、其の痕跡の認められるものがあつた。恐らくは建坪全部を室として使用せんが爲めに、屋內に圍ひ込んでしまつたものであらう。何等の規定が設けられてなかつた爲めに、最初の計畫が根本からこはされてしまつたのは、返す〲も惜しい事であつた。

（十一）

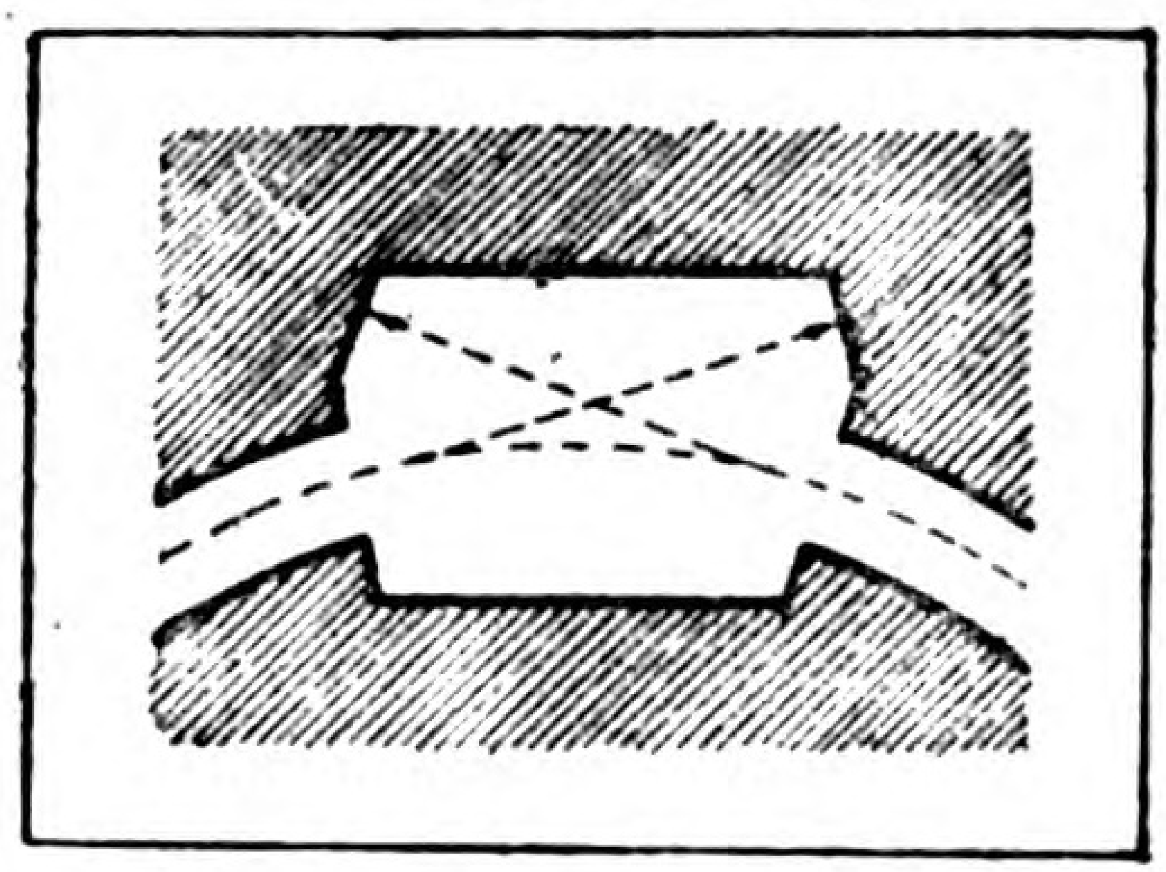
古代の都市に於ては、市民は主要建築を以て圍まれた中心廣場に出て、神殿に詣で、ニウスを交換し、其日の事務を處理し取引を濟ませ、市政演説を聞き、各種の競爭をなし、入浴に身心を一掃して、エキセデレに腰をおろして街巷を眺めまはし、名士の立像や美しき記念柱やなどの間を逍遙するなど、その日その日の全體を其處で送るといふやうに、所謂フォラム生活をなしたものである。中世紀から文藝復興期の商業都市に於ては、フォーラムはピヤッツアや市場（マーケット）に代つた。是等の周圍がどんな

に美しい建物で取圍まれて居たかは、ベニスのピヤッツア、やブラッセルの市場が、今なほ昔のまゝにこれを物語る。現今に於てもなほ地方の小都市は此のプランの下におかれて居るが、大都市に於てはその活動の復雜は到底これを許さない。併し乍ら大體的に見て都市の中心は存在する。而して此の中心地の外に、なほ都市の狀態に從て或數の小中心が存する。是等の部分には孰れも廣場を作り、それ等の廣場を特に他の街衢より抽でたるものに計畫し、各街衢は各小中心廣場の從體となり、斯くの如く其小中心廣場を主體として形作られたる各團は、全體として都市の大中心地を主體として、そのもとに統一せらるゝ形式を存せしむる事は、都市の一般プランの上にも、ひいては美觀の上にも極めて必要な事である。復興の帝都に於て、譬へ其大中心地に、墺國維納のリング附近の壯觀は得られずとも、其小中心の或るものに英國倫敦のピカデリー・サーカス位のものは得たいものである。ピカデリー・サーカスは、世界第一の大都市の第一の目貫の場所である。私の此言を以て笑ふ可しとなす人もあらうが、私のいふ所は其の廣さである。僅かにあれ丈けの廣さで、他の都市のものに比して特に意匠された部分の少い、あんな廣場ですらも。倫敦の市内(シテー)の如く狹い街路のみ續いた町に於ては、如何に重要なる意味をなすかを言はんが爲めに、特に例として擧げたものである。

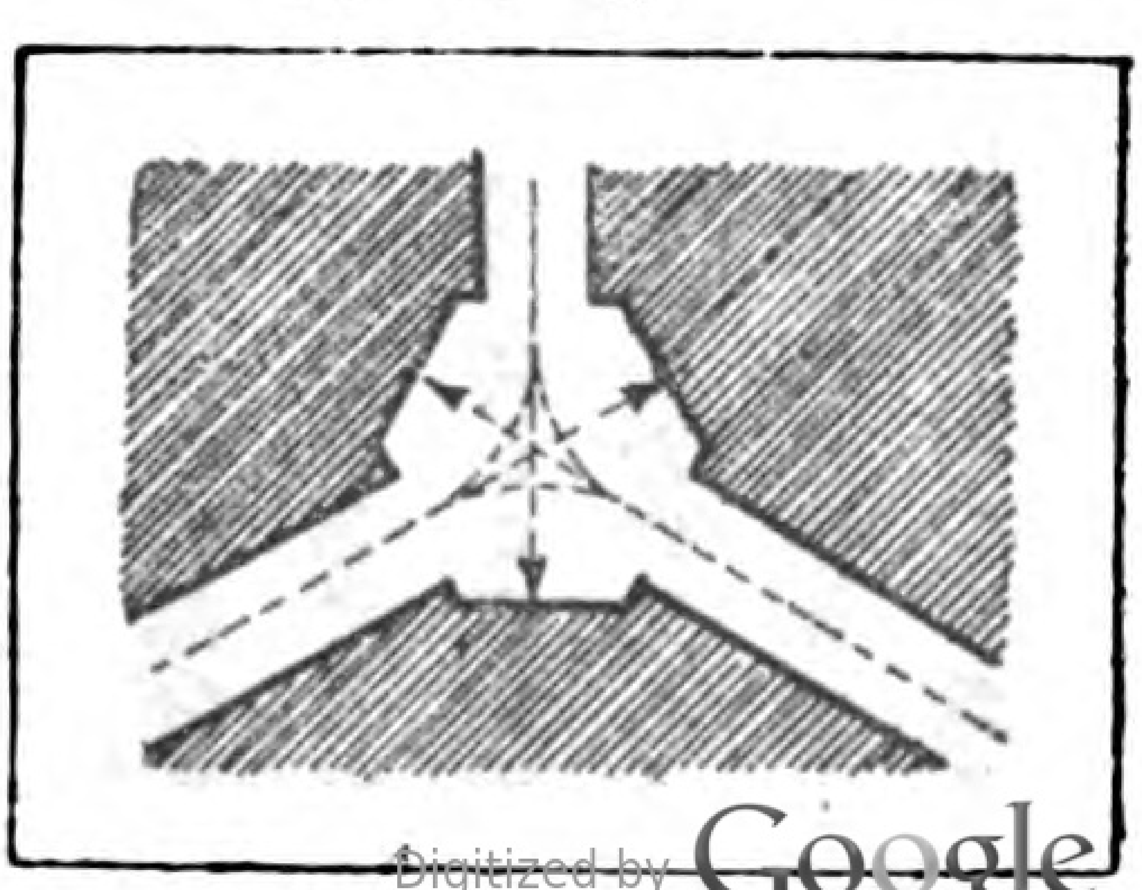
（十二）

廣場は概して街路の交叉點に設けられるものであるが、必ずしもさうでなければならぬといふ事はない。直線をなせる街路の或る部分に於ても、交通上の緩和の爲めにも美觀のためにも設けられる場合がある。また同じ理由に依つて、先に擧げたる如き街路の彎曲せる部分にも第三圖の如く設けられてよい。圖に付せる矢の端の突き當る部分は、立體的に見て極めて好い景觀を呈する。第四圖、第五圖は街路の分岐點に於ける廣場である。第五圖の中央に狹まれたる部分の如さは、市民の娛樂用に供する建物を、意匠をこらして建築するに最も適當なる位置である。巴里の大オペラ・ハウスの如きは恰度斯の如き位置に置かれてあ

第三圖

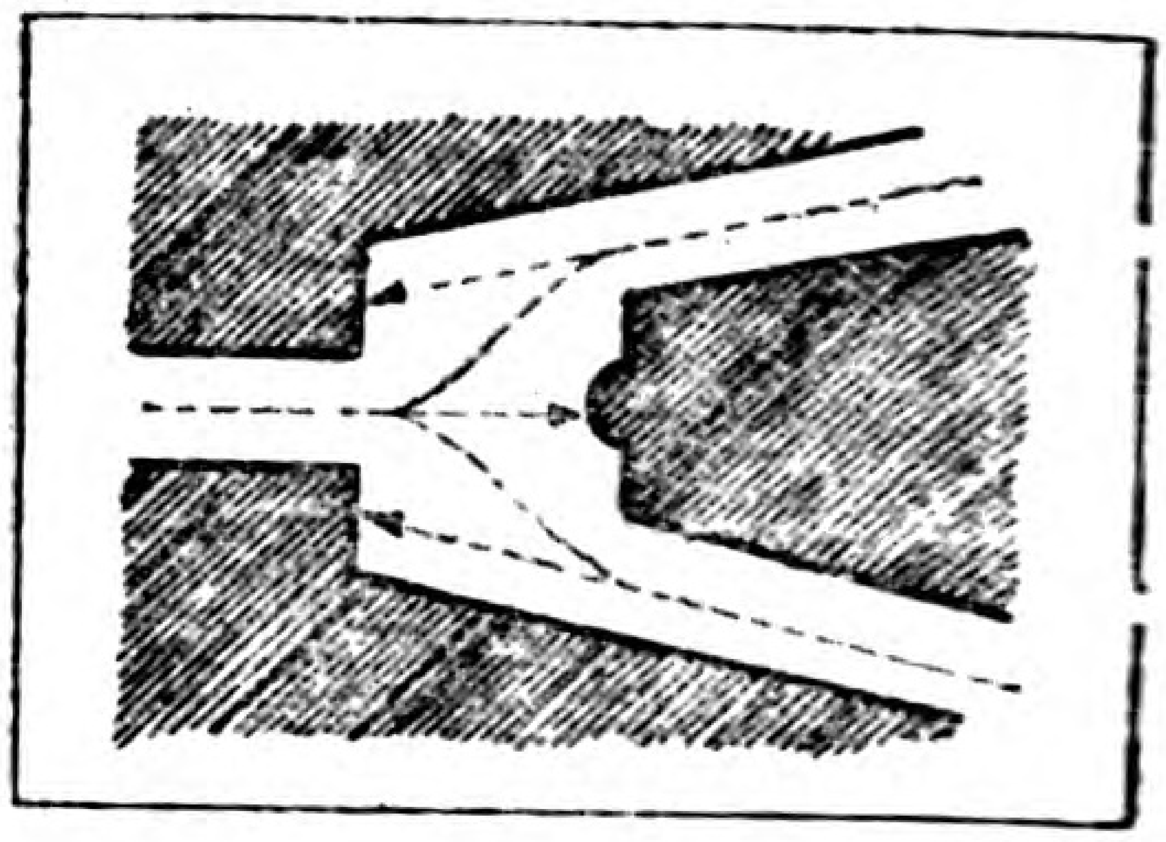


第四圖



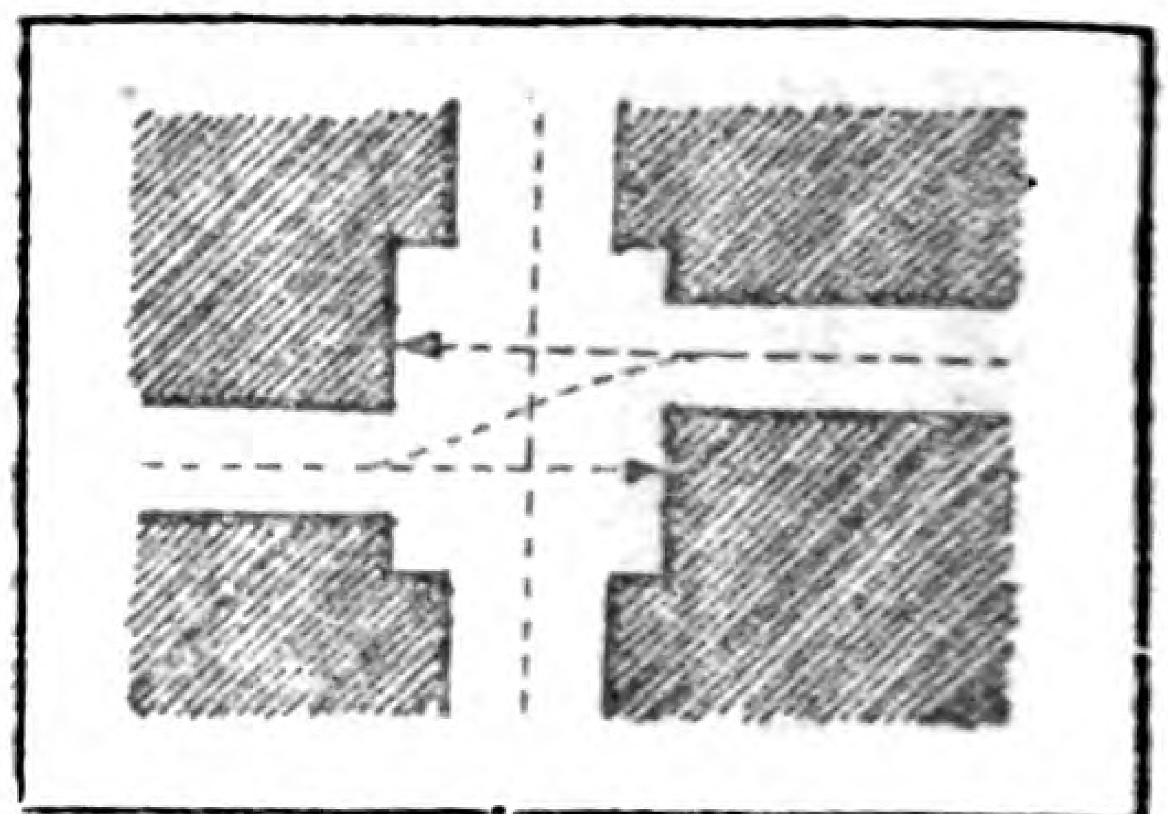
る第六圖、第七圖は、直線を以て交叉し義き街路を、廣場にお

第五圖

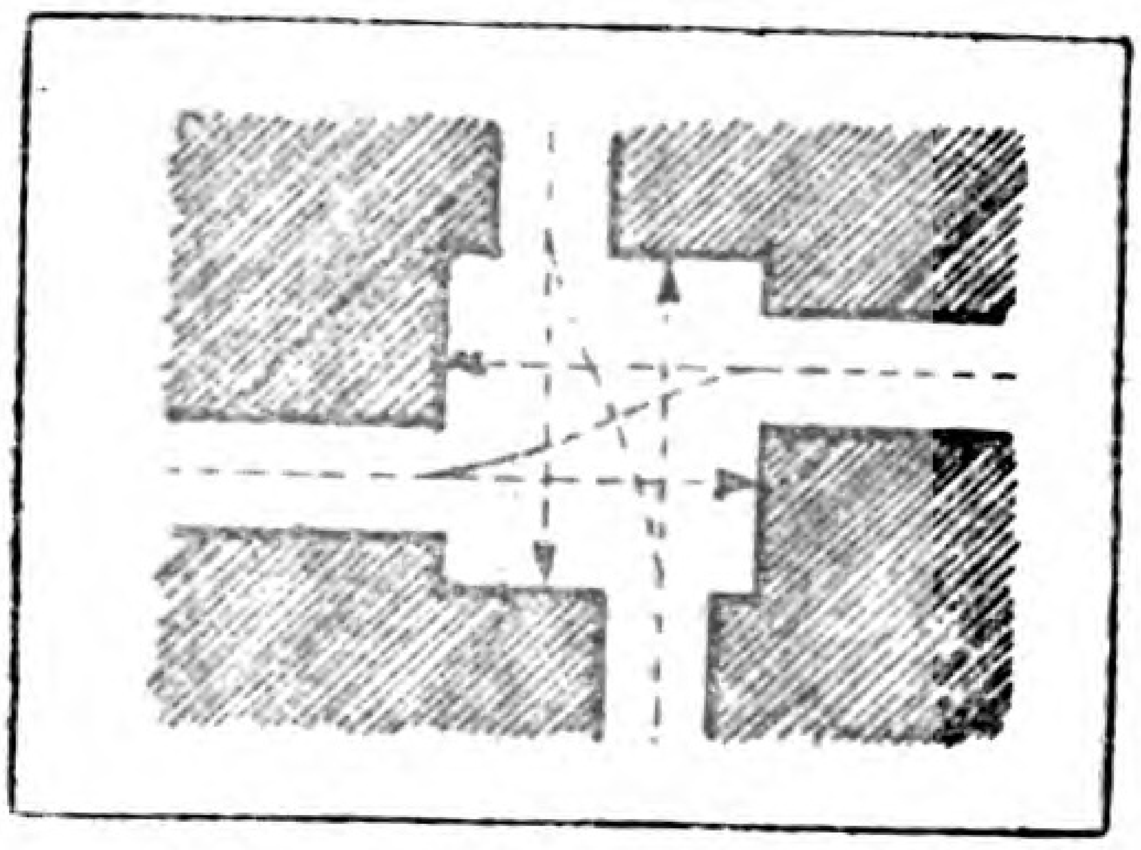


て調節した場合である。各一方の街路より矢の方向に之れに對する建物を望み得るを以て、適當なる考案を施せば、斯の如き廣場は、直線を以て交叉する街路の廣場よりも一層の美觀を加へる。これを逆に、交通上大なる支障を來さゞる限りは廣場は斯の如く計畫する事が、美觀上、策の得たるものであるといふ事も出來る。第八圖はまた

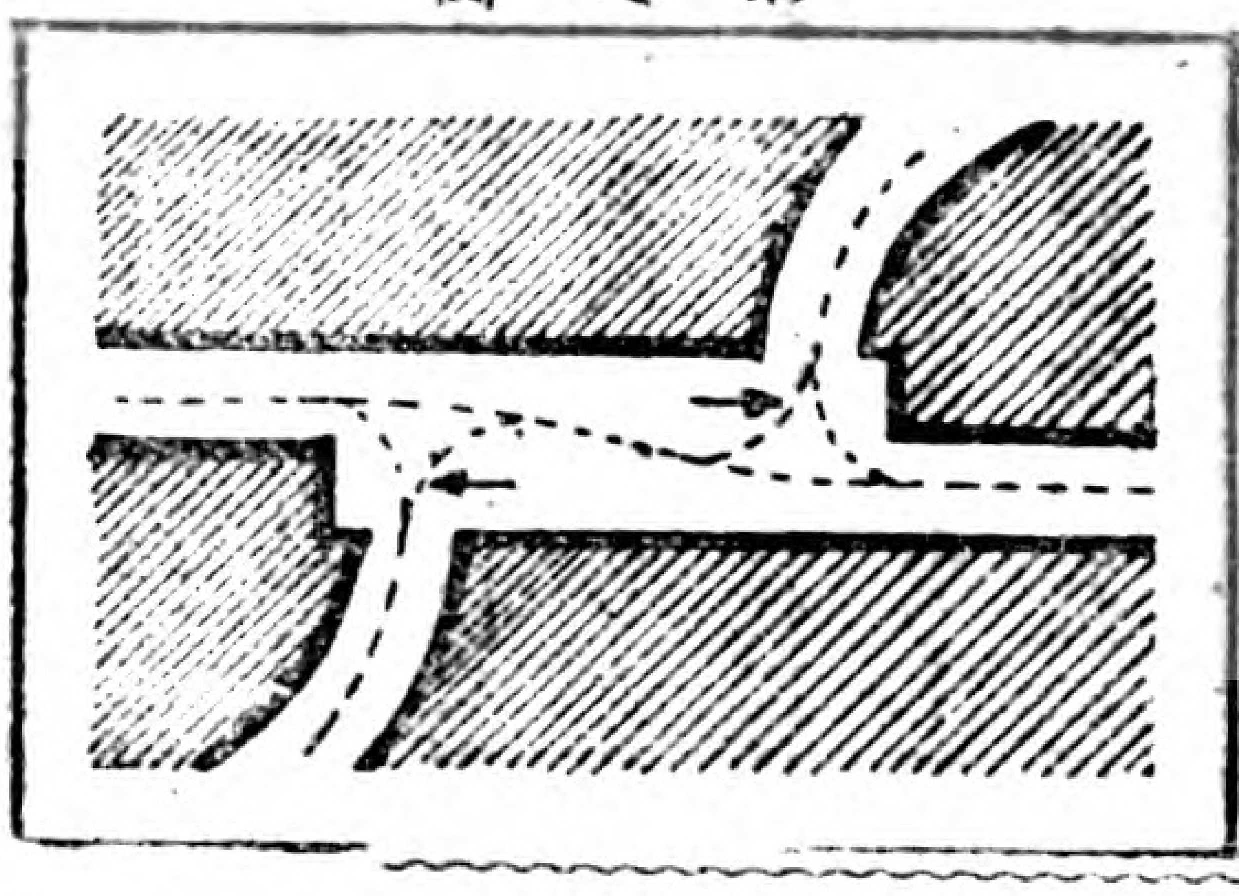
第六圖



第七圖

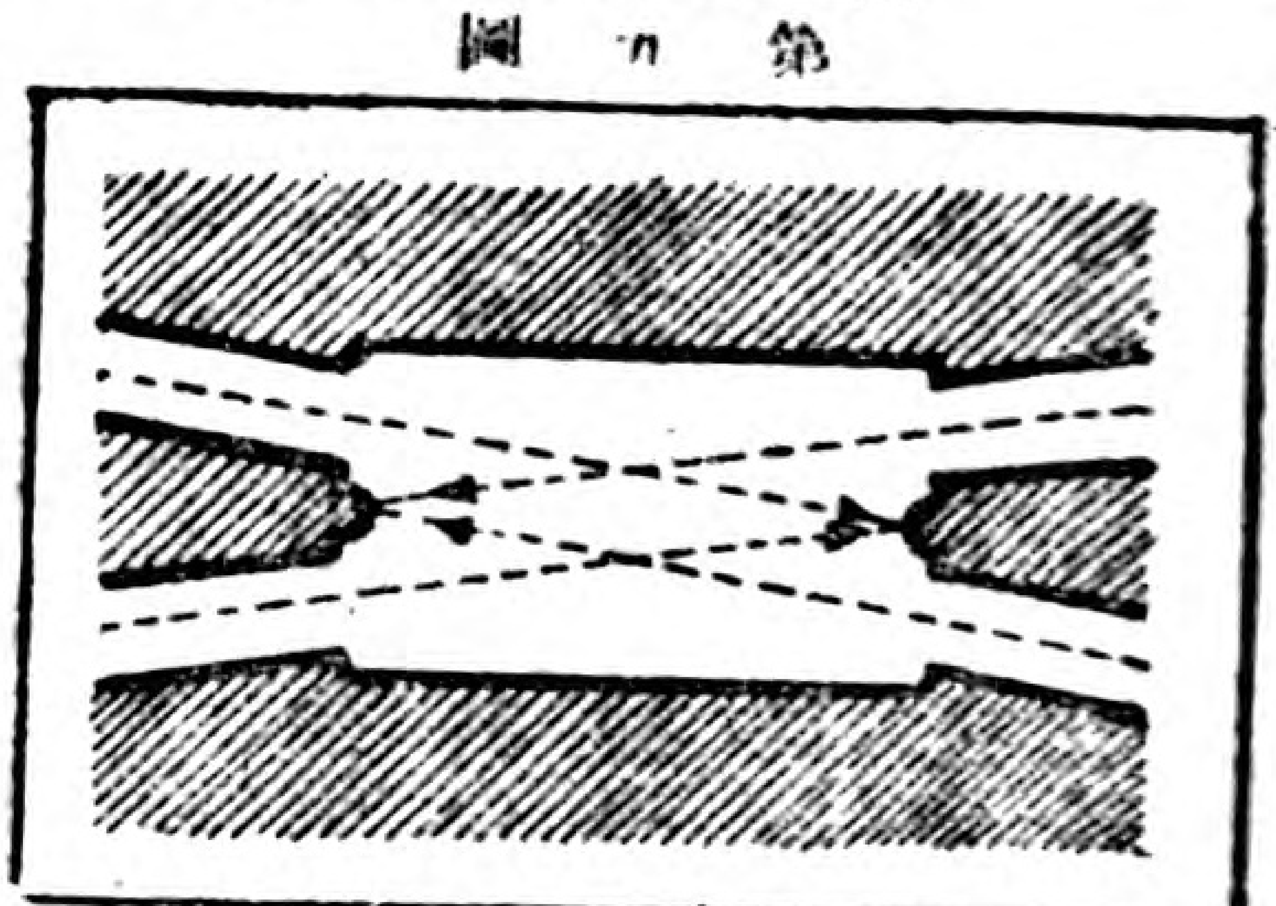


第八圖



一直線に交叉せざる、しかも一方前後の街路の隔りの遠き場合に作らるゝ廣場を示し、第九圖は斜に交はるがしかも各一直線をなさざる街路の交叉點に於ける廣場の所理を示したものである。これは第四圖と等しく、街路に依て挟まるゝ地區に主要なる建築地を得る譯けで、是等の建築も當局者に於て造營するか、或は當局者の監督の下に相當なる經營者をして建築せしむる可きものである。(第三圖より至第九圖に至る七圖は。Raymond Unwin 氏著 Town Planing Practiceより借用)

第九圖



(十三)

街路の美を如何なる部分に集中せしむ可きかに就ては既に述べた。現に計畫せられつゝある日本の各大都市の改造に就ては、の通や保安の條項の特に考慮を要するものゝ多い爲めに、美の方面は比較的閑却せられがちの狀態にある。建物の美は實利を作はねばならぬと同時に、實利が無意味に美を蹂躙してはたらぬ。獨逸の都市計畫は大部分都市の美觀と市民の愉樂に基いて

居る。東京の復興計畫は此點に留意せられん事を希望するものである。仙臺に芭蕉ヶ辻と稱する名所がある。傳ふる所に依れば政宗に依つて作られたものであるとの事、主要街路大町と南町との交點であつて、其の四隅に對稱的に、嚴めしい白壁作りの二階建ての建物を建築したのである。日露戰爭頃まではまだ殘つて居つた。恐らく建築當時にあつては、丸内ビルデングや郵船ビルデングにも比す可きものであつたらう。徳川時代に於ける街巷の美しい語草として傳へられて居る。政宗がどうして斯んた計畫を思付いたものであるか、私の淺學は未だ支那に斯くの如きもののあるを聞かない。恐らくは歐洲の當時の都市計畫の影響を受けたものではあるまいか。帝都の復興には、是非共街巷の廣場に於て斯の如き計畫がなされねばならぬ。譬へ其所に適當に廣場の設定がなされたりとて、其四周に建築せらるゝ家屋が、一定の規律の下に、美觀上から統一が企てられるのでなければ、其効果の大部分を失ふものである。

復興評議會では、廣場に就て相當の議論があり、廣場設置の希望を決議して居る。事實如何なる程度に於てこれが實施せられるであらうか、若し萬一、是等廣場の設置が極めて小規模であるにしても、政宗の芭蕉が辻の如き計畫は、廣場ならざる主要の街巷にも、施さるゝに至らん事を、切に希望して止まざるものである。

（十四）

以上述べ來つたやうな。或る特種の街衢或は廣場等を、美觀上から建物の意匠を統一させやうとする場合には、政府が其部に美觀地區の指定さへすれば、容易にこれを實現し得るやうに市街地建築物法の第十五條に規定してある。今其の條文を摘錄すれば

主務大臣は美觀地區を指定し其地區内に於ける建築物の構造設備又は敷地に關し美觀上必要なる規定を設くる事を得

と云ふのである。此の度の復興帝都には、當然此の地區の指定があるべき筈である。在來の東京にはまだ此の指定が出來てゐなかつた。又市街地建築物法施行令の美觀地區の章の中には四つの條文があるが、其の内の重なるものは左の二條である。

地方長官は美觀地區内に建築する建築物の意匠に關する設計にして環境の風致を害し又は街衢の體裁を損すと認るときは其設計の變更を命する事を得

地方長官美觀上必要ありと認むるときは美觀地區内に一定の區域を指定し其區域内の建築物の高、軒高又は外壁の材料及主色を指定する事を得

即ち、美觀地區の指定さへ主務大臣に依つてなされゝば、地方長官は茲に掲げた丈けの權限を有するのであるから、述べ來つた私の希望は大體に於て出來る譯であり。なほ先きに掲げた市街地建築物法第十五條に依て、主務大臣は、如何やうとも其地區内に於ける建築物に對して規定を新に設ける事が出來るのである。

若しまた。特殊建築會社の如きものゝ手に依て、かゝる地區の建築が統一的に行はれるならば、問題は更に圓滑に解決し得、且つ建築會社も亦これに依て利益を得る事尠くないのを信じて疑はない。

(十五)

湛へられた清冽の水ほど人の心を澄ませるものはない。滑らかに動いてゐる水ほど人の心を柔げるものはない。勢鋭く噴出する水ほど心に潑溂たる快感を起させるものはない。霧となつて飛散する水沫ほど心を輕くするものはない。跳噴の餘勢、散じては霧に虹を宿し、球と凝つては盤に落ちて蓄水の面を打ち、溢れては滑かに盤緣をなめて第二の水盤に注ぐ。此の藝術的光景は、如何に幾何學的階調を主とした是等の廣場にふさはしいか。噴泉の美は、これを木立の間に眺めるよりも、甃や舗石にたゝまれた大地に、石や煉瓦の建物を背景として眺めるによい。世界に名ある噴泉の多くは洵に斯くの如き位置にあり、世界に名ある廣場は殆ど斯くの如き噴泉を有して居る。倫敦より巴里に移つて噴泉の美觀に驚く人は、更に羅馬に遊んで其驚きを深くする。都市の廣場には噴泉は缺く可らざるものである。殊に暑い國に於て其の然る所以を覺へる。

日本の都市には、もつと廣場が欲しいと同時に、もつと豐かに水を出す噴泉が欲しい。若し水道の水をこれに需用する事を惜しむ人があらば、それは眞に都市生活を知らない人である。假りに一歩を讓つて、飲用料にすら不足勝ちな水道を斯くの如きものに用ゐてはならぬとして、東京には關口の瀧に落して居る如き不用な水の多量がある。飲料水でないのだから、少し位不衛生の水でも差支ない。京都でも大阪でも水には不足のない筈である。

廣場の噴泉の意匠は大體に於て建築的形態をとり、これに人像や動物の形をあしらつたものがよい。噴泉の大さと水量とは廣場の大さに比例して作らねばならぬ。小さきに過ぎるよりは寧ろ大なるに過ぎた方がよい。

晝の賑ひにふさはしいのみならず、夜間人定つて、電燈の下に水滴を閃き飛沫を眺めるによい。

(十六)

私共の少年時代の小學讀本には、東京の繁華を說くに、電線は蜘蛛の網の如くとあつた。それは當時にあつてこそ物珍らしかつたに相違ない。併し今日に於ては、甚だ笑ふ可き語であることは誰しも知る所である。此の蜘蛛の網の如き電線と、至る所に無作法に突立つて居る電柱には、市民は甚だ苦しめられて居る。これ等は速かに地下線に改めらるゝ必要がある。同時に各種の地下埋設物は大暗渠の中に整理せられなければならぬ。電線は蜘蛛の網の如くと形容した記者も、今日の地下埋設物の狀態を「もぐら」の巢の如くとは形容しはせまい。しかも大小の鐵管と地下電線との不規則に地下を走れる事、正に「もぐら」の巢の如くであり、道路局が路面を整理し舖裝せる上を、後から後から掘り起して行くを見ては、殊に其感を深くする。傳ふるところに依れば、此の整理には巨額の金額を要するとの事である。恐らくは市民の最も苦痛とする所、しかも今にして何等かの方法の施される事なければ、悔を百年の後に殘すであらう。若し經費の都合上如何ともす可らずとしても、設定せらるゝ美觀地區に於ては、速かに此の整理が實行せらねばならぬ。

更に私をして一般都市としての理想をいはしむれば、電車は總て架空線を廢して地下線式に、若しこれが不可能ならば、或種のものを地下電車に改め、他を自働車を以て代らしむる事、若し街路を走る自働車の總てを、不愉快な音響を發せぬ電氣自働車になす事が出來れば、また更にこれに過ぐるものはない。斯くの如くして整理せられたる路面を、土瀝靑を以て舖裝し、夜間交通の少き時刻に於て淸淨にこれを水洗し、戰前の伯林市のものゝやうに、晴天になほ鏡の如く人馬の影を垂直に路面に投映する事が出來たならば、どんなに美しい事であらうか。整理と淸淨とは都市美觀の重要なる要素である。

(十七)

現行の市街地建築物施工令には、建築物の高さの最大限度が規定されて居る。人間の心理は、是等の規定の設けられる以前には、それほど高いものを建てやうと考へてゐなくとも、斯くの如き最大限度が規定せらるゝと、茲に其限度迄悉く空を取り得るやうに建築を企圖するものである。從て都市の建築物は漸次に上部を平らに切られた箱形のものになりつゝある。

斷面の三角形をなせる屋根は、雨多き地方に於て、木造に依つてこれを防がんとして、必然的に發したものである。又斷面の弯形をなせる屋根は、泥を以て屋頂を覆はんとして必然的に生

じたものである。是等の屋根の形が人をして一種の情感を起さしむるは、全く傳統的觀念より來るものであつて、現在の進歩したる構造の下にありては、必ずしもこれを固守す可きものではない。屋上は使用に耐え得るやうにし、また展望を恣にし得るやうになす可きである。

然し乍ら必ずしも、壁頂を一文字に胸壁（パラペット）を以てめぐらし、建築の外觀を箱形ならしむる事を要しない。要しないのみならず、壁の上部が街路より望み得る建物にあつては、上空に向つて突出せる塔、其他の附加物の設けられる方が、建物の外觀に變化を有しめ、街衢に一層の美觀を與へるものである。

聞く所によれば、當局者は此度の震災に鑑み、特種の建築を除きて、市街地建築物の高さの最大限度を多少縮少せんとする意向を有すとの事である。これに對して敢て異論を挿むものではないが、同時に或種の條件の下に、塔其他の屋上突出物の高さに對して、一層の除外例の設けられん事を希望するのは、今日迄の狀態に照らして大に意義ある可きものであらう。

（十八）

先きに主張せる如き、概して純建築的の美觀を主とせる地區と相待つて、「自然」の風致豐かな、住宅地、公園、遊歩道、河畔等の對立あつてこそ、眞の大都市の面目といふ可きであらう。住宅地は、商工業地域の平坦なるを要するのと異り、寧ろ多少の坂路を有する方が趣がある。そして其街路に接しては、樹木や芝生や花壇やに意を用ゐられる事を要する。我國の都市には公園が甚だ少い。もつと其所に多くの大小公園が設けられねばならぬ。そして或種の大公園の間には、並木の見事な遊歩大道の設けられる必要がある。河川の岸には所々に當然荷上場が設けられるであらうが、其の間々に、是等の混雜を隱くして美しい河畔園が作られねばならない。下水工事の完成と相待つて、河水が清められたら、隅田川とて決して捨てたものではない。そしてそれに架けられる橋はもつと美術的のものである事を要する。

純建築美を主とせる地域と、自然の風趣を主とする地域と、相伴つて大都市には、なほ他方に、蒸氣立ち登り、空高く大起重機動き、鐵槌の響しきりに、熱火の赤く窓に映ぜる工場地の偉觀のある可き筈である。工場建築の美化は近來頻に稱へられ、且つ實現せられつゝある。更に地上の工作物一切の美化が行はれねばならぬ。教育に於て土木學と建築學との間の撤廢に先鞭を付けたのは、獨逸に於ける最近の出來事である。都市全般の美化、これは洵に現代的精神の強き顯はれである　如何な

る部分と雖も寸毫の不整頓、不合理、不快なる形態、不調和なる色彩を有せしめず、都市全體をして一の美術的建築物たらしめる事を要する。現代の都市に於ては、一切の工作物に對して美觀に關する職制を設け、藝術的天分と教養を有する人士をしてこれに當らしめる事を必要とすとは、我輩の豫ての持論である。

（十九）

私は餘りに多く視官の美を說いた。都市の美に對しては、其所になほいふ可き聽官の美が存する。

カンパニーレから鳴り渡る組鐘の階調に、アベ・マリヤを稱じつゝ、寺をのぞんで默禱したのは、中世紀の伊太利市民の事である。ベッフロイから遙かに漂ふ鐘の響きに、町の廣場を指して集まつたのは、復興期のニーデルランドの市民の事である。彼等が如何に町の誇りと歡びとを鐘の音と一緒にして感じたか。彼等にとつては此の鐘の音が、何物にも勝さる力強いそして美しい情緒を心に懷かせて呉れたものであつた。併し乍ら現代の大都市に於ては最早斯くの如き事は到底不可能の事に屬する。無線電話（ラヂオ）の使用が行渡つて、街の角、家の中、いたるところに於て、都市の中心地で奏でられる音樂が聞き得るやうになつてゐなければ、現代の大都市に於て斯の如き事を望むのは最早不可能である。都市を音に依つて美化するものは、第一に公園地に設置せられる奏大樂堂（バンドスタンド）であらう。東京位の大都市に於ては少くとも三四ヶ所の大奏樂堂が設けられねばならぬ。そして獨逸あたりの都市のやうに、市には常時音樂隊が組織せられてあり、陸海軍の軍樂隊の派遣を乞ふ以外に、大演奏が可能になつて居て、每週二三回は必ず演奏がなされるやうにならなければならぬ。戰前の獨逸では斯ういふ事は盛であつた。殊にミュンヘン市の如きは最も力をこれに注いだもので、是等の都市の多くは、每年夏季になると音樂のシーズンが始まる。此の季節には、これを聞きに集る外國人の數も相當多い。是等の都市では、夏の日は一人で數ヶ所の演奏會を聞きに行かれる。場所は公園内の青葉の影とか、レスタウラントの庭内喫茶所の如き所で、人々は晚餐を取り乍ら、珈琲を飲み乍ら、紫煙をくゆらし乍ら、靜にこれに聞入る事が出來るのである。日曜や祭日には、市民は家族をこぞつて公園に遊ぶ、そしてその歸りには、例のレスタウラントの屋外喫茶所で簡單な食事をとり乍ら、美妙な諸音に聞きとれる。それは極めて平民的な事で、決して浪費的な事ではない。日本の都市も早く斯うならん事を希望する。坪内博士の主張されるページエントなどもまた盛になるとよい。

先きに私は、街路の交叉點に挾まれる主要部分に、市民娯樂用の美術的建築の建てられる事を望んだ。斯ういふ場所には市直營の演奏場（コンサートホール）なり劇場なりが設けられるとよい。又市民のために、美術館なり科學館なりが設けられねばならぬ。是等もまた都市美の上に重要なものである。

（二十）

日本の都市に於ては、なす可き多くの事に追はれて、比較的是等の問題が閑却されて居る。併し美は都市にとつて重要なるものである。根本計畫に於てこれを度外してはならぬ。美は後からの修飾であつてはならぬからである。アゼンスの全盛時にはアクロポリスの美觀にこれつとめた。羅馬が盛であつた當時は市民は羅馬市の裝飾に全力を盡くした。東洋の諸都市と雖どもまた同様である。伊太利を初めとして歐洲諸都市は中世紀の後半期から殷賑を増し來つて、市民は都市裝飾に意を用ゐ始めた。文藝復興期に及んで益々此の傾向が高まつた。そして漸次に今日に至つたものである。しかも近代科學の勃興と經濟の發達とは、都市の交通と保安と衞生とが重要視せらるゝに至つた。そして多くの都市學者は是等の條項を重しとして、比較的美觀を度外視する傾向がある。そして其說く所に曰く、美觀を重しとするは文藝復興時代の都市計畫の事であると、其の謂れるやはまた甚だしいものである。

近代都市計畫の本場である所の、戰前の獨逸諸都市は極めて美觀を重要して居た。是等諸都市は、公共藝術や街衢の壯麗を、恰も産業の資本の如く見て、市の美觀を增すことは市の發展上缺く可らざる事として居たといつてよい。市民は演奏場、劇場花園、美術館、博物館等に對する支出に不賛成を唱へぬのみならず、街路を飾り、銅像を建て、噴泉、時計塔の如きを增設する事に甚だ努力したものである。橋梁、停車場其他の公共建築物は、如何に小なるものと雖も悉く甚大の注意を以て意匠せられた美術的産物であつた。そして斯くの如くなす事に依つて、人口は増加し商業は發展すると深く信じて居た。事實これに依つて、健全なる移住者を增し又觀光客を引付けた。斯の如くにして都市は益々發展し、産業は殷盛となり、地價は上騰し、これに依つて市の收入は增加し、市民の税率は低下した。市中は整頓して如何にも裕寛で、且つ演劇演奏をはじめとしてあらゆる高尚な娯樂機關の備はれる爲めに、これが觀光客を歡ばしむるのみならず、市民に對して慰安を與へ同時に敎化に役立つた。獨逸の勞働者の功程が一段抽んでであつた原因の一つは、此の慰安の機關と精神的娯樂に基いて居つたといはれる。

都市の美觀が、市民の慰安の上にも、健康の上にも、精神的向上の上にも、從て風紀の上にも、更に經濟の上にも重要なるものである事に付ては、最早言を費やす必要はなからう。

(二十一)

此の稿を終らうとする日の午後、日比谷の第一中學の前から凱旋道路を通つて二重橋外の宮城外苑に出て、恰度土堤を切りぬいた所の少し內から、夕日に輝く丸の內の大建築の集團を眺めて其壯觀に魅せられた。こんな美觀を今迄見落して居たのか、それとも今日は頭の具合でさうなのか、長く書齋に籠つて東京の市街の貧弱を心に描いてゐたためか、それともまた夕日が殊によかつたのか。最も近い位置にあるので特に抽でゝ見える郵船ビルデングを中心に、左右の海上ビルデングと丸の內ビルデングとが稍低く郵船の後ろに各其一隅を隱くして、次にまた其左右の興業銀行と三菱本社とが更に低く奥に一部隱れて、孰れも對角線的(ダイヤゴナル)に其角を見せてゐるから廣がりも一層大きく見えた。郵船が淡樺に、丸ビルが淡紅に、三菱と海上とが白く、興業が淡褐に日に映じて、中央の郵船から左右へ稍正しく段形の、東洋風に Ziggurat を形造り、其間にまた色の階調も見せて、淡ぼかしの黑煙を中雲に、鱗雲の輕くたゞよつた空の下に廣場の松の上遙かに浮び出てゐた。私は思はず會心の笑みをもらした。たゞ慾をいへばも少し民族性の豊かな表現があると一層よいと思つた(併しそれは、いふ可くして行ふに難い事なのではあるが。)

櫻田門から霞ケ關臺の議院建築の眺めが、將 美しいものになるであらう。此の門と此の敷地の間には高低に於て六十尺の差がある。議院の表玄關から、まさに正しく東の見下ろしが櫻田門に當り、其の延長がまた馬場先きに一致する。櫻田門と議院とを結付けて霞ケ關離宮と陸軍省との間を貫通して大道路が設けられ、其兩側に諸官省が並ぶ計畫になつてゐる。三宅坂の景觀と相待つて此處にこそ眞に帝都としての東京の壯觀が望み得られるに相違ない。一日も早く其完成を見たいものである。

(大正十二年十一月二十六日記了)

山本内閣對政友會觀

文學博士　三宅雪嶺

故林董伯の言に、自分が最も力ある人物と認めたのは、大久保が遥に次いで星亨だつたとあるが、山本權兵衛は之と趣を異にしつつ、一種力ある人物と看做さねばならぬ。多少境遇に支配せられても、境遇以上に自身の力を現はす所がある。薩摩に生れて便宜を得たとし、何處に居るも權兵衛として指目され別格扱ひにされた。大佐で權兵衛大臣と知られたのは、何の事情あるにせよ、尋常の大佐と違つて居るだけの事がある。何處でも居る所で必ず大將らしく見へ、大將らしく構へる事が出來る。然し大久保又は星と違ひ、自ら基礎を築くのでなく、基礎がある所、又は基礎の築かれさうな所に居て、其處で天晴れ大將顔する事になる。自ら築いた基礎でないが爲め、事によつて之を離れるを餘儀なくされ、離れると共に、浮き上る手懸りが無くなりながら、何時か勢が變り、己れを迎ふべきを察して居る。當らず觸らず、人と共同して行くよりも、自ら居る所で人を統率する方であつて、人が迎へねば、孤立するを免がれぬ。孤立しても屈せず、己れの力で何事かを爲し得るを信じて居る所に強味があるものゝ、人が迎へるか何うか豫め知れず、迎へねばそれ限り浮ばぬかも量られぬ。加藤内閣當時に病死したならば、シーメンス事件に手を負ひ、慘目な終りを遂げたと見えたらう。彼自らさう思はず、俺は内地の小さな事を氣にせず、世界に着眼して居るとし、己れの頭を抑へ得る者無きを信じて居る。自ら信ずる程の力あるか、或る部類で待ち設ける程の力あるか、疑はしい限りとし、兎も角も虎が嵎を負ふて居るかに思はれ、或る場合に臨み權兵衛を擔ぎ出さうといふやうになり、顯はれ出づれば、その前に出でる者が一目置かねばならぬ所を妙とする。

彼は先輩に引き立てられながら、その力を藉るよりも、自らの力を暢し、必要缺くべからざる人物なることを認めしめる。西郷に引き立てられ、彼れ亦之に服しつゝ、實際の業務に力を

暢し、權兵衛が居なくては分らぬといふ調子であつた。伊藤公が西郷侯と仲好く、延いて山本を知り、之を引立てる所があり、山本も伊藤の物解りの好いのに快く感じた。陸軍の棟梁たる山縣公の系統は伊藤と面白からず、伊藤は勢ひ海軍に親しみ、海軍で羽振りの好い山本は、伊藤と共にする順序になり、伊藤が政友會を組織してから、山本が何かにつけてその領袖と談し合つたりする。山本は事大主義を以つて滿足せず、我が力を加へて更に一層大にし得る所に立たうとし、其處に聊か渦毛曲りがあり、特徴とすべき所がある。彼既に桂内閣に海相として、首相と孰れか重きやを疑はしめたが、桂がトントン拍子に飛び上り、公爵になり、内大臣になり、更に首相になり、新政黨を組織し、政友會を取つて代らうとし、政界の雲行きが如何になるかが分らず、西園寺侯が違敕問題で政友會總裁職を辭し、新政黨が勝つか政友會が勝つか、憲政擁護運動が何處まで發展するか、勢ひの分らぬ時、山本は難なく桂を叩きつけ、内閣組織の大命を蒙り、政友會と共にし、原内相・高橋藏相・松田法相等と役割を定めた。

　それで山本が政友會と切つても切れぬ仲になつたかと云へばさうでなく、己れの意に從ふ限り、政友會の領袖と共にするのであつて、何時如何になるか疑がある。山本は政友會を率ゐ、新政黨を壓倒し得るを覺え、政友會も山本に順ふ方政權を得、多くの便利あるを知り、互に相提携したけれど、合せ物は離れ物、一旦利害を異にし、相分離するを免かれぬ。シーメス事件の起るや、山本は内閣員の堅く一致するを期待したが、原内相は初めこそ飽くまで首相と倶にしたれ、いよいよ事が難しくなると見るや、何處までも引きづられては困る、大抵にして連帶責任を免がれねばならぬとて、内閣瓦解の已むなきに終つた。山本が政友會に捨てられた譯である。山本はシーメンス事件に何程の關係あるか、自ら斷じて之れ無いと明言しても、之を證明する所が無い。山本に快くない山縣公の關係者が火の手を煽り、總攻擊の形になり、山本は踏み止まらうとして得ず、順調に力を暢し得るの反對、逆境に遑々の體であつた。從來出來上つた所にて大將顏するので、上へ下へのゴツタ返しに、當惑せずに居れぬ。長派の首相は早く事の難しくなるのを見て取り、窮する前に引き上げようとし、薩派の首相は事が難しくなるのに退くを卑怯と感じ、いよいよ踏止り、いよいよ困難に陷つてしまふ。上下ゴツタ返しの騷ぎに馴れれば、その間に處置するの工夫を得るの望ないでなけれど、首相たる人にその經驗なく、如何に強情我慢の人でも仕樣がたくなる。山本は今少しく

巧みに政治を取り得ると思へたのに、さう行かず、コンミツションン取りの張本として葬られた。

その後内閣幾變遷し、當年山本内閣の原内相が首相となり、續いて當年山本内閣の高橋藏相が首相となり、更に山本の後進生なる加藤大將が首相となり、山本權兵衛なる者が何處に何をして居るかを問ふ者が無く、シーメンス事件で全く葬られたとせられた。山本は交際場裡に出でず、丸で問題にされぬ。然し前の山本を知つて居る者は、その當時閣僚を威壓し、貴衆兩院を睥睨したのを想ひ出し、現に何の狀態にして居るかを見ようとする氣持になつたりする。一向音沙汰無いが、何を爲て居るか、面白半分に訊ねるのがある。風來人の面會を避けるけれども、話しすべき人と話するを好み、話しすれば縱橫に快談し、當年の權兵衛未だ衰へずとの意氣を示すに足る。眼中畏るべき者なく、我れ一度び局に當らば現狀を一變し得るかに吹き飛ばすのであつて、當に薩派が山本を引出すの必要を感ずるのみでなく、種々の方面で之を引出さうと考へるに至る。既に政友會が内閣の改造非改造の爭ひで苦しみ、憲政會が政權に緣なくて意氣阻喪し、國民黨が解散して數十名で俱樂部を造り、加藤内閣の後に誰が内閣を組織すべきかの問題起り、種々の案の出でた時、山本が動き出すと知れ、世間でこそ左程に思はされ、元老准元老等に於いて若干首相候補者のうちに群を拔いて居るかに認める。他の候補者はとても較べものになりさうもない。それぞれ順序がついて、山本が大命を拜し、内閣組織に取掛るや、彼自ら當代第一の人物を以つて居り、世に所謂首相級の人物を集めやうと考へた。十年前と違ふの明かなれど、彼山本は政友會總裁高橋子を見る事、猶ほ當年の藏相同樣である。高橋は山本の下に藏相職を勤めても、後に首相職についた身分であり、現に最大政黨政友會の總裁であり、大臣になり得べくもない。高橋は痩せても枯れてもそれ位の氣位がある。然し山本の前では矢張當年の藏相たる態度を離れる事が出來ぬ。何處か下た手に附くを免かれぬ。憲政會の加藤總裁は剛腹を以て聞え、山本に下らうともせぬが、何處か下るやうに見える。世に首相級の人物とする後藤、犬養、田中、田等皆閣僚となつた。

山本首相は政黨の力を知つて居るやうで、頗る多寡を括り、我れと共にするものは來れ、共にするを欲せぬ者は去れとの態度である。彼は政友會と共にするの便利を思はぬでなく、前任者加藤が行つた如くせば世話なしであるが、大政黨に頭を下げるを好まず、頭を下げるに及ばぬ時に顯はれ出で來つて居る

恰も前に新政黨が興らうとし、政友會を提げて之に臨つた如く、今は總選擧で政友會が如何になるべきかの瀬戸際に立つて居る。何の政黨の力を借らうとするよりも、何の政黨に力を貸さうとし、政黨が陰に陽にその力を借らうとして居る。山本はさういふ場合でなくては政局に當らうとせず、當るべき機會を得るに難い。關係は種々であり、何の政黨と共にすべきかが定まらず、定めやうもなく、内閣自ら標榜する所で、總選擧を公平にし、新に政界の分野を明白にしようと云ふのである。政黨は政府黨として便利を得るの慣はしになつて居り、干渉なくても政府黨たるが都合好く、干渉あれば尙ほ更らの事になる。如何に干渉せぬとて、地方官の手心の恐るべきを忘れぬ。況して山本内閣が普選案を提出し、若し議會を通過せば、明年の總選擧を普選に於いてするの意氣込みらしく見える。政友會の二百八十名は、普選反對で當選したのであり、それが普選で何の運命か心配せずに居れぬ。非政友運動が何の結果を齎らすか、成功しさうになれば、政府で乘り出すのがあり、成功しさうもなければ、只様子を見て居らう。

政友會側では普選になつても、區制が現在と大差なければ別段の變化なからうとし、最後に其處で食ひ止めようとするが、それ以前に普選案をして議會で間に合はぬやうにせしめようとし、尙ほそれ以前に他の議案を以つて衝突し、同じく總選擧に臨むならば、普選に觸れず、全國の選擧人に受けの好いやうな方法に於いてしようとして居る。ならう事ならば内閣を破壞するに如くはなく、それが行はれぬならば、危險分子後藤内相を除くべしとする。後藤は内相で復興院總裁を兼ね、復興院は匆卒の際に出來上り、復興審議會でも攻撃の鋒を向け、老人と罹災區民との板挾みになつて居り、何處から何う攻撃しても、傷を總裁に蒙らすに定まつて居る。後藤子は前山本内閣當時、新政黨創立委員であつて、政友會と逆行した。今は直接にこそ非政友運動に與づからね、非政友を念とすれば、既成政黨に變化を起させようとすると思はれる。その點で犬養遞相も同意するらしい。山本首相が此等の人を内閣に置く限り、政友會と共にし難く、寧ろ之を敵に廻すの已むを得ぬやうでも、山本自らは政黨以上に居り、何處迄も各政黨を引き廻し得ると考へて居る。さう行くか何うか甚だ疑はしいにせよ、政友會側で山本内閣に對し、兩天秤を掛けて居るのがある。幹部で協議したのでなく、以心傳心、自然にさうなつて居り、謂はば和戰兩方針を指さうとして居る。今更ら山本内閣をして政友會と提携せしむるを望まぬが、總選擧に何等かの便宜を得たい底意があり、一方

で既に風靡し、他の一方で之でもかと促さうとする。各領袖の意向があり、對議會策について幾度か協議を凝さうが、此邊で如何に落着くか、或は騎虎の勢ひにて政友會が窮地に衝突し來るのみならず、憲政會も之に應じ大騷ぎにならぬと云へぬが、閣僚が甚だしい失策を演ぜぬ間、總選擧を以つて各政黨を操るべき勢ひになつて居る。

事變は豫想する所に起らず、豫想せぬ所に起るのが常にて、特に首相が自ら高く止まるだけ、何處から時變が起らぬと限らぬ。只、復興事業の如きは非常の場合で、極めて困難と見え、それだけ却つて困難でなくなつたりする。首相級の人物を集めた內閣として、尋常の內閣よりも智惠が出さうであつて、案外見掛け倒しかも知れぬ。見掛け倒しの跡形があり、今後隨分覺束ないと云はねばならぬ。然し其處で政黨をぢらす事も出來る。もう困つて居るので援助ゝ求めて來るであらうと考へさす。表面に難しい顏をして居つて、內心にもう何か話しに來ようと待ち構へて居る。政友は一絲亂れぬと云ふても、心の底は十人十色、總務級で何方へ轉んでも損をせぬ床次氏は、權兵衞親分に對し頭の上るべくもない。何にでも從ふ程位置が低くなければど、山本首相の力を藉りて置いて政友會に根を張らうとするの嫌ないでもない。政友會が山本に渡りをつけるのは先づ床次であり、之に渡りをつけねば、鵬島の根據が如何になるかが疑はしい。政友會も山本に對して全く赤の他人でなく、前に一つ鍋を突ついた仲、何うにか縒を戻し得さうと思ふのが少くない。樞密院及び貴族院よりして、內閣を窮境に陷らしめようとするのがあり、或は正々堂々正面より攻擊し、內閣を倒し、政友會內閣を作らうとするのもあるけれど、其處まで足並みを揃へるのが甚だ難く、今一度勢ひが逸まぬ以上、誰も何とも云へぬ。何處で何う急轉直下するかも測られぬ。

然し山本首相は何處までも自ら第一流を以て居り、國家の爲めに天下と共にするのみ、公等皆乃公を信賴して可なりとするの抱負を失はぬ。この抱負に伴ふ智能及び氣力が疑はれる。けれども、今日首相級と見られる人物ゝ引廻さうとするのは、山本の外に誰があるか。時代錯誤と云はば云へ、比較的力ある人物とせねばならぬ。十年間引込んで再び出で、當年の部下が幾人も首相になつたにも拘らず、自ら何處までも當年の部下らしくし、部下であつた者が部下の心持ちになるところが奇でないか。孰れ何とかして失敗しようが、如何に失敗するか、失敗するに先んじ、大久保以後に星あり、その後に山本あり、長命し

ただけ他人の及ばぬ仕事を爲し遂げたと見えるやうにするが宜い。意外に聽いかも知れぬけれど、折角名物中の名物男は、何とか名物に叶ふ事をして貰ひたい。矢張り名物に旨い物なしか。（完）

子孫を愍む

理學博士　丘淺次郎

一

私は數年來どの雜誌にも全く寄稿せずに居た、そして、どの雜誌から執筆を依賴せられても、それに對する私の返事は何時も版で押したやうに同一であつた、卽ち、私は今、研究する材料が澤山あるから外のことには到底手を出す餘暇がない、他の社からの依賴も悉く斷はつて居る所ゆゑ、貴社からのも止むを得ず御斷はりする、この段惡しからず御承知を願ふと、かやうに云ふて今まで絕對に書かなかつた、若しも其まゝ何時までも書かずに居るならば何も云ふことは無いが、今回本誌にこの文を揭げる以上は、前に御斷りした方々に對して、この文を書くだけの餘裕が生じた事情を明にせねばならぬ、これは自分一身に關するだけで、一般の讀者諸君に取つては何ら直接に關係のない事であるが、右のやうな次第ゆゑ、宜しく御許しを願ふ、

私は豫ねてから蛭類と海鞘（ほや）類との研究に從事して居たが、始めてから已に三十年にもなる故、その間に自分で採集したもの、知人から寄附せられたもの、外國から調査を賴まれたものなどで材料は相當に豐富にあつた、その產地も、比較用のヨーロッパ產、アメリカ產のものの外に、インド、シャム、マレイ半島、フイリピン、支那などからカムチャツカ、アレウト列島、アラスカ邊に亘り、蛭類は約五百、海鞘類は約七百の硝子瓶に入れてあつた、その中のおもな種類だけでも解剖して一々顯微鏡で調べることは中々容易な骨折りではない、特に私のやうに每週十數時間の講義と、それに附帶する仕事とを引き受け、

その上、助手も無ければ、職工も頼めず、小使の仕事までも自分でせねばならぬ境遇にある者に取つては、七十まで達者で生きるものと假定しても到底爲し遂げられさうには思はれぬ、しかし、兎に角やり掛けたことであるから、責めては出來るだけの事をしたいと考へたので今から六年前に、私が丁度五十歳になつた時から、學校の務めの外は、講演も雜誌に書くことも一切斷はつてたゞ研究だけに從事することに定めた、私が今まで諸方の雜誌社からの執筆の依頼を悉く斷はつて居たのは、實はかやうな事情のためであつた、

然るに九月一日の大地震で棚に並べてあつた硝子瓶は殘らず倒れたり落ちたりして破損したものも頗る多かつた、その後、滿足な標本だけを撰り分けて整理して置いた所、今度は十一月十六日に學校から火事が出て、殘つた標本が殆んど目茶、目茶になつた、後になつて棚に列べて見たら約三分の一位は無事であることが知れたが、鎭火のすぐ後に此所にも彼所にも壞れた硝子瓶が一面に散つて居るのを見たときは、まづ全部が破壞されたものと思はざるを得なかつた、またこれ等の動物を調べるに當つては常に他の人々が研究した報告書類を參考しなければならぬが、この書類が同じく目茶、目茶になつた、今までに世界各國の學者から寄贈せられた二千册ほどの論文は水に濡れ、靴で蹈まれ、半分に切れたり、一枚づゝに離れたり、圖版の如きも、どれに屬するか分らぬ樣に成つたものが多い、泥で汚れたのは手傳ひに來た女子高等師範の生徒諸氏に洗ふて乾して貰ふたが、皆ばらばらに成つて居るので到底直に用ひることは出來ぬ、以上の如き次第で暫くの間は研究の材料も參考書類も用をなさぬ故、一寸暇が生じたのである、前置きは之だけとして、直に本文に移る、

二

この度の地震や火事を以て天譴であると說く人があり、これを聞いて成るほどと感服する人も少なくない樣である、これ等の人々の說によると人間が近頃餘り調子に乘つて贅澤になり過ぎ、世間一統が輕佻浮薄になつたので、天がその非を悟らしめるために地震と火事とで譴つたのである、併し、かやうな考へ方は地球を以て宇宙の中心とし、人間を以て萬物の中心とし、且人間と同じ樣な喜怒哀樂の情を持つた無色透明の瓦斯體の生物が空中に浮んで居る如くに考へて居た昔しの思想の殘り物であつて、未開時代の坊主の說教としては或は宜しいかも知れぬが、廿世紀の今日の世の中には到底通用すべきものではない、天と云ふ言葉は、宇宙とか神とか云ふ言葉と同じく、人々によつて

意味の取り様が違ふが、昔の人は、とかく宇宙を小さく見、人間を大きく見て二者を恰も同じ列に並ぶべきものとして考へる癖があつた、これは智識の範圍の極めて狹かつた間は素より止むを得ぬことであつたが、今日では最早、取るに足らぬ考へである、

「抑々宇宙とはどの位の廣さの有るものかと考へるに、晴天の夜に當つて天を仰げば一面に星が見えるが、我が太陽系に屬する若干の遊星を除けば、他は總べて太陽と同じ樣な恒星で、肉眼で見えるものだけを算へても四五千はある、天文學者は地球に達する光の強弱によつて、星を數等に分けるが、肉眼で見えるのは、其の中の一等星から六等星位までに過ぎぬ故、極めて小部分である、今日の望遠鏡を用ひて見れば、十九等星、二十等星などと稱する微な星までも見える故、その數を總計すると、少なく見積つても二千萬以上は有らう、而して、これ等の星は地球からどの位の距離にあるかと云ふに、其の最も近いものでも、地球まで光線が達するには殆ど四年位を要する、其の次に最も近いものからは凡そ六年半を要する、遠いものに至つては光線が地球までに達するには數千年も掛かる程である、光線は一秒間に七萬五千里も走る極めて速力の速いもので、三千七百萬里も距つて居る太陽から僅に八分餘で地球に達することが出來るが、この非常な速力を以て數千年も掛からねば屆かぬと云ふやうな距離は到底我々には明に想像することも出來ぬ、

假に或る人が地球から最も近い「アルフア、ケンタウリ」と云ふ恒星まで移住して、其所から太陽系の方を眺めたならば如何に見えるであらうかと云ふに、たゞ太陽だけが一點の輝く星と見えるのみで、其の周圍を廻轉する水星、金星、地球、火星等の如きものは素より少しも見えぬに違ひない、宇宙の廣さに比べては、我が太陽系の如きは殆ど何の大さもない一の點に過ぎぬ、宇宙には望遠鏡で見えるだけでも我が太陽系と同等なものが二千萬以上もあること故、この地球の如きは、宇宙を公平に見渡す際には到底勘定に入る程のものでない、然るに我々はこの微細な地球の表面に住んで居ながら、天地人を三才などと名づけて、天も人も同じ等級のものの如くに信じて居たのである。」

以上は私が今から二十年前に書いた「人類の誇大狂」と題する文の中の一節であるが、今日これを讀んで見ると、恰も天議論者に對して態々書いたかの如くに感ぜられる。假に天に人間と同樣の腦髓があり、人間と同樣の精情意の働きがあるとしても、人間は宇宙に比べて餘り小さ過ぎるから天も其所までは注意が行き屆き兼ねるであらう、牛の角に止つて居た蚊が、その牛の鳴くのを聞いて、重ければ降りて上げましやうかと云ふた話を

ラテン語の稽古本で讀んだ覺えがあるが、大地震があると直に、これは天が人間を譴つて搖らせたのであると解釋するのは、自己を誇大する程度が右の數によく似て居る、

また或る雜誌に今回の震火災を前古未曾有の大自然の大破壞であると書いてあつた、東京や横濱の燒跡を見てかやうに感じるのは無理もないが、實際地震によつて地面の動いた寸法を地球の大さに比べて考へて見ると、大自然の大破壞などと云ふ文字は確に誇大に過ぎる、周圍が四〇、〇〇〇、〇〇〇メートルもある地球の表面上の一點で地殼が僅に〇、一二メートル動いたのであるから、振動の幅は地球の周圍の三億分の一により當らぬ、假に我々の皮膚の一部が、體の周圍の三億分の一だけ振へたとしたら如何であらうか、餘り振動が小さいために當人は少しも氣が附かずに居るに違ひない、立腹するとよく顳顬部の皮膚を無意識的にピクピク動かす人があるが、今回の地震は地球を標準として考へれば到底このピクピクにも及ばぬものであつた．されば、この度の震火災は、それに出遇ふた人間に取つては無論大破壞であるが、自然から見れば殆ど勘定に入らぬ微小破壞に過ぎぬ、

さて、地震も火事も已に過ぎ去つたから、今後は專ら復興に努めなければならぬ、而して、復興に努めさへすれば無論復興は出來やう、元々人間の力で造つた物は再び人間が骨折りさへすれば、舊の通りに出來るのみならず、知識や方法が進んだだけ改良も進歩も著しいであらう、震火災が一大災厄であつたことは云ふまでもないが、一面には古いものを片付けて、進歩や改良を促す上に頗る有効であることは決して疑はれぬ、されば私は今回の地震や火事が天譴であるなどとは決して考へぬが、然らば人間は全く天譴を蒙らぬかと問はれると、私は慥に蒙つて居ると答へる、但し私の云ふ天譴は、一回の地震や一回の火事で濟んで了ふやうな一時的、突發的のものではなく、已に昔の時代に始まり、今もその最中で、今後も長く引き續くであらうと思はれる天譴である、我々の子孫は皆この天譴を蒙るべき運命を持つて生まれ、恐らく之を免れることは出來ぬであらう、私がこの文に「子孫を愍む」と云ふ題を附けたのはその爲である、

三

私が天譴と名づけるのは決して、人間と同じ樣な精神作用を有する「天」なるものがあつてその物が人を譴ると云ふ意味ではない、私の云ふ天然とは天然自然の廻り合せによつて、或る種類の生物が滅亡に向ふことを避け得ぬ場合を指すのである、人間が天譴を蒙ると云ふのも、決して、誰が惡いことをしたと

か、何民族が罪を犯したとか云ふて、それに對して罰を受けると云ふ意味ではない、當然爲さねばならぬ樣な廻り合せになつたことを誰もが爲したために、その結果として、人間の生存狀態が次第に困難に成り行くことを云ふのである、この事は今回初めて發表する譯ではなく、已に幾度も書いたことが有るが、何時も甚だ簡單に述べただけで頗る不充分な書き樣のものばかりであつた、しかし、議論の筋道だけは至つて簡單明瞭であるから、次にその要點を列擧する、以下揭げるのは嘗て私の書いた「現代文明の批評」と題する文の英譯の首に著者として私が英語で書き添へたものを更に日本語に譯したものである、

一、人間が總べて他の動物に打ち勝つたのは道具を用ひたからである、人間は腦で道具を發明し、手で之を操縱した、それ故、人間は腦と手とによつて他の動物を征服したと云へる、

二、人間は孤獨では何の力もない、多數集まつて社會を造つて居たので虎や象にも勝つことが出來たのである、して見ると、地球上で人間が最優者となつた原因は、特に發達した腦と、運轉の自由な手と、社會生活とであつた、

三、總べて他の動物に打ち勝つた後には、人間は人間同志で戰ふた、團體と團體とが生存のために相鬪ひ、生存に適する團體だけが勝つて生き殘り、生存に適せぬ團體は敗けて滅び失せた、

四、かやうにして自然淘汰が行はれ、團體の生存に有利な性質は次第に發達した、團體の生存に最も必要な性質は先天的の協力一致の精精である、自然淘汰の續く間はこの性質は何所までも發達した、

五、他の動物では一團體の大きさに一定の際限があつて、之を超えると團體の纏まりが附かぬ、この際限に近づくと團體は必ず分裂し、新に生じた二團體は生存のために互に相鬪ふ、かくして自然淘汰の働きは何時までも止まぬ、

六、人間だけはこの規則の例外である、人間は相戰ふには道具を用ひる、精巧な道具を使ふものほど戰ひに勝つ見込みが多いから、道具は益々精巧と成つた、通信や運輸の機械が精巧になるに連れて、人間の團體は何所までも大きく成つた、

七、團體が非常に大きく成つて了ふと、その間の生存競爭の結果は、小さな團體の間に於ける如くに徹底的ではあり得ない、敗けた團體でも大多數の者は生き殘つて子孫を遺す、かくして自然淘汰の働きは段々鈍くなり、終には全く止むに至るが、その時から先天的の協力一致の精神は次第に退化するを免れぬ、

八、團體生活を營む動物には平等型と、階級型との二類がある、平等型の動物には主人とか下僕とか云ふ樣な階級の別が絕

對に無い、階級型の團體では、一番强くて一番利口な者が大將と成つて他の者は悉くこれに服從する、哺乳類のやうな生後の經驗によつて次第に利口に成つて行く動物では大將の經驗を最も有効に利用する方法として階級制度を採るのが最も得策である、

九、平等型の團體では自然淘汰の結果として蜜蜂や蟻に見る如き驚くべき團體的本能が生ずる、階級型の團體では自然淘汰の働きにより協力一致の實を擧げる手段として、絕對服從の性質が發達する、

十、人間は初めから階級型の團體を造つた、團體の小さかつた間は、その間に自然淘汰が行はれたので、絕對服從の性質が絕えず進步した、團體が餘り大きく成つて自然淘汰の働きが止んでからは、この性質は次第に衰へた、

十一、團體が大きく成ると一人の司配者が直接に全部を統轄することが出來ぬから補助する者を要した、かくて、團體は司配する階級と司配せられる階級との二つに分れた、

十二、先天的の協力一致の精神が盛である間は階級の間に爭鬪が有り得なかつた、その譯は司配する階級の者は全團體に有利なことより外には命令を下さなかつたからである、司配せられる階級は苦情を云ふ種は一つも無かつた、

十三、先天的の協力一致の精神が衰へるに從ふて、司配する階級の者はその特權を濫用し始め、自己の利益のために、司配せられる階級を壓制し出した、

十四、先天的の服從精神が或る程度まで減少すると、司配せられる階級の者は壓制を苦しく感じ、我慢が出來なく成つて、自由を得たいと叫んだ、

十五、以上の見地から觀察すると、人類の歷史はパラボラの形に似て居る、登る方の部は團體が未だ小さくて自然淘汰が働いて居た時代に相當し、降る方の部は團體が大きく成り過ぎて自然淘汰の働きが止まつてからの時代に相當する、

十六、現代の人間は上り阪の時代に發達した性質と、下り阪の時代に發達した性質とを合せ備へて居る、利他は前者の代表的のもの、利己は後者の代表的のものである、人間のすることに限なく矛盾のあるのは、斯樣な歷史を經て來た證據である、

十七、人間が腦と手とを用ひて種々の不自然な生活を始めたために、體質が絕えず弱く成り來つたことは今日一般に認められて居る、

十八、初め人間をして總べて他の動物に打ち勝たしめた腦と手とは、今は身體的にも精神的にも人間を引き下げて居る、而してパラボラの頂點に居た頃に人間が持つて居ただけの先天的

の協力一致の精神を再び獲る望みは到底ない、

以上は人間の將來に關する私の學說の要點を恰も庭の飛び石の如くに個條書きにして纏めたものである、素より飛び石のことであるから一の個條から次の個條に移るには一寸跨いで貰はねばならず、また文を成るべく短くするために一足飛びにした所もあるが其所は宜しく大股に飛び越えて貰はねばならぬ、それだけの推理力の負擔を承知して貰へば以上の十八ケ條で私の考への大體は分つたであらうと思ふ、

四

さて、團體が大きく成り過ぎて團體間の自然淘汰が止んだために、人間の生まれながらに有する協力一致の精神は次第に退歩せざるを得ぬと云ふ私の學說に對して公に贊成の意を發表した學者は今まで一人も無い樣であるが、學者等の贊成の有る無しに拘らず社會の各方面に現はれる無數の事實は絶えずこの說を證明して居る、凡そ學說の價値は、事實によく當て嵌まるか當て嵌まらぬかによつて判斷するの外はない、如何に巧に組み立てられた學說でも、事實に照らし合せて違ふて居れば、大切に保存して置く値打はない、また如何に氣に入らぬ學說でも事實に照らし合せてよく當て嵌まれば簡單に之を捨て去る譯には行かぬ、私の說によれば人間の先天的に有する協力一致の精神は段々退化する譯であるが、協力一致の精神が退化すれば各個人は次第に利己的になり、他人はどう成つても、自分さへ宜しければよいと考へる樣になる、また、人間のやうな階級型の團體生活を營む動物では、協力一致の實を擧げるには絶對服從の性質が必要であるが、協力一致の精神が退化すれば、それに伴ふて、この性質も退化する故、各個人は次第に目上の者を尊敬しなくなる、團體生活を營む動物でありながら團體生活に必要な性質が段々退化すれば、その生活のいづれの方面にも無理が生ずるのは當然のことで、何問題、何問題と稱する厄介な事件が續々と現はれる、これを見て或る人々は、社會の仕組に不完全な點が有るのに因ると考へ、社會改良の案を立て、中にはその案の實行を企てる者まで出て來るが、實行して見ると何時も理想と實際とが大に違ふので、目的は達せられぬ、安政の大地震の際に「安政になるや成らいで大地震、こんな事なら嘉永でもえい」と云ふ歌が出來たと聞いて居るが、多くの改良案は實地に行ふて見ると、うまくは行かず、「こんな事ならば換へいでもえい」と云ふに終る、而して斯樣な結果を生ずる理由は、何時も、改良案を考へた人が、一つ最も肝心な點を忘れて居るからである、人間の協力一致の精神が退化しつゝあることを勘定に入れずに考へ出した

改良案が、到底實行に適せぬは素より不思議でない、理想と實際とが大に違ふのは人間社會の特徵で、その原因を糺せば、何時も、協力一致の精神の不足に基づく、要するに今後の社會は、物質的文明は進歩し、團體的精神は退歩するであらうと思はれるが、若し左樣になれば、私の學說の唱へる所と全く一致する。

五

右に述べた私の說に對して或る人はこの樣に云ふかも知れぬ、成るほど人間は、若しこの儘に捨て置いたら團體的精神が退歩して世の中が次第に惡く成つて行くことも有らう、併し人間には外の動物と違ふて道德と云ふものがある、德育を盛にして協力一致の精神を養成すればその退化を防ぐことが出來やう、人間が今日の優勢の位地に達したのは總べて人力に依つて爲し來つたことである、若し團體間の自然淘汰が止んだために先天的の協力一致の精神の退化するのを避け得ぬとすれば、人力によつて後天的に之を補へば宜しいではないかと、斯樣に論ずる人があるかも知れぬ、この事が註文通りに出來さへすれば誠に結構である、がそれが頗る覺束ない。

抑も教育の效果を擧げるには三つの條件が揃はねばならぬ、良い米を造るには、良い籾種と、良い田地と良い百姓の世話とが必要である如くに、良い人間を造るには良い人間の種と、良い社會と良い教育者とが必要である、氏より育ちと云ふて、子供の時からの境遇によつて大に變化することもあるが、矢張り瓜の蔓には茄子はならず惡い種から善い實は生ぜぬ、團體間の自然淘汰が止んで各個人の生まれながらに有する協力一致の精神が退歩すれば、教育者の取扱ふ人間の素性が惡くなるのであるから、百姓の場合で云へば恰も惡い籾種を培養するのに均しい、但し此所に教育と云ふのは德育だけのことであつて、智育の方は丸で別問題である、種が惡くては百姓が如何に全力を盡しても立派な稻には仕上げられぬ、その上、田地に相當する社會の風潮が善くないとすれば、教育の效果は極めて微々たるものであらう、今日でも他の方面に比して德育の效果が最も疑はれ、多數の有力な教育者が集まつて修身科の效果を一層充實せしむべき途も適切なる方法如何などと矢釜しく論じて見ても一向に良い考へも出ぬらしいが、今後は尙更六かしく成るのでは無からうか、

修身科で授ける教材には種々の個條が並べ揭げてあるが、煎じ詰めれば、いづれも團體生活に適することを目的としたものである、或は直に協力一致の必要を說いたものもあれば、或は社會の秩序を保つために階級制度を重んぜしめるものもある、克己とか節操とか、博愛とか勤勉とか、題目はそれぞれ違ふても、

團體生活に交渉を持たぬものは一つもない、特に政府が權力を以て一種の宗教を强ひる國では、服從を第一の義務とも美德とも見做してその宣傳に全力を盡くす、かやうな次第で德育は殆ど團體生活の擁護を以て目的とするが、團體間の自然淘汰が止んだために退化するのは丁度その團體生活に必要な性質である、卽ち德育は協力一致の精神の退化を防ぐために起つたもので、其の今日非常に重大視せられて居るのは恐らく現代の人間が、生まれながらに有する團體的精神が餘りに薄弱であつて、其のまゝには捨て置けぬ狀態にあるからであらう、然らば今後は如何に成るかと云ふに私の考へでは、人間の先天的の協力一致の精神が退步すべき原因は依然として存するから、將來に於ても恐らく益々退步することと思ふ、また德育の效果は之と反比例に益々微々たるものと成らざるを得ない、服從性の未だ盛であつた頃には之を基礎とした一種の德育を施すことが出來たが、この性質が退化すると昔の樣な德育は全く施せなくなる、かくして幾代かの後には、いづれの社會にも利己心ばかりが强くて、毫も他人を尊敬し得ない人間が多數を占めるに至るのでは無からうか、そして其の頃の德育は恰も「ニュージーランド」產の無翼鳥を集めて、飛ぶことの調練をさせるのと同樣な滑稽に終るのではあるまいか、

六

さて各個人の生まれながらに有する團體的精神が退步すれば團體生活の上に如何なる缺陷が生ずるかと云ふに、之は殆ど無限にあるから到底枚擧することは出來ずまた枚擧するに及ばぬ、何所の國のでも、每日の新聞を讀んで見れば其の中に多數の例が出て居る、しかし、斯樣に云ふただけでは餘り漠然として居るから次に二つ三つ最も著しい點を選んで述べて見よう、

まづ第一には一國內に於ける權力の爭ひであるが、服從性の亡びぬ間は全體の制度は在來の階級別を其まゝに存して置き、たゞ上に立つて權力を握らうと欲する者等が互に相爭ふだけであつた、然るに團體的精神の退化と共に服從性が減少すると下の階級の者が上の者の壓制を承知せぬ樣になり、終には階級制度その物をも覆さうと掛かる、服從性を具へた人間は假に大望を起したとしても、自分が上の階級に立ちさへすれば宜しいのであるから、權力者の代が變はるだけで、階級制度その物は少しも動かぬ、然るに服從性が無くなると上下の差別の有ることも快く思はぬ故全部の仕組を改めねば氣が濟まぬ、所が從來の階級制度で不當の利益を占めて居る側から見れば、階級制度を覆されることは殆ど自分等の存在を危くされることに當る故、

有らゆる方法を盡して之を防がうとする、かくて何れの國にも激しい階級戰が起るが、相手を負かすには團結が必要であるに拘らず、團體的精神の退化した人間には之が中々六かしい、今日の世の中は大體は昔からの引き續きで、階級制度は其まゝに保たれてあるが、服從性の退化した人間も少しづゝは已に現れて來た、早く出世して金ピカの大禮服が着たいと思ふ多數の者に交つて、大禮服を着て寫した寫眞を見ると、その人物を心から輕蔑せずには居られぬ者も生じた、毎晩男爵になつた夢を見る者と同じ町内に、男爵などと聞けば前世紀の遺物で、到底自分等と同じ一人前の人間ではない様に思ふ者が住んで居ないとも限らぬ、相變らず勳章を何よりの名譽と心得て胸一面に之を飾る者もあれば、之を見ると惡口雜言を浴せ掛けねば蟲が治まらぬ者も出來た、かやうな次第で階級と階級との戰ひは今後は益々激しく成るであらうが、その際いづれが有力であるか考へるに、服從性を具へた人間等は親分子分の關係によつて連絡した一系統を造る故、實際に於ては中々有力である、之に反して服從性に乏しい人間等は、たとひ主義、目的を同じうする者だけが相集まつて團結しやうと試みても、已に團體的精神が退歩して居る故、協力一致と云ふことは到底六かしい、共同の敵を目の前に控へて居る間は、呉越同舟で我慢して居るが、少しでも外側からの壓迫が緩めば、直に仲間割れが始まる、數日前ヴインから送つて來たドイツ學生聯盟の宣傳ビラに、フランス人に大きな鐵鎚で打たれたためにドイツ人が全部凝まつて一塊となる所のポンチ繪があつたが、先天的の協力一致の精神が退歩した以上は、多數の人間を團結せしめるのは外部からの壓迫に限る、かやうな次第で、今後の社會では、上の階級の者は權力を奪ひ合ふて互に相戰ひ、下の階級の者も容易に團結が出來ずに互に相爭ひ、いづれも仲間同志で相戰ひながら、尙その上に、上の階級のもの全部と下の階級のもの全部とが對峙して激しく相戰ふの外は無からう、しかも、上の階級が權力を有するのは服從性に基づいた階級制度に因るのであるから、この性質が次第に消滅して行くものとすれば、權力の維持は追々困難に成るを免れぬであらう。

七

次に富の分配について考へるに、團體的精神が退化すれば無論この方面にも甚だしい無理が生ぜざるを得ない、今日でも大概の社會問題は直接に富の問題に關係して居るが、人間の協力一致が段々出來難くなるものとすれば問題の解決は益々困難になる、同じ社會の内に、朝から晩まで働いても容易に飯の食

へぬ者と、遊んで居ながら贅澤の限りを盡す者とがあるのを見て、富の分配をもつと合理的に改めねばならぬと考へる人は非常に多からうが、さて如何に改めたらよいかと云ふと、實行の出來る樣な名案が中々出ない、案だけは已に幾つ造られたか知らぬが、いづれも實行が出來るか否かは疑はしい、假に實行が出來るとしても、その結果が果して豫想の通りに成るや否やが頗る疑はれる、小說にでも書き綴れば改革後の理想の世の中を美しく示すことが出來るが、實際の世の中では決して其の通りにはならぬ、西オーストラリアに住む或るイギリス人からUnismoと題する小冊子を受取つたが、これは貧富の問題を平和的の手段で解決しやうとする一種の主張であつて、「生產は個人が、分配は團體が」(Individuo produktas, komunumo distribuas)と云ふことを其の標語として居る、これなども實行して見た上で、うまく行けば誠に結構である、

改革が容易に行はれ難いとすれば、當分は今のまゝの制度が續くかも知れぬが、今のまゝでは富んだ者は益々富み、貧しい者は益々貧しく成つて、已に不合理に思はれたものが更に一層不合理になる、昔は總べて手細工で物を造つた故、手を持つて居る世間が尊かつたが、世の中が進んで器械で物を造るやうに成つてからは段々器械が尊くなり、更に近代に及んで機械が精巧を極めた自動的の大規模のものと成つてからは、殆んど器械だけが非常に尊く、人間は僅にその附屬物位に見做されるに至つた、かやうな器械は價が非常に高いから、僅かな資本では到底買ふことは出來ず、またかやうな器械は極めて効力が大きいから貧弱な器械を用ゐては到底それと競爭は出來ぬ、隨つて大きな器械を所有し得る大資本家は次第に小さな資本家を壓倒して益々富を增すであらう、そして、大きな資本家が何れも同じ樣な大きな器械を用ひて製造すれば、販路の競爭上、賣り値を成るべく安くせねばならず、其ためには生產費を減ずるために職工の賃銀を極度まで下げるから、職工は非常に苦しめられる、競爭して賣り値を下げては、たゞ需要者を益するだけで自分等には不利益であるは解り切つて居る故、資本家は協議の上合同を企て、競爭を止めて賣り値を引き上げるが、斯樣な場合には需用者は他にその品を求める道もないので、苦しみながらも餘儀なく高ひ物を買ひ、資本家は忽にして巨萬の富を得ることが出來る、これは否應を云はせずに一般の人々から金を絞り取るのであるから、拔刀で脅かして金を卷き上げるのと餘り違はぬ樣に思はれるが、今日の法律では多分罪惡とは見做されぬのであらう、

製造工業が精巧な器械を用ひて大規模に行はれる時代になれば、農業の如きも、之と步調を共にせぬと到底立ち行かなくな

る、面積の廣い所を大きな器械で大規模に耕作すれば、費用に比して多額の收穫が得られるかも知らぬが、手で細工して居た時代と同じ樣式で、狹い田地を手で耕して居たのでは、如何に計算しても收支が相償はなく成るであらう、されば土地の狹い所では工業の發達に連れて農村の疲弊するのは止むを得ぬことで、之を防止するのは中々容易でない、以上述べた所は何れも同じ團體に屬する人間が互に相爭ふために起つたこと故、團體的精神がこの上に退步するものとすれば今後はたゞ益々困難が增すばかりでは無からうか、

八

更に方面を變へて家庭内のことを考へて見るに、昔は妻は夫に、子は親に絕對に服從するのが原則としてあつたが、今日では中々その通りには行かなく成つた、如何に親の命令でも自分の氣に染まぬ者と結婚することは出來ぬと云ふて戀愛の自由を主張する者もあれば、女子と雖ども同じく一人の人間である以上は臺所にばかり押し込められて默つて居る理窟はないと論じて婦人の解放を强請するものもある、これは明に服從性の退化が表に現れたもの故、私の學說の要求する所とよく一致する、然し私の說によれば服從性の退化は單に團體的精神の退化の一面であつて、團體的精神が退化すれば自我を曲げて他人の意志に從めることを非常に苦しく感ずる故、その頃になれば家庭を圓滿にして置くには大なる我慢を要する、今後なほ服從性が退步するものとすれば、家庭は愈々苦しみの場所と成つて、男は俱樂部へでも逃げ出さずには居られぬであらう、

家庭とは元來男女が同棲して子供を育てる所であるが、子を產んで育てることは團體を維持するための務である、隨つて、團體的精神が退化すれば子を產むことや育てることを昔ほどには好んでせぬ樣になる、如何なる動物でも種屬の維持に必要なだけの本能は備はつてあるもので、子を愛し子のためには命をも捨てると云ふことが種屬の維持に必要である樣な種類ならば必ず本能としてかやうな性質を有する、大火の際に母親が自分の體で子供を掩ふたまゝで共に死んで居たと云ふが、之は人間に限る譯ではなく昔からも燒野の雉子、夜の鶴と云ふ通り、鳥類や獸類には人間以上に子を愛するものが幾らもある、この性質は極めて長い間に養成せられたもので、根さす所が頗る深いから容易には退化せぬが、それでも、團體的精神が退化すると少しづゝ減少すると見えて、今日でも已に子供を生んで育てることを厭ふ樣な母親がそろそろ現はれて來た、

親が子を愛することは、退化するとしても甚だ徐々であるが

子が親を尊ぶことは、服從性の退化と共に遠慮なく速に減じて行く、直接の親さへも尊ばぬ樣になれば、それより以前の遠い先祖などは尚さら構はぬであらうから、家系と云ふ觀念が次第に薄らぐを免れぬ、家系を重んずるのは世襲的の階級制度の特徴で、何某の子孫と云へば、その當人はどんな人間であつても先祖によつて價値が定まつたが、自身の先祖さへ構はぬ人間から見れば、他人の先祖などは全く勘定に入らず、人を評價するに當つては單にその當人だけに就いて考へる樣になる、また親を尊ばぬ樣になれば、たとひ親の云ふことでも自分の氣に入らねば承知せぬであらうから、絶えず意見の衝突が起り、親は親、子は子で別々に生活する方が結句相方ともに面倒が少なくなる、また兄弟は如何と云ふに、之は今日でも已に「兄弟は他人の始まり」と云ふ諺もあつて、共同の生活は到底出來ぬが、團體的精神とそれに伴ふ服從性とが退化すれば益々早く他人と成らざるを得ない、一言で云へば今後は家庭に於ても所謂個人主義が盛になつて、一人一人が常に自分のことだけを考へねばならぬ樣に成るであらう、

九

以上述べたのは何れも同一の民族内に於けることであつたが、次に異なつた民族の間の關係は如何に成り行くであらうかと云ふに、これも素より團體的精神の退化に伴ふて大に變つて行く、然しその間の關係が中々複雜であるから根本から調べて掛からねばならぬ、

人間は總べて他の動物に打ち勝つてからは人間同志で絶えず相戰ふて來たが、人間は團體生活をする動物であるから相戰ふときの單位は無論團體であつた、而して最初は一團體の人數は餘り多くは無かつたものと思はれる、今日の野蠻人に比べて考へて見ても、濠洲の生蕃などは幾つもの蕃社に分かれ、各蕃社の人數は至つて少ない樣であるが、原始時代の人間も先づ之に似寄つたもので、それが互に相戰ふて居たのであらう、しかし相戰ふと云ふても決して一刻も休まずに戰ひ續けて居たと云ふ譯ではない、戰爭の幕間には必ず若干の平和の時期が挾まれて居たらう、日本には昔から今日まで絶えず地震が有つたと云ふたからとて、決して間斷なく搖れ續けて居たと云ふ意味ではない、一つ地震と次の地震との間には長いか短かいか無論若干の距りがある、それでも幾らかの距りを置きながら終始地震が有つた故斯く云ふのである、人間の團體が絶えず互に相戰ふて居たと云ふのもそれと同樣で、實際に戰ふ時の間には若干の戰ふて居ない時期が挾まれて有つたに違ひない、地震が起るのは地震

の起るべき事情が絶えず少しづゝ積もつて、それが一定の度に達すると俄に揺れ出すのであるが、人間の團體が相戰ふのも之と同樣で、戰はねばならぬ樣な事情が積もり積もつて一定の度に達すると其の時に戰爭が勃發するのである、かやうに比べて見ると、その週期的であることに於ては地震と戰爭とは大に相似て居る、異なつた團體が境を接して對持し、何れも勢よく繁殖し膨脹する場合には觸接線の所で互に押し合ふを避けることが出來ず、互に激しく押し合へば其所に必ず戰爭が始まる、而して戰爭となれば、自己の團體以外の者は皆で敵ある故、先般自警團が爲した如くに、合ひ言葉の解らぬ者は總べて竹槍で突き殺したであらう、さて互に大勢を殺し合ふて、勝負が濟めば、暫時は戰に及ばぬやうな狀態となり、表面上、平和の姿を呈するが、平和が少しく續く間にはまた戰爭の種となるべき事情が順々に溜まつて來て、それが一定の量に達すると極めて些細な出來事が導火となつて忽ち戰爭が始まる、何千年も斯樣なことを繰り返して居る間に團體は段々と大きく成つて國と名づくべきものが出來た、一つ一つの團體が大きくなれば、團體の數はそれに準じて少なくなり、或るものは亡ぼされ、或るものは併合せられて、地球上に於けるおもな國の數は僅に何十と云ふ程に減じ、それが割據して各々兵備を整へ、互に睨み合ふことに成つたのである、

さて團體がかやうに大きく成るに隨ひ、其の間の戰爭も勢ひ大規模のものと成らざるを得ない、即ち始まる以上は大戰爭となるを覺悟せねばならぬから、容易なことでは戰爭は始められず、我慢の出來るだけは互に我慢するであらう、隨つて一回大戰爭の有つた後には戰爭のない時期が暫くは續く譯になる、團體が大きく成るに連れて一つの戰爭と次の戰爭との間の距りが長くなるのであるから、言を換へれば、戰爭の週期は團體の大きさに比例すると云ふことが出來やう、週期が長く成れば長い平和の時期と短い戰爭の時期とが相互に交代する姿に成るが、物の表面だけより見えぬ人等はこの有樣を見て平和は常であり、戰爭は稀に起る非常のことであると考へ、所謂平和の時代とは次の戰爭の芽が次第に延びて行く時であることに氣が附かぬ、先般のヨーロッパ大戰爭の場合にも、その突發するまでは、多數の人々は戰爭などは到底有り得べからざることと信じて居た、有名な學者でも、斯樣に考へて居たことを後になつて公に白狀した人が澤山にある、これは恰も安政以來、何所かの海の底で大きな地辷りが起るべき事情が徐々と進みつゝあつたことを少しも知らずに、大地震などは當分は無いものと安心して大きな丈の高い家を建てゝ居たのと同じである、

斯様に長い平和の時期と短い戰爭の時期とが相互に交代して何千年も經て來たが、其の間に、生まれながらに協力一致をせずには居られぬと云ふ團體的精神は絶えず退化して來た、而して、平和の時期には、實際敵と戰ふて居らぬために團體的精神の減退は遠慮なく姿を現した、之に反して戰爭の時期には敵を目の前に控へて居るために團體が幾分か締まつて、先天的の協力一致の精神が多少復活するやうである、例へば命がけで敵情を偵察するとか、決死隊に加はるとか、特志で負傷兵を看護するとか、多額の軍用金を寄附するとか云ふ者が出で來る、無論止むを得ずにする者も多からうが、斯様なことをせずには居られぬ様な空氣が國内に漲るのは即ち團體的精神が一時復舊したのである、擧國一致をさせるのは隣國と戰ふに限る、されば敵國と戰を始めることは國内の紛擾を鎭めるための最も確實な方便として專政國の政治家が屢試みる策略であつた、不思議なことには、この點に於ても地震は戰爭によく似て居る、町内の者が協力一致して相助けるとか、見知らぬ人でも困つて居れば、食物や衣服を與へるとか、誰も彼もが自宅から提灯や蠟燭を持ち出して、夜廻りをするとか云ふことが行はれたが、之は昔し團體の小さかつた頃の團體的精神の一時の蘇りであつた、異民族を虐殺したり、逆臣と認めた者を私刑に處したりしたのも同じ精神から起つたことである、戰爭當時の擧國一致の精神や、地震後の人情美が何時までも續けば何よりも結構であるが、これは非常時の現象であつて、平常に復すれば忽ち消えて了ふ、斯くの如く人間の團體は平和で緩み戰爭で締まり、締まつては緩み、緩んでは締まりして居る間に團體的精神は次第次第に退化して行くのである、

一〇

さて今日は如何なる狀態にあるかと云ふに、多くの異なつた民族が地球の上に棲息して、それが各々膨脹し發展しやうと努めて居るのであるから、眞の平和は中々望まれぬ、遠い先祖はたとひ共同であつたとしても、已に容貌が違ひ言語が違ひ風俗習慣が違ひ、皮膚の色までが著しく違ふほどに分れた後は、再び眞に融合することは到底不可能であるが、融合が出來ぬ以上は互に押し合ふより外はない、而して長く押し合ふて居れば、その間に戰爭の起るべき事情が段々と積つて、終には如何に忍んでも戰爭をせずには居られぬ様な狀態に立ち至る、されば境を接して居る二民族が互に仲のよいと云ふ例は決してない、フランスとドイツとは有名な仲惡であるが、仲の惡いのはフランスとドイツとだけには限らぬ、これと同様な關係にある民族は世界

中到る所にある、相離れて住んで居る民族の間には斯くまで仲の惡いものは見當らぬ、

風俗習慣が異なると、とかく感情の行き違ひが生じ易いもので、一方が何の氣なしに行ふたことが先方に取つて非常な侮辱と感ぜられたり、先方の日常の習慣が當方には甚だしい不行儀に思はれたりして、不愉快の種が絶えぬ、これが異民族が互に相排斥する一つの理由である、先日夜行の寢臺車に乘つた節、翌朝起きて見ると、一人の日本の紳士が三尺帶の浴衣がけで楊枝を使ひながら、洗面所から持ち出したコップで口を漱ぎガアガアと大きな音をさせながら車の中央の床にある唾壺を狙ふて立ちながら水を吐いて居たが、この樣な日本の風俗を見て甚しい不作法と感ずる外國人は決して少なくなからうと思ふた、所が風俗習慣なるものは、長い年月の間に自然に生じたもので、決して一朝一夕には改まらぬ、昨年の夏大連のホテルで、滿洲まで出掛けて居る日本人は少しは內地のとは違ふて居るかと思ふて、滿洲の日本新聞を取り寄せて、先づ九星が出て居るか否かを見た所が、內地の新聞と同樣に掲げてあつた、次に續き物は何かと見たら天下茶屋千人斬と云ふ昔の講談が出て居た、それから町へ散歩に出たら鰻屋の店の前に今日は土用の丑の日と云ふ看板が出て居たので、風俗習慣は殆ど改まる望みは無いと感じたが、いづれの民族も風俗習慣は容易に改まらず、風俗習慣の相異なる異民族は互に排斥するとすれば、民族の融合といふことは先づ當分の中は出來ぬと思はねばならぬ、

併しながら異民族は融合せず、境を接する異民族は常に互に敵視すると云ふても、之は民族全部を生存競爭の一單位と見做しての上のことであつて、個人と個人との間には親密な交際が出來ぬことはない、團體が大きくなり、戰爭の週期が長くなれば平和の時期が相應に長く續く故、その間には個人と個人とは民族が異なつても仲よく附き合ふことが出來る、また文明が進んで交通が便利になれば、貿易のため、見學のために異民族の間を往來する人も殖える、その他共通の利害問題を研究するために異民族の代表が一所に集まつて相談することもある、斯樣な有樣を見て或る人々は、之は追々世界中の人間が悉く集まつて一團體となる前徴であると考へて居る樣であるが、遽に其の樣に判斷する譯には行かぬ、各民族は個人の集まりであるから異民族に屬する個人と個人とが親密に交際する以上は、異民族の全體と全體とも親密に交際が出來る筈であると論ずるならば之は大きな間違ひである、多數の異民族の代表者が一堂に會して、和氣藹々と談笑するのを見て、行く行くは全世界もその通りに成ると思ふと決して左樣には成らぬ、戰爭の時に於てさへ、兩軍

が對持して居るだけで、鐵砲を打たずに居る休息時間には兩軍の歩哨が烟草の火を借り合ふたり「お早う」位の挨拶をするだけの餘裕は有る、平時に於て、境を接する異民族の個人と個人とが交際するのは、之と同樣な關係で、いざ戰爭となれば直に引き上げねばならぬ、

今日の所では以上の如き有樣であるが、今後人間の團體的精神が退化したら如何に成り行くであらうかと云ふに、團體的の協力一致が今よりも一層行はれ難くなるとすれば、團體が外に向ふて働く力がそれだけ減る故、團體間の戰は段々困難になるを免れぬ、而して外に向ふて勢を發することが出來なければ、それだけ團體内の軋轢が增し、個人と個人との間、もしくは、利害關係を共にする小團體と小團體との間の競爭が一層激烈に成らざるを得ない、遠い將來のことは暫く措くとすれば、先づ當分の間は、從來と同樣な狀態で異民族は融合せず、境を接する異民族は互に睨み合ふて強い方が弱い方を虐待し、容易なことでは大戰爭は始めず、而も各民族ともに民族内の不統一が尚著しく成るであらう、

二

戰爭は慘酷極まるものである、出來るだけは其の發生を防がねばならぬ、個人間の喧嘩も甚だ嫌なものである、之も無いに越したことはない、何れも前々から解り切つたことであるが、ヨーロッパ大戰爭でその未曾有の慘害を目の前に見たために、特に痛切にこれを感ずる者が殖えて、平和主義は一層強く唱へられる樣になり平和論者の運動も大に盛になつた、國際聯盟の如き大規模のものを始めとして世界の平和を目的とする種々の會合が催され、今日の文明國で平和協會の名の附くものの無い國は一つもない有樣である、これは誠に結構なことであるが團體的精神が退化すると斯樣な會を造つても、會員の協力一致が中々思ふ樣に行はれず誰を會長にするか、誰が幹事になるか、誰が實權を握るか、誰が會を代表するかと云ふやうなことで意見の衝突が起り、平和協會の幹部が忽ち暗鬪の舞臺となる處がある、國際聯盟の如きも規模が大きいだけに莫大な費用を要することと推察するが、協力一致性の缺乏した人々が集まつたのでは、仲間の統一が六かしいために、如何ほどの效果を擧げ得るか頗る疑はしい、軍備縮小に至つては徹底的に軍備を廢するのではなく、單に競爭倒れになるのを恐れて、その損失を最小限度に止めやうとするに過ぎず、軍備は依然として存して置くのであるから、軍備などはいらぬと考へる人々からは恰も資本家のトラストに似たものと見做されるかも知れぬ、國家の別を無くするを

理想とした勞働者の世界的の命も存する様であるが、之とても團體的精神の退化した連中が集まつたのでは、誰がその牛耳をとるかに就いて爭ひの起るを避けられぬ、如何に「カマラード」とか「タヴァリシュチ」とか互に呼び合ふて協力一致を努めても、生まれながらに有する協力一致性が減じては些細なことにも不平が生じて、中々圓滿には治まらぬ、

平和主義はまた宗教家によつて盛に唱へられるが、之は人類を救ふことを目的とする人々としては尤も至極なことである、國と國とが軍をするも、人と人とが喧嘩をするのも、明に人間が互に相愛することが足らぬのに基づく、人間が互に相愛しさへすれば戰爭も喧嘩も無論せずと濟む譯である、されば世界中の人間が皆他人を愛することゝ心を決したならば、その瞬間から戰爭も喧嘩も地球の表面から絶對に消えて了ふに違ひない、平和論者の理想とする所はこの狀態であつて、若しこの理想が實現せられたならば、地上に天國が生ずる筈であるが、さて實際には如何であらうか、之を論するには先づ人間の愛なるものの素性から調べて掛からねばならぬ、

生物界を見渡すに單獨の生活を營む動物の間には愛は少しも無い、食物の充分に有る間は、互に冷淡無關係の狀態にあり、食物が不足になれば、互に噛み合ひ殺し合ふ、週期的に雌雄相求めることは有るが、之はその一時に限る、また親が子を愛する種類があるが、之は、子を愛することが種屬の維持に必要な種類に限ることであつて、子を生み放しにして置いても種屬の維持に心配のない様な種類では親は少しも子を愛せぬ、雌雄とか親子とか云ふ關係以外に個體が相愛するのは團體生活を營む動物に限つて見られる現象である、而してこの愛は、長い間、團體と團體とが相戰ひ、生存に適する團體が勝つて生き殘り、生存に適せぬ團體が敗けて亡び失せたので、自然淘汰の結果として造り上げられた本能である、人間が生まれながらに有する愛の性質は斯くして生じた團體的精神の表面に現はれたもの故、團體が大きく成り過ぎて團體間の自然淘汰が中絶すれば、當然その時から退化し始めざるを得ない、自分が人間である以上は人間の社會を少しでも善くすることに努めねばならぬとして、人間の愛を叫ぶのは素より甚だ結構であるが、先天的の協力一致の精神が減少して行くのを之によつて防ぐことは到底出來ぬであらう、

三

人類の將來に關する私の學說は斷片的には今まで數回も發表したことがある、多くは默殺せられたが、之を批評したり、之に

對して反對の意見を發表した人も幾人かは有つた、去る九月十何日かに軍人の手によつて外二名と共に慘殺せられた有名な大杉榮氏なども曾て本誌上にその批評を掲げたことが有つた、また、昨年の本誌には友人小野俊一君が非常に長い文を載せて殆ど完膚なきまでに私の說を打ち破られた、大杉氏とは私は遇ふたことも無いが、私の著書を讀んで何事かを知り得たとの意味で私の門人と名乘つたので、其後、大杉榮氏は貴君の門下生かと人から尋ねられたことが屢々あつた、私には門下生などと云ふ者は無論一人もない、學問上のことならば誰とでも對等で研究する積りで居る、小野君の議論に對しては、何れゆるゆる話をする機會も有らうから此所には何も云はぬ、或る新聞紙に私の說を批評して進化論の一點張りであると書いてあるのを見たが、私は學問上の議論には一點張りは差支へないと考へて居る、何所へ學校を建てるとか、何方へ鐵道を敷くとか云ふ樣な實際の問題に就いて、意見が衝突する場合には兩方から五分五分に步み寄つて妥協的に解決しても宜しいが、眞理を見出さうとする學問上の議論には斯樣な眞似は出來ぬ、科學と宗教との調和などと題した論文を讀む每に常に感じて居たことであるが、眞理を求めるためには誰も彼もが一點張りの議論を持ち出し、誤つた所は正し、足らぬ所は補ひ、若し根本から間違ふて居ることが解つたら全部を引きこめれば宜しい、學問上の議論にはただ戰が有るだけで、妥協は許されぬ筈である、而して議論なるものは理窟の附けやうに依つてどの樣にも出來る故、單に机の上で論じて居たのでは形式上には何時までも勝負が附かぬかも知れぬ、それ故學問上の議論に於ては、論理の筋道がよく通つて居るか居ないかも無論吟味しなければならぬが、それよりも、實際の事實を調べて見て、各學說の述べる所や、豫期する所に適合するかせぬかを檢するのが肝要である、實際に照らしてよく合ふ學說はその反對の學說よりも一層眞理に近いものと見做して置くの外は無からう、「子は親よりも物質的文明に於ては優り、團體的精神に於ては劣る」と云ふのが私の說の要點であるが、かやうな結論に到着する私の說と、之に反對する他の說との何れがより多く人間の過去、現在、未來の實際に符合するかは全く讀者諸君の判斷に任せる、(終り)

今更に　なに生ひ出づらん　竹の子の
憂き節しげき　世とは知らずや

帝都復興豫算と財政私見

法學博士 渡邊鐵藏

一、帝都復興豫算

帝都復興院の復興計畫案は大風呂敷であるとか、尨大であるとか、超數字的であるとか、蓋を開けない前から種々の批評があつたが、結局復興院參與會議を經て評議員會に諮問され世間に發表されたものを見ると意外に小規模の計畫で豫算案も七億圓程度のものであつた。一時噂になつた七十億、八十億と云ふやうた案を當局が作らうとは常識で考へられぬ事だが、十五億以上の計畫も或は出て來はしないかと思はれて居たが、具體的に提案されたものは殆んど燒失區域に對する計畫に止まり、其主なものは主要街路、運河、公園、築港、土地區劃整理及び建築助成である。之等に關する豫算は最初は東京横濱を合して七億五千萬圓であつたが、大藏省と折衝の結果七億五百萬圓に減縮された。内、東京の復興事業費としては四億八千八百萬圓で、其中街路費が四億六百萬圓、港灣費が三千二百萬圓、運河費が二千八百萬圓、公園費が一千二百萬圓、土地整理費が八百七十萬圓である。横濱の分の復興事業費は合計五千二百四十萬圓で、街路費が四千二百萬圓、運河費五百六十萬圓、公園費が二百萬圓、土地整理費が二百五十萬圓である。右の外に別に京濱運河費として千三百七十五萬圓が計上されて居る。

猶此外に防火建築補助費二千萬圓其他東京府、東京市、神奈川縣、横濱市等の執行する事業に對する補助費及び之等の地方の復興事業公債に對する利子補給費、並びに事務費等併せて約一億五千萬圓ある。併し最初の東京復興事業費の中でも多くは地方に四分の一乃至二分の一を負擔せしむるやうな方針になつて居るやうであつて、東京の負擔額は勿論將來變更されるかも知れぬが、既に發表されて居る處によれば二億二千萬圓、次に横濱復興事業費五千二百萬圓の中でも街路其他矢張四分の一乃至二分の一を負擔せしめるのであつて之れも横濱市の負擔額は略二千三百萬圓と發表されて居る。然らば東京及び横濱の復興

事業費として政府の負擔する金額は三億一千萬圓になる計算である。之れに前揭の防火建築補助費、地方執行事業補助費、其他の一億五千萬圓を加へた四億六千萬圓と云ふものが結局國庫の負擔になるやうに考へられる。然も補助費の一億五千萬圓の方は或は種々變更が生ずるかも知れぬと思はれる。猶右の復興事業の中全く收入を生じないものと收入又は財產を生ずるものとある。從つて築港、運河の如きは此の意味に於て國家が一時の支出をしても全然失費となるものではなく、更に投資以上の收益を見るかも知れぬ。但し之等の經費の一部を地方に分擔せしめた場合には、之等の事業より生ずる收入及び財產は恐らく將來市に下附する事となるのではないかと思ふが、其際に或は無償で下附し、或は多少の負擔付で下附されるかも知れぬ。

　東京市は國の執行する東京復興事業費四億八千八百萬圓の中二億二千一百萬圓を負擔する外に東京市自身に執行すべき復興事業即ち小道路、橋梁、上水道、下水道、小公園、塵埃處分、中央市場、衛生施設、敎育施設、社會事業、電氣事業等に要する經費として一億七千七百萬圓を要する。但し之等の事業は從來の例に依つてそれ／＼四分の一乃至二分の一の補助を國庫から受けるのであつて、其金額合計四千百五十萬圓を除けば、結局市の負擔すべき東京市の執行すべき復興事業費は一億三千六百萬圓となる。結局東京市は國の執行する東京復興事業費中市の負擔額二億二千五十萬圓と、右の市自ら執行する復興事業費の自己負擔額一億三千六百二十萬圓を合せたもの即ち三億五千七百七十萬圓を全體として必要とするのである。而して橫濱市は國の執行する橫濱復興事業費の負擔額二千三百萬圓と橫濱市自身の執行する復興事業費四千七百八十萬圓中の市負擔額三千七百萬圓を合せたもの即ち六千萬圓を合計負擔する事となる。

　右を取纏めて云へば國は帝都復興に關して、復興院の管掌に屬する豫算に於て、四億六千萬圓の負擔を要し、東京市は復興事業として合計三億五千七百七十萬圓を負擔し、橫濱市は六千萬圓を負擔する事となる。即ち國、東京市及び橫濱市は夫れ夫れ之等の負擔に對して何等かの財源を求めねばならぬのである。但し國の負擔額の中には地方復興事業公債利子補給費として三千八百萬圓が計上されてあるが此金額には多少の增減を生ずることであらう。

　今回の大災害が國難である事に就いては既に本誌前號に論じた通りであるが、財政計畫殊に負擔の問題を論ずるに當つては、事業の性質に應じて更に具體的の考慮を加へねばならぬ。假令國難であつても復興事業の中特に其地方の利益のみに屬するもの、若くは其地方のみに屬するものについて原則として其

地方が費用を負擔すべきであるが、勿論斯かる事業でさへ從來の例として多く國庫の補助があるのが常である。而して今回の如き大災厄に對して突如として國の首府及び重要な貿易港が大破壞を蒙り、其復舊を要すると共に財政上の負擔力を失つて居るのであるから、平素と異り國家が或重要な事業を代つて行ふのみならず、或程度まで從來慣例以上の負擔をする事も覺悟せねばならぬ。國家が或程度迄財政的に援助するに非んば今回の罹災地の復活が遲れるのみならず或は挫折する事があるかも知れぬ。此事は單に罹災者及び罹災地方の損害であるのみならず、固より國家全體としても損失である。假りに將來大坂、神戶等に於て今回の如き大災害が生じたとして、其場合に之れを地方問題として全く其地方の自活力に任せて國家が財政的に之れを援助する事がなければ之等の地方は勿論復活が遲延するのみならず或は再び立ち得ざるに至るかも知れぬ。斯くの如く經濟上、財政上又文化の上より重要なる國の中樞地が、大災害のために一瞬にして破壞されたるに當つて、國が之れを傍觀し、又若くは其迅速に復活することを助成することを怠つたならば國家自ら衰弱を來す源因となる。但し、固より罹災地方が當然自ら爲すべき事を爲さず又は餘り多くを國家の援助に求むる事の不可なる事は云ふを俟たぬ。

二、帝都復興院評議會の希望決議

今玆に既に新聞紙上に於て公表されたる帝都復興事業計畫の各項目の當否又は其規模の過不及等を詳論する時を持たぬが、今回提示された復興計畫案が理想的のものでなく應急の第一次的に必要なもののみである事は明かである。固より街路系統、幅員、築港、運河の規模及び事業の緩急に關しては種々人に依つて議論もあり得やうが、大體に於て今回の提案は最初世間に大風呂敷と批評せられた豫想に反して先づ合理的なものと認めろ事が出來やう。

帝都復興院の最初の復興事業計畫案は、先づ參與會議の審議を經て、十月二十一日評議會の議決を經た。評議會は審議の日少き爲めに街路の系統、路幅等に關しては全く之れに觸れず、港灣、運河に多少の修正を加へ、別に數多の希望決議を爲した。其中最も重要なものは一、復興都市計畫の實行と財政の便宜を計るため東京市內の官有地を整理して、之れを開放し、又は市に交付する事、二、防火建築助成のため少くとも一億圓の補助金を支出する事、三、土地利用の增進を計り、保安、衞生上の支障なからしむるために燒跡地全般に亘つて徹底的に土地區劃整理を行ふ事、而して土地區劃整理を行ふに當つて道路、公園、

其他公共の用に供するため關係土地の一割を無償提供せしむる事、四、建築線間の距離は二間以上とする事、（二間幅以下の道路を許さざる意味）

東京市内官有地の整理の必要なる事は多年我々の論じ來つた事であり、東京市民の翹望して居た處であるが今回帝都復興院評議會に於て全會一致を以て此の希望決議を可決された事は欣喜に堪えぬ處である、乍併此希望に對して政府が何れ丈けの誠意を示すかゞ最も注意すべき點である。元來此問題は評議會の決議に依つて催促せずとも政府自ら行ひ得る事であり又此際是非とも實現せねばならぬ筈の事である。抑々帝都復興のために詔勅が降下し總理大臣も亦特に諭告を出して居る。然らば復興事業の遂行に當つて市民、國民が出來得る限りの努力をし、又負擔をする事は勿論であるが、政府は先づ右の詔勅及び諭告の手前から云つても先づ自ら帝都復興の遂行のために誠意と決心を示さねばならぬ　然らば多年の懸案である東京市内官有地の整理の如きは此際徹底的に斷行すべき責任を持つて居るのではないか。舊本丸の開放に就いては既に前號に於て論じた通りであるが、砲兵工廠其他の官有地に就いても斯くの如き機會に政府が之れを整理するに非んば又孰れの日にか出來やうか。

防火建築の助成のために政府が甚だ小額ではあるが補助金の支出を計上したのは喜ばしい事であるが此外低利資金の貸付、特殊の不動產金融及び特殊の建築會社の設立等の必要な事はかねぐ〵論じた事であるが、帝都復興に際して最も重要な一事項であり、且つ此機會を失つては再び之れを實行する折のない事は即ち土地區劃整理の問題である。復興院は單に道路擴張新設に伴つて殘地整理を必要とする場合に土地區劃整理を行ふ位の考であつたやうであるが、評議會の特別委員會に於ては此問題に關して議論が最も沸騰し擧つて燒跡全般に亙つて徹底的に土地區劃整理を行ふ事の必要を認め、遂に右の決議が出來た次第である。東京にしても、横濱にしても其宅地は市の中心地區と雖も大部分封建時代の地割に從つて利用され建築されて居る。從つて敷地の利用が不便、不經濟的であるのみならず、狹い横丁、行止まりの露路等があつて交通、防火、衛生、等の見地からも甚だ不便且つ危險である。此故に今回の大火災に依つて地上の建物の燒き盡されたのを機會として、貴重な都市の宅地を封建時代の利用方法から一轉して新時代の要求に合致せしむる事が今回の復興事業中最も意義のある事である。之れが徹底的に斷行され、且つ他の希望決議にあつたやうに二間幅以內の道路を許さぬ事とすれば、火災が起つてもポンプ車の通行の自由なるは勿論避難も容易であり、大災厄より生ずる危險を少から

しめるのみならず、平素の交通を便にする事も亦少くない。猶土地區劃整理を行ふに當つて關係地主をして其所有地の一割を無償提供せしめんと云ふ決議は寔に適當な事である。彼の耕地整理法の如きは耕地を整理するに際し、從來の道路を地主に交付し、整理後成立した道路は之れを無償で國に交付せしむる事になつて居り、其爲地主の新に得た耕地が減少するも妨げず、又其限度も示してない。耕地に行はれる方法を直ちに其まゝ宅地に適用する事は勿論出來まいが、獨逸の法制では田野を變じて宅地とする場合に道路敷として土地の三分の一まで無償提供せしむる例もある。而も其際地主は道路鋪裝費、排水設備費、街路照明費まで負擔せしめられるのが常であるが、郊外地が變じて宅地となれば、西洋では地價が五倍にも十倍にも騰貴するので地主は寧ろ此方法を喜んで居る。乍併譬へ燒け跡であるとは云へ嘗て繁榮し、又將に復興せんとして居る市街地に對し、耕地整理法を其儘に適用し若くは獨逸式の法制（所謂アヂテス法）を其儘に適用する事も出來まい。之れが地主の無償提供の限度を一割と制限された理由である。一部の人の間に此土地の一割を無償提供せしむる事を財産權の侵害とし、憲法違反なりと論ずる人もあるやうであるが、斯かる事は既に外國の法制にもある事でもあり、又既に我國でも耕地整理法で行つて居る事に特に限度を示したのに過ぎないのであつて、事新しく憲法論を持出す程の事ではない。罹災者は復活に、國、市は復興のために重い負擔を苦んで居るに際して街路敷地買收の爲めに數億の金を少數の地主に與へる事は此際殊に堪へ難き事である。殊に土地區劃整理を行ふ事に依つて、土地の利用が增進し、地主は明かに將來の地價の騰貴に依つて利益を受けるのみならず國家が費用を負擔してまで區劃整理を行ふのであるから、地主は數箇に於て土地面積の一割を提供しても殘地の價格に於ては寧ろ大なる利益を得るものと云はなければならぬ。場所に依つては一割以上を提供しても好からうし彼のビアード博士の如きも一案として二割の無償提供を主張して居られるが私は一般的には一割提供を以て限度とし、更に後日土地の狀況を見て幹線道路に沿ふ處其他には更に利益の限度に應じて特別負擔を課し、或は又東京市內全般に亙つて新に地價を評定して特別市街宅地租を賦課してもよいと思ふ。此の方法に依つて土地區劃整理を燒跡全般に亙つて斷行すれば區劃整理に伴ふ如上の利益があるのみならず大に街路買收費を節約する事が出來且つ又將に勵行せんとする耐火建築物の強制普及に就いても大なる便宜がある。從來のまゝの敷地區劃では市街地建築物法の勵行の困難なるのみならず耐火建築を實行するに當つて困難を感ずる事は云ふ

までもない事である。

三、帝都復興審議會の横暴

帝都復興院評議員會に於ては幸にして多くの最も適切な希望決議を附して諮問案が承認されたのであるが、次いで十月二十四日に召集された帝都復興審議會に於ては殆んど同一の案が諮詢されたに拘はらず審議委員の中に種々の反對意見が起り大なる波瀾を見たやうである。紛糾の結果二十五、六の兩日の特別委員會に於て一つの協定案が作成されたがそれに依れば政府の諮問案に對して種々の修正的の意見を加へた上、街路の項の如きは僅かに品川より上野を經て三の輪に至る東北縱斷路線と、九段坂下より龜戸町に至る東西横斷線の二大幹線の道路の幅員に適當の收縮を加へて之れを承認した外其他は殆んど否決と考へねばならぬやうな大修正が加へられた。爾余の修正に就いては種々議論もあり得やうが斯く迄に街路計畫を縮少せしめた事に就いては甚だ異論なきを得ぬ。固より私と雖も復興院提案の路線全部を其まゝ承認すべきものとも思はない。彼の横町線の如きは東京驛下を貫通せぬならば二十八間では甚しく廣きに失すると思ふ。又右の縱横の二幹線に就いても幅員を多少狹めてもよいやうにも考へる。其他猶縮少し得べき路線もあるかも知れぬ。又市ケ谷見附と英國大使館横間の路線其他是非とも此際新設せねばならぬものもある。乍併審議會の協定案の如くに二幹線の他は全部之を認めないやうな決定をする事は何人が見ても之れを正當の理由ありとは認めぬに相違ない。政府反對黨は手を拍つて之れを喜ぶかも知れぬが眞面目に帝都の復興を考慮して居る者は寔に茫然たらざるを得ない。私は今茲に如何なる路線を必要として之れを復活せしむべしと論ずる暇はないが、少くとも新聞紙上に現れるが如く若し審議會委員が私の感情に基いて斯くの如き無責任とも云ふべき大修正を加へた事は寔に遺憾な事と云はねばならぬ。審議會の委員諸公に東京市の適當なる街路系統及び路幅に關して十分の智識のない事は恐らく何人と雖も信ずる處であらう。然らば今回の路線の削除は感情と政治上の爭鬪に基いたものと推斷するも誤りがあるまい。市民が帝都の復興を鶴首して待つて居る事を百も承知の上で斯かる行動に出る事は餘り市民を無視し、正義を蹂躙した　爲ではなからうか。私は嘗て横町線が何等二十八間の路幅を必要とする理由のない事が明白なる事を十分に當局も知り拔いて居るに拘はらず單に政治上の理由に依つて市民の不利益を顧みず二十八間と決定された際に政治家の餘りに無責任な事に驚愕した　玆に再び審議會の幹線に關する決定を見て如何にも故意に無責任

な行動に出でたる如く感じて再び驚きを新にした。復興院が斯くの如き修正に盲從する事はあるまいとは思はれるが若し復興院及び内閣が自己の政治的の立場を安全にするが爲めに審議會のみに服從したとすれば我々は益々政治家の無責任を獅子吼せねばならぬ。政府が提出した案は固より自信と責任を以て作成されたものと考へねばならぬ故、多少の修正は忍ぶとして、殆ど破壞的の修正を強ひられて之れに從ふが如きは單に意氣の問題のみではない、政治上の責任觀念の問題となる、從つて審議會の修正を容れるか否かは内閣の進退に關するものと考へるが、政府は如何なる態度をとるであらうか。帝都復興の急場に當つて此復興審議會の如き政略的の機關を最初に作つた事が抑々政府の失敗であり且つ或點からは政府が復興に對して眞劍を缺いて居ると批難する事が出來るが、今や政府は自ら行つた過ちに依つて自ら傷かんとして居る。私は玆に政治論を試みやうとはせぬ。只願ふ所は帝都復興の最も適當な計畫が一日も早く實現する事である。復興院及び内閣の進退に關しては此上玆に論議しやうとはせぬ。只萬一復興院が審議會の案に服從するならば東京及横濱市民は抑々何とするか。

帝都の復興を促進するのみならず自ら實行すべき地位に在り、且つ其爲めに生れた復興院が理想的の計畫は兎に角最少限度の計畫さへも實行出來ぬとあれば復興區域の市民に取つて迷惑を感ずる事があるまいか。固より數ケ月の時を費し日曜も祭日も夜も別ちなく不休の努力をなした事は何人も感謝する處ではあるが結果に於て市民の期待に添ひ得ぬ場合には其怨嗟の聲を聞く事は又止むを得まい。然らば復興院は勇氣を鼓して或程度まで原案を固執するか若くは復興院を廢するか若くは少くとも街路に關しては市の自治に任すの他はあるまい。乍併ら復興院の廢止は當然内閣の運命に關し此復興の大事に際して政局を紛糾せしむる事は輕々しく行ひ得ざるのみならず市民の迷惑之れより大なるものはない。復興院は進退將に兩難の地位に在るものと云はねばならぬ。假りに街路を全部市の自治に任すとしても國道である幹線道路は之れを如何にすべきか、結局主要街路は固より復興院の事業より分割せしむる事を得ずとすれば復興院は自ら存命せんとする限り市民の願望に從ひ幹路線に關して多少の修正をなす事は固より之れを憚らずと雖も審議會が強ひて協定案の如き大削除を固執するならば勿論敢然として之れと戰つて場合に依つては即時に之れを廢止すべきである。其結果として政局の紛糾を來て、内閣の運命に關するともそれは止むを得まい。今直ちに責を負ふて退くの弱さに出でずとも内閣の運命を賭するとならば審議會と戰つて後に政治的の勢力

せずして收るゝも可である。只願ふ所は單に内閣の運命のみを顧慮して帝都百年の長計を誤まる事なきを望むのみである。政局變化のために帝都復興の荏苒日を費す事は固より忍びがだい處であるがされぱとて姑息の案に屈從して永遠に帝都を低劣の舊都に服せしむる事は斷じて忍びがたい處である。

土地區劃整理の點に關しては審議會は東京横濱兩市の自治體に一任する事は決定して居るが此點は區劃整理を排斥したのでなく我國の如き權力のなき自治體に於て、之れを今回の如き時期に燒跡全般に關して行ふ事の事實殆んど不可能なる事且つ種々の障害弊害百出すべき事を氣付かずして市に之れを行はしめんとしたものであらうから恐らく之れを復興院が國に於て之れを實行するとしても單に執行者に關する意見の相違であるから審議會も必しも多く之れを咎めず且つ又政府も亦此點丈けは斷行するの勇氣はあらうと思ふ、然らずんば切角評議會が最も力をこめて議決した希望條件に反く事になり更に一つの難題を加へる事とならう。

四、復興財源

帝都復興に要する豫算は上述の通りであるが、之れに對して市及國は適當の財政計畫を樹てねばならぬ。市をして自ら行ふべきものを行はしめ必要なる程度以上に國家に依賴せしめざるためには當然東京市に與ふべき財源にして從來與へなかつたものを先づ東京市に交附する事を要する。然らずんば東京市は猥に國庫に依賴するものであるといふ譏を受け、政府も亦過度に帝都復興のために地方を犧牲にするものであるとの攻擊を受ける惧れがある。之れが政爭に利用さるれば復興豫算の成立計畫の進行に支障を來す恐れもある。政府が或點まで誠意を示して當然東京市に與ふべき理由のある財源を之れに授與し、且つ將來の東京市の財源を涵養するために當然政府のなさねばならぬ事、及びなし得べき事を決行すれば、東京市は決して政府に頭を下げる必要もなく、復興計畫は全部獨力で實行し得るのである。一歩を進めて國家が徹底的に右の方針を斷行すれば、東京市は今回の復興計畫の實行に際して一文も政府の懷に依賴する必要なく、寧ろ餘裕を以て國自體の復舊事業を援助する事さへ出來る。乍併憐れむべきは東京市であつて、從來當然其獲得すべき財産も收入も與へられず、徒らに國庫の誅求監督に虐げられて其財政と事業は全く窮迫行詰りの境遇にあつた上に、更に今回の大災害に依つて殆んど致命的の打擊を受けたのであるから、此機會に政府が熟慮して從來の如き東京市に對する苦しき冷遇を改むるに非んば帝都の復興は不可能に歸する。

先づ東京市の財政の方面から論ずれば、從來約一億の收入であるが其の租税收入は總額僅かに千七百萬圓に過ぎない。而して電氣事業及び水道の如き東京市唯一の財源となる事業すら猶未だ借金に依る建設時代であつて其收入は支出の五分の二に過ぎない狀態である。而して一億六千萬の市債に對して約七百五十萬圓の利子を支拂はねばならぬから東京市が收入のない教育、土木、衛生、都市計畫、社會事業に投じ得る金額は頗る僅少である。殊に我國に於ては國民教育が地方の負擔となつて居るため、教育費が此中の最も大きな部分を占めて居る。其他の事業費は年額合せて千三四百萬圓に過ぎないのであるから、此僅少な金を以て二百數十萬の人口を有する大都市の施設が理想的に行はれる譯がない。東京市の交通、經濟、保健、衛生の設備が歐米の四五流の都市にも劣るのは當然である。金を投ぜずして仕事の出來る譯はない。平素斯かる狀態にあつた上に今回の大打撃を受けたのであるから此際東京市に對して財政上十分の榮養を與ふるに非んば東京市の命脈は絕てしまふ。

第一に東京市の財源を涵養するために官有財産の下附を斷行せねばならぬ。此點は既に述べた如く其理由最も明白であるが之れに依つて東京市に對して市內に於て約百萬坪の土地を所有せしむる事を得れば之れを平均百圓と評價しても東京市は約一億圓の財産を有する事となる。殊に度々論じた如く大手町、內田橋、文部省附近の官有地約十萬坪を市に下附すれば、數年後には之れ丈けでも五千萬圓以上の財産となるのであるから之等の官有地の利用方針如何に依つては東京市は將來之れに依つて每年五六百萬圓以上、收入を得る事は甚だ容易である。官有地の下附は復興計畫の實行に際し公園系統其他の計畫を樹立するに際して最も必要であるに拘はらず大災後既に三ケ月を經るに今日に於て政府に於て未だ一の官有地の整理さへ行ふ事の決定して居ない事は政府自身に於て眞に帝都復興を斷行する誠意があるか否かを疑はざるを得ぬ。少くとも其の勇氣の鈍い事丈けは明かである。總理大臣に斯かる簡單な事すら斷行する實力のない以上は何度諭告を出した所で駄目だ。

第二に性質上市に與ふべき筈の租税は此際斷然市に交附すべきである。しかし制度上此際急に改革を實行する事困難であれば之れに相當する金額を東京市に交附する方針をとればいゝ。譬へば先づ市內交通税の如きは當然東京市の收入に充つべきものであつて市內電車及び鐵道省線を合して五百數十萬圓の交通税を擧げて居るのであるから之れは全部東京市に與ふべきものである。市內交通税を自治體に交附すべき事は勿論全國共通の問題であるが國の財政上此際一般に之れを行ふ事は困難である

から罹災都市の市内交通税のみを其地方に移譲すべきである。

第三には罹災地の營業税を地方に移譲する事である。營業税は性質上地方に移譲すべきものである事は正に議論が一致せんとし且實行に近かんとして居たことであるが、此重要な税源を國庫の負擔大きい時に際して直ちに全部地方に移譲する事は勿論出來まいが、罹災地のみの營業税を移譲する事は十分の理由がある。之れに依つて東京市の如きは數年後營業税收入が舊態に回復した時は從來東京市内で收めた國税營業税額千六七百萬圓を自ら得る事となる。

第四には市街宅地に對して特別市街地租を課する事である。此に關しては私は數年來地租を地方に移譲して地方的に特別の地價評價をなし、都市に於ては其地價に相當する課税を爲す事を許すか若くは地租を國税として存置するならば市に對しては別に特別市街宅地税を設け各都市の地價を精密に評價して課税すべき事を論じ來つた。都市の土地に租税のかゝつて居ない事は都市の改良事業の行へない最大の原因であつて東京市の財政が困窮し事業の振はざる事は市内に全面積の三分の一に亘る官有地の存在する事と、私有地に對して其の地價に應ずる租税の課してない事に原因するのである。土地に税を課する事は土地の改良に必要な財源を得るのみならず地價の騰貴を抑制する事が出來る。此機會に於て政府が全國一般に特別市街宅地税を課する事の必要を認めるか、少くとも罹災都市に對して之を認むれば東京市の如きは將來之れに依つて一つの大きな税源を得る事となる。東京市は千四百萬坪の私有地を有する故課税の準坪百圓平均に評價しても十四億圓の地價となる、之れに地價千分の二の税を課すれば約三百萬圓の收入を得る。平均坪價が二百圓以上となり五六百萬圓以上の收入を得る事は近い將來に實現する。勿論營業税、地租共現在の附加税については適宜之を整理せねばならぬ。

第五には東京市内に在る官有地及び營造物に課税すること、是等のものにも地方地租、家屋税、其他の賦課を徴收し、且つ官有自動車等にも課税することゝすれば東京市はかなり多くの財源を之れに依つて得ることになる。

第六には都市改良事業に依つて利益を受けた者に對して特別負擔を課することであるが、今日の如き復興都市計畫を實行するに當つては特に國又は市の改良事業に依り利益を受ける者が多いのであるから之れに對して適當の負擔を課すれば十分の財源を得る。道路の新設、擴張、鋪裝、公園、廣場の設置、運河の開鑿等の際に之等の事業に依つて利益を受けた改良工事の隣接地主に負擔を課することは歐米に於て常に必ず實行せられて

居ることであり、我國に於ても都市の改良事業を行はんとすれば、是非此方法を勵行するに非れば其改良工事は徒に一部の者を利益する結果となる。此特別負擔或ひは增價稅に代ふるに超過收用の方法をとつて改良工事に隣接する土地を適宜餘分に收用して此餘剩地を後に賣却して、其收益を以て改良工事費を償ふ方法も亦屢々歐米に於て採られる所である。

第七には電氣事業及び瓦斯事業を市營として、市の獨占事業とし、收益の途を計ることである。電氣事業、瓦斯事業の如き獨占事業は一般に市營となすことを利益とするのであつて、獨逸の諸都市の如きは大部分之れを市營として居るのである。獨逸の諸都市に於ては電氣、瓦斯、水道、電車等は多く之れを市營にしてゐるが、千九百十三年頃の數字に依れば瓦斯事業は之れを市營とするもの七十六市電氣事業は之れを市營とするもの六十四市、水道事業は之れを市營とするもの八十一市、電車事業は之れを市營とするもの四十三市である。而して之等の市營事業の收益は、瓦斯事業は平均一一・七%乃至二〇・一%、電氣事業は一五・六%乃至一五・八%、水道事業は八・四%乃至一四・二%、電車事業は三・四%乃至六・六%の純益をあげて居る。之れは市債費、減價銷却等を差引いた純益であつて、特に株式會社として換算した場合の配當率に相當する意味の數字である。之等の例に依つて見ても瓦斯、電氣事業の收益の大なる事は云ふまでもなく、公營事業として適當なものである。我國に於ても特に事情を異にすべき理由はない。從來の東京市の如く纔かに電燈事業の一部と電車事業を經營するに止まり、電力水源の如きは總て民間に奪はれて、民間會社の壓迫に甘んずる狀態であつて當然東京市の利用すべき水源さへ何等之を獲得する手段を盡さなかつた事は今更遺憾の次第である。僅かばかり報償金を得たとて何の足しにもならぬ。ベルリン市電氣事業の如きは市營前會社は常に市に對して數百萬馬克の報償金を收め、時に依つては純益の五割乃至六割を市に納附した時期さへある。瓦斯事業の如きも東京市は僅かに數十萬圓の報償金を得て居たが納める必要なしとて會社から訴へられて居る。斯くの如き權力のない慘めな都市は世界にあるものでない。殊に歐米の首府と比して東京市の無力な事は何事にも支障を來す原因となつて居る。東京市をして營利會社の頤使に甘んぜしめず市民の利益を計り東京市の財源を涵養せしめんとすれば之等の傲慢なる營利會社を買收して之れを公營事業とする事は最も必要である。

以上述べるやうな東京市の財源涵養に關する事項は直ちに實行出來るものもあり、數年後に俟たねばならぬものもあり、又必ずしも速かに收入の伴はぬものもあるが、之等の計畫を斷行する

決心さへあれば、復興豫算に對しても十分の計畫を立て、又其公債募集を必要とする部分に就いては償還財源を豫想することが出來るのである。公營事業及び特別負擔收入を除いた以上の財源を總括すれば目下一年千五百萬圓將來三四千萬圓の收入を得る事は易々たるものである。此外築港及び運河より生ずる收入及び財產もある。然らば最初に述べた帝都復興に關する東京市負擔額三億五千萬圓を負擔するには決して其財源に困却せぬ。更に又或論者が今回の災害を〔以〕て地方的とし、全く之れを地方の財政及び從來の例のみに依る國庫の補助を以て實行せよと論ずるならば東京市は國〔の〕負擔〔す〕る四億六千萬圓の一部分を引受くると共に東京市内に於いて納附せらるゝ國稅所得稅約五千萬圓の半額二千五百萬圓を東京市に交附されるならば東京市は易々として其要求に從ふであらう。要するに東京市に十分の財源を與へずして復興計畫を當然の必要を顧みずして萎縮せしめ、或は又國庫の負擔の多き事を誇示して恩に着せる事は東京市民にとつては甚しく迷惑千萬なのである。東京市民の聲は與ふべきものを與へよ、然らば自ら行はんと云ふに相違なら

次に國の負擔に屬する既述の復興豫算四億六千萬圓の外に各省所管事業の罹害復興に必要とする豫算約五六億と稱せらるゝものを合算すれば國は約十億の復興經費を負擔せねばならぬ。國は之れに對して適當の財源を求めねばならぬが、假りに前記の罹災地の交通稅、營業稅等の地方移讓が實現さるゝならば、更らに其缺陷を補充すべき財源を認めねばならぬ。又更らに罹災の爲め一般國庫收入の減少もある。之等に關して精細な計算の上に議論をする時を持たぬが、單に大體論として政府は如何なる方面に財源を求むべきかといふことに就いて私見を述べて見たい。第一に政府が剩餘金を使用すべき事は云ふまでもなく、第二に政府が出來得る丈け國費の節約を爲し殊に軍事費の節約を行ふ事に依つて消極的に國費の不足に對抗し得る事は云ふまでもない。第三に貨幣改鑄益金であるが、之れは其一億八千萬圓を全部此際消費盡してもよいと思ふ。之れは一部に社會事業費に充つるべしとの議論もあり、私も從來其の說を持つて居たが之れを基金として永續的の社會事業費に充つる事は勿論反對である。總ての基金制度の時代遲れであることは云ふまでもなく社會事業の如き重大なる問題を偶然に生じた財〔源〕を以て經營せんとするは甚だ姑息であつて宜しく堂々と租稅に依つて實行すべきである。但し改鑄益金に關し別に適當な用途なき故之れを社會事業に支出すべしと考へ、又現在も一部は之れに充當すべきものと思ふが、之れを基金とする如きは固より誤つて居る。然るに今回の如き大災厄が突如として生じたるに際しては大戰

爭の影響に依つて夢の間に集積した貨幣改鑄益金の如きは將に好適の用途を見出したものであらう。從つて現在及び將來生ずべき貨幣改鑄益金を大部分災害復舊の經費に充當すれば少くも一億五千萬圓を得られる。

之丈の方法でも政府は數年間に五六億以上の財源又は節約をなしうる事は容易であるが更に必要とする場合には積極的の增收を計る途がある。先づ特別の損害を蒙つて居る鐵道遞信の事業に關しては各自に收入の途を講ぜしめてもよい。鐵道省の如きは旅客運賃を或部分に於て引上げる事に依つて多少の收入を增す事も出來よう。或は單に之れを復興期間實行してもよい。遞信省も亦重大な損害を蒙つて居るが私は此際郵便料の値上げ即ち葉書を貳錢に信書を四錢に値上げすべきものであると考へる。大戰爭以來諸物價勞銀が騰貴したに拘はらず郵便料のみは一定して居る。通信機關の如きはなるべく低廉である事を要するのは言を待たぬ、然し自らそれには限度がある事情に應じて料金の改訂を行はざれば勤務(サービス)の惡くなる事は當然である。然し通信機關は言論機關及び實業界にて最も多く利用されるために其値上げは常に之等の反對に會つて政治的に困難な事情がある。然し之れに逡巡するのは不忠實であり又値上げに反對する者にとつても眞の利益ではない。公平な立場に在る我等の目から見れば郵便料が安きに失する爲めに濫用されて居る傾きがあると思ふ程である。殊に五厘一錢の値上げはそれ程の負擔でもあるまいと思ふ故此際斷然値上げをして郵便事務の改良を行ふと共に國庫缺陷を補つてもらひたい。

猶一般に收入の增加を必要とするならば私は此際酒造税ビール税淸涼飲料税及び煙草の値上げを行ひ化粧品等の課税を增すもよかろうと思ふ。今回の如き困難に際して罹災地の住民が饑と寒さに苦しんで居るに際してせめて復興の期間なりとも之等の奢侈品の消費に對して幾分多くの提供をなさしめる事は十分の理由がある。又國民としてもせめてそれ程の同情を持たねばなるまい。今酒を一割値上げすれば一年二千萬圓の增收を得煙草一割値上げすれば一年一千萬圓の增收を得る。此値上げを五年間實行するとしても少くとも一億五千萬圓の收入を增加し得る。其他を合せて二億の財源を得る事は決して困難でない。

猶更に必要あれば全國に臨時特別所得税を賦課するのである。其年限は約之れを五年に限り、金額は從來の所得税納附額の約一割を增額する程度が適當と思ふ。今回の災害が國難である事は屢々述べた通りであつて、たとへ復興に關する事業の性質上出來得る限り地方に於て之れを分擔すべきは勿論であるとしても此際國庫から之を援助する必要があり、殊に當然全國民の

負擔すべき政府營造物、文化復興其他の經費がある。戰爭の費用の如く全部が國民の平等負擔に歸すべきものでないことは明かであるが、其一部分が國民の平等負擔に歸すべきものであること 明かである。此意味に於て一方消費稅を課すると同時に其均衡を得る上からも特別の所得稅を負擔せしむべきである。今回の大災害に對して全國民は單に同情を寄するのみならず、幾分の物質上の負擔を爲すことが當然であることは屢々述べた通りである。之に依つて大損害の復舊が助成さるゝは勿論幾分でも我國の文化經濟の受けたる損害、首府及び重要なる貿易港其他の罹災地の恢復を助長することになれば國家のため頗る幸福である。斯かる相互扶助の精神は單に人道上のみならず國家の結合の上から云つても、發展の上から云つても最も重要なものである。今假りに右の程度の臨時特別所得稅を賦課すれば一年二千萬圓、五年間で一億圓の增收を得ることゝなる。

要するに右の如き市の財源を涵養し、國庫は又適當なる節約を行ふと共に現在存する適當な財源を利用し、且つ更に如上の適當な財源を新に求むれば決して國市合して十數億の復興財源に苦むことは勿論ない。此外一般の罹災地の經濟復興、建築事業の速進のためには割增付小額債券の募集、預金部資金貸付等の方法を以てそれに對抗することが出來る。郵便貯金は將來に於ても年々一億の增加を見ることは推定出來る故、少くとも向ふ五年間の復興事業期間郵便貯金の年增加額の半額五千萬圓を復興に關する預金として貸付くることは最も適當な運用であると考へる。政府從來の無責任亂暴の極を盡くした郵便貯金の利用方法を考へれば復興事業に郵便貯金の大部分を貸付くることは最も當を得たるものである。政府は從來の惡事に對する罪亡ぼしとしても此位のことは行はねばなるまい。然らずんば寧ろ郵便貯金の如きは少くとも罹災地の人民は之れを預け入れざる同盟をして罹災地の自治團體に市營の貯蓄銀行を許可することを政府に强要すべきである。

我々の同僚であるベルリーナー氏は今回の災害に對する改造費を理論上總て不生產的經費と同一に取扱ひ全部租稅に依らしめ、公債は獨逸戰時財政の失敗の例に鑑みて絕對に募集せざることを極力進言して居るが、實際問題は別として、理論上此說は十分に尊重すべきものである故、出來得る限り公債の募集を避け、譬へ事業が後に殘るものでありとは云へそれが單に破壞されたものゝ復舊に過ぎないのであるから、從來の負擔の外に更に二重の負擔を後世に殘すことなく、なるべく不幸に遭遇した現在の民市、國民の力に依りて出來得る限りの負擔を爲す決心をすることは最も緊要なことである。此覺悟あつてこそ却つ

て精神も緊張し復興の機運を勃興せしめることが出來るのである。猶此點からして所得税を全國に課すべしとの議論も生ずるのであつて、ペルリーナー氏は所得税を全國に課することに依つて國民をして今回日本國家の蒙つた災害の大きさの程度の如何なる程度のものであるかを知らしめて、これを緊張せしたることが出來ると說いて居る。しかし今回の復興財源を全部租税に依る事は困難であり、殊に一時に巨額の支出を要するものもある故、或程度までは公債の發行も亦止むを得ないだらう。

乍併出來得る限り內債に限る事は最も必要であり、既に我國政府に於て方針を抱持せらるゝやうに見えるのは結構である。現に我國の內債募集力を計ることは財政金融の實際家に非る我々の最も困難とする所であるが我國の金融界が此一二年來大正九年にも比すべき窮迫の狀態にあつたことは固より明かなことであつて、大正十二年五月の數字を見ると、六大都市銀行集會所組合銀行の預金に對する貸出しは二億七千六百萬の超過を示して居る。平素ならば預金總額に對して貸出は數億の下位にあらねばならぬが、大戰終了後より我國の金融界は絕えず貸出超過の危險狀態を繼續し、又同月の手元金の預金に對する割合を見ても右は六大都市平均七、二%に過ぎない。假りに此の率を極端まで下げて五%としても一億圓位を證劵化し得るに過ぎない。固より金融の狀態は絕えず變化し、銀行の資金も變遷するが、從來の如く一年に四億、五億の募債をすることは斷じて困難のやうに思はれる。外債に就いては大正十二年三月末國債三十八億の中外國債十三億五千八百萬圓であつて、外債利拂年約六千萬圓に上つて居る。假りに利拂が此の上四千萬圓增加して一億圓の利拂をなす能力が我國民經濟の能力にありとすれば約六七億の外債は募集出來る。乍併今回の如き大災害を受けた我國に之れに對する公債費を支辨し得る資力が存在するかは疑問であり、少くも之れに苦むに相違ないから、明かに生產的事業であるものゝ外は絕對に外國債は避くべきものであらうと考へる。要するに內國金融界より此五年間に總計五六億圓、及び小額債劵に依る資金收額一億五六千萬圓程度のものを得ることは困難ではなからう。但し後者に就いては募集手段如何によつて增減を生じやう

割增附小額債劵募集のことはかね〴〵私の論じた事であるがそれに對して射倖心を刺戟するといふ抽象的の理由で反對するものもあるが、假へ一部にさようなことがあつても指摘し得る程の弊害を聞いたことはない。かかる論者は貴族院の一部にあるやうであるが、然らば何故速かに從來の勸業債劵の割增附撤廢を叫ばないか。私の見る所を以てすれば、割增附發行は特に

其場合を限定すれば弊害がないのみならず今回の如き非常時に際して復興の大事業をなす爲めに適當の財源を求め、同時に溢費さるゝ遊資を吸集する手段として最も有効な手段であると思ふ。上品ぶつた雲上の空論に依つて實際的の機宜の良策の遂行の妨害になるやうなことはなるべく十分の注意を以て避けて貰ひたいと思ふ。

今回の如き突然の大事變に際しては臨機の處置を取るために法制も必要であり、又財政上に於ても從來實行の勇を缺いたものを此際斷行すると共に更にそれ以上の臨機の處置をとる必要もある。私共は市民、國民が罹災者の救濟、復興事業の完成のために相當なる負擔を辭しないと共に政府殊に財政當局者が當然とるべき手段を盡し、且つ其信ずる所に向つて勇を鼓して進まれんことを希望して止まない。

毛禮卿及其時代

蘇峰學人

著者と毛禮卿

大正十二年九月廿八日、漸く新築のバラックが日吉町なる國民新聞社の燒跡に出來上り、燒殘りの木片や、煉瓦や、石や、印刷機械の遺骸などが狼藉たる中に、荒削りの板のままなる机を据ゑ、それに凭り掛つて國民新聞の原稿を書きつつあるの際、偶々毛禮卿の訃音に接した。予は手に握りたる泉筆を落さねばかりに愕然として、暫らくは書きかけた原稿紙の上に兩肘を突き、無意識的に殆んど机まで垂れ落ちんとしたる予の頭を支へて暫らくは茫乎となつた。卿の死は決して予にとつては意外ではなかつた。彼は日本流の數へ年では八十六歳だ。彼の爲すべき仕事は夙くの昔に濟んで居る。彼は人生の終幕、勅選詩宗テニズンの所謂最後の關を踰るの外に仕事はなかつた。されば早晩之を豫期してゐた。然も豈に料らんや、今ま此の場合に、此事

を聞かんとは。

予は別段彼の朋友でもなければ門人でもない。面識もなければ書信の往復をした事さへない。予の方から彼を知つて居る事は三十年、否な殆んど四十年に垂んとして居るが、彼の方から天地間に一個の蘇峰生の存在するを知つて居る譯もない。かかる本來沒交渉の人に向つてそれ程予が心を動かしたのは抑も何故であらう。予は自問自答して、遂〻に言ふ所を知らぬ。

× × × ×

そは兎も角も予がジョン・モルレーの名を知つたのは、明治十五年の頃であつた。當時日本は自由黨繁昌の世の中で、其黨中の新知識が即ち馬場辰猪君であつた。予は當時熊本の東郊に大江義塾なる私塾を吾父淇水翁と共に設立して、五十乃至百の生徒を集めてゐた一個の無名書生であつた。上京の際板垣其他の首領株を訪ひ、馬場君についていろ〱聞く所があつた。當時馬場君の寓居は日吉町にて、現在國民新聞社の後ろなる裏通の角の二階であつて、其二階の窓には碧梧が涼しく蔭をさしてゐた。そこで兵兒帶浴衣掛の馬場君と對座したが、君が英發の議論と、秀峻の容貌とは、田舍漢の予に深き印象を與へた。君は曰く政治は人である、政治を知るには先づ政治家を知らねばならぬ。先づ之を讀み玉へとて出し貽られたのがジスレリーの傳とコブデンの傳であつた。而して其のコブデン傳の著者が即ちジョン・モルレーであつた。コブテン、ブライトの名は予は同志社在學中から知つてゐた。それでコブテンの傳は少からざる興味を以て之を一讀した。元來熊本に於ける横井小楠の一派は其學説に於いてコブデン派の政治上社會上經濟上の意見を容るゝに相當の素地があつた。横井小楠の政治意見は、徹頭徹尾平和主義であり、道德の理法を、個人より推し擴げて之を社會に及ぼすにあり、社會より推し擴げて之を國際社會に及ぼすにあつた。されば小楠門人の子である予の如きも、傳統的にコブデンの意見を猶豫なく受け容れることが出來た。而して其傳の著者の何人であるかを知らんと欲するの情が最も切であつた。然るにやがてモルレー卿の名は外國電報や外國新聞に屢々揭げられて來た。其れも其筈だ。當時は正さに卿が文壇より政壇に進むの時節であり、明治十九年即ち一八八六年は愛蘭自治案提出の年であり、同時に彼が一新聞記者より直ちに内閣大臣となつた時であつた。而して偶然にも予の「將來の日本」が世間に出でたのも、亦た同年であつた。爾來予の新聞記者的生涯は今日まで繼續してゐるが、其繼續してゐる間に於てモルレー卿の著書は悉く予の手に入らぬものはなかつた。否な予は一と通りでなく、二た通りも其の全集を持つてゐる。されど予は

彼の信者ではない。彼の議論に無制限の贊成者ではない。又人物としても彼をさほど豪傑とも、偉人とも思ふて崇拜するものでもない。予自身からいへば予は彼に取る所ある如くトライツケにも取る所がある。彼に取る所がある如くチエンバレンにも取る所がある。併しながら予には何となく彼に對して言葉にて說き現はし難き親しみがある。予は必ずしも彼を自分の典型として歩いて來たのでもなく、何ぞ況んや競爭者としたのでもない。併しながら何所やら親類らしき感を胸底に湛へてゐる。予は彼の著書の愛讀者であるが、併し彼の文章には絕對の賞讃を表するものではない。實を云へば予には餘り六つかしくある。彼の文を玩味するには些か骨が折れ過ぎる。併しながら尙愛讀するを禁ずる能はざるものがある。彼の死は英國の政界にも文學界にも何等の缺陷はない。彼は生きてゐても過去の人であり、又歷史であつた。歷史が歷史の中に去るのに何の缺陷があらう。併し予の胸中には彼の訃音は少からざる缺陷を生じた。予は予の親友の一人を失ふたより以上の寂しさを感ぜずにはゐられない。抑々彼は何故に予を斯く感ぜしめたのであらう。

毛禮卿略傳

○出身及記者生活

今玆に彼に就て語るに際して先づ概略彼の履歷を知つて置く必要がある。彼は一八三八年十二月廿四日即ち我が天保九年大鹽平八郎が大阪にて燒打の騷動を惹き起した翌年，賴山陽の死後足掛け七年目に生れた。彼の家は中產階級の寧ろ中位にありて、父は端嚴なる醫者であり，其の職業よりも書物が好きであり、外科器械を携へて附近の工場を回診する際には常に袖に本を入れて歩いてゐた。佛蘭西語羅甸語等の書籍も往々袖珍本が存してゐて如何に彼が自習獨學して此等の書籍を愛讀したかといふ事が分る。彼の端嚴と書物好きは父から受けたのであらう。彼は十七歲にして奬學資金を得てオックスフォードのリンカーン校に學んだ。之が一八五五年安政三年江戶大地震の翌年である。彼は本來英國々教の敎職に就くべき望みを以て牛津に學んだが、其信仰は國教の僧籍に入るを許さずして一時は金持ちの家庭教師となり，巴里邊に同行したが，それも其性質に適せず，又た倫敦に赴いて文筆にて口を糊しつゝ辯護士たるべくリンカンスインに學んだが，折角辯護士の服裝なども調達したが，別段の依賴者もなく、遂に新聞記者が其本業となつて了つた。彼は牛津在學中から己に文筆の事を好んでゐた。彼が倫敦に出たのは二十二歲の時で，一八六〇年即ち萬延元年本文の記者が生るる三年前であつた。彼は當初リテラリイ・ガゼット

(文學雜誌)の助筆者より、編輯人となり、又ブライト其他の急進派の機關と目せらたる日刊新聞モーニング・スター(曉星)にも關係し又當時赫々の名あるサタトデー・レヴュー(土曜評論)にも定りたる寄書家となつて筆を執つた。然も彼の文名は次第に高くなり、彼は遂に一八六七年我が慶應三年レウイスのあとを繼いでフオートナイトリー・レヴュー(隔週評論)の編輯長となつた。三十歳未滿の壯年記者としては實に異常の出世であつた。彼は之を一八八二年まで維持した。斯くて別に一八八〇年よりして夕刊新聞パルマル・ガゼットの主筆をも兼ねた。一八八三年には之を罷めたが、それから一八八五年までマクミラン・マガジン(此れはマクミラン書店より刊行したる文學雜誌にて比較的編輯者として骨の折れざるもの)の主筆となつた。而して之も一八八五年に罷めた。それ以來彼は新聞雜誌とは全く關係を絶つたが、而かも彼は尙マクミラン會社の出版業の顧問として其前後に有名なる英國文人傳叢書及び英國十二政治家傳叢書などの編輯長となつた。

○政治的生涯

彼の政治的生涯は一八八三年の補缺選擧にニユウカツスルから出でて初めて議員となつた。其以前彼は一八六九年自分の故郷であるブラックバアンから出でんとしたが落選し、又一八八〇年にウエストミンスターから出んとしたが落選した。而して三度目に辛やく議員たるを得た。併し議員となつて幾程もなく、即ち一八八六年の初めには一躍愛蘭大臣となり、在職半歳足らずにして其六月には内閣の總辭職と共に辭職した。又一八九二年八月から一八九四年三月まで虞翁最後の内閣の愛蘭大臣となり、それから引き續き、一八九五年六月までロズベリー內閣の愛蘭大臣となつた。其後一九〇五年十二月カメル・バンナーマンが自由黨の内閣を組織するや印度大臣となり、同じく一九〇八年四月子爵を授けられて上院に入り、それから一九一〇年十一月には印度大臣から樞密院議長に轉じたが、一九一四年八月英獨開戰の際彼は内閣を去り、それ以來彼の政治上の生活は全く終つた。其後一九二一年十二月愛蘭自由國の建設に關する問題に付て彼は特に當時の上院首領の需に應じて其發議者たるべく出席した。之は彼が終身の事業は愛蘭自治案に繫つてゐたから其晩年を飾る最後の際であつたからだ。

○文學的成績

顧つて彼の文士としての著作の概略をいへば、一八六六年出版したるバーク傳は最初の著述であつた。之は一八七九年修正

して英國文人傳叢書中の一卷となつた。一八七一年にはヴオルテイア評傳が出た。それから一八七三年ルーソー評傳が出た。同年「國民教育の爲めの抗爭」と題する小冊子が出た。それから一八七四年にはオン・コムプロマイス（調和について）といふ一冊が出た。それから一八七八年にはヂデロ及び佛國百科全書派諸家についてのが出た。一八七一年同じく一八七三年には評論雜纂ともいふべきものが出た。一八八一年には前に掲げたるコブデンの傳が出た。それから一八八九年にはワルポール傳が十二英國政治家傳叢書の一冊として出た。一八九一年にはスタデイス・イン・リテラチユア（文學研究）と題し種々の論文を集めたものが出た。一九〇〇年にはクロムウエル評傳が出た。一九〇三年には有名なるグラツドストン傳が出た。一九〇八年には論文雜纂の第四冊目が出た。同じく一九一三年にはノーツ・オブ・ポリチツクス・アンド・ヒストリー（政治及び歴史に就ての覺書）と題する小冊子が出た。其他印度大臣として在職中の演說等を集めて一冊としたものも出た。而じて最後に一九一七年レコレクシヨンス（回想錄）と題して彼の自傳が出た。之が著述としては最 である。

○彼の身分

彼は一八九五年にニユーカツスルに於ての議席を失うた。此落選は彼が多數の選擧者である勞働者に向つて八時間勞働制を法律を以て規定するに贊成を表すると明言しなかつた爲めである。併し彼は其翌年スコツトランドのモントローズから選擧せられて一九〇八年四月子爵となるまで其處を代表した。彼はエドワード七世が一九〇二年八月オルダー・オブ・メリツト即ち最も貴重すべき功績勳章を新たに制定せらるゝに際し最初の受領者中の一人であつた。彼はもろ〳〵の大學等よりもそれ〳〵の學位を受領したが、彼が最も誇りとしたる一はマンチエスター大學の名譽總長であつた。併しそれも近年は辭して全く退隱の生活に入つた。而じて彼が最後の息を引き取つたのは一九二三年九月廿三日午後七時十分であつた。彼は殆んど何等の苦痛もなく、前日より枕に就き、心臟麻痺のために永き眠りに入つた。正確にいへば彼の壽は八十四年と九ケ月であつた。

○一代の成績

彼の一代を斯く記して見れば別に何等驚くべき事もなく、怪しむべき事もなく、彼の一身にとつては何等小說らしき事もなく、さりとて彼が驚天動地の大事功を樹てたといふ程の事もなく、千古不磨の大發明をしたといふ事もなく、いはば平々凡々

を以て終始したとも評すべきであらうか、併し乍ら實にヴィクトリア時代の代表的人物の一人であつて、彼と共にヴィクトリア時代は殆んど消失せた。吾人 彼が如何なる働きを他の主なる役者と共にヴィクトリア時代の舞臺に於てなしたかといふ事に就いて之から少しく物語つて見たい。

ヴィクトリア時代の概觀

○エリザベス時代との對照

ヴィクトリア時代は英國の歴史に於てエリザベス時代の好對照である。固よりエリザベス時代程の愉快なる大活劇は展開せられなかつた。或はローレー、ドレーキの如き海の外やら海の上やらにて赫々たる勳功を樹てたものもなく、又ベーコンの如き偉大なる頭腦もなく、沙翁の如き千古に卓越したる詞客も出でなかつた。而して其代表者ともいふべきヴィクトリア女皇も、操縦自在世の中を己がまにまに引き廻さんとする底のエリザベス女皇に比ぶれば尋常一様の一婦人であつたかも知れぬ。併しヴィクトリア時代は其所謂平々凡々なる所に一種の特色があ、又一種の妙味がある。此時代は十九世紀の初め科學的新發明の結果、産業革命の出來りつゝある劈頭にて、いはば英國が農業なかつたらしく商工業者の國に移る時代であつた。從つて大地主である貴族の階級からして、商工業に從事する中流階級の全盛に赴かんとするの時代であつた。從つて政治上に於ても社會上に於ても暗遷默移、何人も氣づかぬ間に革命が成就せられんとするの時代であつた。從つて從來政治上に於ては殆んど其政權は貴族が壟斷し、折角庶民院の議員と稱するも其實は貴族の所有する土地から選出するもので、所謂袖選擧區(ポケツトバラー)の議員であつた。偶々貴族以外のものが内閣員となることがあつたとしても其れは一種の準貴族で、大地主でなければ其れに縁故ある人々に外ならなかつた。而して中産階級の代表者とも見るべきものが初めてヴィクトリア時代の政局に出で來つた。其大立物は申す迄もなく慶翁其人だ。此時代には自然の要求にて漸次に選擧權が擴張せられ、つひに女皇の末期には事實上中流階級は愚か勞働者に迄分配せらるゝこととなつた。

○思想上の變化

又思想上に於ては從來月並的の英國々立教會の鑄型に嵌つた信仰は新たなる發明、新たなる研究の爲めに大刺戟を蒙り、之が爲めに國立教會 多大の刺戟を受けて、途方に迷ひ、或者は思案の餘り、逆轉してローマ舊教に走つたものもある。即ち二ユ

ーマン・マンニング等の如きは其主なる代表的の人物であらう。之に反して所謂從來の信仰を失ひ正統的の信者たるを肯んぜず或は不可思議論者となり或は合理派となり或はコントの實證派に與し、否らざるも形貌の上には舊衣を纏ふも其心は全く新しき方向に向つたものも少くなかつた。本文の主題者の毛禮脚の如きが當初僧侶たらんとして牛津大學に入り、未だ學校を去らざる以前に已に僧侶たることを、良心が許さない迄に其思想が變化したといへば如何に當時の青年の思想が時代の空氣に觸れて動搖したかが思ひやられるゝではないか。今ま試みに年代を繰つていへば、ダーウインの世界を驚かしたる進化論に關する大著は一八五九年に出で來つて居る。スペンサーが極端なる個人主義を唱道したるソーシアル、スタチックス(社會平權論)は一八五〇年から出で初つた。而してバックルの横紙破りともいふべき文明史はダーウインの大著の出版せらるゝ前年に出版せられた。此等の出版物が如何に當時の思想界をして雲霧を排らき靑天を見るが如くならしめたるかは今更ら絮説するまでもない。

○リベラリズムの世の中

富國となつた時代であると同時に、思想及び文藝の上に於ても平凡とはいひつゝも又偉大の時代であつた。詩の方面に於てはテニズンあり、ブラウニングあり、マンユウ・アーノルドあり小說家としてはサッカレー、ヂッケンス、少しく時代が降つてジョーヂ・エリオットあり、歷史家としてはマコレー、カーライル、フリーマン、フラウド、レッキー、スタッブス其他あり、散文の方面に於てはマコレー、カーライルは云ふ迄もなく、ラスキン、ニューマンなどの大家あり、繪畫及びそれに關係ある技術方面に於ては所謂プレラファエル(ラファエル以前に復古する一派)なるもの出で來り、ミレース、レートン、バーンジョンス、モリス其他あり、殊に思想界に於て一代の泰斗とすべきミルあり、又スペンサーの如く一人にて大仕掛なる綜合哲學を組み立てたるものあり、數へ來らばヴィクトリア時代は實に千山萬壑秀を競ひ美を角ふの趣きがないではない。而も其間に自ら一貫したる思想の系統がある。それはリベラリズムといふ言葉で說明するより他に適當な言葉はあるまい。即ち個人を尊重し、個人の良心を尊重し、一切の信念を各個の獨立思想の上に定むるといふ事であつて、いはゞヴィクトリア時代は個人主義の徹底したる時代といふても差支あるまい。而して其個人主義なるものが所

皆これに[illegible]であつて、要求する所に作られ學問も藝術も[illegible]論も悉く皆世道人心と沒交渉のものはなかつた。尤もヴィクトリア時代に於てもオスカー・ワイルドの如き或はペーターの如き技藝の爲めの技藝、美的生活の享樂などといふことに脫線したものもあつたが、其大勢から見れば、詩人の詩も、政治家の演說も、畫工の刷毛も、文士の著作も、小說にあれ、戲曲にあれ、あらゆる哲學、倫理、諸著述にせよ、一として社會的色彩を帶ばぬものはない。社會的といふ言葉は社會主義的ではない。卽ち人類社會の奧深き運命を探り、それに向つて正しき途を追求するといふ意味に於ての社會的である。尙いろ／＼いふべきことがあるが、極めて概括的にいへば、ヴィクトリア時代は中流階級の全盛時代であり、有形無形すべてに於けるリベラリズムの時代であり、而して其リベラリズムは個人主義を基本として、社會一切の福利幸福を增進するといふ事を目的とするの時代であつた。

毛禮卿と其の交友

㈠モリソン及びメレヂースとの締交

本文の主題モルレー卿は此時代の產物であつて、此時代をすべてに於て、時代をすべてに於て最もよく代表したる一人といはねばなるまい。彼は牛津に約三ヶ年學んだ。職業を求むべく倫敦に出で來つた。彼は中產階級の中にても中流以上ではなかつた。故に彼が中等敎育は其父の少からざる犧牲によつて出で來り、大學敎育は彼の奬學金を得た自力によつて出で來り、今や已れのパンを得べく倫敦に出で來つたのである。然るに彼は偶然にも倫敦に於て全生涯を通しての一益友を得た。それは言ふ迄もなく、ヴィクトリア時代の中期より下期にかけて文學界の明星であるジョーヂ・メレヂスだ。

毛禮卿は生涯の間交々に於て最も多福多幸であつた。之は偶然といふよりも彼は交友を求むるに於て他の企て及ぶべからざる天才であつた爲めかも知れぬ。卽ち牛津在學中にもコッター・モリソンなる一の親友を得た。彼はモルレー卿よりも六七歲の年長者であつて、在學當時已に佛國などを遊歷し、英國のみでなく、大陸の思想をも消化してゐた人であつた。卿は彼によつて初めて知識の世界に引き出された趣がある。彼は卿にカーライルを敎へ、エマーソンを押しつけ、卿の胸中に新しき火を燃やした。モリソンはつひに多くなす所なくして逝いたが、而かも英國文人傳叢書中に於てモルレー卿の需めに應じ、マコレー及びギッボンの傳を書いた。之は予も熟讀したが、何れも叢書中

に於て第一といふ能はなければ少くとも其列に加はるべき傑作であつた。彼の最後の著述はゼ・サーヴィス・オブ・マン（人間奉仕）といふ一書であつて、其書目によつてその内容は略々想像がつくであらう。彼は英國に於けるコント派の仲間中にて其最も華やかなる一人であつた。

話元に戻つてジョージ・メレヂースは當時倫敦にあつて兀々乎として文藝に從事してゐた。年齢からいへばモ卿よりも十歳内外の若者で、彼等の交際はモ卿が廿五六歳、メレヂースが十五六歳といふ時から始つた。凡そ世の中に彼ほどの天才でゐて、彼ほどの傑作をして、彼ほど世間から識認せられなかつたものは少なからう。彼は文を賣つて生活をしてゐたが、而かも其文は彼の口を糊するに足らなかつた。彼の詩人としての位置も決して第二流を下らなかつた。彼が早曉の詩の如き今讀み來つても實に我心のすが〳〵しさを感ぜざるを得ない。聞く所によれば彼の得たる原稿料の最大額が四百磅であつた。此れは恐らくは例のダイアナ・オブ・ゼ・クロッスウエースであらう。彼は或る出版會社の顧問としてあらゆる原稿を通讀し、之を鑑別することを以て辛く自ら支へてゐた。併し彼は實に快活男子であつた。社會が彼を冷遇しても彼の心は常に光つて居り、温かであり、生々として居り、すべての物を吐き出すではなくして包み込む底のものであつた。彼は常に日光を愛し、新鮮なる空氣を愛し、殊に非常なる健步者であつて步行は何よりの彼の快樂であつた。彼は文士に似げなく思ひよらざる腕力を持つてゐた。大いなる鐵丸をば空中に投げ上げ之を手にて受け止むること通常人の竹片でも取り扱ふ如くであつた。彼が何物をモルレー卿に與へたかは、モ禮卿が彼の死する迄彼に對して谷々措かなかつた事を以て知ることが能ふ。彼は決して野蠻人ではなかつた。最もよき御馳走を脊む事を知り、最もよき酒の味も知つてゐた。彼の趣味は尋常に超越してゐた。併し自然は何よりも彼の伴侶であつた。モ禮卿は書物好きであつたが、メレヂースは書物として書物を好かなかつた。彼の第一議論は世と共に生きよといふ事である。第二の議論は自然と常に接觸せよといふ事である。彼は老年に至つて少年の心を失はなかつた。彼の文章が難解である事は誰しも之を辯護するの餘地がない。彼の原稿は何れの本屋よりも歡迎せられなかつたからして其或部分は親友の讀みを以て毛禮卿が編輯長たる特權によつて辛やく之を隔週評論に連載することにした。併し其れについては隨分異論も多かつた。曾つてジョージ・エリオット女史が毛禮卿に向ひ、毎號掲ぐる所のメレヂースの小說は果して愛讀者があるやと問いた。卿も其返事には窮したが、兎も角も答へ得る限り

に於て其場を締うた。然るに女史がいふには、自分は只一人の有名なる紳士が之を愛讀することを發見した。けれども其人でさへも其中に二冊の缺號があつたのに遂に氣がつかなくつて了つたといふ事を語つた。如何に難解であるかはそれで分る。されど最後には此の不遇の文人の世の中から識認せられる時節が到來した。到來した時には最早や彼の晩景であつた。彼の晩景は不幸にして足を病んで彼の最も好める健歩が出來なかつた。彼が文士として受け取つたオルダー・オフ・メリット（功績勳章）は全く毛禮其人の周旋にて下賜せられた。之は毛卿が其生涯の友人に對する一片の氷心ともいふべきものであらう。而じてメレヂースも亦毛卿に向つて如何に其信用を措いたかは彼の死後遺言書執行人中の三人の一人は卽ち卿であつた事によつて分る。兎にも角にも毛禮卿はメレヂースによつて人は世の中より引き退くではなくして、何處までも世の中に押し進まねばならぬといふ事を敎へられた。何處までも快活の氣性を以て如何なる逆境厄運も從容自若として之に當るといふ事を敎へられた。卽ち生きるか死ぬかの瀨戸際にも、鼻歌謠ふて驀進する事を敎へられた。彼等は實に益友であつた。而じて愛蘭自治案前後に於てあらゆる知識階級は貴族階級と共に之に反對し、從來毛卿の親友も十中八九は皆反對者であつたが、獨りメレディイスのみは愛蘭自治案の贊成者として變らなかつた。之は毛卿にとつては非常なる賜物の一つであつたであらう。

○ミルとの遇合

次に彼が得たる友人若しくは先師ともいふべきはミルである。ミルは彼とは別時代の人ともいふべき程に年齡が隔つてゐる。彼は一八〇六年五月の生れであれば、兩人の間に、三十餘年の差が存する。卿が牛津在學中はグリーンの日が中天に輝きて些かミルの光を掩はんとした時であつた。併し何を云つてもミルは大家だ。彼の經濟學原理は大正十二年の今日でさへも何テツキストブツクとして用ひられてゐる程で、彼は功利主義の大宗師として其の感化は政治、社會、經濟、哲學其他あらゆる方面に及んでゐる。毛禮卿は生涯に於て其最も彼を感化したものをミルと麋翁との二人としてゐる。之は實に左もあるべき事と思ふ。

ミルの夫人は一八五九年に逝いた。爾來彼は寂寞として其生涯を送つた。彼が何故に毛禮卿と交際を求めたかといふに、それは一八六五年卿がサタデー・レヴュー（土曜評論）に掲げたるニユー・アイデアス（新たなる理想）と題する一文を讀んで頻りに其作者の何人たるかを知らんと欲し、斯くて其作者が卿である

といふ事を知つて交りを求めたといふことだ。實をいへば其前から卿はミルを知らんと欲　たが、當時ミルは半ば退隱して新たなる交友に接するを臆劫に感じ、其目的を果さなかつたところ、今や却つて此論文は一種の紹介狀となつてミルより會見を求めて來た。此の交際が水乳相ひ契りて如何に速かに熟したかは想像だも及ばない。三十の靑年と六十の老人とが互に相會見して語つたは何事であつたか。爾來卿はミルの日曜晩餐の常連となつた。

○ミルの人格

ミルの大家であることとは今玆に講釋する迄もない。彼は八歳の時に希臘語、拉丁語を知り、已にプラトンを讀んだといふ程の早熟者であつた。彼は其父ゼームス・ミルの嚴肅なる家庭教育の下に已に十歳滿にして他の　を敎ゆる程の學力を修得してゐた。彼については或は論理的器械といふものもあり、或は一個の氷塊といふものもあり、或は歩行する書籍といふものもあり、いろ／＼の說もある。併し彼は大いなる學者であると共に大いなる心腸の所有者た。彼が卿に對する訓言は、世の中の新鮮なる空氣と接觸せよ、世の中の事に向つて汝の最善を盡せ、すべての問題をば消極的よりも積極的に硏究せよ。而して處世の敎訓として此世の人世に於て此世が與へ得る以上のものを期待する勿れといふた。彼の議論は敬重すべきであつたが、それよりも彼の人物は更に敬重すべきであつた。彼を評して合理派の大德であり、功利主義者中の聖人であるといふも恐らくは溢辭であるまい。彼の著作中にて最も人を動かすものは彼の自傳である。之は片々たる小冊子であるが、一種のヒューマン・ドキュメント（人間の記錄）である。之を讀めば如何にミル其人が高明側徹なる心地を持ち、眞理を愛し、世を救ひ、人を憐むの念が眞摯にして且つ濃厚であつたかゞ想像せられる。ミルといへば世の中では只理屈屋の親玉の如く思つてゐる者もあるが、なか／＼以て左樣でない。彼は實に献身的長者の標本であつた。彼がウォルズウオースの詩集の愛讀者であつた事は彼を知らざる人にとつては意外の驚異であらう。彼の友人の或者は彼がウオルズウオルスを愛讀するを甚だ不快に感じた。彼は從容として曰く、成程ウオルズウオルスは君等が戰ふ所の戰場に於ては向ふ側である。（その保守主義たるが故に）併し一度君等が戰ひ勝つた後に、最も要するものはウオルズウオルスによつて養はれたる性情でなくてはならぬく。

○ミルとカーライル

ミルとカーライルとの關係を詳かにすれば如何にミルが敬愛す可き大人であるかといふ事が分るであらう。ミルは佛國革命史を自ら書かんとして其材料を集めてゐた。併しカーライルがそれに着手するといふ事を聞いて自分の有する材料を悉く擧げて之を渡し、又あらゆる助力をした。然るに其一卷が出來上つて其原稿をミルに示すべく渡した。それが不幸にもミル家の下女が之を反古と心得、ランプ掃除に使用して了つた。之はミルにとつてもカーライルにとつても實に困り入つたる事であつた。ミルは百方謝罪し、而じて其失策の爲めに其賠償金を出さんとした。而かもカーライルは之を受くるを欲せず兎も角も再び勇氣を鼓して原稿を書き直した。而じて其間の生活費は當然己れが負擔すべきものとしてミルの方から送つたが、カーライルも之を退くることは出來なかつた。カーライルがクロムウエルの演說及び書簡を編纂した事も實はミルの心づきからであつた。彼等は一八三一年頃からの交際で而かもカーライルをして倫敦に於ける地歩を確立せしめた事についてはミルの力が與つて多きに居るというてもよからう。併しカーライルはいはゞ哲人主義者にて世の中の事は愚者が賢智者に服從し、有力者が無力者を統率して行くといふ事の立て前であり、ミルは寧ろ賢智者の賢智者たるべき點は何處に在る、又すべての人が賢智者となるべき道は何處に在るといふ方向の指導を事とした爲めに兩者の途は自ら背馳せざるを得なかつた。

○議會に於けるミル

ミルは一時議會にも出た。併し議會では思ふ程の成功はしなかつた。併し恐らくは彼も成功をすべく初めから思うてゐたのでもあるまい。彼が議會に立つて演說するや、ヂスレリーは其鼻眼鏡を手に取り、其傍の人を顧みて、好個の女家庭教師よと叫いた。成程百戰の老將たるヂスレリー等の眼から見ればミルの態度は如何にも恭謙にして學者臭く、毒もなければ覇氣もなく、只自分の信ずる所を諄々と述ぶるに過ぎなかつたのであらう。併しミルは眞理の前には決して臆病ではなかつた。他人と論難することについては未だ曾つて一度も廻避した事はない。彼は感情のなきもの丶やうに思ふ者もあるが、併し實は其裏には感情が燃えてゐた。毛禮卿にいはすれば時としては餘りに感情に馳せた事もある。それは一八七〇年七月十四日毛禮卿が佛蘭西が普魯西に向つて宣戰した報を齎らすやミルは卒然として其椅子を叩いて曰く惜しき事をした。オルシニの爆彈が其目標を誤り、惡黨の簒奪者（奈翁三世）を今まで活かして置いた事をと。かかる言葉は氷塊や、若くは活ける書籍では吐き出す事は出來ま

い。

ミルと其の夫人

ミルの一代にて是非共書かねばならぬ事はテーラー夫人との關係である。ミルは人の眼からも恐らくは神の眼からも立派な人格者であつた。彼は人さへ知らねば如何なる事をしても差支へないといふ如き横着者ではなかつた。其品行の端正なるには誰しも一指を挾むものはなかつた。併し彼とテーラー夫人との關係については少からず世上の疑惑を惹き起し、彼の親友も屢々忠告し、彼の父であり彼の師であるゼームス・ミルも甚だ之を懌ばなかつた。併しミルは世間の何物をも頓着なく其關係を維持した。關係といふ言葉は誤解してはいけぬ。眞のプラトニッククラヴで夫れ以上には出なかつた。此顛末についてはミルは立派に自叙に書いてゐる。今少しく自傳中から之を物語るであらう。

「予が最初に此貴女に出會したのは一八三〇年予が二十五歳彼女が二十三歳の頃であつた。彼女は弱齢にしてテーラー氏の妻となつた。テーラー氏は正直で、勇敢で、堅實なる人格者で自由寛大なる意見を有ち、立派なる教養を受けたる紳士であつた。但彼女にとつては彼が知識的及び技術的の趣味が缺乏して、彼女をして些かそれに慊らざる感を有たしめたの外、彼女を愛し、彼女も亦彼に對して尊敬と愛情を捧げてゐた。自分は幸にも彼女と交際を初め、而じてこゝに初めて彼女によつて新たなる世界が開けたやうな感じがした。外形によれば彼女は美と慧との塊りの如く、接近する人を感ぜしめたが、内部に立入つて見れば、世間並の美にして賢なる婦人といふよりも、深遠にして雄勁なる感情の持主であり、透徹なる直覺的の聰明の天資を備へ、而かも並々ならぬ創懐的にして且つ詩的の性情の天稟を具へて居る婦人たることを知つた。自分はそれから約二十年間彼女と親密の交際をなし、其後彼女は自分の妻たることを承諾した。」

と言つて居る。彼等の交際が如何に親密であつたかは、ミルは場所を定め時間を定め毎週彼女を訪問し、其訪問の時にはテーラー氏はわざと避けて不在であつたといふ事だ。彼等は斯くの如く交際したるのみならず時としては相携へて旅行したる事もあつた。さればミルとテーラー夫人との關係は厳格なる英國の社交規律に照して随分物議の種となる事いあつたのは決して驚くべき事ではなかつた。尚今こゝにミルの言葉を引くであらう。

「此時分には彼女は一人の幼少なる娘と共に田舎の静かなる

であつた。予は彼女を田舎にも倫敦にも訪問した。而じて彼女は世間の物議に頓着せず獨居の時にも予の訪問を許し又は時としては相共に旅行することさへも許したる其氣象の雄々しきに負ふ所少くない。」

固より彼等の當時に於ける關係、強き愛情と親密たる昵近の外何等超ゆる所は　かつたとはいへ、彼がそれ程ヱライ女であつたか否かは何人も疑問とする所だ。ミルはすべての事に長じてゐたが全く世間知らずの漢であつた。彼は生れ落ちてから直ちに其父の嚴肅な教育にて成長し、夫れから東印度商社に勤め、其交友とて何れも當代の名士學者等であつて所謂婦人の感化などといふ事はテーラー夫人以外には沒交渉であつた。世間知らずの朴念人が一度テーラー夫人に會ひ、其才貌と言説とに魅せられて以來彼は忽ち天地間にかかる賢女があるかと思ふたのも、彼としては無理からぬ事である。彼の大著經濟學原理にも彼は彼女に負ふ所ありというて、斯く記してゐる。

此著述中勞働階級の恐らくは來るべき前途　題する一章は全く彼女の助言によつて出來たものだ。當初は此一章全く缺けてゐた。併し彼女は勞働階級の前途についての意見を予に語り遂に予をして此一章を書き加へしむるに至つた。

べき「On Liberty」の如きは彼女の逝きたる後之を出版し、其緒言には兩人の合著と特筆してある。併し世間ではミル夫人は夫れ程の賢女でもなく、只一通りの悧巧な女であつて、ミルが言ふことを能く聞き覺え、それを又ミルに語るからしてミルが意外にも自分と同じ意見を其夫人が持つて居ると驚嘆したのであらうといふものもある。又曾て毛禮郷がカーライルにミル夫人の事を聞いたら、カーライルは、彼　碌でもない知識の充滿したる女で、何時も小六つかしい難問題について樣々の質問をなし、夫れをミルが丁寧に答辯し、解說してゐたといつて居る　之も或は酷評かも知れぬ、併し兩人の關係はカーライル夫婦の關係よりも幸福であつたらしい。カーライル夫婦は二個の天才が相愛したるに拘らず燒餅やら嫉妬やら意見の衝突やら、自我の張り合ひやらで常に火花を散らして喧嘩してゐたが、ミルは大人しく其女神の下に跪き女神が死した後は自分も其墓の附近に住し、彼が死んだ時には彼の妻と共に佛國アビノンなる黑き松葉の下に互に並んで眠つてゐる。偕老同穴とは全く此事であらう。

○ミルの死

世間では隨分ミルと夫人との事をいろ〳〵云ふ人があるが又ミルは之が爲に少からざる社交上の損害を蒙つたが、併し二十五歳から彼が六十七歳までの生涯は、最初の二十年は友人關係にて、次の七年は夫婦關係にて、最後の殘年は精靈の關係にて常に彼女は彼の支持者であつたに相違あるまい。ミルの死が如何に毛禮卿を悲しましめたかは彼の死せる時に書いたる追悼文が之を證して居る。又死する少しく以前最後の合離を叙した一文を見れば如何に此兩人の師弟が互に相許したかゞ分る。今ま其意味を摘載すれば左の通りである。

「彼はギルフォード停車場に朝の汽車で着いた。其處に予は待ち受けて居た。我等は悠々として約四時間ばかり徒歩した。彼は熱心なる植物學者であつたから十分間毎には路傍の植物を見て立ち止まつた。予は不幸にして其道に暗かつたからして彼の熱心に與ることの出來なかつたのを遺憾とする。彼はよく語つた。或はゲーテを語り、シルレルを語り、英國の文士に就いて語り、羅馬の歴史に就いて語り、愛蘭自治案について語り、ウオルズウォルスについて語り、彼の話頭は數限りもなかつた。かくて吾等が家に到着し午餐の卓上にては全で小供の如きあどけなさを以て野の花とか、昆蟲とか鳥の啼く音とかについて予の妻に語つた。彼はナイチンゲールの歌を聞くべく待ち受けて居た。かくて彼を附近の停車場まで馬車にて送り、予が生涯中最も愉快なる一日は暮れた。やがて悲むべき日は急に來た。彼が聽かんと欲するナイチンゲールは晴夜に其樂を奏した。而も之れを聽くことを待ちかねた人は永き眠りに入つた。

蓋し彼等の此の會見は一八七三年三月九日ミルが英國を去る數日前で、彼は同年五月八日アビノンにて永き眠についたのである。フレデリッキ・ハリソンはコント派の勇將でミルの門下生でもなければ友人でもない。併し彼はミルについて斯くいうて居る。彼の門人モルレーは彼の死するや強き且つ純なる光は消えた。明白なる見地と慈悲ある人との輝きは失せた。吾人は偉大なる師表と知識と道義の模範を喪うたというたが、それは少しく一時の哀情の爲めにいひ過ぎたものゝやうではあるが、正味を論じ上ぐれば何人も大いなる異論はあるまいと。而して又ミルについてハリソンは斯くいうた。ミル彼自身は眞實に女性的性情の情趣の心腸を有つて居た。彼の心胸は彼の頭腦よりも更に豐富であつたと。之はよくミルを諒解したものゝ言と云はねばなるまい。毛禮卿は最後までもミルの門人であることを恥とせなかつた。何人もミルに對して一矢を向るものあれば彼に敢然として之を防禦した。

二人の外國人

ミル以外にモルレー卿を最も感化せしめたる二人の外國人がある。それはヴィクトル・ユーゴーとマヂニーだ。二人とも自國を追はれて英國に逃れて居た。ユーゴーはルイ・ナポレオンと喧嘩をしてゲルンシーやゼルシーの英國海峽の島に逃れ、伊太利の志士マヂニーは倫敦にあつて遙かに其同志を指揮して居た。此兩人が如何なる程度に毛禮卿を感化したかは一寸想像がつかぬが、併し當人のいふ所によつて之を觀れば決して少々ではなかつたらしい。而じて更にそれと同時に忘るべからざるはコントの感化であらう。コントは全くハリソンを感化せしめて彼の永き一生をコント派として始終せしめた。モルレーはコント派たることを屑とせなかつたが而かも彼は極めてそれに接近した。卽ち彼の師ミルの如きもミル當人が自覺するより以上にコントの之に及ぼしたる感化は偉大であるといふものもある。毛禮卿はユーゴーとも書信をも往復し又ユーゴーとも相見た。併し彼は個人的接觸に於て最もマヂニーと相近いた。マヂニーは啻に伊太利に於ける大人物であるのみならず、歐洲を通じ十九世紀に於ける偉人の一であらう。彼には幾種の方面があつた。彼は一方では暗殺でも流血でも何事でも目的を達するためには[illegible]といふ[illegible]には[illegible]義的精神を吹き込んだのは彼を以てその魁首とせねばなるまい。

「一八四八年から一八七〇年までの間民主々義の福音宣傳者は歐洲に少からずあつた。而かもデモクラシーの中心と其眞正なる意義とに接近したるもの未だマヂニー其人の如きはあるまい。彼には道義的精神があり、宏大なる歷史的又文學的包括があつた。彼は民衆の知識的脈搏を握り、彼等が妄想、迷信に誤らるゝことなきを戒めた。斯くて彼は人間の歷史は粒々雜々たる斷片でなく、過去に於ける大いなる運動と大いなる人物との記憶がよく現在及び將來に向つて吾人を安全に導くといふことを警告した。のみならず彼は伊太利を國家として成立せしめたる主なる一人であるに拘はらず、國家的關係には道義を以て繫ぐといふことについて、又世界的人道主義を以て總ての國家の關係を統括するといふことについてはコントが眞面目にそれであつた如く彼も亦同樣であつた。」

かくて毛禮卿はマヂニーについて斯くいうて居る。

「マヂニーはマキアベリーに見る如く直截、嚴肅、冷酷である。伊太利的の要素を有つて居る、彼は又優しく同情深く、其見地は廣くして而も豐富であつた。何人も彼が如く一見他

を印象せしむるものもなく又は他をよく惹きつけるものもなかつた」

最初の政友チエムバーレーン

併しミルを除けば其次に彼の生涯に於て最も偉大なる關係を與へたる一人は恐らくはチエムバーレン其人であらう。彼とチエムバーレンとの順緣逆緣は殆んど政治家としての毛禮卿の一生を終始して居る。之から少しくそれについて語るであらう。

今日でも（大正十二年十一月）チエムバーレンの名は屢々新聞に出て來る。兄のオースチン・チエムバレーンは今は保守黨中では中元老否元老株の一人であらう。弟のネヴイル・チエムバレーンは大藏大臣である。彼等は何れも其父の子であるが、二人を合しても一人の父ほどではない。チエムバレーンはヴィクトリア時代の政治家として處翁、微伯を除けば直ちに其後に來るべき一人である。彼は黨派的からいへば二個の歴史的大黨派を破壞した。最初に自由黨は彼に依つて破壞せられて、自由黨と自由統一派となつた。次には保守黨は彼に依つて破壞せられて關稅改革黨と自由貿易黨とになつた。彼は世界的政策としては帝國主義を具體的に實現した。英國諸殖民地の統一は彼によつて思ひつかれたとはいはぬが、彼に依つて其輪廓が出で來つた。南阿共和國を英國の領土に加へたのも、或は彼の失策といひ、或は彼の功績といふが兎も角も彼の仕業である。

○チ氏の出身

扨、彼はモルレー卿とは其生立が些か異つて居る。彼とモルレー卿とは少年時代には同一の中學校に學んだといふ。固より其の歲月が各別にて、互に相知るやうはなかつた。チエムバレーンは一八三六年倫敦の生れであれば先づモ卿よりも二歲の長者である。彼はモ卿の如く大學の教育を受けなかつた 彼の父は立派なる倫敦の商人にて、彼は學校を終りて直ちに父の店舖に在り、二年の後、父の關係を代表しバーミンガムに赴き、螺旋製造業に從事し、乍ら成功し、二十有二年の後、即ち一八七四年には、富裕の身として實業界を退き、全心全力を政治に竭すを得るに至つた。彼はバーミンガムの市政に努力し、三度其市長となり、瓦斯や水道を市にて經營し、公園や、學校を設け、市街を新築し、鋭意市民の便宜を計り、大勢力となつた。彼と毛禮卿との交際は一八七三年（彼が實業界から全く足を洗ふ前年）から初つた。此兩人を紹介したのはマックセイといふ政治的海軍々人で（多分現時のナショナル・レヴュー（國民評論）主筆マックセイ氏の父であらう。彼等は此人によつて當時フオースター

の敎育案に反對する集會の席上で逢つた。此フオースターの敎育案なるものは國敎徒と非國敎徒との間に於ける調停案であつて双方に滿足を與へなかつた。フオースターは最も自由黨中にて進歩の思想を抱いた一人で、一時は康翁の相續者とも見られた人である。彼の妻はトーマス・アーノルドの娘でマッシュー・アーノルドの同胞だ。彼の敎育案は國立敎會の手によつて建てたる學校には國庫から從來に倍するの補助金を與へ、又國敎の手以外に建立する學校は其地方々々の地方税にて然るべく支辨をするといふことであつた。之がために非國敎徒の面々は甚しく之に反對した。即ちチエムバレーンもモルレーもそれが機縁となつて相知るに至つたのだ。

當時バーミンガムは北方に於ける英國工業地の中心の一にして、チエムバレーンは實に同地方に於ける急進黨の首領であつた。地方的一大有力者たるに止まらず遂には一八七六年彼は自由黨中急進派の老將ブライト氏と共にバーミンガム選出の議員となつたが、ブライトの急進主義は些か時候後れとなり、チエムバレーンの急進主義は正に旭日昇天の勢であつた。

〇チ氏の性格

併し當時までのチエムバーレンは何れかといへば地方的政治家であつて、其眼光は專ら地方行政に注いでゐた。他日の帝國主義の大立者とは何人も其時には氣づくものはなかつた。併し彼は其時からしてコブデン、ブライトのマンチェスター派の純なる信徒ではなかつた。いはゞチエムバレーンは一生を通じて何人の信徒でもなく、何人の門下でもなく、チエムバレーンはチエムバレーン宗の信徒であり、チエムバレーンはチエムバレーン彼自身の門下であるといふ外はなかつた。併し彼は人に仕ふることは巧みでなかつたにせよ、又好む所でなかつたにせよ、人を使ふには妙を得て居た。又其交友に對しても決して義理を缺くが如き輕薄男兒ではなかつた。而して最も我の强き男であつたに拘はらず實務に堪能の結果妥協調停といふやうなことには寧ろ其掛引が妙であつて、決して頑固一徹の向ふ不見ではなかつた。彼は固より學者ではなかつた。曾てモルレーと共に彼が牛津大學に赴いたことがある。其時に彼は大息して惜しい事をした。自分も若い時に一度はこゝに來て學ぶべきであつたというた。英國では大學敎育は決して政治家の出身に於て等閑にすべきものではない。貴族であり、金持であり、よき親朋を持ち、よき社交上の位置を有つといふことは立身の一つであるが、又大學に於ける名譽の卒業者といふ事も其の一つである。遠くはマコレー卿、近くはアスキス氏の如き何れも大學に於ける名

界が彼等の立身の手引となつた。モルレー卿の如きも其文筆と而かもオックスフォードの門戸を通つて來たといふ事とは彼の荊棘の路を滑かにするために尋常ならぬ助けであつたゞらう。併しチエムバレーン氏は夫れの代りに富を有つてゐた。地方的根據ある勢力を有つて居た。當時彼の周圍には樣々の人が集つてゐた。彼は立身の初めから一個 餓鬼大將であつた。彼は無學ではなかつた。あらゆる新刊の書籍も讀んで居た。佛蘭西小說の如きは最も愛讀してゐた。彼は無風流といふには餘りに其趣味があつた。彼の 物 殊に蘭科の癖は彼と共に有名であつて、彼の死後 を鑑賞する際にに其目錄なども出來て全國の數寄者を集めた程であつた。彼は芝居も嫌ひでなくよくモルレーなどゝも觀劇に赴いた。

○モ卿とチ氏

モ禮は本來氣むづかし屋にて、何事も猥雜な事が嫌ひであり几帳面の人であつたが、併し又た彼ほど批評眼の高くして彼程感服癖のある男も稀だ。殊に己れと異つた方面の出身で己れの有たない多くのものを有つてゐるチエムバレーンには全く參つて了つたやうである。彼等の關係は殆んど夫婦關係のやうであつたらしい。固より彼がチエムバレーンと相知つた一八七三年の頃は、彼は文士として英米兩國は愚か、殆んど歐洲大陸に於ける其の筋合の人々の識認を得たる後であつた。されば彼が青春の熱情からチエムバレーンに心醉するなどいふことはあるべき筈でない。併しチエムバレーンが男性的であり、又彼が實務に於て 群絕倫の手腕を有し、事を目論見、事を進行せしめ、事を仕遂げ、如何 る難 でも遊刄餘りありて綽々として之を斷つて除ける所の手腕と 彼が何物をも怖るゝ事 き無限の勇氣と、一度思ひ込めば獅子兎を搏つにも全力を用ふる底の力を以てすると、彼が辯舌の 快にして舌を使ふこと劍を使ふ如く、而かも敵の急所を刺さなければ止まず、而じて頭腦の明快にして如何たる込み入つたる事も彼の頭にはそれが極めて鮮明に映じ、而じて一度 の口を經れば如何なる難題でも解し得られざるなく、而じて其策に遺算なく、如何なる意外なる事に逢つても忽ち其逃げ路を見出す所の機智と、而じて一度定めたる目的には多少の妥協と若干の讓步をなすに拘はらず之を透徹せねば止まぬといふ徹底の力と、而じて其人に接するや胸懷洞然、何等隱す所なく何事も打ち明けて其思ふ所を大膽に語る所の眞率なる事や、此等はモ禮卿をして彼に傾倒せしむるに餘りあつたに相違ない。卿が曾てチエムバレーンを評していふにはチエムバレーンの學校は事功其物である。即ち環境と出來事の必要に迫ら

れた事が彼を玉成して彼が如き人物たらしめたのである。彼は理想によつて活動する政治家ではない。併し彼の活動を理想と伴はしめるには極めて機敏である。想ふにモルレー卿の如きは理想が本で其理想を行ふために働くのであるが、チエムバレーンの如きは働くための男で、其働くについてはそれに相應する理想を手早く見出すといふのであつて、一は理想が主で活動が客であり、他は活動が主で理想が客であり、之を兩人に分類すれば理想の方は毛禮卿の受け持であり、活動の方はチエムバレーンの受け持であるといふ如くして此兩人の交際は繼續して來た。されば若し萬一チ氏が毛卿の供給する以外の理想を持ち、毛卿がチ氏の供給する以外の活動をなす時には如何に親密の交際でも此兩人の政治的關係は永續すること出來ぬは分りきつたことゝ云はねばならぬ。それは後年のことである。

○兩人の交情

兎も角も毛卿の政治的の洗禮はチエムバレーン氏より授けられたといふ能ばずんば少くとも政界の手引きはチエムバレーンに負ふ所多大であつたことは疑はあるまい。彼等の交際は漸次に親密になつた。一八七五年にはチエムバレーンは毛禮卿に向つて斯くの如き意味の手紙をよこした「自分は時としては世界がすべて發狂したと信ずる。世人は皆瘋狂漢に類してゐる。何となれば七ケ年の活動的公人生涯に於て脫線的でなき政治家と認むるものは僅かに四五人に過ぎぬ」と。其翌年彼が妻を失うた時に彼は左の如き言葉をモルレー卿に書いて送つた。

「予は貴君との友情を最も値打多きものとする。それは予が新生涯に於て唯一の光明の點である程屢々予は君と相見んことを願ふ」と。

かゝる次第でチエムバレーンも亦毛禮によつて倫敦に於ける交友を廣めた。即ちフオーセツト、コルトネー、前に掲げたるハリソンなどゝいふものは何れも彼によつて紹介せられた人々である。

此際チエムバレーンについて尙一言せねばならぬは、彼が黨派的政治家として何人よりも先づ投票集合（コーカス）の方法を案出した事だ。それは味方の勢力が各選擧區に分散してゐる時には何れも浪費せらるるが、それは各選擧區に經濟的に割振つて多きを削り少きに加へ、而して多くの當選者を得る手段であつて、無用に歸する味方の投票を最も有効に使用する方法だ。之は彼が發案であるや否やは知らぬが彼は最も此方法を有効に利用したる第一人にて、之が爲めに如何なる自由黨の首領も彼が勢力を無

親する能はざる事となつた。

○兩人の旅行

話元に戻つて彼等兩人は極めて親密な關係を維持した。毛禮卿がチエムバレーンに待つ程、又チエムバレーンの方からも彼の有せざる所の多くのものを有つてゐる毛禮卿を待つ事厚かつた。殊に其乾兒に對する好意と友情はチエムバレーンに於ては一種の美德ともいふべきものであつて毛禮卿が政界に於ける弟分としてチエムバレーンに率ゐらるる間は彼等の交情は極めて親密であつた。彼等は屢々相伴うて大陸の旅行をした。大概の親友も一度旅行を偕にすれば相互の缺點が見へ透きて、疎遠となり勝ちのものであるが、彼等は旅行する毎に却 其親密を加へ、殊にチ氏は隨所に於て繪畫、建築、彫刻、歷史等に興味を有ち、思ひ遣りもあり、辛抱強くもあり、同伴者として不足はなかつた。彼等は旅行中に佛國の快男兒ガンベツタとも數回會見した。又或時には獨逸の湯治場に於て、ビスマルクと同一の旅館に眠つたことがある。又クレマンソーとも會談した。併し斯くの如く親密 る交際であ。たが、何時の間にか政界に於ては敵味方とならねばならぬ事となつた。それは次に話すであらう。

○虞翁に關する一瞥

是に至つて餘儀なくもグラッドストンについて語らねばならぬ必要が生じて來た。グラッドストンの傳を作るには株式會社を組織してかからねばとても一人や二人の手では六つかしいといはれた程夫れ程複雜して居る。されば予は單に毛禮卿との關係の存する所丈けを極めて手短かく語るであらう。世の中に於て人の意見思想は年齢と共に追々保守に赴くが常であるが、グラッドストンは全く其逆を行いた。彼がロバート・ピールより最も器重せられたる乾兒として政界に乘出したる際マコーレー卿は彼の著述「國家と教會」とを評する劈頭に於て彼を評して、未來の保守黨の首領は此人であると云はんばかりに、保守黨の將に昇らんとする希望であるといつたが、其望みは却つて逆となり、四回も自由黨の首相となり、晩年に於ては當時の自由黨さへも危險視して容易に近き得なかつた愛蘭自治案を提げて天下に呼號するに至つた。其グラッドストンが第 回の内閣を罷めて以來、卽ち一八七四年三月彼は自由黨の首領を辭し、個人生活に歸ると宣言し、天下を驚かした。彼は曰く予の頹齢六十六歲先輩のサー・ロバート・ピールが一八四六年に退隱したる時よりも又一八五〇年に死せし時よりも年齢に於ては長くある。予は最

早や王もなる市民が政治的生涯が終らねばならぬ期限を過ぎてゐると。かくて牧羊者を失うた羊の群たる自由黨は上院に於てはグランウィル伯、下院に於てはハーチントン侯を、公定首領とし、虞翁はホーマーの詩篇とか若くはローマ法王の靈界に於ける大自在力問題とか、全く政界に緣も因りもなき事に沒頭して全く政治を忘れてゐた。然るに雀百まで踊を忘れずとかや。幾もなくヂスレリーの政府が東方問題に手を出し、勃牙利が土耳古に對して叛亂を起し、土耳古人が虐殺を逞うしたといふ報知が達するや否や、彼は一八七六年直ちに其問題に關して小冊子を出し、書齋を跳り出し全國に飛び廻つて隨所に保守黨政府大攻擊の演說をした。かくてヂスレリーはそれを冷笑して、熱情の巡禮と稱したが而かも其巡禮は天下の輿論を作興し一方に於てはヂスレリーが名譽ある平和を齎らして伯林より凱旋將軍の如くして歸り、ヂスレリーの光は中天に赫灼たるに拘らず、虞翁は蘇格蘭のミドロシアン自由黨に招待せられ、玆に所謂ミドロシアン・キャンペン（出征）なるものが初まり盛んにヂスレリーの外交政略を攻擊し、一八八〇年三月二十四日の解散に際し彼は天馬空を行くの勢にて全國を風靡し、玆に自由黨の大勝利を得た。當時下院に於ける自由黨の首領ハーチントン侯は虞翁の態度を安からず思ひ、彼は寧ろ何れかといへば保守黨政府の政策を賛成し、然らざるも默認した姿であつた。其選擧の結果は自由黨三百四十七人、保守黨二百四十人、愛蘭國民黨六十五人といふ事であり、自由黨は保守黨に對して百名以上の多數であり愛蘭黨を加へても尙ほ絕對多數であつた。此大勝利は固より名目上の首領たるハーチントン侯の力でなくして實際の首領である虞翁の力最も多かつたのだ。夫れと同時に見逃すべからざるはコーカスの仕組みを實行したるチエムバレーンの力であつた。固よりチエムバレーンの下には別にシユナツドフオルストといふ選擧の神樣ともいふべき選擧長がついてゐたとはいへ。而して虞翁の側にも亦當時自由黨中の最も左傾派の一人たるサー・チャールス・ヂルク若くは虞翁をミドロシアンに案內したる主人役の、金も多く、才も多く、人氣も多き少年貴族のローズベリー伯の如きがあつたとはいへ。

第二虞翁內閣

女皇は元來グラドストン嫌ひであつた。此場合彼はハーチントンに內閣を組織せしめ、左なくばグランウィルに組織せしめんとしたが、兩人共に勢の不可なるを見て之を辭した。是に於て勝利は戰勝者に歸し、否でも應でも虞翁をして第二回の內閣を組織せしむる事となつた。彼は當時既に七十一歲の老人だ。

六十五歳の時にもう年を取り過ぎたから足を政界から洗ふといふた男が、七十歳を過ぎて内閣を組織するといふ事は辻褄の合はぬ話であるが、人間は論理學の雛形ではない。彼も一時、此も一時で、廣翁は踴躍して其新らしき仕事に赴いた。

○ヂルクの人物

吾等は此際に於て少しくサー・チャールス・ヂルクについて語らねばならぬ。彼とチエンバレーンと毛禮とは當時政界の三人男として稱せられたものであり又互に相許したものだ。ヂルクは政治上に於てはチエムバレーンよりも寧ろ先輩といふべきものであらう。彼は一八四三年に生れたれば年齢に於ては兩人よりも下である。併しながら一八六八年には已に議員となつた。然もチエムバレーンは一八七六年に漸く議員となり、モルレーは一八八三年に漸く議員となつたので年齢は兩人よりも若かつたが、議員としては先輩であつた。彼は名流の子であり、政治家として不足なき財産と不足なき素養と學識とを備へてゐた。彼の祖父は學者でもあり又新聞雜誌にも關係し彼の父は一八九一年倫敦に於ける大博覽會の創立者の一人であつた。ヂルクは父祖の財産と聲望とを有し、大學を出でて、少年にして世界を周遊した。彼がグレークーブリテン（より大なる英國）なる著述は一八六八年に出たが、實に彼が世界旅行の結果であつた。彼は議會に立つや最も急進黨として知らるゝのみならず、最初に皇室費を攻擊して名を知られた。チエムバレーンも共和論の過激なるが爲めに共和黨と思はれてゐたが、ヂルクは思はれてゐたのみでならず、公然共和主義を議場に於て宣言した。併し識者は彼が早晩自由黨の首領となり內閣の首班たるべきものと認め、ヂスレリーの如きは彼を其小說中の主人公の一に擬し、自から保守黨の首領たるに拘らず會見して交を結んだ程であつた。ヂルクは實に東西南北の人にて殊に佛蘭西のガンベツタなどとも親交があつた。毛禮の如きはヂルクの紹介にてガンベツタとは面會した。ヂルクは又非常なる該博なる知識と勉强とを以て當時人々の氣がつかざる世界に散在せる、英國領土の結合やら、防備やら、大英國のあらゆる問題に注意し、外交は勿論、勞働問題やら內部の行政問題やらあらゆる點について百科辭書的の知識を有してゐた。彼は何事も大體論に止まるを屑とせず、必ず其細條節目まで研究せねば已まなかつた。チエムバレーンは當時に於ては何と云つても地方政治家の毛の生えたものに過ぎなかつた。當時彼は專ら內政問題に沒頭し、殊に教育問題の如きは彼が最も力を致す所であつた。

〇第二内閣組織の要素

虞翁がいよ〳〵内閣を組織せんとする時に方つて誰と共にすべきかは疑問であつた。自由黨とはいふけれどもが、之までの自由黨は全く貴族の自由黨であつた。貴族を離れては自由黨はなかつた。虞翁の如きも貴族の庇蔭の下に出身したる一人であつて、虞翁によつて中流社會は大いなる代表者を得たといふも、其主なる要素は從來の行掛りよりして固より貴族でなければならなかつた。併し一八八〇年の勝利は貴族の勝利でなく中流階級の勝利であり、其勝利の分け前には當然中流階級の代表者が獅子の分け前を取らざるにせよ、若干の分け前は取るべきであつた。是に於てヂルクとチエムバレーンは互に攻守同盟を結んだ。それは兩人の中何れも入閣するか、又何れも入閣せぬかといふ事だ。即ち入閣せぬとならば双方共入閣せずして一切官職に就くまい。入閣するとなれば双方共入閣せようといふ事だ。彼等がかかる同盟を結んだのは外ではない。恐らくは彼等の勞に酬ゐ其心を慰むる爲めに政務次官などといふ左程重要ならぬ官職を與ふるであらうと豫測したからだ。案の如く事件は其通りに進行して來た。ヂルクは兩人の代表者となつて折衝の任に當つた。而してヂルクは寧ろ此際一人は入閣し、他の一人は閣外に在つて重要なる位置を占め、議會に於て屢々演説するの機會を得せしむるを以て得策とし、チエムバレーンも亦それに同意した。そこで兩人の中誰が入閣するかは問題であつた。虞翁は最も先例を重ずる癖ありて未だ次官級の役を經ずして一躍入閣するものはないといふ辭を設け、チエムバレーンの入閣を拒んだ。ヂルクが入閣困難なる事情は彼の出身の當初に高調した共和論であつた。彼は今日固よりかかる論を固執しなかつたが女皇は尚彼の昔時を記憶してゐた。そこで兎も角もチエーンバレーンは、貿易廳の長官として入閣し、ヂルクは又女皇に對し相當の釋明をなし、外務次官となつた。外務大臣はグランウイル伯にて上院にゐたから下院に於て外務省を代表するは勿論彼であつた。而じて斯くの如くにして三人男の二人は其所を得た。他の一人は如何。

新聞記者としての毛禮卿

此際に於て毛禮卿の新聞記者としての事を少しく語らねばならぬ。卿は何故か其興味も饒き回想錄中に於ても卿が生涯記の一齣ともいふべき新聞記者の生活については殆んど語る所がなかつた。卿は自ら新聞記者たる事を耻ぢてゐたのではあるまい。併し卿自らは他の方面の事を寧ろより多く重要視してゐた

のであらう。話元に返つて卿が倫敦生涯の初めは全く原稿屋で飯を食つてゐた。彼は毎週サターデー・レヴュー（土曜評論）の編輯局に出張し、其一室に於て編輯長から與へられたる題目について其文を草した。其時分に彼と同じく其室に來て彼と同様に原稿を書いて渡世をしてゐたものがあつた。それは他日保守黨の首領として天下に仰がれたるソルスベリー侯であつた。彼は其父の意に反し貧乏男爵の娘と愛情的の結婚をなし、兩人手鍋下げての生活を營みつつ原稿屋となつてゐたのである。併し彼が沈默なる性質はモルレーと相對して互に其際は一語をも交へずして終つたといふ。毛禮がレウイスの後を繼いで隔週評論の編輯長となつたのは文人としては龍門に登つたともいひ得らるる。レウイスはゲーテ傳の作者又哲學史の作者、更にヂヨルヂ・エリオット女史の同棲者（彼は別に妻帶してゐたが、離婚する能はざるが爲めに別居してゐた）として或意味に於ては其指導者であつた。此人の後任者として三十未滿のモルレーが其任に當つたことは彼としては名譽といはねばならぬ。果然彼はそれに背かなかつた。彼は自ら佛國革命前の諸大家についての重要なる論文を書き、又毎號時事問題については其の評論を掲げた。而じて彼によつて得たる寄稿者は英國現代のあらゆる名流を集めた。チエムバレーンの如きも政治問題についての寄書家であつた。されど彼の記者としての大いなる働きはパーマー・ガゼットであつた。此新聞は本來紳士が作つて紳士に讀まするものとして英國の論客としての第一位を占めてゐたグリーンウードが創立し又其主筆であつた。其持主は倫敦有名の書籍出版者スミスであつた。然るにスミスは必ずしも婿引出といふ譯ではなかつたらうが、其婿トムソンに之を讓つた。舅は保守黨であり婿は自由黨であり、新聞の主義政策が持主の變更と共に一變した。そこでグリーンウードは編輯局から一切のものを引さ、其校正者までも引張つて退去し、セント・ゼームス・ガゼットなるものを創立した。其跡に來たのが卽ち毛禮卿である。彼は當時一萬磅の年俸で聘せられたといふ評判であつたが、（事實は詳かにせず）兎も角もフーオト・ナイトリー・レヴューの主筆たる彼は又パーマーガゼットの主筆として之に赴いた。然るに彼は來り見れば何物もないから當座は其反古籠に棄却したる不用の原稿を寄せ集めて漸く間に合せたといふ事であつた。パーマーガゼットは片々たる夕刊新聞であつたがグリーンウード時代から已に識者の注目する所となつてゐた。文名世を掩ふ毛禮卿が其主筆となつたからには尚更らである。新聞記者としての毛禮卿は果して第一流であるや否やは疑問だ。彼は新聞種といふ事についての興味を左程有つてゐない。ニユースを嗅ぎ出す

官能は決して遲鈍ではないが、それを嗅ぎ出す事を以て新聞記者の能事とは信じてゐなかつたやうだ。彼自身は新聞紙を以て一種の講壇と心得、それから毎日說伏する事が彼の天職かの如く心得てゐるやうであつた。社說記者として彼の如き力ある文を草するものが幾何あるかは疑問だ。彼は決して急言喝論せないが、而かも彼の文字の後ろには彼の人格があり、一言一句決して當座の出來心から書いたのでなく、彼の確信の印象が躍如としてゐる。而して其抑ふれども抑ふれども抑へ切れない道義的熱火が極めて精練したる、極めて緊着せる文字章句の底に燃えてゐる。彼の論文を理解する程のもので、未だ其論文に動かされないものはない。假令其れに同意せぬまでも贊成せぬまでも、彼の言ふ所には一種の條理があるといふ事を認めずにはゐられない。論文記者としては空前絶後とはいはれぬが、固より第一流であつたに相違はない。只新聞記者としては第一に新聞種其物に興味が薄く、又すべての物に對する興味も廣大無邊といふ程ではなく、又即時突嗟に意見を定め判斷を下さねばならぬ場合に於ても學者的思案投首の嫌なしとせず、而じて其文章を書くこともペンを揮へば飛ぶが如しといふよりも寧ろ千推萬敲練りに練り上げて行くといふ方であるから雜誌記者としては兎も角も新聞記者としては殊に現代的新聞記者としては寧ろ向かぬ方といふ方が適當かも知れぬ。併し彼は幸に彼の部下に多くの才能を集めた。第一の助筆者は有名なるステッドであつた。彼がやがて卿に繼いで主筆となつたがステッドは實に新聞界の鬼才といはねばならぬ。彼は所謂英國に於けるニユージャーナリジム（新式新聞製作法）の急先鋒であつた。彼は天性の新聞記者であり、ニユースを好み、殊に大いなるニユースを取る事を以て大いなる愉快とした。それのみならず彼は常に主張があつて其主張を傍若無人に振り舞はし、否でも應でもそれを貫徹し、それを實行せねば已まぬといふ氣概があつた。彼は美文家でなく、彼の文章は疵だらけであつたとしても、字々皆紙上に立ち、生きた文章であつて何人も讀ましめねば措かなかつた。而じて決して空疎の文字に安んぜず、何處までも事實の根柢を調査し、それによつて行くといふ方の男で、其爲めに倫敦賣淫窟を改善する爲めに自ら賣淫窟に出掛け遂にそれが爲めに入獄するの已むなきに至つた程である。かかる男を我が次役としてあつた毛禮卿が如何に不安であつたかはいふ迄もない。又かかる次役が毛禮卿の如き人を其上に頂いてゐたといふ事は如何に窮屈であつたかが思ひやらるる。曾つて兩人の關係についてはステッド自ら書いたものがあつたが今手元にないから委しく語る譯には參らぬが、兎も角も此氣六つかしき主筆には流

石の大脫線屋のステットも弱つてゐたに相違ない。毛禮卿の容貌は痩せ形のヒヨロ〳〵した身體であり、其眼は思慮あるものの如く深く腦中にはまり、其鼻は物を切斷する如く高く聳えてゐる。其の薄き口元は一文字に結べば近き難く、開けばやさしく、其顎は細りて强き意志よりも寧ろその反對ではないかを思はしむるやうだ。老境に入つては如何にも神々しき風采となつたが、併しステッドは毛禮卿の聳えたる鼻に對して何となく氷の如き刄にでも接するやうであつたといつて居る。又ステッドの机の上に毛禮卿が文字の大盤發態は御免を被ると云ふ意味の文字を貼りつけてゐたといふ事もある。又卿が留守中にステッドが代つて論説を認めたのを讀んで卿はステッドに書を送つて君の一篇の文は予の余き髮毛を悉く白からしめんとすといひ遣したといふ事だ。其他南阿總督として南阿戰爭を打ち初めしめるに至らしめたミルナー子爵の如きも編輯局にゐた一人である。又ラスキンの愛弟子にして其傳の作者であり新聞記者として一代に名を得たるサー・エドワード・クックの如きも其一人であり、現在英國に於いて屈指の論文記者たるスペンダーの如きも又其一人であり實にパーマーガゼットは文士の淵叢であつた。而して其パーマーガゼットが實に當時に於て毛禮卿の下にチエムバレーン、ヂルクと相結んで當代の政界を動かす所の原動力となつてゐた。（該新聞は種々様々の運命を經て、大正十二年十月遂に夕刊スタンダードと合併した。タイムスはその爲めに、パーマーガゼットを弔ふ文を掲げた）

政界三人男

政界三人男の關係は當時概して圓滑であつた。新内閣の出來るや毛禮卿はヂルクに向つて一週間に三回づゝ十分間の對話を貴君となし得るは金銀寶玉にも優つてゐるといふてゐた。而してチエムバレーンも亦同様の便宜を彼に與へてゐた。チエムバレーンは何れかといへば新聞操縱術をよく心得てゐたものであり、反對黨の機關新聞スタンダードの記者エスコットなどとも懇意であつた。又ヂルクはデーリーニユースの記者ヒルとも親密の關係を有つてゐた。申す迄もなくヂルクはデーリーニユースの大株主であり、又文學雜誌アセニアム等の持主でもあつた。併し毛禮卿は必ずしも二人のいふ通りにはならなかつた。時としては彼等の意見に反對したる論文を掲げて彼等を悩ました事もある。又それを彼等の意見として同僚から取られて彼等にとつては痛くもなき腹を探られた事がある。曾てチエムバレーンは斯くの如く言譯をして居る。自分はモルレーが道筋を踏み違へはないやうにと手を盡してゐるが彼は實に儘にならぬ動物

であつて、なか〳〵吾等の思ふ通りにはならぬと。之は事實であらう。併し大體に於て二人の關係は虔翁第二內閣の上半に於ては圓滿であつた。時としてはチエムバレーンが苟くも政府の味方といふ新聞が政府を攻擊して困らするといふ法はないなどというて卿に對して愁訴した場所に卿は却つてそれに反對し、その爲めに彼等が例によつて會食する事を特に毛禮卿から今回は御免を蒙ると斷つた事がある。其場合にはチエムバレーンが早速謝罪してそれは自分は云ひ過ぎたというて又舊交を復した。而かもその場合にチエムバレーンは彼に向つて貴君は二つの過ちがある。それは貴君は餘りに感じ易く又餘りに持ち込みが深か過ぎる。若し予が言行が氣に入らなければ其場でそれといへばよいではないかといつたが、それについて毛禮卿は斯く答へてゐる。人の弱點といふものはそれを良き方に用ふれば卽ち强點である。感じ易き事も、實は同情の一部分で、同情なるものは公人の有すべき最も大切なものだ。持ち込み深いといふ事は自尊の要素であつて、自尊といふ事も亦政治家としての强味であると。チエムバレーンがいふた事も當つて居り毛禮の答へた事も當つて居る。此問答の間に於て略ぼ毛禮卿の人格の片鱗が閃くであらう。

○第二內閣の運命

虔翁の一八八〇年の內閣は一八六八年の內閣に比すれば寧ろ失敗の內閣であつた。前回は積極的に其施設すべき政綱を有つて起つたが、今回は只ビーコンスフィルド伯の外交政策を批難して其結果によつて出來たものである。而して其內閣は一方に於てはハーチントンを主とする貴族的穩和黨で、他方ではチエムバレーンを主とする急進的平民黨であり、而して虔翁は其中間にあつて此兩黨を二本の手の如く二本の足の如く動かさねばならぬ。之は彼にとつても少からざる骨折であつた。內輪に於て斯くの如く水と油の合し難き兩要素が對立したと同時に、其內閣は不幸が打ち續いた。劈頭第一はブラッドロー事件で之は無神論者ブラッドローが議會に於て宣誓を拒んだから生じた事件で、今日から觀れば譯も他愛もなき事であつたが、儀式に拘泥する英國流に於ては之を重大事件とし、殊に反對黨の徒ら者共所謂第四黨と稱するチャーチル一味の面々は之を奇貨として少からざる手疵を政府に負はしめた。それから次いで起つた不幸は埃及に於けるアラビーパシャの謀反だ。之は實に困つた出來事であり、虔翁も心ならず兵を以て之を平らげ、事實上兵力を以て埃及を占領する事となつた。謂はばビーコンスフィル

ドの外交政略を尤めて其尤めに倣ふといふべきものであつて、之が爲めに閣員の元老ブライトは内閣を去つた。それから今一つは南阿に於て騷ぎが出來た。英兵は遂にボア人に打ち負けマジユバヒールに於て降つた。之が爲めに内閣の威信を損じた事は勿論だ。それから埃及のナイル河の上流スダンに於ける僞聖マジが亂を起した。其前後の始末の爲めにゴルドン將軍を遣はしたが將軍は當局の節度に違ひマヂの爲めにカルチームに圍まれ、内閣は種々評議の末、援軍を出したが未だ達せざる中にカルチームが陷り將軍は犧牲となつた。之が爲めに内閣の威信を失墜した は實に多大であつた。野に在りて當局の政策を攻擊する時は議論が本位であるけれど、朝に立つて之を行はんとすれば事件が本位である。其れを本位にすれば野に在つて云つた事、殆んど之を取消しにせねばならぬ。些かにても野に在て云ふた事を行はんとすれば半上落下既に剛なること能はず、又柔なること能はず。自由黨は内閣は平素平和論を主張して偶ま政權を握れば平和主義を徹底する能はざる爲めに味方を失望せしめ、又保守黨の政策を繼續してそれを徹底する事能はざる爲めに保守黨の怒を招き、敵からも味方からも見捨てらるるに至るは必ずしも今度に限つた事ではなかつたが、老翁の勝利が餘りに目醒しかつた爲めに、其失敗も頗る目醒しくなり、特にチヤイネース・ゴルドン(支那戈登)とて軍服を着たる聖人かの如くに思はれ、すべての人から神樣扱ひにせられたる將軍を見殺しにしたといふ事とて、上は女皇を初めとし、下は裏店の小僧に至るまで奮慨せぬものはなかつた。かかる場合に於てそれよりも重大事件の出來したのは愛蘭國民黨の出現である、又愛蘭に於ける騷擾である。

愛蘭の難題

愛蘭は本來英國に取つては一の癰腫であつて腹心の病ともいふべきもので、老翁は當初より此事に心をかけ、其第一内閣の際には反對論の激甚なるにも拘らず愛蘭に於ける國立教會を廢した。又土地法案を發して地主と小作人との間を緩和せんと試みた。然るに愛蘭に於ては右樣な手緩き手段で滿足すべきでなく、其極端なるものは英國と全くの分離を唱へ、然らざるものも自治を主張した。愛蘭國民黨は別言すれば愛蘭自治黨である。其自治黨の首領は從來アイザク・バットであつた。彼は溫厚の君子にして英人を道理づくめにて自治論に贊成せしめんと試みた。英人は彼を怖るるよりも寧ろ彼を愛した。併しながら彼の議論には誰しも一顧するものもなかつた。然るに玆に意外にも彼のあとに一個の人物が出て來つた。それはパーネルだ。彼

は一八四六年に生れ英國に於て教育せられ、劍橋に學んだが、彼は何等得る所なく滿腔只だ英人を怕むといふものを齎し返つた。彼は自から地主であり、又た新教徒である。而して彼ほど主要の位置に立つて彼ほどの無學者も少いであらう。彼は愛蘭黨の首領となつたが、殊に愛蘭の歴史さへも知らなかつた。甚だしきは當時の主なる愛蘭の行政官の名さへも記憶して居なかつた。彼は一八七五年に議院に入つたが、一八八〇年に初めて其黨派の首領となつた。彼は實に六十人を率ふる首領であり而かも六十の人は悉く彼の思ふ通りに之を引廻した。彼の政策は二個であつた。議會内に於ては議會法規の許す範圍に於て——時としては其外に馳驀して——飽くまでも議事の進行を妨げるといふ事であつた。議會外にあつては土地同盟を作り百姓共を煽動して騒ぎを起すといふ事であつた。當時愛蘭大臣はフォースターであつて(曾つて教育案についてチェムバレーン、モルレー等より反對せられたる人)彼は其騒擾を鎭壓すべく努力し、鎭壓案を一八八一年の初めに提出するの止むなきに至つた。パーネル及び其同僚は頑強なる抵抗を試み、其討議が七週間に亘り、二月三日には彼及び彼の仲間三十餘人は、餘りに議事を妨害すると云ふ事にて、守衛よりして議場外に退去せしめられた程であつた。而じて彼が土地同盟の集會に於て騒擾を醸した結果、同年十月十三日彼は捕縛せられ、キルメンハムの牢に投ぜられた。政府は土地同盟を不法結社と見做し、之を解散せしめた。パーネルは翌年の四月十日まで牢屋にあつたが、當時最も此鎭壓令の執行に反對したのは、閣外にあつては毛禮卿で、閣内に於てはチェムバレーンであつた。毛禮卿は、政府の愛蘭政策が其根本的に誤つてゐるを論じ、盛にフォースターを攻撃した。而じてチェムバレーンも亦閣内にあつて之に應じ、從つて虞翁も亦其心動き、遂にチェムバーレンを紹介して獄中にあるパーネルと妥協せしめた。之を世間ではキルメンハム條約と云つてゐる。而してフォースターは其職を辭し、政府は折角執行した鎭壓令を棄つることゝなつた。而してフォースターの代りにハーチントン侯の弟キャヴェンヂッシュ卿を送つた。キャヴェンヂッシュ卿は最も虞翁と親密なる關係があつた。而じて其夫人は虞翁夫人の姪であつて、虞翁の一家とも親族的關係があつた。此人にして永らへたならば、愛蘭問題の爲めに、自由黨の分離は或は救ふことが出來たらうと云ふ人さへある。彼はフォースターに代つて一八九二年四月愛蘭大臣となり、平和の使としてダブリンに赴いた。斯くて五月六日の午後五時頃、總督スペンサー伯は公園を騎馬にて逍遥したが、キァヴェンヂッシュはそれより一時間後れて出かけた。恰かも當時次官のバークに

出會したから二人同行して歩いてゐたが、總督官邸の前に於て無殘にも殺害せられた。刺客はバークを殺す積りであつたが、キアヴェンヂッシュ卿は男らしくも身を以て之を助けたから、二人とも其犧牲者となつたのである。此報知は其夜倫敦に達した。グラッドストン夫婦は墺太利大使館の晩餐會に列してゐた。虎翁はそこより直ちに徒歩にて官邸に歸り、夫人は海軍大臣の夜會に赴いた。而して夫人はそこで其報知を受け取つて、取り敢へず官邸に歸つたが、神ならぬ身の虎翁は悠々として少しく後れて歸り着いた。彼の秘書官が官邸の前室に待ち受けて此報を彼に語るや、彼は殆んど地に倒れんまでに驚いた。之は實に友人としての不幸のみでなく、グラッドストンの愛蘭政策の一大頓挫であるからである。

○虎翁とチ氏

當時若し虎翁がチエムバーレンに向つて愛蘭大臣たらんことを勸めたならば、義理にも彼は否む譯には參らなかつたのであらう。併し虎翁は之を勸めなかつた。之が爲めにチエムバーレンが失望したか否かは知る所ではないが、兎に角虎翁とチエムバーレンとは初めから合性ではなかつた。虎翁は遂に一生を通じてチエムバーレンを愛し得なかつたらしい。而してチエムバーレンも亦一生を通じて虎翁を信じ得なかつたらしい。彼等は何れも人の下に就く能はざる強き性格の所有者だ。然るに此老いたる强者と、此若き强者とは同じ黨中にあつて常に中心から融和する機會を得なかつた。如何にも不思議の因緣といはねばなるまい。

毛禮卿の政界出身

此際我等はモルレー卿の一身上に大變化があつたことを語らねばならぬ。それは一八八三年の春、彼がニューカスルの補缺選擧で當選した事だ。當時彼は四十五歲を超えて居る。文士としての彼の名は世界といはざる迄も英國、佛國、米國には知るべき程の人は彼を知らぬものはなかつた。論客として新聞記者として英國現代の唯一人でなければ第一人中の一人であつた。されば彼の親友マッシュー・アーノルドの如きも、君が記者としての位置は議員としてよりも最も有効で且つ最も君に取つても幸福であるから願くは此貴き而して有益なる位置を捨てて議員などになつてくれるなとしみ〴〵忠告した程であつた。之は彼が議員となる三年前の事であつたが、彼はそれで、議員たらんと欲するの心が已まなかつた。實をいへば彼は論客では滿足が出來ず、是非實際の政治に手が觸れて見たかつたのだ。之は彼に取

つて果して正しき判斷であつたか否かは知る限りでない。彼は曾つていつた事がある。實際の政務に當つて居る際には、一日も速かに書卷の生活に立ち還りたく思ひ、又書卷の中に埋れて居る間には、何やら實際の政治に立ち返りたいと。之は正直の話であらう。而じて彼は文士として、論客として、記者として、爲すべき事の殆んとすべてを爲した。遂すべき所の殆んど頂上に達して居たから、尚更ら實際政治に向つての新しき欲望は加つて來たのであらう。マコレー卿は曾て若し眼前に政治と文學との二つの道筋が開け、何れに向つても成功すべき見込のある場合には文學を捨てて政治に赴く程莫迦らしき判斷はないといつた。然し之は彼がエデンバラーの選擧に落選し自棄腹の餘りにいつた事であるかも知れぬ。世の中では一流の文士論客として漸く二流の政治家たるド、トクヴイルの如き人もある。毛禮卿が四十五歳にして議員となつたについては、其親友の大多數は恐らくは彼の爲めに惜み、彼の爲めに其前途を危んだであらう。併し極めて自信力の強き彼はここに三回目に於て其宿望を達したのだ。彼は固より政黨競爭に於ける演壇の辯士ではなかつた。議會の討論の如きは必ずしも彼の得意とする所ではなかつた相手を見て當意即妙の答辯をなし、敵に對して即座にその攻擊を打ち返すが如き縱横の機鋒は彼の生涯を通じて長技ではなかつた。併し幾もなく彼は最も有力なる演壇上の大立者となつた。彼が演壇に立つ時にはすべての聽衆の心を牽きつけずば已まなかつた。それは彼が雄辯家である爲めではなかつたが、彼の文學的素養が演說の上に現れ、彼の道義的精神が言葉の中に迸り、他の徒らに口舌を弄して互に論難駁擊を逞くする所の政黨者流の間に於ては所謂掃溜に下れる鶴の如き有樣であつたからだ。

○第二內閣の末路

話元に返る。キャヴエンヂッシュ卿が刺殺せられし以來、一度自由黨政府とパーネルとの妥協の端緒も更に破れて了つた。キャヴエンデッシュ卿を殺したのはパーネルでもなければパーネル黨でもない。それは亞米利加に根據を有つてゐる過激なる愛蘭人の仕業であつたが、而かも英國の輿論は之を愛蘭國民黨と區別して見るを欲しなかつた。かくて愛蘭は再び騷擾の巷となつた。政府は餘儀なくそれを取締る爲めに犯罪取締法案を設けたが、それが爲めに反抗は愈々甚だしくなつた。新たに愛蘭事務大臣たるサー・ジョーヂ・トレヴエリヤンは在職二年で其頭髮は鼠色となり、其容貌は殆んど十歳以上も急に齡をとつたやうになつた。而じて遂に職をカメル・バンナーマンに譲つた。

此トレヴエリヤンは今尙生存してゐる。即ちマコレー卿の姪で十九世紀に出で來つた有數なる人物傳の一として認められたるマコレー傳の著者であり、又有名なるフオツクス傳の著者であり、其晩年は專ら米國の歷史に從事し、而じて文士としてオルダー・オフ・メリツト(功績勳章)の受領者の一人だ。外には愛蘭の騷ぎが收らず内ではハーチントン派とチエンバレーン派の爭はいよ〳〵激烈となり内閣の信用はゴルドン將軍を見殺して以來いよ〳〵地に墜ち、最早强弩の末魯縞を穿たぬ姿となつた。當時チエムバレーン、チルク、モルレー及び前にいうたトレヴエリヤン等は每週チルクの宅に會合し種々の打合せをし、彼等は自由黨中一種の團體をなしてゐた。併しながら此時分からしてモレー卿とチエンバレーンの愛蘭に對する意見はどこやら一致を缺くが如き𨻶(ひま)を生じて來た。それは卿は何處までも愛蘭を治むるには根本的に自治を與へねばならぬといつたがチエンバレーンはそれには及ばぬ、廣き權限を與へたる地方議會を設置すれば足るといふ事で、兩人共に愛蘭に對して讓步するといふ事は同一であつたが、其讓步の程度に於て自ら異るものがあつた。併し當時パーネルはチエンバレーンの案でも別段異存なく受容れべきであつたが、而かも内閣に於てはハーチントン一派は以ての外の事となし、愛蘭國民黨を取扱ふに謀反人同樣の態度を以てしたから、とても内閣がそれに一致すべき筈もなく、内訌は斯くの如くいよ〳〵甚だしきを加へ、遂に豫算案の議事に於て政府の油斷を見すまし、保守黨と愛蘭國民黨とが一致して之を破つた。それは一八八五年六月の八日であつた。此保守黨と愛蘭黨の聯合は一時的のものであつたか、若くは永續すべきものであつたかは誰しも知らんとする所の疑問であつて、實は當時保守黨中の保守民主說(トリデモクラット)を以て共看板を塗りかへんとしつゝあるチヤーチール卿などが目論んでゐた所で、此時政府の失敗の票決が分るや、チヤーチール卿は腰掛の上に立ち上つて喝采したといふ事であつた。扨てこれから彌よ面倒の問題である。

○五里霧中の政局

保守黨政府はソルスベリー侯を首相として組織せられた。愛蘭にはカーナーバーン伯が赴いた。而じて伯は愛蘭國民黨に向つて極めて妥協的の態度をとり愛蘭黨彼自身も之では寧ろ保守黨と妥協して其目的を達する方が捷徑であらうといふ感じを起さしめたる程であつた。自由黨政府の倒れてから、總選擧までの足掛六ケ月間はすべての政治家にとつて五里霧中であつた。世の中が如何になるかは殆んど何人も見當がつきかねた。一方には愛蘭問題があり、一方には英國農民の狀態を改良し、又種々

の社會的政策を要求する急進黨の一派があり、それに對抗する行掛上の傳統的貴族的自由黨の一派があり、而して保守黨中にも、愛蘭妥協派もあれば非妥協派もあり敵と敵と互に其意中を忖りかねたのみでなく、味方は味方と互に其意中を忖りかねてゐた。而じて何事も思ふ所を一直線に突き通すチエンバレーンの如きは此際殊に自由黨非公認の政綱と題して堂々其意見を發表し、殆んど眼中グラッドストンなき姿であつた。其の要目は自由教育、土地分割、税法輕減、地方自治などといふ事であつて、當時三エーカーに牝牛一頭といふ言葉は有名になつた。それはチエンバレーンがすべての農夫に三エーカーの土地と一頭の牝牛を分配するといふ意味で果して此通りに言明したたか否かは別としてそれが當時の流行言葉となつた。又チエンバレーンは大いなる金持は其財産を國家が保護する代りに其代償として多く拂はねばならぬといふ説を立てた爲めに、反對黨ではこれを目して之は金持の財産を國家が沒收する所謂御用金論と見做した程であつた。當時の雜誌パンチには一人の老人が大いなる傘をさしてゐるが其傘は破れて雨が漏り其側に片眼鏡をかけたる一の若者が別に傘を擴げてゐる諷刺畫が出來てゐた程であつた。當時自由黨の形勢は穩健派は何れもハーチントンに赴き、急進派は何れもチエンバレーンに赴くといふ狀態であつて、七十六歳の老人度翁の政治的生涯も最早第二内閣の終りと共に終りを告ぐべきであらうと思ふたものも満更少くはなかつた。

○度翁と愛蘭問題

併し當人の度翁はなか〳〵以て左様でなく、彼に難問題を見れば之を自ら片付けねば止まぬ底の新しき勇氣を生じ、自問自答如何にして愛蘭問題の始末をつくべきかと一人自ら考へ込んでゐた。而じて彼の思想は已でに此時に於て全く愛蘭自治主義を採用したか否かは兎に角、それに向つて長足の進歩をした事は間違ひはない。

度翁と過激自由黨との連鎖にはハーチントン侯の弟キャヴエンヂッシュ卿がゐた。併し卿は愛蘭人の爲めに數年前に殺された。又急進黨と度翁との間にはサー・チャーレス・ジルクがゐた。チルクはチエンバレーンと度翁第二内閣に於ては同功一體の人で、彼は外務次官から地方政務廳長官に轉じ、内外にかけて最も重要の位置を占めてゐた。彼にして若しそのまゝの働きを繼續することを得たならば度翁とチエンバレーンとの間も今少しは圓滑に赴いたかも知れぬ。而して又度翁も此兩人の聯合の勢力には些か讓歩したかも知れぬ。併し世の中には實に思ひがけなき事がある。寸前暗黒とは此事であらう。今少しく其事を此所

に語らねばならぬ。

○ヂルクの失脚

當時チャ！レス・ヂルクはグラットストン第二内閣に於てローズベリー卿を除けば最も年少であつた。彼は辛く四十二歳であり、議員としての生涯は連續したる十七ケ年を過ぎ彼の内外に於ける信用と勢力とは偉大なるものであり、今後庶翁の衣鉢を繼ぐものはチエンバレーンでなく寧ろヂルクであると思はしめた。庶翁第二内閣の辭職後間もなく一八八五年七月十八日土曜日の夜彼はレフオームクラブ（改革倶樂部）に於て彼の努力に負ふところの選擧區改正案の通過を祝すべき宴會に招かれ、すべての人から祝福せられ滿腔の希望と愉快を以て其家に歸つた。然るに机の上に一通の書簡があり、翌朝重大なる事件にて彼と會見を希望する旨を認めてあつた。其書簡の主はヂルク家傳來の友人であつた。斯くてヂルクは自由黨出身の某議員の夫人が其夫に向つて兩人結婚以後ヂルクと關係ある事を白狀したといふ事を知つた。之は實に青天の霹靂であつた。彼はそれより數日後、即ち七月廿三日附の日記に左の如く書いてゐる。「予は今日余が曾つて多少の名聲を顯したる議院に最後の別れを告ぐる。考へて見れば不思議である。一週間前予とチエンバレーンと會見の際、彼の希望に任せ今後は予が首領となるといふ事を約束した。それは地方に於てはチエンバーレーンが勢力あるけれども、議院に於ては予が寧ろ人望多きからだ。而して三日前にグラツドストン氏も亦同樣の希望を予に向つて漏した。然るに予が今蒙りつゝある批難は如何に辯解しても役には立たぬ。公人としては實に致命傷だ。予は此所に於て直ちに公的生涯を去らんと欲するものである」と書いてゐる。之は全く其通りであつて此事件が事實であつたか、寃罪であつたか、それを詮索する必要はない。彼の友人チエンバレーン始め何れも之を寃罪として取消さんと運動したが、世の中は遂に之を承知しなかつた。只此所に一事の語るべきあるは彼は當時人知れずパテソン未亡人と結婚の約束をしてゐた。パテソンは毛禮卿の先輩でオツクスフオードに二人と下らぬ大家であり、彼の著作の一は毛禮卿が編纂したる英國文人傳中のミルトン傳である。夫人の齡は其夫の齡に半ばする位であつたらうが彼女は女性として多くの傑出したる資格を持つてゐた。斯くてパテソン氏が死後彼等は結婚の約束をなし、而じて當時夫人は印度に旅行してゐたが端なく熱病に罹り、頗るヂルクの心を痛めしめてゐた。而じて其際にかゝる事件に接觸したからヂルクは實に二重の心配をした。其所で、彼は親友チエンバレーンの手を藉つて其 情を印度に

たる夫人に打明けたが夫人はヂルクを信ずる事の厚きかゝる事件にて其心を動さゝるのみならず彼は從來極めて少數の親友にのみ打明け一切秘密にしたる此婚約の顚末を直ちに電報もて之を倫敦タイムスに公にした。之は此一事によつてもヂルクは無實の冤罪に陷つたといふ事を社會に心證せしめんが爲めであつたらう。兩人の間は斯くて圓滿に行つたが、行かぬは世の中で爾來ヂルクは忽ち政界より葬られ、全く日蔭の身となり、次に組織せられれる虞翁内閣に列する事も出來ず又力を失したる彼はチエンバレーン、虞翁の間を調停する事も出來ず遂に虞翁とチエンバレーンとが兩虎相搏たねばならぬ事情に至つた。

○失後脚のヂルク

序でながらいうて置くが、ヂルクの失脚は實に惜しきものであつた。爾後久しきを經て彼は再び議會に來たが二度目の時には最早や別人のヂルクであつた。彼は只一騎打の議員として立つたのみで、殆んど其勢力は失墜し去つた。彼が果して他の妻女に對して失行あつたか否かは別として、此所に一つの逸話がある。曾て彼は有望なる自由黨未來の首領として同じ自由黨の金持テンナント家に招待せられた。其家には才貌二つながら世に目出度き同胞の娘さんがあつた。テンナントは此珍客を下にもおかず待遇したが、何故か娘達には餘り氣に入らなかつた。或夜彼が寢室に赴く際廊下にて其姉娘のローラと出會した。ヂルクは出會頭に若し貴孃が予に只今接吻を許さば予の寫眞に署名して進上せんといふた。ローラは呆るゝ事半時ばかり、それは誠に有難き思召であるが御身の寫眞を頂いたとて私には致方がありませんから御免を蒙ります。といふて相別れた。爾後姉妹打寄つて之を笑ひ話の種としたと妹のマルゴツト即ち現在のアスキス夫人が其自傳に書いてゐる。此等で考ふれば彼は女性に對して非常なる嚴格なる男ではなかつたかも知れぬ。

○危機漸く迫る

當時の政界の模様を見れば群疑滿腹、衆難胸に塞がるといふ如きであつた。ハーチントン一派は虞翁が愛蘭派に接近するやうな事はないかと頻りに猜疑の目を凝してゐた。チエンバレーンも亦虞翁の態度に少なからず懸念してゐた。斯くては自由黨其物の爲めに面白くなしとて彼是周旋する人あつて其年（一八八五年）の十月にはチエンバレーンが虞翁をハワーデン城に訪問し數日滯在して、綏晤した。併し其時まで互に意中の探り合ひであつて其確定したる意見なるものを討論するには至らなかつた。虞翁が一八八五年十月八日ハワーデンからのグランヴイル

卿に與ふる手紙によれば昨日チエンバレーン氏は此處に來た。予は彼 樣々の話をした。彼は共に語るには善き人である。それは啻に彼の力と共 快とばかりでなく、彼は決してうかくと話さず、熟行して話すからである。而して何等邪推深き事もなく又つまらない小節目に面倒をかけず、又強いて其議論の統一を保たしめんとするがやうた事もなく、有りのまゝによく語るからであるといつてゐる。併し此會話の爲めに兩人の愛蘭に對する意見の一致するを得なかつた事だけは明白である。

當時虞翁の意見は愛蘭問題は黨派問題でなく國家問題である。それで之を黨派問題とせず擧國一致で片付けた方が然るべきである。それには現保守黨内閣をしてその事に當らしめ、我等は外から之を援助する方が策の得たものであらうといふ考をしてゐた。併し若し保守黨が之を否んだならば自ら進んで其責に當るを辭せざる覺悟らしかつた。

○選擧の結果

選擧の結果は意外であつた。それは虞翁は選擧區民に向つて此際愛蘭問題を片付くるには絶體的多數が必要だ。保守黨の力も藉らず愛蘭黨の力も藉らず自由黨一黨にて多數を制しそれによつて此難問題を解決すべきであると揚言した。彼の希望は全く共通りであつた。然るに選擧の結果は案外であつた。選擧に於て自由黨は三百三十三人、保守黨は二百九十一人、パーネル黨は八十六人の結果を來たした。卽ち自由黨は單獨に保守黨に對しては多數であるが、保守黨と愛蘭黨が聯合する場合には少數である。之は何故であつたかといへば村落の選擧區に於ては三エーカー牝牛一頭、藥が効いて自由黨の勝利を得たが、都府は概して失ふ所が多かつた。而して其選擧に不利なる多くの理由の一はパーネルが愛蘭の要素を馳て悉く之を保守黨に投票せしめたからである。パーネルは英國の何れの黨派からしても最もよき條件にて讓歩せしむるものと提携せんとした。それには一の黨派を餘り有力ならしむるは得策でないと考へた爲めに更に保守黨に投票せしめたのであらう。殊に注意すべきは從來愛蘭から十四人の自由黨員を出したが今度は愛蘭を擧げて遂ひに一人の自由黨員をも選出し得なかつたことである。八十九の愛蘭に於ける選擧競爭に於てパーネル黨は實に八十五の勝利を得た。卽ちウースターに於ける十七人の保守黨を除けば其他は悉く國民黨であつた。際 て虞翁は愛蘭が若し擧國一致の意見を以て其希望を表明する際には十二分に考慮せねばならぬといつてゐたが、今は卽ち其時節に到着したのだ。

○意外の出來事

此所に意外なる出來事が生した。それは虞翁は例の擧國一致

案を具して之を保守黨の若き後繼者バルフォアに語つた。バルフォアは首相ソルスベリー侯の姪であつて其時には未だ何人も其程には考へてゐなかつたが、彼はソルスベリー侯の最も昵近者であつたから彼を以て侯に其意を通ぜんとした。併しバルフォは別段氣乘りがせぬ風で而かも丁寧に返事をなし、兎も角も之を首相に致すべく答へたが、併し保守黨政府は萬一さる事をすれば愛蘭に於けるウースターの味方を失ひ更に保守黨彼自身の立脚地たる英國の地盤を失ふ危險があるから固よりそれに同意し得べくもなく、爲めに其の態度は漸く非愛蘭國民黨となり、カーナヴアン伯は愛蘭を去るの餘儀なきに至つた。斯くて他方に於ては突如として一個の事件が湧き出てた。それはハワーデン城の紙屑と當時稱せられたものにて虞翁の愛蘭問題に對する意見として藪から棒に十二月十七日の新聞に發表せられたる條項だ。之は實に寢耳に水で何人も之を前以て承知したものはなかつた。驚いたのは何よりも寧ろ味方であつた。之は彼の子ハーバート、グラッドストーン（現在の子爵）が十二月十四日倫敦に赴いた際、或新聞記者の質問に應じ、多分家の親爺の考は此位であらうと話した事が忽ち新聞記者の利用する所となつて世間に發表せられたのだ。流石の虞翁も直ちに電報を以て其事が自分の意見を正確に表はしたものでないといふ事、及び彼の許しもなく知らぬ間に發表せられたのであるといふ事を聲明したが、併し駟も舌に及ばず何人も之を信ずるものはなく、恰も池の中に投じた石の如く、其波瀾は池全面に溢つた。即ち十二月二十日附にてハーチントンは直ちに之に反對の書簡をタイムスに公けにした。之が虞翁と穏和自由派との分れ目の第一であつた。當時チエンバレーンと毛禮卿との間は愛蘭問題に關して追々其親密なる交情が試めさるゝことゝなつた。チエンバーレンは頻りに毛卿が愛蘭問題に對する演説を評して、フーリツシユ・アンド・ミスチヴィアス、馬鹿々々しく且つ有害だといひ、而かもセルレ卿の文學的譫言（ノンセンス）は最悪の骨頂だと罵つた。此れは彼の最初の案たる地方議會案にて愛蘭問題を片付け得ると信じたからであらう。併し英國の政界は今や保守黨の手にもなく自由黨の手にもなく八十餘人を率ゐたるパーネル黨の手にある。何れの黨派でも己れに反對するものを倒し己れに同意するを援くるといふ最も自由なる位置を占めたる彼が今日に於て、地方議會などにて相談のつく事は到底覺束ない事だ。それにも拘らず尚強いてそれを主張したのは何故であつたらうか。

虞翁第三次の内閣、毛卿愛蘭大臣となる

兎に角事件は急轉直下してソルスベリー内閣はいよ〳〵辭職し、虞翁は一八八六年一月三度び内閣を組織する事となつた。此内閣組織について最も意外なる事は禾禮卿が愛蘭大臣に拔擢せられた事だ。今少しく其顛末を語らなければならぬ。

彼の日記に曰く「一月卅一日、日曜日、家に居つて呑氣に論文を書きゝあつたが、午後二時にカルトンハウス街なる彼家を訪問すべくグラッドストン氏より電報が到着した。時刻に訪問した。彼はその書机に凭つてゐたが別に屈托の態もなく、急遽の様もなかつた。彼は單刀直入に重大なる相談を致したいといふた。それは予を愛蘭大臣に推薦するといふ事であつた。予も已に二回程は愛蘭問題については思ひ切つて演説したる後であるから、此には驚かさるを得なかつた。そこで予は虞翁に愛蘭政策は如何、少くとも其根本義は如何と問うた。彼は机の抽斗から書附を取り出し、予に之を讀ましめた。之で見れば彼は確に愛蘭自治に向うてゐる。予は彼に向つて此迄數年淺からぬ友誼があるから返事をする前に一應チエムバレーンと相談して見たいと云ふた。此の返事には彼も少し驚いたやうだ、が併し否まなかつた。予は只數時間の猶豫を乞うたのみだ。兩人の對話は二十分餘であつた。それから直ちにチエムバレーンを訪ふたが彼は某夫人の午餐會に赴いてゐたから予は追うて其處に到つた。折しも午餐終りて彼は應接間から出で來つた。予は言葉短く顛末を語つた。聞くや否や彼の顏色は一變した。驚くに足らぬ、予が愛蘭に赴くは先頃から豫測せられたる兩人の間に生ずべき危機の到着點であるから。彼は曰く果して予が期待した通りだ。予は豫て虞翁が斯くするであらうと思うてゐた。思ふに貴君は承諾したのであらう。卿は答へて、否、未だである。僅かに三年足らずの經歷を議院に送り一切官職の經歷なきものにとつては決して之は小事でない、且つ内閣が最後に於て狹隘なる愛蘭政策に決定した時には予は全然孤立せねばならぬ、予はグラッドストン氏に貴君に面會せずしては決し兼ぬるといふた。チエムバレーン曰く、若し此際君が之を拒んだならば如何にして君は其自尊心を保つ事を得るかと。斯くてチエムバレーンの容貌は何となく六つかしく、而じて何やら例の如くグラドストンに對して種々の苦情を述べ立てた。予は十五分ばかり會話し、それからアセニアム倶樂部に赴き、そこに茶を喫し、予が書きかけた論文を書き終り、更に予が愛蘭大臣たるに適せさる七箇の理由を書き列ね、再びグラッドストンを訪うた。斯くてそれを陳述した。而かもグラッドストンは一切それを押退け、全く予に信頼し且つ予を以て特別の味方とするの意味を語つた。之は予にとつて實に極所である。予も自ら責任の重大なる事をよく承知して

ゐる。予は之を承諾した。而じてそれから器械的に晩餐の爲めに衣服を着換へ器械的にチエムバレーン家の晩餐會に臨んだ。云々」

チエムバレーンとしては多年政界に於ける彼の親友若くは第一の乾兒としてモルレー卿を待つてゐた。然るに此の天下分れ目の大問題解決の際に於てそれをグラツドストーンから横取せられたのだ。彼としては妬ましくもあり、口惜しくもあり、腹立しくもあり、實に其感情が千種萬樣であつたらう。又毛禮卿に取つても彼を實際の政治社會に案内したる兄貴株のチエムバレーンと別れ、虞翁の第一の乾兒となつて而かも彼と場合によれば政戰場裡に鎬を削らねばならぬといふ位置に立つは如何程心苦しかつたに違ひない。併し彼も亦一個の主張ある男子だ。如何に從來の行掛りはあれ、交友的恩愛の情は濃かであれ、自己の主張を抛つて友人に殉する譯にも行かぬ。故に彼は此際進退維谷る極所であつたが、而も其所信に殉して愛蘭大臣たる事を承諾した。當時毛禮卿がチルクに與へたる書翰の一節に「君の不在の爲めに予の滿足と予の信賴の過半は消え失せた。君の存在と否とは非常なる相違を來して居る」といつた。

○虞翁チ氏兩雄の乖離

チエムバーレンは何故に虞翁に對して不平であつたか。彼は當初から虞翁に叩頭することを好まなかつた。虞翁も亦なるべく彼を識認するなからんとした。いはゞ虞翁はチエムバーレンが自ら付けたる正札にてチエムバレーンを買ふ事を好まなかつた。而じてチエムバーレンの行動も亦殆ど眼中には虞翁なきものゝ如くであつた。併し如何にチエムバーレンが新進の勢を以て起つても彼は尙急進派の一部を率ゆるに過ぎなかつた。誰が何といつても自由黨の多數はハーチントンに行かず、チエムバーレンに行かず、尙虞翁を首領とした。チエムバーレンの立場も隨分困難といはねばならぬ。彼はハーチントン一派とは同じ自由黨とはいひつゝも其の思想、意見七分迄は相容れない。さりとて自ら多數を率ゐて自由黨の首領となるといふには時期が尙早い。されば彼としては面白くはないが、出來得る程度に於て此七十六翁と提携するが最も上策だ。チルクは已に失脚の人、ハーコートは有力ではあるが人望が少い。虞翁の衣鉢をつぐものはチエムバーレンの外はない。辛棒さへすれば時が自然に解決する。それらの事は聰明なるチエムバーレンとして分らない男ではない。それで彼は虞翁の招待に逢ふて千思萬考の末愛蘭問

題に就いては入閣の上互に其解決の方法を相談するであらうといふ約束の下に入閣することを承諾した。其についても問題がある。彼は初め卽ち一八八六年正月三十日ハーチントンが入閣を拒んだ後海軍長官たることを求められた。而かも彼は考慮の末其翌日虔翁を見て之を辭した。虔翁は然らば何を望むかと問ふた。チエンバーレンは植民大臣と答へた。虔翁は之れを聞いて端なくそれは國務大臣であると答へた。神經の焦立つたるチエムバーレンは之れを聞いて此爺はどこまで己を侮辱するかと心中に憤つた。いふまでもなく印度大臣、殖民大臣、內務大臣などは其格は國務大臣(セクレタリ・オブ・ステート)である。其他は概ね閣員とは稱するが、其省若しくは廳の長官だ。かくて虔翁は再び彼の前官たる商務廳長官たらんことを求めた、而かもチエムバレーンは之れを拒み、つひに地方政務廳長官として入閣するを諾した。

○虔翁第三次の內閣

虔翁の第三內閣は實にすべての人から不安心を以て迎へられた。自由黨の最も穩健分子であり、有力者であるハーチントン一派は當初から加入せず、チエムバレーンとトレヴエリアンは條件付にて加入し、其他ハーコートの如き昨日まではパーネルを謀反人といひなしたる人々の如き何れも一時の方便として入閣し、若くはグランヴイルなどは單に虔翁に對する友情として同意したもので、全國の新聞紙は殆んど擧げて愛蘭自治には反對し、全國の有識階級は擧げて虔翁の態度を批難し、甚しきは虔翁は其政權欲を滿すために英國を愛蘭に賣るものとさへいふに至つた。かゝる場合に於て敵味方に論なく、何人も其心事を疑ふ能はざるものは只毛禮卿一人であつた。彼の意見については種々の批難もあつたが併し愛蘭自治は彼の確信であるといふ事は何人も異議を挾むものはなかつた。而して虔翁も畢竟は毛禮卿の爲めに愛蘭自治に改宗したのであらうといふ說が多數であつた。

○自治案提出の前後

虔翁內閣の組織の二月から自治案提出の四月に至るまでいろ〳〵の運動が行はれた。其中には愛蘭議員を依然ウエストミンスターの議會に止め置くか若くは愛蘭は自治と共に愛蘭選出の議員は帝國議會に參列を止めしむるかといふ如きは一の主なる問題であり、毛禮卿の如きは自治案と共に帝國議會から愛蘭議員をとりのくるといふ熱心の意見者であつた。若くは此際面倒な議案を出さずとも自治を與へるか與へぬかといふ根本義を定めて然る後議案を出した方が多數の贊成者を得るの途であると

說くものもあつた。併し老翁は一度心を其問題に傾ければ泰山眼の前に崩るゝも驚かぬといふ勢にて其全力を致した。かくて問題の提出せられたのが一八八六年四月八日であつた。彼は愛蘭自治案於ける老翁の勉强は實に盛んなものであつた。此際にと土地法案との二大法案の政策に全力を致し、七十七の老翁として如何に彼が此際奮闘したかは敵も味方も驚くばかりであつた。而して三月十三日其內容を內閣會議にかけた際にはチエムバレーンもトレヴエリヤンも共に辭職を申し出た。然しながら尙評議決しなかつたから三月二十六日の閣議に延期した。其際にはチエムバレーンは寧ろ妥協的の態度で何れかといへば彼は止り得べくんば內閣に止る決心であつたが、却つて其日は老翁が斷然たる意氣込みを以て之に當つたから遂に此兩人は餘儀なく辭職した。此事については其場に居合せたる毛禮卿、ローズベリー伯なども寧ろ喧嘩に首相の方から起したとはいはぬが收むることを好まなかつたらしく見ゆるといつて居る。かくてチエムバーレンも去つた。斯くの如く自由黨の兩翼ハーチントは遂いに來らず、チエムバレーンは去り除すものは老翁一人であつた。彼は七十七歲の老翁として其兩翼を失ひつゝも猶風に戰ふ野中の一本松の如く獨り亭々として聳えて何物をも來れといふ意氣込を示した。何人も政治家に必要なるは勇氣であるといはねばならぬが其勇氣を最も多量に所有した一人は實に老翁であつた。只老翁が年と共に其經驗も加はり年と共に進步の努力も多くなり、年と共に其新規の境遇に順應する態度も出來て來たが只人間を取扱ふ手練手管といふ如き點については些か粗漫に流れたのではあるまいかと思はざるを得ない。彼がチエムバレーンを取りにがしたのは彼の政治的運命といふよりも英國自由黨の運命にとつて實に後々まで磨滅し難き損害であつた。チ氏當人に取りては猶更らである。

○第一自治案の運命

此際に於けるモルレー卿の心配は實に一通りではなかつた。彼は花嫁が恰かもお家騷動の眞中に飛び込んだやうな譯で若し此際非常　る大責任の觀　がなかつたならば殆んど參つて了ふ所であつた。自由黨のありとあらゆる有力者は何れも反對である。偶々味方として賴むサー・ウイリアム・ハーコートの如きは世の中からも眞面目に彼が自治案の贊成者とは受取つてゐない。それは前內閣に於て內務大臣として愛蘭黨を手厳しくやつつけたのも彼である。選擧の際には彼が得意の冷嘲熱罵を以て完膚　きまでに愛蘭黨を攻擊した。それが此際俄然として愛蘭自治を標榜する內閣の一員となつた事は彼が信念からでなく、

處世の便宜から來たといふ事は敵も味方も承知の上である。のみならず彼自身も毛禮卿等が死身になつて騷ぐ間も、此問題には寧ろ冷々淡々であつた。眞面目に關係中にて此事を信念の上から主張する者は張本人といはるゝモルレー、其に化せられたと稱せらるゝ虞翁及び從來愛蘭總督として苦き經驗を脊め、其結果愛蘭自治の止むべからざるを悟りたるスペンサー伯三人であつた。味方は斯くの如く心細き味方であり、敵は日一日に雲霞の如く押寄せて來る、而かも其仲間として賴む愛蘭黨は流石にパーネルが之を率ゐてゐる爲めに亂脈とは行かぬが、其首領パーネル彼自身が一筋繩でゆかぬ曲者である。如何に毛禮卿が虞翁とパーネルとの間に立つて兩方の意志を疏通するに骨折り、又双方の論點を調停するに心配したかはいふまでもない。而かもそれが昨日までは新聞記者の編輯卓上に於て勝手の熱を吹きたる論客が今日は內閣大臣として其內閣の生死存亡の機を握り、其運命を背負つに立つのであるから其幾何の辛苦であつたかは何人も想像がつかぬ。併しながら此場合に於て賴むべきは虞翁であつた。虞翁は敵に對しては勝敗を度外視してゐた。一旦物を購はんと決心すれば其代價の廉不廉は問ふ所ではなかつた。茲に自治案は一八八六年四月八日いよ〳〵提出せらるゝ事となつた。如何に其時の議會が英國全國の視聽を傾けたかはいふまでもない。ありとあらゆる知名の人は皆此の老いたる獅子の所謂最後の獅子吼を聞かんが爲めに集つた。いふ勿れ七十七の老翁であると。虞翁は實に彼の生涯に稀なる大演説をした。彼は生涯の過半を議會に送つた。然も彼は未だ曾つて斯くの如き演説をしたことはないといはるゝ程であつた。其演説は正々堂々として何處までも條理を根本とし、議論の筋を立てゝ上は憲法上の大問題より、下は財政上の小節目に至る迄、宛も名將の百萬の兵を指揮せる如く、一絲も紊れなかつた。

案は已に提出せられた。されど案の運命は實に危險千萬であつた。五月の三十一日自由黨中の急進派に屬する面々五十五名は議會の委員室に集り、此案に對する態度を相談した。チエンバレーンが其會長であつた。チエンバレーンは極めて中立の態度を以て此會議を開いた。即ち此案は二讀會を通過し委員會に於て之を修正すべきか、將た二讀會に於て直ちに之を葬り去るべきかといふ問題だ。然るに此所にブライトの書簡は出で來つた。彼は此會には出席しなかつたが其代りに其の意見を陳述したる書簡を送つた。此書簡は實に此案及び此內閣に對する死刑の宣告であつた。コブデン、ブライト時代の元氣は當時のブライトにはなかつた。彼は寧ろ過去の人として取扱はれてゐた。併しながら彼が道義的勢力は實は盛んなものであつた。彼は當

初より正直一遍の政治家として知られてゐた。彼がいふ所は何等爲めにする事なく只其信念の發露であると受け取られてゐた。而じて彼が愛蘭に同情し愛蘭の爲めに盡したる過去の經歴からして彼が此際愛蘭自治案に反對するといふ事は愛蘭自治が如何にも不都合であるかの如き感じを第三者に與へずして止まなかつた。實をいへばブライトは愛蘭黨にはしみ〳〵愛憎をつかしてゐた。彼は愛蘭黨が議會に於ける擧動及び愛蘭に於ける擧動を見て之を謀叛黨と呼んでゐた。其結果謀友黨と事を共にするを好まず、謀叛黨に愛蘭を預け渡すを好まず、從つて多年の親友である虜翁と此際途を異にすることになつたのだ。いよ〳〵最後の日が來た。それは六月七日だ。虜翁は此案の提出以來、今回が五回目の演説だ。虜翁の顏は其上衣に着けたる花の如く眞白くなつてゐた。併しながら其演説の擒縱自在、其聲音の抑揚頓挫殆んど之が七十七翁であるかと驚歎せしめた。翁はチェンバレーンが解散を怖れずといふた言を引つかけて

それは尤もである。固より解散などを怖るゝ貴君ではあるまい。貴君はその船を造るに如何なる方位から來る風をも常に其帆に甘く之を受くる術を解してゐる。若し總選擧の場合に輿論が此案を賛成するの風を示さんか、貴君は予は本來主義に於て此案が贊成であつたといはるゝであらう。若し輿論が此案に反對せんか、然り予はかゝるが故に此案に反對したといはるゝであらう。若し輿論が愛蘭自治に向つて更に其範圍を擴ぐることを欲せんか。それにも尙貴君には口實がある。曰く政府案は餘りに狹少であゐ。故に予は曾て此案の提出の時に寧ろ之よりも聯邦組織の基礎に於て此案を制定したらば如何といふ説をなしたと云はるゝであらう。最後に輿論が此案は餘りに範圍が廣すぎるとする場合にはそれにも貴君は尙窮せぬであらう。それは四個の地方巡廻裁判をば倫敦から之を支配するといふが予の本來の意見であるといふことを云ひ得るからであると。

斯かる調子にてチェムバレーンをからかひ、總ての人をして其雄論に陶醉せしめた。かくて採決の鈴は鳴つた。此時分でも尙政府側の幹事は若干の浮動投票があるものと信じてゐた。採決は六月八日の午前一時少し過ぎであつた。而して其結果は三百十三に對する三百四十三にて即ち三十の多數にて否決せられた。此多數の中には九十三人の自由黨があつた。かくの如くして第一回の自治案は葬られた。

○虜翁黨の大敗北者

さて其次は如何。若し自由黨の調和を圖るが、虜翁の目的で

あつたならば此際は潔く辭職した方が得策であつたらう。而かも彼はこれに反して解散論を主張した。解散となれば此案に反對したる百名足らずの自由黨員は敵として取扱はねばならぬ。即ち彼等を驅つて敵陣に追ひ遂るのである。されど虞翁はどこまでも自ら信ずること厚く必らずしも案此ものにて戰ふでなく、愛蘭自治主義の大題目にて戰ひ、自ら陣頭に立つて選擧民に愛蘭自治の止むべからざる所以を開示すべしといふ意見で遂に解散となつた。それは六月二十六日であつた。之れには女皇も非常に反對した。併しながら如何に反對しても立憲國首相の意見には君主は枉げて從はねばならぬ。七ケ月以内に於て議會を二回解散するといふことは女皇にとつて好ましいことでなかつたことは勿論だ。されど遂に解散した。其結果は自由黨の大失敗であつた。即ち從來二百三十五の自由黨が百九十六に減じた。保守黨は二百五十一から三百十六に上つた。自由黨中の非自治派は七十四に減じた。獨りパーネルのみは依然として從來の勢力を維持してゐた。されば政府反對の保守黨、及び自由統一派を合すれば三百九十となり、政府黨たる自由黨及び愛蘭黨を合して二百八十なれば反對派の多數は實に百十名となつた。斯くの如くして虞翁の內閣は辭職した。人或は虞翁の手練を缺くや、ハーチントン、ブライト、チエムバレーンの三樣の人物をば、同一の門戸から追ひ出したと云ふ者があつた。併し之れは單に手練手管の問題のみではあるまい。

○愛蘭自治主義者の窮境

爾來虞翁も毛禮卿も愈々敗殘の後を受けてひたすら其恢復に骨折つたが一般の人氣は頗るあしく、苟も愛蘭自治案贊成者といへば殆んど交際社會からボイコットせらるゝ姿となり、何人も相手とせぬやうな淺間しき狀態に陷つた。加之ヴイクトリア朝中期以來苟くも知識階級といへば多くは自由黨であり、若くは自由黨に同情を表したものであつたが、今は學者でも、文學者でも、役者でも、畫工でも、宗教家は勿論、あらゆる知識階級に屬する人々は悉くとはいはぬが概ね其反對者であつて、偶々大學教授やら一流の文士やらで之れを贊成する者あれば何となく奇人偏物の者を做してゐた。それにも拘はらず虞翁は既に八十歲を目がけても尙一生の中に此事丈けはヤリツケアはねばならぬといふ決心もて最後の勇氣を揮つてゐた。その爲めに極めて遲緩ではあるが、漸次に——愛蘭自治の當否は別に問ふ所ではないが——虞翁の熱心と雄辯とに動かされ補缺選擧なども自由黨に有利になつて來た。然るに此際意外にも一の事件が生じて來た。

○パーネル訴訟一件

それは一八八七年三月七日からしてタイムスの紙上に「パーネルズム、アンド、クライム」（パーネル宗と罪惡）と題し一切パーネル派の運動の顚末を肥雜剔抉して掲げ初めた。かくて四月十八日に至りパーネルの直筆の書簡を掲載した。それはパーネルが先年フイニックス公園殺害事件に關係の手紙で其中にはキヤヴエンリッシ卿の死は氣の毒であつたが、次官バークの死は當然であるといふことで何やらパーネルもその暗殺事件に關係のある事の如く思はしめた文書であつた。パーネルは早速議會に於て此文書の贋造であることを釋明したが、タイムスでは尙盛んに此のパーネリズム、アンド、クライムの長篇を連載した。是に於てパーネル黨の一員誹議罪として之を訴へたがタイムスでは之はパーネル其人に對しての事で餘人の關する所でないと答辯したから今はパーネルは默止する能はず議會に向つて特別委員會を設け之を調査せんことを請ふた。政府は之を容れなかつたが而かも之が爲めに特殊の審問會を開くことを承諾し、一八八八年九月三人の裁判官は其委員に任ぜられ、タイス側では當時の檢事總長サー、リチヤード、ウエブスター、パーネル側からはサー、チヤールス・ラッゼルなど双方ともに第一流の辯護士が出て來つた。今日の前首相アスキスは當時は賣出し辯護士の若手としてラッセルの次席辯護士であつた、元來斯くの如き文字を揭ぐるに至つたのは之は單に新聞政策であつたか、將た政策上の新聞であつたか、或はタイムスに依つてパーネル黨を根本から撲滅せんとするの手段であつたか、それともタイムスが珍らしく新聞種としてかゝるものを連載したかそは姑らく措き、タイムスはなか〱それは澤山の金が入つて居る。今其審問の筆記によつて之を見ればパーネルの書簡其他にタイムスが支出したる金高は二千五百三十磅で此の問題についてタイムスが拂つた總高は三萬磅に上つて居るといふ。更に尙三十萬圓内外の金を支出して居る。流石にパーネルだ、彼は一切の問題を書簡が贋造であるや否やといふ一點に集中せしめた。彼は思へらく、パーネルズム、アンド、クライムに連載する事柄は已に歷史である。歷史であればそれが眞僞を故らに爭ふ必要はない。苟くも此の書簡が贋作ときまれば其の他の記事は眞實にせよ眞實でないにせよ決して輕重するに足らぬ、故に彼は此の一點に力を注いだ。かくして漸く此の書簡がいよいよ贋作といふ事が證明せられ、贋造したるピゴットは法廷の審問に對して答ふる事能はず一切を白狀した後ついに西班牙の首都マドリッドに逃れて自殺した。而じてパーネルは實に此大いなる訴訟の勝

利者として出で來つた。之は實に一八八九年三月であつて當時いかにパーネルが英國の自由黨にもてたか 想像の外であつた。同年三月八日エーテークラブ(八十俱樂部)に於ける晩餐會に於てはスペンサー伯、ローズベリー伯、パーネルなど何れも出席しパーネルは凱旋將軍の如く滿場の驩呼を博し、彼がローズベリー伯を中に置いてスペンサー伯と握手するや滿場の熱情は其極點に達した。當夕はスペンサー伯とパーネル昔時に於ける敵味方であつたものが初めて公會の席上に相會して握手したるものにしてローズベリー卿は之を稱して歴史的の握手と稱した。かくの如く自由黨 愛蘭黨との聯合は漸く鞏固となり、而かもタイムスに於ける攻撃は 中樞問題であるパーネルの書簡が贋作と定つて全く失敗に歸し、流行の政府黨も今は意氣揚らざる狀態に陷り次回の總選擧には再び老翁の勝利が間違ひなかるべしと期待せられ、之まで二心あつた自由黨員さへも今はいよいよ愛蘭自治の賛成者となり、潮先きは追々自由黨に向つて來つゝある場合に於て更に一つの事件は出て來つた。

○パーネルと離婚裁判

一八八九年十二月二十四日大尉オーシニが其妻のパーネルと姦通したといふ事を理由として離婚の訴訟を提起した。此オーシニは老翁第二内閣の際は老翁と愛蘭黨の間に斡旋しパーネルの乾分一人で曾て愛蘭黨の議員となつた事もあり其妻はパーネルが入獄の際などは老翁とパーネルの間に奔走したる事もあつた。彼が何故に此際かゝる訴訟を提起したか或は先きに書簡の一件にて思ひ掛けなくパーネルから返り討にあつた統一派の輩らが更に第二の手段としてオーシニを買收してかくなさしめたのであるか、或は他に理由があつたか兎に角此の容易ならぬ事件は出で來つた。併しパーネルは常に平氣であつた。いかに彼が平氣であつたかは、オーシニの爲めに此事件の代理人となつたものゝ語る所が左の通りである。自分はパーネルをレウイスの事務所に於て見た。(レウイスは當時有名の状師だ)自分が室に入るや獨りの男が腰かけて居た。自分は御身はパーネル君ではなきかといふたが、彼はいかにも物靜かの風にて左樣であると答へた。かくて其手を出し多分貴君は何かの書付を持つて來たであらうといふから然りと答へ書付を彼の手に渡した。かくて彼はレウイス君よ書付は之だといふて其の儘無頓着にそれを手の先に弄りつゝ示した。斯て予を顧みて他に何か用事があるかといふた。予はなにもないといふて引下つた。予は實に此人の冷靜なるには驚いた。他に何か用事があるかといふたのは用事が濟んだら早く出て行けといふ意味であつたらうと。」彼は實に

此一大事件即ち彼のチャーレス、デルクの如きさへも此問題に落着した時には寢食を安んぜず爲めに精神上非常なる打擊を受け僅かにチエムバレーンの家に赴き、そこにテニスや、乘馬にて、漸く其心を落つけたいふ程であつた。パーネルにはまるでかゝる訴訟の書類を受取つても自らそれを開いて讀むほどの興味さへも感ぜず其儘之を我依賴する狀師の手に渡したまでゝあつた。彼は此の事件を初めから莫迦にして居た。少くとも莫迦にして居た如く見せかけた。然しかゝる事に於て神經の最もよく働く老翁は此を以て悪魔の祟りと豫測した。彼はすべての事が漸く順調に向ひつゝある際にかゝる面白からぬ事件が突發せんとする事を心配して少らず其心を痛めた。彼は此事については其事件が確定せぬ前毛禮卿にも其事を申し通じた。而して毛禮卿も實は此事について少からず心配をした、それについては今玆に毛禮卿とパーネルとの會見の筆記がある。

○毛卿とパーネルの會見

「時は一八九〇年十一月十日、場所はブライトンのメトロポールホテル。

自分とパーネルとの會見は六時から八時までの間といふ事であつた。パーネルは八時廿分頃自分の室に欣然として入つて來た。予は彼に晩餐は濟んだかといふた。彼がいうには若し御身が未だであつたならば喜んで會食するといふた。給仕人が來る毎に何やらパーネルは外來人を避くるかの如く顏をそむけた。晩餐後彼は一二本の卷煙草をくすべ、火に近き安樂椅子によつて憩うた。かくていよ〳〵會話となつた。(筆者曰く、申す迄もなく最早自由黨内閣の出で來る事も遠くないと見當のついたから此會見はあつたものであらう)かくて愛蘭に於ける土地買收法案について樣々の意見を交換した。それより前途の事に及びスペンサー伯を愛蘭總督としては如何といふ意見を述べた。彼は別段異存はなかつた。それから愛蘭大臣としての問題となつた。予は直ちにそれは申すまでもなく貴君の任ではないかとパーネルにいふた。然り若し予の黨派(愛蘭黨)の誰れもが入閣するとならば斯くなくてはなるまい。それからいろ〳〵の問題が出た。かくて話は更に雜談に入り、彼は獸肉より鳥肉を好み、海よりも山を好むなどゝいひ更らに自分は實に無性者である。併し爲さねばならぬことがあれば蠟の如く執着して離れぬ。併し本來甚だ無性者であるといふた。話前に返りて、食事の終る時分予は、こゝに一事は甚だ申しにくひ事であるが承り　き事がある。但し貴君が其事について語るを好まぬならば其通り遠慮な

く申されたい。我々には即今裁判事件（離婚の訴訟）が當分貴君をして首領の位置から退かしむるに至りはせぬかと心配してゐる。彼は滿面に笑を含み、其フォークを弄びつつ自分が黨首を退くなどゝいふ事は決してない。自分は裁判事件の結果左様な事になるべしとは斷じて考へてゐない。反對黨のものどもはいかに彼等が膝折れ馬に乘つてゐるといふ事を知つてゐないと。予は誠に貴君の此話にて喜ばしくある。實は貴君を相手として我等も此迄やつて來た、されば貴君が心配なしといはるれば、それ程安心の事はない。パーネル曰く愛蘭人は人を信ずる事は甚だ緩慢の人民だが、一旦信じたものを取り去る事は更に緩慢であると。予は此返事によつて全くパーネルは此裁判から勝利者として出で來るものと信ぜざるを得なかつた。斯くて吾等の前途について二三の話をした。それは虞翁の年齢の事やら、女皇との關係が圓滿でない事やら、仲間中の調停を計る事やらであつた。それについて彼は實に其通りであらう、虞翁程の年齢として愛蘭自治案を獨りで背負ひ應がる黨派を茲まで引つ張つて來たといふ事は、なかなか容易の事ではあるまい。十一時卅分に吾妻が出で來つた。パーネルは彼女に對しても誠に叮嚀で愉快であつた。斯くて彼は恰かも夜半に宿を去つた。

斯くの如く自由黨の最高幹部に於てはパーネルの訴訟事件に一方ならず心配をしてゐた。然るに當人のパーネルは平氣でゐ、而かも上の如き事をいつてゐる。然るに此會話より一週間の後には忽ち其事件が確定した。即ち十一月十五日（土曜）に裁判が初り何等辯護するものもなく十七日月曜日には直ちにそれが決定し、裁判所に於ては、パーネル姦通の事實を認め、離婚を許す事となつた。

○パーネル對虞翁毛卿

タイムスの復讐の時節は到來した。一時氣を呑まれたる統一派は茲に再び其元氣を回復した。元來自由黨の根據は非國教徒にある。所謂古へピユリタン派の流を汲み非國教徒の良心と稱し、道德問題に最も八釜しくある。虞翁が彼自身は熱心なる國教徒でありながら英國のあらゆる非國教徒の信望を博したる所以は彼は道德的政治家であつたが爲めである。然るに今や自由黨の首領が人の妻を偷んだものと提携して政界に奔走するなどといふ事は彼等の到底堪ふべき所でない。折しも自由黨は十月廿日にセッフィルドに於て大會を開いたのである。毛禮も茲に來り、ハーコートも亦茲に來つた。虞翁は毛禮に書を寄せて「これでは駄目だ」というた。流石大膽不敵にして物事に動ぜぬハ

ーコートも相見て嘆息し、何故なれば運命の神は斯くまで我等を悩ますかといふた。二十一日いよ〳〵大會の席上に於てはパーネル問題は提起せらるゝ事となつてゐた。毛禮卿の選擧長ともいふべきスペンス・ワットソンは大會の長であつて同夜はパーネルの行動に對して一大鐵槌を下さんと敎圍いてゐた。併しながら毛禮とハーコートの兩人で拜み倒して、辛やくそれ丈けは述べさせずに濟ました。演説を終るや「彼は予（毛禮）を顧みて貌を赤め、眼を閃めかし、私は一生の中未だ今夜の如く我が良心を虐げた事はありません」といふた。と毛卿は記してゐる。翌廿三日黨の幹事即ち自由黨の選擧の神様ともいふべき例のシユナッドフオルストは毛禮卿等に向つて、此一件で選擧は駄目であるといふた。總選擧は迫つてゐる。危機は實に一髪である。斯くて十一月廿四日月曜日午後四時卅分倫敦なるカルトンガルデンの虔翁宅に首領株が相集つて相談した。それはハーコートの原案に成る虔翁よりパーネルに與ふる手紙である。その手紙の意味は「パーネルにして愛蘭黨首領としての位置を繼續するに於ては虔翁が自由黨首領の位置は全く有名無實となる。」といふ意味だ。それから種々評議の上其手紙は虔翁から直接にパーネルに與ふるよりも寧ろ虔翁から其手紙を毛禮卿に寄せたるものとして間接にそれを同卿よりパーネルに致すといふ事にしたが穩當であらうといふ事に決つた。而して此文句も毛禮卿の意見にて更に一層適切なる一句を加へることとした。併しパーネルも左る者だ。彼は毛禮卿が會見んせとするもなか〳〵出て來ず、又虔翁の意を受けてマッカーシー（愛蘭黨議員にして有名なる新聞記者及び著述家）が會見する事も容易に出來ず、其間にパーネルは再び議會開會に際して愛蘭黨の首領に選ばれ議會はいよ〳〵開かれ、虔翁や毛禮卿の立場は實に非常なる困難となつて來たのである。今虔翁となつて考へて見ても頽齡八十を過ぎて而かも滿身の勇氣を以て辛やく最後の目的を達せんとするに際し、思ひ掛けなきパーネルの事件の爲めに見す〳〵腹心股肱ともいふべき仲間を失ひ、その地盤の根柢から毀れ來らんとするを見ては如何なる剛者と雖も之には落膽せざるを得ない譯だ。

而かも虔翁は最惡中の最善を選び、當分パーネルをして首領の位置を去らしめ、一時輿論の鎭まるを待つて再びパーネルをして其所を得せしめんと試みた。虔翁としては、此れが最上の手段だ。パーネルは本來非調和の男でもなければ又怒り易き男でもない。只何人も彼の威嚴を傷けない限りは彼は決して其心を動かす事はない。併し何人にても彼の威嚴を傷け、彼に向つて差圖がましき事をするものあれば之は虎の鬚を捋たも同樣だ。

況んや彼は心から英人嫉ひだ。愛蘭人を愛るよりも寧ろ英人を憎む心からして彼は愛蘭黨の首領となつてゐる。其英人の老翁から自分が愛蘭黨首領たる位置を退けと命令せらるる事を如何にオメ〳〵と彼が承服すべき。彼は夙くに敵の軍略を見て取り豫め其裏を掻いて老翁の手紙を受取らざる前に、其黨派の會合をなし、黨派の信任投票を得ていよ〳〵首領の位置を固めたのだ。今茲にモルレー卿の手記中から摘載すれば、彼と會見の顛末左の如くである。

「十一月廿五日。自分は愛蘭黨の集會する以前に彼と會見すべく特に之を求めた。然るに彼はそれを斷つて來た。そこで予はパーネルはもはや如何に予等が爲すも彼は最後まで戰ふといふ決心を固めたといふ事を見て取つた。予が議會に達した時には午後三時を少し過ぎてゐたが、廊下は開會初めの例により大賑ひであつた。パーネルも其中にあつて二三の友人と雜談してゐた。彼は予を見て進み來り、予に向つて誠に遺憾であつた。實は貴君の手紙を受取る事が遲かつて會見の時期を定むる事が出來なかつたと。予は彼を伴うてグラッドストンの室に誘うた。其途中に於て彼は其の同僚が彼を首領と推選した事を事もなげに話した。斯くて暫時き一小室に達した時に予は彼に向つて今更ら愛蘭黨議員諸氏より貴君が首領に選任せられたといふ事を聞いたのを甚だ遺憾とする。實は其以前に貴君に聞いて貰ひたい事があつた。斯くて自分は老翁が予に與へたる手紙を朗讀した。彼は予が朗讀するのを聞きつゝあつたが彼の顏は如何にも頑强に見えた。彼はいうた。己に對する反感は謂はゞ茶碗の中の風波だ、やがてそれは濟まむ。予は答へた。貴君は愛蘭を知つて未だ英國を知らぬ。此爲めに如何に英國が損害を受くるであらうか。つまり貴君は愛蘭自治の爲めに此際犧牲となつて當分退かれた方が然るべきであらうと。彼は靜かに之に答へて、予は前途に着目せねばならぬ。予は到底我が位置を抛つ事は出來ぬと。彼の態度は相變らず冷靜であつた。彼の聲は何等調子は變らなかつた。只彼の顏色は何時もよりも蒼白く而して何等か薄氣味わるく微笑を洩らしてゐた。斯くて其室を去るに際し彼は予を顧みて勿論グラッドストン君は予を攻撃するであらう。予はそれを期待して居る。彼は斯く爲すべき權利を有つて居る。斯くて我等は別れた。數分後に老翁は入り來つた。恰も午後四時である。彼は帽子も肩掛も脫せず、直ちに予に向て彼の男と會見せられたかと聞いた。予は彼は頑强であると答へ、其會話の顛末を話した。彼は机に凭つて啞の如く予を見詰め、予がいふ所を信する能はざるものゝ如くであつたが、直

ちに彼が予に與へたる書簡を公けにすべしと喝破した。予がいふには最早〔新聞に掲載する時間が〕遅れてゐる。虞翁曰くパーマーガゼットは之を特別號として出版するであらうと。予は兎も角も今少し考へさして貰ひたいといふ事で、虞翁もせう事なしに之に從ひ、相伴うて議場に入つた。斯くて議席に於てハーコートも參加し、相談は直ちに此書簡を公にする事に纏つた。而じて虞翁は予をして此事をパーネルに通告せしむる事にした。予は廊下に出で人を遣はしてパーネルを議場から呼び出さしめた。彼は當時議場に於て何時もの席に在り其仲間と共に愉快さうに話し且つ笑ふてゐた。予はパーネルと廊下を三四度廻り彼の書簡を公にせざるべからざる所以を語つた。而じて彼は如何にも當り前としての如く、何等彼には頓着なきもの丶如くグラッドストン氏としては尤もの事である。斯くてこそ彼は彼の黨派を統御することが出來るであらうと答へた。」

此書簡が一度世に出づるや實に世の中を驚かした。此所に於て愛蘭黨は自治案を捨つるかパーネルを捨つるかのヂレンマに出逢つた。虞翁に從つて愛蘭自治案を通過せしめんとするものは勢ひパーネルを捨てざるを得なかつた。パーネルに從ふものは固より自由黨と絕つの外はなかつた。是に於て愛蘭黨中に非常なる大葛藤が出で來つた。而して其結果愛蘭國民黨とパーネル黨との兩派に分裂した。

一八九一年十月或日毛禮卿はローズベリーの家にあり對話をなしつ丶ある際に翁電報が到着した。伯は卿の顏を見てそれを讀んだ。曰くパーネルは昨夜ブライトンに於て死したと。何たる悲慘の事であらう。彼は無冠の皇帝と愛蘭ではいはれてゐた。其皇帝が殆んど勝利の届く手元に於て彼は忽ち失脚し、惡戰苦闘遂に逝いた。彼は實に四十五歲であつた。何たる悲慘の生涯であらう。彼が如き堅固なる意志を有し彼が如き卓越なる力を有し、自ら其精銳の兵を作り、意の如く之を指揮し已に凱旋將軍とならんとする際に於て、愛する一婦人の爲めに殆んどすべてを犧牲とし去り晚年の約一年間は全く惡鬼羅刹の如く狂ひに狂ふて死んだ。併し彼は毛禮卿に對しては何等惡意を挾なかつた。彼が英國に於てなしたる最後の演說中には予は毛禮君を疑はぬ。予は未だ曾つて彼を疑ふた事はない。彼は英國人中絕えて無くして僅かにある一人、而じて議會に於ける自由黨中に於ては愛蘭問題について始終一貫渝ることなき唯一人であるというてゐる。之はパーネルならざるも何人も承認する所であらう。曾て虞翁と毛禮卿とは此の對パーネル一件について相語つた。虞翁曰く君は我等がとつたる手段について何ぞ悔恨したる事は

ないか。毛禮曰く何にもない。之は避くべからざる事である。予は毫も疑ふ事はないと。如何にそれが痛恨の事であつたとしても致し方なければ如何ともする事は出來ぬ。實に痛恨の事であつたには相違ない。天は最後まで虞翁に對して戯れた。彼が晩節を飾るべき愛蘭問題は今や彼によつて解決すべき機會の眼先に於て此打撃を受けた。パーネルをして其位置にあらしむるも打撃は大、彼を位置より退くるも打撃は小でない。虞翁毛禮卿のとつたる手段は只二つの災害の比較的甚しからざる方を選んだに過ぎぬ。

一八九二年十月二十八日議會は解散せられた。

第四次虞翁內閣

斯くて期待したる總選擧は來つた。而かも其結果は實に虞翁其他愛蘭自治派にとつて非常なる失望であつた。虞翁が一八八六年以來一切の事を只愛蘭自治問題の一點に集中して輿論を動かさんとしたる結果は實に意想外であつた。先づ驚くべきは當人の虞翁の投票數の非常に減少したる事であつた。彼の多數は從前に於ては時としては四千票少き時にも三千票を算した。然るに今回は僅かに六百九十票の多數に過ぎなかつた。如何に樂天的に考へても決して此票數は喜ばしくはない。のみならず其全體にとつて考ふれば多數は漸く四十人乃至四十二人であり而かも其中には自由黨勞働黨及び愛蘭黨を合しての數であつた。四十人內外の多數にて而かも烏合の衆を集めて最後の大決戰をするといふ事は何人と雖も勇み立つべき門出ではなかつた。而かも何事にも後に引かぬ虞翁は猛然として之に赴いた。彼は其八十三才に於て一八九二年八月十五日第四の內閣を組織した此閣僚中には新たに毛禮卿の推薦にて內務大臣となつたのが即ち現在のアスキス君である。毛禮卿は當然の行掛りから再び愛蘭大臣となり、サー・ウイリアム・ハーコートが大藏大臣となつてまさかの時には議會に於ける虞翁の代理をつとむる事となり外務大臣はローズベリー卿が幾度か沈吟回避したが義理や人情で遂に之を承諾し遂に一八九三年二月十三日に於て第二の愛蘭自治案は提出せられた。

○第二次の愛蘭自治案

虞翁を好むものと雖も好まざるものと雖も彼が最後の奮闘には感激せぬものはあるまい。毛禮卿は翁が委員會に於ける態度について斯くいふてゐる。「若し彼が五十才であつたとしても滿場の議員は異常の事として感激するであらう、而かも八十四才の老翁の所作としては言語に絶したる驚歎であらねばならぬ。

彼は有力なる議論や面倒なる憲法上の論說や又雄魁なる討論的の力を發揮する爲めに幾回演說したか知れぬ。彼は如何なる横槍にも難題にも毫も遲疑する所なく直ちに之に應答した。此討論は實に議會の歷史に於ても比類少き時間を要した。正面の敵であるチェンバレーンはあらゆる手段を以て議事の進行を妨げた。而かも虞翁は未だ曾て之が爲めに怒りを發したことなく常に平靜の態度を以て之を縱横無盡に打破つてゐた。但だ時としては餘りの事に虞翁も年のせいか隨分屈托せない事もなかつた。併し一度其問題に會へば彼は更に生れ變つた人の如く起つて之に應じた。時としては毛禮卿が餘りの面倒にて氣を腐らし何となく氣分を惡くし佛頂面でもやると虞翁は却つて倒まに彼を慰め、まあやりつけて了つてからは君とゆつくりホレースについて議論をしやうではないか。予は君の如く彼を大いなる詩人とは考へてゐないといつた。之は虞翁と毛禮とは共に羅馬の詩人ホレースを愛讀し虞翁は晩年の事業として其飜譯を試みた程であつたが併し詩人としての品等に關しては兩人の意見は一致してゐなかつたから毛禮卿が熱した頭に斯くの如き飛び離れたる問題を注入して慰藉したのだ。此親爺は年はとつてもなかなか隅には置けなかつた。兎も角も此案は同年の七月二十七日、に漸く委員會を離れたが其案の通過するまでには委員會丈けにて四十六回開かれ、一切に於て六十八回の議席を重ねた。如何に虞翁と毛禮卿とが其の通過に渾身の力を致したかは之で分るのである。然しながら之は上院に於て物の見事に蹴り出された。此上は致し方はない。上院を改革するか、さもなければ大多數の味方を得て三たび自治案を議院に提出するかの外はない。併し上院改革とて別に手段はない。さりとて再び虞翁をして選擧を繰り返させた時に前回程の結果を得るや否やさへも疑はしい。されば虞翁としては爲すべき事は已に爲し盡した。最早退隱するの外はないのだ。併しながら虞翁の如き政治家にとつては退隱などといふ事は當人が自ら思ひつけば兎も角、他から强制すべき事ではない。然るに此所に思ひがけなき一の事件が持ち上つた。

○虞翁の退隱

それは海軍々事費問題だ。海軍大臣スペンサー伯は、部下の必需としたる要求額を持ち出したが、虞翁は之を不是とした。而し此の海軍々事費に付て、スペンサー伯は、其の平生の氣象通りにて、頑乎として虞翁の言を容れなかつた。斯くてはや何とか其の問題を解決せねばならぬことゝなつてゐたが、次第に遷延し、漸く一八九四年一月九日の内閣會議に商量せられた。最早首

相の意見の通りか、海相の意見通りかに決めねばならぬことゝなり、延期すべき事には參らなかつた。閣僚の多數は悉くスペンサー伯に味方し、處翁の意見を賛成したものは僅かに一人であつたといへば最早處翁が辭職する外は適當の手段はなかつた。兎に角下院丈けでも自治案を通過させたから處翁の面目は立つた。翁は最早八十五歲だ。此上彼は閣僚多數の意見に反して、內閣に踏み留るべき必要はない。至當の結論としては處翁は首相の椅子を後進に讓つて退くべきであつた。閣僚も亦其外に途はないとして何れも其後繼者問題に氣を配つてゐた。併しながら當人の處翁はなかなか辭職をいひ出さぬ、一日議場に於て處翁は毛幾卿に向つて差支なければ今夜晩餐に來られたし、別に相客とてはなく只家族のみである、其際內閣の事について貴君と語るであらうと誘ふた。卿は處翁のいふまゝに彼の官邸に赴いた。成程彼の私昵の友人アーミステッドと外一人を除けば他に誰も相客はなかつた。處翁はいかにも愉快なる氣分にて例によつて高談雄辯を揮つた。晩餐の後に客間に於て處翁は早速アーミステッドと共に双六の盤に向つた。處翁夫人は毛幾卿を伴りたる玻璃の屛風の後ろなるソフアに作ふた。而して實に卿は驚いた。卿は全く彼女に一大宣告をなすべき義務を負はされたのである。實をいへば處翁は自ら辭職するといふ事を其夫人に語るに忍びずして毛幾卿をして之を語らしむ可く晩餐に招き寄せたのだ。その以前豫じめ翁は老夫人に向て、何れ今夕毛幾君から予の身上に關し予の意志を話すからとくと聞いて呉れと申し置いたのであらう。さうして處翁當人は平氣に友人と双六を鬪はして居る。最早毛幾卿も絕對絕命其の眞相をいはねばならぬこととなつた。そこで彼は夫人に向つて最早處翁の統制時代は過ぎた。其辭職は只時間の問題で而かもそれは今月か來月かであるといふことを明かした。之は全く夫人にとつては寢耳に水であつた。夫人は夢にもかゝることを豫期してゐなかつた。そこで夫人は之を聞いて容易に納得しなかつた。如何に閣議が面倒であつても面倒の結果は必ず旨く纏まるのである。又今回ビアリズに保養に赴けば彼の意見も何とか變化すること　出來るであらうといふた。併し卿ははつきりと左樣の調停は行はれぬと答へた。老夫人は然らば內閣の組織を變更してはどうであるかといはれたからそれは大變である。かゝる場合に左樣の事は出來べき筈はないといつた。實は此話は彼女にとつては一生一代の誇も名譽も打ち消す所の傷心事であつて、而かも其話の最中に、一方では双六の勝負につき老人二人が盛に笑ひどよめきつゝあるといふは何たる對照であらう。併し最後の幕は未だ全く下りなかつた。處翁は一月十三日にビアリズに赴き二月十日まで

滯在した。而かも彼は尙未だ辭職といふことを發表しなかつた。彼は寧ろ此際上院が自治案を排斥したるを理由とし上院改革の政綱を以て解散をなし輿論に訴へんと考へた。併しそれは廣翁其人にとつても重大の事であり內閣にとつては尙更取り返しのつかぬ事であるからして閣員は悉くそれに反對であつた。彼がビアリズから歸つてからも彼は屢々卽時議會解散の考をくり返した。併し彼の親友である毛禮卿は之を諫めた。而じて今は其時でなきをいひ又彼は廣翁に向つて自分は最早御身と進退を共にする譯には參らん。此際御身と進退を共にすれば愛蘭自治は全く葬られて了ふ。それで自分は愛蘭の爲めに此內閣の爲めに踏止まらねばならぬといふた。閣員は皆首を長くして廣翁の辭職を明言する日を待つてゐた。併しながらなか〳〵其日が到來しなかつた。いよ〳〵二月十七日には內閣員の晩餐會があつた。すべての人は今夕こそ辭職の話を聞くであらうと何れもそれを待ち設けて之に臨んだ。晩餐は追々終りに近いた。而かも主人公は何も語る所もなかつた。コーヒーが出た。併し尙主人公は啞の如くであつた。そこで何れも顏を見合せて皆退散した。それより六日の後二月廿三日に閣議が開かれた。普通の事項を相談し畢つて彼は此所にいよ〳〵最後の辭職の意を洩した。それは最早閣僚諸君と共に働くことの終りが來たといふ事であつた。その言葉は滿座の人に向つて氷の如く徹した。斯くてそれより一週間を過ぎて最後の內閣會議は開かれた。キンベリー卿は年長者として別辭を述べたが、感極まりて其聲は直ちに慄えて消え失するばかりであつた。彼は實に淚なしには言を發し得なかつた。次にハーコートは廣翁の代理者として翁の重荷を輕からしむべく之まで愉快なる義務を負ふた事を喜び又廣翁と別るゝ事を悲むの意を述べた。廣翁は此等の言を聞きつゝ恰も大理石像の如く動かずにゐた。而して彼はそれに對して四分乃至五分間の小演說を以て答へた。聲は確かに響き言葉と調子は低くあつたが能く徹した。彼は最後に斯くの如くいつた若し我々が男らしく意見が一致して妥協することが出來なければせめて男らしく別るゝことは出來るといつた。而じて斯く意見が違ふに拘らず諸君との交情は長く渝ることなしといふた。而じて殆んど囁く如き極めて低き調子にて而かもすべての人に聞ゆる語調もて"God Bless you All."といひつゝ一方の闇を排して去つた。彼等の同僚は又他の方面の闇を排して去つた。之が最後の幕であつた。廣翁は其日記に此事を記して「實に心を動かすべき場面であつた」と書いてゐる。彼は其日の午後に議會に於て上院攻擊の演說をした。併し之は彼の議會に於ける最後の演說であらうとは神ならぬ身の誰れしも知るものはなかつた。

虞翁の相續者

話變つて之から誰を虞翁の相續者とするかである。當時虞翁の相續者として二人あつた。一はハーコートであり他はローズベリーである。虞翁は兩人よりも寧ろスペンサー伯に望を嘱してゐた。而して女皇が必ず相續者を諮問せらるべきものと豫期し其場合にはスペンサー伯を推薦する決心を以て謁見したが女皇は意外にも遂に虞翁の辭表を受取つたのみにて何等後繼者については聞く所なかつた。順序からしていへばハーコートは年功からいつても功勞からいつても實に虞翁の後繼者でなければならぬ。彼は虞翁の第四内閣に於ては事實上、下院の首領であつた。彼が議院の首領として其働き振りの勇しく且つ目覺しく而じて大藏大臣としての手腕の傑出してゐた事は敵味方に論なく認識したる所であつた。彼は年齢に於てもモルレー卿より十歳以上であり一八六八年以來の議員である。彼は劍橋の大學に於て國際法の教授であつた程であれば彼の學者としての立場はいふまでもない。彼の家は名門である。彼の家からは大法官も出た、大監督も出た、家柄をいへば最も古き家柄であり、何から見ても首相として彼に不足はない。而じて議會に於ける闘將としては敵味方を押並べて彼の上に出づるものは殆どなく、彼と太刀打するものもチエムバレーン、バルフォア數輩に過ぎなかつた。併し彼は天然其儘の人で餘りに直情徑行であつた。其度量は廣くして且つ寛大なる心腸を有つてゐたが傍若無人で我儘勝手の男であつたから、其同僚は一人として彼から多少に限らず、手傷を負はせられないものはなく、又其部下も餘りに彼が無遠慮なるが爲めに彼に心服するものは少かつた。彼は決して惡人ではなく其口掛けよりも其胸中は寧ろ親切でもあり人情もある男であつたが彼は十九世紀より寧ろ十八世紀流の英國紳士を氣取り惡作眞面目見つて物いふものを冷笑し世の中を茶化して蔑すといふが如き傾がありそれで「總好かん」の投票には何時も絶對多數を博するといふが如き人であつた。又自惚れ根性も隨分强く、よく當時の諷刺畫家がお釋迦樣の髮毛をば釋迦の像を以て描く如く、一個のハーコートを描くに頭から足の爪先きまで悉く小ハーコートを以て描くといふ如き有樣であり彼が人並外れたる大男で人並外れたる高帽子を冠り胸を突出し、昂々然として歩く樣を見れば、而も角餘り人より愛好せられない性分が現はれて居るやうであつた。彼の競爭者ともいふべきローズベリー卿は年齢に於ては親子の相違はあるが、彼は大金持の貴族であつて才華煥發、愛相がよく、辯論に巧みであり、社交的人物であり、而じて上は英大帝國の問題より下は倫敦の市政

に至るまで通暁せざるなく、時としては老翁の主人公となつて翁をミトロシアンカンペンに誘引し、時としては倫敦に於ける勞働者罷業同盟の調停者となり又英國に於て初めて區會が開かれる時には倫敦區會の議長となつて毎日七時間も議長の席に坐り詰めし、食事の代りにチョコレートを嚙つてゐたといふが如き而じて老翁の前内閣に於て外務大臣となり所謂外交は黨派を離れて國家的に其政策は繼續すべきものといふ原則を確定し大いに其手腕を發揮したるが如きすべての點からいふも彼に謳歌するものは多かつた。謂はゞ年功手腕からはハーコートが當然の相續者であり、人望と同僚からはローズベリーが相續者として推し立てられた。而じて端なく此兩者の競爭が實際に面して露骨になつて來た。

○兩個の競爭者

却說何れかを定むる者は誰である。毛禮卿は曾て人に向つてハーコートをして首相たらしめなかつた責任者は二人あるといふた。之を聞いた者がそれでは其一人は卿身であらうといふた。卿は其考へ込みたる如き眼を以て高き己が鼻を眺めつゝ否といふべき態度を示したが而かも遂に或は然らんと答へた。蓋し事實他にも人があつたらうがローズベリーをして首相たらしめたのは第一毛禮卿第二アスキス此兩人の力であつたと思はるゝ。

斯くて毛禮卿は自分も全く間違つた。未だ一ケ月ならずして帝國主義者を首相の位に擔ぎ上げた事が分つた。と眞面目なる顔にて懺悔話をしたが併しハーコート傳の著者ガーヂナー氏は之は遁辭であらうと云ふて居る。それは元來ローズベリー卿が帝國主義者であつた事は今に初らぬ話だ。現に内閣に於ては毛禮卿もハーコートと共に屢々ローズベリーの此傾向に向つて戰ふた程であつた。彼はローズベリーが帝國主義者であることは初から百も承知であつたに相違ない。然らば何故に此際彼がハーコートをとらずしてローズベリーを取つたかといへばそれは前に述べたる通りハーコートが同僚に對する態度が餘りに傍若無人であつて、首相として其下に働くには頗る困難であるといふ理由の外に他に一の理由が存せねばならぬ。それは當時外相であつたローズベリー卿を首相に祭り上げ、其後釜を毛禮卿が狙つてゐたに相違はない。其證據には彼が外相たらなかつた爲めに如何に彼が失望したかといふ事は著明の事實であつたからだというてゐる。ガーヂナーの此言は餘程立ち入つたる批評であつて、オネストジョン（正直ジョン。ジョンは卿の名だ）と呼ばれたる毛禮卿としては餘り有り難からぬ批評であるが併し、之も亦一說として受け取るべき價値がある。それは毛禮卿

自身の回想錄によつて見るも卿は自ら外相たるを希望したといふ事は一言も書いてないが、されどローズベリー伯がキンベリー伯を外相に据え置くといふ事については大不承知を申し立て〻それでは自分は入閣御免を蒙るとまでいひ切つた。併しスペンサー伯が懇々其事情を語り若し君が入閣せなければ、予も亦入閣せずとまでいうたから、餘儀なく承引したといふ事が書いてある。さればガーヂナーの評言は一面から見れば當らずと雖も遠からずであつたかも知れぬ。之に反してハーコートの方からは頻りに毛禮卿を誘うて來た。而して俺を首相に押すならば君に大藏大臣の位置を讓らう。俺は君より十餘歳の年長であれば俺の相續者は當然君であるといふ如き話を持ちかけたが而かも卿はそれに應じなかつたといふ事も回想錄に自ら書いてゐる。更に伯此時期に愛蘭大臣丈けは切り上げて見たいといふ事が卿の考であつて、卿は「彌よ外相たる見込なきに於ては」寧ろ此際印度大臣たるを欲したらしかつた。其事の相談に出掛くる際にモルレー夫人の如きは着物を着換へる室までつき纏らて是非愛蘭大臣はやめて貰ひたいと泣かんばかりに愁訴したといふ事である。彼も其積りでローズベリーの所へ出掛けたが、ローズベリーから拜み倒され餘儀なく愛蘭大臣を繼續することとなつたが、然らば予は今後地方の演壇にも立たぬ、又議會の辯論も愛蘭問題以外には一切頓着せぬ、予は愛蘭一省に全く籠城するから其覺悟でゐて貰ひたいといふ捨臺詞で引受けたといふ事である。實をいへば愛蘭問題では虎溺も毛禮卿も二つながら行き詰つて了つたのだ。彼等のする丈けの仕事はしたが上院が頭として之を承知せざる以上は致し方はない。而して愛蘭人は彼等に不足こそいへ何人も感謝する者とてはない。愛蘭人からは感謝されず英人からは惡く思はれ、全く骨折り甲斐のなき損の上塗りする役目に何時まで執着したとて見込はないのだ。彼が此時期に切り上げんとしたのも尤もといはねばならぬ。

ローズベリー内閣

併しモルレー卿がローズベリー伯を擁立したる因果は覿面に來た。ローズベリー卿は首相になるや否や上院に於て演說し愛蘭自治も其主なる要素である英蘭が同意しない以上は實行覺束ないといふ事を公言した。是に於て愛蘭の輿論は騷然として起り又自由黨中にも其言葉が餘りに不穩であるといふ事にて少からざる問題を惹き起した。毛禮卿はそれを何とか甘く繕ふべく少からざる骨折をせねばならなかつた。ローズベリー内閣の門出は誠に目出度なかつた。ハーコートは此際癇癪を起して辭職するには餘りに自尊心が強過ぎた。彼は種々の難題を持ち込ん

だ。例せば外務省の一切の公文書は悉く彼の閲覽を經る樣にせよなどといふ事さへも持ち込んだ。併し結局彼は議院の首領として大藏大臣として止まることとなつた。而して彼が有名なる財政法案即ち死税の設定の如きも此間に出來た。死税はいふまでもなく相續税だ。之が今日に至るまで英國財政上の一大要石となつてゐる。ハーコートは其畢生の目的たる第一位を得る能はざるに拘らず熱心を以て此提案の通過に努力した。何人も當時に於けるハーコートの努力と手腕とに敬服せないものはあるまい。併しながらローズベリー卿との間は漸次疎隔して來た。

元來彼等兩人は舊き喧嘩仲間だ。一八八〇年虞翁の第二内閣の際に、ハーコートは内務大臣でローズベリーは其次官であつた。然るにローズベリーは其長官と相容れずして幾もなく去つた。之が衝突の初りである。それにハーコートは昔流の自由黨で、帝國主義などは大嫌ひであつた、されば思想の上に於てもローズベリー卿とは相容れぬ所が多かつた。而して自由黨中にもハーコートを首相に擔ぎ上げんとするものがあつて、自由黨は黨の面目として其首相は下院議員たらざるべからずといふ如き一般的論理を以てローズベリーの首相を排し去らんとするの陰謀團體があつた。閣議などにては隨分ローズベリー伯はハーコートから手嚴しく取扱はれた。かくて彼等の間は互に相見て一語をも交へない程となつた。

○外交上に於けるローズベリー卿

此際一言するは外務大臣として又後に首相としての外交に於けるローズベリー卿が我日本帝國との關係である。日英條約改正は此不運にして短きローズベリー内閣の時に出で來つた。日清戰爭の際にも英國は嚴正中立を守り、三國干渉の場合にも斷じて之に應じなかつた。此等は何れもローズベリー伯の外交上の成功の一に加ふべきものであらう。日本人としては彼に感謝せざるまでも彼の功を識認するの義務は存する。

○ローズベリー内閣の總辭職

話變つて毛禮卿などもローズベリー内閣には寧ろ失望したる一人であつたらしい。彼はハーコートを排斥したる一人であるに拘らずハーコートとも最も親交があつた。ハーコートは別に毛禮卿の態度に慊む所はなかつた。而して彼等は非帝國主義の一點に於て寧ろ共通する所は少くなかつた。而して首相と大藏大臣との葛藤はいよ〳〵昂じ來り、内閣の足元も頗る弱くなり議會に於ては四十二の多數が漸次減少して今日は八票、明日は七票といふ位になり、數人の晩餐會—其爲に決議數に加はらぬ

故にーは容易に內閣の運命を制し得るの有樣となつた。處が一八九五年六月廿一日に陸軍省の豫算案を議するに際し紐狀火藥の準備が足らぬといふ名義にて政府案反對の動議が出た。而してそれはまだ當日の議事の初期であつたが、意外にも政府は七票の少數にて失敗した。當時の陸軍大臣はカメル・バンナーマンであつた。閣僚中には之しきの事にて辭職する譯もあるまいといふ評議もあつたが、溫厚たるバンナーマンは頑としてきかぬ、之れは自分に對する不信任案であるから面目にかけても自分丈けは辭職をするといひ張つた。此際陸軍大臣一人をやめて內閣を改造する譯にも參らぬからついに內閣の總辭職となつた。然るに此政府の運命の決する瀨戶際に於て毛禮卿などは全く投票には與つてゐなかつた。それはアスキス夫人の自傳によつてよく其時の事情が分る。當時アスキス夫人は產褥の病氣にて最早回復期であつたから見舞客と寢室に於て相見た。當日ハーコートが　て世間話をして居る中に又、毛禮卿がやつて來た。種々の面白き話をしてハーコートが歸つたが毛禮卿　尙話しつゞけてゐた。その話の中には近々內閣も總辭職をするであらうから閑となつたら小說の合作をしては如何などといふ冗談交りの話をした。若し女主人公をアスキス夫人が書くならば男主人公の方は毛禮卿が引受けるなどといひ、而して其趣向は如何などといふやうな空中樓閣の話をしてゐた。やがて卿が去つて間もなくアスキス氏がやつて來て最早駄目だといふた。聞く所によればハーコートは漸く表決の際に間に合つたが、毛禮卿は遂に間に合はなかつたといふ事である。其日の投票は全く不意打であつて、此不意打は現時下院の父と稱　らるゝ最　長議員オコンネルのいふ所によれば之は敵と味方の或者とが互に調子合せて此芝居を目論んだのであらうといふ事だ。當時政府黨の院內幹事は頗る周密なる注意を拂ひ、容易に手拔かりをしなかつたが其日は表決の際に於て天から降つたか地から涌いたか、其時まで議場に見えなかつた反對派の議員等がゾロ〳〵やつて來たといふ事である。恐らくは此等の議員を人の目につかぬやうに裏門より引き入れ、いよ〳〵といふ際に之を議場に繰り出したのであらうといふ事だ。それは兎も角も斯くの如くにしてローズベリー內閣は終りを告げた。

人の噂によれば、ローズベリー卿には、三個の名譽心があつた。第一は才貌兼備なる大金持の貴女を娶り、第二はダービの大競馬にて捷利を占め、第三は一國の首相となると云ふ事だ。卿はロースチイルド家の跡取娘と婚して、第一を滿足した。第二第三も亦然りであつた。然も卿其人は、何事にも素人としては餘りに玄人臭く、玄人としては餘りに素人臭く、遂いに天下

の望を負ひつゝ之を未済にして了つた。

○再び自由黨の大失敗

爾後の總選擧は實に見事なる自由黨の敗北であつた。其結果は一八九二年に於ては兎も角も四十二の多數を得たが今回は百五十二の少數となつた。即ち保守黨は三百四十、之と同一の態度をとる自由統一派は七十一名、之に對する自由黨は百七十七名、愛蘭黨中の非パーネル黨が七十人でパーネル黨が十二人といふ事であつた。ハーコートも毛禮も孰れも落選の不幸を免れなかつた。毛禮卿は其翌年蘇格蘭のモントローズから補缺選擧に當選した。

○敗殘せる自由黨

貧すれば鈍するで、敗殘の餘、自由黨の內訌は愈よ激甚を加へ、爾來幾もなくローズベリー卿は自由黨首領の位置を去り、又ハーコートも書を毛禮卿と交換して相互に領袖株の位置を退き、憐れ自由黨は最早其統率者なきに至つた。是に於て最も圭角の少き好々的人物とせられたるカメル・バンナーマンが選ばれて名目上の首領となつた。之は其人が、自由黨中第一の有力者なるが爲めでなく、單に何人も爲ることを好まぬからであつた。而して此際に於て毛禮卿は政治上の失敗時間を文學上の成功時間となし、彼の素好である文筆の業に從事した。自由黨最退潮の極點に於て、老翁は逝いた。而して卿は其家族の依賴に應じて老翁傳の編輯に取掛つた。翻つて政府側を觀ればローズベリー內閣の後を承けて、一八九五年ソルスベリー侯が第三內閣を組織するや從來外から援助したる自由統一派の面々も亦入閣し、チエムバレーンはこゝに殖民大臣となつた。元來殖民大臣は比較的閑職であつたが、チエムバレーンが一度其大臣となるや殖民省は恰かも帝國主義の大本山となり、彼が在職中即ち一八九五年より一九〇〇年に至るまで實に目覺しき仕事を大英帝國史上に殘した。其主なる一は南阿戰爭だ。此戰爭に對しては毛禮卿の如きは最も戰爭反對者であつて、世間からは所謂プロボア（ボア人贔屓）と呼ばれた一人だ。彼とハーコートは、互いに提携して、輿論の大勢に反抗し、大いに戰爭反對の氣焰を吐いた。然るに自由黨中ローズベリーの一派は南阿戰爭に於ては政府側を贊成し彼等は別に自由帝國協會なる一團を設け自由黨首領カメル・バンナーマンに對して公然楯をつくの運動をなした。其人々はアスキスを初めグレー、ホルデン・フアウラーなどゝいふ何れも前大臣か否らざれば大臣級の人々であつた。斯くの如く敗殘の餘を受けたる自由黨は其精粹ともいふべき若

手の連中は寧ろ政府を贊成し、政府反對の旗を押し立てたものは僅かにカメル・バンナーマン、ハーコート及び毛體卿等にして、而かも毛體卿は半ば以上文學に隱れ活戰場に立つて少くとも正統なる自由黨の健在を認めしめたるものは僅かにチェムバレーンの本據バーミンガムに飛び込み其市公館に於てチェムバレーン氏反對の演說をなし、群衆より殆んど八ツ裂きにせられんとしたが、さとくも警官の衣服を纏ひ裏窓から逃げ出したるロイドジョーヂのあるのみであつた。

○バルフォア内閣の總辭職

併し滿つれば缺くる世の中にて統一黨（保守黨及び自由統一派）政府も餘りに政權を久しく握り些か行詰りの姿となりチェムバレーン氏の南阿戰爭も成功は成功であつたが其代價の不廉なるには何人も驚く所であつて彼は兎に角局面轉換として自由黨の將たビール以來英國の傳統政略であつた自由貿易制に變革を試み四稅政策所謂關稅改革論の新旗幟を以て乘り出した。チェムバレーンは此局面轉換にて政局を一新するつもりであつたが、意外にも禍は蕭牆の中より起り前に處翁に反對して自由黨を去りたるハーチントン候即ち當時のデオンシヤイア公爵は、自由統一派中にありて主として之に異存を唱へ政府の關係は勿論與黨中にも其議論自ら二派に分れ、而してソルスベリー侯に代つて首相となつたバルフォーア氏は（現在伯爵）兩者の間に依違として自由貿易が然るべしとも將た關稅改革が然るべしとも明言せず、双方から然耳で聞けば自分の意見に贊成するかの如く思はしむる曖昧摸稜、容易に詰き留め難き辯論をなし、いよ〳〵詰つていよ〳〵明白を缺き、遂に政府の政策は何れにあるか敵も味方も茫乎として五里霧中に迷ふの有樣となつた。然るに自由黨に於ては南阿戰爭に贊成したる自由帝國主義者も自由貿易といふ一點については其黨派の傳統政略を祖述し、殊にアスキスの如きはチェムバレーンの後から後に廻り一から十迄チェムバレーンの議論を說破し、チェムバレーンをしてアスキス君は辯護士が法廷にて辯論するが如き演說をするといはしめた程であつた。此の如く神氣沮喪し、互ひに分離反目したる自由黨の各派は、今や形勢の我に可なると見て、意氣頓に昂り、互に一致し、之に反して政府は首相に確乎たる成見なく、閣僚中には異論者あり、辭職者あり、黨內の關稅改革、非改革論は互に其熱度を加へ、其極遂にバルフォーアをして多數を擁しつゝも內閣總辭職をなすの止むなきに至らしめた。而して女皇を繼いだエドワード七世は直ちにカメル・バンナーマンに向つて內閣組織の命を傳へしめた。之れが一九〇五年十二月四日であつた。

○自由黨の大勝利

毛禮卿はバンナーマンとは極めて良好の間柄であり、一九〇五年一月十九日にはバンナーマン夫婦を其の蘇格蘭の住所に訪ひ前途の事を評議しそこで二人にて内閣の役割などを製造した。政界の大勢を見るに、敏感なる毛禮卿は、一八九五年以來十年間荒野に彷徨したる自由黨も遂ひに時節渡來せんとするを見て取つたのであらう。卿は其時勞働者の評判男たるジョンバルンスを是非入閣せしめよといふことを提議して置いたといふことだ。而して彼自身は、印度大臣たる豫約で諒解が、兩人の間　出來てゐた。

○バンナーマンの大度

話戻つて内閣組織の場合に際して、バンナーマンは實に大度ある長者の風を示した。彼は首領たる已に公　反旗を掲げ自由帝國協會を組織したるアスキス一派を悉く網羅せんことを勗めた。かゝる場合　於　從來の行掛りなどに膠泥するは愚の骨頂だ。アスキス等も皆入閣に異存はなかつた。然しそれについて彼等には條件があつた。それは外ではない。バンナーマンを上院に祭り上ぐることとだ。當時の新聞記事の文句其儘に云へば、上院に祭上ぐるといふことだ。彼等はバンナーマンが到底下院首領の器でないと思うた。而して下院首領としてはアスキスに比すべき者はないと思ふた。故にバンナーマンを上院の閑所に押込隱居せしめ、アスキスをして其衝に當らしめんとしたのだ。之には何人も殆んど異存はなかつた。英國皇帝エドワード七世さへも内閣組織の命を彼に下さるゝ時に首相と下院の首領とを一人にて兼ぬることはなか／＼容易なことではない。それよりも寧ろ上院に入つて下院首領には他に適當の者を据えたら如何であらうなどゝ話されバンナーマンも或は仰の如くするかも知れぬといふ言を申して罷り下つた。内閣組織の大問題は、何よりも首領彼自身の立場であつた。即ち此の儘下院に留る乎、將た上院に赴くかにあつた。此問題が十二月六日七日に亘つて自由黨の最高幹部に非常なる緊張味を加へた。有體にいへばバンナーマン彼自身も何れとも惑うて居た。彼はアスキスとも相談したがアスキスも直卒に其方が然るべしと答へた。グレー（現時の子爵）に至つては若しアスキスをして下院の首領たらしめざるに於ては即ちバンナーマンが上院に赴くにあらざる限りは自分は斷じて入閣せぬといひ切つた。自由黨は本來外交政策に於ては弱點を有つてゐる。當時外相として、内外の信望をつなぐに足るもの自由黨中グレーを除いて他に人はなかつた。それで

グレーを失ふといふ事は非常なる新内閣の缺陷であつた。されば バンナーマンが上院に行く行かぬの當否は兎も角も、又下院の首領として適不適は兎も角も、グレーを入閣せしむるためには是非彼の注文通りにせねばなるまいといふ事ですべての領袖株が口を揃へて其事をバンナーマンに奬說した。

○バンナーマンの決心

然るに茲にバンナーマンの意志を動かす最大有力者が出で來つた。其顛末は左の通りである。毛禮卿の手記に曰く、

「一夕予とツキードモウス卿とはバンナーマンの邸にて、一件の評議をしたが、未だ何んとも極りがつかず、いづれ晩餐を濟まして再び又相談するであらうといふことで別れた。我等が立ち去つてやがてバンナーマン夫人は蘇格蘭の本邸より到着した。我等が晩餐後再び彼と相ひ見るや、彼は別人の如く、意氣昂揚してゐた。彼は我等の前に立つて腕を振りつゝノー、ソレンダー(斷じて降參せぬ)と凱歌を奏した。此一語は鐵よりも堅かつた。即ち彼の唯一の相談相手たる彼の夫人が此際上院などに入ることがあるものか、是非下院にあつて自ら自由黨を率ゐねばならぬと助言したからバンナーマンは其言に動かされ萬障を排しても之を行ふといふ決心が出來たのであると。

之が十二月六日の夜のこと。而して其翌日彼がアスキスを見るや彼はさも愉快げに而かも決然たる態度を以て曰く、自分はどこまでも下院を去らぬ、アスキス君よ、君はグレー君に外務大臣たり、ホルデン君に陸軍大臣たれと傳へ玉へと。而して終にグレーも亦た其異存を抛ち入閣することとなり、茲に初めて十年振りに自由黨の内閣はカメル・バンナーマンの下に出來た。而して毛禮卿は世人の意外にも―當人の意中にも―印度大臣となつた。

印度大臣としての毛禮卿

世人は毛禮卿を文學者でなければ政論家と見て居る。愛蘭問題は彼の信念に基くから、彼が其の實行の任に當つたのは、何も不思議はないが、然も英國屬領の最も大いなる印度を彼が受持つなどゝいふ事は實に意想外であつた。併し彼はミルの門人だ。ミルは其父ゼームスミル以來印度とは多大の關係がある。毛禮卿も其親友にして且つ政敵であるチエムバレーンが殖民大臣として花を咲かせたからには自分にも敢てそれに對抗するとはいはぬがそれと對照すべき印度大臣を自ら好んでとつたのは毫も不思議はない。併し當時の印度省は實に難題の問屋であつ

た。印度大臣の椅子は、正直に云へば、薔薇花の褥でなく、荊棘の坐であつた。恰も印度總督カルゾン卿と當時印度軍司令官キチナー元帥との確執にてカルゾン卿は辭職し、ミント伯之に代り、カルゾン卿の倫敦に到着したのと毛禮卿が大臣となつたのは略同時であつた。問題はそれに止まらず印度に於ては日露戰爭後有色人種が何れも自覺心を發揮し印度に於ける回敎徒とヒンドウ敎徒互いに其の勢力恢復、若しくは獲得を競爭しつゝあつた。而して其急進者中には、動もすれば英國の羈絆を脫せんとするの傾向が生じつゝあつた。之を內にしては本國に於ける印度省の長官と印度總督との權限についての爭があり、而して前總督が、ベルカル州分割は非常に輿情に反し、之が取消の運動も亦た激烈であつた。此の如く、印度に於ては前に舉げたる文武官の衝突又は印度人對英國との葛藤、一として面倒でないものはなかつた。毛禮卿は實に其眞中に飛込んだのだ。而して毛禮卿の著書を愛讀したる敎育ある印度人は毛禮卿が必ず己等には滿足すべき自由を與ふるであらうと期待し、又平常毛禮卿の議論を知り彼を一種の偏理家と認め且つ小英國主義の權化としたる徒は彼が如何に其持論のために國家の威信を失墜するかと危み、彼に於ては一喜、此に於ては一憂といふ有樣であつた。

○印度大臣としての成績

加之印度總督ミント卿は彼が推薦したのではなく前內閣の推薦である。キツチナー將軍は彼と何等恩怨なきも彼は曾てキツチナー將軍がオムダーマンの勝利の際英國下院に於ける將軍に對する感謝の決議の際に彼は將軍が濫りに僞聖マヂの墓を發き其灰をナイル河に棄てたといふことを理由として反對演說をしたこともある。いはゞ彼は印度大臣として何等特別の便宜なく赤手にて乘り込んだ。

併し彼の印度大臣は、彼が政治家としての晩節を飾るに最も大いなる成功といふも過言ではあるまい。愛蘭大臣としての事は勞は即ち勞であるが功といふべき點が幾何存したのであらうか。されど彼が印度大臣としての成功は政府の成功といふより寧ろ彼の個人的成功ともいふべきであらう。クライブ、ヘステング以來英國の印度に於ける只之を英國の寶庫とし、いはゞ英國のために存する印度とするに過ぎなかつた。然るに毛禮卿が一度印度省に入るや彼は印度人民に向つて多大の同情を表し、英國の印度を支配するは利慾のためでなく人道のためであることを明かにし、印度省をして日常の政黨政治や若くは利權問題の上に超然たらしめ茲に初めて崇高淸鮮なる道義的の雰圍氣を現

じ來つた。彼は其意見を陳述するに極めて謹愼であつた。時としては餘りに謹愼に過ぎる程であつた。されば彼は印度に於ける改革派の期待を裏切つた事は少くはない、併しながら又英國に於ける保守派の心配を裏切つた事も少くはなかつた。

○印度大臣としての毛禮卿の勢力

彼は何れかといへば神經的の政治家だ。新聞の毀譽褒貶などは、頓着に看過し能はない程の神經的政治家だ。何れかといへば政治家としては餘りに皮が薄すぎる。併しながらかゝる弱點あるに拘らず彼は未だ曾て世論の爲めに其政策を左右せられなかつた。彼は何よりも印度大臣は印度總督と互に諒解せねばならぬといふ事を知つてゐた。故に彼が在職中概ね毎週一回必ずミント卿に通信をした。其通信は公文としては餘りに名文であり過ぎる。併し私信としは餘りに公務が多く掲げてある。何れにしても彼とミント伯は偶然の行掛りで同時に總督となり大臣となつたが然も互に相得た。之は彼が印度大臣としての成功の一の理由に數ふべきものであらう。併し彼はすべての點に於て自己の職權を尊重し、屢々印度總督に向つて總督は印度に於てこそ副王であるが其命令は悉く印度大臣により聽かねばならぬといふ事を訓示してゐる。彼とミント伯との往復書翰を讀めば伯は生徒で、卿は教師だ。彼は理論の上では極端なる自由主義の如く思はれてゐたが實際家としては寧ろ專制君主に近き程の專制者であつて、時としては第三者をして、餘りに印度大臣の職權が强大に過ぎ印度總督の職權は縮少に過ぎてはゐないかと思はしむる程であつた。それでも彼は世間の淺薄なる政治家の如く無暗に威張るといふのではない。只其筋道を正しく十分に踏み行ふのみであつた。但し時としては餘り其の勵み振りが、目に立つたと云ふ迄だ。彼は印度總督の評議會員に印度人を加へんとするの意見を有してゐた。而じ、之を彼れ自ら發議するは宜しからずとし、之を總督に云ひ含め總督をして之を望ましめた。總督も之に反對ではなかつたが、之を實行するに躊躇した。併し彼は遂に之を總督をして行はしむるに至つた。毛禮卿が此事を印度總督に申し向けたのは一九〇六年六月であつたが、其實行は一九〇九年の春となつた。其埒明かなかつた主なる理由の一は、エドワード七世が反對であつて、なか／＼容易に之を聽き容れなかつた。併し内閣一致の決議を以て之を申請したから終に漸く其認可を得た。卿は屢々印度大臣として皇帝エドワード七世と意見を異にした。エドワード七世はすべての事について練達の君主であり殊に外交の問題に懸けては當局者も及ばぬ程の眼と手を持つてゐられた。皇帝はミント伯が印度總督

の任期の盡くるに際してはキッチナー元帥を以て之に擬してゐた。元帥當人も亦之を望んでゐた。而して陸軍大臣ホルデン(現在の子爵)も亦成らうことなら斯くありたしと望んでゐた。併し卿は武官が印度總督となるは不可なりといふの意見を持して何人が之を慫慂するも頑として聞かなかつた。エドワード七世は直接彼に向つて懇々之を懇談した。併し卿は皇帝に向つて卿の意見を陳述し、とう／＼之を承知しなかつた。卿　皇帝がそれ程強くその意見を持つて居られたるに拘　ず左に意見を戰はしたる末予に別るる時には如何にも親切と物柔かであつたといふてゐる。英國皇帝も流石に立憲君主であるが毛禮卿も流石に立憲大臣といふべきであらう。富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、好言甘語も移す能はずとはこれ毛禮卿の謂ひ歟。彼は印度大臣として印度議會の權限を擴め、從來印度議會及び地方議會に於て三十九人の選擧議員があつたのを百三十五人に增加し從來議員の總數百三十九人のものを三百七十人に增加した。而じて彼は更に倫敦に於ける印度省の評議會に二人の印度人を選任した。一人はヒンドゥ教徒にて他の一人は回教徒であつた。彼は一方に於て英國は終古印度を捨てずと明言し、印度人をして所謂分離獨立の心を絕たしめ、他方に於ては印度のことを成るべく印度人をして之に當らしむるの方針をとり漸次に其自治を與へ其自由を擴大ならしめんとした。彼の政策については皇帝を初め一方には之を危く思ふものもあり、他方には餘りに名のみ大にして其實が少いと思ふものもあり、與ふるものは多きに過ぎたりといひ、受取るものは少なきに過ぎたりといひ、双方から批難苦情の的となつたに拘らず何れにしても印度に於ける英國の道義的の地歩を占めしめ、印度に向つて自由の曙光を與へたのは彼といはねばなるまい。若し印度に於ける革命の氣運を沮絕し、若しくは中止し、若しくは之を他日に遷延せしめたる者ありとせば、彼の印度に於ける政策の結果と云はねばなるまい。彼は其相棒であるミント卿が其職を去る時に際して、彼も亦印度大臣を罷めた。時は一九一〇年十一月だ。即ち一九〇五年十二月就職し殆んど滿五年となつた。彼も追々老年となりて繁劇なる政務に當る事を倦しと思うた故でもあり且つは新しき總督は新しき大臣と共に仕事をする方が便宜であるといふ考からして罷めたと自ら稱して居る。

○樞密院議長としての毛禮卿

併し彼を內閣から失ふ事は大損失であるから當時の首相アスキスは彼を樞密院議長として強いて之を留めてゐた。而じて彼に次いで印度大臣となつたるクリウ卿が病んだから彼は六ケ月

も又彼の古巣に還り彷々クリウ卿に代つて政府を上院に代表する事になつた。彼は內閣から容易に取去る事の出來ぬ重要なる一人であつた。

○バンナーマンの成功

話元に返るがカメル・バンナーマンはすべての人の期待以上であつたチャールス・ヂルクなどは彼を評して彼は屬僚の作つたる文案に盲印を捺し、佛蘭西小說などを讀んで何か面白き駄洒落の種でも作る外能事のたき男というて居るが、恐らくは彼ほど內閣首相として旨く其閣僚の統一を保つたものもなく、又下院の首領として味方から敬愛せられたものはあるまい。彼の內閣が一九〇六年の首總選擧を行ふや未曾有の多數であつた。卽ち自由黨は三百七十六人、勞働黨五十三人、愛蘭國民黨八十三人、自由統一派三十七人、保守黨百三十人といふ事にて格翁が一八八〇年に於て大勝利を博したる時さへも自由黨三百五十三人にしてそれに僅廿餘人を加へてゐる。而かも彼は斯くの如き過大なる多數を甘く之を善用した。而じて彼が不磨の成功といふべきは南阿に向つて自由憲法を制定せしめたる事にして彼の行動は所謂赤心を人の腹中に措くともいふべきものであらう。彼がボーア人を英人同樣に取扱ひ、一切に參政の權を與へ何等人種的區別を設けず英人とボア人とをして一致協和せしめたる寬大の所置は彼としては實に見上げたる大成功であつた。彼は其一生中の親友ともいふべき夫人に先立たれ、其身もやがて其後を趁ひ、アスキスが彼に代つて首相となつたのが一九〇八年だ。

平民の毛禮子爵となる

此機會に於て一言すべきはモルレー卿が自ら好んで貴族となつたことだ。毛禮卿は急進黨として出身した。彼はチエンバレーンやヂルクの如く共和主義者として自ら居らず、亦た固より共和主義者として世に立たなかつたが、されど彼はオネスト・ジョンの一平民として世間から認められてゐた。然るに彼は何故に自ら好んで貴族となつたか。序ながら少しくこゝに語るであらう。

それは左の通りである。「一月下院に於ける予が役室にアスキス來つて自分がいよ／＼首相となるであらうといふ事を話した。予は固よりしかあるべき事であると答へた。彼は自分に向ひ、願はくは留閣せられたし、而じて何か注文はないかというた。予曰く、年功からいへば予は君が現在の位置たる大藏大臣となつても差支あるまい。然し予は今印度省にあつて最も大切

の仕事に取りかゝつてゐる。今更中途にて之をやむるは遺憾である。そこで若し君が異存なければ予は印度省に止り而して上院に入りたいものと思ふ。アスキスは之を聞いて聊か驚きたる氣味にて、それはまた何たる事であるかというた。予が曰く、予の眼は未だ翳まぬ、予の精力も未だ衰へぬ、併しながら予も随分之まで骨の折れたる生涯を送つて來た。今少し比較的閑散の場所に移つて予の仕事を終りたきものと思ふというた。」即ち此理由によつて一九〇八年四月彼は子爵を授けられ上院に赴いた。此の如く彼は全く下院の煩累を避けて貴族院に赴く爲めに貴族となつたのである。而じて彼は五年の間に彼としては申分なき收獲をなし印度省を去つて樞密院議長として内閣に止つた。

毛禮卿の政界に於ける最後の働き

彼が樞密院議長としての仕事は只内閣に於ける一の元老として重きをなすに止らず、彼としては重大なる働きを上院に於てなさねばならぬこととなつた。自由黨と上院とは永き間の確執である。毛禮卿の如きは其少壯時代には若し上院を改善せされば廢去する、即ちメンド、オア、エンドといふ警語を吐いてゐた。アスキス内閣となつて以來、愛蘭問題に於ても上院と衝突し、財政問題に就ても上院と衝突し、今はいよいよ内閣も決心の臍を固め上院に向つて正面から戦を挑む事となつた。それは若しも一の法案が二年以内に於て三度の議會に於て下院を通過する場合には上院が反對に拘らず皇帝の裁可を得べしといふ案である。之は三十年前ブライトの唱へたゞ所にして今や漸く其れが實際問題となつた。此問題は憲法上實に重大なる問題にして反對黨は貴族院を根據とし、貴族院にてかゝる法案を通過せしむる場合には之は實に自殺案である。三回引續き二年以内に下院を通過したる案は上院の反對に拘らずそれが裁可を經て法律となるといふ場合には最早上院にて食止めるといふ望みはなくなる。されば反對黨が上院に立て籠りて必死の力もて此議案の通過を妨げんとするは當然である。併しながら政府は此所に於て最後の手段をとつた。若し然る場合に於ては新たに五百名貴族を作つて上院に入れ込み遮二無二之を通過せしむるといふ事である。當時エドワード七世は逝き、ジョーヂ五世が新たに位に即いたる際であつてアスキス内閣は新帝から、其の勅許を得たのだ。されどクリウ卿は(現在の佛國巴里駐劄英國大使)上院の政府の首領として此事を明言し、而して斯くの如き事をするは甚だ皇帝に於ても欲せざる所であるといふ事を申添へ

た。反對黨に却て其欲せざるといふ言葉を盾に取りなか〳〵新らしき五百名の議員などが鑄造せらるべきものでないと考へ、之は全く威し文句であると認め、容易に此案の通過を贊成すべくはなかつた。そこで毛禮卿は皇帝に請ふて文句をかへ、皇帝が全然之を嘉納したといふ文字に改めた。卿は自から此事を記し、曰く「而して議論百出、形勢甚だしく、事面倒となるや予は自分の袖から陛下の裁可を得たる所の文句を書きたる手紙を出しそれを朗讀した。反對の側に立つ方からそれの再讀を求めた。予は之に應じた。而じて予は彼等に告げた。何人にても予の意見に反對する人は卽ち新しき貴族五百名の鑄造を贊成する人であると。是に於て遂にカンタベリーの大監督は心機一轉し、此際固執するは徒らに上院の信用を害ひ其恥の上塗りをするに外ならぬと氣附きもはや此際は此案を贊成する外はあるまいと發議した。要は只だ五百の新議員を作るか、然らされば此案を贊成するかである。而じて其結果は遂いに政府黨の勝利が十七票を以て得られた。政府黨の票數は八十であつた。それに三十七名の統一派と十三人の大監督、監督等が贊成した。」と。此案の通過が恐らくは公人としての毛禮卿の主なる働きの終りであらう。之は一九一一年八月十一日であつた。それから一九一四年八月英獨開戰の際は、彼はジョンバーンスと共にアスキス內閣を去つた。之は如何なる理由であつたか彼自らは精しく語つてゐない。或は彼が閣員にてありながら英佛の攻守同盟ではないがそれに類する打合せがあることを知らなかつたのを遺憾としてといひ、或は彼が頽齡にて新たなる局面に當るに堪へざるが爲めといひ、或は日常平和主義を以て終始したる彼が戰爭內閣に列するを屑しとせざる爲めといひ、種々揣摩するものがあつたが、彼は只だ英國が世界大戰に參加したため辭職したといふの外自ら何とも語らなかつた。爾後彼が世に出で來つたのは初めに掲げた如く上院に於ける愛蘭自由國の創立に關する議案の發議者として特に政府黨首領カルゾン侯より望まれて出席した丈けである。

文學者及び論客としての毛禮卿

餘りに政治家としての彼を多く語り過ぎたから文學者及び論客としての彼は勢ひ極めて單簡に說かねばならぬ。彼は文學者としてヴイクトリア時代に記憶せらるゝ一人であつて、彼が文學者たるの位置は彼が一八八三年政界に足を踏み込む以前に已に到達すべき所に至つてゐた。彼の主なる著作もそれ迄に殆んど出來上つてゐたといふも過言でない。彼は英國よりも寧ろ佛

界に類ひ多き文學者であつて、詩人でもなく、小、説家でもなく、哲學者でもなく、神學者でもなく、歴史家でもなく、さりとて專門の文學的批評家でもなく、ちよつと文學者として分類し難き一人である。

○思想家としての彼

彼が思想家としての本領は一八七四年に出版したる「調和について」(オン、コンプロマイス)一冊で分明だ。此書は彼の著作中最も其特色を發揮したるものにて、而かも彼の氣力最も旺盛にして推理、辯難の鋒先最も鋭き時代に出で來りたるもので、彼が思想界に於ける破邪顯正の戰鬪振りは此一冊の上に躍如としてゐる。彼は英人が、一切の人事を第一義より割り出すを欲せず、只當座の習慣、故例、都合、便宜といふが如き事によつて、政治、宗教あらゆる問題を調和化し去る氣分に慊らず、當座の利害如何を無視して直ちに根本原理に遡つて事物の研究判斷をなすべき所以を闡陳したものである。著書の目的は其開卷の劈頭に「眞理を第一位に置くと、之を第二位に置くとの如何によつて、人間萬事一切の差別は之より生ず」と題した言葉が盡くしてゐる。彼は英人が眞理を第二位に置き只御座なりの月並流にて滿足するを慊らず思ひ、自ら進んで眞理を第一位に置き、之によつて政治、宗教あらゆる實際問題を解決せんと試みたものである。斯くの如き著述は彼が實際政界に踏み込まぬ前に出で來る特殊の産物であつて、彼が晩年マキアベリーに關する論文や、はたギクシアルヂニーに關する論文などを見れば其調子が自ら異つてゐる。右の「調和について」の論文中には隨分思ひ切つた事もある。併しながら其中には千古不磨の名言も少くない。例せば「進化は力でない、方程(プロセス)である。原因でない、法則(ロー)である」との一句の如き、世の中の人が只進化々々といつて自然に放擲しても進化は決して自働的に出で來るものではない。進化は進化を欲する人間の努力によつて出で來るものであるといふ意味を最も剴切に道破したものと思はるゝ。

○彼の文壇に於ける本領

併しながら彼は決して哲學者ではない。彼は哲學者たるべく餘りに實際の問題に觸れてゐる。併しながら彼は實際家として餘りに理想の追求が强過ぎる。彼は非常なる歴史的趣味を有つてゐるが、さりとて彼の歴史趣味は大勢の綜合達觀と其舞臺に働く人物の性格活動にあつて、所謂古文書を繰り返し隱れたる事實を發見し、若くは誤れる事實を正すといふが如き考證的の趣味はない。されば彼の最も得意とするは、政治と歴史との堺

目であつて、彼の擅場は政治的人物傳記である。此標本として大物としてはコブデン及び葛翁傳、小物としてはバーク、ワルポール、中物としてはクロムウエルの五種を數ふるであらう。又それよりも尙ほ短篇は十八世紀に於ける佛國のチユルゴー、若くはコンドルセーなどに關する論文の如きも其中に算へ得べきであらう。實をいへば佛國革命前の佛國に於ける思想と其思想を活現せしめたる人物との評論數種は毛禮卿が隔週評論編輯長として努力したる十五ケ年に於ける間の產物である。彼は又其間に於て其雜誌を中心にあらゆる人物と其の論文とを集めて來た。ハリソンは職業問題の有力なる辯護說を掲げ、ハックスレーは物理的より人生の根柢を論じ、其他レスレー・ステイヴンがチスレリーの小說評論やら、又前に掲げたる如くメレヂース小說の連號掲載やら、其他バジヨツト、フリーマン、ミル、スペンサー、スキンバーン、ウイリアム、モリス、ロセッチ等の如き人々皆其寄書家であつた。彼は一八八二年其主筆の壇を退くに際して、曰く『或へは曾つて予に向つて安く見積つても有力なる雜誌の記者は議員の七十五名位には匹敵するといふたが、予は果して然りや否やを知らぬけれども、予の最善の力を效した積りであると。實に其言の如く彼は少壯より中年までは全く一個の論文家として世に識認せられてゐた。而じて彼の雜誌は別に主義政策を以つて標榜したのではないが自らリベラリズムの急先鋒であり、自由思想、自由研究の論壇であつた。彼は編輯長であるのみならず其寄書家の誰に比しても劣る所はなき論客であつた。

○未成の二書

若し彼が實際政治に携らなかつたならば、彼の製作はより多かつたのであらう。彼が世間に豫約して遂にそれを果さなかつたのは十二政治家傳中のチヤタム傳だ。而じて彼が自ら企てて遂にそれが墮胎したのはカブール傳である。彼はカブール傳を彼が文壇に於ける最後の作たらしめんと欲し、其爲めに久しく用ひずして忘れたる伊太利語の研究を初め其材料の蒐集に取かかり或は少しく筆を着けたやうであつた。併し自由黨內閣の一九〇五年に於ける成立は彼を印度大臣たらしめ、遂に其の的を達するを得さらしめた。若し之が出來たならば如何に好著述であつたらう。當人も屢々此事に言及した程であるから筆を投じた後も尙若干の執着心は殘つてゐたのであらう。

○政界の文界に與へたる影響

併し彼にして政界に身を投じなかつたならば、葛翁傳は勿

論、クロムウエルもワルポールも、恐らくは出來ても今ま吾人が彼より受取つたが如きものではなかつたであらう。此等の政治傳記の妙所は何れも廣き歴史上の考察と深き哲理上の推究と、而して自ら國家の大局に立ち、大事を擔當したる實驗とによつて出で來りたるものにして而かも其最も特色とするは第三者である。例せばクロムウエル傳の如きは彼の前に幾何もある。カーライルのクロムウエル書簡及び演説集は固より、專門の著作としてはガーヂナー、又ファアース等の諸家あり、又小冊としてはフレデリック・ハリソンの作がある。併しながら此等の中に於て彼のクロンウエルが特色ある所以のものは全く彼が實務的經驗より得來りたるものといはねばなるまい。文士たる彼に取つて最も仕合せであつたのは彼は政界に入つても失意の時代多く、得意の時代少かつた事だ。最初の在閣は半歳以内であり、次には一八九二年から一八九五年の足掛四年を除けば、其餘は何れも反對黨であつた。されば政界にありといふも其十分の七は在野黨として立ち、而かも在野黨としても彼は專門政治家の如く只黨派的角逐を事とせずして寧ろ其餘裕を彼の風好に投じた。されば彼が政界に入つたのは、文士としての彼の損失といはんよりも寧ろ儲け物であつたかも知れぬ。彼をして永へに文學界にあらしめても恐らくは從來の彼より以上のものを制作することは出來なかつたのであらう。然るに彼は政界に投じて實際政治のからくり、若くは政局運動の内幕或は其活動者の情僞等を實見するの機會を得、彼をして書齋的文學者以外に更に一の要素を彼の著作の上に加へしむるを得せしめたのは全く其賜物といはねばなるまい。

○彼の傑作廣翁傳

彼の傑作としては何れも廣翁傳を推さぬものはない。併し之には滿更ら異論がないではない。ハーコート傳の著者ガーヂナー氏の如きは其問題が餘りに重大であり、其人間が餘りに接近してゐたが爲めに流石の毛禮卿も何となく堅くなり過ぎ、爲に折角の大作も彼をして其十分の技倆を發揮せしむるに至らなかつた。眞正の廣翁を知らんと欲せば更に別に傳ふる所のものなければなるまいといつて居るが、併し予の觀る所では恐らくは廣翁の公式傳記（オフィシアル・バイオグラフィー）として之ほどのものは毛禮卿を除けば何人も書き得まいと思ふ。元來廣翁は十九世紀に於ける一大政治家には相違ない。併しながら彼は眞面目一方の人にて、又彼の生活は甚だ長く且つ變化あれども眞面目に始まり眞面目に終つて居る、眞面目といふ事は月並といふ事だ。之を其好敵手たるヂスレリーの生涯の、生涯其物が一種の傳奇（ロマンス）なるに比して傳記の材料と

して塞とに厄介の物だ。如何に巧妙に之を書いても虜翁傳ほど重苦しく、面白くなく、讀んで一枚に至れば直ちに眠を催すといふが如きものはあるまい。虜翁には一切脱線的の言行なく、彼は只だ月並的の熱心なる基督信者であり、月並的の家庭の良家長であり、強ひて面白き材料を求れば、彼がハワーデン城の庭園にて伐木をするとか又は一種特別の襟をつけて彼が演説する時には襟飾が彼の頸を一週するとかいふ位のことにて、演説は誠に大家であつたが其筆記は殆んど文學的價値もなく、されば虜翁傳記を公式傳記として書くにはいはゞ東道海の鐵道案内記位のものより外は出來る筈はない。然るに彼が如き三冊の巨編を成して而も吾人をして之を快讀し、其面白き所に至れば再讀三讀は愚か三十讀するも何倦くを覺へさらしむるものは毛禮卿ならでは出來ぬ業と思ふ。卿が此傳を編むに際して、バルフォア氏（現時の伯爵）は、アスキス夫人に托して傳言して曰く、予が爲めに毛禮卿に語れ。大胆にやれ、無分別にやれと。併し卿は中々以て其の忠告通りには行はなかつた。それは公式傳記であれば致方がない。然もそれが大成功であつた。之についてはウォーズ夫人の評が最も緊肯に中つてゐる。今其意味を譯れば「予の觀る所によれば毛禮卿の文界に於ける最上の功績は虜翁傳だ。政治家の傳記は動もすれば月並化し易い。殊に虜翁の傳に於て最もだ。虜翁は道徳的の人であり、國教の熱心なる信徒であり、生眞面目勝ちの人にて、何等滑稽味を解せず、演説は巧みであるが文藝的技巧に乏しい。されば之れを平凡化せずして物になすといふことは容易の業ではない。然も流石に毛禮卿の文學的本能と技巧的本能とは此難關を打破つた。予の觀る所によれば此書の最も興味饒きは下半である。自由貿易、クリミア戰爭、財政々策などより漸次虜翁が凝り固まりの保守黨から自由黨の首領に發達し、遂に選擧權擴張の活劇場裡よりして一八六八年に其第一内閣を組織するに至るの記事は平易明快であるが、而かも尙著者は見物人として遠方から之を書いてゐる。併し一八八〇年以後に至れば一切の場面が變つて來る。何となれば著者彼自ら其中に飛び込んでゐるからだ。之から日一日と其記事が熱度を加へ、剴切を加へて來る。一八八六年の初めからして一人の傳記は殆んど二人の傳記となり、之よりして更に幾倍の精彩を加へて來た。而じて驚くべき幾多の場面の中には往々作者と主人公との交涉若くは哲學上に關する談話を挾み、さながら虜翁を活躍せしめて居る。」と。之は先づ尤の評言と思ふ。

〇傳の作者と傳の主人との關係

序たから茲に毛禮卿と虞翁との關係を語らねばならぬ。毛禮卿は最も氣六つかしき一人にて彼の下に使はれたる者は彼が動もすれば、其の感情を刺戟し、其の平靜を攪亂するを恐れぬものはなかつた。此は書齋的に生活した者が實務に當るに際しての弱點として先づ勘辨せねばなるまい。併し彼は決して冷酷屋でもなく、無情漢でもなかつた。而じて交友を作るについては眞に一種の天才であつた。彼は議論家としては一歩も他に讓らなかつたが、實際の交際に於ては反對の意見を有するもの若くは其政敵といふべきものとも圓滿であつた。何人も彼が保守黨なるリットン卿と親しくして、リットン卿が印度總督として去る時に其送別の宴に招いた極めて少數者の中に當時佛國革命ジヤコビン黨の化身と思はれたる急進黨の毛禮が其一人であつたことに驚かぬものはなかつた。リットン卿が印度在任中毛禮卿との書信の往復は常に絶えなかつたといふ。又チエムバレーンとも愛蘭問題について袂を分ち爾來チエムバレーンの帝國主義に最も反對したるは毛禮にて、毛禮の愛蘭自治に最も反對したるはチエムバレーンであつたが、而かも兩人の交情は始終を一貫した。虞翁はかつて毛禮卿に向つて「君等兩人は何一つとして一致するものはなく、否寧ろ兩人は衝突矛盾其物であるに拘はらず互に仲の善きは不思議である。」といふた。流石の虞翁にも此謎は解けなかつた。彼は又た米國の大金持カーネギーとも、親しかつた。彼は屢々カーネギーの蘇格蘭の別邸に遊び、又たカーネギーと共に米國に赴いた。カーネギーは彼が購ふたるアクトン卿の藏書を擧げて、毛禮卿に贈つたが、卿は自から之を私するに忍びず、之を劍橋大學に轉送した。劍橋大學はアクトン卿が史家教授として、其の終りを飾りたる緣故あるからであらう。又たカーネギーが死するや、其遺言狀には卿に毎年二千磅の年金を贈る旨書き殘してあつた。彼の交遊は多方であつた。併し眞に彼の心から敬愛したるものは前にはミルであり後には虞翁であつた。殊に虞翁に對する彼の敬愛の念は眞摯を極めてゐた。烱眼なる虞翁夫人は曾つて虞翁に語つて彼が御身に對する態度は彼が他の者に對するものと全く異つてゐるといふた。毛禮卿は實に虞翁に對して特別の愛情を捧げてゐた。彼等兩人の間にはすべての問題に於て反對の點が多く、一致の點が少かつた。虞翁は何よりも第一に信者であり、國教徒であつたが、毛禮卿は之に反した。其他哲學、文學人物論等彼等は互に其の意見を相鬪はしたが、何等共通の點は全く多くなかつたやうだ。而して何故に毛禮卿が斯くまで虞翁に傾倒し心醉するに至つたかは之も亦一の謎といはねばならぬ。併しながら其相愛したるは一方からばかりでない、虞翁からも同樣であつた。曾て虞翁が一

八九〇年十二月三十日附に卿に答へた書簡がある。今其大意を左に掲ぐるに「予は君が予の誕生日に際し最も親切なる書簡を感謝するを延引する能はぬ。自分は此世の中に於て自分の何事にてもあれ有益なる業をなし得たのは全く友人達の評議と慰藉とに負ふ所と信ずる。而も人生七十六歳を經過してかゝる交友の中に稀なる親友を得る事は決して容易の事ではない。獨り君に於て之を見るは實に予が喜びに堪えぬ所である。」之はお世辭でなく全く老翁の眞肝を吐いたものだ。彼等は同一内閣に立ち未だ幾週間も經ざるに已に互に相許してゐた。毛禮卿が曾て老翁傳の編纂に從事し、老翁の日常の心意氣其儘を寫し出したる手帖日錄を繙して見る際に斯くの如き一句が書いてあつた。「すべてに於て予が有する最善の支柱はJ・Mである。」之は固よりJ・M其人が十數年の後に之を見るべく豫期して書いたものではない。當時之を知つたるものは神と書いた人との二つであつた。老翁が毛禮卿に對する心事が此通りであれば、毛禮卿が老翁に對する心事の彼が如きであつたとも又疑ふに足らない。併し毛禮卿は決して老翁を盲信したるものでもなく又無鑑別的に崇拜したものでもない。烱眼なる毛禮卿は老翁の弱點も缺點もすべての缺陷は誰よりもよく知つてゐた。時としては老翁が餘りに出しやばつて反對黨と鬪ふから議場に列席したるアスキスと相顧み、アスキスは之はいひにくい事だが親爺さへゐなければ之れ程の面倒はなくて濟むものをと互に相嘲つたほどであつた。併しそれにも拘はらず毛禮卿は實に老翁に對して弟子が師に於ける如く、子が親に於ける如く、若くはそれ以上であつた。

○老翁の性格

老翁其人についてはいふべきこと甚だ多いが、之は本題でなければ暫く語る事を止めるが、彼の性格については、ローズベリー卿は彼を評して「彼を彼たらしむる三個の主なる性質は第一勇氣、第二勉强、第三信仰」といつてゐる。又ラツセルは「第一は宗教的である事、第二は權勢を愛する事、第三は何物をも怖れざる事」というてゐる。此權勢を愛するといふ意味は世俗的の意味でなく、高位高官を貪り、榮爵利達を計る意味でなく、彼自ら一種の天職を有つて國民を指導するものと心得、常に國家の機關を支配する其支配者とならんとする慾望である。とラツセルは解釋してゐる。何れにしても老翁は自ら信ずるとの甚だ強く、如何なる場合でも失望せず、落膽せず、其勇氣の無限であつた事には何人も之を否む者はあるまい。惟ふに毛禮卿をして最も老翁に傾倒せしめたのは其辯舌でもなく、其勉强でもなく、其財政上の手腕とか、若くは宗教上の信仰とかいふもの

よりも恐らくは此活動者としての妥協をもとりひしぐ勇猛心であらう。人は少年時代に於て互に親友となることは珍らしくない。然し七十餘の老翁と五十前後の成熟したる人との間が一朝にして互に相許す親友となり、死生相渝ることなきに至つては實に人間の遭遇も不思議といへば不思議である。

○廣翁傳の物質的成功

此廣翁傳は文學的產物としてのみならず、所謂書籍としての成功も亦著るしきものであつた。毛禮卿は此傳記編纂のために四年の歲月を費した。彼は實に其材料の多きに惱まされた。廣翁の死は一八九八年の五月で毛禮卿は其翌年から其事にかゝつた。其材料の總數は三十萬片(ピース)あつたといふから如何にそれが編輯者を當惑せしめたかゞ分る。併し長き間雜誌及び新聞記者としての彼の素養は此等の材料を取り裁くに恐らくは大いなる便宜を與へたであらう。彼は勿論最も良き補助者を得た。其前半はハーストにて其後半はステッドであつた。ステッドは彼のパーマー時代の次席記者であつたステッドの子だ。而じて彼は豫期の如く一九〇三年十月之を出版した。世間ではかゝる大部のものを一度に出すは不便であるから豫約出版として連接的に刊行したらよからうとの說があつたが、彼は兎も角も一度に之を出した。第一年には三萬部以上を發行した。二磅二志の高價なる書としては實に異常といはねばなるまい。翌年には又廉價なる出版が出來、一週間の中に三萬部を賣つた。而して十ケ年中の賣上高は十二萬部といふ事だ。之は此種の著述としては實に物質的に於て大成功といはねばならぬ。

○最後の著回想錄

卿の最後の著作は一九一七年世界戰爭が未だ闌なる最中に出でゝつたる回想錄(レコレクションス)である。(因に云ふ此書の校定者は現時勞働黨首領ラムセー・マクドナルド氏であつた)之は卿の自傳であるが併しルーソーの懺悔錄などゝは全く類が異つてゐる。予は之を數回愛讀した。其出版の當時も讀み、其後も讀み、今度又卿が死んだ後も讀んだ。卿の著作としては之も傑作の一であらう。此書は卿の同時代に於けるあらゆる人物を毛禮卿其人によりて描かれたる肖像を陳列したる一種の陳列館の趣がある。而して卿自身も亦其一人であるとは申す迄もない。併し予の感じは此書を透して毛禮卿を見れば何となく手袋をはめた儘に握手する心地がする。如何にも懇切ではあるが何となく直肌に達しかねたる憾がある。又書齋に通され主人がストーブにあたりつゝ茶を啜つて安樂椅子に凭り問はず語りをするを聞く心地がする。

なかなか面白く又眞面目なる中に何やら時としては一種の皮肉もあるやうに思はれ、自ら膝の進むを覺えぬやうであるが、併し赤裸々の毛櫻卿其人を此回想錄によつて知る事は餘程注意深き讀者でなければ分るまいと思ふ。若し此書の中より眞に毛櫻卿の幾分を知らんとすれば彼が自ら語らんと欲したる所でなくして不用意の間に其言語の洩れたる所か、然らざれば彼が努めて語るを避けたる所であらう。即ちいはんと欲する所に於て彼を見ずして其語らざる所若くは語るを屑とせざる所欲せざる所に於て彼を見るとでもいふべきであらう。彼は漫りに人を批難せず又漫りに人を褒めぬ。例へばアスキスに就ては屢々書いてあるけれども晩年の關係であるロイド・ヂョーヂについては一卷の中に其名さへも掲げてない。固よりジョーヂといふ字はあるが、それはジョーヂ三世のことでなければジョーヂ五世のことであつてロイド・ジョーヂについては遂に何等の語る所がない。之を見れば彼がロイド・ジョーヂについて如何に考へてゐたといふ事は想像するに餘りがある。

○二個の苦情

彼に又或夫人が彼に向つて斯くの如きことをいうたと記してゐる。「御身は如何に人々が御身に對して苦情を持ち初めたかといふ事を知るか。彼等は三つの事をいうてゐる。御身は餘りに氣高くある。御身は心の中に於ては眞實の平民主義者ではない。お身の野心が半分も足らない。」彼は斯く記して只一言を添へてゐる『誰か此言の眞僞を知らん。』と併し如上は毛櫻卿が自ら評したる言でなければ少くともそれに相當する言だ。彼は自ら鷄群中の一鶴を以て任じ、混濁する政界に立ち交るを屑としてゐない。彼は自ら政界に乘出したが而かも政界は彼にとつては決して愉快の地ではなかつた。彼は道理上に於ては立派なる平民主義者であつた。併しながら彼はすべてに於てチエンバレトンの如き若くは濾翁の如き民衆的の政治家ではなかつた。彼の心の中には貴族的趣味が充滿してゐた。貴族的趣味とは殿様風といふのではない。即ち複雜なる多數よりも精選したる少數でこなすよりも品のよきを貴ぶといふ事である。彼が文品の如きも餘りに高くして實は一般向の趣味には投じなかつた。人品も亦同樣というてもよかろう。彼は當初より首相となるを期してゐなかつた。如何なる場合にても第二流を以て安んじてゐた。即ち野心の少かつたといふ事は彼の政治的生涯を通じて間違なき事であつた。

○人品と文品

彼の文章は恰かも彼の人品と同一であつた。彼は苟くもせずといふ事が本色であり、偽さゞる所ありといふが誇りであつた様だ。即ち彼の文章は苟もしなかつた。故に其判斷をするにも『若しも』とか『恐らくは』とか『或は』とかいふ限定的の言葉を好んで用ゐた。而して若し一言にして足らば決して二言を用ふる勿れといふ原則を確守した。彼の文章は調子が整ひ、釣合がとれ、あらゆる磨きをかけたものであつて、無疵の玉ともいふべきものであつたが、併し天眞爛漫山野を川流るゝの光景は彼に於て見る能はなかつた。彼のスタイルは自然のスタイルでもなく、簡素のスタイルでもなく、實に骨が折れ手がかゝつたものであつた。併し何人も之を作意的のものと思はないのは、其文字の中に犯すべからざる確心と、森嚴なる精神と、熱情とが籠つてゐたからだ。彼の文章は譬へていへば萬斛の泉の如く到る所に涌くのでもなく又水天一髮の大洋に萬丈の波瀾が湧くでもなく、いはゞアルプスの山徑を辿るが如く、上には雪の嶺を眺め下には石に激して流るゝ谷川を見、その周圍が何となく神々しく、而して清澄冷嚴なる山間の空氣が全身を緊張せしむるの氣分となるの趣があつた。彼の文章には未だ曾て緊張味が缺けた事はない。併し彼の論文は苟くもせざるを欲するの餘り、單刀直入直ちに人の肺腑を刺すといふが如き概がなく、些か廻りくどき感じがないでもない。又晩年の著作は何時も問題のみを提出してつひに何等の解決をも與へずして終る如きの嫌がないでもなかつた。即ち包の中から多くの鳥を取り出し之を放つて他に見せしむるのみにて其鳥の行きつく先は誰も知らぬといふ如き類があつた。概して言へば彼はマコレー、カーライルの如き大家といふよりも、寧ろ名家といふが適當であらう。彼の最も長所は議論よりも叙事であり、叙事よりも叙事と議論と交錯したる所であつた。從つて政治家の評傳などは一度彼の手を經れば實に小題大做で一卷の書から多くの知慧を吸收し得可きものが出で來つた。彼は本來僧侶たるべく牛津大學に行つたのである。併し彼の信仰はやがて冷かとなり彼は一生を通じて合理(ラショナ)派(リスト)若くは不可思議派(アグノスチック)の一人として立つた。彼が壯年時代の著作には通常ゴツドといふ字はキヤピタルにて書くべきに彼のみは特に普通の字で書いた。併し彼は本來宗教心の缺乏したる男ではなかつた。彼は自らいうた。議員中にてウエストミンスター寺院の中に行き其聖樂を聽くを好むものは予を除く外幾許もあるまいと。彼は自ら議會出席中の時間を節してよく之を聞きに出掛けた。彼はウオルテーアの如く基督教の文化に貢獻したることを無視するものではなかつた。彼は英文聖書の文學として最も崇貴高尚であるものであることを信じてゐた。彼が基督教徒

でなかつた事は選擧界に於ける彼をして往々當惑せしめた。敵は彼が不信者であるといふ事を口實として動もすれば彼を攻撃せんとした。曾て彼がニウカツスルに於ける選擧競爭の際に、選擧人からして彼の宗教に關する意見を聞かんことを求めた。彼はそれに關する種々の質問に答ふるを否んだが而かも只一言かくいうた。宗教といふ事はいろ／＼ある。併し詮じ詰むれば人を憫み人を慈しみ正しきに忍從する一の實質の聲である。此點には貴君等の候補者は彼の知識と信仰の最善を以て聞かんことを欲してゐると。之に單に彼が選擧界に於ける辯論の勝利ではない。彼の心事は正にかくの如きものであつた。彼は決して所謂清教徒でもなく、又偏人でもなく、奇物でもなかつた。彼は立派なる學者であると共に立派なる俗人であつた。交際も嫌ひでなかつた。儀式ばつたる席上に出づることて　强いて拒まなかつた。音樂も好きであつた。演劇にも興味を有つてゐた。美人との對話も嫌ひでなかつた。良き料理、良き酒、良き宴會は彼の好む所といふ能はずんば、彼の認むる所であつた。併し彼の最も愛したるは書籍であつた。彼の天國は彼のライブラリーであつた。彼は嚴粛なる論客であつたが、彼の心は頗る物の哀れを知つてゐた。彼は常に偉大なる思想は赤心から來るといふ言葉と、崇高なる人の心は最も多く物の哀れを知るものであるといふ言葉を常に語つてゐた。されば彼が曾て田舍にある飾停車場まで彼を迎ひに來る馬車に乘つて其家に歸る毎に、坂道に至れば必ず自ら馬車を降りて步行した。彼の愛は馬にも及んだ。而して彼は又犬を愛した。彼が回想録の最後の一章は彼が愛する犬を連れて其附近の丘に登り、其上に立つて徘徊顧望し彼が一生の追懐に耽り大地の悠々たるを見、人生の限りあるを思ひ、瞑想稍久しく、夕陽の漸く沒するを見て犬を伴ひ其家に歸るの一章を以て結び實に人をして無限の詩を讀むの感じをなさしめてゐる。彼は政治家としても第二流を出でず文學者としても恐らくは第一流の位置に立ち能はざるも、少くとも世人は二兎を追ふものは一兎を得ずといふに拘らず、兩者に於て彼が自ら期待したる到着點に達した。而じて彼によつて英國の政治家が如何に政治は日常の權勢利達のとりやりでなく、道義的崇高の淸職であるかといふ事を知らしめ、彼の言論により又其行動により而じて更により多く彼其人の人格によつて知らせたかは後の歷史家でなければ十分に之を品隲することは能ふまい。併しながら今日の英國を眺むれば最早彼が如きものは再び出で來ることは絕無といはざるも僅有であらう。彼の死するや彼は王者の如く死せず學者の如くして逝いた。其葬らるゝや堂々たる大伽藍でなく、火葬場の式場にて彼の親族と彼の親友が集り、其式を行ひ、彼の後進生にして又其友人の一人アスキスが彼の柩の前に立つて、ソロモン王の傳道の書中の數節を朗讀し、斯くの如くして彼の最後は穩やかに靜かに恰かも彼の趣味通りに取り行はれた。彼を稱して英雄とか豪傑とかいふは彼自らの欲する所でない。併し彼は實に超卓にして秀拔なる一個の文人政治家であり又政治家的文人であつた。

大正十二年十二月初八於大森山王草堂蘇峰學人一校了

普選の實績を擧ぐべく新有權者への言葉

一票が代表する自己

杉森孝次郎

「戰爭が單に邪惡だと思はれてゐるあひだ、戰爭はそれの魅力を決して失なはないだらう。戰爭は俗惡だ、低劣趣味だとさげすまれるに及んで、戰爭は人氣を失なふだらう」とは、言語藝術家ワイルドの、「藝術家としての批評家」のなかの連續した二センテンセスだ。かれのやうに狹義の藝術意識が異常に、破格に發達してゐた人にとつては、俗惡はなによりもたまらないことであるにちがひない。しかし、戰爭は一私事でなく一公事だから、社會の大多數人なり優越少數人なりが、俗惡趣味の持ちぬしでなく、本質的にずつとリファインドな趣味の持ちぬしとなる見込みが容易にたたない限り、ワイルドの意見は、殆んどすこしも政治家的もしくは經世家的價値を有するものだとはいへない。不幸にして、その見込みは、いまなほ容易にたたない。

しかしたがら、いかなる制度にしても、その社會の、すなはちその制度が直接の目的とする社會のなるべくはすべての人人の最深自己意識に不可抗的威力ある滿足を與へるものでなくては、その制度は一度も成り立たないか、たとひ一度は成り立つても久しからずしてぐらつきはじめ、倒壞するにきまつてゐる。

普選は一大制度だ。いな參政權そのものが一大制度だ。かたちに於いては、各人にとつて、かれの參政權は、單なる一票だけのものだが、意味に於いては、その一票に、かれの政治人の

殆んど全部が代表される。どうしたら、この一票を、われら有權者のおの〳〵は、最も有意義に使ふことができるか、これはわが國に於いて刻下の一大問題だと明知される。

道德は無論結構だが、單なる道德、すなはちいはゆる仁義や公德やの意識にうつたへたところで、それがどれほどの印象なり、感銘なり、反省なり、反應なりを刻下のわが社會の大多數人のおの〳〵に生じうるかは、頗る悲觀的に豫測される。たとへばヤソの山上の垂訓が有名なる周知の一事となつてからいく千億とも數知れぬほどの男女は二千年近くの世代をかさね、かさねして生きて今日に及んだ。しかるに、一九一四年の夏から一九一八年の秋へかけての大戰爭と、今日なほ佛獨間を焦點としてさかんに燃えつつあるそれの餘焰的貪瞋嫉恚の煩惱とは單なる道德的說理と敎論とが、いかにそれ自身はうつくしからうと、たふとからうと、いはゆる靴を隔てて痒ゆきをかく同樣の薄效非果のものであることを明瞭にわれらにかたる。

新たなる國政參與者が一千萬內外もの多數に於いて近く生まれいでんとするわが國の今日に於いて、國民は、おの〳〵の一票を最も有意義のものにするために、單なる道德論的說法以外にも工夫するところがなくてはならん

わたくしは、由來、古來の常識道德外にも學說的敎理的道德が、人間を最初から愛とか正とかのたまごとばかりに見なしてゐるかの證跡があまりにいちじるしいのにすくなからず不平をいだいてゐる一人だ。あまりに愛とか正とかを他にむかつて振りまわされると、當人御自身の內生活と言行とはどうかと反問して見たい氣にも自然なるほどだ。

わたくしは、人性の本質には、愛他意識も、正邪意識も、實に不可測深の根を張つてゐるものだとは考へるが、そしてそれらの意識の無限の發達を人生のためにこひねがうてやまない一人ではあるが、同時に、わたくしは、人間の本性には、現象的特徵だけについていふならば、それらとは別系の本能なり、意識なりもまた絕滅すべき程度に深く生みつけられ、多少は育てあげられてもゐることを無視することも、忘れることもできない。

たとへば榮辱意識のごときはその一とつだ。ほこりとはぢの意識といひかへてもいい。この榮辱意識は、勿論人類に通有の一意識ではあるが、日本人に於いては、殊にこの意識が顯著だ。殆んど支配的ともいつていい程度にそれは甚だしば〳〵高調する。劍橋大學の近世史敎授のローズ氏が、「歐洲諸國民の最近代發達史」のなかで、「プラウド」であると同時にプラクチカルな日本民族の本能といふ言をなし、同じ英國の心理學者ヰリアム・

マクヅーガル氏が「社會心理學」のなかで、アジア民族内に於ける日本人の爭鬪性を特に注意したごときも、決してまとはづれの觀察ではない。雖は、無論、日本人の榮辱意識は、いままでのところでは、いはば知覺的認識に裏づけられた淺徹、近逹のものであつて、いまだ概念的または最高理性的認識に裏づけられた、したがつて十分に深徹、遠逹のものになつてゐないところにある。

早い話が、先度の選擧に際してすら、たとへば神田區民のごときは、比較的に利害意識によつては投票しなかつた。たかも知れ切つたぼろ錢などに買はれてたまるものかといふ意氣地が神田ツ子かたぎの多少とも殘生してゐるそこには發動したのだ。候補者の米戸叩頭の徹底さによつてあそこの有權者の多くは投票を決定したとつたへられる。米戸叩頭によつて一票の書き入れを決定するがごときは、まことに不正、非公のはなはだしいものであるが、それでも、回數の多寡によつてさうする原始的「醇良民」にくらべては、正と公とに一歩を進めてゐるものだと明確に判斷される。

わたくしは、普選實施後の有權者は、勿論その周圍の無權者と共に、先づすくなくともかれら自身の榮辱意識を、先祖傳來の心理的國寶たる清淨潔白、體面、武士のなさけ、町奴の意氣地程度には、現代の責任と事情相當の形式と内容とにおいて反省すること、すなはち普選實施後のおの〱の一票權の行使者は、買收を明白に表示する札や銀貨の到來をば、一とつの絕大なる私的、公的、人格的、社會的侮辱だと正解し、したがつて相當の復讐行爲または制裁行爲にかならずいづるやうになることをこの際に於いて希望することは、決して潛越でも過分でもないと考へる。日本人が榮辱意識をまでも錆ばしたり、とぎすまさなかつたりしたならば、どこに存榮の見込みが成り立つか。淺徹ながらも、近逹ながらも、アジアの隣接諸民族よりは榮辱意識がすこしばかり秀でてゐたればこそ、幕末のペリ來にも、明治の支那來及びロシヤ來にも、ついに屈せずして自命を保存し、多少たりとも文化の花をも世界の舞臺に咲かせかけたのではないか。維新の前夜を特徵づける尊王攘夷主義者も、維新の捷日を代表する福澤諭吉氏も、要するに、「丁丑公論」や「痩せ我慢の説」や、いはゆる「一片の獨立は生命より重し」や、また氏自身の内生活と實行がなによりも有力に代表する、淺徹と深徹、近逹と遠逹の差こそあれ、榮辱意識に最も深く且つ直接に傾聽して行動したものにほかならなかつたではないか。明性の世界に於ける政治人の新たなる解放と共に、せめて國民の一半たる人人は、各自の根柢に潛生してゐるにちがひない榮辱

意識を、國家的社會的行動の自目下の現在に同時に解放し來たれ。

西洋の文明國では、茶代すなはちチップは、これを旅舍や料理店の婢僕にのみ與ふべきものであつて――これも近時は榮辱以外の理由によつて廢制に進んで來たが――舍主、店主、及び多少それらに近い位置にある直接經營者には決して寄與してはいけない慣習になつてゐる。よく〳〵の下賤なまたは「醇朴」な店でない限り、婢僕よりも上位のものに心づけでもしようものなら、明白な侮辱として先方の憤慨を買ふだけの莫迦な目を見るにきまつてゐるのだ。日本では、古來殊に武士道發達以來、金錢を不當にいやしむ惡弊があるかと思へば、他面に於いては、いはゆる一等旅舍でも大抵は茶代制を、婢僕よりも上位のものが目的とされての茶代制をいまなほ廢棄し切らないし、商人根性、商人根性とばかりにいひけなす英國の選擧にくらべて、とても桁ちがひで話にならない下劣程度に投票は買收されるし、賄賂、利權、これらは決して資本主義經濟組織や私有財産制の副作用だとは日本人自身の口からはとてもいひ張れないいちじるしい程度に、同じ組織や制の遙かに增進擴大してゐる英國などに比してラムパントであるし、平大臣になつたり、總理大臣になつたり、臺灣や滿鐵あたりの長官になつたりすれば、鉅富の人となるやうな奇蹟は、英國などには殆んど絕無であり、日本には殆んど必有であるといふやうなこともあるし、壯士、國士、志士、有志と呼ぶ方も呼ぶ方だが、その士人や志人を概觀すれば、封建時代の武士が祿をはむがゆえに當然いさぎよく主の馬前に討死を榮爲したのにくらべてさへ、ずつと、ずつと酷烈に、卑劣に大事の、大事の榮辱意識をとてもつまらない、くだらない、おはづかしい利害意識の犧牲にするものが大部分のやうだし、下司根性といふ意味に於いての商人根性は、かへつて日本人のことではないかとさへ反省され、汗顏される事實と現象だらけの知識と想像とを現在の日本のなに人かよくえ持たないことができよう。

一體、われら日本人は至極淡泊にできてゐる。そこに或るうつくしさも、重寶さもないではないが、自分の欲望なり目的なりを確實に、したがつて正當に滿たしたり達したりするために必要な手段的努力を過度に、不可能的に、無理にもはぶきたがるほどにもわれらの性格は淺底にして「罪がない」。ここに於いてか、有りあまりや、貰ひ借りの錢で議員に當選したくたつたり、骨折らずに入る錢なら五圓でも十圓でもありがたいといふ被買收心理も容易に發動する。利害意識は人生に於ける、また人性に於ける一大實在だ。なに人かこれを否定することができ

よう。またこれを否定するがよいといふ理說を立てることができよう。しかし、それほどにも大事な利害意識だから、人としては、これをできるだけ深徹式、遠達式に保成すべきではないか。現代に於いてなら、利をば社會が公認する方法によつて堂々と求め、計り、作るべきでないか。農人は個人的に農業に精だすばかりでなしに、團體的に農業に對する國家社會の認識、評價を十分化する努力を拂ふことによつて、根柢ある增利、造利を來たすべきではないか。商人でも、工場勞働者でも、だれもかもだ。

わたくしは、筆のついでに想ひだされたまゝ一言するが、私立綜合大學なども、財源をば、堂々と產業部を創設して、國際貿易なり、國內產業なりを、現制下に於いて比較的に淸く、模範的にやることによつて造つたら、今後の問題としては、よからうと考へる。

金錢または財物に對する認識及び評價に於いていまだ現代のいはゆる一等文明國の程度にすら達してゐない日本の社會に於いては、榮辱意識と利害意識との間なる進化的當然的分業が、常別が、機能わかれが、まだ甚だしく原始的ケーオスの狀態に彷徨してゐると考へる。そして、國民の參政務及び參政權の遂行と主張との上にも、この根本的一不完全がいちじるしく例示されてゐると考へる。

無論、正義意識、國家的社會的責任意識を背景とし、內容とし、條件とせざる單なる一身一家の榮辱心のごときは、一票の記入を決定する動力であつてはならん。ただ、單なる一身一家の眼前卑近の小利害心に比しては、まだしも單なる榮辱心の方が正義意識や國家的社會的責任意識に近緣であり、親關係であることをわれらはこの際注意する價値があると考へるのだ。

知識が力だ。知識こそが、他のなにものにもまして、一票の正用及び善用問題のごとき、殊にわが國の當面のそれのごときの解決を目的とする場合に於いては、力だ。それが實に力のなかの力だ。有權者のおの〳〵の知識を增進し、開發することが、かくして刻下の一大急要務だ。しからばその方法はあるか、ないか、あるとすればそれはなにか。

わたくしは、讀書及び聽講の機會を組織的に設備することがその方法だと考へる。讀むことが第一、それから聽くことがそれの補充位に立つべき方法だ。

そも〳〵、印刷術と出版業が著大なる發達の途について年なほ淺いといへば淺いが、すでに久しいといへば隨分と久しくもある。しかるに、近代人は、いまなほ印刷術と出版業を十分に意義づけることを知らない。西洋に於いても、中世期間は教會の一部的內容または機能としての位置をのみ主としては與へられ

た學問と藝術が、近世に及んで、近世と共に、大學及びその他の諸學校として、及び藝術に關する諸般の教育的、發表的、鑑賞的獨立設備として分裂進化して來た。しかるに、印刷と交通の學及び術の急速なる發達は、學術研術の方法の上に早くも第二のメタモールフォーシスを必要づけて來た。これを日本についていふならば、たとひ政府と議會は東京にのみ存し、產業と金融の中心は大阪と東京に集中的代表のかたちに於いて發見されようとも、知識開發の機會は國內の各地方に實は開設されてゐるのだ。讀むことと聽くことの上に地方在住者が最善の選擇と努力を拂ふ意志をさへ持てば、各地方人の知識增進の難關はすぐに突破される。

わたくしは、現在の各小學校を空間的及び建造物的中心として、公用無費圖書館を大々的に新設し、增設し、擴充すべきだと考へる。書物はかならずしも數量的に多く備へつくるを要しない。それよりも必要な條件はいかなる書物をいかに多數に、多部に備へつけべきかといふ問ひを聰明に實行をもつて答へることだ。比較的に社會が進んでゐるイギリスあたりでさへも、各地方の公用無費圖書館を、勿論それのいくらかをのぞいて見て先づ注意される一事は、備へつけの書物の數の貧少であるよりも、それの選擇の不聰明至極であることだ。日本でも、わづかばかりのぞいて見る機會をわたくしは持つたにすぎないが、同樣の歎は深かつた。詩を作るよりも田を作れとかいふ俗諺があるが、多くのいはゆる地方圖書館の備へつけ書物は、それらを讀むよりはまだ散步でもした方がどれほどか有益だらうと思はれる性質のものが多い。この點は、實に、國家社會の最大問題の一だとわたくしは考へる。

各小學校を中心とすれば、土曜の午後、日曜の全日、その他の週日の夜分あたりを利用して、その附近の青、壯、老年男女が圖書館通ひするに不便はない。そして、本でも、雜誌でも、新聞でも、いいものづくめにその圖書館の內容を充實させ、且つ眞に讀みがひある、讀む價値ある本や雜誌をば、讀むべき人の數に相應して百部でも、千部でも備へつける位の方針を取らなくてはいかん。藝妓風情を相手にばか酒を飲みこぼしつつふざけちらすだけの地方ブルの餘財をまわしても、その邊の費用はいくらかでるだらうし、五萬圓內外から十萬圓內外の買票費のでどころがあるほどの財嚢を、公的動機によつて公壓してもいくらかの費用はでるだらう。娯樂及び興怡は必要だが、藝妓などを座席にはんべらしての歡談、取り引きや亂痴氣騷ぎやは、とても知識ある人の我慢のできべきことではない。それはひとへに醜劣と苦痛だ。買票費でも、酒席費でも、散財する當人からい

つたら、有目的の必要費だらう。しかし、これがまだ日本の社會が利害問題をば正々堂々と率直にかせいだり、職業に對する國家社會の認識、評價を高めるなりすることによつて解決するといふ深徹、捷速の方法には信頼せずに、姑息的に、詐僞式に、最もイージーゴーイングに解決せんとのみ欲する原始狀態にあることの一とつの有力なる證據だ。また相手も相手だ。料理屋酒ぐらゐを馳走されたり、ふるまはれたりして、大事の時間をつぶされ、そして、さもなくば乘らなかつたゞらう話に乘つたり、應じなかつたゞらう求めに應ずるとは、根性 さもしすぎる。いな、日本人の至寶ともいはれる潔癖心がねむつてゐすぎる。ビズネスはビズネスですべて簡捷に、酒入らずですましてこそ正直でもあれば、眞の深徹、速捷も期せられるといふものだ。相手を酒や女で誤魔化さうなどとは、いい加減相手をばかにした仕打ちであることに、現代の日本人の多くはまだ氣づかない。「祿」をはんでは忠節をはげみ、より多く忠節をはげまんがためにより多く「祿」をはまんと腐心し、健闘した武士の子孫だけあつて、われら日本人は、大正の今日になつても、酒食をも、あるひはこれに加へて色をも、おごらずに用談だけ持ちかけるとは人をばかにするにもほどがあるとばかりに、飛んでもないはきちがへをとかくする。

わたくしは、禁酒や禁煙は主義としたり法令としたりする必要のあるものだとは曾て一度も考へたこともなく、現にも考へないが、したがつてアメリカの禁酒令をも、あらゆる意味に於いてわかい國民だなと且つ感心し且つ微笑して傍觀する一人だが、現在の日本人のやうな輕い、淺い、浮いた心がけでは、アメリカのやうな富强國には當分なれさうもないし、まちがつてかりになつたとしても、財力なら、權勢なら、國際的社會の飛ぶ鳥をも落とすその國未曾有の勢ひの盛り阪に、いくらでも買へる酒をすこしも飲まぬ法律を制定するなどいふ英雄主義的小賢潔癖に、決してできないことだと考へる。そして、そこに、われら日本人は、善にも惡にも、底の淺い國民であるのかたと多少悲しい、おごそかな反省を餘儀なくされることを否定しえない。

小學校の一部教授や、もしまた夜間の教授などがあるならなほさらそれは、早く晝間しかもなるべく午前の教授に改移しなくては、小學教育の目的上、いかんから、建物や室の問題は、公用圖書館の擴設の目的を達する方法として、別に大いに考慮しなくて解決される。繰りかへしていふが、備へつけ圖書選擇をば、少數者の私的または機械的專斷にまかせてはいかん。その地方人の個人的及び團體的要求を第一材料とし、その地方人中の識者の勸告と要求をこれに加へ、また廣く、遠く全國內、

全社會内の圖書館や識者からも見學したり、聽學したり、讀學したりすべきだと考へる。

軍備に於ける不必要部分のための出費や、都市の單なる表面的體裁のための支出よりも、全國各地方の圖書館の内容的充實完備を目的としての出費の方が、日本國をもつと積極的に獨立させ、興榮させる原因としての確實性と必然性をたしかに大きく持つ。愚な本を愚に讀むから讀書も愚な仕事になるが、かしこい本をかしこく讀めば、これよりも人をかしこくする方法は現代にはない。ここでかしこくとは、小ざかしく、利巧にといふ意味では無論ない。いい意味に於いての賢明にだ。正直にさとくだ。

現代の志學者は、一般に、讀むよりも聽きたがる。これは品性上の修養に熱心な人が、古今東西の偉人の言行錄や金言や格言などを百も千も集め書きして、あるひはそれをうつしなほして分類したりなどして精根をつからせ、一とつの金言をだけでもすぐから實行することとの最賢策であることに氣づかない悲劇的事實とくらべて、一層と大きな悲劇的事件だ。知覺的認識に裏づけられないでは、條件づけられないでは理解も、感動も切實にならないといふことは、個性と文化の幼弱をかならず意味するといふ一原則をわれらはこの問題の場合にも反省させられる。聽くよりは讀む方が概念的認識經驗だ。そこに身の入らない困難もあるか知らぬが、そこに身の入れがひが、人としてはあるにきまつてゐる。日本人の弊は、由來、知覺的認識に條件づけられないでは評價が十分發動しないといふ淺弱、近弱、低弱に實はあるでないか。獨自の科學、哲學を發達させる必要が日本人としてもあるならば、讀書第一主義の併學、開智は當然の一必要事だ。

各小學校中心の公用無使役の圖書館の設備に次いでは、常時的及び臨時的講演の設備が、同じく場所をば各小學校を利用するかたちに於いて、一票を有意義にするためにも必要だ。各地方の在住者のなかの識者や專門家や職業者が、毎週の日曜の午前あたりに研究なり意見なりの發表をすることを常時的講演の代表的方法とし、臨時的講演の代表的方法をば廣く全國乃至全社會内の識者、專門家、職業者を招き寄せて聽講することに求めべきだ。これは經費その他の關係上、度數に於いてはどうしても制限される。

一體、わが國に於いてはいはゆる教會は無存在に近いと見ていい。わたくしは、小國校卒業以上の年齡の人々のために、西洋に於ける教會に相當する、そしていはゆる教會に固有もしくはすくなくとも固着されてゐるいく多の迷信、なかんづく教

…權威主義とこれの一派生的現象としての經典權威主義とを本質的に根本的に持たない社會教育機關がわが國の社會に新設され、發達させられる必要が不可測的に切實だと考へる。當分のうち、場所は小學校を部分的に利用してすむから、常識教化場とでも呼ばば呼ばれべき性質の設備と制度と組織とを、われらは、この際に新興させる必要が十分にあると考へる。その常識教化場に於いては、通則としては第一に日曜の午前に、第二に日曜の夜分に、政治、經濟、衛生、哲學、教育、文學、藝術、各種自然科學、地理、歴史、農、工の技術及び原則、及びなほその他ありとあらゆる文化內容の題目なり科目なりにわたつて、適當の講演を開催するのだ。

國庫からも、右の事業にむかつて、できるだけ經費の補助をおしまないやうにすべきだ。

當面の具體的文化問題、社會問題の研究と、原則的靜質的研究とを、勿論、その常識教化場に於いては組織的に併營すべきだ。

曾てアメリカの奴隷廢止運動は、奴隷所有者からは勿論發端せず、奴隷自身からも發端しなかつた。それは知識ある局外者の範圍から發端した。いはゆる社會思想、社會理想、また社會運動上の煽動家の組織的及び無組織的一群が、それの發端とそ[illegible]の後の進展にさへも殆んど全部にふ遂せんばかりの機分を與へた。永らく奴隷的境遇に生まれなれ、生きなれた人々は、多くの場合に於いて、わが身を中心として形成されてゐる社會的不正義または不完全を自覺するだけの批判力をも、問題が社會的自己に關する限りに於いては、麻痺し了し、衰萎し了する。社會進歩のためには、いはゆる煽動家は或る缺くべからざる公役を、一面に於いては、たしかに演ずるのだ。いはゆる煽動家自身も、淺小柢のものが多いに古來一定してゐるが、解放される當人のむれは、十年や二十年や、要するに一代の、また二代のあひだぐらひは、いはゆる煽動者に比して一層間接にそとからつけられた心熱だけに冷却する可能が通例高い。フランス革命ののちに、封建主義に殉死した民衆も、帝國主義的內外兩面の專制主義に悅んで殉死した民衆も斷續的に隨分と永く種切れとはならなかつたことを見ても、この通則の一例は見られたわけだ。現在のフランスを見ればむしろ一層の適例だ。

およそかくのごとくにして、いはゆる煽動思想家は、ないよりはある方が、社會進歩のために有益だ。それは實に、現に持てる私人なり團人なりが、外力に餘儀なくされずにみづから進んでその持たれてゐる特權なり特榮なりを棄てる可能は通則としてはないし、現にすこしも持たざる階級は、さきにも述べた

通り、不足と卑屈に慣性づけられてその不足と卑屈とを意識しえなくなつてゐるのだから、「公平なる理性」をまがりなりにも代表する第三者、第三團としての有識煽動階級が國運なり、徹底的には社會運なり、文化なり、文明なり、人生なりを成長させ、進化させるために不可缺の一存在權を、一道徳的及び社會的存在理由を有するのだ。

しかしながら、奴隷自身としては、一刻も早く完全なる自覺ある、すなはち自知ある自治者とならなくてはまことに恥づべき次第であるがごとくに、およそ人は、自己の問題をば自己が發見し　そして解決する有能者とならなくてはいかんこと勿論だ。

デモクラシイがどんなにそれの最も正しい意義に於て發達しようとも、社會の各成員が絶對的に純眞に等量にも、まして同質にはなほさらならないにきまつてゐるのだから、ただ眞正デモクラシイの社會に於いては、各人間の等量的及び同質的要素または部分と異量的及び特質的要素または部分とが、種別されると同時に組織されることによつて各人の全人の保存及び成長の機會が制度的、慣習的及び觀念的に完備されるだけのことであるから、その社會に於いては、各人間の通性は通性として一般的または劃一的待遇をうけ、殊質は殊質として特殊的または差別的待遇をうけることになる。われらが信頼し且つ主張すべきかたちのデモクラシイはかならずこの原則に徹底的に忠實なものでなくてはならん。

社會がどんなに進歩しても、各人間の個性別及び聰明別は抹滅されずに却つて顯明になると同時に、職業、專門、學別等の飽かず仔細に分裂進化するにしたがつて、一職業、一專門、一學別の人は、他のすべての職業、專門、學別の內實と事情とに關しては、たとひかれが常識とかれ自身の職業、專門學別に關してはどんなに聰明であらうとも、比較的に多少不聰明であり、極めて不聰明であつてさへもすこしも不思議ではないゆえに、教導と學從、及びしば〳〵命令にさへも形似したる自發的責任敢取と、盲從にさへも形似した信任とは、いかなる進歩的社會に於いても永久にそれの一大特徴として保存され、いた發達するにきまつてゐる。それは實にさうあるほかないと同時にさうあるべきでもあるのだ

されば、普選實施後の日本の社會に於いても、先導者と追隨者との各自の存在理由はますのみにしてすこしもへらない。その先導者のうちの或るものはいはゆる煽動家として見られることもあり、また妥當的にさう見られべきものであることもあらう。しかしながら、おの〳〵の煽導者は實は先導者であるでな

くては、その社會のデモクラシイはすくなくともこれだけ未發達だ。

勿論、社會の各人がすべての問題に關してことごとく先導者揃ひであれば、これに越したことはないが、それは前述の理由によつて單なる一空想としてすらも不成立のものであるから、各人は、常識に於いては完全なる自治者であることを目的として努力すべきであり、またかれ自身の直接の職業、專門、執掌に關しては同樣に完全なる自治者であることを目的として努力すべきだ。常識と職業に關してだに常にあるひはたまにでさへも追隨者であるといふ狀態は、恥づべき狀態だ。ここに於いてか、その職業方面についていふならば、たとへば小作人、自作農人のむれは、かれら自身のなかから候補者を無理なしに立てうるやうに成るたけ早く準備を完全にしなくてはいかん。工場勞働者は工場勞働者自身のなかから、仲介業者としての卸ろし、小賣商人が必要である限りはまたかれらのそれぞれの團群からもといふやうにだ。

職業自治は、各職業團の政治的自治をもそれの一大內容とすべきであることは自明の事理ながらこの際新たなる注意と反省を國民にむかつて要請すべき理由が大きい。

小作農人、自作農人の群團が、また工場、鐵道、鑛山等の勞働者が、いつまでもいはゆる局外の煽動者や先導者を候補に立てるやうでは鋏でない。それは實に國家なり社會なりの一大不祥事だ。

國民の各員の、各職業團の、各地方群の、各問題または利害の當事者の、完全なる自己直接の體驗にもとづく意志が、これのみが、これこそが、參政の唯一の方法でもあれば、國政の唯一の內容、實質、生命、源泉でもあるのだ。しかるに、體驗知にもとづく意志、體驗知に條件づけられた意志は、たとへば職業が關する政治問題についていふならば、その職業に平素從事し現に從事する人人の特權だ。それはかれらの本質的專有件だ。局外の煽動者や先導者が、どんなに聰明であり、誠意であり、そしてどんなに研究と奉仕または代表の努力をはげまうとも、かれは要するに理解ある同情、同情ある理解程度以內の成績を發しうるにすぎないにきまつてゐる。各職業人よ、早く煽動者及び先導者の手を離れて、自己の脚であるける有能者と、すくなくとも自己の職業が最も直接に、深切に關係する參政問題、政治問題の發見と解決とが關する限りに於いては、なるやうに修養せよ。そして、その修養の方法は讀むにある。及び聽くにある。考へることなどは、特に意識して注意すべきことがらではない。人は自然にかれの知識相當に考へるやうに出來てゐる。

「考へる」ための努力などは、なに人の場合に於いても絶對に無用だ。いはゆる本職の思想家でさへも、もしもかれが眞に思想家の名をあたひする知力非凡の人であるならば、特に考へるための努力や時間をば決して持たないとわたくしは確信する。世にいはゆる禪なるもののごときは、考へるのではない。それは睡眠に似てしかも實はきわめて盛なる遊惰だ。わたくしにむかつて、英國の熱心なる一哲學研究者が、君は毎日のどの時間を考へる時間に割りあててゐるかとまじめにたびたびたづねたことをわたくしはいま偶然に想ひ起こす。そのたびごとに、わたくしは、これくらゐわからない、無意味の問ひは世にもすくなからうとかならず痛感したことをもわたくしはいま自然に想ひ起こす。考へるための努力はいらないが、知るための努力は大いにいる。そして、それは、圖書館や講演の制度的設備と、讀書や聽講の個人的實行目錄とを必要とすることがらだ。

新有權者は、原則としては、既成政黨に加入することをば最初から無問題的に否定すべきだと考へる。實行的に萬一加入してよい場合があるとしても　それは從來の形式にかける入黨であつては決してならん。それは入黨を意味せず、或る黨の或るもしくはすべての政見に偶然自己の政見が一致してゐるからといふだけの理由を有するものではなくてはいかん。だから、それは、正直に、精確にいひあらはすならば、入黨ではなく、政見贊成にほかならない。したがつてその政見が一致を缺くと同時にかれは脫黨すべき必然的理由を持つ。また事實、現在の既成政黨のどれを望見しても、錄でもないものばかりだ。政友會は利權あさりで周知だが、憲政會にしても、政見をよりも政權を愛した跡はおほへないでないか。それの總裁たる人の曾つての對露見發表を見ても、最近の日露關係の乖離は日本が兵力をもつて露の內政に干涉したに起因してゐるとかいふ風の前置きをして論進しながら、續いて展開された意見　讀み行けば、しかるに當時の責任者がいくたりとか現內閣の責任位置にゐるからわるいとか、また尼港問題に說き及んでは、最初の原則的判斷をみづから否定してゐるやうな變なことをいうたりしてゐたことを不精確ではあるがわたくしは記憶してゐる。加藤氏は、あたまがぼけたのか、あれが氏の政治的聰明の正直なところか、それとも政權慾のために聰明を多少くらまされたのか、もしこの最後の部分が大いにあつたのだとすると甚だ心細いと當時わたくしは考へた。いまの日本に立つ一とつの政黨ともあらうものが、い　んや在野黨ともあらうものが、元老、准元老、軍閥、官僚、貴族及び富豪あたりを誠實に教化するだけの必要をも、責任をも、義務をも意識せずに、むしろかへつてそれらにこび

るやうなことであつては、まことにつらいことだと考へざるをえない。いはゆる民衆をも、いはゆる當路及びその近縁をも、すなはち官民朝野のすべてをこめた國民を雜質的一全體たと正觀して、眞の國民的必要の意識に於いて自己の政見と政治的行動とを決定するでなくてはたよりない。

革新クラブに關しては、わたしはほとんど無知識だ。また憲政會に對してほどに注意と意識を當然うながされる程度には、それはすくなくともまだ發達してゐないと想はれる。

革新クラブや憲政會に入るよりは、新黨を興こす努力にむかつた方が、新有權者として、どれほどその新權利、新責任、新義務を忠實に、有意義に果たす方法であるか知れないほどに、それは確實に著大に賢明だ。或る正しき意義に於いて忠義だ。或る正しき意義に於いての忠義とは、制度に對するロイアルチをさしたのだ。

要するに、どの既成政黨に萬一かりに入るとしても、それは政見贊成、動機贊成、遂行力信賴等を唯一の内容とするものでなくてはいかん。また新黨を組織するとしても、それにしばられる條件つきで入黨してはいかん。徹頭また徹尾、始めから終りまでを一貫して、わがえたる一票をば、活きた政治のその時その時の眞の必要のためにのみ使ふといふ條件を最も安全に、確實に造り、保たなくてはいかん。

國政は私事にあらずしてすくなくとも國家的公事だ。黨などを慢然としてこしらへたり、黨などに慢然としてはいつたりすると、正しき意味に於いての一票の自由が、わるい意味、不正な意味に於いて制限される。一人一黨的現象が、たとひ一千萬内外の新有權者のすべての在りかたとして現はれようとも、姑息的な、低級妥協的な、下劣方便式な小黨や糾黨に比しては、それの方がはるかに、はるかに着實な、そして深慮ある政治的良心、常識、明智、及び行爲だ。國家にとつても、社會にとつても、當人にとつては無論のこと、千萬人の雷同者、浮和者を持つよりも、一人たりともの眞の自由者、獨立者、特行者を擁つ方が、千萬倍以上のいな實に無限倍の利益でもあれば、幸福でもあることに、人のみならず、天地全實在もの理想的原則が一致して和讃する。

ことばが大ほげさに視え、響くかも知らんが、新有權者のおのおのよ、生まれかはつたつもりで、生きなほすつもりで、古來の殉眞、殉善、殉美、殉正者の至誠心を、いま、ここで、われが新たに發達させるといふ敬虔至極の態度を自然に自他に形成して、國の外的關係、及び勿論國の内的組織の種々の内容について、それらすべての、また一人としてはそれらの一とつた

りともの、可能的進化改善にむかつて、いまだけがれざる各一票を最有効に使ふことを先づ深く決意せよ。

その進化改善の具體的諸特殊内容の研究は、勿論早きを要し、深きを要し、否さを要する。ここに於いてか、問題はふたたび知識にかへる。(十二、一)

新有權者に對する切實なる吾人の期待

法學博士 吉野作造

○

普通選擧が實施されると新有權者は驚くべき多數に上る。内務省の發表に依ると、從來の制に於ける有權者數は約三百萬だが、普選になると之が千三百七十萬に達する勘定だ。いろいろの理由で洩れる者が若干あるとしても、兎に角千萬以上の新有權者を見ることだけは疑ない。從來の三百萬に比すると殆んど革命的激增と謂つて可い。而して之が實に一部の人をして憂慮せしむる點であると同時に又一部の人をして狂喜せしむる所以でもある。

○

併し有權者の數が革命的に激增すると云ふ事自身は直に憂ふべきことでもなければ又喜ぶべきことでもないのである。と云ふ意味は、一つには普選の實施は當然の理であり又自然の勢であつて外界の喜悲を以て如何とも爲し難いものだからである。が又他の觀點からすれば、普選の結果の喜ぶべきか否かは一に今後世人の態度如何に繫り、其れ自身はもと善いとも惡いとも決まらないものだとも云へる。尤も之れ丈のことは云へる。我々が如何に努力しても從來の制下に在ては政界の廓淸向上は容易に期せられなかつたのだが、普選になれば努力次第でこの道義的目的が或は達せるゝかも知れぬと云ふ見込は十分に立つと。之等の點は前々號以來既に屢々說き及んで居るから復たくり返さない。要するに、我々の努力次第では今後の形勢を善くする

ことは必ず出來る。之を好むと否とに拘らず普選の實施は最早動す可からざる既定の事實だとすれば、我々はその後を善くする爲に十二分の力を竭さなければならぬではないか。この見地から新有權者諸君に希望すべき點は頗る多いが、今茲には其の最も重要なる二三項を列擧して見やうと思ふ。

○

第一には其の非常な勢力たる所以に思を潜めて自重して貰ひたいことだ。從來の有權者の勢力を一とすれば新有權者のそれは三以上だ。之れまでの選擧權擴張はどんなに多い場合でも在來の權利者が凌駕する程の增加には到らなかつた。從つて新形勢の下に於ても大勢は依然として、在來の權利者の支配する所であつた。今度はさうでない。即ち大勢を左右する鍵は直に新權利者に渡されんとして居るのである。新參者と自ら卑下してはいけない。兎に角彼等には一躍非常に優勝な地位が與へられるのである。換言すれば、今後の政界の向背は一に彼等の意圖に依つて定まるといふことになるのである。之をよく自覺して貰ひたいと僕は望むのだ。そして大に自重して此の地位を善用せられたいと冀ふのである。

○

第二には言ふまでもなく此の地位を善用されんことである。僕は前段に於て一に對する三といふ非常な勢力たることを自覺して欲しいと云つたが、之を誤解して結束以て元の一を壓倒すべしとされては困る。一を壓倒する爲に結束することは、それだけ良心の拘束を甘んずることになるので、矢張り折角の勢力を善用する所以ではない。古い政治的通弊に腐敗し切つた舊勢力を壓倒することは勿論緊要だが、其のやり方が宜しきを得ぬと、臭に代ゆるに越を以てするに過ぎず、政弊は依然として殘ることになる。故に我々の切に望む所は、一擧にして壓倒し去ることが出來るかどうかは別問題として、兎に角堅實なる道義的壓力を以て精神的に舊精力を牽制することである。詳しく云へば、與へられたる貴重なる一票を投ずるに當りては、專ら自家良心の命に聽き、其の最も自由なる判斷に基くべく、何人にも又何物にも自己の確信を賣つてはならないのである。

世人が普選を歡迎し之に政界改善の效果を期待する所以も、一には茲處に在る。在來の有權者は餘りに深く在來の政弊に浸染して居る。之に椋りて國情の効は擧げ難いから、普選に依つて新鮮なる分子の多數入り込んで來ることを歡迎するのだ。然るに其の多數がまた結束の目的を貫く爲に同じ様な無理をするのでは何にもならない。普選の實施は、つまり新有權者に期待するに、其權利をば良心の命ずるが儘に行使せんことを以てす

ると謂はなくつてはならない。之れ丈けの事が最少限度の希望として期待し得ないのなら、普選は決して急いで之を迎ふる必要はないのだ。

　良心の自由はもと全然個人主観の問題である。政黨乃至政界の事情が面目を一新するに至らば格別、今のところ多數の結束は則ち自由の拘束だ。故に少くとも當分のところ僕は新有權者の政治的結束をすゝめない。強て結束をするなら、良心を賣らないと云ふ消極的目標の爲に集ることを冀ふ。選擧は賴まれてやるもの、甚しきは何等か利益の提供に對する報償としてやるものと思ひ込んで居る者は、まだ中々多いから、新有權者にして亦此弊風に釣り込まれる危險は今なほ頗る多いと見ねばならぬ。之はどうしても防がなくてはならない。場合に依ては、一種の社會的制裁をかざしても喰ひとめなくてはならぬ。この目的を以て一種の道徳的十字軍を起すの必要は大にあると思ふ。心ある青年諸君の奮起を切望する。

（　）

　以上述ぶる所の趣旨に基き、僕は新有權者に對し、普選の主意を貫き世人の期待を完うする爲に、次の三點に深き顧慮をおかれんことを希望する。

（一）何人を選擧するかは何人とも約束せざること。候補者の依賴を承引すべからざるは勿論、郷黨有志の申合の如きも亦良心の自由を拘束するものとして之を避けなければならぬ。

（二）何人を選擧すべきやは投票の瞬間まで決定を留保すべきこと。事前に之を研究するは妨げない。併し途中からどんな良候補が新に現れぬとも限らぬから、決定は最後の瞬間まで留保するのが賢明である。

（三）何人を擧ぐべきやの決定の標準は一に自分の良心の命ずるが儘に從ふべきこと。腐敗手段や陋劣なる方法を慣用する者を排すべきは言ふを俟たない。

　猶先覺の士に向つては右の趣意の貫徹する様一種の社會的運動を起されんことを希望するが、之は直接新有權者に對する注文でないから今は省く。遮莫僕は今や普選實施の上に多大の期待をかけ同時に其の本旨の實際的發見の上に一種の責任をさへ感じ、何等か爲す所なかるべからざるを自認しつゝある。都鄙の新有權者の味方となりて政界新機運の門出を立派に踏み進めしめたいとは今僕の私かに期して居る所である。

新有權者への言葉

安部磯雄

普選が行はれた曉に於て政治は果して革正されるであらうか。之は今日誰もが抱く疑問である。私共にしても普選が行はれる結果として日本の現在の行き詰つた政治が何等かの開展を見せるであらうといふ新らしい希望を持 。今迄の有權者はざつと三百萬人であつたが普選が實施されることになれば千二百萬人となり、其數に於て約四倍になるから、假りに今迄の有權者が投票を正當に行使しなかつたとしても、新たに九百萬人近い人が投票することになるからそこに大分政治の革正が出來るだらうと樂觀して居る人々が他にも少くないと思ふ。併し一方に於て幾ら有權者が殖えても投票が依然として今日のやうに行はれるならば結果に於て今迄と變りがないといふ考もある。無論今迄の有權者とても決して其教育程度は高かつたとは云へないが、社會上の位置も相當にある人達であつたから、今迄の程度に於て投票が行はれたのであるが、普選實施後に於ける新らしき有權者の大多數は、少數の例外を除いては比較的教育程度の低い勞働者であつて、社會上の位置も亦殆ど無い者が多いのであるからそれらの人々が投票權を持つに至る結果在來よりも投票がよくなるとは期待されぬし、假りによく行つても今迄と大差がないといふ所であらう、無論これは俄かに斷定さるべき事柄ではないが、大體に於てさういふことが豫想されるのであつて、一寸考へて見たゞけでも普選が行はれるやうになつたからとて直ちに政治の面目が一新されると思ふのは樂觀に過ぎることであり、寧ろ反對に其結果は今日の狀態よりも惡くなりはしないかと懸念される位である。併し茲に悲觀論者にとつても樂觀論者にとつても一致すべき一點がある。それは相當の年數を經たならば普選實施後に於ては政治教育が有效に行はれるといふことに就いてである。と云ふのは何を意味するかと云ふに、投票權を持たない者には政治に對する興味がない。從つて如何に政治教育の機關が整つて居ても効能がなかつた。早い話が總選擧の時に應援演說に行つたとしても聽衆の過半數は選擧權を

持たない者であるから、其場合演說をする者にも張合がないが聽手も眞面目になることが出來ない。ところが今後はどうなるかと云ふに、兎に角千二百萬人が投票權を持つことになるから、選擧界が前よりも惡くなると假定しても、其處に自ら他に救濟の道も見出される譯であつて、一場の演說、一篇の論文にも反響を生ずるといふ風になれば、大多數が政治教育に依つて訓練されるといふことになるのであるから、それに力を入れる人々にとつても盡力の爲甲斐があるといふものであり、此點に希望をかけることは樂觀論者にしても悲觀論者にしても變らない筈である。私が普選に贊成するのも其點に在るのであつて、普選は一時に政治を革正する力は持たないが、漸次に國民の政治教育を爲す上に於て有効である。此際政治教育に志ある人々は總ゆる方法を講じて、近き將來に於て有權者たるべき人々に意見を述べて置く必要がある。此意味に於て新有權者たるべき人々に對して私の言葉を供したいと思ふ。

私が玆に云はうとするのは簡單に云へば選擧權に關する有權者の心得ともいふべきものであつてそれには先づ根本の問題から出發する必要がある。今日政治の腐敗は爭はれぬ事實であつて、我々は一概に政黨政治が行はれゝば好いと考へるが、政黨それ自身が既に行詰の狀態にあり、腐敗を極めて居る有樣である。現在では政黨に對する信用が地を拂つて居て、議會政治其物に對してすら信用を置かれないのであるから、人々の考は政黨などはどうでもいゝといふ風になり、超然內閣でも何でも構はないといふことになつて、政黨の面目は全然潰されて了つて居る。其原因は何處にあるかといふに、それは有權者が選擧權を正當に行使しないといふ點にある。私共が政黨政治を說く時に有權者の態度が公正でなければ政黨政治は立派に行はれぬといふが、それは換言すれば今日の政治の腐敗は必しも政治家の罪でもなく、政黨の責任でもないのであつて大部分は有權者或は國民全體の責任であるといふことである。政治は國民の反映である。國民は恰も高處にある水溜の如く、そこの水溜から下の方に管を引いて來て其口を開けると水は勢よく噴き出るが、物理學の原則として、水の上に噴き上げらるゝ高さは上にある水溜の水面以上には上がらないが、政治も亦それと同じ法則に支配されるのであつて、政治は常に國民の政治思想以上に擢んでることが出來ない。反對に國民の政治思想が向上すれば政治もそれに伴つて進むことが出來る。幼稚な、劣等な國民の政治思想からは決して好い政治が生ずることがない。政治を鏡とすればそこに映る面は國民であつて、政治に映る國民の値打は、鏡に映る其顏以上のものではない。今日國民が政治の墮落を罵

例するのは恰度鏡に映る自分の顔の醜さを見て憂目するのと同じである。斯くの如く見れば政治の善悪は一に有權者の覺悟に依るものであつて、茲に於て有權者の考から先づ根本的に改めなければならないといふことになる。

今如何なる點に於て有權者の態度が誤つて居るかといふに、それは單に選擧權の行使に關する問題のみではなく、選擧に關する一般的の問題に就いてゞある。選擧の弊害は市町村を通じて同様であるが、今は大體其弊害に就いて述べて見たい。第一は時間の問題である。選擧に於て無益な時間が浪費されて居ることと今日の如く甚しきはない。衆議院議員の選擧ならば四年に一回總選擧が行はれる。其場合有權者はどの位の時間を費すかといふに都會に於ては便利があるから普通三十分位の時間で選擧をすることが出來る。然るに田舍に於ては選擧場に行くには遠いので二時間或は三時間の長時間を費さなければならない。斯くの如く四年毎に一回必ず三十分乃至三四時間の時間を費すのが有權者側に於ては普通である。然るに猶選擧に於てはそれ以上に馬鹿らしい時間を費す場合がある。選擧の競爭が烈しくなると入れ替り立ち替り毎日戸別訪問といふことをする。此場合主人は一々對面して居れば無駄な時間を費すので職業のある者は妨害される。そして選擧前二週間若くは三週間といふものは全くそのために煩はされるのが通常である。候補者の側から云へば一ケ月も二ケ月も前から選擧準備のために多くの時間を費し、運動員を頼んで自ら有權者の家を戸別訪問をする。演説會をやるならば一二度で濟む場合もあるが、戸別訪問は際限がなく、烈しいのになると三四日、若くは五六日と續いて廻り歩く。こんな手數のかゝる選擧は馬鹿らしいのみならず、また政治を腐敗せしめる原因であることが分つて居るので心ある人間は候補者に立つことを屑としない。選擧場裡に立ち得る人は寧ろ面の皮の厚い者であつて、さういふ者にして初めてさういふ仕事が厭はずにやれるのである、今云つたのは時間に就いての事であるが、更に一層酷い弊害は金の問題である。これは政治を腐敗せしめる大原因であつて、それには運動費であるとか、選擧間際になると實彈と稱して現金買收を行ふことなどがある。そのために選擧費が増加して、衆議院議員の選擧ならば少くとも一選擧に二三萬圓、多き時は十萬圓以上も金をかけることになる。有權者が買收をされて投票をし、運動員がいゝ事にして金を誤魔化すといふ其事だけでは大した事ではないが、選擧費の増加は、候補者が金持である場合には差支ないが、さうでなく無理算段をして選擧費を作つた人が後に代議士となつた時には前に使つた費用を取返す必要があるので、政黨は常にこ

ういふ人達によつて利權を求められ、そこに必然に政治の腐敗を招き、政黨の墮落を來すといふことが大きな問題なのである。莫大な選擧費がかゝるといふことが當選後に往々惡事をさせるといふ傾きがあるが、それさへなければ斯くの如き弊害もなくなるのである。更に選擧費用が多く要るといふことが自然に第一流、若くは第二流の人々の間から候補者を出さしめないことになる。さういふ人達は當選後に於ても先の費用を取返さうといふ心にもなれぬし、無理算段をして選擧費をこしらへる位なら初めから候補者に立つことを斷念する。で現今の政治家には第三流、第四流の者が跋扈して居る。斯くの如き弊風を助長せしめたも元を糺せば有權者の責任である。

戸別訪問に就いてもう少し云ふならば、(之れは普選實施後に於ても重大な問題である)その弊害は既に人の知る所であるが、今日の戸別訪問なるものは有權者にとつて大いなる侮辱ともなる。私は自分の家に運動員などがやつて來るのは非常に不愉快だと思ふ。選擧は勸誘に依るものではない。有權者の自由意志に依つて自分が適當と思つた人を選んで投票するのが眞の選擧である。然るに運動員が投票を勸誘するために同じ家に二度も三度も有權者を訪問することは非常識の沙汰であつて、これが普通の用事の場合であるならば主人に逢つて依賴し、主人が引受けたといふ返事をしたならば用事は其場で終るべき筈のものであつて、同じ用件の爲めに運動員などが甚しい時には五度も六度も有權者の處へやつて來ることは明に有權者に對する侮辱の態度である。これは恰も有權者を普通人として取扱はないものであつて、小兒若くは低能兒に對するが如き態度であるが有權者が甘んじてそれを受けるのは不可思議である。既に戸別訪問が有權者に對する侮辱を意味するならば有權者は斷然としてそれを拒否すべきではないか。議會や市町村會に議員として出る者は一部の人を代表して選擧の結果出るのである。或事に關して我々が代表者を擧げて何處かへ行つて貰ふ場合には、其選ばれた者は御苦勞だが行つて貰ひたいといふ依賴を受けて依賴する者は旅費を出し、禮を盡して代表者に行つて貰ふのが普通である。議會に代表者を出すにも亦斯くの如き道を踏むべきであつて、我々の代表者と見て選擧する以上は此方から依賴するのが本義であつて、これが有權者のとるべき正當の態度である。候補者が自ら名乘を上げて自己を代表者として推薦してくれと有權者に依賴するのは位置顚倒の甚しきものである。戸別訪問が既に不合理である以上、普選實施後に於ては戸別訪問禁止法が出るべきであると考へるが、法制審議會では候補者自身が戸別訪問を爲すことを禁ずることは可決したが、運動員は

差支ないといふことになつた。候補者自身の戸別訪問を禁止するといふ其事だけでも實は一の進歩であるが、更に運動員の戸別訪問をも禁止したら一層好かつたのである。これは推測するに帝議會がそれをも可決しなかつたのは、假りにそれを禁止しても運動員が夜間こつそり有權者を訪れるといふことになればいくらでも法律は破ることが出來るのでさういふ形式的な法律を無用と見たゝめであるかも知れない。併乍それは法の目的を履き違へたものである。幼年禁煙法を出しても陰で喫煙をする者があれば仕方がないといふかも知れぬが、實際はあの法律があるために十四五歳の少年で煙草を喫む者は少い。法の力は天下に向つて「してはいけないことだ」といふことを宣言することに効果がある。天下の法はそれが或事柄を禁ずると否とに依つて國民の態度に影響する。暗夜に法を犯す者が現れるといふことは法律の効用を疑ふことにはならない。戸別訪問を禁止してもこつそりそれをやる者が出てくる以上はその禁止法だけでは猶有効ではないが、問題がそこまで來るとそれ以上は有權者の態度と決心に俟つより外はなくなる。私は私の信念の實行者として私の門内には一切候補者、運動員等の入ることを禁ずる。それを門外に貼り出してこそないが、私が嘗て市部に住んで居た時でも私の態度が彼等にも分つたと見えて運動者がやつて來ない。譬へ私が選擧をしやうと思つて居ても、其人が私の門内に來て頭を下げるとなると私はもう其人に投票をすることをしない。頭を下げて來るやうな奴は代表者としての資格がないと思ふからである。私はさういふ態度を二十年來とつて居るが選擧の時には甚だ樂である。二三年前間違つて私の門内にさういふ者が這入つて來たことがあつたが私は直ちに私の主義と信ずる所を語つて追ひ返して了つた。斯くの如き態度は各人が皆やることになれば自然運動員の戸別訪問を防止することになる。此事は小事のやうであるが、其結果は選擧費の節約といふことになり、今日の政治の腐敗を除く間接の効果ともなる。

投票權は公權であり、國家に對する權利であると同時に又義務である。私は選擧の度に學校に於て學生に話すことであるが、それは我々の神聖なる投票を奪ふものは單に戸別訪問をする運動者ばかりではなく、實に我々の内側から他の道を通つて投票を浚つて行く者があるといふことである。それは親戚、友人の道をたどつて内側から若くは裏口から來る奴である。伯父さんであるとか何とかいふものがやつて來て、某に投票してくれと頼む。それにハイ〳〵と云つて應ずるものは丁度投票といふことを音樂會の切符を用ふることゝ同一に心得る者といふべきである。裏口から來る者に對してさうであるならば、場合に

依つては運動者の買收にも應ずる者と見られても仕方がない。投票は親戚や父親の命令に依つて左右さるべきものでなく、先輩に恩を報ずるために利用さるべきものでもない。それは飽くまでも有權者の自由意志に依る行爲であるべきであつて、有權者は總ゆる誘惑に對してそれを斷然拒絕する勇氣を有ち、またさういふ態度を取るべく習慣づけられることが必要である。既に云つた通り投票は決して音樂會の切符と同一視さるべきものでない。それを猥りに與へる事は明かに天下の公權を濫用するものである。投票の買收は何處まで行はれてゐるものか分らぬが、果して金が投票のために使はれて居るかどうかは甚だ疑問であつて、そこに受取證のあるべき筈がないから、專門のブローカーの手に金が渡つてから後の用途は頗る曖昧であつて只徒にブローカーの懐を肥すのみでないかとさへ思はれる。これは極めて馬鹿らしい事實である。更に何買收其物は何といつても論議の餘地はなく、それは不合理其物である。我々の候補者はそれを推薦する時に此方が金を貰ふ處でなく、我々に眞に候補者を推薦する誠意があるならば、選擧に際して其候補者が費用を要する場合には進んでそれを負擔すべきが本當であると思ふ。我國の選擧界は實際に於て腐敗して居るが、中には立派な選擧區もあつて有權者中の有志者が候補者の選擧費用を支辨して居た例がある。横濱から第一議會以來出て居る故島田三郎氏の如きは自ら選擧費用を出したことがないと云はれて居る。有權者が投票をして而も候補者の選擧費用を負擔し、彼等の代人を議會に送る、その事が本當であるが英國に於ては事實さういふ風になつて居る。英國勞働黨の現在の勢力は素晴らしいが、最初は二三人から始つて多くて四十人も議員を出したのが大成功と云はれて居る。英國に於ては今から十幾年も前までは議員には歳費といふものがなく、議員たることは名譽職であつた。然るに今勞働者の仲間から議員に出る者があると、其處に收入の途が絕えることになるので、全部勞働組合から金を出して議員の旅費から其生活費まで負擔することにした。然し諸入費を有權者が全部負擔するといふことは勞働者にとつては困難であつたので、自由黨内閣時代から英國の議員に三千圓の歳費を給することになつた。それでも猶選擧の時には勞働組合は其候補者のために其選擧費を支辨したのであつた。斯くの如き例は獨り英國ばかりでなく、獨逸に於ても亦同じであつて、社會黨代議士が彼等を代表して選出せられる時には其費用は總て社會黨の負擔する所であつた。將來我國の選擧も亦斯くの如き傾向に進むべきであつて、有權者は候補者の費用を負擔しても彼等の代表者を議會に送ることが望ましいが、我國に於ては從來親分

乾兒の關係といふものがあつて乾兒は常に親分から貢いで貰ふのを普通と心得るやうな習慣があるが、何となく今日の候補者は親分で有權者は乾兒のやうな關係があるように考へられる。即ち候補者が引續いて長く同じ選擧區から出ることになると、そこに親分乾兒のやうな親密な關係が生じ、其結果乾兒が親分から物を貰ふことは當然であると考へるやうになる。日本のお伽噺といふものがさういふ關係を露骨に現して居るものである。彼の桃太郎の話は、親分乾兒の關係を語るものとしてこれほど代表的のものはない。此話の中に於ては黍團子を貰はない中は雉も猿も決して桃太郎の乾兒にはならないのである。我國に於ては親分の位置にある者からは金を貰ふのが當然であつて然る後に有權者は一票進呈といふことになり勝ちである。私の意見では桃太郎のお伽噺は宜しく改訂して、少くとも猿丈けは黍團子を與へられることに依つて鬼ケ島の征服に從ふことを屑とせず、若しそれに從ふとしても自分から兵糧を持つて行き、若くは桃太郎の兵糧までも携へて行くといふことにならなければならないと思ふ。

今後の我々の期待は勞働者の投票がどういふ風に行はれるかといふことである。若し勞働者が彼等の中から代表者を議會に送らうとするならば其投票は英國や獨逸のやうになるだらうと思ふ。即ち候補者が選擧費用を出すことが出來ない場合にはそれを推した勞働者なる有權者は當然其負擔に當るべきであると思ふ。從つて其場合には費用はなるべくかゝらぬといふこと、時間節の約といふことが重要な問題となる。若し勞働者が普選實施後第一次の選擧から斯くの如き態度をとることになれば日本の政界の弊害を革正するに有力であることは明かである。只茲に考ふべきことは一般に勞働者といつても其數は多く、殊に組合に加入してゐる勞働者の數は比較的に少く、大部分はさうでない者が多い。組合に屬する勞働者には英國若くは獨逸式の選擧が行はれることが望めるが、組合以外の勞働者は又自ら特別の立場に在る者であつて、一概に勞働階級に對して同一の態度を求めることは困難である。そこには殊に親分乾兒の關係に見られる弊害が露骨であつて、親分の手に依つて五十人、百人の乾兒が容易に動くことが普通である。選擧に於て親分が買收されゝば乾分が其命令に依つて更に買收され、結局彼等の間に於ける投票は買收に終りはしないかといふ懸念があるのである。普選に對する悲觀論者の論斷が茲にあり、憂ふべき傾向が其處に認められるとするならば、今後勞働者は一層努力して組合運動を促進し、熟練職工、不熟練職工を問はず其階級に依つて各自に組合を作り一日も早く親方の手から獨立して其自由意

志に依つて投票するやうになることが必要である。將來勞働黨を組織するといふことになれば此方法は更に必要となる。即ち勞働者の大同團結が肝要となる。彼等が有權者となつた曉に勞働階級の指導者が彼等を教育指導して行けば、十年、二十年後には英國や獨逸に於ける如く勞働者の議會に於ける勢力は必ず增進するに違ひない。斯くして勞働階級の代表が日本の議會に出ることになれば議會の空氣は茲に初めて眞劍とならう。私は普選の結果の良くなると惡くなるとは主として勞働階級の態度如何に依るものであることを深く感ずる。

普選の實績を擧ぐる爲めに

文學博士 三宅雪嶺

政黨内閣が普選案を危險とし、衆議院を解散したのに、總選擧に當選した議員が未だ任期の滿たぬうち、超然内閣とか官僚内閣とか云ふべきもので普選案を提出するに決し、若し通過せば、それで五月の總選擧に臨まうとする事、日本憲政史の奇現象と云はねばならぬ。何にせよ、内閣で普選案を提出するのを憲政の爲めに賀すべしとし、それが果して無難に通過するや否や、聊か疑ひないでない。若し通過したならば、約九百萬人が新に選擧權を得る事になる。知識の程度で從來の選擧人三百萬と大差なく、地方によつて前よりも知識の增すを覺えるか、從來の選擧人は選擧權ない者に對して特權あるが如く心得、選擧權あるだけブルジョア氣分を強くしたところがある。原内閣で普選案の可否を總選擧にて決しようとし、否とする者が勝を制したのが、種々の事情よりし、强ち案の如何によらぬけれど、選擧人中に選擧權擴張を喜ばぬ者の少くなかつたのを打消す事が出來ぬ。邊鄙な地方程甚しかつた。地主が水呑連と同等になつて堪るものかと云ふ調子であつた。新に增すべき九百萬人はさういふ氣分が無く、何か一種の義務を負はせられたかに感ずるのが多からう。總選擧の際演説を聞かねばならず、投票に出

掛ければならぬやうに考へ、面倒臭く思ふのがあらう。幾名の候補者が互に相爭ふ際、孰れに投票しようかとて、面倒がるのもあり、面白がるのもあり、欲張るのもあり、種々樣々にならう。權利よりも義務を感ずるのが先になるのは、長い歷史で已むを得ぬ所とし、權利を認識するのも相當にあらう。

勞働黨が必然の順序として起らうと思はれる。勞働黨にも種類があり、警察に手數の懸かるのもあらう。何事も略ぼ落着くまでに多少の騷ぎを免かれぬ。或はそれ故に普選尙早を唱へたのであると云はうが、幾年待つても全く騷ぎがなくなる事がない。騷ぎのないのがよいか、あるのがよいか、一概に云へぬ。平穩無事がよければ武陵桃源に如くはなく、それでは世界の廣きに生れた甲斐がないではないか。否やでも應でも我が日本は世界列國の間に立ち、爲すべきを爲さねばならぬ。

力ある國があり、力ない國があるが、その區別の起るは、國民の多數が力を伸すか伸さぬかである。何故に英國が榮え、西班牙が衰へるか。國民の平素爲す所を以つて直ぐに知る事が出來る。英國は遙かに多事多端、世界戰役眞最中に婦人六百萬人に選擧權を與へた。煽動政治家が餘計な事をすると云ひ、又云へぬでなけれど、其處に英國の發達する順路を見出すでないか。選擧權擴張を稱へるなど、動機はさまざま、他愛のないのもあるが、成るべく多くの人をして成るべく多くの力を伸ばさしめようとする所がある。政治の事は或る一部分の擔任すべき所に限り、他は各自の業務に專らなるに超した事ないとするが、それで濟む國柄は、平穩無事と云はば云へよう、國力の伸びないのを如何にするか。伸びたとしても、更に一層伸ぶべきを伸ばさずに居るべきか。

全國の二十五歲以上の男子が選擧權を得たとて得ないとて、格別の違ひないやうであり、只取締りが煩はしくなるに過ぎないと云へぬでなく、實に差當つて特に何の見るべきものがなく、人權の必要より見て、已むを得ず敢てすべき所とするのがある。然し千百萬人が、國政を議すべき議員を選出するを得、選出せねばならぬとするのは、いくらか國家に於ける己れの地位を知り、延いて世界に於ける國家の地位を知るに與かる。多數の中には己れの位置を知つただけで、己れの力を伸すの必要を感じ、思ひもしなかつた力を伸すがあらう。寶の持ち腐れと云ふやうに、世間に力の持ち腐れがどれだけあるか知れぬ。震災火災で腰の立たなんだ者が走り出した例がいくつもある。前に步く力がなかつたのでなく、步かなんだのである。世間の多くのうち、己れの力を知らず、職業を求めて步くのが數へ切れず、何うも不運で仕方ないと呟いて居るけれど、或る勢ひを得

て政界に飛躍し、天晴れの人物と見られないと限らぬ。如何に國民の最大多數をして伸しうる限り力を伸ばさしめやうかとは列國の心ある者が頻りに考へる所であり、憲政の行はれたのもその勢に基き、既に憲政の行はれ、普選となるもその勢に基く。

新に選擧權を得、何の利益あるかを解せず、惡戯半分に隣りの八公を投票するのもあらうが、何もせぬに優つて居る。いくらか隣近所又は町内よりも廣い所へ目を配る事になる。演說を聽かされる事多く、刷り物を配布される事多く、その間に知らず識らず知識を增し、見地を高める所がある。祭の神輿を擔いで步くよりも、候補者を擔いで生きた知識を得る。選擧毎に得る所が甚だ僅かにせよ、全國に亙つて相應の高に上り、幾回も經驗する間に力を伸す事鮮くない。只區によつて各自の力を伸すの多いのがあり、少いのがある。千幾百萬人が一樣に選擧權を得たのを思ひ、之では彼も人、我も人、一奮發せねばならぬと思ひ立つのがいろいろあらう。太平洋の彼岸の米國では、人が厄鬼になつて奔走し、神經衰弱を米國病と名付く程であつて、それで尙ほ働きが鈍くてならず、能率を高めねばならぬとて、頻りに督促するの聲を聞く。日本で米國を相手にすると云ひながら、各自の力を伸すに於いて孰れが優るかを考へぬのは何と云ふ事か。前よりの事なれど、今は決して安閑として居れる時でない。新に選擧權を得る者は、期せずして此邊に氣付くべきである。從來の選擧人は選擧權を自慢にし、上品振つて働くべきに働かぬ嫌ひがある。新たなる選擧人が、選擧權を得て誇らうとせず、自身に思はぬ力があるに氣付き、之を振ひ、前に幾倍するの仕事をするならば、普選が何よりも有效とならう。若し之を厄介視し、面白半分に投票するのみならば、憲政の効用を擧げ得ぬのみならず、各自の力を伸さず、延いて國力を伸ばさず、世界の到る處で輕蔑せられよう。歷史に徵すれば、我が日本はさうならず、世界の最も進んだ國と伍し、相諧に世界の文明文化に貢獻し得るを認めずに居れぬ。

要點はこゝにある

室伏高信

□

普通選擧が實現されると新らしい有權者の數が約一千萬人も增加するであらう。その一千萬人は從來三圓以上の直接國稅を納めなかつた、若しくは納むることの財產能力をもたなかつた人々である。巡査、小學教師といふごとき下級月給取り、勞働者、農民の大部分が新らたに選擧權を獲得するわけである。卽ち新らたに選擧權を獲得すべきものは大體において無產者の群れである。從來の有權者三百萬人が、小ブルジョアであつたのに對して、約一千萬の無產者が選擧權を獲得するわけである。新らしく選擧權を獲得するの人たちも、若しくは新らしく選擧權を與へんとするの政治家の諸君も、先づこのことを第一に考へてかゝらなくてはならぬ。

勿論、私はこのことのために、普通選擧の實行とともに、日本の政界が直に有產者對無產者の一つの階級鬪爭の局面を展開するであらうといふのではない。日本においても、社會が既に階級鬪爭のために熟してゐることは事實である。都會においても、農村においても、一つの經濟的搾取者と被搾取者との間に階級的對立をなしてゐるとともに、階級意識が次第に濃厚になつてきたことは明らかである。この階級的意識がどれほどの程度にまで發達してきたか。都會の工場勞働者の間では既にこの種の意識が可成り鮮明になつてきてゐることは確實である。それが普通選擧の實行とともに一般的に擴められてゆくであらうといふことも爭はれないところである。けれども日本の工場勞働者はその數においまだ人口の一小部分である。ロシヤの工場勞働者と同じく、人口の一小部分である。マアクスのいふごとくに、社會が二つの階級に分れて、プロレタリヤが人口の大部分を占めるといふまでには前途遼遠である。こゝに工場勞働者を中心とする社會革命運動が、若し日本において餘地があるとしても、それは議會的、社會民主主義的マアクス主義であることはできない。少數の工場勞働者を率ゐる頭腦人の一團、例

へばロシヤ・ボルシエヴヰキのごとき一國が、少數者の獨裁を目標として進むのほかないであらう。若しそうなつたとしたら、マアクス正統派、若しくはボルシエヴヰキの辯護者たちがいふてゐるやうな、人口の多數が人口の一小部分に對する獨裁ではない。人口の一小部分が人口の大部分に對する獨裁であること、現にロシヤにおいて行はれてゐるごときものであらう。しかも總ての獨裁がそうであるごとくに、古るきフエロウの鞭に對して、新らしきチエツカの劍がそうであるごとくに、ムツソリニに對してヅチエルチエンスキーがそうであるごとくに、その獨裁は一人若しくは數人の獨裁に歸着するであらう。ロオザ・ルクセンブルクの言葉でいへば、それは卓子の前に腰掛けてゐる一握りだけの人間の獨裁政治にと歸着するであらう。私はかくのごとき國家を奴隷と名づけてゐるものである。日本のボルシエヴヰキ的勞働政治家の諸君はかくのごとき奴隷國を理想として最近まで戰つてきた。その一部の人たちは今や牢獄に繋がれてゐる。一部の人々はその本國としてのロシヤに逃れてゐる。他の一部の人々は尚ほ踏みとどまつて戰つてゐる。けれどもその踏みとどまつてゐる人々の間では、そして日本における勞働政治家の諸君の大勢は、今日では、兎も角もこの種の獨裁政治の理想を放棄しつゝあるかに見える。縱令放棄ではなくて、彼等一派のタクチイクであるといふであらうにしても、そのタクチイクが彼等自身を次第に奴隷國の理想から有産ブルヂヨア方面に轉回させつゝあることは今や爭ふべからざるもののごとくに見える。目的でなくてタクチイクが支配する。それが現代社會である。マアクス主義の社會である。概して文明の社會である。目的の國は空想、空疎なる空想だとして遠き彼方に押のけられながら、タクチイクが萬能の神として一切を決定しつゝあるのである。目的は手段を撰まない。ヂエスヰツトはこゝに更に一段の飛躍を遂げる。目的は手段を撰まないの半面は手段は目的を撰まないの世界である。勞働政治家は手段によつて目的を撰まない。目的の國、獨裁政治の理想は弊履である。勞働チエスヰツトは弊履を捨ててビロオドの机掛けの前に腰掛けようとしつゝある。こゝに日本の工場勞働者運動は議會政治、政治的民主主義の方向へと掉してきたのである。ボルシエヴヰキからメンシエヴヰキへ。レニンからカウツキイへ。否、ベルンシタインへ。更に否、ヘンダスン・トオマス・クラインスの方へと「方向轉換」を始めてきた。こゝに鈴木文治氏は再び舞臺の中央に立つてきた。日本の勞働運動の本流を代表する人として鈴木文治氏が最も適任であるべく、その五、六年前の傳統へと復活しつゝある。

たゞ面倒な一事がある。日本の工業主義が尙ほ英國のごとく、獨逸のごとくにならざるの一事がこれである。ベルンシタイン說が破れたハノオバア會議における當時の獨逸よりも、工業勞働者の數がまだ少けないのが今日の日本である。この少數の工場勞働者を踏臺として、若しくは要素として、日本の新ベルンシタイン派の諸君は何の成算を議會政治のうへに發見せんとするのであるか。そこが勿論ベルンシタイン主義である。プテイ・ブルヂョアとの共同戰線がこれである。中央黨、民主黨、若しくはスチンネス・ストレエゼマン黨とも結合するところにベルンシタインのベルンシタインたるところがある。そこで日本の勞働黨運動の行き道は二つである。一つはベルンシタイン主義の徹底である。勞働總同盟友愛會の最初の機關雜誌を見ると、澁澤榮一の名が彼の伴侶として揭げられてゐる。勞働總同盟がその今日までのボルシエヴヰズムを放棄したとしたら、そのゆくべき道は、その五、六年前の傳統へ、更にまた最初の傳統たるスヰキブンジ・シブザ ワエイイチ・エンド・コムパニイへと復歸することがその一つでなくてはならぬ。他の一つの道は農民の方面へと向けられてゐる

□

問題の中心は農民である、普通選擧實行とともに最高最大の問題は農民問題である。特に政治における農民問題である。一般には尙ほこのことがよく理解されてゐないようである。事物の周圍を回轉する人々、ヘエゲル・マアクス的デアレクチクを崇拜する今日の知識人、金錢學者、勞働政治家にとつては、この問題は實質には永久に理解されないであらう。けれども如何なる人々をも農民問題に向けしめる一つの誘因がある。農民の數的根據がこれである。

農民は人口の多數である。日本においては尙ほ人口の比較多數が農民である。こゝに議會政治の謳歌者等は農民に向つて媚を賣らねばならぬ。議會政治の根據は政治的數學である。價値は數的である。多數は價値である。少數は無價値である。多數は道德である。少數は不道德である。その多數が買はれたる商品であつても、馴らされたる羊であつても、多數であるがゆえに價値である。球突きのゲエムのごとくに、議會政治家はその突き當てた球の數によつて勝敗を決する。勝ては官軍、敗くれば賊軍。價値と道德と尊嚴とは常に多數とともにある。多數の聲は神の聲である。「人民の聲は神の聲である！」ナポレオン三世は凡ての政治時代に存在しなくてはならぬ。國民の聲が神の聲である。多數の聲が神の聲である。政友會の聲が神の聲である。高橋是淸の聲は達摩の聲ではなくて神の聲である。ゆゑ

に神の聲は金錢の聲である。神とは神ではなくて物神である。物神の信奉者等が政治を買ふ。政治を買はんとするものには常に多數を制しなくてはならぬ。こゝに政治家とは常に民衆を輓くの驢馬である。その驢馬は、日本においては農村を見つめねばならぬ。農民を輓くの驢馬が賢明なる政治家である。政治的數學の達人である。議會の多數派となり、若しくは成りうるの可能性はこゝから、そしてこゝからのみ生れてきたらねばならぬ。そこでブルヂョアもプロレタリヤも、彼が政治的數學を理解してゐる限り、農民に向つて媚を賣らねばならぬ。政友會が過去に現在に將來にそうであるごとくに、プロレタリヤ政治數學家の諸君もまた農民の方面に向つて彼等の販路を擴げようとしつゝある。

今日は農民もまた一種の都會民である。水呑み百姓が三矢サイダアを飲む。山紫水明の地にあつて、自然に湧き出づる泉の清さをもつの農民が、その自然の水、神の與へたる水を捨てゝ三矢大五郎の與へたる水を飲む。その意味において農民もまた文明人である。半都會人である。金錢の崇拜者である。都會の崇拜者である。ブルヂョア的世界觀の信仰者である。こゝに農民もまた政治の圏内に入つてきたらねばならぬ。三矢サイダアの愛用者はまた政治の愛用者である。三矢大五郎が農民の懐中を搾取しつゝあるごとくに、政治數學家は、ブルヂョア政治家も、プロレタリヤ・ポリチシアンも、ともに農民の懐中に眼をつけてゐる。農民は危機に瀕してゐる。農民を欺かんとするものが多くして農村は飢えて死なんとしつゝある。

普通選擧は一つの機會である。都會の勞働者は、自ら少數であるがゆえにそれは機會ではない。それは彼等の獨裁の理想から遠ざかつて、直接には他の多數者の前に彼の屈服せしめるの機會であるに過ぎない。けれども農民にとつては一つの機會である。農民黨なるものが眞に成立することができるとしたら、農民にとつてはたしかに一つの機會である。從來農民黨と稱せられてきた地主黨、即ち政友會または中央農會、若しくはそれ等に屬する多くの地主團體に對して、眞の農民、——自らの手によつて農業を營みつゝある農民が、その犯されたる利益を回復するための運動が、これによつて一つの刺激をうけるであらうことがその一つである。他の一つは都會民、都會の頭腦人、商業人、機械人、金錢學者、金錢政治家、金錢議會に對して、農民的勢力をもつてこれに對抗するの新運動に議會を與へることである。

英國のように、農民が人口の一小部分であるところでは、農民は最早や力ではない。農村は全く都會によつて征服し盡くされたところである。農村は涸渇して最早や何等の力をもたな

い。この反抗の力さへも失つてただ都會に屈從するだけである。

英國の農民は工場勞働者の尾として勞働黨の一翼にうずくまつてゐる。けれどもヨオロッパでも米國でも、尙ほ農民の自覺は農民をその衰頽から救はんと努力しつゝある。ナン・パアティザン・リイグのことは人々のよく知つてゐるところである。獨逸における農民黨、佛蘭西の小農等はブルヂョア派、若しくは祖國の欺くに委せてはゐるが尙ほ農民としての一つの自覺を失はないでゐる。都市に對する農民の反抗運動は現代世界における一つの最も新らしい、そして最も底力ある運動である。そのことについては、私は他日私の研究を發表したいと思つてゐるのであるが、農民もまた一つの階級であるといふたレニンの言葉は、農民運動に面して立つた都會的政治家の僞らざる告白である。農民は一つの獨立した階級である。彼の利害は資本家とともにたきごとくに、地主とともになきがごとくに、凡ての都會制度とともにない。こゝに、農民もまた一つの獨立階級である。

農民はプロレタリヤではない。小作人はプロレタリヤではない。農民は農民である。一階級である。都會對農村の爭ひは一つの階級鬪爭である。私はこの意味から一つの農民黨が小作人と中產農民とによつて組織されなければならないと考へてゐるものである。けれども私が農民黨の必要を提唱してゐることはこれによつて農民の解放が完成されるといふの意味ではない。

Der Bauer ist nicht Demokrat——農民はデモクラアトではない。近代的政治的デモクラシイとは都會人の發明である。政治的並に經濟的中集權主義がなくては近代的デモクラシィは成立すべき前提がない。近代的デモクラシイとは都會民がその都會的世界觀を農民のうへに押しつけんとするの一方法である。都會が農村を征服せんとするの方法である。普通選擧にしても、もと〳〵この目的から生れ出たものなのである。英國のごとくに、都會民が人口の多數を制する國においては、この目的は完全に達せられてゐるのである。けれども日本は英國でなくてロシヤである。都會民よりは農民が尙ほ多數である。こゝにおいて普通選擧は、尙ほその本來の目的に向つて熟してはゐない。またこゝにおいて普通選擧は、都會民によつてではなしに、逆に農民によつて利用することが可能なのである。普通選擧をとほして日本の農民は彼の都會に對する抗議を述べることができるのである。これあるがゆゑロシヤの賢明な驢馬たち——レニン、トロツキイは普通選擧の理想を撤回した。三月革命の後までも支持してきた普通選擧と國民議會とを直に泥土の中に投じてソヰエト制度を採つた。日本の新舊驢馬はレニン、トロツキイのごとくに賢明でなかつたために、普通選擧を與へ、また

普通選擧を崇拜しつゝある。愚ろかなる驢馬たちである。農民の乘ずべきはこゝにある。農民のための機會はこゝにある。普通選擧の實行せられんとするに對して私のいはんとすることの要點はこゝにある。

普選と勞働總同盟

林癸未夫

去る十一月中旬、日本勞働總同盟の中央委員會は、數日に亘る討論の後、其所屬の勞働組合員は、普選法の下に選擧權を行使するといふ方針を決定して、之を公表した。そして彼等がかく決定した理由として聲明したところに依ると、普選の實施は勞働階級に「經濟鬪爭の他に政治鬪爭の機會をも與へる」ものであつて、彼等が「勞働階級解放のため、此新しき戰線をも有效に利用すべきは勿論」であるから、彼等は「普選實施後に於て議會行動を利用するを至當と認める」といふのである。此聲明によつて我國に於ける勞働組合運動の主流が、其理想を實施する一手段として、現存の議會制度を利用しやうとする一般戰略が明白にされたことは注目すべきことである。併し此聲明書の文面だけでは、如何なる意圖に據つて、かく彼等が議會政治への參加を必要とするに至つたかの根本趣旨が曖昧である。若し總同盟の中央委員會が、此決定に到達する迄に交換した討議の內容、議事の經過が公にでもされたならば、それによつて略彼等の根本趣旨を推測することができたであらうと思はれるけれども、それは新聞にも書かれなかつたやうであるし、又私が個人的に知り得る機會もなかつたから、私に取つては今尙それが重要な疑問として殘されてゐる。ひとり私に取つて重要であるばかりでなく、勞働總同盟自身に取り、又我國の勞働組合運動全體に取つて、それは一層重要な問題に相違ないのである。つまり勞働總同盟は眞面目に帝國議會の立法的職能に參與することによつて、勞働者保護法規並に一般の政治經濟に關する諸立法の內容を、能ふ限り勞働階級に有利に轉向せしめようとするの

であるか。或は又彼等は、現存の政治組織を飽くまでも否定し其運營を出來るだけ妨害するの手段として、議會の職能を內部から攪亂し、其立法作用を停廢せしめようと謀るのであるか。其何れの目的を以て議會政治に參加しようとするのであるかゞ疑問なのである。

○

ひとり勞働總同盟に限らず、一般我國の勞働組合員が全部結束して選擧權を行使したからと言つて、全國の總勢僅に二三萬の現狀を以てしては、果して能く其代表者を一名たりとも選出することができるかどうか、これ亦私に取つては大なる疑問であるが、假に一名乃至數名の議員を選出し得たとして、之等の勞働議員が眞劍に議會內に活動するならば、右に擧げた第一の目的に對しても、第二の目的に對しても、或程度までは有効に其任務を竭し得るであらうことは想像に難くない。

先づ第一の目的卽ち眞面目に立法作用に貢献する場合に就て考へて見ると、勞働議員は政府及ブルジョア諸政黨の提出法案に對し、勞働階級の利益の觀點から之に忌憚のない論評を加へ其缺點を指摘して修正を要求することができるし、又其要求が拒否されたにしても、とにかく中央議會の壇上に獅子吼して、勞働階級の主張を天下公衆の前に宣傳し得るだけの機會を、臨時に摑むことができるのである。これは彼等に取つて確に珍重すべき一箇の武器に相違ないのである。

次に第二の目的卽ち議會政治を攪亂する場合に就て考へて見ると、これは獨逸の社會黨がビスマルク執政時代に於て、又愛蘭國民黨がヂスレリー內閣時代に於て、取つた策戰であつて、要するに勞働議員が勞働階級解放の根本理想を廣く國民に宣傳しようとする苦肉の計略に出づる物である。恰も無政府主義者の暴行が思想宣傳の手段として選まれるのと同じである。尤も此策戰は議會に於ける不斷の騷擾を激發して、一切の議事の進行を妨害することを主眼とするのであるから、議會全體から嫌惡されることは必定であり、又國民の反感を買ふ危險も甚だ多いことを覺悟せなければならない。かゝる策戰によつて宣傳の目的を達することが、必ずしも不可能でないことは、獨逸の社會黨が終に社會主義者鎭壓條例を廢止せしめ、愛蘭黨がグラッドストンの自治案提出を贏ち得た事實に顧ても明かではあるが、併し、日本のやうな特殊の國民的性格及傳統を有する國に於ても、かゝる策戰が同じやうに成功するであらうとは、私どもの容易に信じ得ないところである。

今一つ言つて置きたいことは、勞働議員が上記何れの目的に依つて言動するにせよ、我國に於ける現在の實際問題として之

を見るならば、彼等の議會内に於ける職能も、或は議員としての存在そのものすらも、彼等の言動が絶對に革命的色彩を帶びないといふ嚴格な條件の下に於てのみ、唯可能であるといふことである。彼等の抱藏する窮極の理想が革命的であることは必ずしも妨げないとしても、彼等の議員としての言動は、如何なる場合に於ても、決して革命的であつてはならない。何となれば、若し彼等がかりそめにも革命的な意圖を表明したり宣傳するやうな言動を敢てするならば、政府及ブルジョア諸政黨は到底それを認容する筈がないのみならず、我國に於ける一般勞働階級の自覺と團結力とが現在の如く低級である限り、彼等の同情も亦勞働議員から離反するであらうと豫想されるからである。尤も時としては、議會からの除名も、公衆からの擯斥も、一種の宣傳手段として役立つこともあるが、それは極めて變則の場合であつて、いやしくも選擧を爭つて議會に入つた以上は、できるだけ長い間其資格を維持し、できるだけ多くの機會に其發言權を行使することが、第一の肝要事であることは言ふまでもない。而してさうするがためには、其言動を議會及國民が認容し得る程度、即ち現行憲法に牴觸しない範圍内に局限することが、何うしても必要な條件となるのである。

○

顧れば勞働總同盟が公式に其主張の中から、普選實施の要求を撤廢したのは、大正十一年十月の大阪大會に於てゞあるが、總同盟の中央委員會が普選促進運動から脱退するの決議をしたのは、その以前即ち同じ年の一月であつた。當時彼等が發表した聲明書を讀むと、先づ第一に「吾人が議會主義に反對なるは旣に明かである」と喝破してゐる。彼等が何故に「旣に」と言つたかは、私に取つては疑問である。何となれば大正十年の總同盟大會では、普選運動廢棄の提案が否決されてゐるからである。が其詮索は姑く措いて、次の一節を讀むと、「併し吾人は吾人の理想實現のために當然必要なる政權獲得運動即ち政治運動を拋棄するものではない。」と述べてゐる。之に依ると彼等は議會制度に依らないで政權を獲得しやうと志してゐるのである。知らず其手段は如何。要するに直接行動の外には何もないではないか。聲明書は更に記すらく「議會主義は妥協的であり、改良的である」と。若し其理由で議會政治を否定するならば、彼等の往くべき途は徹底的なるプロレタリヤの獨裁と、革命的な解放運動より外にはない筈である。從つて此聲明書に含蓄されてゐる趣意が、今日尙總同盟中央委員會の頭腦を支配してゐるとするならば、彼等が普選の下に選擧權を行使しやうとする根本の意圖は、疑ふの餘地がないやうに思はれる。

次に大正十一年十月の大會に於て可決された總同盟の綱領、宣言及主張を吟味しやう。先づ綱領の第二項に於て「我等は斷乎たる勇氣と有効なる戰術とを以て、資本家階級の抑壓迫害に對し徹底的に鬪爭せんことを期す」と記してある。特に「徹底的」と記されてあるところを見ると、協調主義を絕對に排斥して、挑戰的な階級鬪爭を遂行する意味と解せられる。又それは綱領の第三項に謂ふ所の「我等は勞働者階級と資本家階級とが兩立すべからざることを確信す」と言ふ辭句とも照應してゐる。そして「我等は勞働組合の實力を以て、勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す」といふ一句は、彼等の最後の理想が社會組織の根本的改造に在ることを明示するものであることは贅言を俟たない。

次に彼等は宣言の中でかう言つてゐる。「內に於ては資本家階級の全國的經濟聯盟の成立あり、政府の社會局の新設あり。其統一的威力を以て事に當らんとするの傾向が鮮に見える。之に對して勞働者も亦全階級の努力を盡して決死的奮鬪を試みんとするの意氣盛んなるものがある。これ我國に於ける階級鬪爭の進展を雄辯に語るものである。」

此文章に依ると、日本經濟聯盟も社會局も、要するに日本の資本家階級が、勞働者階級の抑壓を目的とする「統一的」戰略に基いて設立されたもの丶やうに、彼等からは見られてゐるのである。言ひかへれば政府と資本家とが協力一致して勞働者に對する大規模な敵對行爲に出でつ丶あると、彼等からは考へられてゐるのである。之が事實であるとするならば、定にゆ丶しき大事である。彼等が之に反抗すべく「全階級」の努力を糾合し「決死的」な奮鬪を試みやうと力むんでゐるのも宜なるかなと言はなければならぬ。が實際經濟聯盟と社會局との間に、かゝる統一的協働があるか何うかは、世人の常識によつて判定さるべき問題である。

此宣言の末文に「我等の陣容を充實し以て理想への戰線を進めて行く爲には、運動、戰術上種々考慮を要すべきもの丶存することは明かである。例へば……空漠なる形式的論議を避けて實質的效果のある現實政策に心を用ふべき事」と述べてあるのは注意に値する。吾々は未だ彼等の所謂現實政策の何なるかを明かにするを得ない。併し彼等が主張として掲げてゐる七項を見ると、最後の「經濟的行動の全國的協力」だけを除けば皆現實政策に關した題目のみである。即ち八時間勞働の實施、最低賃銀の設定、夜業の廢止、治安警察法の撤廢、勞農ロシアの承認、メーデーの全國的休業之である。

が茲に吾々の甚だ怪訝に堪へないことは、右の現實政策六項

の中、最後の勞農ロシアとメーデーとに關する二項を除いた前の四項は、何れも現行法規に關するものであつて、議會の立法作用に依らずしては、之を改廢することの不可能な規定であるといふ一事である。言ひかへれば此四項の主張は、議會主義を理想として是認しないにしても、現存の議會制度の機能に俟たなくては、如何にしても實現することのできない要求なのである。既にさうである以上は、彼等の此主張を貫徹するに必要な前提條件は、現在の議會の實質が彼等の主張の合理性を認識し得る程度に進歩しなければならぬといふことである。しかも此議會の進歩は、議會そのものゝ否認からは生れないで、議員の思想的改善によつてのみ可能であり、議員の思想的改善は選擧法の改正に依ることが最も捷徑であることも自明の理である。然るに彼等が曾て是等の立法的主張と同列に置いてゐた普選實施の要求を撤廢して、議會主義否認の態度を鮮明にしたに拘らず、依然右の立法的主張を維持してゐるのは、私に取つては如何にも不審千萬である。要するに之は、彼等の思想上の矛盾、戰略上の不統一を暴露したものではないかと想像せられるのである。

が併し、これは別問題として、右に述べた綱領と宣言とを精讀することによつて、吾々の受ける印象は、勞働總同盟が飽くまでも社會革命主義を信奉し、階級鬪爭に邁進しやうとするの意圖を藏するものであるといふことである。それと大正十一年一月の中央委員會の議會主義否認の聲明書を照合するならば、今回新に中央委員會の發表した選擧權行使の聲明の眞意が、議會立法への貢獻ではなくして、寧ろ議會政治の撹亂に在ると見るのが合理的な推測のやうに思はれるのである。少くもさうである方が彼等としては論理上當然の歸着であることは爭へないのである。

併し、今假に綱領や宣言に重きを措かないで、彼等の所謂「實質的効果ある現實政策」に對する用意と、主張として揭げた法律改正の要求とに重きを措いて考へるならば、或は彼等は、曩の議會主義否認の聲明を撤回し、新に議會主義是認の看板を揭げるに至つたものかとも想像されぬことはない。若しさうであるならば、彼等は數年來のボルシエヴヰズム信仰を拋棄して、英國勞働黨或は獨逸社會黨程度の社會主義にまで改宗したものと認めて可いわけである。

○

私一個の立場から言へば、日本勞働組合運動の主流を代表する勞働總同盟が、數年前から陶醉してゐたボルシエヴヰズムの夢から醒めて、第三インターナショナルの立場から、第二イン

タニナショナルの立場に移ることを希望するものである。何となれば、若し彼等がさうしないならば、日本國民に固有の國家的觀念や道德的思想や、政治的背景や、社會經濟の實狀が、日本に於ける勞働組合の運動の發達を著しく阻害して、假令僅少の精鋭を送ることはできたとしても、大多數の勞働者を廣く堅い基礎の上に組織的に結束することは、到底不可能であるからである。大衆運動の成敗を決するものは結局「數」である。線香花火的な成功は少數者によつても得られるかも知れぬが、恒久的な勝利は何うしても多數者の協力に俟たなければならない。組織あり統制ある大衆のみが「解放」の榮冠を戴き得るのである。しかもかくの如き大衆の結束を實現し得る、殆ど唯一と言つても可い手段は、理論で彼等を導かないで、實感で彼等を導くことである。然らば彼等の實感は何によつて動くか。それは彼等が無意識の間に祖先から承け繼いだり、社會から感化されたりして、自然に彼等の本能の中に融化してゐる感情によつてゞある。勿論彼等の本能的感情も時と共に變化して行くものには相違ない。が、それは現實的な勞働組合運動の考慮に入るべく餘りに長い年月を要する。勞働組合運動が單なる學説や思想の宣傳に甘んじない限りは、彼等の主義も綱領も、戰略も戰術も、常に現實を基礎として考案されなければならぬ。露西亞、英吉利、獨逸、亞米利加、各々彼等に固有の現實を有する。ボルシエヴヰキの革命が成功したのは、一九一七年秋に於ける露西亞の現實が偶然彼等に幸ひしたからである。しかもそれは他の國他の時代の革命運動者が、到底再び望むことのできない稀有の偶然であつた。かゝる稀有の偶然に出くはさない限り、獨逸の社會黨や英國の勞働黨が純理的には半熟不徹底なる態度を固持してゐることは寧ろ當然であつて、彼等としてはそれが最善の戰略なのである。それを勞農露西亞のみに適合する理論に依つて非難することは、徒に彼等の反感を挑發するだけであつて、決して彼等を善導する所以ではない。第三インターナショナルの世界的宣傳が結局失敗に了つたのは全くそのためである。かういふ意味からして私は、この數年來餘りにボルシェヰキズムに傾倒して、日本固有の現實を無視する嫌ひのあつた勞働總同盟が、多少なりとも彼等自身の眞の現實に目ざめて、主義戰略の立て直しをすることを、心から彼等に望むのである。

從つて又私は、彼等の選擧權行使の根本趣旨が、議會主義の否認でなくして其是認であり立法作用の攪亂でなくして、それへの眞面目な貢獻であることを希ふて息まない。何となれば私は日本の勞働組合運動の前途の光明は、必ず其處から輝き初めるであらうことを信じて疑はないのである。

普選の實績を擧ぐ可く新有權者への辭

堀江歸一

始めて權利を得て、之を實行すると云ふことは、人に取つて大なる興味を惹く。私の如き二十年ばかり以前に、始めて衆議院議員選擧權を得た時には、餘程之を貴重なる權利であるかの如くに考へ、早速選擧場である區役所に赴いて、自已の意中の人である或る候補者の爲めに、其候補者や、運動者から何等特別の依賴を受けて居らなかつたに拘はらず、自已の一票を投じた記憶が未だに腦裡に殘されて、今日まで一の印象と爲つて居る。固より其時私の投票した人は多數の投票を收めて當選したものゝ、當選後に於ては、必ずしも選擧運動の際に聲明した言質を全うしなかつた。隨つて私としては何だか其人に欺かれたような氣がして、選擧の投票と云ふことに餘程興味を失つたし其後は何時も私の一票だけで候補者の當落が決定される譯でもあるまいと云ふ立憲國民としては甚だ相濟まない考へであるが、棄權を續けて居るものゝ、選擧權を始めて得た時の投票に對する興味は何としても忘れられない。制限選擧の下に、選擧權を獲得した場合に於ても、尚ほ斯の如くである。然るに今度は多年國民の要望した普通選擧が實行され、戶主であると否とを問はず、又納税金額の多寡に拘はらず、總て日本國民の或る年齡に達した者には選擧權が與へられるのである。斯くて多年政治上に於て、差別的待遇を受けて居つた人々が漸く其差別された柵內から自由の地に放たれて、自已の意思に依つて政治上に行動するを得るに至つた次第である。

我國に於ける普通選擧制たる、今日之を實行することは、遲きに過ぎこそすれ、決して早きに失するものではない。然るに我國には一部の保守頑冥なる思想家あり、又一方には權略を事とする政治家があつて、普選の實行を喜ばず、現に原敬氏の如き、自已の率ゆる政友會を代表して、普選を以つて、社會組織を脅威するの虞れあるものとした。即ち普選實行の曉に於ては何人も同等の選擧權を持ち、一家に就て云へば、家長たる戶主も被扶養者たる家族も政治的には一票の選擧權所有者であつ

て、左に政治上の意見を異にする場合には、家長の權威も遂に家族の意見を左右するに難く、結局家族制度を破壞するに至る。又一の工場に就て云へば、事業主も勞働者も共に政治上に於ては、同等の權利を有すると云ふことが後者の前者に對する服從的關係を消滅せしめ、勞資の關係を對等ならしめ、又之を危險ならしめると云ふことが論者に依つて杞憂された所である。

或は普選の下に於ては、政治が急進に爲ると云ふ掛念もある。然し一國政治の趨勢が急進に走るか、保守に留まるかは程度問題であり、又其孰れを以つて可なりとするかと云ふことも時勢の如何に依つて、定めなければならない。而して實際問題として、我國の政治の何處に急進に失する點があるか、抑も亦急進主義の下に、弊害を蒙つた跡が何處に求められるか。明治の初年なれば兎に角、今日に於ては、私は寧ろ社會萬般の事物が總て固定し、停滯し、却つて幾多の弊害の釀されることを恐れる位であつて、普選の實行は我國に取つて、適當なる刺戟劑と爲ると思はれる。

或は普選が實行されたならば、勞働運動が過激に爲るであらうと云つて、恐怖する向きもある。然し勞働者の如き從來、資本家の權力下に壓迫されて居つた階級が普選の下に、政治上に力を伸して、資本家と對等に立つと云ふことは、社會全般の權衡を保つ上から見て、最も喜ぶ可き所であつて、斯の如くして能率の大なる、責任を重んずる勞働者の輩出することを望むを得るのである。

若し其れ普選を以つて、病的思想であるとし、又國體に反すると云ふ說を唱うる者に至つては、論者自らの病的に非ざるやを疑ふ次第であつて、斯る說に對しては、一顧だも拂ふ餘地あるを見ない。

以上述べる如き次第であつて、普選に對しては從來、恰も黑白に比す可き正反對の議論が行はれて居り、私共普選贊成者は普選を以つて、國民教育制度と相並行して、行はれ可きものと考へる一方に、反對者は普選の齎し來る弊害を恐れて已まない。而して普選は今や現實の問題と爲り、其可否が事實に依つて、裁斷されることに爲つた。隨つて私は普選贊成者の一人として、普選の下に、普選を認めて、新に候補者と爲つて、選擧場裡に立たんとする人々に向つて、種々の希望を開陳せざるを得ない。

第一、普選の實施と共に、新に候補者に立つ人は飽くまでも普選の趣意を實現し、政弊を革新する覺悟を持し、政爭に權力金力を利用せず、言論を以つて、終始すること、

第二、政見を發表するに當り、人氣取りや、場當りに墮せず、

自家の信條を率直に披瀝し、且つ言責に對して忠實なること。

第三、普選の實施に乘じて、志を政治に伸ばさうとする人の政見は必ずデモクラチツクであり、又ラデヰカルであるのは、當然であるが、之を實際に發表するに當つて、殊更に奇を衒つて、他の誤解を招かざるの注意を爲すこと。

第四、普選を利用して、候補者たらんとする人々は勞働者、青年等の間に多かる可き譯であるが、彼等の間に感情の背馳や、利害の衝突があつて、同士討を演ずることもあらうが、斯る場合には小利を捨てゝ、大同に就くの精神を以つて、一人にても多數の同志の選出を期する點に努力すること。

幸に普選の下に、新に候補者たらんとする人が以上の覺悟を持ち、又以上の態度を示して、選擧場裡に出るからには、新に選擧權を獲得した新有權者にも亦自ら或る覺悟がなければならない。私は新有權者に對する所望の個條を左に列記する。

一、自己の新に行はんとする選擧權は自己又は同志が多年普選實現の爲めに、運動した結果であつて、最も神聖、貴重のものである旨を銘記すること、

二、候補者の演說會には萬障を差繰つて參會し、其所說を聽聞するなり、疑義を質問するなりして、其言論を確め、然る後に一票を投ず可きか、投ず可からざるかを決定すること。

三、新有權は各自の住所、職業其他の關係を基として、成る可く團結を作り、各自の適當と認めた候補者に對しては、一團擧つて、投票を與へ、以つて新有權者の威力を發揮するに勉めること、

四、新有權者は從來納稅額を標準とした選擧制度の下に於て常に選擧權から除外され、自己の代表者を有せざる議會に支配され、政治上に不平等なる取扱を蒙り、幾多の壓迫抑制、總て此點から生じたものであるとすれば、普選の下に、眞實自家の代表者として、從來の枉屈を除却し、各自の權勢を伸張するに足る人を選擧す可きであつて、此見地に於て代表者を物色すること。

果して普選と共に、以上の諸個條が有權者に依つて、又候補者に依つて實行され、以つて普選の効果を全うするかどうか、私の注視して已まざる所である。若し其れ普選の効果豫期の如く爲らず、議會に何等の新生面を開かしめることが出來ずして一方に無責任不誠實なる議員をして多く議席を占めしめ、普選と爲つて却つて議員の品位を傷けると云ふようなことが出來し、地下の原敬をして名を成さしめるが如きことは萬々なかる可き所と思はれるが、私は飽くまでも此點に就て、普選贊成者の監視を望んで已まないのである。



日本近代詩の浪曼運動

日夏耿之介

引。昨秋十月號本誌上に公けにした「日本近代詩の成立」は、草創の頃から明治三十年迄を概說したが、本篇は、それにつづく三十年代より明治末期に及ぶ十五年間の日本近代詩の展開の過程及びその意義とその背景である社會及び一般思想界の起伏の概狀をうかゞつてみようとするのである。

もと、詩史といはんよりは詩史論の性質を基準として、詩史の役目をも分擔せしめようと企てたものである故、文献の考證、事實の詮索などは、多く斷考の道程を略いて結論のみを一言した。

緒言

さきの「日本近代詩の成立」篇で述べた大體は、日本語に密接な關係を有してその型式を存續して來た、七五、五七などの正格の詩歌の格調は、古く、山上憶良の問答歌、阿佛尼日記などから多く「古今」以後の詩文に散見し、長歌、今樣の名を以て稱され、萬葉長歌二百五十首、旋頭歌、混本歌、連歌等も等しく右の格調を基調とした長歌類であるが、それらが短歌のやうな詩型の上の本質的な便宜がなかつたために榮えずに明治までつづいて來たのが、明治十五年より創まつた「新體詩」は、こゝろを西歐の新詩にとり、形を在來の七五、五七その他にとり、漢詩、短歌、俳句等の舊詩型の抒べえざる新時代の新感情の自由にして藝術的な清新の表現を理想として出發したが爾來

明治三十年にいたる十五年間に、草創時代の前期を經て、原史時代の後期をば、青年詩人透谷の慘死、諷諧詩家梅花の狂死を時代の犧牲として意味ぶかいその第一期の幕を閉ぢた、それ迄の次第を述記したのであつた。

二十七八年戰役は、在來の國民感情が、十分政治經濟思想上の基本に統制せられざりしを、一氣にこの事件によつて集中制約せしめ、國家的自覺を國民のあたまに注入し、十年代末期から輸入したプロイセン風の國家主義を全く本質的な傳統の感情と結合させて、强大な深厚な國家組織にしてしまはふとした企てに成功する機會を與へた。

歐化思想の反動としての日本主義と吟味せられなかつた日本的なるものの再在としての日本主義と、この二つが日本主義といふ一つの思想に抱合されて二十年代末から三十年代初期にかけて活潑に活動した。さういふ感情が趣味としては、江戸趣味といひ、日本趣味といふて衣食住の末端にまであらはれるにいたつた。しかも、同時に、淺薄な鹿鳴館趣味が消失して、西洋的なるものの眞に模倣すべき物的心的のものを再び顯微鏡にかけてとり入れる準備が初まつた。內地雜居さへ、それにひとつの機會を與へた。

獨乙哲學が入つて來たのは二十年代からであるが、丁度三十年前後にあだかもその全盛期を經過した。すなはち十年代に入つて來た英米經驗論哲學が二十年前後にその絕頂點を通過してから滿十年の後のことである。が、例へばヘルバルト流の獨乙敎育學說は二十年代に於て早くも夥しい成果をあげてゐる。畢竟するに、これらの事績を見てその間に貫流する思想精神に、明治半世紀間を通じて流下する啓蒙思潮、客觀論哲學、主智主義の思想であることが判る。西洋でルネツサンス以後十九世紀に及ぶ近代の我の自覺史を、日本では明治維新以來約五十年間に經過してしまつたのである。從つて、科學の輸入といひ、民權思想の橫溢といひ、資本主義の確立といひ、國粹黨の復活といひ、基督敎の一時的屏息といひ社會の發展の基調をなしたこれらの事實の背後にあるものは、いはば明治式實證主義の轉展にあたつての一張一弛であつたので、その間に時あつて勃興し流行した反實證主義思想なるものは、尙思想の嚴密な試練を經過してゐない淡たる傳統的の理想主義的精神、無意識的なる、素質としての「日本感情」により背景を與へられたことがあつたにすぎない。が、この傳統のエスプリは規模に於て狹小であり、源流に於て異邦的であり、賦性に於て排反省的であるにしても、維新この方、外來文明の咀嚼にあたり一種の掣肘となつて、漫

然たる彌漫の弊から救ひあげて民族本來の頽敗の墮落への擁護にある力となつた點　注意を蔑にすることの出來ないものである。が、そのために起つた多くの必要以上の干渉や差出口やが大正期文化の集大成の上に少からず支障をなしたことも事實である。凡て民族は運命である。

プロイセン風の君權政治が明治初代の政治家に便宜とせられたことは尤もであるが、その政治上の獨乙主義も、三十一年六月松隈内閣の成立から英國風の政黨政治に向つてその後より今日に到るまで愉悦する機會を與へることになつた。感情の素質に於て少からずフランス的なる日本人が、政治の精神に於て類似するドイツ的なる方策を採用し、それが、次第にイギリス的なる型式にまで緩和せられたといふことは、明治半世紀の流轉がいかに世界大の廣場にあつて五百年の歳月をわずかに五十年に縮めた急激の發達であつたかといふことを語り、また、日本的なるものの本質が、明治期の間にいかに多くの世界的なるものの洗禮を受けねばならなかつたかといふことを示し、さらに個人覺醒の悲劇がいかに舊來の國體精神の上に行はれたかといことを表はす證左となるものである。

日清役が資本主義の發展に力となつたとともに、個人主義の内容に深化を與へて、個性の自由の信念に立つ原始キリスト教的精神が、傳統的國粹感情に行くさきを遮げられ、經濟文化の歐化と精神文化の世界化とが急激に實行されたといふ點で、この戰爭後の日本は在來にない混亂錯雜を極めた。その複雜化した社會心が感情の方向にあらはれた詩歌の世界は、表面、「古今」の典雅を追つたり、元祿の風流にあこがれたり、あるいは希臘羅馬の古藝術の自由性をしたひ、プリ・ラファエエライトの風雅を旨としたりしてゐるものの、その閑靜なかたちの奧にわれらは正しく確かに動いて來た十九世紀浪曼精神の情熱と迫力とが個人と外國との概念とそれらに對するおのおのの態度との上に厚く強く重い運動を示して來たことを識る。

十九世紀の實證主義はその浪曼精神の盾の半面となつたが、明治のポジティイギズムもその裏打ちとなつたものはこの期に初まるローマンティイツク、スピリツトの昂揚である、人間の本性のふたつの型がかうして時代や個人やの精神の上に相互の必須關係を持してあらはれてゐる、明治中期のリヤリズムは細叙主義の意でその觀照のこゝろは自然主義でなくてロマンテイシズムであつた。硯友社派の小説があかれた時一しきり小説が衰へた。三十年から四、五年にわたる間である。自然派の意識的主張がそれ迄の淡たる寫實主義を改造して硯友文學を文壇から完全に蹴落すまでの暗黑期である。

木村鷹太郎や高山樗牛の日本主義が詩壇に及ぼした影響は尠い。古文學の飜刻や古神話の吟味は、日本主義の前提として二十年代からその後つゞいて行はれ、漸 淺薄な歐化主義から脱却して、史學、傳說學、考古學、古文學史の方面への新らしい態度が確定して來たが、一般的にいへば、淺薄な歐化思想は、輕卒な國粹主義と双在して時代の空氣を濁らせてゐた。天才の芽生も末枯れてしまふ民族の毒風である。社會の發達も逡巡しがちな時代の運命である。明治藝術史の問題はわれら日本人を寂しくする。

が、歐化的感情から解放されんとする「若き日本人」の憧憬は雄渾で熱心であつた。詩歌史の業績はこの感情のあとを探ることに外ならぬ。

第二期時代

明治卅一年――明治卅七年

こゝに所謂「卅年代」とは、創草已來前後二期を有する第一期を經て、漸く大展開の第二期に入り、三十八年後より、詩歌の象徴時代すなはち第三期に移つて、次期第四十年代前半の明治末期に接する明治新詩史に第一の重要時代であつて、大觀すれば、明治新詩そのものが全くこの十年間に熟成した藝術の花期(フロレッセンス)である、また、明治文化の詩的發靡の次第に整つて來た文明の開花時代である。

明治卅年は、當代の「帝國文學」記者が、「新體詩の隆盛なりし昨年の如き未だ曾て見ざる處なり。雜誌にして之を掲げざるものなく、二三專門の雜誌さへいづるに至り、詩集の世に出でたるものまた甚多し。」(三十一年一月號)と云つてゐる通り、「天地玄黃」、「抒情詩」、「この花」、「松蟲鈴蟲」、「青葉集」、「青年新體詩集」、「愛吟」及び評論集「かげ草」を出し、而して此第二期に晩翠と並んで君臨する島崎藤村の處女詩集「若菜集」を出してゐる。二十七八年役の國民感情が漸く沈靜して、戰後に必ず伴ふ享樂期の當然なる所産として戀愛詩が時花り出した。いはゆる「星と菫」時代の黎明の頃である。しかも三十年四月、大町桂月は「この花」を評して「物のあはれは、戀よりぞ知る。……古の歌人はよく戀を歌ひき。日本の古歌より、戀歌を去らば、少くとも和歌の妙味の六分は沒了すべし。明治に至りて、木葉詩人は多く沒趣味の歌も石塊の如く到る處にころがりをれど、未だ戀歌を作る人あるを聞かず。明治の歌人はそれ木石乎。」(圏點在原文)そして桂月は語をつぎ、實際は歌つてゐるのだが、いふを憚つてゐるのだといふ。何をか憚る。曰

く、「閲歴とか實地の經驗とか少しは種があるかなどと速了する野暮な讀者多くして、動もすれば累を作者の人格に及ぼす處あれば也。」と斷じ例證を落合直文の

さるに己れを兄と呼び
さるに弟と彼ゞ呼ぶ

云々の詩を評して啻は師弟間の同性の戀を歌つてゐ乍ら題を「寄春雨戀」などととぼけてゐる。「世上の俗物を憚るやうでは眞情を吐きたる傑作の出來るべき筈」がないと彼一流の卒直な冷罵を加へてゐるが、此時代已來次第に情思の纎細なる搖曳を捉ふることを旨とするに到り、戀愛詩の如きも漸くかなり露骨に詩人の感能の上にひびいた激情のかげを描くに成功するやうになつた。

その戀愛詩時代初期のカーテン・レイザは何であつたか。國男、獨歩、湖處子、玉若等に滲にじんだ昧爽のおぼろかげは認められるが、その東天の紅第一線を投じたものは藤村の詩集「若菜集」に外ならない。

第二期　前期　（三十一年―三十四年）

一　島崎藤村

島崎藤村は信州木曾に生れて東京に人となり一家の困憊と一身の惱苦との數年間を經て、「文學界」により初めて詩境に見參した。

「若菜集」は放浪して仙臺名陰町の客棧にあり、教師として東北學院によつて衣食した二十九年秋より三十年秋迄約一年間の作である。主として三十年春迄の作集である。その年の八月二十九日に春陽堂から初版が出た。この靑い若菜の一篇は、序文に、

天地みなつみいれし篇の若菜かな　　倦知翁

とある包合の象徵であり、「吾歌はまだ萠出しまゝの若菜なるぞや。」といい、

春はきぬ
　春はきぬ
うれひの芹の根を絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萠えよかし

――「春の歌」

とある青春のサムボルであつた。まことに國民感情の「春」、人生の「春」、藝術の「春」を悉くこめて

心の春の燭火に
若き命を照らし見よ

──「醉歌」

と歌ふ愛惜と奮躍と春思と驚嘆との民族の聲がこの集のところ〴〵に稚いながら醇眞にひゞかれる。

をとこの氣息のやはらかさ
お夏の髪にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰のごとくはしるとき

といひ。

をとこの黒き目のいろの
お夏の胸に映るとき
をとこの紅き口唇の
お夏の口にもゆるとき

──「四つの袖」

といふ「やむときもなき清十郎」とお夏とを歌へば秋之介等にない官能の最初 幼いながら簡朴にきかれる咏嘆がある。その外、「相思」といひ「傘のうち」といひ集中戀情詞の類は頗る多いが何れも右の埒内にあるものと云つてよい。その他のものでは「哀歌」と「秋風の歌」と「深林の逍遙」とをあげえよう。

力を刻む木匠の
うちふる斧のあとを絶え
春の草花　彫刻の
鑿の韻もとどめじな

──「深林の逍遙」

といふ破題は句法揺曳の具合といひ漢字と假名字との詩的使い分けの正當といひ、重く、考へぶかく嗟嘆する感情のいきが感ぜられる。名手の詞である。が、全篇この氣息で進んではゐない、惜いことに段々調子が亂れて處々感情の蹉跌を感じることが多いけれども、集中の作品としては之を推さねばならぬ。

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
　尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隱る

ふりさけ見れば靑山も
色はもみぢに染めかへて

霜葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩す秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき

悲しいかなや秋風の
秋の百葉を落すとき
人は利劍を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も
息吹まどはす秋風よ
世をかれぐ＼となすまでは
吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の
壺の中なる秋の日や
落葉と共に飄る
風の行衛を誰か知る

七五正調に據つて季秋の詩感を言語の精靈に托した文語の詩美を最大限に發揮した「秋風の歌」は、假令んば、「人は利劍」云々の如き膚淺衛俗の感慨や、「高くも烈し」云々の如き氣力尠き散文律に墮りした凡常の術句がないではないが、「しづかにきたる」の破題は平凡な起句でしかも彼の詩情の姿を代表した第一スタンザであり、「ゆふべ西風吹き落ちて」涼颯の秋氣たもとに迫り、落葉を修道の旅に鹿島立つ婆羅門僧に譬へた名パッセイヂ、及び「あゝうらさびし天地」の最終聯に感ぜられる廓落たる秋天に孤影を投げる落葉のむれと、姿なきその運搬手・風のちからを歌つて、いはゆる全般幽微の情趣の中に、秋景と人の身との纏綿した相關の理法と、聲一ぱいに泣きはなつて見たい小さい人間のあはれさを鏤めた鹽梅は、（よし、七五の正調に附隨する感情固化の弊や、新時代の新感情を描出して新らしい情趣を創造するには尚多くの力と美とに於て不足勝ちであつたうらみがある個所などの見のがしがたい諸點を數へねばならぬにしても）、以上に縷説した詩情詩美の巧みとさゝえとの表はす通り他の何人にも卓れて當代感情の代辨であり、次なる時代への一致語であり、明治中期の國民感情の美しい頂點を示した雄篇であつたことは爭はれない。

藤村は、つゞいて三十一年六月「一葉舟」を發市して詩五篇に文九篇を收め、同じ年の十二月「なつぐさ」を編んで十七篇の新詩を公けにした。「一葉舟」に蒐めた作詩には「白磁花瓶賦」

以外佳品はない。「なつぐさ」集中「晩春の別離」は

　流れは空し法皇の
　夢杳かなる鴨の水

行春の古都に旅してゆく友を送る一片の情思で、そのおもひは、

　時は暮れ行く春よりぞ
　また短きはなかるらん
　恨は友の別れより
　さらに長きはなかるらん

友誼の深き手まさぐりは古藝術の回顧となり、阿典諸神廟の憧憬ともなり、

　かのバビロンの水青く
　千歳の色をうつすとも
　柳に懸けしいにしへの
　琴は空しく流れけり

大雅をしたふ「君にしあれば」、藝術の天にかゝる日も君が旅行く路々を遍照して詩囊豐かに歸ることであらうが、それ迄は、

　あゝいつまた相逢ふて
　もとの契りをあたゝめむ

といふに終る卷頭篇であるが、作品といふものではない。技巧の進程はうかゞはれるが、歌ふその感情に平凡であり非力であり何の聯想感をも惹起する力がない。無理に情感を押し進めてたゞ美しく優雅に裝ふとした意圖さへうかゞはれて、藤村の缺點と美點とが一所に集められた感のする作である。そして、その中に一番作者のエンフアサイズするらしく思惟せられる藝術愛の浪漫精神は、早くから彼の若い心胸に泊つた、明治二十年代末期の藝術至上主義思想の流れから受胎したもので、若き「若菜集」の詩人が昔ながら戀のおもいを鮮らしい心で抒べたラブ・ソング（「初戀」、「相思」、「傘の内」等）とともに、松島瑞巖寺の木彫によせて唯美主義感のおぼろなほのかな香りを燻らせた詩篇を見れば、「なつくさ」集中、

　せめて藝術を戀ひ慕ふ
　深き情を持たしめよ

（「曉の誕生」）

といふ稚淳な心持ちの淵源は解される。從つて、

　人の世はげにとどまらで
　時につけつつ動くとも
　藝術の國の靜けさは
　この池の面に似たるかな

（「月光五首」）

といふ象牙塔上の若き感慨、また

藝術(たくみ)の花はむかしより
人の慕ふにまかせたり
（同上）

とか、

ともしび乘りてよもすがら
遊ぶといふもことわりや
藝術(たくみ)は長し月消し
この命こそ短かけれ
（同上）

といふ武帝古詩に事よせたアルス・ロンガの熱情も、「一葉集」の「白磁花瓶賦」に

みしやみぎはの白あやめ
はなよりしろき花瓶を
いかなるひとのたくみより
うまれいでしとしるやきみ

夢に戲れ夢に醉ひさむるときなきわが友の名殘はこの白き一個の花瓶にそのあつき涙のみが殘つてゐるとて、「光は高き」小さき瓶にことよせて情念の紛糾を歌つた詩人の悲哀も皆ともに當代の浪曼思想の顯現としてその後三十年代に及んで極度まで發展した藝術主義の酵母となつた當年の新感情である。しかもこれらが時代の先聲を放つて「藤村詩集」の史價を重からしめたとともに、更にもひとつ彼は「新潮」に漁人を歌ひ、「農夫」に農人や鍛冶工を歌つて彼の思想の三十年代末期後今日に至る道筋たる人生主義者的基調をはやくも表はしてゐるのは注心しなければならない。正しくこの頃の彼の詩情には此二者が雙在して私かに相戰つてゐたもので、それが年ふるにつれ、漸く後者のかげが濃厚になり、「文學界」時代の上田敏、平田禿木らと逝かに離れて、彼らが、「明星」の運動に力を添えて三十年代浪曼詩の有力な基礎をすゑたに反し、彼のみひとり、詩よりやがて小說に轉じて自然主義運動の驍將の一人としてその業績の重大な部面を分擔し今日もなほその作風に於て人生觀に於て眞摯にして溫藉、着實にして實際的なる傾向の上にイ立してゐる仔細を判明しうるのであるが、しかも今日とても彼の人生藝術には一味の藝術主義の烈しい香がかほつてをり、昔の一青年詩人より、今半白の老小說家になつたその三十年間の藝術的精進は畢竟この二者の自然なる落付を豫想する自己心內の爭鬪であり、藤村らしい今日の藝術が確かにこの二者の混迷紊雜の間に

醸成せられたものであることが判明する。

越えて二年、三十四年十一月發行の「落梅集」は、藤村の詩的欣求の最終の聲であり、彼の夢多かりし青春を閉ぢる輓歌であつた。

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色はづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

（「小諸なる古城のほとり」）

人生流蕩の遊子がかなしみ、千曲河畔の草もゆる岡邊に日に溶け水に流れて綿々とつきせぬおもひ、抒情本來の姿を正格に持して「青年日本」のリリカル・クライを見せたものがこの集であり、この集の初頭を飾るこの篇であつた。尚ひとつ同じ心の強く出てゐるものに「椰子の實」がある。

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身の浮寝の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂

海の日の沈むを見れば
激(たぎ)り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々
いづれの日にか國に歸らん

思ふに、藤村の詩品の強みは、その靜雅な情操の流麗音(カンタビーレ)と、二律 反の思想の内訌美との抱合から産出する淑やかな忍び音の悲歎である。この「優美」は舊日本の壯年にも親しいものであり、新日本の青年にも親しいもので、凡そ當年の讀詩家の欣求する詩美の主調は、この青年詞人の手によつて奏でられた新節奏のなかに發見することが出來た。

なほこの集には、さきの「なつくさ」篇に芽生を起した實際生活の描寫、實人生直接の感慨の詠嘆等の次なるステップへの進歩がある。すなはち、「勞働雜詠」の連篇に、「朝」を感じては

諸羽うちふる鷄は
咽喉(のんど)の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰鬪(たゝかひ)の
よそほひせよと呼ぶかな

と悟り、

あゝ綾絹につゝまれて
爲(な)すよしも無く寢(い)ぬるより
薄き襤褸(つゞれ)はまとふとも
活(い)きて起(た)つこそをかしけれ

と肯き、「晝」を歌つては、

生命(いのち)の長き戰鬪(たゝかひ)は
こゝに音無し聲も無し
勝ちて桂の冠は
はづかに白き頬かぶり

と稚く思念し、「暮」を吟じては、

あゝ勇みつゝ躍りつゝ
諸手をうちて笑ひつゝ
樹下の蔭を横ぎりて

家路に通ふ森の道
眠る聖も盗賊も
皆な土くれの苦一里
霧立つ空に入相の
精舍の鐘の響く時
あゝ驕慢と歡喜と
力を息に吹き入れて
勝ちて歸るの勢に
揭げよ樂しき秋の歌

と抒べ終つてゐる。が、これらは、未だ實生活の個々物の正視に入つたものではなくして、他の晩翠や泣菫や鐵幹や「文學界」舊同人らが全く思惟のなかなる感念の直寫に急であつた只中に、たゞ彼ばかりが一人、なほおづおづと、勞働の福音に耳傾け、農夫の業務に省慮して、生活に卽した何ものかを早くも詩料の中に整へようと欲した意圖を示してゐるにとどまるものにすぎないので、この方面に於ける彼の藝術的野望は七五五七の格調に入てゐる限り絕望と思つて、やがて自然なる轉向としてこの集を最後に散文小說の領土へと志すに到つた。

詩の埒內に住んでゐる間、彼は、「一葉舟」、「落梅集」等に數多くの散文を挿んでゐる。多くは、この頃より三十年代末期かけてさかんに行はれた「美文」の類である。美文とは何であるか。かつての文學中、われらは古俳人の俳文などにその適例を見る。今でいふ散文詩である。詩情の散文的表白である。散文律の詩的最大限の踏舞である。この型の特に靑衿者流のあいだにもてはやされた仔細は傳來の詩形である、短歌や俳句や漢詩やに、思想上の反動的原因からと型式上の斬新をあくがれる欲望とからして、全く同感を持つことが出來なくなつた處から、七五、五七、七八、八八の新調に新情趣をさかんに創造しようとしてゐる新體詩の方面に惝怳しながら、また、その型式の正格なる窮屈さに何んとはなき困憊を自然に感じて、つひに散文詩の自由な形によつて、いとせめて靑春の詩的汜濫をとり靜めようと考へたのである。從つて、その形は全く散文ではあるが、その中に盛られた感情は異常に強く激しい昂揚を示し、まつたく抒情詩の恍惚狀態にひとしい特徵をあらはしてゐる。

本邦の近世文章史を見るに、鎌倉室町から下つて急に德川期に入ると、そこに著しい形式の異動がある。五山詩僧の文學や雲閣雲上の禁廷文學やが、それ迄、多くは全く支那風を模擬した和臭のつよい漢文でなければ、昔ながらの古態を墨守した和文にかぎつて行はれたに反し、漢文の一般的普及と和文の近代化との二つの所因に基き、その二つの混淆した形が、市井より

發生した庶民文學の間から、まことは造花の如き宮廷、柳營などに直屬する形式化の死文學よりも遙かに高級な眞の藝術を目付け出すに到つたのである。

今日もなほ嗜讀せられる「伽婢子」「空穗猿」「艶隱者」をはじめ上田秋成の「雨月物語」「春雨物語」といひ、近路行者(都賀庭鐘)の「繁野話」「英草紙」といひ、錦文流、六樹園らの諸作といひ、それらの作に使用せられた文章の新味は、いふ迄もなく典雅清麗の和文の間に極めてエフエクチイーブな、且つ印象的な、金屬性の響音のつよい漢文の成語熟語が挿まれて一種奥ゆかしき調子の高い崇貴な文調を形成してゐたためである。その中にも、西鶴と六樹園とは漢語の使用程度に相違があり、秋成文と行者文とは文致の硬軟に甚しい異差こそあるが、大體から見て徳川の文章が此二者の自然な抱合に新境致を發いたことは爭はれない。

三十年代の「美文」は、前代の此文章の型式をそのまま套襲して、その形の中に於て徳川期にも明治初期にも見ることの出來ない效果をあげようと企てたのである。歐外の譯文がその一番立派な範を垂れ、桂月、羽衣、雨江合著の「花紅葉」、桂月の「黄菊白菊」、羽衣の「霓裳微吟」、雨江の「闇香疏影」、大和田建樹の「深山櫻」その他久保天隨、呦鹿庵、佐々木信綱兄弟、湖處子等の作品がそれである。後に新らしく立派な寶石の詩を散文の白檀木の中に彫りこめたものに上田敏、平田禿木があり、次いで内海月杖である。美文韻文云々の文集は當代の一番粋なハイカラな型として青年の憧憬の的を集めたのである。

わが藤村も亦「文學界」舊同人、禿木、孤蝶、秋骨、敏、楓口一葉らとともに美文の所作が多かつた。彼の文章は、敏の典麗もなく、禿木の清雅もなかつたけれども、その感情の眞率と優麗な姿態とは彼ら二人に次ぐ史價を持つてゐる。「西花餘香」に、「ある秋の日の夕ぐれ、サイモンヅ友と共にこゝに來りて徘徊さるあたはず。しばらく城壁にもたれて風光を賞するうち、ふと共友の倚りかゝれる古壁に左の如く記しつけあるを見出しぬ。そのことば。"I gazed, and gazing, wept the bitterness of fate." 讀む人は好古のサイモンヅ、ところは花深き以太利の古壁、記せしぬしを誰ぞと問ふによしなけれども、なさけあり涙あるはこの一語なり。知らずや、こゝろありて尋ねよれる以太利狂の旅人のみかは、朝夕こゝろなくこゝに來りて、われは眺め入りたり、眺め入りつゝ運命のはげしさに沸きぬと、古壁に倚りて涙を灑ぐ花のごとき君もあるべきを、」とあるは、「春詞」、「秋詞」、「亡友反古帖」「七曜のすさび」と共に詩に伴つて愛誦を呼んだ美文であつた。「七曜のすさび」は、木曜日の散

步、金曜日の懷舊、土曜日の音樂、日曜日の談話、月曜日の手紙、火曜日の新茶、水曜日の送別皆ともに新詩情のかゞやき、五月の海の晶光の如くに麗はしい詩情豐かな散文の作品であつた。

明治三十年四月の「帝國文學」記者は、「新體詩界の二大弊」として、古典趣味派の外形にとらはれ過ることと、新派の粗笨すぎることとを擧げてゐるが、思ふに、永遠にわたつて此調和すべからざる二者の二個の通弊は、その特徴とともに運命的なるものであらう。嶋崎藤村は、戀愛詩の纖弱、七五五七の外形化等の陷穽をひかえ乍ら上來述べ來つた如き佳作を出すことの出來たのは、彼が大槪を知るの聰明と、事にあたつて眞摯篤實であつたこととに歸すべきであるが、過去五六年間の勞作の結晶としての四詩集を通覽すると、當時の評詩家の鋭鋒をついに避けることの出來ない缺點も、從つて駄作の類も夥しくあつたのは止むをえない。

與三州といふ評家が曰く、「余は藤村が情思のあまりに涙もろく、情詩のあまりに嗟辭多きには、涙の源泉、長息の狹霧いかに深からん、とおもひやる位にて、もらひ泣だに出來ざれば、感動せむはおもいの外也」これは、外形の嘆咏事繁きに眼眩じて詩趣の成功不成功如何の程度に迄透入する識見のない粗雜な評家の言葉の代表的なるもので、この種の評家が大部分を占めてゐたのである。寧ろ藤村の詩弊は、多情多恨の情思が、外形のために同化しすぎて、性來甚だしく情熱的ではあるがその表白にかへつて內にわく殉情のあはれを少女の戀の如くに胸ひとつに包んで、包みかねた心のはじはじが自ら外に漏れる類の情念が彼獨特の立場であるのだが、表現された作品の上では餘りに冗長、散漫、宛曲、迂拙、薄絹へだてゝ麗人に向ふはがゆさがその何れにもつきまとふてゐて、「あまりに嗟辭多」いためではなく、感懷の表白に缺點があるから「もらひ泣き」も出來かねるのである。

しかも、もと〳〵彼は生の有意義を痛感する血氣の樂生觀から出發して、世運の非、一族の惱、一身の苦に惱んで人生遍旅の泊り〳〵の夜毎々々に路傍の花にも熱い涙を濺いでゆく底の感傷家であるゆゑ、彼の悲嘆は恒に否定の惱でなくて、肯定の苦から巢立つのである。纖弱にして雄渾の氣魄なしといふやうな趣味に偏した大ざつぱな、うち見のよい物言ひをしたがる當代評家の間に、彼の「纖弱」が攻擊せられたは是非ないが、彼らは彼の纖弱を攻めつゝ、結局は纖弱の詩美を嘆仰してゐたので、その間の矛盾を自ら悟る者は、少くとも文章の上では少かつた。

されば、若菜集の昔に「嗚呼口紅をその口に君に移さで止むべきや」と叫んだ熱情は、落梅集の胡音では「胸より胸に」

吾戀は河邊に生ひて
根を浸す柳の樹なり

とか

あゝわれも君にむかいて
草を藉き思を送る

とかいふ優婉の姿を帶びて彼の詩的通路を閉ぢるに到つた。沸々たる抒情詩人の激情かげをひそめて漸く流轉の相に黯然としておもひ深げに眺め入る散文家となつた。

二 土井晩翠

彼は能く理想の形相を描いて其内容を歌はず。——小山鼎浦

そのライヴル藤村が熱き情思から入つて蒼青い省慮に到つたに對し、土井晩翠は、冷たい概念と澎勃とした血氣とが並行して、つひに情念の枯渇に竭つた。

土井晩翠は仙臺に生れ、帝國大學文科に學び、學窓を終る頃より詩作を發表して「天地有情」(三十二年四月)、「曉鐘」(三十四年五月)「東海遊子吟」(三十九年六月)を出してその後卒然と詩人の歩みを消した。

晩翠の詩作は、文學史的に見て、二十九年十二月「帝國文學」所載「紅葉青山水急流」に嚆まる。「造化妙工」、「萬有と詩人」「夕の思」の諸篇を經て、一卷の「天地有情」に凝集された晩翠の詩品は、當時一般の評言が、沈思冥想の詩人、哲學的思索の詩人、理想をうたふ詩人、宗教的詩人と云つたにもかゝはらず、今これを精密に再査すると、それらは多く、詩の外形、用語、理説の部分に誤まられた膚淺の言葉であつて、文學史上晩翠の位地を確めるには全く別途から出なければならぬことが見付け出される。

晩翠が藤村と並んで詩壇の二大標目であり、次なるエポックに若干の遺産を殘したことは事實であるが、彼の詩を好む者は單に讀詩家ばかりでなく一般の人々特に青年男學生にかぎられてゐた。そのことは、彼の特徴が奈邊にあつたかをよく談るものである。晩翠詩を賞する者は、雄渾、壯大、深刻、凄涼の致があり、諷誦するにたえたりといひ、男兒の聲也といひ、國民の代辯者なりと見做した。晩翠詩を斥ける者は、粗率、空漠、膚淺、生硬の擬詩にすぎず、非詩人の詩、學徒の歌、概念の化物にすぎないとした。

二十七八年役後、國民詩人出でよとか、雄大なる理想を歌ふ

詩人出でよとかいふ批評が出て、泣候、綾羅の痴戀詩を斥ける聲が當分の間かまびすしかつたが、一向にその類の作品が世に出でず、相變らず唯美派の想像力の對象とする美しきもの、高きもの、遠きにあるものに對するあこがれを滿足させるに足ると考へられた夢と戀と藝術とのくさ〴〵の夢見心地が詩材となつて、朦朧とか晦澁とか纖弱とか婦女の歌とかいふ批判をうけてゐたのは、いかに何と外より之れを動すも易く揺ぐまじき時代の趨勢の自然の産物でそれらの詩があつたからである。

ルネッサンス以後の近代精神を初めて、ゆる〴〵と心に浴み出來たのはこの頃から後のことである。近代主義のロマンティシズムが何の支障もなく這入つて來たのは此頃から後のことである。官能の鋭感が改めてためされ、ものそのものの姿を因習から蟬脱させて獨自の地位から眺めることが允され、徳川名教の不自然な束縛から解放され、ひとたび崩落したいろ〳〵の日本的なるものが再び取り入れられて再吟される前の歐化時代が現前されたのは此時である。西鶴文章の婬靡が藝術批評の講壇から人生觀照の尖鋭と透徹との方面から値付けられ、「軟文學」、「市井文學」の中心人物が、全く新らしい着眼點から注目される今である。希臘と羅馬とルネッサンスと奈良朝と元祿時代とが、ひとしく此ごとき人々の新らしい趣味識から愉悦の目をさし向けられた時期である。

優柔を斥けるものは粗野な雄壯の概念からのみ眺めてその道義性を蔑にし、纖弱をけなす者は淺薄な武士道的家訓の強健の趣味からのみ視てその人生價を亡みしたのであるが、市井無智蒙昧の遊冶郎の優柔や纖弱と右の新藝術の眼目とには一見相似て非常に異つた内容があつた。夫の流蕩趣味が反省なく恍惚なく目途なき非知識的立場にイむに反し、いふ迄もない事であるが、この新らしい青年の新らしい夢見心地には情熱と理想と熟慮との餘になる新浪曼主義のエスプリの特産物として人格的立場に出立するものであつたに係はらず、俗流の批判は（その中には老批評家學海居士も藩閥の高官も大學の教授も一般有識階級もゐたのである）當時青年の胸にときめくこの恍惚の企望とその價とに盲目でありすぎた。さういふ俗見に阿諛して特更ら勇壯活潑をてらふ政黨壯士の醉歌のごときを作る愚人も時代の波の汐さきを覗つて飛出た事もあつたが、いかに俗見が社會に重んぜられる時代であつても、このやうなものの文壇的存在は允されなかつた。その中で、必然性ある緒を引いて壇上にあらはれた二人の雄健な姿致を極愛する作家があつた。一人は天地有情の詩人晩翠で、一人は「男兒の歌」を叫んだ與謝野鐵幹であつた。

晩翠の「天地有情」は三十二年の上板であるが、二十九年頃の處女作時代からこの時までに、彼は藤村と並行して詩壇の二大詩伯として愛誦された。その詩の特徴は雄健であり剛快であり凄壯であり悲痛であつた。しかも藤村の詩が幾分か先人の型の上に立つて自己の作風を確め得たに反し、彼の詩は全く先人未發のものであつた。その「帝國文學」や「反省雜誌」に揭げられて、急に讀者の眼を奪ふ新鮮があつたのも無理はない。彼の詩は正しく三種に分類することが出來る。愛戀を咏じた短曲と、史詩又は譚詩の類と、抽象的思念に立つた作とである。その中で、第一種のものは全くどの方面からもその値を認められなかつた。拙詩であり、第二第三種は世人の嘆美を引いた佳品であつた。その第三のもののため彼は形而上學的思索の詩人だなどとも稱されたが、そして此評は當時かなり有力な批判であつたが、それは全く誤つた淺薄な末流の管見である。そして第二のものこそ彼の作風をユニークのものとして史價を帶びしめ、次期への有力な貢獻を殘さしめた獨特の詩情と詩型とに立つ代表的、象徵的位相ある作作であつた。

社會主義者で萬朝記者であつた若き堺枯川が、その粗粲な鑑賞を臆面なく暴露して藝術眼の皆無なことを自ら公表したのはその「天地有情」の批評（三十二年七月二十九日及び八月一日「萬朝報」）からであつた。曰く、「嫉ひなるもの、伊藤博文、壯士役者、新體詩、年増の酸粲ならしたると或人は言へり。予も亦新體詩を好まざる一人也。然れども予は不食嫌の譏を免れんがため、此頃大々詩人の評判ある晩翠子の「天地有情」といふを讀みたり。」云々で初めた一文である。枯川の批評は詩壇に些の影響もなかつたが、俗見をよく表はしてゐるものとしては代表的のものである。「星落秋風五丈原」を指して、「取りあげて之を評するを欲せず、」とした點だけ述べてもその眼は易すく推されるのである。

大町桂月は、晩翠詩の一本調子と用語のや妥當的なる點と、難澁の弊に陷れる處とを缺點としてあげ、「其詞に意に沈靜として調高きを」愛して措かないといひ、大體は椿牛の評に讃すると云つたがこの評語も不用意な出鱈目にすぎなかつた。小山鼎浦は、流石に桂月、枯川の流を脫して眞摯に丹念に熟讀の上、「晩翠の詩の價値は殆ど其長短と正比例す。詩は長きが故に貴からず、されども彼の詩に於ては長ければ必ず讀むに足り、短ければ多くは誦するに堪へず。」と云つてゐるが、これは上述三種別の詩品中、長きものは第二第三種に屬し、短かいものは多く第一種に屬したためである　外ならぬ。また鼎浦は、「萬里長城の歌」を賞美し、詩集「曉鐘」の代表であるといひ、「富嶽の

歌」を美辭學的模型と斥け、「弔吉國樵夫歌」を白眉といひ、日本韻文史上挽歌のモデルと稱し、「晩翠の情を抒ぶるや、大鐘を亂打するが如し、いかに痛切の情といへども、耳なれては何の感か有らむ。」と樗牛等の遠く及ばざる奇警の刺句を吐き、晩翠が思想の進程の一段落を劃するものを「登高賦」なりとなしたが、鼎浦が比較的卓拔の評文も最終この結語をなすに及んで、つひに晩翠の談理を抒情本來の聲と誤まり「現象の世界に於いて直ちに無象の大靈を感得す。」といひ、「無窮の戀に近き進化の神を認めたり。」と賞美してゐるが、晩翠はつひに信仰の人でも思索の人でもなかつたのである

當時の太陽記者高山樗牛は「天地有情」を評して、「恐らくは彼の哲學思想は、何等確實なる科學的研究の上に樹てられたるものに非ずして、ダンテ、ユーゴーの如き詩人の詩的想像に養はれたるものに過ぎざるならむ。」と粗硬の觀察を恣まにし、又「如何なる短篇と雖も、多少の冥想(レフレクション)を含まざるものなし、是點に於ては、彼は甚だシルレルに近きもの也」と穴さつばに斷じ去り、(「太陽」第五卷第十四號)鼎浦と全く同じい迷路に陷らしめられてゐるが、「帝國文學」記者は評して、「墓上の花」の概念詩を指して、淺墓にも大仰にも「沈痛の調浮圖氏道を說くの慨あり」などと出鱈目をいひ、「晩翠の詩の弊は描かずして談らんとするにある」と核心に參じ得、「情に訴へずして智に訴ふ」と稱し、從つて、「抽象的の語多きを占む」といつたはよいが、情に訴へずして「說明する底の失ある」所因を、「日常觸目の事物中にも神秘の意を觀ん」としたためであると云つたのは幼稚な斷言である。說明の弊は、詩的表白の態度の不純から起るもので、談理の易すきについて情を描くの難を避けんとしたから生じたにすぎないので、態度さへ本然的であれば日常觸目の事物にも神秘の意をさとつて、尙且よく高遠な詩的法悅の詩的表白に到ることは難くない。

さらに轉じて詩作そのものについて考へて見よう。「天地有情」中、「哀歌」、「無題」、「はるのよ」の如きは柔かい情念の世界にも這入つて見ようと企てゝ、その拮屈なスタイルを脫却する手段をとらずに、たゞ抒情小曲の世界の感情らしいものを客觀的な態度でとり扱つたため、絹ごしを鐵椀に入れて出したやうな感じのする拙劣な作となつた。反之、「馬前の夢」は極原始的なスタイルで足りるバラッド風をとつて奈破烈翁一世をうたひ、その持味は荒い感觸の手織縞のやうな判築があるが、その荒つぽさは內容と外形とよく釣合を保つた上の本質美をあらはしてゐるオリヂナルなものであるゆゑ

玉樓の春短かくて

魚龍淋しき秋の水
花はうらがれ香は消え
ほまれの星も落行けば
君盜世の勇いづこ
焰は狂ふモスコウ府
吹雪は亂るボロヂノウ

のスタンザも、

風雨いよ／＼荒れ行きて
四大のあらび渾沌の
世の有樣をまのあたり
夜の惱みをいやまして
雷車亂るる雲のへに
魔炎の光りたれか射る

の一節も原始的な力強さを持つてゐるし、「星落秋風五丈原」に孔明をうたつて、

清渭の流れ水やせて
むせぶ非情の秋の聲
夜は關山の風泣いて
暗に迷ふかかりがねは
令風霜の威もすごく
守るとりでの垣の外

の叙景抒情の混淆も一種のエフェクトさへ示し、

風塵遠し三尺の
劍は光曇らねど
秋に傷めば松柏の
色もおのづとうつろふを
漢騎十萬今さらに
見るや故郷の夢いかに

と簡勁に感慨し、君王の遺言を畏みて「柴露のつとめ」に數年の辛苦を叙した直ぐあとへ、

今落葉の雨の音

といふ彼の套語乍ら氣持のよい風韻を殘し、轉じて、南陽の舊草廬をかへり見ては

隴畝に民と交はれば
王佐の才に富める身も
たゞ一曲の梁歩吟

と一句に背景の大を描き、「寒梅痩せて春早み、幽林陰を穿つとき、伴は野鳥の暮の歌」のみなりしを「其隆中の別天地」から空の彼方を眺めると、「大盜競ほひはびこりて、」榮華は枯葉の風に飄るがごとく、

治亂興亡おもほへば
世は一局の棊なりけり

の陳腐な形容がこゝではかへつて一番妥當で且つ強い時代色さへ出してゐる。さて、いよ／＼中原にのり出してから、

花とこしへの春ならじ
夏の火峯の雲落ちて
御林の陣を焚き掃ふ
四十餘萬のあといづこ
雲雨いま臺夢ならず
巫山のかたへ秋寒く
名も白帝の城のうち
龍駕駐るいつまでか。

抒情と叙景とは形影相伴つて筋をはこんでゆくその変相は、簡單で、ソングの型を脱しないが、快い上に印象の強いしかも適當な漢語と、歯切れのよい和文臭の柔かみとが錯交して生じるエフエクトは詩の力と美とにかゞやいてゐること爭はれない。

苦心孤忠の「英雄」の胸ひとつ
其壯烈に感じては
鬼神も哭かむ秋の風

と第五章を結び、直ぐ同じ句を次章に蘇らせて

鬼神も哭かむ秋の風
行て渭水の岸の上
夫の殘柳の恨訪へ

と詩情の樓をエフエクティーブにつゞけ、最後に古英雄の死の意義を讃仰して終つてゐるが、その終りの咏嘆の節などになると、私のいはゆる第三種の詩の特色として

神秘の色につゝまれて

とか、

「無限の淵」に立てる見よ

とかいふ無反省な抽象語がかへつて印象を稀薄にし錯雜にしてゐるため、この絶好のバラッドも畫睛の妙味をかいてしまつてゐる。

次の集「曉鐘」にも

生ける歴史が數ふれば榆は高し二千年
影は萬里の空遠き名ある長城の壁の上
落日低く雲淡く關山見すく／＼暮れんとす
征驂恨み留りて俯仰の遊子身はひとり
絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し

乘乾坤に回りては霞まぬ空も無かりけり
天地の色は老いずして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀

で初まる「萬里長城の歌」にも隨分巧みな力ある餘韻ぶかき詠嘆は少くない。尤も此作は全篇としては缺點の尠からぬものであるが、彼の特色も隨所に鏤められた故棄てることのどうしても出來ない作となつてゐる。

抽象思念の情と理との相錯交した第三種詩品は、

「渾沌」よさし窮りて
時「永劫」のふところを
出でしわが世のあさぼらけ
かざしににほふ明星の
光に琴を震はして
詩人よ君は歌いしか

の起句ある「萬有と詩人」にミルトン、ウオーヅウオース、ロゼチ、シエークスピヤ、ダンテ、ゲーテ等の思想の解釋に藉りて詩人の思想の美と力との讃美を形したのはいゝが、そして、

淸きアポンの岸のへか
に沙翁を示唆し
咲くタスカンの花の野か
にダンテを暗示し
それワイマアの森蔭か

にゲーテを忍ばしめた手法は英國浪曼派の詩人たちのやつた型で、陳腐で非力ではあるが詩として合法でないとはいへない。が、

心の窓を押しあけて

とか、

（かたどる影は眞善美）
三の星こそ並ぶなれ

とか、

かのプラトンの見るところ
高き理想の夢に醉へ

とかいふ散文的な怠惰な表現になると、そこには何らの含蓄も、餘情も、力說も、示唆もないのである。この種の作はこの種の失敗が數多くくり返されてゐるのは彼の致命的な缺點で、この缺點のため、外遊中の詩集「東海遊子吟」が木片を嚙むやうな非詩詩集と化してしまつて、爾來、詩人晩翠は永久に詩人でなくなつてしまつたのである。「夕の思ひ」もこの弊の多い作で、作者の學問的修養の誇りが詩句の純眞を穢し、知識の徒ら

なる意味が、フレクシブルな詩美を歪めてしまつてゐること夥しい。

「光」も題味じみた作である。けれどこの篇に於ける詩情は知識を制御して、説理の傾んとしては感情の嗟嘆に入つてゐるため上述諸篇のやうな缺點は少いけれども、その主題の熱情に結ばれてゐるものでないため結局佳品にはならなかつた。かへつて「萬有と詩人」などの中に折々夕闇を光る電光のやうな感情の一閃に人は眼をひかれるのである。

森のねぐらに夕鳥を
麓の里に旅人を
靜けき墓になきがらを
夢路の暗にあめつちを
送りて響け暮の鐘

の破題、先づ壯嚴な大建築の玄關に彳むやうな「暮鐘」の一篇は、たしかにこの第三種の作として最も傑出した逸作であり彼が全詩作中注目すべき特色あるものである。

天の反響地の叫び
恨みの聲か慰めか

と抒べた二句は强みに於て

友高樓のおばしまに
別れの袂重きとき
露荒涼の城あとに
懷古の思しげきとき
聖者靜けき窓の戶に
無象の天を思ふとき
大空高く聲あげて
今はと叫ぶ

とうたつた散漫な非効果的な想像力に訴へて只詩句のなだらかさに滑走したものよりも卓れてゐる。

天使の群をかきわけて
昇りも行くか「無限」の座

などいふ粗雜なパッセイヂもあるが、深ぶかい人の世の夕ぐれごとに聲たかく暮の鐘が

源流すでに遠くして
濁波を揚ぐる末の世に
無言の教宣りつゝも
有情の涙誘へるか

と說き、

祇園精舍の檐朽ちて
菲酒の香のみ高くとも

セント・ソヒヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも
聞けや夕の鐘のうち
驗鷲橄欖いにしへの
高き、尊き法の聲

とささい
天地有情の夕まぐれ
わが騒鸞の夢さめて
鳳樓いつか跡もなく
花もにほいも夕月も
うつゝは脆き春の夜や
岩上の霞たちきりて
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲
その一音はこゝにあり

更に最終の一聯で晩鐘に鳴り出づる餘韻の意義をたゞしく次の如くに結んでゐるその句は、簡淨で、清麗で、正格である。

天の莊嚴地の美麗
花かんばしく星てりて
「自然」のたくみ替らねど
わづらい世々に絶えずして
理想の夢の消ゆるまに
たえずも響けとこしへに
地籟天籟身にかぬる
ゆふ入相の鐘の聲

土井晩翠の詩が殘した影響は案外尠い。それは、斯くのごとき力づよいが簡單なる詩型に、明晰ではあるが簡單な思想をうたつた彼の詩は、前代になくして、彼の聲によりてのみ突如として歌ひ出されたゆゑに青年者流の簡單な空想を刺戟しやすく、そのため、讀詩社會のみにとどまらず一般人の間にさへ、ソングとして（たとへば「星落秋風五丈原」の如く節を作られて朗唱せられたものもあるとほり）喑誦されるに至つたもので、彼を模倣したものは、彼からつひに一歩も出ることが出來なかたに反し、藤村を模擬したものはその類似の作風に自ら自己の立場を作つて行つたものが少くない。專門の詩人の間にそのエピゴーネンを出さずして、中等學校や全國高等學校の校歌の間に、當分の間は晩翠調ならぬ何ものをも見なかつたほどその作

風の模倣が横がつたのは無理もない、しかも中には青衿の徒の作ながら晩翠の作に卓れるとも劣れりとは思へぬほどの作さへ出たことがある。が、さういふ作になると純粋の晩翠調かゝやゝ脱化して、その時代の好尚や傾向や特徴やを取入れてもつと清洒なもつとロマンテイツクなものと物思はしげな詩風になつてゐる。

晩翠は、後、外遊中の作を三十九年になつて「東海遊子吟」として出したが、既に詩壇の太白の位置は移つて、遥かに進歩した象徴詩時代にまで入つてゐた時代であるから、世の中からは一顧も與へられずに終つてしまつた。その詩も處女作時代の情熱が失せて、乾からびた説明と議理とで鬼面人を脅かしてゐたにすぎない。青春の夢が去つてから、彼ごとき詩人が、依然として、若しも詩人の、而も最高の位地を保つことが出來たとしたならば、それは、彼が自ら作詩の態度に嚴峻な反省を自ら試み、詩感の醸育と表白とに深い注心を怠らなくあつたからでなくてはならないのだが、彼の詩想は、青春殘夢の消失とともに全く去つて、多くの同じ詩人のやうに詩人の王坐から一夜平俗人の坐にまでいつのまにか移つてゐたのである。

晩翠の詩は、小山鼎浦の云つた通りに、理想の形相らしいものを説明しようとしたにとゞまる。彼の理想として藝術的に人格的に萬人を光被せしめる何ものをも彼は描くことは出來なかつたのである。

かれのひびきは、宗教の信仰とは何の關係もないものだ。かれの思念の性質は哲學者のそれとは大異がある。宗教や哲學に關する思考の部分を詩の中にとり扱つただけで、かれの人間それ自身が宗教的ではなかつた。哲學者風でもなかつた。かれの人間は學究であるにすぎない。而も學究としても今迄何ものの業績も殘してはゐない。かれが歌はせたものは彼の唯一の好ぶべき素質たる、眞摯な、超俗的な、きはめて粗笨だけれど純粋に近いかれの人格である。その人格の有する純粋な感情の一圖なひたすらな表現である。これは何人にも卓れた彼のみの享有した天賦の資質であつた

一時彗星の光を見せて又闇中に沒し去つたが、多分それは一個の隕石として空しく地上に落ちたことであらうが、其詩壇に於ける史的位相は確實に一つの時代を藤村と共に劃してゐるのである。

三　二つの傾向の代表者

日清役後の思想界にあらはれた多くの現象の中で一番注目すべき浪曼精神の所有者として、島崎藤村は、土井晩翠以上に廣

く深く強い自己のものを持つてゐるが、詩壇の趨勢が三十三年二十世紀の聲をきいて今又更に西歐詩想の移植に急となり、十九年世紀西洋詩史のランクに近づかうとして來て、ロゼチ、キーツ、シエリ、バイロン、ゲーテ、ハイネ等浪曼時代の詩人の詩が輸入されて、更に一轉してフランス象徴詩及びパルナツシヤン詩が同時にとり入れられて、詩壇の象徴詩時代が現出するに至る前に、藤村は早く詩壇から去つて散文壇に移つてしまつた。この移轉は多くの人に惜まれたが、その後いかほどの努力をつゞけたとて、かれは「若菜集」及び「落梅集」の水準線以上に到つたとは考へられない。かれの轉移は自然である。

晩翠は、その後依然として消息を詩壇に絶つ、育英方面に專心してしまつたゝめ、かれの藝術的業績は全くないのである。

新日本の青年が求めた感情のはけ口が一つは藤村によつて提供され、一つは晩翠によつて代辨されたことは爭はれぬ。藤村の詩情は柔媚であるが人格的に根元からゆすぶり上げるやうな力はない。晩翠の詩感は雄剛であるが人心の纖微なところにまで潜入してしみじみと嗟嘆をさせるやうな底力はない。ふたりの詩作は當代日本感情史の符號として確かなものではあるが、それは弱く、薄く、淺く、濁つてゐる蘆笛の呻吟のやうな藤村の聲が日本の若者にさゝやいた聲は、今迄にない新らしい、そしてほのかな、自由な、哀泣であつた。喇叭のひびきのやうに日本の青年に亂聲された晩翠の音は、今迄にない新らしい、そして強い、放膽な高吟であつた。ふたりとも西洋らしいハイカラな歌口をしめしてゐながら、ふたりとも日本らしい傳説的な感情美の要素をふんで人の心を刺戟した。時代の情念の好代表たりえた所以である。

四　他の詩人と詩論と譯詩と

島崎藤村、土井晩翠らの時代は二十年代末に萌芽して第二期の中期、すなはち「落梅集」と「曉鐘」とが出た三十四年に終つてしまつた。

この間、他になにの運動があり、どのやうな詩人がいかなる作品を殘したであらうか。第三期は、されば、三十四年迄を前期として三十四年より三十七年末迄を後期として考察することを便宜とする故、その前期中の詩的業績について一言するならば、第一期の後期詩人として知られた人々の作集が此間に出版されたものが數多くある。上梓はこの時であるが、績は前代に終つてゐるのである。すなはち、大町桂月の「黄菊白菊」(三十一年)、大和田建樹の「深山櫻」(三十二年)、塩井雨江の「闇香疎影」(三十四年)、及び後期にまたがる、佐々木信綱の「磯馴松」(三

十六年)武島羽衣の「霓裳微吟」(同年)等がある。三十三年一月の「帝國文學」は前年度の詩界を述べて、中に、「桂月、雨江、羽衣の諸子は袖を連ねて退き、」云々と報じてゐる。また、アンソロジーに、「山高水長」(三十一年)、「さざなみ」(同年)、「花天月地」(三十二年)、「花月集」(同年)等があり、作法書類に、「新體詩歌自在」(中村秋香三十一年著)、「新體詩學」(大和田建樹同年著)、「新體詩指南」(石橋玄潮三十三年著)、「創作要訣」(西村眞次同年著)がある。

さて、此第二期前期に活躍した詩人に、與謝鐵幹、薄田泣菫、蒲原有明、岩野泡鳴、高安月郊、河井酔茗その他がある。その中で、鐵幹は、第一期の後期(二十五年――三十年)に早くも活動を開始して、「東西南北」(二十九年)、「天地玄黄」(三十年)を發市してをり、此期に入つてからは、「月の桂」(三十一年合著)、「鐵幹子」(三十四年)、「むらさき」(同年)を出し、後期に入つて、「うもれ木」(三十六年)を公板し、外に「片袖」第一集(三十四年)同第二集(同年)といふ二冊のアンソロジーを出し、自作の外に有明、平木白星、瀧澤秋曉、夜雨、桑田春風らの作を收めた。泣菫は、「暮笛集」(三十二年)、「ゆく春」(三十四年)を、有明は此期には一冊の詩集も出さず、後期に入つて處女詩集を出した。而して、鐵幹は三十三年三月「明星」を發刊して四十一年の終刊迄にいはゆる明星派を起して詩壇の運動を捲き起し、泣菫、有明の二人は、藤村、晩翠のあとを受けて四十年前後に泣菫有明時代を現出した。三十一年十月に、多年文壇一方の勢力であつた舊「早稻田文學」は廢刊號を出して、その時報欄に當年の詩壇を概觀し次の如く云つた。

「元祿文學就中西鶴文學の立脚地は反高踏的なる所にあり、明治の小説また歩を下層に向けて、而して情ますます眞なり、願ふは新體詩の致を此所に一にせんことを。殊に我邦の詩は、其の非市井的なる點に於て從來の眞目最多かりき、新詩體の先づ排すべき關門は此れに外ならず、切言すれば今の新體詩は餘りに上品ぶりたり、餘りに澄まし過ぎたり、餘りに片づきすぎたり、矯飾、作爲、すべて之れより來たる。」

また同年の詩界を報じたその翌年一月號の「帝國文學」雜報は、

「數年來漸く發達し來りたる新體詩は一昨年に入りて、其壇に於ける一頂點を形作りしが晩秋の頃より淘汰の渦流は輕躁なる群小作家を呑滅し去り、斯界遂に適者たる一二生存者の舞臺とならむとするの觀ありき。此光景は昨年に至りて判明なる現象を呈し、藤村晩翠の二子、他諸作家を壓倒するに至りぬ。……此間にありて、壯士風を以て世評褒貶の間に立ちし鐵幹が太

陽所載の「歸省」及反省雜誌夏期附錄の「盆祭」の如きは比較的見るに足るべき者ならむ。其他子が作の概ね卑俗なりと雖もまた一種の新想を描寫せむと勉めたるは、斯界に於けるすね者と謂ふべからむか。……之を要するに昨年の新體詩界は晩翠藤村の時代と謂ふべく、一昨年に比してやゝ寂寥の觀ありきと雖も、一方。於ては明に沈靜の中漸く確實なる發達を示し、數年來の要求たりし思想の修養も其緒に就きたるが如し。想ふに此趨勢は新體詩界の前途に向つて一小希望峯たらむか。然れども余輩が寒心に堪えざる者は新詩形未だ成らざるに、昨年に至りて愈明瞭に七五の形式の長篇に適せざるを覺知せることとなり。藤村の最長篇たる「農夫」の如き此弱點を曝露せるものにはあるざるなきか。」

一體に明治時代の雜誌の時報が、學校で學んだ文學史の實習といふ見得で仰々しく人や作や傾向や問題やを扱つたは、今から見ると微笑に値ひするものにしか過ぎないが、その上にも黨派や傾向の同臭賞讃に傾いて嚴正の批判を顧みないことは今の社會批評家や詩評家の厚顏と無恥とが之れを誠によく受けついだものと思はれるが、當時の中でも、「帝國文學」と「早稻田文學」は比較的に公平な立場から發言してゐたのであるが、右の評を見ても早文記者が一圖に同誌の傳統的色彩たるリヤリズムに拘外迄の我田引水を敢てし、帝文記者がこゝにはその引證を畧いたが同誌所載詩人狄洲の詩を値以上に持上げ、たどたどしい文章に圈點たくさん附きで威めしく判論するなど當時の批評文のよいサンプルである。

當時の詩壇は、巨星二人の大きな蔭の下に呼吸してゐたことは事實であり、特に泣菫の如きは一番よく藤村の影響を受けた時代である。兒玉花外、山田枯柳、山本露葉三人の合著「風月萬象」（三十二年）は何ら注目すべき詩集ではないが、その一人兒玉花外が、三十一年發刊の内村鑑三が「東京獨立雜誌」から杉谷代水、平木白星、高橋山風、吉野臥城らと共に出立して後花外調を起したその最初の處女作集として見るべきだけのもので、中に「鷄の歌」はじめ十三篇を收た。

革命をそれ鷄の
聲になぞらへ歌はん乎

とか、

民權自由を唱へたる
涙と血との大丈夫が
紋殺臺、朝露の

とかいふ調子で平和と自由と二語が一杯にある詩稿だが固より値あるものでない。

山田枯柳は八篇をよせてゐるが措辭に花外以上の詩的約束を認めることは出來るが、藤村の模倣から脱し切らないものでニコライ主教をうたつた「十字架」に

　シナイの神の御手は
　わかき神僕の指にふれ
　ナザレの主の接吻は
　わかき神僕の頰にあり

といつた詩風で一家をなしうる天禀に乏しい作篇であつた。

山本露葉は

　足は小草の露を踏み
　眼は夕づゝを眺めたり
　かの枯草のなるごとく
　唇もるる聲やなに

といふ「ぶだうの葉かげ」以下十五篇を收めたが三人では彼が一番詩才もあり現在殘つてもゐた。

　きらめく星を數へつゝ
　浪の花ちる岩のへに
　吾れたゞひとり哀にも
　悲き歌をおもふかな
　　　　　　　　　　（「荒磯」）

露葉は、後、第三期に入つて一家の詩風を更に[illegible]めた。

國府犀東の「花さくろ」（三十四年）は樗牛、桂月のいゝかげんな序文をつけて公けにされたがその漢詩以下のものであつた。強い意氣を、結果をも考へずに粗笨に打ち出した、言葉を瓦礫に扱つた當年夥しい作集のその一つである。岩崎泡鳴は、早く第一期の後期から作をつゞけて三十二年には雜誌「學窓餘談」に宮古島の物語詩「嘉播の親」を發表し、三十四年に處女詩集「露じも」を公けにした。粗雜で含蓄に乏しく想像力さへ極めて貧弱な彼の詩風はこの時既にうかゞはれるが、「悉釋迦の渡」に譚詩を試みたり、種々なる異つた題材に新興趣を呼ばうと試みたり、後半生に色々の思想や主義の主張と宣傳にいちはやく身を投じたあの性急な建設者的風貌のひこばえは早くこゝにも覗はれるが、詩そのものは一として取るに足るものはない。彼ほど詩を談つて詩の拙なかつたものはない。彼ほど意圖を公表して成果を收めえなかつたものはない。そこが彼の詩人としてのしんじやうである。價である。その點からうかゞへば彼も亦有意義な立派な存在である。

三十三年「夜濤集」の處女作を出した高安月郊は、言葉を行るに巧みに、教養もふかく、將來大成を何んとなく期待された一人であつたが、三十二年の作「落瓦賦」

秋は舊都に立ちにけり
千代も落葉となりぬらん
瓦拾へば苔むして
桐か、葵か、蝶見えず

とうたい、また、同じ詩に、

空也と鐘は鳴らしゝが
色ある珠數の緒は切れず
妻を抱きて釋迦笑ふ
天竺よりは肌寒し

と歌つた。その外、李青蓮をうたひ、大雅堂を咏じ、不識庵を吟じたが、もと趣味に遊んで深く自ら傷ます、人間としても藝術の上でも少しも苦勞のない閑雅な作者であるにすぎないから、一味の藝術味がたゞよつてゐるといふだけで、熱情もなく、想像力も貧しく、主觀詩人の資格は少い人であつた。彼が詩劇から入つて後「櫻時雨」の劇曲に至りえたのは彼の藝術上の頂點であり、且自然な行路のあとの所産でもあつた。

以上の詩人のほかに早稲田文學の杉谷代水、帝國文學の吉田狹洲、松村湖音をはじめ、各種の文學雜誌に詩人の續出を見たが、大成しえたものはひとりもなかつた。

こゝに古くから小さい孤砦を守つて十數年の努力をかさねた詩人の一派がある、いはゆる文庫派の詩人である。その緣起は、二十一年の頃に山縣悌三郎の「少年園」が發刊され、翌年、「少年文庫」といふ兄弟雜誌の續刊となり、後者は二十八年に、「文庫」と改題し、夜雨、清白の徒を出したことは第一期の場合にも述べたが、三十三年後に到つては河井醉茗を初めとして横瀨夜雨、伊良子清白、鈴木露子、塚原伏龍(島木赤彥)五十嵐白蓮、瀧澤秋曉らの集りで、まことの活動は寧ろ三十四年後のことであつて、此期には一派としての特色が定まらうとしてゐる準備時代であつた。この派のアンソロジーは、「詞藻」(二十九年)と「詩美幽韻」(三十三年)とがある。後者には十五人の同人の作詩を蒐集し、卷頭に伊良子清白(すずしろのや)の「嚴間の白百合」連篇四十二篇を置いた。同じ年、瀧澤秋曉は「明有月」を出して美文韻文を合集した。凡て批判に値するほどの獨創は全く見出されない、腰のあやふやな、詩作の契機を悟り切らない徒らなる青春の血汐の氾濫にすぎぬ。

その中で、河井醉茗は、三十四年、處女詩集「無弦弓」を公けにし、内に詩三十三篇と小曲十五篇を收めた。多く溫藉な詩情が靜謐な曲律をとつて淑やかに歌はれてゐるが、人の心にくひ入る力はない。

風しづかなる朝な朝な

少女が家のそらたかく
とどまる雲の一ひらに
錦しき色のうかぶなり

風ふきそよぐ夕な夕な
少女が家のそらたかく
とどまる雲の一ひらに
悲しき色のうかぶなり

朝ぎよめするあけ姫の
影もしづかに消去りて
のこるか袖の横雲に
別れてはしる小さき雲
――下略。(「いさよふ雲」)

あるひは「紅芙蓉」の一節に、

花の綸筆を紙に載せ
をとめさびする葉隱れに
秋は雲こそあふがるれ
一葉の芦の笛吹きて
眼をさそふふところに
花や少女の夢を見む

かすかな美であるが、氣取りも誇張もなさすぎる位にない謙讓な作である。この溫情あつて、藤村の熱情もなく、泣菫の技巧もないかれがつひに一代の流風をかたづくるに到らなかつたのは是非ない。が、「文庫」に集つた詩人には、清白や夜雨のごとき一種の材を出し、その後の多くの詩人の搖籃ともなつたが、主義主張に生きてゐた集合的意義はない文學的團體ゆゑ、ムーブメントを發起することはしなかつた。

久保天隨、中内蝶二合著「濺がり船」(三十三年)は餘戲に少い作集)である。當時の帝國文學記者は云つた。「今の新體詩の題材に貧しく、詩風も亦單調に失して、獨創の異彩なきは永く、默過す可きにあらず、加ふるに新進の文士等二三詩家の顰に傚ひて、とこしへに潮を咏じ、星を歌ひ、戀よ望よのいがゞはしき擬人法、おぼつかなき哲理に傾くは喜ばしからず。……

今の詩家が自家詩形の單調を覺りながら、頗る律語の變化を要する抒情詩にのみ力を用ひ、比較的に詩形の單調を許す敍事詩の方面を注目せざるは吾等の訝かる所なり。」

論ずる者の所説はいふ迄もなく稚けないが、當時の風潮がどんなであつたかは、こんなたどたどしい論文を通してでもよく

垣間見られる。

作者の側の技巧も詩想も稚けなかつたが、評家の側の鑑賞眼、透徹眼はさらに貧しかつた。右のやうな筆法で、幼稚な詩界を導くことの出來ないのは、嬰兒が嬰兒の手を引いて河を渡るにひとしい。

尙他の機會に於て、内容と形式との論議を重ねたものも見えるが、結局例によつて、「所詮詩歌の第一義は、内容に在りて形式にあらず。」といふ様なきまり切つた所を繰返して、内容と形式との有機關係から形式過重の弊害、及び内容輕視といふ意味の眞の消息を明晰に論斷しえたやうなことは一人もなかつた。この論者は、その論文の終りに、

「形式の推敲攻究に盡悴すべきは勿論なれど、尙ほ恰當なる詩形を發見し得ざる場合にありては、詩歌の第一義に基づきて、忌憚なく其感想を發展せむことを。」と望んでゐるのは、此種の指導者を以て任じる輩が少くも詩の形と心との間の微妙な生命關係を悟つてゐないで、いゝかげんに時代の病弊と覺しいところを拔き出して、いゝかげんに所説を捏ちあげたまでにすぎないのである。

が、前にもいふ通り、右のパツセイチを見てすらも、心あるものは當時の詩界がどんな傾向になつたかは略想像するに難くないであらう。右の論者の言葉に、「形式は、時計の外部の裝飾の如きのみ」といふ句があるが、こんな風に形式とか技巧とかを考へる輩は、今の無知無學な小詩人輩ばかりのさかしらでなく、二十餘年前のこの時分の詩人評家が既に業に夙くも立派な傳說をうち建つてくれてゐることである。

かういふ風に迷妄を重ねて、時代も人も恬として恥ぢず、さとらざる有様である上に、藤村の感化をうけた青年や、その以前の擬古派といはれた桂月、雨江、羽衣などゝ赤門派ともいはれた詩人の影響さへ受けて、一圖に美しいことを、なさけ傷らんことを、粉飾の妙をてらはんことを生命としたため、その外形は羽衣、藤村に眞似て、而もそれだけの詩美の必然性をも具へることが出來ず、内容は桂月、晩翠の豪邁を似せても、徒らに鬼面人を嚇す類に出でなかつたのである。

尙、右の詩論は文章から察すると當時の「帝國文學」編輯委員の一人小日向是因であるらしいが、是因は詩作もし、詩論も試みて相當詩に對する味解力のあるべき筈ながら斯様な稚論に低徊してゐたところを見れば、かれ以下の詩人評家らの大凡いかなる程度のアツプリシエイションを有していたかは推するにかたくないことだ。

是因に、「詩歌の眞價」といふ時評中、

La vie est vaine :
Un peu d,amour,
Un peu de baine,
Et duis——bou our !

La vie est brève :
Un peu d'espoir,
Un peu de rêve,
Et puis——bonsoir !

をあげて「格調の最能く整ふたるものとして、佛人は勿論、多くの他國人すら、之を暗誦せざるもの稀」だ。けれども「其想の如何に陳腐にして、又極めて單純なるや。しかも尙名詩として、人口に膾炙する所以のものは、其國語の性質と、其配列の妙とに依らざらんや。故に之を他國語に譯すときは、其妙味を沒して平凡なるものとなり了るべし。」從つて、われ〳〵が外國詩に學ぶのは形式でなくて思索であるといふ論法で、詩に於けるかたちが、こゝろをいかに消息してゐるか。こゝろは、いかにかたちの表現を認めてゐるか。こゝろを學ぶといふことは、かたちを學ぶことではないのか。國語が異つても、詩に於けるかたちの表はれに相違はない以上、名詩の鑑賞はかたちとこゝろと同時に一つの詩となつて表白され得たものを味ひとることではないのか、などといふ方面への疑問はその芽をあらはしてはゐない。當時の詩が、たゞ美しい一方に、たゞ整つた一方に、たゞ多情多恨三昧に陷る一方に精進して、世間から「朦朧體」の名をかちえたのも無理はない。特に、詩に志少く、たま〳〵關心あるものも內容外型の形式的二元論にとらはれたものであるから、わるい作はいふ迄もなく、佳作さへ一見時流に遠い言葉が少しでも交ればすぐ朦朧體であるとして批難を加へることに躊躇しなかつた。

高山樗牛のごときも、價以上までに喝采をあげて、自分の「雄渾趣味」に鼓腹し、朦朧體の非をあげて必要以上にその値を亡してゐるやうな不埒を犯してゐるところを見れば、かれのホイットマン推賞がどんな程度の理會と必要との準備の下に行はれたかゞよくわかる。

が、その粗笨と膚淺とは今日彼をその價以下に思はせる有力た所因であるにはちがゐないが、樗牛の言說も、あの當時に於ては水準線の上に[illegible]てゐたものであることは確かである。樗牛には抒情詩のデリケートな味解は出來なかつたが、要領をかんでそのエスプリを捕捉することは實に名人であつた彼であるかれが讀書のわり合に少なかつたわりに、批評以下に無學であ

つたわりに、大規模な[illegible]を、しかも浮山に書きえたのはこのためである。

英佛白伊文學の深い鑑賞と敏い理解とを以て、いちはやくその意義ある紹介にあたつたものは、その業蹟に於て鷗外漁史に匹敵する上田敏であつた。彼は思想を取り扱ひえない鑑賞者であつたから、その特色は自ら詩歌の驚くべく巧妙な譯出と自己の詩情の散文的發表と泰西藝術の大雅の趣味への正しいあくがれに新日本の高級な青年をその後年久しく東道するに到つたその究學とであつた。彼の趣味の洗練された獨立性は、「十二文豪」中の「バイロン」(三十三年米田實著)や、「シエレー」(同年濱田佳澄著)と、高橋五郎の「英獨詩文研鑽」(三十一年)や「短篇詩集評釋」(同年)や、「江湖漂泛錄」(同年、バイロンのチヤイルド・ハロルド譯註本)や、「英詩評釋紅紫爛漫」(高橋五郎、關貫米合著)の類を見て、これを彼の「みをつくし」(三十四年)、「詩聖ダンテ」(同年)、「文藝論集」(同年)、「最近海外文學」(同年)に比べれば易く判明する。

「みをつくし」は美文であるが、詩心あるこの散文は、晩翠よりも詩的であり、藤村よりも高級であつた當時としては一昔さきに進んだネオ・ロマンテイシズム的感情の流麗な發露であつた。ダヌンチヨ、ツルゲーネフ、ブラルコン、ゴーゴリの譯文及び彼自らの美文が收められてある。樗牛の中學生的名文は當代の喝采を呼ぶに丁度適當した卑俗な低級な感情の上にたつバンガロウ・スタイルにすぎないが、上田敏のまとふた衣裳にはロゼテイの夢みた中世主義の思慕と、スヰンバーンのあくがれた希臘的風光と、十九世紀の藝術至上主義思想を抱く者一切が感じた趣味とが打ちあふれてゐた。

そこにはかつてない感情の新領土があつた。愉悅の新對象があつた。思想の新分野があつた。スタイルの新意匠があつた。最も夙く進んだ青年のみがあくがれた夢を、かれは譯文や評論紹介や譯詩や美文やで紹介した。

此點かれは、樗牛も梁川も抱月も漱石も逍遙も及ばない獨自の立場と稟質とを所有してゐた。かれのあくがれの系統はドイツ文から鷗外がもたらした南歐的情思で、かれの同胞には、たつたひとり平田禿木があつた。禿木は英文學に終始したが、かれはあらゆる近代文學に手を染めたのである。

が、前にもいふ通り彼は思索しうるあたまではないから、獨創の識見に於て誇るに足る精到にして彼獨自なる論評も紹介も、卓論の移植でなければ前人の祖述のたぐひで、今からかへり見てその論文の獨自の價は割合に少ない。たゞかれの傚緻な鑑賞と夢見がちな青春の餘燼のあくがれ心地とが、その趣味に

飽くまでも透徹して、その後二十餘年以上も卓れた文學青年のみの微笑して肯くやうな境地に到りえたのである。パールを阿古屋玉と呼びかへても王朝趣味以外の新鮮をかゞやかしえたのは彼一人である。多くの譯詩譯文家は寳玉を瓦礫にかへて恬然として恥じなかつた輩にすぎない。

上田敏の言葉は、悉く彼自らの言葉として、王朝や、德川やロコヽや、フランドルや、倫敦や、巴里や、フラマンや低獨逸あたりから集合した。それが新浪曼趣味のランビキにかけられ、「晩近頽唐派」の薫香ににほひづけられてあらはれたエキゾーテイツクな日本の煉金の薔薇花である。

「ウクラインのよるをしれりや、あはれ美しきかの夜をしらずば、はやくゆきても見給へかし。あかぞらに月はてらしぬ。」(「南露春宵」)。

といふゴ！ゴリイも、

「やよひになりて、ピアッシエは戀に燃えたり、まどろみもなき二夜三夜は、總身にたとへしなき歡喜漲り、千萬の木芽、肌をついて、つのぐみわたるやうに、あやしの屋根うらのすまゐよりも、物とはなしに、妙音のぼりきて巴旦杏の花ざかりにも似たりや。のダヌンチオ文も

「われはもと南極星下の人、十字のほしのかげをあびて、ゆき／＼てなほ程とほきぱんぱの野をよこぎり、」

云々の異邦的日本の自作文章も、アイク・マーベルもアラルコンもヘルデルもみなそれである。

かれの詩情に理解も同情もなかつた樗牛は、道途傳ふる處によると、かれの「みをつくし」の特製本の白頁を切り裂いて手帖の代りにすると豪語したさうであるが、此代表的評論家にはわからずとも紺飛白の青年には夢見がちなときめきを與へてゐた。それが、やがて明星運動の强みとも、象徴詩ムーブメントの基調とも、今代なほつゞく新浪曼精神の酵母の一部ともなつてゐるもので、「文藝論集」や「最近海外文學」に紹介された泰西近代詩感の輝やきは、右の譯や作によつて培はれた感情に論理的根據を與へる力となつた文獻である。

たとへば、「文藝論集」に傳へられたる近代派の詩文の紹介は早く、かれが大學在學中又は卒業當時の筆のすさびで、「日清談判破裂し」たり、民友記者が戀愛小說の流行を以て民心倦怠の兆と斷じたり、井上哲次郎の「比沼山の歌」が喝采を博したりした時分に、夙くもかれは、ロゼテイを論じて

Memorial from the Soul's eternity
To one dead deathless hour ....

の美を説き、ペイタアの彫琢文を賞し、當年の詩匠柳村が作「絃のうち」を以て右の近代諧家詩人の筆路に比し、早稻田派の行文の穩雅を發見して散文の體をえしものと讃し、ヱルレエヌが

Car nous voulons la Nuance encore,
Pas la Couleur, rien que la nuance.
Oh! la nuance seule fiance
Le rêve au rêve, la flûte au Cor........

（何となれば、吾等の望む所は影にして色に雜ざればなり。あはれ影のみぞ夢を夢に結び笛と角とを調ぶべき。）

の幽妙微韻を論じ、またこの詩人の逸作「秋のうた」をはじめて日本詩壇に移植し、モロオとオディロン・ルドンの畫をいひ、ルビンスダインが樂音を奏し、ジョルジュ・エークーを白耳義文學に求め、メーテルリンク、ヱルハーレンに及び、コンシャンスとピカアルとロオデンバツハとヒユイスマンスとライオネル・ジョンスとデキッドスンと共にあらゆる佛英の近代詩文人中の卓れて情思の鮮らしく美しく晩近的なるものを抽出してゐる、今日の佛文學全盛は、かれの趣味識の敏鋭にもとづくもので、英文學はかれがその妙趣を反復したにかゝはらず、餘りに語學屋的なる新聞記者的なる飜譯の因襲年久しきにわたつてゐたせいで、佛文學の場合ほど効果はなかつたが、これは二十餘年の今後に待つものである。

上田敏は當時作詩は試みなかつた。譯詩によつて自己の詩情を托しうる唯の詩人的の最もよき鑑賞者としてかれは位地づけられたからである。聰明なるかれは、自らの才分の範圍を知つてその後とも作詩は極めて少なかつた。

當時譯詩として、スコットの「湖上の美人」以來の一般化を呼んだものに、尾上柴舟の「ハイネの詩」（三十四年）がある。

柴舟は詩魂も卓れず、創作の才に乏しい詩人であつたが、溫雅な情致が一般の快感をつくに足るものがあつた。その柴舟の「ハイネの詩」は、まことに、ハイネでなくして柴舟の詩であつたのであるが、ハイネのかたちのあるものを借りてかれの詩情をかなり柔軟に自由に表白した點でその譯詩は相當な成效をえたのである。

てる日の影に堪へかねて
惱みがほなる花はちす
そのかしらをばうち低れて
待つたり夜を夢みつゝ

月こそ花の戀人よ

やさしき彼れが光もて
夢より花をよびさまし
照らしいでたりそのおもわ

花は開きぬあからみぬ
しづかに空を仰ぎ見ぬ
愛のおもひの痛みより
かをりぬ泣きぬをののきぬ

此詩の一般的好尙をひく所以は、此悧りいゝ平汎なリズムである。斷崖に佇んで、わづかに甘い俗文學と境しつゝ、而も、他の小詩人の決して企て及ばぬ感情の迫力がある魅惑がある。その外隨所に佳句がある。それが外の多くの凡句を救助してゐる。

今年の春のわびしさよ
かなしき夢のつゞくかな

とか、

君が心は吹きかはる
風のこゝろに似たるかな

とか、

かさなる雲のひまとめて
さやけき月のかげさせば
忘られはてしそのかみの
面かげまたもうかぶかな

といふやうな日本的なる感情の表現法のなかに、獨逸の、ハイネのかつてうたつた言葉のかたみが殘されてあるからだ。それが讃美歌の感傷心に芽み、「小學唱歌集」のセンテイメンタリズムにあたらしめられ、「湖上の美人」の殉情調にそそのかされ、やがてこの卷によつて一入西洋的なる、しかしながら、日本的なる歌口の淑やかさを愛したのである。この一種の系統は、皐続久しく連綿として大正の今日に殘つてゐる。紅蘭娘子の書生に就てきけば易く判明しよう。

五　新代の芽生

第二期のこの前期に於ける詩人の活動は、かくのごとく平凡で何の意義ぶかい作家も見出せないが、後に及びて詩境の力となつた人及び運動の萌芽は遂に世が十九世紀より二十世紀に押しうつつたといふ、日本人には初めての世紀的意識の經驗とともにはやく雜草詩園の一隅に培養樹の美しい芽を赤らんでゐた。

その人は薄田泣菫、蒲原有明。この運動は「明星」の文學運

動である。ついでは「文庫」の自然な貢獻も忘れてはならない。そして、その外のものは、非才が今日のごとく徒らに喧騷してゐたにすぎないのである

蒲田泣菫の詩の光彩は、詩史第三期の初め三十八九年にわたつて一番明らかにかゞやいたが、この當時は、まだ、試作時代の常として、先人の模倣や、獨自の詩境の暗中模索やの間に彷徨してゐた。

泣菫は美作ゥまれであるが、かれの愉悅の對象は、かれが京阪に生れた人のごとくに自然に寧樂、平安の兩朝の回顧の眞珠母である奈良であり京都にあつた。かれは、藤村の嗟嘆をよろこび、キーツの哀情に心をかたむけたが、その性情はもと、理智に於て勝り、高く淸らかに持し、また一味冷視の諷罵僻があつた。かれは、明治詩人中稀にみる古典語の驅使家であつたが、中學の頃稀にみる秀才であつた身を敎師と對抗して退き、爾來學校の門を何處もくぐらなかつた獨學者である。

かれの作詩は、二十九年の「新著月刊」誌上に「花密藏難見」絕句十九篇の奇詩を出して一擧にその名を知られた。その點、藤村、晩翠と同時代から出發したが、大成したのは右の二家が凋落しさつたあとで、有明と前後して、いはゆる「泣菫有明時代」をかたちづくるに到つた。その處女詩集「暮笛集」(三十二年)について、三十四年に「ゆく春」が出た。當時に於ても相當に重視せられた詩集である。それ故彼を藤、晩二家と合せて三詩人の名目を與へてもよいのだが、かれの代表的詩集「白羊宮」は遙かのちに出て、その時代の耳目をそばだてしめたもの故、過渡期の詩集としての二詩集をかへり見るを以て至當とする。

かれは多く三十三年發行三十六年迄つゞいた大阪の文學雜誌「小天地」と東京の「新小說」によつたが「後の明星」の客星として同誌にその作詩をよせた。「暮笛集」は、作詩三十篇外に長篇四行スタンザ百五聯の「尼が紅」と絕句十四行曲十九篇を收めてある。過渡期の暗中模索はまぬかれないが史的立場を離れて作そのものの價値批判の上から考へてみると藤、晩二家に優るとも劣らない佳品はこの集の隨所に發見せられる。長編「尼が紅」は當代詩壇に於て有數の佳作とみとめられたものであるが

許せ、沙尼が身戀ありと、
幕引きかゝげ窺へば
頸うちよせしめやかに、
春たのしむか、諸人の。
………………
見すや、若草離々として、

[illegible]叫く野の末とほく、
野馬うちむれて永き日を、
あかぬ快樂に醉ひぬらし。

………………

われ朽尼の身に堪えで
趣味ある方に迷ひしが、
快樂花さく下かげは、
袖ぬれがちの世なりけり。

これらの詩句に髣髴する泣菫獨自のスタイルは熱情的といはんよりもむしろその情が内訌のさまを備えて居り藤村の詩にみられるやうたよい意味に於ける一般感情の偏向なき巧みなる描寫と相違してむしろその趣味は局限されその用語は思想的所因にもとづく古王朝文化への憧憬の具象化としての古語の復活があり豐なる想像力と透徹せる理智とは一層彼が崇拜したジョン・キーツの詩情の外態に類似するものと思はれるけれどもまことは藤村になくキーツでない彼自らの古典主義がまだ自らさとらずそのふさはしい衣裝をもつけてゐないけれども詩集「白羊宮」に大成された明治詩壇まれに見る完成されたスタイルと透徹した趣味とを兼ねつらぬく彼獨自の詩情は夙くもこの處女詩集に仄めいてゐることは明らかである。

天稟の技巧の冴えと藝術的聰明とすでに所有してゐるこの一卷が何故に藤、晩二家の如く、しかく一般的にならなかつたのであらうか。泣菫と並稱される有明の詩風を考へてみればこの二人の非通俗的作家が、通俗的聲譽を博した藤、晩二家の次期を代表する二大詩星となつた所以が判明されやう。これは、個性の問題でなくして環境及び時代の立場から見るべきものであらうと思はれる。このことについては後段詳言する機會がある。

さて、この詩人について世評は何と見たか、帝國文學記者の言を引くと「由來泣菫が詩才に關しては評家各見るところを異にし、過褒激賞の言は、却つて作家の價値を下すなきかを疑はしむるものあり。或は全く渠を知らずして、詩才の有無を斷ずるものあり。天才者なりと言ひ、然らずと言ふ。余輩思ふに、斯の如く、世評の同じからざるは未だ渠が新體詩人としての眞價の發表せられざるものにして、是非褒貶の聲多かる丈、多數の評家諸者の注目を惹き、其頭腦の一部に刺衝を與へたる結果なれば、必ずしも渠が凡庸作家たらざるを證するものにあらずとせむや。過論の辭甚だ作家を誤らしむると同時に、又讀者を誤らしむるもの、余輩はなかなかに夫等一部の評家に同意する

能はずといへども、刻下の新體詩壇に於て、晩翠、藤村を措きては、先づ指を泣菫に屈せざるを得ざる可をは、十指の指さす處なるべし。」

その外彼に就て發言した人は多いが、たゞ一大事を忘れてその彫蟲の技巧の點についてのみ所言したから肯綮に中るなにものもないものが多かつたのは止むをえないのである。此集に次いで泣菫は第二詩集「ゆく春」を三十四年晩秋の頃に發市した。これは、第一集に比すると題材の寫實性に於いて勝つてをり、詩感の對照に於て異つてをる。この集の見のがすべからざる缺點は「あゝ杜國」の絶句十篇にトランスヷアールの亡國を嘆じ、チエンバレンとクルウゲルとを歌ひ、遣憤九首に當代政治家の無理想と無節操と破廉恥とを若く、直く、ひたすらに義憤してゐる。すなはち、苞苴の公行を嘆じては

丞相何とて無禮なるや、
路塞りなやんで泣くもあるに、
名聞買ふべく民をはかり
險しき方にぞ惑はしむる。
往くもの責ありこれに比して
誘ふは倍する罪ぞ負へる。
罪なほ厭はじ、怖るべきは
歴史を恥辱の影とせずや

（下略。「遣憤」第二。）

「義人」の末路を慨いては、

海神願はく行を垂れて
この日は諸手に浪を撓るな、
大なる靈魂傷を帶びて、
白帆を揚げたる船に伏せり。

吹き散る海の香　額を打ちて
「南の同胞」に落つる所
不幸のうまれよ、民惱むと、
王者（クルウゲル）は老いたる額を垂れぬ。

あゝ、彼の尊き御名に依りて、
義しき叫びを野に揚ぐるも、
白色人種に答ありや、
世の道まことに非違ぞ多き。

（下略。「あゝ杜國」）

これらの句に散見する作者の悲嘆は、當代青年の誰れしもが感じ、誰れしもが之れを歌いたいと考へたところのものであるには違ひないが、この用語のこの表白が、かれの本然のもの、獨自のものとなりきるには、餘りにかれの用語と詩感とは互に相かけはなれてゐた。ことに、古語の些かも容赦せぬ盛んな使用は、古典的な心の風景に於てこそ、一語一句の拔きさしも出來ないやうな黄絹幼婦の詩境を保つことが出來るのだが、この用語とこの題材との間には、當時、なほ古語の一般的使用と解釋力とのさかんな頃なればこそ、大して物おかしくもなく、さりとて面白くてたまられぬといふ程でもない平凡の地位を有することが出來えたので、今日これを見ては、題材と用語との隔離感から來る滑稽感が殘り、ましてや、異常に牽引する興味の類を惹起しうる要素は少しも認めることは出來ないのである。

然るに、「夕の歌」(巡禮にたちたる子を思ひて母のよめる)になると、たとひ、

夕となりぬ、日暮れぬ、
黄雲細く旗捲けば
天路に逼りし影も落ちて、
晝の務め地をば去り、
次いで來たる闇き夜の
小娃か、金星近く降り
織子門に凭る如く
目尻もうるみて此處をまもる。

（下略。）

などまことに稚い描寫の間にすらも、なほかたちところとの打ち親しい昵近が感ぜられるのである。

「あゝ杜國一風の歌が、その當時の詩風の過渡期性を表はすものとして、一種の興味があることは爭はれないが、それは藝術本來の價値が自然に呼び起す關心ではない。朦朧を排して簡潔に詠へと云ふ樗牛一派の詩材通俗説に心をひかれたのであらうか。

華筵に盛れる木蓮は、
香爐の灰冷えしまゝ
脆く落ちて行春の
ながき愁を止めぬ

深く責めな春の日を、
鐘撞男花に醉ひ、
時の數を忘るゝとも、
それは笑ふべき罪なり、

詣でゝ歸る子を呼び。
春の齢を問へるに
君も見よと雛衣の
袂ふりて急ぎ去る

今鐘樓に攀ぢ上り
遠く浮世を望めば
百里途もつくる方
春はかなく落ちんとす

あゝ若きに酒くみて、
甘き夢に興がるを
獨り冷えし堂に入り、
破れし帙篋をや解くべき

願ふに、魔よ毒さして、
才なき石と變ぜよ、
さば永劫朽ちもせで
春戀石と名を得んに。

「沙彌がうたへる歌」

清麗な措辭の妙と、雅馴な王朝語の美とが錯綜して冷美なる感傷の綾を織つてゐる處は、藤村から入つて、藤村とは全く違つた立場で立ち勝つてゐるところの當時いはゆる冷艶素香の美で、その中に縷々として神經質な氣難かしい感情のふるまひがかよつてゐる。讀者としては俗耳に入りがたい詩境で、作者としては常に入りがたい詩風である。

黑潮よどむ海の底
戀も詩歌も才の名も
根もなき藻草の一枝は
花を飾るに足らざらむ。

（「巖頭沈吟」）

といふ作は後の高踏詩風の芽生であり、

世に秀才なく
少女なく、
われ唯ひとり
物狂
雨垂拍子、
句を切りて

無才を知るよ
　今こゝに。

の皮肉な自嘲は、詩を廢して輓近の「茶話」の類の散文の基調となつたかれの嗤笑の快感である。

詩人泣菫の處島立は、はやく、この秀美にはじまつたが、その詩風の流俗に昵近なき高踏の趣を持しつゝも、藤村の如くに農人を咏じて「南畝の人」を作つたり、民謠に先んじて二三の作があつたがその方の成效展開は勿論なかつた。それから、絕句十九篇の試作(「暮笛集」)は、格調に於て八六の新調をとつて詩情の複雜性の自由なる表現を計つたけれど、その企は概して失敗に歸した。長篇「石彫獅子の賦」(「ゆく春」)には題咏風のくさみはあるが、藝術の愛をうたつたかういふ場合にのみ、作者の異樣な感情の昂揚を見られる。「尼が紅」(「暮笛集」)よりも成功した所以であらう。が、普通の戀情を抒べて後の「白羊宮」に類のない功果をあげてゐるのは一般にかれの詩巧の進步したためである。

蒲原有明は明治二十年代末期より詩作を公けにしてゐた。醉茗の記述によると、かれが最初に出した作篇は二十七年末「落穗帅紙」に掲げたものであるといふ。が、その詩情の幽光を江湖の有識愛詩家のあひだにのみ認められるにいたつたのは處女詩集「草わかば」が三十五年の一月に初めて世に公けにせられてから以後のことに屬する。

有明に對する世評は、これを良くいふ者は幽邃を以て稱し、これを惡く蔑にするものは晦澁を以て亡し去つた。が、この二個の特徵は楯の兩面である。一をとり去るならば、他は必然的に亡びさらなければならない。今、われ〳〵が文學史の見地からこれを觀るとき、有明の世に出でた事實は、泣菫の世に榮え、星菫詩の時代を劃し、象徵詩の出現したごとき明治文化史と緊密の關係を有するきはめて必然的な運命の下に生れたものであり、しかもその史上の値たるや、その市價の寡なりしにかゝはらず、嶄然として當年の諸文化諸藝を拔いてゐた。

ひとり、詩に盲目であつた一般民衆のみではない、當代評家として世にもてはやされた人々の所言を見ても時流の方向を知らず、一家見の狹きを悟らず、徒らに論理を巧みにあやつることの「頭の好さ」に心私かに傚つて、一人の異材の情致のデリケシーとその思想傾向との本質干係と及び時代との有機關係については纖細な領悟を得ることが到底出來なかつた。例へば樗牛が、藤村の「四つの袖」をもつて「朦朧派の末路」といつたごとき、また、樗牛よりも遙かに詩的鑑賞に卓れた抱月でさへも、その「新體詩復興策」で一圖に詩材を市井の巷に覓め

ることの急を說いて、現在動いてゐる新日本の浪曼精神がいかにナイーブにいかに熱心にそのままの表現に眞面目であつたかの一面を忘れてその立場に於ける彼らの詩才の進歩發展をうながす評家の善導といふ使命の部分が、その當時に於て更に更に重要であつた事理について知らない顏である。何となれば、當時の異材と云はれた泣菫や有明や鐵幹や醉茗や泡鳴や清白や林外や花外や月郊やその他の詩人が、よしんばその天より稟けたる詩的規模に於て天才の域に到底到達する能はざるものであつたにしても(事實これに達ひはなかつたのであるが)評家の博識と多才と深刻な透見と燃犀な史的考察と異邦文學研究よりの時流を拔く卓見とにより、各の詩才のよつて來りし處、現在低迷するところ、近く赴き着かねばならない處をよく精密に査べて之に同情と理解とに富んだ批判を下し、普通讀書社會と詩人との間の融合一致を求め、合せて詩壇の水準線を引上げることに成效したならば、持つて生れた才能の最大限に於てこれらの詩人は此時こゝに殘した貢獻よりも、いま少し卓れた作品を十分十二分殘すだけの余裕はあつたに相違ないと考へられるからである。しかるに、かへつて淺薄なジャーナリストや無節操な「新聞讀者級」やの盲言を基本として、空しくその「星と菫」すぎることを攻め、「朦朧」すぎることを鞭打ち、「晦澁」すぎることを縮めることに專心して、引出すべき天賦の才智を芽生ながらにして、あるひは、春半ばにして葬り去るやうにたちいたらしめた所以はすなはち此等の評家でありまた世人でありまた時代そのものであるからだ。

有明の如きは、昨夏出版の「有明詩集」中に舊作詩品を悉く改作してゐるが多くは昔の晦澁といはれたものをとり去ることに努めてゐるが、之れがためかへつて、原作の神韻と幽玄と史價とを失ひ、散文的說明の闡僻にさへ陷してゐるのは、卓れた彫像を作者自ら打ち毀つたやうなもので惜むにも余りあることである。その例證は「有明集」の卷頭「智慧の相者は我を見て」の作品によつても判る。

舊作

智慧の相者は我を見て今日し語らく、
汝が眉目ぞこは兆惡しく日曇る、
心弱くも人を戀ふおもひの空の
雲、疾風、襲はぬさきに遁れよと。

改作

智慧の相者は我を見て、努めていふ、
——汝が眉目は兆惡しくこそ日曇れ、
心弱くもあたし人戀ひわたりなば

夜の疾風やがて襲はむ遁れよと。

また、「春鳥集」の巻頭を飾つた「日のおちぼ」の名篇に、

舊作

日の落穂、月のしたたり、
残りたる、誰か味ひ、
こぼれたる、誰かひろひし、
かくて世は過ぎてもゆくか。
あなあはれ、日の階段を、
月の宮——にほひの奥を、
かくて將た踏めりといふか、
たはやすく誰か答へむ。

改作〔ひとしづく〕

日のおちぼ、月のしたたり、
うるほせる、誰かあぢはひ、
こぼれたる、誰かひろへる、——
あだし世はかくてすぎゆく。
あな、あはれ、日のきざはしを、
月しろのにほふおくがを、
つつしみのあしどり惱まず、
誰か、世にとめてゆくらむ。

右の例證で、「智慧の相者は我を見て今日し語らく」の句が、「……聲めていふ」になつてをる。一見、「今日し語らく」といふやうな格調に滑走しすぎたやうな感じのする古臭い様な文句は案外内容が空疎でコケ威しにすぎないやうな氣がするものだが、更に一度考へて見ると、實は、「今日し談らく」といふ簡勁の一句がけふといふカ行を頭にした堅い言葉と「談らく」といふカ、タ、ラといふやうな烈しい語音からなる言葉とをつなぐに、しといふ力強い一語を以て緊迫してあり、「聲めていふ」といふやうな力の弱い（必ずしも力の弱いのがいけないのではないが、此場合よくないのである）しかも説明的な余情に乏しい語句に替つてゐる點到底舊作の神韻に及ばないのである。

また、「汝が眉目ぞこは兆惡しく日曇る」が改作では「汝が眉目に兆惡しくこを日曇れ」となつてゐるが、これも、「ぞ」とか「こは」とかいふ、格調に縛られたやうな氣のするらしい、又一見無用らしい語句につながれた舊作の方が力強く、しかも含蓄があり、到底改作句の散文的な力弱い語句の及ばない詩人の言葉の美に富んでゐる。その次の二句でも、「心弱くも人を戀ふおもひの空の雲、疾風、襲はぬさきに遁れよと」といふ舊作の寸分すきのない、印象の强い、云ひ切りの美しさは、改作の「心

弱くもあだし人戀いわたりなば夜の疾風やがて襲はむ遁れよと」の如き拙劣な說明の氣力なさと比べることの出來ない美と力との言葉の搖曳である。

「日のおちぼ」でも同じことがいへる。

「かくて世は過ぎてもゆくか」

の名句が改作に於ては

「あだし世はかくてすぎゆく」

となつて、あだし世といふやうなよい言葉も、全句の調子の說明と非力との二點とのために、「智慧の相者」の場合と少しも違はぬ失敗をくりかへしてゐるのである。その次句

「月の宮――にほひの奧を」

が、

「月しろのにほふおくがを」

になつてゐるのは句としてこゝに優劣を見ないが、舊作の方が說明僻が奧ではたらいてゐないだけの句の稚醇を許して作者の眞摯に參することが出來よう。そのあとの二句は大分心がちがつてゐるから比較は一概に無理ではあるが、全篇から見れば舊作を保存して作者の心を誤まるものでは決してない。

改作を施したものの中でよいものも勿論あるが、惡いものになると更に多い。その例證が右の二句で片鱗を示されるのである。有明自ら、「その當時あまりに表現に急であつたが爲め、晦澁、混雜、矛盾等の缺陷を生じ、詩として自然の調律を失はむとし、また既に失へるところがあつた。」(「有明詩集」自註二頁參照)と告白してゐるけれども、詩としての自然の調律は、即ち、有明の詩としての自然の調律で、それは右の例證で肯かれるごとく、舊作にあつて、かへつて改作にはないものである。晦澁、混雜、矛盾は人となり性急な有明本來の詩的特色で、仔細にかれの全詩作を檢して見るならば誰にも易すく判明することであるし、かれの人格に接して見れば尙一層よく判明することである。これらの諸特徵を亡さんとならば、かれは詩人的に自殺しなければなるまい。詩は運命である。法悅である、晦澁や混雜や矛盾やは詩に於て顧慮すべき惡德では決してない。明晰や統一や合理やが決して詩に於ける美質でない。凡そ美しいものの壞敗は自己を一番よく發揮することを差しひかへるときに起るのである。このやうな考へを、著作時代以來二十年の後にさへかれをして起させた所以は、一はかれが自らの詩人的卓越を知る所が少かつた非自覺的所因のためでもあるが、一にはまた當年の粗豪な評家の出鱈目批判が氣弱なかれを萎縮させてしまつたために外ならぬ。評家無用などいふ放言はこのやうな事情あるがため、この時分からしば〳〵文壇で云はれるに到つ

たので、作者の心境と評家の態度とをよく胸におさめて考へるとこの放言も決して一時の放談ではなくなつて來る。

さて、有明は、「草わかば」の若々しい裝いで詩壇に見參をして見たら、世評はなほ一向になかつた。かれの自註するところによると、「日神頌歌」三十二、三年頃、紅葉山人の手を經て、「讀賣新聞」新年附錄に公けにされたものであり、「可怜小汀」は二十八年の春、一卷の「ハロルド公子歷遊篇」を懷にして瀨戶内海を尾道から船で渡つた折りの作であり、「菱の實採るは誰が子ぞや」は九州の情景であるといふ。が、初版本は予の手許になく、改作篇のみをとつていふは危險であり、しばらく引用はこれを遠慮しなければならない。たゞ一つ、作者が、後年「春鳥集」の名作「さび斧」に於て到達した詩境の萠芽が夙くもこゝに現はれてゐると自ら稱してゐる「かすかに胸に」中の一句をとるならば、

かすかに胸に、けふは、また、
むかしの海の響すと、
ひとり寂しきうたがひに、
山邊の翁のつぶやける。――
山邊にかくは齡老いて、
遠きおもひもあらざりき、
今日しいかなるたはぶれぞ、
翅は生ひぬ、わがゆめに。

雲も色めき、ただよひて、
あらき巖をつつむとき、
樹かげの闇を離れゆく
夢のつばさぞ匂ひたる。

（下略）

かれの寂しい思念、思ひ深げな嗟嘆、何處へとも得判ぬ皈依信樂のあくがれのこゝろの香がやうやくおぼめいてゐる。しかも世間では何かしらいゝものゝお蕾はへてゐさうだと考へてゐたにすぎなかつた。

それが、三十六年五月の「獨絃哀歌」になると、稍明らかになつてゐる。この集中の諸作は、もと「明星」に三十四年の交迄載されたものである。有明の詩的精進は、正しく、晦澁を明確に書き直すことではなくて、晦澁を明晰に意識することにあつた。この集では、かれの特色がます／＼明らかな自分の衣裳をまとつてゐる四七六を一行とする讚美歌をとつて詩美の複雜性をはかり、「出雲風土記」によつて「作太大神」を作り、「新竹曲」

を作つた。後者は、スキンバーンの「イチラス」を飜譯してゐたをりの作であるといふ。

先ず、世評を見よう。厨川白村は「帝國文學」の批評欄で言つた。「集中の『佐太大神』の一篇などは、自分が嚢に『明星』の誌上で見たとき、殊に面白いと思つたものであるが、その外『薔薇のおもへる』、『浮世の戀』『よきしほ』、『戀の閾』などに見へたる戀愛には、西歐近代詩歌の風韻がある如く覺へて、詞藻のたくみなところに於ても、また着想に於ても戀愛詩の方面でわれは此作者を島崎藤村などよりもうへに置くに躊躇しないのである。」(三十六年七月號)が、有明の詩の特色は決して戀愛詩にあるのでない。藤村の生一本な、純粹な、なよびやかな、日本的な、奔放な、殉情一路の戀のうたが一切りもてはやされた後、有明の思はしげな、複雜な、幽遠な、西洋的なる戀のおもいをいろ〳〵な凡百の情思に交ぜてほのかなる近代の思致をたくまふしうしようと試みたその愛のうたが、たま〳〵西洋的なるものに青年のあくかれを示した白村の同感をひいたのであつて、これは一部の好尚をひいた眞實な味ひに富んではゐるが、決して一般民衆の愛誦の的となりうる本性を備へてゐるものでは固よりない。

また、白村はその譯詩を稱揚して「此詩集のうちで最も感服するのは、英國詩歌の飜譯である」といひ、「萬年草」に出たロゼティの"The Portrait"を讀んだ時「初めて其筆致の巧を認めた」といひ、左の譯詩を例證してゐる。

そのかみ君をも知りけむ
いつの世ぞとはえもわかねども、
燕さすかたうなじを君、
さはかへすとき、
面帕おちぬ、——そは昔われこそ見つれ。

You have been mine befour,—
How long ago I may not know:
But just when at that swallos's soar
your neck turned so,
Some veil did fall,—I knew it all of yon.

有明が譯詩の巧緻は上田敏と雁行すべきものがあるが、その最初の試みは夙く本集の發市とともに青年外國文學愛好者の間に知られたのである。(譯詩については後に詳評する。)

白村のいふ愛の詩の巧みも、實は有明の大きな特兆の一つにすぎないので、その本質のよく表はれたものは、戀の歌の類でなくて、苦惱哀求の心緒を抒べた詩篇にあつた。それにこそ含蓄と

餘情とに富む詩人の句が隨所にある。

落葉林の冬の日に、
さいかし一樹(ひとき)、
（さなり、さいかし。）
その實(み)は、梢いと高く、風にかわけり。
に起る「落葉林の冬の日に」は、

風おのづから彈きならす
小琴ならねど
（さなり、ひそかに。）
枝に縋れる殼の實のおもひ悲しや。
わびしく實る殼の種子(たね)
この日みだれて、
（さなり、すべなく。）
音(ね)には泣けども、調なき愁ひを、いかに。
かくて、世にまた新なる
光はあらめ
（さなり、ひかりや。）

われは嘆きぬ、さいかしの古き愁ひを。

の惆悵たる、悽愴たる、慘々たる愴惻に終つてゐる。そのスタイルは既に完成の域に薄らんとしてゐるのである。

「靈鳥の歌」は、その感情の規模が一層大きく、深く、廣い。

鑿の手あらば鑿を執り、力をこめよ。
絃(いと)の音(ね)知らば絃を彈けかし。――
ああ、さは問はじ、
「何處より來し、かの鳥」と。

が、一聯のみをかう切ると、卓れたスタンザの妙は燦然とかゞやくけれど、かういふ聯を八個つなぎ合せた全篇を初めから讀んでゆくと何となく倦退の情のきざすのを止めることが出來ないのは何ぜであるか。聯より聯と層一層步武を進めるに伴ひ、感情の必然的變化に連れて効果の更新がなければならぬ。感激の幾何級數的增加がなければならぬ。最後にいたつては、全篇を蔽ふ天地にひゞく詩人の絕叫がなければならぬ。あるひは、壯嚴な私語がなければならぬ。あるひは、意義ぶかい默語に辿り入らねばならぬ。この詩にはこれがかけてゐる。ポウの「大鴉」などは、この點で詩人の鬼才を遺憾なく發揮したるが故に近代の大作といはれるのである。

終りに注目すべきは refrain が成効的に使はれてゐることで

ある。ロゼテイが感化の技巧に及ぼせる一例と見てよい。

有明は第三期に入つて「春鳥集」をまづ公けにし、明治も末期に近づき、その出版の機は遅れたが正しく四十年前後の一代の詩風を率ゐるものとして目さるべき「有明集」を上梓した。この詩集でかれのスタイルは完成したのである。われらは、明治新詩史のあとを辿つて、この有明にいたつて初めて西洋近代の詩の本質的な東方的誕生を見る。

泣菫、有明の二家をはなれて他の群れを一瞥しよう。小説界（並に戯曲界）に於ては三十六年紅葉の死にいたる迄、硯友社風は力づよく一世を風靡し、浪曼精神も、寫實主義も、尚古趣味も、この一代の流風の坩堝を濾過されて出るにあらずんばその存在は不能であつた。從つて當代社會の趣味思潮の一般傾向を代表する硯友社文學が、寫實心をもたげても、それは、前にもしばしばいふ通り漠然たる細叙主義以外何ものもなかつたし、浪曼主義の趣を尚ぶと云つても陳腐で低級な江戸時代の遺風のあるものを喜んで新代の好尚に理由なく反抗したり、日本的なるものを支持すると號してもそれは存在理由のあるものないもの一切に對して取捨辨別の事理に甚しく缺けた無知と、無反省との盲動で、且その態度も徹底しない遊戯心をわざとらしくてらふ態に自足自滿してゐたにすぎなかつたのである。文壇の本流は、而して、これである。これ以外のものはバタくさいと云はれた。チンケイトウだといはれた。混覚文學（紅葉がロシヤ文學に對して下した諷語）だと云つて斥けられた。堺枯川が婢びなもの年增のほうづきと新體詩だなど云つたのも、陳腐な流俗趣味に鼓腹迎合して新らしい趣味に肝を怒らした言葉である。緑雨が新體詩人の非粹的行動、非通人的言行をさかんに隨筆で書きけなしたのも、大才を抱いて生れたこの無自覺的な江戸趣味最後の文士が、新思潮に對する消極的なイヤ味をもらしたにすぎないものである。平田禿木の文章を以て西洋料理を食べてヘドを吐いたやうだと惡口を飛ばしたのはこの一派の人であつたと記憶する。更に、夏目漱石が「猫」の中で上田敏の「あゑかの君」といふ語を弥次つたり、象徴詩の皮肉を云つたりしてゐるのも、生若い、無學にして、好計りよい、いつの世にも絶えない「青年詩人」といふ手合の胸の浮くやうなイヤ味を小ツ非道くこき下したい當時の中年有識者流の憤懣を代表したものであるが、一面に於てまたそれは徒らに新らしいものに對して遊戯的な氣持ちでちよつかいを出して見たがる賢明にして臆病なる傍觀者の心中をさらけ出したものと見られる。

凡そ、世はこの風尚にあつたのである。藤、晩二家に在來の強い日本趣味の香があつて一般の好尚を率いたに反し、その次

明を受けた泣、有二者がまつたく世俗とかけはなれてしまつて少數愛詩家の專有物となつてしまつたのは、一面、この二者の本性の然らしむる處である家、その二者の一期を代表した所以を考へると、かゝる傾向の作家をば、當時の詩壇そのものが誠は飽くまでも要求してゐたことが判明する。詩の値から云へば泣、有二者は、藤、晩二家に較べて一段の進歩を示してゐることは公平な讀者の一樣にいふ所であつた。値あるが何ぜに世に迎へられなかつたかと云へば、かゝる傾向が尙よく世と一致しなかつたからだとしか云へない。しかもひろく時代を鳥瞰すれば、この傾向も亦明治時代の重大な一部分を擔任してゐるのである。泣、有二家の詩の一聯一句が株屋や合百師の口に歌はれなかつたにせよ、その株屋の不幸なる息子は、うすぐらい土藏の窓でこつそり泣菫の「あゝ大和にしあらましかば」を涙を流して嘆美してゐたかも知れない。その合百師の悴は、ある夜ひそかに有明の「翠菜園」を小聲でうたつて憧憬の瞳を「海のあなた」に向けてゐなかつたと誰がいへよう。

西洋的なるものに對する反抗と憧憬とが文壇の垣の内外にせめいでゐたのである。泣、有二者各日本の古傳説に取材してバラッドやエピツクやパストラルの方面へ開拓の手を延ばさうと既にしてはゐるが、その精神、その諧和にどこか頑固な日本趣味者の毛嫌ひしさうな「バタくさい」ものがあつたことは爭はれない。流俗の耳にその語が入りがたかつた理由の一はこれである。

もひとつは、自分の趣味思想に頑固に徹底して、流行や名聲やは完く度外視してゐたかれらの態度から來てゐる。泣菫の古語廢語の復活は、當時に於ても中々非難の的となつた。有明の晦澁は、藤村の朦朧體を一層徹底させて殆ど世間と相鬪することない外態を呈するまでにいたつた。利口で冷靜な泣菫は冷然とかまへて一向に辯明もしたかつたが、一本氣で正直な有明は「春鳥集」の序で近代精神の幽遠を說いて、複雜な心緒の表白が、むかしのやうな單純なスタイルに滿足出來ず今日の自分のやうな晦澁に近いものを招くにいたつたのも止むをえないと親切に說いた。曰く、「詩形の研究は或は世の非議を免かれざらむ。既に自然及人生に對する感觸結想に於て舊日と異るものあらば、そが表現に新なる方式を要するは必然の勢なるべし。夏漸く近づきて春衣を棄てむとするなり。然るに舊慣ははやくわが胸中にありて、この新に就かむとするを厭へり。革新の一面に急激の流れあるはこの染心を絕たむとする努力の遂に外に逸れて出でたるなり。かの音節、格調、措辭、造語の新意に適はむことを求むると共に、邦語の制約を寬うして、近代の幽致を寓せ

易からしめむとするは、誨に已み難きに出づ。これあるが爲に晦澁の譏を受くるは素よりわが甘んずるところなり。

眼識等の諸官能は常に鮮かならざるべからず、生意を保たざるべからず。然らずば胸臆沈滯して、補綴の外、踏襲の外、あるは激勵呼號の外遂に文學なからむとす。」かれはこれから立論して近代象徴派文學の眞諦と信ずるものを說いてゐる。日本に於ける象徵派文學の輸入者は上田敏であつて、その意識的作詩家は、すなはちこの有明であつた。

以上の二點が、二家を世間から切りはなち、世間を二家から遠ざけてしまつたのではあるが、かゝる傾向の二大代表が詩壇に前後して君臨するに到つた理由は別にある。實は、それがこれらの作者の非通俗性の所因の眼目である。第三期に入つて論じよう。

藤、晩二家衰へて以來、三十八年以降象徴詩運動の意識的勃興が初まるまでの數年間は、三十四年前後のいはゆる「星菫詩人時代」であり、その後のネオ・ロマンティシズム提唱の時代であつた。この浪曼時代に、その憧憬の對象を希臘主義風の境地に置き、その主材を、西洋的なるもの、王朝的なるもの、及び、德川的なるものなどに採つた。空間に於て遠く異邦をさぐり、時間に於て遙かに古代をさぐるのは浪曼家の常である。かれらは、自國の帝國主義がいかに新興個人主義によつて漸く脅かされてゐるか、いかに社會主義によつて次第に脅かされてゐるかに左までの關心は置かなかつた。假令ば、一旦關心を置いたにしてもそれが國家の重大問題ではなかつた、家族主義の破毀、國粹思想の頽廢、政治家實業家の腐敗、階級別よりの社會的酸敗等についてもノンシヤランスであつた。思想的にも經濟的にも社會的にもしかく在りえたのである。かれは頭上に花咲く星の光の色彩と光度とに眩惑されてゐた。地上に光る一輪の花の殿堂のその微妙な偉大性に驚嘆してゐた。かれ、漸く「個人」でありえんとする文明の思春期の青年である。いかにして「個人」たりうるかがその刻下の問題である。いかにしてその「時代」より惠まれた、祖父らのかつて經驗せぬ多彩多作奔放自由な想像力の世界がこの地上に浮び出づる秋が來るだらうかとそこはかとなく空想してゐる少人であつた。おづ〳〵とではあるが、この空想の世界の美しさを我と我が胸の中に包みかねて、こつそり詩の中に鏤めてをきたいと思惟する若者であつた。その逍遙する世界は、希臘の如く、中世の如く、英國の如く、伊太利の如く、日本の如くあつた。その戀人は、希臘の雅人に似て、古羅馬の姿態もそなへ、浪曼英國の詩畫人の畫架を拔け出た面長な青白い美女であるかと見れば又、ダンテ冊中

の詩界に彷徨する南國の佳人であるやうな情熱も持つてゐて、これらの顔やローブやこゝろが、天平の面影めいた古代姿にはまつたり、勝山や桃われや結綿のニッポンムスメにも變裝して夜な夜な青年の胸を訪れた。かれらの情熱は、交情にひた泣き・心美女の運命に集中した。近松の心中女は、果然、ジュリエットやローラやフランチエスカとアイデンテイフアイされたのである。かれらの哀求は、美しきものの遍在に對臨する狀態に向つて放たれた。三十四五年代の半開日本首都は、當然、阿典や羅馬のむかしの如くに思惟されたがつた。無理にもさう考へたい希望の間にかれらのロマンテイシズムがあつたのである。

この思考に悩む青年に「社會」乃至「國家」といふ生々しい現實の問題はしばらくそのかげをすら潜めてゐたのも無理はない。名聲、射利といふことも、只青年らしく抽象的にあくがれさせるに止まり、自己の空想の値の幾部分をその方面への努力のために割くだけの世間性はなかつた。勝手に思ひ、勝手に考へ、勝手に作り、勝手に發表した。自作を賞めるものもそしるものも、自己と同じ教養と藝術觀と切望とに生きてゐるものと定めてゐた。かれらの足は、星の世界に入つてゐた、その時は花の宮殿の只中にあつた。これが非通俗なる詩を作らなくて何を作るであらう。

この浪曼精神は、スコツト、キーツ、ノバーリス、ミユツセの前浪曼思想と同時に、ロゼテイ以後のラフアエル前派藝術の思想及びヹルレーヌ、マラルメ、マーテルリンク等後期浪曼思想をも一緒に受入れてゐた。文明の花遅く笑つたこの國に梅櫻桃李一時に花ひらいたのである。前浪曼的とのみ斷ずるには新らしすぎる想像の属性がある。後期浪曼的といはんには古めかしい空想の對象も尠くない。

あらゆる思想や傾向やに博大な同情と理解とを示して、それぞれ自分の心持に從ひ、各異なる衣裳を纏はせて不毛の荒蕪地の開拓使とさせた森鷗外の大規模な業績の一として、かれの傘下に集つた一派はこの期の浪曼趣味の熱心な培養者として各の部分々々を分擔することに從事した。上田敏、平田禿木、戸川秋骨の諸文學界同人は既に中年の篤學な學究として一世に漸く重んぜられんとする働き盛りにあつた。馬場孤蝶は譯文に赴き、かたはら選詩の事にしたがひ、かれら先蹤の業にあくがれた新進の青年文學者は評論に譯詩にこぞつてこの傾向の學問的分野を堅めた。自覺ある作家も、自覺なき作家も、一樣に立つて自分の空想の値を文學の花苑の中にためさうと企てた。他の文化の分科、醫學や工學や法學やに於けると等しく、西歐文學の刊

達してゐる場所に一旦に立ち到つて英人と同じ希望に生き、佛人と同じ空想を喜び、獨逸人と同じ仕事にいそしむことをうるに到らんとしてゐた。散文の方面では、紅葉死後自然主義の革命運動によつて漸く一氣になしえた效果を、詩壇に於ては、早くもこの期の頃より、悠々と、而して、緩々と行つてゐたのである。そして、これらの人々の凡てが同情を有して之れに執筆し、宛然、日本新浪曼運動の策源地の觀があつた一雜誌がつひにあらはれた。それは文學界の傳統をもひき、鷗外の趣味によつて暖められ、澎勃たる新興文學の新精神が、個人の小さな力以上の大いな集團的勢力を要としたその時代の要求の波に乘じて出現した雜誌舊『明星』である。

『明星』は三十三年三月創刊されたが、その發行所新詩社を率ひた主幹與謝野鐵幹の文業は、はやく二十七八年前よりはじまつてゐる。初めかれは「二六新聞」によつてその作品を發表したが、その後は他の刊行物によつた。かれは京都に生れて東都に遊び國文學者萩廼屋主人落合直文の門下となつたのであるが、その師の短歌道に對する革新の希望は、この弟子鐵幹によつて、他の同門服部躬治、金子薫園に於ける以上に成効的に果されるにいたつた。しかも多才にして世運を見るに敏な鐵幹は、三十一文字の世界にたて籠ることが出來ず、新體詩の方面に馳せ參じ、詩歌兩道にまたがつてその若い澎勃の氣を吐かうと企てた。

が、もと、かれは泣菫、有二家の如く詩に劃期的大才ある人でない。その詩才は、詩に於てよりも短歌に於て本質的に發輝され、その結果も亦歌道に於てより大きく、より强く波動を與へた。誠に新詩社の短歌革新は明治文學史の重要な部分を占めるもので、その運動の骨子となり、あまねく天下に秀才、才媛の數々を求め、ついに一人の巾幗天才者鳳晶子を發見してその傘下にもたらし、爾來「明星」の短歌は、十數年の長きにわたつて新日本の最も注目すべき詩的呼吸の中樞機關となつた一事はかれがその主働者として挺身したところにまつことが多い。わけても雜誌「明星」の發行は、世にいかなる多くの非謗を敢てするものが今なほあるにしても かれでなければ到底出來ないことであり、かれによつて初めて意義ある多くの結果をもたらしえたことである。が、かれは多才の人の通有とする、一事に專念することの出來ない自然の誘惑を持つてゐたがため、文にゆき詩にゆき、歌にゆき、宗教にわしらんとし、政治を垣間見、甚しきは若くして朝鮮で射利の業さへ企てたと喧傳せられたがその何れもがかれの最大事業として及び時代の最大光輝として殘るものではなかつたけれど、建設的明治の過渡時代が生んだ

一種の公人として、美妙の如くに偶像的であり、嶺雲の如くに崎嶔であり、獨歩の如くに計畫好き事業好き運動好きであつた、さながらに二十年代より三十年代の時代相を示唆する明治式文士の好摸型であつた。從つてその事業、運動の花やかさに較べて、卒然、かれの著作そのものを二十年後の今日に於て文學史家の眼で一瞥するならば誰もその名の大なる割にその作の少くて、その追隨者の多からぬをいぶかるであらうが、一度時代の風雲の上に野望滿々と彳立した若い彼の姿とその作とを合せ觀じる時、われらは初めて正當に色々なイヤ味や粗豪や傲慢や露骨や衒氣や匠氣や茶氣やのその只中に時代としつくり合致して、靑年の熱望のフオーカスとなるあるものを握つてゐる一種の鐵幹獨得のスタイルを見出さずにはゐられない。こゝにかれの藝術の創見と立場と價値とがある。が、所詮、かれの文業として後世に殘りうる貢獻はその率ゐる新詩社一派明星詩派運動の主倡者としての業績でなければならぬ。

鐵幹の詩作は、二十九年の長詩短歌集「東西南北」を處女作とするが、次いで出た同じ種類の「天地玄黃」(三十年)、「鐵幹子」(三十四年)、「紫」(同年)、「うもれ木」(三十五年)、「毒草」(晶子共著。三十七年)と數へて來ると、その間かれらしい獨自の開展があり、進歩があり、變移があつて、その推移は、第一明星より第三明星へと轉位して行つた雜誌そのものの傾向と意義と貢獻とを明らかに物語つてゐる。

初期の二著に見られるかれの特徴は容易に人に賞されやすく、かつ、そしられやすいイージー・ゴーイングの一氣呵成で果した靑春客氣の空しき跳梁であつた。かれの人となりを呑込む者は、かれのイヤ味や衒氣をも微笑して受取られうるが、かれの人となりを嫌ふ者が、かれの隨所に持ち出して「匹夫の勇」(帝國文學記者の評語)の標榜とする「虎」や「太刀」や「八道」や、轉じては、「業平」や「バイロン」がたまらなくむしづの種となつたのも無理はない。

處女作「東西南北」は、史價あるものではないが、かれの大膽な短歌革新に一種の自信を與ふる機緣となつた點で注目する要がある。

當時の新誌は何と見たか。「國民の友」は、この集の亂調をなして「過去の形式の束縛を脫し、格律の鐵柵を碎」いた所以を以て、「漫然として古人の爲る所を離れ、自然の外に自我を立つ」た故とし、「許多愛誦すべき佳什」の出來た原因は「自然の調に」入りえたものであるからだとした。「東京朝日」は「善くいへば豪放惡くいへば勃窣」と評し、「早稻田文學」は「ともかくも我が新體詩壇に一旗幟を樹つる」ものとした。又、「靑年

文に記者は「詩想單純淺薄にして、其言表はしば露骨」だといひ、その「新體詩に至りては淺薄露骨更に甚しく、誦すべきの作殆どあるなし」と斷じ、轉じてその貢獻を數へて「漢語を新體詩中に導き入れ」て、巧みに「雅語と漢語とを融和し得て、毫も其調を亂すことなきのみか、却てこれを圓轉流暢ならしめ、變化あらしめ、雄壯ならした」と賞美した。大町桂月は、長詩の中から

上人老いぬ我れ病みぬ、
世をかたらふも懶しや、
たゞ相逢ふて笑ふのみ、
興去ればまた別れ去る。

の篇を拔出して之を推賞し、「因過竹院與僧話、又得浮生半日半」の詩句よりも奇拔で飄逸の趣掬すべし」といひ、その詩歌が多く漢詩のヒントを獲てゐるとて對照縷說し、當代詩文人の血と涙と骨と腸となき女人臭と非國家臭と反社會僻とを斥けて「此際に方り、鐵幹、好んで慷慨雄壯の語を吐き、孤劍萬里、飄然として二たび古三韓の山河を跋渉す頗るバイロンが慨然として古希臘に遊びしに彷彿たるものあり。而してこの好男子、竟にバイロンが狂熱なき乎。」と攻めてゐる。

この集のかく人目を率いたわけは、詩そのものの値高いためでなくして、その身振が人目を眩じ、誰人も毀譽何れとも何んとか云つて見たくなり、その破調が奇矯で當時の詩に好對照をなしたからに外ならぬ。多くは拔措なく、感情粗笨に、苦心も焦慮も懊惱も苦悶もない。二十七年の「軍中月」の如きは軍歌であるが割合に無難な作である。

平壤府、大同江、
野はひろし、流れは長し。
見れば皆、幾日もたゝぬ新戰場。
すさまじきいくさ一と揉み程もなく、
清兵三萬わしらせて、
秋は半となりにけり。
よしや今宵は勝利の祝ひ、
かねて三五の月の宴。
…………
飲めや謡へやこの一と夜。
故郷人がはゐばると
眞心こめておくりたる、
うまき伊丹の酒もあり。
肴には、こたびのいくさに斬りたりし、
血に染む髑髏五千級。

その他、「從軍行」と題した軍歌は、

大男兒、死ぬべき時に死ぬを得ば、
捨つる命は惜しからず。
五十年、太平の夢をむさぼりて、
なにか空しく長らへむ。

云々で初まる一篇で、全國年少の普ねく歌ふ所となつた。畢竟するに軍歌の域を出ないもののみであるが、かれの漢詩に於ける造詣は歌にあらはれ、詩に現じ、その後三十年代に出したかれの詩の多くには、當時の流行心理であつたところの西洋詩の感化は少しもなく、多く五言古詩の漢詩句をそのまま新體詩形に引直したやうな氣息と型式とを備へたものばかりであつた。

鐵幹は、時流を感得することと頗る敏感であり、恒に時代の進展に伴つて今日に到つてゐるけれども、その詩に於ける西洋詩の影響は皆無であつた。一卷厖大なフランス詩の譯集「リラの花」を大正三年に出した渡佛から歸つた後のかれとてその詩と思想と趣味と感情とは少しも西洋らしい處はなかつた彼である。この點昔からの東洋風文人肌であつた。長兵衛、秀吉を咏んだ所以である。當時著しく一部の諷誦するところとなつた作に「人を戀ふる歌」（「鐵幹子」）がある。

妻をめとらば才たけて
顔うるはしくなさけある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱
…………
くめやうま酒うたひめに
をとめの知らぬ意氣地あり
簿記の筆とるわかものに
まことのをのこ君を見る

あゝわれコレッヂの奇才なく
バイロン、ハイネの熱なきも
石をいだきて野にうたふ
芭蕉のさびをよろこばず

この「男の子」の意氣は、當年の民友社はじめ樗牛らが纖弱婦女の私咲のみとして擬古派雨江、鳥山羽衣らより「朦朧體」派藤村の詩風を斥けた主題に出立する男性の聲の雄叫びを旨としたものであるが、徒らに女子の泣聲とけなした羽衣や雨江や藤村に「小夜ぎぬた」、「深山の美人」、「荒鷲のうた」の作品があつて、今なほ一誦するに勝ゆる所以あるにも係はらず、之を大上段に論議した評論のたぐひに殘る何ものもないのは、どちらが

正統武術の立場で藝文にいそしんでゐたかといふ疑問への判識の標目だ。鐵幹が男子の歌、「小生の詩」は、柔軟の詩風に抗して立つたものではあるが、それは青春の血汐に驅られて複雜な鬱氣を漏らしたものにすぎず、もとより劍を按じて立つの人となりではない、衆庶を臨梅して經濟の大局を管理する實務の人でもない。これは獨りかれのみでなく、當年の若者全てに通有する不可能の願望のひとつで、尙これをわれらが、二葉亭の志士氣質に見、獨歩の經倫僻に見、透谷の覇志慾に見るものである。二葉亭が渡清して川島浪雄の友情により北京警務學堂の提調と立つや日頃の志成れりと喜んだが實際はかつての容想と反する處徒らに多く、僅かに本國に便して「ビヅネスも面白いものさ。」など負け惜みを云つたのがこの種の國士氣質の落付く先きであつたのである。二葉亭程の知識も準備もない鐵幹が如何ほどの謀士的容想を果しえたか蓋し思ひ半ばにすぎようが然し、誠はその樣な實現性はどうでもいゝものである。われらの關心はたゞ詩材として盛られた閔氏事件であり、完平君であり、秀吉であり虎でありバイロンであればよいのである。彼の詩はその何れにも肩を怒らした空疏な勇心が假裝せられてゐるが、それはすべて單純な氣息の粗豪な形を具へてゐた。

一鬼あり眼を眇す
うゑはしさかな美女の血を
乾してねりたる肌の色
（「咒詛」）――「鐵幹子」

といふ一節を見ても

わが道いく種にみだれては
婆羅門人を畸形にす
君見ずや現代の小詩風
これ餓鬼のよる果實なり
（「晩翠を憶ふ」）――「鐵幹子」

といふ一聯を讀んでも「そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身」とか「われ男の子意氣の子名の子つるぎの子詩の子戀の子あゝもだえの子」とかいふやうな短歌に見られる衒氣が感じられるが、これら實に名に渇え、戀に狂ふ青年與謝野の不平の吐瀉所であるのみでなく、時代の舊權威に反抗する、現在は非力なる若者の、苦惱の姿態であり、そこはかとなく朧ろの俤を虛空に幻ずる理想らしきものへの憬れの嗟嘆である。されば、この見地より見れば衒氣も愛すべきものであり、匠氣も忌むに足らず、イヤ味たつぷりな壯士の歌も實は各人の身中にその半分をしめる人間昔ながらの悲しい哀調でないと誰れが云ひきれようか。われが鐵幹の才能は、これらのマンネ

リズムと躍りして動いてゐる。なよびやかな情緒、綿々たる一縷の哀情それらは彼にないものである。

斟む酒琥珀色に
子が手何んぞ白き
笛のにがきを說くな
唇芙蓉の紅流る
…………
寂寞の石
子が接吻なくば
堪へんや嗚呼堪へんや
秋の日沈む

天王寺
梅が辻
追懷の明日と訪へ
秋の香いづらぞ
菊寒く鐘ほへき
（「泣菫と話す」）

粗大な感情の流露の間に、不用意な一氣呵成の素描畫の間に、一縷の心緒は說明的語句の間に、描寫の權威を以て迫るものがある。これは東洋風の表現である。些の西洋らしい形式がそこには見出されない。

…………
わが名咀ふ
何んの咎ぞ
わが戀しのぶ
何んの嫌ひ
歌口血に染む
短かきも他人の笛か
無聊に堪へず
いざ宰相の彊横ぎらむ
（「破笛」）

同じ漢詩や俳句やよりの表現法は他にも隨所にある。

夕不忍の池ゆく
涙おちざらんや
蓮折れて月うすき

長酡亭酒寒し
似ず住の江のあづまや
夢とこしへ甘きに

…………

（「敗荷」）

かういふ小手法は感情を人に强ひてかへつて反感を買ひやすい粗笨な技巧に基く稚い詩技であるが、表現が單純であるから人には判りやすい。しかも判り易く誤られ易い本性にあるのが鐵幹のテクニークである。

　山の湯の氣薫じて
　欄に椿おつる頻り
　帳あげよ
　いづこぞ鶯のこゑ……

（「春思」）

これは「明星」のうたである。イヤ味があると云はれた軟派の表白である、が、その効果は彼にあらはれた。鐵幹は戀をうたはんとしてその纖美の情思を言葉にのせることをせず、その戀のうたにも功名榮達へのもだえをもらした。戀のうたは彼のものでない。彼の吟等の不平と客氣とは悉く集つて「日本を去る歌」にある。毀譽の中心となつた作である。

　ああわが國日本
　あゝわが父祖の國日本
　東太平洋の綠をのぞんで
　白き被衣の女富士立てり
　顧望して低徊す
　山なんぞ麗はしき
　水なんぞ明媚する
　あゝわれ去るに忍びんや

　あゝわが父祖の國日本
　日蓮を生みし國
　秀吉を生みし國
　わが渇仰の古き友業平を生みし國
　こゝに十九世紀の末
　誤つて詩人われ鐵幹を生みし國
　あゝわれ去るに忍びんや
　………

　詩人の行動は天馬空を行く
　不道德や無賴や風俗壞亂や
　惡語頻りに父祖の國に誤らる
　あゝ人間（ひと）の縄を以てわれに强ふるか
　…………
　峨々たる殿堂京の大寺

妓女の[illegible]つて
善男善女の血の酒
美女と金屋の春に戯る

…………

われ之を慨して閔泳駿を擁し
微力聊か本國を整めんとす
何事ぞ偵吏われを迫害して
治安妨害の名の下
三十一年の春南大門の雪の夕
あゝ遺憾なりや　われ女裝して
ひとり京城を去らざるを得ざりき

…………

神よこの國の詩人を憐み給ふ勿れ
彼等はすべて戯作者の子たり
狹斜を寫して文學となすに
藝術の高きを望むべきや

…………

顧望して低徊す
美なるかな祖國の山河
去るに忍びんや
然れども迫害は急なり
われ遂に居るべからず
昨日女裝して京城を逃れし子
今男兒の歌を誦して去らむ

…………

緑酒一杯にわが顚狂を喜び、舞妓君子に「そのいぢらしきくち紅を」人のこころにうつすなと感傷する彼は、近づく人凡てを愛し、遠のく人凡てを悔むだ。

身はすべて醉きみが房

と歌つた領事官補堀口香坡によせた「酒ずきの緑ずきのなつきじかりし我友」への友情、「夕だちの雲にのりさて人の子に歸されし大町桂月」と罵つた憎惡、凡て彼のたちがたき運命的なる愛憎一念の發露である。しかも友情に托し惡罵に托し歌ふ處は人の事でない自分のことである。一分一時自分を忘れることの出來ない神經質な小膽な彼である。その彼が任俠の長兵衛を羨んだり、豪放の大雅堂を讃じたりしたのである。矛盾だらけ、衒氣だらけ、イヤ味だらけ、それを無遠慮にさらけ出した處に詩人鐵幹の獨自の藝術美とその近代性の新鮮とがある。そしてそれらに裏打ちされた匠氣と衒氣と[illegible]開性とがある。この[illegible]

ら見れば當時にしては甚だ奇異なる裝幀であらはれた「紫」は、泣菫の「ゆく春」よりも、藤村の「落梅集」よりも、晩翠の「曉鐘」よりも、有明の「草わかば」よりも、當代の何んの詩集何んの文集よりも一番輓近派體のスタイルとエスプリと野望と紛飾と缺陷とを持つてあらはれた詩集である。

越えて三十五年かれは詩文集「うもれ木」を公刊した。その文は「海王百詩の跋」の如き藝術主義の空想を自ら樂しんだものから「埋木」の「金糸雀の窓」のごとき長閑かな逸民情調に移つてゐるが、これは、その客氣年と共に漸く衰へて、居を求めて燈火のあたゝかきに慕ひよる閑住の心が次第にかれの身にわだかまつて來た證據である。また自ら耽つた「海王」の樂みは當代の文學青年の空想の赴く先きを延ばせるだけ延ばして示したものである。

その散文が柔美の趣を加へて來たと共に、さきに自ら攻撃した婦女の情は、その詩にも又たくさんあらはれた。寧ろ、性來持つてゐたものが怒つた肩を下してあらはれ初めたのである。その優情には一寸他に類似のない趣きがあつた。東方の文人が閑遊して玩ぶ西洋的感情の發作である。これも當時の明星の基調であつた。

黄金ひぐるま

(都にちかき里すみの姫の歌へる)

ひともと盛りの黄金向日葵(こがねひぐるま)
詩歌(しいか)の聖なる君に贈る
王の賜びにし綬の紫
垂れて結びて挿しませ
………
白絹きせてあなかしこ
跣足ながらに持てまゐる
歌の香あまき君が御口
先づやはらかに觸れ給へ、……

詩林の閑窓に心驕つたかれの心はこゝでも昔日と同じ娛樂をうる歌口を示したが、その僻の少い作に

丁子の香蒸して
連翹の影のぼる
日あたりの南窓
小障子ぞ鄙(ひな)びたる
わび住みの狹うして
馬車(うまぐるま)おもはねど
いたいけに美くしう

誇るは君こそ若き
過ぎたるは猶ひとつ
鳥籠の金蒔繪
桃が笑む京染の
緋に燃ゆる房かざり……

この靜謐に自足せんとする彼は今や昔の夢を雜誌「明星」の擁護と愛育とにうつした。そのため彼は多くの友とそむき、多くの友をつくつた。多くの事件が彼をとり卷き、多くの焦燥がかれをかこんだ。かれは次第に年老いて來た。その身とともにその心も老いて來た。

詩史第二期前期に於ける鐵幹は、その全身を、「紫」「鐵幹子」の二書に示し、後期に於けるその業績は右の「うもれ木」と次いで三十七年に及んで出た「毒草」とにあらはれてゐるのであるが、かれの詩史の發展を辿る便宜上、こゝには後期の作「うもれ木」をも合せ評した。「毒草」に於てわれらは、かれが、來るべき象徴詩時代への紹介を見る。その次第は後に談らう。

主筆鐵幹が右のやうな路を辿つて來た間にその愛人なり愛子たりし「明星」はどう展開したか。さきに述べた如く當年の風雲に乘じて起つたこの誌が當代青年のあらゆる秀才者を悉く網羅し起した觀があつたのは固より怪しむに足りないが、こゝより巣立つた青年らは、この浪漫的温氣にあたゝめられ、思ひのまゝに空想の生長を敢てし、學問的研究の下地の熱情をも合せてこの誌の先進らより攝取しえて、やがて四十年代後に活潑な運動を開始して行つた

當時の「明星」は「星と菫宗」の本山といはれ、戀愛教の講義所といはれて世間よりの反省なき漫罵を與へられてゐたが、その憤懣はかへつて詩情の熱烈となつてあらはれた。平木白星、山本露葉、前田林外、川上櫻翠、細越夏村、平出露花、高村碎雨、相馬御風、栗島狹衣、谷活東の諸同人がそれだ。が、當時はなほ集團して多くの收穫を殘すにはなほ餘りに若かつた。その結實は三十七八年に於ていちぢるしくあらはれたのであるが、三十四年前後に於けるその活動には既に他の如何なる結社も右に出ることの出來ない熱心と恍惚とを見た。

「星と菫」といふ言葉に不快な語感を匂はせたのは、ジャーナリスト及びその不謹愼な言説のために浮薄な俗解をなした世間民衆である。言語の概念の低級下は國民の未開の證左である。いかなる言葉をも曲解、誤解、俗解して、わがもの欲しげな卑しい淺薄な嗜慾にまで引下げて考へたがるのである。これは後の自然主義の場合でも同樣である。星と菫とに一向專念した新

詩社同人の詩は、多くこの世間の皁笑の的になつたのも止むをえない。星と菫の咏嘆は詩よりも寧ろ多く歌にあらはれ、さきに引いた「そや理想こや運命」の短歌及び晶子が「みだれ髪」中の「夜の帳にささめき甘き星のいまを下界の人のびんのほつれよ」の歌などその代表的なるものである。そこでこれらの傾向に對する世間の俗解によれば、彼等詩人の行ふ戀愛は、星をうたい菫をうたふ高襟な輕薄な色の生白い「青年詩人」が、「バタ臭い」趣味の風姿をして、無止みに詩や歌を引いて當年の流行語にいはゆる「海老茶式部」の女學生と手に手をとつて放埒亂淫の限りをつくし、家族や國家や舊慣や學問やの權威を蹂躙してはじからぬ自由戀愛に耽るほどの意味をさしていふのである。例をとれば後年、小栗風葉がツルゲーネフの「ルーヂン」に暗示をえて作つた小説「青春」に出て來る大學生欽哉と女子大學生繁との戀がたり、あるひは三十五年に出た田口掬汀が某詩人をモデルにしたといふ小説「魔詩人」に出て來る青年詩人天野詩星と女詩人美世子、菊枝などとの戀愛がそれで、前者は扮本に左右されただけ非日本的の無理な按梅もあるが、その文學論や戀愛に對する態度は四十年前後の世態の反映とも見られるが、後者は全くモデルの興味中心で書いた淺薄極まる駄小説であるが、中に出て來る「青年詩人」の歯の浮く様な言動は、當時の智識階級と稱される人々が解釋した「星と菫」すぎる、あるひは「粟の矢飛白すぎる」文學中毒症にかゝつた寫眞である。

が、さきにも述べたごとく、浪曼精神の特兆とするものが非現實的な遠い時空をねらふのはこの人間の基本感情の特性であるから、當時のロマンテイシズムに目醒めた若者が、星の美をうたつて現實の醜に頭を蔽ひ、花の美を咏じて實社會の陋から身を避けんとしたのも、その文學の搖籃時代の浪曼文學の遁避的傾向を知る限りはさけ難い運命に立つてゐたのである。たゞ問題は、その遁避主義にいかほどの誠實があつたか、いかほどの精進があつたかといふことである。遁逃せんとする空想に身を燒かれ乍ら、かれらも亦日本の臣籍に列して實社會の一成員（メンバー）を形ちづくつてゐる以上、生慾及び性慾、又は藝術的野望等の所因から對人關係の複雜な事件を惹起した場合、もろくも昨日迄罵つてゐた「因習」のために蹉躓して尋常人と等しい醜陋な行爲に結末するなら、その因習打破思想は何ら意味なき無節操な一時の放言となつてしまはねばならぬ。空に心をあくがれる感情は、美しい世界への憬れに外ならぬ、しかも憬れへの到達の一歩一歩に於て醜くくも信念を折られた人は即ち一切の今迄の思惟の道、行爲の道、感念の道の初めに立ち歸つて尋常人と同

ランクから出發しなければならないからである。

實際問題としても、この種の戀愛事件に附隨する世間とかくの評はこの頃より次第に社會問題の一端となつて刊行物紙上を賑はして來る　うになつた。美妙と稲舟女史との事件の如きはそれである。現實をのがれて星と花との清淨な世界に悠遊したと信じた詩人の群れにも、この種の問題は鐵椎の如くに下つて來た。小夜の夢は醒めなければならぬ。詩人とは迂遠なもの高慢なもの理屈ぽいもの非力なもの反實行的なもの此世に何の役にも立たないものといふ考へが巷々の老主人やはたらきての主婦の間に段々と傳へられて文學と生計、文學と國家といふ問題迄延長し、この藝術至上主義の芽生時に同時に社會の一方からは文學亡國論を公然唱へるやうな僧侶や記者や教授やが續出するにいたつた。鐵幹を非議して極端な人身攻撃に及んだ「文壇照魔鏡」(山口孤劍)もこの頃あらはれたのである。

星と菫とに耽溺した青年詩人のむれは、その作概ね拙くしてこゝに引用するに堪えない。その詩人らも後には獨自のスタイルに到達したものもあるが。先進詩人の藤村も晩翠も泣菫も有明も盛んにこの種の憧憬にあつてこの種の詩材を扱つたのであるから、彼等に追從するエピゴーネンがひたすらその詩感の幾分かに倚つて凡てやゝ誇大に偏倚的にこの種の感情をうたつたのも尤もである。況んや、時代文學の主潮として青年の胸をときめかしめずにはをかない現實的魅惑に富んでゐる時花りの歌口を棄てゝ去る若者の少かつたのも亦無理はなかつたのである。

この浪曼精神は倘逃しく稚淳であつた、これが次第に圓熟境に入つたのが詩史第二期後期を形す三十五年より七八年に及ぶ時期である。

第二期後期

――三十四年――三十七八年

一　ロマンテイシズム

明治三十四年七月の「帝國文學」は、「新ロマンテイシズムの勃興」といふ時評をその雜報欄にかゝげて、在獨の姉崎嘲風、「太陽」の高山樗牛、「太平洋」の九皐生、「帝國文學」の畔柳芥舟、登張竹風等が、一期せずして殆ど同時に一種の新ロマンテイシズムとも稱すべき氣風を思想界に鼓吹せんとするが如し、言ふ迄もなく各人個々に特色あり、またロマンテイシズムの名稱當れりとも覺えず、唯だ夫れ從來の思想界に慊らざるところありて

之を打破し更ゆるに新たなるものを以てせんとするに於ては即ち一也、不知、斯のイズム能く幾何の感化影響を與ふることを得るや、吾等は刮目して視む。」と報じてゐる。

また、早稻田文學三十九年三月號「新體詩界」は、復活近數年間の斯壇を概評した中に此期の傾向に論及し、「星菫詩人とは藤村、晩翠以後の過渡時代の詩人に一面諷嘲の意味を以て與へられた名稱である。……鐵幹氏を中心として「明星」の誌上に此の種の詩人が夥しく集まつた、此種の詩人の題目は主として戀愛にあつて、其戀愛の標號として盛んに星、菫、百合等の文字を用ゐた。其の領地は主もに短歌の上にあつて所謂「新派和歌」の特色は最もよく此の間に發輝された。此の時代の產物と稱すべきは鳳晶子女史の短歌で、其の第一の歌集「みだれ髮」は卅四年の八月に出た。併し新體詩の上にはさして著るしい影響は殘さなかつた樣である。」と記錄した。

同じ三十九年中の新紙「日々」に春風道人はまた明治新詩史の回顧をなして「日清戰後の初期詩壇に於て、自然を歌ひ、穩かなる戀愛を歌ひたりしものは、明治三十四年前後に及び、高踏的戀愛を歌へる星菫詩となり、明治三十七八年の今日は、更に轉じて象徵詩の流行の兆を呈し、星菫の時代去て、夢の時代來つつあり。」云々と論じた。

又、三十六年五月「帝國文學」記者は、「ロマンチック鼓吹につきて」の一文中、本邦新興の浪曼思想は必ずその範を「英のPRB派と獨のロマンチックと」から採ることであらうが、「獨逸當年ロマンチックの遊逸主義は、斷じて現下文壇の崇倣すべきもの」でない。何となれば、「刻下の文壇は、精神知生活の豐富を急務とす、所謂文士なる者は、皆其の幾分を負擔せざるなし。蓋し文壇の事を經營する者は文士に外ならざれば也」文士既に此の負擔あり、或は創作に其の驍能を顯現すべく、或は批判に其の犀利の筆を揮ふべく、或は外國文學の紹介に滿身の精力を濺くべきなり。また何の暇ありてか、遊逸主義を學ぶべけむ。」けだし、「此の遊逸主義は、一面印度哲學の幽玄と、機微相髣髴するの觀を呈せりと雖も、多くは是れロマンテック騎將の個性之れが因となり、當時の俗惡なる社會之れが緣たらざる者尠し。遊逸怠惰は無邪氣と靈化（ウンシユレドガイステル）とが吸ふべき瀕氣なりと、此の如くにして、最高なる生活は純なる植物に外ならずと思惟せられたり。」そこで、この獨逸浪曼「主義は、藝術に於ては乃ち天才的自恣の尊崇となり、科學に於ては、乃ち直接的信仰の復活となり、實際生活に於ては、乃ち渾沌たる遊逸主義となる。」これがこの傾向の輸入を恐れる理由であると、斷じた。

凡そこの類の說は、時代の急潮の流れが速くてしかもその全

體を把握するに困しむ過渡期の概觀を、僅かに強ひて試みむとしたものであるから稚論と管見との域を脱せぬものであるが、この樣な文獻を通じて見ても、當年の新思潮の觸手がどの樣な方面に向つて延ばされてゐたかといふことは略推測することが能きる。しかも注目しなければならないことは、自然主義文藝の名稱と事實とは既にこの頃から勃興してゐたことである。「デカダン論」が安藤無菩子によつて同誌に紹介せられたのも亦この頃のことである。

さきに予は當時の浪曼精神が西歐新舊の浪曼思想を混糅して同時に輸入しその精神を基調とせんとしたものであると云つたが、星菫時代に隣りする當時の詩潮が、廣い意味のロマンティシズムに低徊し、その間新舊の差別ある因子あつてもそれは相剋することも尠かつたため、この期の傾向は大體に於て一般的に浪曼底格なるものに對する日本民族の意識的初見參として試されることになつた。

それ故、當時の新詩は、スコツト風の中世思慕とキーツ風のヘレニズムとロゼツテイ風のカトリシズム藝術とニイチェ風の社會觀藝術觀とこれらが錯雜し紛糾して異邦に愛慕の瞳を放ち、古代に憬れのこゝろを寄せ王朝や元祿やをも亦鮮らしい光の下に見かへす動作を繰返した。當時この人々の間に全く影を潜めたものは、反動的原因に基く、徒らなる嫌惡感から來る、支那趣味の排斥であつた。二三浪曼的風格の詞人即ち李白、青邱らについてはもとより昔ながらの愛誦が継續せられたけれど。日本在來の典籍や趣味やに對する反感のあつたこともいふ迄もない。が、大體それらの反感、嫌忌の情は、傳統的嘆仰の心と混合して青年の胸に蟠居してゐたのである。

二　異邦詩壇の研究

「若き日本」の革新文學者らの建設事業の發端が、飜譯文明の背景を有する國家に發生し文學の本性の恒として異邦文學移殖の手に初まつたことは、さきに明治十五年代の項に於て之を述べた。

さきに評隲した「ハイネの詩」は譯詩としての近頃の成効と謳はれたものであつたが、一般詩史、詩壇の研究にいたつては、創見ある論評が尠かつたにとゞまらず、泰西單行本、刊行物中の小研究の飜譯、又は、ある詩人、詩的運動についてのモノグラフの紹介などでも、多くは眼目を逸して枝葉に走り、薄弱な紹介者の小主觀に誘惑されて論者の焦點を故らに外らすなどの不都合の個所があるもののみであつて、その間紹介の使命を完全に果したものとしては森鷗外の諸論、上田敏の紹介文、島

村抱月の論議及び夏目漱石の少數な小研究などにとどまつた。しかも、三十四年代までの外國文學紹介は、多く、手當り次第に共時共場の小興味に任せて譯し散らす類のものが夥しく、その間右の如き明確な自分の問題と自分の本質とを意識した達見ある學究らを外にしては、何ら時代の病症のたために、或は、時代の要求のために、或は時代思潮の培養土として緊密な有機關係ある題目を選んで巧妙て詩境の水準線を高めんとするやうな才人はこの方面には尙とんと尠かつた。

民友社の「十二文豪」は、英國の「英文人傳」や「文豪傳」を學んで、内外の詩文人の評論を企てた最初の規模のものとして記錄に値ひするが、その内、三十三年迄に公刊された詩人論は、「ヲルヅヲルス」(宮崎湖處子)、「ゲーテ」(高木伊作)、「エマルソン」(北村透谷)、「ユーゴー」(人見一太郎)、「バイロン」(米田實)、「シエレー」(濱田佳澄)「カーライル」(平田久)等で別に森田思軒の遺著「賴山陽及其時代」があり他に「トルストイ」(德富蘆花)、「ジョンソン」(內田魯庵)、「マコウレー」(竹越三叉)に塚越停春樓が「瀧澤馬琴」、と「近松門左衞門」山路愛山が「荻生徂徠」を加へて叢書を完備せしめてゐるものであるが、多くは二三の粉本に倚賴して作り上げた迄のもので、自己大稟の本性に限近する主題を捉えて熱情と理解と研究心とが多少なりともあつたとおぼしきものは、劣かに思軒文、透谷が說、湖處子の筆並に蘆花が論を推すことをうるにとどまる。思軒が外史氏論は、時代に密接な交渉を保つてあらはれたとはいへないけれども、漢洋の文章に詳しくユーゴーの氣稟に傾倒し、經世家の立場をはなれざる人生派の詩文を好んで味讀したかれの史學方面に於ける素養をかたむけた唯一の遺文として、又、明治に及んで新出した古き才人山陽の粗荒にして精倒な論稿として貴く詩論の荒野を灌漑した淨水の一流と見て差支へない。又、湖處子の湖畔詩人傳は打つてつけの主題として迎へられたが、もと精緻な究學に不得手な人であつたから傳史にも斷論にも訂正すべき個所は夥しいけれども、田園に遁逃して自然の默語を感じ之を簡樸な單純詩體にうつす自己の詩境の憬れの對象として日夜ライダルの詩聖を愛慕した彼の一味の感激が通篇到處に感ぜらるる處にこの書の價はある。透谷文章にいたつては著しく乖離した題目を選んだそしりは、一見、免れないけれども、しも教牧の職にあつて詩に耽り文にいそしんだこの北米に生んだ唯一の獨創ある文學者の溫藉にして庶民的高雅を失はない風丰が、烈火のやうな心內の惱苦に持てあぐんだかれに凉風一過の快感を感じしめて異種の感激に身を滿しつつ極めて獨斷的に(殆ど文獻の取捨など眼中にをかない詩的及び詩人的ライセン

スを以て）宣傳的に、信念を以て一氣呵成に書き下した個所に史的關心がをかれうる。が、この種の論篇は既に業に時代の埒外に措かれんとしてゐたのである。その論斷の態度に於て、文獻の按梅に於て、行文の感情に於て爾後の新時代に相應はしい何ものの酵母をも有さなくなつてゐたのである。

三十四年師走に發市された上田敏の「詩聖ダンテ」は二三年來「帝國文學」に揭げられたものである。泰西詩人の評傳として近代的型式と精神とを備へた、恐らく、日本最初の逸篇であつた。泰西ダンテ學の上に何ら新らしい貢獻を加へるものではなく、又、詩人が立場の思想的解釋としては餘りに表面的な反思索的な淺薄な註解であるに相違ないものでゐるが、綿密な語學的解釋力と敏俊な直感的判斷力とにより、二三の文獻を巧妙に料理して、青年ダンテの境介を說き、神曲の自然敍景法を論じ、近代ダンテ學に於ける神曲註疏の一斑を述べ、詳らかにその梗概を傳へて、果ては詩材、結構、將日の細部にまで一通り初學者の肯じうる程度に概論し去つた點、本邦ダンテ文學の急先鋒である計りでなく、詩文人評傳の範を垂れた典據的作品としてその史上の價を亡ふわけにはゆかない。又、前項（昨秋本誌揭文）既に述べた如くに、彼の「文藝論集」（三十四年）や「最近海外文學」（同年）、「續最近海外文學」（三十五年）の出版によつて、當時の青年外國文學研究者は初めて親近的なるものの存在を知り、同時代に感化せられ、暖められつつ將來自分の赴くべき大道への明らかな指南車をえた感がした。その內容は、「ダンテ」よりも更に零細なるものの隨時の收錄にすぎず、英佛刊行物の翻譯でなければ、單行究學書の紹介にすぎなかつたのであるが、その銳感た鑑賞と判別力とにより直感的に甲乙の差別をして、一種の浪曼青年にのみ魅力ある筆致で之を傳へたところが此等の書の價である。その眞價よりも遙か以上にその影響は詩壇文壇各方面にわたつて廣く深く厚いものがあつた。作らざる詩人、天成の鑑賞家としての彼の天禀の自ら然らしめた結果である。從つて、その感化は、多く青年文學志望者の間のみ行きわたり、一般樗牛紅葉を喜ぶ讀者や文壇人やの間には概して風馬牛であつて、機智あれば衒學者（ペダント）とのしられ、キザとけなされ、僅かに之を認めるものも單に博識であることとの卓越と、一見奇麗なその文章の秀拔とより見て表面的にかれの外態を指摘するにとどまつたのは、かれの長所でもあり短所でもある個所が潜在的にあらはに出てゐる物を、內部に立入つて思考するだけの識見力たき爲か、一寸指先きでなすつて行つただけにすぎなかつたからである。當時の小文壇人の標本としての正岡藝陽の評語をこゝに引用す

れば、「樗牛一度び逝きてより赤門派亦人なし、僅に一の桂月あれども亦昔日の桂月に非ず、上田敏文名ありと雖も何人にも巧らしく見ゆる文章を作り得ると云ふのみ、久保天隨に至つては一箇の文商のみ、又云ふに足らず、登張竹風に於て樗牛の氣焔の一半を覗ふべしと雖も、第二の樗牛たるには尙多くの進境を見ざるべからず、唯彼れに多とする所は其文章ビールの量と共に進步するを以て也、」云々。(三十六年十一月十五日發行「新聲」所載「赤門派と早稻田派」)氣焔と內容とを混糅せしめたり、ビールの量に生平の交情を匂はせて樂屋落の出鱈目評をしたりする所は今の月評家の先考とも思はれる駄文だが、この式の論文が一般文壇に相當に受けてゐたのである。當時の上田敏は才識の煥發するに任せて、新らしきものへ、或はずつと古きものへその興味を集中して處女詩林の開拓に努めてゐたが、自己の問題とする處、思想、の疑惑とする處を明瞭に捕捉して、延びゆく內心の生成への善き糧たらしめる働きは餘りなかつた。單に怜悧な鑑賞家に安住するけはひにあつたからである。これが、彼をして晚年の論評文に少からず思想的解釋の點慊らぬ、內容價を缺かしめる遠因となつたのである。

木村鷹太郎は、早くより詩に志があり、「バイロン文界の大魔王」(三十五年)を出してムア傳に基き詩人の一生を辿つたが、問ゝ、衒氣にみちた、思ひ上つた小感想を挿んで批評と更へてゐる。これも既に餘り非時代的な陳腐な論體で何ら値あるものではなかつたが、只彼の餘りに幼稚な一圖な同情が、かへつて一種の色彩となつて一部稚い讀者を牽引した。畢竟、この種の、鑑賞のセンスなくして、獨斷的に思想上の會得を獲たりと盲信する風の詩の愛好家は明治末代迄引つゞいて存在したので、その最初の人物がこの木村鳴湖に外ならぬ。

その外、關露香は、「詩人と戀」(三十四年)を公けにして、バイロン、シエリ、バーンズ、ウオーヅオース、ブラウニング、テニスン初の各國各時代詩人の戀物語を說き、笹川臨風は、「南絲風片」(三十二年)に贋造の鬼才少年詩人チヤタトンの事績を談り、坪內逍遙は、「英詩文評釋」(三十五年)にテニスンのバラツド、ドライデンの樂歌、クーパーの戲作歌、ウオーヅオースの抒情詩を詳細緻密に釋義した。三十一年の頃、高橋五郎がバイロンの「ハロルド公子歷遊篇」を註釋して「江湖漂泛錄」を出し、なほ外の短篇詩の評釋集や、英獨詩文の釋義を公けにした頃よりも、更に緻密に更に幾分感情の悟得をもつて、かつ、文學史上の地位に就ての知識を背景とした評心を以て、口先き計りの泰西詩人謳歌よりも直ちに實際に作品の硏究に入るを心がけたそのさきがけをしたのがこの逍遙の書である。島村抱月が西洋

式レトリック最初の結成書の一たる「新美辭學」を上梓したのも同じ年のことであつた。當時尙學生であつた橋本青雨は、ハイネ邦譯本の興味をうけて「詩人ハイネ」(三十六年)に感傷的な同情を多分によせたこの詩人の評傳を公けにしたのが、ハイネについて纏まつた文献を出した第一貢献であつた。なほ、この年に出た「畫趣及び詩味」(湯原元一撰)は、レッシングのラオコーンの梗概を傳へたもので、譯者が文壇の士でないに係はらず、よく丹念に懇切に、かつ、相當の理解と同情とさへ備へてこの批評文學の古典を巧みに紹介した有數の佳著の一であつた。詩と姉妹藝術特に繪畫彫刻との關係についての解説より、同時代詩の藝術價、史的位相、文化的使命等の方面にまで圓滿な領悟を詩文界はもとより一般社會に向つて賦與するための基礎となつたからである。

越えて三十七年には高橋五郎の「ファウスト」邦譯本が出たがこれは言語道斷の拙劣極まる盲譯であつた。山縣五十雄の「英詩研究」三卷本は三十六年夏から翌年春にかけて出版されたが、原詩と大意と註解とを加へた便利な本ではあつたが、何ら詩に味解の皆無な語學者の語學的詮索と觚を嚙むやうな梗概文とにすぎなかつた。この種の語學者の仕事は極めて少數なものに僅かに辭書を引く閑を略く意味で便宜な書であるにとどまり、ボウもヘリックもサウジーもその外當時もてはやされた詩人もためにかへつて性急な國民の間には曲解される因をも作つたのである。英文學の變則的輸入の一例證がこれである。

なほ詩壇の論評として記憶されるものをあげるならば、嘲風は樗牛會講演會に「ワグネルの戲曲に於ける戀」を談り、蒲代素人は「時代思潮」に「ロマンチクの詩人ノヴーリス」を論じ、ヨネ・ノグチ、エドヰン・マーカムを「明星」に說き、「早稲田學報」には丁抹の詩人グラントピッヒ紹介の第一文あらはれ、志田素琴早くも「讀賣」に「俗謠研究の聲」をあげ、厨川白村は「帝國文學」の海外騷壇に「勞働者の詩人」ジエラルド・マッセイを紹介した。この反拿破烈翁派の不遇詩才を初めに說いた一文であつた。この時代の特色として天才を說き、ワグネル樂を論じ、ゲーテの多情多恨文ウエルテルを論ずるものは再三踵を接してあらはれた。これらの賑かれた鞭韃と教書とを與へられた作詩壇はどんな模樣にこれを受入れたか。それを談る前にも一つの他の助力である譯詩の方向について一瞥しておく必要がある。

三　貧しき譯詩壇

時代精神の培養のためのあらゆる施設の中で、過渡時代の恒

とする外來文化の輸入が殆ど止度なく行はれた中に、特に詩歌の方面に於て一番鮮かな身振りを示しものは異邦詩歌の日本譯の事業であつた。飜譯文明の直接の姿を知らんとならば、譯業そのものに馳る方が、結果された收穫を檢べるよりも生々しい印象をうることに成效しよう。

が、此第二期後期の譯業といふは、その結果を遠く三十八九年の頃に於て示されたが故に時代そのものの飜譯的效果は案外に少かつたのであるが、一代の詩風の淵源となり、日本象徴時代の基調となつた譯集「海潮音」中の諸篇でも、「獨絃哀歌」、「春鳥集」に掲げられた有明の譯詩でも、それが譯されて、刊行物に公けにされたその時期は多くこの間の事であることを思へば、詩壇の姙孕時代として特に注目しなければならぬこの時期の譯業に又特別の意義を認めなければならないことは當然の理であらう。

先づ、單行本としてあらはれたものを檢して見るならば、「ハイネの詩」に激せられて出た三浦白水郎の「西詩餘韻」(三十五年)があり、今村敬天の詩集「青春の詩」(同年)があり、「英詩評釋紅紫爛漫」高橋五郎、關貢米合著三十四年)もあり、「舶來すみれ」(今村敬天著三十六年)あり、鷗外譯の「オルフエウス」(同年)あり、「獨逸詩粹粉紅集」(秋元蘆風著三十七年)あり、小野竹三の「英米名家詩抄第一集游もみぢ」がある。なほ、柴舟はつゞいて「もとめ」「わたり鳥」以下の譯詩を公けにし、有明は「朽絣琴」の譯詩を掲げ、山田枯柳が「露西亞の詩」は露文直接譯の詩歌の嚆矢であり、上田敏がダンテ新生(ヰータヌオーヴ)第一章譯は三十七年十月の「中央公論」にいでゝ名譯の名が高かつた。

これら僅かに數へた以外、定期刊行物に掲げられた無數の譯詩を通覽するに、何よりも無心の讀者が之を讀んで失望したことは、原作者又は原作詩篇の名徒らに高くして、譯詩の全く色も艶も光もない、生硬無味であつたことである。その言葉としての陰影、彈力、個性、含蓄の有無の點から見れば、ゲーテ、キーツの名作譯詩は、無名詩人の即興詩にも及ばない拙劣なものであつた。これは、譯者の大部分が語學の才に任せて詩を感じるのセンスなきに係はらず手當り次第の亂譯を試みて得々としてゐたこと、或は、語學力も創作力も低劣なるからに原作の偉大にたよつて强ひて粗笨な盲譯を遂行し、珠玉を泥土に委するの愚を厚顏にも行ふてしかも恬として恥なかつたことなどが主なる動因となつたのである。

「西詩餘韻」はなほ學生であつた著者の譯詩集であるが他の拙劣な譯集の間では決しておとしめるべきほどのものではなかつた。ハイネ、ウーランド、ゲーテ、シラー等の詩が收錄されて

あつた。が、之等の譯には少しも原作の差別が行はれてゐない。ゲーテもウーランドも署名を見なければ全く同一人の作品としか思はれないからである。

今村敬天の「青春の詩」は南米にあつて著作した作譯の收集であるが、その譯詩は英、佛、西、葡數ケ國にわたり、その廣く集めた點に於ては鷗外が文集を外にして此集が隨一であつたけれど、その技巧は全く拙くして記錄するに足るものは一もない。「薄もみぢ」、「粉紅集」ともに措辭につたなく感情固燥して想像力の躍動讀者の心耳を打たない點で、高橋、山縣の詩譯と五十歩百歩であつた。たゞその內「薄もみぢ」の努力は「粉江集」のそれよりも卓れてゐただけは認めなければならぬ。

かやうな引稱するだに厭はしい譯詩の續出の間に、詩壇はなほ飽くまでもゲーテ、ハイネ、キーツ、シエリを呼號してやまなかつた。詩を作りうる素質のものが、多く異國語に堪能でなかつたために、紹介によつてその大體の傾向を知り、自分の赴かんとする彼岸の憧憬境に悠遊するそれら大詩人の詩情にあくがれつつ、いとせめて、紹介なり、譯詩なりによつてその輪廓を識り香氣を感じて精進の一助としたい心願にあつたがため、譯詩の拙ないものの尙多くを讀まれたのは詩人、評家又はそれらたらんとする青年に限られて一般愛詩家の間にはさまでの期待も失望も與へなかつた。凡て作品でなければ興味は感ぜられないのである。この寂寞たる低級譯詩壇に敏、有明の譯業が燦然と輝やいたのは無理もない。

敏、有明については別に細評するが、單行譯本を出した者よりも、雅號で或は變名で、「かりのすさび」の心持ちでたま〱なる譯詩を試みたものの方にかつて幾分の卓越があたことは記錄してをかなければならぬ。

高田梨雨、小山內薰、水上夕波、大塚楠緒子らの名、わか紫、うたかた、おもはれ人らの假名がしば〱當時の雜誌に散見したが、外に、散文詩の譯業を試みたものに、藤井紫影、梧桐夏雄（五島駿吉）、栗原古城及びさきにその「美文」に一言いひ及ぼした內海月杖等がある。千葉江東の「いささらば」も散文による詩情の表白であつた。高須梅溪、戶澤姑射、淺野憑虛、杏鄉生、久保天隨、杉谷代水、齋藤弔花、大町桂月及び綱島梁川らの美文皆同巧異趣の詩情の散文的發現であつた。言語の本質に詩的用語としての疑問の長い間の引きかゝりがあつた以上、この時代に一番榮えたいはゆる「美文」の一體については恒に詩に次ぐの注目を拂はなければならない。

四　詩壇苦

高山樗牛が「文明批評家としてのニイチエ」を説いて個人主義の文學、藝術、倫理に關する最初の注目を惹起した舞臺は三十四年一月の雜誌「太陽」であつた。時代の推移を早くも感じて、外界と默契せる内心の機會を逸することなく妥當なる妙合を自然に悟つてこの叫びをあげた彼は天成の聰明なる好ジャーナリストであつた。而も當時にあつては、一番高級なジャーナリストであつた。彼の「博識」は決して彼の學究的好望とはならない、彼は世間と彼自身とがおもふ以下に淺學であつたからである。彼の「識見」は決して彼の鑑賞家的將來をよいものとはしてゐなかつた、彼は社會と彼自身とが考へる以下に粗雜であつたからである。しかも之れは此時此國での第一流評家としての地歩を占めるに何ら故障とならない計りか、しば〳〵その「博識」とその粗雜とのために彼は愈よそのジャーナリストの天分を發揮することが出來たのである。

かれは又同時に「文明批評家としての文學者」を説いて、硯友社風戲作文學の死滅を覚め、トルストキ、ニイチエ、イブセンが個性ある森嚴な人生觀の眞摯な小説戲曲的の表現の間に、當代文明の批判者として届人を引上げ、陳人をたしなめ、少人を誨へることの夥しい大文學の到來を望んだ。

一樗牛の投げた波紋は、默々たる共鳴者の思はざる歡迎をうけて時代の全池面に渦線を形してひろまつて行つた。時代は、早く彼の叫び出るものを待ちかねてゐたのである。が、彼の要求は、決してそのまゝ當時の社會、文學、美術の向ふ彼岸を指示してゐたものではなかつた。これを詩壇に限つて考へて見る。彼はさきに擬古派詩人及び藤村一派に對して浪曼派の名を與へて罵倒したけれども、彼の淡然たるホイツトマンへの要求は少しも世間の顧みる處とならずして、時代はかへつて藤村らの蒔いた種子の芽生へが若き泣菫の苗となり、過渡期小詩人らの二襲を崩へ出だし、やがて完成された泣菫の古典詩とさかんなる象徴詩の運動を惹起した有明の思念詩とに爛漫の美花を吹かせたからである。そして、彼はもと本質的に「明星」一派の三十四年代の泣菫詩には同感も理解も持ちえなかつた。詩壇の大勢の方から見ても、日本主義の提唱から日進主義の宣傳に走つた樗牛とは、あらゆる點に於て早く風馬牛の位地にあつたのである。ひろい意味浪の曼思想と呼ばれるものの一部面としてニイチエ主義が受入れられ、個人主義が同感され、彼の提唱が一般的讀者にまで擴がつて行つたのであるけれども、その後の詩壇は影寂しく社會の大野にたゞ一人旅のやうな形で歩みをつゞけた。よく見れば、時代の要求は、新人の感情の姿相をかくあるべ　育くんでゐたのである。

さて、在來の戯作文學の氣風完く廢れ、西歐文學の移植日に日に隆盛に赴いて、新興ローマンティシズムの思想文學のけはひ愈よ明かに看取されるに至つたのは三十六年度からのことであるが、三十四年代より三十六七年にまたがる詩壇の精神は實際どうであつたか。

當時小說壇は逍鷗露紅悉く筆を戢め、在來の小文士の亞流小說は心ある讀者に全く飽かれて僅かに出版業者の爲にする處と、今迄よりの惰勢とによつて生命をつないでゐた三十四年代前後の過渡期を漸く破つて、鏡花、天外、蘆花、春雨らの新進が局面の打開に赴かんとする自然主義前期の黎明時代であつたに反し、詩壇は、藤、晩の魅力既に去つて泣菫ひとり縱橫の才思をのばせおはさうとする際ではあつたが、彼の非通俗性は一般低級讀者の倦退を買ひ、他の詩才も僅かに鐵幹、有明、淸白、夜雨の情思によつて辛くも詩壇の存在をつないでゐるにすぎず、文壇全般から見れば詩壇は論評の絕えざるにも係はらず數に於て著るしく寂れた形にあつた。

その前　早稻田文學（七年三號）「新體詩の根本的二疑」を提出して、由來本邦人は長詩にふさはしい、永續的な、熱情がないといふ事と、國語が先天的不備が、僅か　音數律によつて成立せる和歌俳句の短詩形の存在を允すのみで、しかも到底西洋に行はれるやうな、又、支那の詩に見るやうな、「音數、平仄、押韻」の三大言語變化が國語に完全に實行せられぬとすれば、長抒情詩の存在は根本的に不可能なのではあるまいかといふことと、此二つの問題を論議したことがあつたが、その設問はついにそのままに未解決のやうな形で過されて來てゐたのである。

今やその疑問が再び首をもたげねばならぬ秋が來た。口語と雅語とは儼然たる區別に於かれてあるが、雅語卽ち詩語の驅使に便宜を多く有する詩風のもののみならば問題はないけれども詩語の有する制約と語感とを去つて赤裸々に簡樸單純な直線詩情をうたはうとする者にとつては雅語はたしかに便宜がよくないものに相違ない。けれども、口語のみで歌ふことの未熟感と反調子との不安のために全然口語にたよる氣にならないから、その間はどうしても先づ使用語の不滿不足に惱まなければならない。しかも右の兩者共に前の言語の運命的缺陷から來る不便のため支那人よりも印度人よりもラテイン人よりも誰よりも一段多くをこの暗礁に於て苦しまねばならない。歌歌はんにも道具がないのである。情は胸の中に燃え出つてゐるがこれを形式の上に盛ることが出來ないのである。こゝに詩家の人知れぬ苦衷があつた。この點については比較的みに三十六年一月「帝國

文學」誌上石劍生の「新體詩の衰運」がこれを描いてゐる。即ち上述の次第を論述した後に、「然らば我等は竟に詩歌なくして絶るべきか。」世は喧びすしく天才を覓める言葉を皆から絶たないが、「天才とは集注せられたる精力」のことだ、「刻苦する技術」のことだ、前代人の知らざりし新詩酒を、藤、晩、鐵、泣の諸家によりて我等は示されてゐるではないか。「不可能」の山險を攀る敢爲なる「少數の撰ばれたる天資あるもの」のみ詩界の蕭索落莫に耐へて新詩運に到達しなければならないといふ論旨は、當時にあつて異數の透察と樂觀とを並有する卓論であつたのだが、しかも、その當時よりの「反響の寂莫、曰く實行の不良、曰く普耕の識面と敬遠主義、曰く作家衷心の不滿足と其生活問題」等は、今日の日本、佛國、英國、獨國に於けるが如くしかく順當にその時初めて經驗する詞家らの小胸を奇襲したのである。詩人の生活問題は漸く思想的背景の前に佇んで論ぜられる時が來た。泣菫も、當時鐵幹に與へた私信中に（その私信は「明星」誌上に公開せられたものであるが）この間の苦痛を述べて勞作の感興いたりがたい世俗的繁忙に對する恨みの情をかこつてゐる。有明、月郊らは恒產ある身の上であるから此間の苦衷は尠ないが、雜誌に衣食する鐵幹、教師として食をえた泡鳴らは他の何人よりも月下の薔薇花の幻夢から早くさめて力ある思想の自日に於ける詩美を追はうとしてゐた。花外の社會主義詩集はこの際に出たのである

兒玉花外の「社會主義詩集」は三十六年八月に公刊されて直ちに發賣禁止を受け、その翌年新たに官憲の忌憚に觸れぬ詩篇のみを再版し、禁止詩集に對する三十餘名の意見（主として同情ある慰問文章のみ）を附錄として「花外詩集」を再刊した。

單純で直情で酒好きで貧乏で詩を作る外に鬻ぬ職もない花外は、稟性、その處女作時代から階級思想に對する不滿、貧者への同情等に社會主義思想らしい感情を所有してはゐたが、露葉、枯柳との合著「風月萬象」（三十二年）や、醉茗、露葉らとの合著「わか草」（三十二年）以來、この詩集にいたるまでの詩作は、特に社會主義詩と名付くべき程の思想的ドグマを持つてゐるわけでなく、從つて、その詩冊の題名は、名稱そのものとして見て不適當なものであつた。果然、時尙に乘ぜんとしてあのやうな名をつけたのだらうなどと言つた批評も出たけれど、その動機が何れであるにもせよ、左に右く斯のやうな題名が當時のセンサー・シップを通過し來よう筈はなかつたのである。それ程當時は尙社會主義的一切の思想に盲目的嚴峻であつた。花外は、その後の業績に於て依然として抽象的自由の快情を歌つたり、志士的感慨に耽つたり、容疑の世界に彷徨せんと努め

たりしが、社會主義的思想は彼の內部生命の裡に何らの根柢ある順當の發達をしなかつた。この詩集が禁止せられた時評家は何と云つたか。當時の「明星」に林田春潮は、「著者が詩を以て社會主義宣傳の手段となしたるにあらざるか」といふ疑問が、「治安の吏」の「この書をもて世を紊すと認めたる理由」であらうとする說を引いて、嫌疑をかけられるには書名は蓋し恰好であつたのだが、詩は本來手段でない、「詩は詩それみづからをもて目的」とするのである、詩人が社會主義をうたつても、それは「たゞ社會主義に同情するのみ」なのである、詩人と主義者とは目的を殊にしてゐるではないか、有司はそれを混合してかゝつてゐるからいけない。處で、社會主義を布く目的で詩をかくものもあるかも知れない、その場合それは詩ではないのである。が、此場合はさうでない、若し「詩を手段に用ふとせば、宜しく鉾をつゝみて有司を昧まさ」うぢやないか。わざと名乘つた處を見れば「社會主義思想宣傳の意なきを表は」してゐるのであることが判る筈だと結んでゐる。事情は何れでもいゝがこの一文で社會主義詩集の名は不適當のものであることは明かであるし、この當時の評家詩人が社會主義への對度も略判明する。當時一般評家も亦禁止そのものに不服を訴へつゝ、詩集の詩そのものには大した讃辭を與へなかつた。花外が進歩したのは四十年代前後の頃である。

五　詩形の刷新

以上のやうな內部苦惱と外的刺戟とに挿まれながら過度時代の暗黑な貢獻に殉じなければならない運命に玩ばれつつその日その日の進程をいとせめて愬へてゐた詩壇の實際收穫には、果して何の喜悅があつたらうか。

この期にあつて二つの注目すべき新現象をわれわれは見る。一は、史詩の流行である。他は、詩形の刷新といふことである。

三十九年三月の「早稻田文學」雜報欄は「新體詩界」の過去を報告した中に、詩形の刷新について言及してゐる。曰く、「七五、五七の調は第一期の間に殆ど使ひ盡された觀がある。詩壇の新領土を開くには是非共此の舊形以外に何等かの新詩形を造らねばならぬとは自然に詩人の胸に泛んだ考であつた。泣菫氏の第一の詩集は、尙ほ藤村氏の感化を脫し切らぬ時代の作物とて、七五調か大部分を占めた中に、八六、十四行の絕句十九篇を收めた、第二の集に至つては此の新詩形が一層の洗練を加へられたのみならず、更に七五、六五等の新調を以て歌つたものもあつた。有明氏もその第一の詩集にては尙ほ深く藤村氏の感

化の跡を留めて、其の殆んど全部が流麗なる七五調で成つたものであつたが、此の以前より新詩形の工夫に心を用ゐて居たことは、三十四年八月の『明星』に出た『獨絃哀歌』で分る。此の詩は當時朦朧體を以て非難されたものであるが、其の形式は全く新らしいもので、四、七、六の十七音より成り八行を前聯とし、六行を後聯とし、併せて十四行の一體を造つたもので、泣菫氏の八六、十四行の絶句と、共にソンネツトより採用したものであるとは言ふまでもない。かく泣菫、有明二氏を先導として種々の新詩形を工夫する者、次第に多く三十四年以後の詩壇は詩形の上に全然新なる面目を發揮し、七五、五七の舊形を株守するものは時代遅れとして一概に排斥される程の勢となつた。かくて詩形刷新の氣運漸く熟すると共に、おのづから從來の單純な抒情詩では滿足されぬやうになり、更に新詩風を求むる方向に動いて來た。」云々、

三十八年十月の「日々」紙上春風道人も亦、「詩形にありても、戰後（日清戰後）七九、五七のなだらかなる調に統一せられむとしたりしもの、今は再び六四、八七、五五、七七、七六等の種々なる詩形を見、其技術次第に纖細巧緻となりて、中には遂に小刀細工に陷れるもあり。」と見てゐるが、新詩草創の出發當初多くは七五調に則つてゐたのが、その內に五七調に入り、八六、八八調等の破調に詩感を托すものが增えて來て、日清役前後擬古派全盛の頃には再び七五と五七との二調に限られるやうになつたのはこの派の傾向が全然に端正、優婉、典雅、渾樸な詩境にあるところより、それらの特色を打出すに一番至便とせられてゐる右の二調が最もよく使用せられたのであり、且又、戰中以後に一切り榮えた軍歌には七五調が一番適當であつたところから、色々の方面に此等の昔乍らの流麗音が尊ばれたのであるけれども詩感の內容が次第に複雜となり、喜怒哀樂の原始情緒より、晩近體の纖美な思念と情操とを詩語に托さうとしてロゼテイの詩に見られる疊句の効果的手法や、シエリのかなり氣息の長い一行句の複雜性などから暗示された多くの詩的企てが各作家の心緒に生じるにいたつて、果然、右の記錄にあるやうな樣々の形式上の苦心が心ある詩家によつて行はれるやうな傾向に入つて來たのである。

例へば、泣菫が「花密蔵難見」絶句十九篇に試みたソネツト（「暮笛集所載」）の形式の日本語化は、決して効果あるものではなかつた。いふ迄もなくキーツ、ロゼテイらに使用せられたソネツトなどから考出せられたものに外ならぬ。近英のソネツトは、最初伊太利亞から輸入されて中古英國の詩形となつてからダンテが小曲などとは著しく趣を異にし來り、沙翁ミルトン等

の名作期を經てロゼテイが「命の家」に蒐せられた傑作の完美した百餘篇のラフアエル前派體はキーツ、ウオーヅオースに卓れて遠く沙翁と呼應し近代の驚異とされてゐるゝので、その形式も泣菫が單に大節（オクテーブ）八行の前聯に、小節（セステット）六行の後聯に相當するものを作り、追々脚韻に準じるものを置いたにとどまるが如き單純な型式でなくして、英小曲が伊古曲の複雜をその國語の必要から單化したといひ條なほミルトンはペトラルカが古法に則つて作つてゐたし、普通の英小曲と云つても尚大節が二個の四行韻節（クワトレーン）より成りその第一行は第四行に、第二行は第三行に押韻し、第一クワトレーンの第一行と第四行とは第二クワトレーンの第一行と第四行とに押韻し、前者の第二、第三は、後者の第二、第三と押韻してをり、小節は簡單でペトラルカの復法を守らないと云つても尚、第一行は第四行に、第二行は第五行に、第三行は第六行に押韻され、前後聯の各音節的性質相呼び答へて（伊太利亞小曲では前後聯の關係が漢詩の起承轉結に類し、後聯にいたつて詩感の内容も一變して終らしめるのである。）言語藝術の「約束」の美、「束縛」の美、「約束」の自由、「束縛」の自由を發揮してゐる盛觀があるに反し、日本語が僅かに音數律の運用によつて言語美の變化による効果を求めるにとどまるにすぎないため、單に大小節に分けて劣かに脚韻めいた企てを下して見てもかへつて形式の窮屈が自由にして豐富な詩情の流動をさまたげるに至るやうな結果になつたのである。

たとへば彼が絶句の一篇

歩めば楢裡にこぼれ、
かへれば姫百合裾に折れて、
往來憚かる山路來つゝ、
嗚呼また思ふは妹が上か。
巖根にこもれる荊棘（をどろ）がくれ
えならぬ香（かをり）を風にしめて
隱かに萎るる花の如く
怨むもかひなき己（おの）が身かや。

これは「紅淚」の大節であるが、八六調の重い衣裳と泣菫の纎そい感情の身柄とがそぐはないため、戀を歌つて枯燥し、自然をうたつて固化し、言葉をあやつる技能は早くもこの卓れた詩才のひこばえを示してはゐるがその秀芽が異土の風雨をうけて悉く死んでしまつてゐるのである。

泣菫が詩形の試みは俗謠斷稿に古民詩の破調を捉へてゐるのが異例である計りで他は悉く彼の詩情に相應はしい七五正調のみ用ゐてゐた。

有明は、四七六を一行とする調律の美を讃美歌のなかから汲

ひ出して活用しようとした。泡鳴は之を有明の哀歌調と呼び一行に句切が三つあるだけで晦澁になる一原因だと云つた。

をぐらき。森の常陰に、うそぶき入る。
汝がさま。よひの歌こそ。こだましぬれ。
うたふは。胸の火たほも、燃ゆるがため。
迷ふは、世の途を倦みて。行くによるか。

有明がこの氣息ながき一行句の使用は、かれの哀切な、なよなよとした、しかも深沈な、思ひ深げな感情のたたづまひとよく一致して後年の佳品にもしばしば効果があつたものである。ロゼテイが「命の家」の數篇の譯詩のごときは、いろ〳〵の氣息のながい一行を試使したがためにあの優麗と深沈との趣を生ぜしめえたと云つても過言ではないのである。泡鳴の說は調律の點に捉はれた謬見にすぎない。泣菫の絶句體はかれの本性とやゝかけ離れた內容に適するやうな調律美の本質であつたために、その後はあまり使用はしなかつたし、その佳品の多くは、大がい、七五を二個重ねて一行とする(「望郷の歌」)か、又は、「あゝ大和にしあらましかば」のやうに、七五調一行のあとに長く七五七一行音節をつゞけるやうな變化に富む樣式を考出した。

上田敏はルコント・ド・リール一派高踏派の壯麗詩を譯すのに、泣菫の如き七五七五一行の形を用ひ、ダヌンチヨの「海光」の如き壯嚴美をあらはすに、五七の破調を考案した。前田林外は「夏女少女」に八七調を連用した。これは一番危險な重苦しい調律で、しばしば感情をもたげかけるやうな情調を起させるため、キザだとか、イヤ味だとかいふ評言を與へられ易い。そのかはり岩野泡鳴も云つたやうに「雄大壯烈」なることが歌へるのだが、かれの『女神海島』が公にされた時世人は之を阿呆陀羅經のやうだと云つたに對し、かれは、十五音に延びた調であるから音脚と句切りとを確かにしてをく要があるのを、十二音の七五調を讀むつもりで分節するから、自然に七五の標準音時よりも早く節さねばならなくなつて、つひ變挺な口調に讀みそこねてしまふのであると辯解してゐるが、「新體詩の作法」、音脚句調各論一六五頁)その道理は別に存在理由はあるけれども、かれの作篇に異樣な聯想を抱き易かつたことも事實である。泡鳴の「作法」は古來の音律を系統的に表を作つて研究した苦心の著で今なほ注目に値するものであり、七五、八七調なども一層詳しく分解して夥しい例證をあげその各の特性を列擧してゐるあたりに彼の根氣と直感とを覗ふべき明治詩の音律研究には第一に數へなければならぬ重要の著であるが、かれの

粗雜はこの丹念な研究にも見へ、自分の感銘を過信して他の多くの「場合」を認める餘裕がないのと音律を過重視したとにより處々夥しい疎漏がある。詮ずるに藤晩時代に較べて必要よりする音律感の敏銳が作者の凡てに萌ひ起り、あらゆる音數律がさかんに試みられた事實をいへば足るのである。泡鳴自らはその使用する八七調が「明確壯大」に四、四、四、三の音步をはこんでゐる點を誇り、又、その七六調が「明娟幽妙」に三、四、三、三の音脚を刻んでゐることを力說してゐるが、かれ自身明確壯大と信じる處も、しばしば餘人が之を見るときは、簡單、粗大にすぎず、明娟、幽妙とする處も、時あつては、平凡、無味に終つた場合が尠くなかつた、

泣菫は右の絕句に見へる試み、泡鳴がいはゆる「薄田泣菫の八行調、乃ち、七四調と八六調との混用體」などを試驗したがかれの企ては民謠調と史詩と本來の古典詩調との三つに集中せられてゐたから、勢ひいろ／＼の破調にたよらず結局七五調、又は七五重用調の邊に落付いてしまつた。調子の上の苦心はやはり有明と泡鳴とが一番多く經驗したが、その効果は前者に一きははつきり見られたのである。

國語本來の詩的効用の貧弱をしば／＼示唆されてから、詩人らは必死になつて音數律のあらゆる變化を應用してその音樂美と思想美との自由自在なる運用を期待した。ある者はつひに絕望して散文壇に走つた。ある者は、筆を折つて牙籌の巷に遁れ去つた。あるひは、教壇に立つもの、宗門に隱れるもの、更に或は公表を中止して私かに作り私かにたのしむ境界に强ひて安住してしまつた者さへあつた。當時のある文學雜誌は、たま／＼晩翠と談つて詩形の問題に言ひ及ぶと、概然して思ひ一度び詩形に到れば萬事廢ると云つて嘆息したと漢學流の誇張した筆法でことごとしく傳へた。事の有無はどうでもいゝが、あらゆる眞面目な詩人の眞面目な時の場合にのみ、この詩形の問題がどの位眞摯に、惱ましげに、果ては絕望的に考へられたか今日では想像が出來かねることであつた。

詩形の刷新は、雅語の使用が、口語の新使用にとつてかはれる時迄絕えず繼續された問題である。

六　史詩譚詩及劇詩に於ける試練

詩壇は一方詩形の問題に惱みながら、他方、新らしい詩情の打開に焦燥せずにはゐられなくなつてゐた。詩壇以外の世界からは、思ひ出したやうに銳い鞭韃や空疎な叱咤がひびいて來る。天才いでよ。國民詩人いでよ。庶民的であれ、男性的であれ、市井的であれ。熱情がないのか。泰西詩壇が目につかぬの

か。感情を誤問化すな。曖朧を排せ、等、等、等。

戀愛詩の全盛期を一經過した詩壇は、空疎なるもの、幽遠なるもの、蠱惑的なるもの、深刻なるもの、あらゆる在來の日本詩にない、西洋的なる、異端的なる、浪曼的なる詩材の發見に心忙がれてゐたのであるが、時が熟せず、處が熟せず、人が熟せず、作者の想像力は同一の偶像を前後左右から覗ふにとどまり、新らしく、力ある、まことに美なる何ものも多くは現はれず、徒らに單純な評家の空元氣ばかりが誇張した口調で空つ風と一樣に中央詩壇を席捲してゐた。世は議和團事件の後、星亨の刺殺以來、日英同盟が結ばれ、教科書事件が突發し、つゞいて日露戰爭が開かれたそれまでの過渡時代中の過渡期である。

新らしい詩境は、つひに史詩の類となつてひらかれた。その詩材は、晚翠が、三國時代の支那にとり、拿破烈翁の佛蘭西にとつたに反し、なるべく日本古來の史料を用ゐることに一致してゐた。何の故であるか。日清役後、國民的自覺を促す民衆の內なる聲と、帝國主義の軍國的訓練を强ひる政府の方針の成効との一致によつて、日本趣味の復活となり、日本主義の提唱となり、更に進んで老學究によつて壟斷せられた日本古典の世界を新進學者によつて支配する古史學、考古學、傳說神話學の新氣運を促がし、古きものの情勢的權力に阿附、事大する卑劣な、意識、無意識の間に斥けられて、同時に淺薄な鹿鳴館式歐化主義が嘲笑せられて、古日本の古藝術、古文化、古文献の數々に對し、新らしい態度で新らしい眼の再吟が暗默の間に行はれることが著しく目に付くやうになつて來た。福澤諭吉、伊藤圭介らが歿したのは三十四年であるが、中江兆民も其年の夏同じ鬼籍に入り、その翌年の八月には西村茂樹が、九月には正岡子規が十二月には高山樗牛が逝き翌々三十六年尾崎紅葉、落合直文死し、團、菊、左の名優相次いで去つた。

時代は自ら新氣運の下地を作つてゐたのである。この時に詩境の一方に行はれた史詩の流行は少くとも二つの方面から見て興味があり、有意義でもあつた。國語の長詩材に堪えうるや否やといふことへの試練がその一である。舊史材による新感情が當時新進の詩人の間にいかな程度まで深化されてゐたかといふことへの返答がその二である。

さて、當時史詩、譚詩、劇詩の試みの中で世評に上つた作品は、「明星」同人の連作「源九郎義經」(三十六年一月より連載)同じく「日本武尊」(同年十二月より連載)白星の「伊邪諾、いさなみ」「隆盛の最後」と「お小夜新七」、泣菫の「雷神の歌」(「明星」)、「金剛山の歌」(三十六年「新小說」)、「天馳使の歌」、有明の「國主神の賦」、「さび斧」、「人魚の海」、「佐太大神」、「新

篤曲」、清白の「駿馬問答」泡鳴の「鳴門姫」、(三十六年「白百合」)、「豐太閤」(同年「讀賣」)、月郊の「後の羽衣」(卅六年)川下江村の「佛御前」、紫紅の「地獄の卷」、「日蓮上人」、鷗外の「オルフオイス」と「長曾我部信親」(三十六年)及び逍遙の劇詩「新曲浦島」(三十七年)がある。外に有明が南洋ラロトンガの傳説に取材した「姫が曲」があつた。

これら夥しい史詩、譚詩は、性質上、その多くが史料の感情化に力を盡して、詩形化することに全力をそそぎ、表はれた詩的效果の客觀的價値に冷靜にも思ひ及ぼすひまのない傾きがあるため、出るもの、出るものは、詩壇の雄才が新詩情開拓の氣込みすさまじい長篇も、劇壇の宿老が、劇詩形の草創に希望をかけての勞作も、新進詩人の精進も皆悉くその結果に於てはあへなく失敗に終つてしまつた。一言にしていへば少しも面白くないのである。詩形化する必要が感ぜられないのである。散文のより暢達とより自由なるを感ぜしめるのである。一行、一聯、一章の獨自性とその各行、聯、章との詩的有機關係の微妙を認められないのである。史的事實、史的人物の新見地を發見出來ないのである。

大體に於て以上の失敗に終つたことは明らかな事實であつたが、細部を調べて見ると尠からぬ種々なる努力、發見が加へられて、部分的には立派に成功の域まで達つてゐるものも亦少からずあつた。それらは決して空しい努力の浪費ではなかつたのである。

先ず、「源九郎義經」を見るに、これは三回迄で中止されたが破題を承つた與謝野鐵幹は「おひたち」に筆をつけた。

家門は平氏、地は平安、
時は平治ぞ、天に謝せ。
村鳥しのぐ白鷹の
英姿猛なる左馬頭
天魔や魅入る、おろかにも、
不覺人なる痩公卿の
信頼ばらに加擔して、
我から首を持て來るは。

しやつ、小童の惡源太、
親を眞似の雜言か、
安倍野に來れば、出迎の
三千餘騎は影いづこ。
待賢門の夜あらしに
矢叫たかきも興こそ有れ、

まじる雨降とちりぢりに
消えを急ぎぬ、源氏がた、（下略）

追がに初筆の勢猛に、色々出た史譚詩の中で、鐵幹の作は出色の作であつた。叙事の進むにつれ次第に之に伴ふ感情がだれて來てしまつたのは他の凡ての例と同一だが、處々輝やく措辭が挿んであつた。

だんだら綱に手かけて
いと徐やかに、長閑やかに、
この一しきり廻る時
春日も伴れて轉るらし。

のごとき景情一致の好パツセーヂもある。鐵幹に次ぐ章は白星が「幻境」と題した一章である。

いかに知らすや、大夜叉が
天の逆皷の雲珠鞍を
こゝに襲りし往古を、
鐵の峯にくだかれし
青巖今に峨々として
眉目のきはみに聳えぬる。

に初まるこの一節は彼の通性とする嶮峻なる感情を強ひる處より反感を生ぜしめて表現の朴直と自然とを失しる個所はこゝにも依然として存在するが、「降盜の最期」に「老西郷」の一節）に方語を使つて、

田近に聞えるあの喇叭こそ
戰を流見が旋したとぢやろ
質こッごとしい鐵砲ッとどろき
桐野はどしつろ、村田は何ゆ？

としたのや、世話物の詩形化ものやよりは遙かに整つてゐるが、

さても鞍馬と聞えしは
王城の子に位して
斷絶、雲にひいでつゝ

などは馬琴物か「源兵盛衰記」を詩の形に書き直したにすぎない。

前田林外は次に「初戀」を謡つてゐる。

これ靈郷か、いと柔き
管絃の樂に妖艶の
彌生の容を夢のごと
魂も漂ふ心地して、
枸杞の姫蘇綠なる

とざまに立つや、御曹子

この調子で同誌に掲げた「夏花少女」に妖魔の泉をうたひ孔雀石を描いたと同じ態度で「有情の年少御曹子」や瑠璃姫を扱つてゐるのは一見滑稽に感ぜられるが、外の凡ての人の業蹟を見て又見かへせば、結局創始的意味はなくとも一番よく自己をあらはしえた點で結句これが一番卓れた態度であつたことが肯かれる。

「日本武尊」は、山崎紫紅、平野弔影（萬里）前田翠溪、大井蒼梧、晶子、相馬御風、川上櫻翠、茅野蕭雨（蕭々）、鐵幹らによつて連作されたが、「獄會」に

小草の露のしめやかに
空もゆめむる春の宵
夕さり來ればもの思ゆと
い下り立たする宮簀姫
なよびし姿のらうたけて
月の宮居の少女とも

で初まる蕭雨の章は卓れてゐる。總じて似通つた筆路で、技巧は皆相當にたつしやであるのが「明星」一派の特色であつた。

泡鳴の太閤は八七調で通した長篇だが

衆議に從ひ、すなはち、こゝに
大老中老奉行を命じ
片桐且元小出の播磨
秀頼傅たるにこれ定まりぬ

風の格調と事實とに心をとられて詩情の横溢が殆ど少ない、明星の年少詩人らよりも遙かに劣つた作であつた。これも彼が議論に引づられてわれとわが詩感を殺した例である。その叙事にかゝつらはない個所だけは

供養の萬燈つき夜の如く
海上遠くも光はをどる

といふ樣な拙いなりに少しの落付きもあつたが、全篇から云へば顧るべき性質の作ではない。

清白の「駿馬問答」は「驊騮全書」、「春日神馬繪圖及併」、巣林子が作等により作つた譚詩で、

月毛なり連錢なり
丈三寸年五歲
天上二十八宿の連錢

で初まり、

さて蘇芳染の手綱とは
人車記の故實に出で

鐵地の鈴は
一葉の船を形容たり

の類の詩節多く、餘りに古文の格式に則つて恰も古戰記を詩風に書き下したにすぎない感があり彼の作としては劣作である。

多くこの類の試作の中に、遉がに個性を失はず一種の詩情を燻らしてゐるのは泣菫と有明とであつた。泣菫が「天馳使」は

尋ねいでたる伊弉册の
「待ちね」とありし約言に、
黄泉大門の外がまへ
烏黑なるくらやみの
醜のふかみに立ち待てる
妻覓狂の伊弉諾は、

の「なかだえ」の巻に初まつて、

火探の童さき追に
若さかりなる嘴が、
花笑すがたにこやかに、
天のみ階にたゝす頃

のパツセイチある「あまくだり」に終つてゐるが、古淡な言語の揺曳が三十餘頁もつづくのであるから倦怠を時に強いられるきらひはあるが、その叙事の妙、情を點じる巧み、擬人のさえ、叙景の鮮かさは到底他詩人の比ではない。又、他の多くが傳説の約束に引きづられて行くに較べて、こゝにあらはれた「妻覓狂」のイザナギ、イザナミは雅馴な典麗語のあひだから生々しい肉身を現はして「人間」の淺間しさ、小ささ、尊さの凡てを身につけて指し示してくれる。

春雷を古傳の濃霧に追入れて
ひと日丹塗の矢となりて
蟬の小河を流れたる
火の雷の命ぞと
小鬼の如く小躍りに
棟の甍を踏みやぶり
雲路はるかに上り來て

父の宮にかへる神人の戰鬪を叙した「雷神の歌」もいみじい想像力が自由に古語成語時としては新造語を驅使して悠々たる蒼古の趣を現はした作品であり、「金剛山の歌」は山姿の聯想を傳説の衣に繳つて一種の情調を創造してゐるがこれは譚詩といふ程のものではない。泣菫の作は、以上の如く卓れたスタイルに到達したもののみであるが、只しば〳〵自己の「問題」を譚詩の叙述のあひだに匂はせようとあせつて、「正義」とか「いで

あの國」とか「新代の一の座の生挑」とかいふ語句を挿んでゐるのは致命的の目障りであるが、今にして見れば、こんな形式の詩にそのやうな語句を挿まざるをえなかつたのも時代のせいであり、彼の本性のせいであることが判る。

有明の「さび斧」は

その樹かげ、夢は花さく
黑髮のわかき手弱女
あらはなる踵もねたし。

のあたり、彼が平生の套語を忍ばしめる部分はあるが、全體からいへば缺陷の多い作である。印象が錯雜して落付きがないからである。

が、彼らしい表現は既に成つてゐる。その表現力がこれでは分裂してゐたが、それが巧みに圓熟を示したものが彼の「有明集」の卷尾を飾つた「人魚の海」である。

「怪魚をば見き」と、奥の浦

武邊の君が老いたる水手から小耳に挿んだ話が因となつて

霧はまよひて、光なき
入日惱める秋の海
船脚おもく、
凶の時なり、奥の浦・

あゝ人も人、船も船
昔の夢ぞほほゑめる
そのをりなりき、眼のあたり
人魚うかびぬ。波は燃え
黃金の鱗、藍ぞめの潮にひたりて
人魚は美女の眉目蔽る
武邊の君が半弓の的に怪魚の聲
亡妻の笑、怪魚の眼と
思ひ亂れて又迸り來た
霧はあつまり、光なき
入日たゆたふ奥の浦
武邊の君は身を棄てゝ
淵に躍らす束の間を
「父よ」と風に呼ぶ聲す

つゞいて

武邊の君が亡骸も
姫も、人魚も、幻の
波にくるめく海の底

に沈んでしまつたといふ西鶴の「武道傳來記」の一章に據つた譚詩で鶴の文章をそのまま引いた所もあるが、力弱い邦語でベ

ラッド體をこれ迄にこなした有明の詩筆が嶄然と群を拔いてゐたことは確かだ。

此等を佳作として、他に幾分の優れたものがないではなかつたが多くは泡鳴や清白の轍を踏んで我と自ら我感情を蹂躙して顧みない劣作許りであつた。

高安月郊は、早くから詩に潜心して「夜濤集」(三十三年)、「春雪集」(三十六年)の著があつたが、その中に、純粹の抒情詩よりも咏史の作が多かつたのは、その性情がもとひたすら感傷に悶へ、純情になげく類の情痴の人となりでなく、冷たく靜かに「趣味」をたのしむ鑑賞の立場に遁れる傾向の性格であつたから、「落瓦賦」、「嵯峨野」、「李青蓮」といひ、「大雅堂」、「不識庵」、「蕭白」、「杜少陵」といひ皆史詩、譚詩の類が大部分を占めてゐた。

そのあやつる言葉の綾はきはめて綺麗であつたが、それが表面的な美しさに終つて人格的背景の前に聳立する本質的の約束を缺きがちであつた。技巧の點についていへば群小詩人の間を嶄然と拔いてゐたけれど、この致命的の缺陷のため、ついに大詩情を確立する機會を持たないで終つてしまつた。その青春の詩情が最大の飛躍をなした詩は、「杜少陵」であり、「羅浮仙女の嘆」であつた。彼れの嗜好が、一度び恰好の詩材にはまると異樣の光と艶とを帶びて一種獨得の美にかゞやいた。その最高の激情が誘發された。譜代の言葉が出現してユニークなスタイルを示した「大雅堂」は若き彼の作品であつた。

　狐走らす謝春星
　君は三葉をむさぼれど、
　見よや海には波遠く、
　雪を乘せ行く小舟あり。

「杜少陵」の初章は

　痩せし身をなやむ吾驢よ
　秋の道降るは木の葉か
　うすごろもまたも破れて
　ふところの詩草ひやゝか。

で初まる。よい一節が拙い一節につづき、拙い一聯がよい一聯を追ふのが彼の作である。その藝術の愛は高踏して氣高いものを求めてゐたけれども、その嗜感か、人格的迫力を缺き、死に身になつて「藝」に遊び、「趣味」に生きるだけの思想的要求と熱情とを忘れてゐたため、一篇の中にも、甚しい巧拙の差を生じ、讀書を嗜んで凡百の藝術を玩賞したけれど、知識の喜びに終つて、それを感情の鎔爐に投げ込んで、純粹詩感の姿相を捉へることが運命的といはんほどに寧ろ拙劣であつた。即ち一

見巧みな技巧が悉く亡び、言葉が白けて色さめ、文字の殘骸許りが殘されるのである。

「羅浮仙女の嘆」は三十八年の作である。

　青邱の君は斬られけり
　禁園の春、夢閉ぢて、
　琵琶も洩さぬ宮人の
　かんばせ誰か伺はん。
　蘭燈のかげ稍動き、
　照るは衣か、水晶の
　簾に色そふくれなゐや。

彼の至情が一番よくこの詠史の詩にうごめいてゐる。詩壇の主流とかけ離れ、星菫の感傷も象徴の悩みも深く感じることなく過してしまつた彼の一家の詩史は殆どこの篇のあたりでその進歩を絶つてしまつてゐる。内に動いて外に赴く人でないからである。

　山崎紫紅の「日蓮上人」は史詩であるが、かれが「源九郎義經」連編の一目として作つた一篇に比べると段違ゐの劣作であつた。これは、自ら同宗の信者であつて上人の歴史を談る上に宗教上の不安も手傳つたのであらうが殆ど全篇一句として顧みるに足る詩節はない。鐵幹、木兒、秋騰、山川知應らが合評が「明星」に出て他に一二の批評も出たが多くは表面的な信念らしいものの力説か輕薄にも本ものと強ひて受取つて賞美してゐたにすぎない。この種の浮薄と淺見とは當時の批評にしばしば見えた所で、雄健趣味、國粋趣味、清廉趣味と低級な一般人が無條件的に同感しさうな力點に評家も又その陣套（コンベンショナリズム）に加はつて無反省を自ら暴露したのである。

　鷗外が「長曾我部信親」（三十六年）は、もと薩摩琵琶歌として人の依囑に應じて作つたものであるから、叙事詩と銘が打つてあつても正面から論ずべきものではない。

　頃は天正十四年
　しはす十二日の朝まだき
　筑紫のはても冬闌けて
　霧山おろし吹きすさむ

に初まる些の抒情の末節もない冷たく堅い事實の整然たる叙述にすぎない。措辭文章の上に流石に作者の弱點の寸分をも見せない技巧の手堅さは見へるが、詩史の上には何んの關係もない。

　白星の「心中おさよ新七」は、小島烏水が「心中といへるが如き叙情詩若くは劇詩の綱張内に屬すべき性質のものを闘いて、叙事詩の圏内に致したる手際ががいゝと賞め、五六章は特にキヤ

ムプルが「アリン郷の姫」を想起せしむといつてゐるが、德川世話物の題材を嚴めしい敍事詩體に移してつひにそぐはない滑稽感ばかりが殘る無益の試みであつた。彼の多くの試作は結果を考へずに無暗にくり返して無慘に失敗したものが多かつた。言葉を贅澤に使つてそれが多くは時處に就ての詩人的纖細なセンスを失したため皆犬死に終つてゐるのである。

鳥水が「句々連珠」と激賞した右の一節は

身の代は五十金
賣はれたる燕子花
夜を忍ぶ一刻の
色も香も懷しく

云々といふのである。秀句さへ處を得ないでは全體から見ればその艶を失ふものである。

泰西歌劇を邦語を邦人によつて日本的なものに輸入したいといふ企望は、早くから詩文人、樂人のあいだにあつた。ワグナーがバイロイトに建設した綜合藝術の夢は、この樂人の傳記やダヌンチョが「焰」などを讀んだ當年の若者の心に燃えてゐた。極めて粗末なオペラの眞似が實演せられたのは四十年前後から後であるが、この頃より早くから此方面の企ては老大家と無名の青年とをとはず全ての間に抱かれたことである。

中でも詩に志があり劇に望をかけた江村、紫紅、月郊らは極めて單純な劇詩の試作から出發しようとしたのだが、江村は若年で亡つたから何ら業蹟の見るべきものは一もない。佛御前や杉野孫七郎を詩材にして試作を形したが稚淳なスタイルのない凡作に終つた。後者二人は、後、この努力に失望して劇部に移つた。劇詩、歌劇の企は詩、劇兩界から研究されて共に失敗したのである。

泡鳴の「海堡技師」(三十八年)は冥想詩劇と銘打つて口語を以てセリフを一貫せしめ「たま／＼文語法を挿入せし所」があつたが作者の説明によると「感情の激したる所、嚴格なる想念の顯はるる所、獨白等」に口語に近い文語體を用ゐたのは「言葉の主が殆ど俗界を脫したる心持ち」があつて「觀者に一時、この人物の外境を忘れしむべき必要」があるからで「之を笑ふと勿れ」と斷はつてゐるが、

お杉　わたしは人を殺しやせぬ。
玄道　刄物を以ては殺さねど
　　お茶には毒を入れて！
　　　　お杉　ええ！
玄道　さ、それはどうでも、人前をけふは知らぬと云ひ張れよ。

さ杉　はい、春ぞれと申し升。

といふ詩風で、文語より口語に移り、口語より文語に移る自然の推移を不自然な推移でガムシヤラに押し進めたのでどうしても滑稽に陥つてしまふ。彼も遉がに此作だけで此企ては中止してしまつた。

平木白星の「耶蘇の戀」(三十八年)も大體泡鳴に似た企圖と失敗とをくりかへした作である。

月郊の「後の羽衣」は、香津良姫と月天子と天人と天魔との四人物が登場するオペラであるが、

天人一　いざ物語

四人　　　　し給へかし。

香津良　げに云ふもよし、問くもよし、様を學びて今茲に

　下界の姿示さばや、

春風や、春風や、

蕾ほのめく春風や、

花も柳も振分の

髪は額に、肩過ぎて、

獨うつせば筒井筒、

水も春めく心かな。(一の天人の手を取て前へ引出す)

天人一　こは何故の思ぞや

香津良　天に知られぬ戀といふ、人の心の春ぞかし。

の如き詩形であるが、言葉が巧みに動いても、その情が獨り合點で、劇的有機性を持たぬため、セリフの受渡し中に現はれる劇的エフエクトもそれによつて現はれる人物個性のかゞやきもないから結局、美しい一方に描かれた死花を見るやうな美と、單に劇の體裁にしたといふだけの結果しか殘らないのである。

彼が後更に作つた「をろち」といふ歌劇も、同じ失敗を重ねた。が、これは月郊のみを攻めるわけにはゆかない。凡ての試作がこの錬獄に陥つたからである。努力は空しかつたが、その貢献は時代全體に向つてそそがれたわけである。

後、白星が公けにした「劇詩釋迦」もこの空疎な贅澤な焦點を外れた言葉の亂費であつた。

江村、紫紅らの作も、たゞ、科白を叙事風の詩形にしたといふまでのことで、月郊、紫紅のごとき純詩篇に於て相當の經驗と自信とある人々であるに係はらず、一たび劇詩に筆を染めると、一行句が何の詩的獨立性も、存在性もない、散文の漫然たる切り放ちになつてしまつて折角詩人にして劇詩に開拓の斧を入れる特別の意義が失せてしまつた。

鷗外は、三十六年「玉篋兩浦嶼」を書いた。全篇科白を七五調で通した上下二卷の劇詩の試みである。

乙姫。さらばわらはが恩愛の
　なさけをあだにしたまひても。
太郎。おう。かくいはばつれなしとも
　なさけなしともおぼさんが、
　さいつころよりなにゆゑか
　をりをりこころたのしまず

といふ風の科白の受け渡しと、

太郎。おう。いさましや。わたつみの
　かみのみやこをわがいでしも
　おなじこころよ。さりながら
　　おもふは先祖　行ふは
後ノ太郎。
　　子孫にこそあれ　嗣し丶
たまをば（地を指す）舟につみゆきて、
秋津をだに　をかざさる
いくさのたすけに　せらるべし

といふ風の手法である。凡ての劇詩の試みと同じく七五の格調に押込めて並べたのが窮屈で讀むことをも一寸躊躇しなければならない感じを與へるのであるが、一讀して見れば矢張り鷗外の氣稟はこゝにも明らかに動いて一種の情趣の創造はあるけれど、かういふ形式の提唱が、多くの追隨者を呼ぶにはその形の詩的不備が餘りに激しかつた。作者自らも後年「脚本プルムウラの由來」の中で「稍雅言に近い位な處で優しく書かうといふのでいつか「浦島」を書いた事があるが、あれをもう一度しようとは思はない。」と云つてゐる。

この浦島が出た翌年、坪内逍遙の「新曲浦島」が又出た。近古來の俗曲を悉く收めて、白は雅語とし、西洋樂さへ挿んで、振事を主とする綜合的な新樂劇の下書きである。逍遙の意向は、主としていかにして此綜合劇を可能ならしめるかの一點にあつて、作の基調の藝術的功果は之れを第二義と見なした。逍遙自ら、詩人といふよりも、藝術の教授、指導者といふ人柄であるため、若し之れに盛られた理想や人生觀やを檢するならば、幼稚にして小細工のあとが見へすき殆ど論じるに足らぬ愚劇であるといはねばならぬけれど、こんな形式の新樂劇の創建者としての立場から見れば、こゝにもさきの「小說神髓」と「當世書生氣質」とに於けるが如き史的位相を見るのである。かれの之の種の劇に對する意見は「新樂劇論」と題して同時に

出版せられた、

　尉曲白

　　あの夕月の

　曲(竹本)

　　ほのめく影の殘るうち歸らば妾に俟ちうけて

　姥曲(常盤津)

　　右も左も今一度

　尉曲白

　　論いて見る目に花咲くか。

　姥曲白

　　只愛見るか。

　尉曲白

　　假の世は

　二人曲(竹本)

　　親子のえにし薄明り。

といふ風のセリフの進行である。

　彼の詩は、巧みなる文章家の詩である。その思想は形式的であつて到底內省的でない。浦島の値は、一つの藝術の形式の唱道の點にあつて、その內容價にない。詩人でなく、思想家でないからである。若しこの形式がつゞいて多くの亞流によつて眞似られたとしたならば、彼よりももつと巧みなものが出來たかも知れなかつた。が、これは下書きである。そして其本當はつひに出なかつた。浦島の新曲は、古きものを新らしい器に盛つて、全く新らしいものの完成の姿を誰れにも判り易く暗示しようとした所にその史的價値がある。

　逍遙の樂劇論は、小山鼎浦をして「新曲新浦島」を書かせた。熱情家で、眞面目な求道の青年であつた鼎浦は、この樂劇の指さす理想にあくがれて、自己の才分が、あの流風の藝術に著しく不向きであることをも忘れてゐたのである。三十八年の夏「帝國文學」に發表されたのがそれである。いふ迄もなく失敗に終つたが、その中には逍遙にない狂情がふくまれて、それが外に發散され得ないで內訌してゐた。

七　詩壇本部の概觀

　近代象徵詩運動前期であつて、いはゆる星菫時代を次いだ明治三十四五年から七八年にまたがる過渡期の詩壇は、さきに述べた史詩譚詩の流行と少數劇詩の試作とによつて局面を轉回し詩形の刷新によつて表現の複雜の可能を企てたが、詩壇本部そのものの內部生命は、依然として過渡期の潑剌と未熟とを合せ備へた「若き日本」の青年のみから共鳴と同情とを集められる

素質のものであつた。

愛慕を星に托し戀情を花に寄せる抒情詩は、三十四年代とひとしく三十七年代に於てもつづけられた東京時花歌のたぐひであつた。そして、感情の固化から全く離脱しえない明治中期の日本人の間に於ては、二十代の青年のみが、情痴の次第を公然と詩歌に表はしうる大膽と向ふ不見ずと本能と盲目心とを有するのである。譬へば三十男に戀の歌でもありますまいよと云へばさうですかで先づ通らねばならぬ底の一般社會である。その中にあつて、明星一派のみが誇りかに、又は、麗々しく、又は、悠容と、又は憶面もなく詩に歌に之を謳歌し高調し力説して、はては、道學者への「やは肌のあつき血汐にふれも見で寂しからずや道を説く君」の抗戰となり、世口に恬然たる

垣ね芝生のあさじめり、
息ざし深き濃むらさき、
きみがあゆみの蹠に、
やをら踏まれて死にたさに
花にならばや
すみれの花に。

（泣菫――「戀ごゝろ」）

の情熱となつて、長らく感情の枯死を數へられた青年の胸に、誠の潑剌たる感情の表白の自由と價値とを吹き込んだため、こゝに「星菫」時代の詩歌主義となり、それがしばらくつづいて、やがて、青年の憧れの對象は必然無限にひろい浪曼的なるもの「神秘」なる「夢幻」なる「空靈」なるものにまで擴大されていつた。

その時代精神は、すなはち、同時代詩となつて、泣菫が「白玉姫」（三十八年）、「二十五絃」（三十八年）の完成となり、林外が「夏花少女」（三十八年）の妖美となり、鐵幹が「毒草」（三十七年）の畸調となり、清白が「孔雀船」（三十九年）の鮮麗となり、有明が「獨絃哀歌」（卅六年）、「春鳥集」（三十八年）の幽韻となり、幸田露伴が「出廬」（三十八年）の長篇試作となり、泡鳴が「夕潮」（三十七年）、「悲戀悲歌」（三十八年）の破調となり、柴舟の「銀鈴」（三十七年）、「金帆」（三十八年）の清姿となり、啄木が「あこがれ」（三十八年）の處女作となり、夜雨が「夕月」（三十五年）、「花守」（三十八年）の寂味となり、酔茗が「無弦弓」（三十四年）、「劒影」、「塔影」（三十八年）の靜境となり、白星が「日本國歌」（三十六年）、「むつ星」（三十七年）を初めそめ外、「小野のわかれ」の小山内薫をはじめ清水橋村（「野人」（三十四年）「夏廂」汪洋合著（三十八年）、淮田空穂（「まひる野」）、吉野臥城（「小百合集」（三十四年）「野茨集」（三十五年））、太田瑞穂

及塚原伏龍(「山上湖上」)、今村敬天、佐々木信綱等の詩作に森鷗外が外征中の新作もあり、湯淺半月の「半月集」(三十五年)、武島羽衣の「霓裳微吟」(三十六年)「秋之家遺稿」(三十七年)、は十年二十年の明を失して惜くも出版せられしもの、「青海波」、「殘雪集」、「花がたみ」、「五彩雲」、「はつじほ」等の詞華集に美妙が「新體詩歌作法」(三十五年)鹿島櫻巷が「新體詩獨習」(三十八年)等の作法書より更に下つては、「不如歸の歌」「金色夜叉の歌」、「源氏物語」「瀧口白羊」等の市井歌が出て三十六年の浪曼的覺醒に勢力を回復した詩壇は三十八年の大詩歌時代となつて同時に空前の詩論頻出を現じ、三十八年中期頃より、それ迄詩に論に蠢動の生々發動を示してゐた象徵詩は漸く流派傾向の活動と化し詩壇の全域にわたつての明治詩初まつて此方最初の意識的なイズムの主張と非議と批判とを經て第三期の全期より大正時代にまたがるサンボリズムの輸入と創作の大運動となつた。その仔細と意義と結果とは次期に詳しく論じる。

それで、最後に次期に接する性質のものを略叙しつゝ當時の重なる作者作品の一瞥だけ試みてをくと、一番目につく事が二つある老大家の出馬と女詩人の活躍とである。

鷗外が出戰中の作は、彼「うた日記」(四〇年)に收められたが、恐らく彼の全著作中の最劣作であらう。新詩人としては熱情が足らぬと評家からよくいはれたが、よしんばそこに往來の熱情の不足があるにしても人生全般に嚴肅なその態度を決定するある人格が何らかの對象にふれて異常の感激が托されぬ事がないとはいはれぬ、そこには詩人的活躍が試られうる。鷗外が陣中作は、ほんの「筆のすさび」で、書齋にこもつて思索に熱し考證に熱し譯業に熱する時に示される彼本來の熱情はこゝにかげを全く潜めて觸目の幺微事作に小感情を經驗したその苦辛なき記錄にすぎないのである。例へば、

されぱだりにの　港をば
かくいふ大野　縫殿之助(ぬひのすけ)
ひとりの手にて　とりにきと
短かき燧を　かいたでつ
(「大野縫殿之助」)

の如き詩風が多かつたのである。此時かれは肉身と共にその詩魂も全く當代の詩壇からは離れてゐた。彼の鋭才が詩界を動かしたのははるか後の事である。

露伴は紅葉に卓れて全く詩人であつたが、その詩情を時花りの詩風に托せん熱情を示したのは新詩の表現力を信じたからであらう。

「出廬」は、つひに出でざりし詩集「心のあと」の序詩で、三十七年中十ケ月にわたり「讀賣」に連載されたが、その破題

おもしろや、あら、おもしろや！。
みなもと遠き　大河の
水は流れて物言はず、
やさしく地を　潤して、
ゆるく去り行く　其の姿！。

は難のない詩的出發ではあるけれども、

うつし世　言ふに足らず。
いふに足らず　うつし世！

の如き反復的表現の失敗も中にあり、

あはれ　赤猪子、何とせん　老。

の無理な云ひまわしもあり、

戀慕は性慾に伴へば
慾を離れて　戀もなし。

の類の無味乾燥な說明僻が隨所に現はれて、間々夕星の如く輝く微妙の一兩句をも死滅させて、詩壇に類のないこの長篇の、小說家露伴による試作は、之を全體として見る時は、つひに詩の迫力と感情とを缺き美事失敗に終つてしまつたけれど、措辭の巧はさすがに群詩人を遠く凌ぐものがあつた。たゞ何んとなく古くさい表現だといふ感じを當時の年少われらにも感じさせたと今尙記憶するが、それは時代が陳套の感を寄せてゐた古成語をそのまゝかまはず使用してそれが何等微妙な時所の好機をうる事がなかつたからである。彼の四行詩の試みも三十八年中「讀賣」に發表されたが同じ失敗に陷つてしまつた。爾來彼は詩に默した。彼は散文によつて十分詩を談る詩人であるから。

道、鷗、露三先進の詩林に於ける活躍の案外であつたに反し、從來、一葉を除いて何の鬼才なき女流文壇は、巾幗の逸才二人によつて男性の境地を犯して注目すべき新生面を開かしめた。一は三十七年中の「太陽」誌上に揭げられた大塚楠緒子の詩「お百度詣で」と、三十七年九月號「明星」を飾つた與謝野晶子の「君死に給ふこと勿れ」とである。

一足踏みて夫おもひ
二足國を思へども
三足ふたゝび夫おもふ
女ごゝろにとがありや

（記憶のまゝ。）

で初まる「お百度詣で」は楠緒子の勝氣な聰明が出征中の夫を思ふ孤閨の婦情を消極的に自認し讃美し、よつて以て女性の抗議と憤激とを表はしたものであり、晶子の作は、由來彼女が歌に

於て殆ど男性の凡てを凌駕して明治粲女の名を謳はれた逸才者であるに反し、詩に於ては全く拙く、詩を感ずること深　彼女がこの劣作を敢てする不思議を從來も、その後とても多くの讀者に感ぜしめた程であつたのに、此詩は全く女性の云はんとする所を大膽に云つてのけ、そして夫れは同時に男性の云はんとする部分をも有意義に包含してゐて、楠緒子よりも更に積極的に抗戰した點で、史上の特別の意義を有する佳品であつた。

あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとおしへしや
…………
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事か
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり
…………
すめらみことは戰ひに
おほみづからは出でまさね
かたみに人の血を流し
獸の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ
…………
わが子を召され家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髮はまさりけり
…………
暖簾のかげに伏して泣く
あえかに若き新妻を
君わするるや思へるや
十月も添はでわかれたる
少女ごゝろを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ

物言ふ立場は商家の若者の姉の飽く迄も因習的な無智な感傷的なそれであるが、かへつてゐさとくもその無知な商女に假裝したかため、樂々と氣ままに歌へたのである、また禁止もされなかつたのである。

が、國家正義派の評家としての大町桂月は卒直にその「非忠君愛國思想」を社會人に指示す樣な態度で攻擊したので危く訴訟事件にまでならうとして示談になつて事すんだのであつたが、とにかく、當時の青年詩人が、感情的に解放されたと信じ乍ら、個人對國家の諸問題については、全く無關心の態度をとつたり、無理解であつたり、無交涉を裝つたりじて、一たび各自の實際問題が此一點に逢着すると今更あはてゝかへつて陳腐頑迷な道に入つたり、理由を正當に思考する餘裕なく無暗に憤激したりしたに對して、補緒子、晶子兩人が卒直にこの方面の感情を歌つたのは興味あることであつた。これは、思ふに進んだ男性詩人ならば、既決の問題として省みなかつた詩材であり、鈍劣の小才ならばウヤムヤに解して棄てゝをいた個所であつたのを女なればこそ便宜ある一點から之を拾ひあげて詩に活かしえたのである。

實際社會の起伏の如きを歌ふをいさぎよしともせず、興味をもよせざりし當時の詩界にこの詩材はたしかに珍らしいものであり、有意義でもあつた。何人も感ぜざりし點をいち早く感じて歌つたのではないが、敢て歌ふ者のなかつた時に女性の一點から之を拾ひあげて歌つたのが面白いのである。

泣菫は依然として詩壇の覇者の地位にあつた。その民詩については既言したが、「戀のわな」に

戀のたはむれ
さりやな

の奇調を成し、每句の音樂的効果を民謠風の小詩に奏し、「おもひで」のしめやかな回憶詩に

朧夜の窓のあかりに
京むすめ、難波商人
朽尼や切戸まうでや
人の世の旅の道づれ

の哀情をあらはし、「白玉姬」の民謠體に古雅な節横を作つてやがて來るべき「白羊宮」の大成への小手しらべを了へた。

有明の眞の活動は次期であり、その代表作は「有明集」で「獨弦」、「春鳥」ともにその道程にすぎないが、「獨弦」については、「明星」誌上で綱島梁川が「此集の長は、觸手春を生ずる趣にあるよりも、むしろ沈刻にあるべく、精思にあるべく候。其の焰は熱烈をつつめる沈鋉の餘に候。即ち Solid fire に候。」と

賞し、詩形聲律の上で「判合にエフエクチーヴならざりし」と評してゐる。梁川は泣菫にも林外にも同情ある批評を與へた散文の詩人で、かれの心證記錄が當代の思想の眼目をなした事は後に述べる。

　有明は「春鳥集」の一卷で

　　日の落穗、月のしたゝり

のロゼテイが套語をマスターし了し、

　　靜かにさめしたましひの
　　一日は花とにほひ咲く

の詩に完成境を早く忍ばしめ、官能と靈感との本質的一致を企て、その序文に近代象徴詩を解說し、ヹルレーヌをも譯してゐる。泣、明二人については彼等の主義を談る時その全詩史にわたつて詳かに鳥瞰景を試みよう。

　三十六年十一月、「明星」より岐れて雜誌「白百合」が創刊され林外、泡鳴、御風ら之によつたが、「明星」とに別趣の清洒な佳麗と新鮮とに富んでこの期の浪曼思潮の一砦となつた。これを泡鳴自らが「實際的新情熱派」と形容してゐるのは、その特色の一部を示した言葉である。

　泣有二家に雁行する才で、鐵幹の措辭をも凌ぎ、泡鳴の粗笨に遠く卓れて、林外の形式美を遙かに超越した收穫を一卷の詩集に殘し乍ら、つひに眼ある評家の正當な「發見」を購ひえず、そのまゝ時代の下積みになつて消失した稀に見る天稟の技能の所有者が、たゞ一人異端の如く、「文庫」の中に交つてゐた。その人は伊良子清白、その集は「孔雀船」(三十九年)である。

　伊良子清白が詩については他の項にも別の方面から評するが、此期に於てのみ活躍した彼を一言しておくと、彼の才思は一代の流風をも創造するだけの力と美とを有したに係はらず、その賦性を鼓舞し、光艶あらしめる何らの外的約束がなかつたため、詩に盲目な世人に全く今もなほ遺忘せられてゐるのみか當時唯一の好詩評家といはれた櫻井天壇を初め、あらゆるその後の文學史の上から抹殺されてゐるのであるが、心ある卓識者は早くよりその詩美の嶄然たる卓越を私かに賞揚してやまなかつた。彼の搖籃は「文庫」であり、十餘年の昔、二十八九年の交に、醉茗、夜雨、白蓮、葉末露子らとこゝに巢立つたが、三十六年東都を去つてから彼の立場は反中央的となつたためその鴻作もいよ／＼人目に觸れる機會を失つたのである。文庫派中彼の才能は醉茗夜雨と鼎立して獨得の威力を思はせたが、醉、雨二者がその特色をよく社會から認められたに反し彼の技巧のみは何ら論らふ人もないのである。

　元來「文庫」派はエポックを作らなかつた。作りえなかつた

のである。その集合は偶然の集合に近かつた。酔、雨の静境が後進の目標とはなつたが、それとても時代の回轉の動力となるものではなかつた。酔茗の「無弦弓」（三十四年）以前に「文庫」からは「詞藻」（二十九年）、「詩美幽韻」（三十三年）等のアンソロヂーを出してゐるが、前者が偶然な投書集であるに反し、後者には清白の「巌間の白百合」、夜雨の「いてふ集」、酔茗の「雲無心」ら十五人の選詩があつた。「文庫」の發展は三十二三年から七八年迄つづいた。清水橘村といひ山崎紫紅といひ吉野臥城、一色白浪、水野葉舟、瀧澤秋曉、溝口白羊といふ人々のその努力は長くひたすらにつづいたがその業績は決して力ある史價に富むものではなかつた。

酔茗は齊實温良な人格が淑やかに自然の結晶をなしたその極めて日本的なる詩に一家の風格を示したが、もと熱情の人ではなく、智性の鋭い資性でもない、たゞに善良の人性を眞摯な立場に置いて温健平凡な詩風を守つたにすぎないのであるから、一世を率ゐる思想力も一派を永遠づける趣味性ももとよりない。詩を好む若人は、いらひどく一方に偏しない。静穏な保育場として、波除場としてこゝに雲集した。これが、後、卓れた二三の詩才をこの畑から出した所以である。夜雨の哀婉は自然なる傷感の流露であるが、その技能はもと必ずしも勝れた素質にあつたものではなく、その詩想のスケールも何ら永く廣く深い將來と基礎とを約束したものでないが、縷々として訴ふる哀感が七五正調の流麗音と、誠によく一致して當時何人も摸すべからざるユニークのスタイルに到達してゐたのと、生れて筑波山の麓に不具の身をかこつ境界に蟠まる一切の人生經驗から生れ出た殉情が極めて自然ににじみ出たあらゆる忍從、哀泣、安心嗟嘆等がよく何人の同感同情をも惹かねばやまないものがあつた。天賦の技能からいふと酔茗は、清白、夜雨に遠く及ばない。夜雨はまた清白に一歩をゆずらねばならぬ。その清白が何故に茗、雨の聲名、をえずして終つたのか。

畢竟するに、茗、雨の詩境は萬人に解され易い本性にあるに反して、清白のそれは少數の人々のみに著しく喜ばれる素質のものにすぎなかつたからである。茗は柔かに雨はたをやかに而して兩者ともおだやかに平明であつたから一般人はその詩に親みやすかつたが、清白は高くかたく而して畸形の姿、蒼風の趣があつたから一部には夥しくもてはやされ、全體からは親みがたく遠ざけられたからである。（彼等三人の全體論は次期に敍べる。）

山本露葉は、林外に似た技巧の長所缺點があつた。「漂渦の白流」といひ、「くら海のほの白み」といふ類の格調の爲めにエフ

エクトをも考へずに語句を詰める詩風が、無感動な、只表面許りできらくしてゐるにすぎない、外面的な効果しか齎さない偏狹硬化の無生命體にしてしまつた。もと相當に技巧に長けた人であつた。

林外は、「夏花少女」（三十八年）の處女集により言葉の外的妖麗の當時にしては稀に見る形式美に達したけれど、その言葉の多くは花やかに裝つたまゝ死滅してゐた。この境地からやゝ脫却したのは倘第三期に入つてからのことである。極彩色の濃情が夢の南國の背景に彳んで妖魔を喜び、妖女をしたひ、佚麗にして富贍な古語造語のかなり粗末な使用がその特色で、評家が空靈派でなくて空響的だと冷罵したのは、措辭にある名詞止めと、助詞ぬきと、生ぬるい讀み方とより來る一種の厭味と「靈」とか「愛」とか「魔」とかいふ頻用の套語が力も含蓄もなく無定見に使用はれろ固僻を指したるに外ならぬ。三十七八年代この種の詩の缺點を擴大鏡下に示したのが林外の詩である。從つて又、この期の詩の特質もかれの詩に誠によく出てゐる。彼は次期の「花妻」で一段落に達した。

「夏花少女」十二篇は「明星」から「白百合」にわたつて連載された彼の出世作で、これに舊作を合せて同名の詩集が出た。天壇は彼の詞藻の豐麗と擬人法の異彩とをあげてゐる。それらは「金翅鳥王の歌」、「極樂鳥の賦」、「碧璽孔雀の賦」等に表はれてゐるが、かれの語彙の富贍は空想の對象の本性の然らしめたものであり、擬人法の異彩も亦、天壇は彼の妖魔趣味に基くとしたが、寧ろそれはもつと廣義に解してかれの浪曼思想による萬物に對する憧憬と欣求に基くものである。泡鳴は林外の「單に文字の綺麗を誇る缺點」を隨所にあげてゐるがそれは泡鳴と對蹠的位相にあるもので林外の病所をついた語だが特兆もそこにあることを忘れてはならない。プラスティックの美と評した天壇の語は萬人の見る所のものである。

「夏花少女」の三「妖魔の泉」を引くと、

譬へば紆曲れる蚰蜒の如く
紫薇は菩提樹くだり、
倦んじて眠れる我が耳舐めて
「哀」とささやき艶女と化りつ。

ああ又ささやく、『妙趣巡り
禮讚、涅槃の秘路訪ふや、
仆れて熱土に死せんは頑陋
とこしへ、青綠ぞ濃きこの蔭に、
魄靈をば若やぐ、水瑠璃掬べ

ああ、そは快樂ぞ情よ君」と。
目醒めば、緋色の大なる葩は
葉の間を流れを燃えつつ匂ふ。

『感謝す、蔵よ、戀にも濁く
妖魔の泉にわれ溺れんか。』

花外は「新小説」に詩をかゝげてゐたが、以前の「暗中田鼠に告ぐる歌」の作品以來、「馬上哀吟」、「孤憐吟」等の作があつたが作風は舊態依稀として變らなかつた。その生一本な感傷、直情には易すく同感はされうるが、人を支配する大きな力がつひに表はれなかつた。ヨネ・ノグチは當時晩翠を十八世紀の詩人と評したが、花外も亦その感情の特徴に於て舊浪曼時代英國に見られる詩人である。その「雄渾」も「偉大」も晩近體の詩に見られる文化價値意識に相通じるものではない。が、その思想感情の新舊は何れであれ、一たび情感にあほられて猛り起つその詩姿は純であつた。

重き愁の身をのせて
駒の歩みの遅きかな
桔梗小萩は咲き亂れ
露にたふるゝ女郎花
鶉啼くてふ野を過ぎて
その名も高き信濃なる
淺間の山に來りけり。……

のやさしい心は忽然

壯んなるかな永劫に
天に炎をあぐる山
小さき胸に火は燃えて
われも天地に怨みあり
人の思想を厭すなる
世をば燒かむか……

——「馬上哀吟」

「のろひの世にぞわれは歸らじ」と結ぶ花外獨特の憤恨の怨詞となる。その形は簡單でその心も單純であるが、七五の格調によく合つて彼らしい高吟が一部の讀者を率いたけれど、詩壇の本流は此頃より離れて行つた。

「鐘鳴らし信濃の國をわれ行かば」の哀調を以て歌壇にはやく知られた窪田空穂は、最初、小松原春子の假名に隱れてゐたが、詩歌集「まひる野」(三十八年)に窪田通治の名を以て三十餘篇の詩を收めてゐる。「文庫」にぞくして同顯的溫雅と自然の

咏嘆とを志した。中には「うたがひ」に父母の眞假を糺し、「春日」に稚い戀心を描いてゐるもあるが、「枳殼」篇の一節に

行くべき春を行かしめて
山時鳥啼く日をば
わが日とするか、枳殼の
花はつはつに咲き出でつ
覺めて靜けき綠野や
遠く望みて立つ見れば
尼そぎすがた堂に入り
背見するにも似たるかな……

など、淸麗な雅馴のスタイルの創成を豫想せしめたが、彼も亦この若き頃の稚い形をそのまゝに殘して永く詩林を去つてしまつた。

「銀鈴」のひびき、「金帆」のかげに、「ハイネの詩」以後の詩情を育くんでゐた尾上柴舟は、流麗と溫雅とを失はぬ日本的感情の直寫によつて尙その發聲をつゞけて來たが、これらの集を最後に、その後は全く歌壇の人となつてしまつた。

あしたゆうべの逍遙に
歌もやあると問ふな君
その野の水と胸に湧く
愁を友の我なれば

○

野邊の小鳥にそと聞けば
夢より歌はなりぬてふ
罪のかげのみおごるなる
あゝわが夢のいかにせむ。

等の詩を當時の評家がアイヘンドルフの逍遙歌に比較した。淸楚な哀感は何人をも動かしたが複雜な近代詩體に赴く作者では既になかつた。

石川啄木は十八才より二十才に及ぶ間の作を「あこがれ」(三十八年)一卷にまとめて處女的見參をなしたが、その絕句の形式は泣菫の模倣であり、その詞藻の陰影のあるものは有明の感化あつて未だ彼のスタイルを出してゐなかつたが、「才氣縱橫の少年詩人」啄木は、「帝國文學」記者の「よく言へば豐富なり瑰麗なり。惡く言へば雜糅なりゴタゴタなり。」と云つたその詞藻の中心に何とはなく「多大の興味を以て彼の前途に注目」したいあるものがあることは萬人また早く之を認めた。

日はくれぬ。

(愁のいのち)

幻想の森に、いさや、

ひとりゆかむ。
萬有音をひそめて
(あ、我がいのち)おも での
妙樂の夜あまゝ森。(ひとりゆかむ)

の轢き一打音
秋去り、秋來る時劫の刻み受け
五百秋朽ちたる老杉、その眞洞に、
黄金の鼓のたばしる音傳へて
今日また木の間を過ぐるか、こがらし姫。

——「杜に立ちて」

の八四六長音節の十四行曲にあなどり難い詩感の獨自性と鋭感な感受性とを示した。

雜誌「七人」は臨川、無想庵を初め、高瀨、上村、吉田、太田、小山内らの同人によつて發刊された同人雜誌だが、臨川は之にメーテルリンクを論じ小山内なでしては一卷をあげて詩集「小野のわかれ」にみてしめた。敏感な輕快な小才詩の幼芽がうかがはれる。が、彼も亦此一卷だけを殘して劇壇に去つた。

あふげ青葉したゝる岡を
古御堂の屋根のいたゞき
十字なす黄金の光

そこよりぞの虹橋
大空に色彩なして
麓なる小村にいたる

あゝ神に至らむ路か
紫に紅に萌葱に
美しき「愛」の色彩
君、米の黒きを泣くな
君、衣の襤褸を泣くな
見よ君が茅葺屋根に
うるはしの橋は通へり

——「虹」

此詩は卷頭を飾る一篇であるが全體として客觀的で修辭に巧みな特色とわざとらしさの失敗をあげてゐる文壇の評は正當をえてゐるが、そのわざとらしさは、若し彼が永く詩作をつづけたならば大な缺陷として殘されるものであつたらう。

同じやうな才情を持つ靑年に相馬御風があつた。彼は「明星」から「白百合」に移つて抒情的な感傷的な作風をつゞけたが獨特の身振りの決定に及ばず評壇に去つた。その集は、後、「御風詩集」(四十一年)となつて殘された。

夏の空くもれる下に
北海は鉛のごとし。
死魚のごと浮べる船の
舳先には綱取まろび
舵取は櫂にぞねむる。
力なく帆はしなだれて
帆柱に皺みてからむ。……

——「溜息」

の如き詩風でなでしこよりも遙かに殉情的であるが才思の逆り方に相似形がある。

ゆく秋の朝のしづけさ
夜あらしの惱のはてに
天地はいまやすらけく
息たゆる翁のごとし。……

——「ゆく秋」

此詩人も亦後年詩作をつゞけても、大規模の作家とはならなかつたらうが、一味の才情がよく時代と共に進展して行つたであらう。

溝口白羊は流行小説の新體詩を出してその俗風を嗤はれたが「文庫」にかゝげたその詩には相當見るべき作もあつた。詩集「ささぶえ」(三十九年)には模倣と粗野とがあるが、淺草街を歌つた「ペンキの塔」の如きは新詩風のさきがけとしてその平俗な感情の間にかゞやく一縷の眞面目を採らねばならぬ。彼亦後年一の逸作もなかつた。

鐵幹の「毒草」はさきに叙べた史譚詩の類作に他人に卓れた詩才の自在を表はした外に注目すべき何ものもない。序にいふが、彼の詩集類によく挿入されたいはゆる「アール・ヌーボー」風の畫は當時のハイカラな趣味を表はして鐵幹の作、明星派の作に相應はしかつたものである。

泡鳴の「夕潮」(三十七年)と「悲戀悲歌」(三十八年)とは次期から一同轉したそのいはゆる「自然主義的表象詩」前の最後のもので、かれはその序文中世の非難に答へた中、破格語法の使用、八七調使用、同一調を長篇に使用すること、押韻の點、術語、俗語、難解語を挿入すること等につき辯じてゐる。かれの詩は理論仆れの感があつたが、かれの詩論は、論理の術に近い當時の詩壇には有意義であつた。その作になると不相變らず技巧が粗笨で、殆ど詩人の措辭とも思はれぬが、その正直な措寫が卒直に所感を表白して時として佳句佳節をなすけれど、むらが多いために纏つた完成作は尠ない。

ああ日は毛布の黒みを帶びて、

月また血のごとしぼみ來たり、
あめなる星々その軸もろく、
たとへば無花果地にぞ落つる。

――「悲戀悲歌」――三界獨白

などの一節はいゝ聯であるが多くは八七調に無理に亂暴に押しこめられた詩情が、結果は變り色となつて表はれるのでかれの理論は自ら正當であると思ひ、又、正當であつても、表はれた結果としての作品は妙な感じに陷つてしまつたので、この點に彼は盲目であつた。或は無理押しをきめて平然としてゐた。

時劫の森かげ露はしとど、
わがおほ御神の足を受けず、
重なる落葉の下行く水は、
岩をばめぐりて人を刻む。

――「悲戀悲歌」――短曲

などもその缺陷の尠い一節である。泡鳴の如きは眞先に口語を採用して効果ある詩人であつたが、その方面では遲かつた。(早く二十年代に使用したのは民謠風の使用語法で正當な近代的口語使用法でない。)泡鳴の用語こそ雅語は相應はしくないものである。彼ほど眞面目に詩を書き詩を論じた人が、一閃の熱心をも讀者に起させずについに小說に轉じたのは、彼の作詩に根本的の過誤と臭味があつて反感を招いたからである。

詩史第二期はこんな風で終つた。三十八年中頃から象徵論が盛んになつたを機會に詩壇は一回轉をして第三期に入つた。淸白夜雨鐵幹有明泡鳴泣菫らの中堅作家も、なでしこ、白秋、胡夷、「明星」の平野萬里その外など若き一群も此期の初頭に改めて自己の與へられたる天稟を試みようための詩的活躍を行つた。三十八年九月かけて詩壇は空前の賑かな年であつた。新詩風に同情する者は馳せ參じ、嫌厭たる者は壇を下つて永久に詩林を見すてた。それらの細部については改めて第三期劈頭に詳しく論評しよう。

附言。震災のため居所を轉じ參考文獻を携へることを得ず、諸種の點遺憾の個所多し。出來うべくば次章に於て訂正せん。

福太郎と幸兵衛との復興對話

生方敏郎

福太郎　や、今日は。御隱居。

幸兵衛　よう、いらつしやい。

福太郎　まづ明けましてお目度うございます。

幸兵衛　別に今日ばかり目出たくはない。目出たいと思ふ時は何時だつて目出たいし、目出たくない時は何時だつて目出たくない。

福太郎　これに御挨拶で……。

幸兵衛　御挨拶でも何でもない。まあ、懸引なし本當のところがさうぢやあないか？　正月だつていやな事が有れば目出たくねえ、盆でも暮でも好い事が向いて來りやお目出たいに違ひなからう。

福太郎　そりら、まあ、さういつた樣なものですが

幸兵衛　ものですがではない。ものですなんだ。日頃はこせ／＼してゐるくせに、お正月に成ると急に目出たい／＼と世間の奴等は觸れ廻るんだが、あれは全く〻附け景氣だ。目出たい事も何もないのにあんな事を云ひ合つてるんだ。本當に目出たい好い氣持であつてみろ、何もそれをふれ廻るには當らない。この寒空内で炬燵にあたり乍ら居眠りでもしてりやいいんだ。にあちこち步き廻つて風でも引き込んだ日には忽ち好い氣持は何處かへ失くしちまつて、目出たくも何ともないものに成つまう。

福太郎　成ほど。してみますと、旦那は矢張お目出たいんで、つまり恁うしてお內にゐて炬燵で居眠りをなすてゐなさるところを伺ひますと。

幸兵衛　うん、こりや、貴樣に一ぽんやられたな。

福太郎　やりますとも。御隱居。お宅なんかは全く吹く風枝を鳴らさすてえ文句通りですが、私共のバラツク正月と來たら吹く風は天井からも床下からもヒユー／＼家中を鳴らし廻つてゐりや賑やかなものです。

幸兵衛　そりや一層陽氣でよからう。その音に浮かれて平生

からお目出たい男に輪をかけてお目出たくなつて、御髭をふれ廻つてるのだらう。

福太郎　御冗談を仰言られちやあ困ります。隙間風の呻りなんか些とも陽氣なことはありません。家にゐても寒くてやり切れないから、體を温めるために屠蘇を頂きます。冷たい屠蘇を飲むと體がブル／＼とふるへますから、後で温いのをやります。さうしてゐる中に自然正月氣分に成りますんで。唄の文句にもあります、寒さしのぎの茶碗酒てゝなあ、こんなものかと思ひますよ。

幸兵衛　さうかい。それも全くバラック生活のおかげだ。震災の賜物だ。有がたいと思ふがいい。

福太郎　いや、飛んだ賜物で。地震がなかつたとて、正月に成れば御酒ぐらゐは頂戴しますよ。

幸兵衛　だが、貴公の顏が今年の正月くらゐお目出たく見える正月は、之までにないよ。たしかにバラック生活の賜物だ。

福太郎　また顏の棚おろしですか。

幸兵衛　棚おろしぢやない。貴公は自分の顏の價値を知らずにゐるものだから、顏の評判が出さへすれば直ぐ棚おろしをされてると思ふやうだが、そりや考くたくないといふものだ。貴公の顏付はたしかに禮讃を捧ぐ可き價値がある尊い顏だ。さういふ顏付を製作した父母の恩を厚く感謝しなさるがいい。身體髮膚之を父母に受く、といふがその身體の中でも顏は尤も大切な部分、家にたとへれば玄關、商店なら店先きだ。鼻や口はショウキンドウみたいなものだ。特に貴公の顏なぞと來たら、福引付き賣出しの當日のそれの如き、景氣のいい顏面なんだ。

福太郎　へえ、矢つぱり他人が見ても、そんなに値打の有る顏でしたかね。

幸兵衛　といふと、自分では已にその眞價を認めてゐたのか。

福太郎　そりや當り前の事ですよ。

幸兵衛　いかにも、鏡にうつして悲觀する顏といふものは、世の中に一つも無い。貴公などさう思ふのも無理はない。さうして貴公の細君は何う考へてゐる。定めて滿足してゐるだらな。

福太郎　さあ、滿足してるか何うか分りませんが、別に不足も云ひませんよ。

幸兵衛　何處の女房だつて亭主の顏の不足を云ふ者はない。それを云ふのは贅澤すぎる。それよりも女房は自分の容貌に對する不滿を年中氣にしてゐるものだから、着物とか髮の物とか、いささかなりともショウキンドウの裝飾と成る可きものを矢釜

しく要求するのだ。それさへ十分に當てがつてやれば、家内安全だ。日本婦人が將來參政權を得るやうに成つての後も、女房が貴公の顔付にまで干渉する事はあるまいから、安心なさい。

福太郎。私は安心してゐますが、これでも女房は仲々安心しませんで困りますよ。

幸兵衛　何にかい。

福太郎　私にです。

幸兵衛　はてね。昔から人を見たら盜人を思へ、といふ言葉はあるが、貴公ばかりはそんな人間とは考へられなかつた。正直その物の樣で、そうしてお目出たく出來てゐて、お愛嬌たつぷりで、その上何處やらバカげてゐてさ。併し同じバカげた顔付でも、役者のやうにのつぺりしてでもゐると、或はまた近頃流行の婦人關係が成立せんとも限らぬから、細君としては油斷もなるまいが、貴公の樣子と來たら、幸にして男子にも安心させまた不幸にして婦人にも安心させるといふ顔付だ。

福太郎　さうでせうか。女難の相はありませんかね。

幸兵衛　何う贔屓目に見ても、今のところ、まづ女難はなさ相だね。

福太郎　易者は女難が有るといひましたよ。

幸兵衛　易者もたまにはお愛想を言ふのだよ。元來貴公の顔その物には女難はないが、將來それが出て來ないとは限らない。貴公は自分でお氣づきか何うか知らんが、貴公の顔の眞價はその名の通り福々しいことだ。いつ見てもにこ〱してゐる。お愛嬌たつぷりだ。心持も幾分お目出たく出來てゐる。いや、お目出たいと云つたとてバカにしたわけではないから、腹を立てなさんな。腹を立ててさへも貴公はにこ〱してゐる。軍人や巡査に成つても餘り睨みのきく雜作ではない。だがにこ〱してゐるから、人に可愛がられる。いつも景氣がよさ相に見えるので、人は本當に景氣のいい人と誤認して貴公に對し油斷する。城壁を構へず安心する。之れその顔の徳だ。

福太郎　へえ、顔にも徳なんてものがありますかね。

幸兵衛　あるとも、徳とは自らつとめずして天然自然に備はつた資だ。山本伯は海軍軍人として棟梁たる可き面構へをして居り、後藤子爵は内務大臣として此火事跡のどさくさ紛れに際し活躍するには恰度いい顔付をして居るんだ。と云ふと何だか火事どろのやうに聞えて失禮だがの。權兵衛伯の面構へで呉服屋の番頭にでも雇はれた日には、如何に大勉强の廉賣をやつても婦人の客は入らない。少しも繁昌する模樣が見えない。たとへ其手腕があつても其徳の無い方面には成功せぬ。後藤子は山本伯より使ひ道が廣いかの如くに見受けられるが、さう見るの

は凡眼ぢや。

福太郎　へえ、何う見りや非凡眼で。

幸兵衛　何うつて、後藤子も矢張政治家以外に成功する人相でない。醫者に成つても代脈先生程度の信用しか得られまいし、教育家としても村夫子、役者になつたら馬の脚ぢや。商人に仕立てゝも燒トタン板の鞘取で儲けて暴利令にふれ警察の大目玉を食ふ位がオチぢや。

福太郎　さうすると、山本さんも後藤さんも商人としては、私共以下ですね。

幸兵衛　まあ、そんなものだ。彼等も海軍商人政治商人と見れば、矢張一種の商人にちがひないが、市井普通の商人ではない。亡くなつた原敬といふ男の相には、火の玉と氷の塊の二面を備へてゐて世間を威嚇したが、とう〱兇刄で破られた。後藤の相には大風呂敷が其象徴として現はれてゐるから之は錐でもやられぬ。其の代り風に吹かれて行方不明に成る危さがある。又山本には重い砲車のやうな風格があるから、下り坂へかかつたが最後惨めなものぢや。がら〱と谷底へ落ち込まう。まあ、こんな鹽梅に人は誰しも風格といふものを持つてゐる。人相はその風格の一部だ。

福太郎　そこで、御隱居さん。私の風格は福々しい事なんですね。にこ〱してゐて。

幸兵衛　さうだ。さうだ。人を安心させる徳を備へてゐるのだ。

福太郎　で、私は金持に成れるわけなんですね。

幸兵衛　ところが、さう簡單には行かぬ。

福太郎　をや〱、何だ、詰らない。御隱居さん、私をかつぐんですね。

幸兵衛　何で、私が貴公をかつぐものか、貴公は福々しくはあるが、福々しい者必ずしも金持には成れぬ。ただ金持と誤認される餘德がある。福々しくして他人から安心される。油斷される。そこで自分が油斷しなければ金も出來よう富も出來よう。しかし、自分も亦た安心する、油斷する。だから、取つたり放したりぢや、拾つたり捨てたりぢや。

福太郎　それでは　とどの詰り元つこで、まことに詰りませんね。拾つたり捨てたりでは、拾ひ損といふものです。

幸兵衛　それは考へやうで何うとも云へる。拾ひ損でもあらうが、拾ひ得でもある。拾つた物をまた失へばこそ、貴公のやうに莞爾として笑を含んでゐられるのだが、拾つたものを拾つたなり何時までも放さないと、金持になれる代りには、そのにこ〱した福々しさが顔から失せる。金が溜つてみろ、心配に

成る。そして心配の相が現はれて來る。貴公はバラツクで正月を迎へたりやこそにこ〳〵してゐるんだが、廣い屋敷に住む金持はお正月でもさうにこ〳〵してゐない。貴公なんかは自分の家へ入つて來る客は皆な福の神に見えるだらう。入つて何か置つて行く。いくらか置いて行く。ところが金持の眼から見ると來る奴〳〵貧乏神に見えるんだ。新年でお目出度うてな事を云つて來る奴が、屹度何かしら持つて出て行く。持ち去らうと思つて入つて來る。だからバラツクは福の神の寄つて來る寶船だし、山の手の大厦高樓は盜人と貧乏神に狙はれてるんだ。

福太郎　いや、そりや、御隱居さん、バラツクにもずゐぶん泥棒が入りますよ。

幸兵衛　さうかの。もうバラツクも泥棒に狙はれるやうに成りや一人前だ。蝿が砂糖の在るところを知つてゐるやうに、泥棒といふ奴は富の在り家をよく知つてゐるものだ。もう泥棒が入るやうに成つたら、バラツクも寒いの何のと不平を言ふな。一體泥棒は日本ぢうに何人ゐると思ふ。

福太郎　さあ、何人居ますか、つひ交番で訊いた事もございません。ただで他人の物を自分の物にするといふ儲かる商賣ですから、之で警察で捕まへさへしなければずゐぶん多いものでせうな。石川や濱の眞砂はつきるとも、世に盜人の種はつきまじて之歌があるぢやございませんか。

幸兵衛　感心な事を知つてるな。しかし、それは盜人の種はつきまじといふ事さ。多いといふたとへではない。いや何んな物も慾に種は盡きないよ。盜人もつきねば閻ツ引もつきない。貧乏人もつきねば金持もつきない。金庫のある限りは金庫破りは存在する道理さ。ところで、何うだ。燒け殘りの東京に家は何軒あると思ふ。二十萬軒くらゐは有らう。また燒跡に出來たバラツクが何萬軒あると思ふ。此頃ぢうは毎日一日に五千とか六千とかのバラツクが出來つゝあるといふぢやないか。さうして盜人の數は何人だ。二十萬人あると見ても一戸あたり一人しか入らない勘定だが、まさか二十萬人の泥棒は東京にゐなからう。

福太郎　そんなにゐられて堪るものですか。

幸兵衛　泥棒なんて百軒に一軒ゃ入りやしない。入つたところで火事みたいに洗ひざらひ持つて行くわけではなく、たか〳〵風呂敷に一しよひ持ち出す位のもんだ。それにしては、餘り皆が騷ぎ過ぎるよ。

福太郎　騷ぎ過ぎるつて、旦那、泥棒に入られては餘りいい心持はしませんからねえ。臆病な泥棒に成ると刄物をふり廻すから、けんのんでもありますよ。

幸兵衛　だが火事はもつとけんのんだ。そのくせ火事には皆が油斷して一度に何軒も何十軒も平氣で丸燒けに燒け出され乍ら、泥棒だと一軒入ると大さはぎをする。燒けるなら山ほど燒いても欲しくないが、盗まれる物は風呂敷に一つでも欲しい。と云つた考へ方なんだな。一般の人々は。

福太郎　火で燒くのも惜しいけれど、火の力ばかりは何とも手の下しやうがないからでござんせう。泥棒は後でふんじばつて來て牢へ入れる事も出來ませうが、火事を牢屋へ入れる事は出來ませんから、仕方なしに泣寢入りに成るのですよ。平氣で誰も丸燒けに成る人間は有りますまいよ。

幸兵衛　さうか。若し火事を裁判する事が出來たら、檢事は豪い求刑をするだらうなあ。

福太郎　裁判所まで連れてかない先に、皆で撲ち殺してしまうでせう。

幸兵衛　自警團がやつつけてくれるか。

福太郎　さうですよ。火事には燒かれた後の灰掻きやら後片附けやらに大きな暇と金とが入ることです。とても盗人の追錢どころの話ぢやありませんからね。

幸兵衛　ははは、怨み骨髓に徹したわけぢやな。

福太郎　さうでもありません。今頃に成つて愚痴がポツ〳〵出もしますが、あの當座は何となく綺麗さつぱりのやうな氣がしましたよ。

幸兵衛　命ばかりはお助け〳〵といふ幕だつたんだからな。火も小さいと侮られて、煙草の火などは下駄で踏み消される奴だが、大火と成ると敬意を表して誰とて惡口はおろか愚痴さへ言ふ者がない。盗人も、同樣小泥棒は憎みもし責めもするが、大泥棒は自費自動車を驅つて大威張だ。弱い奴は犯した罪が無いのに濡衣を着せられてさん〴〵な目に會はされるが、景氣のいい奴なら大抵の事が微罪不檢擧で通る。呑舟の魚は網に入らずといふ奴だが、入らないのぢやあない入れると網を痛めるからだ。そこで震災後も相變らず雜魚ばかり捕つてゐる樣だ。トタン板を十枚賣つたとか鑵詰を一箱賣つたとかいふのばかりつかまへてゐる。貴公のいふ濱の眞砂だ。大きな岩は其儘にして置かれる。だがその大岩石も自然の力には敵はない。今度の樣な地震が來ると、海底へ埋沒して影も無くなる、と云つたもんだ。

福太郎　いや、あんな地震に度々來られちや堪りませんよ。岩ばかり持つてかれるなら構ひませんが、家でも人でも遠慮無くさらつて行きますからね。

幸兵衛　まあ、そんなものだ。自然の大破壞に矢鱈に來られ

ちや堪らない。併しやはり時々は來て人々の惰眠を覺さんといかんよ。

福太郎　いえ、何といつても地震ばかりは、もう懲々です。眞平です。何が恐ろしいつて、世の中にあんな恐ろしいものはありませんよ。あの時の事を思ふと屠蘇の醉も何も覺めてしまひます。

幸兵衛　ははは、よく〳〵恐かつたと見えるの。酒が醒めたら後からまた飲ませてやらう。お富士や。一本福さんに燗をつけて來なさい。そんなに地震がいやなら地震でなくもよい。地震ばかりが大變動ではない。世の中には眼に見えない地震がある。その眼に見えない地震は絶えず人に逼つてゐるが、人々はそれに氣付かずにゐるんだ。

福太郎　目に見えない地震。へい、そんな不氣味なものが有りますかね。

幸兵衛　ある。そいつは瓦を落したり家を潰したりする位の生やさしい事では治まらぬ。もつと豪い事をする。この世の中をぐるりと變へる。

福太郎　へええ。こいつあ初めて聞いた。そんな物騷なものが有りますかい。そうしてそれは何時頃來ます。

幸兵衛　いつ來ると、私にも時期をきつと豫言する事は出來ないが、來るには屹度來る。太古、小亞細亞にノアといふ人の住んでゐたのを知つてるか。

福太郎　さつぱりそんなお方は存じませんね。矢張、西洋人ですか。

幸兵衛　西洋人でも東洋人でも、どつちでもよい。兎に角、昔さういふ人が有つた。此人が或時神のお告を得た。

福太郎　はてね。

幸兵衛　この後、四十日四十夜大雨が降り續く。そうして世界が大洪水に見舞はれる。何故かと云ふに、世界の人間が世に恐い者の在るのを忘れ、自分の知惠を頼んで文明を誇り餘りに傲慢に成り過ぎてゐる。奢侈淫樂が其極度に達してゐるから、ここに一大鐵槌を下して警告してやらうといふ神樣の計らひなんだ。

福太郎　恐ろしい陰謀をたくらみやがつたな。

幸兵衛　これ〳〵陰謀ではない。神の義憤ぢや。だがそこは流石に神さまだから徒に人類を苦しめて子孫を絶たうとはなさらない。ノアといふ正義の士が有つたから、此者に前以て夢の中で件の計畫を啓示された。大きな箱船を作り其れを浮べて生命を全うせよと仰言るのだ。ノアはこりや大變な事に成つたわいと思つたから、この洪水襲來の報を毎日〳〵觸れ廻つた。

福太郎　自動車に乘つて、メガホーンでね。

幸兵衞　バカ。その時分メガホーンも自動車も有るものか。

福太郎　ええ、こりや此地の話で。大阪からお米を積んで軍艦が二はい唯今芝浦へ着きました。とね。あのメガホーンの間拔けた聲もあの時ばかりや嬉しかつた。さすがに畜生米掴みたいた名前をしてやがるだけあつて、權ちやんは米にかけちや拔かりはねえねな。と感心しましたよ。

幸兵衞　畜生とは何だ。氣を付けて口を利きなさい。なるほどあの時の總理大臣閣下のお手並は見事だつた。だがノアの活動と來たらそんなどころのものぢやあない。毎日の樣に口を酸くして洪水大警戒と觸れ歩いた。けれども誰一人ノアの言ふ事を眞面目で對手にする者が無い

福太郎　そりや當り前ですよ。もう誰だつていい加減流言蜚語には手を燒いてますからね。女子供は早く逃がせ、警察は手薄だから有志の者はそれ〴〵自警してほしいと仰言る。よし來た、と江戸ツ兒は早受合ひの、浮つかり其手に乘つて自警團を組織する、此地は皇國のためと思つて竹槍さはぎをおつ初める、偖て其後、世の中は治まり何もかも忘れた時分に成つて、一寸來いを頁ひ、珠數つなぎにされて檢事局へ廻されたりするんぢや、全く以ていくら人民でもやり切れませんや。

幸兵衞　これ〳〵、誰もまだ前に其樣な流言蜚語なぞをした者はない。全く寢耳に水だ。本當と思へば誰しも寢耳に水と驚くところだが、悲しい哉、人々は無明の闇より覺めなかつた。ノアの此警告に耳を貸す者が天下に一人もない。皆なノアを鼻であしらつた。ノアは何をたはことを言つ居る。憐れやノアは氣が狂つた相な。彼もあんまり永いこと貧乏生活をするからだらう。貧乏のくせに子供ばかり拵へて、新婚以來十年の中にはや半ダアス生み付けた。一體あんなに子供ばかり製造して將來何うしておまんまを食べさせ何うして教育を授けるつもりか知らん。この頃は中學校も女學校も月謝は前金で一學期に五十圓づつもふんだくられるから、六人一度に學校へ行き出したら親父が倒さに成つて働いても到底月謝の代も稼げまいに。やれ〳〵氣の毒なものかな。それでノアもとう〳〵氣がちがつた相な。と。

福太郎　へへえ、御隱居、そりや一たい何方の事です。

幸兵衞　ノアといふ聖人のことさ。

福太郎　よく似た話もあれば有るものですなあ。私も新婚以來十年の間に子供が半ダアス出來ました。

幸兵衞　やれ〳〵、出來も出來たものだ。それでは貴公が貧乏ばかりしてゐるのも無理はない。君達夫婦は何もしないで子

供にかり落へてゐたものと見えるな。

福太郎　御冗談を仰言いまし。何處の世界に子供ばかりこしらへ様と志願して暮す人間が有るものですか。子供なんてものは、全く出物はれ物で知らねえ間に出來ちまうのでさ。

幸兵衛　しかし、よく生みも生んだぞ、まだ此先き何人くらゐ製造するつもりだい。誰にも遠慮するには及ばないから、どし／＼製造するがいいよ。被服廠や何かで大分人減しがあつた後だから、これから皆で勉強して早く補充する事だ。

福太郎　いやもう子供にはおくびが出るほどあき／＼しましたよ。私のところでは、この半ダアスこつきりで切り上げるつもりです。

富士子　何だか大變面白さうなお話ですね。さあ、お屠蘇はぬきにして直ぐにお熱いところをお一つ如何です。

福太郎　之は恐れ入りました。まだ此先き廻るところが何軒もあるのに、御隱居さんのお話が面白いものですから、つい長居をしすぎました。御酒はおあづけにしまして、一廻して參りませう。

富士子　何ですよ。今日に限つて、柄にも無い遠慮なんかなすつてさ。お婆さんのお酌ではお氣に入りますまいが、さあ、お一つ。これでも昔は鶯泣かせた体もあつたんですからね。

福太郎　では遠慮なしに頂戴いたします。

富士子　本當に何にも有りませんよ。極り切つたお正月の物ですよ。

幸兵衛　これは北海道から到來の數の子だ、これをやつてごらんなさい。鯡の腹には此通り澤山の卵が出來る。人間も之に肖りたいといふので正月の肴の中には屹度之を用ひるのだが、鯡は魚の中の福太郎さんみたいなもの。とんと子福者のところが似てゐるよ。

福太郎　時に先刻の子福者のノアとかいふ人の話は何うなりました。

幸兵衛　おゝ、その事、／＼、何といふところまで話しましたかの。

福太郎　ノアが洪水が來るとふれ廻つても、誰一人信じるものなく却つてノアを狂人あつかひにした、といふところまで伺ひました。

幸兵衛　さう／＼、そこでした。大森博士は地震學に從事するところ頗る多く、多い報告書を英文や邦文でのこされたのであ[illegible]だが、博士がそんな偉い人だといふ事も死んでから聞いたのでは後の祭り。生きてる間に博士のいふ事を能く聞いておいたら[illegible]北の方でも張合が出てもつと世人に[illegible]に[illegible]だらうに、

世間で用ひないから博士も多く請らず、遂に折角世界の學界に貢献するところの多き博士の地震學も、日本の用には少しも立たないでしまつた。さてノアの昔話だが、ノアは決して博士でもなければ學者でもない。世界の洪水學に何等貢献した事のない男だが、宣傳の方には實によくつとめた。よく宣傳したが世間は少しも應じない、全く馬の耳に念佛と聞き流し對手にしなかつた。さうする中に雨は降り出した、四十日四十夜小止みなく降つた、大海の水を傾けたかの樣に明けても暮れてもザア〱ザア〱雨の音だ。人足なぞ初めの中はいい事にしてサボつてゐたが、十日も降ると腹懸も股引も質屋へ預けねばならなく成る。緣日商人は愚痴の百萬だらを並べて空ばかり怨めし相に眺めて暮す。その位の雨なら何時の代如何なる國にもある事で、小野の小町にも出來る藝當だが、神樣のなされる事は之れくらゐでは治まらぬ。ザア〱ザア〱四十日四十夜、手放しで降りつづけた。水は世界に彌漫して世界は水の下に入つた。山々峯々こと〲く水の下に埋もれた。さあ、さういふ時に成つたら人間は何うなる。と思ふ。

福太郎　軍艦でも商船でもありつたけの船に乗り込んだに極つてます。さうなりや郵船會社の海員だつて陸よりや船がいいと、サボタージュは直ぐおしまひで、儲けたのは重役でせう。こないだの火事なぞと來ちや、そんな生やさしいんぢやありませんでしたよ。船に乗りや船に火がうつつて足元から焰がもえ上るんですからね。

幸兵衛　まあ、ききなさい。その時分まだ世界の人は唯も船といふものを知らなかつた。何とも顚んとも水に浮んで見える物とては、アララット山と申す高山の絶頂とノアの作つた箱船ばかり、實に濁流滔々として何方を向いても水より外にはない。

福太郎　富士山や日本アルプスは何うしました。

幸兵衛　その時分まだ富士もアルプスも多分無かつたと見える。兎も角も世界の人は洪水のために一旦は死に絶えた。

福太郎　何だ。詰らない話ですなあ。

幸兵衛　詰つても詰らなくつても、事實此通りなら仕方がない。だが、安心しなさい。これは比喩談だ。目にこそ見えね、恁ういふ洪水は何度も來た　そして舊時代の人々、舊時代の文物典章こと〲く堙滅し、がらりと變つた新時代が來た。洪水の引いた後の荒野へバラックが建ちはじめるのは間も無くの事だ。何も顚も活き〱して來る。ゆで小豆が繁昌する、牛飯が盛んに賣れる。それからだん〱天どんと成り鰻どんと成り花柳界まで活氣づいて來る。いつの新時代も皆此通りぢや。蒸

府といふ舊物が押し流された後へ出來た明治政府はバラック建てだつた。明治天皇は新時代の人として先頭にお立ちなされ、明治元年はゆであづきと牛飯の時代ぢや。

福太郎　へえゝ、皆さんが嚥かし腹を下した事でせうなあ。

幸兵衛　これは穢へ話だ。いかにも皆な腹を下した。腹を下して西郷隆盛も大久保利通も死んでしまつた。そこで明治十年以後が天どんと鰻どんの時代ぢや。

福太郎　へへえ、さうしますと二十年以後が一品料理の豚カツ時代といふわけですかね。

幸兵衛　いや冗談でなく一品料理だ。憲法發布議會召集保安條令、皆な一品料理の豚カツだ。と思へば間違ひなしさ。併し笑ひごとぢやないぞ。一品料理に舌鼓を打つた時代の人々にはまだ〳〵バラック時代の活氣が殘つてゐたぞ。そこで、私のいふのは今度の震災も之を天の警告と見るならば、ただ焦土の上にバラックを建てそれでもうそれだけだと思つたら、間ちがひだといふのだ。ゆであづきを食つて天どんや牛めしを食つて、ただそれだけで復興氣分に浸つたと心得たら了簡ちがひぢやといふのだ。今度は偶々震災と火災とがごつちやに成つて來て、思ふ存分破壞し去つたんだが、たとへ此大破壞――目に見えるところの大破壞が無かつたにせよ、目に見えぬ新時代は迫つてゐたのだ。何うあつても舊物は打ちこはれねばならなかつた。そして何うあつても新時代の表現は其後へ打ち建てられねばならなかつた。丁度其所へぶつつかつてゐたんだ。舊人は隱れ新人は生れ出でねばならないところ迄來てゐた。よしかね。けれども舊物が有つては邪魔に成つて、容易に新時代が生れにくい。然るに大災がそれを綺麗さつぱりにしてくれた。之は形の上ばかりと思つてはならぬ。心に於いてもその通りなんだ。たとへば貴公がバラック住居になる、すると心持まで前とは變つてくる。居は心を移すとは此の謂ひだ。

福太郎　飛んでもないところへ移したものだ。私はあきらめてはゐますが、成らうことなら燒けない前の方がよござんしたね。

幸兵衛　いいの惡いのつて言つたつてはじまらない。もう既に燒けちまつて無いのだから、それを云ふのは死んだ子の年さ。

福太郎　私もさう思ふから默つて寒いバラックに暖か相な顔をして座つてゐるのですよ。ただ痛快な事は今度はもう何んなにデカい地震が來ても大丈夫、ぺちやつと來たら下から屋根をぐいと差し上げてお目にかけやうと思ひましてね、私は時々寢てゐてトタン板の屋根裏を見乍ら、大地震め、もう一度來ねえ

かなあと言つてやるんですよ。そうしたら今度こそは御隱居の家は丸つぶれだね。もう一ぺん來た日にや山の手の家とて一たまりも有るまい。

幸兵衞　これ／＼何を言ふかい。それが燒け出されのバラック根性といふ奴だ。自分さへ滑されねば他人は何うなつても構はぬといふ。

福太郎　いいえ、他人は何う成つてもいいつてえんぢやありません。ただ一寸面白いだらなんて考へましたんで。

幸兵衞　いやな奴。まだバラックにゐるからそんなバラック根性が出るんだが、本普請が出來上つてそれへ渡まししてみろちやんと本普請らしい心持が生れて來る。

福太郎　それ迄お待ちなさいよ。

幸兵衞　まあ待つより外に仕方もない。待てば海路の日和ありだ。だん／＼に本普請が出來たら人々の心持も改まらうが、今のところはまあ妙なものだな。こないだも方々歩いてみたがバラックの店は食物屋ばかしだ。ただし淺草だけは佛壇や位牌を賣る店があつたのは、流石場所柄だと思つた。日比谷公園の中の食物店の多いことと云つたら、流石の私もあれには驚いたよ。

福太郎　全く何んなものでせうなあ。三文でも資本を持つた人間は皆な食物店をはじめます。かうして皆なそれが何うにか斯うにか利を得て生活が立つのだから不思議ぢやありませんか。あれで見ても實際江戸つ兒は食ひしん坊だと思ひますね。

幸兵衞　復興は先づ食から初まるが順序だらうから、格別不思議はない。生活の根本は食物ぢや。次にはシャツやオーバーセータアや股引足袋な。あんな店の多いこと、そこで初めて衣食足り、而して禮節を知るぢや。

福太郎　さうしてみると、禮節といふのは神樂坂や道玄坂で賣つてる品物と見えますね。食物の次に繁昌するのは彼所らですからねえ。

幸兵衞　衣食足りて後に享樂を知る、戀を知る、さて戀の中から禮節が生れて來る。

福太郎　こじ付けましたね。御隱居。

幸兵衞　何の之がこじつけなものか。禮節といふものは論語や孟子を幾ら讀んだからとて決して生れるものではない。衣食足りて享樂を知り享樂足りて禮節を知るぢや。

福太郎　旦那。うそばつかり云つてらあ。

幸兵衞　うそなものか。大工さんの震災前の生活を見ろ。世間の不景氣から仕事は少なく、賃銀も安いや。一日稼いでもいくらにも成らねえ。面白くもねえと思つて家に歸れば、女房も

面白くなさ相た顔をしてゐるな。そこで喧嘩だ。更小鉢が飛んで破れて又損の上塗りだ。然るに震災後の破落の生活ぶりを見ろ。大工さん／＼で何處でも大工さんだ。手間代は高く成る仕事は殖える、どんぶりの中は銀貨と札でがちや／＼だ。仕事を早く切り上げても誰も何とも文句の言ひ手はない。歸らうとすりや電車はべらぼうに込んでゐらあ。仕方がないから待つてゐる、ただ待つてもゐられねえからテント張りの天ぷら屋へ入つて一杯ひつかける、二杯ひつかけ三杯ひつかける。何うせひつかけ序でだてんで更にもう二三ばいひつかける。こんなでもう歸らう、家には女房が待つてらあ、と里心が付いてテント張を出ようとする時に、「いよう、熊兄い」と聲をかける者があちあ。見りや屋根屋の蜂公だ。まんざら知らない顔でもなく、時々仕事場で顔のぶつかる事もある仲だ「景氣は何うだい」と來る。おつき合ひで又一ぱい飲む。之れ禮節の初まりだ。

稲太郎　變な禮節も有つたものですねえ。

幸兵衛　なに少しも變なことはない。熊さんと蜂さん、何地らも元氣よく仕事の話が出る。ます／＼儲かり相な話なんで、前祝ひに之から神樂坂へくり込まないかと蜂さんが動議を提出する。熊は一寸躊躇する、蜂さんは一人者だ。一人もので景氣がよけりや藝者遊びも無理はない。併し俺には嬶もありがきもある。お多福にはちがひないが歴とした嬶左衛門尉の位に納まつた女が俺を待つてゐる。折角だが蜂さん、今日はちつと都合が悪いんだ。留守に親類の奴が來て待つてゐる、と態ふ斷る。之れ妻に對する貞節の初まりだ。人倫の初まりぢや。

稲太郎　私はさういふのは友達の交際を知らねえ奴だと思ひます。貞女は小學修身の本から教はつた事もありますが　貞男といふのは、ついぞ聞いた事がありません。

幸兵衛　それは誰もいふ事だ。蜂さんも矢張さういつて怒るんだ。親類の者なんか夜明けまででも何時までも用があるなら勝手に待たしておけばいい。友だちが此通り誘ふのに、まさか義理を知らねえ熊さんでもあるめえと云はあ。今時ケチにして金をためる事は流行ないよ、火事に成りや何もかも灰になる世の中だ。と云ふ。さういはれてみると、成ほど蜂のいふ事がもつともだ。俺はまさか十兩や十五兩の端た金を惜しんで斷るわけぢやねえけれど、と答へる、けれどつてそんなけれどは餘計なけれどだ。おめえ嬶がおつかなくつて遊べねえんだらうと蜂公は圖星を指すね。嬶なんて何だ、ぐづ／＼云つたら叩き出しちまひねえ、向ふが嬶左衛門の尉ならお前は亭主關門の位ぢやあねえか、と云ふ。蜂公の理屈は一々尤もなので熊は友情を重んじて神樂坂へ行く。之れ義の初まりだ。孟子に從へば之れ

道の終り也だ。神樂坂へ出かける前に、熊兄いは既に仁義を身に體してゐる。

福太郎　御隱居、そりや面白い理屈ですねえ。私らも心ぢや常にそんな風に考へるんだが、口に出ません。女房から外で遊んで來るのは愛が無いからだわと云はれると、何うも一言も無いところですが、今日は早速家へ歸つたら、此道理をきかせてやりませう。

幸兵衞　蜂公の案内で熊は神樂坂の待合へ行つた。日頃此邊を根城にして遊んでゐたブチブルジョアやサラリーマンが大災以來すつかり遠のき一時は火の消えた樣であつた此土地も、今や漸く職人衆のバカ遊びの爲めに復興氣分に向ひつつある事とて、女中たちも二人を下に置かないもてなしぶり、おなじみはと問はれて誰もないと云へば、では若い綺麗なところを呼びませうとて女中は電話口へ立つ。座敷を見廻せば仲々洒落れた作りで三尺ばかりだが床の間も有る。熊さんは之まで他人に頼まれてならば、ずゐぶん立派な床の間をも作つた經驗がないではないが、自分の住居には床の間はない。床の間の附いてる座敷で床柱を背中へ負つて大胡座をかいて脇側にもたれた大盡ぶりは今夜が初め手だ。蜂は蜂で座敷を見廻し乍ら、仲々いい部屋ぢやねいか、床の間の壁を見ろ、孔雀だぜ、釣壁の方は小笠原と來りや本物だが、こりや根岸とは何うしたわけだ、などと商賣柄、壁の方ばかり見てゐる。今晩は、と云つて入つて來た美形の水々しさ、とても新宿や品川の阿魔ッ子とは比べものに成らぬ。如何が、と云ひつつ媚を呈して德利に手をかけられたから、熊は驚いて座り直して盃を出したが、持つ手がふるへてガチ／＼鳴る。何うもこんな美人を自分如きが何とかするのは勿體なくて罰が當りはせぬかと思ひ、しきりに滿腔の敬意を表する。これ享樂より禮節を知り併せて謙讓を學ぶものといふ可しぢや。君子は溫良恭謙讓といふて、恭謙の心は尤も大切なものだが、近來君子と書いてきみこと訓むやうな世の中に成り、漢學復興を叫んでもアナクロニズムと嘲笑を估ふだけの時勢に於いて、熊さんと蜂公とが待合に入つて恭謙の心を起したりとはいかにも殊勝な話、商賣遊びの官吏だつたら表彰られる人物だぞ。

福太郎　ところでその熊さんはその後何う成りました。

幸兵衞　さあ、私もその先何う成つたか委しい事は知らぬが懷に金があり胸に恭謙の心を起した位だから、多分藝者からはいい旦那として迎へられ、お定りの夫婦約束でもすれば、それを實行するためには多勢子供のある女房を追ひ出し彼女を後妻に持つたかも知れぬ。さすれば信義に於いて缺くるところが無

い。

福太郎　へへえ、私もちと熊さんに肖かりたいものですな。私も信義の至つて固い方ですから。

幸兵衛　左樣、熊さんの其後の消息は知らないが、此所に燒け跡のガアドの下へゆで小豆の店を出して一儲けした男の話がある。

福太郎　へえ、又ゆで小豆ですか。

幸兵衛　さうだ。ゆで小豆も初めの程は盛んに賣れたが、復興氣分の勃興と共にだん／＼賣れ無く成つた。

福太郎　そいつは損をしたでせう。食物店もああ多くなると美人の姉妹軒とか何とか特別の景物が無いと誰も入りませんよ。

幸兵衛　ところが大ちがひ。大に儲けたところで小豆に見限りを付け牛めしをはじめた。

福太郎　また牛めしですか。それから一品料理のトンカツでせう。

幸兵衛　だまつて聞きなさい。何もさう食物ばかり商はんでも、儲かりさへすりや何をしてもよい。執鞭の吏といへども敢て辭せんやといふ意氣組みだ。

福太郎　そいつは豪儀だが、それだけ聞いたのでは私には何の商賣か分りません。

幸兵衛　分らないのも無理はない。執鞭の吏とは馬車別當だ。運送馬車を一臺借りて來て乘合馬車と掲示して燒跡のほこり道を驅け廻りお客を乘せる。之にも大に當てた。儲けた金でトタン板を買ふ。朝に之を買つて夕に之を賣れば死すとも可なり、の意氣を以て之でまた儲けた。遂にボロ自動車を一臺買ひ込んで乘合自動車屋を初め、又儲けた。萬事其筆法で行つて益々儲けた。商賣の形はさま／＼に變るが道は一つ。ただ儲けさへすればよいと思つて大に儲けるが、運の強い時は致し方ないもので、暴利はむさぼれども警官の目には觸れぬ。さうかうする中に世の中はだん／＼元に戻り、以前に增して花やかな大都會が生れる。新橋や柳橋も復活して飲めや唄への不夜城を出現する。世の中は再び震災前の華美に幾層倍する華美な生活ぶりに戻る。玄米の味もバラックの寒さも忘れる時が來る。その時には此男がガードの下でゆで小豆を賣つた昔を知る者もない。他人が之を知らざるのみならず當の自分さへ忘れてゐる。彼はその時分には幾つもの大會社の重役を兼ね大銀行を所有してゐる。彼が多額納税者として選ばれて貴族院に席を列するのも不思議ではない。彼は他の多くの大實業家に倣ひ年々多額の脫稅をする。この意味から云へば多額納稅議員といふよりも、むし

ろ多額脱税議員といふ方が至當なのであるが、何故か世間では彼を多額納税議員と呼ぶ。脱税が知れれば天下の罪人で、こんな不名譽はないが、それを敢て犯すところは勇だ。又富豪なみに妾みたいな女を方々に置き其母親から飼猫までも世話するところは仁だ。景氣のいい年には社員を殖して事業を擴げ不景氣が來れば遠慮なく馘首する。そして失業した社員たちにつくぐ浮世の苦勞を味はせ、人格修養の時間と機會とを與へるとは、之れ智あり仁あるブルジョアのやり方だ。かく型の如く智仁勇の三德を兼備した紳商と認められれば、勳章をも貰ひ又爵位をも授けられる。

福太郎　ゆで小豆屋も恐ろしい出世をしたものですねえ。私も一つその小豆屋にあやかりたいものですが、一たいその人は何のガアド下に店を出したのです。

幸兵衞　なあに、これは私の夢物語よ。そのゆで小豆屋が金持ちの族に列せられる時分には、また第二の大地震が來るのさ。

福太郎　へえ、又來るのですかい。地震の博士はもう當分の中決して大地震は來ないとか云つてた相ですぜ。

幸兵衞　さあ、それが少しも當に成らないんだ。學者は地震の後に成つてからいろいろ云ふのだからの。併し學者とて繪の申し子ではあるまいし、そんな事が前から明確に知れるわけがなし、凡そ想像が付いたからとて、そんな事を云つても若し來なければ人騷がせになるし、何うも困るさ。併しゆで小豆屋が成金華族に列せられる頃に大地震が又來る事だけは事實だ。私は斷言する。そして又火事だ、大火事だ、又ぞろ東京市は全滅だ。又ぞろ自警團騷ぎだ。又ぞろ被服廠だ。又ぞろ社會主義退治だ。

福太郎　それは又何うしたわけです。矢張何十年目かには同じやうな事が起らずにはゐないものですか。

幸兵衞　その豫防がして無ければ起るだらうよ。冬に成つてレウマチの起る女がそれを療治しなければ又次の冬にもレウマチが起る。それと同じだ。東京市民は此大地震に會つても少しも懲りてゐないと見えて、少しもレウマチの療治をしないやうだ。之では又レウマチが起らうではないか。

福太郎　と申しますと。

幸兵衞　何も彼も前と同じだ。復興氣分と云つても、それは革命氣分ではなく、それは一切復舊氣分だ。出來上つて見れば舊態依然たりだ。矢張慾の世の中だ。矢張金の世の中だ。矢張仁義禮智忠信孝悌の世の中だ。矢張地震地帶の上に累卵の危き都會を築くに過ぎない。福さん。貴公は當の川柳を知らないか。

福太郎　そんな物騒なものは存じませんな。

幸兵衛　雷は鳴る時ばかり様が付く、といふのぢや。天地晦冥にして電光紫に初めは遠雷おどろ〳〵しく次第に近づいて殷々轟々天柱くだけ地維裂けんとす、と來れば「今日の雷様はずゐぶん烈しく鳴るねえ」雷さまは落ちるだらうか」などと様づけにして話してゐるが、翌日には「何っだ、昨日の雷は大きかつたな」「お前、雷は嫌ひか、俺はあのごろ〳〵いふ音が大好きだ」などと鳴らぬ日は雷も呼び捨てにされる。地震も揺つた當座には遷都說まで出たが、餘震がだん〳〵弱くなると鐵筋コンクリートの屋根をスレートぶきにするならば遷都しなくも宜からうといふ事に成り、その餘震さへだん〳〵微弱に成り間遠に成ると地震は左迄恐るに足らずただ火事の用心さへすればいい家屋も木造ならば十分だ、萬一潰れても十軒に一人位しか死ぬものでない即ち五十人に一人くらゐの死人にすぎぬ、うんそれなら俺は大丈夫だ四十九人の生存者の中へ屹度入るだらう、といふ事に成る。

福太郎　では地震も揺る時ばかり様が付くの仲間ですね。

幸兵衛　地震も火事も戰爭も、其間だけ敬意を表されるが、咽元過ぎれば忽ち忘れられる。地震當時、遷都論に次いでは大東京市の建設が叫ばれ、種々理想的な案も出たが、一月たち二月たつと、理想論は漸次に斥けられて俗論が勝を制して來た。大公園の大増設は漸々乍ら小公園を三三増設するに止められ、道路の四十間は三十間となり二十間となる様なわけだ。

福太郎　いつそ三尺幅以内に成ればいい。

幸兵衛　それはまた何故かね。

福太郎　電車や自動車が通らないから安全で宜うござんすよ。大地震は五六十年に一度か二度でせうが、自動車や電車におどかされる事は毎日ですからねえ。

幸兵衛　さうすると、駕籠にでも乘つてゆつくり歩かれていいかの。それぢや、復古氣分といふものだ、あははハハ……。だが、矢張豪い人達が寄り集つて評議する事だから、東京市の復興も大方智仁勇の三德でやつてくれるだらうと思はれるが、之が何より心配ぢや。

福太郎　さうして皆な華族さんに成りますか。

幸兵衛　後から手盛の八杯で侯爵に成るものも伯爵に成るものもあらう。それは結構ぢやが、地震地帶の此東京から都を他所へうつさずして、平氣でここに再び都市を作り上げるところは勇と云はざるを得ぬ。遷都したなら從來の東京の地主は坪千圓も五百圓もする所謂土一升金一升の土地を荒野か畑にする他はないが、彼等地主に損をさせない爲めに地震地帶を去らさる

は仁ぢや、我身を殺して仁を爲すところの沙汰か二百萬の生靈を死地に陷れるを辭せずして地主を保護する仁政ぢや、さて數年若しくは數十年の後にまたも地震と火事とに襲はれて、燒け出されや死にぞこないの窮民が現はれた時に、飛行機が翔けり軍艦が動き食糧品を配給するやらバラックを建てるやら失業者の職業紹介につとめるやら、今度と同じ事を繰り返してやるところは智に非ざれども又仁ぢや、その時流言蜚語を放つて國民の刃に血ぬらせドサクサ紛れに危險思想とやらを持つ者共を退治せんとするは愚に似たれども、その責任を何うか恁うか遁れて罪をことごとく田舍自警團に負はせて白ばくれるところは智ぢや。この智仁勇三德を具備する人達のこと故、將來何んな出世をなさるやら、凡知を以て計り知る可からずぢや。

富士子　暑くついたのを持つて參りましたよ。いかがですね。福さん。お重ねなすつて。おぢいさん、喋つてばかりゐてお酌を何うなされたのですよ。

福太郎　いや、もう十分頂戴しました。

幸兵衞　おゝ、さうだ。私は話にばかり氣をとられて、酒をすつかり冷ましてしまつた。そつちの暑い方を貰はう。

富士子　奥さんはその後、お肥立はいかがです。お子さんたちも御丈夫ですか。

福太郎　ええ、皆達者です、病氣をしない位が私共の取柄でせう。

富士子　なあに、あなたが一つ御奮發なされば、燒けた位直ぐ取り戻しますよ。さうして却つて燒けぶとりといふ事になりますよ。

福太郎　ええ、バラックで皆さんがさういつてますよ。これからは一同臥薪嘗膽の覺悟で大に努力するんだつて。

幸兵衞　福太郎さん。臥薪と云へは、日本家屋はことごとく薪の寄せ集めだから、何んな覺悟で寢ても、殊にバラックなぞと來たら、臥薪に相違ないが、努力なんかはなさらぬがいい。

福太郎　努力はいけませんかな。ゆで小豆屋は努力しなかつたのですかね。

幸兵衞　ひどく小豆屋の話がお氣に入つた樣だね。小豆屋でも熊さんでも皆努力なんかしやしない。景氣といふものが大きくしてくれたのさ。努力なんかして溜めた富は、それこそ、忽ち散つてしまふ、努力してもしないでもゆで小豆屋は金持華族に成る時が來れば成るのだが、併し又努力してもしないでも失くなる時は失くなる。こないだも美術家が來ての話だが、努力といふのは展覽會で畫を賣る時の景物だ相だ。すべて努力だの社會奉仕だのといふ文句は、商品の景物だ相だ。

福太郎　ええ、その點は私どもとてぬかりなくやつて居ります。冬の賣出しに景品を添へるといへば、以前は何んなに少くてもライオンの袋入くらゐは差上げましたが、近頃は社會奉仕を景物にすることに成りまして、私共の仲間も大に經濟してゐますよ。

幸兵衛　さうかい、皆さんが其調子でやつて下さると、我々老人も大いに安心するが、智仁勇でも仁義禮節でも社會奉仕でも、南無妙法蓮華經でも南むまみ陀彿でも、宗旨に依つてそれ〴〵景物の名前は違ふが、之を眞正直にやられたら飛んだことに成る。貴公は夏の禹王といふ名君を御存知ぢやらう。知らんかい。之は堯舜に次ぐ支那の明君賢王だが、まだ舜の下に使はれてゐた時分、支那に大洪水があつた。

福太郎　おや〳〵、また洪水ですかね。之は恐れ入りました。

幸兵衛　その時禹は九州の水を治める爲めに、南船北馬、九年の間家に歸らなかつた、といふのだ。その間自分の家の前を過ぎても立ち寄る暇が無かつたといふ事で、それも誰が爲め、こと〴〵社會の爲めぢや、恐らく彼は社會奉仕の元祖だらう。

福太郎　矢張元祖となると違つたものですな。

幸兵衛　實際だ。そこで一番迷惑した者は誰だと思ふ。

福太郎　誰だか分りませんな、そんなに寒い社會奉仕をされて迷惑する人が有りませうか。

幸兵衛　そりや大有りのこん〴〵ちきぢや。細君と子供たちよ。何しろ禹が九年といふ間、更に家庭に寄りつかないんだから、第一に世間の人の口が煩さい。禹は內儀さんと喧嘩ばかりしてゐた相だ。それで官命をいい事にして家に寄りつかないんだ。それといふも結局細君がよくない人だからだ。けちん坊で嫉妬やきでおひきづりで向ふ氣が強くて、とても始末におへない女だ。多婬であるので禹はとても應じきれないで逃げ出したといふ說も出で、大評判、しかし何れも細君を批難する說のみ多いのは極端に男尊女卑の國柄である支那のことだから云ふ迄もない。夫人に對する批難はやがて禹その人に寄する同情と變り、禹は遂に王位までも讓られるほどの人望を得た。だから社會奉仕も普通選擧も商賣道具や景物くらゐの程度以上にやられると、斯ういふ犠牲者が出るからの

福太郎　ははあ、普通選擧も景品に成りますか知ら。

幸兵衛　そりや成るとも大成りだ。景品にするなら今が其時節だ。ここを通りすぎていよ〳〵實施の曉には、何でもないものに成つてしまふから、景品にするなら今の中だ。政府でも政黨でも鳴物入りで景品に使つてゐるのだから、商人ばかりが遠

慮して之を捨てて置くにはあたらぬ。早速用ひなさい。けれどもいよ〳〵實施に成つた曉には、普通選擧には税がかかるぞ。

福太郎　へえ、そりや話がちがひませう。普選にや納税資格は無いので御ざんせうに。

幸兵衛　なに有るさ。以前こそただだつたんだ。ただどころか一票が幾らかづつには成つたんだ。一票が鰹節に成つたりメリンスの風呂敷に成つたり園遊會に成つたりよ、ところが今度若しいよ〳〵普選實施といふだんに成ると、あべこべに手錢手辨當で演說くらゐきさに出かけずばなるまいよ。だからさ、之も商品に使はれてる今の中の方が結構なんだ。だが、その實施に成るのも時代の趨勢で、決して政治家どもの努力の結果でも何でもないんだよ。努力した奴らはむしろその反對派だ。時代の大勢に逆行する政治家の骨折りは、ずゐぶん大したもので憫然の至りさ。いよ〳〵實施となりや選擧權を人民諸君がルーブル紙幣をつかませられた樣に思つて、ずゐぶん道傍へ捨てるだらうよ。その時に成つちや三文にもならない。まあ〳〵ガード下のゆで小豆屋ばかり羨まないで、燒跡相應な商ひをしなさい。貴公は人相がいいから繁昌するよ。淺草の觀音さまへ行つて見たかい。

福太郎　へえ、こないだ參詣して參りましたが、盛んな人出で大繁昌でした。

幸兵衛　あれは燒けなかつたからといふので御利益があらたかだといふ評判に成つた相だな。

福太郎　そんな話です。

幸兵衛　それ見ろ、觀音さまは賢いや。若し觀音さまが社會奉仕をして、自分は燒けても淺草區は助け度いなんて云つて、自分が先きに燒けてその反對に淺草區が殘つて見ろ、誰も參詣するものはありやしないから。それで見ても、人は本氣で社會奉仕なんか分つちやゐないんだよ。本當の社會奉仕は大災當座二三日のことさ。これから一日々々と智仁勇の方へ復古してしまつたよ。

福太郎　だん〳〵苦しくなつて來るからでせう。

幸兵衛　さうさ、それ故智仁勇をふり廻して、苦しい世界を作らうといふ寸法なのさ。だが、矢張正月は何處かのんきらしい氣がするのう。そこで私もお勅題に因んで一首やつたぞ。

福太郎　一つ伺ひたいものです。

幸兵衛　新年言志が題で、

正月はやはり何やらお目出度し
　酒でものんで　無駄話せん
がきも來い婆さんも來い屠蘇くみて

生き殘りたる春を祝はむ

は何うだ。

福太郎　うまく有りませんなあ。私にもそんな歌ならやれますよ。

子供らが出來も出來たり半ダース
新婚以來十年の春

富士子　へえ、これは面白うございますね。この途も一首よみましたよ。

打ちそろひ　何はなくても屠蘇に餅
命冥加を祝ふ今日かな

さあ、もう一本あついのがつきました。

人間の弱さと強さ

相馬御風

○

九月このかた震災地から避難して來た大勢の人達とずつと一緒に暮してゐたので、此秋はたゞもう追ひ立てられるやうな慌たゞしさのうちに過ぎてしまつた。それが四五日前來て居た人達を一度に皆送り出してからといふものは、急に家の中がひつそりとなつて、何だかこれまでに經驗したことのなかつたやうな秋の靜さが感じられるのである。

今更のやうに自然の景物に心をとめて見ると、今年の秋もいつの間にかもう暮れかゝつてゐるのであつた。見える限りの高い山々にはすつかりもう雪が來てゐる。庭の木の葉の色も此の二三日急に著しく黄味を增して來た。田の稻もすつかり刈り盡されて、刈株から伸び出たひこばえだけが、鮮かなうちにさびしみのある緑の色を見せてゐる。暮れ行く秋の景物のうちで毎年のことではあるが、此の稻の刈株から伸び出たひこばえほど私の感傷を誘ふものは少ないのであつた。大地の上の草といふ草の殆どすべてが枯れかゝつてゐる。それだのに此の稻の刈

株から伸び出たひこばえばかりは、何といふみづ〳〵しい緑の色を見せてゐることであらう。すぐそこに寒さと暴風と霰と雪とが伴うた怖ろしい冬が攻め寄せて來てゐる。しかも、稲のひこばえだけはそんな事には少しも頓着なしに伸びられるだけ伸びやうとしてゐるのだ。

暮れ行く秋の大地のところ〴〵には、稲のひこばえの他にもなほ多くの新緑を見せてゐる草の葉がある。しかし、それらの殆どすべては春を待つて更に伸び上り、花を咲かせ、實結をばうとしてゐる類のものである。稲の刈株からのひこばえはそれとは全く趣を異にしてゐる。少くとも冬の來ることの早い此の地方では、稲のひこばえに花が咲いたり穂が出たりすることは、到底望み難いことである。

しかも、どの田を見ても、どの稲の刈株を見ても、鮮やかな緑色のひこばえがすく〳〵と伸び立つてゐる。すなほに勢よく伸び立つてゐる。人間に見るやうな運命に對する恐怖や不安などは、それには聊も見られない。無論自然そのものに對する疑惑の陰などは露ほどもない。それは春の早苗のそれ以上に勢よさゝうに伸びてゐる。「何といふ力だ、そして何といふすなほさだ。」時には思はずこんな感嘆の言葉を口走らずにはゐられぬほどに、それは氣持よく伸び立つてゐる。

○

ところで、私は今こんなことを書いてゐるうちに、ふと先頃東京にゐる友人の一人から震災後の狀況を報じて來た手紙の中に左の如き一節のあつたことを憶ひ出したのである。

『ニコライ堂の側の一度は枯れたと思はれた銀杏の大樹が、此頃になつて緑玉の芽を梢に飾りはじめました。赤い焼原の中でその緑の色と力は、一種の痛々しさと强さとを感じさせます。』

此の友人からの手紙の一節を讀んだ時にも、私は何といふことなしに「そこだ!」といふ氣がしたのであつた。人間同志おたがひに眺め合つてゐても兎角切實に感じられないやうな事がかうして自然の景物から思ひがけなく、ぴたりと感じさせられる場合の少くないのも、感謝すべきことの一つであるやうにも思はれたのである。

○

自然は容赦なく奪ふ。しかし、それと同時に自然はより多くを與へる。このたびの震災に於ても、私はその眞實を疑はない。人々は容赦なく奪はれた。しかし、それと同時に人々は如何に豐かに惠まれたことであらう。私はそのことを考へずにはゐられない。

多數の避難者達に私達は遇つた。いづれも多くを失つた人達であつた。大半は所有してゐた「物」の全部を失つた人達であつた。しかも、私達はそれらの多くの人達の殆ど凡てについて、失つた「物」に對するあきらめ難い執着といふやうなものを見ることが出來なかつた。意外にも人々は快活であつた。意外にも人々は恬淡としてゐた。「此人までが?!」と怪まれるほどの人々までがさうであつた。私達にはその事實が涙ぐましく感じられた。

私達は常に、時々刻々に失ひつゝある、奪はれつゝある。しかし、それと同時に私達は常に、時々刻々得つゝある、與へられつゝある。そして、如何なる場合に於ても、その與へられるものをひねくれずに受取り得る心を持つた人は幸である。玄米の握飯をも充分に嚙みしめて味ふ心を持ち得た人々の經驗に對して私達は頭を下げずには居らない。

「『人間といふ者は、環境に順應して、どうにでもなるものだといふこと』を今度といふ今度ほど痛切に感じたことはない」と人々はいふ。さうだ、一面に於て人間といふものはどんなにしてゐてもこれでいゝとは感じ難いものだ、しかし、他面に於て人間といふものはどんなにでもして生きて行けるものだ。そこが人間の本當の强味だ。

私達は總じて多くの場合自らをあまりに弱く見積り過ぎてゐる。『あんなにしたらやつて行けないだらう』とか『そんなことには堪へ得ないだらう』とか『そんなことになつたらどうしよう』とか「そんな目に遇つたらどんなことになるだらう」とか云つたやうに、私達は兎角さまざまな豫想をしては自ら取越苦勞をし過ぎてゐる。しかし、いざゝなると不思議にどんな境遇にも順應して行けるのが人間の常である。このたびの大震災の如きも、あれほどのことが想像出來ないとしても、少くともあれに近い災難を平時に豫想したとしたら、「なあに大丈夫だ!」と斷言し得る者は殆どなかつたであらう。しかし、いざさうとなつて見ると、案外に、いやむしろ不思議に、人間といふものは强いものだ。おそらく多くの罹災者達は自分といふものゝ意外の强さに驚いたことであらう。人々のさうした經驗の前に、私達は何となく頭が下るやうな氣がするのである。

（[illegible]）

あの地震のあつた日には私は私の住んでゐる町から二十餘里離れた或山奥の村へ講演に行つてゐた。地震は午前の講演が終つて午餐をしたゝめたばかりのところへ襲つて來た。頑丈な寺院の建物でさへも、殆どぢつとしてゐるに堪へないほどの搖れ方で搖れた。動搖は引續き二三回起つた。

「ひどい地震だつたね」
「こんな大きな地震は生れてから始めてだ」
「どこかひどくやられたところがあるのではなからうか」
　こんな會話が人々の間々に取交された。しかし、その場合誰があんな事が起りつゝあつたとは想像し得たものがあつたらう。やがて午後の講演の時刻になつたので、地震の話もそれぎりになつてしまつた。その日の講演は午後四時に終り、やがて私はその夜の宿に充てられた其村第一の舊家といはれるとある家へと案内された。その家は森々たる老樹に圍まれた昔の豪族の山莊とも云ふべき幽靜な邸宅であつた。廣い庭の隅々にはもう大概秋の花が咲き揃ひ、さまざまな蟲の啼聲が四方八方から流れて來るやうに聞かれた。稀に見る古風な建物のガランとした廣間の眞中に、湯上りの疲れた體を横へながら、私はやゝ暫く獨しづかに蟲の啼聲に聞入つた。山奥は流石にもう秋の氣がしめやかに漂つてゐた。
「何といふ快い靜さだらう」私はずからひとりごたずにおられなかつたほどに、私の心はしみじみと其靜さを味つてゐたのであつた。
　しかし、後から考へると、私がそのやうにして靜かな山奥の初秋の快さに浸つてゐた時は、震災地に於ける幾百萬となき人々が生きながら地獄の苦みにさいなまれつゝあつた時なのだ。しかも、交通の極めて不便な山奥の此村では　その翌日の午後になつてもまだそれについての何等の報道をも得てゐなかつた。久々で土を濕らせてくれた快い雨の中を村人達はその日も昨日と同じ講習會場にと集つた。しかも、誰一人前日の地震のことなどを口にするものがなかつたばかりか、人々は寧ろ二百十日の厄日が彼等の久しく待ちこがれてゐた雨ですますことの出來たのを、互によろこび合つてゐた。
「ありがたいお厄だつたのう」
「結構なおしめりで　まことにおめでたいことでござんす」
　こんな風に村人達は自然に對する感謝のおもひを語り合ふのであつた。六七月頃の雨續きと氣溫の低さとの工合では、今年の稻作はどうなることだらうといふ暗い不安がいたるところの農村に漲つてゐたのであつたが、八月一ぱい照りつゞいた上に二百十日の厄日もかうして無事に濟んで見ると、人々の心は急に新たな歡びに波うつのであつた。
　しかし、さうした歡びに心を躍らせながらも、人々はやはり自然に感謝することを忘れなかつた。
「よくしたものだ」
「ありがたいものだ」

こんな風に彼等は口々に自然の恩惠について語り合ふのであつた。

けれども此の土地の人々が斯うして自然の惠を語り合ひつゝあつたと同時に、震災地に於ては幾百萬の人々によつてそのもたらせる慘憺たる災害の爲めに如何に自然が呪はれつゝあつたことであらう。

後から私はこの事を思つて、今更の如く自然と人間との關係について何事かを考へずには居られなかつたのであつた。

○

このたびの震火災について『天譴』といふ言葉がよく人々の口に上つた。さう考へるのはいゝか惡いかといふやうな事まで論議されたりした。しかし、自然の所爲に對して人間がそれを恩惠と感じたり、又はそれを天譴といふやうに感じたりすることは、第三者から彼是論議すべきでないと思ふ。さう感じないで居られぬ人には、さう感じさせて置いた方がよく、さう感じたくない人にはさう感じさせなくてもよいのではないか。たゞしろ吟味すべきはそれが眞實感であるか否かであると思ふ。いづれにしても自分にとりての眞實と感じられもしないことを、他人に强ひるのはよくないことなのである。況んや自分がその難にも遇はないで居て、不幸な罹災者達に向つて大きな顏をして彼是言つたりすることは、怖ろしいことである。こんな事を私は思つた。

しかし、大天災の後では昔からきまつたやうにそれを天譴と感じた人が多かつたやうである。それで憶ひ出すのは文政十一年霜月の十二日の越後の大地震の後で流行したといふ瞽女唄である。瞽女といへば越後の特産であるやうに云はれてゐる盲目の女の唄うたひのことである。越後には此のゴゼと呼ばれる盲の女の唄うたひ今でも多くある。彼等は二三人づゝ組を成して村々町々を廻り歩いて家々の門に立つてさまざまの唄をうたふのを職業としてゐる。今日では多くは世間の流行唄ぐらゐしか唄はないが、以前は彼等獨特の一種の物語歌風のものを主としてうたひ歩いたものである。そのゴゼ達が文政十一年の大地震の後で盛にうたつて歩いたといふ地震の唄も、やはり一種の天譴說の宣傳見たやうなものであつた。私はその瞽女唄の寫しの保存してあつたのを、先頃私の友人に見せて貰つたのである。

瞽女口說『地震の身上』

天地開けて不思議をいはゞ、近江湖水に駿河の富士は、たんだ一夜に出來たと聞けど、それは目にもせぬ昔の事よ。数に不思議は越後の地震、聞くも語るも身の毛がよだつ、頃は文政十一年の、冬の霜月中ばの二日、朝の夜あけとおぼ

しき時分、どんとゆり來る地震のさわぎ、たばこ一服落さぬうちに、上は長岡新潟かけて、中に三條今町見附、夫につゞいて與板や燕、つぶす家數は幾十萬ぞ、さすやうつばり柱や桁と、背骨肩腰頭をうたれ、目鼻口より血を吐きながら……（コノ所文字不明）……手おひ死人は書き盡されず、數も限りもあらましばかり、親は子を捨て子は親を捨、可愛夫婦の中をもいまは、捨てゝ逃げ行く其行先は、焔もえ立ち大地がわれて、砂を吹き出し水もみ上げて、行くに行かれずたゞたずむうちに、風は烈しく後を見れば、火の子吹き立て火焔をかなた、あつやせつなや苦しやこわや、中に挾れや手足をはさめ、泣きつ叫びつ助けてたべと、呼べど招けど逃げ行く人も、命大事に見向きもやらず、覺悟々々と呼ばゝりながら、西よ東よ北南よと、思ひ／＼に逃げ行く樣は、實にきやうくわん大きやうくわんの、責もこれにはよもまさるまじ、今は此の世が滅してしまひ、彌勒出世の世となるやらん、又は奈落へ沈もしよか、聞くもおろかや語るも涙、經に祈禱に香花などで、せつな念佛となへて見ても、何の印もあらおそろしや、幾夜ゆるぎは少しもやまず、凡そ七十餘日の間、肝も心も消え入るばかり、親子兄弟顏見合せて、共にため息つき居るばかり、御大名には村上、新發田、與板、長岡、村松、桑名、會津、高崎迄其外に、御料、御陣屋旗元衆も、思ひ／＼に御手當あれど、時節柄とて空打ちくもり、雪はちら／＼（消字）、親や親類寄り集りて、大工いらずの掘立て小屋で、つゞれかむりて凌ぐとすれど、吹雪たち込み目もあてられず、殊に今年は大惡作で、米は高値諸色は高く、……（中略）……

是をつら／＼考へ見るに、士農工商掟にそむき、神を片つけ名聞後生、邪見けんどん心の儘に、利慾ばかりに世渡るものを、神の惠も佛の慈悲も、及び兼ねたる此有樣よ、譯はどうじやと尋ねて見るに、武士は武を捨て算盤枕、夫に習ふて地下役人も、下をしひたげおのれのおごり、昔小作の話を聞くに、葛を掘つたり稗茶をつんで、それで自分の命をつなぎ、收納作徳立てしときくに、今の百姓はそれとは違ひ、少し不作の年柄にても、検見願ふの拜借などと、上へ御苦勞田親へ對し、有るの無いのと言譯ばかり、其場其時濟みさへすれば、內の暮しは奢りの頂上……（中畧）……それに順じて町家の普請、たかへひくしやくせり合ひ故に二重たるきに銅卷いて、屋根のしぶき柱の丈は、丁度昔の二本の長さ、御殿廻りか宮拜殿か、地下の家作と見られぬ仕かけ、前を通るも肩身がすくむ、されば心は獄に劣る

いかな困窮の年柄にても、收納家賃の用捨はあらず、少し下ると追ひ立てなど〻、用をば上よと小前をせめる、慈悲も情もけし粒ほども、無いはことはり渡世の道理、深い考知らざる故ぞ……それはさて置き此の近年は、儒者の風俗つく〳〵見れば、黒の羽織に大小差して、詩だの文だの講釋など〻、鼻の高いは天狗もはだし、錢のないのは乞食に劣る、晝夜大酒道樂つくし、己ばかりか弟子共までも、金をつかへば風流人よ、道を守るが浴物など〻、宜か然らずの錢金まいて、書物讀み〳〵身上をつぶす、わけて近頃寺樂の風義、淸僧淨師と勿體らしく、着たる衣は白粉くさく、光るお袈裟は判身のにほひ、尼さん衣は子持のにほひ、……(中略)……わけて惜いはお醫者でござる、隣村へは馬か駕籠もたせ、知れた病氣も呑み込み顔で、少し容體わるいと聞けば、人にゆづりて己れははづし、……きかすさはらぬ藥の數を、たんとのませて衣服をかざり、禮の多少で病氣をつかひ　窮家貧家は十日に一度、金になるのは毎日四五度……(中略)……さればつら〳〵考へ見るに、士農工商儒佛も神も、口說〇〇違ひはあらじ、天の戒め今よりさとり、忠と孝との二つの道は、己れ〳〵の職分守り、上に居る人下憐れみて、下に居る人上敬へば、常にけんやく慈悲心深く、奢る心を愼むならば、かゝる稀代の難事はおらず、かゝる困窮はあるまいものぞ……(後略)……

文政十一年子十月

作者　桑津非文字大夫
板元　氣儘屋隙右衞門

此唄の作者は何人であるか知るよしもなく、又彼自らも地震の災厄に罹つたのであるかどうかもたしかめ得ないが、しかしかうした好ましくない文句をならべた歌を多くの盲の女達が村々町々の門毎に唄ひ歩いた有様を想像すると　何だかあまりいゝ氣持がしない。當時の人達は——殊に震災土地の人達は——それをどんな氣持で聞いたであらうか。

このたびの震災に於てもそれを天譴と感じた人のあつたことそのことについて、私はかれこれ云ふ資格はない。しかし、果してそれを自分の身の上について眞實心の底から「これ實に我身にとりての天譴なり」と痛感した人がどれ程あつたらうか。他人の身にとりてゞなく、眞に自分の身にとりてゞある、一般世間にとりてゞなく眞に此のおのれにとりてゞある。要するに何人にとりてよりも、此のおのれにとりてが大事である。

自分も同じく災厄に罹つた人が他人の上にあてはめてそれを云ふのはまだよい。しかし、自身全く災厄に罹らずにゐながら

多くの不幸な人々に對して天譴よばゝりをすることは、弱い心の私達にはどうしても出來ないことである。

○

そにしてもこのたびの震災は、何といふ美しい人間愛の泉をいたるところに湧き起らせたことだつたらう。鐵道各驛に於てその土地々々の人達によつてなされた熱情のこもつた避難者救護の狀況を見たゞけでも、私達はこれまでにこんなことがあつたらうかといふ氣がした。震災のやゝ詳しい情報が一たび傳るや、いたるところの村々町々では期せずして驚くべきほどの同情が湧き起つたのであつた。此事は震災地にばかり居た人達にはよくわからなかつたかも知れないが、地方へ避難した人達にはおそらく永久に忘れ難い印象を與へたことゝ思ふ。震災地からは遠く離れた邊鄙な私達の地方に於てすらも、各驛に集つたその町その村の人達は殆ど不眠不休の活動を幾日も幾日も續けたのであつた。一椀のあたゝかい味噌汁にも、どうにかして不幸な人々をよろこばせたいといふ多くの人の眞情が籠つてゐたのであつた。それればかりでなく震災地へ送る爲の食料品、衣類その他の必要品、さうしたものが各町村の家々から徴發的に集められもしたのであつた。全くあのやうな事はこれまでには大戰爭の場合に於てすらも見ることの出來ない事であつた。

かうした狀況の中にあつて私達の實際にぶつかつて特別に深い感激を與へられた一つのエピソードを、私はこゝに是非書き添へて置きたく思ふ。それは九月下旬の或日私達の町の臨時救護事務所――そこへは私も手傳に行つてゐた――に起つた事件である。その頃は此事務所では主として各戸から集めた米、味噌、衣類などの荷造りと發送とに力を集めてゐた。そこへ一日一人のあまり身なりのよくないお婆さんがやつて來た。そして受付の者にたづねた。

「地震で困つてをんなさる人さん方へ少しばかりお金を寄附させていたゞきたいがでござんすが、どういふものでござりやんせう。」

その頃はまだ義捐金募集には着手してゐなかつたので、受付の者は一寸返答に困つた。それと見てとつて他の委員の一人が横から言葉を挾んだ。

「金の寄附の方はまだ手をつけてゐないんだが、折角のことですから、どうぞ遠慮なくお出しください。」

だが此の「遠慮なく」といふ言葉の奥には、どうせ大した金額でもなからうから手數ではあるが……と云つたやうな多少好ましくない心持のあつたことは明らかであつた。しかし、お婆さんの方ではそんなことに頓着なく、「それでは」と云つて懐中

から大切さうに取り出して一枚の紙幣を窓口へ差出した。ところがその紙幣を一目見るなりそこに居合せた係りの人達の顔面には一様に驚きの色が現れた。

「これはお婆さん、百圓札ぢやないか」と委員の一人が頓狂な聲でたづねた。

「ハイ、百圓でござりやす」

「これをお前さんが寄附してくんなさるといふんだね。」

「ハイ」

こんな馬鹿げた會話が委員とお婆さんとの間に取交された後で、お婆さんは改めて事情を語つた。

「實は私の悴が去年の二月三日に親不知で大勢の人達と一緒に雪崩で死にまして、その時世間のお方々のお慈悲で私共はありがたいお救ひにあづかりました。その時そのお金の中から百圓だけ京參りの路銀にでもするやうにといふことで私に貰つて置きました。それをそのまゝ持つて上つたやうなわけでござります。」

お婆さんの話は大體そんな意味であつた。此話を聞いて始めて人々は合點が行つたと同時に、その場に居合せた誰一人として涙ぐまない者はなかつたのであつた。百人に近い屈強な青年達が社會奉仕の一念に驅られて怖ろしい吹雪と寒さとの中をも厭はず鐵道の除雪作業に出て、その時親不知で雪崩に遭つて無殘な死をとげた事は、まだ私達の記憶には新たなことである。お婆さんはその時慘死をとげた一人の青年の老母であつたのだ。

このたびの大震災に際して震災地では、無論數限りない美しい事件があつたに違ひない。しかし、遠く離れた此の土地にすらもかうした涙ぐましい事件がどれほど多く隱されてゐるか知れないのである。

誰やらが云つたやうに「さうした氣持も汎んの一時だけで、ぢきに忘れられて行つてしまふ」かも知れない。そして「ぢきに元のまゝになつてしまふ」のかも知れない。しかし、矢張り誰かゞ云つたやうに「さう云つたやうな心の狀態に時々人間が置かれるといふことは無意味なことではない」ことも爭はれない事實である。

私達はあの際――少くともあの際――自分の身を遠く危險から離れた場所に置きながら、我こそ何もかもわかつてゐるといふやうな態度で徒に天譴を豪語したえらい人達よりも、かうした田舍の無智なお婆さんのカケ値なしの美しい心持と行爲との前に、本當に頭が下るのである。

○

だが考へて見ると、私達のその日その日の生活の安全などゝ云ふことも、何だか雨の中を傘をさして歩いてゐる程度の安全に過ぎないやうな氣もする。私は時々雨の日に傘をさして歩きながら、「誰が考へ出したものかこんな細い竹を組み合せてそれに薄つぺらな紙を貼つてそれで雨を凌がうといふのはよくよく手數のかゝつた無造作だ」といふやうなことを考へる。さう思つて見ると、誰もかもが自分の身のまはりの少しばかりの間に雨を落させないやうにして歩いてゐる、傘をさした格好が何となく可笑しいやうに眺められる。少ばかり強い風が一吹きぶつと吹いて來れば、もう其の紙ばりの防雨具は何の用もなさないのではないか。それでも人々はいかにも「これさへあれば大丈夫だ」といつたやうな格好で歩いてゐる。しかも、その道具をこしらふのにそれはそれは一通りでない手數をさへもかけてゐる。何とかしてそれを格好よく美しく見せやうとしてさまざまな加工さへも施されてゐる。

考へて見ると全く可笑しいほどあぶなつかしい藝當だ。だが、そんな事はすつかりわかり切つてゐるにも拘らず、傘はすたらない。なるほどそれは不完全にはちがひない。しかし、「何が一體完全だ」から考へて見ると、萬全でないものは傘ばかりではないことになる。たゞその萬全でないものを萬全だと信ずるところに危險が伴ふだけだといふことにもなる。「なあに、いざとなつたら肌まで濡れたつてかまふものか」さう考へてゐる者には、萬全でない傘もまづまづ役に立つ道具である。萬全でないから、不完全だからといつて、傘をさゝないで雨の中をわざわざ濡れて歩いたら、それこそ馬鹿の骨頂である。

このあひだも或友人とその話をしたのであるが、その時その友人は云つた。

「さう云へば誰やら古人の句に「濱までは海士も傘さす時雨かな」といふやうなのがあるぢやないか」

なるほどそれは面白いと私も思つた。そしてこんな事をも二人で話しあつた。

「震災地の復興だつて、まあそんなものぢやなからうか。どんなに工夫を凝らしたからといつて、これでもう大丈夫だ、どんな地震が來ようがどんな火事が出ようがもう大丈夫だ、そんな完全な復興が出來ようと思へないからね。しかし又それだからといつて、どうでもいゝやではわざと傘なしに雨に濡れて歩くやうなものだしね。」

「そこだよ、要するにいざとなつたら濡れたつてかまふものかといふどん底の覺悟が何より安全の土臺といふもんだ。さう云へば、良寛和尚があの文政十一年の大地震に遭つた後で與板の

山田杜皐といふ人に送つた手紙の中にもそんな事が書いてあつたよ。「しかし、災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候死ぬ時節には死ぬがよく候これはこれ災難をのがるゝ妙法にて候」つてね。と云つたところで吾々の様な凡夫は其覚悟だけでは生きて行けない。そこが又人生の妙味のあるところなんだらうよ。」

○

震災の印象について書かれた吉田絃二郎君の文章の中に、「何十年来見たことのない美しい空が焼け滅びた都會の殘骸の上に横つてゐる。氣の毒な人々の死骸を葬つてしまつたら、私たちはしばらくこの美しい空を見るがいゝ。」といふ一節のあつたのに、私はひどく心を撲たれた。

それにつけて憶ひ出すのは、先年私の七歳になつた男の子が物心ついてから最初の東京見物に行つて來ての話の中で

「お父さん、東京には星がないね。」

と云つた警句である。その時私は子どものその警句がひどく氣に入つたので重ねてたづねて見た。

「どうして東京に星がないんだらう。」

それに對して子どもは即座に答へた。

「それはね、お星さまは東京みたいなにぎやかなところを嫌ひだからだよ。お星様はやつぱしとつちのやうなさびしいところが好きなんだ。」

私達は重ねてその警句に驚かされた。そして子どもといふものは、大人達の氣のつかないうちにも、何かと自然の現象に注意してゐるものだなと、つく〴〵感心したりしたことであつた。吉田君ではないが、このたびの震災後東京に住みなれた人達も、さすがに空の美しさや、星の美しさに始めて目をとめたことであらう。

○

それから又地方から震災後の東京へ行つて來た或人の書いた文章の中に、夕方とあるバラックを覗いて見ると、そこにはもうほの暗い蠟燭がともされてゐて、その薄暗い明りの下に一家五人が顔を集めて何か物語つてゐた、見ると娘の膝の上に、愛くるしい小猫が丸くなつて咽喉を鳴らしてゐた――といふやうな事の書いてあつたのを讀んだ時にも、私は或一種の感動を與へられた。

そしてその事が又私にずつと以前今私達の住んでゐる町が大火に罹つた折の一つの記憶を喚び起させた。その時の大火で私達の町の半ばは焼けてしまつたのであつた。人々は殆ど皆家財と共に海岸の砂濱に避難してゐた。その人間やら家財やらゴタ〳〵と混雑してゐた砂濱で、曉の光がほの〴〵と東の空からさ

し初めるや否や、どこからともなく晴れやかなカナリヤの鳴聲が聞え出した。それは誰かゞ家財と一緒に持ち出して來た小さな籠の中で鳴いたのであつた。その瞬間疲れ切つて仆れて居た大勢の人達が、一度にむつくと起き上つて、

「オヤ、どこかでカナリヤが鳴いてゐる！」

から一齊に叫んのだであつた。

私は今その記憶を喚び起させられたのである。東京のバラックに猫のゐたことに心を惹かれた其人はこんなことをも書き添へてゐた。

「あの焦熱地獄の中を――荷物は愚か我身一つを持あぐね、親子さへ見捨て合つて、命から〲逃げのびた中を……猫一疋の生命を憐んで、連れて逃げた其の慈心を思ふと、急に尊敬の念が胸をついて、一種の云ひ知れぬ涙が湧いた。此の家族の上には、やがて惠まれた幸福の生活が必ず來ると思つた。」

なるほどさうした慈悲心の現れとしての涙ぐましさも其事柄から感ずることが出來るけれども、それ以外私にはさまざまの複雑したことが考へさせられたのであつた。

○

おひ〱寒さが押しよせて來る。震災地の人々の不自由な生活が、しみじみおもひやられる。だが、人間は案外強いものでもある。バラック生活も日數がたてば、そこには又案外味のある住心地も出て來ることであらう。今住んでゐる私達の町の如きも、幾度となく町の大半を燒き盡されたほどの大火に罹つた。最近では十三年前のが最もひどかつた。その時から今日までの永い間、いまだに假小屋住居をつゞけて來てゐる者も少くない。さう云ふと私自身もまだ家の半ばはその時の假小屋のまゝの中に住んでゐる。農村では假小屋でなくても、まだ疊を敷かないで暮してゐる人達が非常に多い。

一日も早く震災地の復興されることは、無論切念に堪へないことである。しかし、何事もさう思ふやうに早くは運ばないであらう。此際私達の第一に祈りたいことは、災厄にかゝつた多くの不幸な人々の上に、人間といふものはいかなる境遇の下にも順應して行けるだけの強みがあるといふ眞理がいやが上にも實證されるやうにといふことである。

それは兎に角、この度の大災厄を經て生命の全さを得た多くの人々は、おそらく自らの強さに驚いたことであつたらう。「よくもあんな中を逃げられたものだ」とか「よく堪へられたものだ」とかいふ言葉を、私達は多くの避難者の口から聞いた。一方から考へると人間ほど脆いものはない。しかし、他方から考へると人間ほど強いものはない。

○

つひこの間東京にゐる或友人から來た葉書に、「武藏の荒原で原始的住宅を造るのに忙しい人々」と題するスケツチが畫いてあつた。そしてその畫面の中に赤とんぼを追ひ廻してゐる一人の少年の姿が點出されてゐた。それは私にはたまらなく面白く感じられた。又荻原井泉水氏の『大震雜記』と題した文章の中には、或雜踏してゐる家族に交つて隣の子が地震の眞似事をして喜んでゐたといふ事が書かれてゐた。それについて荻原氏は「子供は強い、どんな不幸でも災厄でも、子供ばかりは打ちのめすことが出來ない――私はそんな事も考へさせられた」と書いてゐた。

かうしたことは私達の町が先年海嘯と云つてもいゝ程の大激浪に襲はれて今にも全滅しさうになつた際にも、私達の經驗したことであつた。その時の暴風浪は三晝夜つゞいた。山の方からは洪水が押し寄せて來、海は今にも町全體を呑み込みさうに見えた。礫を混へた瀧のやうな雨、家をゆるがす暴風……さうしたすさまじさの中に、私達は電燈もつかない、ランプもともすことの出來ない、眞暗な怖ろしい二夜をあかした。ところがさうした中にあつても、小供だちだけは第二日目からは、何の恐怖も感じないげに家の中で遊んでゐた。夜もすや／＼とよく眠つた。

私達はそんな忘れてゐた記憶までも此の機會に鮮かに喚び起されたのであつた。

○

今日もすさまじい暴風雨だ。小さな私の家などは船にのつてゐるやうに、ぐら／＼搖れつゞけてゐる。もう今日あたりは山奥の村では雪が降つてゐることであらう。毎年十一月の中旬から翌年の五月までの永い間雪の中に暮す村が此地方の山奥には多くあるのだ。雪の降らない地方の人達から考へたなら、どうしてそんな所に安んじて住んでゐるのだらうと怪まれるかも知れない。しかし、そこゝは又そこだけの特別の味のあるものである。人々はその味はひを求めもし、創造もして、それ相應の生活を營んでゐるのだ。

人間は弱いやうで、案外強いものだ。

夢の古都南京

村松梢風

一

一九二三年の五月一日だつた。其の晩の十一時に上海を發つ列車で私達は南京へ向つて旅行することになつた。

朝のうち西華德路（シハトロ）の洋品店へ行つて、手袋だの、靴下だの、襯衣だのを買調へて來た。それから午後になるとY子は、彼女の持つてゐる限りの服だの、帽子だの、靴だの、いろんな物を取り出しては比べて見た。そして時々、何んにもする事がないので窓際でぽかんとして煙草をふかしてゐる私の方を向いては相談を掛けた。

「兎に角簡單におしよ、旅行は身輕に限るからね」

私は彼女があれもこれも持つて行きさうなのでさう言つて注意した。けれども彼女はなか〳〵きかなかつた。たかが二三日の豫定で出掛ける旅行に過ぎないのだが、假りにも泊りがけで旅に出るといふことは彼女に取つても此の上海へ來て以來初めての經驗だつたので、彼女はすつかり有頂天になつてゐた。南京や蘇州の、それらの土地の美しいであらうところの自然だの歴史的意義だのに關しては、彼女は其の實餘り誘惑されてゐるわけではなかつた。只、知らない土地へ行つて見るといふだけの漫然とした好奇心と、それから其の土地の人々の眼に自分自身がどう看られるかといふこととの大きな興味とが彼女の心を浮はつかせてゐるのだつた。だから、出來るだけ人目に立つやうに、美しく裝はなければならなかつた。着替への服や帽子の類を一と揃ひに、頸飾や耳飾、化粧道具、骨牌の札、吸ひ馴れてゐる紙卷煙草——そんな物を鞄へ一杯詰め込んだ。

「さあ、これで汽車へ乘るばかりだわ」

まだ日も暮れないうちから彼女は帽子を冠つて、マントまで着込んで、嬉しくて溜まらない容子で私の前へ來て大きく兩手をひろげた。嘗て舞臺で習つたさういふ表情や動作を彼女は折り〳〵部屋の中でもやるのだつた。

紺地にエジプト模樣の刺繡をした伊達な散步服、幅の廣いリボンの附いた燃えるやうな麥藁帽子、さうして襟と袖とへ天絨鵞を附けた美しい灰色のマント――それらはみんな彼女の好みで作らせたものだつた。派手好みの此の土地でも彼女の身たりは往來の人が振り返らずにはゐなかつたほど派手だつた。

私達二人が初めて相知つて同棲を始めてから今日迄に廿日ばかりの日數が經過てゐた。私達は今ではお互ひに自分の性格を相手の前に曝露するやうになつてゐた。彼女は非常に感情が强くて我儘者だつた。其の點では私と似たり寄つたりであつたから、二人を合せることは、火に火を點じ、鐵に鐵を擦り合はせるやうなものであつた。趣味の上では一致することもあるし、全然相容れぬ正反對の場合もあつた。そして兩人とも矛盾だらけな性格を具へてゐる點に於て共通してゐた。さういふわけだから私達の間には今から既に多少の葛藤が生じないではゐなかつた。些細な事から感情を害し合つて二時間位物を言はないやうなこともあつた。そんな爭ひも現在の此の生活に對しては却つて適度の刺戟を與へてくれるやうなものだつたが、併し所詮は私達の戀愛關係といふ奴が、油に點じた火のやうなものだから、急速度に燃えるだけ燃えてしまへば跡には白い灰の一片すらも殘らなくなるのはわかり切つたはなしだ。

直ぐ近所に住んでゐるS君といふ友人の家で晩餐を御馳走になる約束がしてあつたので其の時刻にY子と二人で出掛けた。S君は日本の或る大新聞の特派員だつた。夫婦暮しで支那人のボーイを二人使つてゐた。S君と私とは私が上海へ初めて着いた日から極く親しい仲になつてしまつたが、其の前から細君は福州の親戚へ行つてゐて留守だつたので、細君とはつい五六日前に歸つて來てからの知合だつた。S君は支那劇の通で、新聞記者といふよりは詩人タイプに近い人物であるところへ、近頃は可成り神經衰弱の氣味もあつたから、日常の言動が餘程常規を逸してゐるやうなこともあつた。夫婦仲が圓滑に行かないのも其の原因の一つだつた。S君は口癖のやうに自分の細君に對する不滿不平を私達に訴へるのだつた。で、私とY子は、自分達こそさもさも幸福であり、そして經驗家であるかのやうな顏をしては、其の問題に就いて無遠慮な無責任な提言やら忠告やらをS君に對つてしなければならないやうな立ち場に置かれてゐた。處が最近細君の方とも親しくなるに及んで、彼等の夫婦關係が圓滿を缺くのは大體に於てS君の責任であることが私達に解つて來た。何故かと云へば、彼は猫の眼よりも劇しく心の變る男だつたから。

「どうも彼女（あいつ）の鼻が僕は氣に入らないんだよ、何んて幅の廣い

鼻なんだらう。それから彼女の顏を見ると僕は牝獅子の顏を聯想させられるんだよ」

とS君はよく細君の造作の棚下しをして、それを當人の前でもづけづけ素つぱぬくのだつたが、さう言ふ彼自身の鼻は赤くてぶくぶくしてゐて、其の顏は何處となく牡鹿のやうな感じがあつた。

「鹿よりは獅子の方が位が上だわよ」

蔭でY子はさう言つて笑つた。

出發迄は時間があるのでS君夫婦が私達の方へ遊びに來た。S君の細君はY子からお化粧の仕方を教はる約束だつたので、Y子は細君を椅子に掛けさせて美顏術師のやうな恰好をして其の顏へ舞臺風の厚化粧を施した。青い粉で眼の周りへ陰影を付けたり、睫毛を染めたり、眼張りを入れたりすると、細君の顏には俄かに物凄いやうな惡の表情が現はれた。

「不可ないね、何んだか怖い、矢つ張り此奴にや似合はないよ」

S君は誰にともなく憤慨するやうな調子で叫んだ。

「見慣れりやいゝんだが……これで髮の卷き方を變へて洋裝にすりやちつとも可笑しくないことよ」

「此奴なぞが洋裝したつて似合ふもんですか……」

それからS君は例に依つて細君が猪頸だことの、猫背だことの、鰐足だことの……。

細君は大きな姿見の前へ行つてきまりわるさうに自分の顏を映して、兩手で頰をおさへた。Y子は其の背後に立つて名優のやうな誇らしげな容子をしてゐた。

出掛ける前に下婢（アマ）を呼んで「今夜これから南京へ出掛けるから二三日留守になる」と言ふと、下婢は達者な英語で、

「南京――？　南京は非常に美しい處でございますよ。あなた方は何んといふ宜い旅行をなさるでせう」

と表情を用ゐて言つた。そして玄關迄鞄を搬んでくれた。S君夫婦に送つて貰つて、停車場迄は三丁位だから歩いて行くことにした。無論私が重たい鞄を手に提げて。

おぼろ夜だが靜かないゝ晩だつた。此の邊の住宅街は人通りも殆んど無かつた。私はつい二三日前の雨上りの晩、十二時頃からY子を伴れて散歩に出て今夜と同じ道をそゞろ歩きした時のことを思ひ出してゐた。それは雲間から水の垂れるやうな月が出てゐて、地上には低く白い霧が流れてゐた。私達は、どちらからも餘り口を利かず緩やかな歩調で歩いた。其の落ち付いた何處か夢幻的な夜の氣分を味はふとする心持が無言の上に互ひの胸に通じ合つてゐた。Y子は私の腕を確りと抱えてゐた。

「日本へ歸るのは厭になつた——」

と、Y子が言つた。

「何故——？」

「だつて、日本へ歸つてしまへば、こんな氣持は味はへないんだもの——」

それきり二人は默つてしまつた。日本の土地には、私の歸國を明け暮れ待ち焦れてゐる妻や子供達がゐる。私の手で養はなければならない澤山の家族がある。私はどんな場合にも妻子や家族を見捨てる心にはなり得ない。三人の男の兒達を大きくするためにならば、たとへ自分の生涯を藻屑よりも無意味にしても悔ゐはしない。あはれな妻よ、お前はお前の良人の爲めにどれ程澤山の苦勞を嘗めて來たことか……。

其の晩自分の部屋へ戻るとY子は父親の側にゐる小娘のやうに素直になつて、此の頃自分できれ地を買つて來て仕立てかけてゐる部屋着の袖などを縫ひ始めた。

私は一體彼女をどうする了簡なのだ——？　彼女は私と一緒に日本へ歸ると言つてゐる、あれ程平常嫌つてゐる自分の生れた國へ、乞食をしても歸り度くないと言つてゐた日本の都へ——。どうせ碌でもない別れが來ることは知れきつてゐる。あの極り切つたやうな大詰の場面——喧嘩口論、嫉妬、邪推、それから金がなくなる、愛想盡かし、不貞腐れ、醜い夫婦の姿。あゝ、思つて見るだけでも厭なことだ。だが、どうして私は彼女と別れる心になれないだらう——？

發車時間には卅分位間があつた。私は南京迄の二等の切符を買はふとした。するとY子が一等でなければ駄目だと言つた。

「二等なんか支那人だけ乘るんだから穢くて仕方がありやしないわ」

「そんな事はありませんよ、二等で澤山ですよ、谷崎君なんかもさう云つてました、支那の汽車は二等に限るつて」

とS君が言つた。

「外人でも二等へ乘る人があつて？」

「乘りますとも、大概の人が二等ですよ」

S君は最初から二等へ乘ることを私に勸めてゐたのだつた。私は初めて乘る汽車のことで見當が附かなかつたが、S君の言ふことの方が確かだし大體汽車賃が半額で濟むのでY子を押し付けて到頭二等の切符を買つてしまつた。處が、プラットホームへ着いてゐる列車の側へ行つて見ると二等室は可成り混んでゐた。そして乘客は全部支那人だつた。Y子は駄々をこねだした。

「厭だわ、こんなチャンコロばかしの中へ這入つて行くこた」

彼女は戸口から覗いて見たゞけで引つ返してしまつた。

「今日はどうしてこんなに混んでるのかしら、何時も此の汽車は空いてるんだが」

S君は言ひ譯をするやうに言つた。Y子は廊下みたいな處へ立つてブリブリした容子を見せてゐた。何んでも此の二等室へ乘れと云ふならいつそ南京行は止めてしまふと言ひ出しさうだつた。

一體Y子は何んに限らず平素口で言ふ事と實際とが一致しない女だつた。彼女は平素ブルヂョアを罵倒して自分は何處までも無産者階級の味方だと言ひ〳〵した。貴族趣味を嫌つて平民主義に共鳴してゐた。其の癖彼女自身は極く贅澤で氣取り屋だつた。併し今の場合としては私も實の處彼女を此の室へ連れ込んで衆人環視の的にするのは氣の毒でもあるし、初めての旅行をできるだけ樂しいものにして置き度い私自身の心持をも傷つけられさうな氣持がしたので、一等の方へ乘り替へることにした。車掌が來たのでS君に其の交渉をして貰つた。

廊下の横に附いてゐる小さな室へ這入つた。一間四方位の部屋の中央に細長いテーブルが造り附けに附いてゐて、兩側はソファーになつてゐた。電燈が暗くて陰氣だが、其處なれば合客はなかつた。

「向う迄二人つきりで行けるわよ」

Y子は機嫌が直つてにこ〳〵してゐた。

「僕も旅行がしたいな、仕事をするのが厭になつた」

とS君はクサ〳〵するといつた風な言ひ方をした。S君夫婦はプラットホームへ出た。其のあとへ、中年の支那人と廿歳位の藝妓風の女とが這入つて來て私達の前側の席へ並んで腰を掛けた。彼等は先客の私達に一寸會釋をした。彼等も矢張り二等から乘り替へた客だつた。合客が出來たことはあてが外れたけれども、さすがにどちらも品の惡くない男女だつた。男は廊下へ出てプラットホームへ來てゐる澤山の見送り人とめい〳〵に話しをしてゐた。女は鶯のやうな聲音で廊下にゐる男に向つて何か言つた。男は出たり這入つたりしてゐた。發車間際になると女も廊下へ出た。私達も其處へ行つて

「ぢやあ行つて參ります」

「お大事に行つてらつしやい」

たゞ、S君夫婦と言ひ合つた。間もなく汽車は暗い郊外へ向つて走り出した。

私達と前の男女とはお互ひに好奇的な眼を注ぎ合つた。

男は卅七八位の年配で、痩せぎすで、頭が禿げかけた、溫厚な容子の商人風の男だつた。女の方は丸ぽちやで愛嬌のある顔

立ちだつた。彼女は確かに上海の一流の藝妓であることは、何處となく上品な容子や立派な身なりに依つて判斷することができた。

男は不意に支那語で私に話し掛けた。一語も解らなかつた。すると今度は名刺を出して私に呉れた。私も名刺を出した。彼は朱――何とか云ふ名で、字は晋侯、安徽蕪湖の人で、某商館の總支配といつた片書きを有つてゐた。彼等も私の名刺を手に取り合つて不思議な物でも見るやうに眺めた。私はふと氣が付いて手帳と鉛筆を出してテーブルの上で筆談を始めた。晋侯さんは鉛筆を取つて私に何處へ行くと訊いた。南京へ行くと答へると、南京から其の次ぎは何處へ行くと尋ねた。私は南京を見物すれば直ぐ上海へ歸るのだと答へた。すると今度は「先生來弊國做何商業」と訊かれた。事が少し面倒になつて來た。私は中學仕込みの怪しい漢文で答へた。

「僕は文筆を業とする者だが、三月に來貴國へ來て、諸所の名所を見物したり貴國の人情風俗の研究をしてゐるのです」

向うの藝妓も多少文字を知つてると見えて、私が書いて渡す度びに首を伸ばして手帖の上を覗き込んでゐたが、其處へ來ると解らなくなつたと見えて例の鶯の聲で男に何か質問してゐた。男は靜かな聲で早口に說明してゐた。すると藝妓は「はあ〳〵」と言つて合點き乍らチロ〳〵した眼遣ひをして私達のなりを見た。翡翠の耳飾が其のたんびにぶら〳〵動いた。それから暇潰しに暫く筆談を續けた。女の名を訊ねると「李彩貞」と晋侯さんは書いた。藝者はハンケチを口に當てゝ「ホ、、、」と笑つた。

「一寸いゝ藝者だわね、一品香あたりへ來るのとは違つてゐるわ」

「當り前さ、持ち物を御覽よ、上海でも乾度有名な藝妓なんだらうよ。で僕が觀察する處ぢやあ、此の男女は可成り永い關係だよ、男が商用でちよい〳〵上海へ來てゐるうちに馴染を重ねたんだね、で今ぢやあお互ひに深く思ひ合つてゐるもんだから男も到頭決心して今度綺麗に身請けをして自分の故郷へ連れて歸らうといふ事になつたんだ」

「支那の小說によくそんなのがあつてよ、それからどうなるの？」

「まだ先が分るものか。併し、日本と異つて妾を置くなんて事は罪惡でも何んでもなくつて寧ろ妾の數の多いのを誇りにしてゐる國だから心配は無いのさ。だから先刻も停車場へ大勢見送りが來てゐたが、あれも詰まり一つのみえで、ぢやあ是れで當分會へないがお前も精々晋侯さんを大事にして無事に暮した

いと云つて主に失敗の方の知り合ひの人達が送つて來たのさ」

「何んだかあてにならないね、だけどさうとして置いてもいゝわ。ぢやあ私が一つ此の人達を占つて遣らうか？」

Y子はトランプの札を並べて戀愛の占ひをすることが上手だつた。彼女が獨りでそんな弄びをしてゐるのを側で見てゐると私は以前見たことのあるマダムXといふ活動寫眞のヒロインを思ひ出すのだつた。南米の殖民地か何かへ流浪して行つて淪落のどん底に沈んでしまつたマダムXが、カフエーのテーブルの上でトランプの札で占ひをしてゐる其の悲惨な末路がやがて十五年廿年將來のY子の運命でありさうな氣持がした。けれども汽車の中のつれ〴〵の慰みにはいゝ遊び事に違ひなかつた。其處で私は晋侯さんに向つて

「私の妻が貴君方の運勢を占つて上げるさうです」

と例の筆談でやり始めた。私の言葉の意味が十分に徹底しないやうだつた。併し二人はY子が何事を始めたのかと好奇心の眼を据え込んで見てゐた。年齢を問ふと、晋侯さんが私と同年の卅五歳で、李彩貝が廿一だと言つた。Y子は大眞面な表情をして札を切つたり並べたりした。暫らくそんな事をしてゐた後彼女は私の方を見て言つた。

「困つちまつたわ」

「何だ――？」

「いゝのが出ないんだもの――どうしても駄目だわ。あんたの観察とは大分違ふんだから――二人とも見掛けはよさゝうだが判らないものね――大體此の人達はねえ、初めの頃は男の方ばかり熱心で女は一向氣がなかつたのよ、つい近頃迄さうだつたの。それに此の女は存外脆いらしいわ。そこで、とにかく一緒になれたんだよ。すると女が元來生眞面目なだけに今度は此の方が本物になつてしまふといふ形なんだが……」

「結構な事だ、言ひ分は無いやね」

「黙つて終ひ迄お聞きなさいつてば。處が、さうなつてから男の方から故障が出るんだよ。男が浮氣をするかも知れない。末が不可ないわ、離ればなれになつちまふわ」

「そいつはどうも弱つたな。併しまあお終ひの處だけ一寸色を直すんだね」

私は好い神のお告げを知らせる神主のやうな物々しい容子をして、好い加減な文句を並べて晋侯さんに見せた。無論「李先生は賢意に富み、李夫人は頗る貞淑　琴瑟相和し、家庭圓滿、子孫繁昌疑ひ無し」といつた風に念入りにお目度くした。晋侯さんは嬉ゝ乍ら然に極りの悪るさ　な　をした。そして「違ふ〳〵」といふ風に手を振つて見せた。李夫人が何か聞いたがそ

れには答へなかつた。

それから四人は互ひに顔を見合つて何んの隔意もなく「ハ、、、」と聲を立てゝ笑つた。私達の間には急に強い親しみが加つて來た。それは言葉に依つて現はされるもの以上の、心と心とを結び付けるやうな好感だつた。

私は支那へ旅行して可成り多くの支那の國の人と接近した。政治家學者や藝家といつたやうな方面から、僧侶教員學生商人勞働者、或ひは上流婦人藝妓賣春婦乞食。勿論深い交際もあれば路傍一過の緣に過ぎないのもあつた。併し、大體に於て私がそれらの人々から與へられたところの印象は「親善」であつた。それは場合に依ると日本人に對するよりもより以上の親善を感じることが多かつた。時期は恰も排日運動が熾烈を極めてゐる最中だつた。上海では數回街路の示威運動が行はれた。過激な政治家は日本人を驅逐せよと言つて街頭で叫んだ。「不承認廿一條、回收大連旅順主權」と書いた宣傳ビラが全市中に貼附された。茶館へ行つても賭博宿へ行つても彼等は排日を口にしてゐた。日本の官憲は極度に神經質になり、新聞紙は日毎に形勢の惡化を傳へて邦人の單獨外出について不氣味な警告を與へた。さういふ際だつたけれども私はお構ひなしに何處へでもノコノコと出掛けて行つた。排日運動の中心だと云はれゝ大學へ見學に行つたり、苦力の集まる一ぜん飯屋へ這入つたり、淫賣屈へ泊り込んだり、眞夜半頃に市中を迂路ついて歩いたりした。けれども、絕えて一度も自分の身邊に危險の迫つたことを感じたことはなかつた。否、私は私の前を通り過ぎたところの數限りない支那人の眼に反感や憎惡の陰を認めたことは一度も無かつた。有名な政治家は日本の政策を攻撃したけれども私に對しては親切であつた。支那人の店で買ひ物をすれば、日本人の店で買ふよりも遙かに安くて物がよかつた。若しそれ花街へ足を踏み入れるに至つては、到る處で「トンヤン、チョーカ、ホレシー」日本のお方、御容子がいゝわ）と叫んで絕大の歡迎と好意とを示して與れるのであつた。新世界大世界の如き支那人ばかり集まる娛樂場へたつた一人の日本人である私が這入つて行つても、彼等は莞爾として私に席を讓つて與れるのであつた。排日は言ふまでもなく政策(ポリシー)である。個人としての支那國民の感情の內部に吾れ〳〵日本人に對する愛好の念が多分に含まれてゐる事は疑ひない。少くとも日本人が支那人に對して拂ふところの友情と敬意は、彼等のそれに比べて甚だしく不足してゐることを私は感じずには居られなかつた。政策は政策である。個人的に、吾れ〳〵日本人は支那人に對してもう少し善い友達にならなくては不可ないのである。

Y子は一番簡單なるトランプの仕方を李彩貞に教へた。しまひに男二人も仲間にはいつてやり始めた。

莫迦に暖かいと思つたら何時の間にか雨が降り出してゐた。

二

眼を醒まして見ると、カーテンの隙き間からうつすらと朝の光線が差し込んでゐた。Y子は空氣枕を當てゝよく睡つてゐた。前側の二人も横になつて睡つてゐた。ぼんやりした電燈が點つてゐた。私は窓を明けて外を見た。

雨が止んで外にはしつとりと霧が流れてゐた。鐵道線路から一丁位離れた處に餘り高くない山がうねつてゐた。らくだの脊のやうな草山が幾つもつながつてゐた。山の裾を一筋の道が通つてゐて、道の側らにはところどころに石門が立つてゐる。それは墓の門だつた。緑の樹木に包まれた農家、稻田、桑畑。

Y子も前の二人も起きなかつた。私は一時間以上も獨りで窓外の景色を眺めてゐた。

農夫は畑へ出て耕作を始めてゐた。淺い小川の中へ馬を乘り入れてゐる男もあつた。窖のやうな石造の家が密集してゐる村落にはあたりに水澤があつて、水際には楊柳が茂つてゐた。

晋侯さんが先づ眼を醒ました。彼は私に向つて一寸頭を下げて、それから煙草を吸ひ始めたが、時計を出して見て、窓の方へ頭をやつて睡つてゐた李彩貞の柔かい手首を取つて引き起した。女のはれぼつたい顔が夜見たよりも美しく見えた。

私はY子を揺り起こした。

「もう南京へ來たの？」

「まだ〳〵、併しいゝ氣持だから一寸起きて外を御覽」

其の時分にはしつとりと濡れてゐる野山へ朝日があたつてゐた。

「ちよいと、山があるのね、まあ何んていい氣持だらう！」

彼女は窓際へ寄つて飽かずに山を眺めてゐた。

「あたいは山を見たのは半年振りなんだよ、日本を離れたつきり今日迄山といふものにお目にかゝらなかつたんだわ。上海で暮らしてゐて、何んだか變だ變だと思つてゐたの、だが、考へて見ると山を見なかつたせいだわ、今山を見た時直ぐさう感じてよ」

彼女は山國の靜かな都會で生れて其處で廿頃迄暮したのだつた。

ボーイが熱い茶を持つて來た。晋侯さんはボーイに何か命じた。すると珈琲を四つ持つて來てめい〳〵の前へ置いた。

「何か食べようか？」

「食べてもいゝわ」

私はボーイに命じてトーストにハムエッグスを持つて來させた。

汽車は七時卅分に南京へ着く筈だつた。私達はそろ〳〵仕度を始めた。其處へボーイが片付けに來ると晋侯さんは小さな銀貨や銅貨を混ぜて勘定を拂つた。私も自分達の分を拂はふとすると、ボーイが手眞似で珈琲と茶の代金は晋侯さんが拂つて呉れたから要らないと言つた。私は食べた物の代金だけ拂つて、晋侯さんに向つて「有難う」と支那語でお禮を言つた。

軈て、彼方へ城壁が見えて來た。城壁は恰も山脈の如く蜿々として果しもなく續いてゐた。それは私が生れて初めて見る雄大なる光景だつた。

「此城廓何城乎」

と私は晋侯さんに尋ねた。すると晋侯さんは鉛筆を持つて

「此即南京城」

と答へた。

私の胸には譬へ難い感激が滿ちて來た。數千年の過去へ貫く夢の幕が切り放たれたやうな氣持がした。

見渡す限り、さして高からぬ山丘が起伏してゐた。城壁は高くなり低くなりして走つてゐた。汽車は其間近くを通つた。城壁の外側には運河のやうな濠があつて、其の邊りには人家が密集してゐた。城内にも丘陵が聳えて見えた。樓閣の反りを打つた屋根が見えたりした。

私達は道伴れの二人に對して感謝の辭を呈したかつたけれど手帳を取り出すのも面倒なので默つてお辭儀をした。すると晋侯さんも李彩貞女も同じやうに禮を返した。私達は此處で別れたら最早二度と相見ることはなからう。併し私は何時迄も彼等の事を忘れないであらう。

汽車は停車場へはいつた。晋侯さんは毛布で包んだ荷物を自分で提げて先きに降りた。李彩貞も勢よく隨いて行つた。私達は人々の後から出て行つた。停車場の建物は小さかつたが、此處で全部の客が降りてしまふので可成り混雜した。

驛前の廣場へ行くと馬車と人力車が澤山出て客を呼んでゐた。私達は寶來館といふ日本旅館の宿引きをめつけて其の馬車に乘つた。馬車は、丸石を敷いた町幅の狹い通を無闇に驅けた。野菜の市場らしくどの家の店にも青物が並べてあつた。

旅館は割りに近かつた。けれども其の家は思ひの外貧弱で何んの落ちつきもなかつた。私達は二階の座敷へ通されたが、矢鱈に居心が惡かつた。

「厭な宿ねえ、宿場の飲食店みたいぢやないの」

「それよりヒドイや。だが外に日本人の宿屋は一軒も無いさうだから仕方がないよ」

「弱つたねえ」

私達は疲れた顔を見合つて寂しく默り込んでしまつた。南京のイリユージョンがすつかりぶちこわされてしまつた。

さうしてゐる處へ女中が茶菓子を持つて來て

「お泊りでございますか」と言ふ。

「さうです」

「御用事ですか、御見物ですか」

「見物に來たんだよ」

「それぢやあ本店の方へおいでになつたほふが御便利てす。あちらは家も廣いし、それに此處は城外ですか、御見物の場所は大概城内にあるんですから」

「其所迄どれ位あるんですか」

「二里位もありませうか。併し馬車でしたら一時間で參ります」

何の事だ、二里も手前で宿を取つたのだ。早速馬車を雇つて城内へ行くことにした

ごたごたした狹い町を暫らく走ると、眞つ直の大通へ出た。眞正面に壯大なる城門が現はれた。馬車は城門を通り抜けた。入口の處に兵隊が二人劍附き鐵砲を持つて立つてゐた。

城内へ這入ると四圍の景色が一變して來た。丘陵が起伏してゐるかと思ふと、青々とした麥畑が遠く延びてゐた。馬車は柳の並木の間を通つたり、美しい竹林の脇を沿つて走つたりした。非常に大きな朱塗りの樓閣があつた。沼澤の岸には幾本かの柳が枝垂れてゐた。畑には農夫が働いてゐた。可成り大きな山があつた。頂上には樹木が茂つてゐて、其の間から薄紅い壁の古代の建物が現はれてゐた。

「何處に南京の街があるの?」

Y子は不思議な處へ來たやうな顏をして言つた。

「さあ何處にあるのかな――」

道路に沿つて兵營があつた。下等の飯屋が澤山あつた。飯屋には農夫や苦力が一杯這入つてゐた。併し何處迄行つても市街らしいものは見えなかつた。

「街なんか無いんぢやないの?」

「無い筈はないさ、何處かにあるんだよ、南京と云へば少くとも人口幾十萬といふ大都會なんだもの」

「さう云へばさうね、だがあたいは城内と云へばぎつちり家が混んでる處だと思つてゐたら、是れぢや野原ばかりね」

「是れでも昔明の國の都だつた時分には城内には家がぎつちり

あつたのだらう。それが度び度びの戰爭で燒かれてしまつたのに違ひない。

ところどころに古代の邸宅の跡かと思はれるやうな處があつた。巖丈な土塀が續いてゐたりした。追ひ追ひ家並みが多くなつて來て幾分か街らしくなつて來た。玩具賣りが籠に玩具を入れて、二つ三つ取り出して手に持つて大道の際で賣つてゐた。Y子は支那の元始的な玩具に非常な興味を有つてゐて、上海にゐても眼に付くと買ひ集めた。だから彼女は眼敏く玩具賣りを目つけて馬車を停めて買はふと言つたが、

「後におしよ、乾度方々にあるから」

と言つて私は止めさせた。饅頭を賣つてゐる店が何軒もあつた。眞つ白な大きな饅頭から息が出てゐた、私が其の饅頭を買ひ度いと言ふと、今度はY子が止めた。

「後になさい、乾度向うにもあるから」

漸う目差す賓來館へ着いた。其の邊はまだ場末町だつた。日本造りと支那造りとを折衷した建物で、粗雜で落ちつきは無かつたが家は可成り廣かつた。それが南京に唯一軒の日本旅館だつた。

表二階の八疊の部屋へ通された。部屋の入口で靴を脱いで疊の上へあがるのだつた。部屋の前の板敷きの處には、宿の主が骨董の蒐集家だとかで棚の上に古い陶器などが澤山並べてあつた。

S君から紹介狀が貰つてある五味さんといふ人の處へ電話を掛けると、五味さんが電話口へ出て、早速こつちへやつて來てくれると言つた。一時間ばかり後に私は其の人の訪問を受けた。

五味さんは、黑い立派な支那服を來て中折帽を冠つてゐた。卅位の年配だが、一寸見ると日本人とは見えなかつた。外國語學校の出身で、支那へ來てから六年になるさうだ。

「こつちへ來てから二年ばかり村長さんの家へ下宿して實用の支那語を習ひました。どうせ支那へ來たからには純支那式の生活をしようと思つて、近頃家も支那風に建てました、後で一寸僕の家を見て下さい」

五味さんは餘程支那化してゐた。字は斤伯と云つて、支那人の間では伍斤伯で通つてゐると云つた。南京在住の日本人は現今三百人位しかない。一と頃は八百人位あつたのが近年減つてしまつたのだ。日本人の娛樂機關がないのは寂しいけれども、靜かで、物價が安くて、住み慣れてしまへば非常に生活の氣樂な土地だと、斤伯さんは言つた。

「今日は幸暇ですから御案内しませう、南京で第一の名所は何

んと云つても明の孝陵ですが、丁度半日位でいゝ處ですから其處から見物することにしませう」

斤伯さんは持つて來た地圖を展げて私達に其の位置を說明した。

「秦淮といふ處は何の邊です？　よく秦淮に畫舫を浮べと云ふから、其處も見度いですね」

「此の河が秦淮です」斤伯さんは地圖で河の處を指して、「藝妓屋のある處は此の邊ですな、秦淮は夜がいゝ處ですから歸途に行きませう、まあ東京で云へば淺草見たいな處ですが、あれ程の事は無論ありませんよ。併し今日は東嶽廟の祭ですからあの邊は大分賑やかでせう」

私達は少し早い晝飯を食べて、馬車に乘つて宿を出た。宿から十丁位も先へ行つた處に五味氏の家があつた。廣い往來に向つて高い土塀が築いてあつて、門には「五味公館」といふ表札が打つてある。其の邊にはさういふ風な邸向きの家が多かつた。私達は馬車を降りて一寸立ち寄つた。表の庭には鷄だの山羊だのが遊んでゐた。それは木造の純支那建築だつた。斤伯さんはまだ獨身者で、支那人のボーイを使つて暮してゐるのだつた。

再び馬車に乘つた。道はあちこち折り曲つた。軈て滿洲屋敷といふ處を通つた。其處は滿洲の旗人の屋敷のあつた處だつたが、今では畑になつてゐた。これから少し行くと明朝の宮城の跡へ出た。宮城の跡には煉瓦だの瓦だのごろた石だのが一面に散らばつてゐた。煉瓦の門がわずかに殘つてゐたけれども、餘りの荒廢さで昔をしのぶよすがもなかつた。

內濠と思ふ濠で二三人釣りをしてゐた。向うの草原では水牛が呑氣さうに獨りで遊んでゐた。

「長髮賊の亂の時に燒かれてしまつたのださうです」

と斤伯さんは言つた。

馬車は城壁の方へ向つて畑の間を走つた。城門の近くになると、見すぼらしい民家がごちや〳〵と並んでゐた。床屋、鍛冶屋、飯屋……穢いなりをした貧相な男や女、餓えてゐる子供、油を揚げる音、蠅の群――それは、世にも情無い世界を見るやうに思はれた。

大きなトンネルになつてゐる城門を通り拔けた。其の長さは三十間餘りあつた。其の門をば「朝陽門」と呼ぶのだつた。

城壁の外側には天然の湖が濠のやうに周つてゐた。湖の岸からは地勢が段々上りに上つて、幾つもの丘陵が綠の波濤を描いて、其の向うに高い形の秀れた山が聳えてゐた。斤伯さんは遙かに其の山を指して、

「あれが紫金山です。孝陵はあの麓にあるのです」
と言つた。うしろを振り返ると、齒形になつた城壁が益長くひろがつて見えて來た。城壁は、眞赤の太陽の爲めに紫色にぼかされて、姿を湖にうつしてゐた。恐ろしいまでに夢幻的な光景だ。
「五味さん、此の城壁は一體どれ位長さがあるんですの？」
とY子は斤伯さんに訊ねてゐた。
「七十二淸里です。ですから、日本の里數に直すと十二里になりますね」
と斤伯さんは答へた。なだらかな坂道へかゝつた。すると道ばたにゐた大勢の乞食がワイ〳〵囃し乍ら車の後押しを始めた。さうして眞つ黑な手を遠慮なく馬車の中へ突つ込んで錢をねだつた。銅貨を摑んで投げて遣ると彼等は馬車から手を離して鷄のやうにつゝき合つて拾つた。二枚も三枚も獨りで拾ふ奴もあれば、野呂馬で一枚も拾へない奴もあつた。すると拾ひ損くなつた奴は再び馬車を追つかけて來て取り付くのだつた。仕方がないから又撒いて遣つた。それでも拾ひ損くねた奴は、根氣よく馬車にくツ付いて來て聲を限りに泣き叫んだ。
「蒼蠅い乞食だな。五味さん、此奴は何處迄ついて來るでせう？」
「さうですね。一里位は平氣でついて來ますよ」
驚いて錢を投げて遣ると、乞食は忽ち喜色滿面で其の錢を拾つた。
道の兩側に巨大な石像が並んでゐた。駱駝、象、獅子――其の他にも得體の知れない動物の像が二つ宛道を挾んで向き合つてゐた。象が一番大きくて二間位の高さがあつた。それから先へ行くと、文官と武官の石像が四つ宛立つてゐた。
間もなく孝陵へ着いた。私達は馬車を降りた。幅の廣い坂を登つて行くと正面に門があつた。門の左右には紅い色の土塀がめぐらしてある。其處で又もや乞食の群に悩まされた。今度は男女大人子供取り交ぜて三四十人位で網を張つてゐた。
陵の建物は、奥へ〳〵と幾棟も建つてゐた。それは言ふまでもなく明の太祖の陵である。何處も彼處も甚だしく荒廢してゐた。堂の中で瓦の破片などを賣つてゐた。
一人の女乞食が、何處から潜つた來たのか陵の中へ這入つて來て蒼蠅く私達に附き纒つた。斤伯さんが叱り付けても容易に離れなかつた。そして何やら分らぬ事を繰り返し〳〵喋つた。
「五味さん、一體此の乞食は何んて言つてるんですか」
「一錢下さいつて言ふんですがね、言ひ草が圖々しいぢやありませんか、門の外だと大勢に呉れなければならないけれども、

此處だとわたし一人で濟むからあなた方も得だらうと云やがるんです」

「へえ、忌々しい奴だな、すつかり弱點を知つてやがる」

其の利己主義の女乞食を一錢與へて追つ拂つて奥へ進んだ。石段の中央だけが平面になつてゐて、それには龍が彫刻してあつた。昔は其の上を皇帝が歩いたのだと言つて斤伯さんが說明した。一番奥には赤煉瓦で築いた大きな塔があつた。塔の形は四角で丁度箱を置いたやうに見えた。背後は山だつた。私達は塔の下部に明いてゐるトンネルを潜つて背後へ廻つた。雜木が立つてゐる山で山鳩が啼いてゐた。

塔の上に登ると、脚下に幾棟かの建物を見て、此の前方には無數の丘陵がうねうねして展開し、遙かに城壁の周圍を圍繞してゐた。廣野の眞ん中に點々として石門や石像が立つてゐる。それは雄大を極めた光景だつた。

私達は塔の裏の涼しい木蔭へ行つて憩んだ。斤伯さんは其處で面白い話を私達に聞かせた。其の一つは、此の塔の上の殺人事件だつた。

「去年の春頃のことでした。一人の女學生風の女が此處で殺されてゐたのです。其の前日の夕方男の學生が二人と女學生が一人、三人伴れで來たのを番人は確かに見たさうですが、歸る時男ばかりだつたかはつい見掛けなかつたと云ひます、多分女を殺した後で山の方から逃げ去つたのだらうといふことでした」

「犯人は捕まらないのですか」

「捕まるものですか」

斤伯さんは涼しい顔をして答へた。それから彼は又思ひ出したやうに、

「もう一つ妙な事がありましたよ。それは、此の裏山を一里程奥へはいつた處に紫霧洞といふ寺があるのです。是れは三年程前の事ですが、秋の頃僕が獵銃を持つて此の山へはいつた序でに、どんな寺だらうと思つて初めて行つて見たんです。すると山裡の上り口の處に日本の女の下駄が一足脱いであるぢやありませんか。あの表附きの下駄がです。私も不思議に思つたので物好きに這入つて行つて案内を乞ふと、出て來たのが卅幾つ位の紛れもない日本の女で、日本の着物をきて日本の帶をしめてゐました。相當の美人でした。で、一寸話をしてお茶をよばれたりしてゐる處へ可愛らしい女の兒が顔を出したりしました。其の女の生んだ子なんださうです。其の時僕は深い話も聞かず其の儘歸つてしまつたが、あんな山の中の寺に日本の女が住んでゐるといふのはどうも不思議で何時迄も疑問が解けなくてゐました。するとそれから一年ばかり經つてから其の女の素性が

分りました。女は以前下關と云つてあなた方の宿のある附近の地名ですが、其の邊にゐた醜業婦で、或る支那人と馴染んで夫婦になつたさうです。私が寺で見かけた女の兒は其の間に出來た子だつたのです。處が、亭主の男といふのがなかなかの惡人で、阿片の密輸入やら何やらいろんな惡事を働く都合上、紫霧洞の住持に少し緣故があるところから其處を隱れ家にしてゐたのです。それが露見して到頭夫婦共捕縛されました。」

「女も自分の夫の惡事を知つてゐたのでせうか」

「勿論知つてゐたのです、段々調べて見ると、女の方が惡事にかけては寧ろ亭主以上だといふ事が分つたくらゐです」

「子供はどうしたでせう?」

「さあ、それはつい知りませんでしたね」

Y子が冷かすやうな口ぶりで言つた。

「あんたのお手の物だわね、早速書かないこと?」

「何を?」

「其の女を主人公にしてさ。支那人と夫婦になつて亭主と一緒に惡事を働いてるなんて面白いぢやないの?」

「うん—それも話にやあなるが、併し僕が書くとすれあ寧ろ五味さんが出遇つた事件だけを狙ふね。五味さんが圖らずも寺で日本の女に會つたといふだけの話をさ。庫裡の入口に女下駄が脱いであつたといふのは可成り印象的な描寫になつてゐよ。面白い物が出來るかも知れない、一寸其の寺へ行つて見度いな」

「行つてらしやいよ、獨りで」

「獨りぢや怖くて行けないね、浮つかりすると自分が探偵小說の種になつてしまふからね」

私達は間もなく歸途に就いた。

三

私達は、秦淮の入口で馬車を降りた。其處は市區改正でもした跡のやうな駄々つ廣い通で、片側にはまだ空地が殘つてゐたりした。一方の側には古い料理屋が軒を並べてあつた。新らしい粗雜な建物の茶館には階上階下とも一杯の客が入り混んでゐて、藝人が其の中で騒がしい胡弓に合せて唄を歌つてゐた。活動寫眞館があつたりした、往來は可成り雜閙してゐた。

私達は人々の好奇心の眼で取り圍まれ乍らぶら〱歩いた。

「日本人? 支那人?」

さう呟き乍ら、ゾロ〱跟いて來たり、顏を覗き込んだりする。大道の露店で玩具を賣つてゐた。Y子は一つ一錢の土人形を十ばかり買つた。空き地に見世物小屋が掛つてゐた。大蛇の

看板が出てゐる下では眞つ黒な顔の男が顔ぢうを口にして叫んでゐた。安直な食物屋が門並みに並んでゐる。商賣人らしい女が氣取つた容子をして歩いてゐる。

大通りから少しはいつた處に大きな三層の樓門が立つてゐた。正面に「明遠樓」といふ額が上つてゐた。其處が名高い貢院であつた。門番に廿錢遣ると門の戸を明けて入れて呉れた。正面に大きな堂があつてそれ迄數行の道がある。道の兩側に千字文を壁に書いた細長い建物が幾筋ともなく並行して建てられてあつた。高さ一間位の其の建物は四尺位の間を置いて無數に仕切られてある。一人〳〵其の仕切りの中へ這入つた儘、試驗が了る迄は出ることができなかつた。

正面の堂を至公堂と言つた。至公堂の後ろにはもう一棟衡鑑堂といふ建物があつた。二つの建物の中間に深さうな池があつて飛虹橋といふ橋が架つてゐた。廻廊に圍まれた庭には丈の伸びた草が蓬々と茂つてゐた。

貢院を出て以前の道を少し行くと「江寧省會濟良公所」といふ看板が目に付いたので、斤伯さんに「何をする役所です」と訊くと、

「是れは醜業婦の救濟所です、正業につき度いと云ふ醜業婦を收容していろんな職業を授けた上で此處から嫁入りまでさせて遣るのです、一寸御覧なさい、お嫁の候補者の名前が出てゐるから」

斤伯さんはさう言つて役所の入口の處へ私達を連れて行つた。成る程幾人かの嫁さんの候補者が名前を並べてゐた。

所女陳金英　現年二十四歲　江西人

所女金蘇娟　現年二十一歲　安徽人

といつた具合に書いてある。其の側の陳列棚の中には手工品が陳列してあつて、一々名前が札に書いて附けてある。

「ほんたうの賣り物ね、厭になつちまふわ」

とY子は女だけに反感を持つたやうに言つた。

「手つ取り早くていゝぢやないか。救世軍なぞのやうにお有難がらせる世話が無くて俺は此の方が贊成だな、第一路傍に公告して天下に良縁を求める遣り方が民衆的で氣に入つた」

「氣に入つたら一人申し込んで見なさい」

女房を欲しい男は南京へ行くべしである。

孔子廟の前へ出た。其處は河に臨んでゐた。河には畫舫が浮山繋いであつた。對岸には何の邸か分らないが白壁の塀が長く續いて赤く濁つた水に影を寫してゐた。東嶽廟の祭で神輿が通行するのだと云つて其の邊から先は歩けない程雜閙してゐた。

夫子廟の正面の門は、屋根が三つある非常な古い建築だつ

た。修繕をしないと見えて、塗が剝げて諸所が甚だしく破損してゐた。門の前の廣場の隅の方で一人の講釋師が高い處へ上つて講釋を辨じてゐた。周りに幾つも止り木のやうな腰掛が据ゑてあつて、二三十人のお客が呑氣な顏をして陽に照らされ乍ら聽いてゐた。釋師先生は六十恰好の老爺で、淺葱色の道服を着し、黑い緣の大きな眼鏡を掛け、白髯を胸に垂れてゐる。片手で黑い扇をゆらり〳〵と使ひ乍ら喋々として辨じてゐる。時々聽き手がどつと笑ふ。

「何を演つてるんですか」

「三國誌を讀んでるらしいですね」

私達は、廟の內部を見物した後で元來た方へ引き返した。「長松號」といふ料理屋へ斤伯さんの案內ではいつた。一番奥の河に面した部屋で私達は晝餐を食べた。隣室の客の處へは藝妓が來て例の胡弓を彈き乍らかぼそい聲で唄つてゐた。

外へ出た時にはもう薄暗かつた。河岸へ行くと畫舫が幾艘も繋いであつた。斤伯さんが船頭と談判を始めてゐるうちに双方の聲が莫迦に荒くなつたので「どうしたんです?」と心配して訊ねると、

「何んでもありませんよ、幾許で舟を出すかと訊いたら三圓だと言ひますからね、そんな法外な値があるかつて今負けさせてゐる處です」

と斤伯さんはにこ〳〵笑ひ乍ら言つた。三圓なら隨分安いものだと私は思つたが、先刻も斤伯さんは果物屋で櫻ン坊を買ふ時五十錢だと云ふのに卅錢に負けろと云つたので、果物屋の亭主は嚙み付きさうな顏をして怒つた。怒るくらゐだから無論賣りはしないだらうと思つてると、結局卅五錢に負けてしまつて、錢を取ると俄かにニコ〳〵顏になつて「有難う〳〵」と何遍も頭を下げた。其の傳を知つてるので今度も默つて見てゐると、談判が纏つたと見えて

「さあ乘りませう」と斤伯さんが言つた。

「船賃は幾許になつたんですか」

「八十錢に負けましたよ」

私はあいた口が塞がらなかつた。それにしても餘りに安過ぎるやうだつた。私達が乘つた舟は小型の方だつたが、それでも長さ五間位あつた。何處から何處迄もごちや〳〵した裝飾がしてあつて日本に昔あつた屋根船のやうな瀟洒な風情は無いが、其の代り設備は比較にならぬ程完全してゐる。中央部には天井を張り窓を附け、テーブルや椅子が程よく配置されてある。其處には紫檀造りの寢床まで出來てゐる。ギヤマン細工の釣りランプが下つてゐる。

船頭は二人附いた。船は上手の方へ遡つた。河幅は狹かつた。兩方の岸には石垣が高く積み上げてある。畫舫や小舟が處狹きまで繋いである。料理屋の部屋々々が河に臨んでゐて、あたりからは胡弓の音が水面へ流れてくる。

「是れから夏になると此處が盛るのですが、此の頃はまだ閑です」

と佰斤さんが言つた。それでも客を載せた畫舫に絶えず行き會つた。どの船でも酒盛りをしてゐた。藝妓が來て唄つてゐる船もあつた。

向う岸の家から一人の若い美しい藝妓が現はれて水際の處迄石段を早足に降りて來ると、其處に待つてゐた小舟の船頭に向つて何か言ひ乍らひらりと飛び乘つた。船頭は直ぐに棹を立てて私達と反對の方向へ威勢よく舟を走らせた。

「お座敷へ行く處です」と佰斤さんは後を見送つて言つた。

何時の間にか夜になつた。水の上が眞つ暗くなつた。船は何處迄も上手へ進んだ。途中で行き遇ふ畫舫の中ではどの船も〳〵大勢の男女が乘つてゐて盛んに麻雀(モーヂャン)をやつてゐる。駒を動かす音がガチヤ〳〵と聞える。テーブルの上には大洋小洋の銀貨が積み上げてある。艫の方に料理場が出來てゐてセッセと料理をこしらへてゐる船もあつた。

私達は船首の方の圓テーブルを圍んで櫻ンぼを食べたり飲み物を飲んだりし乍ら雜談をしてゐた。私とY子は昨夜汽車で碌に睡れなかつたので今日は非常に疲れた。籐椅子に掛かつてゐると知らず〳〵睡魔に襲はれた。佰斤さんは少しばかりの酒に醉つたと見えて獨り元氣が良かつた。

「南京の名所を讀み込んだ鴨緑江節を僕が作つたんですが、一つ唄つてみませうか」

さう言つて佰斤さんはいゝ聲で唄つた。

南京の、春は嬉しやわらび狩り、夏は涼しきアノ秦淮の、
ヨイショ、浮ぶ畫舫の數知れずヨウ、彈くやまた胡弓の音も涼し、チョイ〳〵。

驢馬の脊に、路のちぐさを踏み分けて、行くや孝陵のアノ
秋深く、ヨイショ、忍ぶ太祖の夢のあとヨウ、冬はまた紫金山の峯の雪、チョイ〳〵。

河は街から遠ざかつて城壁の根に沿つて流れてゐた。城壁は魔の姿のやうに眞つ黒く眼の前に迫つてゐた。と、城壁の中段頃がぼーッと明るくなつて見えた。たき火をしてゐるやうなとろとろとした明りが闇の中に浮き出してゐた。

「彼處が明るく見えるが、何んでせう？」

「あれは乞食の棲家です、大きな穴を掘つて其の中で暮してゐ

るのです、此の邊に澤山さういふ穴居人種がゐるんですが、大きな穴には卅人位詰入つてゐるのもあるさうです」

「元始的で面白いですな」

「處が、それでなか〳〵贅澤な奴もありましてね。乞食には頭があつて各々繩張りが極まつてるんですが、停車場の近くに繩張りを持つてゐる奴が矢つ張り此の邊の穴に棲んでると云ひますが、朝と晩と自分の稼ぎ場へ通ふのに人力車（ロンポア）へ乘つて行くんですよ、よく私の家を通るので見掛けるけれども」

黄包車へ乘つてゐる乞食と それを載せて驅けてゐる苦力の姿とを想像して私達は大笑ひをした。けれども、城壁の中の炎の光りは何んとなく神秘的たつた。

河風が少し寒くなつて來た。私達は船を後へ戻すことにした。私は何時の間にか椅子に凭れて睡つてしまつた。

翌朝は可成りゆつくり起きて馬車で斤伯さんを訪問した。斤伯さんは今日も一日私達の爲に東道の役を勤めてくれる約束だつた。

主人公が用事をしてゐる間私達は應接間で待つてゐた。Y子は其の部屋にある小型のオルガンをひいたりした。斤伯さんは今日も支那服で、シガーを啣え乍ら出て來た。

「今日は雨花臺へ初めに行つて、それから莫愁湖から淸涼山の方へ廻ることにしませう」

と斤伯さんはプログラムを私達に話した。馬車へ乘つてから斤伯さんは、南京が物價が安くて暮しよい話しをした。

「僕の家は同居人が一人居て都合三人暮しですが、一ケ月の炊事費、無論炭薪まではいつてゞすが、一切が十弗位で上ります」

十弗と云へは昨今の銀相場では日本金十一圓何錢にしか當らないのだつた。

「どうしてそんなに安くて暮らせるんです？」

「別に理由は無いんです、只物價が安いので普通の物を食べてゐてそれ位しか掛らぬのです、牛肉のすき燒をするのに三人分で十五錢買つたら食べ切れません、葱が一封一錢七厘位です」

「ボーイの給金は幾許です？」

「あれは無給金です、都合に依れば少し位向うから出す位です」

「どういふ譯てす？」

「それは、ボーイは役得があるからです、詰まり主人の買物を幾許か胡床化してそれを給金代りに懐ろへ入れるのが此の土地の習慣になつてます、だから大暮しの家とか主人が無頓着な家

になると彼等の收入も自然多くなるから、さういふ家のボーイの株は可成り高價で賣買されてゐるのです」

「何んとかして胡魔化させないといふわけにはいかないもんでせうか？」

「いきませんな、彼等は胡床化すことを當然の權利だと思つてゐるんですから、どういふ手段を取つてゞも必ず胡床化します。日用品を買ひに行くのはボーイの役目で、商人の方でも彼等に役得を與へる事を一つの商業道德と見なしてゐるのですから駄目です。若し給金附にして胡床化しを嚴禁して見た處で、矢つ張り胡魔化されるだけは胡魔化しますから、結局給金を拂ふだけ損をする勘定になります。で、雇ひ主の方でも、態と大目に見て給金に相當する位の額を胡床化させるやうにしてゐるのです」

馬車は町幅の狹い繁華な通を走つた。丸石が敷いてあるのでガタ／＼揺れた。何處へ行つても食物屋ばかりである。油つこい匂ひが街ぢうに染み附いてゐた。斤伯さんは話し續けた。

「支那人はすべてさうなんです、同じ十圓儲けるにしても、それを公然と受け取るよりは年中骨を折つてチビ／＼と胡魔化しながら十圓の金を儲ける方が彼等に取つては遙かに愉快なのです。胡魔化せない位なら支那人は働きません。軍人でも役人でも恐くさうです。譬へば將軍などの收入は莫大なもので皆非常な財産を作つてゐるが、俸給としては誠に少額です、何で財産を作るのかといふと、兵隊の給料を胡魔化すのです。政府に對しては三千人なら三千人の軍隊の人員があることにしてあつて、其の實二千人とか二千五百人とかの人員しか無いのが普通なのです。以下の軍人が殘らず其の遣り方で、大隊長は大隊長で五百人分の俸給を受け取りながら其の實三百五十人しか兵隊はないと云つたやうなわけで、檢閲のある時だけ苦力を日當で雇つて來て人數を揃へるんです。政府でもそんな事はチヤンと知つてゐるから、將校などには特に極く安い給料を當てがつてゐるんです」

面白い國柄があつたものである。

昨日通つた處とは別の南の城門を通り拔けて城外へ出ると、其處にも不景氣な町が暫く續いてゐた。雨花臺は城外でも極く近くにある青草の生へた圓つこい山だつた。向うの續きの山には牧牛が草を食べてゐた。頂上へ登ると、城内の光景が一々指呼の間に收められた。

「是れが兵機廠です」

斤伯さんは脚下に見える幾棟かの建物を指して言つた。

「革命の時に、革命軍が眞つ先に此の兵機廠を占領して、此處

らへ大砲を据ゑ込んで城内を砲撃したので、南京城は一溜りもなく陥落したのです。革命軍には日本の後備兵などが加はつてゐて、素つ裸の褌一つで大砲を打つてゐたさうです。總攻撃に移つてからも日本人が一番強かつたさうで。何時でも先登に立つんで随分討ち死したのもあつたといふはなしです」

南の方を望むと低い山脈が海のやうに際涯なく續いてゐた。空には白い雲も無かつた。私達は暫く草の上に轉がつて話しをしてゐた。すると例の乞食が近寄つて來て耳元でしつこく泣き聲を出した。併し此處の乞食は只錢を與れとは云はず、此の山で拾つた青い豆粒みたいな石を澤山持つてゐてそれを買つて與れと言ふのだつた。そして昨日の乞食に比べると餘程温和しかつた。乞食は支那の名物の一つである。

山を遶つた方角へ降りた。麓の近くに墓地があつた。それは日本人の墓地だと斤伯さんが言つた。山の下に田舎風の茶館があつた。「露花寒第二泉」といふ額が掛つてゐる。私達はそこへ潰入つて裏庭で茶を呑んだ。

城内へ戻つて、大切坊半畝園といふ有名な旅館へ寄つて奥庭の亭で晝飯を食べた。其處を出て馬車で行くと、と或る繁華な街で樂隊を先登に立てた行列に出遇つた。

「葬式が來た」と私が言ふと、

「否、婚禮です」と斤伯さんが言つた。

婚禮と葬式では大した相違だが、支那へ來ると似たり寄つたりだ。樂隊は葬式の時と同じやうに「あな嬉し、喜ばし、戰ひ勝ちぬ——」とあのマーチをブーカ／＼ドン／＼と囃し立てゝゐた。高張提灯、造花、其の後から支那の古式の樂人が物哀しい笛を吹いて行く。花嫁の馬車には眞紅の重たい幕が掛つてゐて、護衛の巡査が後の方へ乘つてゐた。

途中で孔子廟を見物して、今度は西門の方へ向つた。城門を出ると廣い運河が流れてゐた。運河に架した橋の兩側に數十軒の食物店が並んでゐた。家を載せてゐる橋を見るのは初めてだつた

莫愁湖へ着いた。其處には古い寺があつた。勝棋樓だの曾公閣だのといふ古代の建築は非常な觀物だつた。勝棋樓は諸葛孔明が棋を鬪はせた處だと傳説されてゐる。曾公閣は湖を望む爲めに建てられてあつた。湖は水が淺くて左程大きくはなかつた。けれども彼方に蜿々たる城壁を望み、城内の清涼山と相對してゐる其處の風景は古人が嘆賞したのも尤もであつた。曾公閣から階段を下つて來ると壁に澤山の樂書きがしてあつた。其の中で讀みいゝのを一つ拾つて見た。

亭々荷葉玉亭々

晩水蘋花分外清
不是一閣商女恨
怎能將涙洒痴情

坊さんが石刷りを賣つてゐた。紀念に二三枚買つた。馬車に乘らうとすると玆でも乞食が附き纒つた。銅貨を投げてやつて其の暇に馬を走らせると、拾ひ損ねた一人の女乞食が後を追つかけて來て、馬車の横手へ廻つて何か大聲で言つてゐる。

「五味さん、恐縮ですが此の乞食の言葉を譯して下さいませんか」

「乞食の文句は大抵極つてますが、此奴が言つてるのは斯うです。――旦那樣に奥樣、あなた方は大層お儲けなすつたでせう。此の憐れな乞食に一錢施して罪滅しをなさいまし」

「驚いたネどうも。それぢやあとても與れて遣れない」

與れずに馬を走らせると、乞食は杖を振り上げて齒を剝き乍ら後ろの方で罵つてゐた。

「今度は何んて言つてるんです」

「碌でなしの豚の夫婦、貴樣達は今日中にくたばるだらう」

「忌はいましい畜生だ」

私達は清凉山へ向つた。途中の景色も田舍めいてゐて佳かつた。山の麓の茶店の前で馬車を降りた。中腹の寺迄行く坂路の兩側には美しい竹林があつた。寺は後廻しにして山の頂上へ登つて行つた。

頂上へ行くと四方が望まれた。南京の市街が眼の下に見えた。反對の側には莫愁湖が鉛色に光つてゐた。更に遠くに大きな河が見えた。揚子江だつた。江の彼方には高い山脈が續いてゐた。

揚子江を遡る汽船の煙が見えた。其の江の上流の更に不思議な夢のやうな國を私は想像した。

四

其の晩の十一時發の上海行の列車へ乘つた。其の汽車が蘇州へ着くのは朝の四時頃だつた。私達は其處で降りて蘇州を一日見物して夕景の汽車で上海へ歸る豫定だつた。

今度はY子を納得させて二等へ乘つた。幸ひ列車は空いてゐたので私達は二人掛けの腰掛を一つ宛占領してテーブルを隔てゝ向き合ひに座つた。

私もY子も疲勞しきつてゐた。殊にY子は履いて來た絹上靴が小さ過ぎた爲めに足を痛めたので不自由な思ひをして歩き過ぎた後だつた。彼女の靴擦れの爲めに今度の旅行中私までどんなに苦勞したことか分らなかつた。旅行に出る時彼女は踵の高

い散歩靴を履いて行かうと言つたのを私が無理に勧めて編上靴を履かせて來たのだつた。で彼女は自分の靴擦れを偏へに私の罪に歸して地面を踏む度びに私を怨り付けるのだつた。それはしかし私から言はせると大體彼女の靴が莫迦々々しく小さ過ぎた。彼女の靴はどれでもそれを履く爲めには五分乃至十分の時間を費すのが普通だつた、それは足へ履くのではなくて、肉體の一部へ喰ひ込ませるといふ方が至當だつた。で今度の旅行に假りに寶石入りの散歩靴を履いて來たとした處で、矢つ張り同じやうに靴擦れは出來たに違ひなかつた。けれども彼女はさうは思はないらしく、一歩あるいては顏を顰め、又一歩踏み出し乍ら、

「あんたが恁んな靴を履かせたもんだから痛くて歩けやしない。編上げなんて女中だつて履かないことよ、見つともないつてありやあしない、アア痛――」

私は景色を見るどころの騷ぎではなく、絶えず彼女の足許に注意してゐなければならなかつたし、宿へ歸れば歸つたで何が偖置き飯粒を練つて膏藥の製造に取り掛らなければならなかつた。

そんなに疲れてゐるのに、何も慌てゝ夜行列車で發たなければばならない理由は無かつたのだが、私もY子も、見物するだけ見物してしまふともう一刻も其の土地に留どまつてゐようといふ執着が無くなつた。私達は一日も早く上海へ歸り度くなつた。あのどつしりと落ち付いた美しい紅壁の私達の部屋が懷かしくなつた。

それでも來た序でだから蘇州だけは一寸見物して行かうと私は言つた。そして、途中下車がきかないので蘇州迄の切符を買つた。

曠野には秋のやうに澄んだ月が登つてゐた。汽車は月の光の中を淼々と走つてゐた。

「愈々南京ともお別れだね」

と私は段々遠くなる城壁の方を透して見ながら言つた。

「さうね、でも南京は佳かつたわ、私が今迄歩いたうちで一番いゝ處だつたわ」

とY子も二日間に見た景色を一々思ひ浮かべて見るやうな眼付きをして言つた。

「もう生涯のうちに二度とは來られないかも知れないな、多分來て見たつて詰まらないだらうが」

「一生の思ひ出になるわね、私此の事は死ぬ迄忘れやしない」

と彼女は感激の籠つた口調で言つた。彼女の言葉の意味は、此の金陵の地を忘れないといふのか、それとも私と共に旅をし

た樂しかつた經驗を忘れることが出來ないといふのだらうか……
……。
「自然から與へられた感激は何時迄も續くものだよ、遠い昔に見た景色などを思ひ出したゞけで胸が躍るやうなことがあるからね。其處へいくと人間の力なんて小さいもんだよ、戀愛なぞも一時的のもんだ、醒めてしまつて、年が經てば、思ひ出したつて何んの感激も伴なやしないからな」
「ほんとにあんたは左うなの？　あたいは違ふわ、景色なんて見る時だけの樂みだけど、人の事は忘られない――ぢやああんたは、あたいの事なんかも直きに忘れてしまふんだね」
「何もお前の事を忘れると云つた譯ぢやないがさ、自然の力と人間の力とを比較して見たゞけのはなしなんだ」
　其の室には支那人が一番多かつたが、中には日本人らしい男連だの、魔性の者らしい女が混つてビールを呑み乍ら喋つてゐるアメリカ人の一組などがゐた。
　退屈しのぎにトランプを始めた。彼女は負ける事が嫌ひで勝ちさへすれば御機嫌だつた。負けるとプリ／＼した。だから二人の間の氣分を平和にして置く爲めには私が絶えず負けて遣ればよかつたのだが、自惚れの強い彼女は私が態と負けてゐるとは思はず、鼻を高くして私を輕蔑するのだつた。
「馬鹿だよあんたは、そんな札の出し方つてないよ、隨分頭が惡いのね」
　で私も少し癪に障つて來た。今度は眞劍にやり出すと私の方が勝つた。
「本氣になれあ斯んなもんさ」
「偶にやあね、ぢやあもう一遍しよう」
　今度も私が勝つた。それから何遍續けても何時でも私が勝利を得た。
「厭よ、人の札を覗いて見たりして」
「覗きやしないや、だけどお前が札を平にしてゐるから獨りでに見えるんだ」
「おや、あんたは狡猾いよ、さつきあたいがスペードを出した時無いやうな振りをして、今になつて人のにくつ附けるんだもの、狡猾いわ」
「そんな事があるもんか、あの時は無かつたが、其の後で場から取つたんだ」
「知らないよ、胡麻化すんだもの、隨分あんたは卑劣な人ね」
「誰れが胡麻化したりするもんか、確かにあの時」
「卑劣だわよ、そんな卑劣な事するならあたいはもう止すよ」
「止すなら止せ」

彼女は札をピシャリとテーブルに叩き付けて置くと、非常に冷酷な表情をして默り込んで空氣枕にフウ〳〵と風を入れ始めた。そして、マントをフハリと體へ掛けて腰掛の上へ横になつた。

其のあとで私は所在なく獨りで煙草をふかしてゐた。無理解な彼女に對する憤りが何時となく納まつて行つた。兒戲に類する爭ひが吾れ乍ら滑稽に見えて來た。

彼女は疲れてゐるので本當に睡つてしまつたらしかつた。雲母のやうな光澤を持つた短かく斬つてある髮の毛が、縮れながら顏へ掛つてゐる。長い眉、黑い睫毛、すつきりと高い鼻、しなやかに伸びてゐる體――。是れ程美しい女があらうか――と私は思つた。

私は彼女に對して何事も許さなければならないのだつた。それが彼女に對するせめてもの私の心盡しである。私は彼女を愛してゐる。それは或ひは彼女が私を愛してゐるよりも、更により以上に私は彼女を愛してゐるかも知れない。けれども私は彼女に對して現在以上にどうして遣ることも能きないのだ 私には家庭がある、仕事がある、世間がある。それらの物の一つをも私は戀愛の爲めに犧牲にすることは能きないのだ。彼女もそれは承知してゐる。承知の上で私にくつ付いて日本へ歸つて行くのである。善くも惡くも彼女のする事は、これが彼女に取つてはたつた一つの生活である。併し私の生活は三つにも四つにも分れてゐる。自分の生活の僅か一部分しか割いて彼女に與へてゐないのに、それでも私は眞に彼女を愛してゐるといふことが言はれるだらうか……。

蘇州へ着く少し前に私はY子を搖り起こした。彼女は疲勞と睡眠不足の爲めに痛いやうな眼付きをしてゐた。私は彼女の帽子を棚の上から取つて遣つた。汽車から出て見るとまだ夜が明け切らなかつた。驛の前に馬車が一臺客を待つてゐた。馭者を呼んで覺束ない支那語で「日本旅館へ遣れ」と言ふと、馭者は心得て客を載せるが否や馬に鞭を呉れて走り出させた。

馬車は並木道を走つた。西の空に月が殘つてゐたが、空はもう仄の白く明け初めてゐた。彼方には城壁が長く續いてゐた。城外の街には堀割が幾筋も通つてゐて、屋根と屋根の間に帆柱が林立してゐた。白壁の建物が冷たく水面に映つてゐた。Y子は私が話し掛けても碌に返辭もしなかつた。朝の光で見る彼女の顏は青白かつた。

「氣分が惡いのかい？」

彼女は默つて答へなかつた。矢つ張り睡眠不足の爲めに機嫌が惡いのだらうと私は思つた。旅館迄はなか〳〵遠かつた。其

外の大馬路を卅分餘も走つてから、馬車は一軒の日本旅館の門前で停つた。

旅館はまだ起きてゐなかつた。玄關のベルを幾度び押しても起きて來なかつた。馭者は裏口の方へ廻つて行つたりして見たが家造りが嚴重なので呼んでも中へは聞えないらしかつた。私達は寒い玄關先に永いこと立つてゐた。Y子は益々蒼さめた顏になつて腹立たしさうに唇を噛んでゐた。其處へ又一人黄包車で乘りつけた客があつた。顏を見ると昨夜南京から同じ汽車で乘り合せて來た男だつた。

「私が起こして來ませう」

其の人は勝手を知つてゐるらしく裏の方へ這入つて行つた。すると暫くして宿の者が起きて來た。

「入らつしやいまし、どうも大變寢坊をして失禮致しました」

四十位の支那服を着た女の人が出て來て莞爾々々して迎へ乍ら言つた。それが此の家の女將らしかつた。私達は玄關の直ぐ奥の控え室で一寸待たされた後で、小女に案内されて二階の部屋へ行つた。其の部屋は高い處に西洋窓が二つ三つ附いてゐて、緣無しの粗末な疊が敷いてある、其の外には何一つ裝飾も無い殺風景な部屋だつた。でも仕方がないので私は戸口で靴を脱いで疊の上へ上つた。處がY子は靴を脱がずに戸口の側に立つてゐた。

「おい、這入らないか」と私は言つた。

「しようがないわ、こんな部屋ぢや」

と彼女は突劍呑に言つた。

「だが、別に良い部屋も無いんだらうよ、疲れを休めるだけだから茲で我慢しようよ」

「こんな感じの惡い部屋ぢや疲れも休まりやしないわ、他の座敷を聞いて御覽なさいよ」

「ぢやあ聞いて見よう」

私は小女を呼んで他に座敷は無いかと聞いて見た。すると、皆塞がつてゐて他には部屋が無いといふ答へだつた。

「仕方が無いから我慢するさ、とにかく一と睡りしようぢやないか」

Y子は剛情に入口に突つてゐた。

「厭なこつた、恁んな處でなんか睡れたもんぢやない、まるで下宿屋ぢやないの、宿屋が聞いて呆れるわ」

恁う言つて彼女は忌々しさうに其の不景氣な部屋の中を見廻した。

「當り前だよ、此處を何處だと思つてるんだ、支那の田舍へ來てゐるんぢやないか。下宿屋だらうが木賃宿だらうが結構ぢや

ないか、贅澤を云ふ場合ぢやないぜ」

「あんたは玆が氣に入つてるなら獨りで玆へ寢るがいゝよ、あたいは下へ行つて起きてゐるから」

彼女は一旦言ひ出したが最後どうしても承かない女だつた。私は込み上げて來る憤りを無理に押え付けた。着く早々喧嘩をおつ始めたのでは如何にも宿の人々に對して極りが惡るかつた。それに喧嘩の原因が部屋が氣に食はないといふ事からであることを宿の者に知らせるのは氣の毒だつた。と云つて此家を出たところで他に行く處の當てはなかつた。私は蟲を殺して彼女の機嫌の直るのを待つより外はないと考へた。其處で又小女を呼んで、蟲の敷いてない部屋はないかと尋ねると、階下に支那室が一と間空いてゐると言ふので、直ぐさま其處へ移ることにした。

其の部屋は可成り廣くて、支那式の裝飾が施してあつて、鉢植の棕櫚竹が置いてあつたりした。隅の方には固さうな支那寢臺が据えてあつた。小女が十能へ火を入れて持つて來た。私達は椅子に腰掛けて氣むづかしく默り込んでゐた。

其處へ此家の女將が挨拶に來た。

「恁んな田舍で誠に行き屆きませんで――」

支那服を着てゐる女將は小肥りに肥つてゐて丈は低い人だつたが、色が白くて上品な顏立ちに何處か厭味の無い愛嬌があつて、そして非常に賢こさうな婦人だつた。

「どちらからお越しで御座います？」

「南京から來ました、上海へ歸る途中なんですが」

「御見物で御座いませうね」

「えゝ……其の積りで來たんですが、彼女が少し氣分が惡いと云ひますから……」

「おや、それは不可せんですこと、奧樣、何か御藥を差し上げませうか」

「何、それには及びません、持病のやうなもんですから、捨つとけば直きに癒るでせう」

と私は橫から云つた。女將は何も彼もお分つてゐる苦勞人らしい眼色でY子を見ながら程よく話して、其の後で見物をするやうなれば馬でも山駕籠でも傭つて遣るからなどと言つて、お辭儀をして出て行つた。

「どうだ、見物に行く勇氣は出ないかい？」

私は努めて打ち解けて切り出して見た。

「あんた獨りで行つて來るがいゝわ」

Y子は味も素つ氣もなく答へた。私はすつかり斷念した。此の上はもう一刻も早く上海へ歸るばかりだ。歸つてしまへばど

うたとなれ。思ふ存分大喧嘩をして、彼女の横ずつぽを張りのめしてやつて、そして今日限り別れてしまつたらさぞ清々するだらう……。

と言つて見た處で、次ぎの列車が出る迄には三時間程待たなければならなかつた。

Y子はつと立つて行つて、寢床の縁へ腰掛けてごろりと横になつた。私は頭がしん／＼軋むやうな氣持がした。少し散歩でもして來ようと思つて外へ出た。もう麗かな朝日が差してゐた。廣い一本道路を私は先へ／＼と歩いて行つた。家は飛び／＼にしかなかつた。雜木林だの畑だのがあつた。すると其の間を運河が流れてゐたりした。透明な空氣の中で小鳥が群れて飛んでゐた。方々の白壁がキラ／＼と陽に輝いてゐた。

私はふと氣紛れに細い横道へそれて行つた。すると小さな寺の前へ出た。門前を通り越して向うへ行くと、其處でもまた一筋の運河に出遇つた。河岸に柳の木が立つてゐた。運河の彼方には何處迄も／＼畑が續いて見えた。私は切石に腰を卸してぼんやりと考へ込んでゐた。其の時私の胸に浮かんでゐたことは人間のする事は實に不思議だ——と云つたやうな考だつた。何故不思議だと問はれると私は答へに窮するかも知れない。けれども私は自分自身のしてゐる事からして總てが不思議なやうに感じられるのだつた。私は現在支那の蘇州へ來てゐる。そして何でもない野道へ這入つて來て、恁うしてたつた獨りで運河の流れを眺めてゐるのだ、是れが不思議でなくて何んとしよう……。

私はふとY子の事を思ひ浮かべた。あの旅の宿の居心の惡るい部屋で固い寢台の上に横たはつてゐる彼女の事を。すると急に私は彼女が氣の毒になつて來た。彼女も今頃は定めて後悔してゐるに違ひない。そして、私の歸りを持ちかねてゐるだらう……。

私は切石の上から起ち上つた。そして急いで宿の方へ戻つて來た。(完)

新東京花街鳥瞰

松川二郎

花柳地圖は變化する

東京市内十五區、藝妓の住まぬ區はなく、絃歌のひゞかぬところとても無かつた、それが震災前の東京であつた。麻布と小石川のみは、久しい間、區内に花柳街を有たぬことを一種の誇りとして來たものであつたが、それも山元町が現れ白山が生れて、却つて一番新米で、低級で、何等特色のない花柳街の所有者たるの光榮を有することゝなり、斯くて十五區まんべんなく一區少きも一箇所多きは二三箇處、合計二十六箇處に、八千五百の藝妓を擁擁してゐたのが、震災前の東京市だつたのである。

御存知ではあらうが、念の爲、その所在地を簡單な表にして見る。

麴町——富士見町。飯田河岸。
京橋——新橋。新富町。靈岸島。
日本橋——芳町。柳橋（淺草代地を含む）。日本橋（檜物町附近）
神田——講武所。
下谷——數寄屋町。根岸。
淺草——淺草（公園）吉原。
深川——仲町。洲崎。
本所——向島。
芝——神明。芝浦。
麻布——山元町。
赤坂——溜池。
四谷——津の守（荒木町）大木戶。
牛込——神樂坂。
小石川——白山。
本鄉——天神下・同朋町。駒込神明。

白星を附けたのだけが燒殘り、向島は半燒の程度で助かつた。

警視廳の調査に據ると、燒出された藝妓屋が二千百餘軒、人員にして五千七百餘人、待合茶屋が千三百軒。

此の「表」を一瞥しただけでも、「滿目蕭條」の感なきを得ない。特に私の如きは、一種の感慨無きを得ないのである。昨年の春であつたか、私が三德社から『歡樂郷めぐり』を出すと、求光閣の服部貢之助君がやつて來て、彼れには東京の花街に少しも觸れてゐないが多分別に書くつもりなのだからう、「歡樂の東京」といふやうなものを書いて呉れないかと云ふので、それを書く氣になり、二三の雜誌に豫告まで出した樣であつたが、それは或る事情の爲中止となり、原稿は一枚も書かないでしまつた。左樣永久に書かないでしまつた。今度の大震火は天譴ださうだから、私もあの時『歡樂の東京』なぞべら棒なものを書いて居たら、天譴によつて、本所被服廠跡へでも放りこまれてゐたかも知れない。危いあぶない。――とは云ふもの、彼の震火前の東京、遊蕩氣分の爛熟し切つた「歡樂の東京」を、書いて置かなかつたことを、些か殘念にもおもふのである。

然し、失はれた花街は、間もなく復活するであらう。帝都復興に伴れて……、否、寧ろ帝都復興の魁は我々の手に據つて、といふ意氣込で彼等は蹶起するであらう。すでにバラック建ての花街に、絃歌の聲を響かせてゐる處もある。だが燒跡の新橋に、さつ早く昔の新橋が蘇るであらうか。芳町の燒跡に昔の芳町が、柳橋の燒跡に昔どほりの柳橋が……。トタン屋根に月が寒さうに顫へて、襖の無い座敷へ風がヒユウヒユウ吹き込んでくるバラックの待合に、彼の人の心を蕩かすやうな情調が湧き出で得るであらうか？ 新橋の花街は直ぐに復興しても、新橋の情調の再生には、相當の歲月を要するであらうといふことを私は富士見町の一夜の經驗に依つて、沁々と感ぜさせられたのである。

一方には、神樂坂も此頃はさう捨てたものでないよ、などゝ云つてゐた神樂坂が、今はその容積から云つても質から云つても、まさに「東京」の大花街となり、「あゝ白山かえ」が何時までも「あゝ白山かえ」で濟まなくなり相な形勢である。下町の殷盛が山手方面に移つて來たと同じやうに、下町の花街が矢張り山手方面へ移つてゆく。客種が善くなると、銘仙藝妓がお召にかはる。銘仙本位であつた土地がお召に進歩すれば、客種も自然と異つてくる。山手の諸花街の外に、品川、五反田、澁谷、大塚などいふ「準東京」の花街も控えてゐる。こゝ數月の間には、截然として、從來とは地位を變更させる土地が出來るに相違ない。と同時に、全然復活し得ないで、滅びてしまふ土地も二三箇處はある、――と觀てゐる。

東京の花柳地圖は變化する。――矢張り私は彼の時「歡樂の東京」を書いて置けば好かつたのだ。下町の花街に、多くの親しみと興味とを持つた私は、何等の哀愁なしに、此の筆を進めてゆく譯にはゆかないかも知れない。一方には新しきものゝ榮ゆる「欣び」を感じつゝも……。

神樂坂

一

氣分とか藝妓の氣品とかいふものを別問題として、震災前に於ける藝妓の頭數から云ふと、――又しても數字を引合に出すが、どうも私は數字を根據にしないと、話が頼りないやうな氣がするので――「新橋」が九百二、新橋南地といふ烏森を合算すれば一千百五十といふ頭數を擁して、全市の六分一を占めてゐた。次が「芳町」の八百九十八、「淺草」の七百三十四、「神樂坂」の六百四、あとは數寄屋町と湯島とを合した「池の端」の五百三十、四谷「津の守」の四百十、「赤坂」の三百六十、「富士見町」の三百五十などいふ順序で、神樂坂は藝妓の數から云へば、震災前すでに第四位を占めてゐた。

震災後の今日は一千名を突破して、東京の新レコードをつくつた。その增加率の、飛抜けて強大な一事を見ても、此の土地の將來の發展振りが略ぼ豫想されよう。

一日に五六人づゝ、お披露目の無い日はないといふ。何家から何子が出たか、斯う目まぐるつたくては、待合の女將や女中にもなかなか覺え切らず、午後の八九時謂ゆる「汐時」といふ頃には『誰でもいゝんですがね、誰れか居ませぬか』などゝ電話ばかりが、藝妓屋へかゝつてくるのが、此頃の「神樂坂」である。顏をも名をも、知らぬ藝妓同志が、毎夜お座敷でかち合つてゐるのが、此の頃の「神樂坂」である。六百名から一躍千名に增加した藝妓が、毎日お茶屋で引張り凧、氣の利いた家では、客が有ても無くても、日が暮れると口をかけて引張り付けておき、時間が來ればドシ〳〵お直しにして、藝妓を手離さないやう工夫をしてゐるのが、此の頃の「神樂坂」である。

『××子さん電話よ。△さんらしいわ』

『さう有難う、△さんなら妾うんと叱言を云つてやらなくちやあ。……ア、若し〳〵何誰？ 僕つて誰ア れ△さんでせう？ 解りますさ。あんた昨晩ずゐぶん非道いのね、非道いのは妾でなくてあなたよ。此の頃ですもの、一本や一本半ぐらゐ待つてるのは當然よ、贅澤を言つちやいけませんよ人の氣も知らないでさ……。 え？ 甞つたれた事仰在んなよ貴下

も男でせう。昨夜なんぞ何と云つても向ふで貰つて呉れないのよ、それを妾喧嘩(けんくわ)面で漸やく貰つて駈付けたんぢやありませんか、エヘヽヽなんて冗談どころぢやないのよツ。今晩是非入らツしやい、七時？　駄目々々、五時にキチンと來て頂戴、でなきや又ワキからお座敷がかゝつてしまふわ、よくツて五時ですよ……』

某月某日午後二時某藝妓屋に於けるスケッチ――これが此頃の「神樂坂」なのである。

『ねえさん深川から來た藝妓は居ないかい？』

『居ますよ五人ばかり。』

『有難い、そいつを招んで呉んな』

必ずしもお馴染でない、お馴染でなくとも昔――震災前――遊んだ土地の藝妓とあれば懷かしい。神樂坂へ來て、些かなりとも矢張り深川氣分を味はふとする。新橋から來た藝妓は新橋氣分を、柳橋から來たのは柳橋氣分を、芳町から來たのは芳町氣分を、お互ひに發揮しようとする。藝妓が各地から、宛ら洪水のやうに流れ込んだやうに、お客も亦各方面から來る。固有の神樂坂氣分に、各地それ〴〵の花街氣分を添加して、殆んど取止めもなく「混然」「雜然」たる氣分を發揮してゐる。それが取も直さず此頃の「神樂坂氣分」なのである。

此際だから、如何なるお客でも一現の客には前勘を當つて差支ない、といふお布令が公然組合事務所から出たといふのも、此頃の「神樂坂」だからである。

二

言はでものことか知らぬが、「神樂坂」の花街といふのは、牛込見附から所謂かぐら坂を上つて、その坂上から通寺町通りに出る間の左右兩側の裏手一めん、即ち神樂町三丁目、上宮比町肴町及び若宮町の四ヶ町にまたがり、縱横にしたら三町には足らぬ區域、この間に十六七軒の料理店、百餘軒の待合茶屋、百五十餘軒の藝妓屋が、混然雜然と入りまじつて、今は「東京第一」の大花街を形づくつてゐるのである。

指定地外の津久土町に中村屋、白銀町に鈴々木といふ待合が各一軒あるが、昔からある古い家で、謂はゞ飛地、藝妓屋はない。

同じ狹斜街でも新橋の金春、仲通、板新道とくると、すなほに眞直ぐな街路で、道幅も廣すぎず狹くなく、艶消硝子の丸い軒燈が、高低なく一線を成して輝やき續いてゐるのからが、伸び伸びとして、落付いた感じを與へてゐたものだ。それを見て神樂坂へ來ると、花街の中に山あり谷あり、傾斜した細い通は

而も廻りくねつて、突當つたかと思ふと又裏へ通じ、抜けたかと思ふと豈計らんや復た突當る、此の間に料亭・待合・藝妓屋の三業が仲善く雜居して軒を竝ぶ、と云ひたいが平家と三階建が隣り合つては跛者の二人三脚じみて、とんと落付がなく、是れが文字通りの「狹斜街」なのかは知らぬが、玩具箱を引くり返したやうな感じである。

街筋が徒らにごちや／＼として、馴れぬ客などは「八幡知らず」へでも入つた感じを懐くところに、もう一つ六ケしいことは新券と舊券の別。

『こちらお馴染は？』

『うゝ、お馴染つてほどでもないが、一二度會つたことがあるんだ、××家の×子でも、かけて貰はふかね』

『××家？　それは舊券でせう、うちは新券ですもの舊券の妓は入りませんわ。』

『へえ。そんな六ケ敷い規則があるたア知らなかつた、へえ左樣かい』

『×子ひとりが牛込の藝妓ぢやありませんよ、新券にだつて別嬪は居ますよ、お取持をしますから、こちらも新券黨におなりなさいよ、ね。』

神樂坂は遊ぶのにも、骨が折れる處だと、歎じた男があつた。料理屋・待合から藝妓屋まで三業を縱斷した新券舊券の二派、それが月並な玉祝儀問題の紛擾からでなく、憲政會對政友會といふ政黨色を帶びてゐるのだから御愛嬌である。

新券は早稻田のやんちやん坊三木武吉氏を中心とした憲政會系統、舊券の方は誰が牛耳を執つて居るか知らないが、兎に角政友會の系統を引き、議員選擧にも藝妓が二た手に分れて、鎬を削らうといふ凄まじい土地である。おもしろい事には帝國議場に絶對多數を制する政友會は、神樂坂の花街に於ても「多數黨」たるの名譽を支持し、料亭待合藝妓屋の八分通りは舊券組に屬してゐる。新券の藝妓といふのは百二三十名で、その出先きは料理屋で吉新、千鳥、橋本、待合では松ケ枝、小松、住の江、幸樂などを主なるものとして、總計二十軒には足りない範圍である。

「神樂坂」を語るには、勢ひ舊券を語らねばならぬことになる。

三

舊券に屬する藝妓屋は百三十四軒、藝妓の數は約九百。「梅川」の二十二人を筆頭として、盛梅家、新千代家、喜久の家、松本、吉田家など十人以上、十四人の抱妓を有する藝妓屋はザラにある。出先きの料亭は九軒、待合が八十七軒。

料理屋として名を知られてゐるのは「常盤」「末よし」「梅月」、少しく格は落ちてるが「魚徳」。元來神樂坂は料理などは何うでもいゝところ、「何うでもいゝ」お客の來るところ。氣の利いた料理を食はふなどゝいふのはお客の不心得であるが、魚徳は其の名に依ても推察せられる如く、仕出屋出世して料理屋となつたものだから、錢中の錚々、更に角ちよいと食はせる。

待合の一流といふのは「吾妻屋」、御紹介がなければ一現の客は上げない。神樂坂にも今はこんなのがある。神樂町の「梅林」「玉の井」「楓月」、肴町の「重の井」、宮比町の「紅葉」「稲仙」、若宮町の「御歌女」津久土の「中村家」。ちと安賣りか知れないが廉賣は當世流行、まづ此處らが一流と云はれる家である。待合の奥座敷など悉く瀟洒を極めてあるものと思ふと譯がちがふ、室一ぱいの熊皮を敷いて、緞子の布團は五寸厚み、傍らにはお約束の桑の曲象（但位置は往々にしてアベコベに置いてある）靴下の破れたのを氣にしながらもドツかと座つた處は、どうあつても田舍芝居の殿様氣分。『失敗た金口を買てくるのを忘れた』と後悔しながら、敷島を吹かしてゐると、鞠躬如として入て來た女中が、

『あの、まことに相濟みませんが、土地の規則なもんですから……』

『遊ぶのに規則があるのかい』

『えゝ、誰何にかゝはらず、初めてのお方様には土地の規則なんですから……こちらなんぞ斯様なことを申上げては濟まないんですけれど……。あの如何程でも……。』

但ちつとも「相濟まない」と云ふ顔ではなく、無遠慮に前勘をくらはせる。出てゆく女中の後姿を忌々しさうに見送りながら、それ程不信用な客なら初めから上げないがいゝぢやないかと、ヤケに障子を明けると、前は庭で、セメントだゝみの泉水に人造噴水、はゞかりの戸には赤と青の色硝子がはまつてゐようといふ。——ナニそんなものを神樂坂氣分だと思つて買つちゃ困るよ。

九百の藝妓の中、燒出されてワキ土地から來たのにどんな逸品があるかは未だ知らないが、古顔の姐さん株といふのは、泉家のおちやら、新若松の權助、畑松葉のかほる、宮松葉のメ次、本寺島の音羽などで、大勢の宴會には此へんのところを一二枚加へておかないと、若い藝妓がサボつていけない相である。中年增では新滿の十五、八千代子、松本の高助、宮若葉のメ丸、萬むさしの力榮、こゝらは何處へ出しても耻かしくなく、招ぶお客も「氣の利いたお客」とされる。半玉には泉家の清丸といふ傑作がゐる。震災後深川から來て花香家から出た一平は、深

川に居る頃から一流と云はれてゐた妓の由、將來こゝの半玉界で清丸と覇を爭ふものは此の女であらう。

震災後現れた藝妓に鯉家の「あさ二」がある。淺草で千代菊と名乘つてゐた女で、淺草の御定連なら千代菊の新內を知らない者は無かつた。「哀愁」だの「デリケート」だの「二重人格」だのといふ當世語を甚だよく諒解し、一寸した英語の會話もやる。「神樂坂へ來たら一ツ文學藝妓で賣出さうか」と、大變なことを考へてゐる由、由來「神樂坂」は尾崎紅葉の硯友社以來よく文士の遊ぶところ、敢て御紹介におよぶ。

毛色の變つたところでは、盛藤家の伊太利女パールがゐる。短かいスカートに白絹の靴下長くダンスも踊れば、お國の歌もうたふ、但當人御自慢は「鴨綠江節」である。

幇間も十二三人ゐる。揚羽家の延八。同花蝶、櫻川の長作などが藝は達者、座敷持ちも上手。

四

鳥料理の「川てつ」は、箱ははいらないが、神樂坂の一名物。その名は下町へもすでに響いてゐる。然し繁昌の因は鳥その物よりも、常に綺麗な女中を揃へてゐる處に在るといふ者もある。自慢は吸ひ蝎、此頃はどうか知らないが、私のよく行つた二三年前の頃は、生薑が少し利きすぎると思つてゐた。

鰻の「鴨金」、座敷天ぷらの「錦」も、坂では名を得たものゝ一つ。「錦」は幇間——此頃幇間を止めた由——龍田川錦也の經營してゐるもので、材料も精選し油もいゝのを使つてゐるが、その割にうまくなく、高いことは日本一。下町から牛込くんだりへ來て値の高いのにおどかされるなんぞは、決して氣の利いた話でないが、まさに高いことは日本一。

小料理では「喜仙」。

「神樂おでん」も有名、苟くも食通と稱する者で、神樂おでんを知らぬはあるまじく、酢だこの如き天下一品の定評がある。

西洋料理にいゝのはない、水菓子屋の「たわらや」の洋食部が、此の界隈では一番うまいと云はれてゐる。その他牛込會館の階下のカフエ・グランド、東洋軒、カフエ尾澤など。カフエ尾澤のボーイには綺麗なのが居る、かるが故に藝妓のお客が多い。もし夫れ女給のエプロン姿に憧るゝ輩は、カフエグランドへ、將た東洋軒へ、行かさるべからず。

五

花街「神樂坂」を叙した序に、夜の神樂坂の殷盛に就ても一言なきを得ない。——こゝにいふ神樂坂は、文字通り神樂坂

る街路を指す。

夜の神樂坂は、震災前からすでに市内屈指の「盛り場」として知られてゐた。況して震災後に於ける繁昌振は素晴らしいもので、文明館の中に松屋呉服店、肴町停留場前に松坂屋呉服店、毘沙門附近に村松時計店、小山モスリン、伊勢丹呉服店などが下町からやつて來て支店や出張所を設ける。三越は少し離れて築土八幡前に、四百餘坪の土地を買取つてマーケツトの建築中で、十二月の賣出しに間に合せるのだ相だ。濠端から坂を上つて、通寺町の牛込郵便局前に至る間は、四谷大通と相俟つて、まさに東京の二大中心街。東海、尾張屋、安田、川崎、東京貯蓄、永樂、常盤、其の他……。十有幾つの銀行が眼まぐつたい程支店を出して、華々しい金融戰をやつてゐるのを觀ても、此の街繁榮の一端がうかがはれる。

神樂坂は夜光の街、露店は銀座と併せて東京名物の中に數へられてゐた。災後は下町方面の商人がドシドシ入込んで來て、一と頃は毎晩のやうに地所爭ひの喧嘩があつた位である。彼の狹い六間道路の兩側に、坂下から坂上へかけて、約三百の露店が、隙間もなくギツシリと並んだ有樣は、盛を通越してもの凄い程である。唯だもう人の波に揉まれて歩るくばかりで、そこには銀ブラのやうな情味は到底發見し得られないのだが、此頃の如く電車で揉まれつけると、人の波に揉まれることも亦一つの興味となるのか、夜な夜なこゝに集まつて來て、人の波に揉まれ、自らもその波の分子となつて、人を揉むことを樂しむ者が增加した。

殊に毎寅の日の、毘沙門の緣日ときては全たく言語道斷で、肩摩轂擊と云ひたいが車類は凡て通行禁止である。押すな〱の人波に、お座敷歸りの藝妓や茶屋女が、艶めいてゐるのも此の夜。

も一つこゝの特色は、藁店の昔から演藝には緣の深い土地だけに、文明館（休館中）牛込館といふ活動常設の外、神樂坂演藝場、神樂坂倶樂部、牛込亭に柳水亭などいふ數多い寄席貸席があつて、下町の寄席の全滅後は、講談師落語家その他の藝人が集まつて、連日の滿員をつゞけ、芝居の方も舞臺協會劇に次いで、村田正雄がこゝで「人間座」の旗上げをやつた。山の手の淺草とは行かぬ迄も、將來の演藝界に、一地歩を占むべきことは疑ひない。

坂下なる外濠の水上公園。將來はこれに新式の完全な設備を施して、一つの特色としよう、それから矢來交番附近に中央公園をつくつて、區役所警察署郵便局等の官公署を、その一部に集中し、神樂坂からその中央公園、榎町、高田八幡を經て池袋

驛に到る道路を十二間幅に改修して、歩道と車道を區別し、牛込驛と池袋驛とを連絡させる一方、市電の飯田橋――新宿線の沿道も十二間幅に擴げ、飯田橋下から大瀧に至る江戸川の川幅を擴げ、水深を深くして、神田方面から小型の汽船の往來し得るやうにしようなど、帝都復興――否東京改築の計畫に伴ふて區の理事者や有力者達は、種々目論見を立てゝゐるやうである。

兎に角、神樂坂附近は變るね。

白山

一

小石川白山に藝者町のできたのは、四十五年の初夏の頃。西片町十番地のSの家にゆくのに、白山線が通じてからは、本郷三丁目で降りるよりも、掃除町停留場から右に折れて崖をのぼつてゆく方が、歩く距離は四分一もないので、專らその道を取るやうになつた。電車通から路次へ曲つて崖下へ出る間、この兩側へぽつぽつ銘酒屋ができて、頸筋を白壁ほど塗り立てた「淪落の女」が、鼠啼きをして通りすがりの客を呼んでゐた。銘酒屋町から段々進化して、藝者屋町となつてゆく、その變態の經過を、私は明らかに白山で觀ることができた。

そのうち、神田で相當大きな印刷屋をやつてゐたYといふ男の女房が、こゝで待合を出して、是非一度遊びに來て呉れと云つたので、友人のKを誘つて行つて見た。行つて見て驚いた。その家といふのは腰辨の住宅でゞもあつたらしい、一寸した門のついた安普請の二階建で、通された一番のお座敷といふのが、疊には大きなお灸がすえられ、障子は白と鼠いろの切張り、床の間には勸工場仕入れの安軸が一幅、後ろの壁には雨漏りが世界地圖を擴げてゐる有樣！『生憎いゝところは出拂つてゐるものですから……』といふお斷り附ではあつたが、さて繰り出た藝者はと云へば……、顏のことなんぞは敢て言はないが、一言にして悉せば唯だ銘酒屋をんなが藝妓の鑑札を受けたといふまでのこと。

『何かおうたひなさいな、少し騷ぎませうよ』

と催促をうけて、

『何を彈くんだね』

と訊ねると、答がふるつてゐた。

「サノサでも、磯ぶしでも、何でも……。」

その時まで、新橋、柳橋、下谷など以外では遊んだとの經驗を持たなかつた私は、藝妓にもいろ／＼ある。從來「藝妓」なるものに對して、自分の懷いてゐた概念は、少しく訂正の必要

があるわいとおもつた。

×

『スツテヨイ、スツテヨイ、スツテヨイナ』

と八木節の三味線に連れて、丼鉢を敲く杉箸の冴えも聞こえる。夜の賑かさは麻布や赤坂の比ではない。常盤の店前には赤革の長靴がづらりと並んで、葱臭い嬌聲が漂ふ、それも其の筈つい此間まで待合磯の家の壁間に「待合料金五十錢」と麗々と掲げられて居た通り、土地の發展を計る爲には、手段を選ばぬ資本主義、今のところ先づ過渡時代と見てやるが至當であらう。

『それは殘念だつた、唄も何も誰か見られるのを聽けてくれ給へ』

『贅澤を云ふものぢやなくつてよ、お値段と御相談ぢやない？　今誰れかかけますから、おとなしく待つてらしつやい！』

女中の行つてしまつた後、隔然とするかと思ふと、前の銘酒屋か小料理屋で三味線ぬきの大豪遊、浪花節からサノサ節、サノサ節から木遣くづしと、のべつ幕なしに唄ひ續ける。それが又一人や二人でなく、男女入交つて遺憾なく蛮聲を張り上げる。

『オイ／＼そつちのでこ助、盃をくれないかい？』

これが若い女の聲だから恐ろしい。

『箆棒め、手前のやうな阿魔に盃をくれる位なら、家の猫にくれてやらあ、其の面で盃をよこせもねえもんだ』

『オヤ、何處を押せばそんな音が出るんだえ、散々人を口説きやアがつた癖に……』

『お袖さん、お前さんが惡いよ、こんな者對手にしないで、御自分は御自分で飲む事さ、どうせ酒代は此奴等が拂うんだ關つた事はありアしない！』

『違えねえ、よく出來てやがらア、アツハ……、どうで然らせだ、計る／＼と思ひしにだらう、面ア見やアがれ！』

『オヤこん畜生、持つてやがらないんかえ、野太え野郎ぢやないか、紙入をお見せよ！』

『見せたところで籠のものは見榮えもなからう』

『見せろと云へば……。お袖さん、系取くつて見てやろがいゝ。癖になるよ』

『さあ出すか出さねえか！』

二人の女は男の胸倉をとつて締めつけたものらしい、皿小鉢の蹴飛ばされる音も聞える

『謝罪つた、これ！　何をする……腹せつて云へば……』

『苦しきや、出してお見せ、見せなけりやもつと搜ぐるから……』

『出すよ！　出すから……ヤイいゝ加減にしろと云へば……こいつは耐らねえ……出すと云つたら……』

女は首尾よく男の紙入を取上げたものらしい。

『畜生、こんなに持つてるぢやないか、皆奢らしちまはふよ！』

「濁江」に書いてあるやうな氣分が漲る——と、是は大正八年の秋川版「夜の東京」に、武田鶯塘氏の書いてゐる「白山」である。

二

今日の白山は、もはや其の程度の白山ではない。大正四年三業合同で白山三業株式會社を創立し、資金三萬圓を擁する財團組織。料理屋二十一軒、待合六十五軒、藝妓屋九十六軒、藝妓の數が三百五十。殊に藝妓屋組合は三萬圓の積立金を有し、震災後一箇月の休業に際しても、積立金の内一萬圓だけを各戶に配分し、ノホヽンで暮らしてゐたと云ふのでも、過去十年間に於ける奮闘振りがうかゞはれる。全國藝妓屋同盟會本部は白山に在り、その東京支部聯合同盟會の會長は白山が承つてゐるのである。現に角十年は一昔しである。

『此の頃、お座敷で太鼓はやらないのかい』

『えゝ地震からこつち廢まつたのです。此の頃は以前とはお客種がちがつて、大分いゝ方々がお忍びで入らして、騷々しい遊びもお嫌になるし、それにもう白山も太鼓の時代ではなからうつていふのでね……。』

『そりや結構だね、花柳界もあの太鼓をドンドコドンやつてゐる間は、一人前とは云へないね』

『それも矢張りお客樣次第で……』

『客の方も藝妓次第、土地の氣分次第なのさ。太鼓なんぞが止まれば、自然又さういふ客がふえてくるのだよ。かね萬の萬壽婆さんは未だ居るかへ？』

『居ますよ』

『彼れが抑も、この土地の草分だつたね。松田家の小糸は？』

『居ますとも、小糸さん、大助さん、〆吉さん、お八重さん皆居りますよ。この土地ぢや押しも押されもせぬ一流の姐さんです。こゝは割合に藝妓の動かないところなんですよ』

『斯んな處、どこがいゝんだらうね』

『御挨拶ですね。白山に限ると仰在る方もあるんですから、世の中は廣うござんす。』

『此の頃の景氣は特別だらう』

『大小つき交せて三百四十幾人てゐますが、毎夜のお座敷の

數が千から千百と云ひます』

『千百？ へえ。一人平均三座敷乃至四座敷。へえ？ 驚ろいたものだねえ』

白山の花街といふのは、市電白山線の掃除町停留場から、略ぼ指ケ谷町停留場に至る間の南側裏手通り――指ケ谷町百三十七番地乃至百四十六番地に亘る約七千坪の區域である。藝妓屋の草分が前記の「かね蔦」待合の草分が「つたや」、料理屋では「かね蔦」。その他藝妓屋にも料理屋にも「かね」の字のつくのが多いのは私には耳ざわりである。白山閣といふ三階建のおどかした料理屋もできてゐる。

玉や祝儀は神樂坂も澁谷もこゝも同じこと、神樂坂や澁谷はは二時間でお直しになるのが、白山は三時間、それだけが勉強なのであらう。

三

「白山通り」といふのは、白山上の肴町、曙町の通り。こそは市電の駒込線と巣鴨線とを横に連絡してゐる高臺の新市街で、僅か一町ばかりの間ではあるが、道路改正につれて新らしく建てられた三十餘の商舗のうち、六軒まで揃うて呉服店で、四軒が洋品店、その外大きな美術小間物店に百貨店など、何れ劣らず、目覺ましくショーウンドを飾り立てゝ、北部山の手の中心街たる繁昌振りを見せてゐる。

駒込の方へ向ふ淺嘉町の通には、夜になると百五十餘の露店がならんで、駒込、巣鴨、團子坂、谷中方面から續々押かける客を迎へて、此の頃の寒天にも十一時過ぎまで賑はつてゐる。蓬萊町の方へ曲ると、長元寺に「外山」、勝林寺に「宮本」といふ日本橋の呉服物問屋が出張して、お堂の中に呉服物をギツシリ積んで、マーケツトを開いてゐるのも奇觀である。

その外此の界隈で目を引く商舗は、美術陶磁器の平安堂、飯田屋、和洋家具の森一、漆器の永田、菓子屋の松仙堂、大黑屋などで、「新山手繁昌記」には逸すべからざる一劃である。

此の盛り場から毎夜多數の客を吸寄せてゐるのが、此の邊では一風變つた情趣を有つ南天堂カフエである。殊に日本大學や東洋大學、専修商業の學生で、椅子のあきまもなく賑つてゐる。何が故に南天堂は爾く盛るのか？ 帝劇女優學校の七期生堀内きよ子が、解散後こゝに現れて、ウエートレスとして白いエプロンを掛け、あの涼しい眼を投げかけてゐるからである。

復興した三花街

一

一旦灰滅に歸した十七八の花街の中で、何處が復興の先鞭をつけるか、それは可なり興味ある問題であつた。觀音樣の御利益を背負つて立つ淺草か、神田ッ兒の血を享けてゐる講武所かと、先づ此の二箇所に誰も目を付けてゐたが、案外！　九段は靖國神社の埒外から、復興の絃歌第一聲をひゞかせた。十一月一日、震火を免れた山の手の各花街が、一齊に箱を入れると同時に「富士見町」が開業して、天晴れ花街復興の魁をした。此際だ、賞めてやつても好いとおもふ。

それには、理由もあらう。彼のへんは比較的火の手が遲かつた上に、靖國神社といふ廣場が控えてゐた爲に、料理屋も待合も藝妓屋も、丸燒けといふのは極稀れで、皆相當に家財道具を持ち出し、演舞場へ駈付けて最まで持出した者のあつた程、よく手がまわつた。そこに偉大な復興の力が潜んでゐたことは、爭はれない。今一つは、能樂堂を開放して貰つて、其處に九月一日から八日まで、名物男の待合「松月」が村長格で、藝妓屋と出先の茶屋側が一諸に集まつて共同生活をつゞけてゐた爲に三業の者が少しも散逸せず、互ひに相勵まして、復活の氣を揃へた事も、與つて力あるに相違ない。新橋の復興が一番遲れるらしいのも、原因は全たく散り／＼ばら／＼になつたのと、藝妓屋と出先の氣の揃はない點とに歸してゐる。

燒失したのは富士見町狹斜街の一割で、その周圍が燒け殘つたことなども、此の花街の復活を速かならしめた、原因の一つであるに相違ない。

十一月一日から開業したものは――

料理屋で魚久、大岡、加賀屋の三軒。

待合では永樂、海老家、松の家、小川亭、彌生、おかめ、相模家、梅月、壽、喜鶴、ともゑの十一軒。

藝妓屋では稲泉、梅本、梅榮家、福瀬川、光園、花岡、福の家分菊叶、高しまや、さゝや、分木花、分旭家、春成田、たから家、富司、久榮、一初梅、桐家、君松川、分二輪家の二十軒。

但しいづれもバラック建たることは言ふ迄もない。三業組合の菊の家や、松月、笹川などが遲れたのは、本建築をやつてゐるからである。

開業第一日、四十八人の藝妓に半數以上のお約束がついて、夕方迄には恨みつこなく一人殘らずお座敷がかゝつたと云ふのも、御定連の客筋に罹災者の少かつたことを物語つてゐる。

因にこの土地は、震災前は藝妓屋が九十七八軒（藝妓が三百五十）で、待合が九十四五軒あつた。追々に、三分二以上は復活するだらうと云はれてゐる。

二

浅草の花柳界では、待合の「ゆたか」が最先きに焼跡へバラックを建てゝ、十月下旬からぼつぼつ商賣を始めたといふ評判だつた。抜がけの先陣、佐々木四郎高綱といふ格である。藝妓屋の一番槍は「市川家」次が「照吉野」それから米松家、一山廼、米勝本、横田家、新金東、桝金東、金田家など三十餘軒が續々バラツクを建てゝ復歸し、旺盛な復興氣分を漲らせてゐたが、出先きの料理屋や待合の復活が遲かつた爲め、先手を富士見町に越されてしまつたが、そのうち「玉の家」「柏木」など待合も續々建つて、兎も角も十一月十五日から一齊開業で復興した。

同時に柳橋の柳光亭、白山の大正亭、芳町の一松家などの調停によつて、過去五年の間新舊兩見に分れて反目して來た行がゝりを、さらりと捨て、新見三業を解散して合同が成立し、歩調を揃へて土地繁榮の爲に努力することゝなつた。

淺草で一流と云はれた料理屋は草津、一直、大金、松島。草津は大人數の宴會に適し、一直は座敷の居心地が好く、大金は古風なところが喜ばれてゐた。辨天山の岡田は總菜料理で知られ、隣の新玉は連れこみに屈强の家として重寶がられてゐた。

かうした一流どころの復活には、未だちよつと間があり相だが二流以下の食ひ物の復興は、藝妓屋、待合などに較べると、ずつと早かつた。最先きに復活したのは「女」の淺草でなく「食ひ物」の淺草であつた。

料理屋としては二流に屬してゐたが、湯瀧が一つの名物となつてゐる「大増」は、大銀杏の下にあつた爲に、仁王門とゝもに不思議の命を助かつて燒け殘り、眞先きに食堂を開いたので當時の雜踏は眞に名狀すべからず、客は切符を買つて行列して順番の來るのを待つたものだ。震災成金の筆頭と、大分羨まれてゐる。燒出されの中で復活の先鞭をつけたのは「中のときわ」で、門構なども一寸洒落れてゐる。角のときわも復活してゐる。その他牛肉屋の松喜、ちんや、よね久。天ぷらの中清、天定。鰻の「やつこ」。伊豆榮など、悉く復活してゐる。美人の多いので有名だつたカフエアメリカも、奥行十四五間といふ雨天體操場然たる大バラツクで復活してゐる。汁粉屋の「梅園」は宗旨替をして西洋料理となつた。よく流行つた家ではあるが、無くなつてあながち惜しい汁粉屋でもなかつた。汁粉屋では寧ろ辨天山の「秋もと」。彼の自慢の膳ざいは復活したか何うか、うつかりして通りすぎてしまつた。

名の有る無しに拘らず、飮食店は概ね復活してゐるやうであ

る。

仲見世なども二階建てゞ復活しつゝある。『矢張り淺草は淺草だ』誰もさういふ感じを懐く。興行ものゝ方も大半再建の工事に着手し、年内に竣工させて春には揃つて開場の申合せをしてゐる相である。

三

向島は、全滅したのは舊見の方で、俗に「秋葉」と稱する新見側は半分だけ助かつた。卽ち新見に屬する料理屋待合八十軒の內、燒けたのと潰れたのが四十九軒で、蝶々、とんぼ、生稻、壽々榮を始め三十一軒が殘り、藝妓屋は六十軒のうち二十餘軒が燒けて、約四十軒殘つた。

殘つたものだけで、取敢ず十月から營業を開始し、藝妓の玉祝儀は時間制に改めて、從來の半額に引下げ、待合の席料などもぐつと廉くした。その後、燒出されの澤の家、江戸家、金龍なども續々と復活してゐる模樣である。それに此處も淺草同樣これを機會に舊見新見が合同するらしい。

向島は弘福寺の鉦が鳴ると、對岸の淺草から暮れそめて、待乳山が水に沈み、花川戸、今戸、橋場あたり一帶の人家に灯がはいつて、それが水に映る美しさと靜かさ、そこに向島の生命があつた。歌澤の「夕立」にきつねけんの唄はれた頃の向島氣分は夙くの昔に無くなつてゐたにしても、川を隔てゝ眺める淺草あたりの夜の灯に、捨てがたい趣をもつてゐたのだが、今は其の對岸の灯も消え、而も燒殘つたのは舊見（謂ゆる向島）にあらずして、野趣を帶びた新見の秋葉とは、何といふ皮肉なことか。

「世辭金」と云はれた「入金（いりきん）」の女將が、今度の働き振りと氣前の好さとは、花柳界噂の種子となつてゐる。入金は幸ひに類火の禍を免れたが、六百人からの罹災者を收容して、ドシ／＼焚出しをやり、家にあつた浴衣二百二十枚は、燒出された向島花柳界の人々に分配し、十月に入て秋風が身にしみると、お客用の褞袍をも全部引ずり出して分配して、今は殆んど無一物、罹災者同樣の身分となつて、同時に女中にも悉く暇を出してしまつた。女將の曰く『昔、夜寢るのに布團が無くて、菰をかぶつて眠つた時分の氣持に若返り、燒け出された人々と一緒に、新規蒔なほしにやる量見なのです。今迄の女中に、五十錢の祝儀をもらつて有難つて呉れと云つても、それは無理な話ゆゑ、いつそ暇を出しました』と。花柳界には、往々、かうした英雄的な女が發見せられる。地震が無かつたら「世辭金」たゞお世辭の好い女として知られて終つたでもあらうものを……。

向島は、私達の趣味から云つても、又此の入金の女將の健氣な志にめんじても、是非元どほりに復興させたいとおもふ。

十二月から復興の分

十二月一日から開業と決定、――此の雜誌が出た頃には、「開業した」と書替へらるべきは芳町、日本橋、下谷池の端、新富町、新橋南地（烏森）、芝神明及び神田の講武所などである。

芳町は藝妓屋側の元氣が頗ぶる旺盛で、市中林、新福本、吉堺、中村家、一松家、芝吉藤、惠知古屋、鶴の家などは十月中にバラツクを建てゝ住みこんでゐたといふ話、開業間際には四十軒のバラツク藝妓屋が建つて、百名近い藝妓が復歸してゐた。出先側の先鋒が待合の「改善」だつたと、此の方も開業前の十一月末には二十餘軒に達してゐた。「百尺」はとうく〱バラツクを建てず、最初から本建築にかゝつた。建坪は八十餘坪、表がゝりは總檜づくりにすると云ふ。年末までには竣工の豫定。三百疊の座敷を誇りとしてゐた矢の倉の福井樓はバラツク食堂となつたが、食堂はそのまゝ經營を續けて、會席の福井樓は、別に待合「相生」のあとへ建てる相である。

日本橋では料亭の「やまと」が再築の先頭で、二番が待合の「中井」。次いで初大阪、菊よし、豐田、音ぎく、藤村などがバラツクで始め、藝妓屋側では鶴藤、三河屋、菊むらなどが先頭ですでに二十餘軒。「大増」「魚がし料理」も工事を急ぎ　一齊に開業する筈だと聞いた。

下谷では池の端の巻の家、清酒家などが此の界隈での一番驅けをやり、同朋町では岡本が十一月から商賣をはじめたとか。梶田家、志湯田もバラツクができた。それに此の土地には燒け殘つたのに、池の中の笑福亭がある。伊豫紋は本普請にかゝるなでぢつとしてゐるといふから、當分は駄目らしい。藝妓は數寄屋町と同朋町を倂せて六七十名か、先づそのへんで復興の烽火を上げる。

新富町では、藝妓屋の光大黑、飄香川、新大黑、甲子大黑、岩泉等を主なるものとし、待合の側では「やつこ」を始め八九軒、然し新富町は「萬安」あつての新富町である。「萬安」が復活するまでは、新富町の花街は寂しい。それで何うしても「萬安」を年内に竣工させて、元日から開業させやうと努力してゐる。豫定通り行きさうな形勢である。

新橋南地（烏森）は震災後大いに悲觀して、一時解散までしたが、煉瓦地の方の復興が手間取ると觀てとるや、此際先鞭をつけて、從來の從屬的關係を覆してやれといふので、俄かに意氣込み出した形がある。湖月は率先して食堂を開業してゐたが

目下は藝妓をあげ得る家の建築を急いで居り、梅田家、花岡、古今亭などはすでにバラックが出來た。待合では千鳥、生の家、三島、喜仙、菊林、森田家、海月、晴月など、藝妓屋側は玉家、分玉、岡の家、濱の家、伊勢本を始めとして十二三軒。かういふ顔ぶれで復興した。

芝神明は土地が芝浦に近く、北の芝浦の花街が震災後、黄金の渦巻の中に漂ふてゐるやうな好景氣を眼の前に見て居るので、復興氣分は甚だ旺盛。

料亭でははつね、小しげ、翁、泰明閣。

待合では松榮、明月、沖の家、二升、蔦の家、峰の家、錦。

藝妓屋では新大黒、菊三河、竹三河、吉辰巳、福近江、玉兼辰巳、春本、兼辰巳、江澤家等藝妓の數にして四十餘名。斯ういふところで華々しく復興した。

神田ッ兒は氣の早いものと極つてゐた。罹災後眞先きに積立金を藝妓屋に分配し、又九月中に見番を新築して、わきの花柳界を驚ろかしたのも、ともに講武所であつた。それにも拘らず開業が、十二月まで延びたのは、土地が一代限りの許可地で、明神下の齋所町へ移轉を指定されてゐたので、是を機會に一齊に引越しをしよふと、地主に交渉をしたが、纒まつたのもあり纒まらぬのもあり、其んなこんなで遲れたのである。明神下へ移つたのは小部分で、大半は元の土地へバラックを再催した。こゝは數の少いにも因らうが、藝妓屋にも出先にも、殆んど落伍者が無かつたと云つて好い。

湯島の天神下も、地主との間に借地問題でごたごたして居たやうであるが、漸やく諒解が成つて、藝妓屋五十八軒の看板中四十六軒で十二月一日より復興。奇蹟的に燒け殘つた天神境内の料亭「魚十」も、修繕全たく成つたと。

新、柳、赤坂

一

花柳界でも一流となれば番付があると云ふのか、芳町の十二月開業を寧ろ例外のやうにして、新柳二橋が花街復興の殿がりをつとめる事になつた。二流どころでは赤坂が殿軍である。然し何れも、年内には準備を整へて、大正十三年復興第一年の春と共に、復活するは確かである。

夏の夜の柳橋には、何とも云へない風情があつた。兩國の橋から、川風に袂を吹かしながら望んだ南地の抒情と來ては、夜の東京景物中第一のシーンで、あの柳橋（橋の名）の袂に茂る一もと柳にも、無限の懷かし味が感ぜられた。

「柳橋」は復活する。然し復活するのはバラックの「柳橋」である。藝妓あり酒あり、ばかりでは元の柳橋情調は味はふことができなからう。

矢の倉の福井樓は戸田様の跡で三百畳の座敷をほこり、其の隣りには生稲あり、少し離れて花屋敷の全盛、今半の幽雅、錦水亭の順なる。更に踵を代地に運べば、昔は萬八で板前は鳴らした龜清の夢は儼然として馬琴の芳流閣の如く聳え、柳光亭の雅味ある、深川亭の瀟洒なる、待合では吉右衛門びいきで評判の稲垣の紅燈、大川の水を逆しまに射て、川開きにあらざる日とても、上る流星屋下り、水底深く虎の尾のごとき花光りは、燦然として閃めき動めいてゐる――。

斯うした華やかな文章で、再び「柳橋」を叙するの日は幾年の後か。この花街で一番早く家を建てたのは濱町の待合ふじ家であつた相な。稲垣、津久松、田中家、濱中なども割合早かつた。柳光亭も假普請でこの春から開業する由、龜清は敷地が柳橋まで出てゐる爲、帝都復興に伴ふ都市計畫の決定を見る迄は、建築を控えるといふ噂である。

罹災後氷川神社で藝妓組合の總會を開いて、眞先きに復興の宣言をした赤坂が、悠々と落付いてゐる所以は、『どうせ復興するなら本建築でやらう、生子板のバラックなどで遊興氣分の出る譯のものぢやない』といふにある由。此の花街は、その土地の大部分が八百勘、三河家、春本などの所有に屬し、家は藝妓屋にしても待合にしても自分持が多かつた。林屋は二十九人、若松は二十人の藝妓をそつくり率ゐて澁谷へ避難し、九月一日に居た藝妓は一人も落伍させず、揃つてお披露目をさせると云つてゐる相だ。内幕は知らぬが、兎に角大分ブルヂョワ氣分を發揮してゐる。

かうした意氣込の土地だから、名ある料理屋、待合、藝妓屋には斷じて落伍者がないと云つてゐる。澁谷で開業してゐる砂川なども、何れはこゝへ復歸するらしい。

二

新橋のは、敢て伸びりしてゐる次第ではなく、復興について藝妓屋側と、出先きの五業側との意見が合はず、藝妓屋側の折れるのを待つ爲、五業側がわざと悠々して居る如くに觀える。新橋は由來藝妓天下の土地で、平素なか〳〵五業側の指圖などは受付けない。かるが故に、一段の音曲乃至舞踊を演じたのみで、サツサと歸つてゆく。それで玉祝儀は一人前十圓三十錢也といふ我が儘をも振舞へたのである。殊に、元老藝妓なるものゝ勢力と來ては、絶大なものであつたから。

此の機會を利用して、元老藝妓排斥を、五業が目論だのらしい。同時に玉祝儀を時間制にして、從來の半額以下の三時間五圓ぐらゐにしたいと、この方は全國藝妓屋同盟會まで持出して騷いだ。然し藝妓屋では、高くても立派に客を引いて見せるといふ自信を持つてゐる。同時に「安ければ客種がさがる」の定義を顧みて恐れてゐるのである。客種が下ればまた藝妓の質もトントン低下してゆく。斯くては「新橋」は復興しても、新橋の新橋たる權威は滅びるといふのである。何だか藝妓側へ左袒したいやうな氣がする。銀座を挾んで花街ができたといふのみでは、「新橋」の復興といふことにならない。――だが、バラック小屋で席料十圓也は無法だし、從つて玉祝儀も此際低下の必要ありといふ五業側の言分も亦もつともである。兎に角時間制は極力排斥したが、玉祝儀の或る程度迄低下して、話は纏まつたらしい。

震災の直後、例の相惠次を始め、一流どころの姐さん株が、七八人づゝ一隊となり、各手分をして五業側を歴巡して、復興の遊説を行つたといふ新橋藝妓の意氣は愛すべきもので、依然として五業は藝妓に引摺られてゆくの觀がある。

斯くして新橋の營業開始は遲れたが、『復興は先づ藝より』と叫んで、東會が起つた。東會は新橋の誇りで、花柳界に於ける東京一の團體として、一般からも認められてゐた。長唄、淸元常磐津は勿論舞踊、鳴り物各派の藝に優れた一流の藝妓をもつて組織し、毎年歌舞伎、帝劇等の大劇場で公演をやつて、「藝の新橋」の氣を吐いてゐた。十二月早々此の東會が震後第一回の復活公演を行ひ、その益金を以て、煉瓦地跡に山積する灰燼を整理し、土地復興の障害を除去するさうである。

銀座はすでに蘇つてゐる。青ペンキ塗のカフエーライオン、いきな竹籔をめぐらした竹葉亭、一日以前よりも寧ろすが〱しい氣分の資生堂の食堂、一口にバラックと云つても、銀座は矢張り「銀座のバラック」である。夜になれば露店も出るし、行路樹の鈴かけは燒けのこつた、綺麗に片付けられた步道にはもうそろ〱銀ブラ情調がたゞよふて來てゐる。間もなく銀ブラも復興するであらう。吾が「新橋」も亦、速かに復興せんことを祈つてゐるぞ。

三

たゞ一つ、確實に復興の望みのないのは飯田河岸である。飯田河岸の富士見樓も、東京花街の一名物たることを失はなかつた。廣い東京にも、内藝妓をも有つた料理屋は、この一軒より外にはなかつた。座敷には舞臺の設けまであつた。料理の方に

名義はちがつてゐたらうけれど、待合をも兼營し、料理場を拔けて北の待合へ行けるといふ便利な、一種おもしろい家であつた。滑川町では、旅館・料理・洗湯・劇場・妓樓まで兼業にし、それが廊下つゞきになつてゐるといふ妙な家も見たけれど、それは富山縣下だ。東京附近にはない。

富士見樓の藝妓屋兼業は、すでに許可期限のされてゐたのを特に延期してゐたのだから今度はもう望みがない。燒跡は食堂になつてゐる。(一二、一一、二六)

屠蘇盃に映る酒徒の顔

田中貢太郎

一

飮みしは屠蘇、それもさる所より賣り出したる『兩關』と云ふ酒にて造れるものなれど、甲子年頭の卮酒、その快さ云はんかたなきにつけて、思ひ出されるのは、先輩朋友との酒交であるが、由來布衣の交はりは、行藏進退にささわることが多くて、昨日の朋友、今日は行路の人となり、今日の知己、明日は忽ち仇敵となるなど　その離合集散のはかられざるものはあるが、一たび酒盃に向ふと、恩讐の情を超越し、過去現在を閑却して、その音容を盃中に髣髴さするのが酒徒のならはしである。

私が手にしてゐる屠蘇の盃、それには桂月先生の本年五十五歲になる、この二三年來めつきりふけた髭の白い肉の落ちた口元が浮んで見える。從遊二十年、四國から九州のはてまで隨從して、盃を共にしてゐる私の盃に、第一著に桂月先生の音容の動くのは當然のことであらう。

桂月先生の酒は、右手に酒杯を持ち、左手に蟹螯を持ち、酒船中に拍浮せば、便ち一生を了するに足れりと云つた晉の畢卓の酒で、痛飲淋漓、滿を引いて飮むところに趣味を持つてゐる。桂月先生は私に、『酒は咽喉いつぱいかからんといかん』と云

つたことがある。それは漢詩漢文から來た趣味で、ちびりちびりと獨りで飲む酒にも趣味を持たないことはないが、それよりも知人後輩を多く集めて、徹宵放達な酒を飲むことにより以上の趣味を持つてゐる。從つて地酒の舌を刺すやうな惡酒でないかぎり酒に就いてはあまり好惡を云はない。茶碗に注ぐの酒は量にあるからであらう。

その桂月先生は數年前に酒を病んで禁酒したことがあつたが、間もなくその禁を解いた。その禁を解いた時は、私と土佐を遊行してゐる時であつた。それは初夏の雨の多い頃のことで土佐ノ西端の中村と云ふ町に滞留してゐたが、ある夜桂月先生は、私とも一人一緒にゐた若い友人とに、何所かへ行つて遊んで來いと云ふので、二人で出かけ、十二時近くなつて友人は遣して獨りで歸つてみると、禁酒の筈の桂月先生の枕頭に銚子がある。

『先生、どうしたんです』

と、笑つて聞くと、

『歯が痛いから漱をした、酒は利くよ』

と笑聲で云つて、暗い方に寢返りをした。私はこいつすこし危險だぞ、と心の中で笑つた。

中村から嗟跎岬、龍串の磯を見て、一週間ばかりの後に、高知市の方へ引返してゐると、その途中で戸波と云ふ村の有志に迎へられた。で、その村へ行つて一二泊したが、其所から又その隣になつた高岡と云ふ町へ行くことになり、出發する日になつて、桂月先生はその村にある虚空藏山と云ふ山へ、土地の青年を伴れてあがることになつた。私達は向ふの有志と打ち合せをすることがあつたので、そのまま先へ出發したが、その日、虚空藏山へあがつた青年の一人の水筒の中に燒酎があつた。桂月先生はその夜、その青年達を相手にして徹宵齒の治療をしてゐた。

桂月先生はその時から禁酒と云ふことをやめて、斷酒と云ふことを口にするやうになつた。その桂月先生は昨年の秋から十和田湖畔の蔦温泉へ行つて、斷酒しながら杉浦重剛翁の傳記を書いてゐたが、その時私へくれた書簡の中には、白樺の皮に書いた絶句が入つてゐた。

空山任レ足歩遲遲
暄日無レ風鳥語滋
墨斗在レ腰詩興動
樺皮剝得寫二新詞一

二

桂月先生の次に私の屠蘇盃に映るのは、和田垣謙三博士である。林檎をくツつけたやうなつやつやした頬の色、前額のすこし迫つて見えるところは、その小供小供した頬と釣りあはなかつたが、私は其所に博士が半生の辛酸の痕を見たのであつた。

私が博士に接したのは晩年十年間位のことであつた。閑靜にして機智縱横、肥つた大きな體を前屈みにして、ちびりちびりと酒を飲みながら、ぽつりぽつりと思ひだしたやうにしやれを云つた。酒に飽いて來るとマドロスパイプを取つて、それに煙草を詰めて喫んだ。その煙草を詰める時に火の通りをよくするために、マツチの棒を煙草の中へ差し込んで、急がしさうに突ついたりこねたりした。

博士は『月桂冠』を好んで飲んでゐた時代があつた。博士や桂月先生達と高雄山に登つた時には、博士のさしづで一行を案内して行つた書肆が月桂冠を持つて行つたことを覺えてゐる。宴會の歸りに松本道別君達と一緒に伴れられ、小石川臺町にあつた博士の宅へ行つて、夜の明け方まで日本酒やらウヰスキーの馳走になつたこともあつた。

博士は酒を飲むに、且つ飲み且つ食ふと云ふやうなことはしなかつた。酒の時には酒ばかり飲み、ひもじくなると食事をした。日本料理の宴會などへ行くと、食事がすんでゐない時には膳の物を皆食つてしまつてから酒をはじめた。博士のその習慣を知らないで博士に随つて酒を飲みに行くと、調子が違つてちよと具合のわるいことがあつた。

私は一度博士に随いてバーや珈琲店を飲んで廻はつたことがあつた。その日最初に博士が私を伴れて入つたのは、音羽の入口に近い所にある珈琲店であつたが、まだ博士の習慣を知らなかつた私は、珈琲店へ入つても博士のことであるから、大に酒を取り肴を貰つて、盛に飲むだらうと思つてゐると、博士は

『酒を一本』

と云つて注文した。私はその後で肴を注文するだらうと思つて待つてゐたが、別に肴を注文するふうもない。その内に一合入の銚子が前に來ると、博士は私の盃へも注いでくれ、自分の盃へも注いだ。私は博士がこれから肴と後の酒を注文するだらうと思ひかへしたが、それでも博士は何も云はない。そこで私は博士はみかけによらないけちな人だと思つて、心の中で博士を輕蔑しはじめた。

僅に一合の酒は、二人の盃に三四杯づつ注ぐと無くなつた。すると博士はポケツトから錢を出して置いた。

『行かう』

私は面白くないので碌碌返事もせずに随いて行くと、今度は

山吹町のバーに入つた。私は博士が最初の家で蚊の血を吸ふ位飲んで出たのは、汚い食ふ物も碌碌無い家であるから、ちよつと飲んでから出たのであるから、此所では酒も多く取り肴も貰つて、ゆつくり落ちついて飲むだらうと思つてゐると、又酒を一本注文した。そして、それは二合壜であつたが、やはりその酒ばかりで他に肴も取らずに飲み、無くなるとすぐ腰をあげた。私は又博士を輕蔑したが、しかし少し酒がほろりとしかけたので、物足りないことは物足りなかつたが、それでも最初のやうな氣持ちはしなかつた。

博士はそれから三軒目の家へ入り、四芝目の家へ入つた。其所へ入つても博士は、やはり肴は取らずに、一合壜か二合壜かの酒ばかり取つたが、私はもう博士を輕蔑しなかつた。私はもう宜い氣持ちになつてゐた。

六軒目か七軒目かになつて博士は云つた。

『君、ひもじくはないかね、何か食はふぢやないか』

博士は其所で料理を注文して食事をした。私は醉つてゐるので咽喉へ物が入いらなかつた。

その日は十軒あまりも行つて、夜遲くなつて歸つた。私は醉うてぐでぐでになつて苦しくて苦しくて仕方なかつたが、博士は愉快さうにしてしやれを後から後からと云つた。

博士はバーに行くと、女給達を相手にして拳などをやつた。しかしその拳はありきたりの拳でなしに、珍らしい品の宜いものであつた。今よく見かける、指を出して十とか五とか數を云つて、相手にその數を出させないやうにする拳は、博士のはじめた拳のやうに思はれる。博士のよく行つてゐたバーは、牛込肴町の書肆の横を入つた右側の家であつた。

その和田垣博士の酒の左右には『牛込の先生』で通つてゐた漢學者の中川克一翁や、川村清雄畫伯がゐた。その川村翁は白絹の袷を著、つるりと剃つた品のある頭を光らして、日本橋の書肆の三階でよく繪を書いてゐた。川村翁は十六の時勝海舟に知られて、歐洲へ繪畫の修業にやられた人であつた。この川村翁のためには、和田垣博士は勝海舟に次ぐの後援者で知己であつた。

中川翁は久しぶりで博士と郊外を歩いて、かへりに淺草の神屋バーへ寄つて酒を飲み、ひどく氣持が宜いと云つて詩吟までやつたが、その翌日になつて忽然として逝いた。博士はその當時、

『近火だ、近火だ』

と云つて恐れてゐたが、大正八年になつてとうとうその後を追つたのである。

三

白髮白髯の赭顔の老翁があらはれて來た。それは寺尾亨博士であつた。私が博士に接したのは前後二回で、最初は本所の寺で、次は江戸川端の『石橋』と云ふ鰻屋の二階であつた。その江戸川端の鰻屋で逢つたのは一昨年の夏で、その時私達は、博士から酒と鰻の話を聞かされた。

博士は『菊正宗』が好きで灘から直接に取つてゐると云つた。博士は又酒の燗は陶器でなければならぬと云つて、金釜で燗をすると云ふやうなことを笑つてゐた。

鰻の話になつて、博士は行きつけの淺草の鰻屋の話をはじめ、鰻は白燒にして喫ふのが一ばん旨いが、燒き方が面倒であるから、ちよつとした鰻屋ではようこしらへないと云ふやうなことを云つて、それから鰻の白燒を特別に注文して、その白燒のつけるしたじから喫ひ方までも說明した。

博士はその晩、私達に自家の酒を飲みに來るやうにと云つたが、それが最後となつて、二度と博士に侍して酒の話を聞くこともできなくなつた。

博士が私達の中へ顏を出したのは、博士の經營してゐた學校の事務を執つてゐた浦野と云ふ私達の友人を記念する會に臨むがためであつた。

浦野君の名は熊太郎、福岡の人であつた。醉うて來ると眉を怒らして、握り拳で膝を叩きながら浪花節をやつた。

『毛利大膳さんは、利巧か馬鹿か』

キンキラキンと云ふ歌を歌ふこともあつた。

この浦野君は風をおして酒を飲んでゐたために、氣管支を痛め、それから肺になつた。私達が見舞に行くと枕頭で酒を飲まして、自分は血を吐きながらこれを見て樂んでゐた。

浦野君は故郷に近い瀨戸內海の島に轉地療養に行つてゐて倒れた。私達は酒友を弔ふために、その翌年の一週忌にあたる日、本所押上の浦野君の知人の僧となつてゐる寺で、正宗の四合壜を二本供へて祭り、それから別室で酒を酌んだが、その席にも寺尾博士が見えたのであつた。それが私が最初に寺尾博士に逢つた時である。

浦野君を記念する『浦野會』は、毎年六月の梅雨の頃に少集を催すことになつてゐる。その浦野會には、弘田東行、高木斐川、辯護士の原孫六君などが來て酒を飲むことになつてゐるが、そのたびに皆の口から情熱的な浦野君と喧嘩をした思ひ出話がでる。その中で浦野君と弘田君の喧嘩はふるつてゐる。ある時浦野君が、

『聲の大きな奴は、馬鹿だよ、僕の妻の爺親はとつても大きな聲をする』

　と云ふと、弘田君は、

『聲の大きな者は、馬鹿ぢやない、そんなことはない』

　と云つた。それは弘田君の聲が非常に大きいので、異議を云ひたてたところであつた。

『馬鹿だよ、馬鹿だから聲が大きいんだ』

『馬鹿ぢやない、聲の小さい奴が馬鹿ぢや』

『大きい奴が馬鹿だ』

『小さい奴が馬鹿ぢや』

『なに』

『喧嘩ならやつちやろぜや』

　聲の大きいのが馬鹿だと云ふ方も、聲の小さいのが馬鹿だと云ふ方も、皆大きな聲で怒鳴りだした。

四

　下顎の出た口元に力の集まつてゐるやうに見える痩せた顔があらはれて來た。それは滄溟先生宇田友猪翁であつた。滄溟先生は豁達卓犖、當世希に見るの風格をそなへた漢詩人で、板垣伯の門下として、地方の新聞に主筆をしてゐたが、今は仙臺にあつて二兒の教育に沒頭してゐる。

　滄溟先生の酒は焦遂の酒で、雄辯ではないが高談放言四筵を驚かすものがある。私はその滄溟先生と酒の上で爭ふたことがある。それは滄溟先生が土佐から出て來たので、在京の知人が集まつて心ばかりの歡迎の宴を催した酒の席上であつた。

『君、和田君の原稿を買つてやつたらどうだね』

　と滄溟先生が云つたが、先輩和田翁の原稿は、私の關係のある雜誌などには不向のものであつた。

『和田先生の原稿は、立派な原稿ですが、私の知つてゐる雜誌にはどうも向かないでせう』

　と私は云つた。すると滄溟はかさにかかつて來た。

『向かないことはない、買つてやれ』

　さう云はれると私も默つてゐられない。

『それは、あなたが判らん』

『判らんことがあるか』

『判らん、教へてやらう』

『なに、なぐるぞ』

　滄溟先生は正面の床の間から膳を跨いで、その向ふ側にゐた私の前へ飛びだして來た。その時は八月頃の暑い最中で、皆知りあうた中であるから裸になつたり、片肌脱になつたりしてゐる

る者もあつて、滄溟先生も裸で越中褌一つになつてゐた。その滄溟先生は喧嘩に強いので知られてゐた。私は困つてしまつたが賣られた喧嘩を買はないわけにも行かないので、起ちあがるや否や、いきなり滄溟先生の體の一部分をぎうと摑んだ。

　これにはさすがの滄溟先生も立ちすくんでしまつた。とそこで皆が起つて來て止めてくれたので、私もそれを幸にして摑んだ手を放したが、今思ふとそれも忘れられない懐しい紀念の一つである。

　その滄溟先生から聯想に入つて來たのは、楊舟先生東川徳治翁である。楊舟先生は漢學者で、支那の制度法律の研究に深い造詣を持つてゐる。この楊舟先生は上村左川氏の友人で、桂月先生と親しくなり、後には姻戚になつたのであるが、私はそんなことから明治三十六年最初に上京した時には、一二ケ月楊舟先生の玄關にころがり込んでゐたことがある

　この楊舟先生も桂月先生と同じやうに、酒に特別な好みを持つてゐなかつた。私がころがり込んだ時には、楊舟先生は牛込の天神町にゐた。

『君、ひがしがはと云ふちや判らん、あづまがはと云はんといかんよ』

　さうして酒の注文に行つた食客は、毎晩そのお相伴をしたものだ。

　酒に特別な好みを持つてゐなかつた楊舟先生は、時とすると泡盛を飲んでゐることがあつた。小さな二つの盃へ、一つにはその泡盛を注ぎ、一つには水を入れて、泡盛を一杯ぐいと飲めば、水を一杯ぐいと飲むと云ふやうな飲み方をしてゐたのを覺えてゐる。

『鹿兒島ではかうして飲むよ』

　醉うて來ると平べつたい顔を振つて義太夫をやつた。

『わしや、まけ、た、か、はづかしい、』

　楊舟先生の娯樂は、將棋と角力であつた。この楊舟先生も滄溟先生と同型に屬する壯士肌の人であるが、滄溟先生よりはゆとりがあつて、めつたに自分から手出しをするやうたことはなかつた。しかしそれでも癪に觸る人があると、

『おい、角力を取ろか』

　と云つて、角力の手で相手をこらした。京都にゐる時には、酒友の市村光惠博士と喧嘩をして、角力の手で取つて押へたので、市村博士に喰ひつかれたと云つて、右の拇指の傷痕を見せたことがあつた。

　桂月先生も楊舟先生も、滄溟先生も市村博士も、弘田直衛君も、私も、皆土佐の産で、縱酒、狂醉、禮法をあなどつて痛快

がるところに、共通した血の流れを思はすものがある。楊舟先生は今仙臺にゐる。

川田功君も酒徒で、私の竹馬の友であるが、つむじの置位が正しくなかつたがために、中佐で海軍を休職になつた。それは海兵團か何の教官になつてゐて、小鳥を多く飼つたところで、上官から注意をくつた。つむじの置位の正しくない川田君は、ますます多く小鳥を飼つたので、それからまもなく首になつた。川田君には海軍生活を書いた『戰する身』と云ふ著書がある。

土佐藩主山内公爵家の歴史を編んでゐる田岡髮山先生も一世の酒豪である。維新史料の岩崎鏡川先生は、胸に病を得てから斷酒の人となつてゐる。田岡嶺雲先生は觴を擧げて白眼青天を望むの酒であつたやうに思はれたが、明治四十年に私の逢つた時には、半身不隨の病人になつてゐたので、酒徒としての風丰に接することのできなかつのは、今に遺憾に思ふところである。

書肆文會堂主立川堯元翁は、やはり土佐の宿毛の人であつた。酒の氣の無い時には、

『ヘエ、ヘエ、どうもヘエ』

と眞白な頭を撫でて、ぺこぺこと頭をさげてゐるが、醉つて來ると、

『手前達のやうな、はつぱな奴はだまつてろ、こら』

とすさまじい勢になつて來る。先生先生と云つて這ひつくばふやうにしてゐる著者、なかでも芳賀矢一博士、黑板勝美博士にでも、酒が廻はつて來ると、

『芳賀君、黑板君』

と云つて友達あつかひになる。詩人結城蓄堂氏などは、

『おい、結城』

とやつてのけた。唄が好きで醉つて來ると屹と歌つた。

『じようだんにイ、さしたアやなアぎイがア、めをウふくゥちやアないイかア……』

土佐の俗謠のヨサコイ節と同じやうな調子では、

『あいはアせにすむゥ、とりはアきイにとゥらまる、ひとはなア、さア、け、の、ふちにすむ』

浪花節は蓄音機で覺えた奈良丸の勸進帳。

『たびのころもは、すゞかけエのゥ……、……かめい、かたをか、いせするが、なかには、ずんぺらぼうのむさしぼう……』

酒の歸りに二囘車から落ちて、右の脚に故障があつたので、平生も黃楊の杖を突いて、跛ひきひき歩いてゐた。酒を飲みはじめると五日でも十日でも、錢を縮めるまで飲んで、體を痛め

るとすこしやめて、醒ると又飲んだ。

立田翁の酒は病的であつた。飲みはじめると朝から店の者をぞろぞろと伴れて小川町附近を飲んで歩いた。ある時、家の人が翁の健康を心配して、出かけないやうに下駄と杖を隱し、酒を持つて來いと云つても持つて行かずにゐると、翁は涙を流して家の内を彼方此方してゐたが、臺所口で女中の下駄を見つけたので、いきなりそれを履いて裏口へ出、乞食か何かが捨てて行つたらしい竹切を拾つて、それを杖にして近くの料理屋へ行つたので、家でも仕方なしに店の者に杖と下駄を持たしてやつた。

友人で同じく酒徒である森下雨村森澤布川の二人も、この立田翁と盃を共にしたことがあるが、その中でも森澤君は、一方で吐きながらぐいぐいと飲んだので、立田翁に舌を捲かした。

『あの人は豪ひ、やつぱり今に飲んでますか』

その森澤君は湯ケ原で卒倒してから酒を廢し、立田翁は一昨年の秋に忽焉として沒くなつた。その立田翁の頭の毛の白い、黄楊の杖に縋つてとぼとぼと行く姿が、盃を掠めて通る。

五

私の屠蘇盃には、後から後からと酒徒の顔があらはれて來る。電車將軍の松本道別君、福田重政君、木村鷹太郎君、石川諒一君。兒玉花外君はぐでぐでになつて何人かの肩にその蛸のやうな兩手をからましてゐるのが見える。道別君福田君石川君達の背後には、槎枒たる枝に咲いた梅の花があり、櫻の枝があり、海苔しびの出た干潟があり、お羽黒蜻蛉のついついとしてゐる小川の水があり、野祠があり、森があり、燕の飛んでゐる河原があり、茶店があり、赤い實のなつた柿の木がある。その二人の傍にはへうたんを腰にした人の影も見える。

盲人の顔が朦朧としてあらはれて來る。その盲人の胸のあたりには、一綴りの文字が刻みつけたやうになつてゐる。それは『飲めばすぎ飲まねば佗しならはしの酒に幾歳悶へぬるかも』と云ふ述懷めいたものであつた。それは神田の猿樂町に住んでゐた盲唖學校の敎師であつた。

電車が行く、黄ろな小さな人力車が將棋の駒をぶちまけたやうに右往左往する、自働車が行き違ふ、洋服を著た鈎鼻の眼の碧い男が行く、金髪の女が來る、苦力が行く、支那服が行く。其所の店の飾窓には、赤や黒のクロースの日本文字の書籍が見える。其所は上海の閙行路の書店で、土間になつた細長い店の見附には、洋服を著た背のひよろ長い眼鏡をかけた男が、日本文字の新聞を見てゐる。その頭の上には柱時計がのろのろと時を刻んでゐるのが見える。

その新聞を見てゐるのが店主の島津四十起翁である。島津翁はそれからすぐ近くの日本人倶樂部へ球を突きに行かうか、それとも南京路か福州路あたりへ散歩に行つて、老酒でも飲んでかへりに佛蘭西租界の知り合ひの家へでも行かうかと考へてゐる。そしてその内に島津翁の頭にちらちらと詩が動いて來る。島津翁はそこで新聞を置いて店の用箋の端にペンを走らせる。

その島津翁の靜かな生活も、私が上海の人となつたがために掻き亂された。私と島津翁の口には、花雕の盃が離れなかつた。同文書院の清水董三氏は酒徒ではなかつたが、何時も私達の酒の傍にゐた。

南京では井上紅梅氏と盃を共にした。秦淮の流れに畫舫を浮べた時には、ドクトル板坂氏、畫家谷丹矢君との四人で乾盃した。この四人は秦淮の流れに臨んだ茶館で朝の食事を取つて、紅梅先生から支那の女のことや酒のことを聞いた。

上海附近の遊行をすました私は、香港を經て廣東へと行つたが、香港には俳句と未見の酒友が待つてゐてくれた。しかし、もう香港へ行つては、花雕の美味を味はふことはできなかつた。

廣東には柳瀬五山君が私の行くのを待つてゐてくれた。廣東のことを思ふと、先づ榕樹の並んだ沙面の外國租界が歴歴としてあらはれて來る。その沙面の洋館の庭には、芙蓉のやうな眞赤な花が見え、ねむのやうな花の高い木に咲いたのも見える。

其所は赤濁りのした水に包まれた所で、廣州の市街とは橋によつて往來してゐる。その沙面の岸を浸してゐる水は、有名な珠江の流れで、それには香港へ往復する汽船、ランチに曳れた大荷物船、舢板と呼ばれてゐる水上生活者の住む屋根のある小舟、十餘人の苦力に車を踏ませて進ませる荷物船。さうした船が眼まぐろしく行くのが見える。

飯に入れてむされるやうに暑い聯興西街の支那家屋の中で、西瓜の核をぽつぽつと割りながら、ウヰスキーを朝から晩まで飲んでゐた自分の姿が見えて來る。この私のウヰスキーを飲んでゐる傍には、二三人の人がゐる。

海關にゐる會田柏嶺君、岩城渭城子君、それから主人公の柳瀬五山君。西瓜の核を割らない時には荔枝の實を喫つた。苺のやうないぼのある硬い皮を剝いて、中の青白い實を喫ふ荔枝の味は忘られないものであつた。

酒徒の中では會田君が强かつた。酒の間には麻雀と云ふ手遊びをやつた。その手遊びを夜の十二時頃までやつて、幾等か涼しくなると珠江を渡つて河南へと行つた。

河南の支那街の中に日本の旅館營業の料理店が二軒あつた。

その料理店の一軒は蓬萊館と云ひ、一軒は東洋軒と云つた。私達はおもに蓬萊館と云ふのへ行つた、其所には九州あたりから來てゐる女達がゐて、伊那節の踊を踊つた

疊を敷いた室の中には、旋風器がまふてゐた。私達はその旋風器の下で日本酒を飲んで、朝明けの靜なすこしの間を眠つたのであつた。

ウニの罎詰もコノワタも其所にあつた。私はある朝、其所の料理場に松魚のあるのを見つけて、それを燻して土佐流のたたきをこしらへたが、暑さのために舌が焦げてゐるので何を喫つても味がなかつた。

河南では日本の領事館の人々に逢ふことがあつた。この人々は時折私の許へもやつて來た。ある時、その時も若い領事館員が二人ばかり來てゐたが、朝からの酒に氣焔のあがつてゐた私は、廣東政府のことから、支那で帝業を期めて、酒友と一緒に富貴を取らうと云ひだした。

『君には公爵を授けてやる』

『君は外務大臣が好いだらう』

『さア、もすこしやりたまへ、もすこし飲めば、さふらふ侯にしてやる』

六

屋根のある障子の入つた舟が入江の湖の上をすべつて行く。その舟の中には重詰の肴があり、花のやうに著飾つた五六人の女が、三四人ゐる男の間にはさまつてはしやいでゐる。

その男の中に髪の毛の長い髭の濃い男がゐる。それが白雲先生本山氏である。それは二三年前の初春のことであつた。この船には私もゐれば、土陽新聞の尾崎暇江君もゐた

私達は高知市から屋根舟を浮べて、浦戸港の右岸になつた種崎の海岸へ遊びに行くところであつた。

舟は三里の江上を行つて、種崎の海岸へ著いた時には、もう陽が入つて、海の方からあがつた月が左岸の海中に突出した岬の上に光つてゐた。私達は女達に渚から乾いた藻屑を拾つて來さして火を燒いた。

燒火の鼠色の煙は空に靡いて行つて、それが月の面を掠めた。

『實に良い、良いんですね』

と、彫刻家の白雲先生は煙の行方をぢつと見てゐた。

船遊びのことを考へてゐると、撒網を打つ船が眼の前に見えて來る。その撒網船は十艘にも二十艘にもなつて、それが雁の列のやうに連なるかと思ふと、先の船から順々に網を飛ばして

水の中に沈める。それが土佐でやる廻はし打ちと云ふ打ち方であつた。私を乘せた屋根のある小舟では、その撒網で獲つた鯔を料理してゐる。料理の内では、鯔の肉を刺身のやうにして、それを各自にはさんで小釜の湯に入れ、煮えくたらない内にあげて、三倍酢につけて喫ふ湯鯔と云ふのもあつた。

膾には無論した。三枚におろした肉へ松茸を入れて羹にしたのは、この地方の佳肴と云ふことになつてゐた。

私の傍には、銀、楠衛、勝。さうした幼な友達がゐて酒の相手をしてくれてゐる。

『あの松の木の下は、銀があの人と毎晩逢うてゐた所ぢやねや』

私は東の方の入江の岸に見える大きな松の木に指をさして笑つた。

市の中を流れてゐる大川に繋いだ舟があらはれて來る。それは大阪の川にある牡蠣舟である。私と若い新聞記者とは、その舟でどて燒を取つて酒を飲んでゐた。

それは暖な潮の匂がほんのりとちる日の夕方であつた。私達二人はそれから電車に乘つて、戯場の多い街に行き、その裏手になつた小さな家へと入つた。

私達はその家で夜遲くまで飲んで睡り、朝になつて溫な雨の降る中を近くの錢湯へ行つて、良い心地になつて歸つて來たがまだ主婦が起きてゐないので、格子の間から投げ込んである新聞を拾つて讀んでゐると、魚屋が門口に來た。

『おい、何がある』

と聞くと、魚屋は

『太刀魚があります』

と云つた。笊の蓋を開けさせると、なるほど大きな太刀魚を五六尾持つてゐた。

『それを二ひき、燒くやうに切つてくれ』

他に白魚のやうな鰯の煮干も買つて、茶の間の長火鉢に木炭火をこしらへ、銅壺へは若い友人が土間の樽から脫いて來た酒をつけ、一方では鐵きうをかけて魚を載せた。

『お神さんは起きないか、なあ、良い御馳走があるんだが』

やがて酒が沸き魚が燒けたので、二人は灘の本場のとろとろした酒を又飲みだした。それは私が支那へ出かけて行く時の醉興の一つであつた。

七

屠蘇の盃へは中島信虎翁の顔も映つた。匏瓜先生金森君のへちまのやうに長い青い顔も映つた。鈴木壽月君の角な顏も映つた。

小澤季樂君の義太夫をやる顔も映つた。その小澤君の義太夫の顔の後で、樗陰先生の繪にある金太郎のやうな顔があらはれた。その樗陰先生は、右の手で拳をこしらへて、それを左の下腹にあててゐた。

『……やぜん、きでんに、おめにかかり、わかれてかへる、みちみちも、かねの、くめんに、とやかくと、こゝろも、くらき、くらまぎれ、やまこす、しゝにであひ……』

それは樗陰先生の秘戲であつた。その樗陰先生の秘戲を演ずる傍には、桂月先生と私とがゐた。その時桂月先生は雲井龍雄の詩吟。

『みどりイはアアうるウほひイ、くれェないイはアアしづんでエ、しよウとウしてエちからアなしイ』



大正十二年を送りて大正十三年を迎ふる辭

大正十二年を送りて　大正十三年を迎ふる辭

長田秀雄

「夢が浮世か、浮世が夢か……」と、私の愛好する赤坂靈驗記の語りだしにあるが、實際、我々はこの大正十二年を送つて、恰かも、過ぎ去つた瞬間の果夢のやうな印象を感じたのである。

念へば今年くらひあはたゞしく過ぎ去つた年はない。よく老人などが、年を重ねるに從つて、一年を短かく感じるやうになると云ふ。私たちにしても、まだ、世の中の實際を知らなかつた子供の頃のお正月の待遠しさを思ふと、この頃の月日の立つ早さには、打驚かされるのであるが、それにしても、今年くらひ早く過ぎさつた年は、稀である。

今にして顧みれば、一年三百六十五日がわづか、一瞬間の間に飛去つたやうな氣がする。即ち、その一瞬間とは、あの大地震の時の事である。

既に過ぎ去つた大地震を今再び思出すのは、私としてもたへがたい氣持ではあるが、この大正十二年と云ふ年が、あの大地震によつてのみ記念されてゐる以上、大正十二年を語れば、自然と、大地震に及ばざるを得ないのである。

此上もなく正確なやうで、實はきはめて不正確なのが我々の

記憶である。仔細に考へてみれば、今年の初頭よりさまざまの事件があつたには違ひないが、すべての事件は事の大小となく、みな、あの大地震に吸收されてしまつて、我々の腦裡には、さらに姿を止めてゐないのである。

たゞ、一つ、今年初頭の事で、今でも鮮やかに、私の心に殘つてゐる事がある。何新聞であつたかハツキリ覺えてゐないが、米國の電報として、今年はベーリング海峽を通る寒流の位置が變化してゐるやうだから、日本の北部には飢饉が襲ふだらうと云ふ學者の言を傳へてゐた事があつた。それから一月もたつてからであつたか、信州の諏訪湖の表面が例年全部氷つてしまふのに、今年は中央部に氷結しない部分がある。土地の故老たちは、諏訪湖が氷らない時には、何か凶變があると云つて恐れてゐると云ふ事が、やはり何新聞かに出てゐた。

一體一昨年あたりから、地震が頻々とあつたり、雨が多すぎたり酷寒酷暑が襲つてきたり、どうもわが日本の氣候は順調ではなかつたやうだ――私はそれらの新聞記事をみて、ひよつとすると、何か天變地異があるのではないかと云ふ恐怖を心ひそかに抱いてゐたのであつた。

然し、大地震が來やうとは思はなかつた。もし、やつてくれば、大飢饉であらうと想像してゐた――然るに、突如として、大震一過、帝都を一片の焦土と化してしまつたのである。まことにはかり知られぬ天の命運ではないか。

魂も消ゆるばかりの不安恐怖に惱まされた數日は、いま、わが心に歴々として殘つてゐる――かくして、私たちは、やうやく人らしい心持を回復してきた。

年の暮がせまつてくると一緒に、世間は段々靜まつてきた。そして、大東京の街區には、隅から隅まで、釘を打つ丁々たる音、板をひく鋸の響がみちみちてゐるのである。

いま、暖かな南の窓の下に机を据えて、靜かに默想して居ると、冬の日射の光の内に、賑やかな東京造營の響が、夢のやうにきこえる。それをきくと、私の心は、自から和んでくるのである。

が、然し、あの凄慘な大地震の印象は、我々の心から去つてしまつたのではない。大震大火、鮮人虐殺と相つゞいで露はれた天變と、人心の惑亂とは、史上稀にみる處である――今にして思へば、あの震後の夜、空は怪しく晴れわたつて、仲秋の大月が異樣に青ざめた光を投げてゐる時、處々に起る銃聲をきゝながら、街路の上に野宿をした心持は戰慄なしには、どうしても心に浮んで來ないのである。――殊に全市を燒いた火焰の光が、天の一方に集積した怪奇な雲に音もなくうつゝてゐた光

景は、私たちの魂にきざみつけられて、汚點の如く殘つてゐるのである。

大正十二年はかくして大凶の内に過ぎてゆく。私たちは幸にして、生命も財産も全うし得たのである。そして、新らしく來るべき十三年を迎へんとしてゐる。

この頃私は燈下に坐して、幕末維新の歴史を讀んでゐる。はからずも私は安政年度の大地震についてくはしく知る事が出來た。

安政の地震は、東京を破壊した事は、今度よりもはるかに大きかつたらしいが、火事はさほどではなかつた。

私が、今回の大震と比較して興味を感じたのは、地震前後の時世についてゞある。

安政の大震の時は、丁度、黒船が極東に隔絶して西洋の文化を知らなかつた日本に現はれて、天下を驚かした時である。尊王攘夷と佐幕の議論に世をあげて没頭してゐた時である。クーデター と暗殺とが、京都と江戸とを戦慄させてゐた。黒船と異人とは、凶禍をもたらす禽獸のやうに、嫌はれ恐れられてゐたのであつた。

今回の大震に際して、露國からわざく救濟の材料を積んでやつてきたレニイン號を追跡した事なども思出されるのである。大杉氏平澤氏等の横死、甘粕大尉の心事など、興味ふかく當時の幕府の役人、志士の行動と比較されるのである。かくして、暗憺たる空氣の内に兎も角も時代の力は、あらゆる反抗を押破つて、王政維新の世を開いたのであつた。

我々は大正十三年を新らしく迎ふるにあたつて、封建時代を押破つた時代の力を痛切に考へさせられるのである。無論、今回の大震や、安政の大地震が、直接、時代の急激な推移に直接の關係はないかも知れない。が、然し古來の歴史を考へると、大地震、大飢饉と云ふやうな天變地妖の前後に、民心の覺醒が伴なつて起つてゐる事が多いのである。

これ迄、私たちは、感情の上では、現在の社會、都會の現勢などを、しらずしらず永久の相と思込んでゐた。大地震や、大飢饉くらひで、社會の組織が、あゝ云ふ風に亂れやうなどゝは少しも考へてゐなかつたのである。また、東京に、あんな歴史にもないやうな大火が、この防火設備のとゝのつた大正の今日起らうなどゝは、夢にも思つてゐなかつた。

然るに突如として我々の信念はくつがへされた。美くしい女の笑顔が、みるみる内に、髑髏に變じてしまつたやうな氣がしたのである。

人生の惡夢に襲はれた私たちは、憬然として、何等成すところもなく、たゞ、立ちすくんでしまつた——人生の意識が、戰慄してゐる内に變つてしまつたのである。

人間は如何なる災難に會つても、決して希望と空想とを失はない者である。新らしく來る大正十三年を迎ふるにあたつて、私はやはりこの事を深かく感じてゐる。

私の希望と空想との内に現はれた大正十三年は、この大地震によつて、すつかり破壞されてしまつた過去の因襲たる明治以來の飜譯的文化から離れて、民族の獨創を重んじた文化が生れるであらうと云ふ事である。

我々の踏む大地には、甘美な野菜と、美くしい植物とが繁茂してゐる。土に合ふ物はすべて生きるのである。

思想の曙光に明けんとする大正十三年

小川未明

大正十二年は、「大正大地震」によつて、永久に記憶されるでありませう。

さういふ意味からでなく、私は、もつと十二年が、私達にとつて意味深い年であつたと思ひます。それは、私達の眞價を、眞に見せてくれたからであります。

私達は、恐らく、いまゝで、自からを進歩した人間だと思つてゐたでせう。少なくも、事實に現はれた、人間よりは、進んだ、發達した人間であると思つてゐたにちがひない。事實に現はれた。私達兄弟は、あまりに野蠻であり、狂暴であり、無反省であつて、一種厭惡な感じすらさせるからであります。

私達は、庶民を見ること、さながら犬馬の如くであつた過去の武力萬能の時代を、決して、文化の進んだ時代と思ふことができない。たとへその時代に於ての至高の感激に對する犧牲的精神の如きは、實に美しかつたにちがひないが、同胞を見るに、斯の如き差別を設け他人の生命や、幸福や、平和を顧みなかつたのは、たしかに野蠻であつたといふことができるからであります。

その時代を顧みて、今日に至るとたしかに制度の上に革まる

ものが多かつた。そして、文化は促進された如くに見られた。このやうに、西歐の文明は、移植され、また學校は、諸處に數限りなく建設されて、これを見たゞけでも、凡そ、物質文化の一般を知ることができるからです。

私達は、斯の如くにして、自分達の思想も道德も、生活も向上したと信じて來た。しかるにこの文化の爛熟期に當つて、かの大地震があつたのです。

大地震の結果は、何を生じたでせうか。持つてゐる物は、みんな失はれた。莊麗な街も倉の中にしまつてゐた財産も、ありとあらゆる形の上にあらはされたもの、即ち大東京、横濱に於ける物質文明は倒潰し、龜裂を生じたのであります。このことは、ちやうど、金持が、金を無くしたやうなものです。昨日までは、いかやうに澤山財産を所有してゐた金持でも、今日それを失くしてしまへば、もう金持ではないのであります。その者が、昔、一介の百姓であつたら、また、今日は、一介の百姓に過ぎなくなつたのです。もはや、彼には、誇る何ものもあるのでありません。

しかし、その男が、教養されてゐたなら、たとへ富は失つても、決して、それがつまらない人間ではなかつたでありませう。

私達は、一時、あの社會の混亂期に際して、みんなの取つた態度を何う見たであらうか？それは、同胞のために、遺憾がなかつたらうか。果して、人類に對して、封建時代よりは、遙かに進んだ考へを實地に有してゐたゞらうか。そして、理性によつて、不安と迷妄とに、よく處することができたであらうか。このことは、自警團事件、主義者虐殺、それらによつて、私達に非常に疑問を生ずるに至らしめたのです。

私達は、もつと私達兄弟に對して信じてはゐなかつたでせうか？少なくも、これ程までに、慘虐なことが、私達兄弟の手によつて、もし一朝事變に遭遇して、精神が興奮したら、いつでもなされる恐れがあると、平常、互に顏を見合つて、笑つたり、語つたりする間に思つたでありませうか。私は、そのことを考へると、惑ふのあまり、奇異な感じにすら、捕へられるのであります、

けれど、それは、事實であつて、今や、これを疑ふ餘地はない。私達の眞價は、そこに止まつてゐたのです。たま〳〵震災によつて、暴露されたので、もし、震災がなかつたら、私達は依然、眞價以上に自分達を信じてゐたことでありませう。が、危險も、またそのまゝ隱されることによつて、一層の危險があつたでせう。そしていつか、その機會がきたら、突發すべく、

決して、永久に、暴露せずにゐることはなかつたでありませう。

震災は、私達に、未曾有の苛酷な犠牲を拂はしたけれど、それがために、私達の持つ危險性を暴露して、私達に、反省の一日も早からしめることを得たのは、この點だけは喜ばなければならぬと思ひます。

過去五十年間の文化は、その施設に於て、つとめたと言はなければなりません。前にもいつたやうに、學校の數からいつても、驚くべきものがあります。そして、五十年の歳月は、短かいといふことはできない。それにかゝはらず、理性に於て、道德に於て、思想に於て、たいした進歩を、その外的文化に比較して、見られなかつたのは、どうしたことか。何人も、先づ疑ひをこゝにかけなければなりますまい。

私は、五十年の文化は、たゞ資本主義的文化であつたがためと言ふことを憚かりません。即ち、物質中心の文化であり、模擬的文化であつたからです。

教育も、科學も、すべて、物質主義のための教育であり、科學であつて、それは、決して、人生や、正義を、對照としたものでなければ、悉く、功利主義に、その根柢を置いてゐたからであります。

眞理と科學とは、人生のために、追究する性質のものですけれど、學校はこれを個人の利益を得るために教へてゐたところだつたのです。功利主義、個人主義、物質主義に、教育された人々が人類愛、人生愛に、缺如するのは、蓋し、怪むに足らない結果だつたのかも知れません。

資本主義制度の上に、立脚した。學校教育は、人生的、若しくは、人間的に、徹底したなら、成立し得るものでない。それは、根柢に矛盾を有するからです。けれど、もし、文化の精神が、人類の平和、幸福になかつたら、また、至善、至高の感激になかつたら、教育の第一義を忘却したものと言はねばならないのです。

かゝる間に、私達は、庶民階級の思想戰が、民衆感化につとめたことを記憶しなければなりません。言論に於て、藝術に於て、いまだ所期の目的に達するには、遠いとは、いへるけれど、反動的思想がやゝもすれば、暴威を肯定せんとする際に、眞理に對して、常に、敬虔に其れと進行を共にしたのを記憶しなければなりません。

現政府は、今議會に、普選案を非常な決意にて上程するさうであります。こゝに至つたのは、必然の結果であります。そして、民衆の意志が、つひにこゝに至らしめたもので、今更通過

するのを異としないのです。たゞこれによつて、民衆の自由、幸福がどれ程までに増進するか、こゝに言ふことはできませんが、人間平等の權利の主張が、民衆の理性に徹しただけでも嬉しいのであります。

普選が、無產階級の解放運動から見ても、その過程であるといふ考察は、正しく當を得てゐるやうです。なぜなら、眞理は、いつまでも停滯を意味するものではないからです。勞働者が、眞に、自己の解放を望むならば、一つの概念に、いつまでも囚へられてゐる筈はないからです。

政治を、常に、權力そのものと見て、政治の目的を、私達は考へずにはゐられないからです。暗流であつた無產階級の思想戰が、現實の表面に立つて、爭はれるだけでも、無產階級は、階級戰に、有力な地步を占領したといふことができるでありませう。

まさに、大正十三年は、堂々と表面に立つて、民衆の意志を表白する自由の第一年でなければなりません。

私達は、震災當時、いかに、一方あゝした誤解があつたにかゝはらず、一方には、少なからず、相互扶助の暖かなる感情に、相觸れ合ふことができたか、これを見ても、人間相愛の目的が、決して空想に終らないことも信ずるものです。

私達は、各自の地位について、最善の努力を、新社會建設のために致さなければなりません。

藝術、思想にあつては、すべてが、人間が眞生活を營まんとする運動のために、存在の意義あることを強く意識すべきです

庶民階級の思想、藝術家は、最も勇敢に、思想戰に於て、ブルジョアに挑戰すべきです。

―一二、十一―

新しい芽

田山花袋

去年の後半期に起つた慘憺とした光景は、單に外面ばかりではなく、心の內部にも、さうした消長が、興廢が、絕えず繰返

されつゝあることを私は考へて見た。『廢墟』は常に人間の心の内部にある。心理的にある。決して一時の出來事と言つて了ふことは出來なかつた。

私は『再び草の野に』を書いた時分のことを頭に繰返した。また『廢驛』を書いた時分のことを、『新しい芽』を書いた時分のことを頭に繰返した。その時分は何故か『廢址』といふことが深く私を動かした。私の頭の前にあらゆるものの亡びてのみ行くのを注意して眺めた。

何んな歡樂でも、何んな事業でも、また何んな努力でも、すべて時の間に過ぎ去つて了ふものであることを私は痛感した。私は大きな自然の中に置かれてゐる人間の位置の何んなに小さくあはれなものであるかを思はないわけには行かなかつた。そしてその中にも時は經過して行つた。いろいろな廢址――心の廢址が常に私の眼の前にあつた。あの天下を騒せた有島氏の事件なども矢張その廢址のひとつと言ふことは出來なかつたか。

從つて私の今の考へでは、あの地震などもその時分から私の體と心との中にちやんと巣を食つてゐたのであるといふ氣がした。否、更に一歩を進めて、あの地震の豫言ぐらゐは出來たかも知れないといふやうな氣がした。矢張、あれもこの大きな自然のリズムの一つであるといふ感じを私はつくづく深く味つた。

少くとも、あの地震の前と後とでは、心の持方が非常に違つた。その災厄に實際に遭遇したものは勿論、それを見ただけのものでも、いろないろな感じをそこから受けた。滅びるといふこと、原始的になるといふこと、得體のわからない大きな不安な自然といふものに身を托してゐるといふこと、何うなるか知れないといふ恐怖、贅澤な生活と簡易な生活との區別――その他にも澤山に澤山にあつたであらうと思はれるが、兎に角そこから種々な感じを受けることは確かだ。それは人間だから、出來無意識に――成るたけ何も知らずに生きるやうに自然から拵へられてある人間だから、さういふこともじきに忘れて了つて、また元の木阿彌に成るのはそれはわかり切つてゐるけれども、しかし、その前と後では、著しく眞面目になつて來てゐるといふことは爭はれない事實だ。

私達はあの震災前の疲れた、爛れた氣分を一掃しなければならない。中途半端のデカダンを捨てなければならない。虚榮と僞善とを排さなければならない。そしてこの大きな自然の中にぽつねんと置かれてある人間といふものについてもつと深く考へなければならない。更に言ひ換へれば、私達は一度壞れた『廢址』の中から更に新しい芽を求めなければならない。

しかし、新しい芽は何うしてそこから萌え出して來るか。何うしてそこから生れ出して來るか。以前の古い衣や汚れた襦袢を脱ぎ捨てた新しい姿は、何ういふ形と何ういふ色彩と何ういふ感じとを持つて私達の前にあらはれて來るか。それははつきりとはわからないけれども、しかし私達はそれに向つて大きな期待を持たずにはゐられなかつた。本當に新しい藝術が波を擧げ渦を卷いて來るのを待つのも、あながち空想とばかりは言はれまい。

自然に還れ

上司小劍

太陽のぐるりを、地球が一とまはりする所謂公轉の一回を一年間とすることに、我々は教へ込まれて來た。さうしてそれを信じなければならないやうなことに餘儀なくされてゐる。『さアこれで一とまはりしたぞ。』とでも言つて、地球がそこで一と休みするならば、正月とか新年とかいふことも、だいぶ意味のあるものになつて來るけれど、地球はそんなことに頓着しないで、正月も盆もなく、働きつづけて、頻りに『時』を製造してゐる。公轉も私轉もお休みなしのブッ通しだからえらい。……といふやうなこともまた、科學といふものが、我々に信じさせやうとしてゐる。

大正十二年を送つて大正十三年をこの島國の上に迎へたと言つても、大自然の上から見れば何んの區切りがあるわけでもない。……と、また分り切つたことを、仔細らしく考へたくなる。「公轉によりて四季を生じ、私轉によりて晝夜を作る」と教はつたのは小學校であつたか中學校であつたか、だいぶ前のことで忘れてしまつたが、しかし現代の科學はまだそれを變へないらしい。地球が圓いなんて言つたとて、誰れも掌に載せてころがしてみたものはないから、ほんたうのことが分るものか、と疑ひ深く生み付けられた私は、子供の時さう考へて、今にまた地球は平ッたい、と教へてくれる先生が出て來さうに思はれ

てならなかつた。ところが今日まで無事に、地球は圓いといふことで通つて來た。これから幾年つゞくか知らないが。……『日本は世界の東の端にある。だから極東といふのだ。太陽は東から出る。卽ち日本は日出づる國だ。日の本だ。』と、敎へたのは、地球が圓い、と敎へたのと同じ先生であつた。『先生、圓いものがぐる／＼廻はつてるのなら、どこが東やら西やら分らないぢやありませんか。』と、幼い頃の私の頭は、それがわからなくて、先生に問ふた。すると先生は、持つてゐた扇子をさつと擴げて、『これを地球とすれば、こゝが東で、日本だ。』とかなめのところを指さし、『小さくとも日本はえらい。世界のかなめなのだ。』と、にこ／＼して言つた。

『先生、それぢや地球は圓いんぢやなくて扇を開いた形をしてゐるのですか。』と問ふたのは私でなかつたが、先生はまたにつこりして、『理科の時間には地球が圓くなるし、歴史の時間には地球が扇面の形になる。まことに重寶なものでなア。』と言ひ言ひ、扇をたゝんでポケットへ入れ、この扇子といふものも甚だ重寶なものだ。場合によつて形が變る。とでも言ひたげな顔をした。

丁度其の頃のことだ。私は人がお正月お正月と言つて騷ぎ立つて、お正月が來ると一つ年を取るのだと、嬉しさうに言ふものもあれば、厭やさうに託つものもあるので、何んでもこれは大晦日の晩から元日の朝へかけて、身體が急に大きくなるのだと、思ひ込んでしまつた。そこで大晦日の晩に寢る前、柱へ身體をおつ付けて突つ立ちつゝ、頭のてツぺんに當るところへ、白墨でしるしを附けておいた。さうして元日の朝、父が若水を汲む物音に眼をさまして、跳ね起きるなり、早速黑光りのする柱のところへ行つて、どれくらひ身の丈が伸びたかと、白墨のしるしのところで測つてみたが、一分一厘も伸びてはゐないで、大晦日其のまゝの舊い身體だ。なアんのことだと、私は失望もすれば、馬鹿々々しくなつて、全くお正月といふ のを祝ふ意味がわからなくなつた。年が新らしくなつたと言つたつて、父も母も同じ顏、同じ樣子をしてゐるではないか。何が新らしいのだ。何の爲めに、表へ松を立てたり、大騷ぎをして去年のうちに餅を搗いたりしたのか、私には少しもそれがわからなかつた。しかし、若しやと思ふ心もあつて、元日のくるゝ迄で私は幾度か黑光りのする柱の側へ寄つて、白墨のしるしと頭のてツぺんの高さとを比べたが、私の背丈は大晦日の晩と少しも變らなかつた。

なアんのことだ。これでは正月といふものを迎へる理由が少しも分らないと、私の子供心はまたさう思つた。昨日の自分

と、今日の自分と少しも變つてゐないのに、何故に年が新らしくなるのか 不審にたへなかつた。これはいけない、白墨で引いた線を、誰れかゞいたづらに消して、低く下げて引いたのかも知れない。一寸ぐらゐ下へおろして引きなほしたにちがひない父や母はまさかこんないたづら すまいけれど、事によつたら下女の仕業であらう。あいつなか〳〵わるいやつだから、と私はさう考へて、今度はもう消されないやうに、其の黒光りのする柱の、私の頭のてッぺんと同じ高さのところへ、小刀で横に深く溝を刻り付けた。かうやつておけば、あの下女も、この深い溝を下へさげることは出來まい、ざまア見やがれと、得意になつたものゝ、新年はもう一年待たなければ來ない。昨日の大晦日にこの深い溝を柱に刻り付けておけば今日の元日に自分がどれだけ大きくなつたか、よく分つたのに、あたら下女のいたづらで、折角の計畫を臺なしにされてしまつた、殘念なことだと、私はもう下女を惡者にきめてしまつて、ひとり憤慨してゐた。それほど私は人間といふものが、大晦日の晩から元日の朝へかけて、一度に少しづゝ大きくなつて、やがて大人になるものと思つて、固くそれを信じ切つてゐたのだ。低能兒と言はうか何んと言はうか。しかし、老人が大晦日から元旦へかけて、一時に身體が萎びたり、皺が殖えたり、白髮になつたり、頭がテカ〳〵したりするものとは考へなかつた。

私の子供心のさうした愚かな考へは、其のまゝ其の年もつゞいたが、時々あの黒光りのする柱の側へ寄つて、自分の刻り付けた深い溝の線と丈くらべをしてゐるうちに、何んだか少し其の線よりは自分の身長の方が高くなつて來たのを感じた。これはをかしいぞ、まだ正月にもならないのにと、首を傾けると傾けただけ低くなつた頭のてッぺんが、丁度柱に刻りつけた溝のところに當つて、頭を眞ッすぐにすると、てッぺんの方が少し溝よりも高くなる、若しや黒光りのする柱が土の中へズリ込んだのではないか。それとも、足元の板の間が少しせり上つたのではあるまいかとも思つたほどであつたが、古いけれども岩乘な家で、底津磐根に宮柱太しり立て、と言つた風な、大きな固い礎石の上に載つてゐる太い柱だ。今俄に地中へズリ込むわけはがない。板の間とて鏡のやうに光つた厚い板で、寸分の狂ひさへ生じて居らぬ。いつだかの大地震に、あの大佛殿の大伽藍の山のやうな屋根の四隅の軒に吊るしてある半鐘よりも大きい風鈴が、これまでいかなる大風にも搖かなかつたといふのに、ゆら〳〵と劇しく振られて、ガラン〳〵と氣味わるく鳴り響いたことがある。其の大地震にも、この家はビクともしなかつたといふのが、祖父の自慢として父から私へ傳はつてゐた。其の家

の共の柱だもの、俄に狂ひを生ずるわけがない。これはどうしても、私の身體の方に狂ひが出來て、正月にもならぬうちに、丁度鷄が宵に時をつくるやうに、變則な伸びかたをしたのであらうと思つた。

それから、其の年の秋頃まで、私は殆んど毎日其の柱の側へ寄つては、柱と丈くらべをしたが、一日や二日ではどうといふ變化もないけれど、一と月と經ち二た月と過ぐるうちには、いつか私の身長の伸び行くことが分る。これは妙な身體をもつたものだ。正月にもならぬのに大きくなるとは、不具なのかとさう思つて、私はそれを恥づる心で父母にも告げなかつた。

きちやうめんな母親、家をきれいに住むことの好きな母親、物に疵の附くことの嫌ひな母親は、立派な黒光りのする柱に、深い疵が横に附けられたのを發見して、苦い顔をしてゐたが、或る日私に向つて、『あの柱へ疵を附けたのはお前だらう』と言つた。私は其の時、母親に叱られるのを恐れて、『いゝえ。』と噓を吐いた。母親は其の時それッ切り默つてゐたが、二三日すると私を土藏の中に連れて行つた。私がまた何か道具でも出すのを手傳はされることかと思つてゐると、母親はいつになくむづかしく怖い顔をして、土藏の重い戸を内からゴロ〳〵と締めてしまつた。これは變だぞと思ふ間もなく、私の方に向きなほつた母親は、物凄い顔をして、いつの間にか、短刀を拔き放ち、『さア、柱に疵を附けたのは、いたづらとして、あやまれば許すが、自分にしたことを、いゝえと噓を吐いた卑劣さを許すわけには行かない。刺し殺してしまふ。』と沈痛に叫ぶのである。

さうして私が泣いてあやまりながら、正月以來の苦心のほどを語ると、母親の恐ろしい顔は、忽ちにつこりとして優しい顔に變つて、人間といふものは、自然にじり〳〵と大きくなるもの、お正月が來たとて、一足飛びに伸びるものではない。お正月だとか、新年だとかいふことは、皆人間の戯れだ。といふことを、しみ〴〵敎へてくれた。

千九百二十三年を送つて、千九百二十四年を迎ふるにあたり、私はゆくりなくもお伽話をしてしまつた。——

自然は私たちの優しい女である。其の優しく、えらい自然の生んだ愛子は、これまであまりに自然に對して我儘でありすぎた。自然にそむいて噓を吐いたり、柱に疵を附けたりする不自然な生活をしすぎた。それだから、時々ひどく自然に叱られる。これからはもつと、自然の溫かい懷に還つた生活をしやうではないか。——これをこの新年のことばにしたい。

大正十二年を送りて新に大正十三年を迎ふるに當りて所感を誌す

近松秋江

社會の一隅にたゞ逸民として生活してゐる吾々にとつては、殊に、改暦に際して格別新なる感想とてもない。元祿の頃芭蕉は深川に苟めの草庵を結んでゐる時出火に遭つて、それから更に人生觀が一變したと、自分でもいつてゐる。卽ち現世を火宅と觀じて爾後只管一處不住の生活をつゞけた。「翁繪詞傳」に、

ある年、庵の邊り近く火起りて、前後の家とも、めら／＼と燒くるに、炎熾んに、遁るゝ方あらねば、前なる渚の潮の中にひたり、藻をかつぎ、煙りを凌ぎ、辛うじて免がれたまひて、いよ／＼猶如火宅の理りを悟り、ひたすら無所住の思ひを定めたまひけるとなり、

と書してある。

これによつてみると、あの隱逸翁も深川で火事に遭つたのだ。雨と降り旋風と捲く火の子を遁るゝすべもなく、渚の潮水の中にひたり、藻を被いで煙を凌いだとは、丁度本所の被服廠の水溜に面を伏せて、から／＼に危い命を全うしたと異らぬ運命であつた。

その翁は嘗て又、深川にゐる頃次のやうな句を吐いてゐる。

年の市線香買ひにいでばやな

年の市で表の通りは、いづれもお正月の支度の買ひ物に人が雜沓してゐる。年の瀬に立ちて世俗の人はみんな多忙を極めてゐるが、自分の如き生活にかゝづらひのない者は、歳末に當つても閑暇なものである。どれ、他に市に用事もないが、ひとつ町の賑はひを見かた／＼線香でも買つて來ようか。

芭蕉のやうな世捨て人の心持ちには誰れでもがなりかねる。又凡ての人がさうであつた時には人間の社會は衰退してしまふかも知れぬが、しかし大正十二年の九月一日に突如として起つ

た大天變地異、現世地獄の苦しみを嘗め、その修羅の慘狀を面りに目撃した者は、人生觀に大なる一轉化を來す者も少くはなからう。最愛の父母、妻子を失ひ、杖柱と頼む一家のあるじに離れて路頭に迷ふ者、バラックの堀り立てに打ち叩く彼等の槌の音にも限り知られぬ哀音の籠るを聞かずや。仰いで天に訴ふるも、無情冷酷なる天は應へない。押し詰めて考へれば宇宙といふものが、既に極めて危かしいものである。地球自體が人類萬物を載せたまゝ嘗て靜止する時なく不斷に動いてゐるのである。三界の火宅に坐して永遠の存在を頼りとするは愚かの至りである。

しかし、そんなことを思つて、現前のなすべき事を手を空しうしてゐては、一層人間の生活は慘めなものになつて來る。凝つと、咽喉に詰まる涙を嚙みしめて踴躍するのほかはないのである。失望、悲哀、落膽は恰も惡性の黴菌の如く不幸なる者の胸に喰ひ入らうとするのであるが、そいつを、飽くまで强力なる意思によつて抑へおさへして起つところに人間としての妙味もあるのである。

自然は盲目にして無意識であるが、その時としては極惡非道の惡魔であり、時としては慈母の如き愛を示すところに宇宙の矛盾があり又調和もある。今更めいた、甚だ幼稚な感懷であるが、異常なる天災に遭遇して、斯ういふことを改めて思つてみるのも强ち無用のことでもないであらう。何故に地上に美しい花が開くか、甘美なる果實、穀類、野菜等は育つか。科學者は其等の內具的原因乃至狀態を分析し說明することは可能であるが、何故に地上にさういふ物が存在するかの、外的の根本の不思議は神のほか知るものはない。そのほか一つ〱、好い例を擧げていふまでもなく、いかに此の世界が完全に造られてゐるかといふことは——ほかに、より善き、これと類似の物と比較する術がないので、甚だ獨斷的ではあるが、——これを否む譯にはゆかないのである。欲をいへば限りがない、人間は悉く早逝せずして各々百歲の壽を保つことに定まつてゐるとしたら、どうであらう。すると百歲を超えても尙ほ生存を貪るであらう。概してこの世界は慈み深く造られてゐるものにちがひない。世界はそも〱誰れが造つたのであらう。それは分らない。察するところ偶然に出來た物に外ならぬ。しかし、その偶然は實に巧みな偶然であつたといはざるを得ぬ。造化の奇工といふのがそれである。大正十二年九月一日の地震にしても、これを、巨大なる地球の上から云へば、實に一小部分に突發した、わづかの海底の土地の陷落——地質學者の說を信用して——に過ぎないのである。その一小部分に住んでゐた者が、そ

の爲めにひどい辛い目に遭つたとしても、地球には何等の責任はない。彼は何處までも知らぬ顏をして澄ましたものである。愚かなる人間は、彼等の僻れなる智惠、小賢しさを餘りに强く自信し過ぎて、いろ〳〵な危い藝當をその上に工んでゐた。それがそもそも今度の非道い目に遭つた原因である。人間が自分の力量の程度を慮らないで、大自然の力に反抗したり、又はあまりに自然の愛に甘え過ぎたりすると、今度のやうな飛んだ辛い目に遭ふのである。昔から戰爭をするにも、なるべく身體の動作が自由に持扱はれる時期を待つた。戰爭の如き破壞的行爲には、時期を選ぶ要はないやうであるが、さうでないと思はれる。歐洲の大戰の進行について見てもさうである。賤ケ岳の戰爭は、あの邊が雪の深い處なので、秀吉も勝家も早春雪の消える折を待つてゐた。いかほど耐震耐火などゝ人間の智惠を搾つても、自然の力に反抗することは愚かの至りである。且つ自然の愛を過信することも考へなければならぬ。

自然は人間に比べて遙に恒久不變の本性を具へてゐるものであるが、その氣分(ムード)の變幻不測な點は人間以上に信頼出來ない。

いつの年末でも、歳旦でも、來年こそは今年こそはと思ふがさて一年を通り越した後から回顧してみると、いつの年も大して變つたことはない。しかし、改暦に際してそんなことを思つて、多少心を新にするのもせぬより無益でもない。

大正十二年は忘れ難い惡い年であつたが、個々の場合に立ち入つてみれば、この年が一生忘れられない幸福な年であつた者もあるであらう。しかし、一般の日本人の歴史の上からいへば大正十二年は實に呪ふべき惡年であつた。よつて極めて通俗に考へて大正十三年は、もつと〳〵好い年であつてほしいものである。歳首に當つて將來の一年のことを思ふて志を一新するのは人間の行路に好ましいことである。

しかし、稚い空想に充ちた子供の時を過ぎてしまへば、お正月といふものは、そんなに、樂んで待つてゐたほど面白いものでもない。むしろ歳晩の市中の景氣を見ながら、温い懷中にどつさりお金を持つて買ひ物をして歩く方が愉快である。けれども此の歳末年首は、例年のとほりにならぬ。が、それも爲方のないことゝ諦めて、やつぱり人間は前を見て進むのほかはない。

反省と希望

本間久雄

一九二三年の大震災が、吾國に取つて、未曾有の大慘事であつたことについては、今更こと〲しく云ふにも及ばない。物質上の損害は百億萬圓といふ大へんな額に上つたのは、まだしも再び得ることの出來ないさま〲の美術品、古書籍等、その他文化上の損失に至つては、到底測り知ることが出來ない。吾々は、物質上文化上のこの大損害を醸し出したこの一九二三年といふ年を、つひに涙なしに送ることが出來ないのである。

しかし、この大災厄は、これからの吾々の生活の改善、向上にひいては當來文化の復興に何等かの機縁として役立つことはないだらうか。

世間には、この大災厄を以て、一種の天譴だと説いた人もあつた。世間が餘りに贅澤になり、虚僞になり、輕薄になつたので、天が大震災を捲きおこして誡めたのだといふのである。單に日本ばかりではなく、アメリカの一牧師は、日本が最近餘り朝鮮を虐めてゐるので、神の怒りに觸れたのだと大眞面目で唱へ出したので、彼方でも可なり問題になつたらしかつた。しかしかういふ天譴説は、云ふまでもなく所以のないことである。天災は、それ自らでは何等の意志を持たない自然の單なる偶發的悪戯である。この震災で生命を失つたり、財産を亡くしたりした人と、生き殘つた人、及び比較的物質上の損害を蒙らなかつた人とを比較して、見ただけでも、このことはよく肯かれる。天譴を受けるに値する人間と、それを受けるに値しない人間とを誰れが區別することが出來やうぞ。天譴説などを、この場合、勿體らしく唱へるのは、時代錯誤的センチメンタリズムであるのは云ふまでもなく、生命財産を失つた同胞に對しても、僭越至極の沙汰であらう。

とは云へ、少くもその天譴的感情を單に自分だけの上に持つて來て、自己反省の資料とするのは、あながち咎むべきではない。自分がこれまで、一體どういふ生活をしてゐたか。どういふ生活態度で、その日〲を送つてゐたか、僞りの衣を着ては

ゐなかつたか。文明といふ美名の下に、徒らなる文飾を施してはゐなかつたか。至純な人間性を暗ますところの虚僞と追從と輕薄との雰圍氣の中に、吾れと吾が身を包んではゐなかつたか。突きつめた、眞劍な態度で世に處するといふよりも、すべてにおいてイ・ジイ・ゴーイングな態度や氣持ちではゐなかつたか。要するに、自然の殘虐無慈悲な偶發的惡戲によつて、自分等これまで築いたことが、一朝にして壞滅に歸したとしても、何等の悔ひなくて、それを見守り得るやうな生活であつたかどうか。かういふさまざまな自己反省を、もしこの天災を機會に、吾々が試みるならば、そして、それによつて自分の生活改善、ひいては、將來の文化復興に何等か資することを得るならば、自然の偶發的惡戲である。天災そのものを、結果において吾々が最もよく善用したことになるのではあるまいか。

○

坪内逍遙博士が、この大震災について當時の東京朝日に發表された十幾首の歌の中に

心はたありし淨裸にかへるべき時は來にけり借着ぬがんかな。

と云ふのがある。

一切の借着を脫いで、赤裸の自分となつて、新しく出直すことが、今日の場合最も必要であらう。一世紀も前にルソーが「自然にかへれ」といふことを言擧げして、文明の繁瑣と虚僞の衣を脫いで、人間の自然性に立ちかへらうとしたその生活態度は、今日の場合においても、最も必要であらう。殊にあらゆる方面における文化復興乃至文化再建の今日においては、すべて新しい根本の立場から新しく出發することが何よりも大切であらう。

○

由來、日本人は「諦め」の國民だといはれてゐる。宿命觀（フエータリズム）を、世界中殊によく體得してゐる國民だと云はれてゐる。近代の日本文學に描かれた小乘佛教の人生觀や寂滅爲樂趣味などによると、或ひはさうかも知れない。しかし又一方から云ふと、日本人ほど、光明的で、生々潤達な國民はないと云はれる。そしてその例證としては、佛教渡來以前の、わが古代文學がよく引合に出される。芳賀矢一博士の『國民性十論』には、殊にこのことが力說高調してあつたと覺えてゐる。果してその何れであらうか。

恐らく、その何れにもそれぞれの理由があらう。私は今こゝでその比較論を試みようとするのではない。たゞ、今日の場合わが國民の文化のあらゆる分野における復興期においては、少くも氣分において、佛教渡來以前の光明的な原始的日本人にた

ちかへることが必要だと私は云ひたいのである。さういふことに語弊があらば、少くも吾々の日毎々々の生活を、意識的に享樂する人生の熱愛者、人生の肯定者となることが必要だと、私は云ひたいのである。

私の尊崇する現代の思想家エレン・ケイは、この人生肯定の態度を次のやうに述べてゐる。

「眞に人生の熱愛者となるのは、日毎々々、日の神と共に『けふの日こそ生命なれ！』と喜び勇みつゝ起き出づることである。朝の光りに、立琴の弦の上の眞珠の如きその日のもろもろの賜物を數へ見ることである。日の出から日の沒入まで、いつも聖餐式に侍するやうな心持で、その日の力と甘さとを甘受することである。我等の神話中の古英雄が、蛇の洞穴に陷りても、尚、この世の讚美歌を歌つたやうに、いかなる場合にも、人生を讚美する讚美歌を歌ふことである。いづこいかなるところにも新しき生の芽ぐみつゝある日毎々々を享樂することである」

いかにも味ふべき言葉ではないか。「けふの日こそ生命なれ！」といふことを深く自覺して、その日〳〵に、自分の力一ぱいの生き方をすることがとりも直さず、生活肯定者の生き方である。手のとゞかない、遠い、空のあなたに、常に理想の幻影をかゞげてゐる理想主義者は、かういふ生き方を、或ひは安價な樂天主義と云ふかも知れない。しかし本當に生活を愛し人しむ人は、まづその日その時の刹那々々を、最も愛し慈しむ慈でなければならない。そしてかういふ生活愛慕の一念は、殊に今日において、一層多く力說さるべきものであることは爭はれない。といふのは、すべてを新しく建て直さうとしてゐる今日あらゆる分野においては、吾々の生活そのものを脅かし、吾々をして人生そのものを呪はしめるやうな困難事が一層多く瀕發するであらうからである。

しかし。轉じて共日々々の生活を享樂するには、いかにすべきかといふ實行問題に移ると、そこには、細說を要すべきさま〴〵の復雜な問題が生じて來る。

しかし、これを一言で云へば、その日〳〵の生命を力強く享樂するためには、何より先に、吾々の生活を美化しなければならないのであり、そして生活を美化するには何よりも先に吾々の勞働を快樂化しなければならないといふことである。言葉を換へて云へば、吾々の日常の勞働を快樂化することによつて、吾々の生活を美化し、吾々の生活を美化することによつて、吾々は最も力強く、最も美しく、その日〳〵の生命を感得し、體達し得るといふことである。(尤もこのことを明瞭にするためには更に進んで、いかにすれば、吾々の勞働を快樂化し得るかといふ根本問題を攻究しなければならないのであるが、それは別の機會にゆづる。)

勞働の快樂化、生活の美化——來るべき時代における生活態度の標語として、私は、この言葉の意味のひろく一般に徹底されることを希望する。

想華

ピヨトルの猫と私の猫

長谷川如是閑

ピヨトル・デミヤニッチは、細長い、氣むづかしやの、高等學校評議員だが、あの長い串を突込まれた黴のはへた燻製の魚に大變よく似てゐる男だ。丁度今、自分がラテン語を教へてゐる高等學校へ出かけやうとして、持參の文典の隅つこを鼠にやられてゐることを發見したからたまらない。

『おいこらプラスコウヤ。』いきなり臺所へ出かけてクツクに怒鳴りつけた。『何んだつて鼠なんかを家に入れた。怪しからん！　昨日我輩のシルクハツトをやられたと思つたら、今日はまた我輩の雜句文法を喰ひよつた。……この調子では間もなく着物に取りかゝるに違ひない。』

『私にだつてしやうがありませんわ。私が鼠を家に入れた譯ぢやなし。』クツクは、先生又始めたと澄したものだ。

『だからよ。何うにかせにやならんといふのだ。猫を貰つてくるがいゝ猫を。お前貰つちや居らんか。』

『一匹貰つて來てゐますけれど、何にもなりやいたしませんよ。』クツクはさう云つて隅の方を指したが、眞白な、マツチのやうに痩せこけた小猫が竈の蔭になつて寢てゐた。

『何うして何にもならん？』
『でもまだ赤坊ですもの、二た月にもならないんでございますよ。』
『フム……ぢや教育してやる。こんな所に寢ておらんで勉强せにや爲めにならん。』
ピヨトル・デミヤニツチ先生は、如何にも仔細らしく溜息をついて臺所から出て行つた。小猫は頭を擡げて先生の行衛をものぐさ相に見送つたが、再び眼を閉ぢてしまつた。
小猫は寢ないで考へた。何を考へた。まだ現實の生活に觸れてゐないのだから無論印象の貯蓄といふものがないので、その心的過程は全く本能的に働くしかない。で今彼の胸に描き出す生活の繪畫も、彼の祖先であつた虎（ダーウヰン參照）から、彼の肉や血と一緒に遺傳された概念によつて描き出す外はない。無論彼れの考へることは妄想であつた。彼れの猫想は先づアラビアの砂漠のやうな場面を幻想する。そこをクツクのプラスコウヤに似た人間や、ストーヴや箒などが影のやうに通る。その影の眞中に牛乳の皿が現はれた。皿は忽焉として爪を生やし、ムク／＼と動いて、今にも驅け出しさうになる。小猫は、急に、一と跳ね跳ねたかと思ふと、血に渴した情慾の身震ひと共に、グサとそいつに爪を突立てた。……牛乳の皿が見へなくなる。とプラスコウヤの落した肉片が見へた。その肉片は、臆病らしくチユウ／＼と鳴きながら走り出した。小猫は一飛びに飛びついてグサ……。すべて此の若い夢想家の空想は、その出發點に、跳躍と爪と齒とがある。他人の魂は眞暗で見え透かさるものではない、猫のだつて殊にさうだが、然し、こゝに記した幻想が如何に眞實に近いものであるかは、次ぎの事實によつて察しられる。小猫は、右のやうな白日の夢にすつかり魅せられて、突然跳び起きて、眼を輝からせてプラスコウヤを睨み、身體中の毛をふくらかして、例のバウンドをやつてクツクのスカートにグサと爪を立てた。彼れは明らかに生來の捕鼠家で、誠に血に渴した祖先を辱しめざるものであつ

た。彼れは全く、窖や倉庫や米倉の恐怖たるべく運命づけられてゐた。さうして、もし教育がそれを妨げなかつたら……然し豫想はやめやう。

ピョトル・デミヤニッチは學校からの歸りに、荒物屋に寄つて十五錢がとこを奮發して捕鼠器一個を買ひ込んだ。晩食の時に先生、大事の御馳走を割愛して餌として、その鼠捕りを長椅子の下に置いた。そこには生徒等の答案が家庭用として澤山貯藏されてゐるのだ。丁度六時頃、この堂々たるラテン學者が、生徒の答案を乘せたテーブルに控へてゐると、突然バタンと大きな音がした。おぢさんびつくりしてペンを落したほど高い音だつた。早速長椅子の下から鼠捕りを取り出して見ると、可愛らしい小鼠が、鼻先きで金網を突きながら恐怖に震へてゐた。

『アッハー。』ピョトル・デミヤニッチ先生は、貴樣に零點をくれてやるぞといふ時の恰好で、憎くさげに小鼠を睨まへて、『貴樣、捕かまつたな、惡るもの！　待ッとれ！　今貴樣に、我輩の文典の喰ひ方を敎へてやる！』

獲物に咽喉をならしながら、ピョトル・デミヤニッチ先生は呼ばつた。

『プラスコウヤ、鼠がつかまつたぞ！　猫を持つて來い！』

『只今』聲に應じて、クックが虎の子孫を抱いて來た。

『素敵だ！』ピョトル・デミヤニッチ先生は手の甲をさすりながら、『さあこれから課業を敎へてやる。……鼠捕りと向ひあひに猫を置きなさい。……さう〳〵……先づよく嗅がせる。よく見せる。……さう〳〵……』

小猫は、不思議相におぢさんを見る、肱掛椅子を見る。面喰つたやうに鼠捕りを嗅ぐ。すると、多分あんまり明るい燈火と衆人環視の眞中に置かれたのとで、すつかり怖びへてしまつて、―小猫は忽ち突走つて戸口の方へ身慄ひしながら逃げ出した。

『止まれ！』おぢさんはいきなり猫の尾をひつ掴んで叫んだ『止まれ、このならずものめ。鼠をこわがるなんて、阿呆！ 鼠だよ、これは！ 見ろ！ いゝか？ 見ろといふんだ！』

ピョトル・デミヤニッチは猫の頸玉を捕へて、その鼻面を鼠捕りにこすりつける。

『見るんだぞ、やくざ者！ プラスコウヤ、猫をつかまへて居れ、……鼠捕りの口の處で押へて居れ、……俺が鼠を出すから、同時に猫を追つ放すのだぞ。……わかつたか、……すぐと追つ放すのだぞ！ さあ！』

おぢさんは奇妙千萬の顔をして、鼠捕の蓋を明けた……鼠はびく／＼しながら出て來た。と矢のやうに、長椅子の下に逃げ込んだ。……突つ放された小猫は尾を立てゝテーブルの下に驅け込んでしまつた。

『逃がしたな！ 逃がしたな！』

ピョトル先生は恐ろしい劍幕で叫んだ。『何處へ行つた、曲者！ テーブルの下か？ 待て……』

おぢさんはいきなり小猫を引ずり出して空中で振り廻した。

『やくざなけだものめ』耳の所をひつぱつたいて、『取らんか、取らんか！ 今度ずるけて見ろ！ やくざ者！』

翌日も、クックのプラスコウヤは召集を受けた。『プラスコウヤ、鼠がとれた！ 猫を持つて來い！』

前日通りの暴行に逢つてから、小猫はストウヴの下に逃げ込んで出て來やうともしない。プラスコウヤが引出して頸玉をつるして主人公の書齋に持ち込んで、鼠捕りの前に置くと、猫はぶる／＼顫へて、情けない聲でニア／＼鳴いた。

『待て、先づ猫を樂にさせなきやいかん。』ピョトル教授は命令する『よく見せて、それから嗅がせるんだ。ソレよく見て、研究する！』猫は折があれば逃げ出さうとする『止まれ、こん畜生！ 貴様を叩き直してくれるんだぞ。耳の所を

押へろ、さうだ。……さあよし、鼠捕りの前に置け。』

おぢさん、例によつてそろ〳〵と鼠捕りの蓋を明ける。……鼠は猫の鼻の下をするりとぬけて、クックの手にぶつかりながら、棚の下に逃げ込んでしまつた。猫は自由にされると、忽ち、飛ぶやうに長椅子の下に退却した。

『又逃がしやがつたわい！』ピョトル・デミヤニッチ先生は喚いだ。『これでも猫か？　始末に終へないけだものだ！打ち懲してやれ、その鼠捕りでしつぱたいてやれ！』

三度目の鼠が取れた時には、小猫はもう鼠捕りとその中のものとにすつかり怖びへてしまつて、クックの手を掻きむしつた……四番目の鼠の時には、おぢさんはすつかり狂暴になつてしまつて、小猫を蹴り飛ばして怒鳴つた。

『こんなもの、そつちへ持つて行け！　もう知らん！　抛り出してしまへ！　此の世に全く用のないものだ！』

一年經つと、か細く痩せた小猫は、丈夫な悧巧相な、あたりまへの猫になつた。一日彼れは逢ひ引きの途中、裏庭を通つて、嬉しい場所に來て見ると、ガサ〳〵と音がして、鼠が一匹廐の方から水槽の所を驅けぬけた。豪傑それを見るや否や、身の毛をよだゝせ、背中でアーチをこしらへて、フッー〳〵吹いて、ガタ〳〵慄へて、一目散に不名譽の退却を遂げた。

こゝまではチエホフの噺だ。――この噺には『誰れのせいだらう』といふ題がついてゐる。

私はもう少し早く此の噺を讀めばよかつた。私の所に、此のロシヤの小猫と――少し行き方が違ふが――似たやうな運命に逢つた猫がゐる。もし早く私が此の噺を讀んでゐたらと思ふが、一體此噺の英譯は去年出版されたのだ。私の猫の爲めに――すべての猫の爲めに――此噺はもつと早く凡そ猫のゐる國の國語に翻譯さるべきものであつた。

私の猫は、W社の二階に泥れ込んだのら猫の子だ。W社はS社の二階の一間を借りてゐたのだが、S社の人達は、その小猫を可愛がつて、めい〳〵辨當の餘りをやつたりしたので、のら猫はとう〳〵S社の社員になつてしまつた。がその時はもうその牝猫は子供を腹に持つてゐた。こんな悲慘な話に、泣くものも怒るものもないのは、猫の世界の事だからだと思つてはいけない。人間の世界も段々そんな風になつて、此位のことを泣いたり怒つたりしては生きてゐられないやうになりつゝある。で私達は、大きい腹をした放浪の女が、細い泣聲を立てゝ、愛とそうして食を求めながら慕ひよるのを、詩にも歌にも社會問題にもならぬかの如く、平然と取扱つて、忙しい時などは頸玉をつるして、遠くの方へ、その社會問題を拋り出した。

で赤坊が生れた。三匹產れた。S社は勉め人の寄り合ひで、元より家庭ではない。從つて、猫の子を產ませたり育てたりする準備もない。が社員が蜜柑箱を工面して、そこでお產を濟ませて、三匹の子供は無事に眼があいた。元來社員が多い社にさう收容の餘地がないので、一匹は近所のそば屋の小僧が貰つて行き、一匹は社員の一人が持つて行き、他の一匹を私の家に連れて行つて、母親も亦社員の家へ再婚した。

一匹も死なずに又棄てられずに生きて行つた。――尤もそば屋へ行つた一匹は此の震災で死んだらうが――どうして生きて行くのか、てんで豫算の立たない倫落の女が、こんな風にして生きて行くといふ事實はありがたいものだ――とある坊さんに話したらさう云つたが、本人の猫がそれほどありがたがつてゐるか何うかわからない。人間をそんな風にバスケツトに入れてやつたり取つたりすることが出來たら、もつとありがたいといふかも知れない。

私の處へ來たのは白猫でその時分は細く小さい、丁度ピヨトル・デミヤニツチ先生のところの猫のやうだつた。『まだ二月』。どころではない漸く半月位なものだが、やつぱり少し馬鹿のやうでもあつた。そのふざけ方が如何にも頓馬で滑稽

味を帶びてゐるので『茶目』と呼ぶことにした。

不思議なことには、此猫は前にゐた——さうして茶目の來る少し前に病死した猫と色合も形もよく似てゐた。それは『白』と呼んでゐたが、此シロは甚だ悧巧で、やつぱり同じ位の大きさで來たの、が、すぐと家にゐた大きいセッターのダンと馴染んでしまつて、ダンの尾にからまつたり、背に乘つたりして遊んだ。食物もよく、自分のを喰はずに、ダンのを喰ひに出掛けた。ダンもシロの喰つてゐる間は、涎を垂し／＼待つてゐた。ダンが死んだ當座、シロはよくダンのゐた小屋へ來て、その中にションボリ、ダンの歸るのを待つてゐるやうに座つてゐた。……『ダンはもう歸つて來ないんだよ。』私達はよくさうして座つてゐるシロに云つた。

シロは又隣りの小さい赤犬とよく馴染んだ。そのアカは丁度大きくなつたシロと同じ程か、少し大きい位の身體なので殊にいゝ遊び相手だつた。庭の芝生の上で二人は始終吠へたり泣いたりしながら追ひかけつこをした。さうして又シロはよくアカの御馳走になりに行つた。赤は又御馳走を貰ふと乾度シロを呼びに來ると人々は稱した。がそれは何うだかわからない。此アカとシロとの運命も悲しかつた。アカは電車に後足を二本とも轢かれて、死に損つた。辛うじて命はとりとめたが、後足は二本とも使ふことが出來なかつた。で何時の間にか前足だけで中心を取ることを習つて、短く切れた後足をふら下げながら頭を下げて歩いてゐる恰好は、Tの字が歩るいてゐるやうだつた。アカがこんな不思儀な恰好になつたのを始めてシロが見た時には、シロは怪訝の顏で舊友の姿をジロ／＼見た。Tの字が歩き出すと、シロは不思議相にその後からついて歩いた。さうしてそれは友達の變つた姿であるといふことを知つた時に、シロはその周りとクル／＼走り廻つた。アカは、生命を脅かされた重い手傷の爲めに身體の自由と一緒に心の自由も失つたやうに、たゞぼんやりとシロの馳け廻る姿を眺めた。シロはアカがいつものやうに自分を相手にしてくれないは、自分の刺戟が足りな

いのだとでも思つたか、むやみとアカにからみつくのであつた。アカは中心を失つて倒れたまゝ、起き上らうともしない。シロは空中に刎ね返つてゐるアカの後足を抱へて引き倒したり、噛へて引張つたりした。アカは苦し相にころがされながら、でも吠へたいのを堪へてゐるやうに、クン／＼云つた。アカが少しよくなつてからは、私は、屡々二本足でヨチ／＼駆けながらシロを追ひ廻してゐるアカを芝生の上に見た。

そのうちに、アカの主人が地方へ引越したので、シロはアカとも別れなければならなかつた。さうして間もなく彼れも死んだ。ダンの隣りに葬つて、ダンの上にはすゝきを植ゑたが、シロの上には南天を植へた。

茶目は此シロの後繼ぎのやうにして、私の家に育つたのである。ピヨトル・デミヤニツチのとこの猫に似てかぼそく痩せてゐたが、育ちの早いのも驚くべきもので二三月の後には、普通の親猫ほどの大きさになつてしまつた。今ではもう小犬ほどの大きさだ。さう早く大きくなつたことも私を誘惑してピヨトル・デミヤニツチにした一つの理由であつた。

私の家には鼠が澤山ゐる。誰れの家にも鼠はゐるが、私の家は、鼠の方で『私の家には人間がゐる』といひ相な位鼠本位になつてゐる。ピヨトル先生の家とは反對に、喰はないのは文法書位なもので、他のすべてのものを、鼠も亦私の家族と同じ權利で噛ぢつてゐる。主人公の食ふ喰パンなんかは時々、その内部を奇麗に食つて、外廓だけ主人公の爲めに殘されてゐる。主人公はいつも外廓を併せ食ふ習慣で、サンドヰツチを作るにも、敢て外廓を捨てさるを以て道徳としてゐるのに、鼠は、却つて震災の際玄米を嫌つた人間と同じく、倣頑な榮養上の態度を取つてゐる。新鮮な野菜は、幸でも大根でも、鼠先づこれを賞翫し、幸ひにして殘餘があれば主人公の口に入るといふ始末である。で屡々猫を飼ふのだが、近來私の所に來る猫、概して鼠を好まない。主人公が好まないから之れを眞似るのかも知れないが、彼等は、鼠に

對する自分達の本能の働きをまるで月給を貰つてシブ〳〵やつてゐる仕事でゝもあるかの如く、冷淡にやつてゐる。おまりに臺所邊に音がすると、偶に太儀らしく出かけて行つて、殆んど義務的にそこらを巡邏するに過ぎない。その目的は鼠よりも、他にあるらしく、そこら中の容れ物をひつくり返したり、徳利を落したりして、却つてその方が餘ッ程騒がしい。

シロにもさうだつたが、茶目に至つては愈甚しく、恐らく、ピョトル・デミヤニッチ家の猫が空想にだけでも持つてゐたやうな本能性をすら、ちつとも持つてゐないらしい。これ亦私をピョトル先生にする強い誘惑だつたのである。

茶目は白日の夢としても『ダルウヰン參照』を必要とするやうな、祖先の虎のロマンスを夢見てゐないで、三毛猫のロマンス位なものだらうとも思はれるが、然しそんな艶つぽい夢を見るには、彼れは餘りに茶目であつた。それが却つて皆の氣に入つた點だつたが、然し鼠に對して性來の無頓着を示してゐるのは、デミヤニッチのクックのいつたやうに、『馬鹿』かとも思はれる。が又鼠なんどに興味を持たない位向上してゐるのかとも思はれる。何れにしても、私は彼がも少し鼠に興味を持つても、強ち猫の道徳に背く譯でもあるまいと、時々さう思つた。

で動機は、ラテン語の先生ほど利己的ではなかつたが、過程はやゝ共通で、とにかく茶目をして鼠を取る本能を呼び覺こしめなければならないと考へた。從つてそれが爲めに取つた手段も同一の典型に陷つた譯で、やつぱり鼠捕り一個を買ひ込んだ。さうして臺所にそれをかけた。すぐと鼠がかゝつた。

その後の私と女中と茶目と鼠との關係は、チエホフの噺と重複する故、省略しなければならない。が茶目は、年も取つてゐたので、鼠取りの中の鼠に興味を持つたことは、デミヤニッチの猫に優つてゐた。ぐる〳〵廻つて、頻りと鼠と鼻を突合はせた。さうして鼠に鼻面を噛まれてギヤツなんて聲を立てた。私はラテン語先生よりは思慮に富んでゐて、その鼠捕りを、四方の出口を閉めると逃げ場所のない廊下に持ち込んで、茶目もその廊下に閉ぢ籠めた上で、鼠捕

りをあけて鼠を逃がした。

茶目は本能的にその逃げ出した鼠を追ひかけた。がその追ひかけ方を見て、私は猫の本能が、果して茶目に遺傳されてゐるか何うかを疑はなければならなかつた。といふのは、茶目が左に追ひかける時には、鼠は右に逃げてゐる。これはしたりと右に追ひかけて行けば、鼠は左に逃げてゐる。茶目は又左に行く、鼠はスル〳〵と柱を傳つて、框の上に座り込む。茶目がそこへ飛び上る頃には鼠は下に降りて、框から落ちてマゴ〳〵してゐる茶目を、廊下の隅から、賢しこ相な眼を輝かして眺めてゐる。

これは駄目だと私は思つた。私は數年前に飼つゐた、よく鼠を取るミケと呼んだ牝猫がこんな場合に何うするかを屡々見て知つてゐる。明け放しの書齋へ鼠が入つて本棚の裏に隱れたので、ミケを呼ぶと、彼女はもう部屋へ入るか入らぬかに鼠のゐることを知つて、敎へもしないのにその本棚の下に飛んで行つて、頻りに彼方此方を覗いたり手を入れたりして鼠を追ひ出さうとする。それに追はれて、鼠がチラと本棚の中段の三四尺の高さのところに姿を現はしたかと思ふと、ミケはもうその鼠を啣へてゐた。そんなに不思議な位迅速にやらなければ、何も猫の本能なんかを必要としない。茶目のはまるで人間が兎でも追ひかけるやうに、それ何處へ行つた、そつちだ、こつちだと騷いでゐるので、猫の本能などは藥にしたくも現はれてゐない。

でも私は、デミヤニツチ先生のやうに強制的に猫を訓練しやうとは思はなかつた。尤も、しやうと思つても、何うしていゝかかわらなくもあつた。たゞ、これは猫自身の力で、自分の裡にある本能を呼び覺まさせる外はないと思つた。それには須らく猫を鼠と一緒に此廊下に閉籠めて置いたらいゝだらうと思つた。で私は二人をそのまゝにして、そこから出てしまつた。

時々ドタンバタンチユー〳〵と云ふ音がした、時々ニヤーといふ聲がした。扉を少しあけて覗いて見ると、茶目は、柱の傍にかしこまつて鳴いてゐる、鼠はその上の框で休んでゐる。『降りて來てくれ』とでも云つてゐるらしい。忘れたと云ふでもなく、つひそのまゝ二三時間經つて、何うしたかと思つて——といふよりは、もう、多分茶目は鼠を喰つてしまつただらうと思つて、扉をあけて見ると、豈計らんや、茶目と鼠とが、廊下の片端で、互に一尺ほどを隔て、同じ姿勢で向へ合つて座つてゐる。まるで、人間が何故に猫と鼠とをかやうに一室に幽閉したのであるかを論じ合つてでもゐたといふ工合である。

扉があいたので、茶目は嬉れし相にニヤーと鳴いたが、座つたまゝ動き相にもしないで此方を見た。『今鼠に用があるのだ』とでもいひた相である。鼠は赤みかゝつた小さなまん円い眼で同じくこちを見て『さうだよ』といふ顔をする。二人は、僅々數時間一室に幽閉されたといふ同じ境遇の爲めに、互の本能を忘れてしまつて、お互に何うしたものかと、共同の意識で思案してゐたのであらう。實際境遇の力は萬能だ。

鼠と猫とが共に自分達の本能を忘れてしまつてゐるのに、私といふ人間だけが、それを覺へてゐて、『これではならない』などゝ考へた。思へば、ピヨトル・デミヤニツチ以上の私であつた。

で私は、茶目の本能を何うしたら呼び醒ますことが出來るかと考へた。そして猫に猫の本能を呼び覺まさせるのは、人間にヒユーマニテイーを呼び覺まさせるのと同じことである。それは茶目にとつて必要の教養であらねばならぬ。と私は大分ラテン先生にかぶれた。私はこれは畢竟茶目が鼠を恐れてゐるのだらうと考へた。然らば鼠を少し弱らせて、安々と茶目に征服されるやうにしたらばよからうと考へて、私は徑藥の矢を取つて、凝としてゐる鼠を輕く打ち降した。打たれて鼠は本能的に逃げた。その迅速な活動は私を面喰はせて、私は二つ三つそこらを打ち廻るうちに、まぐれ當り

に鼠に觸れたと見へて、鼠は弱つた姿で座つたまゝ動かなくなつた。茶目は、その間、鼠が逃げ廻ると、流行にその本能の閃きを感じると見へて、それを追ひかけてゐたが、鼠がヂツと動かなくなつてしまうと、その傍をうろ〳〵して、時々横目でヂロ〳〵鼠を眺めてゐるばかりである。無論喰ひついて行かうとはしない。私は矢の先でその鼠を茶目の鼻先に押しやつたが、茶目は後退りして、やつぱり澄してゐる。見るともう鼠は死んでゐるのだ。茶目は、つまらな相に扉の傍に行つて座つて、開けてくれとニヤー〳〵訴へてゐるのである。

此の人道主義者のお蔭で、私はとう〳〵彼れに代つて鼠一匹を打殺した下手人になつてしまつた。しかもそれは彼れを教育しやうとしてである。考へて見れば、それは奇妙な教育思想であり、奇妙な教育手段であつた。教育の目的は、猫をしてその本能を呼び覺まさせやうといふのであり、その教育手段は、人間が殘忍を行ふのであり、而してその結果は、猫を人道主義者にしたのである。

この經驗は、私の茶目に對する態度を多少變化させた。私はもう猫は鼠を取るといふことに形而上學的絶對性を認めることは出來なくなつた。從つて、ピヨトル・デミヤニツチ先生のやうに、茶目を蹴飛ばして、「此世に全く用のないものだ」と怒鳴る衝動を感じなかつた。

その反對に、私は、茶目が鼠に對して、人間程度の興味しか持つてゐないのを面白く感じ出した。鼠を取らうと思ふことも人間のさう思ふ位の程度であり、取つてから、コンなものと思ふ點も、人間のそれと似たものであり、死んだ鼠なんぞは他人が何うかすると思つてゐるのも、主人公と同じであり、とにかく彼れは、猫の本能を忘れてゐるといふだけ私達に近いやうな氣がする。

さう思つて茶目を取扱ふと、彼れも亦さう思つて私達を取扱ふらしい。

彼れが一番好む部屋は私の書齋だ。外の座敷の廊下の安樂椅子が彼れの座席になつてゐるのだが、皆が留守の時の外は、滅多にそこにゐない。屹度書齋にゐやうとする。然るに私は、何か仕事する時には、傍に生物がゐると氣が散つて出來ない癖があるので、仕事を始めると彼れを追ひ出す。大抵は素直に出て行くが、何うかすると、間もなく扉の外に來て、把手の所に飛びつく。始めのうちは、人間が開やうとしてゐるのかと思つて、起つて行つて内から開けてやると、茶目が鳴きながら入つて來ることが度々あつた。夜中にガチヤンとやつて驚いて眼を覺したこともあつた。此頃は飛びつかずに、背延びして把手に屆くほど大きくなつたので、立つたまゝ長らくガチヤ〳〵やるのでなほだまされる。何うかして此惡戯をやめさせやうと思ふが、人間が把手をガチヤンとやつて開けるのを彼れが見てゐる限り、やめ相にも思はれない。

彼れは亦食物で私を眞似る。朝はパンと牛乳を少しづゝでも食はなければ、決して食卓の前を去らない。パンもバタがついてゐないと、丁度こんな時私のするやうに、澁々食ふ。私は煮た魚よりは燒いたのを好む。彼れもさうだ。私は茶漬、淺漬澤庵の類を貪る。彼れも茶漬と澤庵とは人間の箸の先について口へ行く途中を時々チヨツかいを出して失敬するほどすきだ。私がチユーインガムを噛めば、彼れはそれをも要求する。私が咽の藥のヴアルダ・パスチルをかめば、彼れも欲しがる。さうして、彼れの國の木天蓼の類は、なんだこんな猫の藥とでもいつたやうに、甚だ冷淡である。

食物に於てばかりではない。動作に於ても彼れはだん〳〵猫の本能に遠かる。西洋の諺に「犬は人につき、猫は家につく」といふことがあるが、茶目はその點では寧ろ犬に近い。私達が外出する時には、附いて來やうとするので室の中に閉じ込めて置かなければならないことが度々ある。又彼れは人のゐない室には決してゐない。(私の書齋だけは私の留

守に代理で座り込む）好きな人が室を代へると、もう決して先の部屋へは行かない、好まない人のゐる部屋へは決して入らない。私の父は猫嫌ひだが、茶目は決して父の居間に入つて行かない。私達が入つて行くと入口で待つてゐる。彼れは又、猫の本性たる木や屋根に上ることが頗る下手で、高い所へ上つた時には鳴いて助けを求める癖がついて、大きくなつて平氣で降りられるやうになつても形式的に鳴く。今だに、時々墜落して身體を打つて、ヘドを吐いて二三日寢ることは珍らしくない。

要するに茶目は猫の本能を次第に忘れて行く。それは『誰れのせいだらう。』猫の生存に一番大切な本能は、彼れがピョトルの猫のやうに卑怯者となつて忘れても、私の茶目のやうに道德家となつて忘れても、またよしんば神様となつて忘れても、忘れるのは一つで、そして迷惑も一つではなからうか。

（をはり）

時論

甘粕公判廷に現れたる驚くべき謬論

甘粕事件の公判の模様を各種の新聞記事で讀んで最も驚いたことが三つある。

一は甘粕大尉自身が毫も良心に恥ぢる所なしと公言して居る事である。人を殺して良心に恥ぢないといふのは、矢張り大杉の一族を殺したことを內心奉公の一種と信じて居るのか、又は結局の責任は實は自分にはないんだと自認して居るが爲めなのか、孰れにしても見逃し難い點である。大尉は「自分は何物にか弄ばれて居る樣な氣がする」とも言つたさうだが、之れが果して何を意味するか、辯護士諸氏の追窮せなかつたのは殘念千萬であつた。夫れは兎もあれ、大尉は部下の爲に寬典を願つて責任を一身に負はんとしながら、チョイ／＼意味深長の言辭を弄して自家心底の衷情を他に愬へんとする樣に見へる。男らしさを衒はんとつとめて實は案外正直なところもあるやうだ。篤實な生れつきであり乍ら、所謂軍人型になり了うすにはまだ修練の足りない人なのだらう。要するに彼は善にも惡にも案外弱い平凡な男ではなからうか。が、とにかく公判廷で堂々と「良心に恥ぢる所なし」と放言せしめて誰も深く咎めなかつたのは、種々の意味に於て大に注意すべき事柄であると思ふ。

二は辯護士の多數が非常時に於ける殺人を少くとも道德的に肯定せることである。之にも我々は一驚を喫せしめられた。大杉を不逞兇暴の惡人と信じ之を活かして置いては國家の爲にならぬと一圖に思ひ込んだ純な心持には、同情を寄せる丈けの値打はある。之が教養の足りない市井の誰彼の所爲なら、固より酌量を求むるの理由とはならう。併し甘粕氏は憲兵大尉だ。それでも動機の純を舉げて強て寛典を求むるの理由とするの結果は、あゝした場合に於ける殺人の道德的肯定とならざるを得ま

いではなからうか。辯護士だからとて商略の爲め大事な道義的判斷を枉げてはいけまい。斯の點以外に酌量要求の好理由を見出し得なかつたとすれば、彼等は餘り有能といへない。若し彼等が衷心斯く信じたとせば、我々は彼等の良心の健在を疑はざるを得ぬ。猶この點は同じく檢察官にもあてはまることを注意しておく。

三は所謂軍隊精神と良心の自由との關係に付ての重大な誤解が法廷内に漲つて居ることである。辯護士諸氏は異口同音に云ふ。下官が上官の命令の當否を判斷する樣では、軍隊精神は根本から破壞される。全然盲目的に上司の指呼に服從する樣でなくては、軍隊といふものは立ち行かぬと。尤も這の論は三上等兵の無罪を主張する爲に述べられたのではあるが、その命令關係を否認する甘粕大尉の辯護人も、命令とあれば絕對に從はねばならぬものだとする根本思想には反對して居ぬやうだ。而して之に對する内外の評論の調子に照して見るに、世人一般も亦之を深く怪まぬ樣に思はれる。併し我々は玆處に大なる疑問を有するものである。

上の命ずる所下之に從ふと云ふ原則に依て社會の秩序を立てた專制時代はいざ知らず、今日開明の昭代に在ては、服從はどこまでも良心の自由なる了解の上に基かねばならぬ。この新しき原則に遵ふ限りに於て、國家的秩序は立派に立つて行き得るのである。而してこの根本原則に對しては、軍隊と雖も決して特別な例外を爲すものでない。

只軍隊に於て特別なのは、事の性質上、他の場合に於けるが如く良心自由の抗辯に對して直接の機會を與へ得ぬことである。であるから、外觀上命令服從の關係がギゴチなく定められてあるのだが、之とても軍隊は斯くせざれば其の本來の仕事は有効に行はれぬものだといふことが了得されて居るからのことだ。從つて軍隊に於てはこの服從關係を十分に立てゝ行く爲には右の特別の性質を豫め十分に了解せしむることが必要である。凡そ特別の負擔に對しては何事にあれ常に完全な了解あるを必要とする。況んや軍隊におけるそれは殊に著しき制限拘束を要求するものなるに於てをや。

斯く考へると、世上一般の考と僕の立場とは、軍隊に在て命令服從の關係が儼然として確立せざる可らずとする點に於ては一致するも、其の基礎として命令の内容に關する完全なる了解あるを要する點に於て全く正反對になる。命令服從の關係が大切だから平素から盲從を強いて行かうと云ふのは斷じて現代の眞要求乃至眞趨勢に伴ふものではないと信ずる。斯う云ふ流儀を今なほ固守するのが、軍隊が動もすれば時勢を無視すると忌

まれ又軍隊精神が社會の進運に適行すと識らるゝ所以ではあるまいか。若し夫れ短見なる一部の軍人が軍隊に於ける盲目的服從の呈示する外觀的成功を誇り、此の流儀を社會一般(ことに國民教育)に及ぼさんと企つるものあるに至つては實に沙汰の限りである。

孰れにしても右の如き風潮は心ある者の大に阻止抗爭せねばならぬ所であるのに、如何に辯護に利用する爲とはいへ、之を容認し之を支持するが如き說を立つるのは僕の大に意外とする所であつた。辯護士諸氏にも反省して貰ひたいが、特に讀者諸君の一考を煩したいと思ふ。

以上はたゞ新聞記事を讀んでの感想である。新聞が事實を正確に報道したかどうかは保證の限りでない。いづれ判決もきまつたら一切の經過がもつとはツきりするだらうから、其際重ねてまた論ずるの機會があらう。(一九二三・一一・二五、千虎俚人)

無題錄

○

地震で家根の瓦が落ちた。落ちる際にトタンの雨樋をこわした。家根屋を呼んでも時節柄中々來ないから、先づ以て錻力屋に雨樋を直さした。やがて瓦屋が來た。所が家根に登る梯子をかけて折角直した樋をまた滅茶々々にした。問るとあつさり叱言を云つたら家根屋は樋の事まで構つて居れるもんかと陰口を言つてゐたさうだ。之は僕の知人の話である。

一つの家でも滿足に之をつくる爲には瓦屋もブリヤ屋も必要だ。而して兩者同一の目的に圓滿な協同を缺くこと概ね斯の如し。是れ我々の飛んでもない所で飛んでもない迷惑を蒙る所以。調和せる協同のない所に決して事數の擧る道理はない。

僕は協同を缺如せる最も適切な例として我國のお役所を擧げねばならぬのを遺憾とする。之をまた家に譬へる。家根屋とブリキ屋と幸に協同しても、大工と左官とは別々の途を行く、家の構造と壁の色とは傳來の仕來り以外に一歩も出でないではないか。大工と庭師との間に何等の打合なきは勿論だが、同じ大工の仕事にしてからが、多くの家は人間の住むべき纏つた家ではなくて雜然たる部屋々々の機械的集合たるを常とする。家の建築に現れた有機的調諧の缺如がそも〳〵國民性の一特質と見へて、之が社會のあらゆる方面に現れるのだから堪らない。

ことにお役所の仕事になると、調和を缺くの結果は啻に或る處に重複し或る處に足らないといふ不都合を來すばかりでは濟まず、動もすると彼此衝突して無益に精力を浪費し、更に仕事

の停頓澁滯をさへ來すに至るのである。此間の救護事業の運びでも十二分に苦い經驗を嘗めた筈だから、も少しこの通弊から醒めてもいゝではないか。

この際ことに此の苦言を僕は復興審議會の老人方に捧げたい。

○

此間上海から歸つた人の話に、彼地では稅金が馬鹿に安くて生活の便宜が馬鹿に整つて居ると云ふ。道路のいゝのは勿論のこと、而かも郊外にドン〳〵之を擴張して熱鬧の巷から離れて住まんと欲する者に完全な滿足を與へて居る。病院だ、圖書館だ、公園だ、音樂堂だ、果ては競馬場まで金に飽かして作つて尙ほ財政に餘裕ありと聞いては、嘘の樣だが能く其のわけを聞いて見ると少しも怪むに足らない。そは軍備といふ者に少しも金が要らないからである。

國防は大事だ。軍備を相當に整へて置く爲に金を惜んでならぬことは固より云ふまでもない。只若し軍備と云ふ者に金が掛らなかつたから如何に少額の稅金で過分の享樂が出來るものかと云ふ事だけは知つて置く必要がある。軍備の國家財政に加ふる壓迫は、安月給取りの放蕩が其の家庭經濟に及ぼす脅威以上に大きいものなることは、多辨を要せずして明白な事實だ。

軍備がないとて上海の住民は毫末も不安を感ぜぬ。今日まで隨分永い間東洋多難の變局に際會して上海住民は殆んど嘗て侵略的脅威に惱んだことはない。之も疑ない事實だ。が、之を引援して我國の軍備問題に比論するは固より誤りだ。併し之れ丈けのことは云へる。若し我國で軍備に相當の斧鉞を加ふることが出來るものなら、震災復興の豫算位の金を作り出すことは造作もないことだと。否、震災復興の資金の如きは、此際寧ろ軍備縮少の途に依るの外之を得る途はないのではないかと。但し之は假定の話である。これ程の大な復興計劃の遂行に就て、今日まで誰も軍備縮少に資金を求むべしとの論を立てた人のない所を見ると、軍備は之が以上縮少の出來ぬものかも知れぬ。審議會に於ける江木千之老の如きは、國防を忽にするの虞があるから斯んなに復興計劃に金を使つては可けぬとさへ仰せられた。あの老人は決して變な頭の持主ではあるまい。

或人曰く、過大な軍備に財政を滅茶滅茶にされた今日の日本は、唯さへ行詰つて居るのに、更に復興の爲めに巨額の資金の出やう道理がない。幸にして世界各國の同情翕然として我國に集つた所から、當局は渡りに船と之にすがつて外債を募らうと內密に當つて見たが、先方は開き直つて申す樣、貴國の樣に無暴な大陸軍を擁する國へは險吞で此上金の融通は出來ませぬ、强てと仰れば一割位の利息なら御相談もしませうと。內地でこそ一割は何でもないか知らぬが、西洋の財界では無類の高利だ。斯んな高利の金を借りたとあつては一般外債は暴落する、我が財

政的信用は依然として墜つるに極つて居る。詰り外債も結局出來ない相談となり了つたのだ。於是復興も復舊と變じ、百年の大計も惜氣もなく棒に振らるゝの段取となつたのである云々と。

要するに國防は大事だ。今日の陸軍を老大だなど〻云ふのは以ての外の不心得だ。道路も狹くて我慢すべく、港灣などは贅澤の話だ。家もバラツクで結構、この次ぎの地震火事のことなどを考へては戰爭は出來ぬ。三十萬の家屋が灰燼となり、十數萬の生靈が無慚に死んでも、今日の軍備を日本帝國の飾りにして置くの氣强きに換へられぬ。斯くして今日の國民は、有らゆる希望と有らゆる幸福とを拋擲して浮雲の如き虛誇の前に途を讓るべく餘儀なくされて居る。歎しいことである。

○

復興審議會の老人連の計劃縮少要求が亂暴極まるものたるは言ふを俟たない。夫にも拘らず所謂閣內委員は深く之を爭はずして其修正に盲從せんとして居る。一體にどの內閣でも、閣員は衆議院あたりの討議に於ては理窟のある批判に對してゞも可なり强く橫車を押すの例なるに、先輩老人連の前に出るとロクなロも利かぬを常とする。此點に於て今の內閣のみを責むることは出來ない。

その結果は斯うなる。表面的にも內實的にも圖られなければならぬのは國利民福だ。差し詰め民衆の苦惱を癒やすことだ。從つて本來適當な對策を樹てる爲には第一着に民衆の要求が總かれねばならぬのに、政府の復興計劃なるものは、實は此點に於て〻十分の用意に出でたものとは云へぬ樣に思ふ。それでも兎に角專門家を多く集めて攻究を盡したものだけに民衆要求の要點を外づれては居ない。然るに之が審議會の老人連の手に掛ると、彼等の出來心でメチヤ〳〵にされて仕舞つた。恰度民衆の苦痛は腹の病に原因があるとて政府といふ町醫が腸胃の藥を盛つたのに、元老の大家連は民衆と全然沒交涉であり乍ら勝手に其の苦痛の原因は腦に在りとさめ、强て腦の藥を盛れと政府に迫る。政府は之を聽かない譯に行かず、さればとて良心を僞つて全然之に盲從するわけにも行かずとて、結局双方の顏を立てると稱して腹の藥と腦の藥と半分づ〻盛ることにする。新に出來上る復興計劃は則ち斯の如きもので民衆の要求を裏切るや勿論である。

復興計劃の是非得失を論ずるのは實は予輩の目的ではない。日本の政界は今仍ほ頑迷な老人が跋扈し、其の出來心や思ひ附に出て勝手に左右されて居ると云ふ奇怪な事實に讀者の注意を喚起したい爲に之を書いて居るのだ。政府は勿論、在野黨でも苟くも政權に有り附かんとする以上、思ひの儘に其の經綸を實行することは許されない。先輩老人の善意惡意の干涉には一言半句も反抗することは出來ないことになつて居る。何故斯うなつたかの研究はこ〻に略するが、此の奇怪な現象の實在することだけは明白にしておきたい。

今日の政治家が斯うした狀態を異とせずして而して政權に行りつかんとして居る以上、我々がいろ〳〵智慧を絞つて獻策しても駄目だ。良い事は必ず老人連の故障なしに行はれると限らないからである。獨り良い事が行はれないばかりでなく、どんな下らない問題でも老人連の興味を惹く事柄は其時々の大問題となる。どんな大問題でも老人連の視聽を外づれて居ると、新聞にすら書かれない。斯くして今日我國の政治といふものは、條理の軌道の上に安定して居ない。何時何事を老連人がいひ出すか分らないから、政府は毎日の天氣を心配する樣に彼等の鼻息を窺ふに忙しく、政黨は萬一を恐れて豫め詳細な政綱を發表することを躊躇する。政令の朝三暮四なる所以も玆にあり、政黨の綱領の空漠を極むる所以も玆にある。

昨今新政黨問題の行きなやんで居るのも予輩は一の重なる原因を矢張りこゝに認むるものである。新政黨の樹立に付て一番困るのは黨首問題だ。人或は曰ふ。犬養と加藤と兩立せずんば之を元老格の顧問に据え、黨の幹部に委員制にして可なりではないかと。又曰ふ。幹部を委員制にするは寧ろ決を衆議に乘るの政黨本來の精神に合するではないかと。然り、理窟は正に斯の通りだ。併し幹部を委員制にし決を衆議にとつては、政綱は豫め確定して仕舞ふ。後に至つて融通は利かない。老人連の其時々の思ひ付と拍を合はして行く餘地はなくなる。そこで所謂政界の玄人は、誰が何と云つても今日日本の政界で本當に政權に行りつかうといふには、幹部組織は所謂總裁專制に限ると嘯いて居る。なんだかんだ議論に花を咲かしても、落ち付く所は總裁の方針に任せるといふのが、例へば政友會の在來のやり方ではないか。政黨が本來最もデモクラチックであるべくして、獨り我國に於て極端にデスポチックな專制組織を採るのは、畢竟之が爲に外ならない。而して問題を元に戻して考へて見る。新政黨樹立の本當の目的が近き將來に於ける政權の獲得である以上、事實上は名義はどうでも[illegible]專制的黨首を要するは勿論であつて、犬養甘じて加藤に附くか加藤心から犬養の指命を奉ずるかの解決が六つかしい限り、結局不成立に了るべきは當然である。併し之を兩者雅量の缺乏に歸してはいけない。新政黨の成立を不可能ならしめる殆ど唯一の原因は、我國政狀の變態的たる所に在る。元老連の跋扈を默過して居る以上、どんな雅量に富む政治家が起つても各派の大同團結は困難であるのだ。

然らばこの變態的政狀を打破するの途はないか。ある。それは本誌が多年說き來つた如く、政黨が在來の傳統的勢力に阿附して樂に政權に行り附かうとする陋習を排り、背水の陣を布いて其の勢力の根據を民衆の道德的信望に置くに至ること是だ。今日の政治家が本當に民衆の道義的支持を得る樣になるまでは、彼等は恐らく老人の我儘な干渉を抑へることが出來ぬだらう。而して予輩は近く實現すべき普通選擧制の採用が實に政治家にこの方向轉換の好機會を與ふものなることを一言しておく。

（以上古川學人）

輸入税免除

純粋の英國製 洋服及外套（オーバーコート）特價提供

此回の大災害に際し締盟國なる日本の各位に對し男子用**セビロ**服並に**オーバーコート**類を特別廉價にて御提供す。御注文は別誂品にても高等既製品にても同價にて、實に左の如き大低廉なり。殊に目下輸入税免除の特典あれば即刻御注文あるを御利益と信ず。

セビロ服（三ツ揃）

織地は最上等にて、柄は薄鼠（ライトグレー）、濃鼠（ダークグレー）、茶褐（ブラウン）及び紺（ブリュー）の各種。裁縫優秀にしてスタイルは斬新なるスマートのセビロ服なり。

特（廿英）	貳磅拾五志。	參磅七志六片。	四磅五志。
價（廿英）	四磅七志六片。	五磅五志。	五磅拾八志六片。

オーバーコート

織地は純毛にして、柔かく且つ暖かなり。柄は鼠（グレー）及茶褐（ブラウン）スコッチ又はフリース綾及び紺ナップに濃淡の種類豐富。

特（廿英）	參磅七志六片。	參磅拾八志。	四磅四志。
價（廿英）	四磅拾五志。	五磅五志。	五磅拾志。

御注文品を速かに御供給する爲め下記の寸法用紙に夫れ〲御記入の上代金（銀行爲替又は郵便爲替）添へ御送附下さらば至急發送す。但し柄見本御入用の方には御申越次第進呈す。

英國倫敦市ストランド百十二番
メージャーダニエル
MAJOR DANIELL
112, Strand, London W. C. 2, ENGLAND.

MEASUREMENTS（御寸法用紙）

此用紙ｮ英文にて明瞭に御記入願上候總ての寸法は呎及吋（インチ）尺にて御記入の事。
之れに代金（銀行爲替又は郵便爲替）を添へて下記へ御送附願上候。

MAJOR DANIELL
112, Strand London, W. C. 2, ENGLAND.

御姓名
Name ....

御住所
Address ....

セビロ用御好み柄　　　　オーバーコート用御好み柄
Colour of Cloth Required for Suit .... For Overcoat ....

胸廻り寸法（但しチヨツキの上から計る事）
Chest Measure (Taken Over Waistcoat) ....

胴廻り寸法（　仝　　上　）
Waist Measure (Taken Over Waistcoat) ....

ヅボン（股の内側より地上一吋の處迄の寸法を取る事）
Trousers (Measure inside the leg from fork to 1 inch from the ground ....

總身長（頭より足迄）
Your Height ....

オーバーコートの場合
For Overcoat ....

長さ（脊後のカラーより寸法を取る）
Length (Measure from back of the collar) ....

御好みの織地の厚さは薄手か厚手か御指定を乞ふ
State whether *light* or *medium weight* cloth ....

御注意＝必ずしも此用紙御使用に及ばざれども以上の要点を英文にて御記入は必要なり。

整腸消化劑ビオフエルミン

ビオフエルミンは本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして整腸と消化の兩作用を兼有し、諸般の腸疾患の治療並豫防に對し賞用せらる。

ビオフエルミンに對する知名醫家の實驗報告二百有餘に達し殊に小兒の消化不良、綠便、下痢に應用し卓効あり。

粉末及錠劑あり、全國有名藥店に販賣す

製造元 株式會社神戸衛生實驗所 神戸市二宮町

發賣元
武田長兵衛商店
大阪市東區道修町

痔疾新藥ボラギノール

醫學士六車勇先生が實驗推奬せられたる痔疾治療劑にして殊に痔核、脱肛、肛門裂創、痔出血等に對し比較的短時日に之を治癒せしむ。

軟膏並坐藥の二種あり。使用法頗る簡單にして單に本劑軟膏の塗布又は本劑坐藥の挿入のみにて足るを以て日常坐臥に應用せらる。 全國知名藥店に販賣す

【包裝】 軟膏二十五瓦入(金貳圓四拾錢) 坐藥十ケ入(金壹圓貳拾錢) 三十ケ入(金參圓貳拾錢)

發賣元
武田長兵衛商店
大阪市東區道修町

中央公論第卅九年新年號創作

- 小說　他人の災難……正宗白鳥
- 小說　或る男の手記……豊島與志雄
- 戯曲　だるま……武者小路實篤
- 小說　キリストと祖父と母……野上彌生子
- 小說　或る社會主義者……長與善郎
- 小說　悲しきチヤアリイ……宇野浩二
- 小說　雨蛙……志賀直哉
- 戯曲　震災餘譚……菊池寛
- 小說　顔……中條百合子
- 對話　退屈問答……佐藤春夫
- 小說　糸女覺え書……芥川龍之介
- 小說　不安のなかに……德田秋聲



他人の災難

正宗白鳥

（一）

村田仙吉の妻のきた子は、跛足(ひつこ)をひきながらもひとり歩きが出來るやうになつたのを喜んだ。もう一週間か二週間此處で靜養してゐたなら、身體がぐつとよくなつて、夫(をつと)のあとを追つて東京へ歸つて行かれると、思つても胸の躍るほどの樂みを覺えてゐた。家財の燒失や自分の手足の負傷や、避難の道中の困難なども、昔の思出として記憶に殘つてゐるだけで、もはや心の痛みにはならなかつた。兩親の慈愛は、地震から受けた彼女の物質上の損害をも精神上の損害をも略々償つてくれたのであつた。そして、山國の秋日和は、市街のうちに住んでゐても、快く彼女の耳目に觸れた。朝日の光や夕映えの雲の色や富士の姿や、亭々と何處かの庭に聳えてゐる銀杏樹や、さういふ見馴れてゐるものによつても今度は、幼い頃の懷かしい追憶をそゝられて、久振りに美しい夢に浸つてゐるやうなこともあつた。

彼女は二十五歳の今日、世の中へ生れ變つて來たやうな氣持がした。數年の間頭の

なかに奥くつてゐたさま〳〵な不平や煩悶の鬱屈は、地獄の烈火で燒盡くされて、心魂は秋空のやうにスガ〳〵してゐた。空を破つてゐる百舌の聲の冴えてゐること。軒近く寄つて來る雀の囀づりの元氣のいいこと。彼女は離れの靜かな二階に氣儘に身を置いて、時を過してゐる間に、窓外の鳥聲人語を音樂のやうに思つて聞いてゐたが、この二三日來は裏隣りの乾物屋の奥座敷から、無氣味な唸き聲が聞えて來るので苦しめられた。母親に訊ねると、それは、横濱から焼出されて逃げて來た少年の聲であつた。隣家では、ある知人に頼まれて、引取つて店員として使つてゐたのであつたが、先日の晩十三夜のお月見に、この少年も團子や柿や栗などを、人並みに飽食したゝめに、罹災當時の不攝生で弱つてゐた胃腸を害ねて、醫者の手當のしようのないほどに惱まされてゐるといふのであつた。

「痛いよう。誰れか來て呉れよう」と、少年は苦しげに叫んでゐた。

「可愛さうね、どうかして癒せないものかしら」と、きた子は窓から顔を出して、聲のする方を見下した。

「お藥を無理に飲ませても受付けないで、直ぐに戻してしまふんだつて」と、母親は云つて、「あんな病人を背負ひ込んぢやお隣りでも困るだらうよ」

「二日も三日もあんなに疼み續けちや助からないかも知れないわね」

きた子は、唸き聲の止む時が少年の死ぬる時であらうと、哀れを感じてゐた。それで、まん丸くなつた月の懸けだした夜、疊の上に流込んだ柔しい光を浴びて寢そべつた時に隣りの苦悶の聲がパツタリ止んだのに氣づくと、いよ〳〵少年の生命の糸が切れたのかと察して、あの世の幸福を祈つてやる氣になつたが、あとで聞くと、少年の父親が田舍から迎へに來て俥に乘せて連れて歸つたのであつた。

「假病だなんて云つてるけれど、まさかさうでもあるまいよ。自分の家へ歸ることに極ると直ぐに起きて衣服を着替え

て、ニコ〳〵して俥に乘つたつて云ふけれどね」と母親が云ふと、

「假病であんた聲が出せるものですか。地震の當時に私はあんな聲を方々で聞いたのよ。今でも耳にこびりついてゐるやうなの。人間も少し苦しい目に會ふとあんな聲を出すのだからいやなものね」と云つて、きた子はあの際に耳に入れたさま〴〵な苦悶の聲を思出して眉を顰めた。

隣りでは、唸き聲のかはりに、庭の方で若い店員の氣輕な唄聲がしてゐた、「森の狸の腹皷、ポコ〳〵ポン〳〵」

何年となく見たことのないほどに月は美しかつたし、例年より時候が遲れてゐるのか、秋の夜風も肌寒くはなかつたので、きた子は、遊び心をそゝのかせて、夜の町の散歩を思立つた。そして、外出の口實として、昵近な鈴川の家へ、たび〳〵見舞を受けた答禮に行きたいと云つて、兩親の許しを得た。誰れか家の者が附添つて行かうとするのを堅く斷つて、手早く身じまひをして獨りで出掛けた。晝間でも俥で病院へ通ふ外には、滅多に外出をしたことのなかつた彼女は、久振りに平和な明るい夜の町を見て恍惚とした。かねて田舍のちつぽけな都會として侮つてゐた甲府の町が、こんなに煌々と燈火が耀いて繁華になつてゐるのが不可思議にさへ思はれた。

彼女はまだいくらか殘つてゐる足の疼みをも忘れて、山奥から出て來た人のやうに、物珍らしげに左右の商店を覗いたり露店の前へ立つたりした。露店のうちには震災の繪葉書を賣つてゐるのもあつた。活動館でも震災の實況の映畫を呼物にしてゐた。きた子は罹災者の一人として、自分だちの悲慘な遭難を賣物にされてゐるのに、些少の不快を感じたが、今度の大災難に會はなかつたこの邊の人々は、時代おくれの田舍つぺいであるやうにも思はれた。

鈴川の家は盛り場を稍々離れた町にあつた。そこには、きた子の女學校時代の同級生で特別に親しくしてゐたまさ子が、きた子とは一つちがひの二十四歳にもなつてゐながら、まだ良縁が得られなくつて親の側にゐるのであつた。幾人

かの罹災者がその家にも一時は寄寓してゐたが、まさ子の伯母にあたるおえいといふ老女は、中風を病んでゐて、手足の自由が利かないので、外の人々がそれ〴〵に一身の處置を考へて立歸つた今日でも、なほ居殘つてゐた。

きた子は、東京では一度も會つたことはなかつたが、自分と同じ燒出され仲間だといふのに同情して、この老女にも今夜は會つて、言葉の上だけでゞも慰めてやらうと思つてゐた。

「先つきお宅から電話が掛つたから、此處でお待受けしてゐたのよ。大變お手間が取れたわね。お怪我はもうよくおなりなすつたの」店先の片隅に立つてゐたまさ子は、きた子の姿を見つけると、急いで側へ寄つて、足元に目を留めながら云つた。

「えゝ、もう大丈夫……」

きた子は、店員に見られるのを憚たがつて、無理にも足を早めて、自分の方から先に立つて薄暗い土間を奥へ進まうとすると、まさ子は、後からその肩を捉へて、

「そちらはいけないのよ。此方から私の居室へ御案内するわ」と、小聲で云つて、表へ出て、壁際の細い薄暗い路次を通つて、裏口から家の中へ入つて、裏梯子を傳つて二階の居室へ客を導いた。きた子にはその居室が自分の居室よりも遙かに陰慘に見えた。電燈の光が弱くて笠にはほこりが溜つてゐた。

「土間の方から來ると、伯母さんに見つかつて、あなたが煩い思ひをなさるだらうと思つて。……伯母さんはこの頃は誰にでも會ひたがつて、しよつちゆ茶の間へしや〳〵り出て爲樣がないのよ」と、まさ子は客に座蒲團を勸めながら云つた。そして、きた子の近況を訊くに先立つて、矢繼早に伯母に對する不平を洩らした。

「伯母さんと云つたつても、私は十年の餘も會つたことないんですからね。私は手紙一本やり取りしたこともなけれ

ば、私が東京へ行つてる間にも一度も訪ねて行かなかつたくらゐで、今度のやうな災難がなかつたら、一生會はなかつたかも知れないやうな關係だつたのよ。私だちの方で災難に會つて手頼つて行つたつて、決して世話をしてくれるやうな人ぢやないの。それが、今度は家が丸焼になつたつて、四人も五人もの家族が、めい／＼に生命だけ持つて、乞食見たいな服裝をして、私の家へドカ／＼と騙込んで來たんですからね。私吃驚しちやつたわ。お母さんはこの頃こそ、疎遠になり勝ちになつてゐても血を分けた姉妹だし、お父さんは氣が弱いんだから、氣の毒に思つて、最初のうちは、大切なお客様扱ひして、何から何まで氣をつけて上げたのよ。お父さんが柄にない義俠心を出して、親船に乘つた氣で安心してゐらつしやいなんて云つたものだから、みんながいゝ氣になつて、家の者同様にしてお御輿を据ゑちやつたの。東京者は圖々しいのね。それで言艸か癪に觸るぢやありませんか。不斷帝劇だの三越だのと、贅澤をして遊び歩いた罰が當つたのでせうつて。ガラクタ商ひをして年中ピイ／＼してゐた癖に、帝劇も三越もあつたものですか。先月の月末までに外の人だちはやうやく引上げたのだけど、伯母さんだけはいつ立つか分らないの。歸つた人がバラックでも建てたら迎へに來ることに話は極つてゐるのだけど、容易に實行しさうぢやないんです。手足の不自由な人を連れて行つちや厄介だから、一日でも永く此方へ置いとかうといふ腹なんでせう。實の子供が二人も三人もあるのに、みんな勝手なことをして、不斷でも親のところへは寄付かないんですつて。子供でさへ世話をしたがらないやうな人を、私の家でいつまでも世話をするつて法はないと、私思ふのよ。そりや困るんですよ。寢床の上下しから衣服を着るにも、人手を借りなきやならないんですからね。それに病氣のせいだか、お小用が近くつて、夜中にも屹度一度は便所へ連れて行かにやならないんだから、どんな世話好きの人だつて、世話をしきやしませんわよ。時々は蒲團の上へ粗相することもあるの。それを利かない手でこつそり洗つたりなんかしてるんだからたまらないの。中風なんていやな病氣ね。私病氣になる

にしても、あんな病氣だけは眞平だわ。あれでは人困らせに生きてゐるやうなものよ。でも、伯母さんはしやあ〳〵してるの。女が歳取ると圖太くなるのね。病人は病人らしく隅つこでぢつと寢てればいゝのに、退屈するのかヨチ〳〵足を曳摺つて茶の間へ出て來て、しかも長火鉢の上手に御隱居樣然と坐つて、横柄に下女を使つたりするんだから呆れつちまふわ。あれで、も一度轉んで、半身不隨が全身不隨にでもなつたら、歸るにも歸れず、返へすに返へせなくなつて私の家で一生伯母さんを見て上げなければならなくなるかも知れないんですからね」

「今度はどこの家でも避難者が來たゝめに迷惑をしてゐるのね。でも、自分の家が災難を免れたと思へば、諦めがつくぢやないの」きた子は、相手のいきり立つた不平を笑ひ〳〵聞いてゐたが、やがて、口輕く言葉を挿んで「私だつて避難者の一人だから、あなたにさう云はれると、ちよつと耳が痛いわね」

「あなたは違ふわよ」まさ子は、胸に溜つてゐた憤懣を晴したあとのすが〳〵しさを覺えながら、「あなたはもうすつかりよくおなりなすつて？……でも、よかつたわね。若いうちから手足の自由が利かなくなつちや生命があつても生甲斐がないでせうからね」

「私もさう思つたのよ。此方へ逃げて來る時にも、村田の肩に摑まつたり、村田に背負つて貰つたりして、二人ともそれはお話にならない苦勞をしたのです。此方の伯母さんはそんな不自由な身體をしてゐらしつて　よく無事に此處までゐらつしやれたことね」

「伯母さんも乘物のない所はお連合におんぶして貰つたのでせう」まさ子は若い女にしろ老いた女にしろ、夫に背負はれて大道を歩くのをいやらしいことのやうに思つて、冷笑的に云つた。それをきた子は勘付いたので、

「あの時分は誰れしも生命懸けだから、體裁なぞ構つちやゐないんですよ」と、辨護するやうに云つた。

「生命に障りがなければ災難に會つて見るのもいゝのぢやないかと、私この頃思ふことがあるのよ。こんな田舍にゐて避難者のお世話をして日を暮らすは詰らないと、私思つてるの。それで、あなたの身體がよくおなりなすつたら、一晩泊りでいゝから、諏訪の温泉へあなたを誘つて行つてゆつくりお話をしたいと、獨りで極めてゐるの。あなたの爲めと云ふよりも實は私の爲めなんだけど同意して下さらない？。私一人では何處へも出られないのだから、かういふ時にあなたをダシに使つて、一日でも保養したいと思つて、お父さんの承諾を得てゐるのよ。成べく二人つきりで行きたいの」

「さうね。私久振りで温泉にも入りたいけれど、近かに東京へ歸らなきやならないから、お伴が出來ないかも知れないわ」と、きた子は氣乘りのしない返事をした。

「でも、私樂みにしてゐたのですから。……私と温泉へゐらつしても、村田さん何とも仰有りやしないでせう」

「それは云はないでせうけど、私いつまでも實家の厄介になつてゐちやいけないから、身體がよくなり次第歸らうと思つてゐるんです。家も郊外の方に借りたさうですの」

「いくら混雜してゐても　東京のお家がよくおなりなすつたのね。伯母さんなぞバラックはいやだの燒跡へ歸るのはいやだのと云つて、優待もしない私の家で、一日でも餘計に暮らしてゐたかつてるんですよ。毎日他人の家の御飯を喫ばれて平氣でゐるやうになつちや、人間も末だけれど、女も自活するだけの腕を持つてゐなければ、一生誰れかの厄介になつて食べさせて貰はなければならないのだから、伯母さんも他の女も、五十歩百歩見たいなものね」

「でも、女の自活なんか駄目ですよ。東京の職業婦人なんていやなものよ」

「どんな所がいやなものなの？」まさ子は目をきらめかして訊ねたが、きた子はハツキリした返事は出來なかつた。そ

して、ふと氣付いたのは先日會つた時に、まさ子が職業婦人にでもなりたがつて雜誌などを讀んでひそかに研究してゐるらしい口吻を洩らしてゐたことであつた

「きた子さんも、以前こちらへ歸つてゐらしつた時に、女も獨立の出來るくらゐな藝を身につけとかなければいけないと、私にしみ〴〵話してゐなすつたぢやないの」と、まさ子は言葉を押付けた。

「今だつてさう思はないぢやないけど、私なんぞ何を習つたつて駄目なのよ」

「そんなことないわよ。私でさへ、一心に稽古したら大抵なこと出來なかないとこの頃思つてゐるんですもの。學校を卒業してから三年も五年も、ゴタ〴〵した詰らない家の用事に追廻されて、一生の役に立つやうな藝は何一つ覺えないで來たことが、泣きたいほどに後悔されてよ。あなたは後悔なんてことはしたことないのでせう」

「私なんぞ、馬鹿だから。しよつちゆうヘマなことをしちや後悔してゐるわ」

ここで二人の話は暫く止切れた。まさ子は妹に呼掛けられたので階下へ下りて行つた。負傷して以來正座するに惱んでゐるきた子は、足をいたはりながら立上つて、窓を開けて外を眺めた。此處でも月は屋根から屋根へ美しく照つてゐた。隣は小料理屋で、其處には三味線の音が響いてゐた。

この部屋も子供の時分によく遊びに來た所で、思出は多いのであつたが、無思慮な結婚の後悔をまさ子に向つて洩らして、まさ子がまだ獨身で、將來の身の振り方も自分の心まかせであるのを、眞心から羨んだ時のことが、ふと思出されて、甘酸ぱいやうな感慨に打たれた。

自分一人であんな災難に會つたらどんなだつたらう？　と、彼女は、梁で右足を壓されて悲鳴を揚げてゐたところを夫に助けられてからのことを、飽きもしないでまた思出したが、思出すたびに、夫は自分の神樣佛樣であるやうに思は

れた。かういふ夫に嫁いだことは自分の一生のうちの最大の幸福なので、假りにも結婚を後悔したり、夫に對する不平を他人へ洩らしたりしたことは、罰當りの所業であつたやうに思はれた。

そこへ、まさ子の母親が、葡萄や饅頭などを持つて、湯上りらしいテカ〳〵光つた顏して入つて來て、いろ〳〵とお愛想を云つたが、話のうちに、厄介者の仕末のつき次第、母子二人連れて東京へ燒跡の樣子を見に行くことになつてゐると云つて、

「運がいゝのだか惡いのだか、不思議なことが御座いましたよ。まさ子がお話したかも知れませんが、ある方のお世話でまさ子も東京の何とか云ふ大きな會社へ出てゐらつしやる方と縁談が纏りかけてゐたのでした。その方はまだお若いのに重役とかになつてゐらつしやつたんださうです。話が極つたら、十月匆々式を擧げると、先方では大變急いでゐらつしやつたのですが、それが、あなた、あの地震で、その方は會社が崩れたために、煉瓦の下敷になつてお亡くなりになつたのださうです」

「まあ、お氣の毒な。そんなお話は私ちつとも承りませんでしたわ」

「先樣はほんとに御氣の毒なんですけれど、結婚式がも少し早く運んでゐたなら、まさ子もどんな悲しい目を見たかも知れないんで御座いますよ。それにつけても、物事は急ぐのがいゝのか、ゆつくり構へてゐるのがいゝのか、一寸さきのことは人間業では分りませんです」

「さうですとも」

きた子はしみ〴〵同感するとともに、自分の幸福をまた新たに感じてゐたが、そこへ、まさ子が入つて來たので、

「今はじめてお母さんに承つたところなのよ。あなたもガツカリなすつたでせうね」と、同情したつもりで云ふと、ま

さ子は鼻の先で笑つて、

「縁談のこと？。嘘ですよ。……お母さんは何が面白くつて詰らないことを吹聴するんでせう」

「だつておきたさんには隠さなくつてもいゝじやないか」

「きた子さんにこそいゝ加減な話はしない方がいゝの。そんな話をしたつて自慢になりやしないわよ」

母親は面皮を剝がれたやうな不快を感じて、コソ〳〵と階下へ下りて行つた。

「あなたはなぜお母さんにツンケンするの？」と、きた子が非難すると、

「老人は詰らないことを大袈裟に吹聴するからいやになつちまふわ。縁談があつたにはあつたのでせうけど、私の方で結婚する意志はなかつたのだから、はじめから問題にはならなかつたのよ。なぜ問題にしなかつたかと、あなた聞かないで頂戴ね。……今度はいつあなたにお目に掛れるか知れないから、身の入つたお話をしてきたいと思ふんですけど、かうして顔を突合せて見ると、別段話すこともないものね」

「でもいろ〳〵なことを承つたぢやないの。……あなたは近にお母さんと御一しよに、焼跡見物にいらつしやるさうだから、さうしたら是非私どもの新宅へ寄つて下さいね。どうせ狭苦しい間に合せの家なんでせうけど、大喜びでお宿くらゐしますよ」

「焼跡見物もどうなることやら分らないわ」まさ子はふと陰気な口調で云つて「私ね、焼跡のうちでたつた一ケ所よく見ときたいところがあるのよ。被服廠の跡でも浅草でもないんです。誰れも見物に行きさうな所ぢやないのだけれど、私其處へ行つて、灰が残つてゐれば灰を掻搜して見たいと思つたりしてゐるの。私この頃は其處の夢をよく見るんですけど、夢と眞實とは全くちがふかも知れないわね」

「何處を御覽になりたいの？　寫眞なんかを見て想像の出來るよりは餘程ひどくつて眞實の燒跡は、それは汚ならしいいやなものなのよ。どんな立派な家だつて燒けると見窄らしくなつちやつて。……」

「さうでせうね。でも、私その見窄らしい、汚らしい所を見たくてならないのよ。想像とは違ふつてあなたは仰有るけれど、私其處の燒跡をいゝ夢に見てゐやしないんですよ。烏が屍骸を突ついてゐたり、臭い火が燃えてゐたり、惡魔の玉子が灰の中にうぢや〱涌いてゐたり、燒焦げた人間の魂が燒土の中で呻いたりしてゐるのを、夢に見てゐるのよ。それで、行つて見て實際がさうでなかつたら何だか詰らなかないかと思ふこともあるの」

「あなたは考へ方が一風變つて來たのね。……でも、惡魔の玉子が灰の中で踊つてるといふあなたの考へは當つてゐるかも知れないわね」

「私詩人氣取りでそんなことを云ふのぢやないの。夜の夢にだけさういふ夢を見るのぢやなくつて、晝間にでも、家の用事を片附けてこの部屋で休んでゐると、東京の燒跡がそんなやうに見えて凄くなることがあるんですよ。それで、以前はさうでもなかつたけれど、伯母さんの顏がこの頃は、燒跡から出て來た怨靈見たいに見えだして、私氣味が惡くつて爲樣がないの。御飯を頂く時には、五本の指をヒヨロ〱させて、箸を持つて左の手を右の手首の突かい棒にして、口のはたからはお汁を垂らしたりするのを見てゐると、私一しよに食べてゐて御飯が喉へ通らない氣がするのよ。妹だつて弟だつて、いやがつてるんですけど、伯母さんは特別に私をいやがらせてゐるんぢやないかと、私には邪推されるのよ。介抱は大抵はお母さんの役になつてゐるんだけれど、時々は私が夜の便所のお伴をすることもあるんですがね、さういふ時の氣味の惡いことつたら……母や妹なぞは、伯母さんにいつまでゐられちや、手が掛つて爲樣がないと零すだけなのだけれど、私は伯母さんは私に祟つて私がこの家にゐる限りは、此處にゐようと腹を極めてるんぢやないかと思

はれてならないの。……私あなたにだけこんなことを打明けるんですけどね。……四方八方から大火が燃えて來るなかを、あの不自由な身體でどうして無事に逃げ出せたのでせう。先つきお話したやうに、實子があつても不斷から寄付かないくらゐで、危險を冒してまで母親を助けようつていふ孝行心を起す譯はないんですからね。それこそ厄介拂ひをするくらゐに思つてゐたに違ひないの。御亭主だつても、老人のくせに浮氣者で、隨分伯母さんを邪慳にしてゐたらしいの。……伯母さんはどうしてかすり傷一つしないで、この私の家まで逃げて來たんでせう。私不思議に思はれてよ」

「でも、非常の場合には、病人でも不思議に元氣が出るんですよ。それに、傍の人だつて、今度のやうな大きな災難に會ふと、犧牲的な考へを起して、自分を棄てゝも人を助けようて氣になつたんでせう。新聞にもさういふ實例がよく出てゐたぢやないの」

きた子は、自分が見聞した涙ぐまれるやうな美はしい相互扶助の實例を二三話した。まさ子もそれを聞くと感動したが、しかし、伯母一族の上には關係がないやうに思ひながら、

「あの人だちに限つて犧牲的の考へなぞ、爪の垢ほども持つてゐやしませんよ」と斷言して、「今でも、手紙の文句や口先でばかりうまいことを云つて、伯母さんをいつまでも私の家へ押付けて置くやうに企んでるんだから、あの人だちに人情のないことはよく分つてゐるわ」

まさ子がいやにしつこく伯母の事に拘つて惡態を吐くのを、きた子は不思議にも思ひ淺間しくも思つて、多少反抗的に、

「私今夜は伯母さんにも是非お目に掛つて行きたいと思つてるのよ。私と同じ避難者なのだから、知らん顏してゐられないでせう」と云ふと、

「會ひたければ會つていらつしやいな。同じ災難に會つても、あなたはどんなに幸福だつてことが分つて、お宅へのいゝお土産話になりますよ。……それから、伯母さんは私の母の姉だけあつて、餘計なお喋舌にかけても母よりは上手なのだから、あなたに會ふと、屹度私のことを話しますよ。母が都合のいゝおまけをつけて、自慢で話したことを伯母さんは、意地の悪い興味で話すでせうけれど、どちらも正味の事實を見透してゐやしないんだから駄目なの」

やゝ窶れてゐるまさ子の骨張つた顔面に、焦立たしい神經がきらめいた。話しつ振りが賑かだつたので、はじめのうちは氣づかれなかつたが、その目顔に以前の快活さが薄らいでゐるのが、きた子には次第に氣づかれだした。

「それは、さつきちよつとお母さんから承つた縁談のことなのね」きた子は微笑して乘出して、「ぢや、あなたの口から正味の事實を話して下さいな。私が聞いたつて何の足しにもならないかも知れないけど、眞心だけは持つてゐるんですからね」と、改つた口調で云つた。

「さう改つて訊かれちや困つてよ。諏訪の温泉にでも行つてのび〱と手足を伸したなら、そつくりお話することが出來るかも知れないけど、此處ぢや駄目。事の筋道がなか〱入組んでゐるんですからね」

まさ子は思はせ振りに云つて口を噤んだ。そして、相手の顔をまじ〱と見てゐたが、ふと骨張つた頬へ一しづくの涙を落した。

「馬鹿々々。……」と、自分の弱さを叱るやうに云つて、「私もきた子さんのやうに、いつになつても奇麗な濁らない氣持をもつて生きてゐられるといゝんですけれどね。私悪人になつたのよ。東京が大火事になつて、××町が燒けたつて聞いた時には、自分が望んでたことが本當になつたと思つて喜んだのですからね。これで胸がせい〱したと思つてたところへ、間もなく、伯母さんの一組がヒヨイと店先へやつて來たの」

また伯母さんのことか、もう澤山ときた子は對座してゐるのがいやになつたので、「さあ、私もうお暇にしませう。家で心配してるかも知れないから」と、ふと慌たゞしく云つて腰を浮かした。

明るくつて靜かな自分の部屋へ早く歸つて、重つたるい足を氣儘に伸したくなつたきた子は、もはや伯母さんなどに會つて面倒な思ひをする氣はなくなつたので、まさ子の兩親にだけ挨拶して、直ぐに行過ぎようとしたが、茶の間の長火鉢の側に根をおろして、關所の番人のやうに絶えず土間の通路に目を注いでゐた伯母さんは、默つてきた子を通らせなかつた。

呼留められたきた子は、據なく上り口に腰をおろして、互ひの災難を語合ひ慰め合つたが、同時に東京で生死の境をくゞつて來た同士であるから、まさ子などゝ話してゐるよりも、却つて話に熱が通つて面白かつた。何處の路をどう通つて何處で火を避けたといふことだけでも、自分の經驗に照らして興味をもつて聞かれた。

「あなたももつと此方で御保養なすつたらよろしいぢや御座いませんか。燒跡に灰がもや〳〵立つてる東京へは、私のやうな身體の弱い老人は當分歸らない方がいゝだらうと思つてゐますのですよ。どこかの溫泉へでも入つて身體をよくして、來春花の咲く時分になつて歸ることにしたいと思つてるので御座います」と、伯母さんは、罹災者らしい屈託のなさゝうな呑氣な口を利いたので、側にゐたまさ子は、意味ありげな冷笑を浮べてきた子に目くばせした。

「それはよう御座いますね」と、きた子は眞面目な受答へをした。こんな弱々しい青褪めた顏した老人を、生活の設備の整はない東京へ歸らせるのは、いた〳〵しくて忍ばれない氣がした。そして、「私の家へも一度お遊びにいらつしやいましな」と云ふと、伯母さんは喜んで、「毎日家にばかりゐるのは退屈でなりません。天氣のいゝ日には俥に乘つて市中を見物したいと思ふこともあるので御座います」と、明日にも訪問しさうな氣振りを見せた。

（二）

きた子は再び夜の町を出て家へ歸つた。避難以來はじめて獨歩きをしたり、他人の家へ行つたりしたので、足にも頭にも疲勞が感ぜられた。このくらゐなことで疲れるのは、災難の打撃がまだ癒えないためなんだらうから、歸京しても繁忙な働きには堪えられないかも知れないと稍々悲觀しながら、家族の團欒に加はつて鈴川一家の様子などを話した次手に、

「まさちやんに縁談があつたんでせうか」と訊ねたが、母親をはじめ誰れもそんな噂は聞いたことがないと答へた。

「あの人は何だか變よ」と云ふと、

「縁が遠いから、自分でも氣を腐らすんだらうよ」と、母親は云つた。

きた子は自分の部屋へ行つて寢仕度をした。月はます〳〵冴えて、遠くの方は煙つて、近づいては遠ざかつて行く汽車の音も、いゝ音樂のやうに響いて來た。何と云つてもまさ子よりは自分の方が遙かに幸福なのに違ひないと喜びながら、軟かい蒲團の上に横たはつた。そして、まさ子が燒跡の灰を掻捜して見るなんて氣取つたことを云つてゐたのを、ふと思出して噴きだした。

あくる日は夫の仙吉からいゝ音信が來た。郊外は秋の眺めがよくなつて、狹くつても前の家よりは住心地がいゝ。燒失した市内にもバラツクなどが續々建てられて復興の氣分が盛んである。自分の勤め先の店も再興の準備が着々步を進めてゐる。と、文字を讀んでゐても胸の踴るやうなことが書かれてあつた。身體がよくなつて歸京する時には、成べくかういふ者を買つて來てくれと、鰹節けずり、洗面器、フライパンなど、臺所道具の名が十幾種、夫の姉の手で書添え

られてあつた。きた子は、新世帯を持つ幸福を感じて、母親と一しよに町へ買物に出掛けた。傷跡は肉がついたので、毎日思ふ存分に湯に浸つて罹災後の汚れた身體を磨き立てた。

永い間徒歩連絡を餘儀なくされてゐた中央線も、幸ひに全通したので「××日に歸京する」といふ手紙を出して置いて、歸り仕度に取掛つて、その日には、弟を連れて甲府の停車場から汽車に乘つた。縣廳の役人の轉任の見送り人でプラットホームが混雜してゐたので、乘車の際には氣づかなかつたが、汽車が動きだしてから、ふと見ると、同室の中にまさ子の伯母さんが坐つてゐた。贈り物をされたり見送られたりするのを好まなかつた上に、先夜の訪問によつて、まさ子に對する隔てなき親しみがやゝ薄らいでゐたので、歸京の日取りを鈴川家へは知らせなかつたのだが、今日偶然伯母さんと同車したのは、同じ時に同じ土地へ逃げて來た罹災者として因縁があるやうに思はれた。それで、手荷物の整理をしてしまふと弟に座席を守らせて置いて、自分は、可成り距つてゐる伯母さんの席へ寄つて行つて挨拶した。匹偶と思はれる老人が保護者として附添つてゐた。

「これはいゝお伴れが出來て」と、伯母さんは喜んで、席を空けてきた子を側へ坐らせた。顏は先日と同じやうに窶れて青褪めてゐたが、衣服は借り物だか貰ひ物だか、小ざつぱりしたものを着けて、頭髮は奇麗に解付けて、足袋でも下駄でも新しくつて、罹災者らしいところは見えなかつた。

「鈴川では、是非もつとゐてくれつて留めたんで御座いますけれど、甲府にも飽き／＼しましたから、急に東海道の方へまゐることにいたしました。靜岡の近くの××といふ村に、私どもの身內の者が行つてゐまして、是非來てくれと申しますから、あちらは冬が溫くつて魚もよく捕れるところで、弱い者の保養には甲府よりはよろしいだらうと思ひまして、急に出掛けることにいたしました」と、伯母さんは、先日の晩の話とは辻褄の合はないことを云つたが、きた子

は氣にも留めないで、

「それは結構で御座いますこと」と、この厄介な燒出されの病人を置いて呉れる所が、外にもあるのを、他人事ながら心強く思つた。

「鈴川の家では母親が子供を甘やかして育てたものですから、どの子も出來のよろしい方ぢや御座いません。私ども今度久振りで會つて呆れましたのです。おまさは小さい時にはもつと素直な性質のいゝ子だとばかり思つてゐましたのに、あゝ我儘になつちや、どこへ緣付いても辛抱が出來ますまいよ」

早速かういふ話が、半身不隨のお喋舌の老女の口から出て來たので、きた子は聞斗を立てたが、傍の老人は、

「その話はまあ止したらいゝだらう」と、眠つたさうな目に微笑を浮べて云つた。

「おまさのお友だちのこの方に、因緣があればこそお目に掛つたのですもの」と、伯母さんは遠慮なしに話を續けた。

「私も內々でおちか（まさ子の母親）に賴まれて、永いことおまさの嫁入口を搜してゐたので御座いますが、寫眞うつりが惡いのか、寫眞を見せると、いつも二の足を踏まれるので、當人を東京へ寄越せとたび〳〵云つてやりましたのです。子供の時分にはそんなに不器量な女ぢやなかつたのにどうしたのだらうと不思議に思つて、私どもゝ一度當人に會つて見ようと思つたのでしたが、どういふものか、おまさは東京へ出ても私の家へは寄付きません。見合ひをすることも嫌つて、一度仲に立つた方を困らせたこともあつたと、おちかゞ申して居ました。妹も年頃になつてゐるのに姉の方がいつまでも片付かなくつちや困ると、母親一人でヤキモキしてゐたやうでしたが、それが馬鹿ぢや御座いませんか。訴訟沙汰で鈴川の家で賴んでゐた代言人に母子ともスッカリたぶらかされて、その代言人の親分の息子と緣組みが出來ると思込んで、代言人に餘程のお金を捲上げられたらしいんです。用心をして世間へはまだ內證にしてるけれど、今度

は見合ひまでしたから確かだつて、私の所へおちかが知らせて來ましたから、私どもにはどうも腑に落ちませんので、貫緣をたぐつて段々先方の樣子を調べて見ますと、お話にもならない大間違ひなんで御座いまして、先方の親御は錦町に立派な事務所をもつてゐらつしやつて、御本宅は目黒にあつて大きな西洋造りで、息子さんは洋行歸りのチヤキ／＼で、どうして田舍の小商人の娘なんぞと緣組みをしさうなお家ぢやないのです。見合ひをしたと云つても、本當の息子さんと見合ひをしたのやら、贋物と見合ひをしたのやら、分つたものぢやないと、私どもは大變心配いたしまして、早速鈴川へ詳しい手紙で注意をしてやりました。ところが、餘計なおせつかいとでも思つたのでせうか、暫く返事も呉れなかつたので御座いますよ。ぢや、勝手にするがいゝ、身內の爲めだと思つて暇を潰して穿鑿してやつたことを惡く取られるやうぢや詰らないと、さう思つて暫く打遣らかしてゐるうちに、先日の大地震が起つたのです。私どもは生命だけ助かつて、夢中で此方へ逃げて來たのですから、おまさの緣組みのことなんぞ、當時は忘れてゐましたのですが、四五日たつて心がいくらか落着いてから訊ねますと、錦町の事務所が地震で潰れた上に丸燒けになつて、先方の親御も息子さんも御一しよにお亡くなりになつたと、代言人から知らせて來たと云つて、おちかは大變に殘念がつてゐました。私どもの云ふことは取上げさうで御座いませんから、そこは避難民のなさけなさで、上べは調子を合せて、おくやみも云つてやりましたが、代言人は地震をいゝ幸ひに、自分の詐欺の尻尾を掴らないで奇麗に濟まさうとしてゐるのに違ひ御座いませんです。こちらでも詐欺に掛つたと分つて娘を嗤はれ者にするよりは、相手の男が地震で死んだとしといた方が氣持がいゝでせうから、それで濟まされるものなら濟ましとくに越したことは御座いますまいが、若しも先方の息子さんが無事に生きてゐらつしやるやうでしたら、餘程變なものだと私どもには思はれるので御座いますよ。」

伯母さんは力の弱い聲で、自分の話すことに何の感じをもつてゐないやうな平板な調子で、ゆつくり／＼話續けた

が、きた子にはそのゆつくりした話にいくつもの針を含んでゐるやうに思はれ、聞いてゐる耳に、針で突かれる痛さが感ぜられた。

「それで、まさ子さんはどう思つてゐらつしやるんでせう?」と、訊ねると、

「あの子は打明けては何も申しませんが、母親ほどのお人よしぢや御座いませんから、ちつとは勘付いてゐるやうで御座いますよ。それて逆恨みに私どもを恨らんでゐますのです。先方の息子さんが死んだのか死なゝいのか、代言人の云つたことが眞實なのか詐欺なのか、私どもの知つたことぢやないのに、私どもの所爲のやうに思はれちや、ほんとに迷惑いたします」

「お前もいゝ加減な當推量を人様に申上げるものぢやないよ」

先つきから、目を瞑つて眉根に皺を寄せて、何かの考へ事をしてゐたらしい匹偶の老人は、ふと伯母さんを顧みて、叱るやうに云つた。

「何が當推量なものですか。おまさは地震でもなかつたら、惡代言人の詐欺に掛つて、取かへしのつかないひどい目に會つたかも知れなかつたのです。替え玉と知らないで見合ひをしたゞけで、身體に間違ひが出來なかつたのは、運がよかつたのですよ」と、伯母さんは匹偶に云つて、「私、口が渇いて爲方がない。蒲萄でも買つてくれればよかつたのに。この時節に甲府へ來て蒲萄さへろくに食べずじまひになつたぢやありませんか」

「おれも蒲萄の一籠くらゐは買つて歸りたいと思つたのだが、お前の方を手離せないものだから」

「蒲萄ならこの次の勝沼で賣つてゐますでせう」と、きた子が口を出すと、

「いや、病人を連れてゐて荷物を殖やすのは困りますから」と、老人は慌てゝ言譯をした。

風呂敷包一つの外に手荷物らしい物を、彼等は持つてゐなかつた。きた子は氣の毒になつて、自分の席へ行つて、車中で食べる筈だつた一袋の蜜柑を持つて來て、伯母さんの手へ持たせてやると、伯母さんはペコ〳〵頭を下げて、蜜柑の方へ口を持つて行つてはしやぶりついた。汁が口端から垂れて膝を汚すのを、匹偶(つれあひ)ははたから拭いてやつた。きた子は目を外(そら)した。

「大變おいしう御座いました」と、伯母さんは、欲しいだけ食べてお禮を云つて、殘りを匹偶(つれあひ)に勸めた。向う側では、役人の妻君が書生に籠を開けさせて、紅い色をした柿を出して皮をむいて夫(をつと)に勸めてゐた。きた子はそれらを見るにつけても、夫の側へ歸つて行く樂みを覺えた。役人は色の淺黑い凛々しい働きものらしい顏をしてゐるのに、妻君に豚のやうに肥つて鼻がぺたんこで下品なのが、きた子には氣になつた。そして、釣合ひが取れても取れなくつても、若くつても歳を取つても、夫婦といふものは、互ひに情愛があるものか知らと、今更のやうに感心した。

「靜岡にはお灸の上手な人がゐるさうですから、あちらへまゐりましたら、灸をすゑて貰ひませう。さうして冬のうち温かい土地で保養したなら、私の身體もよつぽどよくなるだらうと思はれます。花の咲く時分には東京へ歸りますから、あなたのお宅へも一度寄せて頂くかも知れません」

伯母さんは苦のない人のやうにさう云つて、きた子の新宅の在所(ありか)を訊ねた。

「どうぞ遊びにいらして下さいまし」

きた子はさう云つて頭を下げたが、それを機會に伯母さんの側を離れて、自分の席へ戻つた。まさ子の縁談の眞相はどちらであつたにしろ、氣の毒には違ひなかつたが、飽きるほど耳にした地震の慘話を思出すと、まさ子の不幸などは些細なことのやうにも想はれた。

「御覧なさい。紅葉が奇麗ぢやないの」と、きた子は窓の外を見ながら弟に云つて、「私だちは生命懸けでこの邊を通つて來たのよ」

「東京から逃げて來た人は、みんな生命懸けで來たつて云つてるよ」弟はさういふ言葉は聞飽いてゐて、何の感じも起さゝれなかつた。

「あなたも一度生命懸けの經驗をして御覧なさい。こんなに氣樂に坐つてゐて秋の景色を見てゐられるだけでも、ほんとうに有難いと思はれるやうになつてよ」

「地震や火事に追廻されて苦勞しなくつたつて、面白いものは面白いよ。たまに旅行にでも出ると、僕はいつだつて面白いよ。生命懸けの自慢なんか詰らないことぢやないかな」と、弟は笑つて、「さつき姉さんと話してゐた老婆さんも、燒出されの自慢話でもしてゐたのだらう。あの老婆さんの顔は見てると氣味が惡くなるよ。東京にはこの頃あんな人ばかりがウロ／＼してるんだらうか。……そら、老婆さんは姉さんの方を見るよ」

「大きな聲で惡口を云つちやいけないよ」きた子は弟を戒めながら、われ知らず向うの方へ目をつけた。伯母さんは小さな目で此方を見据ゑてゐた。弟の云ふやうに氣味が惡いときた子も思つた。そして東京へ着くまであの目で見られてゐるのはいやなことだと、同じ車室へ乘合せたのを悲んでゐたが、暫くしてそちらを見ると、伯母さんは匹偶の膝を枕にして眠つてゐた。

（三）

勤め先からの歸りに停車場に出迎へに來てゐてくれた夫の仙吉に連れられて、東中野の新宅へ着いた時は日暮前だつ

たが、豫想してゐたやうな郊外の靜かさとはちがつて、あたりは市中のやうに賑かだつた。新宅も掘立小屋見たいな安普請で、秋草などで庭を色取られてゐる瀟洒たる住居は、彼女が先月うち見てゐた夢の中に存在してゐたのに過ぎなかつた。燒失したいろ〳〵な家財調度が新たに彼女の心に浮んだ。家を見廻りながら考へてゐると、

「不平さうな顏して見てゐるね。だけど、こんな家でも、燒跡のバラツクなんかよりは有難いんだよ」と、夫に云はれたので、

「不平どころぢやないのよ」と、きた子は慌てゝ云つて、假りにもそんな顏を夫に見せてはいけないと自から戒めて、

「明日から私も働きますよ」と快活に云つた。

一時心淋しい思ひをしたきた子も、夫の妹や自分の弟などゝ一しよに、新しいちやぶ臺を圍んで、間に合せの食器で、賑かな笑話をしながら食事をしてゐると、實家にゐた間とはちがつた潑溂たる氣持になつた。夫も顏だけは知つてゐるまさ子の緣談についても面白づくで話した。

「あの人は容色が惡いから貰れが遠いんだね。高望みをしないで、いゝ加減なところで極りをつければいゝんだ」

仙吉は醜い田舍娘の身の上には何の興味も寄せられなかつたので、さう云つて簡單に片附けた。

「當人にさう云つたら、利かん氣のまさ子さんはどんなに怒るでせう。……あの人近かに東京へ見物に來るやうなこと云つてたから、若しかすると私の家へ寄るかも知れないの。その時はあなたも親切にあしらつて下さいね。境遇が氣の毒なんだから」と、きた子は來訪を豫期してはゐないのに念のために、夫に注意した。仙吉は首付いた。

諸方の燒跡の復活しつゝある經路は、仙吉によつて語られて、弟は好奇心を寄せて明日にも被服廠や淺草などを見に行かうとした。

「私も一しよに行つて見ようか知ら。元の家の跡も見たいし」

きた子は、今の幸福な氣持を強くしたいためにも、生死の苦しみをさゝれた所を訪れたくなつた。

「行つて見るといゝ。お前が足を敷かれて唸つてたところには、燒土が盛上つてるばかりで、まだバラツクも何も建つてやしないよ」

「今に家が建續いたら分らなくなるから、早く行つて見ときませう。自分の一生の紀念によく見てよく覺えとかなければならない」

「お互ひに不平が起つたらあの時のことを思出すんだね」

かういふ睦まじい話を、仙吉の妹やきた子の弟は、反感も同感も寄せないで、無心で聞いてゐた。

翌日は、朝のうちは三人がゝりで拭掃除をして、家具調度の置場所を都合のいゝやうに直した。甲府から買つて來た新しい世帶道具や家庭用のいろ／＼な材料は、鐵道の貨物が輻輳してゐるために、容易につきさうでないので、働くにも働きようのない今のうちに燒跡見物でもしようと思立つて、きた子は、弟を連れて市中へ出掛けた。

あの時の大混亂の光景が思出されるとゝもに、市中が穩かになつて、みんながそれ／＼に働らいてゐるのが、涙ぐまれるほどに悅しかつた。最初に靖國神社境內のバラツクを見て、それから、元住んでゐた町の方へ足を向けて、九段の坂を下りかけたが、神田全體の新光景を見下してゐるうちに、ふと錦町の事務所とかいふ者を次手に見たくなつた。知らない人の白骨が山をなしてゐるといふ悲慘な被服廠よりも、親しいまさ子の緣談の相手にされたといふ××の息子の壓死された跡を見る氣になつた。

九段下から電車通りを通つて行くと、表通りこそ小さなバラツクなどが出來てゐたが、裏の方は燒けた時そのまゝの

やうであつた。

「燒跡は汚いものだなあ」と、弟は何方を向いても、活動寫眞などで見て想像してゐたやうな趣味のある燒跡は見られなくつて、埃つぽくて臭くて穢るしいばかりなのに失望して、「どこもこんなのか知ら。もつと變つたところはないのだらうか」

「火事で燒けるのに變つた燒け方つてあるものかね。あなたは燒けない前のこの邊の事を知つてゐないから、見てゐても詰らないのよ。その角には大きな洋服屋があつて、義兄さんの夏服も冬服もそこで拵えたのに、今はあんなになつちやつた」

きた子は、夫の洋服もそつくり燒失せたことを思出して、洋服屋の方を顧みながら心を暗くした。伯母さんから聞いた言葉に導かれて錦町の方へ歩いて行くと、きた子がかつて鼻の治療のために數週間入院をした病院が石の門だけ殘して燒けてゐるのが、立札によつて分つた。で、足を留めて、自分が入つてゐた病室のあたりを心當てに見てゐたが、弟に注意されて目を轉じると、まさ子に違ひない若い女が向うから歩いて來たので、きた子は吃驚した。何となく此處で出會ふのは避けたくなつたが、急に横へ外れるのも後目たかつたので、近よつて聲を掛けると、まさ子は顏色を變へて立留つて、直ぐには口が利けなささうだつた。

「いつこちらへ入らしつたの?。あなたおひとり?」と、きた子が訊ねると、

「昨夕の夜行で來たのよ。伯母さんは昨日立ちましたよ」と、まさ子は稍々落着いてから打解けて云つた。

「さう?」きた子は後で分ることを白ばくれてゐてはいけないと思つて、「私昨日伯母さんと汽車で御一しよになつたの」

「ぢや、伯母さんのお喋舌をお聞きになつたのね。あの人、今度東海道へ新奇の避難所を見つけたつて、急に、私だちの

持成しが惡いやうなこと云つて出て行つたのです」まさ子は險しい目をして云つたが、相手が、返事に迷つてゐる間に、わざとらしい馴々しさを顏に現はして、

「母と一しょなんですけれど、吉村さんのお家へ母を預けといて、私だけが燒跡見物に來ましたのよ」

その時二人の目に一度期に映つたのは、耳鼻科の病院の側の、「××事務所」といふ立札であつた。そこには燒煉瓦が積重ねられてあるだけで、まだ改築されるらしい樣子は見えないで森閑としてゐた。溫い日が燒土に光つてゐた。此處が伯母さんの話してゐた家なら、入院中に廊下に立つてたび／＼見てゐたのだと、きた子は、さほど立派ではなかつた燒失前の家を記憶から惹出してゐたが、

「どつち向いてもこんな風だと恨みつこはない譯ね」と、まさ子は空々しく口を利いて、「母が待つてゐますから私此處でお別れしますわ」と云つて行過ぎた。

きた子は何か云はうとして氣おくれがしてゐるうちに相手の姿は遠くへ離れた。好奇心からこんな所を見に來て、まさ子の氣持を傷つけたことを後悔するとともに、被服廠などを見物に行く興味はすかり消失たので、燒殘つた山の手の町で買物をして、自分の家へ歸りを急ぐことにした。弟も快く同意をした。

まさ子に會つたことは夫にさへ話さなかつたくらゐで、彼女のことはそれつきりきた子の頭の中に薄らいだのであつた。知つたつて何の足しにもならない、人の縁談の眞相を强いて知らうとする熱心も起らなかつたので、手紙を一本出さうともしなかつた。幼な友だちのうちで最近まで親しみを寄せてゐた唯一人のまさ子とも、これでお別れになつたやうな氣がしたが、自分の新宅が日に／＼整頓して住みよくなるので、きた子の世の中は明るくつて賑かだつた。

意外にも伯母さんからは代筆の端書が來た。「先日は失禮いたしました。都合により昨日歸京いたしましたから、お通掛りの時にはお立寄り下さい」とあつた。

きた子は、弱い心をさゝれるやうなかういふ端書は貰ひたくもなかつた。そして、夫に誘はれても燒跡など決して見に行かうとはしないで、さういふ暇があつたら、自分の家をよくするやうに努めようとした。

或る男の手記

豊島與志雄

もう準備はすつかり整つてゐる。準備と云つても、新らしい剃刀と石鹸と六尺の褌とだけだ。それが、鍵の掛つた書棚の抽出の中にはいつてゐる。私としては、愈々やれるかどうか、それを試してみるだけのことだ。然しその前に、一切のことを書き誌してみたい――と云ふより寧ろ、文字といふはつきりした形で考へてみたい。馬鹿げた欲求だといふことは分つてゐるが、さうにでもしなければ何かしら心に落着がつきにくいのだ。

とは云へ、どこからどう書いていつたものか、一寸見當がつきかねる。いろんなことが一時に持上つた混亂した事件だけに、本當の筋道を辿りそこなうこともあるだらうし、重大な事柄を見落してゐることもあるだらうし、私の知らない隱れた事實もあるだらう。然しそんなことを心配してゐてはきりがない。自分を中心に――さうだ、この場に及んでもやはり自分だけが中心だ――ぐんぐん書いてゆく外はない。

あの日……表面的にはあの日が發端だつた。からりと晴れた小春日和で、田舍には

小鳥でも鳴いてゐさうな日だつた。實際井ノ頭の木立の中には、小鳥の聲が爽かに響いてゐた。そして私は、郊外の大氣と日の光とに我を忘れて光子を眺めて、小鳥のやうな女だと思つたのだつた。そして私もまた、何かしら心が浮々としてきたのだつた。……が、こんなに筆が先へ滑つては仕方がない。

その日の午前十時頃、私が會社の室で、何だか滿ち足りない焦燥のうちに茫然としてる時……と云つても、そんな氣持はその日に限つたことではなく、もう長い間の私の心の狀態となつてゐたのだが、それは後で云はう。でその日もやはり、落付いたやうな落付かないやうな氣分に浸つて、ぼんやり煙草を吹かしてゐると、女の人から電話だと給仕が取次いできた。何の氣もなく電話口に立つと、それが月岡光子だつた。「月岡光子でございます。」と彼女は姓までつけ加へて名のつた。彼女の姓が月岡だといふことは前からよく知つてはゐたが、電話で改めて聞かされると、それが私の耳の中で物珍らしく躍つたものだ。

「お目にかゝつて至急御話申上げたいことがございますが、そちらへ伺つて宜しうございませうか。」

「さあ……」と私は口籠りながら、餘りの意外さに躊躇したものゝ、相手の急き込んだ語氣からして、何かしら切迫つまつた心を感じて、兎も角もお出でなさいと承知してしまつた。

彼女が私に逢ひに會社の方へやつて來るといふことは、私と彼女とのこれまでの關係からすれば、全く調子外れのものだつた。來るなら自宅の方へ來さうなものだ、そして私の歸りが待ちきれないといふなら、妻へ話しても用は足りる譯だ、などゝ私は考へながら、また一方には、それを押して會社へ出かけてくるくらゐだから、何かよつぽどの事件に違ひない、などゝいふ好奇な期待の念が、私の心に甘へかけてきた。

一時間ほどたつて、彼女は會社へやつて來た。その間に私は、大體の仕事を急いで片付けて、いつ會社を退出しても

いゝやうにしておいた。勿論意識してさうしたわけではなく、自然に氣が急いてさういふ結果になつたのだつた。一體私は、平素はのらくらしてゐて隨分懶け者だが、一朝事があると――と云へば大袈裟だけれど、例へば子供が病氣で入院したりなんかしてる場合には、人手の少い家の中でいろんな用をしながらも、平素の幾倍となく自分の仕事を捗すのである。「あなたくらゐ妙な人はない、忙しい時ほど仕事がよくお出來になるんだから、」と妻はよく私に云つたものだが、私としては、泰平無事な時よりも、苦しい脅威が迫つてくればくるほど、心に張りが出來るし働き甲斐があつて、ぐんぐん仕事が進むのである――仕事といつても、英語の小説の飜譯くらゐなものだが。然しさういふ狀態はいけないものだつた、少くとも變則のものだつた。多くの人は落付いて仕事をしたいと云ふのに、私だけは、落付いてゐては仕事が出來ないといふのだから。それに……いやこのことをも先で云ふことにしよう。

私は光子を應接室に通さしておいて、ゆつくりと心構へをしながら出て行つた。光子は私の姿を見ると、吃驚したやうに立上つたが、ぎごちないお辭儀を一つすると同時に、微笑とも苦笑ともつかない影を顏に漂はして、そのまゝ腰を下してしまつた。そして、私が腰を下してからやゝ間を置いて、改まつた調子で初めて口を開いた。

「あの……お邪魔ではございませんでせうか。」

「いゝえ別に……。」そして私は一寸落かない心持で尋ねた。「何か急なお話があるんですか。」

「えゝ、是非先生に聞いて頂きたいことがございましたんですけれど……。」

だんだん語尾の調子をゆるくしながら口籠つてしまつて、變に固苦しくかしこまつた。その樣子を私はちろちろ見やりながら、遠廻しにそれとなく話を引出さうとした。然し彼女はなかなかそれらしい話を切出さなかつた。河野さんの家に於ける生活狀態などを、私の問に對して簡單な文句で答へはしたが、心が外に向いてることは、その樣子にも明か

だつた。時々辻褄の合はないことを云つては、それを自ら意識してる風もなく平氣で、私の方へちらと黒目を向けるのだつた。

黒目を向ける……とは變な云ひ方だけれど、實際彼女の眼には特長があつた。私は初めて彼女に逢つた時から、その眼に一寸興味を惹かれた。初めて逢つたと云つても、さう遠い前のことではない。今年の六月、一寸した用件のついでに、北海道を暫く旅して廻つて、登別の溫泉に泊つた時、髮の結ひ方から服裝から言葉遣ひまで、女中といふよりは寧ろ女學生といつた風な二十歲ばかりの女が、私の許へ夕食の膳を運んできた。そしてお給仕をしながら、さういふ場合のありふれた會話の間々に、彼女は私の方へちらちらと黒目を向けた。もつと詳しく云へば、兩方の黒目が薄い上眼瞼に引きつけられて、宛も近視の人が額に物をかざして眺める時のやうな眼付、もしくは、若い女優が舞臺の眞中に立つて空を仰ぐ時のやうな眼付、さういつた風などこか不安な色つぽい眼付なのである。それでゐて、決して上目を使つてるのではなく、眞正面に私の方を見てるのだつた。私がそれに注意を惹かれて捕へようとすれば、瞬にさつと細やかな光が搖れて、黒目は元の——普通の——位置に復してしまう。後で私は知つたのであるが、北海道の女には、殊に不品行な女には、さういふ眼付を持つてる者が多いやうである。然したゞ彼女の眼付には、不品行などゝいふ影は少しもなく、固より處女ではなさゝうだけれど、濁りのない純な光が輝いてゐた——が或はそれも、純白な白目のせいかも知れない、と今になつて私は思ふ。この女が、月岡光子だつた。私はその溫泉に五六日滯在してゐたので、光子とは可なり親しみが出來た。彼女自身の云ふ所に依れば、彼女は札幌の文房具屋の娘で、遠い緣續きになるその溫泉宿へ、保養旁々來てゐた所が、女中の手が足りなくなつたために、一時餘儀なく手傳ひをしてるのだつさうだつた。やがては女中も來るから、そしたら暫くの間、見物がてら東京へ出るつもりだなどゝ云つて、先生と私のことを呼びながら、私の住所

なんかを聞きたゞした。話の調子や趣味やなんかから、私を文士かなんぞのやうに誤解したものらしい。私は面倒くさいから强ひてその誤解を解かうともせず――實は私も英語の小說の飜譯なんかを內職にしてるので、文士のはしくれと云へば云へないこともなかつたのだ――また、別に彼女に對してどうといふ氣持もなく、たゞその黑目を見るだけで滿足してゐた。それから旅を續けると共に、彼女のことは忘れるともなく忘れてしまつた。そして八月の半ば、若い女が不意に東京の私の自宅へ飛び込んできて、月岡光子と女中へ名前を通した時、私はそれが彼女であるといふことを、逢つてみるまでは思ひ出せなかつた。

所で、會社の應接室で、いつまでも肝心の話を持出しさうにない光子を相手に、多少ぢれつたい氣持になりながらも私は、彼女がもぢもぢすればするほど、表面だけは益々落付拂つて、時々黑目が上眼瞼に引きつけられる彼女の眼付を、物珍らしさうに待受けてるうちに、ふと、北海道の溫泉宿のことをまざまざと思ひ浮べ、次には、窓の外の澄みきつた蒼空を眺めやり、次には、いつ人がはいつて來ないとも限らない鹿爪らしい應接室を、そぐはない氣持で見廻して、こんな所で彼女が話しにくいのも無理はないと考へた。と同時に、解放された晴々とした所に出てみたくなつて、少し外を歩いてみようかと云つてみた。

光子は喫驚したやうに黑目を据ゑて眼を見張つてから、暫く何とも云はなかつた。

「それに、もう時間だから、何處かで晝飯でも食べませう。」と私は云つた。

彼女は御飯は頂きたくないと答へたが、お差支へがなければ外を步いた方がいゝと云ひ出した。

私は社の上役に斷つておいて、光子と一緒に外へ出た。丁度その日私は和服をつけてゐたので、袴が多少邪魔になりはしたけれど、洋服よりは都合がよかつた。ステッキを打振つたり引きずつたりしながら、內幸町から宮城前の堀端の

方へ歩いていつた。街路の地面は心地よく乾いてゐて、ほつこりとした溫みのある日の光が、私達の身體を包み込んだ。光子は輕快な足取りで私と並んで歩きながら、妙に默り込んでしまつた。それも何かを思ひ耽つてるといふ風ではなく、顏付も眼付も暢やかになつて、何だかかう夢をでもみてるかのやうだつた。晝飯を食べようかと云つても、たゞ欲しくないと答へた。一體どうしたといふんだらう？　私にはさつぱり譯が分らなくなつた。思ひ切つて眞正面から、話といふのはどんなことですかと、少しきつい調子で尋ねてみた。

「もういゝんですわ。先生にお目にかゝつたら、どうでもいゝやうな氣がしてきたんですもの。」

「それで？」

「それでつて……。」

そして彼女は一寸地面を見つめたが、何を思ひ出したのか、くすくすと一人笑ひをした。たつたそれだけのことだが、それが私の心を輕く憤らした。この輕い憤りほど始末の惡いものはない。殊に相手が、反感も憎惡もない快い異性の時にさうである。私は甘つぽく嵩にかゝつてゆく氣持になつて、急な大事な話といふのを聞かないで、このまゝ光子を放すものかと決心した。そして、どうしたら彼女が話し出すだらうかと思ひ惑つてる所へ、高い角張つた建物や電車自働車の響きや忙しげな通行人など、眩しい錯雜した都會と、私が朧ろげながら推察してる彼女の話の內容——恐らくは戀愛問題——とが、相容れない世界となつて心に映つてきたので、こんな風ではとても駄目だと思つて、知らず識らず步みを止めた。もういつのまにか堀端に來てゐた。葉の散つた柳の細い枝影を、派手な大柄な絣の米琉の着物に粗らに受けて、一二歩先で足を止めて私の方を振向いた彼女の顏が、堀の水と空とを背景にくつきりと浮出して見えた。

「いゝ天氣だから、郊外でも少し歩いてみませうか。」と私は、その瞬間の咄嗟の思ひつきに自ら微笑みながら云つた。

「えゝ、先生さへお差支へございませんでしたら。」と彼女は平氣で答へた。そして日傘の先で、ぐいぐいと地面をつゝついた。――水淺黄に黑で刺繍のしてある日傘を、彼女はその日一度もさゝないで、丁度ステッキのやうな風に持ち歩いたのを、私は今はつきりと思ひ出す。

私達は東京驛へ折れ込んで、それから電車に乘つた。初め私はたゞ漠然と郊外でも歩くつもりで、中野までの切符を買つたが、乘り込んだ電車が吉祥寺まで行くものだつたから、一層のこと井ノ頭へ行つてみようと思つた。

「東京にも、北海道ほどぢやないが、靜かな落付いた公園があるから、案内してあげませうか。」と私は小聲で云つた。

「えゝ。」と彼女はまたどうでも構はないといふ調子で答へた。

電車の中に彼女と並んで腰掛けて、ステッキの頭に兩手をのせ、ぼんやり車外の景色に眼をやつてるうちに、私は一寸さうした自分の姿に苦笑したが、別に他意あつて光子を連れ出すわけではなく、心さへしつかりしてゐて過を犯さなければ、彼女と半日の秋の光を浴びるくらゐ何でもないことだと、至極呑氣な氣持に落付いていつた。たとひ友人に出逢つて何とか揶揄されても、私は顏に一筋の赤味も浮べないで、反對に相手を揶揄することが出來たかも知れない。後で妻とひどく喧嘩をして、私は北海道の時から光子と關係がついてるのに、それをのめのめと家に引張り込み、光子が河野さんの家に行つてからも、時々媾曳してたに違ひないと、とんでもない邪推を受けた時、私は落付いて次のやうに云つたのである。

「馬鹿なことを云つちやいけない。いくら僕が呑氣で圖々しくても、もし光子と北海道で變なことがあつたのなら、何で家の中にお前の側に引張り込むものか。僕はまだそれほど精神的に墮落はしてゐないつもりだ。勿論結果から見れば、僕はお前に何と云はれたつて仕方ないけれど、初めから破廉恥な計畫なんかは少しもなかつたのだ。僕は光子を非

ノ頭に連れて行く時、別に何といふ氣持も持つてやしなかつた。たゞ彼女からその大事なといふ話を聞かうと思つただけだ。光子が女だつたのがいけないのだ。もしこれが男であつて、僕がその男と井ノ頭に散歩に行つたとしたら、どうなんだい？　お前は氣を揉みもしなければ、何とも思ひはしないだらう。僕はかう思つてる、夫婦といふものは一つの生活をしてるのであつて、その一つの生活といふことのために、戀人同士やなんかよりや、もつと深く堅く結び合されてるのだと。もし僕が獨身だつたら、若い女やなんかと一緒に歩いたりする時、僕は屹度妙な氣分に心をそゝられるに違ひない。然しお前と夫婦の生活をしてるので、一つの生活をしてるので、若い女の前に出ても僕は平氣でゐられるのだ。さういふ所に、夫婦生活の強みと自由とがあるわけだ。妻を持つてる身の上だから若い女と一緒に歩くのは悪いといふのは、本當の夫婦生活を知らない者の言葉だ。夫婦生活とはそんな堅苦しい窮屈なものではない。僕は光子と井ノ頭に行つた時、少しも心にやましさを感じはしなかつた。僕はお前と一緒の生活にしつかり腹を据えてゐるので、どんなことをしても大丈夫だと思ひ、何の危險もないものと思つてゐた。この僕の心持だけは、どうか誤解しないで信じてくれ。たゞ僕は、さういふ信念の下に餘り油斷してたのがいけないのだ。」

この言葉は嘘ではない。全く私はさういふ信念を持つてゐた。所が、そんな信念なんかを吹き飛ばしてしまうほどの、もつと深い所に潜んでるいけないものが――油斷なんかといふ言葉で蔽ひつくせないものが、私の生活の中にあつたのだ。がそのことは、もつと先で云はう。

吉祥寺で電車から降りて、井ノ頭公園の方へ歩き出した時、私は光子の様子の變つたのに驚いた。東京驛で電車に乘るまで彼女は、私に對してあれほど和やかな心持を示して、何か遠い夢の跡をでも追つてるやうなぼんやりさで、私に信頼し私に凡てを打任せてゐたのであるが、今私と並んで田舍道を歩いてる彼女には、すぐ眼の前に浮んでる何かを一

心に見つめて、ぢつと凝り固つてゐるやうな様子が、顔付や足取りに現はれてゐた。それが一種の反感に似た冷さで、私の方へ對抗的に迫つてきた。彼女に對して何か惡いことでもしたのではないかしらと、私は妙にぎごちなくなりながら、わざと冗談の調子で尋ねてみた。

「どうしたんです、變に眞面目くさつた顔をして……。」

彼女はちらと私の方へ黑目を擧げてから、なほ四五歩進んだ後で云つた。

「私いろいろ考へてみましたけれど……。」

いくら待つても後の言葉がないので、私は靜に促した。

「で……どういふんです？」

「どうしたらいゝか分らないんですもの。」

「一體何のことですか。話してしまつたらいゝぢやありませんか。私の顔を見てどうでもよくなつたなんて……。」

「でもあの時は一寸そんな氣がしましたけれど……やつはり……。」

「話してしまつた方がいゝでせう。私の顔に何か書いてあるわけでもないでせうから。」

私は冗談にしてしまはうとしたけれど、今の彼女には手答へもなかつた。日傘の先で地面をつゝついて歩きながら、恐ろしく眞劍に考へ耽つてる樣子だつた。私は何となく不吉な豫感を覺えた。實は彼女にその話をさせるために連出したのだつたが、そして會話の調子でなほそれを求めてはゐたが、公園にはいりかける頃から、もう聞かない方がよいかも知れないといふ氣持が起つてきた。然しやがて、彼女の方から話し出してしまつたのである。

日曜日でないせいか、公園の中には餘り人はゐなかつた。杉の木立のほろゝ寒い下影にはいつて暫く行つた時、光子

は一寸足を止めてあたりを見廻したが、今度はゆつくりと歩き出しながら云つた。
「私やつぱり先生に、何もかもお話してしまひますわ。」
「えゝ。」と私は簡單に素氣なく答へた。
　私達は足の向くまゝに――と云つても池の緣の道を――長く歩き續けた。光子の話は調子が早くなつたり遲くなつたり、事柄が前後したり、私に聞き返されて云ひ直したりして、餘りまとまりのよいものではなかつたが、大體の筋途はよく通つてゐたし、彼女にとつては可なり眞劍なものだつた。
「私何よりも先に、先生にお詫びしなければならないことがございますの。先生お許し下さいますわね。初めのうちに申上げておけばよかつたのですけれど、何だか云ひ悪くて……。あの……先生の所へよく遊びにいらつしやる松本さん、あの人と私變な風になつてしまつたんですの。河野さんの所へ參つてからは、始終お手紙を下さいますし、私も時々手紙を上げてゐましたが……。でも、今ぢやもう何でもありませんわ。あんな意氣地のない人のことなんか、どうだつて構はない、私心の外におつぽり出してしまひますわ。そりや變なことを仰言るんですもの。あなたはこれまで幾人の男に關係したかなんて、まるで人を藝者か女郎とでも思つてゐらつしやるやうな調子なんでせう。私口惜しいから突つかゝつていつてやると、悪かつたら謝罪するとかうなんですもの。そして、たとひあなたの過去にどういふことがあらうと、そんなことを私は咎めはしない、現在のあなたが私一人を想つてゐて下さればそれでいゝんです、けれど、お互に過去のことをすつかり打明け合つて、さつぱりした氣持で愛し合はなければいけない……とそんなことを繰り返し仰言るんです。變な理屈ですわ。過去のことを打明け合ふのはいゝけれど、それをくどくど話すといふのは、やつぱり過去のことをいつまでも忘れない證據ぢやないんでせうか。私はもう昔のことなんか綺麗に忘れてしまつてゐますわ。

先生にだけお話しますけれど、私札幌で一人戀し合つた人がありましたの。でも今ではもう、松本さんの仰言るやうに、それも言葉だけでなしに本當に、過去は過去として葬つてしまつてるつもりですわ。それを根掘り葉掘り尋ねておいて、おまけに昨夜は私をあんな室に置きざりにして……。先生、何もかもありのまゝお話しますわ。ねえ、聞いて下さいまして? 私本當に困つてるんですの。私奧樣のお世話で、河野さんの所へ參りまして、晝間は學校に通はして貰へますし、夜分は家庭教師の眞似事みたいなことをして、ほんとに願つてもない仕合せた境遇だと、初めのうちはどんなに喜んだか知れませんわ。けれど、先生は御存じかどうか知りませんが、河野さんてそりやあひどい人なんですの。松本さんも私の話を聞いて、それは立派な色魔だと仰言つていらしたわ。私はそれほどには思ひませんけれど……或はお酒のせいかも知れないと思つてゐますけれど、松本さんに云はせると、酒は男の計略ですつて。さうでせうかしら? 夜晩く歸つていらして、夜の一時二時頃まで召上ることなんか、珍らしくもありません。奧樣は御病氣で片瀬に行つていらつしやいますし、女中さんは二人共まるで山出しの田舍者なんですもの、お酒の相手……いえ私お酒なんかあすこで一杯も頂きませんけれど、お側についてゐてお酌をしたりなんかするのは、いつも私の役目ですの。だつて外に誰もゐないんですから、仕方ありませんわ。そして醉つ拂つた揚句には、私の手を握りしめたり、便所に立つふりをして、私の首にかぢりつかうとなすつたり、この頃では、晝間お酒の氣がない時でさへ、變な眼付をして私のお臀を叩いたりなさるんです。それも冗談ならいゝんですけれど、時々變なことを仰言るんですの。俺は草野の細君みたいな女が大好きだ、昔から好きだつた、が人の細君では仕方がない、お前ならその向ふを張れるから、一つ俺と一緒にならないか、あんな病身なくよくよした妻なんか、今すぐにでも追ん出してみせる……なんてもつとひどいことだつて仰言るんです。草野の細君といふ言葉を私は二三度聞きましたが、ひよつとすると、あなたの奧樣に變な氣を持つてゐらつしやる

のかも知れませんわ。そんなひどい心の人ですもの、私なんかを手に入れるのは譯はないと、どうもさういつた調子なんですの。お前もい丶加減意地つ張りだねと、私の耳を火の出るほどひどく引張つたりなさるんです。なぜうんと怒つてやらなかつたかつて、松本さんはひどく憤慨してゐらしたけれど……いえそれは昨晩のことなんですの。いくら何だつて、私そんなことを松本さんに話せはしなかつたんですもの。でも昨日はとうとう逃げ出してしまひましたわ。それまでに幾度逃げ出さうとしたか分りませせん。松本さんは私が前に手紙でそんなことを少しも匂はせなかつたと云つて、少し疑つてゐらつしやるやうですけれど……そのためかも知れませんわ、私に過去のことをいろいろお聞きなすつたのは。男には女の心なんか分らないんでせうかしら。私がそれまで隱してたのは、事を荒立てたり松本さんに心配かけたりしたくないといふだけで、外に譯は何もないんですの。でもやつぱり駄目でしたわ。一昨日の晩は余困つてしまひました。夜の二時頃までお酒を召上つていらしたが、餉臺の上の小皿を一枚ふいに取上げて、いきなり側の鐵の火鉢に投げつけて、粉微塵に壊しておしまひなすつたんです。何でも、差された杯の酒を私が飲まないとか何とか、そんな風なことだつたんです。でも私にはその亂暴が、全く不意だつたものですから、すつかりまごついたせいか、自分でもよく分りませんが、急に變な氣持になつて、前の杯の酒をぐつと飲んでしまひましたの。後ではつとしましたが、もう追つつきません。河野さんは恐い眼付で私の方をぢろりと見て、うむ、お前が皿一枚に一杯つ丶飲むなら、夜明けまでに何枚でも壊してやると、かうなんでせう。さうなると私も意地つ張りで、もう一言も口を利かないで、室の隅にぢつと坐つてゐました。それからまた皿を二三枚お壊しなすつて、暫くすると、疊の上にごろりと寢轉んでゐらしたが、私が氣がついてみると、少し鼾をかいて眠つてゐらつしやるんでせう。私ほんとにどうしたらい丶かと思ひましたわ。しまひには腹を据ゑて、夜着を上からそつとかけてあげて、私は一番遠い隅つこへ火鉢を持つていつて、それによりかゝりながら朝

まで坐り通しに坐つてゐました。その間の恐ろしいやうななさけない樣な氣持つたら、今考へてもぞつとしますわ。そして朝になつてから私は、女中達の手前今起きたやうな風をして、顏を洗つたり庭に出てみたりしました。河野さんは平氣でしやあしやあとしてゐらして、女中に小言を云ひながら室を片附けさして、それから私に向つては、人の居ない所で、昨晩夜着をかけてくれた親切は忘れないつて……。それを聞くと、私は頭から水でも浴びたやうに、ぞーつと身體が悚んでしまひました。どうしてそんなに恐ろしかつたのか、自分でもいくら考へても分りませんが、ほんとに恐ろしくてぢつとしてゐられなかつたんですの。そしてその日の午後に、私は身體一つで松本さんの下宿へ飛んでいきました。

「松本さんは私がやつて行くと、たゞ遊びに來たものとでもお思ひなすつたのでせう、初め何だか嬉しさうにそはそはしてゐらしたが、私の樣子がやはり變だつたと見えて、いやに眞面目な鹿爪らしい調子で、いろんなことをお聞きなさるんです。私も初めから何もかも訴へて縋りつくつもりだつたものですから、これまでのことを殘らず話してしまひましたの。すると、松本さんは非常に憤慨なすつたので、私もまた更に腹が立つてきて、二人でさんざん河野さんの惡口を云つてゐますと、途中から、松本さんはいやに默り込んでおしまひなさるんです。晩の御飯を頂いてる時なんか……だつて外に出かける間がないうちに、日が暮れてしまつたんですもの。下宿屋の御飯なんか、薄穢くて私もうつくづく厭ですわ。それを松本さんはうまさうに召上りながら、何だかぢつと考へ込んで、碌々私に返辭もなさらないんでせう。そして御飯が濟んで暫くたつと、いきなり私の方に向き直つて、河野さんのやり方は何處までも惡い、然しあなたは全然正しいかつて、さう仰言るんです。全然正しいつて……まあ何のことでせう。私呆れて返辭も出來ませんでしたわ。それからが過去の問題なんです。……あゝ、もうお話しましたわね。で私は、松本さんが私と河野さんとの間を疑つてゐらつしやるのだと思つて、そんな邪推を受ける覺えはないと、くり返し云つてやりましたの。所が松本さんは、

あなたの方が私の云ふことを邪推してるんだつて、さう仰言るぢやありませんか。それから面倒くさい理屈になつて、

私ほんとに弱つてしまひましたわ。戀愛は人間の一種の煉獄で、それに飛び込むには、過去を懺悔し合ひ赤裸々になつて、なほ未來を誓ふだけの勇氣がなければ、いけないんですつて。それからまだいろんなむつかしいことを仰言つたけれど、私一々覺えてやしません。そして私が、愛といふものは理屈ぢやなくて、どうにも出來ない氣持の上のものだと云ふと、それにも贊成なさるんでせう、結局何のことだか分りやしないわ。それから變にちぐはぐな氣持になつて、長い間默り込んだりしてるうちに、時間がたつてしまひましたの。松本さんは吃驚したやうに時計を見て、もう歸らなけりやいけないんでせうと仰言るんです。河野さんの家へ歸るのは厭だと云ふと、でも今晩は歸らなけりやいけないと仰言るんです。私むつとして、ぢやあ歸りますつて立上ると、乾度私の顏色が變つてたのかも知れませんわ、慌てゝお引止めなすつて、泊つていつてもいゝつてことになつたんですの。それでも、今晩は同じ室に寢ない方がいゝと云つて……それも私を愛してるからですつて！　……御自分は別の室に寢ようとなさるんです。さうなりや私も意地で、是非歸ると云つたんですけれど、とうとう、私が外の室に寢ることにして、泊つてしまひました。それも下坐敷の穢い室で、襖の邊は擦り切れ、壁に新聞の附錄か何かの美人畫がはりつけてあつて、狹い床の間には古机が一つ横倒しになつてゐます。その中で私、下宿屋の薄い穢い布團にくるまつて、涙が獨りでにこぼれてきました。松本さんは私に、今晩はこれで辛棒して下さい、こんな風にするのもあなたを愛してるからで、後で分る時が來ますつて、さう仰言のたけれど、そんな愛し方つてあるものでせうか。私が何もかもうつちやつて縋りついていつたのに、歸れと云つたり別の室に寢かしたりして……あら私、何も一緒にどうのつていふんぢやありません、せめて同じ室にくらゐ寢かしたつてよささうなものですわ。私口惜しくつて、夜中過ぎまで顫えながら泣いてゐましたが、もうどうとでもなれと諦めて、それに前の晩一眠

りもしなかつたんですもの、朝遲くまで寢入つてしまひましたの。松本さんは早くから起上つて、何度も私の室を覗きにいらしたんですつて。私ほんとに恥をかゝされちやつたんですの。そのまゝ飛び出してやらうかと、よつぽど思つたんですけれど、無理に我慢してゐますと、松本さんは變にしほれ返つた樣子で、私の手をぢつと握りしめなさるんです。でも私知らん顏をしてやりましたわ。それから、二人で先生の家へ行かうと仰言るのを、逃げるやうにして飛び出してきました。そして一人で外を歩いてるうちに、どうしていゝか分らなくなつて、やはり先生にお話してみようと思つて、お伺ひしたんですの。一昨日の晩からのことを考へると、何だか夢のやうな氣がしたり、またいろんなことが眼の前に押し寄せてきたりして、自分で自分が分らなくなつてしまひますわ。どうしたらいゝんでせう？ ……でも、どうせ私は……。」

光子はぷつりと言葉を切つて、突然何かに腹を立てでもしたやうに、早めにすたすたと歩き出した。私達はそれまでに、池を一周半ばかりしたのだつた。

光子の話の中で、殊に私の注意を惹いたことが三つあつた。河野さんの口から洩れたといふ私の妻のことゝ、河野さんが殆んど毎晩のやうに酒を飲むといふことゝ、最後のは全く馬鹿げてるが、松本の下宿で光子が朝遲くまでぐつすり寢入つたといふことだつた。それから、後で松本から聞いた所に依ると、光子が泊つた室はそれほどむさ苦しいものではなかつたさうだし、また、光子は自分の過去を話すのを厭ひながらも、松本の過去をしきりに聞きたがつたさうである。……だが、こんな細かな詮索はぬきにして、彼女の話全體は、初めの不吉な豫感に反して、淋しいやうでまた伸々とした自由さを私の心に傳へた。うち晴れた秋の空を見るやうな感じだつた。それは恐らく、何處かの狹苦しい室の中ではなく、あゝいふ場所で聞かされたせいかも知れない。そして不吉な豫感は、ずつと先の方に對してのものだつ

た。

光子は何かに立腹でもしたやうに、とつとつ歩いてゆく。私はその後から、餘裕のある心持でついて行きながら、わざとこんな風に尋ねかけてみた。

「あなたは一體松本君を愛してるのですか、どうなんです？」

「あんな人のこと何とも思つてやしませんわ。」

と彼女は振向きもしないで答へた。

「ぢや河野さんは？」

「考へるのも厭ですわ。」

「それではどうしようつて云ふんです？」

「分りませんわ。」

「そりや誰にだつて分らないでせうけれど……でも何だか變ですね。」

此度は彼女も本當に腹を立てたらしかつた。私の言葉には返辭もしないで、自棄氣味に日傘を引きずりながら、眞直を見つめて歩き續けた。私も默つて後からついていつたが、次第に心の落着き場所を失つてきた。彼女の眞劍な話を變な風にはぐらかしてしまつたのはよいとして、その納りをつけるのに困つた。しつくりと彼女の腑に落ちることを云つてやりたかつたが、その言葉が見付からなかつた。そして知らず識らず足をゆるめてゐると、彼女はふいに向き直つて、だいぶ後れてる私の方へ焦れつたさうに呼びかけた。

「先生、もつと早く歩きませうよ。私この池のまはりを何度も廻つてみたいんですの、幾度廻れるか。」

「そんなことをしてどうするんです。」と私は云つたが、彼女のぽーつと上氣してるらしい顏と、眸の据つた輝いてる眼とを見ると、すぐそれにつり込まれてしまつた。

「私もう何にも考へないわ、馬鹿馬鹿しい！」と彼女は投げやりの調子で云つた。「この池のまはりを七度廻つて、それでおしまひ。」そして彼女はとつてつけたやうに笑つた。

西に傾いた日脚が赤々と杉の梢に流れてゐて、池の水は冴々と澄みきつてゐた。藻の影にぢつと浮んで動かない鮒の群がゐたり、水の面に黄色い花が一つぽつりと咲き殘つてゐたりした。そして杉の林と古い池とから醸される幽寥な氣が、それらのものに意外の靜けさを與へてゐた。でも私は淋しくなかつた。あたりの景色が靜かであればあるほど、遠い旅にでも出た氣になつて、解き放された自由な喜びを感ずるのだつた。殊に光子は潑剌としてゐて、明るい日向に出ても薄暗い蔭影にはいつても、同じやうな眼の輝きを失はなかつた。

「私何だかさつぱりして、氣が淸々して、もうどうなつたつて……この池にはまつて死んぢやつたつて、構ひませんわ。」

そんなことを云ひながら、ぐんぐん歩いて行つた。先刻の譯の分らない腹立ちがけし飛んで、その昂奮だけが殘つてるやうな調子だつた。小鳥が鳴いてる、花が咲いてる、鮒が浮いてる、杉の芽が綺麗だ、ほんとにいゝ天氣だ、などゝそんなことを短い言葉で獨語のやうに云ひながら、それでも心の底には、何かしらぢつとしてゐられないものが渦卷いてるといつた風に、出來るならば宙を飛んだり地面に轉つたりしたいやうな素振だつた。で私は彼女を見てるうちに、勝手氣儘に飛び廻り囀り散らす小鳥を聯想した。實際立木の中にはいろんな小鳥の聲が響いてゐた。それからまた私の頭には、北海道の廣漠たる平野やアカシアの都會や山の湯のことなどが浮んできた。そして平素の陰鬱な窮屈な生活を遁れて、自由なのびのびとした世界に出たやうな氣がして、性質から境遇から凡ての點でその世界のものであり、その世界

に我を忘れてる光子に對して、羨しいやうな小憎らしいやうな感情が起つてきた。

　そして更に、その感情をなほ刺戟することが起つた。私達は池を何周したか覺えてゐないが、日脚が益々傾いて、杉林の中や池の面に、ほろゝ寒い靄影がこめかけてきた時、次第に私は空腹を覺えてきて、光子にさう云ふと、彼女もやはり腹が空ききつてると答へた。それでは栗飯でも食べて行かうといふことになつたが、私はふと氣がついて、歸りが餘り遲くなつてはいけないだらうと注意してみた。

「構ひませんわ。」と彼女は答へた。「私今晩は新宿の叔母の家に泊つていきます。」

　私は喫驚して足を止めた。八月に彼女が私の家へやつて來た時には、いきなり東京へ飛び出して來たものゝ、身寄りの者も知人もないし、上野驛前の宿屋に一晩泊つたが、何だか恐ろしくて仕方がないから……といふやうな話だつた。それから詳しい事情を――農科大學生との失戀や嫂との喧嘩などが重つて、札幌の家に居られなくなつた譯だの、何處かの家で働きながら晝間は繪を習ひたいといふ志望などを――いろいろ聞かされてるうちに、つい私も妻も同情をそゝられて、暫く家に留めておくことにしたのだつた。實際彼女はその翌日になつて、驛に預けつ放しにしてるといふ柳行李を一つ取つて來たりした。それから私の家に半月ばかりゐて、妻から河野さんに頼つて、子供の家庭教師みたいな風で置いて貰ひ、晝間は畫塾に通つてゐるのである。新宿に叔母がゐるなどゝいふことを、彼女は今迄匂はせもしなかつた。で私は何氣なく、その點を輕くつゝ込んでいつた。すると彼女は平氣で答へた。

「だつてあの時はあゝ申さなければ、先生が置いて下さらないやうな氣がしたんですもの。本當は少し前から新宿の叔母の家に來てゐたんですの。所がその叔母が大變なやかましやで、私喧嘩をして飛び出して、それから先生の所へ伺ひましたの。……でも札幌の話はみんな本當ですわ。私よく喧嘩をする女だと、自分でも厭になつちまう時があります

の。」

　そして彼女は駄々つ兒のやうに私の顏を覗き込んできた。それを私は、張り倒してやりたいやうな、また抱きしめてやりたいやうな、變挺な氣持でぢつと見返したまゝ、どうにもすることが出來なかつた。

　栗飯を食べるために、私は靜かな奥まつた家へ何の氣もなくはいつていつたが、やがて自分の迂濶さに面喰つた。私達を出迎へた女中は、銀杏返しに結つて銘仙の着物をつけ、何を云ふにも取澄した顏をしながら、身體全體で愛相を示す、可なり年増な女だつた。通された室は奥の八疊の間で、衣桁から床の間の掛軸や水盤など、程よく整つてゐて、而も違棚の上には大きな鏡臺が据ゑてあつた。それになほ、生憎今日はお風呂がございませんで……とわざわざ斷られた。とんだことをしたと思つたが、もう取返しはつかなかつた。女學生とも令孃ともつかない光子の樣子と自分の袴とに、變に氣が引けながらも、いゝ加減に料理を註文しておいて、私はおづおづ光子の方を覗つた。彼女は何を考へてるのか、さも疲れたらしくぐつたりと坐つて、餉臺にもたせた片手で頰を支へ、室の隅にぼんやり眼をやつてゐた。私は辯解のつもりで云つた。

「うつかりはいり込んだけれど……少し變な家でしたね。」

　彼女は私の方へちらと黑目を向けて、こんなことを云つた。

「でも、これで溫泉と谷川とがあつたら、登別のやうな氣がしさうですわ。」

　不思議なことには、彼女のその言葉に私は全然同感したのだつた。登別と井ノ頭とは、どの點から云つても全く異つた景色なのに、私の心にはそれが一緒になつて映つたのである。今から考へると、その時の登別といふのは一つの符牒に過ぎなくて、たゞ漠然と自由な一人つきりの境涯といふくらゐな意味のものだつたらしい。私はその日初めて聞かさ

れたのであるが、彼女はあの時既に札幌の家に居にくゝて登別に來てたのださうだし、私はまた漂泊の旅にでもあるやうな氣で旅をしてたのである。

私達は馬鹿々々しくも、登別と井ノ頭とを比較して話し初めた。そのうちにいろんな物が運ばれた。女中は物を持つて來たり用を聞いたりすると、すぐに室から出て行つたが、金屏の調子や素振りで愛相よく待遇してくれた。一つ間を置いた向ふの室で、男女の笑ひ聲が聞えてゐた。私はいゝ氣になつて酒を飲んだ。光子も自ら進んで私の相手をした。それから何だかごたごたして、今私ははつきり記憶してゐないが、やがて食事を濟して林檎をかぢりながら、私は縁側の戸を一枚そつと開けて、外を眺めてみたのである。庭の植込からその向ふの木立へかけて、薄い霧が一面に流れてゐて、空高く星が光つてをり、西の空にどす赤い下弦の月が懸つてゐた。その不氣味な月に暫く見入つてゐるうち、俄にぞつと寒けを感じて、ふと振向いてみると、光子は半身を餉臺にもたせかけ火鉢の上にのり出して、震えながら歯をくひしばつてゐた。私は雨戸をしめて戻つてきた。

「どうしたんです？」

彼女はぎくりとしたやうに顔を擧げて、黒目が三分の一ばかり上眼瞼に隠れてる眼付を、私の顔に見据えてゐたが、そのまゝ瞬きもしないで、はらりと涙をこぼした。私は殘忍な氣持になつて、それに乘じていつた。

「あなたはやはり心から松本君を愛してるんですね。」

「嘘、嘘、」と彼女は叫んだ、「誰も愛してなんかゐません、誰も。」

「ぢやあなぜそんなに……絶望してるんです？」

彼女は病的な表情をした。そして暫く默つてた後に云つた。

「やつぱり私一人だけだわ。」

「何が？」

「いろんなことを考へたつてやつぱり……私一人だけだわ。」

「だから考へない方がいゝんです。」

「それでも私……。」

「鬱憤を晴らすのなら、めちやくちやに歩き廻るのが一番いゝですよ。」

「先生だつて……。」

「だから池のまはりを七回まはつたんです。」

「七回なんてまはりやしませんわ。」

「然し……一體どうしたらいゝんです？」

そして私は不意に顔が赤くなつた。やたらに煙草を吹かした。彼女も默つてゐた。虫の聲がいやに耳につくやうな靜けさだつた。長い間たつてから、私は不意に彼女の手を握りながら小聲で云つた。

「泊る？　……歸る？」

「泊るわ。」

そして私達は敵意を含んだ眼付で見合つた。

茲で私は一寸斷つておかなければならない、筆が餘り滑りすぎたやうだから。實は私は、いつの頃からか覺えないが、性慾の衰退に可なり惱まされてゐた。原因は毎日の晩酌と過度の喫煙とに在ると、醫者も云ふし自分でも思つてゐた

が、それがどうしても止められなかつた。なぜなら、生活全體が早熟してしまつて、本當の決心といふものが私には不可能だつたから……がこのことはもつと先で云はう。兎に角私は性慾が著しく衰退して、さういふ事柄にさつぱり興味がなくなつてしまつてゐた。私はいつも何だか滿ち足りないやうな焦燥のうちに暮してゐたと、前に一寸述べておいたが、それも一つはこれが原因だつた。たまに玄人の女に接することがあつても、後の感銘に實に索漠たるものだつた。殊に家庭に於てはそれが甚しかつた。そのために私の家庭には、冷かな風が流れ込んできた。子供に乳房を含ましたり頬ずりをしたしりながら、私の方へぢろりと投げる妻の眼付に、私は或る刺々しいものを感じて、ぞつとするやうなことがあつた。どうして子供なんか出來たんだらうと、そんな風に溯つてまで考へることがあつた。それかと云つて私は、何も君子然たる心境に到達したわけではない。頭の中にはいろんな妄想が、以前と同じやうに去來するのだつた。云はゞ性慾そのものが、肉體を離れて頭の中だけに巣くつたやうなものである。そして一時私は、頭の中だけでいろんな女性を探し求めて、精神的に彷徨し續けたこともあつた。然しさういふ空しい幻はやがて崩壞してしまつて、私は非常に虚無的な氣持へ陷つていつた。それから漸く辿りついたのは、性慾の蔑視といふことだつた。單に性慾ばかりではなく、肉體に關する一切のものゝ蔑視だつた。凡て肉體に關するものは、一時的で皮相で無價値なものだと思つた。この思想は一夫一婦主義の家庭生活とよく調和した。私は若い女性と一緒に談笑しても平氣だつたし、時折不道徳な行ひをしても、自ら良心に咎める所が少しもなく、それを妻に隱したのは、たゞ妻から小言を喰はないためにばかりだつた。妻と一つの生活――この一つの生活といふのに力點を附して――一つの生活をしてゐる、といふ意識さへしつかりしてゐれば、下らない肉體的な過失くらゐは取るに足らない、さう思つて私は、どんなことをしても危險を殆んど感じなかつた。光子を平氣で井ノ頭まで連れ出したのも、右のやうな持論を持つてるからだつた。所が、光子からあゝいふ話を聞

き、次に自由奔放な彼女の魂を見、最後に家庭なんかの煩ひを離れた伸々とした氣持になつて、私の心の中には別なものが頭をもたげてきた。それが更に、酒を飲んでゐるうちに光子の眼付から屡々そゝられた。そして、前にはたゞ「何だかごたごたして」とだけ書いたが、そのごたごたのうちに私は意を決したのである。前日來のことで絶望して苛立つてる放弃な光子を見、その挑みかゝるやうな眼付を見て……だが彼女がどういふ心持だつたかは私にはよく分らない、彼女自身にも恐らく分つてゐないだらう、實際その場の空氣はごたごたしてゐたから……でもその間に、私は彼女を對照として自分をためしてみようと思つたのである。そしてそれは、性慾を蔑視する平素の持論にも矛盾しなかつた。

さういふ風にして凡ての調子が狂つていつた。光子も私の氣持を無意識的に感じて、更に絶望的に苛立つていつたらしい。

呪はしい一夜だつた。

私達は飯も食べずに、七時頃その家を飛び出した。朝霧が霽いて、地面はしつとりと露に濡れてゐた。木立には雀が鳴いてゐた。森を掠めてる清らかな朝日の光が、私には眩しかつた。光子は足先を見つめながら歩いた。蒼ひ顔色をして、唇の端を輕く痙攣さし、時々病的な光が眼に現はれてきた。池の縁に出た時、私は皮肉な微笑を浮べながら云つた。

「これをも一度一周りしようか。」

「厭よ。」

「なぜ？」

「あなたのやうな……卑劣な人とは。」

私はむつとした。が突然、顔が眞赤になるのを感じた。

「でも僕は……。」

「いや、いやよ。」と彼女は私の言葉を押つ被せた。「いろいろうまいことを云つても、やつぱりあなたには、愛も何もないんだわ。」

「ぢやあなぜ、昨日は、僕にあんな話をしたんだい？　そして……。」

「そして……何なの？」

　彼女は病的に光る眼で私の方をぢろりと見たが、ふいに眞蒼になつた。

「もうお互にはつきりしておかうぢやないか、何もかも萬事を。」

「えゝ私はもう何もかもはつきり分つたわ。」

「そんなら、僕のこともよく分つてくれてるんだね。」

「分つてるわ、あなたがそんな人つていふことは。」

「またお前は！……」

「それから、自分がこんな女つてことも分つてるわ。だから私あなたを有難く思つてるのよ。」

　そして彼女はヒステリックに笑ひ出したが、その笑を中途でぷつりと切つて、毒々しく光る眼で私の方を眸めた。

「いゝえあなたばかりぢやない。何もかも有難く思つてるわ。」

「お前はまた、心にあることゝ反對のことばかりを云つてるね。もうかうなつたからには、眞正直に物を云はうぢやないか。」

「えゝ私は昨日からずつと眞正直だつたわ。」

「さうも云へるけれど……。」

「反對だとも云へると仰言るの？　私何もあなたに隱しはしなかつたわ。あなたこそ……。いゝえもういゝわ。何だつていゝわ。よく分つてることだから。」

そして彼は非常に陰鬱な顏付になつて、眼の光も消えてしまつた。私はぞつとした。

「ねえ、お前は僕を許しくれる？」

「許すも許さないもないわ。あなたこそ、私を許して下すつて？」

「さうだ、許すも許さないもないといふのは本當だ。この氣持でゐやうぢやないか。そして、どちらかに心が落付くまで待たう。」

彼女は何とも答へなかつた。私達は森をぬけて停車場の方へ歩いていつた。森を通した薄赤い朝日の光に照らされてゐる、彼女の蒼ざめた顏や亂れた髮が、私には驚くほど美しく見えた。

「これからどうする？」と私は低い聲で尋ねた。

「河野さんの家へ歸るわ。」

それきり私達は切符を買ふまで默つてゐた。電車に乘つても、彼女は窓の外の景色を一心に眺めてゐた。私もいつしか外の景色に見入つてしまつた。

そして、私にとつては長い間のやうな氣がするが、實は僅かに昨日の午後からの短い間に、事情は他の方面で、退引ならない方へ進展してしまつてゐた。

私は光子と別れてから、その半日を會社で過し、午後は暫く街路を歩いてみたが、やはり何だか氣にかゝつて、三時頃家に歸つてきた。そして、妻に向つてこんな風に云つた。

「昨日は會社の用で急に横須賀に行くことになつて、つい知らせる隙がなかつたものだから……。電話がないとほんとに不便だね。」

實際私は、會社の用で時折横須賀へ行つて一泊してくることがあつた。俊子は變な顔付で——それも私の思ひなしかも知れないが——私の方を見てゐたが、やがて、會社のことなんかどうでもいゝといふ風で、困つたことが出來たのでお歸りを待つてゐた、と云ひ出した。けれど私も、家のことなんかどうでもいゝといふ風で、着物を着換へ初めた。所が、光子とか松本とかいふ言葉に、忽ち注意を惹かれてしまつた。

俊子の話を概略するとかうだつた。——昨日の朝、松本が慌しく驅け込んできた。そして光子とのこれまでのことを告白し、前日光子がやつて來たことから、その朝までの一部始終を話した。それは私が光子から聞いた所と大同小異だつた。そして松本の願ひとしては、光子を救ふと思つて、暫く家に置くかまたは他の所へ世話するかして、兎に角河野さんの家から引出してほしい、とのことだつた。俊子はひどく狼狽して、主人が歸つたらよく相談して、すぐに何とかしようと答へた。所が、晩に松本はまたやつて來て、河野さんの家へ電話をかけたら光子はまだ歸つてゐない、といふことを報告した。

「それから今まで、私は一人でどんなに氣を揉んでたか知れませんよ。」と俊子は云つた。

大體の話が分ると、私は少し安心して、また冷淡な態度を取つた。

「厄介なことになつたものだね。だがまあ、そのことは後でゆつくり相談しよう。僕は會社のごたごたした問題で、昨

口から非常に疲れてるから、少し靜かにしてくれ。」

彼女が不平さうにぶつぶつ云つてるのを知らん顏で、無理に布團を敷かして、私はその中に頭までもぐり込んだ。實際私は非常に疲れてもゐた。けれど眠れはしなかつた。

外部の事情からしてもまた私自身の氣持からしても、光子のことに關して何とか解決を迫られてるのを、私は重苦しく感じてきた。然し私は何等解決の方法をも見出しはしなかつたし、たとひ見出しても、その方へ步を進めるだけの元氣がなかつたらう。光子と別れてから後私は、全く無批判な盲目的な心境へ落ち込んでゐた。善とか惡とか意志とかさういつたものを全然拔き去つた、深い落寞の心地だつた。自分の性的――否人間的――無氣力を證明された痛ましい一夜から、ぢかにつながつてきてるものだつた。いろんな取止めもない妄想に耽りながらも、どうなるかなるやうになつてみろ！　と捨鉢などん底に、自然と腰が据つてゐた。

それで、その晩松本がやつて來ても、私はわりに泰然とした皮肉さで、彼に接することが出來た。殊に私のさういふ皮肉さを助長するかのやうに、松本は私が晩酌をやつてる所へ飛び込んできたのである。

晩酌は私の日課になつてゐた。そしてその晩の晩酌は、いつもより少し長引いてゐた。俊子がくどくどと先刻の話を繰返すのへ、ぼんやり耳だけを貸しておいて、私は自分の醉つた落寞とした心境に、ぢつと心を潜めてゐた。食事を濟した子供達が隣りの室で、「チイチイパッパ、チイパッパ、雀の學校の……」といつたやうなことをして遊んでるのを、籬越しにでも見るやうな不思議な心地で、ぼんやりと眺めながら、知らず識らず杯の數を重ねた。そこへ松本がふいに姿を現はした。彼は坐敷へ通されるのを待たずに、私達がゐる茶の間の方へ自分からやつて來た。その自信ありげな露はな眼付を見た時、私の氣持に不思議な變化が起つた。今までもやもやと立罩めてゐた霧が急に霽れて、自分の周圍が

ぱつと明るくなつたやうな心地だつた。そして私の頭には、四人の子供を隣室に遊ばせ、臺所に女中を控へさし、妻を側に坐らして、その眞中に納まり返りながら——何の能もない自分が家庭といふ巣の中に納まり返りながら、酒にほてつた赤い顔をし、額に泰平無事の快い汗をにぢまして、ちびりちびり晩酌をやつてる、おめでたい自分の姿が、一瞬の間はつきりと映つたのである。それは單にその晩だけの姿ではなくて、これまでの長い家庭生活を通じての、總括的な自分の姿だつた。私は突然或る反抗心に驅られて苛立つたが、それに光子のことがからまつてきて、次の瞬間には、反對にぐつと皮肉に落付いてしまつたのである。

松本は私に一寸挨拶をしておいてから、いきなりから云ひ出した。

「畏さん、光子さんは歸つてゐますよ。」

それを聞いて、俊子が變にぎくりとしたことを、私は後になつて思ひ出した。後で分つたことだが、俊子は既にその時から、私の珍らしい外泊や歸宅後の樣子などによつて、一種の疑惑を懷かせられて、そのために却つて、私の行動については一切尋ねなかつたものらしい。でもその時私は、そんなことには少しも氣付かなかつた。

私は松本に對して、皮肉な調子に出てしまつた。

「だいぶ面白い話があるさうぢやないか。」

松本はちらと私の方を見たが、すぐに眼を伏せてしまつた。それへ、俊子が氣忙しくなく尋ねかけた。

「え、光子さんはいつ頃歸つたのですつて？　どうしてあなたにそれが分りましたの？」

松本は一寸考へてから答へた。

「私は昨日から、光子さんの行方が心配でならなかつたんです、何だかひどく苛立つてるやうでしたから。それで、今

朝また河野さんの家へ電話をかけてみました。所がまだ歸つてゐないとの答へです。それから、晩になつても一度かけてみました。出て來たのは確かに光子さんです。月岡さんはおいでゝすか、と私が云ふと、はい、といふ返辭でせう。私はすつかり喜んで、松本です、と思はず云つてしまつたのです。すると、それからいくら呼んでも返辭がありません。でも確かに光子さんです。何を私に怒つてるんでせう。」

それから變に皆黙り込んでしまつた。私は松本の綺麗にかき上げられてる髪に眼をつけてゐたが、三四杯酒を干してから、煙草に火をつけながら尋ねてみた。

「一體君、初めからどういふ話なんだい。」

松本は苦しさうな表情をしたが、底に頼る所ありげな諦めの態度で、一切のことをまた話してきかした。私は既に光子からと俊子からと二度も聞いてるその話を、新たな興味で聞き初めた。そして實際彼の話は、光子のそれと違つて、落付いたしつかりした歩調で進んでいつた。最後には、私が草野さんに相談して必ずあなたを救ひ出してあげるから、二三日辛棒して待つてゐてくれと、固く約束をしたから……とそんなことがつけ加へられた。

私は心に一種の壓迫を感じてきたが、それを強ひてはねのけるやうにしながら、ぢかに突込んでいつた。

「君は一體、本當に光子さんに戀してるのかい？」

松本は少しもたぢろがなかつた。

「今の所戀してるかどうかは自分にもはつきり分りませんが、愛してることは確かです。」

「愛と戀と違ふのかい。」

「私は違ふと思つてゐます。」そして彼の眼は輝いてきた。「私が深く光子さんを戀してゐたのでしたら、一昨日の晩、別

々の室になんか縦なかつたらうと思ふんです。夢中になつて取返しのつかないことをしたらうと思ひます。また、戀してても愛してもゐなかつたとしたら、別な興味で臨んでいつたらうと思ひます。私はかう思つてゐます、男が女と肉體的に接觸する場合は、深い戀か單なる性慾かのどちらかだと。所が私は光子さんに對して、盲目的な深い戀を感じてもゐませんし、單に性慾で臨むほど無關心でもゐません。何と云つたらいゝですか、かう……あの女(ひと)を清くそつとしておきたいといふやうな心持、愛……愛です。私は本當にあの女(ひと)を愛してゐます。」

「君は全くの理想家だね。」と私は冷かに云つた。

「えゝ、私は理想家です。自分のあらゆる行動を理想で律してゆきたいと思つてゐます。單なる理想でなしに、實際の行動をも支配するほどの強い理想が、本當に新らしい時代を生長させるのであつて、もし……。」

云ひさして彼は俄に口を噤んだ。私の皮肉な眼付に氣付いたのであらう。ぴくりと眉根をしかめて、眼を伏せてしまつた。私は容嘯いて煙草を吹かした。彼が理想家であることは前から分つてゐたが、その理想を光子に對しても應用して……そして、彼が光子に長々と戀愛論をしてきかしたといふ話を、私はふと思ひ出したりして、變に皮肉な苦笑的な氣持が募つてきた。

「まあ君の理想はいゝとして、一體光子さんの方は、君に對してどうなんだらう！」

「私を愛してゐるやうです。たゞ私が苦痛なのは……。」

彼はまた口を噤んで私の眼を見た。

「何が苦痛だつて？」

「一昨日私の所へ飛び込んできたのは、本當に私が戀……私を愛してるからか、それとも一時河野さんを避けるため

にたゞぼんやり頼つてきたのか、その邊がよく分らないんです。」
「君が苦痛だといふのは、たゞそれだけなのかい。」
「それだけつて……。」
「君は光子さんをどんな女だと思つてるんだい。」
「比較的眞正直な怜利な……いや何だかよく分りません。」
彼は急に苛立つてきた。私はそれをなほつゝ突いてやつた。
「例へば、河野さんと實は關係がついてゐたり、北海道でいろんなことがあつたり、そんな風な奔放な女だつたとしたら？」
「え、そんな女でせうか。」
「いやそれはたゞ假定だよ、君の氣持をはつきりさせるためにね。で、もしさうだつたとしたら、それでもやはり君は、彼女を愛し續けてゆけるのか。」
私の執拗な眼付に對して、彼は顔を伏せて暫く唇をかみしめてゐたが、やがてきつぱりと云つた。
「愛し續けてゆきます。責任上愛し續けるつもりです。」
「責任だつて！」
然し彼は口を噤んで答へなかつた。私には今以て、それがどういふ責任の意味だか分らない。彼はやがて徐ろに云ひ出した。
「私はお宅で初めて光子さんに會つて、それから次第にかういふ氣持へ落込んできたのですが、光子さんの身の上につ

いては實際よく知つてはゐないんです。もし何か……ありましたら、教へて頂きたいのですが。」

「僕だつて何も知りやしないよ。まあ、過去は過去として葬るがいゝさ。」

「でも……。」

私は彼の眼付にぎくりとした。と同時に、話の工合がいつしか自分にとつて危險なものとなつてるのを感じた。それで話の方向を一度に變へてしまつた。

「で結局君は、どういふことにするのが一番望みなんだい。」

「私は、出來るならば、光子さんを暫くお宅に置いて頂いて、私と交際を許して頂きたいんですが。」

「今だつて君は、自由に交際してるんだらう。」

「文通はしてゐますが……。」

「交際はしてゐないといふのかい。へえー、僕はまた君達をもつと深い間柄だと思つてゐた。」

少し腹立ち氣味の反抗的な氣勢で、腕を組み眼を伏せて考へ込んだ彼の姿を、私は小氣味よく眺めやつた。それを餘りひどいとでも思つたのか、俊子が突然中にはいつてきた。

「理屈はどうだつて、兎に角光子さんをこのまゝ河野さんの所へ置いておくのはいけませんわ。北海道から遙々頼つてきたのをあすこへやつたのですから、あんな話を聞いてこのまゝにしておくのは、私達としても濟まないぢやありませんか。」

「だから僕はどうしたものかと考へてるんだよ。」と私は云つた。

「あなたはいつもそれですもの、考へてばかりゐて、はつきりと決斷なすつたことは、一度だつてありやあしません。

そんな風では、いつまで待つたつて片付くものですか。」

「ではどうすればいゝんだい?」

「もう松本さんの心はきまつてゐますし、この上は光子さんの心だけでせう。私が參つて、一體光子さんはどう思つてるか、それをよく聞いてきませう。河野さんには義理もあるけれど、穩かに話をすれば、あれだけの人ですもの、さう分らないことも仰言るまいと思ひますわ。」

勿論これ以外に解決の方法がありやうはなかつた。然し彼女の調子は幾分私を驚かした。前から一々準備したやうによく整つた簡潔な文句を、もうきまりきつたことのやうにきつぱりと云つてのけて、それで一學に事柄を決定してしまつたのである。私にくどくどいろんなことを述べ立てゝ相談した彼女とは、すつかり異つた調子だつた。恐らく彼女は、私と松本との話を聞いてるうちに、何となくそれだけの決心を强ひられたものらしい。さう私は咄嗟の間に感じて、何故となく不安の念に驅られてきた。

「勿論お前が行つてくれなければ、外に一寸行く人はないんだけれど……。」

「だから私が行きますわ。……ねえ、松本さん、それでいゝでせう?」

「えゝ。濟みませんが、さうお願ひします。」と松本はきつぱり答へた。

私は自分の立場が急になくなつたやうな氣がした。と一方には、それを自ら皮肉に顧みる氣も起つて、松本に杯をさしたりなんかしながら、こんなことを云つたものだ。

「さうきまつたからには、もう君も心配しないでいゝよ。なあに場合によつては、河野さんと一談判したつて構はないし、僕達で君達二人の間の媒妁人になつてもいゝ。」

何て馬鹿なことを私は云つたものだらう！　心ではつゆほどもそんなことを思つてはしなかつたのだ。明日一杯で明後日までには何とかなるだらうといふ約束で、松本が再び元氣づいた自信ありげな眼付をして歸つていつた後、私はなほ酒の燗を命じてちびりちびりやりながら、そんなにお目出度く事件が片付くものかと考へて、理想主義者の松本のために――この理想主義者だといふことが、なぜだかその時私にはひどく必要だつた――彼理想主義者のために、輕蔑的な苦笑が自然と浮んできた。それから、片付かないとすれば一體どうなるのだ？　といふ所へ考が落込んでいつた時、譯の分らない憤りと苛立ちとを覺えてきた。私の方をぢつと窺つてるらしい倭子の落付拂つた樣子にも、私はまた心を亂された。

「明日は大役だよ。よく考へて失敗らないやうにしなければいけない。」などゝ私は平氣を裝つて云つたが、口元の輕い震へをどうすることも出來なかつた。

然し彼女の答へは、冷淡な調子ではあつたが、案外素直な不平のみに止つた。

「あなたがあんまり吞氣で意氣地がないから、こんな役目までも私がしなければならないんです。」

そしてなほ幸なことには、彼女は子供の面倒をみてやらなければならなかつたし、私は銚子に殘つてる酒を飲みながら、すつかり醉つ拂つた風をすることが出來た、

實際にも私は少し醉つ拂つてたかも知れない。その晩いくら酒の廻りが惡かつたからといつても、平素よりは隨分長く多量にやつたのだから。そして布團の中に蹲りながら、陰鬱な妄念に弄ばれるうち、私にも似合はない決心をしてしまつた。その決心が翌朝になると、自分のこれまでの生活に對する反撥心から、更に益々固められた。

私は學校を出ると間もなく結婚して家庭を持つた。勿論戀愛結婚やなんかではなく、私の例の煮えきらない態度の

ために、いつしか媒妁人のために引きずり込まれてしまつたのである。然し妻の俊子は善良な女だつた。私によく仕へ家庭をよく整へてくれた。そして三人の子供を設けた。家族が増すにつれて私の收入だけでは生活困難だつたけれど、一番上の子が病氣で入院した時をきつかけに、金のいる時はいつも妻が河野さんから借りてくる習慣がついてしまつた。河野さんは昔妻の父から恩義に預つたことがあるとかで、心よく私達の世話をしてくれた。向ふでは何でもないことだつたらうけれど、實業界に羽振りのいゝ河野さんがついてゐてくれることは、私達にとつては非常に力強く、自然とその擁護に安んずるやうな惰性がついた。そして表面上、私達はまあ幸福な生活をしてゐたのである。所がその安穩な幸福といふやつがいけなかつた。私達の生活にはいつしか、張りがなくなり力がなくなつてゐた。私は元來文學が好きで、法科をやりながらも文學書ばかりに讀み耽つた。卒業後もずつと、會社員になり済さうかそれとも文學で身を立てようかと、それを迷ひ續けてきた。生活の脅威と重荷とがなかつたために、いつまでも決心がつかなかつた。河野さんの口利で、今の會社の社長秘書といつた無爲閑散な役目になり、一方では英語の小説の飜譯などをしてゐた。然し兩方とも私の本當の仕事ではなかつた。本當の仕事は、ずつと遠い所に……雲をでも掴むやうな所にあつた。そして、その本當の仕事がいつまでも掴めないし、張りのない安穩な生活にはまつてしまうし、子供は殖えてくるし、自分はいつしか三十の年を越してゆくし、遙かの先まで平坦な道の續いてゐる自分の一生が、妙に味氣なく見渡されて、何か或る驚異を求める焦燥の心が萌し、それかつて別に面白い冒險もなし得ずに、いつしか酒と煙草とに耽るやうになつた。外で飲まなければ家で必ず晩酌をやり、敷島を手から離すことがなかつた。酒と煙草とは精神の一種の手淫である。その不自然な精神的淫蕩に沈湎してゐるうちに、私の腦力も體力も衰へてきて、その直接の現はれとしては、前に述べたやうなひどい性慾減退を來し、また内的には、全く意志の力を失つてしまつた。もう今迄のあやふやな生活を擲つて、何か一

つ自分の一生の仕事といふものを選ばうと思つたり、また直接當面の事柄としては、酒と煙草とを止さうと思つたりしたが、本當の決心が私には出來なくて、いつもぐずぐずに終つていつた。そして私の精神はだらけきり、私の生活はなまぬるい陰鬱なものになり、而も私の魂はまた諦めきれずに、いつも落付かない焦燥のうちに悶えてゐた。

妙に暖い薄曇りの日だつたが、そのなま白い朝の明るみの中で、私は自分の姿を堪らなく慘めに感じ、その感じが前々日來の記憶に更に助長せられて、凡てに反撥するやうな心地から、前夜妄想のうちにふと浮べた決心を、私はほんとに固めてしまつたのである。その決心とは、光子に逢つてみることだつた。逢つてどうしようといふのではない。逢つたらどうにかなるだらうといふのだつた。恐らくは、前夜松本に餘り齒が立たなかつた不滿や、俊子の樣子から受ける不安や、事情の切迫から來る脅威や光子に對する好奇心や、自分の性的無力を挑撥立てられた苛立ちや、其他いろんなこと――自分にだつて一々分るものか！――何やかやがつけ加はつてはゐたらうけれど、要するにそれは私にとつて、凡てのものに對する最後の反抗の試みだつた。道徳的な批判や良心なんかは、私には少しもなかつた。

そこで私は、その午前中には俊子が出かけられないことを推測し――俊子よりも前に光子へ逢はなければいけなかつた――會社へ行く風をして朝早めに出かけ、河野さんの家のまはりをひそかにぶらつき、十町ばかり離れた所に場所を選定し――他に適當な場所が見當らなかつたので、電車通りから一寸はいつた洋食屋の二階にした――それからわざわざ自働電話を探して、河野さんの家へ――光子へ――電話をかけた。私はごく冷靜に落付拂つて、それだけのことをしたのである。

電話口に出て來たのは、たしかに光子らしかつた。所が私が名前を云ふと、向ふはぴたりと口を噤んでしまつた。話しかけても答へがないので、「もしもし」と呼んでみると、「はい」といふ返辭がした。話しかけるとまた答がない。呼ぶ

と返辭だけをする。そんなことを三度ばかり繰返した後、私は確かに光子が聽いてだけはゐると信じて、是非逢ひたいことがあるから來てくれとくり返して執拗に賴んだ。所がやはり答がなかつた。私は暫く待つてから再び懇願した。すると突然怒つたやうな聲が響いた。

「それでは參りますわ、ぢきに。」

そして電話は切られた。私はぼんやり自働電話の箱から出て、約束の洋食屋へやつて行つたが、どうしたのか、目的を達したといふ喜びは少しも感じなかつた。否喜びどころではなく、次第に不安を感じてきた。

可なり立派な西洋料理店だつたが、朝のうちのせいか、階下の廣間に四五人の客がゐるきりで、落付きのない靜けさにがらんとしてゐた。二階に上ると、幸にも二室に仕切られてゐたので、私は狹い方の室を占領して、葡萄酒一本と林檎のパイ二人前とを註文しながら、女が一人訪ねて來たらすぐに通してくれとボーイに賴んだ。そして一人になると、腰掛けに坐つてをれなくて、室の中をぐるぐる歩き出した。期待の念にわくわくしながらも、心は深い穴の底へでも落ちて行くかのやうな氣持だつた。然し私は長く待たされはしなかつた。註文の品が運ばれて、葡萄酒を一杯飮むか飮まないうちに、光子は性急な足取りで階段を上つてきた。

彼女は電話口に出て來た時と同じ服裝のまゝで、すぐにやつて來たものらしい。着くずれた銘仙の着物にメリンスの帶をしめてゐたが、髮だけは綺麗に取上げて、大きな鼈甲の簪を一つ無雜作に挿してゐた。ボーイが開けてくれた扉を斜め後ろ手に閉めきつておいて、挨拶もせずに私の方へつかつかと進んできた。その樣子を一目見ると、私はもう何もかも駄目だといふ衝動を受けた。顏は眞蒼と云つてもいゝくらゐに血の氣が失せ、變に總毛立つて、化粧のためにぼーつと鼠色の陰を帶びてゐた。脣がかさかさに乾き、痙攣的に震へる眉の下から、薄黑い暈で緣取られてる眼が異樣に輝

いてゐた。殊に私の眼を囚へたもゝは、臙脂色の錦袢の襟から覗き出してる頸筋に、紫色のなまなましい痣が二つ三つ見えてゐて、それが今朝結び立ての髪と病的な對照をなしてゐることだつた。そして私は、窓からさし込んで天井の高い白壁に湛へられてる、薄曇りの晝間の影のない明るみの中では、見るに堪へないやうなものを、彼女の全體から嗅ぎ出したのである。

「まあお坐りよ。」と私は眼を外らしながら云つた。

彼女は默つて私の正面に坐つた。卓子の上に少し萎れかけた菊の花瓶があつて、それでやゝ二人の間が距てられた。その影から私は彼女を見据ゑてゐたが、黑目が半ば上眼瞼に隱れて光つてゐる彼女の眼付に出逢ふと、もう我慢が出來なかつた。

「お前は……。」

彼女は同じ眼付で後を尋ねかけてきた。

「お前はとうとう……。」

それでもやはり先が云へないでつまつてゐると、彼女はふいにいきり立つた。

「えゝ、さうなつたわ。それがどうしたの！」

「それでお前は……いゝのかい？」

「いゝも惡いもないわ。どうせ私みたいた者……。馬鹿馬鹿しいわ。あんな風にぐれ出したんだもの。どうなつたつて構やしない。」

その絶望的な憤激が、私の方へ向けられないで、彼女自身の方へ向けられてゐるいを感じて、私はその隙に乘じようと

した。

「さういふ風にお前は、自分自身をいぢめてゐるが……實は……。」

「い〻え、」と彼女は私の言葉を押つ被せた、「實はだの本當はだの、そんなもの何もありやしないわ。何にも……。私はたゞかうなつたゞけよ。あの時からもう……。」

「それぢやなぜ、今日やつて來たんだい？」

「あなたが是非來いと仰言るから……。」

「それだけ？」

「え〻、それだけよ。」

乾ききつた唇を少し歪め加減にくひしばつて、彼女はぢつと私の方を見つめた。色褪せた菊の花の影から、先の尖つた大きな鼈甲の簪が細かく震へてゐるのが、しきりに私の心へ觸れてきた。私は立上つて少し歩きながら云つた。

「僕は今日、お前と喧嘩をするために此處まで來て貰つたのぢやない。ゆつくり落付いて話がしたかつたのだ。お前の心をよく聞いてみたかつたのだ。お前の心次第で……。」その時私の頭に非常な勢で新たな考が閃めいた。「初めはあんな風だつたけれど、何にも囚はれない自由なのびのびとしたお前に、僕は……戀したのかも知れない。何もかも打捨て〻しまつて、お前と勝手氣儘な放浪の生活をしてもい〻。僕にはそれが、何だか新らしい本當の生活のやうな氣もする。何處に行かうと自由だ。何をしようと自由だ。お前さへ承知してくれるなら……。」

「ぢやあ一人でさうなすつたがい〻わ。」

私は立止つて振向いた。彼女は兩肱をぐつたりと卓子にもたせて、毒々しい輕侮の眼付で私を見てゐた。

「お前は、僕を憎んでるね。」
「憎んでやしないわ。もう誰も怨んでも愛してもゐないわ。たゞ……。」
「え？」
「自分が憎いだけ。」
　ぶつきら棒に云つてのけて、突然、彼女ははらはらと涙をこぼした。私は呆氣にとられて、その涙をぼんやり眺めてゐたが、不思議にぱつと一切のことが明るくなつた。私は眼がくらむやうな氣がして、椅子の上に身を落した。
「さうだつたのか。やはりお前は……。」
　彼女はぎくりとして涙の顔を上げた。
「やはり松本君を愛してるのだらう。」
　そして私は惹きつけられるやうに彼女の眼に見入つた。その眼は黝ずんでぢつと据つてゐたが、私から後ろに菊の花の方へ移ると、俄にぎらぎら輝いてきた。
「ぢやあ私が松本さんを愛してるとしたら、どうすると仰言るの？　また愛してゐないとしたら、どうすると仰言るの？」
　眞劍だとも皮肉だともつかないその調子に、私は遠くへ突き離された氣がした。そして兩手で頭を押へながら、それでもなほ縋りついてゆかうとした。
「どうすることも、僕にはどうすることも出來ない。たゞお前が何とか云つてさへくれゝば……。」
　彼女は默つてゐた。

「いろんなことがさし迫つてるのだ。……もう何もかも云つてしまはう。實は昨晩松本君が來て、すつかり打明けてから、お前を僕の家へ引取つておいて暫く交際さしてくれと、さう云ふのだ。そして結局、俊子が今日お前の所へ行つて、お前の心をよく聞いた上で……といふことになつてゐる。午後には行くだらう。それで僕は……。」

「え！」と彼女は聲を立てた。「奥さんが私の所へ？」

彼女の喫驚した樣子に私は眼を見張つた。

「本當？」

「本當だとも。だから僕は……。」

私は云ひかけて止した。彼女はふいに飛び上らうとしたが、それをぢつと押しこらえるやうな表情をして、頬をぴくぴく痙攣さした。それから突然顏色を變へて、その引きつゝたまゝの口元に、嘲るやうな影を浮べて、いきなり病的な笑ひ聲を立てた。

「いらつしやるがいゝわ。晝間よりか、晩にでも、そして……河野さんの所へでもいらつしやるがいゝわ。」

「何だつて！」

彼女はまた病的な笑ひ聲を立てた。

「河野さんの所へいらつしやるがいゝわ。どんな風だか、私影から覗いてゝやるから。……男つて可笑しなことばかり考へるものね。私を捉へて、俺はお前だとは思つてゐない、草野の細君だと思つてるんだつて……。だから私も云つてやつたわ、私もあなただとは思つてゐない、草野さんだと思つてるつて。その時の喫驚なすつた顏つたらないわ。それで私はなほ云つてやつた、私はもう身體は草野さんの奥さんと同じだから、どうか思ふ存分につて。いくら恐い眼付で

見られたつて、私びくともしやしない。そして云ふことが振つてるわ、俺が惡かつた、草野の細君といふのはたゞお前の心をそゝるための手段で、實は誰の細君でも何處の女でもいゝんだ、そんな者はゐやしない、俺が惡かつたから誤解しないでくれ……さう云つて頭を下げなさる所へ、私かぢりついていつてやつたわ。人を馬鹿にして、ぢゞいのくせに！……でも、何もかも馬鹿げてるわ、初めからみんな馬鹿げてるわ。」

彼女の眞蒼た顏はなほ蒼ざめて、眼だけが異樣に輝いてゐた。私はそれに堪へられなくなつて、菊の花の影に隱れるやうにして兩手で額を押へた。もう何もかもめちやくちやになつた氣がした。彼女の言葉の奥には、いろんな感情がこつたに亂れてゐた。單に河野さんとのことばかりではなく、私や松本のことなんかも、主客轉倒して一緒にはいつてゐたかも知れない。私の頭の中で、何もかもめちやくちやになつてそしてこんぐらかつてしまつた。その上なほいけないことには、妻に對する疑惑が頭の隅に引つかゝつてきた。

私達はそれきり長い間默つてゐた。何處かで小鳥の鳴く聲がしたやうたので、私はふと顏を上げた。光子は彫像のやうに固くなつて考へ込んでゐた。私の視線を感じてか、ふいに彼女は立上つた。私も立上つたが、不覺にも涙をこぼした。

「どうする？」

「やつぱり……仕方がないわ。」

「それでも……。」

「もう駄目よ。」

私は屹となつて涙を拭いた。

「僕が河野さんに逢ひに行から。そして……。」

「いゝえ、いけないわ、どうしてもいけないわ。」と彼女はむきになつて遮つた。

「ぢやあ止すよ。」

私達はぢつと眼を見合せたが、心に相通ずるものは何もなかつた。彼女はぴくりと眉根を震はして云つた。

「私、もう歸るわ。」

私は默つて首肯いた。

「では、先生、これで……。」

そして彼女は改まつたお辭儀を一つした。その先生といふあの時以來初めての言葉と、その時彼女の頸筋にはつきり見えた生々しい紫色の痣とが、今でも私の心にはつきり殘つてゐる。

彼女が出て行つた後、私は椅子に身を落して兩手に顏を埋めた。涙がしきりに出て來た。その泣いてゐる自分自身に氣がつくと、急に譯の分らない苛立ちを覺えて、前にあつた葡萄酒を半分ばかり飲んでしまつた。それから其處を出て、その足ですぐ會社へ行き、急な雜用をすつかり片付けておいて、途中で食事を濟し、晩の八時頃家に歸つてきた。

私は平素の自分を取失つたやうになつてゐた。絶えず萬一のことを期待する氣持に驅られてゐた。その萬一が何のことだかにはつきりしなかつたが、光子からあの變な話をきかされた時から、何もかもこんぐらかつて壓倒されたやうな心地の底に、たゞ一つ、或る漠然とした萬一の場合を豫想する念が萠して、それが次第に私を囚へていつた。泣いてる自分自身に氣付いて苛立つたのも、會社へ行つて大體の用を片付けたのも、食事後すぐに家へ歸つてきたのも、みなそのためだつた。家へ歸つて私は書齋の中を片付けるつもりだつた。

この萬一の場合を豫想する氣持は、これまでにも時々、ふつと日が陰るやうな風に、何等はつきりした理由もなく起つてくることがあつた。それは生活氣分がたるんで心身がだらけてる結果だつたらうが、その日のは變な重苦しい重壓となつて、私の上にのしかゝつてきた。光子との會見があんな風に終つて、愈々もう駄目だといふ絶望が濃くなるにつれて、私は一刻もぢつとしてはゐられなかつた。多分河野さんの家へ行つてもう歸つてる筈の俊子と顔を合せることも、ひどく不安ではあつたけれど、そんなことに構つてはゐられなかつた。

所が家へ歸つてみると、俊子は不在だつた。女中に聞けば、俊子は午後中ぢつと家にゐて、それから晩になると慌しく仕度をして、俥に乘つて出かけたさうである。後で分つたことだが、彼女は河野さんの家へ行くのが何だか嫌で、ぐずぐずしてるうちに夕方になつて、いつも三時頃には社から歸る私が歸つて來ないし、不安な思ひが募つてきて、どうにでもなれといふ氣で出かけたのだつた。

「蟲が知らしたんです。」と彼女は云つた。「私はどうしても行きたくなかつた。そしてぐずぐずしてるうちに、あなたは先廻りをして、あの女と落合つていらしたんでせう。圖々しいにも程があるわ。あなたはそれで恥しくないんですか。」

「いや僕は會社に行つて遲くまで用をしてゐたんだ。」と私は憶面もなく云つた。「嘘だと思ふなら、會社に電話で聞いてみるがいゝ。」

「いゝえ、嘘です、嘘です。」

そして彼女はどうしても聞き入れなかつた。……がそれは後のことである。

私は俊子がゐないのにほつと安心すると共に、また一方には不安にもなりながら、二階に上つて、飜譯の原稿や五六通の書信を片付けたり、書棚の中の書物を並べ直したり、机の抽出の中のこまこました物を見調べたり、額縁の歪んで

るのを掛直したり——何のためにそんな下らないことをしたのだらう！——そして合間合間には腕を組んで室の中を歩いたりしてるうちに、今迄曾て知らない種類の焦慮に襲はれてきた。一晩に河野さんの所へでもいらつしやるがいゝわ、」といふ光子の言葉から糸を引いて、俊子がいつも河野さんに金を借りにいつたこと、彼女が結婚前から——子供の時から——河野さんと往來きしてゐたこと、河野さんの性情や私達の冷かな夫婦生活、そんなことが一時に忌はしい影を拵へて、私の頭に映つてきた。思ふまいとしてもまたいつしかその方へ考へが向いていつた。そして自分のことゝ彼女のことゝが、頭の中に渦を卷いた。私は幾度も時計を眺めた。十一時近くまで彼女は歸つて來なかつた。

表に俥が止つた時、私は物に怯えたやうに立悚んだ。それから机の前に坐つて、書物を一冊披いて讀み耽つてる風を裝つた。俥屋の聲や、女中の聲や戸締りをする音や、茶の間で何かかたかたやる音などが、相次いで聞えてきたが、やがてしいんと靜まり返つた。私は苛ら苛らしてきた。そして十分ばかりたつと、梯子段を鈍い足音が上つてきた。

俊子は半コートだけをぬいだ外出着のまゝで、靜に室へはいつて來て、火鉢の向ふに坐つてから、改まつた調子で云つた。

「只今。河野さんの家へ行つて參りました。」

その全體の樣子から私はたゞならぬものを感じて、一寸口が利けないでゐると、彼女は急にはらはらと涙をこぼして、それからまた立上つて出て行かうとした。

「俊子！」と私は呼び止めた。

振向いた彼女の顏は、ぞーつとするほど冷く凝り固つてゐた。

「どうしたんだい？」と私は强ひて尋ねた。

彼女は一寸考へてから、また火鉢の向ふに戻つてきて坐つた。そして燃えるやうな眼付を私に見据ゑながら、顫へる聲で云ひ出した。

「どうしたのか、御自分の胸にお聞きなすつたら、分る筈です。あんなことをしておいて、よくも私を……。私のめのめとあの女の前に出ていいつたかと思ふと、口惜しくて、口惜しくて！……」後の言葉は息と共に喉元にゝめて、こまかく肩を打震はした。

私はどしりと打ちのめされた氣がした。萬一の場合を豫想する氣持になつてはゐたが、その萬一は、そんなことではなくて、もつと遠い他の漠然とした所にあつた。何れ俊子に分るかも知れないとは思つてゐたが、河野さんの家で彼女がそれを聞き出さうとは、夢にも思つてはゐなかつた。私は彼女について他のことを懸念してゐたのである。所が………。私は我を忘れて飛び立たうとした。

「え、誰から、誰から聞いたんだ？」

すると彼女は、俄に嘲笑的な調子に變つた。

「誰から聞からうと私の勝手ですわ。あなたは、分るまではごまかしておくつもりだつたんでせう。立派なお考へですわ。そして松本さんに向つて、場合によつては媒妁人になつてあげてもいゝなんて、よくも圖々しい口が利けたものですわ。昨日からどうも樣子が變だとは思つたけれど、まさかあの女と……さう思ひ直して……。私あなたを買ひかぶつてゐました。もつと立派な人だと思つてゐました。北海道で關係をつけた女を、二人でしめし合せて家に引張り込んで、私の前では少し都合が悪いものだから、河野さんの家へ追ひやつて、始終媾曳をして、井ノ頭なんかに泊り込んだりして、……またあの女も女ですわ、あなたに飽きてくると松本さんを誘惑したり、河野さんに身を任せたり、丁度あなたには

似寄つてゐます。ほんとに似寄りの夫婦よ。あの女と結婚なさるがいゝわ。私邪魔も何にもしやしません。默つて出て行きます。あの女が私の代りになつて、私があの女の代りに河野さんの女中にでもなります。あなたよりも河野さんの方が、まだ男らしくて立派ですわ。」

彼女はもうめちやくちやになつて、自分で思つてゐないことまで口走つてるのが、私には感じられた。と共に、彼女が或る點まで確かな事實を知つてることも、私には感じられた。もうごまかせやしない、さう思ふと却つて腹が据つて、私は初めからのことを告白して、そして納得させようとした。

「もう僕も隱しはしない。何もかも云つてしまうから、つまらない邪推はしないでくれ。」そして私は、北海道では何事もなかつたことを諄々と說き、次に一昨日光子が會社へやつて來たことから、光子を井ノ頭へ誘ひ出したことを話し、その時の氣持を前に書いておいたやうな風に說明し、それから井ノ頭でつい遲くなつて泊つたことを話したが、その辯解には可なりゆきづまつた。「兎に角僕は油斷をしてゐた。性慾を輕蔑してゐた。人生を甘く見てゐた。お前と一緒の生活をしてゐるといふ腹が据つてゐるので、何をしても危險はないと思つてゐた。そして遂に躓いたのだ。心は少しもぐらつきはしなかつたが、肉體的につい躓いたのだ。」そんな風に私は云つたのである。勿論それも、私としては全然嘘ではなかつたけれど、それ以外のことはどうしても云へなかつた。云へば自分達の生活の否定になるのだつたから。

それまで默つて聞いてゐた俊子は、そこで急に私の言葉を遮つた。

「ぢやあ何をしようと、油斷からならいゝんですね。私もこれからせいぜい油斷をしてみませうよ。他の男と一緒に泊つてきて、つい油斷をして躓いた、とさう云つてあげますわ、あなたがどんな顏をなさるか……。もう分つてゐます、あなたの心なんかすつかり分つてゐます。いつも私にはあんなに冷淡にしておいて、他の女に逢ふと愛情が起るんでせ

う！　性慾を輕蔑してゐたなんて、よくも圖々しいことが云へたもんですわ。」
「いや實際は少しも光子に心を動かしたのぢやない。肉體的に靡くことはあつたにしろ、僕は心の上では一度もお前に背いたことはないつもりだ。それだけはお前も信じてくれていゝ筈だ。」
「それでは、あなたはどうして私を河野さんの家へおやりなすつたのです？　なぜその前にかうかうだと仰言らなかつたのです？　私にあんな恥しい目を見さしておいて、何が心の上では……でせう。私河野さんの前で、ほんとに穴でもあればはいりたいやうな、泣くにも泣かれず、額からぢりぢり汗が出て……。」
「え！」と私は思はず聲を立てた、「河野さんが…　河野さんがお前に云つたのか。」
私の心の奧に巣くつてゐた淺間しい感情が、突然はつきりと姿を現はしてきた、さういふ私がさういゝ場合に彼女に嫉妬するとは、何といふことだつたらう！　然しその時私は、忌はしい想像を振り落すだけの力がなかつた。
「どんな風に、どんな場合に、河野さんはお前にそれを話したのか？」
彼女は呆氣に取られたやうに私の顏を見守つた。私はなほ執拗に迫つていつた。すると突然、彼女の顏にはありありと恐怖の色が浮んだ。それが私を更に驅り立てゝきた。
「お前は前から河野さんとは親しくしてゐたらう。恥しい思ひをしたことはないのか。」
云つてしまつてから私はぎくりとした。餘りに忌はしい調子だつた。もつともつと落付いて……さう思つて云ひ直さうとしたが、もう遲かつた。彼女はまるで死人のやうな顏色になつた。顏色ばかりではなく、眼も頰も口も冷くこちこちになつてしまつた。
「淺間しいとも何とも、あなたは！」

「いや僕はたゞ……。」

「聞きたくありません！」ぷつりと云ひ切つてから、暫くすると、こんどはひどく激昂してきた「あなたは自分がさうだから私までもそんな女だと思つてゐらつしやるのですか。あなたがそのつもりなら、私だつてさうなつてみせます。それこそ油斷をして、性慾を輕蔑して、世の中を甘く見て、河野さんを立派に誘惑してみせますわ。それがあなたのお望みなんでせう。あなたは自分が狡しいものだから、私にもけちをつけたいんでせう。」

「お前はそんなめちやなことを云つて、自分で恥しくないのか。」

「あなたこそめちやなことを仰言るんです。」

會話はそんな風に實際めちやになつていつた。何もかもごつたになつてはてしがつかなかつた。それを一々書くのは無駄でもあるし、また書ききれるものでもない。私達は口早に云ひ爭つたり、長々と說明したり、可なりの間默り込んだりして、夜中の三時過ぎまで起きてゐたのである。そして全體としては、彼女は次第に攻擊的になつて嵩にかゝつてき、私は次第に受太刀になつて詭辯を弄したが、それも結局二人の間を益々乖離させるばかりだつた。彼女は私の云ふことを眞正面から受け容れはしなかつたし、私は彼女の問に卒直な答をすることが出來なかつた。その上彼女も私に對して卒直な口の利方をしなかつた。殊に河野さんの家でどんなことが起つたかについては、初めから一度もはつきりしたことを話さなかつた。私は後で彼女の言葉を綜合して、大凡次のやうなことを知つたばかりである。

俊子が俥で乘りつけた時、河野さんはまだ晩酌をやつてゐた。で彼女は一寸挨拶をしておいて、光子に別室へ來て貰つた。そして松本がやつて來た顚末からその希望などを話して、光子の心を聞きに來た由を告げた。所が光子は顏を伏せたまゝ、初めから一言も口を利かなかつた。いくら尋ねても「石のやうに押默つて」ゐた。そしてしまひには、河野

さんに話して下さいとたゞそれだけ云つた。俊子は仕方なしに河野さんへ相談した。そして松本と光子との戀愛だけを話したが、話はそればかりぢやあるまいと河野さんに突つこまれて、遠廻しに事情を匂はした。河野さんは默つて耳を傾けて、「火鉢の底がぬけやしないかと思はれるほど、火箸を灰の中につき立てゝぎりぎりやつて」ゐたが、ふいに「眼をぎよろりとさして」一切のことを打明け、私のことまでさらけ出した――勿論私と光子とのことを、彼はどの程度まで知つてゐたか、またどの程度まで俊子に話したか、それは私には分らない。が兎に角、俊子はそれを聞いて「消え入るやうな思ひ」をした。河野さんは彼女を慰めた上で、さういふことになつてる以上は松本の方の意志次第だと云つた。松本といふ人がある以上はこれから自分が光子を清く保護してやると誓つた。

俊子の心を絶望的に激昂さしたのは、勿論私と光子との關係が第一ではあつたらうけれど、河野さんの取つた處置もまたその一つだつた。翌日私は、松本がやつて來ないことにふと氣付いて、さすがにしきりと氣にかゝつてきて、思ひきつて俊子へ尋ねてみた。

「松本君はどうして來ないんだ？」

彼女は宛もその問を待つてゐたかのやうに、朝から堅く噤んでゐた口を俄に開いた。

「松本さんはいらつしやりません。河野さんの所へでもいらしたんでせうよ。あなたよくお聞きなさるがいゝわ。河野さんは私にかうお云ひなすつたんです。今更光子をあなたの家へ引取るわけにもゆくまいし、それかといつて、光子の心はひどく荒んでるやうだから、他處へやるのもどうかと思ふ。それで事がきまるまで、私が預つておくとしよう。知らない前は兎に角、松本といふ人のことを知つた以上、私は誰にも指一本さゝせないやうにして、光子を清く保護してみせる。それから松本といふ人には、まさかあなた達から話をする譯にもゆくまいから、一層全く知らない他人の私か

ら、さつくばらんに打明けて、その上の心持を聞くとしよう……とさうなんです。それでもあなたは恥しくないんですか。私は顔から火が出るやうな思ひをしました。まだあの女を家に連れて來た方が、どれだけいゝか分りません。それも出來ないやうなことに、誰がなすつたのです！」

彼女の眼は憎惡に燃え立つてゐた。然しその憎惡は、單に私にばかりではなく、一切の成り行きにも向けられてることを、私ははつきり感じた。そしてその時から、私は凡てに復讐する氣持で、河野さんに決鬪を申込んでやらうかとも考へたのである。

でもそれは翌日のことだつた。何だか俳が先へ滑つてごたごたしたが、實際私はこれから先をはつきりと書き分けるのに困難を感ずる。私は何が何やら見分けのつかない氣持になつてゐたのだから。

所で、その晩、私は俳子と三時まで諍ひ續けて、三時が打つと、その音がまた不思議にはつきり聞えたのであるが、私達は急に默り込んでしまつた。そして長い間默つてた後に、「もう私は寢ます」と彼女は云ひすてゝ、不意に立上つた。その樣子が異樣だつたので、私は喫驚して、心を靜めてくれとまた哀願した。

「二三日考へてみます。」と彼女は云つた。

それでも、私は安心しかねて、彼女の後に引きずられるやうについていつて、寢室へはいり、彼女が寢てしまうのを見定めて、自分もやはり布團にもぐり込んだ。それから夜が明けるまでのうちに幾度か、夢現のうちにふつと不安な氣に驅られて、頭をもたげながら彼女の方を眺めやつた。

それは何とも云へない怪しい氣持だつた。晝間になつてもそれが續いた。一瞬間でも眼を離したらどういふことになるか分らない、といふ恐れもあれば、眼を離したらもう永久に彼女を失つてしまう、といふ恐れもあつたが、また一方

には、どうなつたつて構ふものか、彼女を失つたつて平氣だ、と思ふ心が却つて不安の念をそゝつて、彼女の側を離れ難かつたのである。私は宛も鐵が磁石に引きつけられるやうに、始終彼女の方へ氣を惹かれた。そして私は、ぢつと坐り込んでる彼女から、少し離れた所をぶらついたり、食事の時にはやはり一緒の飯臺に坐つたり、彼女の側でいつまでも新聞をみてる風を装つたりした。

さういふ私に、彼女は殆んど一瞥をも與へなかつた。二三日考へてみるといふ言葉を、常住不斷に實行してるかのやうだつた。いつも口をきつと結び眼を見据えて、額に冷酷な專心の影を漂はしてゐた。そして時々思ひ出したやうに、三歳になる末つ兒の達夫を、いきなり膝の上に引き寄せ、その上に屈み込んで頬をくつつけながら、力限りに抱きしめた。達夫が苦しがつていくら踠いても、彼女はなかなか離さなかつた。それでも一度手を離すと、もう忘れてしまつたかのやうに見向きもしないで、自分一人の沈思に耽つていつた。かと思ふとまた三人の子供達を呼び集めて、一番好きな御馳走を拵へてあげようとか、一番好きな玩具を買つてあげようとか、一番好きな遊びごとをしてごらんなさいとか、兎に角子供の一番喜ぶことを尋ねておいて、女中に云ひつけてその通りにさせた。けれどもやがてまた、自分自身の中に潜み込んで、苦しさうに眉根を寄せるのだつた。さういふ様子を、神經質な長女の清子は、子供心にも痛々しく感じたのであらう、私の方を窺つたり俊子の方を窺つたりして、それから妙に涙ぐんだやうな眼付で、俊子の側にいつまでも坐り込んで小布を弄つたりしてゐた。次の子の秀夫は何事にも無頓着で一人で騷ぎ廻つてゐたが、いつも遊び相手の清子が取合はないので、つまらなさうな顏をして、女中の所へ菓子をねだりに行つた。末つ兒の達夫は、三歳とは云へ漸く馳け廻れるくらゐで、玩具箱をかき廻すのに倦きると、しきりに母親の後ばかり追つかけた。それを俊子は時々の氣分によつて、突き放したり抱擁したり愛撫したりして、泣かせたり苦しませたり喜ばせたりした。それから女中は

變におづおづして――と私には思はれた――影の方に引込んでばかりゐた。皆一緒になつて和やかにいつてゐた家庭の調子が、何だかばらばらに壞れて狂つてきた。其の中で俊子は、殆んど用事だけの口をしか利かないで、冷たい蒼ざめた顏をして、何處かの隅にぽつねんと考へ込んでゐた。そして突然氣付いたかのやうに、子供達に對していろんなことをしてやるのが、益々家庭内の空氣を不安になすのだつた。

その不安な空氣に堪へられなくなると、私は彼女から身をもぎ離すやうにして、二階の書齋に上つていつた。そして家庭的な空氣が少しづつ遠くへかすんでゆくにつれて、外部の新たな不安な空氣が、私へ重くのしかゝつてきた。松本や光子や河野さんのことなどが、解くことの出來ない縺れをなして、壁のやうに立塞がつてゐた。それをぢつと見つめて、苛立だしい焦燥のうちに室の中を歩き廻りながら、私は次第に或る忌はしい想像を打立てゝいつた。まだ眼に殘つてる光子の頸筋の斑點やら、俊子に對して懷いた恥しい疑惑やら、殊には河野さんが光子を渡さない處置などから、其他全體の事件の成り行きから、私はこのまゝで河野さんと光子との間が終るものかと想像して、云ひ知れぬ恥しさと憤激とを覺えた。その時私の頭に映つた河野さんは、荒い赤毛を頭の上にむりに撫でつけ、太い眉の下にぎろりとした眼を光らし、皮膚のたるんだ頬に太い筋のある。たゞ一個の人間ではなくて、獸的な力强い性慾を具體化したものだつた。そして私はこんどの一切のことに復讐する氣で、河野さんと決鬪してみようかと思つた。初めふと浮んだその考へは、何度も頭に戻つてくるうちに、たゞそれだけがあらゆる屈辱を拂ひのける唯一の手段のやうに思はれてきた。日本人だからとて決鬪していけないわけはない、さう自ら心に叫んで、私は拳銃を手に入れる方法を考へたり、河野さんから借りた金額を胸勘定したりした。どうせやるなら堂々と、金を返した上で拳銃で打合ひたかつた。

所が私には、一體どれほど河野さんから借金があるのか、はつきりしたことが分らなかつた。五千圓を越してるかも

知れないとぼんやり思ふだけで、明確な所は俊子に聞かなければならなかつた。家財道具を賣拂つたり友人に借りたりしても必ず金は返してみせる、その上で……と決心して俊子の方へやつていつた。然し俊子の冷いた眼付に出逢ふと、私はそれを云ひ出しかねた。淺間しい疑惑の一件が、しきりに邪魔となつてきた。

その上俊子は、私の一身からひどい嫌惡と脅迫とを感じてるらしかつた。絶えず私に顔を外向けて背を向けようとしたし、私の前を避けようとしてゐた。夜中に私がふと不安な心地で我に返つて、彼女の寢てゐる方を窺ふと、二燭の電燈のぼんやりした光の中で、布團の上に坐つてる彼女の寢間着姿が見えた。私は吃驚して息を凝らした。やがて彼女はぶるつと一つ身震ひをして、傍に寢てゐる達夫の方に屈み込んで、その額に頬を押當てた。暫くすると立上つて、ふらふらと室を出て行かうとした。私は飛び上つてその手首を捉へた。

「何處へ行くんだ?」

私の手の中で彼女の手首はぶるぶると震へた。それから石のやうに冷く固くなつた。

「放して下さい、退いて下さい。」と彼女は夢遊病者のやうな聲で云つた。「私はあなたの側にゐるのが厭です。他の室へ行つて下さい。他の家へ行つて下さい。暫く旅に行つて下さい。それでもあなたが此處にゐると仰言るなら、私が出て行きます。暫く何處かへ行つてきます。いゝえ、放して下さい。」

彼女は無理に身を遁れやうとした。私は力の限りにそれをねぢ伏せて、彼女の布團の中に押入れた。

「お前が僕と一緒に暮すのを厭がるなら、そのやうにしてやる。僕も考へてることがあるから、今に何もかも片をつけてやる。二三日待つてゝくれ。」

そして私は自分の布團にもぐり込みながら、河野さんとの決鬪の計畫をまた思ひめぐらしてみた。

然し今考へると、私は本當に河野さんと決鬪するつもりではなかつたらしい。たゞ息苦しさの餘りさういふ空想に縋りついていつたものらしい。河野さんからの借金の額を俊子に尋ねもしなかつたし、金を拵へようともしなかつたし、拳銃を手に入れようともしなかつた。そして松本に逢ふと、その決心は跡形もなく消え失せてしまつたのである。

私が光子に逢つた日から中二日おいて、雨のしとしと降る三日目の午前、松本がふいにやつて來た。

その時私は二階の書齋で、火鉢にかぢりついて雨音をぼんやりと聞いてゐた。前々日來一歩も外に出ないで、何社のことなどは勿論頭の外に放り出し、飜譯のやりかけにも手をつけず、たゞ息苦しい空氣の中に浸り込んでた間の時間が、非常に長いことのやうに思はれた。そして影繪のやうにぼんやりと、いろんなことが見渡されて、陰鬱な佗しい影に包み込まれた。これまで嘗て、これが本當の自分の仕事だと思つて働いたこともないし、はつきりした心の苦しみや喜びを感じたこともないし、物事に對して明確な批判を下したこともないし、妻や子を眞面目に愛したこともないし、たゞのらくらと時を過してるうちに、心も身體もだらけきつて、そしてこんどの出來事で一度に壓倒されてしまつた……さういふ自分自身の空虚な生活が――花も受精しない果實が早熟して自らの重みで地に落ちたやうな生活が、堪らなく淋しく感じられてきた。而も事件は――妻や松本や光子や河野さんなどゝ四方に糸を引いてる關係は、益々こんぐらかつてゆくばかりで、そして私に屈辱を重ねさすばかりで、どう解決がつくのか見當さへつかなかつた。それをぷつりと斷ち切るやうな氣持で、河野さんと決鬪しようなどゝ考へたが、實際はその方へ一歩も踏み出してはゐなかつた。あれやこれやを考へて、いつそ決鬪で殺されてしまつたら……なんかと想像してみたりした。そしてそれが馬鹿馬鹿しくなると、またいつしかぼんやり雨音に聞き入つてゐた。

そこへ女中がやつて來て、松本さんをこちらへお通ししてもよいかと云つた。私は驚いて眼を見張つた。

「え、松本君が？　今來てるのか。」

「先程からいらして、奥様とお話してゐらつしやいます。」

私はまた喫驚した。いつも階下に誰か來た時は、何かの氣配を感じないことはなかつたのに、その時ばかりは少しも感じなかつた。私は心にぎくりとしながら、通してくれと女中に云つて居住を直した。

やがてやつて來た松本は、私に或る印象を與へた。頬がひどくこけたせいか鼻がつんと高く額が白々と秀でゝ、眼には澄んだ奥深い光を湛へてゐたが、唇の薄い口元には毒々しい輕侮の影を漂はしてゐて、その二つが變に不調和な對照をなしてゐた。彼は私の前方にぴたりと坐つて、私の方を見ないで云つた。

「奥さんにだけお逢ひしてゆくつもりでしたが、あなたにもお目にかけておく方がよいと思つて、持つて來ました。光子からの手紙です。」

私は無言のまゝ、差出された手紙を取つて讀んだ。一枚のペーパーに萬年筆で細かく書かれたものだつた。

松本さん、何もかも許して下さいまし、ほんとに何もかも。私はあなたがお許し下さることは存じてをりますが、やはりからお願ひしずにはゐられませんの。

私はあの時二度とも、次の室からすつかり聞いてをりました。あなたが一日考へてからと仰言つてお歸りなすつたその一日が、私にはどんなに苦しかつたか分りませんわ。そーして次の日の朝いらして、やはり私は光子と結婚したいと仰言つた時私はぞーつと震へ上つて逃げ出しました。恐ろしくて恐ろしくてたまりませんでしたし、次には悲しくて悲しくてたまりませんでした。私は生れて初めて本當に心から泣きましたの。

私もうとてもあなたにはお目にかゝれませんわ。この手紙が屆く頃には、私は他の處へ行つてゐますでせう。どうか行方を探さないで下さいまし。お目にかゝれる氣持になりましたら、私の方からあなたの所へ參ります。たゞそれまでは、どうしてもいけませんわ。

今になつて私はあなたのお心がようく分つたやうな氣が致しますの。ほんとに何もかもお許し下さいまし。　光子

中身は月日も宛名もないたゞそれだけのものだつた。私はくり返し讀みながら、いつまでも頭が上げられなかつた。

松本は暫くして、自ら進んで云ひ出した。

「私は河野さんに呼ばれて全部の話を聞かされました。そして一日中考へてから、是非とも光子さんと結婚する氣になつたのです。あの女の生一本な一徹な性格がひどく私の心を惹きつけたのです。今ではもう戀してると云つてもいゝかも知れません。」

私は俄に顔を上げた。

「それで、君は彼女の行方を探さうといふのか。」

「いえ、探しはしません。今探し出して捕へるのは却つて惡いと思ひます。私はたゞ待つてるつもりです。あの女は屹度私の所へ戻つてきます。半年か一年か二年か、それは分りませんが、鍛へられた心で必ず私を訪ねてくると信じてゐます。……さう云へばまた、理想主義者だとあなたに笑はれるかも知れませんが、私はどこまでも理想主義で押し通してみせます。」

彼の言葉の調子からかまたはその表情からか、どちらからとも分らなかつたが、その時私は心に電氣をでも受けたや

うな感じを覺えた。

「君は……僕に意趣晴しをするために來たのか。」

「いゝえ、たゞかういふ風になつたとお知らせに上つただけです。」

そして私達はぢつと眼と眼を見合つた。ぴたりとぶつかつた視線で力一杯に押合つてると、やがて彼の眼の光がむき出しになつてきた。

「さうです、」と彼は云つた、「私はあなたをこのまゝでは濟せないと思つてゐましたが、もうそんなことはどうでもいゝやうな氣がしてきました。馬鹿げきつたことです。」

私は俄にかつとなつて、顏を眞赤にした……と思ふだけでなほかつとなつて、大きな聲を立てた。

「歸り給へ。もう出ていつてくれたまへ。」

「えゝ歸ります。」

彼は飛び上るやうに立ち上つて、室から出て行つた。その力強い足音が階段に消え去ると、私は急に氣力がぬけはてたやうになつて、机の上にもたれかゝつた。そして暫く惘然としてるうちに、全く無用な自分自身を見出した、と同時に、或る廣々とした所へぬけ出した氣がした。

それは一寸名狀し難い氣持だつた。世界が俄に晴々としてきて、自分自身が遠くへ薄らいでいつて、何もかもどうでもよくなつた。松本がどうしようと、光子がどうしようと、俊子がどうしようと、私がどうしようと、生きようと死なうと、どうでもよくなつた。死ぬことだつて自由だ。そして私は死へ微笑みかけていつた。

一時間ばかりして俊子と顏を合した時、彼女は私を睥み据えた。

「あの女の手紙を御覽になりましたか。」

「あゝ見たよ。」と私は落付いた調子で答へた。「なるほど、御前が松本君をすゝめて僕の方へも見せに來さしたんだね。お影で僕はすつかり安心したよ。」

「安心ですつて！　まあ何て恥知らずな卑劣な……。私もうあなたの顏を見るのも厭です！」

そして彼女は物に懼えたやうに肩をぴくりとさして、向ふへ行つてしまつた。

俺が死んだら彼女はどう思ふだらう、と想像して私は微笑を洩した。俺にだつて死ねないとは限らない！　そして私はいろんな自殺の方法を考へてみた。首を縊る……毒を飲む……頸動脈を斷ち切る……頭か心臟かに拳銃を打ち込む……然しどれも面白くなかつた。もしその瞬間に死ぬのが厭になつてももう間に合はない。生きるも死ぬるも自由な方法が私には必要だつた。いろいろ考へてるうちに、ふといゝことを思ひ出した。手首の動脈を切つて徐々に貧血しゆく死に方は非常に快いものだと、何かで讀むか聞くかしたことがあつた。これだと私は思つた。生きたくなれば出血を止めればいゝし、やはり死にたければそのまゝにしておけばいゝ。そしてその方法を頭の中でこね廻してるうちに、私は湯舟の中でやつてみようときめた。死んだ場合に餘り醜くないやうに、身體をよく洗つておいて、褌をしめて、それから剃刀で手首の動脈を切つて……大して痛くもないだらう……それを湯の中につけておけば、出血が途中で止ることもなく、面白い幻覺をみ續けながら、苦痛もなく徐々に死ぬことが出來る。女中は何處かに使に出しておけばよいし、俊子は私の方を見向きもしないから大丈夫だ……。

私は雨のしとしと降る中を出かけていつて、もつと降れもつと降れといふ明るい氣持で、新らしい石鹸と剃刀と白布とを買つて來た。その白布を六七尺の長さに鋏で切つた。猿股でなく褌を用ひるのが私の氣に入つた。馬鹿に高價だと

思ひながら一番匂がいゝと云はれて買つて來た石鹸は、見馴れない黒い眞圓いものだつた。それも私の氣に入つた。よく切れるのをと云つて買つてきた剃刀は まだ本當に刄が立つてゐないらしかつた。私は仕方なしに革砥ですつかり研ぎ上げた。そしてその三品を本箱の抽出にしまつた。

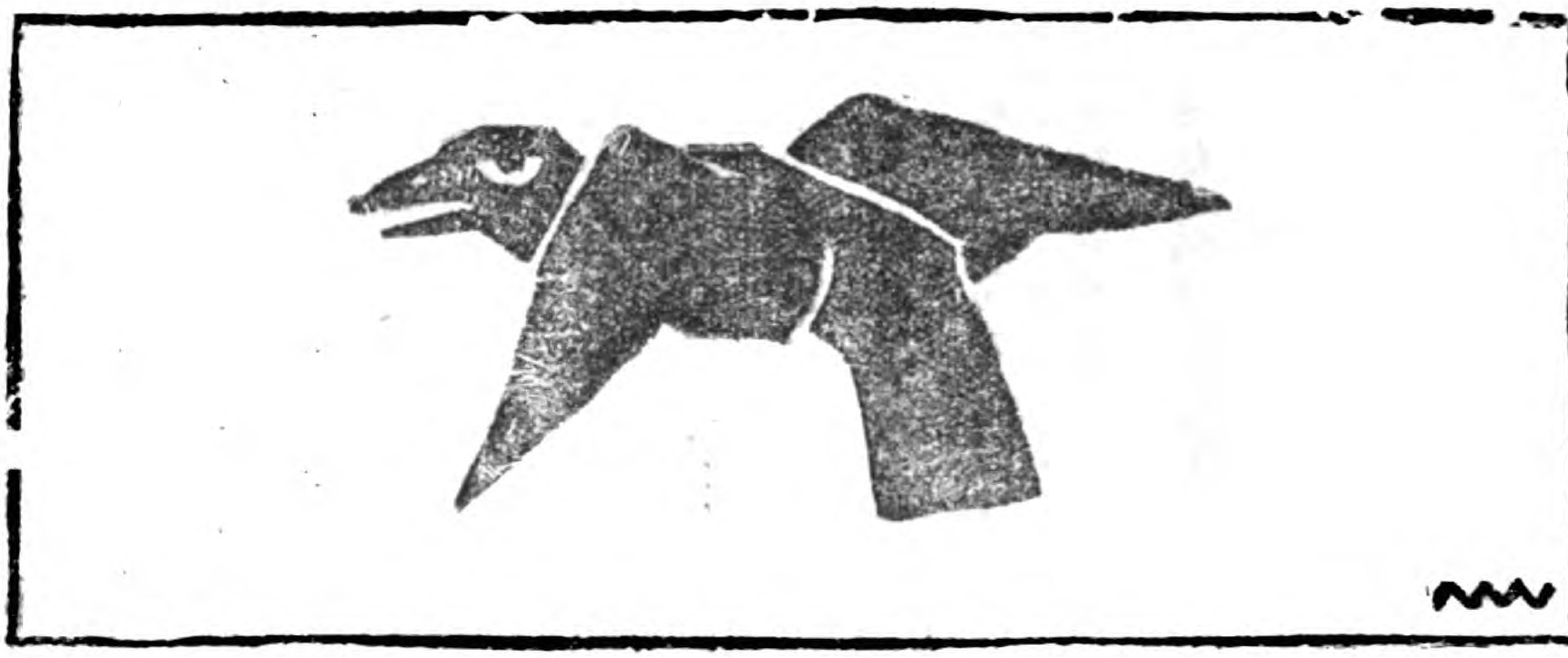
所が、一切の準備が出來上つてから、これで俺は死ねるのかしら、本當に死ぬのかしら……といふ疑ひが起つてきた。何しろ私はごく自由な晴々とした氣持になつてゐた。松本と光子よ、君達は輝かしく生きるがいゝ、河野さんよ、あなたは金の力で勝手な眞似をなさるがいゝ、俊子よ、お前は俺から解放されて自由な途を歩くがいゝ、子供等よ、お前達は力強く生長するがいゝ、其他私の知つてる人々よ 君達は健在であれ。……さう呼びかけたいやうな氣に私はなつてゐた。これで死ねるのかしら……と私は不安になり初めた。そして、いや死ぬものか！ といふ思ひと、いや死ぬのだ！ といふ思ひとが、同じ强さで起つてきた。

私は自ら茫然としてるうちに、ふと思ひついて、この氣持に落着をつけるために、事件の一切を書き誌してみようと決心した。そして殆んど寢食を忘れて書き續けてきた。すると、妙なことが起つてきた。

井ノ頭の翌朝、私は一種無批判な盲目的な心境に陷つたことがあるが、それと似寄つて而も氣分は全く異つた心境に、私は次第に浮び上つていつた。あの時は陷つたのであるが、こんどのは浮び上つたのである。無批判ではなくて一切の批判を絶した、盲目的ではなくて眼をぢつと見開いた、晝でもなく夜でもない薄ら明りの、落付いた靜かな空しい心境だつた。何のために？ といふことがないと共に、なぜ？ といふことも一切なかつた。そして心の奧から、さうださうだ！ といふ聲が響いてゐた。何がさうだかは分らないが……と云ふより寧ろ、何がさうだかは問題ではなくて、たゞ靜かにさうだつた。髮の毛一筋も埃一粒も搖がないで、たゞ靜かにさうだつた。

斯くてあれかし! ……ふとそんな文句が私の心に浮んだ。死も生もその境をなくして、たゞ斯くてあれかし!

私は死ぬかも知れない、或は死なないかも知れない。どちらだつて結局は同じことだ。私が生きようと死なうと、何處にも波紋一つ立たないだらう。たゞ寂しい時間だけが流れ去つてゆくだらう。兎に角私は、三つの品を實際に用ゐてみようと思ふ。どうなるかは、誰にだつて分るものか。たゞ靜かな晴々とした寂しい世界だ……。



だるま

武者小路實篤

登場人物

だるま

A

B

僧侶

（だるまの修業して居る小さい堂の前、

A、B、登場）

A。この堂に住んでゐる男を君は知つてゐるかい。

B。知らない。

A、さうか。この堂の内には珍らしい男が住んでゐるのだ。

B。どんな男だい。

A、八九年の間壁許り見てゐると云ふ男が住んでゐるのだ。

B。壁を八九年見てゐる？ 何の爲めだい。

A。何の爲めだかわかれば珍らしい男ぢやないことになるが、誰も何の爲めに壁とにらめつこしてゐるかを知つてゐるものはないのだ。皆の云ふ處だと白痴だらうと云ふことになつてゐる。

B。そんな大きな聲で云ふと內へ聞へやしないか。

A。大丈夫、白痴でその上、つんぼと來てゐるのだからね。

B。つんぼなのかい。

A。つんぼなのさ。

B。それで壁許り見てゐるのかい。

A。さうだ壁許り見てゐる。

B。どうして食つてゐるのだい。

A。近處の人間が、飯だけはかゝさずもつて來て入れてやつてゐるらしい。

B。それは感心だね。

A。それは時々は、飯を運ぶのを忘れる時もあるだらう。三日や四日運ぶのをわざと忘れて見た時があつたが、平氣で矢張り壁を見てゐたさうだよ。

B。圖々しい奴だね。

A。だが白痴としたら出來のいゝ白痴でわるいことは何にもしないのだ。そしてたゞ壁だけ見てゐるのだから、始末はいゝのだ。飢死にされると困るので、飯は食はしてゐるが、それもごく少し切り食はないのだから、別に困ることは

ないのだ。

B。だが飯をやらなかつたら、何處かへゆくだらう

A。處がそんなことが考へられる男ではないやうだ。飯を入れてやらなければ出て食ふなんて云ふ考へは起らないらしい。

B。珍らしい馬鹿だね。

A。その癖、顔だけは中々怖い顔してゐる。賢さうな顔してゐる。こんな話がある。何年前かに戰爭があつた時、敵の兵隊がこゝをあらしたことがあつた時、この內にゐるやつこさんだけは、逃げないで矢張りこゝで壁を見てゐたさうだ。皆が逃げろと云つたつてつんぼだらう、だから平氣でゐるので、皆も死ぬなら勝手に死ぬがいゝと思つて逃げたのださうだが、やつこさんはそんなことは一向平氣で、相變らず顔を壁に向けて坐つてゐたら、敵兵が入つて來て、首を切らうとしたさうだが、やつこさんは平氣でゐたさうだ。あんまり平氣なので兵隊の方が怖くなつて、之は餘程偉い人にちがいない。聖者にちがいないと思つてお辭儀して逃げたさうだ。誰だつて顔を見ると、白痴だとは思ないからね。

B。どんな顔してゐるのだい。

A。見たければ見せてやらう。(戶をあけやうとする)

B。默つて戶をあけてもいゝのかい。

A。いゝとも、聲かけたつて聞へやしないからね。時々人が來ると僕はこゝをあけて見せてやるが、自分の首が落ちかけたつて、平氣な男だから、戶位あけたつて、おどろきはしないよ。(戶をあけやうとする。)中々かたい戶だよ。(あけ

る。」どうだ中々偉さうな顔してゐるだらう。白痴とは思へないだらう。

B。思へないね。中々するどい顔してゐるね。一寸、見ると白痴といふより氣違ひに見へるね。

A。だが、氣違ひとしてはおとなしすぎるのだから、矢張り白痴なのだらう。

B。さうかね。見かけは中々堂々としてゐるね。白痴とはどう見ても見へないね。

A。人は見かけによらないと云ふが、本當だね。僕は始め、こいつはさつと利口な人間なのだが、心願のために無言の行をしてゐるのだと思つて、内々尊敬してゐたが、あんまり鈍いのでがつかりしてしまつたよ。この前、僕がこゝを通つた時、一人の男があいつの頭をなぐつて、いゝ音がするだらうと云つてゐたがね。僕はあいつが起き上るか、どうかするだらうと思つてゐたが、少しも表情が變らなかつた。つまり何にも感じなくなつてゐるのだね。

B。さうかね。しかし人間も、其處まで馬鹿になればいゝね。

A。本當だよ。僕もその點では、こいつに感心してゐるのだよ。何んだつて怖いものはないのだ。餓死にすることも、殺されることも、平氣なのだからね。なぐられたつて悪口されたつて、蚊がとまつた程にも思はない。そのかはり樂しみなんかも何にも感じないだらう。何のことはない金でつくつた彫刻のやうなものだね。もう生きながら死んでゐるやうなものだね。たゞ息がかよつてゐると云ふだけにすぎないね。人間もかうなつてはおしまいだよ。だがそのかはり、心配もないだらう。苦勞なんかもないだらう。この位い呑氣な人間はないだらう。

B。しかし本當にあれで馬鹿なのかね。僕にはさうは思へないね。

A。しかし利口な人間が、今時に、こんなことを八九年もつゞけることは出來まい。だつて壁、見てゐたつて何にゝなるだらう。何にもなるわけはないぢやないか。

B。それはさうだね。しかし頭をたゝかれても本當に顔色をかへないかね、たゞかへないふりをしてゐるだけなのじやないかね。

A。いや、たしかにかへないね。僕はよく見てゐた。

B。しかし遠くで見てゐたのだらう。それぢや、目玉の動きなんかよくわかるわけはない

A。それなら僕が一つ頭をたゝいて見るからよく見て居玉へ。

B。たゝいても大丈夫かい。この男にいきなり、怒鳴られたら腰をぬかしさうだよ。何しろこんな怖い顔は滅多に見たことはないからね。

A。大丈夫だよ。いゝかい。なぐるからよく見て居玉へ。

B。大丈夫かい。本當に。

A。大丈夫とも。よく見てゐたまい。

B。よく見れば見る程、珍らしい顔だね。どうもこいつが、怒り出したら、しめ殺されて喰はれさうだね。

A、いや。こいつは實に溫和しい奴なのだ。恐いのは顔だけだよ。それならなぐるよ。

B。よし。

（A、頭をなぐる）

A。どうだ。

B。不思議だね。どうも不思議だ。もう一度なぐつて見てくれないか。（そばによる）

A。よし。（又なぐる。）どうだ、矢張りかはらないだらう。

B。かはらない。不思議だね。生きてゐるのかね。

A。生きてゐるにはきまつてゐるよ。

B。どうも矢張り君の云ふ通り、この男は白痴だね。神經がないのだね。僕はこんな男を見たことはない。土産話に一つ僕にも打たしてもらはうかね。

A。あゝ、かまはないから遠慮なく打ちたまい

B。まるで君のもの丶やうだね。はつはつは。

A。はつはつは。

B。一つそれではなぐらしてもらはうかね。

A。遠慮なく。

B。それでは今度、君が見てゐてくれ玉へ。

A。よし。

B。なぐるからね。（なぐる）どうだ。

A。なんともない。

B。本當にこの頭はなぐるといゝ音がするね。もう一つなぐつて見てもいゝかね。

A。いゝとも。

B。お許しが出たからなぐるかな。だが氣の毒だね。

A。感じないのだからかまわないよ。

B。一つうんと力入れてなぐつても大丈夫かね。

A。君の力位いなら大丈夫だらう

B。不意に感じて、飛び上られてはびつくりするね。

A、大丈夫だよ。この前なぐつた奴は、君より力が强さうな男だつたよ。

B。それなら、これが最後だから、話のたねに力一杯なぐつてやらう。（力をこめてなぐる。）

だるま。（同時に）喝つ。

（二人腰をぬかすようにおどろき）

A。許して下さい。

B。許して下さい。

（だるま、默つて立つて便所にゆく）

A。なんだ小便に行つたのだ。びつくりしたな。あの聲にはおどろいたな。何て云ふ聲だらう。

B。本當にびつくりした。逃げ出さうか。

A。あんまりびつくりしたので腰が立たなくなつてしまつた

B。俺の腰も云ふことを聞かなくなつた。だからよせばよかつたのだ。君があんなことを云ふので、ひどい目にあつた。どうなるだらう。

A。ともかく逃げられるだけ逃げやう。（いざりながら逃げやうとする）

（だるま、歸つて來て、又以前の處に坐る）

A。こいつは逃げないでも大丈夫だよ。やつこさんびつくりして聲に出したものゝ其處が馬鹿本性でなぐられたことは氣がつかず、俺達のゐることは知らないのだ。不意に小便にゆきたくなつたゞけなのだ。君があんまりひどくたゝいたので、ひよつと氣がついたら、小便にゆきたくなつたのだらう。何んでもなかつたのだ。

B。隨分おどろかされたな。あの聲には。一時はどうなるかと思つた。

A。もう一度なぐる元氣があるかね。

B。もうとてもない。腰はたつかね。

A。やつとたちさうだ。隨分おどろいたれ。壽命が三年もちゞこまつたやうだ。

B。どうもいくぢのない話だね。

A。いゝ話の種が出來てうれしいだらう。

B。しかし腰をぬかした話は內證にしておかう。

A。あんまり名譽なことでもないからね。

B。君はもつと度胸があるのかと思つたよ。

A。しかし僕にはもう一度位いなぐれる元氣があるね。

B。本當かい。

A。本當とも。だが君がおどろくと可哀さうだからやめておかう。

B。なに僕はあの戶口で見てゐるから、なぐれるなら一つなぐつて見せてもらはう。だがなぐる勇氣は君にはないだらう。さつきのやうぢや、とてもそんな勇氣が君にあるとも思へない。

A。なくつてどうする。一つ俺の勇氣を見せてやらう。(こは〳〵だるまに近づき、手をふり上げる。)
(だるまふり向く。)
A。(跪づき)、お許し下さい。お許し下さい。
だるま。今日は何日かな。
(A、Bびつくりして口をもがもがする)
だるま。お前さん方は、つんぼなのか。
A。いえ、いえ。
だるま。今日は何日かな。
A。へい、へい、今日は十一月の十二日で御座います。
だるま。さうか。それでは今日でまる九年。こゝにゐたわけだな。
A。へい、へい
だるま。(立ち上り)、鈍骨の俺も九年でやつと覺りの道を得られたわけだ。ありがたし、ありがたし。
(二人あつけに取られて見てゐる)
A。あなたはつんぼではなかつたのですか。
だるま。つんぼではない。
A。さつきの失禮をどうぞお許し下さい。
だるま。お前さんは私に何にもわるいことはしなかつたぢやないか。

A。それでもあなたの頭をお打ちして。

だるま。あゝお前さんだつたか。それはどうもありがたう。お前さんに頭をぶたれたので、私は、悟りに入れたのだ。

佛さんが、お前さんにのりうつつて私をぶつて下さつたのだ。

（若き立派な僧侶、一人登場。だるまに最敬禮をする）

僧侶。佛さまよりのおつげでお迎へに參りました。

だるま。さうか、それなら一緒に行かう。（二人に氣輕にお辭儀し、）さつきはどうもありがたう。

（僧侶とだるま退場、二人あつけにとられる。）幕（一二、一一、一二）



キリストと祖父と母

野上彌生子

或る朝。委しく云へば西洋の暦で紀元二十七八年頃に相當する秋のさわやかな午前、ガリラヤのナザレに住んでゐる大工のアキムは、村からカペナウムの町に出てゐる同じ大工仲間のヨセフの家を訪ねるために郊外の湖添ひの街道を急いでゐた。ヨセフの連合ひのマリアは彼の娘であつた。孫は男の子が五人、女の子が二人あつて、長男のイエスはもう三十を越してゐた。この勘定で行くと、アキムはどんなよぼ〳〵のお爺さんになつてゐても不自然でない筈であるが、事實は中々そんなどころではなかつた。彼は八十近くなつてまだ矍鑠としてゐた。丈と幅の釣合つた岩丈な身體を質素な旅支度で堅めて、頭陀袋を肩に背負ひ、自然木の大きな杖をついて、しつかりした足どりで歩いてゐた。たゞ若い頃なら村を夜明け方に立てば、その日樂に着いてゐたカペナウムが、今では二日がかりの道になつただけは仕方がなかつた。尤も昨夜途中の小村で泊まつたのは、其處で日が暮れたためではない。その村の木挽のセム爺と大事な商賣上の話があつたからだとアキムは信じてゐた。

『ふん、彼奴等までがほかの話はしやしない。』

アキムはその愚直な木挽夫婦が自分の顔を見ると用談はそつちのけにして、二人で鼓爭でまくし立てた一つの話題――近頃界隈で噂の種を蒔いてゐる自分の孫息子に關するお饒舌を歩きながら忌々しく思ひ出してゐた。夫婦は一部の人々のやうにイエスを神の子ともエレミヤの生れ代りとも信じなかつた代り、他の一部の人々のやうに魔法使ひとも詐欺師とも思ひはしなかつた。そんなことを思ふには彼等は餘りにイエスを知りすぎてゐた。それはマリアの懷に抱かれてゐたイエス、ヨセフの仕事場でおが屑だらけになつてよちよち歩き廻つてゐたイエス、またやつと鉋の使ひ道と鋸の持ち方を覺えると、一つぱし職人氣取りで得意さうに、お祖父さんと父親の傍で働いてゐたあの少年のイエスではないか。殊に一人前になつてからは、しよつちう用達にも來れば、小屋の爐を圍んで一緒にものも食べ、冗談口も利き合つた間柄であつた。つい小一年前までそれでたつて來たのである。その出來のよい若い職人が、どう云ふ譯で急に豫言者見たいに說敎をして歩いたり、醫者の眞似をしだしたりしたのか、夫婦にはそれが分らなかつた。强ひて想像すれば氣がふれたとでも思ふ外はなかつたので、二人のお饒舌には病氣見舞のやうな、また誰か大事な息子を死なせた場合に述べ立てる悔みのやうな調子があつた。

「なに、あの極道のことなんさ、もう何をしようと、どうならうと、構やしません。神樣のお蔭で、ほかに男の子もない譯ぢやなしするから、彼奴等の內で誰か一人位は地道に親爺の家業をついでは行きませうさ。婆さんが愚痴をこぼす度に私はさう云つてやるのだ。イエスの野郞は、王樣のお達しでベツレエム界隈の赤ん坊と云ふ赤坊が一人殘らず殺された時に、娘と婿とでエジプトへ連れて逃げてやつと助かつた因緣づきの子供だから、あの時に殺されたとして見ろ、今日まで無事にしてゐただけもめつけものぢやないかつてね。」

アキムはその時は斯う諦らめきつた風を木挽夫婦には見せてやつたのであるが、本統を云ふと、それは苦しい見榮で

あつた。アキムには決してイエスを諦めることは出來なかつた。彼に比べれば、他の四人の孫息子たち、ヤコブやヨセやシモンやユダは何物でもなかつた。既に初孫の悦びの中から生じてゐたこの偏愛は、イエスの頼もしい成人ぶりを見ると共に希望と信頼に代つてゐた。どちらかと云へば婿のヨセフには彼は飽き足りなかつた。人は悪くはないが、少し愚圖で殊に腕の鈍いと云ふ點が何よりも職を重んずる老人の氣に入らなかつた。イエスを彼が特別厳しく仕込んだのも一つはその不滿を孫に依つて充たさうとしたのであらう。この意味では、お祖父さんと孫は師匠と弟子であつた。その丹精でイエスは立派な大工になり、手堅い冴えた仕事をした。それにおつとりした温順な性質で、職人に似合はず讀み書きを好み、ギリシア語とアルマイク語まで出來ると云ふ風であつたから、アキムは滿足しきつてゐた。この上は金を溜めさせることだ。而して誰か氣立てのよい娘を貰つてやつて……

併しそんな事はもう何もかも夢になつてしまつたのだと分つた時の彼の驚きと失望は想像されるであらう。イエスはいつとなしに仕事を怠け出す、家に腰が落ちつかなくなる、終に何處ともなく飛び出してもう一年近く親兄弟の傍にも寄りつかないゐでゐるうちに、あの飛んでもない評判が傳はつて來だしたのである。木挽夫婦が饒舌つて聞かしたとすつかり同じその話が。——最初アキムはイエスが漁師たちや税吏等を集めて說教をしまはてゐると聞いた時には聞いた口が塞がらなかつた。併し鬼に憑かれたものが彼の一言で正氣につくと云ふ噂に對しては、心から怒つた。

「馬鹿奴、そんな能があるなら、手前に取つ附いてゐる鬼から先に追ひ出すがいい。」

最も我慢のならないのはそれ以來逢ふほどの人から變な意味のある顔で見られることであつた。人々は明らかにアキムの自慢の孫のつまづきを面白がつてゐた。身内の間でさへヤコブやヨセたちは、平生一にもイエス二にもイエスで辿してゐたお祖父さんへの反感から、結句いい氣味だ位にしか思はない風であつた。現にアキムの方で急ぎの仕事があつ

てわざ〳〵町まで手助けを頼みに行つた時も彼等は拒んだ。

『兄貴を探して來てさせるといいや。おい等のした仕事ぢや、どう老爺さんの氣には入らねえのだから。』

アキムは彼等の皮肉を面憎く思へば思ふほど、イエスに對する愛著を新にした。而して彼の途方もない不了見が腹立しかつた。

『人の氣も知らねえで、本統に何處をほつつき歩いてるんだ。行つて取つちめてやらうにも三日と同じ場所にはゐねえと云ふのだから始末が惡い。』

この焦慮は近頃引き受けてゐる一つの普請と結びつけることで一層彼を苛ら立たせてゐた。それはナザレの美しい丘陵の端に建つ別莊風な凝つた家なので、イエスに一つばし腕を揮はせて見たかつた。他の大工の下手な仕事に舌打ちする度に、アキムは日に二十遍もその孫の弟子の腹立たしく可愛い極道者を思ひ出した。今、忙しい仕事の中から急にカナペウムをさして出掛けて來たのも、ほかの用事ではなかつた。刈穂祝をその町でするために、イエスが其處に來る筈だと、もう來てゐるとか云ふ噂を耳にしたからであつた。

『よし、今度こそ取つ捕まへてやるぞ。』

老人の激しい氣魄は、盛り上つた眞つ白い眉や、一双のまだしつかりした褐色の目や、その間から聳え立つて長く顔の中央に伸び、唇に屆きさうになつて、やつと鈎形に折れ込んだ大きな鼻や、鼻に劣らず大きな口や、その下から鼻の先を目がけて突き出た肉瘤のやうな岩丈な顎や、それに續いた頸の丈夫な厚い皺などと共に、彼の顔を法官か祭司のやうに嚴かつくしてゐた。ただ相違は白髪頭の上に載つてゐるものが、玉飾のついた禮帽でなく、安つぽい大工の頭巾だと云ふだけに見えた。

町に近づくに從つて街道は兵士、商人、旅人、大勢の駱駝を連れた隊商、または近在の百姓の群などで混雑した。この百姓たちは、木の枝の長く切つたのを青い葉のまゝ束にして背負つたり、車に積んだりして運んでゐた。これは目の前に迫つた刈穗祝の假屋の材料として町へ賣りに行くのである。この人種特有の濃い髮毛と際立つて紅い唇をした女たちも交つてゐた。或る者は車の後を押し、或者は果物の籠を手にしてゐた。どの女の籠にも無花果と葡萄が一杯入つてゐた。これも町へ賣りに行くのである。一人の兵士が歩きながら一人の女に一房の葡萄を求めた。女が籠の中から粒のよささうなのを選り出して渡すと、兵士は果物よりは先に女の手の方へ口を持つて行つた。若々しい驚きの叫びがあがる。併しそれも周圍に續いた陽氣な承認の哄笑に葬られて、結句人々の愉快な心持を增長させたに過ぎなかつた。皆んながもう半分お祭氣分になつてゐるのである。それに上天氣だ。申分のない秋だ。湖には漁船が浮かんでゐるし、空にはお天道樣がきら〳〵してゐる。――その中をただ一人アキムは澁いしかめつ面をして默々として歩いた。

ヨセフの家は、何處の町の入口にもあるやうな汚いごた〳〵した裏町の一つにあつた。仕事場になつた入口の土間には二三本材木が轉がつてをり、正面の道具棚には商賣用の諸道具が雜然と並んでゐるだけで、しんとして人つ氣がなかつた。アキムもまた別に聲をかけるでもなく、默つて土間に突つ立つた儘、ぎよろつとした目を道具棚の上へ投げてひどひく忌々しさうに眉と鼻をしかめてゐた、足を踏み入れると同時に目についた商賣道具の不完全な手入れが氣に食はないのである。それからまた豚の屎と腐敗した食物の匂とそれに異邦人の強い臭氣――この邊にはナザレあたりでは見られない諸國の食ひ詰め者がごろ〳〵してゐるので――の交り合つた曖なたまらない、この裏町特有の空氣が彼を嘔氣つかしたのであつた。其處へ近所の井戸まで水汲に行つてゐたマリアが、右の肩に水の一杯入つた水甕を載せて歸つて來た

『おや、お父さんぢやありませんか。』

一と目土間の姿を見つけると、マリアは驚きと悦びの聲を一緒に立てながら、大急ぎで父親の傍へ近づいて來た。

『よく出て來ましたわねえ。昨夜はセム爺さんのところで。さうでしたか。家は皆んなお達者でせうね。おつ母さんが右の藥指を腫らしてたとか云つたのはもう直りましたか。それはよい鹽梅で。え。うちの人ですか。お蔭でこの節は絶えず仕事がござんしてね、今日も息子たちと早くから出掛けました。娘たちは御近所のかみさんたちに誘はれて、後の森まで祝ひの木を取りに行きましたが、これはもうおつつけ歸つて參りませう。――さあ、まあ上つて下さいよ。お父さん、私は一寸とこの水の始末をつけて來ますから。』

マリアが父親を招じた一と間は、土間の右手の壁に出入り口のついた、家での一番善い部屋であつたけれども、狹くて臭いのは隣の土間と變りはなかつた。ただ往來に向いた一つの窓が割合に大きくて日當りがよいのと掃除が行き屆いてゐるのが、すべての缺點を償つてその部屋に小ざつぱりした感じを與へてゐた。併しアキムの不機嫌な心はそんな好意ある見方はしなかつた。彼はじろりと、丁度先刻道具棚に投げたと同じ一瞥を部屋の家具類に投げただけで、皿一枚ふえてゐない、彼等の相變らずの貧乏を認めたのみであつた。――彼奴等町に出さへすればその日からでも金持になれる氣でゐたのがどうだ。イエスのことにしろさうなのだ。家があの儘村に落ちついてゐれば、あの野郎だつてあんな途徹もない眞似をおつ始める筈はないのだ。いや、しようたつて傍についてるおれがさせるんぢやない。――

一年半前、ヨセフの一家が彼自身の强い反對を犯してまで無理にこの町に移つた時のアキムの怒りは、金儲けが移轉の唯一の目的であつたに拘はらず未だに斯んな暮らしをしてゐる彼等を見ることや、殊にイエスの問題をそれに結びつけて考へることで、今何倍にもなつて歸つて來た。同時に先刻久しぶりの娘の聲を耳にしてた時、流石に少し和らいで

見えた彼の顔色も、再びもとの澁い表情に戻つて、水の後始末をすましたマリアが、いそ〳〵した笑顔で臺所から引つ返して來ても、今度は頬の筋一つゆるめなかつた。知らぬ旅人が一寸一と休みさせて貰つてゐると云ふ恰好で、杖も袋も身に引きつけたまゝ頭巾さへ取らず、戸口の腰掛によそ〳〵しく凭りかかつてゐた。マリアは移轉のごた〳〵以來父親の不機嫌には馴れ切つてゐたから、どんな顔をされても驚きはしなかつた。却つて氣さくに振舞つた。

「まあそんなところに掛けて、お父さん。あなたの椅子は村にゐた時分からあの大きいのに極つてゐたのぢやありませんか。さあ、向へ行つて下さいな。」

マリアはまだ焚き始めない爐の前にあつた。部屋での一番大形な椅子に、乾草をふく〳〵詰めた小布團を二枚まで載せて、その方へ上手に父親を引つ張つて行つた。それから疲れてはゐないか、咽喉は渇かぬか、乳もあつた筈だし、丁新度しい蜂蜜の貰ひ物もある、若しお腹が空いてゐるやうなら、お晝御飯にしても、さう早過ぎはしない時刻だ、と云ふやうなことを、持ち前の人懐つこい調子で話しかけながら、今一度臺所に取つて返したり、また窓と反對の壁につけた粗末な戸棚の中をかき廻したりしてゐる間に、アキムの前の四角なテーブルの上には、以上の食べ物や飲み物が順々に並びかけた。マリアの斯んな優しい心遣ひは、一方から云ふと彼女の無意識な、またそれだけ自然な手管でもあつた。どれ程怒つて來た時のアキムでも、さうやつて其椅子に二三十分もかけて、目の前で甲斐々々しく動き廻るマリアの貧苦にやつれながらもまださう醜くならない小柄な母親らしい姿を見、優しいその聲を聞くうちには、いつとなしに以前の締りのない親子になつて仕舞ふのであつたが、今日だけはさうは行かなかつた。アキムは大きな手を振つて、

「マリア、構はないでくれ。おれは今日は飲み食ひに來たのぢやないのだ。」

と高びしやに拒んでおいて、その下から鋭く詰問するやうに續けた。

『彼奴がこの町に來てるとか、來るとか云ふのは本統の話か。』

マリアの頬は見る〳〵血の氣がなくなり、父親似の大きな鳶色の目には當惑と悲しみの色が浮かんだ、しかし彼女は落ち着を失ひはしなかつた。

『そんな評判があるにはあつても、どうだか分かりはしないのですよ、お父さん。あの子のことは何んだつてさうなんですもの。あゝだ、斯うだつて噂する人だつて、よく聞いて見れば本統のことを見て來た譯ぢやないのですからねえ。私は耳に蓋をしてゐます。ですからお父さんも餘計な氣苦勞はしない方がよござんすよ。』

『ぢや何とか云ふ評判の惡い商賣女と、イエスが今一緒になつてゐると云ふのも、お前は人の噂だけだと思つてゐるのか。』

『幾らイエスが變にぐれてるといつて、お父さん。さう云ふふしだらな眞似が、分けてもそんな女を相手に、どうして出來ますかつて。』

『マリア、彼奴も何んとか云つてももう三十だぞ。――併しそんな詮議立ては今日はどうでもいいのだ。この土地にイエスがまだ入り込んでゐないことだけは確かだね。』

『若し歸つたのが本統なら、久しぶりの親兄弟に顏位見せに來さうなものぢやありませんか、お父さん。』

マリアの目には初めて大きな涙が現れた。

『よし、ぢや明日にも歸つて來るとすればお前たちはどうする氣なのだ。』

『どうするつて。』

『分つてるぢやないか。彼奴が何處の馬の骨とも分らない連中のお先立になつて、おまけに御丁寧に女郎まで引つ張つ

て來て、この町で馬鹿恥を曝らして歩くのを、おめ〳〵好き勝手にさせて置く積りかと云ふのだ。』

『それはこの町に歸つたを幸ひにあの子が家に落ちついてくれさへすれば、それ程結構な話はないでせうか、人間の一人の了簡ばかりは幾ら親でも仕方のないもので――』

『駄目だ、駄目だ。』ヨセフはおつかぶせて叫んだ。それまではまだ押へる力を失ひ切らなかつた彼の怒りが、マリアのその一言で露骨に爆發したのであつた。『お前でもヨセフでもそんな氣だから子供に馬鹿にされるのだ。人間一人の了簡が聞いて呆れる。自分の子供ぢやねえか。親がどうしろ、斯うしろと云ふに何んの遠慮が要るもんか。聞かなきや打つ叩いてでも聞かせる氣でなくて、男の子を一人前にしたてて行けるかい。一體お前たちが甘過ぎるのだ。イエスがぐれ出したのだつて、おれに云はせりや半分はお前たちのせゐだ。第一、あのエリサベツの何んとか云つた氣狂ひ息子で王様に楯をついて絞り首になつた奴――ヨハネか、さうだ、あの野郎と附き合ひをさせてゐたのからして、おれには氣に食はなかつた。お前がエリサベツと氣が合つてるからと云つて、何もイエスまであの女の息子と友達にすることはない。それも同じ大工仲間ででもあれば別だが、彼奴は何一つ出來たこともない能なしの、ぶら助の、半氣狂ひで通つた若造ぢやねえか。その内にとうとう彼奴が本物になつて、荒野に飛び出して行つて得體も知れぬことを饒舌り散らす。それをまた閑人の彌次馬どもが取り捲いてわい〳〵云ふといふやうな騷ぎがおつ始まつてまでも、お前たちはまだイエスを引き放さうとはしなかつたのだ。』

『お父さんにさう云はれゝば一言もないのですけれども、あの時のエリサベツの心配ははたで見てゐられなかつたのですからね。何しろあの人にはヨハネは天にも地にもかけ代へのない息子ですし、連れに行かうにも女一人でどうにもならないので、日頃仲のよかつたイエスをまあ様子見かた〴〵やつた譯なのですが――』

『ふん、そこでミイラ取りが見事にミイラになつたのだ。まあ一緒に絞り首にならなかつたのがせめてもの幸ひだ位でお前たちには諦らめがついてるのかも知れないが、おれは決して諦らめちやゐないよ。マリア、おれはミイラに今一度人間の魂を吹き込んでやる。さうだ、おれは何處までも人間が好きだ。それも自分で働いて自分で食つて行く地道なまつ直ぐな平凡な人間が好きだ。神樣だつておれはさう云ふ人間が何よりお氣に召すのだと思つてゐる。その證據には、この世の中にはさう云ふ人間が一番數が多いんだからな。それに當節の若者たちは、二言目にはやれ神樣がどうだの、モーゼが斯うだの、エレミアがああだのと、利いた風なことばかり拔かしあがつて、さて手前は何んだと云ふと、自分一人の口すぎさへ碌に出來ねえ體のいい乞食ぢやねえか。全く惡い流行だ。イエスだけには死んでもあんな眞似なぞはさせ度くないと考へてるうちに、いつの間にかその御本尊が連中の隊長になつて押し廻つてるんだから情けない。マリア、おれはそれを思ふと劫が煮えるんだ。今から斷つて置くぞ。若し彼奴がこの祭で町に歸つて來たらお前たちにまだるつこい事をさせて置きやしない。おれが直ぐにも引つ捕まへてその儘村へ連れて行つてしまふのだからその積りでゐろ。』

アキムは此處まで非常に激しい權幕で續けたにも拘はらず、最後には言葉や調子ほど內心では怒つてはゐなかつた。寧ろ今までの腹立ちは、久しぶりのイエスを引つ張つて二人で故郷の村をさして歸る時の樂しい豫想で打ち消されつつあつた。さうなりさへすれば事情はすべて一變するであらう。イエスは心を入れ替へてもとの忠實な大工になる。やがて結婚する。もとよりシリアの性惡女なぞではない。ナザレ村生え拔きの堅氣な生娘だ。また家を見つけるなら面倒臭くない範圍で近く、不便でない程度に遠いと云ふところが、おれにもお若夫婦にもお誂向だ。來年の今時分になつて、その家の無果花がもう一度實をつける頃には、窓からも赤ん坊の泣き聲が洩れようと云ふものだ。そこで仕事に一層精が

出る。金が溜まる。家一軒の土藏が固まつて行く。これが人間のまともな暮らし方だ。神様からちやんとお許しの出てゐる、誰がやつても間違ひのないただ一つの道だ。――

　父親の前に默つて愼ましやかにかけてゐたマリアは、アキムのいつとなしに和らいで來た顏色を見ただけで、彼が樂しんでゐる妄想を推量するにむづかしくはなかつた。併し彼女はその問題の前途を父親のやうに樂觀することは出來なかつた。イエスの素直な性質の中に隱れてゐる、まるで反對な激しい熱情をマリアは母親だけの持つ祕密な感覺でよく知つてゐた。アキムに仕込まれてゐた間に示したイエスの驚くべき勉强ぶりだつて、結句同じ氣象の現はれに外ならなかつたのである。同時にそれ程苦心して身につけた職を未練なく擲たせ、家を捨てさせ、親兄弟に背かせた力は何であるか。どんな不思議な信念が彼に突然說敎をさせたり、病人を診察させたりするのか。ヨハネの氣狂ひにかぶれたのか。木挽夫婦やアキムが分らなかつたと同樣に、マリアにも分かりはしなかつたのであるが、その中で彼女は堅く信じたことがあつた。それは現在やつてゐることがどれ位馬鹿けたことであるにせよ、イエスがそれまで身を打ち込めてかかつた以上、誰がなんと云はうと決して止めはしないと云ふことであつた。その意味から若しイエスが刈祝穗に本統に歸つて來るとすれば、アキムとの衝突はマリアの一番怖れることとであつた。彼に關する善惡まち〳〵な噂などよりも、今はその方が幾倍にも氣がかりであつた。久しぶりの息子に逢へるかも知れないと思ふ悅びさへ、この不安の前には容易に消え去つた　マリアの顏は父親の段々晴れやかになつた。顏つきとは反對に、淋しく沈んで行つた。

　丁度その時であつた。何處からともなくわ――つと鬨の聲のやうなどよめきが聞こえたと思ふうちに、あたりが俄かに物騷がしくなつて、往來を人が駈け出し、隣り近所からも口々に何か叫びながら飛び出して行つた。

『何んだ。』

『何んでせう。』

驚いた親子は云ひ合せたやうに椅子を離れて窓際へ行つた。見ると狹い裏町の道を雜多の人々の群が恐物でもしたやうに悉く上の方へ向つて駈けてゐた。

『アセル、アセル。』マリアはその中に末の息子のユダと友達の少年が走つて行くのを見て窓から乘り出して呼び留めた。『何處へ行くの。何がはじまつたのです。』

振り返つた少年はその儘後戻りしさうな姿勢を示したが、彼は戻らなかつた。返事もしなかつた。ちらと意味ありげな一瞥を投げ返しただけで、逃げ出すやうに却つて先よりも早く駈け去つたのを見た時、或る豫感がマリアを打つた。すると、往來の人と云ふ人が皆んなその子供と同じ視線を彼女の方へ送りながら駈けてゐる氣がした。

『何だか詰らないことですよ、お父さん。この邊の人達と來たらそれはおかしい程物見高いのですから。――まあ、お乳でも一つ如何です。』

マリアはわざと斯んな言葉で胸の騷ぎを紛らさうとしながら、父親を今一度椅子につかせるために、自分から先に立つて窓を離れた。併し席に戻つた親子がコップの牛乳を一と口飲み、パンの一片に蜜を塗る隙がやつとあるかない程であつた。――姉妹の娘が表から叫び聲をあげて駈け込んで來たのは。

『お母さん、大兄さんですよ。大兄さんが歸つて來たんですつて。大勢お弟子さんたちが連れてゐますつて。町ぢうそれは大變な騷ぎよ。』

『遊園地の廣場で今に演説がはじまるのですつて。皆んなそれで駈け出してゐるのですわ。私たちも誘はれたけれども、お母さんに知らせてからと思つて――』

十五と十三の小さい娘は、取つて來た青葉の枝を入口に投げ出した儘、目を見開き 息を切らして母親に注進した。彼等はお祖父さんにする挨拶さへ忘れてしまつてゐた。

『お母さん、大兄さんは今に新しい王國を拵へて、その王樣になるのですつて。本統。』

『お前たちはそんな馬鹿なことを――!』

『だつてお弟子さんたちが皆んなさう云つてゐますつて。ですから私とアクサが駈けて歸つてたら、やい、王樣の妹のお通りだ、なんて皆んながはやし立てて賑でしたわ。ねえ、アクサ。』

妹のアクサは微笑とうなづきで姉のタマルを保證した。併し彼女は姉ほどその冷かしを氣にしないで、寧ろ得意げに面白がつてゐるやうに見えた。

『王樣の妹はよかつた。のうアクサ、お前たちも兄さんのおかげで飛んだ偉いものになつた譯だ。どれ、おれも一つ王樣のお祖父樣の御威勢と云ふところを皆んなに拜まして來るか。』

嚴つい表情でぢつと孫娘たちの報告に耳傾けてゐたアキムが、斯う云ひ樣突然立ち止つて、椅子にもたせ掛けてあつた杖を摑んだのを見ると、マリアは我ともなく同じやうに飛び上つてその杖に縋つた。

『待つて下さい、お父さん。イエスに話があるのなら、家の中でも出來ることぢやありませんか。彼處へ行くことだけはどうぞ思ひ留まつて下さい』

『馬鹿奴、彼奴が今に飯食ひにでも歸つて來る氣でゐるのか。――離せ。』

『呼びにやりますよ。直ぐ呼んで來させます。――タルマやアクサや、二人で駈けて行つておいで、兄さんにね、お祖父さんが待つてゐますから今直ぐに歸つて下さいつて、お母さんが一生のお願ひだつて、さうお云ひ。――一人で寄りつ

けないつて。そんなことがあるものか。何んなら普請場に行つて、お父さんにさう云つて兄さんたちから行つてお貰ひ。分つたね。さあお出で。』

二人の娘は二羽の傳書鳩のやうに今駈けて來たばかりの表へもう一度飛び出した。併しこれとても十五分とはアキムを引き留めることは出來なかつた。彼は待ち切れなかつた。どうしても行くと云ひ出した。再び立ち上つて杖を摑んだ。マリアもこの上は仕方がなかつたから、行くなら一緒に行かうと決心した。――人中で何事が起きたとしても、自分がその場にゐないよりは穏やかにすませると信じたので。

アキムとマリアが二十町足らずの距離にある湖水べりの遊園地についた時には、太陽は丁度天の中心に在つて、其處から下の廣場に集まつた驚くべき多數の民衆を見下ろしてゐた。イエスは多分その太陽の直下に立つて彼に聞かうとするものに話してゐたのであらうが、マキムとマリアには何を話してゐるのかは勿論、何處に彼がゐるのか、それさへ分からなかつた。マリアはせめて先に出して娘たちに出逢ひ、イエスの返事を聞き度いと思つたけれども、到底探し出せさうもなかつた。二人が氣遣つたやうにイエスに旨く逢へたかどうかも疑はしかつた。その混雜は丁度エジプト人の曲馬團がこの廣場で野天興行をする場合と似てゐた。後れて來て圈の外輪に立つことになつた人達が何處か中の方へもぐり込める隙を見出さうとして彼方此方と動き廻る。向ふからの群とこちらからの群が衝突する。怒鳴る。惡體を吐き合ふ。――斯うである。而してやけになつた見物人が、背伸びをしながらよく見えない女騎手や道化役者に向つて無遠慮な批評を浴びせたやうに、彼等は中央の見えないイエスに對して口から出放題なことを叫びかけた。

『口上は澤山だぞ――手品から先にしろ。』

『今日は何をやるんだ。躍（をどり）を踊らして見ろ。』

『皆んなに見えるやうに木の上でやれ。』

『大工の木登り始まり――左樣――。』

どつと笑ひくづれたる音。しつ〳〵と制する聲。面白がつて吹き立てる口笛。その中で突然火のついたやうに泣き出す赤ん坊の泣き聲。――これ等は同じやうに內側へ入り得ないでマリアと共に黑い渦の中に押し揉まれてゐたアキムを極度に興奮させた。取り分け彼等の露骨な冷やかしさは、自分自身が侮辱されたより尚強く老人の耳にこたえた。

『藝人や道化ぢやあるまいし、歴つきとした職人が何の樣だ。――何處の馬の骨とも知れねえ奴等に馬鹿にされながら何をまだ饒舌くつてゐるのだ。』

引きずり出してもやり度い。――この腹立ちで眞つ赤になつたアキムは、急に獸のやうに躍り上つたかと見る間に、厚い人垣を一氣に押崩しさうとする勢で群集の後から突つかかつて行つた。驚いたマリアが引き留める隙もなかつた。併し群集は突かれた二倍の力で突き戻したので、親子は押し重なつてのけぞり、轉びさうになつて、やつと蹈みこたえた。散々に罵られた。アキムはこれに一層かあ――つとして、今度は手に持つた杖を振りあげて相手構はず打ちかかりさうな權幕を示した。

『喧嘩だ、喧嘩だ。』

『爺いをなぐつちまへ。』

『何んだ。あの女は一件のお袋ぢやねえか。』

斯んなことを怒鳴るものもあつた。その素破抜きは人々を悦ばした。マリアは顏の燃え立つのを感じた。で、尚も彼等に抵抗しようとする父親を宥めながら、自分たちが何であるかを知つて新たにからかひ面になつてたかつて來る群集

の間を骨折つて潜り拔けようとした。

『御免下さい。――少し通して下さい。――出るのですから。』

二人が人波から稍々自由になり得たのは、廣場の一方の端に高まつてゐる丘陵の中腹に辿りついた時であつた。其處と下の平地との位置は、大きな圓形劇場の高い見物席から舞臺を望んだと同じ關係にあつたので、本來ならば今足下に起つてゐることを見るのには何よりよい場所な筈であるが、ただ大分遠見になるので其處まで登つてゐるもの好きは澤山はなかつた。同時にその靜かな斜面から見下ろした廣場の光景は、二人が先刻群集の間に押し揉まれながら見たものとは全然違つたものになつて眼前に現はれた。其處には見えぬイエスを茶化し、聞こえぬ説教を邪魔する彌次馬の聲はもう達しなかつた。群集の押し合ひも、喧嘩も、大きな蟻塚の周圍に起こる少數の蟻の運動以上には見えなかつた。たゞ一樣に黑い尨大な塊まりとなつて、その密集團が、黃色い熱氣を加へた午後の太陽の下に、晴れ〴〵と打ち開けた湖水を背景として、何物にも、またいつまでも崩れまいとする城塞のやうに、强く、押し固まつて立つてゐる光景は異常であつた。

マリアはそれを見下ろした時、而してあの集團のまん中には姿こそ認められないが正しく自分のイエスが包圍されてゐるのだと思つた時、息子の晴れがましい名譽の種類や場合を考へて見る餘裕はなかつた。彼女はその盛んな光景をただ一と目眺めただけで目には感激の涙がにじみ、胸は母親らしい無邪氣な得意で一杯になつた。來て見てよかつたと思つたこれまでイエスについて聞かされた有らゆる忌々しい噂も、今はこれに依つてたしかに不思議な事實として實證された氣がした。私たちの知らない間に、何か偉い力があの子に下つたに相違ない。――彼女はこの感激をアキムに洩らすことは出來なかつた。出奔以來イエスをそんな風に考へるのは父親が大嫌ひなことを知つてゐたから。それでも矢張

り黙つてはゐられなかつたので、狡い云ひ方をした。

『お父さん、早く此處に氣がつくとよござんしたねえ。此處からだと何もかも一と目ぢやありませんか。』

而して探るやうに、右側に一歩先んじて、杖で大きな顎を支へるやうにしながら、石の如く立つて下の廣場を見詰めてゐる父親をさし覗くと、マリアははつとした。アキムの顏の上にはこれまでにない、一種名狀しがたい複雜な感情が浮かんでゐた。それはもうまさしく怒りではなかつた。マリアの顏を明るくしてゐる悅びとも違つてゐた。寧ろ反對に痛ましげな、悲しみに堪えないやうな憂慮の色であつた。

約二年の後、イエスはゴルゴクで二人の泥棒と共に磔刑になつたと云ふ報知がナザレに屆いた時、この同じ表情は今一度アキムの顏に現はれた。が、口では彼はただ腹立しげに叫んだ。

『それ見たことか。大工なら大工らしく手前の職を地道にやつてさへゐりや、そんな目に逢ふ筈はないのに、いい罰だ。』

（終）

或る社會主義者

長與善郎

辰三は間借りしてゐる自分の家の前の空地がある富豪に買はれたと聞いた時とうとう怖れてゐた事がきたと思つた。そしてガツカリすると共に腹を立てた。「どこのどいつが何の權利で俺達からあの神聖な場所をふんだくりやがつたんだ！」まだ廿五であつた彼はハタに聞こえるほど大きな聲でかう獨り言つた。「俺達」と云ふのはさし當り彼とその戀人との事であつた。

それは俗に〇〇原と呼ばれて、八千坪以上もある、その界隈での唯一の「野天倶樂部」であり、「公園」であつた。

そこには數本の櫻と、十五六本の太い樫と榎とがあつた。人々はその十五六本の樹木の一團を「森」と呼んだ。櫻は春には花を咲かせ、秋には葉を紅葉させた。夏の晝には「森」のこかげが人々の休息と、晝寢と、針仕事との場所になり、夜には若い戀人同士の媾曳にいゝ所となつた。子供らは一日中その原でとんぼをつつたり、紙凧を上げたりし、家の中でくさ〳〵する苦勞者はそこへ息を吐きに行つた。町に住む人間

にとつて、殊に子供にとつて、「原つぱ」は何たる樂園であらう。しかもそれは樂園である上に又、火事や何かの災難の折の避難所でもあつた。そして何よりもまづ、その原の存在のためにそれに面する數百軒の家には朝から晩まで陽があたり、廣い青空が見えるのだつた。

辰三はその界隈での病人が自然多く直接その原に面しない裏の家々に發生する傾きがあるのを見ると　日光や、いゝ空氣のやうな「只」のものでもやはり公平には分配され難いもんだと云ふ事を思はされないわけにいかなかつた。

しかしその「公園」は今やある個人に買はれた。毎日一人の立派な紳士がその細君や、お嬢さんをつれて自働車でこの下檢分に來た。紳士は葉巻らしい紫の煙をくゆらしながらキラ／＼と日に輝く銀の柄のステツキを握いて、毛の襟巻に美しい頸をうずめてゐる細君に何か腹案の說明をし、歩を量つて見たりしてゐた。細君とお嬢さんとは樂しみらしく又いろ／＼の提議を持ち出してゐるらしかつた。日曜には十二三の男の子と、大學の制服を着けたその兄さんらしい青年と、書生とが來た。そしてそれらの人々が我物顔にその原つぱを横行濶歩するのを界隈の人々は怨めしげに、にく／＼しげに立つて眺めてゐた。「畜生。馬鹿にしやがるな。ぬす盜奴。」と男達はつぶやいた。

その中に技師が來、測量師が來た。原には繩ばりがされ、「無用の者入るべからず」となつた。人々はその繩をブチ切つて入つた。そしてそこでなほ前の如く樂しまうとし、自然の營養を取らうとする者を、今度は「主人達」がにらみつけた。

「まアいゝ。ほゝつておけ。あまりやかましく云はんほうが後々のためにいゝ。」

主人はかう低く云つて叱らうとする運轉手を制した。しかし細君は「どうも困るわねえ。かう亂暴に這入つて來られちや。」とこぼして書生に文句を云はせた。

人々はさう云はれゝばどかないわけに行かなかつた。

「ロハで見るものと一緒ぢや高ぇ金をはらつて見る者は割が合はねぇつてわけだらうよ。ふむ。」と或る者は云つた。「人が這入りや地所が減ると思つてやがる。」

「どうも社會主義は起らねぇわけに行かんなあ。」と辰三は考えた。

倒取りがきまると地形がはじまつた。毎日數十人の女勞働者がそこへ來て卑猥な謡をうたいながら地盤堅めの綱を曳いた。或る印刷所へ通つてゐた辰三は朝早く家を出て、夕方に歸るため、その嫌いな謡をあまり聞く事はなかつたけれど、石や材木を運ぶ馬力がにはかにふへたため、道がひどくわるくなつただけでも彼には不快だつた。

「こんな途方もねぇ廣い地所に一體幾人の人間が住まうつてんだ。」と近所の男が云つた。

「廣い地所を占領する者はいつだつて小人數ときまつたもんだ。下男、下女つて云はれる奴をあはせたつて知れたもんだ。だが何萬坪つて邸の持主に比べれや八千坪位はまださう廣い方ぢやねえかも知れねえ。」と隣りの親方が云つた。

だがどう考えて見てもたしかにそれは廣すぎる。八千坪と云ふ地所は一家族や二家族の占領すべき面積ではない。と辰三もそこへ入つて合槌をうつた。そして室へ歸るとから考えた。

一體地球上の全陸地のうち　人間の居住に適する土地の全面積は大凡どの位のものか。それを大凡にでも測定しておく必要がないものだらうか。それが分ればそれを世界の人口で割つて、一人の人間が大抵どの位の土地を占めるのが相當かわかる。そこにいろ〳〵の事情が生ずるにしてもとに角それを單位として、大體はそれに從ふのを原則とする必要がある。先きへ行つたらさう云ふ事にきつとならずにはすむまい、と。

家は出來上つた。それは二階建であつたがアメリカ式の赤い瓦の西洋館で、屋根が高いために、普通の日本家の四階に

もあたつた。原に面して、今まで吸へるだけ吸つてゐた日光は最早その西洋館の陰になる家々に「まるつきり當らない」ことになつた。事實町は暗くなり、寒くなつた。彼は林檎のやうに紅い頬をしてゐた近所の子供達が不健康相に顏が蒼くなつたやうな氣がした。

せめてあの原の景色だけでも屋根からのぞかせてくれたつてよささうなものと溫和しい女はつぶやいた。しかしそれは冷たい鼠色の高いコンクリートの塀のために完全にかくされて了つた。

「物持ち共通のケチな心持ちからだ。人がのぞくとな、景色が減つて、自分らだけの樂しみがソガれる氣がするんだ。」

「當り前だ。人とわかち合はうなんて殊勝な心持ちがあれや始めつから一人で物をふんだくりやねえや。」

しかし勿論、そんな事を云い合ふ連中自ら人の事こそ云へ、決してその「ケチな心持ち」や「ふんだくる」氣の無い連中ではない事 欲望に於ては金持ちと些かも變りのない事を彼等は認めないわけには行かなかつた。それでその事を或る時一寸しやべつて、彼等の反省を促さうとした。

「ぢや、お前は何かい。自分が立つてゐれや後ろの者の見物に邪魔になるからつてんで、芝居を見やうとはしないのかい。お前が立つてゐれや、それだけ後ろが日陰げになるつてんでお前は日向ぼつこをしやうとはしないつてのか。」とある皺の多い爺が彼に云つた。「そんな事云つてたら俺達や生きて行けると思ふか。俺達はかうして此處に立つて話してる中にだつて蟻の二匹や三匹は踏みつぶしてるかも知れねえ。それがいけねえつて云ふなら俺達はどこにどうして身をおきやつゝんだね。ものゝわかつた人間はそんなえらさうな無理は云はねえもんだ。只な、人と一緒に物を見物しやうつて時には唐傘をひろげるなつて云ふんだ。自分の頭は出してたつていゝが、只あんまり肱を突つ張らねえやうにしろつて云ふだ。頭を出しちやいかんとは云やしねえ。」

「ちがいない」と辰三は感服した。

しかしその「店舗」をひろげてゐる家の主人は昔は一介のプロレタリアであつたのが、今は堂々たるブルジョアとして一方の尊敬をうけてゐるのだつた。で、辰三は自分の室へ這入ると、そこに變な矛盾を感じた。一プロレタリアから身を起して、遂にブルジョアとなる。人はそれを成功者として、立志談の中にかぞへ、尊敬する。そのくせブルジョアたる事は悪い事になつてゐる。それは別問題であるかも知れぬ。人の感心するのは詞はど、そのブルジョアジーにあるのではなくて、その人間の不屈不撓な意志や、時機を見る慧眼さにあるのだとも云へるだらうから。しかし理屈はさうつくもの丶實際に於て、それはおかしなもんだと彼は思つた。

しかしある雨上りの日曜の夕方、彼は女工であるその戀人と町を歩いてゐた。と、一臺の自働車がぬかるみを馳つて來て彼女の着物にひどいハネを浴せかけていつた。それは彼女が只彼とかうして歩きたいだけのために無理をしてやつとこしらへた一張羅のめいせんであつた。彼は思はず、後から「おい！」と自働車を呼びかけたほど腹を立てた。

「まあ、このハネ！　にくらしいわねえ。」彼女は着物を見ながらくやしさうに云つた。「だけど、まあ、仕方がないワ。」

彼は返事をしなかつた。そして暫く默つて歩いた後云つた。

「とに角活動を見やう。そして出てから天ぷらでも食はう。それとも鰻にするか。」

彼女はその奢りに反對する事や、どつちでもいゝと云ふやうな答へが、沈んだ感じを彼に與へはしないかと云ふ氣遣いからわざと快活に天ぷらを主張した。彼は財布の底までハタいて彼女と御馳走を食つた。すると彼女はハラ〳〵と氣をもみながらも爭つてまで自分で勘定を拂はうとする事をひかへた。

「何でもものは相對的だからな。お前のそのめいせんを羨ましさうに見てる女も多勢ゐたよ。」二三杯の酒にもう顔を眞

赤にして彼は云つた。

「まさか」とまじめに云ひかけたが、すぐ陽氣な調子にかへて彼女は云つた。「だつて實際妾達は贅澤ですものね。もつと贅澤な人も世間には澤山ゐると云ふだけの事で、そんな人達と無理に比較して考へさへしなければ、これでもどうして中々ブルジョアの中ですわ。」

そして二人は愛の幸福感のために涙ぐむほど笑ふのだつた。

歸りがけに二人はとある寶石商の前にさしかゝつた。彼女は本能的にふつとその眩ばゆいショーウヰンドウに引きずりよせられた。そしてわるい事をしたと思つた。どうせ買へもしないそんなものを見る事は自分には不氣以上只面白いのであるが、彼を苦しませる事だと彼女は知つてゐたから。それですぐ何げない體で歩き出した。

「どうだ。一つ買つてやらうか。ほしいやうなのがあるかね。」

そつと體をくつつけて手を握りながらかう云つた彼の言葉にはその「殘酷な」言葉を滑稽に聞かさうためのわざとらしい露骨な冗談さがあつた。

「えゝ、買つて頂戴よ。あのダイアのを。三千五百圓！」

鋭く彼の眼をのぞきこみ乍ら甘へるやうにかう云ふと、彼女は呑氣相にカラ／＼と笑つて見せた。

が、その時その店のドアが開き、一人の美しい貴婦人と、白狐のショールを被た背の高い令嬢とが店員に送られながら出て來た。二人は歩道の窪みにたまつた水を大袈裟に裾をとつてヒョイ／＼と二三歩跨ぎ、そして自働車へ乗つて去つた。

辰三と戀人は顔を見合せた。それは前の大きな家の細君とその娘であつたので。

「買つたのね。屆けると云つてゐたわ。」と戀人は云つた。

「あゝ云ふ人達が欲しいものを買へるのはいゝこつた。決してわる事ぢやない。只俺達が買へないのがわるいことなんだ。」

辰三はやがてから云つたものゝその不公平に憤慨を感ぜずにはゐられなかつた。少くとも――その城廓のやうに自分らの家の前に立ちふちがつた家の爲めに、見す〳〵自分らの家に日が當らたくなり、晝容が減り、彼女との戀の紀念である神聖な森が森はれ。しかもそこからは毎日のやうに令孃がピアノにあはせて唱ふ「御自慢の聲」や、甘つたるい子供の唱歌が「ばか〳〵しい」笑い聲や、喝采と共にきこえる。それらはその廣々とした室の中のいかにも「のんき」な明るい幸福さと、贅澤な華やかさとを「無遠慮に」想像させるのだつた。そしてその想像がそれと餘りにちかひすぎる自分の周圍の生活と對照して考えられる時、――彼は「あの人達があんな風に幸福である事は至極いゝ事なんだ。決してわるい事ぢやない。只俺達が同じやうに幸福でない事がわるい事なんだ。」と冷靜にのみ考える事は出來なかつた。そして世はさま〴〵だと只云つてすましてはゐられない氣になるのだつた。

「でも人の幸福をにくむのはよくない事だわ。」とある時彼女が云つた。「あの人達だつて別にわるい人達ぢやないでせうし。」

「わるくもよくもない奴らだらう、多分。しかし皆があいつらを憎むのは當然で仕方がないんだ」と彼は答へた。「なぜつてあいつらはつまり勝つたのだからね。假りに俺がもしあいつらの富や幸福をぶち倒したとすれや、その時は俺が又あいつらの代りに勝利者として皆から憎まれてゐる時なんだ。」

――人生は幸福の奪い合いだ。それは一定の分量に於て地上に與へられた一般の物質と同じく、或る者が多く取れば、

他の者の傾け前が減り、或る者が太る事はそれだけ他の者を痩せさせる事である。事實その城郎のやうな家が占領してゐる分量の日光だけ周圍の者は日光を奪はれてゐるやうなものである。彼に日光を奪はれまいとすればそれ以上高く廣い家を自分で建てるよりない。更にそれ以上高い家が次々と建てられる迄。そして怨む者は常にその後ろに絕える事がない。——

此目前の實感と、物質の窮迫とが彼をだん〴〵卑近な唯物主義に導いて行つた。從つて人生はキリのない物質の爭奪戰で、自分が怨むか、人に怨まれるか、咀ふか、咀はれるか何れかの運命を免れられぬ憎惡の轉々たる修羅場であると云ふのが彼の人生觀の全部となつて行つた。どうせ凡ては敵であり、凡ては爭鬪である。勝つか敗けるかだ。

「君の說は凡そ古い。カビが生へてゐる程陳腐にして、且つ平凡なりだ。」とある友が冷やかした。

「つまりそれはそれほどに動かない事實だと云ふ事ぢやないか。」

彼は肩をそびやかして答へた。彼にはだん〴〵同主義の友が出來た。

しかし思いがけない事が起つた。

或る日突然異樣な大音響と共に彼は活字の組み立ての機械から突きのめされるやうに床に投げ倒された。そして起き上らうとしても起き上れなかつた。彼の體の上に活字の棚がおつかぶさつたのであつた。彼は無我夢中であつた。そしてどうしてそこから體をぬけ出させたかを知らなかつた。彼は惡夢のやうに恐ろしい人々の悲鳴と叫びとを聞きながら轉げてゐる者の體の上を踏み、よろけ乍ら往來へ出た。そして目の前に家が倒れ、火が燃え上つてゐるのを見た。

それは大地震とその爲めの火事であつた。彼は恐怖に全身が顫へおののき、何をしていゝのか分らなかつた。併しその瞬間彼の頭に彼女の事が浮んだ。「あの人はどうしたらう？」かう思ふと、心配の本能は恐怖の本能よりも遙かに強く

なつた。そして滿身の勇氣が立ちどころに彼に命じた。「あの人の處へ行け！」と。

彼は走り出した。大地は猶ほ波の如く搖れ、往來の兩側の家はくずれ、高い壁や、煉瓦は瓦と共に降るやうに彼の身邊に落ちた。その砂煙りと、危險の中をひた走りに走りつゞけて彼は怖れを感じなかつた。家の事も考えなかつた。只彼女が屋根やハリの下敷になり、血を流して、悲鳴を擧げ、助けを呼んでゐる姿や、それよりももつと無殘な姿だけが眼に見るやうに想像されるのだつた。おゝもしもさうだつたら？　彼は拳を握りしめて、頭を打ち、そして祈つた。何に？　彼は祈る對象をもたなかつた。しかし祈らずにはゐられなかつた。

しかし彼女は助かつてゐた。彼と彼女とが出てゐる二つの工場の丁度まん中頃にある公園の前迄彼が辿りついた時、人波を押しわけて髮を亂し、裾をからげ、跣足のまゝ走つて來る彼女を彼は見た。

二人は物も云はず抱き合ふ、泣いた。そして再び彼は何かに祈らずにはゐられなかつた。

「とに角お前の家へ行かう。」と彼は云つた。「多分彼方は大丈夫だらう。」

とまつてゐる電車道を二人は又そつちへと急いだ。併し途中まで行つた時、彼らは彼女の家が到底助かつてゐない事を覺つた。濛々とした火焰の潮は彼女の家の方面を既に舐め盡して此方へと向つて來るのだつた。二人は呆然とそこに立ちつくし啞の如く默つて、子供の手を曳き乍ら逃げて來る避難者に突き飛ばされた。そして誰も彼女の町の樣子を訊く彼等に答へるほど閑た者はなかつた。

しかし家の事を心配してゐる間に自分らの體に火がつき相な事に二人は氣がついた。

「命にはかえられない。あきらめちまふんだ！」

と彼はガツカリしてゐる彼女を叱るやうに云つた。「俺の家の方へにげやう。あつちならきつと大丈夫だ。」

二人は又方角をかへてそつちへと向つた。

「あの家はどうしたらう。あの大きな家は。」

歩きながら彼はふつとこんな事を考へて、彼女の氣をまぎらすためにさう云つた。しかし「あんな家こそまつさきに燒けちまふといゝんだ。」と云ふ露骨な氣持ちは戀人にもらさなかつた。

實際その方面はまだ安全である事がそつちへ〳〵となだれ行く避難者の潮によつて知れた。そして五六丁の手前まで來た時彼は安心した。

「大丈夫だ！ さあ、もう一あし！」彼は元氣よくかう戀人を勵ました。

しかし彼の間借りしてゐた家はビシャンコにつぶれてゐる軒並みの家の一つだつた。そして婆さんの主婦は屋根の下敷になつて死んでゐた。

「まあ、どうしたらいゝでせう！」

かう云つて戀人は泣きかけた。

彼は呆然と口を噤んだ。しかし前の大きな家を見た時、近所の人々がその破壊されたコンクリートの塀を越えどんどん中に侵入してゐるのを見た。

「皆はあの家へ這入つて行く。かまはないんだ。さうだ！ あの家へ行かう。」

そして彼は彼女の手を曳いてその「燒けちまふといゝ」と思つた家の中へ入つた。虫の死骸よりは毛物の死骸の方がむごたらしいやうに、その大きな、立派な家の破壊された狀は小さな家のそれよりも一層無殘な感じのものであつた。

おびたゞしい金と、勞力とをかけたその美事な人工物が無殘にぶちこはされてゐる事の「いたましい」と云ふ絶對の感

じの爲めに人々はさう云ふ贅澤な生活に對する非難を發するよりさきにまづ「まア、なさけない！」とか、「惜しいもんだなア」とか「勿體ないねえ」とか口々に云つた。そして何か取るものはないかと露骨にさがしあつてゐた。

早くもそこでは一方小さな爭奪戰が起り、他方では主人の云いつけで壁のおちたまゝ近所の負傷者の收容にあてゝある殘つた室の一部から呻き聲が聞こえた。

「美、とてもあの聲を聞いちやゐられないわ。」と彼女は耳をふさいで云つた。「どこかそとへ行きませうよ。第一家の中はあぶないわ。」

「さうだ。森があつた！」と彼は答へた「久しぶりにあの思い出の「森」でお前と一夜をあかすのもわるかない。」

しかし森には主人達が避難してゐた。そして二人がその森へ行くより先きに辰三はかう云ふ主人の叫び聲を聞いた。

「風はこつちへ向いたぞ。もうお仕舞だ。にげろ！」

そしてたちまち火の潮は疾風の速さで彼等の方へ突進し、火の粉は吹雪のやうにそのさんざん呪はれた擧句、その呪つた人々の避難所となつた家の上にふつた。

二人は又その家を後にして走つた。今度は「主人達」の仲間と一緒であつた。

「えらい事になりましたなア。貴方々はどつちへゆかれるのか知らないが、とに角お互助け合つて行かうぢやありませんか。」

主人が辰三にかう云ひかけた。

「ふむ。弱音をふきやがるぜ。心細くなりやがつたもんだから。遲すぎら。」辰三は片腹いたく思つた。「こんな時になつて助け合はうもよく云へたもんだ。人を溺れた時の藁だと思つてやがる。普段は平氣で踏みつけておいて。又陸へ上り

や波もひつかけやうとしやがらねえくせに。」

　彼は冷笑をうかべた皮肉な顔つきで一寸戀人の方を見かへつただけで、主人には返事をしなかつた。

　主人達は八つになる子供までめい／＼背負へるだけ、提げられるだけの荷物を擔いでゐた。小さい子供は何遍もころびさうになつたり、ころんだりした。

「そんなものは捨てゝおしまい。邪魔だ。又買つてやれるからね。」父親にかう云はれても子供は自分の荷物――玩具や人形を捨てなかつた。

「お父さん。どこ迄行くのよう？」子供らは心細さうに訊いた。

「分らない。安全な處まで行くんだ。」

　子供らは運命を覺悟したやうに默つて、我慢してついて行つた。併し或る坂の途中まで來た時何遍もころんだ子供は膝をすりむいて血を出し、足が痛いと云つて遂に泣き出した。誰かゞその子供をおぶらなければならなかつた。しかし誰も荷物を持ちすぎてゐた。

「貴方何か一つ持つておやりにならない？」彼女が見かねたやうに辰三に云つた。少し氣の毒だわ。妾達は手ぶらだから。」

「いやだ。持つてやる必要はない。」辰三は冷たく答へた。「自分で持てないものは捨てるがいゝんだ。要る者が拾ふだらう。」

「さあ、先きへ行かう。こんなお相伴でぐず／＼しちやゐられない。」

　彼はかう云つて急ぎ出した。

しかし「主人達」と別れて郊外へ出た時彼は人々がかう噂してゐるのを聞いた。「〇町は全滅だ。」

〇町は彼がさし當りそこへ避難しやうと考えてゐたふだん餘り仲のよくない彼の一人の兄がゐる處であつた。

彼らは失望のために顔を見合はせて立ちどまつた。

「まあ、ぢや一體どこへ行つたらいゝんでせう。」と彼女は云つた。

「人の噂は百の中九十九迄は嘘ときまつたもんだ。とも角行つて見やう。全滅なんて事があるもんか。」

しかし彼等はそこへ行く迄に殆んど全く文字通りに全潰、又は全燒してゐる二三の町を通過し、血みどろの怪我人と、死人と、泣きまどう女子供や、發狂者を見つゞける事に麻痺しなければならなかつた。

「何だか妾、こんなにして自分の體の安全ばかり氣にして逃げるのが氣がとがめて來たわ。あんまり薄情のやうで。」

やゝとげ〳〵しく聞こえる聲で彼女が漸く云つた。

「だつて、仕方がないぢやないか!」彼はもじ〳〵と、しかし苛立しく答へた。「一人や二人の事ぢやなし。俺達がこんな目に逢つたにしたつて誰が助けてなんぞくれるもんか。」

しかしさう云ひ乍ら、自分にそんな屁理屈を云はせ、自分のエゴイズムをむき出しに意識させる彼女に彼は不服で、いら〳〵した。で、二人は互の氣まづさと、心細さと、自分の氣の咎めと、外部からの强すぎる刺戟の連續の爲めに口を利き合はず、只默々としててんでに歩いた。

氣がたつてゐるために二人はくたびれず、日の暮れまで殆んどぶつ通しに猶ほ五里の道を歩いた。

「そら見ろ。全滅なんて嘘だ。あんなにまだ家がのこつて明りがついてゐる!」

〇町へ着いた時彼ははじめて凱歌をあげるやうに云つた。

「見ろ。肉屋もあれば、すしやもある。御馳走が食へるぞ。」

實際そこにはまだ殆んど半數の家がのこり、つかへ棒をかつたまゝ早くも避難者の群をあてこんだいろ〱の飲食店が出され、景氣よく賑かに明りが點けられてゐた。

「まあでもなんて云ふ呑氣さでせう。不公平なもんだわねえ。」と彼女はつく〲感じたやうに云つた。

「まつたくなア。」と彼も云つた。「世の中はすべてこの通りさ。」

が、口ではさう云い、心にもさう感じながらも彼等はよろこんでゐた。彼は兄の家を訪ねた。

「おゝ、助かつたか。心配してた。」

飛びだして來た兄は口早にかう云つた。

「僕も。」

彼もかう口ごもつた。彼はふだん兄弟とは思へぬほど疎々しく冷たくしてゐる此一人の兄を訪ねる事に拘泥してゐたのだつた。彼が訪ねて行けば兄は舌打ちをしながら「此厄介な不義理者が。おまけに二人でか！」といふいやな顔を見せるものとのみ想像してゐた。しかし事實の邂逅はちがつてゐた。

兄のいかにも自然にうちとけて、よろこんでゐる顔を見、聲を聞いた時彼も亦本能によつてすぐその愛を信じた。彼は兄の意外な態度をその時些しも不思議に思はなかつたほど、自分自らもしんではこの兄に愛をいだいてゐる事を今さら自覺した。そして今までそれをさとらずに互に憎みあつてゐるものとばかり思つてゐた事を感じた時、彼はある不思議な感情のために胸が一杯になつた。もし今までこの兄を愛し、又愛してゐると樂に自覺してゐたならば彼は此時胸が一杯にはならなかつたであらう。

「お前がこゝへ逃げてくれやいゝと思つてゐた。」

兄はさう云つた。それは「だがお前の事だから來るとは思はなかつた」といふ風に辰三には聞こえた。彼はすなほに自分の邪推や、我まゝをあやまりたいやうな氣がした。

「こゝもやつぱり相當にやられちやゐるんですね。」

辰三は眼ににじむ涙をかくすためにこんな事を云いながらそこらを見廻した。

兄と彼ら二人との三人は壁がぽつくりと落ちてこまいかきの間から赤い夕空がすけて見える室で茶に喉をうるほしながら話しあつた。彼はあまりに恐ろしい目に遭い、此世のものとも思へぬ無殘すぎる光景を見すぎて來たので、その對比から此町へ來た時はホツとしたが、それと共に不公平なもんだと感じたと話した。

「不公平にやちがいないが、だがその不公平のおかげで俺達は又かうして逢つてよろこべたと云ふもんぢやないか。」兄は笑いながら云つた。「これでもしどこもかも○○市同樣全滅全燒になつてゐたら俺達はどこへ行つてその不公平をこぼせるんだね。不公平をこぼせる處があるのはまだしもその災難者の仕合せと云ふもんだらうよ。」

蠟燭をつけながらかう云つて兄は彼らにその「不公平」のための御馳走をしやうと云つたが、二人は斷つた。事實彼らは空腹のくせに御馳走を食い度い氣にはなれないのだつた。

「だが、此町だつても保證づきの安全地帶と云ふもんぢやないからな。腹だけはこさへておけよ。萬々一の用意のためにな。」

兄はかう云ふ武士氣質をもつてゐる男だつた。三人は蠟燭の灯をかこみ、にぎり飯と漬物との「御馳走」を喫べた。彼は今この兄に對するうちとけた親愛さを示したく思つた。しかし異常に感情が昂ぶつてゐて、樂に物が云へなかつた。

そしてやつとの事で一つのにぎり飯を砂を嚙むやうに嚥み下した。

「かう云ふ時は食へないもんだ。此頃お前胃はどうだ。」兄は訊いた。

「どうも、やつぱり……」と辰三はにぎり飯に味のつくほど垂れた鼻水をすゝりながら答へた。「……よくないんで。」

「こんな時は腹は殊さら大事にしないといけない。……」

しかし兄がかう云い畢るより早くけたゝましい半鐘の音に彼らは顏色を失つた。

原因は分らなかつたが、その町にも小火がおこり、小火は烈風のために見る〳〵手のつけやうのない大火となつたのであつた。

「この風ぢやいよ〳〵此町も不公平をこぼさなくつちやならないかな。」

兄はかう云つて立ち上つた。障子は空の火焰を映してまつ赤になつた。

「どこまでしつつこく殘酷な眞似をしやがるんだらう。氣違い自然奴。」

辰三は怨めし相に外をにらみ乍ら溜息をついて云つた。

「なあに、この位のいたづらじやあまだ寢返り一つうつたほどにも感じちやゐない。」兄はすばやく外套を着ながら云つた。「だが俺は行かなくつちやならない。お前たちはこれをもつてにげるがいゝ。」

そして兄は二人に毛布をくれた。

辰三は今又「逃げる」と云ふ氣にはなれなかつた。それよりも若い彼はその破壞者と闘いながら兄と一緒に何かその町の人々のために一働きしたい氣になつてゐた。彼はヘンに度胸がすはり、海嘯のやうに押しよせる火を見ても恐ろしさを感じるよりむしろ興奮した勇氣や、一種奮闘の興味をさへそゝられるのであつた。そして自分の内にそんな不思議

な本能のある事を意識して彼は子供のやうによろこんだ。

「いくらでもする事はあるでせう。消防でも何でも僕はしますよ。」彼は兄に云つた。

「まあ、お前が一番責任の重い此人を安全な場處へうつしてからする事があつたらするがいゝ。」と兄は云つた。「そんな氣がお前に起つたと云ふだけで、それや無意味ぢやない。まあ、今はその人と一緒に逃げろ。」

そして兄は二人に逃げる方角と場所とを敎えた。二人は兄の言葉に逆ふ事は出來なかつた。

「寒いぞ。風邪を引かないやうにな。ぢや又會はう。」

さう云つて兄は出て行つた。

二人は兄に敎へられた河原迄ゆつくり逃げて來、そこで野宿する事にした。ふりかへつて逃げて來た方をのぞむと、まつ赤な火焔と黑煙の雲の上に血のやうに赤く、しかし、しかし湖水のやうに靜かに月が照つてゐた。

「何と云ふ靜かさだ。すごいほどしやあ〳〵とおちつきはらつてやがる。」

月を見ると二人はまづ此感にうたれた。しかもそれは唯「冷やか」と云つたのみでは足りない、冷やかではあるが、かと云つて反感をもつ事の出來ない感じであつた。二人は何か考える事を强ゐられる如く、吸ひよせられる如く、夢みる如く、河原の上に並んですはつて恍惚とそれを仰ぎ見てゐた。

「まるで夢の夢のやうだわねえ。たつた今日一日の間にまあ何て云ふ天地の變り方でせう。」

暫くして彼女が體をふるはし乍らから沈默をやぶつた。「ねえ、一體どう云ふ事になつて行くんでせう。貴方。」

「分るもんか。俺に。」彼はむつつり答へた。

二人は腹の底から淋しさがこみ上げて來た。が、その時向ふから黑い人影が幾つとなく此方へ來るのを二人は見た。

「此處に此白い毛布をかぶつて待つてゐろ。」と彼は起ち上つて云つた。「俺はあの人達が此處へ來るやうに敎えて來てやる。此處には芝生もあれば乾いた砂もあるからな。」

「えゝ、みんな呼んでいらつしやいよ。早く！」と彼女はせき立てゝ云つた。

「もうどこもかも全滅でさ。人間の家ばかりか林も森もつる〳〵坊主の禿げ頭で世話はありませんや。」

そこへ來た避難者はかう云つて自棄笑ひをした。

「でもA市や、B市はいゝでせう。あつちの方は。」

A市やB市はそこから三百里も遠くにある都會であつた。しかし辰三はムキになつて三百里も遠方の土地の安否をこの知つてゐる筈もない男に問いかけずにはゐられなかつた程心細くなつてゐたのだつた。

彼等は體が綿のやうに疲れてゐるにもかゝはらずその晩中殆んどまんじりともしなかつた。寒さのためもあつたが、それよりも感が情たかぶり、頭が恐ろしく緊張してとめどなく働くからであつた。

「どうも分らない事ばかりだ。一體あの兄貴の奴はどうしてあんなにやさしくしやがつたんだらう。そして俺も亦。あの嫌いな奴に對して。まるで二人は仲がわるいからなほ愛し合ふとでも云ふやうに。水つ鼻まで垂らしてよ。」

この考えがと角彼の頭につきまとつてゐた。

「分りきつた事だ。俺達や、それはど氣が弱くなつてゐたんだ。」と彼の一方の頭が答へた。「丁度體が健康で、仕事の景氣もいゝ時はハタへも寄りつけないほど鼻息が荒くつて不愉快な奴でも、大病にでもなつた時は急に氣が弱くなつて善人らしくなるのと同じだ。こんな天災に度膽をぬかれてお互意氣地のなくなつた時の人間が一寸善人らしくなつたからつて感心する事はねえ。勇氣が出てくれやすぐ又元の敵同士だ。」

しかしその後で彼は五分間ばかりとろ〳〵とした。そしてその五分間の間に彼は恐ろしく長い感じのする夢を見た。

――何でも彼が例の通りに印刷場の輪轉機に向つてゐると、大きな大砲のやうな音を聞いた。「いよ〳〵始つたナ」と彼は思つた。彼は多勢の勞働者達と工場の前の廣場へ出た。もう群衆は一杯そこに集つて整列してゐた。見なれない軍服を着た者が皆に爆彈のやうなものをくばつてゐた。彼は不安になり、來る處を間違へたかと思つた。しかしその軍服を着た者の後ろにロベスピエールや、マラーや、レーニンや、トロツキーに似た顏のゐるのを發見して、矢つ張りこゝでいゝんだと思つた。そして彼も幾つかの爆彈を渡されるまゝにポケットへねじこんだ。

彼等は黑い旗を押し立て、隊伍堂々と市街へねりこんだ。町の人々は彼等を見ると悲鳴を擧げて逃げ出した。しかし一番まつ先に馬に乘つて進んで行く指揮官は三日月形の劒を拔いて號令した。そして張り子のやうに兩側に並んでゐる大きな家々に爆彈をなげつけろと叫んだ。ボン〳〵と皆は投げた。張り子のやうな家はガラ〳〵と面白いやうにくずれた。土煙りと一緒にパッと火があがる。あつちにもこつちにも。ふと見ると赤瓦の七階建の大きな家の窓から、彼の前の家の奥さんが、八つになる子供を抱いたまゝ助けてくれと叫んでゐる。鐵砲の音がして子供は七階から步道の敷石の上に落ちて頭を割つた。逃げる者はバタ〳〵と前へ倒れる。呻る。叫ぶ。泣く。子供は母を呼び、母は子を呼び、夫は妻や子を呼びながら倒れて行く。そしてその累々たる死骸の山と、怪我人と、手を合はせて拜む者と、血の海の中を群衆は蹴散らし、踏みこえながら進んで行く。彼も進んで行く。――彼はうなされて彼女に搖り起こされた。見ると朝日が照つて、露をおびた草木は金色に生き〳〵とかゞやいてゐた。

しかし彼女は反對に夢か、夢であれと願つた恐ろしい昨日の一日が夢でなく、現實であつた事を見出して茫然とガッカリしてゐた。

彼は默つて、流れの方へ顏を洗いに歩いて行つた。そして一人の花を持つて泣いてゐる少年に會つた。

「どうしたんだ。」彼は訊いた。

「僕は花屋なんです。」と少年は答へた。「町へ花を賣りに行つてなぐられたんです。」

「それや、こんな時に花なんぞ持つて行つたらなぐられるだらう。」

「こんな時だからこそと思つて僕はなほ持つて行つたんでした。しかし馬鹿でした。」

そして少年は去つた。

しかし彼にはこの馬鹿な少年よりもその少年をなぐる忙しい人達の方がより多く人間を愛するものとは思へなかつた。そして彼が何かしら此馬鹿な少年の言葉によつて考へさせられながら戻つて來ると彼女は云つた。

「妾いゝ事を考えたの。あそこにゐる人達はこれからK町まで行つて、汽車でB市へ行くんですつて。で妾も汽車で一旦A市まで歸らうと思ふわ。」

A市は彼女の郷里であつた。

「妾はA市の家で一時落ちついて、時を俟つ事にしませう。さうすれば貴方はお一人で自由に働く事が出來ますわ。」

「ところが俺には一層働くと云ふ事が食ふ爲め以外には何だか目的が分らなくなつて來たよ。お前と分れてまで働いたつて要するに始まらないよ。」

しかし何かする事がなければならなかつた。それで彼はA市へ行く事には贊成した。そして二人は又とぼとぼとK町へ向つて歩き出した。

K町へ行く道々には矢張り多くの破壞されてゐる村があつた。そして美事な木の黑い骸骨だけがにゆうにゆうと立つて

ゐる林の燒け跡には死人を燒いてゐる臭い烟が立つてゐた。それらの慘鼻な光景は彼に昨夜の夢をさながらに思い出させた。すると彼はひどく自分で不愉快になつて來た。

「もし革命や、或る主義が、――戰爭は云ふまでもないが、――人間の狀態を一時的にもせよこんな風にするものだとすればそれはたとへどんな名義のもとだらうと、問題にならなく惡だ。」彼は心底までから感じた。「人間がたとへどんな場合のどんな條件の下にも、人間をこんな風にする權利があると誰が考へ得やう。あつてたまるものか。」

一人の腰卷き一枚で寒さにふるへながら乳飮兒を抱いて、――母を見失つたのであらう――途方にくれてゐる十二三の娘を見た時、彼は殆んど考える暇もなく、自分の毛布を與へた。しかし彼女が「妾のもやつてお了いなさいよ。」と云つた時彼は赭くなつて答へた。「まあいゝ。あんな人はいくらでもゐるんだから。」

彼は自分の折角の――無一文の彼自身では一寸おどろく程の――行爲が彼女の一言によつて光りを消された事、そしてそれを承認しないわけに行かない事の爲めに、彼女と自分とに業をにやしていら〱した。

しかし、殊にこんな場合の戀人同士の間が、再びうちとけるのはわけはなかつた。

K町で二人は群衆のなだれと共に無蓋の貨物列車にのつた。丁度發車には間もなかつた。寒い秋風が吹いてゐたが立錐の餘地もない人いきれのために彼女は額に汗をかき、手が出せずにそれを拭く事も出來ない事を彼に眼で知らせてほゝ笑むでゐた。と彼は又その彼女がいやにキレイに見へるのでついほゝゑみを返へしてしまふのだつた。

その時プラツトホームを後から〱と走つて來る人々の中に彼女は或る顏を見つけて云つた。「まあ、あの人達よ。」と。

それは昨日も道づれになつた例の大きな家の一族であつた。主人は草鞋穿きに變つて子供をおんぶし、金ぶちの眼鏡

が鼻の頭までずり下つてゐた。彼等は玉のやうな汗を流し息をきりながらそこ迄來たが車は人であふれてゐた。

「もう一杯だ〳〵。これ以上詰め込んだら窒息しちまふ。」と人々は少し野次り氣分で云つた。

「こゝへ入らつしやい。」突然辰三はかう云つて了つた。「まだは入れますよ。」

彼は腕をさしのべて昨夜の夢では頭を割つた事になつてゐる子供をうけとつた。彼は細君やお孃さんの手を取つてやりたかつた。しかし人から助兵衛と思はれるのが煩さいのと、氣が引けてそれが出來なかつた。そして後から押し上げられてやつと其處へ這入つた主人や女達を見るとホツとしたが、その人達が心からうれし相に禮を云つた時にはやゝ氣まりわる氣に知らぬふりをして横を向いてゐた。

運命と云ふ奴は何と云ふ譯の分らない、又譯の分らぬ事を人にさせるもんだらう。――彼はその金持ちの人々と自分との不思議な因緣を考へながら思つた。「俺はすべてかう云ふ奴等に反感をもつてゐた。今だつて決して厚意をもつてゐるんぢやない。さうかと云つて俺が先刻あの子供をうけとつてやつたのは決して僞な氣持ちからでもなかつた事はたしかなんだ。」

しかし彼は凡て神秘主義的な物の考へ方が嫌いであつた。それで、憎みと云ふ意識よりも、感情よりも、もつと深くかくれた處から來る一つの超意識な力がどこかにあり、それは恐らく愛とは又別なものかも知れないが、とに角憎みよりは强く、深い力をもつたものである。その力が自分を自分の意志に超えて勝手に引きずり廻はし、玩具のやうに操つてゐるがために自分はこんな譯の分からぬ事をさせられるのだ、――と云ふ風には彼は考へなかつた。

「昨夜あんな夢を見たからな。識らず〳〵罪亡ぼしと云つたやうな氣持ちになつてゐたと見へる。」彼はかう思つた。「それにやつぱり氣が弱くなつてゐるんだ。こんな災難の場合には自然の奴めが人間の氣を弱くして、又建設させやうため

に助け合はせるんだ。」

彼等は二日二晩その汽車の中にゐた。到る處の停車場ではたすきがけした女や娘達がいそ〳〵とにぎり飯をくばり、水を與へてゐた。彼らは三度々々その誰からでもない飯をもらつて飢を感じなかつた。

三日目に彼らは漸くA市に着いた。そこは彼等の豫想どほり、微震の影さへもなく、平然と繁榮の樣を示してゐた。人々は活き〳〵として、健全な明るい顏に見へ、皆ちやんと相當なりをしてゐるやうに見へ、あらゆる店は華々しくさかへてゐるやうに見へ、電車や、種々の車は賑かに走り、並木の樹木は青々としてゐた。

○町に來た時不公平なもんだと云つた彼女は今それを見ると「まあ、うれしい！」と叫んだ「まあ、なんてみんな幸福相に見へるでせう！」

「本當になア！」彼も躍り立つやうにかう云つた。「實にありがたいぢやないか！　見ろ。皆な平氣なもんだ。それがたつた此處へ來ただけでかうなんだ。世界は廣い。人類はビクともしてやしない。しちやたまらないが」

彼等は今や心からその「不公平」をよろこんだ。そして——二日二晩も足をのばす事も出來ずにゐたので、——無暗と町中を歩き廻はつた。

或る家の前へ來かゝると中から音樂が聞こえた。

「ちよつと、貴方。ピアノが聞こえるわ！　ほら！」

かう云つて彼女は立ちどまつて彼をつつ突いた。

「おゝ！　なるほど！」彼もほゝ笑むで云つた。「なんと云ふキレイないゝ音だらう！」

二人は其の瞬間その「贅澤」を少しも贅澤とは感じなかつた。

「まあ、こんなに妾達は音樂を好いてゐたんでせうか。キレイなものに飢へてゐたんでせうか。」
「なんでもものは時と場合だからな。だが、俺にやゝつとある事が分つたよ。」と彼が答へた。
「俺達が今あの音を聞いてあんなによろこんだのはなぜだと思ふね。それはあの音樂その物の效果だけぢやなかつたんだよ。あの音樂と一緒に聯想されるあの家の幸福さ、さう云ふ幸福を持つてゐる人がゐてくれる事がうれしかつたんだ。有りがたかつたんだ。他人の幸福と云ふものゝ價値。お前さう思はないか。」
「まあ、本當に。さうですわね！」と彼女も力をこめて云つた。
「他人の幸福つてものが、自分の幸福にとつてどんなに大事なものか、どんなに妾達は知らず〳〵それを頼りにしてゐるものかつて事が、今貴方にさう云はれて、やつと妾にもわかりましたわ。」
彼らは幾つかの「ブルジョワ」の家の前を通つた。その中には辰三の家の前のあの大きな家の二倍もあるやうに見へる邸宅もあつた。併し彼はもうそれを「呪ふ」心持ちにはなれなかつた。
彼女はその都會の兄の家におちついた。辰三も避難民としてその家にとめられた。
彼は毎日町を歩き、見晴らしの可い、公園の丘に上つて腰をかけた。
眼の下に――彼らがその町へ來た時のやうに、黑山のやうな避難民を滿積した汽車が一方からどん〳〵その町へ入つて來るのが見へる。と、又此方からは同じやうに黑山をなす救護隊を滿積した汽車が殆んどひつきりなしにポツポツと出て行く。その玩具のやうな汽車の可愛さ。或る汽車には看護婦の一群がぎつしりとのつてゐる。それが日に輝いて白い鷗の群のやうに見へる。子供達が出征の兵を送るやうに萬歳を唱へて旗をふつてゐる。
辰三はどんな悲慘なもの、むごたらしいものを見ても泣きはしなかつた。氣違いのやうになつて泣きながら子供の名を叫んで燒跡をうろついてゐる母親を見てさへも泣くよりは只苦しむだ。しかし今、腰をかけ乍らこの人間的な光景を見てゐた彼の眼から涙が流れて來た。

行つてくれ。行つてくれ。
天使のやうなやさしい軍隊
いさましい鳩の軍隊
あの可愛さうな父や母や、妻や、子のところへ
飛んでゆけ
あの黒い燒け跡のきたならしい死と灰の上を
羽のやうに輕る〳〵とかけめぐる
君達の白い姿
それはどんなにいさましく、うつくしく
神々しく見へるだらう
眼に見へるやうだ。
おゝ私もあとから行きますよ
何かの仕事をさせてもらいに

こんな詩がおのづから彼の内にわいた。彼は立ち上つた。
彼にはもう働く事は「始まらない事」とは思へなかつた。
翌日の朝一番で彼は彼女に停車場までおくられてA市を立つた。再び○○市へ。
その後彼のその友達が再び變つた。
彼は今の社會でのブルジヨワとプロレタリアとの關係を依然肯定する事は出來なかつた。しかし同時に彼はもう社會主義者でもなくなつてゐたから。

――一三、一一、一九――



悲しきチヤアリイ

宇野浩二

一

あなた方のうちにもこの寫眞を御覽になつた方があるだらうと思ひます、題は『チヤツプリン日本に現る』といふのです。

ヱルカム、チヤールス・チヤツプリンといふやうな字幕が現れて、次に小さな絞りが次第に擴大されると共に、お馴染のチヤアリイ・チヤツプリンの、珍しくも、半身像が幕面一ぱいに映し出される。チヤツプリンはいつもの通りの服裝で、頭を斜めに曲げて、そのまん丸い目を心持ち流し目にした恰好で見物の方に向けながら、山高帽子に手を上げて、そして挨拶するのである。觀客席の主として前列の、少年たちが大勢ゐる場所の方から頻りに送られる拍手の音の中に、それが消えると、畫面は忽ち日本の何處かの大都會の停車場前の雜踏が可成り高いところから見下ろされた全景になる。廣

場のまん中には物々しい歡迎の綠門もこしらへられてある。そして群集は、如何にも誰か珍しい客が到着するのを迎へようとするもの、見物しようといふもの、中には旗を持つたもの、隊を組んだもの、――言ふと、近い數分間後に何ものかを待ちもうけてゐるもの丶慌しさで、混亂した蟻のやうに雜踏してゐる。寫眞は又一層近づいて、例の綠門の邊の光景を映し出す。いふ迄もなく、それには WELCOME と認めた大額が掛つてゐる、殊更にその下を旗を立てた自動車が通り拔けたり、絹帽を被つて、胸に薔薇の花か何かの章をつけた人が忙しさうに過ぎたり、その間には近所の鼻垂れ小僧らしいのが、杉の葉でこしらへた門の柱の邊を、始終見物席の方に物珍しげに顏を見せながらうろ〳〵としてゐて日偏りなのも、如何にもさういふ場合の活動寫眞の圖らしい。

さて、今度はプラットフォームの光景である。大勢の出迎人が群集してゐる中に、型の如く汽車が堂々として突進して來て止まる。出迎人たちが賑々しく帽子や手巾を振る中に、とある扉が開けられて、おゝ、これは確かに珍しい寫眞に違ひない！　どちらを見ても鷲のやうな日本人の雜踏の中に、間違ひなく、ひらりとそこへ私たちのお馴染のチヤツプリンが飛び出すのである。斜めに頭の上に載せた山高帽、鼻の下の小さなブラシュのやうな髭、屈めた腕に引つかけた杖、曲つた足附、――それ等は私たちにとつては實際にその人を目で見たより以上に、現に不斷言葉を交してゐる隣人や友人よりも、もつとはつきりと印象されてゐる人の肖像である。が、それを私たちはいつの時でも外國人の中に見馴れて來た、――それが今思ひがけなくも私たち日本人の間に現れた鷲きと嬉しさとに、觀客たちはそれが寫眞であることを忘れたやうに、寫眞の中のプラットフォームに立つて迎へてゐる人々と一緒に、手を上げ、手を叩いて、中に萬歲を唱へるものさへあつた。

出迎人の中の主な人たち四五人が、その時まで餘り人々の注意を引かなかつたのであるが、例の前列の活動狂の少年

たちの多い方面から、「立見！」とか、「國枝！」とか、「水島！」とか叫ぶ際に氣が附いて、見ると、それ等は總て有名な日本の活動俳優たちで、成る程、少年フアンたちがそれ〳〵の名を叫ぶ時は、即ちそれ等の男女の俳優たちが、主賓のチヤツプリンの邪魔にならない範圍で、觀客の方に向つて寫眞の上で會釋をしてゐる時なのである。それは正しくチヤアルス・チヤツプリンが日本に來たので、彼に最も緣故の深い筈の日本の活動寫眞會社と、その會社に屬する俳優たちが迎へに出た光景に外ならぬのである。チヤツプリンはいつ、日本の何處を訪問したのであつたらうか。

然し、現に『チヤツプリン日本に現る』といふ表題でさへもあるのだ。ところが、この寫眞で最も不注意に取扱はれてゐる點は、その一々の說明文が和洋兩方で與へられてゐるのはいゝとして、それが「チヤツプリンの到着」とか、「停車場にて」とか、「日本の古城見物」とか、まるで英文直譯の極めて簡單なものである上に、それが日本の何處の町であるのか、何といふ古城であるのかゞ少しも書いてないことである、それに、どういふ譯か、プログラムにも、その寫眞に限つて、製作會社の名前が記されてゐない。だから、却つて想像力の強い見物人は、若しかすると、チヤツプリンが日本に來たなどといふのは嘘の事で、費用を惜しまない亞米利加あたりの會社が、わざ〳〵日本への輸出向な作品にするつもりで、斯ういふ日本流の町や城やをこしらへて、群集に日本人を雇つて、即ちチヤツプリンが日本に現れるといふ趣向の畫を作つたものだらうか、などと考へる。然し、それならば、現に日本の人氣活動俳優であるところの立見や、國枝や、水島やがどうしてそこに出て來るかといふ疑問に當つて、彼等の想像は忽ち打ち破られねばならなかつた。

それに、私たち東京に住んでゐる者に合點の行かない事は、ロイド・ジヨオジとバアナアド・シヨオと共に、現今英國が持つてゐる最も世界的な人物の三人の一人であると言はれてゐる程の彼、チヤアルス・チヤツプリンが日本に到着

したといふのに、その寫眞に現れてゐる停車場はなる程大都會のそれらしいことだけは承認出來るが、それが東京ステーションでないことはいふ迄もなく、新橋でも、品川でも、上野でも、或ひは新宿でも、それ等のどれでもない、それでゐて可成り立派な停車場ではあるが、といふ事である。そして日本獨得の多辯な辯士がそれに就いて何の說明をも加へないのである。

だが、さういふ見物人たちの疑問にも拘らず、寫眞は容赦なく進行して、畫中のチャップリンは迎への人力車に乘る前に、例の WELCOME の緑門のところに來ると、ちらりと觀客の方に一瞬間顏を見せて、杖を二三度振り廻すことに依つて挨拶した後、獨得の步き方でその門を通りかゝるのであるが、ふと上を見上げたかと思ふと、する〳〵とその杉の葉で造られた門の柱を攀ぢ上つて行く。無論、觀客たちは大喜びで喝采を送る。畫中の出迎人たちは呆氣にとられた形で、猿のやうに緑門を攀ぢ上つて行くチャップリンを見上げてゐる。彼は見る見るうちに緑門の眞正面の、WELCOME の額の上のところに突立つて、山高帽にちよつと手をかけることに依つて、彼一流の挨拶を觀客に送るのである。そして忽ち寫眞が變る。

チャップリンは人力車に乘つた、あなた方がさういふ場合に彼がさうするだらうと思ふやうに彼は乘るのである。だが、乘つて、それが走り出してからも彼は少しもぢつとしてゐないで、いきなりひよいと飛上つたかと思ふと、踏臺の上に腰をかけて、然し本當にそこに腰を下ろさないで、さういふ恰好をしてゐるだけで、地面についた足は、前に轅棒を持つて走つてゐる車夫のそれに合はして、極めて巧妙に走つたり、そこで急に車が輕くなつたので車夫が振りかへると、彼は忽ち輕業師のやうに元の位置に飛び戾るのである。かと思ふと、彼は幾度もその車の上に立上つて、ちら〳〵と正面に向つては彼一流の仕方で觀客の方に挨拶をする、或時などは危く帽子を飛ばしさうになつて、見物の人たちも

皆々はつとする、途端に彼の右手に持つてゐた杖がひよいと延びたかと思ふと、山高帽は空中でその杖の先に止まるのである。だが、幾ら彼の身體が輕いと言つても、そんな風に一刻も車の上でぢつとしてゐないので、屢々車夫は引きにくゝなつて立ちすくんでしまはなければならなかつたし、追々に見物の群集は增して來て途を邪魔するので、結局自動車に乘換へることになるのである。

次の場面では、チヤツプリンの一行は小さな銅像の立つてゐる公園にやつて來る。この邊から觀客の頭に、その地方を知つてゐるもの知つてゐないものに拘らず、次第にその土地が何處であるかの想像がついて來る。現に寫眞がその銅像の大寫しになるところでは、例に依つて和洋兩文で「日本のナポレオン、豐臣秀吉の銅像」といふ見出しが附いてゐる、それは日本のナポレオンが軍扇を持つた片手を擧げて、遙かの空中を睥んでゐる像である。そこで寫眞が鳥瞰的な映寫になつて、前景に小さく、軍扇を擧げた銅像が向う向きになつてゐる、その彼方には、最も近くには閭屋根を持つた洋風の建物があり、つゞいてホテル風の建築が見え、鐵橋のかゝつた川が流れてる、その向うにはまがふ方なく數多の日本建の家々の屋根の海があつて、それ等を越した遙かの遠方に、可成り立派な日本の古城が見えるのである。卽ち銅像の人物は軍扇を擧げて、その城の方を睥んでゐる體と見えるのである。「これや大阪らしいね、」とその時觀客席の彼方此方で言ひ交される聲が聞かれる、「成る程、さつきの停車場は大阪のステーションなんだらう。」

その時、寫眞は銅像の傍の景色に戾つて、そこへチヤツプリン一行の自動車が到着するのであるが、それがすつかり止まり切らないうちに、扉が開いて、チヤツプリンの顏が覗いたと見る間に、ひらりと彼は地上に飛び下りる。が、いつもの彼の本國でやる場合と違つて、彼の相棒になる筈のバスタア・キイトンも、シドニイ・チヤツプリンも、さてはエドナ・パアギアンスもゐないので、一々の仕草にひどく骨が折れるやうに見える。この際當然彼の藝の引立て役であ

るべき日本の活動俳優諸君は、遠慮してゐるのか、呆氣に取られてゐるのか、全く木偶の坊のやうに無能に見えた、然し相變らずチヤツプリンだけは一所懸命に活躍し、愛嬌を撒かうとしてゐるのであつた。彼は例の二本の足が菱形に見える歩き方でつか〳〵と銅像の方に進んで行つて、二三度それを見上げたり見下ろしたりした末に、ひよいとその柵の一本の棒に飛び乘つたと思ふ拍子に、寫眞は忽ち前の鳥瞰的な全景のに變つて、見ると、前景に小さく見える、向う向きの軍扇を擧げた銅像の傍に、影法師のやうにチヤツプリンが攀ぢ上つて來るのである、小さな銅像であるが、流石にチヤツプリンはその三分の一位にしか見えない。やがて、彼はその銅像の英雄が立つてゐるのと同じ臺石の上に立つて、英雄が軍扇である代りに、彼は彼の馴染の杖を持つて、銅像の形を眞似て、遙かに見える古城の方を杖で指さしながら睥む見えをする。そこで寫眞が變つて、チヤツプリンの一行がその古城を訪問する光景に變るのである。

想像された通り、その古城は大阪城の外のものではなかつた。チヤツプリンの一行はその大手門から這入つて行く。大きな石を持つてゐるので名高いその石垣の傍に來ると、彼はその杖でもつて、それがどんなに大きいかを計つて見たりする。或入口では、それが何でも師團の司令部になつてゐるので、鐵砲を持つた番兵が立つてゐる前に來て、彼はその杖を鐵砲の代りにして、番兵と向ひ合つてさゝげ銃の恰好する、そして杖を元に戾す時に過つたやうな振を裝つて、番兵の帽子を引掛けたりする。本當の番兵にそんな不埒なことをする譯には行かないだらうから、これは多分俳優が臨時の番兵を勤めたものであらう。その他いろ〳〵とあつて、それから大阪城の見物が終ると、千日前や道頓堀の雜踏を歩いたり、さてはチヤツプリンがその杖を少し派手に振り廻すと、一度に兩側の店の飾窓の硝子を壞してしまつたやうな狹い心齋橋筋を散歩したり、築港を見に行つたりして、最後に天王寺公園へと着くのである。

天王寺公園の東側の入口のところには、停車場前にあつたのと同じやうな、WELCOME の綠門が設けられてあつ

て、そこへチヤツプリンの一行の自働車が着くのである。もうその頃にはチヤツプリンも流石に大分疲れてゐるやうに見えた。その足が菱形に見える歩き方も、それが彼の一種の藝と見えて、それをすることを時々忘れさへした。

花壇の一つの場所に天幕張りの休憩所のやうなものが設けられてある、そして更に目に着くのは、その傍に上らうとする前の、瓦斯を一ぱい孕んだ葉卷型の輕氣球が置かれてあることだつた。輕氣球の腹には白い文字でWELCOMEと認められてある。ところが、寫眞がその近くを寫し出したので見ると、その輕氣球の根の周圍にはすつかり紅白の幕が張り廻されてあつて、それの一つの側には一寸した臺を設けて、その上に卓子が据ゑられてある、そしてその臺に向つたところは一面の廣場になつてゐた。即ち斷るまでもなく、そこで演説が始まるらしいのである。現に寫眞が寫つた時にも、その廣場にはもう大勢の群集が臺の方に向つて立つたり蹲んだりしてゐた。多分こゝでチヤツプリンが日本の民衆に向つて、役者である彼の贔屓客に向つて、「隅から隅までずいと……」といふやうな挨拶をするのであらう。

その想像は間違つてゐなかつた。チヤツプリンは一度花壇を通り拔けて、「新世界」に面した方の公園の中を彼方此方と散歩した後で、最後に輕氣球のある方へ歸つて來る。そして休憩所の天幕の中に這入つたところで、寫眞が變つて、もうすつかり群集で埋まつた廣場と、その向うの、輕氣球の根のところを仕切つた紅白の幕を背景にした臺と、臺の上の卓子とが映し出されるのである。即ち我々はそれを廣場に集まつた群集と共に見てゐる體になつてゐるのである。と、忽ち畫面の半分を占領してゐる群集の頭が海のやうに搖れ出して、蠅のやうに眞黒に見える人々の頭の海の中に、彼等の拍手する手が無數の蝶々のやうに搖れ飜つた。その時寫眞が正面の臺の方に一層近くなつて、右手の方から、禮服を着た見知らぬ老人を先頭に、立見とか、國枝とか、水島とか、即ち我々が顔馴染の日本活動界の男女の俳優たちその他、此度のチヤツプリンの接待役をしてゐた人たちが這入つて來て、正面の臺の左右に置かれてある十數脚の

椅子に着席するのであるが、當のチャップリンが未だ現れない前に、先の禮服を着た老人が臺の上に上つて、群集に向つて簡單な挨拶をした。その老人と入れ違ひに、突然、臺の後の紅白の幕の間を割つて、ひよいとチャップリンが首を出した、そしてその拍手に彼の山高帽子が幕の前に落ちかゝつたと思ふと、それより早く例の杖が幕の間から出て、もう少しで地面に落ちさうになつた帽子を受け止めると共に、幕の前にチャップリンはその全體の姿を現したのである。が、それと共に、又寫眞は少し遠くなつて、演壇に現れたチャップリンと共に、前の廣場に集まつてゐる熱狂的な群集全體を見渡すことになる。チャップリンは今や寫眞の中央、遙か彼方の臺の上の卓子の前に立つて、前の群集の歡迎に對する謝辭を述べてゐる樣子である。

が、遺憾なことには、この寫眞の眼目である手妻(トリツク)が、この邊で稍々破綻を來しかゝつてゐるのである。言ふのは、先にも言つた通り、チャップリンは築港見物の終り頃から、この天王寺公園の場にかけて、觀客にも分る通り可成り疲勞の樣子が見え出した。すると、その疲勞した恰好が、我々の見馴れてゐるチャップリンと著しく違つたチャップリンの恰好になるのである。それを見てゐると、觀客のうちの五分の一は「おや?」といふ氣持に打たれる。そこで、これ迄彼獨得の恰好ばかりに氣を取られてゐた觀客たちは、期せずして彼の顏に注意力をそゝがうとする。その時になつて我々がもう一つ不審に氣がつくのは、彼がそも〳〵停車場に着いた時、即ちこの寫眞が始まつた時から、彼の顏の正面を容易に觀客たちの方に見せないことである。それは勿論決して見せなかつたのではない、二三度、ほんのちらりとだが、正面を向いて見せたことがある。然しそれはほんのちらりで、餘り一瞬間である爲に、その顏が少し位我々の見馴れたものと違つてゐても、その時は決して我々に疑問を起させなかつたのであるが、この最後の場面になつて、それ等の記憶も一時に蘇み返つて來て、この「はて?」といふ氣持が擴大して來るのである。そして、それがこの最後の、彼

の姿が非常に遠く見えるところの、然し正面を向いた演說の場で、たとへ一部の觀客にではあるにしたところが、はつきりと「はてな？」と考へさせるのは、確にこの寫眞の失敗ではないだらうか。何故と言つて、もう極く僅の間だけ觀客をあやつつてくれたら申分がなかつたであらう。

無論、その演說の間も決してそんなに長い間ではなかつた、寫眞が再びその演壇に近づけられたかと思ふと、挨拶を終つたチヤツプリンは慇懃なお辭儀をする、彼は頭を下げたまゝの恰好で次第に後退りをして行くと、彼の後にある紅白の幕が左右に開かれた中に這入つてしまふ。そこで寫眞が一轉して、チヤツプリンはその幕の後で待つてゐた輕氣球に乘るのである。地上の群集は、盛んな拍手を送つてゐる、手巾を振つてゐるものもある、帽子を振つてゐるものもある。輕氣球は今しも上らうとする。そこへ接待役の人たちも集まつて來る。すると、ひらりと小鳥のやうに素早く籠の中に飛び乘つたチヤツプリンは、つゞいて乘り込まうとする接待役の人々を拒絕するのである。人々がどうした譯だらうと騷いてゐる間に、チヤツプリン一人だけを乘せた輕氣球がふわり〳〵と上昇し始める。前の群集は更に大喝采をする。そこで輕氣球の籠だけが大寫しになつて、我々は到頭氣がつくのである、といふのはその時はつきりと、近くで見るチヤツプリンは、チヤツプリンに似てチヤツプリンの外の人間であることを。が、觀客は自分たちの目を疑つてゐる暇がないうちに、その僞チヤツプリンは見る見るうちにその山高帽を地上に投げつけ、杖をほうり出し、もしや〳〵の髮の毛の鬘を脫ぎ、小さいブラシユ型の口髭をむしり取つて、から〳〵と人々の方を見下ろして嗤ふのである。そして寫眞は全景になつて、前の人々が呆氣にとられて見上げてゐる中を、輕氣球がふわり〳〵と天に向つて上つて行くところで、がちや〳〵と白と黑との縞が入り亂れて、暗くなつて、明るくなつて、そして寫眞は終る。――あなた方のうちにも、この馬鹿々々しい寫眞を御覽になつた方があるだらうと思ひます。

「この男を知つてゐる、おゝ、この男を！」と私は今から四五年前のことであるが、初めてこの寫眞を、東京の場末の或活動寫眞館で見た時、その主人公のチャップリンが、上つて行く輕氣球の籠の中で、帽子と杖と、髭と靴とをほうり出して、から〳〵と笑つたのを見た瞬間、思はず斯う心の中で叫んだ。「私の記憶の違ひでなかつたら、このチャップリンに化けた男は、さうだこの寫眞の場所も丁度大阪だ、私が十年前に大阪で知り合ひになつた茶谷半三に似てゐる、確に似てゐる、確に彼に違ひない！」

二

だが、果してその僞チャップリンになつた活動俳優が、私の今言ふ茶谷半三であつたかどうか、それは甚だ疑問でなければならなかつた。何故と言つて、その前の年と、その前の前の年と、二度つゞけて、さういふ方面から久しく消息を絶つてゐた茶谷半三が、文部省主催の展覽會に洋畫を出品してゐた記憶を私は持つてゐたからである。どんなに生涯に幾つもの仕事をしたり、或ひはしかけたりした人に聞いても、彼が一番最初に手を染めた仕事は最初の戀人のやうに懷しいものであるとの話である。即ち茶谷半三は、最早や彼は何年か前に三十歳の阪を越えたことに違ひない、心持が落着くと共に、神妙に洋畫に沒頭し出したのであらうと私は考へたのである。私はしかしさういふ機會がある每に彼に就いて興味をもつて考へるものではあるが、と言つてわざ〳〵手紙を書いて彼に消息を聞くほどに親しく交つてゐた間柄ではなかつた。現に私は彼が大阪の何處に住んでゐるかさへ知らなかつた。

私が彼を初めて知つたのは、私も亦その都に少なからぬ緣故を持つてゐるところの大阪で、それはその活動寫眞を見た時からして又十年も前のことであつた。當時私は東京の或私立大學の文科の學生であつたが、學校を怠けることを許

りのやうにして、毎日下宿の四疊半の部屋で煙草のけむりを吹いてゐたけれども、心の中は各々の、どんな二十歲の青年が抱いてゐる夢よりも、もつとの夢に惱まされてゐた。四月の末、私は同じ下宿住居をするのなら、たとへ一ケ月でも二ケ月でも、京都大阪で暮して見ようと思ひついて、女中のやうな小さな風呂敷包を一つ持つて先づ京都に着いた。それから半月ほど後に大阪へ行つて、そこの北區のとある裏町の素人下宿に腰を下ろした。大阪には私は三人や四人の友達を持たない譯ではなかつたが、或者は自分の家の商賣の爲に、事務所の簿記臺の前に坐つてゐたり、又或者は日曜の外は學校に行つてゐたり、他の者は會社に勤めてゐたり、一人として私のやうに朝から晩まで遊んでゐるものはなかつた、それでも初めのうちは彼等も夜の暇な時間だけを私の爲に割いてくれて、一緖に道頓堀や千日前を散步することを附合つてくれたが、それは一人についてせい〴〵二度か三度かで、いつ迄も彼等は私を歡迎してくれなかつた。つまり廣い大阪中で私のやうなものは一人しかゐないといふ譯だらう。

その頃、大阪の道頓堀の或町に一軒のカフエーが開業された。これは餘談であるが、同じ時分に東京の京橋區に開かれたカフエーと共に、これは日本の最初のカフエーだつたらう。暇で困つてゐた私には、それは救ひの手であつた、何故といつて、一杯か二杯かの珈琲代を拂ふことだけで、私はその片隅の卓子に五時間でも十時間でも坐つてゐることが出來た。それは未だ一般の人々が、この不思議な、洋食屋にしては派手で快活な家が、どういふ種類の飮食店であるか、誰でも這入つていゝのか惡いのか、その中で飮食するものはどういふものであるのか、と遠慮するやうな頃だつたので、その家の十數の卓子が滿員になるなどといふことは絕對になかつた。だから私は安心して、當時私にも珍しかつたそこの石の卓子の上に肘を突いて、出入りする客の眺めを樂んで時を潰すことが出來た。時とすると、私は午前十時頃から夜の十時頃まで、又或日は午後四時頃から翌朝の六時頃まで、（そのカフエーは徹夜營業だつたので、）何かを見張

りしてゐる刑事のやうにそこに坐つてゐた、そしてどんなに短い時でも、一日のうちで三時間より少なく私がそこに顏を出さないことはなかつた。だから私はその家の女給仕や番頭たちよりも、そこに來る客の種類や樣子に通じてゐると言つてよかつた。その中の大部分の者は唯の一度しか來ない、色んな階級の、それも大抵二人連れ以上の客であつた、中で少數の者だけが、翌日か或ひは二三日後に裏をかへして來た、そしてこの二度やつて來る客は大抵三度來、四度來、その度に同じ連れか變つた連れかを作つて來た、そしてさういふのは大抵二十歳代の、洋服を着た種類の人間だつた。近所の商店の小僧や中僧たちが、入口の硝子戶の外に交る交る三度も四度も顏を出して、結局中で最も勇氣のある者が先頭に立つて這入つて來たり、或ひは十一時頃に、芝居のはねる頃一度にどや〳〵と客が混んだり、さては夜更けの二時頃に二枚鑑札の藝妓を連れた男がぽつり〳〵と這入つて來たりするやうになつたのは、もう餘程そのカフエーといふものの存在が知られてからのことである。

不思議なもので、私自身がさういふ常連の一人であるにも拘らず、先に言つたやうな二度來、三度來、果ては三四日目には必ず顏を出すといふ風な、洋服を着た客は私の最も氣に入らない種類に屬した。何故かと言ふと、彼等の方でもいつとなく私を注意するやうになるし、私の方でもつい彼等の方をぢろ〳〵と見るやうになる、そしていつの時でも私が大抵一人ぼつちである反對に、彼等の方は屹度大勢連れであつた。即ち私を除いた、他の常連といふべき客は、必ず二人以上連れ立つて來たものである。が、その中で、例外として、時々一人でぽつんとやつて來る客が一人あつた、それが茶谷半三なのである。

初めのうちは、私はこの男も餘り好きになれなかつた。それは何も特別の事情からではなくて、誰でもさうであるやうに、斯ういふ場所で、斯ういふ狀態に置かれた二人の人間は、互ひに顏を知り合ひながら、言葉を交す機會を欠つて

しまつて、終ひには顏を見合はすことに苦痛を感じなければならなかつたからである。彼はいつの時でも、その頃には珍しかつた、背廣の下に襟のないワイシヤツを着てゐた、そして粗末な、短い一本の杖を持つてゐた、步き方などを見ると割合に輕快で、時々そこで知人などと會つた時の應待なども割合に氣輕らしく、さつぱりしてゐたが、唯、一人で卓子に肘を突いて、珈琲などを飮んでゐる時の恰好は、その襟のないワイシヤツの具合ばかりでなく、心持背中を丸くして、餘りぢろ〳〵他所見をしないで、稀に女給仕などにからかつてゐるらしい事もあるが、それが土地柄に似合はず淡白で、全體に於いて寂しい男のやうに見えた。多分これは大阪生れの人ではなかつたのだらう。

それが、斯ういふことが起つた。或晩、私がそのカフエーに行つた時、それより前に彼が來てゐた、それ以前に多分彼がそこに先に來て私が後から現れたといふ經驗は一度もなかつたに違ひないので、その時私が這入つて行くと、いつとなく、それが私の席のやうに定つてしまつたところの、向つて右の一番奧の端にある卓子に、彼が一人で坐つてゐるのだ。私は入口を這入つて、その晩は珍しく滿員に近いほど込んでゐたので、目を下げていつもの席の方への道を夢中で半分ばかり步いて行つた時、初めてそこに彼を發見してはつと立止まつた。その前に彼は私の姿を見付けてゐたらしく、矢張り多少狼狽した形で、半分中腰になつてゐた。

「あゝ、どうぞ、」と私は思はず斯う聲をかけて、あたりに空席がないかと探した。が、直にそれが見付からなかつた。

「今日はお休みかと思つて、」と彼は言つた、「替りませうか、この席を？」

「いえ、どうか。……ぢやあ失敬して私はこちらへ掛けさしてもらひませう、」と言つて、私は彼と卓子を隔てゝ向ひ合つた椅子に着いた。

「どうも挨拶をし遲れてしまつて……」と彼は頸のところへ手を上げながら、それを又急いで下ろして、ポケツトから

一枚の名刺を出して私の前に置いた。それには茶谷半三とあつて、肩書に「大阪××新報記者」とあるのを鉛筆か何かの筋で消してあつた。

「あゝ、新聞記者か。」と思ひながら、私は名刺を持つてゐないので、自分の名前を口で言つた。そして「××新報に居られたんですか？」と聞くと、

「えゝ、一ケ月半ばかり。」と彼は答へた。「然し、昨日止したとこなんです。」

彼の言葉は普通に聞いて東京辯であつたが、何處かに西國の訛が響くやうに思はれた。果して彼は二ケ月ほど前に但馬の方の田舍から初めて大阪に來たもので、そして一ケ月半の間××新報社の美術記者をしてゐたとの話であつた。だが、彼はその職業や境遇に就いては餘り話すことを好まないやうに見えた。その代り、彼は私に就いてもさういふことに就いては少しも聞かうとはしなかつた。さて、いろ／＼四方山の話をした後で、私たちが稍々話し疲れて、暫く無言の狀態で冷たくなつた珈琲をすゝつてゐた時であつた。ふと氣がつくと、彼は片手の拇指と人差指との間を一寸ばかり離して、そこに力を集中するやうな恰好で、頻りにその手を動かしてゐるのである。妙な事をしてゐると思へるので、私ばかりでなく、その近所の卓子にゐた客たちも恐くそれに注意を引かれた。私は初めのうちはなるべく默つて見過ごしてゐようと思つたが、相變らず彼が熱心にその不思議な運動をつゞけてゐるので、

「さつきから、それは何をしてゐるのです？」と私は堪らなくなつて尋ねた。

すると、彼は一瞬間當惑したやうな表情をしたが、直に、「これですか、これは君、この拇指と人差指といふものは、知つてゐますか、初めに斯う一寸ばかりの間隔で並行して立てると、幾ら力を入れてもこの指と指とはくつ附かないものですよ。……やつて御覽なさい。」と言つた。

それを聞くと、私ばかりでなく、近所の卓子にゐた客たちも、或者は公然と、又他の者は秘かに卓子の陰などで、各々彼が言つた通りに、拇指と人差指とを並行に立てゝから、それを豫め覺悟して、非常な力を入れてそれ等をくつ附ける運動を始めた。皆さんもやつて御覽なさい。——私もその時眞面目になつてやつて見たのであるが、何でもない、それは力など入れなくてもくつ附くのである。私がさうしたのを見ると、

「ハヽヽヽ、」と茶谷は輕い、空虛な聲で笑つて、「君も一ぱいかゝりましたね、」と言つた。「しかし、これは誰でも初め一度は掛るから面白いんですよ。」

それを聞くと、近所の卓子の、私同樣この子供らしい惡戯に一ぱい掛けられた人たちは、恐く怒つたやうに苦笑した、實際怒つたやうに。私も、私は腹は立たなかつたが、呆氣にとられた形で、仕方がないので矢張り苦笑をもつて答へた。——そしてそれが私と彼との最初の近づきの場面であつた。

實際、彼には斯ういふ何でもない、茶目的な性質が一面にあつたのは確だつた。私がその學校を怠けて、大阪に滯在して、日本最初のカフエーの常連として一日も缺かさず通つた時日は、七十何日であつた。そのうち試驗が始まつたので、その期間だけ二週間ほど東京に歸つて、それから學校の夏期休暇と共に再び大阪へやつて來た、そして又七十何日か滯在してゐた。だから、前後合はして、ざつと五ケ月ほど大阪にゐた譯になるが、その間に私が茶谷と會つた度數は五度以上ではなかつたらう。そして、たつた一度だけ、或晩の十一時頃、私たちが例のカフエーで會つた時、

「やあ、暫く、」と私は彼に言つた。「君とは始終會つてゐるやうで、そんなに會つてゐませんね。つまり僕は斯うして毎日こゝへ來てゐますが、君は考へて見るとたまにですね。」

「此頃は殊にさうなんです、」と彼は答へた。「といふのは、少し忙しいもんですから。」

「忙しいつて?」と私は聞いた。「又どこかへ勤めに出たんですか?」

「どう致しまして、どうも勤めは僕に向かないんです。僕の仕事を打明けませうか?」とそこで彼は大事を話すやうに聲をひそめて言ふには、「僕はこれで畫かきなんですよ。」

「なアんだ、」と私は心の中で思つた「然しこれは矢張り變つた男に違ひない、どうして畫かきであるといふことを、そんなに秘密にする必要があるだらう?」

「今夜も君は徹夜ですか?」と彼は暫くしてから聞いた。

「え、いや、」と私はこの彼の露骨な問に少なからず狼狽を感じて、「いや、どうしようかと思つてゐるんです。身を持ちくづすといふ事は女の爲ばかりに限りませんな。それよりも僕のやうなのが一番始末におへないんだと思ひます。」

「お互様ですよ、」と彼は言つた。「どうです、氣に入らなくなければ、僕んところへ泊りがけで遊びに來ませんか。」

元より氣に入るも入らないもなかつたし、外にすることもなかつたし、私は彼に附いて、玉造だつたかの彼の二階を借りてゐる住居に行つて見た。そこで、私は別に變つた事には會はなかつたが、一寸變に思へたのは、彼の狹い部屋の中に立てかけてある、澤山の描きかけや、下描きや、出來上つたのやの畫の、九分通りまでが日本畫であることだつた。

「君は日本畫をやるんですか?」と私が聞くと、

「さうぢやあないんですけど、これでないと食へないもんだから、止むを得ずです、」と彼は手早くそれ等の畫を片附けながら言つた。それ等の一々の落款には「茶里」といふ雅號が認められてあつた。

「變つた名前ですね、」と私が言ふと、

「え〻。僕は本當の號は、笑つちやいけませんよ、茶谷チヤアリイといふ毛唐ぶつた名なんですけれど、それぢや日本畫の客は承知しないもんですからね、それで、茶里はい〻でせう、」と彼は事もなげな調子で言つた。

それから間もなくの日のことであつたが、私は彼が印絆纏を着て、枠に張つた畫らしいものを肩に擔ぎながら、自轉車に乘つて町を走つて來るのに會つた。

「やあ、」と彼は辨で頭のところへ手を上げながら、何と思つたのか自轉車から飛んで下りた。そして私の傍に寄つて來て、「大變なところを見られましたな。……あ、此間は失禮。」

「何です、畫を持つて行くんですか。何處へ？　展覽會へ？」と私が聞くと、

「どうしまして、」と彼は言つた。「お得意へ持つて行くんです。つまり茶谷茶里先生は家に坐つてゐる體ですよ。僕は茶里先生の弟子兼書生なんです、今は。ぢやあ、さよなら、又。」

そして彼は可成り大きな畫を擔いだま〻で、ひらりと自轉車に跨るなり、私の前から早い速力で消えて行つた。チアリイ——これは即ちチヤツプリンと同じ名前である、そこへ持つて來て、私は彼のさういふ性質の一面と、嘗て畫を擔いだま〻で、輕々と自轉車に飛び乘つた彼の恰好を思ひ合して、『チヤツプリン日本に現る』の主人公を彼に擬して考へた所以である。だが、まだそれだけではないのである。

三

それから三四年經つた。私はその後ずつと東京にゐた關係からでもあらうが、茶谷チヤアリイの消息を殆ど聞かなかつた。その癖、その後追々知つたところでは、私にも彼にも共通した友人が二三人出來たのであるが、そのうちの誰に聞

いても、「さあ、どうしてゐるかな、一向聞かないな。」と彼等は答へた。そして誰もが一樣に言ふことは、さういふ彼に就いての具體的な消息は一つもなくて、彼が珍しく才走つた男だとか、頭がよ過ぎる程いゝとか、そんなにお喋りではないのに、何處か快活な、明るい感じのする男だが、內心はどうもその反對らしいところがある、「現に何あれだけの人物を大阪のやうな、謂はゞ地方に埋めておくのは惜しいと思ふよ。多分東京に出たら、何かの方法であの才能が現れない筈がないし、又認められない譯がない。」と彼等は口をそろへて言つた「が、あの男には致命的な缺點がある。それはあの男が何事にも一所懸命になれない、一つの事に執着の出來ない、物事に自信がないといふのか、或ひは何事にも見通しがつき過ぎて直に興味を失つてしまふ爲なのか、それともあの男の快活らしい表情の裏に始終ちら〳〵と窺はれる、妙に恥かしがるやうなところの見える性質が心の髓まで蝕つてゐるからだらうか、大抵のことをやり通さないうちに見限つてしまふ癖がある。……」等、等。

その頃のことであるが、或晩私は有樂座でバアナアド・ショウの『武器と人』といふ芝居を見たことがあつた。當時、私は極度に貧窮な生活に惱まされてゐたので、私が三度の飯よりも好きな文學とか芝居とかいふ方面のことは、たとへ新聞や回覽雜誌の頁で覗くことをさへ許されないほどその日その日を餘裕なく送つてゐた時なので、さういふ私が、誰に連れられて、どういふ機會でさういふ劇場の客となつたか今覺えてゐない。何でもその時、新田宏といふ、その頃の新劇團體のうちで有數な人物の一人が、そこで舞臺監督を兼ねて座頭を勤めてゐた。私はその時切り、この『武器と人』を本でゞも芝居でゞも見ないので、それの筋も、それに出て來る人物の名前もすつかり忘れてしまつたが、多分第二幕目かの時であつた、舞臺は誰かの家の庭園でゞもあつたか、そこには主人公の役を勤めてゐる新田宏の外に數人の男女が立つたり坐つたりしてゐた。そのうち、幕が開いてから相當の時間が經つてつたと覺えてゐるが、

その時、多分それ等の既に舞臺に出て居る人たちの間に、誰かそこへ現れて來る一人の人物の噂が出てゐたやうに記憶するが、兎に角、「あゝ、あの方がお見えになつた？」と言ふやうな期待の聲が舞臺の人たちの間に起るのである。そこで、人々が一齊にその方に目をやるので、彼等と共に見物たちも、ふと一瞬間劇場中が鳴りを鎭めた時に、舞臺上手の方から、カツタカツタと靴で舞臺の板を踏むところの――それは我々在來の歌舞伎芝居に馴れてゐた青年にとつて、恰も泰西近代劇の象徴のやうに、胸に一種のときめきを起させるところの、――懐しい音が起つて、やがてその足音の主が我々の目の前に現れたのである。その足音の主の芝居での役は何といふ名前であつたか、玩具のやうな綺麗な西洋の兵隊の服を着てゐた、それは多分その芝居の中では、女を除いて、男の役としては主人公の新川宏の次の重要な役割らしかつた。彼はどちらかといふと丸顔で、ゴム人形のやうな頬と、小さな頤を持つてゐた、そして恐らくそれは彼の初舞臺であらうと思はせる程に、幾分はにかんでゐる風に見えた。が、それは大勢の人が見物してゐるところの、劇場の舞臺に出たことを恥かしがつてゐるといふよりは、初めて知らぬ家に行つて數人の知らぬ人たちに會つた時に私たちが往々するやうなはにかみの表情であつた。自然、物の言ひ方や、身體の動かし方に多少ぎこちない感じが見えないではなかつたが、それが又斯ういふ場合の舞臺として却つて自然にさへ見えた。その時、私ばかりでなく、この芝居を見た多くの人々は、この俳優は今こそ少し素人素人してゐるが、將來は屹度いゝ新劇俳優になるだらうと期待したに違ひない。

「おや？」と私はその役者が舞臺に出て來た時思つた、そして急いで手に持つてゐたプログラムを調べて見た。すると、私の目の間違ひではなく、確かに「――」と役名を書いた下に、茶谷半三と認められてあつた。「この男は役者にもなれるのか、」と私は驚いて思つた。そして私はそんなに親しい友人でもなく、又これから別に親しくなるだらうとも思

はない彼ではあるが、然し何故か心の中で好きな男であつた、その彼の爲に遙かに觀客席から彼の成功を喜んだ。

茶谷半三のその次の芝居は、――或ひは私が見た彼のその次の芝居は、矢張り同じ有樂座で、出し物はアルツウル・シュニツツレル作『戀愛三昧』であつた、彼はそれの中の學生テオドル・カイゼルをやつてゐたかと思ふ。彼はもうこの前の時の『武器と人』に見たやうなぎごちなさから十分に脱してゐた。が、彼の特徴であるところの、如何にも舞臺の隣に彼自身の日常生活をしてゐる部屋でもあつて、そこからふら／＼と舞臺に出て來たといつた風な調子の、しかし彼の持前の幾分はにかんで見えるやうな態度はその時も未だ殘つてゐたが、それが却つて見物にいゝ感じを與へたのも以前の通りであつた。彼は全く從來の役者のやり方を脱した方法で、ヰイン人の戀の場面をヰイン人は斯うもあらうかと見えるやうに演じてゐた。第一幕の終、彼のテオドルが「さよなら、」と云つて、女たちと一緒に部屋を出て行く、彼とそして彼女等はそこから往來に出た體で、姿が見えないで、賑かな話聲だけを舞臺の方に聞かして夜の町を歸つて行く。さて、見えないテオドルがドッペルアドラアの旋律を口笛で吹いて行く音が聞える。舞臺では後の窓から部屋の主人のフリッツが、その往來の方を見送る、といふところでチリ／＼と鈴が鳴つて幕で下りるのである。その時の何とも言へぬ沁々した彼の姿、それは舞臺の上で扮裝してゐる彼ではあるが、私が彼との僅かな交渉のうちで、唯一のしみ／＼した彼の姿であるにも拘らず、何となくそれが彼の本來の姿の一部分であるやうな氣がして、今だに私の記憶に新たなのである。

それから二年ほどの間、彼は俳優生活をつゞけてゐたやうであつた。松井須磨子と一座して、彼女の相手方の役を暫くつゞけてゐたこともあつた。それから何々劇協會、何々劇社などと、いろ／＼な新劇團から迎へられて、彼は次第に俳優生活に根を下ろして行くやうに見えた。その間にたつた一度、どういふ用事があつてだつたか、私は或日彼が住ん

でゐた芝區の或下宿屋を、半時間ほど尋ねたことがある。それは私が彼と物言つたのは、大阪の玉造の彼の部屋へ行つた時以來のことだつた。それは取り散らすことで決して人後に落ちない私でさへ驚いた程、せめて俳優などになつたのだから、幾分綺麗になつてゐるだらうと思つた私の豫想に反して、實に亂雜な部屋の光景であつた。何でも私が行つた時、彼は何處かの芝居に出る爲に、出て行かうとして着物を着更へてゐた。その時、私が彼と交した會話のうちに、

「僕はもうこんな事止さうかと思つてるんですよ。」と彼は如何にも人氣俳優らしくない、しをれた樣子で言つた。

「だつて、折角これ迄やつたんだし、そして現に新劇の俳優として、君は有望な人とされてゐるんぢやないですか?」と私は可成り眞味で言つた。

「えゝ、だけど、そんな事……」

「ぢやあ、止めてどうするつもりなんです?」

「矢張り蕎をやらうと思ふんです。それに東京では僕には役者をしてる外に食ふ道がありませんから、そしたら大阪へ歸るつもりです。……いや、そんな俯道など迚も掛けられるものぢやありません。……大阪? えゝ、大阪にはまかり間違つたら叔父の家があるもんだから。」

そして、それ以來私は彼を見ないのである。舞臺で見たテオドルの感じと言ひ、又その最後に會つた時の、ひどく眞面目な調子と言ひ、それは私にまつたく豫期されなかつたものではなかつた。まして、あの僞のチヤツプリンとそれ等とは、全然別の人の表現であるやうに思へた。實際、彼は私が最後に會つた時以來、私の知る限りでは、到頭舞臺に現れなかつたやうだつた、そして私はそれから半年程後、誰からともなく、彼が大阪にゐるといふことを傳へ聞いたのである。だが、嘗て彼自身の書生兼番頭に化けて、蕎を擔いで自轉車で走つてゐた彼であり、更に俳優になつて舞臺にも

立つた彼である、——このチヤツプリンの寫眞は矢張り彼に違ひない、と私には思へてならぬのであつた。

四

だが、先に言つたやうに、私が『チヤツプリン東京に現る』を見た前の年と、その前の年とに、二度つゞけて彼が大阪から文部省の展覽會に、日本畫でなく洋畫を出品してゐたことは事實だつた。然し、その活動寫眞を見た時分、——それは卽ち今から三四年前のことであるが、その當時彼が佛蘭西にゐたとは私は夢にも知らなかつたのである、近頃私の友人の或畫家が、佛蘭西から歸つて來て次のやうな話を私に齎らす迄。——

彼は東京での俳優生活を切り上げて、大阪の叔父の家で居候をしてゐたのは、四五年もの間であつた。彼にとつて、結局それが彼の不幸であつたことには、彼の叔父の家は石版印刷を業としてゐた。だから、彼は彼の居候の報酬としても、時々は叔父の家の下畫を描いてやらなければならなかつた。何々汽船會社のビラには美人が船の欄干にもたれて海を見てゐる圖とか、何々釀造合名會社のビラには、一本の酒の罎に十人以上の心地よく酩酊した人間の顏が映つてゐるところとか、さては一寸した圖案とか、廣告の文案とかまで、彼は初めのうちこそ言はれた通りにそれ等の仕事をやつてゐたが、次第に馬鹿々々しくなつて來ると共に、持前の惡戯好きな氣持が湧いて來て、美人の肖像の目の下を目立たぬ程に黑くしたり、或ひは大勢の人間を描く時には、その一人一人を知人の似顏に描いたり、それが初めのうちは誰にも知られなかつたが、到頭叔父に知られて、暫くの間その家上離れてゐたことなどもあつた。さういふ事が、彼に折角成功の直近くまで行つてゐたところの、俳優生活さへ投げ打たした畫といふものに對して、次第に厭氣を催させる原因になつたやうに見えた。その頃から彼は每日每日カフエー通ひを始めた。

その頃の大阪はカフエーの全盛時代であつた、少し大袈裟に言ふと、一週間に一軒位の割合で大阪中に新しいカフエーが出來て行つた。私にも一二度さういふ經驗があるが、最早や冷たくなつた珈琲のコツプを前に置いて、所在なささうに卓子の上に頬杖を突いてゐると、先程から私の近くの卓子で、これも一人で卓子を占領して、氣がつくとその男は時々私の方を見ては何か話しかけたさうにもぢもぢしてゐる樣子に見える。そして到頭その男が他人を憚るやうな風で、こつそりと私の傍にやつて來て、こんな風に言ふのである。「××さんで入らつしやいますか、お名前は兼々承つて居ります、私は斯ういふものでございますが、」と彼は町名番地と名前と、そして肩に必ず新奇のカフエーの名前とを認めた名刺を出して、「今度斯ういふところへ、こゝの家などから思ふとほんの玩具のやうなものですが、唯せいぜい感じのいゝ、皆さんからお敎へをいたゞいて皆さんのお好み通りのものにしたいと思ひますので、一度お立寄りが願へましたら……」

これはまつたく大阪商人風なやり方に違ひなかつた。ところで、實を言ふと、先にも言つた通り大阪のカフエーの常連の草分である點に於いては、彼よりも私の方が一日の長だつたので、彼と私とがあの大阪最初のカフエーで時々顏を合はした時分に、私は二度ばかり斯ういふ經驗に會つたが、その頃は即ちその名刺を貰ふものは彼でなくて私であつた。その時彼は私に半分はひやかしで、半分は羨みから、「いゝ株ですな、今に君はカフエーの顏役といふやうなものになれますよ、」と言つたことがあつた。が、考へて見ると、その頃のは未だそんな事があつたといふだけのものに過ぎなかつたが、今いふ彼が二度目に大阪にゐた時分は、それこそそれが株の一種のやうになつて、初めてカフエーを開く者は、必ず彼のところへ挨拶に來たといふ位だつたさうである。無論、昔私に挨拶したカフエーにしても、その頃茶谷を招待したカフエーにしても、それは私たちその者を客として吸收する目的ではなく、私たちは謂はゞカフエーの裝飾で

あり、廣告であり、客寄せであり、言ひ換へると、近頃よく小賣商店の店頭に具へつけてある、蓄音機に比敵すべきものに違ひなかつた。だが、外に行き場がなく、又一つのカフエーで毎日を暮すよりも、時々違つた所に出かけられることは私たちの望みでもあつたので、自分の立場を顧みて苦笑を感じながらも、私たちは好んでさういふ境遇に甘んじてゐたものである。

けれども、私の時には、私はまだ學生時代であつたから、たとへ僅かな小遣錢とは言つても、たゞ貰つて來るところがあつたが、茶谷の場合ではさうは行かなかつた。現に彼は東京で俳優までして來たものである。彼は何か彼かして働かねばならなかつた。が、彼はいつとなく叔父の石版屋の仕事も止め、と言つて、外に何の職業らしい職業を持たなかつた。その代り彼はいつの間にか大阪の藝術家たちや、藝術好きの青年たちやの仲間での人氣男になつてしまつた、だから彼の現れるところには、いつもさういふ人たちが自然集まることになつた、從つて、何處のカフエーでも彼を招待することが、初めに思つたよりも一層彼等の商賣にとつて利益であつたことに驚いた位だつたといふ話である。だから、何處のカフエーでも彼から勘定の支拂を要求する者はなかつた。が、それでは此方の氣が濟まないといふので、彼は或所では壁畫を描いてやつたり、他の家では看板を描いてやつたりした。すると、彼のやうな才物のことであるから、それ等の看板や壁畫がいろ〳〵の方面の注意を引いて、或ひは劇場から看板や背景を、或ひは商店から看板や窓飾りなどを、到底彼がそれ等の注文に應じ切れないほど持込んで來るやうになつた。新聞社から文章を頼んで來たり、活動寫眞會社から彼を雇ひに來たりしたのも、多分その時分のことであつた

寧ろ、彼のやうに生れて來た者は、斯ういふ境遇で得意になつて、それで滿足してゐるならばよかつたのかも知れなかつた。が、いつの時でも一つの境遇が固まりさうになると直にそれから逃げ出すのは、彼が飽き性の爲であらうか、

或ひはより高いものに對する憧憬が起つてゞも來るのだらうか、そしてそれ等の一つの境遇から他の境遇へ移る時のやり方は定つてゐた。それはほんの少しばかり人が困るやうな種類の惡戲をすることであつた。それは多分彼として意識しないで自然さうなるらしく見える。自分の畫を賣るのに、彼自身の書生に化けて得意の家を廻つたり、俳優生活の場合ではわざと間違つた白を言つたり、會話の中で相手の役者の生活を諷したり、演じてゐる脚本の批評をしたり、そして又この際で言ふと、看板に動物の畫を描いて、その動物をそこの商店の主人の顏に似させたり、だが、さういふ事をやり出す時分には、彼の日常生活の半面には非常に憂鬱な影を生じるのが常であつた。だから、彼自身にとつては決して冗談ではないことに違ひない。「これではならぬ、」と彼は必ず考へるのだ。そして、さう考へた時、彼はそれが俳優の場合であつても、カフエーのごろつきの時代であつても、或ひは看板かきをやつてゐた時にしても、彼は屹度「畫をやらう、眞面目に、洋畫を勉強しよう、」と決心するらしかつた。所詮、洋畫が彼の生命取りであつた。

「君はそれだけの才を持つてゐるんだから、せめて秋の展覽會に出す位の畫を描くことは何でもないぢやないか、」と彼の友達が屢々彼に忠告した。「一年に一枚や二枚の畫を描くことは何でもないことぢやないか?」

それは今度佛蘭西から彼の消息をもたらして來た私の友人も、大阪で彼に會つた時彼に忠告したことである。

「二科會や、美術院では、確に君のやうな若い才人を歡迎するよ。ね、是非今年は出して見たらどうだ?」

「いや、二科會や美術院は止めよう、」と彼は何を思つたか斯う答へた。「俺は出すんなら文展に出さう。今年から一つ本氣でやるかな?」

「どうして? 文展なんて君らしくないぢやないか?」

「いや、二科會や美術院ぢやあ、つい當て込みの畫を描いてしまふよ、と言つて落選なんかするのは不愉快だからね。

俺のことだから、文展だつて矢張り當て込みをやつつけないとも限らないが、こいつは何にしても一番骨が折れるからね。それに、大阪あゝりぢや文展の作家と言つた方が、更に角賣るのに便利だから。……そして、金でもこしらへて洋行しようか。」

即ち、その年から彼は文展に繪を出したのである。「矢張り君、彼が言つた通り、ね、君も見たらう、あの『カフエーの一隅』なんて文展向きに描いてあつたね。」と友人は言つて、「あの男こそ自分の持つて生れた才分に呪はれた人間のいゝ見本さ。」と注釋した。つまり、それから、二年目の年の暮に、誰にも知らさないで、彼はこつそり佛蘭西の巴里へ出かけたのである、そこには、その一年前に行つてた前記私の友人初め、數人の彼の友達がゐた筈であるが、彼は巴里に着いてからもそのうちの誰をも訪問しなかつた。現に私の友人の畫家も、ふと往來で彼に會つたのであるが、それは彼が來てから一年以上後だつたとのことである。それは丁度私の友人の下宿してゐる家から半町と離れてないところだつたので、彼は彼の下宿へ茶谷を連れて行つた。

「何をしてゐる？」と彼は彼に尋ねた。

「何にもしてゐないよ。」と茶谷は答へた。

「ぢやあ、畫ばつかり描いてるの？」

「うゝむ、僕はもう畫も厭になつたよ。」と彼は答へた。「これから、我々が一生飯を食はずに勉強したつて、駄目だよ、君、セザンヌの頭から冠を叩き落せる自信があるかい。」

「……」友人は暫く默つてゐてから、「で、君は生活の方はどうしてるんだい？」

「生活の方かい、生活の方ね。」と彼は急に小聲になつて、「内所だよ、僕はね、今パテエ會社の馬の脚になつてるんだ

よ。内所だよ、内所だよ。何處か——さうだ、コックドオルへでも行つて飯でも食はうか、あそこの料理はうまいよ。」

その私の友人の部屋は五階の屋根裏部屋だつた。彼の部屋を出たところに、直に階段があつて、階段の壁一つ向うにエレベエターがあつた。彼等が部屋を出て、友人が階段の傍を通り抜けてエレベエターの方へ出ようとすると、

「君、エレベエターは止さうよ。」と茶谷は言つた。「僕はどうもこいつが嫌ひなんだ。」

と言ふので、二人は階段にかゝつた。すると、五階から一階だけ下りて來た時、茶谷は突然立止まつて、五階への階段と三階へのそれとの境目になつてゐる、曲り角のところにある欄干の柱をつかまへながら、「これはいゝな、これは珍しいな、」と叫んだ。

「何が珍しいんだ？」と友人が聞くと、

「こゝの梯子段は一階に就いて一つづゝになつてるぢやないか。何故つて、大抵のは一階に就いて二つづゝ、つまり一階の間に梯子段を二つに仕切つて曲げてあるだらう、だから、五階だと梯子段が十ある譯だ。が、こゝのは五階で五つさ、」と言ひながら、彼は元氣に梯子段を五階の上まで歸つて行つた。「それにこゝの稲妻形（ヂグザッグ）はうまくつゞいてゐるよ。」

「それがどうしたんだ？」と友人は元の方へ駈け上つて行く彼の後から、見上げて聲をかけた。

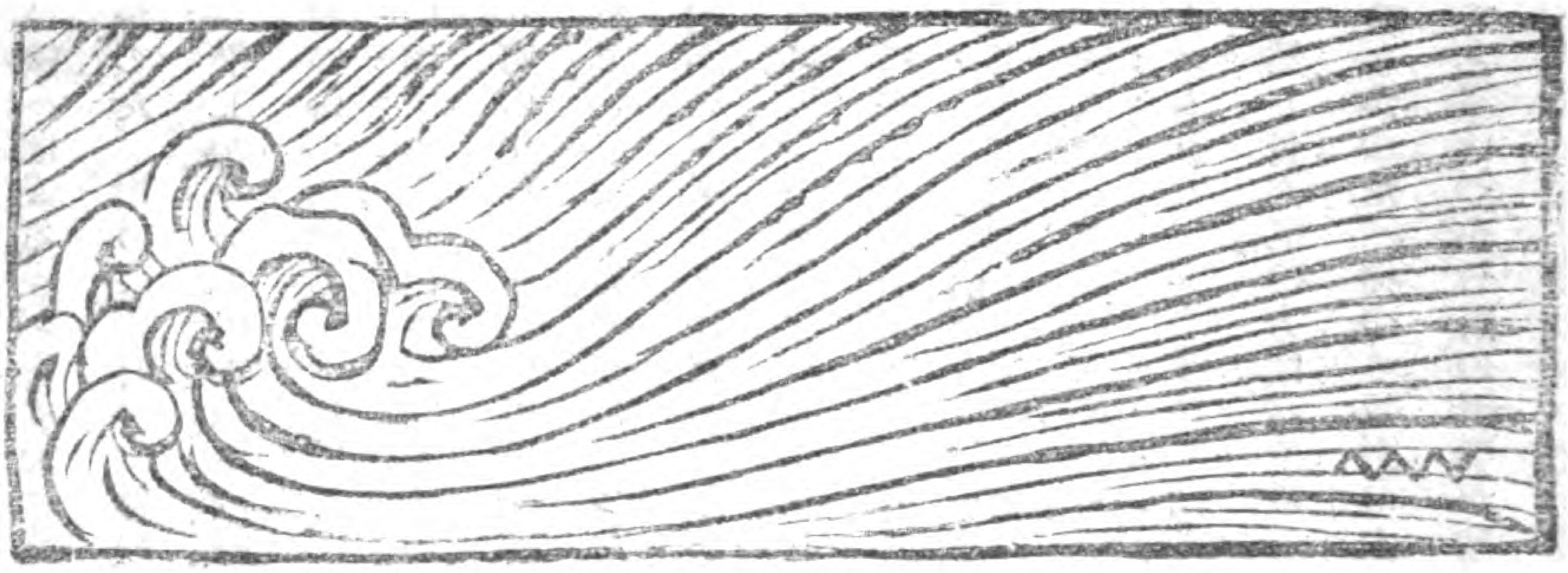
すると 茶谷はそれに答へる代りに、五階の階段の頂上の欄干の上に、ひらりと身輕に跨がつたかと思ふと、丁度子供の遊戯のやうに、一氣にすうつと四階の角まで滑り下りて來た。友人は呆氣にとられて、

「馬鹿だな、」と苦笑しながら言ふ外なかつた。

「ぢやあ、僕はこれで下りるよ、」と茶谷は笑はないで斯う言ひながら、次に四階から三階、三階から二階へと、欄干の上を滑つて行つた。

そして一階のところで、二人が顔を見合はした時、
「相變らずだね、君は、」と友人が言ふと、茶谷は聲をひそめて、
「ところが、この藝當で僕はパテエ會社に認められたんだよ」と言つた。——
そこで、私は友人の畫家に四年前に私が見たチヤツプリンの寫眞の話をすると、
「無論、茶谷だよ。」と彼は答へた。「僕はその寫眞は知らないが、その後佛蘭西でそのパテエ會社の彼の寫眞を見たことがあるよ。その時のプログラムの名前がいゝぢやないか、『日本チヤツプリン、——チヤアルス・チヤヤ』といふんだ、チヤヤがふるつてるぢやないか。それも矢張り、その日本のチヤツプリンが巴里の名所を見て歩くんだよ、そして最後がその稻妻形（ヂックザック）の階段を、欄干に跨がつて滑り下りて來るところだ。彼らしいね。」
「そして今でも巴里にゐるのか？」と私が聞くと、
「驚いたね、君は知らないのか、」と相手は急に嚴粛な顔になつて言つた。「新聞に出てゐたぢやないか、半年程前の。
——死んだよ。」
「えゝ！」私は驚いて叫んだ、「何處で？」
「伊太利でだよ、」と友人は言つた。「僕ももつとも誰からも通信は受けないがね、確かだよ、死んだのは。その新聞の文句も覺えてゐる、日本畫家自殺す、といふ題なんだ、日本畫家チヤアルス・チヤヤは一文なしとなり當地にて自殺を遂げた、とそれだけなんだ、伊太利のナポリだつたか何處だつたか、でゝ、通信社からの電報らしいよ。いや、間違ひぢやないそれだけの同じ文句が、どの新聞にもみんな出てゐたよ。日本畫家チヤアルス・チヤヤは彼の外にはないだらう。然し自殺は僕は間違ひだと思ふね、彼は自殺する男ぢやないよ。然し一文無しは當然だよ、彼のことだから、ゴンドラの上で冗談に逆立でもして、落ちたんぢやないかね。」
「成る程ね。しかし自殺もあり得るよ。」

一



雨蛙

志賀直哉

長與善郎兄に捧ぐ

A市から北へ三里、Hと云ふ小さな町がある。道に添ふた細長い町で、生垣が多く、店家は少なかつた。住民は大方土着の舊家で　分家々々と分かれ殖えた爲めに、百戸餘りの家が大體五つか六つの姓に含まれた。土地の人々は、道角の誰れ、籔前の誰れ、或は棒屋の誰れといふ風に呼び慣はし、その籔が十年前に伐開かれた今も、某が親の代に棒屋をよして居ても依然その儘に呼んで他の同姓から區別した。

町には昔から一つの組合があり、それで互に助け合つた。誰れが左ういふものを作つたか今は知らぬ人の方が多かつた。町を縦に貫く道は縣道よりも立派だつた。左右へ入る小路は冬の霜解け、雨期の泥濘は仕方ないとして、人の歩くだけは一ト筋に平石が敷かれてあつた。

例へば或る家が燒け失せる。左ういふ時それが再び元のやうに建てられる爲めには恐らく普通の半分の費用も要らなかつた。用材は共有の山林から殆ど只得る事が出來たし、勞力も一軒から何人として寄附される事になつて居た。然しかういふ町からも或時、町だけの生活に滿足出來ない者が出る。その者は都會へ出る。仕事をする。失敗する。再び歸つて來る。それでも、町の人々はその家を潰さぬだけの助力を惜しまなかつた。組合の同意を得れば低利資金を借出す事さへ出來た。左ういふ町であつた。

町の中程に土藏作りで美濃屋といふ造り酒屋がある。若い主の賛次郎は一人兒で中學時代には父の意嚮で理科大學を卒業し、家業を襲ぐ筈だつたが、五六年前その父に死なれ、急に一家の若い主になつた。同藏といふ祖父の代からの番頭が居、家業に差支へはなかつたが、家に主がゐなければと云ふ祖母の考で彼は市の寄宿舍から呼び返へされ、その儘家に居ついたのである。然し彼は此事に不服はなかつた。自分が理學士になつたからとて、もつとうまい酒を土地の人々に呑ます事が出來るとも思はなかつたし、學士になつて偉らさうな顏をするなど云はれないだけでも氣安い事だ、とこんなに彼は考へる方だつた。

賛次郎の親しい友に竹野茂雄といふのがある。中學を卒業すると東京の私立大學の文科に入り、詩や歌を作り、青葉といふ號で、文學雜誌に投書などして居た。彼は文壇の消息通で、よく左ういふ話を賛次郎に聽かした。

然し賛次郎の方は詩や歌を作らうとは思はなかつた。出來ないと思つてゐたし、興味もなかつた。そして本も餘り讀まなかつた。從つて竹野の左ういふ話も身を入れて聽いては居なかつたが、町へ歸り、その生活を幾らか單調に感じ出すと、いつか竹野の影響が彼に現れ始めた。彼は市へ出る度、何か左ういふ讀物を買つて歸るやうになつた。

竹野は投書家仲間の女と最初は文通に始まり、間もなく話は結婚するまでに進んだ。女は東京の水菓子屋の娘で美し

いといふ方ではなかつたが、若いにしては心のしつかりした女だつた。

竹野は三男で結婚には至極自由な身であると氣樂に考へて居ると、案外にも年の大分違つた長兄がそれに反對した。長兄には文學をやる女といふ事が先づ氣に入らなかつた。兩親は隱居し、總て長兄任かせになつてゐたから、その不同意は家全體の不同意も同樣だつた。竹野は腹を立て、家と絶縁し、A市で女と水菓子屋を開き、それで自活する事にした。

同じ頃、美濃屋の賛次郎も結婚した。遠縁の農家の娘で、彼は前から好きだつた所に祖母から云ひ出され、一も二もなく承知したのである。

せきと云ふ名だつた。無口で餘りはき／＼しない、學問のない、然し誠に美しい田舍娘だつた。脊丈のない事を當人は苦にして居たが、四肢の均等した發育がそれを少しも醜く見せなかつた。首から上の小さい、髮の毛の豊かな——髮は少し赤かつた——皮膚の滑らかな、鼻の形の正しい、そして全體に如何にもクリ／＼と肉附に彈力のある事が見るから健康さうな感じで何人にも一種の快感を與へた。一つ當人の知らぬ缺點を云へば茶色の勝つたその眼に光りがなかつた。

間もなくせきは姙娠した。その五月目、丁度秋の末、流感がはやり、彼女はそれに罹つた。姙娠の流感で人々は氣遣つた。そして實際胎兒は流産して了つた。で、せきはそれなり直つたが、せきの上を一番氣遣つた姑親が最後に同じ病氣に罹り、これは肺炎に進み、遂に亡くなつた。

——その時から今に三年經つ。せきはもう姙娠しなかつた。そして氣短かな祖母はよくその事を口にし、賛次郎に苦い顏をさせたが、當のせきは却つて氣にも留めなかつた。

白鼠の阿藏が中風に罹り、郷里へ歸つてからは贊次郎もいよ〳〵一本立ちで何事もやらねばならぬ身となつた——皆である。所で實際は氣丈者の祖母が永い經驗から、家事、商事、總てに采配を振つて居て呉れた。

贊次郎の文學趣味は少しづゝ亢じて來た。彼は座敷に大きな本箱を据え、それに新刊書の溜まつて行くのを樂んだ。そして近頃は自身でも短かい文章を作り、竹野に見て貰つたりした。

彼はせきにも左う云ふ方面の教養を與へたいと思つた。一人では何んとなく淋しかつた。が、せきにそんな事は無理だつた。贊次郎は以前の自身を憶ひ、察しられたから、落膽もしない代り、念ひ斷りもしなかつた。

或日竹野から葉書で、近日、市の公會堂で劇作家のＳと小説家のＧとが講演をする、その時は是非來るやうにと知らせがあつた。贊次郎はせきも連れて行きたかつた。彼は返事に其事を云ひ、女連れ故、一泊させて貰ふかも知れぬと書いた。

やがて其日が來た。十月にしては晴れて居ながら、いやに生温かい風の吹く日だつた。會は三時からで、早ひるで出掛ける事にし、其仕度をして居ると、手傳つて居た祖母が如何した事か不意に横に倒れた。陽氣が惡かつた。大した事はないが、病人を雇人任かせにしては出られなくなつた。彼はせきに云つた。

「お前はどうするか。竹野君が待つて居ると思ふが、お前一人だけでも行く方がよくはないか。お前が行けば私も會の模樣を聽く事が出來るし。左うしないか」

「へい」

「病人は私が居れば心配ない。案じず、ゆつくりして來なさい」

「へい」せきは無心な眼差しを向け、かう答へた。

間もなく待たせてあつた俥に乗り、出掛けて行つた。贇次郎は店前に立ち、その後姿を見送つた。今は田舍でも餘り見かけなくなつた廂髮を搖られながら、生垣の續く長い一本道を、せきは一度も振返えらず、段々に遠ざかつて行つた。

祖母は幾らか熱があり、常より赤い顏をして居た。贇次郎はうつら〳〵してゐる病人の枕元で本を讀みながら、時々額の手拭を絞り更へた。

酒倉の前で職人達が大樽の縮を締めて居る。その乾いたやうな槌の響が風音と混り合つて聞こえて來る。彼は合間々々にその方の見廻りもせねばならなかつた。

今頃はどうして居るだらう。彼は時々せきの上を思つた。大勢の聽衆の中に吞まれ切つて居る妻の姿を想浮べるとせきがさう云ふ場所に餘りに不調和な人間だつた事が今更に想はれた。

その晩、彼は祖母と枕を並べ、早く床に就いた。祖母とは何年振りかで同じ部屋に寢ると思つた。

夜に入り、風は靜まつたが、庇にぽつり〳〵雨の音がしはじめた。變に蒸々と寢苦しい晩だつた。病人は今は熱が下り、すや〳〵とよく眠入つて居る。雨は段々烈しくなつた。

翌日彼の起きた時には空は奇麗に晴れ、風は北に變り、秋らしく冷え〳〵とした氣持のいゝ朝になつて居た。彼より先に起き出た祖母は半白の髮をさつぱりと束ね、もう勝手元を働いて居た。

「買物もあるし、迎ひがてらAへ出ようと思ふが、もうすつかり快くなりましたか」

「あゝ快くなつた」

「それはよかつた」

彼は食事を濟ますと直ぐ自轉車で市へ向ふ事にした。前日とは急に寒くなつたので、彼はせきの爲めに肩掛けを風呂

數包みにし、自轉車のハンドルに懸けて出た。

實際氣持のいゝ朝だつた。道には小砂利が洗ひ出され、木や草には水玉がキラ〳〵光つて居た。薤畑の紫の花が黑い濕土と共に大變美しく見えた。遠い空に雁の淡い一列が動いて居る。彼はのび〳〵した樂しい心持で自轉車を走らせて行つた。

彼が水菓子屋の店前で自轉車を降りた時、竹野は帳板の上で、遠くから來たらしい林檎の箱を開けて居た。そして今まで俯向きに赤くなつた顏をあげると、當惑の色を浮べながら、前夜せきは迎雲館に泊り、今、此所に居ない事を告げた。贊次郎は眼を丸くした。せきと迎雲館、此對照が最初彼には甚しく滑稽に映つた。市一等の旅館で自分達には足踏ならぬ場所のやうに考へられて居たからだ。然しそれは直ぐ竹野の何か事ありげな氣配で、彼は何んとなく不安になつた。

竹野は着て居た厚司を帳場へ脫ぎ捨てると、先に立つて、薄暗い階子段から天井の低い店二階に彼を導いた。其所で竹野は彼に精しい事を話し出した。

前日講演會が濟んだのは既に日暮れだつた。續いて市の新聞社主催の歡迎會が昔藩主の別邸だつた淸々園といふ料理茶屋で開かれ、竹野はその方に出てたが、女連れはその晝、講演會場の樂屋で山崎芳江といふ土地の女子師範の音樂教師から講演者達に紹介され、その時の約束で、二人は芳江と宿の迎雲館でSやGの歸りを待つてゐた。

S、Gが烈しい降りの中を自動車で送られ、歸つて來たのは十時過ぎだつた。二人は可成醉つてゐたが、それでも女達の前には最初、割りに謹み深く見えた。

Sは色の白い、眼の優しい、柔かい髮が廣い額を斜に隱し、物云ひも丁寧に、聲も小さく、動作まで何所か女らしい

感じを與へる男だつた。Gは反對に眼、鼻、頭、首、總てが強い線でがつしり描かれ、肩幅もあり全體嚴丈で、何んとなく力強い感じに溢れてゐた。竹野の細君にはGの左ういふ感じが何となく恐しく來た。

　席には女の飲む甘い酒と果物とが運ばれ、然し人々は餘りそれに手を出さなかつたが、只芳江だけがそれを重ね、一人はしやいでゐた。

　芳江は男との關係ではよく噂に上り、Sとの關係もそれを知る者には寧ろ公然の秘密で、市での評判は餘りよくなかつたが、その豐かな肉體と聲と派手な性質とでは今は此市になくてならぬ女のやう若い連中からは思はれてゐる、左ういふ女だつた。

　皆は氣輕に話し合つた。SやGの話は講演の時より面白かつた。殊にGは自由に何んでもいひ、仕舞ひには女連れの前では憚かれるやうな事まで巧みにその露骨さを消して話した。

　せきは呑まれ切つて頬に卒ろな笑ひを浮べながら、淋しい眼つきで人々の顏を見較べてゐた。竹野の細君は左ういふせきが氣の毒でもあり、それに雨も止む樣子がなかつたからそろ〳〵歸支度にかゝると、幾らか醉つてゐた芳江が切りと止めた。一人殘る方がいゝ筈なのに、左う思ふ竹野の細君はそれを輕く受流してゐたが、芳江は惰性的に段々執拗くそれを云ひ張つた。心にもない我を通す芳江だから關はず歸らうとすると仕舞ひに芳江は本氣に怒り出した。そして捨鉢に、

「そんなら私も一緒においとましてよ」そして泣き出しさうな顏で男達を流し眼に見ながら如何にも甘えた調子に「ねえ、Gさん、私もおいとまするわ」

「左うかい」殊更無關心にGは答へた。「然し君にはSが何か用事があるんぢやないか」

「串戯云つちやいけないよ」Sはにやりとした。

「それぢやあ、芳江さんの方から用事があるのか」

芳江はいきなり荒つぽく起つて行つてGの脊中を二つばかり强く撲つた。Gは故意に平氣な顏を見せてゐた。

竹野の細君は居堪らない氣持になつた。そして吃驚してゐるせきを連れ、座敷を出ようとすると芳江は險はしい眼つきで寄つて來た。

「そんなら貴女はもうお止めしないわ。けど、せき子さんだけはお止めしてよ。せき子さんは何所へ泊るのも同じだわね。左うでせう？　此降りにわざ〳〵お歸りになる事ないでせう？」

「若しおよろしければお泊りになりませんか」Sも云つた。

「へい」せきは微笑し、かすかに點頭いた。

「お泊りになりますか？」

「どちらでも」

竹野の細君は吃驚した。そしてどういつていゝか分からずにゐる内、到頭力のある芳江の爲めに廊下へ押し出された。Sが起つて送つて來た。その後から芳江は勝誇つたやうにこんな事をいつた「いくら女だつて、堅いばかりが能ぢやあないわ」

贊次郎には話しの重さが分からなかつた。何んでもない事のやうでもあり、何かしら非常に困つた出來事のやうでもあり、見當がつかなかつた。只、それを話す竹野の意氣込が只事でなかつた。

下に俥が止まり、竹野は急いで降りていつた。間もなく階下から竹野の何か細君に怒る聲がして來た。
「えらい髪に結つて來られたよ」苦がり切つた竹野は還つて來た。
「どんな髪だらう？」
「直ぐ結ひ直さすよ」
「いゝぢやないか。僕もそれが見たいよ。せきのは餘りに舊式だからね。少しは新式にならんといけないのだよ」賛次郎は殊更氣輕に起つて行つた。薄暗い階子段の下にせきと竹野の細君とがぼんやり向かひ合つて立つてゐた。
「どう、髪を見せなさい」賛次郎は店の明かるい方にせきを連れ出した。それは耳隱しといふ髪で、頬に紅などをさした當世風が思ひがけなくせきには甚く似合つてゐた。
「よろしい。よろしい」賛次郎は恥かしさうに伏眼をしてゐるせきの尖つた小さい頤を指先に摘んで此方へ向けた。實際彼はそれから少しも厭やな感じを受けなかつた。せきは指先から頤を外し、又俯向いた。
「疲れたやうな顔をしてゐるね。直ぐ歸らうか？」
せきは首肯いた。
「講演は分つたか？」
せきは首を振つた。
「左うか。それはいけなかつたね。けれども山崎女史の唄があつたさうだね。いゝ聲だつたらう？」
首肯いた。
「昨晩、翠裳館では山崎女史と一緒だつたか？」

首を振つた。

「せき一人にされたのか？」

その時せきは横を向いた儘、意味の解からぬ微笑を浮べた。賛次郎はどきりとした。そして思はずせきの顔を見凝めたが、せきは二タ側になつた力のない眼差しでぼんやり遠く往來の方を見てゐた。賛次郎はそれ以上訊く氣がしなかつた。それは許されてない事のやうでもあり、それより訊くのが恐しかつた。訊けば直ぐ正直に答へるせきだけに恐しかつた。

彼の心は甚く亂された。

直ぐ歸る事にし、彼は又階子段を昇つて行つた。上では竹野夫婦が何かひそ〳〵話し合つてゐた。彼の足音で、細君は急いで起ち、段の上で昇り切る彼を待つて降りて行つた。賛次郎は出來るだけ平靜にと心掛けた。

伜の來る間二人は向かひ合つてゐたが、話が全でなかつた。賛次郎は火のない宣徳火鉢に窮屈さうな姿勢で兩手を突き、自身の心の空虚と戰つてゐた。出窓の千本格子を透して向ふ側の鏡賣屋の二階が見えた。赤地に白くメリヤスとぬいた大きな旗が秋の軟かい日差しを受けてゆらり〳〵大きく搖れてゐた。

「だうだ。肩掛けを持つて來た」賛次郎は不圖ぼんやりこんな事を考へた。

「伜が參りました」階下から細君の聲がして竹野は降りて行つた。賛次郎は何んといふ事なし、忘れ物はないかしらといふやうな氣持で部屋中を見廻はし、それから、暗い急な階子段を用心しい〳〵降りて行つた。

せきは店の蜜柑や林檎やバナヽなどを竝べた間の道に立つてゐた。竹野は懷手のまゝ、不機嫌な顏をして框に突立つてゐる。賛次郎はその足元に屈んで靴を穿いた。竹野の細君は函の大鋸屑から林檎を幾つか取出し、荒い目籠に入れて、

それを車夫に渡した。

「その内又來てくれ玉へ」

「ありがたう」贇次郎は尻端折りをしながら、響のない聲で答へた。

朝はそれ程でもなかつたが向ひになると風は寒かつた。せきは默つてゐる。話しかけても肩掛けに頬を埋めたまゝ、返事をしなかつた。打砕かれた淋しい心、何をいつてもそれに觸れさうな恐しさで、凝つと不機嫌に默り込んでゐる、左ういふせきであらうと贇次郎は思つた。耳隱し、頬紅などの當世風が先刻はよく思つたが、陽なたの田舍道では醜く見えた。

彼も默つてゐたかつたが、年寄りの車夫が彼を默らして置かなかつた。郵便の簡易保險は如何いふものだらうとか、A市の郊外に工場が出來るので、田より畑の方が値がよくなつたとか、贇次郎の町の某の息子が新潟の醫專を出て、市の病院へ來るのか、それとも町で開業するのかとか、左ういふ話題が盡きなかつた。贇次郎は車夫との話がつらくなつた。彼はせきの疲れを氣にしながら、

「どうだらう。此邊から歩からうか」と云つた。

縣道から町へ分かれる所に大きな榎がある。前夜の雨に打たれた枯葉が一面に散敷いてゐる。其所でせきは俥を降りた。果物の籠を自轉車に移し、それを曳き二人は肩を並べて歩いた。熟れ切つた稻の香が強く鼻へ來る。足元からけうるさく稻子が飛立つた。逃げまどつた一疋がせきの肩に止まり、暫く二人の道連れになつた。

せきは少しも口を利かず、贇次郎のゐるさへ意識しないやうに、ぼんやり遠い一點を見つめて歩いてゐた。その樣子が贇次郎には何かせきが其所に或る幻影を認め、それを見つめる事から氣の遠くなるやうな陶醉を感じて居るのではな

いかしらといふ氣が不圖して來た。打碎かれた淋しさの不機嫌としては餘りにその眼は何かを夢見てゐた。如何にも甘い夢だ。それに醉ふ一種の喪心狀態に思はれた。賛次郎には變にはつきりとせきのその心持が映つて來た。彼は思はず頰に血の昇るのを感じた。胸の動悸を聽いた。力に溢れ切つたやうなと云はれるGと、此美しい肉附きのせきと、此關係は實際不思議な力で彼の肉情を刺激して來た。彼にとつて、その事の想像は最早他人の戀愛事件ではなかつた。自身のそれだつた。

「あのね」彼は息をはづませながら、優しい聲で云ひ出した。「昨夜は一人でなく誰れが側に寢たか？」

「初めは芳江さんが寢てゐました」

「それから？」

「何時の間にか芳江さんが居なくなつてGさんが入つて來ました」

「それで？」

「GさんはSさんと芳江さんに追ひ出されて來たのだといひました」

「それで？」

「………」せきは急に下を向いた。

彼は不意に其場でせきを抱きすくめたいやうな氣持になつた。せきが堪らなく可愛い。そして彼は危くその發作的な氣持に惹込まれかけたが、ガタンと音のするやうな感じで我に還へると、驚いて其不思議な氣持から飛退いた。

「何んと云ふ自分だらう」

彼はそれきりもう默つた。そして自分の氣の靜まるのを待つた。然し彼の胸は淡いなりにせきをいとほしむ心で一杯

だつた。

暫くして、それは一方が田、一方が森になつてゐる所で、贇次郎は電柱に自轉車を持たせ、その道傍の草へしみ〲と小用を足した。長い小用だつた。其時彼は何氣なく上を見ると、電柱の中程に何か小さな青い物を認めた。何だらう？　左う思つて直ぐ、雨蛙だといふ事に氣附いたが、森の傍で何故こんな柱などに住んでゐるのだらうと考へた。雨蛙は其電柱が未だ山で立ち木だつた頃、其所から小さい枝が生えてゐた、その跡が朽ち腐れて今は臍のやうな小さな凹みになつてゐる、その中に二疋で重なり合ふやうになつて蹲つて居た。その樣子が彼には如何にもなつかしく、又親みのある心持で眺められた。その少し上に錆びた鐵棒の腕があり、蜘蛛の巣だらけの電球が道を見下ろして居た。雨蛙は其灯に集まる蟲を捕る爲め、こんな所につゝましやかな世帶を張つて居るのだ。これは屹度夫婦者だらう、左う思つた彼は、やがてそれが自分達の生活なのだと云ふやうな氣持になつた。彼はせきに雨蛙を示したが、せきは何の興味も持たなかつた。

間もなく二人は自分達の町へ歸つて來た。それは昨日のまゝの靜かな、つゝましやかな町だつた。いや、贇次郎には僅か數時間前に出たばかりの町だつたが、それが如何にも久しく見ない所だつたやうに彼には思はれた。

その夕、贇次郎は四五冊の小說集と二冊の戯曲集とを本箱から拔取ると、人知れず、裏山の荒地へ持出し、燒捨てた。



震災餘譚（一幕）

菊池　寛

人物

河村吉太郎。年三十三。洋服屋

妻おとよ。二十六。

おしん。吉太郎の母。

吉三。
およし。（吉三、およし）―彼等の子。

岡野茂助。おとよの父親。鳶頭。

吉次郎。吉太郎の弟。二十九。

弟子。

時。十二年九月五日。

所。小石川區初音町。

情景。電車通より、狹き路次を三間ばかりは入りたる家。入口が土間になつてゐ、直ぐ六疊がある。ミシン臺、大小の型を交へ五つ六つ一隅へ取り片づけてある。土間にも、腰かけてやる踏みミシン臺を置いてゐる。おとよ、小柄な善良さうな女、蠟燭に火をともし、ミシン臺の上に立てる。灯影で老母のおしんが片隅に坐つてゐるのが分る。午後七時頃。弟子甲斐々々しく身つくろひをし、手に棒を持つて歸つて來る。

弟子。お神さん、朝鮮人が湯島天神の井戸へ毒を入れたので、六十人ばかり死んださうですよ。

おとよ。（眉をひそめる）まあ。おそろしい事をするんだね。

弟子。松坂屋が燒けたのも、やつぱり朝鮮人ださうですよ。松坂屋へは、どうしても火が點かないので、前の岡野へ爆彈を投げ込んださうですよ。

おしん。おゝ恐い！　恐い！　此方へも、來やしないかね。

弟子。本鄕と小石川丈は、何うも出來ないのが、殘念だと云つてるさうですよ。

おとよ。あんなに下町を燒いときながら、まだ足りないのかしら。

弟子。でも、もう此方だつて、警戒してゐるから大丈夫ですよ。先刻も、こいこいやく閻魔のところで、朝鮮人が一人捕まつたさうですよ。

（その時、家かすかにゆれる。）

弟子。おや、ゆれてゐますね。

おしん。本當にいやになつてしまふね。妾も今年で六十一だけども、こんな恐しい目に逢つたことは初てだよ。

おとよ。本當に、いつが來たら安心が出來るのだらう。まだ電燈は來ないし……水道は出ないし……豆腐屋さんの非

戸は大丈夫かしら……。

弟子。大丈夫ですとも。あの井戸は、寢ず番をしてゐるんですもの……お神さん。何か喰物はありませんかね。どうもお腹がすいちやつて……。

おとよ。あゝさうさう。いつか、本所のお母さんに貰つたほしいかゞあつたよ。

（おとよ、立つて、箪笥の開き戸棚から、鑵を出してやる。）

弟子。こいつは、ありがたい！　少し貰つて置きますぜ。ぢや、行つて來よう。

おとよ。お前今晩は、十二時から先きぢやないのかい。宵の裡寢てゐたらどうだ。

弟子、氣が立つてゐて、ちつとも寢られませんや。今日は夜になつたら、通行する人を、一々調べるんですよ。

おとよ。今日もぞろ／＼隨分通つたはねえ。一體何處から何處へ行くんだらう。

弟子。春日町へ行つて御覽なさい。この前の通の三倍位、通つてゐますよ。一旦逃げた人達が、自分の家の燒跡を見に行くんですよ。中には、乞食のやうな恰好をしてゐるのが澤山ゐますよ。

おしん。燒けた人達に比べたら妾達は仕合せだね。

弟子。仕合せどころか、お殿さまですよ。親方は遲いな、今日あたり何とか、手がかりがあればいゝですね。……さあ、出かけよう。

おとよ。お前親方が歸るまでは、あんまり遠方に行かないでおくれ。

弟子。大丈夫ですよ。角の藥屋の前に居ますよ。

（弟子出てゆく。）

おとよ。やつぱりお母さんと兄さんは被服廠へは入つたんでせうか。

おしん。さうだね。何とも分らないけれど、お前のお母さんにしろ兄さんにしろ、落着いて居る方だから、案外たすかつてゐるかも知れないよ。

おとよ。ほんとうに、お母さんは何うしてお父さんと手を離したんでせう。……あゝ、孰ちらかにきまつてくれないとじつとして居られませんよ。

おしん。ほんとうに案しますよ。でも、今日は何とか手がゝりがありますよ。

（子供の吉三とおよしと歸つて來る。吉三は七つ位、およしは五つ。）

おとよ。お前達、何してゐたの！　日が暮れるまで、何處へ行つてゐたの。先刻もあんなに云つたぢやないか。家の前に居なければいけないつて。

吉三。だつて、おつ母さん。お閻魔さまへ炊出しを貰ひに行つてゐたのだもの。

おとよ。（直ぐおだやかになつて）まあ、おむすびを與れたのかい。

（兄妹、右の手を差し出す。二人とも大きい玄米のむすびを持つてゐる。）

おとよ。（前よりはずつとやさしく）でも、日が暮れる前に歸らないといけませんよ。

吉三。（うなづく。）……

おとよ。そんなに、大きいおむすびなら、一つをお前達二人で半分わけにして、一つの方はお婆さんにお上げなさい。

吉三。うん。よし子お前のをお婆さんにお上げ、兄さんがお前に半分やらう。

（よし子、おしんに渡さうとする。おしんそれをさへぎる）

おしん。妾は、けつこうだよ。折角お前達が、貰つて來たものだから、お前達でお上り。

おとよ。お母さん。いゝぢやありませんか。こんなに、大きいのですもの。

おしん。ぢや、半分丈貰はうかね。お前に、半分上げませう。

おとよ。妾は結構ですよ。

おしん。そんなに云はないで、お前も半分お上り。

おとよ。さう。ぢや半分いたゞきませう。

（おとよ、おしんの分けたむすびを受取る）

おしん。でもかうして、みんなが揃つて、おむすびをいたゞけるなんて、ほんとうにありがたいよ。

おとよ。ほんとうに、さうですわねえ。

吉三。（戸外を見てゐたが）お父さんだよ。

おとよ。（そゝくさと立ち上りながら出迎へる）お歸りなさい！　あなた何うして。

吉太郎。（頭を振りながら）駄目々々。いくら探しても駄目だ。まだお父さんは歸つて來ないか。

おとよ。えゝまだ。一所ぢやなかつたの。

吉太郎。今日は兩國を渡ると、二手に別れて探さうと云ふもんだから、別れたんだよ。

おとよ。まあ、さう。

吉太郎。いくら探してもとても駄目だ。

（上りがまちへ、へたばるやうに腰を下す。）

おとよ。（涙ぐんでゐる）まあ！　さう。
吉太郎。今日はお前、兵隊さんに頼んで、被服廠へ入れて貰つて、探したがあれぢや分りつこはないなあ。
おとよ。まあ。
吉太郎。十の死骸が、八つまでは黒こげで、男だか女だか年寄だか若い者だか、かいくれ分らないんだもの。
おしん。南無阿彌陀佛〳〵。
吉太郎。被服廠を出てからも、大川の岸をずつと探してみたが、あれぢやとても分りつこはないや。
おとよ。明日は、妾が行かうかしら。
吉太郎。俺も、もう二三日は行くつもりだから、お前もあきらめのために一緒に行かう。
おとよ。えゝ、連れて行つて下さい。
吉太郎。俺達のやうな居職の者は、一日あるくと、とても堪らない。足が、木のやうになつてしまふ。でも、ひきがへるのやうな恰好をして、大川を流れてゐる佛に比べると、俺達は幸せだよ。
おとよ。お母さんや兄さんなんかも、そんな恰好をしてゐるのかしら。
吉太郎。そら分らないよ。
おとよ。あゝいやだ。いやだ。考へた丈でも、ぞつとするわねえ。
吉三。お父さん、僕死人が見たいな。
吉太郎。何を云つてやがるんだい。この小倅め！
吉三。水道橋のとこにも居たつてねえ。

吉太郎。うん、彼處にも四五人ゐたよ。
よし子。お父さん、馬の死人も居るんだつてねえ。
吉太郎。馬の死人つて奴があるかい。馬の死骸だよ。馬の死骸ならあるよ。吾妻橋の手前に、馬の死骸に石灰をかけてあるので、何うしたかつて、訊いたら、罹災者が肉をすつかり喰つてしまつたので、見つともないから、石灰をかけたんだつて。
おとよ。まあ、お腹がすくと、獣のやうになるんだね。……さあ、御飯を喰べませうか。
吉太郎。喰べてもいゝが、鼻の先にまだ死骸の臭が喰ついてゐるやうで、飯がのどを通らないや。
おとよ。ぢや、少し待ちませうか。私達は、九時に喰べることにしたのよ。
吉太郎。うむ、俺も道で一杯十錢の牛乳と、梨をかぢつたので、胸が變につかへてゐる……それよりも、横にならう。
お父さんは、遲いね。
おとよ。何うしてゐるんでせう。一人で大丈夫かしら。
(吉太郎、奥へゆく。電車道から、さはがしい聲や警笛の音がきこえる。)
吉三。おつ母さん。一寸電車通へ行つてもいゝ。
おとよ。いけないつたら。
(吉三。叱られて、つまらなさゝうに横になる。)
よし子。(突然歌ふ)小さい子！　小さい子！　お前は何をしてゐます。
おとよ。いけません。こんなときに、歌なんか歌つちや。

（よし子、だまつてしまふ。おしん、南無阿彌陀佛〳〵と、ほのかに唱へる。急に戸外が、さはがしくなる。此方だ」「此方だ」「此方へつれて來りや分るんだ。」などと四五人の聲がする。弟子を先頭に、自警團の人々、銘々に提灯を下げて、一人の罹災民らしい男を連れて來る。）

弟子。お神さん。この人知つてゐますか。

おとよ。（駭きながら、近づいて提灯の光で見る。）いえ知りません。

自警團の人々。それ見ろ！　怪しい。……曲者だ！　やつつけてしまへ！　警察へ渡せ！

その男。怪しい者ぢやない。本所の罹災民だ。

自警團の人々。ウソを付け！　ぢやなぜ、お神さんが知らないのだ。

その男。玆は、たしかに河村吉太郎さんの家ですか。

弟子。さうだよ。俺の家なんだ。ねえ、お神さんこの人が、本所から燒出されて此方を訪ねて來たと云ふんですが。お神さん、御存じありませんか。

おとよ。知りませんね。もしや、貴君は岡野茂助の家の人々から、何かことづてを聞いて來たのぢやありませんか。

その男。いゝえ、違ひます……私はあのう……あのう……

おしん。（片隅で、ぼんやり聞いてゐたが、このときふと何かを認めたやうに上りがまちへ近づく）一體、何うしたの…

おとよ。おつ母さん。貴女、この方知りませんか……

おしん。えゝ……どの人ですつて……

（おしん、眼鏡を取り出さうとする）

その男。（急に）おつ母さんぢやありませんか。
おしん。えゝつ（見つめて）誰—
その男。吉次郎です！おつ母さん。
おしん。吉次郎だつて……えゝ……（よく見る。駭く）ほんとうに、吉次郎ぢや。吉次郎ぢや。まあ、何うおしだの。
まあ何うおしだのえ。吉太郎や、吉次郎が歸つて來ましたよ。
吉次郎。兄さんは、御無事ですか。
おしん。あゝ奥に居ますよ。吉太郎や。
自警團の人々。ぢや、やつはり此方の身寄の方ですな。それで安心しました。さあ、行かう。
（皆去る。弟子、ジロ〳〵吉次郎を見てゐたが同じく去る。）
おしん。まあ、お前何うしたんだい。お前東京に居たのかい。
吉次郎。本所に居たのです。（オド〳〵しながら）おつ母さん。兄さんは。
おしん。吉太郎おいで、吉次郎が、歸つて來ましたよ。
吉太郎。（無言のまゝ出て來る。激しい憎惡の色）……。
吉次郎。兄さん、お久しう。御無事でけつこうです。何のおかはりもなく。
吉太郎。手前は、なぜ歸つて來たのだい。
吉次郎。兄さん、すみません。私が惡うございました。
吉太郎。何がすみませんだい。手前は、お天道さまが、ひつくり返つたつて、歸つて來られた義理ぢやないぞ。こんな

地震位で、歸つて來られる義理ぢやないぞ。

吉次郎。よく分つて居ます、兄さんの仰つしやることは、一々御尤もです。どんな事があつたつて、この家の敷居を跨げられる義理ぢやありません。でも兄さん、本所の被服廠で命からがらの目にあつて、女房子は眼の前で燒け死ぬし……

およよ。まあ……。

吉次郎。外にたよる所がないものですから、それにお母さんや兄さんのお身の上も心配になつて久し振りで……

吉太郎。(やゝ意とけて)午前、東京に居たのかい。北海道に居ると云ふことは、聞いてゐたが……。

吉次郎。去年の暮に、東京へ出たのです。死んだ父ちやんや兄さんに迷惑をかけて、家を飛び出したもの〻いゝことがありませんや。でも北海道で、住み込んでゐた料理屋の主人がね、たいへん私に目をかけてくれましてね。去年の四月に女房を持してくれたのです、そして私が口ぐせのやうに、東京へ歸りたいと云ふものですから、到頭去年の暮に暇をくれて、商賣の元手として七百兩ばかり與れたのです。

おしん。それで、お前東京へ歸つて來たのかい。

吉次郎。さうです。去年の暮に歸つて、本所へ小料理屋を出しまして、この頃ではやつと得意も出來、どうかかうか店らしくなつて來ましたので、一人前になつたら、兄さんの所へお詫びに來ようと思つて、それぱつかりを樂しみにしてゐると、今度のさはぎでせう。女房と今年の春生れたばかりの男の子を、ムザ〳〵と眼の前で殺してしまつたのです(……とすゝり泣をする)

およよ。まあお氣の毒ですね、貴君も被服廠ですか。私の里の母も兄もやつぱり被服廠ですよ。父や母や兄と別れて、

被服廠へ行かないで、兩國橋を渡つて、逃げたものですから助かつたのです。

吉次郎。なるほど、……おゝ貴君は、嫂さんですか。初めまして、私は吉次郎です。もう八年ばかり前に、兄貴にも父さんにも不義理をして、家を飛び出したものです。……どうぞ、嫂さん！何分ともによろしく。

おとよ。なあに、そんな御挨拶に及びませんよ。こんなときは、他人だつて助け合ふんですもの。まして、親兄弟ですものいくら、不通だからと云つたつて……ほんとうによく來て下さいましたね、さあ、どうぞお上りなさい。

（吉太郎、尚默然としてゐる）

吉次郎。ねえ、兄さん貴君は、まだ氣持が悪いかも知れませんが、どうぞ勘忍してやつておくんなさい。もう、私も來年は三十でさあ。女房子も持つて、地道に世の中を渡らうと思つてゐた出鼻を、この地震でせう……少しばかり出來かゝつてゐた家財道具もめちやくちやで、スツカラカンになつてしまつたのです。その上、二十二になつたばかりの女房と誕生日も來ない悴とが、私の目の前……あゝいけない！　いけない！（眼の前の怖しい幻影を振り拂ふやうにする）

吉太郎。手前改心してゐたと云ふのは、本當かい。

吉次郎。本當ですとも兄さん。私が、どんなに地道に働いてゐたかを、兄さんに見せたかつた位ですよ。

吉太郎。本所は、何處だつた。

吉次郎。えゝ。龜澤町……

おとよ。おや、龜澤町……ぢや、妾の里の近くですわねえ。

吉次郎。（少しく狼狽して）えゝさうですか。貴女のお家も龜澤町ですか。何丁目です。

おとよ。貴君のお宅は……。

吉次郞。私の家ですか……えゝと、交叉點がありますね。

おとよ。えゝありますよ。

吉次郞。あれから錦絲堀の方へ向つて行くと……。

おとよ。右側ですか、左側ですか。私の家は右側ですよ。

吉次郞。私の家は、左側の横町ですよ。

おとよ。ぢや、横田と云ふ寫眞屋さんの横町ですか。

吉次郞。さうです。さうです。あの寫眞屋の横町です。

おとよ。ぢや、私の里の向横町ですよ。彼處に小料理屋が出來てゐたとは氣がつきませんでしたわねえ。尤も妾は今年になつて、一二度しか行かないんだから。

吉次郞。ほんとうに、嫂さんのお里があの近くにあると知つたら、直ぐに御挨拶に出るのでしたのに、失禮しました。

おとよ。それは、お互ひ樣ですよ。……さあ、どうぞお上りなさい。

吉太郞。吉次郞！

吉次郞。はい。

吉太郞。手前よく聞いておけ。父さんが死ぬときにな。あんな不孝ものは、たとひ俺が死んだ後でも、一足でも家の敷居を跨すことぢやねえと、繰り返して云つたんだ。手前、さう云はれたつて文句はないだらう。

吉次郞。尤もです。

吉太郞。が、手前も、地道に世の中を渡つて行かうと云ふ出發を、この地震でめちやくちやに叩きつぶされて、親は泣

きよりと、泣き込んで來たからには、今度丈は勘辨してやらう。
吉次郎。兄さん。ありがたう。ありがたう。
吉太郎。手前が身の振方が着くまでは、置いてやらあ。その代り、以前のやうなことが一寸でもあると叩き出すよ。
吉次郎。はい。解りました。よく解りました。
おしん。(欣んで)それでもよく無事で歸つて來ましたねえ。姿も北海道に居ることとばかりと思つてゐたんだよ。
吉太郎。井戸端へ行つて、足を洗つて來い。少し遠いぜ。あゝ吉三、お前案内してお上げ。手前一人で、井戸端なんかをウロ〳〵してゐると、また自警團にとつつかまつちまふ
吉次郎。本當に、先刻はびつくりしました。白刃を突きつけるのですから。
吉三。伯父さん、此方だよ。水道が出ないから、井戸までは半町もあんだよ。
(吉太郎と吉三と出てゆく。)
おとよ。あれが、いつか云つてゐた弟さんですか。
吉太郎。極道で仕様のない奴だつたんだが……
おとよ。でも、不思議ですわねえ。里の直ぐ近所に店を出してゐたなんて。
吉太郎。(默つてゐる)……
おしん。吉次郎が歸つて來たので急に氣がつよくなつたやうな氣がしますよ。
おとよ。ほんとうに賴もしいですわね。
(おとよの父茂助歸つて來る。袢纏を着た五十五六の元氣な老人)

おとよ。お父さん、お歸りなさい。
吉太郎。お歸りなさい。
茂助。(だまつてうなづく)……
おとよ。どうして、何か手がゝりがあつて……
茂助。駄目だ。駄目だ。
吉太郎。お父さんの方も駄目でしたか……
茂助。念のために、枕橋の方も探してみたが駄目だつた。やつぱり被服廠かな……あの中で、黑こげになつたんぢや、分りつこはないや。
おとよ。そんなこともありませんよ。今もね、宅の長い間不和になつてゐた弟さんが、やつぱり被服廠に馳け込んのだが、お神さんや子供さんは燒け死んだけれども、御自分丈は、助かつたと云つて、たよつて來たのですよ。
茂助。そいつは、……そんな運のいゝ人もあるんだな。(吉太郎の方へ向いて)そいつは、おめでたう。
おとよ。それがね、ちよいとお父さん。家の向ふ横町ね、寫眞屋さんの横町で、小料理屋を出してゐたんですつて。
茂助。あすこに小料理だつて……。
吉太郎。そんな家がありましたかね……
茂助。えゝと、……そいつは……いつからです。
吉太郎。去年の暮からですつて。
茂助。そんな筈はないな。あの横町は、袋になつて、十軒ばかりしか家がありやしない。それに、地震の直ぐ後に、俺

は商買柄一軒一軒、見舞を云つて歩いたんですからね……。

おとよ。横町が違つてゐるのぢやないかしら。

吉太郎。たしかに寫眞屋の横町と云つたぢやないか。

おとよ。たしかにさう云つたわね。

茂助。あの横町は、踊りの師匠が一軒あるばかりで、後はしもたやばかりだが。そいつは不思議だね。

吉太郎。（考へ込んでゐたが。憤然とする）おのれ！まだ根性骨が直つてゐないな！（立ち上らうとする）

おとよ。（すがりついて止める）どうしたのです。あなた。

吉太郎。あの野郎、このドサクサまぎれに出鱈目を云ひやがつて、俺の家へ歸つて來ようとしてやがるんだな！まだ根性が曲つてゐやがるんだ！畜生！叩き出してやる。

（夜警に用ゐるらしい木劍を取り上げる。）

おとよ。だつて、それやお前さん横町が違つてゐるかも知れませんよ。

茂助。本當だ、こんなときだ。みんな氣が轉動してゐるんだ、考へ違ひ思ひ違ひだ。

吉太郎。先刻、なんだか言葉をごまかしてゐると思つたが、あいつの昔からの出鱈目なんだ。自分の住んでゐる所を思ひ違へるなんて、そんなべらぼうなことがあるものか。野郎、北海道あたりで喰ひつめやがつて、揚句の果に出鱈目を並べて、ドサクサにつけ込んで歸つて來ようとしやがるんだ。何が被服廠だ！何が、女房子だ！馬鹿にしてやがら。歸つて來てみろ、叩き出してやる。

茂助。俺が云つたことから、そんな事になつちや、俺の立場がなくなるぢやありませんか。まあ、もつとよく落着いて

他人だつて仲をよくするこの際だから。

吉太郎。だつて　出鱈目もほどがあるぢやありませんか。着物は汚いが、ちつともやつれてゐないと思つたら、被服廠どころか何處に居たんだか分りやしない。

おしん。(オロ／＼してゐたが) でも、吉太郎。小料理屋をやつてゐたのが、嘘にしてもやつぱりお前、妾達の身を案じて何處からか來てくれたんだよ。いくら義絶になつてゐても、東京大地震だと云ふことを聞いて、私達の身を案じて歸つて來たのですよ。

おとよ。さうですわ。ほんとうに、おつ母さんの仰しやる通ですよ。

茂助。さうだとも、そんなに惡氣があつて、こんな所に飛び込んで來る譯はないや。

おしん。それが。お前、普通では足踏みが出來ないもんだから　あんな嘘を吐いたのですよ。あの子は、嘘つきでなまけもんだけれども、さう惡氣のある子ぢやありませんよ。

吉太郎。だつて、おつ母さん……。

茂助。まあ、い丶ぢやありませんか、吉太郎さん。この地震で、俺等初め、世間の人達は、替換のない親兄弟を失くしてゐるんですよ。お前さん丈ぢやないか。この地震で兄弟が出來たのわ。

吉太郎。……。

茂助。今度い地震で親兄弟の情愛のありがたいのが、皆分つたのぢやないか。弟さんだつて、東京全滅と聞いて、お前さん達の安否が氣になつて飛んで歸つたのだよ。

吉太郎。…………、

（この時、吉次郎と吉三と一緒に歸つて來る。初對面の伯父甥は、もう可なり親しくなつてゐる）

吉三。伯父さん、それからその馬を何うしたの。

吉次郎。さうさ、群衆の中を荒れるもんだから、女子供などはをどろいてきやつ〳〵泣き出すんだらう。

吉三。それで……

吉次郎。だから、伯父さんが荷物を放り出して、その馬に飛びついて、やつと四足を絜つて倒したんだ……

吉三。ほう……伯父さん、偉いなあ。恐くなかつたの。

吉次郎。伯父さんは、北海道の牧場で、何百疋と云ふ裸馬を手かけたことがあるんだもの……馬なんか、犬ころのやうにしか思はないや。……只今。

（吉次郎皆に挨拶する）

およよ。お歸りなさい。

（一座白けて、およよの外誰も挨拶しない。吉次郎は、茂助に一寸目禮した後、上りがまちに腰をかける）

吉三。（伯父にまつはりながら）それから、被服廠へは入つたの。

吉次郎。さうだよ。被服廠の中が、また大變だつたよ。

吉三。どんなだつたの。

吉次郎。とても、お話にはならないよ。黑い煙で、一間先が見えないんだよ。旋風が吹いて來る度に、眞赤に燒けたトタン板が、何枚も〳〵ピユー〳〵飛んで來るんだよ。それが、人の首に當ると人間の首がスツ飛んでしまふんだよ。

吉三。ほんとう！

吉次郎、ほんとうだとも、伯父さんは嘘なんか云はないよ。

吉三。旋風つてこはいの！

吉次郎。恐いとも、人間がビユー〳〵木の葉のやうに吹き飛ばされるんだよ。

吉三。自動電話が、空へ捲き上つたつて本當！

吉次郎。自動電話どころか、自動車が捲き上つたんだよ。

吉三。運轉手が乘つてゐたの……

吉次郎。（ドキツとして）乘つてゐたとも。

吉三。お客は！

吉次郎。お客なんか乘つてやしない！

吉三。先刻、一間先は黑烟で見えないなんて、そんなもの丈は見えるの。

吉次郎。（ドギマギして）そら、お前……そらお前……旋風で黑烟が吹きは拂れてしまつたんだ……

（みんな苦い顏をして聞いてゐる。）

おとよ。吉三、早く行つてお寢。よし子は寢てしまつたんだもの。

吉三。だつて、被服廠のこと　もつと伯父さんに話して貰ひたいんだもの。

茂助。貴君が弟さんですか。俺は、このおとよの父です。初めまして。

吉次郎。初めまして。

茂助。大變御近所に住んで居られたやうなお話ですが、ちつとも知らなかつたものですから。

吉次郎。いゝえ、手前こそ。

茂助。今さう云つてゐるのですよ。この地震で、親や兄弟を失くしたものが多いのに、疎遠になつてゐた兄弟が廻り合ふなんてどんな目出度いことだか分りやしないつて。

吉次郎。ほんとうですとも。私ね、東京へ歸つて商賣をやつてゐたものゝ、親兄弟に會へないのが、どんなに心細く思つてゐたか分らないのですよ。それが、この地震で詫びが叶つて、こんなうれしいことはありませんや。(涙ぐむ)地震前から心を入れ替へてゐたのですが、この地震ですつかりやり直すつもりですから、父さん貴君もどうぞ、兄貴同樣にお心やすく。

茂助。ようがすとも、

吉三。伯父さん、それからどんな事があつたの………。

吉太郎。吉三、ねろつたら。

(吉三。ベソをかきながら、奥へゆく。)

吉次郎。兄さん私は、どんなことでもやりますよ。どんなことでも………。

(弟子あはたゞしく歸つて來る。)

弟子。親方、とても手が足りないんですよ。もう一人出てくれろつて。

吉太郎。よし、疲れてゐるけれども………

(立ち上らうとする)

吉次郎。兄さん、私が行きますよ。私にやらせて下さい。

吉太郎。(默つてゐる)………

吉次郎。兄さん私にやらせて下さい。その木刀を借して下さい。

吉太郎。(先刻の木刀をまだ持つてゐる。暫く考へてから)これかい。(かしてやる)

吉次郎。(弟子に)さあ行きませう。

(二人出て行く)

おとよ。でも吉次郎さんは、疲れてやしないかしら。被服廠で………

吉太郎。馬鹿！お前まで、そんなことを信じてゐるのか。

おとよ。おほ………(かすかに笑ふ)でも直ぐ役に立つてくれるわねえ。

茂助。さうだとも、地道に働く男手ならこれからの東京で、いくらでも入用だよ。一寸面倒を見てやりや、直ぐ一本立になれるよ。

吉太郎。あいつは單衣一枚だつたな。おとよ俺のシャツでも持つて行つてやれ。

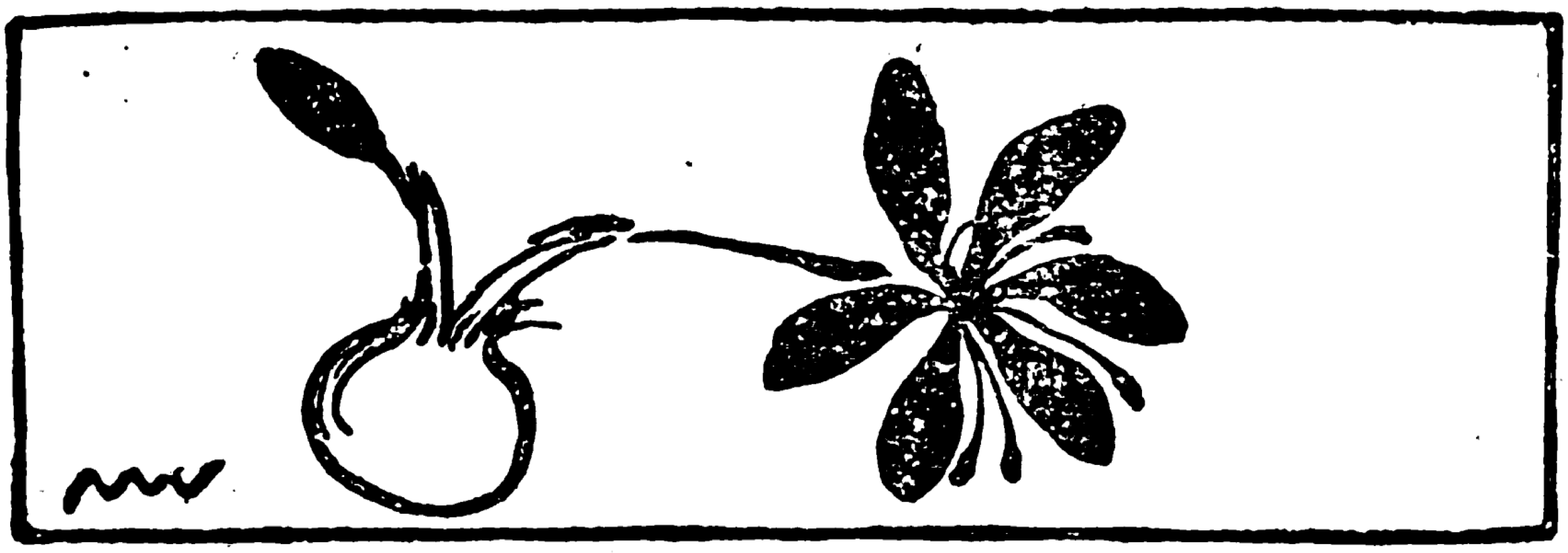
おとよ。はい。

(奥へゆく。)

おしん。私はこれで何だか心丈夫になりましたよ。………おやまた揺れてゐるのでないかね。

(二人天井を仰ぐ)

……幕……



顔

中條百合子

ルイザは、天氣にも、教父にも、又は夫のハンスに對しても、ちつとも苦情を云ふべき種のないのは知つて居た。

自分達位の身分の者で、村の誰が彼那行屆いた洗禮式を、息子に受けさせてやつたらう。四日の第二日曜日の其朝、天氣は申し分のない麗らかさであつた。暖い溶けるやうな日の色と云ひ、爽やかな浮立つやうな微風と云ひ。彼女は、ハンスと婚禮した時からの思ひ通り、由緒ある伊太利亞レースの肩掛にフランツを包んで、教會に行つた。

ハンスは氣張つて、きまりの献金のほかに、打紐で飾つた二本の大蠟燭と見事な花束とを聖壇に捧げた。

教父は至極懇ろであつた。

丁寧にフランツの頭に聖水を注ぎ「主の忠實なる僕、ハンス・ゲオルグ・ヨーストの一家に惠深き幸運を授け給へ」と、祈禱書にない文句さへ、足して稱へてくれたではないか。

けれども、ルイザは、教會からの歸り、見晴しのよいだら〳〵坂を、滅入つた心持で下りた。彼女には、仕立屋のカールが、不意とフランツをあやすのをやめた、そのやめかたが氣になつて居た。郵便局の細君が、フランツのくるまつて居るレースをこと更に褒めた。その褒めかたがルイザの心持を曇らせたのであつた。

彼等が、小ざつぱりとした安息日の盛裝で教會の廣場に現はれると、眞先に見つけたのは仕立屋のカールであつた。

彼は、のし〳〵と大股に近づいて來た。そして腕を振り廻してハンスと握手した。

「どうだね」

彼は、脂肥りのした厚い瞼の間から、ぢろりとルイザの抱いて居るもの丶方を見た。

「男かね、女かね」

ハンスは、口のまはりに微かにばつの悪さうな表情を浮べ乍ら低く答へた。

「男の子だ。――親父の名を貰つてやつたさ。」

「ほう！　男とはうまいことをやりをつた。せつせと金箱を重くしても、娘つ子に攫はれちやあ始らないからな」

仕立屋のカールは、ルイザの方にやつて來た。ルイザは初めての兒を褒められた嬉しさに、自分の方から瞼を曲げて挨拶をした。

「どれ〳〵、一寸のぞかせて下さい。儂でもこれで三人孫をあやして呼吸は知つて居る」

ルイザは、フランツの額の上からレースをどけて顔全體がよく見えるやうにした。

カールは、大儀さうに腰をかゞめ、キ、キ、キ、と舌を卷きあげ乍ら、年寄の愛嬌をふり撒いた。

「ふむ、なか〳〵よい兒だ。男になれよ」

が、彼は不圖訝しさうに眼をルイザの顔に移した。ルイザは彼が何か云ふのかと思つた。ところが、仕立屋はそのまゝ又さりげなく嬰兒を覗き込んだが、今度はほんのお義理で、ちよい〱フランツの頬を突つくと、さつさと、一言の挨拶もなく男達の群に戻つて行つて仕舞つた。ルイザは、鋭い痛みが、胸の眞中を刺しとほしたやうに感じた。

何と云ふ變な爺さんなのだらう。

程なく、ルイザの周りは新たに賑やかになつて來た。

彼女のまわりでは、女達の白い大頭巾が彼方此方に揺れ、絶間ない話し聲が漣のやうに擴つた。そのうち誰か一人が、後を振向いて一寸傍によつた。その前に喋つて居た女は、言葉を切つて其方を見、途をあけた。ルイザが縫物を習つたことのある郵便局の細君が、まるで町風に派手な帽子をつけ、踵の高い靴を耀かせて來たのであつた。

郵便局の細君は、ルイザに近よりきらないうちから誰よりも大きな聲で話し出した。

「まあまあ、立派な阿母さんにおなりだこと。ついこの間までほんのねゝさんだと思つて居たのに――」

ルイザの前に立つと、彼女は、傍で挨拶をした一人の女を見向きもせず、指環の三つ箝つた手を延して、レースをどけた。

「どれ、――ふうむ、いゝ兒だこと」郵便局の細君は、フランツの顎の下を擽つた。伏目になつて微笑みながら子供の顔を見て居たルイザはやがて、おやと思つて私に注意を集めた。フランツの顎を擽つて居た細君の、光澤のある指先の働きかたは、妙にのろくなつた。そして、ルイザにはつきり感じられた一種の感情をもつてそのまゝ止つてしまつた。下を向いたまゝ彼女は自分の顔と嬰兒の顔とが素早い偸むやうな一瞥で見較べられるのを感じた。指先は、そつとフランツのくゝれた軟い顎の下から引こめられた。そして、郵便局の細君は、ほんの一足ルイザからどき、殊更な、まるで溜息と一緒にはき出すやうな調子で云つた。

「まあ、結構なレースをお持ちだことね。」

ルイザはかつと眼の裏が熱くなるやうに思つた。

レースは確に結構なものであつた。彼女の曾祖母が、サクソニー太公夫人の侍女を勤めた時拜領した共は、まがひなしの伊太利亞絹レースであつた。ルイザは褒められるのは嬉しかつた。彼女が嫁入りに母親から貰つた唯一の本當に立派なものなのだつたから。けれども、この人は、又何と云ふ妙な云ひ出しようをするのだらう。

焦々した思ひがつき上げて來た。ルイザは、フランツの顏を見たまゝ、はツきり呟いた。

「何てお前はお祖父さん似なのだらう。私の子でないと思はれるよ」

然し、云つたあと、猶、ルイザの心持は悪くなつた。鐘が鳴り渡つて、ルイザも定りの腰架についたが、彼女には、自分達の捧げた二本の大蠟燭がちつとも他の蠟燭と違はない色や形で聖十字架の前に燃えて居るのが、ひどく物足りなかつた。焔が美しく揺れる度に「フランツの爲に、フランツの爲に」とでも、高らかに歌ひ乍ら輝いて呉れゝば好いのに！

ハンスは、ルイザの心持は知らず滿足して、大股に悠くり教會から歩いた。家へ妻と嬰兒を送りとゞけると、盛裝のまゝ、又出て行つた。

獨りになると、ルイザはためて居た涙をぽたぽた膝の上に落した。そして、頭を振つた。彼女には、今日自分が經驗したいやな思ひは、何でもない、たゞ、自分等夫婦とも、髮は金色で碧い眼を持つて居るのに、生れたフランツばかり何故か黒い捲毛と黒い眼をして居るからだと、はつきり分つたのであつた。

全く、フランツは、ひとによく目をつけられる兒になつた

村には彼の他に澤山、黑毛で黑い眼色をした男の兒が居る。それだのに誰も其等の兒には目をとめない。村の者でも、町から用事で來た者でも、フランツ、ヨーストの小さい顏を見ると、此世で初めて髮や眼の黑い子供に出逢つたやうに長い間凝つと彼を視た。

ルイザが一番氣にしたのは、其那にしげしげ眺め乍ら、彼等が一人として普通ごく自然にするやうに「ほゝう、好い子だ」とか「これは可愛い」とか喚い、彼女もよろこぶ感歎の言葉を洩さないことであつた。ルイザが見て居ると、或者は、殆ど、驚くべきものを道傍で發見でもしたやうに、眼を瞠り立ち止つて、無心なフランツを熟視した。けれども、傍の時計屋の入口で手を腰に當て、嚴しい顏で此方を見張つて居る彼女が母親だと判ると、俄に故意とらしく空咳をしたり、髭をしごいたりして、歩き始める。

フランツが自分に解らない理由で、理解出來ない注目の焦點になるのを見ると、ルイザは、何とも云へず不安に居心地わるく感じた。

追々片言を喋るフランツに、何か云ひかけて居る耳なれない大人の聲をきゝつけると、ルイザは

「フランツ！　フランツ！」

と、息子を呼んだ。

フランツは馳けて來る。

ルイザは、彼の顏や體を仔細に見まはし、何處にも別狀ないのを見極めて、裏に連れ出した。

「さあいゝ子は暫く此方へ來てお遊び、ガーガーが、フランツ來い來いと呼んでるだらう。」

裏は空地で、餘りよく耕されて居ない礫まじりの甘藍や蕪の畑、粗末な板圍ひの家畜小屋があつた。小屋の中には五

匹の親子づれの黒い粗—の豚が居た。三羽の鵞鳥は、フランツの前を走つて逃げながら、喧しい聲で鳴き立てた。フランツは、乾草熊手に跨り黒い捲毛をふり立てゝその後を追ひ廻す。

ルイザは、よく夫のハンスに云つた。

「お前さんは如何う思ひなさるか知らないが、私はあのフランツは苦勞の種ですよ。彼那小さいうちつから、彼那人に氣をつけられる兒と云ふものを見たことはありやあしない。それも、何で見られるのか判れば私だつて氣が樂だけれど」

夫婦が、店に續く奥の小部屋で木の卓子に向ひ合ひ、此那話をする時分、フランツは、彼の藁床でもうぐつすり寢ついて居た。

ハンスは、默つて、長いこと陶器のパイプを噛む。やがて持ち前の重い口調で云つた。

「時が來れば、わかるだらう。――まるでの案山子でもなさゝうぢやあないか――」

ルイザは、赤い更紗のカーテンで半分かくされて居るフランツの臥床を眺めた。

「――俺の大祖父(おほぢち)は矢張りあのちびのやうに黒い眼をして居たつけが――死ぬ時分には村の書記で、名も憶えられる者になつた」

ルイザは、默つて疑はしさうにちらりとハンスの顔を見る。二人はそのまゝ默り込んだ。四邊が餘り森として、夜の空氣の裡にフランツの寢返りうつ氣勢さいしないと、ルイザは突然譯のわからない不安に摑まれた。彼女は遽しく、而も跫音を忍ばせて、カーテンの傍によつた。そして、そおつとフランツの寢顔を覗き込んで、又自分の腰掛けに戻る。一寸氣がつかない間に、何處へか居なく成つてゞも居はしまいかと云ふ烈しい意味のない懼れが、ルイザを焼くやうな思ひで腰掛から追ひ立てるのであつた。

不思議な心配、ルイザの絶え間ないぼんやりした恐れの間に、フランツは段々成長した。

フランツは、小學を終る前の年、堅信禮を受けた。

その年の所聖節の夜の彌撒は、ルイザにとつて、婚禮の時のやうな晴がましい喜悦を感じさせた。フランツが、同じときに信徒名を授けられた少年と一緒に、初めて聖歌合唱をすることになつたのであつた。

定りの禮拜と祈禱とがすみ、教父がきらびやかな法服の裾を引いて聖壇の前の椅子につくと、ルイザは、我知らず胸に下げた珠數を握りしめて正面を見つめた。靜々聖壇の右側の扉が開けられた。純白の寛上衣をつけ、片手に譜本を持つた赫毛の男の兒が眞先に現れた。會衆のざわめきも他處に一人一人出て來る順に手繰り込むやうに目の前をやり過し乍らルイザはフランツの姿を待つた。

彼は、四番目に現れた。眞面目な顔つきで、自分の場所に立つと傍見もしない。後に二人のルイザに誰か分らない男の兒が續いた。

皆は一列に並んだ。一聲、長い、引くやうなオルガンの音が響き渡つた。四邊が水を打つたやうに鎭りかへつた。歌ひ手達は、一齊に兩手の間に譜を擴げた。期待に充ち滿ちた靜寂

オルガンは、徐に莊重な四重音で一小節歌の始りを前奏した。息をため、心をこめて六人の少年歌手は「ナザレのふせ家に」と云ふ文句で始る信徒生涯の聖歌を歌ひ出した。

ルイザは、子供のときから幾度も聽いたなつかしいその節をきくと、ぞつと身中にさむけが走るやうに感動した。彼女は、大蠟燭の焔の反射する、香の薫りのうつすり立ち罩めた腰架の上で、低く頭を下げた。

うつとりとして聽き入つて居ると、ルイザには、次第にフランツの聲ばかりが聞えて來た。たつぷりした響の美しい彼の聲が、眞心をこめて幅ひろく流れ下り又高まるに從つて、他の入り混つた幾つもの聲が、優しく一つ低音に漂つたり心も躍るやうに晴々高い聲で顫へたりする。

ルイザは、此迄一度もフランツが本氣で歌ふのを聞いたことはなかつた。何と云ふ立派な聲を持つて居たのだらう。

ルイザは、上氣せた顏を擧げ、讃歎でうるんだ眼をフランツに向けた。刹那に、彼女の相恰が變つた。彼女は、何とも云へない顏をして、無意識に傍に居る夫のハンスの方に片手を延した。

「フランツ、フランツ、フランツ――あれが、フランツ？　彼の神々しい――……」

ルイザは、瞳をつき出し、微に口をあけ　打れたやうにフランツを視た。

あゝ、まさか、彼方の聖畫に命が入つて、少年イエスが代つて立つて居るのではあるまいー

我を忘れて唱ふことに身も心も打ち込んで居るフランツの顏を正面から聖壇の大蠟燭が照して居た。小搖ぎもしない金色の輝の環の中で、彼の黑い、精神の燃えたかまつた二つの眼、清い唇、純白の寛衣と黑い捲毛とは、此世のものでなく見えた。ルイザが「聖母まりしあ、あゝ御母まりーあ様」とくづほれてしまつた程、その顏だち、姿は繪の少年基督に生きうつしたのであつた。

ルイザは、震へながら、幾度も幾度も十字を切つた。

「あゝお惠み深い聖母、此那ことがあつてよろしいものでせうか。私の眼は今迄何を見て居りましたのでせう、」

彼女は、始てフランツが人目を牽いた譯を知つた。誰が、お前の子はイエス様にそつくりだなどゝ、雜作なく云へたものか彌撒が終ると、フランツは、合唱仲間と村長の家へ廻ることになつて居た。

ルイザは、ハンスの腕をかたく握つて會堂を出た。空は寒く深く晴れ上つて、星が大きく燦いて居た。往來の左右にははきよせた四五日前の雪があつた。家々の窓から洩れる灯かげを横切つて、時々黒く人通りが過る。

暫く歩くと、路は廣い空地にかゝつた。ルイザは、ぐつとハンスの腕を引いて、彼の耳を自分の口に近く下げさせた。そして、なほよく前後を見廻した後、始めてわかつた驚くべき事實を彼に囁き聞かせたのであつた。

ハンスの、重い口は、思ひがけないことでまるで働きを失つたやうに見えた。彼は、

「ふうむ」と牡牛のやうに唸つた。

默つて考に沈み、凍つた夜道で一度二度足を辷らせ乍ら、夫婦は家に着いた。ルイザは、鍵を廻して入口の扉をあけた。

「お入りな」

ハンスは、戸口に立ち止つて、何か考へ乍ら獸皮帽を手の平で額の後にずらせた。

「いや――俺はフエリクスの店まで行つて來ずばなるまい」

ハンスは又帽子をかぶりなほして出て行つた。

わく／＼して居るルイザには、ハンスが歸つて來る迄に、どの位時が經つたのかまるで解らなかつた表の方に跫音がし、ハンスと一緒に思ひがけずフランツが奧の小部屋に入つて來るのを見ると、ルイザは、驚きの叫びをあげて立ち上つた。彼女は何か云ひ乍らフランツにかけ寄らうとした。が、ぴたりと止り、兩手を握り合はせ、殆ど畏怖の現れた眼でフランツを見た。彼はもう白い寛上衣は着て居なかつた。けれども、此程あり／＼わかる佛を、何故今夜まで見わけられなかつたのだらう。

ハンスは、帽子と厚い外套とを釘にかけた。

「連れがなからうと思つたんで、一寸よつて來てやつた。」

彼は、卓子の前に掛けた。少しの間ばつが惡さうに剛い髭を指先で撫で、やがてフランツに云ひ始めた。

「今夜は滅法好い聲で唱つたた、」

彼は衣囊をさぐり、一挺の小刀をとり出した。

「ほら、今日の祝ひだ。失さないようにしろ。」

フランツは、嬉しさうに莞爾々々した。

「ほう！　兩刄だね」

ルイザは、卓子の彼方側から、熱心に父子を見守つた。ハンスが妙に口を利き難さうにし、何か心に考へを持つて居ることが彼女によく分つた。フランツがすつかり滿足し、刄をすかしたり、彫りの模樣を檢べたりする樣子を見、ハンスは、更に細長い棒のやうに卷いたものをとり出した。

「これもまあ記念の積りだ。――机の傍の壁にかけられる大きさだと思ふが。開けて見ないか」

フランツは、ナイフを置いて、結びめを解いた。そしてくる〳〵と少し內側を擴げると、彼は感歎の聲をあげた。

「ほゝう！　これ！　まるでいゝや」

フランツは、手一杯に擴げたものをルイザの方に向けた。一目見、彼女は息が窒りさうになつた。それは聖畫、しかも先刻會堂で、彼女が、その中の基督がフランツか、フランツがその救主かと震へ乍ら見た少年イエスが博士達と問答をして居る畫であつた。

ハンスは、ルイザの愕きをわざと見ず、フランツに何氣なく云つた。

「腕一杯だな――脇榻に下げて見よう」

彼はフランツを助けて、二つの壺を重しに使ひ、榻からその聖畫を下げた。燈の工合で陰翳(かげ)が淡くなり、遠くから眺めると、若いイエスの唇からは今にも活々した聲が響いて來さうな程、畫中の人物が浮あがつて見えた。

親子三人は、默つて凝つと其方を見た。やがて、ハンスが息子に云つた。

「一寸あの畫の傍に立つて見ろ」

フランツは、怪訝さうに父親と母とを覗た。

「――お前の背があの畫の何處まであるか見て置きたいのさ」

ランツは、歩いて行つて額のそばに立つた。

「これでいゝ？」

「もうちつと畫によつて」

フランツは、畫中の基督と同じ高さに顏を並べた。ハンスは思はず深く唸つた。ルイザは、肱でひどく夫の脇を突き乍ら、居たゝまれないやうに呻いた。

「御覽なさい！　あゝまりーあ、聖(さんた)まりーあ」

ハンスは、のそりと立ち上つた。

彼は、忽然として自分の目の前に現れた二つの少年イエスの顏を見、名狀出來ない氣持に打れたのであつた。

其晩、夫婦は長いこと床の中で目を醒して居た。ハンスは、彼の考へになれない頭で、自分達親子の運命を思ひ惑つた。自分のやうに學問も德もない平民に、何故彼程、救世主に似た顏つきの息子を授けられたのか。考へれば考へる程

四

眠らな　なつて、彼は、ひとりでに太い溜息を洩しては、寢返りを打つた。

ルイザは、絶え間なく聖母まりーあを稱え乍ら涙を流した。ハンスが大きな體軀で寢返りを打つ毎に少しづゝ傍にずつて遣り乍ら、彼女は、フランツの髮や眼が黒いことを私かに不平に思つたり、後の子達の生れない苦情を訴へたりしたことを、慈悲深い聖母に謝罪した。

この事があつてから、ハンスとルイザとは、自分の息子に對する心持を變へた。彼等は、フランツを、時が來る迄——それは勿論いつか判らないが——自分達にあづけられて居る者と云ふ恭々しい感じを深めた。もう、人が目をつけることをゝ恐れなかつた。誰か、

「あれはお前さんの息子かね」

ときゝでもすると、ハンスは元のやうに眼を逸するやうなことはせず鄭重に答へた。

「さやう、あれはフランツ・アルブレヒト・ヨーストです。」

少年のフランツ・ヨーストは、次第に自分の生活が、何だか他處の子とは異ふやうなのに心付き始めた。

例へば、隣りのエルンストは、彼と同い年であつたが、よく親父に怒られて耳を引張られた。自分は唯の一度でも父親に耳朶をつねられたことがあるだらうか。

忘れられないことがあつた。

丁度堅信禮を受けて間もない或日、彼は、直したばかりの自鳴器(オルゴール)つきの懸時計を、仕事場の此方から、彼方の壁に持つて行つて吊ることを云ひつけられた。

フランツは、時計を捧げて二三間歩いた。が、ちよつとうつかりした機勢に何かに蹴つまづいた。はつと思ふ間に、大事な時計は彼の兩手からすつ飛んで、いやと云ふ程彼方の箱にぶつかつてしまつた。

フランツはぎよつとして首をちゞめ、立竦んだ。ハンスは鳴怒り乍ら飛んで來た。そして、ぐつとフランツの肩を掴んだ。がフランツが、あやまらうとして父親の顏を見上げると、彼は何故か、默つてそろ〳〵手先の力をゆるめた、がてすつかり肩から手をはづした、そ て、却つてフランツを恐れさせた靜かな口調で一言

「もうよい、彼方へ行け」と云つた。

フランツは、その時、如何那に父親に怒つて貰ひたかつただらう。彼はしんから父に氣の毒に思つたので、出來るなら頬の一つも打つて欲しかつた。勿論泣くだらう。けれども、父親が、彼にさへ感じられた努力で癇癪を抑へるのを見るよりは、ずつと後がからりとしたに違ひないのだ。けれども、父は、他處の父親の怒るやうには怒らなかつた。それがフランツに 寂しさを與へた。

母親についても、彼の感じは同じであつた。他の村人や學校の教師についてさへも。

フランツは、何故か、自分は悪戯やその他同じ年頃の少年のする馬鹿なことは、決してしないものと傍からちやんと定められて居るやうな窮屈さを感じた。

偶に何か遣ると、人々は眞面目に、大人に對してのやうに言葉嚴く愕きを示した。そして、彼から、辯解や活潑な口應へや、止められたことを又する冒險の面白さを殺いでしまつた。

彼は、何とも知れず嚴かな雰圍氣が、到る處自分の行く先について廻るのを知つた。彼の少年らしく野放しな陽氣さをのぞむ心持、腕白小僧のやうに遠慮なく大人とふざけ廻つて見たい氣持は、皆、さう云ふ、彼の力で如何うもしよう

のない何ものかで阻まれて仕舞ふのであつた。

　これ等の、内へ内へと、自分の憧れや、樂しさを追ひ込まれる淋しさが、全く、不思議な自分の顔立ちの故だとはつきり解つたのは、彼が十五の時であつた。

　其年の秋、例年通り、村長の持ちで、胡桃もぎの年中行事があつた。

　フランツもその年から村の若者の仲間入り出來る筈であつた。彼は、白絹の晴着の襯衣をつけ、父親の他處行を直した天鵞絨の半洋袴をはいて、隣りのエルンストと出かけた。山には、荷車に載つて行つた小綺麗な身なりの一隊の娘が待つて居た。

　村長が振り廻す杖の先で、笑つたり犇めいたりし乍ら、若者達と娘等は入り混つて幾組もに分れた。

　娘達は、指手にいろ〳〵の形のリボンで飾つた籠を下げた。男どもは、先に鈎のついて居る長い枝下げ棒をかついだ。

　フランツは、二人の小つぽけな娘と組になつた。

　二人とも同じやうに薄赫い少い髮を編み下げにし、狹い胸に黑天鵞絨の胸衣（ボディース）をつけて居る。始りは少し間がわるかつた。けれども、片方の、雀斑のある娘が

「あら！　お前の洋袴もビロード？」

と叫んでから、すつかり極りわるさがとれた。フランツは、元氣よく二人をつれて樹の間に分け入つた。

　彼方此方から、賑やかな笑ひ聲や、陽氣な合唱、木の枝のさわ〳〵云ふ音が響いて來た。

　組と組とが、ひよつくり樹の陰から出會ひでもすると、兩方でどつと悅びの聲をあげた。娘等は籠を覗き合ふ。或者が入れ換る。傍では手を叩いて笑ひ囃す。ばた〳〵馳ける跫音。秋の日は非常、麗かであつた。

小さい娘達とフランツは工合よくやつて行つた。

彼は、どつさり実のついて居る枝を見つけては、低く低く、いつまでも娘達の捥ぎきる迄曲げて居てやつた。娘共はずるく牒し合はせ、わざとのろ〳〵暇をかける。フランツが手を怠くして枝を離すと、彼が餘り早く手離したとだつて怒る。怒り乍ら噴飯す。

虫喰ひの不具な果でもつかむと、彼女達は

「いやなフランツ！　虫つくひ！」

と、彼に其果をぶつけた。

はははは。もつとぶつけろ、捥いだ胡桃を皆ぶつけろ！　フランツは樹に登るぞ。彼は登つた。乾いて好い匂ひのする葉の間へ本當に隠れた。そして、ばら〳〵枯れ葉をお下髪の頭にふるひ落す。

が、又いつの間にかする〳〵裏から辷り降り、上ばかり見上げて居る娘達の鼻先に、ばつさり好い枝を引き下げて、愕かすのだ。

樂しい胡桃山の上に日が移つた。

樹々が長い濃い影を地に牽く時刻になると、再び村長の杖が皆をかり集めた。

若い者達は、村まで歩いて踊ることになつた。荷馬車は、村長と胡桃を載せて、謝肉祭の山車のやうに列の眞中に割り込んだ。

フランツはエルンストに合ひ、暫く彼と一緒に歩いた。

山合ひの曲り蜿つた草道を抜けると、路は、なだらかな傾斜の耕地に出た。遙か遠くに村の教會の塔が見え、頂の十字

架が、西日でキラ／＼燃えるやうに燿いた。それも段々薄れ、やがて見えなくなり、四邊に低く夕暮の霧が這ひ始めた。もうよく見分けられない列の前方から、足に合はせた速い調子で「早起きトツド」の歌が聞え始めた。

フランツは、不圖、連だつた小さい娘等のことを思ひ出した。彼はエルンストと別れ、歩調を早め、列を前に通りぬけて見た。娘達は居た。矢張り二人かたまつて、少し大きい娘の傍にくつつき、默つてせつせと歩いて居る。

フランツは、顔を見定め、傍によつて行つた。

「暗くなつたね、一緒に歩かう」

聲をきゝ、顔をじつと見、其がフランツだとわかると、どうしたか外側に居た一人が、返事もしないで、すつと、大きい娘の彼方側に隱れてしまつた。

フランツは、少し寒い薄くらがりの中で苦笑ひした。又暫く經つて、彼は、此方側に居る雀斑の娘に云つた。

「お連れにならうよ。――その籠をお出し、持つて上げるから」

その娘は逃げない代り、まるで無愛想な口調できつぱり

「いや！」

と斷つた。そして、益々空いた片手を振り乍ら、眞正面を見 歩きつゞけた。

「いやよ、觸ちやいやよ。――ガスタブがお前は惡魔だつて云つたわよ」

フランツは、小さい娘をぢろりと見、肩を揺つた。娘は、止度がなくなつたやうに、又云つた。

「ガスタブばかりぢやあないわ、みんなさう云つたことよ。お前みたいに――うゝ、時計屋の子の爲に其那――イエス

様みたいな顔をして居るなんて、てつきり惡魔に違ひないつて。だから私」

娘は喋るのをやめて、睨むやうにフランツの顏を見た。フランツはおどろいて娘を見た。

「觸つてなんか貰ひたくないの」

二三歩、小娘は、可怖さを我慢してしやんしやん歩いた。が、フランツが一寸手を動すと一時に「わーッー」と聲をあげ、三人一度に轉るやうに彼の傍から馳け去つて仕舞つた。

フランツは、ぽつり獨りで、頸を垂れ、列を脫れて步いて日暮の道路を歸つた。

その晚、フランツは生れて始めて、しげ〳〵と鏡で自分の顏を見た。娘の云つたのは嘘でなかつた。

床に入つたが、寢つくどころではなかつた。彼には自分と云ふものが、まるで解らなく成つて仕舞つた。

屋根部屋の窓から光が差して、寢臺の裾から床に蒼白い影の湖を作つた。時々、黑い木の小枝や葉の影がちら〳〵する。

フランツは、寢鎭つた夜の裡で、泌々考へると、何とも云へない陰欝な恐怖に襲はれた。自分の前途には何が待つて居るのだらう。

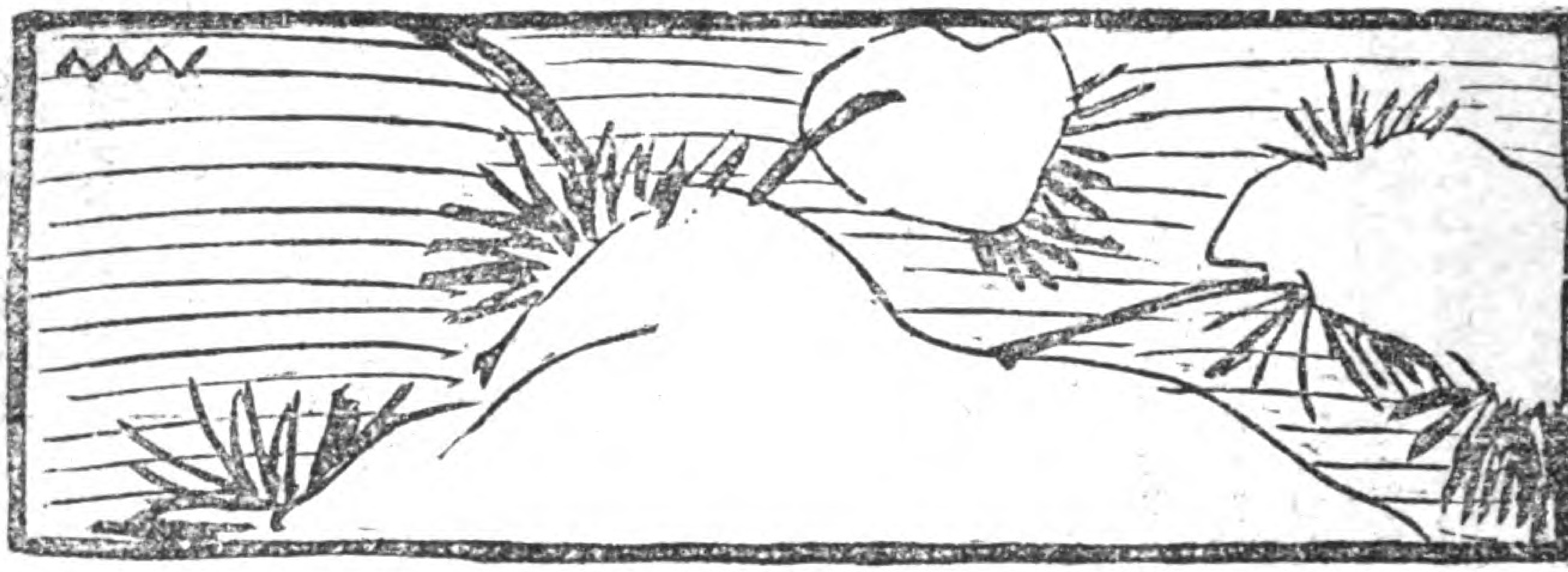
神は、思ひも設けない時計屋の子の自分に斯那特別な相貌を與へ、神の榮を顯させようとするのか。又は、本當に恐ろしい惡魔の力が自分に惡戲をしたのだらうか。

フランツは、寢床を出、水のやうな木のむき出しの床に跪いて永いこと祈つた。寥しい、胸の引しめられる苦しさが起つて、彼は淚を流した。

もう到底平氣で父に貰つた卑猥の基督を見ることは出來なくなつた。萬聖節の晚、父親が何故あの繪の傍に自分を立たせたか解るとともに、その記憶は、彼に、いくら十字を切つても切りきれない、堪へ難い心持を起させるのであつた。

フランツは、裸足のまゝ立ち上つて、机の傍に行つた。そして、頭を下げ、其方を見ないやうにして、少年イエスの畫像を暗い壁の上からとりおろした。

（終。）



退屈問答

佐藤春夫

a 先生と呼ばれる男
b 文學少年
c 宿屋の女中

c「先生、もうお目ざめですか。――今、中川さんといふ方がお見えになりましたが、お逢ひになりますか」

a さつきからひとりで吹かしてゐた煙草をつづけながら「中川？ 中川？ 中川誰だい？ ――中川といふのはふたりあるのだがね――どんな人？」

c「まだほんの若い人です」

a「若い人つて？」

c「え、學校の服を着た……」

a「あ、然うか。鼻の高い奴だらう」

c「さうです。さうです」

a「──う。面倒だな。別に用事でもないのだらうが」

c「たづねて見ませうか。お斷りしませうか」

a「いいよ──さう言つてくれ。目は覺めてゐるがまだ寢てゐる……」

c「さう言つてあるんです」

a「起きるのはいやだが寢てゐてもよければ逢ふつて。──それからちよつとそこの窓を開け放してくれないか」

c、窓を開けながら「ごらんなさいまし。いいお天氣でせう」

---

b「まだおやすみだつたのですな」

a「いいや。僕は毎日十時にはきつと目をあくよ。だがそれから床の中で一時間あまりはかうして退屈を味ふのだ。──今日は君が來たから一さう退屈かも知れないな（笑）」

b「どうしてです」

a「君とは話がないのだもの。──君が五つ若いか五つ年とつてゐるかすると話はあるのだ まさか君をつかまへてお伽噺をきかせるわけにはいかない。といつて、むきになつて文學論をするには君はあんまり若くつて心配だね。默つてゐては尙退屈だし、折角時々來てくれるのだから話をしたいが、困つた事に同輩のやうな馬鹿な話は出來ない。君は僕より十五も若い。僕は先生ぶつて何かいい話をして見たい。ところで僕は無學な上に、お說法はへただ。正直にいふと君ぐらゐの話相手が僕には一番困るのさ」

b「はあ、お邪魔ですか」

a「さう恐縮されてはなほのこと困るよ（笑）もう邪魔をしてしまつたのだ。君が今恐縮して歸つたらそのあとで僕は君に氣の毒でたまるまい。まあいいよ——今日はまた詩を讀ませるつもりかね」

b「いいえ、今日は小說です」さう言ひながら彼はポケットから一綴の原稿をとり出しながら「これです」

a「や、長さうだな。何枚あるの」

b「十七八枚。短いんです」

a「上手ならば短いんだが（笑）まづかつてごらん。長いわけぢやないか——書かなくつてもいい事だもの。書いた人はそれでもよいが讀む人になつて見たまへ（笑）」

b「では讀んでは下さいませんか」

a「いいや、讀まう。——僕はこのとほり文句を並べ立てながら頼まれたことは斷れない——いやな性分だね」

彼はその原稿を手にとり上げて讀み出す。「初夏の頃」といふ題である。つまらなさうに二三枚一度にめくつてから、ところどころ見る——廣子さんといふ娘が出て來てゐる。……廣子さんには兄さんがあつて規矩雄の友達だとある。廣子さんの兄さんはどうも少し不良少年らしいやうな風に書いてある。規矩雄は道玄坂で廣子さんの兄さんに出逢つたらしい。緣日には美しい咲きそめた薔薇の鉢が並んで初夏の夜はどうとかだ……樹々のなかから灯が見えて、ピアノが海の湧くやうにもれて來て……廣子さんのネルの着物が官能的で、……規矩雄はばかに憂鬱になつて……。それから五六枚飛ばすとおしまひになつた。彼は原稿を閉ぢて枕もとへ放り出すと、しばらく無言で煙草を吹かした。

a「……あ　そこにお茶の道具がある。紅茶もある。欲しかつたら手を延して自分で入れて飲みたまへ」

b「……」

a「……今日は日曜かね」

b「いいえ土曜です」

a「學校はもうお仕舞ひかね」

b「いいえ。まだ二時間あるのですが、エスして來たのです」

a「何をして？」

b「エスケープして來たんです。あんまりいい天氣なものだから、教室でぢつとしてゐられないのです」

a「廣子さんのことを思ひ出すのだね。君もぼつぼつ不良少年になりかかつてゐるんだね。一たい何の時間をエスケープして來たんだい」

b「數學です」

a「數學か。君も數學ぎらひと見えるね」

b「え！　大きらひです」

a「ロード・バイロンも數學は大きらひだつたさうだよ。それで先生に叱られてね、バイロンは口惜しいものだから先生に食つてかかつたさうだ――『數學なんて學科は一たい何になるんです』つてね。すると數學の先生は何でも緻密な注意と明晰な頭腦とを養成する爲めだとか何とか返へをすると、バイロンは『はあ、然うか。そんなもいなら別に養成するまでもなく僕はちやんと持つて生れて來てゐら！』と嘯いたさうだが、愉快だね、君。ロード・バイロンは不良少年だつたのだよ。自分のことをびつこだと言つた人を打殺さうと思つて鐵砲を持ち出したんだぜ――子供の自分に。君も何かね――バイロン的の大自信を抱いて數學が嫌いなのかね」

b（苦笑）

a「僕は少くともさうだつたがな。僕も數學は大きらひだつた。だがバイロン的の自信も大にあつたぜ。——或る時、代數の問題が出てね、それが人を莫迦にしてゐるのだ。そら混合酒をこしらへる問題があるね。それが見るから不能問題なのだ。表面は大へん入組んでゐるくせに、ちよつと、ほんのちよつと注意するとそれが不能だといふ事が直ぐ判るのさ。どういふのだつたかよくは覺えないが、結局は何でも十八錢の甲酒と二十錢の乙酒とを混合して二十一錢の丙酒をつくらうと思ふのだが甲乙兩酒をどんな割合で混合すればいいかといふやうなことになるのだ。そのわかり切つたことを少しごまかしてあるんだね。僕は算式を立てずに——立てやうと思つても出來もしなかつたしね、ただ文章で理屈を書いた上に、是非つくりたければやいいかげん水でもまぜたらいいだらうと書いてやつたら、それぢや答案にならないと言つたつけ。答案にならなくつたつて理窟には合つてゐるだらう。わからなけや算式を立てる必要もあらうが判つてしまへば無駄なことだと言つたら、教師は僕のことを理窟つぽい男だ——そのくせ數學の出來ない奴だと言つた。それからまたその先生は僕が幾何をいやがるのを見て、君たちは何かむづかしい事のやうに考へていやがるがあれや古代の希臘人が退屈まぎれに思ひついた遊戲なのだと言つて聞かせた——今思ひ合すと、その先生は僕を多少愛してゐたんだね。ところで僕は教師の幾何學の趣味を聞いても一向感心しなかつた。さうだらうとは思つたが、ところが少年は退屈は知らないからそんな遊戲は不向きですと言つてやりたかつた。が近ごろでは、希臘人の退屈をまぎらす氣持が少しわかるね。どうだ君、僕が一つ君に數學を教へやうか。君は數學の時間を逃げ出して僕のところへ來たのださうだから、君は僕のところで煙草を食つて涼しい顏をしてお父さんをごまかすつもりだらうが、それぢや僕も君に加擔して君のお父さんをごまかす事になるのがいやだから（笑）今が數學の時間なら、一つこれから數學をやらう。いやならよすたし

たまへ。尤も僕のは獨特の問題だ。やさしくつて面白いよ。文學をやらうといふ人間にも出來る。いいかね。かういふ問題だ。1から10までの十の數――

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

をだね、皆合すと幾つになるか――手で數へてもいい。三十秒間でやりたまへ」

b「へ？　三十秒間ですか！」

a「あたりまへさ！　一分間でも仕方がない。三十分かかつたら尋常二年生ぢやないか」

b「……ちよつと待つて下さいよ……。え、たいがい判るんです……44でせう」

a「四十四だつて？」

b「ちがひますか」

a「かぞへてごらん、聲を出して」

b「1と2とで3、3と3とで6、6と4とで10、10と5とで15、15と5と20……」

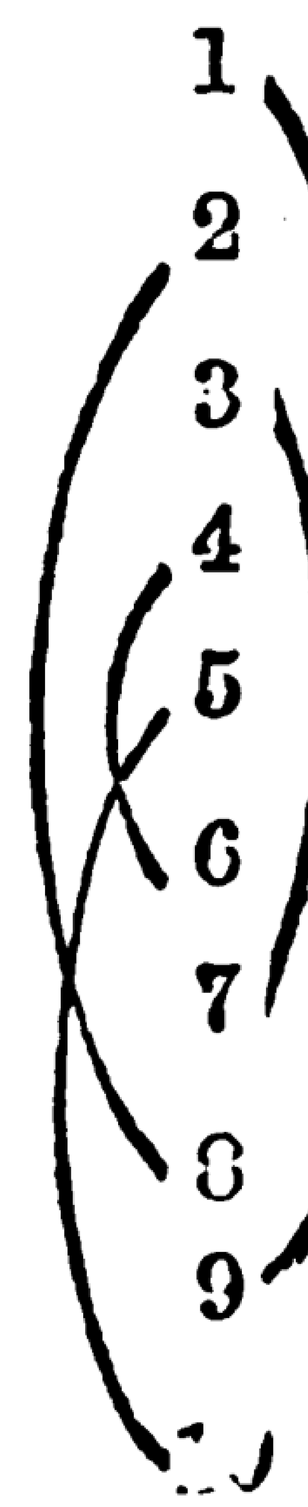
a「君は頭がわるいばかりでなく不正直で見え坊らしいぞ。君は以前にきつとこの問題をひとりでやつて見たことがあるね。――誰でも子供の時分ものずきにちよつとやるものだからね。僕もやつた。君もやつて見たのだらう。君はむかしのうろ覺えを答へたのだね。生憎とちがつてゐた――」

b「もう一分以上でせう――こんがらがつてしまつて出來ません」

a「さうだらうとも。そんな考へ方ぢや三分でもむつかしいだらう。――たつた三十秒あれや出來るのに。いいかい――（手を出して10ごとに指を折りながら）

1と9とが10
2と8とが10
3と7とが10
4と6とが10
まだ數へないのは
5と10とで15
10が四つで40へ15の55

44ぢやない55だ。君は以前に數へたことがあつて、何でも同じ數字が重なることだけ覺えて居たものだから出たらめを言つたのだね。僕の數へ方は早いだらう。——それは僕が十一ぐらゐの時の工夫だぜ。初めに指でやつたのぢやない。書いて見たのさ——ね。



かういふ風に。——それぢや今度は第二の問題だが11から20までの數をすべて

11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

これを合せてどれだけだらうね」

a「わかりません」

b「さう考へずに言つたのぢや駄目だ。これや今の考へ方の應用にしかすぎないのだぜ。——駄目だな。1から10ま

でが55さ。それに10が十あるのだから100と。100と55だ。155だ。それぢやもう一度

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

では？」

b「……ええ……と、255ですか」

a「さうさう。その通り。31から40までが355さ。以下そのとほりだが、それでは一から百までだと？」

b「それやとても駄目ですよ——僕はそんなことは全く駄目なので」

a「何もさう怖毛をふるふことはなかろう。ね——

1から10までが55
11から20までが155
21から30までが255
31から40までが355
41から40までが455
51から60までが555
61から70までが655
71から80までが755
81から90までが855
91から100までが955

だからして……」

b「みんなで九百五十五ですか」

a「いや、いや！

55
155
255
355
455
555
655
755
855
955

これだけを皆合したものが一から百までの總和さ……」

b（欠伸）「ずい分たくさんになるものですね」

a「うむ。とても暗算では駄目だと思ふかね。わけはないさ、五十五が十の五百五十五。それから百、二百、三百、四百、五百、六百、七百、八百、九百、千が五千五百——のところから千を引くから四千五百。四千五百に五百五十だから五千五十だな。」

b「一たい一萬までぐらゐ算へるつもりですか（笑）——そんなことを數へて何になりますか？」

a（笑）「何にもならないさ。アインスタインが相對性原理を發見しても別にその爲めに月が三角にも見えないやうにね。君、意味のあることや、何かになることだけが面白いのぢやないよ——僕は、君に威張りながらちよつと希臘人になつてゐただけのことだ。無意味だ。だが必ずしも無意味ではない。何でもない一向手柄にもならない事でも、これやひよつとすると誰もあんまり考へない考へ方かもしれない。何でもない事をかし特別な見方で見る——考方で考へる、これは藝術家にとつて不必要なことではないのだ。それにしても君は駄目だね。獨創の才もなければ應用の才もない。君は僕の藝術數學で見ごとに落第した。……序だから君のメンタルテストをやらう。君の作品は隨分と拙い。だが君は作品はまだ未熟だけ人間はえらいのかも知れない（笑）——君は立派な鼻をしてゐる」

b (笑)「ひやかしちやいけません」

a 「いいや本當だ。その鼻を見てゐると君はもつと偉人でなけりやならぬやうな氣がする(笑)。君は學校をエスケープして來た罰にメンタルテストに應じたまへ、文學入門試驗のつもりで。問題はごくばか〳〵しい。それに僕の考へたのではない。ありふれた冗談の問題だ。どこかで聞いて知つてゐゝなら正直にさう言へたまへ。いいかね。まづ隣の部屋で人の聲がしてこんな事を言つてゐるのだ――

『お前のお父さんは私のお父さんの子で、私には一たい兄弟はない』

つてね。いいかい。もう一ぺん言ふよ――

『お前のお父さんは私のお父さんの子で、私には一たい兄弟はない』

これだけの言葉を聞いたのだが、さてこの言葉を言つてゐる人とこの言葉を聞いてゐる人とはどんな關係の人か――かういふ問題なのだ」

b 「あ、それは、その問題は私も知つてゐますよ。聞いた事があります。それやたしかただの親子の關係でしたね」

a 「さうだ。ところで君は人に說明して貰つたのか自分で考へたのだか知らないが、それを考へた時にはずいぶん苦心しやしなかつたかい?」

b 「え、ずいぶん考へ込みました。圖を書いて見たりしましたがそれでも判らないで、とうたう敎へてもらひました。今でも考へ込んでゐるとわからなくなつてしまひさうですよ」

a 「さうだらう。それが當り前だもの。――それを知つてゐるならもう一つ別のことも聞くよ。かういふのだ――或る道を荷車が來るのだ。前を曳いてゐる人とうしろを押してゐる人とがゐる。その前を曳いてゐる人に向つて、

『車のうしろを押して來るのはお前のお父さんか』

と尋ねると、その人は

『違ひます』

と答へる。それで今度はうしろを押して來る人に尋ねる——

『前を曳いて行くのはお前さんの息子でせう——本當の息子でせう』

『然うです』

と、その人は答へた。二人の答は矛盾してゐるやうだが二人は決してどちらも嘘を言つたのぢやなかつた——うしろを押す人の返事を聞いた時一切はわかつた。それでは彼等の關係は何であるか？」

b「もう一ぺん言つて見て下さい——荷車が來るのですね、さうして前を曳く人に？」

a「『うしろを押すのはお前のお父さんか』と尋ねると『違ふ』と否定するのだ。それだのに、うしろの人に『曳いて行くのはお前さんの息子だらう——本當の息子だらう』と言ふと『然うです』と肯定するのだ。然もふたりとも嘘を答へたのではない」

b「……ずいぶんをかしいのだな」

a「をかしいのだ。……考へるのも莫迦々々しいさ。——母親と息子となのだぜ。お父さんかときいたから息子は違ひますと言つたのさ」

b「なあんだ！　ハハハハ」

a「ね。それで僕が君に與へようといふ問題は寧ろこれからなのだが、一たい今の二つの問題のなかで君はどちらが

面白いと思ふかね」

b「さア……　どちらもあんまり面白くはありません」

a「なるほど、さう言つてしまへばそれまでさ。が、君どんなつまらないことにでも面白さを發見しなけや結局人生といふものにもそれほど驚天動地の面白いことはざらにはないのだぜ。しかし、君がどちらも面白くなけや仕方がない。それぢやどちらの方がむつかしいと思ふかね？」

b「それや前の問題の方が『お前のお父さんは私のお父さんの子で……』といふ奴の方がむつかしいでせう」

a「さう。あの方が人を困らせるな。ぢやあれがどうしてそんなに人をまごつかせるか、君はそれを考へて見たことがあるかい」

b「いいえ。ありません」

a「ぢや、今考へてごらん」

b「それや日常そんな愚にもつかぬ途方もない會話を誰もしないでせう」

a「想像以上に異常だからと言ふのだね。消極的な理由としてはそのとほりだ。では、人は何故に日常そんな對話をしないのだらう」

b「あんまりわかりきつた事だからではありませんか」

a「さう。……だが必ずしもわかりきつた事實とのみは言へまい。何かの拍子で名告り合ふ時もなく別れ別れになつてゐた親子が對面したとでもすれば、親子がそんな事實――私はお前の父親だが、私はお前のお祖父さんのひとり子で兄弟はなかつたので……とそんな事實を話すことは絶對に無いとは言へないのだ。絶對に無いことは寧ろその事實で

い。自分のことを子に向つて自ら『お前のお父さん』と呼ぶこともすこぶる異例だが、更に自分のことを『私のお父さんの子』といふに到つては更に異例だ。これを普通のやうな顏をして使用するとすれば、言葉そのものの性質を全く無視したやり方だ。言葉の虐殺だ。『お前のお父さん』と言ふのを聞けば、人は自然に、それを言つてゐる人として父自身ではない第三者を想像する。『お前のお父さん』といふ語法はたしかにさういふ風にだけ生きてゐるのだから。ところへまた重ねて『私のお父さんの子』と呼ぶに到つては、自分といふものをもう全然第三人稱化しきつてゐる氣持を聞く人に呼び起させる――第一人稱の『私』を重要に使ひ込んでゐるものだから我々は一さうだまされる。『お前のお父さん』で先づ方角違ひをさされた我々は『私のお父さんの子』でもう一ぺんぐんぐん方角違ひの遠方へひつぱつて行かれる。この奇問を提供した人は、しかし理詰には少くもあいまいなことを言つてゐるのではない。但、有機的なものである言葉といふものを全く器械的に、死んだ符牒のやうに――代數の記號のやうに使用してしまつてゐる。それだのに我々の方では言葉の有機的な性質をどこまでも無視し去ることが出來ないのだ。殺されて用ひられた言葉を我々は生きたものとして働かせる。さうして我々はこれを解かうとして何とも言へない混迷を感ずる。まるで奇術に出てくる骨無しの子供が兩脚の間へ自分の頭を突込んで逆立してゐるのを見た時に我々の目が感じる困惑だ。一種の錯覺的なものだね。この奇問を案出した人は我々のこの錯覺を利用したまでだ。この奇問の案出者は、それほどの自覺があつたわけではないかも知れないが、言葉といふものの持つてゐる秘密をしつかりと握つた上で、そいつを逆に利用したのだ。ねえ、詩人の言葉に對する懸命の努力を彼は全く逆に行つたのだ。――不自然に、言葉が互に殺し合ふやうに。僕の言ふことがわかるかね？

a「え、わかります。わかると思ひます」

b「さう解釋して見るとこの莫迦々々しい奇問にも多少は面白味が出てくるだらう。たが、僕はどちらかといふとこの問題はあまり好かない。あまり難しくつて人を困らせすぎる。成程、判つてしまつてから人は笑ひはする。しかしその笑ひのなかにはこんな愚にもつかないことにあんなに骨を折らせられたといふ自嘲の氣持が多すぎる。報ひられなかつたことを笑ふのだ。だまされた事だけを笑ふのだ。出題者自身だけがあまり悧巧ぶつてゐるからだ。この問題は組立も冷たく出來てゐるし、その報酬も冷たすぎる。だから人はこの問題で一ぺんは笑つてもさう何度も笑へない――僕はさう思ふ。そこへ行くと荷車の親子の笑には溫味がある。ただ理詰ではなく機智的なところがある。それにユウモアもないことはない。僕はあの話を考へてゐると、荷車の後押しをしてゐる母親が、そんな勞働にしてゐるのだし見たところ男親のやうな身なりをしてゐても無理はないと思ふ。さうして息子だらうと言はれて「然うです」といふ聲を聞くと女だといふことがわかる。息子にあれは『お前のお父さんか』とたづねたのは、息子に氣の毒をしたやうな氣持までするね。ただ理屈つぽい以外に、ユウモアがあるぢやないか。立體的に出來てゐて、ただ奇問のために奇問を立案したのぢやなくて、どこか自然な氣持がある。どうかすると、この出題者は實際に男の風俗をして勞働してゐる女を見て、それをモオチブにこのをかしい問題を考へ出したのかも知れない。我々と同じ笑ひをその出題者自身が先づ笑つたのであらう。遊戲的には『お前のお父さんは私のお父さんの子……』の方がすぐれてゐるかも知れないが、文學的にはこの荷車の親子の方がずつといいね。どうだい贊成しないか？」

b「え、贊成してもよござんす。――何しろ、しかし、先生は用もないことばかり考へてゐられるのですね。驚きました」

a（苦笑）「ふゝ、僕は用のあることと用のないこととの區別を知らないのさ。しかし君は文學者にならうと思ふのなら、時には用もないことを考へて見てもいいだらうよ」

b「でも僕にはとてもそんなことは考へられません――先生のやうなことは」

a「さうかね。尤も僕のは少しすぎるかも知れないな。退屈で中毒してゐるのだ。だが僕は主張するね。君が文學者になりたけりや用もない事も少しは考へたり感じたりしたまへ。用もないところまで考へなけりや大ていのことは無意味に濟んでしまふだらうから。用もないことを考へたり感じたりするところから文學が發生すると言ひたい位だね。文學だけぢやない、すべての發見をする人や或は賢、社會であらゆる機會をつかんだ人はみんな用もないことを考へたんだ。林檎の落ちるところを見た人はニユートンだけぢやあるまい。しかし考へたのはニユートンだけだ。どういふ風に用もない事を考へたらいいか。今度はそいつを一つ敎へてあげよう。茲にかういふ話があるのだ。――僕は紀州の生れだがね。紀州の熊野と言へば日本でも山の中だ。それからあの邊からはアメリカへ出稼に行つてゐる人間が隨分とある。そんな出稼人のひとりが歸つて來たと思ひたまへ。日本へ殘して置いた子供を迎へに來たのだ。その子をつれてもう一度渡米するのだ。子供は六つぐらゐだが、今も言ふとほり山奥で育つて汽車も汽船も何も知らない。人家が十軒とかたまつてゐるのさへ今度の旅で始めて見るくらゐのものだ。さういふ子供をつれて父親はアメリカへ行くのだ。一たいその地方からアメリカへ行くには、先づ勝浦といふ港町へ出てそこから大坂まで汽船、大坂から汽車で神戸、神戸からアメリカ通ひの船へ乘り込むのだがさてその子供は山奥からつれられて森浦といふところまで來た。森浦の灣を一つ距てた向側が勝浦で、そこへ渡るのには石油發動機船で四十分ほどかかる。子供は森浦から勝浦へ渡つた。夕方であつた。――勝浦は相當に賑やかな町なのだよ。すると子供が自分の父親に言ふのだ――

『お父さん、ここがアメリカかえ?』……」

b「ハハハ(笑)」

a「をかしいだらう。本當の話だよ、これは。ところがね、子供のこの言葉を聞いて父親は涙が出たさうだ。いいかね、普通なら用のあるところは『お父さん、ここがアメリカかへ?』と子供が言ふところだ――現に君もそこで笑つた。これがつくり話なら全くその一語で落ちになつてゐるだらう。事實の話ならばこそ、父親に涙が出たといふ用もない事がくつついてゐて、用もないことを考へる人間はそこのところを焦點にする。話の意味は『お父さん、ここがアメリカかえ?』で終るのではなく、寧ろ最後の「父親は涙が出た」といふところで始まるのだぜ。」

b「その子がそんな無智なことを言ふから涙が出たのですか」

a「一口に無智なと言つても――山奥の子ならそれは言ひ兼ねないのさ。たゞね、父親は子供にアメリカといふところはどんなに遠いかといふことはくれぐれも言ひ聞かせて居たのだらう。さうして船へ乘つて行くのだといふことも。そこで子供は小さな灣一つ渡つて、しかし父が教へたほど遠くへ來た氣持がしたのだらう。父の教へ込んだ遠さは子供には到底通じなかつたのだ。父親はそれに氣がついたのだ。それにつけてもこれから二十日近くもかかる實に遠い前途のことを思ひ合せて、そんな子供がどんなに心細がることだらうかと思ふと、子供が可哀さうでもあり父親自身でも心細くなつたのだらうぜ――説明したのでは盡くされない。君自身で一つ父親のことを考へてその人の心細さを感じて見たまへ。こんなことを感じたり考へたりするのがつまり僕のいふ用もない事なのさ。さうして文學といふものは世間話より少し遠方にあるんだ。君はもう澤山といふ顔つきをしてゐるが、序だからもう一つ聞きたまへ。――僕が十一ぐらゐの頃のことだが、さうその頃の學制でたしか高等小學の一年生の時であつた。運動會があつて、その日には生徒は夜の明

けないうちから起きて騒いで喜ぶのだが、その日ひとりの生徒が、僕たちより二級ぐらゐ上の大きな子であつたが、あまり富有な家の子でもないのにその日洋服を著込んで來たものだ。昔の事ではあり、田舎で洋服などを著てゐる生徒は滅多にない――袴でさへ無かつた。でもたまには金持の子供などで運動會や祭日などにだけ洋服を着てくるともあつた。ところがこの運動會には金持でもない子供が洋服を著て來た。生徒はみんな珍らしがつてその生徒のまはりへ集つた。ところが誰が見つけたのか知らないが、子供といふものはそんなことには妙に目の早いもので、その生徒の身にそぐはない小倉服の袖を見て

『郵便持ち！　郵便持ち！』

と言ひ出したものだ。見ると、その袖にはなるほど郵便脚夫の一の字とTの字とを重ねた印が、その赤布を剝がしたあとだけが、ぐるりの褪せた色の中にくつきりと緋色に目立つてゐるのだ。

『郵便持ち！　郵便持ち！』

我々は皆で一さうさかんに囃し立てたものだから、その子供は我々に取まかれながらたうとう泣き出き出してしまつた。少し拔けたやうな子でね、

『羞しいよう』

と言つてめそ〳〵と泣くのだ。さうしてたうとう家へ歸つてしまつた。泣くのも無理はないがわざ〳〵「羞しいよう」と言ふのが、僕の子供心にもいかにもお人好しらしくつてをかしかつた。僕がこんなことを覺えてゐるのもそのためだつた。ところがねつひこの間、いろんな用もないことを考へてゐるうちに、この子供のことを思ひ出してね。實に氣の毒でたまらないのだ。殊に袖のところの赤い印を剝がしてあつたのをはつきり思ひ出すのでね。きつと母親の心づ

くしだね。金持の子供のやうに自分の子にも洋服が着せたかつたのだよ。それで郵便脚夫の服を手に入れて直したのだ。運動會にはそれを着せて子供を喜ばすつもりだつたらう。子供もよろこんで着て來たのだらう。ところが母親の心づくしが仇になつて、子供はその日は皆にからかはれて家へ歸つたまま、たうとう外の友達が愉快に遊ぶ一日をひとりだけとり殘されて、さぞその一日を快々として暮したらう。母親もさぞ悲しかつたらう。ところがその家族をそんな目に合せた我々子供たちは決して彼等に些の惡意も何もありはしない。そんな氣の毒なことをしたなどとは思つても見ない。ただフェヤリイのやうに無邪氣に興じてゐたのだからね。出來事が小さいから何でもないのさ、だがこれと同じやうな形で大きな出來事があつたらどうだらう——檢微鏡で擴大したら至く深さのある悲劇の形だね。『羞しいよう』と言つて泣いた子供のをかしかつたことを僕は二十年前に知つてゐて、自分たちが飛んだ氣の毒なことをしてゐたことはやつと二十年過ぎてからわかつたのだね——泣いた子供自身は根がお人好しだし、もう疾つくに忘れてしまつてゐるだらう頃に用もない事でも考へつづけて見たまへ。ひよくり何かにぶつつかるかも知れない。感じた事を考へてそれがぶつつかるところまで行くのだ。——一から百までの勘定は實際馬鹿々々しいね。だがあれを一萬までやつてゐると、ひよつとすると何か數といふものの性質を熟知して案外そこから法則でも見出さないとは限らない——大丈夫そんなことも無いかな。……つまらない。さあ、講義はもうこれぐらゐでおしまひにしよう」

b「いろいろ有難うございました」

a「で、君は本當に面白かつたのかね？」

b「……」

a「正直に言つて見たまへ」

b「……よく判らないところもありました」

a「さうかい。――さうだらうとも。僕は出鱈目をしやべつてゐたのだもの。退屈まぎれに自分でも何を言つてゐたやら知らないほどだ。いつもひとりぼんやりしてゐる時の考へるとりとめのないことを、今朝は君がゐたから口に出してしやべつて居ただけだつたのだ。僕は一日の三分の一はこんなことを考へて暮してゐるんだがね」

b「――先生のおつしやることはどうも少し人生から遊離しすぎてゐると僕は思ひます」

a（眞面目に――しかし今までの冗談のつゞきに）「さうだつけ。君は少年だつたな。少年には幾何學はいらなかつたのだ。僕はあまり老耄職人になりすぎて、人生に無駄な線をやたらに引ぱつて見て樂しんでゐるだらうか」

b「……」

a「人生から遊離して雲に乘つて仙人になつてゐるだらうか」

b「……」

a「なるほど！ さうだよ。僕のいふことは人生からあんまり遊離してゐる。君の批評は達見だ。その一言で君はメンタルテストに及第した。實は、僕自身で昨夜そのとほりのことを感じて、見給へ、僕は書きかけの小說をこのとほりこゝへ破り捨ててしまつたのだ。僕は人生の毛細管をつついて血をちよつと滲ませるだけで、人生の動脈のありかは知らないのだね！ ゆうべ僕は考へ込んだ。さうして今朝は一さう物憂くつてつまらない。まつたく僕はあんまり用もない事を考へすぎる習慣がついてしまつたらしい。……」

彼は默つて煙草を吹かし出した。

b「濟みませんが僕にも煙草を一本吹はせて下さいませんか」

a「君はもう煙草を吸ふのか」

b「え、吸ひます」

aはbに煙草を與へる。

b「それから濟みませんが、(bは腕時計を出して見ながら)もう四十分ほど何か言つて下さいませんか。――今からうちへ歸つてはまだ少し早すぎるのです」

a「もう四十分? 澤山だ! 僕はおしやべりがいやになつた。……君はだんだん地金を出して來たね。(笑)やうな顏をしてゐるくせに頭の働きはよくない。詩もまづいが小説はなほ駄目。學校はエスをするし、それでゐてなかなか遠見を持つてゐる。お父さんの目を晦ます、煙草は吸ふ、廣子さんのあとは追つかけまはす。(笑)君はもう大ぶん不良少年になりかかつてゐるぢやないか。それに初夏ではあるし、天氣はよし、君はこの上四十分も僕の退屈の相手をするよりは……、さうだ、一さう廣子さんのところへでも行きたまへ。それとも廣子さんはまだ學校から歸らないのかな」

b「いいえ、廣子さん――といふのは嘘の名ですが――廣子さんは今は學校へは行つてゐないのです。さうだ、廣子さんのところへ寄つてみるのもいい」

a「それがいいさ。僕は行きたくとも廣子さんのところはないのだ。君を歸したら、ひとりで退屈をしながら『いかにして人生へ肉迫すべきか』を考へなけやなるまい」

b「……、ええ、あの……、何でせうか……廣子さんに手紙をやつたら廣子さんの兄さんは怒るでせうか」

a「君も君で『いかにして人生へ肉迫すべきか』を工夫してゐるのだね。だが君の問ひは僕にはわからないさ。僕は廣子さんの兄さんを知らないぢやないか」

b「あのなかに書いてありませう」

aは氣がついたやうに例の原稿「初夏の頃」を取上げてbの前へ輕く投げ返す。

a「これのなかにかい」

b「え」

a「自惚れてはいけないよ。現に君がそのなかで精一ぱいに描いてゐるそのことでさへ僕に想像出來るやうには出來てない。況んや、その紙人形より劣る人物を文字のなかから引つぱり出してそれが實世界の別の場面でいかに動くかなどは僕がどんなにえらくても考へられるものか。だが多分、君が廣子さんに手紙をやればきつとまづこの三つの一つだ——鼻のさきで笑つて默つてゐるか、怒つて君をなぐりつけるか、それとも『俺の妹はあれでもまだ何にも知らないのだ。どうぞそつとそつとして置いてくれ給へ』と君に歎願するか。僕にそんなことを聞くより、廣子さんの兄さんに聞きたまへ——君が正道を行く人間ならば。『君の妹に手紙をやつたら、君、君は怒るかね？』つて」

b「直接、廣子さんの兄さんにそんなことを聞くのはちよつと困るのです」

a「それぢや寧ろ、もう一層直接に廣子さんその人に聞くのだ——『あなたに手紙を上げたとしたら、あなたの兄さんは怒るでせうかねえ』つて。さうしてその時廣子さんの顏色をよく見るのだ。廣子さんの顏色の都合で『ね、僕が手紙を上げたとしたらですよ』と重ねてさう言ふのだ。さうして廣子さんの顏色を見れば、まるで手紙を出してその場で返事まで貰つた事になるぢやないか」

b「あ！　さうですね」

a「その代りだね、君を誰かゞ——例へば當の廣子さんその人が、君を不良少年あつかひにしても僕は知らない

よ！」

b「……やつぱり、廣子さんにそんなことを聞くことも出來ません」

a　それぢやつまり、誰にも聞かないで置くのさ。ハハハ」

b「……先生。僕はやつぱり廣子さんに聞いて見ます。さよなら、先生」

*b*少年は元氣よく立ち上る。

a（笑ふ）「そんな時に、先生と呼びかけると、まるで僕は不良少年の先生だね」

*b*少年に、しかし、*a*の言葉などは聞えないらしく、人生のただ中へ突入するやうな氣勢で部屋の外へ出て行つた。

*a*はぼんやりと*b*のあとを見おくりながら、新らしい煙草に火をつけてそのけむりの流れて行く窓を透して碧い空を見てゐる。



糸女覺え書

芥川龍之介

秀林院樣（細川越中守忠興の夫人、秀林院殿華屋宗玉大姉はその法諡なり。）のお果てなされ候次第のこと。

一、石田治部少の亂の年、卽ち慶長五年七月十日、わたくし父魚屋淸左衞門、大阪玉造のお屋敷へ參り、「かなりや」十羽、秀林院樣へ獻上仕り候。秀林院樣はよろづ南蠻渡りをお好み遊ばされ候間、おん悅び斜めならず、わたくしも面目を施し候。尤も御所持の御什器のうちには贋物も數かず有之、この「かなりや」ほど確かなる品は一つも御所持御坐なく候。その節父の申し候は、涼風の立ち次第秀林院樣へお暇を願ひ、嫁入り致させ候べしとのことに御坐候。わたくしももはや三年あまり、御奉公致し居り候へども、秀林院樣は少しもお優しきところ無之、賢女ぶらるることを第一となされ候へば、お側に居り候ても、浮きたる話などは相成らず、兎角氣のつまるばかりに候。父の言葉を聞きし時は天へも昇る心地致し候。この日も秀林院樣の仰せられ

候は、日本國の女の知慧淺きは横文字の本を讀まぬゆゑのよし、來世は必ず南蠻國の大名へお輿入れなさるべしと存じ上げ候。

二、十一日、澄見と申す比丘尼、秀林院樣へお目通り致し候。この比丘尼は唯今城内へもとり入り、中中さけ者のよしに候へども、以前は京の糸屋の後家にて、夫を六人もとり換へたるいたづら女とのことに御座候。わたくしは澄見の顏さへ見れば、虫づの走るほど厭になり候へども、秀林院樣はさのみお嫌ひも遊ばされず、時には彼是小半日もお話相手になさること之有、その度にわたくしども奥女中はいづれも難澁仕り候。これはまつたく秀林院樣のお世辭を好まるる爲に御座候。たとへば澄見は秀林院樣に、「いつもお美しいことでおりやる。一定どこの殿御の目にも二十あまりに見えようず」などと、まことしやかに御器量を褒め上げ候。なれども秀林院樣の御器量はさのみ御美麗と申すほどにても無之、殊におん鼻はちと高すぎ、雀斑も少少お有りなされ候。のみならずお年は三十八ゆゑ、如何に夜目遠目とは申せ、二十あまりにはお見えなさらず候。

三、澄見のこの日參り候は、内内治部少かたより頼まれ候よしにて、秀林院樣のおん住居を城内へおん移し遊ばされ候やう、お勸め申す爲に御座候。秀林院樣は御勘考の上、御返事なされ候べしと、澄見には御意なされ候へども、中中しかとせる御決心もつきかね候やうに見上げ候。然れば澄見の下がり候後は「まりや」樣の畫像の前に、凡そ一刻に一度づつは「おらつしよ」と申すおん祈りを一心にお捧げ遊ばされ候。何も序ゆゑ申し上げ候へども、秀林院樣の「おらつしよ」は日本國の言葉にては無之、羅甸とやら申す南蠻國の言葉のよし、わたくしどもの耳には唯「のす、のす」と聞え候間、その可笑しさをこらふること、一かたならぬ苦しみに御座候。

四、十二日は別に變りたることも無之、唯朝より秀林院樣の御機嫌、よろしからざるやうに見上げ候。總じて御機嫌の

よろしからざる時にはわたくしどもへはもとより、與一郎様（忠興の子、忠隆）の奥様へもお小言やらお厭味やら仰せられ候間誰もみな滅多にお側へは近づかぬことと致し居り候。けふも亦與一郎様の奥様へはお化粧のあまり濃すぎぬやう、「えそぽ物語」とやらの中の孔雀の話をお引き合ひに出され 長ながと御談義有之候よし、みなみなお氣の毒に存じ上げ候。この奥様はお鄰屋敷浮田中納言様の奥様の妹御に當らせられ、御利發とは少少申し兼ね候へども、御器量は如何なる名作の雛にも見劣らぬほどに御座候。

五、十三日、小笠原少齋（秀清）河北石見（一成）の兩人、お臺所まで參られ候。細川家にては男はもとより、子供にても奥へ參ることはかなはざる御家法に候間、表の役人はお臺所へ參られ、何ごとによらずわたくしどもに奥への取次を頼まること、久しきならはしと相成り居り候。これはみな三齋様（忠興）秀林院様、お二かたのおん燒餅より起りしことにて、黒田家の森太兵衛などにも、さてさて不自由なる御家法も候ものかなと笑はれしよしに御座候。なれども亦裏には裏と申すことも有之、さほど不自由は致し居らず候。

六、少齋石見の兩人、霜と申す女房を召し出され、こまごまと申され候は、この度急に治部少より東へお立ちなされ候大名衆の人質をとられ候よし、專ら風聞仕り候へども、如何仕るべく候や、秀林院様のお思召しのほども承りたしとのことに有之候。その節、霜のわたくしに申し候は、「お留守居役の衆も手ぬるいことでおりやる。そのやうなことは澄見からおとつひの内に言上されたものを。やれやれお取次御苦勞な」とのことに御座候。尤もこれは珍しきことにても無之、いつも世上の噂などはお留守居役の耳よりも、わたくしどもの耳へ先に入り候。少齋は唯律義なる老人、石見は武道一偏のわやく人に候間、さもあるべき儀とは存じ候へども、兎角たび重なり候へば、わたくしどもを始め奥のものは「世上に隠れない」と申す代りに「お留守居役さへ知つておりやる」と申すことに相成り居り候。

七、霜は卽ちその旨を秀林院へ申し上げ候ところ、秀林院様の御意なされ候は、治部少と三齋様とは兼ねがねおん仲悪しく候まま、定めし人質のとりはじめにはこの方へ參るならん、萬一さもなき節は他家の並みにもあるべきか、もし又一番に申し來り候はば、御返答如何遊ばされ候べきや、少齋石見の兩人、分別致し候やうにとのことに御座候。少齋石見の兩人も分別致しかね候へばこそ、御意をも伺ひし次第に候へば、秀林院様のおん言葉は見當違ひには御座候へども霜も御主人の御威光に勝たれず、その通り兩人へ申し渡し候。霜のお臺所へ下がり候後、秀林院様は又また「まりや」様の畫像の前に、「のす、のす」をお唱へ遊ばされ、梅と申す新參の女房、思はず笑ひ出し候へば、以ての外のことなりとさんざん御折檻を蒙り候。

八、少齋石見の兩人は秀林院様の御意を伺ひ、いづれも當惑仕り候へども、やがて霜に申され候は、治部少かたより右の次第を申し來り候とも、與一郎様與五郎様（忠興の子、興秋）のお二かたは東へお立ちなされたり、內記様（同上、忠利）も亦唯今は江戸人質に御座候間、人質に出で候はん人、當お屋敷には一人も無之候へば、所詮は出し申すことなるまじくと返答仕るべし、なほ又是非ともと申し候はば、田邊の城（舞鶴）へ申し遣はし、幽齋様（忠興の父、藤孝）より御指圖を仰ぎ候まま、それ迄待ち候へと挨拶仕るべし、この儀は如何候べきと申され候。秀林院様の仰せには分別致し候やうにと申し渡され候へども、少齋石見兩人の言葉に毛すぢほどの分別も有之候や？　まづ老功の侍とは申さず、人並みの分別ある侍ならば、たとひ田邊の城へなりとも秀林院様をお落し申し、その次には又わたくしどもにも思ひ思ひに姿を隱させ、最後に兩人のお留守居役だけ覺悟仕るべき場合に御座候。然るに人質に出で候はん人、一人も無之候へば、出し申すことなるまじくなどとは一も二もなき喧嘩腰にて、側杖を打たるるわたくしどもこそ迷惑千萬に存じ候。

九、霜は又右の次第を秀林院樣へ申し上げ候ところ、秀林院樣は御返事も遊ばされず、唯お口のうちに「のす、のす」とのみお唱へなされ居り候へども、漸くさりげなきおん氣色に直られ、一段然るべしと御意なされ候。如何さままだお留守居役よりお落し奉らんとも申されぬうちに、落せと仰せられ候譯には參り兼ね候儀ゆゑ、さだめし御心中には少齋石見の無分別なる申し條をお恨み遊ばされしことと存じ上げ候。且は御機嫌もこの時より引きつづき甚だよろしからず、ことごとにわたくしどもをお叱りなされ、又お叱りなさるる度に「いそぽ物語」とやらをお讀み聞かせ下され、誰はこの蛙、彼はこの狼などと仰せられ候間、みなみな人質に參るよりも難澁なる思ひを致し候。殊にわたくしは蝸牛にも、鴉にも、豚にも、猴の子にも、棕櫚にも、犬にも、蝮にも、野牛にも、病人にも似かよひ候よし、くやしきお小言を蒙り候こと、末代迄も忘れ難く候。

十、十四日には又澄見參り、人質の儀を申し出し候。秀林院樣御意なされ候は、三齋樣のお許し無之きうちは、如何やうのことと候とも、人質に出で候儀には同心仕るまじくと仰せられ候。然れば澄見申し候は、成程三齋樣の御意を重んぜられ候こと、尤も賢女には候べし。なれどもこれは細川家のおん大事につき、たとひ城内へはお出なされずとも、お鄰屋敷浮田中納言樣迄入らせらるべきか、浮田中納言奧樣の樣は與一郎樣の奧樣と御姉妹(ごきやうだい)の間がらゆゑ、その分のことは三齋樣にもよもやおん咎めなさるまじく、左樣遊ばされ候へとのことに御座候。澄見はわたくし大嫌ひの狸婆には候へども、澄見の申し候ことは一理ありと存じ候。お鄰屋敷浮田中納言樣へお移り遊ばされ候はば、第一に世間の名聞もよろしく、第二にわたくしどもの命も無事にて、この上の妙案は有之まじく候。

十一、然るに秀林院樣御意なされ候は、如何にも浮田中納言殿は御一門のうちには候へども、これも治部少と一味のよし、兼ねがね承り及び候間、それ迄參り候ても人質は人質に候まま、同心致し難くと仰せられ候。澄見はなほも押し

控し、いろいろ說き立て候へども、一向に御承引遊ばされず、遂に澄見の妙案も水の泡と消え果て申し候。その節も亦秀林院樣は孔子とやら、「えそぽ」とやら、橘姬とやら、「さりすと」とやら、和漢はもとより南蠻國の物語さへも仰せ聞かされ、さすがの澄見も御能辯にはしみじみ恐れ入りしやうに見うけ候。

十二、この日の大凶時、霜は御庭前の松の梢へ金色の十字架の天降るさまを夢のやうに眺め候よし、如何なる凶事の前兆にやと悲しげにわたくしへ話し申し候。尤も霜は近眼の上、日頃みなみなになぶらるゝ臆病者に御座候間、明星を十字架とも見違へ候や、覺束なき限りと存じ候。

十三、十五日にも亦澄見參り、きのふと同じことを申し上げ候。秀林院樣御意なされ候は、たとひ何度申され候とも、覺悟は變るまじ、と仰せられ候。然れば澄見も立腹致し候や、御前を退き候みぎり、「御心痛のほどもさぞかしでおじやらう。どうやらお顏も四十あまりに見ゆる」と申し候。秀林院樣にも一かたならず御立腹遊ばされ、以後は澄見に目通り無用と達し候へと仰せられ候。なほ又この日も一刻置きに、「おらつしよ」をお唱へ遊ばされ候へども、內證にてのお掛け合も愈手切と相成り候間、みなみな安き心もなく、梅さへ笑はずに控へ居り候。

十四、この日は又河北石見、稻富伊賀(祐直)と口論致され候よし、伊賀は砲術の上手につき、他家にも弟子の衆少からず、何かと評判よろしく候まゝ、少齋石見などは嫉きことに思はれ、兎角口論も致され勝ちとのことに御座候。

十五、この日の夜半、霜は夢に打手のかかるを見、肝を冷やし候よし、大聲に何か呼ばはりながら、お廊下を四五間走りまはり候。

十六、十六日巳の刻頃、少齋石見の兩人、再び霜に申され候は、唯今治部少かたより表向きの使參り、是非とも秀林院樣をおん渡し候へ、もしおん渡し候はずば、押し掛けて取り候はんと申し候間、さりとは我儘なる申し條も候ものか

な、この上は我等腹を切り候とも、おん渡し仕るまじくと申遣はし候。然れば秀林院樣にも御覺悟遊ばされたくとのことに有之候。その節、生憎少齋は拔け齒を煩はれ居り候まま、石見に口狀を賴まれ候よし、又石見は立腹の餘り、霜をも打ち果すかと見えられ候よし、いづれも霜の物語に御座候。

十七、秀林院樣は霜より仔細を聞こし召され、直ちに與一郎樣の奧樣とお內談に相成り候。後に承り候へば、與一郎樣の奧樣にも御生害をお勸めに相成り候よし、何ともお傷しく存じ上げ候。總じてこの度の大變はやむを得ぬ仕儀とは申しながら、第一にはお留守居役の無分別よりことを破り、第二には又秀林院樣御自身のお氣象より御最期を早められ候も同前の儀に御座候。然るに與一郎樣の奧樣にも御生害をお勸め遊ばされ候上は、わたくしどもにさへお伴を仕るやう、御意なされ候やも計り難く、愈迷惑に存じ居り候ところ、みなみた御前へ召され候間、如何なる仰せを蒙ることかと一かたならず案じ申し候。

十八、やがて御前へ參り候へば、秀林院樣御意なされ候は、愈「はらいそ」と申す極樂へ參り候はん時節も近づき、一段悅ばしく候と仰せられ候。なれどもおん顏の色は靑ざめ、お聲もやや震へ居られ候間、もとよりこれはおん僞と存じ上げ候。秀林院樣又御意なされ候は、唯黃泉路の障りとなるはその方どもの未來なり、その方どもは心得惡しく、切支丹の御宗門にも歸依し奉らず候まま、未來は「いんへるの」と申す地獄に墮ち、惡魔の餌食とも成り果て候べし、就いては今日より心を改め、天主のおん敎へを守らせ候へ、もし又さもなく候はば、みなみな生害の伴を仕り、われらと共に穢土を去り候へ、その節はわれらより「あるかんじよ」(大天使)へ賴み、「あるかんじよ」より又おん主「えす・きりすと」へ賴み奉り、一同に「はらいそ」の莊嚴を拜し候べしと仰せられ候。然ればわたくしどもは感淚に咽び、みなみな卽坐に切支丹の御宗門に歸依し奉る旨、同音に申し上げ候間、秀林院樣にも御機嫌よろしく、これにて黃泉路の障

りも無之、安堵いたし候まま、件は無用と御意なされ候。

十九、なほ又秀林院様は三齋様與一郎様へお書置きをなされ、二通とも霜へお渡し遊ばされ候。その後京の「ぐれどり屋」と申す伴天連へも何やら横文字のお書置きをなされ、これはわたくしへお渡し遊ばされ候。この横文字のお書置きは五六行には候へども、秀林院様のお書き遊ばされ候には一刻あまりもおかかりなされ候。これも序ゆゑ申し上げ候へども、このお書置きを「ぐれどり屋」へ渡し候節、日本人の「いるまん」(役僧)一人、殿かに申し候は、總じて自害は切支丹宗門の禁ずるところに御座候間、秀林院様も「はらいそ」へはお昇り遊ばさるることかなふまじく候、但し「みさ」と申す祈禱を奉られ候はば、その功德廣大にして、惡趣を免れさせ候べし、もし「みさ」を修せられ候はんには、銀一枚賜り候へとのことに御座候。

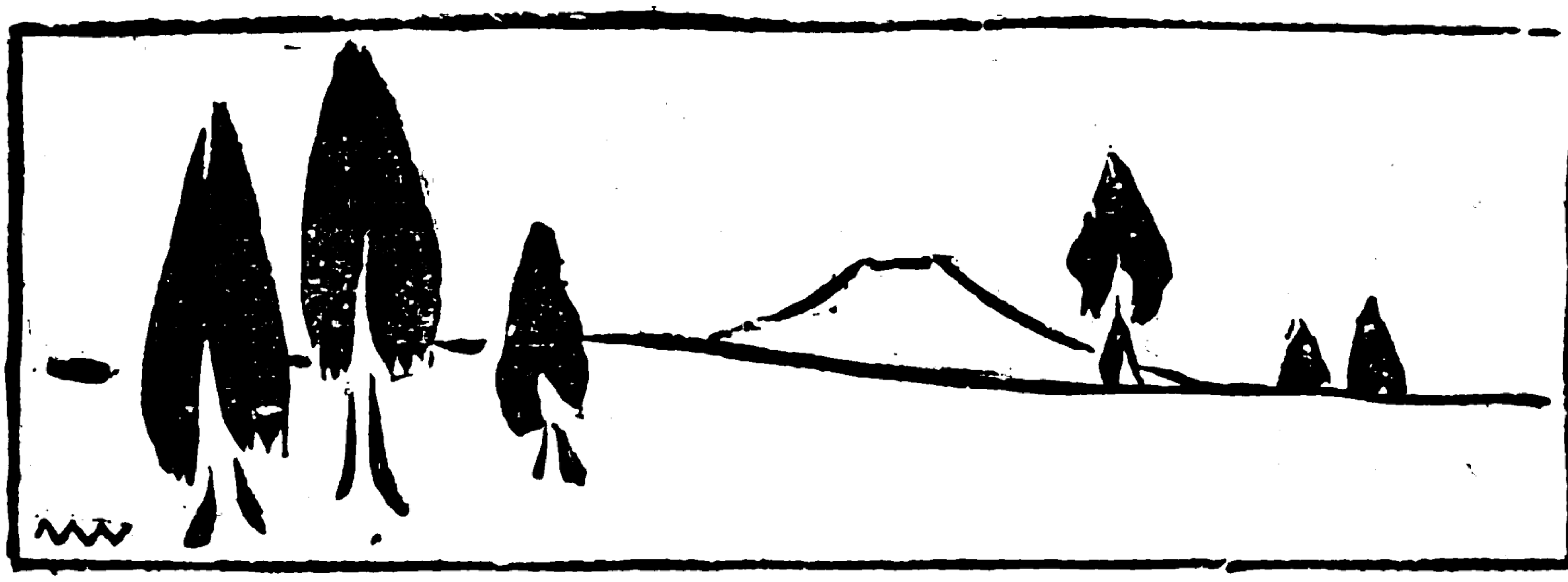
二十、打手のかかり候は亥の刻頃と存じ候。お屋敷の表は河北石見預り、裏の御門は稻富伊賀預り、奥は小笠原少齋預りと定まり居り候。敵寄すると承り候へば、秀林院様は梅を遣はされ、與一郎様の奥様をお召し遊ばされ候へども、はやいづこへお落ちなされ候や、お部屋は藻ぬけのからと相成り居り候よし、わたくしどもみなみなおん悅び申し上げ候。なれども秀林院様にはおん憤り少からず、わたくしどもに御意なされ候は、生まれては山崎の合戰に太閤殿下と天下を爭はれし惟任將軍光秀を父とたのみ、死しては「はらいそ」におはします「まりや」様を母とたのまんわれらに、末期の恥辱を與へ候こと、かへすがへすも奇つ怪なる平大名の娘めと仰せられ候。その節のおんありさまのはしたなさ、今も目に見ゆる心ち致し候。

二十一、程なく小笠原少齋、紺糸の具足に小薙刀を提げ、お次迄御介錯に參られ候。未だ拔け齒の痛み甚しく候よし、左の頰先腫れ上られ、武者ぶりも聊かはかなげに見うけ候。少齋申され候は、お居間の敷居を越え候はんも恐れ多く候

間、敷居越しに御介錯仕り、追ひ腹切らんとのことに御坐候。御先途見とどけの役は霜とわたくしとに定まり居り候へば、この頃にはみなみないづこへか落ち失せ、わたくしどもばかり殘り居り候。秀林院様は少齋を御覽ぜられ、介錯大儀と仰せられ候。細川家へお輿入れ遊ばされ候以來、御夫婦御親子のかたがたは格別に候へども、男の顏を御覽遊ばされ候は今日この少齋をはじめと致され候よし、後に霜より承り及び候。少齋はお次に兩手をつかれ、御最期の時參り候と申し上げ候。尤も片頰腫れ上られ居り候へば、言舌も甚ださだかならず、秀林院様にも御當惑遊ばされ、大聲に申候へと御意なされ候。

二十二、その時誰やら若き衆一人、萠黄糸の具足に大太刀を提げ、お次へ駈けつけ候や否や、稻富伊賀逆心仕り、敵は裏門よりなだれ入り候間、速に御覺悟なされたくと申され候。秀林院様は右のおん手にお髮をきりきりと卷き上げられ、御覺悟の體に見上げ候へども、若き衆の姿を御覽遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顏を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。わたくし一生にこの時ほど、秀林院様の御器量をお美しく存じ上げ候こと、一度も覺え申さず候。

二十三、わたくしどもの御門を出で候節はもはやお屋敷に火の手あがり、御門の外にも人人大勢、火の光の中に集まり居り候。尤もこれは敵にては無之、火事を見に集まりたる人人のよし、又敵は伊賀を引きつれ、御最期以前に引きあげ候よし、どちらも後に承り申し候。まづは秀林院様お果てなされ候次第のこと、あらあらは申し上げたる通りに御坐候。 終



不安のなかに

徳田秋聲

一

十時はその時姉の家の茶の間にゐた。一昨日の夜の十二時に妻と子供に送られて東京を立つて、昨日の午前にこゝへ落着いたばかりであつた。兄の家にしようか、姉の家にしようかと、彼は仕事をするのに落着のいゝところをと思つて、暫くの豫定ではあつたけれど、居所を定めかねてゐたのであつたが、用事のために來たその用事が姉の一家のうへに係ることなので、餘り落着の好い家ではなかつたけれど、とにかく一旦そこへ落着くことにしたのであつた。

立つ前に彼は幾日も〳〵不愉快な、腹立しい自分の心を凝視めるのに飽きはてゝゐた。勿論妻に對する或る不滿から來たことであつたが、孰も頑な心の持主であつたので、さうして睨み合つてゐることを疎ましく思ひながら……そして又今更らそれが何うなるものでもないので、好い加減に胡麻化して行くより外ないことだとは知りながら、やはりさう出來ないのであつた。しかし十時が立つ前には、滯在のあひだ必要だと思はれるものを、彼女はいつものやうに、ちやんと鞄につめ、兄や姉達や姪達に贈

るべき土産なども取揃へ、鍵をかけないばかりにしておいてくれたのであつた。そして來なくともいゝといふのに、停車場まで送つて來たのであつた。寢臺の下がなくなつてゐたので、十時は子供に上を取らせた。彼はしばらく腸をわるくして、歩行するのも頼りがなかつた。

「下がないのか知ら。何だか危うござんすね、大丈夫ですか。」彼女はそこへ上つて行く十時を見上げながら言つた。

發車間際になつた。十時は開いた窓から足を出して、歩廊に立つてゐる三人を見下してゐた。

「何だかそこから墜ちさうでやつぱり上は可けませんね。」

言つてゐるうちに、汽車が出てしまつた。

「ぢや、行つていらしやい。」子供が言つた。

十時はさうやつて出てみると、又何だか留守が氣にかゝりながら、いくらか氣分が安易になつて、何うかするとによき〳〵出て來る彼女の厭な性癖や、それに拘りがちな自分の苦しみから解放されるのであつた。

十時が今度來た用事といふのは、姪の悦子の結婚についてであつた。去年十時が母の法要に來た時も、別れぎわに姉から一寸その話が出た。姉は良人の沒後、あいてゐる部屋へ學生を置いたりしてゐた。その時も郡部から出てゐる學生が二人、づつと前からゐて、家族的に著してゐるらしく、その親達とも親類同様に附合つてゐたのであつたが、その一人と悦子との間にいつとはなしさうした愛が柔かい根をおろしはじめてゐた。

「今度はどうもさういふ風になるかと思ふ。先もその積りらしい。」

十時を送つて來た姉の千代子は、瀬戸物屋の陳列を見てゐる傍へ來て、その青年の聰明なこと、前途に期待の多いこと、子のやうに自分に昵んでゐることなぞを話した。

「若しさういふ事にでもなつたら、おしらせなさい。しかし親達や親類もあるし、とかく破れがちのものだから。」十時はさう云つて、輕率なことのないやうに警告を與へて別れたのであつた。

今年になつて、氣輕な千代子が其の事で十時の歸國を促しに、七月末の或日にひよこ〳〵と遣つて來て、事態の切迫してゐる事と、十時が行つてさへくれゝば、先方は譯なく納まる筈だと言つて、挨拶をするかしないうちに、いきなり十時の承諾を求めたのであつた。十時もその時は直ぐにも行くつもりであつたが、落着いて考へてみると、其も輕率のやうに思はれたので、其の話が破れた時のことをも豫想において、わざと悦子の父方の從兄にあたる人に、一應話をしに行くやうに計はせたのであつた。しかし先方では親類に不同意の人もあつたけれど、結局は、親達の意志に基いて、結婚が承認されることに成つたので、今はたゞ十時の來るのを待つばかりだといふのであつた。十時は健康がすぐれなかつたのだが、漸と忙しいなかを都合して、東京を立つたのであつた

で、昨日お豐前に着いたばかりの十時は、その午後早速懷かしい上の姉や兄の家を訪ねて、今日は東京では行く隙のなかつた床屋へなぞ行つて、歸りに公園をぶらり〳〵して來たところであつた。彼はまだお粥を食べてゐた。そして歩いたために疲れが出たので、腹這ひになつて千代子や悦子と話してゐた。學生は二人ともまだ來てゐなかつた。二階の十二疊も、下の六疊もがら明きであつた。裏には孟宗の籔があつて、白い粉を吹いたやうな竹と、其の枝葉が二階の十二疊と下の六疊とを薄暗くしてゐた。

「こゝは何うです。」千代子は十時と一緒に二階へあがつて、仕事をするやうな位置を考へたりしたが、十時には其の座敷よりも、上り口の明い三疊の方が好かつた。そこには悦子の兄の小机に、本箱に收まつた謠曲本、尺八の譜などがあつて、その傍の尺八掛に尺八が立かけてあつた。兄貴の宗一は、小學の五六年時代から、白髪など生えて、頭腦が惡か

つた。十時の家へ來てゐた頃は、寫眞だの繪畫だのやらせたこともあつたが、それで生活するほどの技術はなかつた。彼は自分の生活費にも足らない月給で、或る會社へ勤めてゐた。十時には眞實の一人の姉の子であるこの兄妹が一番心配であつた。彼等はその父の亡くなる前に、永く住みなれたその家を離れてゐた。

十時は去年來た時も、兄妹で尺八と琴の合奏をやつてゐる處へ來合せて、餘り好い感じがしなかつた。亡くなつた父親からしてが、職を失つてから碌に收入もないのに、床に花を生けたり、謠や碁に耽つたり、苗や朝顏を作つたりする方であつた。彼は町の敗殘者の一つの型であつた。

しかし宗一ももう四十であつた。十時は小言を言つても追つかないと思つた。まだしも尺八でも吹いてゐられる彼の幸福を悦んでやりたかつた。

「好い尺八があるな。」十時は手に取りあげて、袋を拂つてみた。

「それ好いのですよ。なか／＼高い。不思議に尺八が好きでね、もう少し詰めてやると、物になるさうだけれど。」

「それで御飯がたべて行けるやうだつたら。どうも頭腦のいることは駄目な宗一のことだから。」

十時はそんな事を言ひながら、又下へおりて何か食べようかと思つて、横になつてゐた處へ、微動を感じたのであつた。

「地震だ。」敏感な十時はさう言つて、電燈を見上げた。千代子も悦子も、同じく見上げた。そして初めて氣がついた。

「あら金魚の水が……。」悦子は簾戸格子のところにある金魚鉢の水のだぶ／＼波立つてゐるのを見ながら言つた。

少し止んだかと思ふと、まだゆら／＼と揺れてゐた。微動ではあつたけれど、その揺れ方が氣味がわるかつたので、十時は下駄を突かけて外へ出た。二人も後から續いた。往來の人は誰も氣づかぬらしかつた。隣の家では、絞りの浴衣

を着た上さんが外へ出てゐた。十時は暫くして入らうと思ふと、まだ揺れてゐるらしいので、大分長く道の眞中へ出て跪坐んでゐた。

内へ入つてから、十時は姉と濃尾の地震の話などをしてゐた。其は父の死んだ年であつた。十時はその前に、夜中に醫者を迎へに駈出した時、紺絣の單衣の藍の匂ひが、鼻にしみたことを覺えてゐる。十時は近頃のやうに地震を恐れもしなかつたので、机の前に坐つてゐた。大阪から來てゐた長兄が、地震嫌ひの母が何うしたらうかと思つて、奥へ入つてみると、母の姿がみえなかつた。そして暫らくすると、低い垣根の壊れたところを超えて、庭つゞきの餘所の竹籔からのこ〳〵彼女が出て來たのであつた。十時が母を東京へ迎へなかつたのは、地震の心配もあつたからであつた。

「どこだらう震源は……。」十時はぼんやり思つてみたきりであつた。が、何だか不安を感じた。

「東京に地震があつたかも知れん。」

「東京のはこゝまで來ん。」

二

その日七時頃配達された夕刊に、横濱に大地震があつて、町が盛んに燒けてゐると云ふことと、鈴川で汽車が顚覆したとか、東海道線が名古屋以東不通になつたとか云ふ極簡短な大阪からの電話が載つてゐるのを見ただけでは、十時の頭腦には東京にも同じやうな地震のあつたことは、はつきりとは浮ばなかつたのであつたが、しかし不安は感じた。

「東京もきつとやられてゐる。」十時は呟いた。悦子達が傍からそれを打消すので、十時もその氣になりながら、矢張り

氣にかゝつた。彼は年取つてから、長いあひだ振顧ることをしなかつた、故郷が年々好くなつてゐた。そして歸る度びに未知の自然や數ある溫泉へ行つて見ようと思ひながら、いつも忙しいので果さなかつたので、今度は少しゆつくりして、子供のをり行つた記憶のある白山の裾にある美しい谿谷だの、二三の溫泉場などを巡つて見ておかうと思つて、今朝もそれらの土地の地理や汽車の時間や、交通の便などを折角研究してゐた處であつたが、もうさうしてゐられないやうな氣がした。そして東京の事情が何か少しでもわかり次第何時でも出發できるやうに、目的の用件を片着けておかなければならないことを感じた。それにはその青年が歸省中である田舍の家へ出向いて、親達と親戚の人に逢はなければならないのであつた。その前に、媒酌の役を勤めてくれた悅子の父方の叔父の松木にも逢つて、一應先方の意嚮を聞いておく必要もあるのであつた。何よりも自分の胃腸を早く癒さなければならなかつた。

「今夜松木へ行かう。」十時は夕飯のとき、お粥を食べながら少し焦燥氣味で言つた。

「いゝですわ。貴方が行かなくとも、お出でることになつてゐるから。もう役所へ電話をかけた。」千代子が言つた。

その晩方に一人の方の學生が出て來て、竹籔に臨んだ下の六疊に荷物を持込んでゐた。十時は木村と云ふその青年に逢つて、悅子の愛人の濱野の家の周圍關係を聽取つたりした。七月に姉の千代子が來たとき、「おれが東京へ行つて叔父さんに話をする」と言つて意氣こんでゐたと云ふその青年が、木村なのであつたが、十時が逢つてみると、田舍の町の醫師の一人子息で、親達の死んだ後は、老祖母と二人きりで暮してゐるといふ彼は、何處か坊ちやん〳〵した、丸顏の口數の少ない穩和な青年であつた。しかし木村の唯一の大切な胤であるところから、學問なぞにはさう激しない彼の輪廓が大まかで、ふつくらしてゐる割りに、頭腦の好いことは、その晩皆なで花を引いたとき、十時に解つたのであつた。

夜になつてから、十時は氣分を紛らせるために、彼等と二階で花を遊んでゐた。こんな事をしてゐて可いのか、と彼は氣に咎めたが、仕方がなかつた。

そこへ松本が來てくれたので、十時は下へおりて逢つた。

「私も忙しいものですから、漸と都合して行つたやうなことで……。」溫良な松本は言ふのであつた。

「先方では、私が行くと、東京から來たかと言つて聞かれたくらゐで、貴方の來られるのを待つてゐるのです。私が逢つた姉さんのお婿さんだと云ふ人が、ちよつと首をふつてゐるらしいので、少しむづかしいことを言つてゐたのですが、今はその人も表面へは出ないことになつて、手紙で申上げたとほり板谷と云ふ本人の從兄とかに當る人から、圓滿解決の旨を言つて來たのです。いや何うも、汽車をおりてからが、隨分遠うござんしてね、朝夙くだから、足袋も袴も草の露でべと／＼になつて……しかしK—驛まで乘つてお出になれば、車もあるさうで。」

松本は話がすむと、子供の話などして直きに歸つて行つた。

「あんな素直な人見たことがないと云つて、松本の叔父さん先方へ大變受けがいゝさうでね。」姉は後で噂した。

「僕もあの人が適任だと思つたんだ。」十時も言つた「僕はさうは行かないから、自分でも用心したんだ。」

十時はまた二階へあがつて、花の仲間に加はつた。

「さあ、こんな事をしてゐて、東京はどうかな。」十時は時々呟いてゐた。何か未曾有の物凄いことが起つてゐるやうにも思はれたが、橫濱だけのやうにも思へた。

そこへ蒔繪をやつてゐる、一人の甥の信吉がやつて來た。骨董などに目が利くので、彼はその時も自分の作品と茶器を一點もつてゐたが、少し酒氣を帶びてゐた。彼は長いあひだ東京で蒔繪の權威について修業したので、叔父の十時に

何かと心配もかけたし、一緒に下宿にゐたこともあるので、十時の故郷へ來るのを誰よりも懐かしがつてゐたし、十時もまた何か食べに行く場合なぞ、信吉と一番話が合つてゐた。

「何だかもつてるやうだね。ちよつと見せないか。」十時は花札をつかんでゐながら、解らないながらにさう云ふものにも興味をもつてゐたところから、さう言つてその包みを見てゐた。

「いや、詰らんもんです。」信吉は笑つてゐた。

「信ちやんはやらないかね、花を……。」

「その方はちつとも遣りません。」

「花は花でも、お上品な方だね、お茶もやつぱり遣つてるの。」

「ほんの時々。」信吉はやつぱり笑つてゐた。

そこへ又田舍の方へ片着いてゐる十時の妹がやつて來た。彼女は町の方に家をかりてそこから子供を中學に通はせてゐた。十時は花を引き〱をり〱信吉や妹と斷片的な話の遣取をしながら、氣を紛らせてゐたが、やはり胸に痞へでもするやうで氣分がはづまなかつた。もつて來た仕事を取上げる氣には何更なれなかつた。

裏の竹籔に爽やかな夜風の音がして、露虫が高い植物性の聲で啼いてゐた。そして皆なが歸つてしまふと、十時はがらんとしたその部屋に釣られた蚊帳に入つて、獨りで寝たが餘りのう〱した氣持ではなかつた。

三

明朝早く起きて新聞を見たけれど、東海道筋のことが出てゐるだけで、東京の様子ははつきりわからなかつた。しか

し大なり小なりの影響のあることは確かであつた。彼は粥を食べると、袴をはいて家を出た。悦子のためにも、少し長くゐて、事によつたら後から妻にも出て來させて、式を擧げさせようと思つてゐたのであつたが、今は先方へ顏を出すのが精々であつた。電車に乘つても、彼の心は鉛のやうに重かつた。ざわ／＼した停車場の群衆のなかへ入つても、名狀しがたい氣懈さを感じた。それが單に盲目な本能的の不安であつただけに尚更不快なのであつた。

「もう何うかなつてしまつてゐる。」彼はぼんやりした想像をめぐらして見たが、それが何樣の程度で何うかなつてゐるか、見當のつけやうもなかつた。進歩した科學の智識を以てしても、何程のこともわからない空間的にも時間的にも無邊際な自然界が、いつも感ずるとほりにあるものとは勿論思へなかつた。四時の風物などに本能的な敏感をもつてゐる十時の感じうる處だけで見ても、この二三年の自然の現象は、それ以前の季節々々の陽氣に比べて可也な變化を見せてゐた。科學者でない十時は、それを學問的に考察する餘裕をもたなかつたけれど、いつもあつたやうな初夏の爽かな氣分のかはりに、秋風のやうなあわたゞしい冷い風が、柔かに楸の若葉を裏返へらせたり、長いあひだの經驗では、菊日和の好晴がつゞく筈であるのに、梅雨期のやうな淋雨が降りつゞいたりした。勿論それは一時的のものかも知れないし、太陽の熱が目にみえて弱くなつたとか、地熱が冷却したなぞと云ふ、大きな變動でもなかつたけれど現在の生命に限りのある自然界が、刻々死滅か新らしい他の生命かに向かつて、變化しつゝある途中の出來事であることは明かであつた。そしてこれは隨分原始的な人間の恐怖には違ひないけれど、十時はいつ何時何んな目に逢はされるかも知れないと云ふ氣がして、一日一日生きてゐる心が悚みがちであつた。人間が殘らず平均に富んで、皆なが平和なお人好しばかりである社會が、どんなにか無興味な怠屈なものであらうかの如くに、暴風雨や雷霆や海鳴のない好晴つゞきの自然がいかに刺戟のない怖いものであるかは、想像するだけでも、不愉快になるのだが、親しみ易いだけそれだけ可怖い自然

界のことだから、いつ何んな力を出して踏ん反り返らないとも限らないのである。十時には殊にも大地が不安であつた。彼は不斷から足の下がゆら〳〵してゐるやうな氣がしてならなかつた。一生のうちに一度は投り出されるやうな氣がしてゐた。自分の一生に來なければ、子供達の代に來るかも知れなかつた。そして其が今遣つて來たのではないかと思はれた。

「來たなら來たでもいゝ。」十時はさう思つたと同時に、今迄遭遇して來た「國民難」と云つたやうな色々の出來事を回想した。

停車場の氣分は不斷と變りはなかつた。十時は自分と同じ心配をもつてゐる人があるかと思つて、色々の人の顏を見た。東京から來る途中、場末の女優のやうな女が、變な洋服を着た茶目を二人つれて、町が近くなつた頃に、舞臺の衣裳のやうな安價な、しかし其がよく其の女の顏に映る着物を大きなバスケットから出して着込んだり、窓枠に鏡をかけて、熱心にお化粧をしたりしてゐた。茶目が母親の叱るのを面白がつて、窓へ足をかけたり何かして、人をはらはらさせた。それは乘客に取つて、不時の怠屈凌ぎであつたが、あの女なども、好い時に來合せたのだと、十時はその女が町のどこへ紛れこんでゐるかを想像したりした。

汽車は鈍かつたが、結局豫定どほりにK—町へついた。十時はそこから俥を傭つた。彼は俥のうへで、今ステーションで買つた大阪の新聞を繰擴げた。俥は寂しい町を走つてゐた。海邊から來るやうなそよ〳〵した風が、まともに吹くので、新聞を擴げるのに骨がをれた。その新聞では東京のことは矢張り漠然としてゐた。警視廳が燒けたとか、宮城に火が移つたとか、內閣員の親任式の最中首相が泡を喰つて逃出したとか、某の元老が壓死したとか、誰某の行方が不明だとか、丸ビルや三越で幾百の死傷があつたとか、其の他學校、病院、官衙、銀行、會社などの重立つた建造物の崩壞

と火災などが大業ではあるが簡短に報告されてあるばかりで十時の頭腦に映じた印象は都べて混沌としてゐたけれど、一昨夜まで其の中に平氣で暮してゐたあの東京が今は容易ならぬ大動亂の渦中にあることだけは、やゝ彼の感覺に輪廓づけられて來た。十時は詳しく讀むのも厭なやうな氣がしたので、其儘膝の上に新聞をたゝんでしまつた。

俥は長いあひだ走り續けた。荒廢した町塀から廣い平野へ出ると、澄みわたつた大空の碧や、黄ばみかゝつた稲穂にそよぐ微風などが、遽かに心の痛みを拭き取るやうで、富裕らしくは見えながら、夢のやうな靜かさの湛へられた平凡な村邑の、森から森へと繋がつてゐるのが、如何にも平和な感じを與へた。十時は何はともあれ、地に俯して働いてゐる者の幸福さを感じたが、若しも東京が一朝にして滅茶滅茶になつて、總ての生活が虚無に歸してしまふとなると、懐かしい故郷其物すらが、今迄もつてゐた意義を失つて、彼が見棄てた時の住み辛い三十年前の其よりも、頼りない寂しいものであるに過ぎなかつた。そこに生活の根をもたない十時は、甥の信吉や宗一や、其他の多くの町の人が、兎にも角にも持つてゐるやうな何物をも所有してゐないのであつた。

「若しも自分が産れたとき、父がくれてやる約束をした貧しい農夫につれられて、こんな土地に百姓の子として育つてゐたとしたら……。」十時はそんな事を思つて苦笑した。

俥や高野嶺などの垣根の多い村へ入つて來た。道傍に穀物が干されてあつたり、鷄がくくと餌を獵つてゐたりした。俥は鬱蔭の道を通つたり、無花果の熟した枝葉と、十時の帽子が摺れ〱になつたりした。

高野では十時の來るのを今日も待受けてゐたやうに、老婆が彼の姿を見ると「おいでちや」と言つて奥へ駈込んだ。十時は綺麗に拭込んだ板の渡されてある廣い土間から、爐が切つてある茶の間へあがつて挨拶したが、間もなく書院作りの奥へ通された。髪の毛をのばした、目の澄んだ小柄の青年が、帷子をきてゐて、「板谷へ行つて來ましたか」と聞く

から、「後で伺ふつもりで……」と答へると、彼は従兄の板谷を呼びに行つたらしく、お茶など飲んでゐると、其の人がやつて來て、「お互ひに角目立つてゐる場合でないから、詰らない感情を棄て、本人達の幸福を圖つてやるやうに、御同感であるなら結婚させたい」といふ意味を、親しみのある打釋けた調子で話し出した。

「さういふふうの御見解だと、私の方も非常に有難いんです。」十時も安心したやうに同感の旨を述べた。

水の迸りさうな紅い西瓜が、そこに盛られてあつた。

「さあ、お暑いですから何うぞ。何にもないところで、西瓜が名物でして。」

話がきまつたところで、一献汲まうといつて、杯盤が持出され、年取つた父親や本人もそこへ連なつた。

「倅も一粒種ですので、さう學問の方を深入りさせる積りではなかつたのぢやが、幸か不幸か幼い時分から頭腦が好い方で、私も卒業まで生きられるか何うか、心細いとは思ひますが、まあ仕方がないと思つて、……倅もそれを心配して、醫大の方なら東京まで行かんでも濟むから、醫者にならうといふので、今度その方へ入學しましたが、まだ先きが四年もあるさかへ、結婚は早いが、さうも言うてをれんで、式は卒業の時として、とにかく内祝言のやうなことにして、極めておきさへすれば、却つて落着いていゝかもしれんと、かう思うて……。」耳の少し遠い、質直と几帳面その物のやうな老人は、煙管に煙草をつめながら、微聲で話した。

「それで念には念を入れておきたいのは、町に育つた娘さんのことですもんだからこんな田舎は不自由で居辛からうし、厭にもならうと思ひますので、私はそれが案じられる。」

「いや、本人はその點十分承知してゐるやうです。いつぞや私が東京へ連れて行つたことがありましたが、若い女には珍らしい、東京が嫌ひで、何うしても居つからうとはしなかつた位ですから。」十時は答へたが、これは彼のお座なりでは

なかつた。それに濱野は志望が大きかつた。博士論文の下準備さへ、もう頭腦に描いてゐるくらゐで、開業などする意志もないらしかつた。行く〳〵は町で暮すか、それとも東京へ出るか、勿論洋行なども一度はしないではゐないだらうと思はれた。

飯の仕度をするから、袴でもとつて寛いでくれと、勸められたけれど、十時はさうしても居られなかつた。

「また重ねて。何しろ東京の方が、生死のほども判りませんので。」

十時も暇がない！、文字通りに杯だけさせることにして――それも姉の家の二階で、ひつそり遣ることにして、その日取りを、十時は明日にもと思ひながら、つひ明後日といふことに決めて歸つた。

數十分すると、彼はK―町の停車場へ入つた。停車場には何となく、慌忙しい不安の氣が漂つてゐて、今そこへ地方新聞の號外賣りが出て行つたり、一頁大のその號外を見てゐる軍人があつたりしたが、十時がそこへ寄つて行つた時分には、軍人達は外をもつて出て行つた。十時は胸がわく〳〵した。そして誰か號外をもつてゐる人はないかと思つて待合室を覗いたり、構外の廣場へ出て見たりした。寄り〳〵地震の噂をしてゐる者もあつた。十時は傍へ寄つて行つて耳を傾けた。

すると間もなく、入口の方で、多勢い人が一枚の號外に集まつてゐるのが目についたので、十時は急いで寄つて行つた。ふいに、「ボンペイ最後の日――東京は今や焦土と化しつゝあり」と云ふ大きな活字が、彼の微弱な心臟に強い衝動を與へた。そして「神田、本郷被害甚大」といふ文字が目についた時には、彼は目がくら〳〵して、體を支へるのがちよつと困難のやうであつた 彼は辛うじて自から支へることができた。

四

それからは來る報道も來る報道も、たゞ恐ろしいことばかりであつた。惡いことにしても好いことにしても、新聞の報告はとかく誇張になりがちなことは十時も知つてゐたが、彼は何時でも「もつと酷いことがある」と云つたやうな氣持で、それを受取るほど、本質的に用心深く産れついてゐた。しかし實世間的には可なりルーズな生活氣分もあつて、それによつて、今まで彼は生きて來たのだと思はれた。今度のことなぞも、姉や悦子の氣休めでは安心することはできなかつたが、どこまで惡くなつて行くか知れないやうな、各方面の情報に接する毎に、彼は全く今迄踏込んで考へようとしたこともない禍が、自分達のうへに落ちて來たことを感じた。押詰め／＼して考へてゐた以上に、彼は次第に押詰められつゝあることを感じた。

さうして概括的な、或は部分的な各種の報道のなかで、火災の悲慘な事實を最も、よく描寫したものは、何といつても東京の街々を見てあるいた記者の報告で、そのなかには覿面に十時の目の前へ、妻や老人や多勢の子供達が火焰に追はれて、そこゝと逃げ惑ひ、幼いものは路上に棄てられて群衆に踏にじられ、若いものは若いもので、足腰の不自由な老人や、不斷から病氣がちで、よく外で卒倒したりすることのある母や、幼い弟妹だちに引かされて、手足の自由を失つたり、火煙に蒸されたり、人波に押隔てられたり、死骸に躓いたりして、散々離々になつて、辛い思ひで生死の境に呻吟き苦しんでゐるであらう活きた圖を、まざ／＼と見せてくれるやうなのもあつて、それによつて色々の場合や光景を想像すればするほど、彼は頭腦が磨ぎすましたやうに鋭くなるばかりであつた。彼はたゞ溜息を吐くより外なかつた。

「ひどい事になるもんだな。」十時は號外のうへに顏を伏せながら、冷笑的に呻吟いてゐた。人と口を利くのも懶かつた

し、手や足にも力がなかつたが、しかし又折角樂しんで來た故鄕の溫泉の匂ひもかゞず、いつもお預けにして歸つたので、今度こそは仕事の隙々に行つてみようと思つてゐた、町の料理屋へも行かずに、このまゝ歸つてしまふのが、殘り惜しいやうな、妙に低徊的な氣分が、滓のやうにどこかに、こびりついてゐるやうにも思はれて、彼は不思議な自分の心理を、底から見透かし得るやうな疎ましさを感じた。それに東京に殘して來たものは、故鄕の土の匂ひのなかにさうした肉親の人達に圍まれてゐる十時の感じでは、みんな他人だと云ふ氣さへするのであつた。子供ですらが、より多く母體の系統を引いてゐる、當然母方の肉親たちに屬すべき性質のものゝやうに思へるのであつた。

午後から夜へかけて、十時が病人顏をして浴衣がけで坐りこんでゐる茶の室へ、上の姉や信吉や妹やが入替り立替りやつて來て、姉と悅子は送迎に忙しかつたが、大抵の人は東京か横濱か鎌倉かの孰かに關係をもつてゐた。十時の一人の甥は横濱に店をもつてゐて、去年山の手の方に邸宅を新築した。二人は東京にゐた。信吉の姉の長女は、或る物產會社員に片着いて、柏木に住んでゐた。嫂の弟の子達は鎌倉の別莊にゐた。そして其の嫂が伺ひをたてた結果によると、何れもこれも安全なものはなかつたが、十時の家族だけは、家は少し傷んだけれど、打揃つて無事でゐると云ふのであつた。それには上の姉の見て來た卜者の言葉と符合するところがあつた。

「それで、急いでお立ちになるのは危險ださうで、一兩日のうちに急度何かの知らせがくるから、それまで立つのをお見合せになるやうに。當てにもなりますまいけれど、不思議によく中りますので。」嫂は言ふのであつた。

しかし十時は假りの盃をするために、濱野の人達に約束した翌々日まで、同じ懊惱のうちに時を過すのが、堪へられない苦痛であつたので、遽かにそれを明日に繰りあげてもらふことに電報を打たせておいて、その晩は少しでも體を安めておくために、十時頃に二階へ上つて寢ることにした。勿論歸るにしても、迚も一人では駄目だと思つた。皆んなも

それを氣遣つた。兄の家では人夫を、姉達のうちでは信吉や宗一を附けてくれることになつてゐた。

翌日は朝から雨が降つてゐた。窓から見ると、北國らしい空一面に漠々とした雨雲が彌漫して、東南の方だけが微かに明いてゐた。悦子が獨野青年と盃をすることは、まだ兄の宗一には話してなかつた。十時は初めからそれを不思議に思ひながら、早く打明けることを姉に勸めてゐた。「それなら叔父さんが話して下さい。」姉は言ふのであつた。

「それでもいゝが、さういふ事がいけないと思ふね。いくら無能でも、總領は總領だから。親類一同へも、秘し隱しに隱しておかないで、皆なに話すがいゝ。己がいゝやうにする。」十時は言つてゐたが、しかし姉も悦子も、何故かそれを躊躇してゐた。勿論この零落れた一家だけが、孤立の形になつてゐることも事實であつた。

十時はその朝新聞にさはるのも厭であつたが、しかし矢張り氣になつた。大分色々のことが判つて來たらしかつたが、饑渴に苦しんでゐる市民は、更らに又鮮人の騷ぎなどで、まるで無政府狀態におかれてあることなどが、十時の心を新しく傷けた。昨夜彼は、疲れた神經が、不愉快な幻覺に苛まれて、それから寢られなくなつたところで夜なかに寂しい二階をおりて、茶の室で空の白むのを待つてゐた。末の女の子を振返り〳〵何處へともなく歩いて行く妻の姿が、硝子に映るやうに浮んだ。長男が力味返つて、拳を固めて何かを打破らうとしてゐる半身が見えて、その掛聲で十時は目がさめたのであつた。彼は靈魂の不滅などを信じなかつたが、死の前後、意力の惰性で、しばらく中空にふわ〳〵してゐるくらゐのことは有りさうに思へた。十時は夜の白む頃に再び、二階へ上つて蚊帳のなかへ入つたのであつたが、彼はその時ほど、心が死に近づいていつたことはなかつた。彼は呪はしい生活破壞を今迄幾度考へてみたか知れなかつたが、思ひけがない自然の暴力で今その家庭が虚無に歸したときの、彼の姿を思ふと、寂しい行脚僧なぞよりも、死を擇んだ方が優だと思はれた。

午後になつても雨は遏まなかつた。信吉が來て、上京するには身元の證明が必要だと告げてくれたので、彼はどしや降りのなかを、裾を搴げて市役所まで出向いて行つた。公園の下の道を通ると、雨水が河のやうに流れて、電車の線路が洗ひ晒れたやうになつてゐたが、いつも時代に置いて行かれてゐる此の町も、今は無上の樂土だと思はれた。市役所では手續きが面倒だつたので彼は更に警察の方へ行つてみた。證明を取りに來てゐる人が、殺到してゐた。そして證明書には寫眞の貼附が必要だと言ふので、更らにそこから十町ばかり先きにある、早取の寫眞屋を教はつてそこへ行つた。

「翌日の午後一時ですな。」寫してから寫眞屋は言つた。

暫らくすると、十時は又人々の集まつた茶の室にゐた。そこへ山からおりて來た兄が俥でやつて來た。

「どうも今度は大變なことになつたものだね。」兄はヅボンをたくし上げるやうにして坐りながら、

「しかし心配することはないぞ。己は本郷は大丈夫だと思ふ。各區のことが出てゐるけれど、未だ本郷のことは一向出てをらんぢやないか。新聞で見てゐると、大變なことのやうに思ふけれど、色々綜合的に想像してみてもわかるが、安全な處も其中にはあるに決まつてゐる、若し又燒けたとしたところで、大きい子供もゐるし、人も來てくれてゐるだらう。」と言つて、極力慰めるのであつた。

「いや、なか／＼さうぢやないらしい。」十時は首をひねつた。

「かういふ日に逢つた子供は好くなるぞ。」

兄はそれから、どうせ途中だから立つなら寄るやうにと言つて、直ちに他の方面へまはつて行つた。

直きに四時頃になつた。姉は今朝から今日の仕度に奔走してゐたが、もう其の時分には雨のふるなかを、料理を入れ

た織をかついだ男がやつて來て、姉は一つ〳〵それを臺所の方へ運びなどしてゐた。やがて濱野青年と、その從兄の板谷とが雨に濡れながら遣つて來て、挨拶がすむと、町で仕立てゝ來た柳樽や、熨斗や鰑や結納の包みなどを、別の部屋で取り飾つて、十時と姉との前へ、容を更めながら差出した。その中には黑い水引をかけた、佛前の一包みもあつた。十時はこつちがぬかつてゐたことに氣がついて、ちよつと狼狽したが、しかしそれは何うでもなることだと思ひながら、苦しい辯解をしたりした。

「いや、何にも知りませんもので、……まあ親達の申しつけ通りに」と板谷も謙遜してゐた。

人の出入りがあるので、二人はやがて二階へ上つて行つた。

「なか〳〵ちやんとしてゐるね。」十時は姉に私語いた。

「何と言つても、はづむ時ははづむ人達だから。」姉も氣が引けるやうに言つた。

十時はそれらの品と禮服とを、バスケツトや風呂敷包みにして、二人で背負つて來たことなどで、殊にも好い感じを與へられた。

日の暮れ方に、宗一が會社から歸つて來た。十時は今迄の經過と、今日のことを告げて、松本も二日の晩、社長が東京にゐるので、若い人達と一緒に上京して、他に列なる人もなかつたので、宗一だけは列席さしたいと姉が遂に氣を揉むので、氣輕に姉から話してみさせることにした。薄暗い奥の納戸で、姉は宗一の前に一切を打明けた。

十時は今まで無氣力な宗一が、何一つ自分の意志らしいものを表明したことを聞かなかつたし、人と人との交渉で、少しでも自己らしいものを出した例を曾て知らなかつた。佛のやうなお人好しであつた。勿論尺八なぞ吹くほどだから、時代の空氣とも沒交渉で、遺傳的に少し許り手の器用さはもつてゐたけれど、強ひてそれを發揮しようともしないのであ

つた。障りにはならない代りに、頼りにもならなかつた。十時はまだ子供のやうに思つてゐたが、姉に聞くと彼ももう四十であつた。

「埒があかん。何うしても出ようと言はんもの。」姉は十時の傍へ來て言つた。

「何うして……。」十時は袴の紐を結びながら、「承認しないとでも言ふのかね。」

「まあさうや。」姉は溜息を吐いた。

「尤も今迄秘しておいたのは惡い。しかし宗一はそんな男かね。」

「あの人には困る。言出すと頑固で。」姉は途方に暮れたやうな顔をして、「實のところは、今迄打明けようと思うても、私も悦子も可怕うて言出せんのや。濱野さんも可怕がつてや。」

「亂暴でもするかね。」

「そんな事もないけれど。」姉は今更十時に見えをしても仕方がないと思つて、「濱野さんを二階からおろして、悦子と一緒に謝罪らせろと言うて、肯かんのでね。」

十時は信じられなかつた。

「一體何ういふのだね。それには何か原因がありさうだが。」

「そや、原因と言ふほどのこともないけれど、會社の仲間で、妹をくれゝば宗ちやんにお嫁さんを世話するといふ人もあるし、あれは去年やつたか、宗ちやんの知つてゐる憲兵隊の將校さんからも話があつて、宗ちやんは悉皆乘氣になつてゐたけれど、そんな人軍縮で駄目でせう。任地が朝鮮では尚更厭だし。宗ちやんは、その時大變に怒つて、己の言ふことを聞かないなら、家におかないから、何處かへ行つてしまへと言うてね。そんなことで長いこと紛紜して、悦子が夜

なかに家を飛出したこともある。」

「まるでお話にならん。」十時は思つたが、今夜の處を穩かに濟ますには、悅子に手を突かせでもするより外はなかつた。

「わたし可怖い。」悅子は躊躇してゐたが、納戸へ入つて行つた。

暫らくすると、悅子の泣聲が微かに洩れて來た。十時は仕方なし納戸へ入つて行つたが、その時は宗一はその先きの籔蔭の六疊にゐて、椅子に腰かけて、木彫のやうな無表情な可怕い顏をしてゐた。十時はその傍へ寄つて、下から優しい言葉を以つて、硬張つた彼の氣持を釋しなだめようと努めたが、彼はじつと目を据ゑたきりで、口を利かうともしないのであつた。十時は又悅子や母親の立場を說明して、誰れに賴るところもない悅子の、それが當然撰ぶべき道であると同時に、それを成立たせるのが、宗一の責任だと云ふやうな意味を、繰返し說いてみたが、彼はびくともしないのであつた。童蒙な目が血走つたやうに光つてゐた。

「とにかく出ることにしよう。己もそんな處ぢやないんだ。出るだらう。」

宗一の唇が漸と動いた。

「どうも出られん。親類へ極りも惡いし、莫迦々々しくて。」宗一はにやりとして言つた。

十時はまた其の事が、宗一の考へてゐるやうに、極りの惡い理由のない事と、親類へも公開する旨を話したが、其時心臟が苦しくなつて來たし、その場の光景が芝居じみてゐるのに興さめがして、そこを出て、濡れ手拭で冷しながら、暫らく横になつてゐた。そして氣分が快くなつたところで、二階へ上つて行つた。

大分たつてから、急かしに下へ降りてみた。

「宗ちやんが亂暴して、お吸物の鍋を引くらかへしたもんやさかえ。これには困る。悦の着物だつて、みんなあの人が引裂いてしまうから、家におかんやうにしてをる。」白足袋に紋附を着た姉はさう言つてお膳立に忙しかつた。

五

十時は翌日にも立たうと思つたけれど、證明が間に合はなかつた。それに大宮口などは、竹柏騒ぎで近寄れないから、今二三日見合すやうにと、皆なに引止められた。

宗一は昨夜濱野たちが歸つたあと、皆なが寢てから、鎖した戸をあけてから〳〵と下駄を鳴して出て行つたきり、歸らなかつた。

「あいつ何うしたらう。」十時が言ひ出すと、

「さあ、何處へ行つたのやら。」と、悦子も笑つてゐた。

「宗一はあゝいふ男かね。」

「まだ〳〵酷い。皆んなこわがつてや。」

で、姉や悦子の話によると、いつも皆んなから除外されてゐる孤獨な彼の生活も、可なり荒み氣味であることが想像された。俸給なぞも、大部分飲食ひに費ふらしかつた。

「けれども何うして、悦子の邪魔をするだろ。嫉妬ぢやないか。」

「さうかね。」姉も首を傾げてゐたが、

「それやから早く嫁をもたさうと思ふけれど、それには餘程働きのある人でなければ……。昨夜もあれから色々話して

みたけれど、宗ちゃんは明日にも悦子を餘所へ出せと言ふて肯かん。其ができなければ、自分で出るといふのやけれど、此の前だつて、直きに謝罪つて來たさかへ。」姉は笑つた。

「それは濱野さんも、謝罪つても可いと言ふておいでのやけれど、」

十時はもうその問題に深入りしても、仕方がないと思つた。

十時は晝頃家を出て、大阪新聞の支局を訪問したり、支那の詞曲通で京阪や東京にも交友の多い舊友のH氏を訪ねたりして、四時頃に家へ歸つて來た。警察へもまはつて見たが、立つのは暫らく見合せろと言つて、署長までが引止めたので、明日はと思つてゐた決心が鈍つて來た。

四時頃に信吉が來て、散歩に誘はれたので、十時はこの間に墓參でもしておかうと思つて、家を出た。途中信吉の姉の家へ寄つて見たりした。そこでも不安の氣が漂つてゐた。お産をして、つひ近頃歸つたばかりの淀橋の娘夫婦よりも、何かの力になつてくれてゐる横濱の義弟の方が、餘計氣遣はれた。

十時はどこへ行つても落着いてゐる瀬はなかつたが、歩いてゐても妻子の姿が、頭腦にこびりついてゐて、離れなかつた。

「お寺なら、こゝから拔けませう。」信吉はさう言つて、彼の叔母さんの家の格子戸を開けて、入つて行つた。

いつか見た時よりも、その家は一層綺麗になつてゐた。娘夫婦に子がないので、軍人の娘さんなどに、琴や花などを敎へて、悠樂に暮してゐた。

「御心配でございませうね。」娘も老母も出て來て、お見舞を言つた。

十時はかう云ふ世界もあるのかと、羨ましく思ひながら、長い土間を通りぬけて、庭の木戸をあけて貰つて、裏通り

へ出た。

靜かな町であつた。とつてんかん〳〵と箔を打つ音などが、微かにしてゐた。貸席の電燈を出した洒落れた家などが、目についた。

十町ばかり川添ひの町を行くと、そこにお寺があつた。近年眠みになつた住職はゐなかつたが、お經料をおいて、墓地へ入つて行つた。可也な廣さの十時の先祖の墓所に、幾基かの墓が立つてゐて、そこに父や母や長兄が眠つてゐた。目をつぶつてゐると、過去の幻影が浮き出して來た。

歸りに川に沿つた料理屋へあがつた。どの部屋も〳〵がらんとしてゐた。十時と信吉は、汗を流すために、瀟洒な露次庭の飛石をわたつて、湯殿へ入つて行つた。それから湯をうめたりして、渋らうとしてゐる處へ、信吉の妹婿から電話がかゝつて來て、信吉が行つてみると、今日五時に、第一回の避難民が四百ばかり着くから、若し其のなかに十時の家族がゐるか何うか、見に行つては何うかと言ふのであつた。

信吉は湯殿へ復つて來て、

「いかゞです、行つてごらんになつては」と勸めた。

勿論十時が宗一をつれて行くことになれば、皆なを此處へ引揚げさせるやうにとの說もあつたし、昨日あたりもぼつ〳〵歸つて來るものもあつて、十時の氣分では、妻や子供が自分のところへ遣つて來るのが、さう不自然だとも思へなかつた。

「だが、萬に一つその中にゐるとして、誰と誰とが生き殘つてゐるか。」十時はさう思つた。

二人は急いで着物を着て、ステイションへ向つた。ステイション前は、群衆で身動きができなかつた。そして三四十

分もすると、避難民を載せた列車が入つて來たが、勿論十時の子供達の居やう筈もなかつた。もつと近いところに、妻の田舍があるのであつた。

夜はまた姉の家の茶の室で、十時は色々な人に逢つたが、此等の人達が歸つてから、宗一もそこへ來てお茶を飲んでゐた。宗一は不斷と少しも變らない調子で、十時に話しかけた。まるで昨夜のことは忘れたやうであつた。そのうちに話がまた昨夜の問題に移つて行つた。

「今まで何遍私は悅子に警告したかわからん。その度に悅は鼻で笑つてをつたんだ。濱野だつて無禮だ。人の横間から人の妹を攫つておいて、私に一言の斷りもしないんだからね。今度のことは皆んなで共謀で、私を出しぬいてしまつたんだ。こんな莫迦々々しいことはありやしない。」宗一は言出した。

「それは悪かつた。だから已がお前に陳辨してゐるんだが、除外されても仕方のないことがお前にもあるんぢやないか。お前は今まで悅のために何をしてやつたんだ。」

「それと是とは別問題だ。」

「それで、何うしてもこの話を打壞すといふなら、打壞しても可い。お前は後始末をつけるかい。」

「後始末といふと。」

「先方へ行つて、話をつけるのさ。そして悅子の體の處置をするのさ。」

「そんなこと言つたつて……それあ弱いもの窘めといふもんで……。」宗一はしほ〱した目を細くして笑つた。

十時は怒れもしないと思つた。

宗一はやがて二階へ上つて行つた。

「お話にならんとこと。」姉も悦子も笑つてゐた。

「誰に似てゐるのかな」十時は宗一と自分の顔に、相似點のあることを知つてゐたが、氣質も共通してゐるやうに思へてならなかつた。

「あれはお父さんにも、あゝ云ふところがあつた。京都の叔父さんは、もつと酷い。」姉は言つた。

二階では尺八を吹きはじめてゐた。十時はその音を餘り好かなかつたけれど、宗一の吹くのは彼のために好いと思つた。子供の時分から持つてゐる姉の三味線が二階の床脇のところにおいてあるのも思ひ合されて、近頃の彼女の氣分がわかるやうに思へた。この一家族がいつも氣遣はれてゐた十時もいくらか安易を感じた。

公論大賣捌所

東京[illegible]	[illegible]堂
同 京橋區丸屋町	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

一 お[illegible]は[illegible]東京三四番　長野三三〇五番なり
一 切手代用 は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝ[illegible]ます
一 代金引替 小包の取扱は一切謝絶す
一 代金郵便 御送金の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる金額を削いて弊社へ御通知せらるべし、弊社は直ちに御取扱手續をなすべし但為替貯金の申込を受くるも受金受領證にあらざれば雜誌發送せず
　一 金[illegible]以上五圓迄　金七錢（振替貯金）
　一 全額拂込　金八錢（同上）
一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌別にて金額御指定あれ
一 殘部請求は必ず送料を要す

◎定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘 海外郵税貳拾八錢
但支那を除く

冊數／國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期特別號等臨時増刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十四冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾壹圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

大正十二年十二月二十日印刷納本
大正十三年一月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 長丸ノ内三〇二二（高分不通）
牛込 五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍

◎本號特價金壹圓八拾錢
郵稅金五錢

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◎本號特價金壹圓八拾錢　郵税金五錢

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA